

Title	大阪外国語大学70年史
Author(s)	大阪外国語大学70年史編集委員会
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81243">https://hdl.handle.net/11094/81243</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



# 大阪外国語大学70年史



上に掲げたのは、本学旧来の盾形のバッジをやゝ拡大したものである。中にはラテン語で EX ORIENTE LUX ET PAX(「光と平和は東方より」)と書かれている。これは、第一次大戦終了時という本学創設期の世界情勢の中にあって、平和と文化の光を東洋の国、日本から全世界に向って拡げることの意味しており、本学の理念をあらわしたものである。

## 70年史刊行に際して

本学も今年は開学70周年を迎えることになる。大正、昭和、平成と綴り合わせてきた学生の証を記念にしようというのである。開校当初は9語部、一年生200名であったのが、70年経った今、第一部18語学科23専攻、第二部6語学科、それに大学院修士課程、留学生日本語教育センターを含めて、学生数、優に4000名を越す単科の大学としては質量ともに有数と称されるまでに発展してきた。本学の評価を国内にとどまらず、広く海外にまで高めてきたのは、創立以来、本学に関与してきたすべての人々の叡知と活力の凝集にほかならない。ここに、その70年にわたる軌跡をつまびらかにし、改めて諸先輩が創りあげてきた伝統の重みをはかることによって、故きを温ねて新しきを知るの譬え通り、母校のレーゾンデートルを確かめるよすがともしたいものである。

70年史編纂の芽ばえは、6年ほども前にさかのぼる。今は既に定年退官され、なお嬰鑠として斯界で活躍されている名誉教授の山口慶四郎氏を委員長として、その準備作業が始められた。その後、昭和63年の12月になって、大学、同窓会、からそれぞれ5名、後援会からの2名を理事とする、大阪外国語大学70年史刊行会なるものが設置されて、会長に同窓会長の山口博恭氏、副会長として大学側の山口慶四郎教授と後援会委員長の木村實氏が就任された。次いで大学から7名、同窓会からの3名が編集委員に選ばれ、やがて山口教授の定年を機に布施俊夫教授が二代目の委員長になり委員も増強されて、愈々本格的な編集作業に狂奔するほどの熱い日々が続くことになるのである。教授会のメンバーはもとより、事務職の関係者もそれぞれに支援の活動を展開してくれたが、委員長を中心とした各委員の献身ぶりには、ただただ頭の下がる思いで感謝の言葉も容易に見出し得ない。それほど熱意と努力の見事な結実が、この大著となって、ここにその姿を表わしたともいえる。この場をかりて祝意とともに改めて深甚の謝意を表する次第である。

戦後、新制大学が発足して40年あまり、昨今の激しい情報化、国際化のうねりのなかで、大学は再び大きな転換期を迎えつつある。しかも遠からず大学の就学人口は激減する傾向にあるという。このような状況のなかで、大学はどのように対処しようとしているのかその回答を迫られている。本学も、年史の編集委員が今日に及ぶ来し方の吟味に明け暮れていたその多忙さをも巻き込みながら、ここ2年ほどは、新しい大学づくりに全学を挙げて沸き立つほどのエネルギーをすべて傾注し尽くしてきた。幸い同窓会の発意によって本学70年の歴史を緋くことのできるようになったこの区切りの年が、奇しくも21世紀にむけて理想に燃えた大学創りに新しく出立しようとする年に繋った偶然を天与のものとして意義あらしめたい思いである。

1992年9月

大阪外国語大学

学長 山田 善郎

## 70年史発刊にあたって

本学創立70周年に当たり、ここに70年史を刊行することができますことは、まことに喜びにたえない所であります。

顧みますに、本学箕面移転後、同窓の間より、史料・証言の消失しないうちに、70年史を編纂してはどうかとの議が起こり、同窓会として、まず資料の収集を始めたのであります。その後、大学・後援会・同窓会の三者で構成される「大阪外国語大学70年史刊行会」が発足し、本学にとり先例のない編纂事業が進められてまいりました。編纂事業は刊行会内の「編集委員会」が主体となり、初期には山口慶四郎名誉教授が、同氏退官後完成までは布施俊夫教授が委員長として統卒力を発揮され、また、執筆に当たっては元毎日新聞記者小林俊夫氏の献身的努力により達成されたものであり、ここに厚くお礼申しあげる次第であります。

「賢者は歴史に学ぶ」という先哲の言葉に俟つまでもなく、文化は歴史の積み重ねの上に成りたつことは言を俟ちません。この70年史は一大学の歴史とはいえ、日本の大正・昭和・平成の三時代の学術文化の一側面を物語る貴重な資料であることは間違いありません。大学におかれてもこの歴史の上にたち、将来の発展を期して頂きたいと思います。また、これが将来の本学年史編纂の礎となれば幸いです。

終りに本事業に多大のご支援を頂いた歴代学長ならびに木村實後援会委員長に深甚なる謝意を表するとともに、2年有余にわたり編集委員を努めていただいた先生がた、草創の折多大の貢献をされた故山中源也君、写真整理に当たられた小林義男君、とくに資料の収集整理に最初から最後までご努力願った高橋昭平君に、厚くお礼申しあげる次第であります。

1992年 9月

大阪外国語大学70年史刊行会

会 長 山 口 博 恭

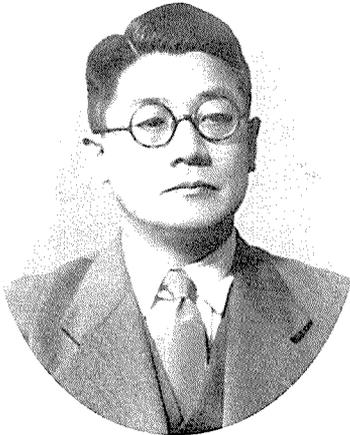
# 歴代校長および学長



初代校長 中目 覺



2代目校長 葉山 萬次郎



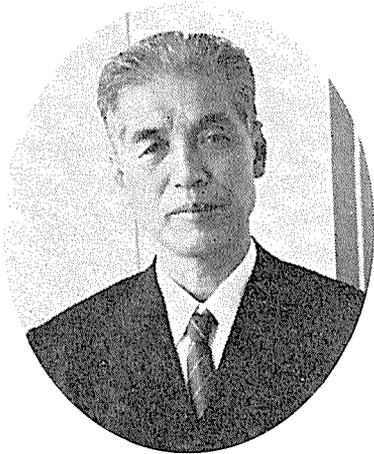
3代目校長 横山 俊平



4代目校長 尾崎 卓郎



5代目校長  
初代学長 平澤 俊雄



2代目学長 森澤 三郎



3代目学長 金子 二郎



4代目学長 牧 祥三



5代目学長 伊地智善継



6代目学長 林 栄一



7代目学長 山田 善郎

大阪外国語大学 全景







バス・ターミナル(B棟西)



体育館

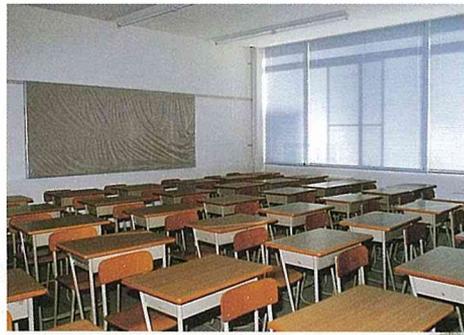


記念会館

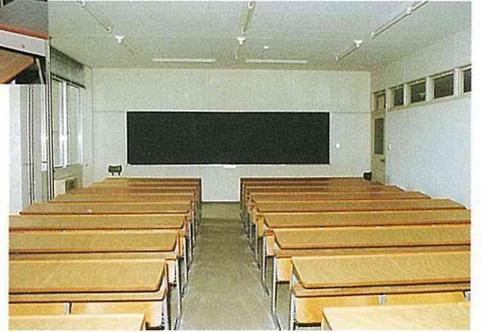




本部棟



教室



附属図書館・B棟・A棟



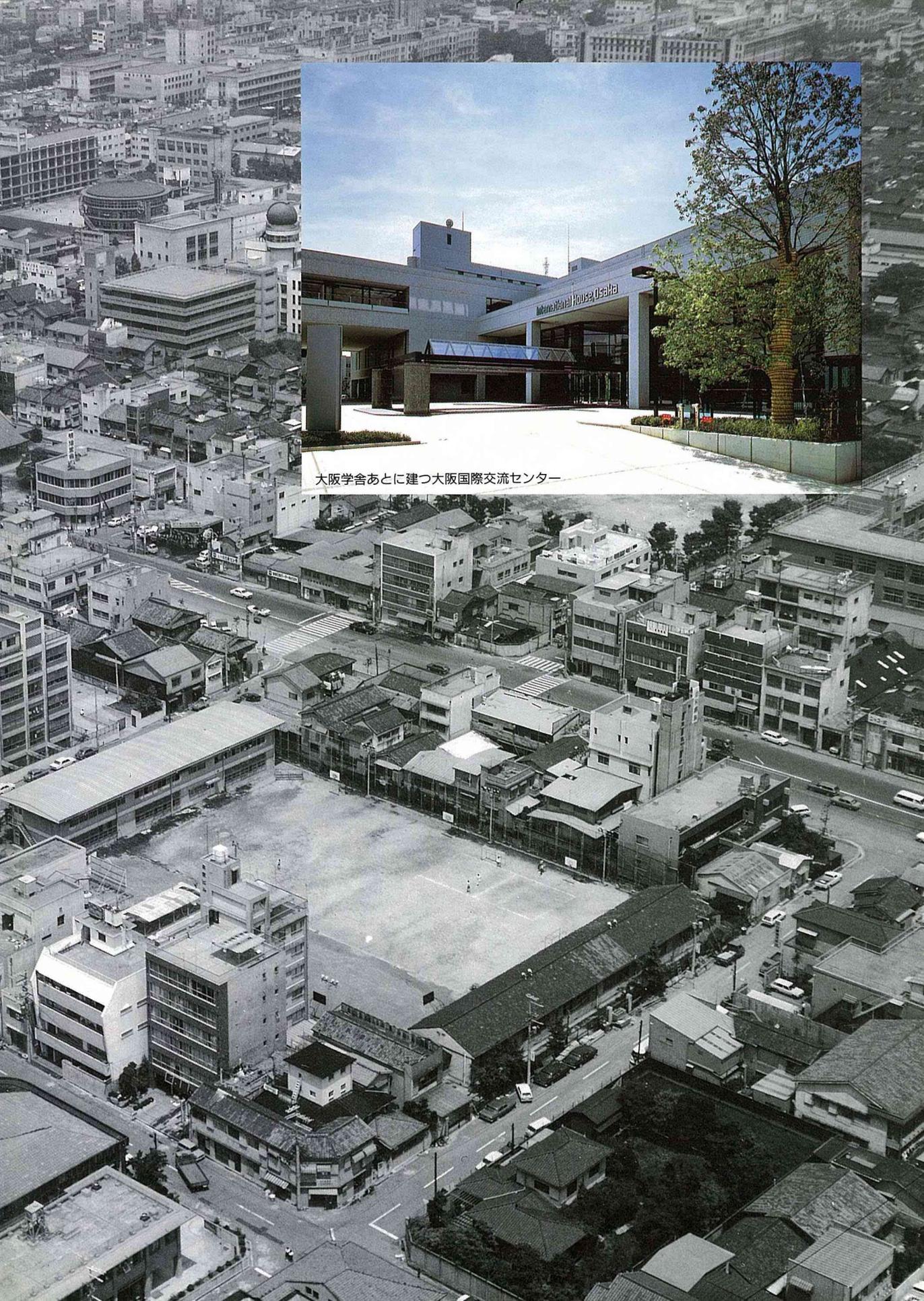
グラウンド



大学会館

昭和50年頃の大阪学舎





大阪学舎あとに建つ大阪国際交流センター



南

高

寺

前社

新

木

王

國

日本橋

日本橋

谷町

丁

日本橋筋

日本橋筋

日本橋筋

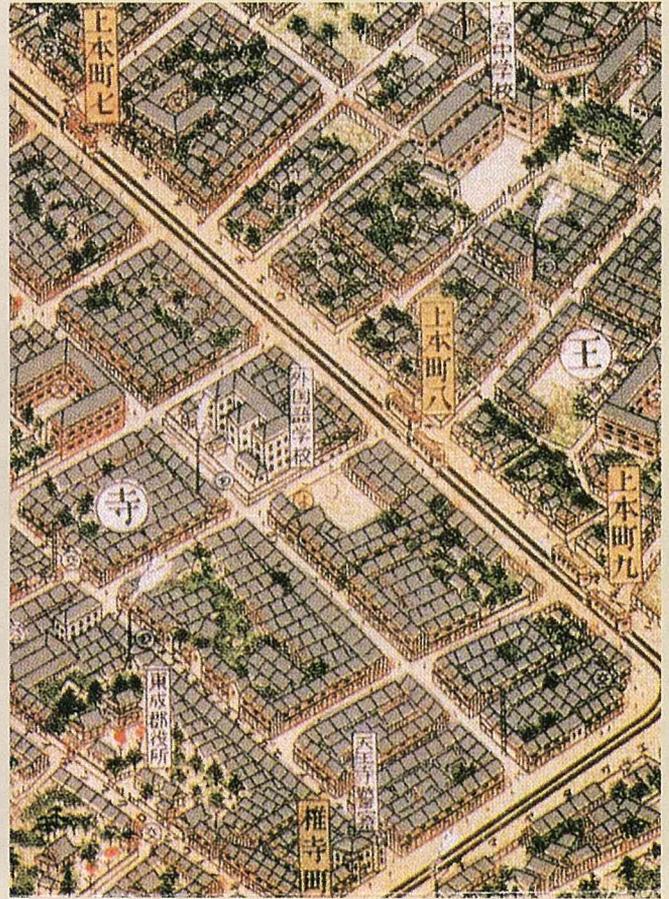
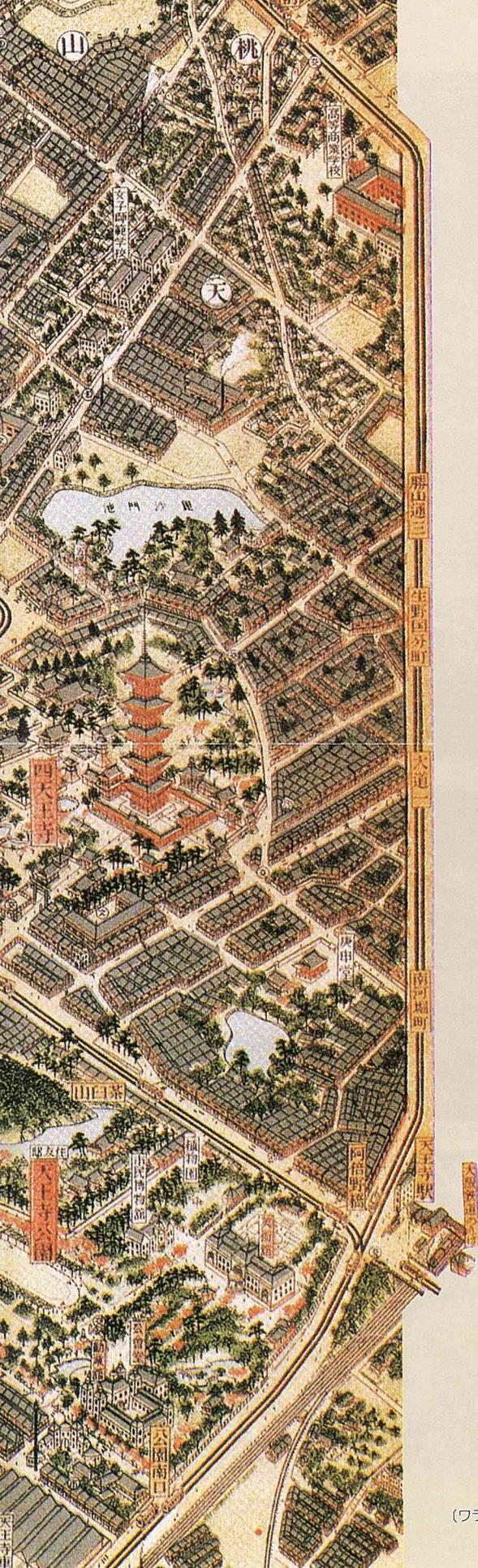
大

美

木

國

大阪市パノラマ地図にみる  
学校周辺(大正13年)



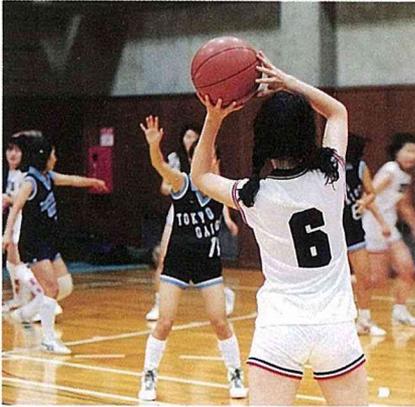
東外戦  
あれこれ



応援風景



空手道



バスケットボール



柔道



剣道



傘をさしての応援

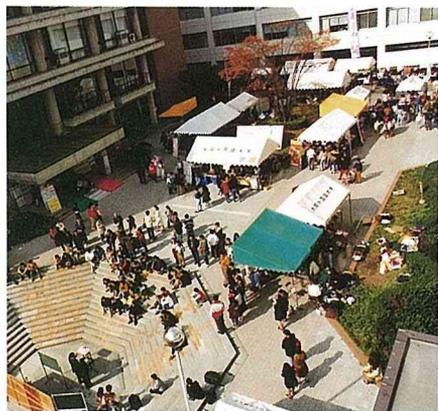


サッカー



ラグビー

間谷祭  
点描



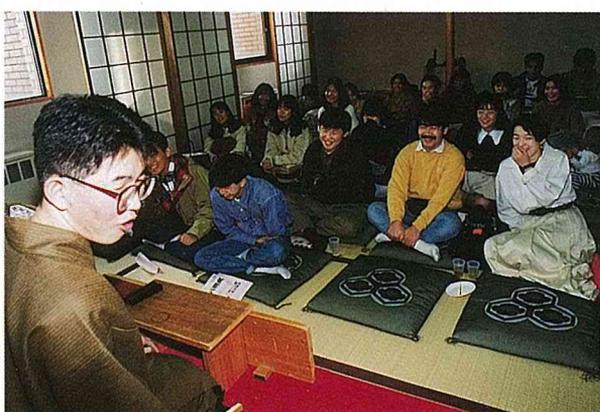
中庭の風景



語劇



書道展



落研



語劇



絵画展



ディスコ

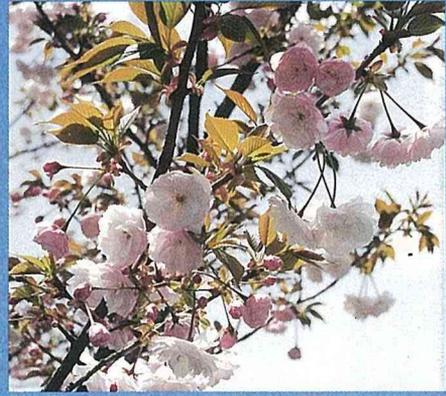


外国人留学生との餅つき

外大周辺で見られる鳥など



モズ



サクラ



ヒヨドリ



ルリタテハ



カシラダカ



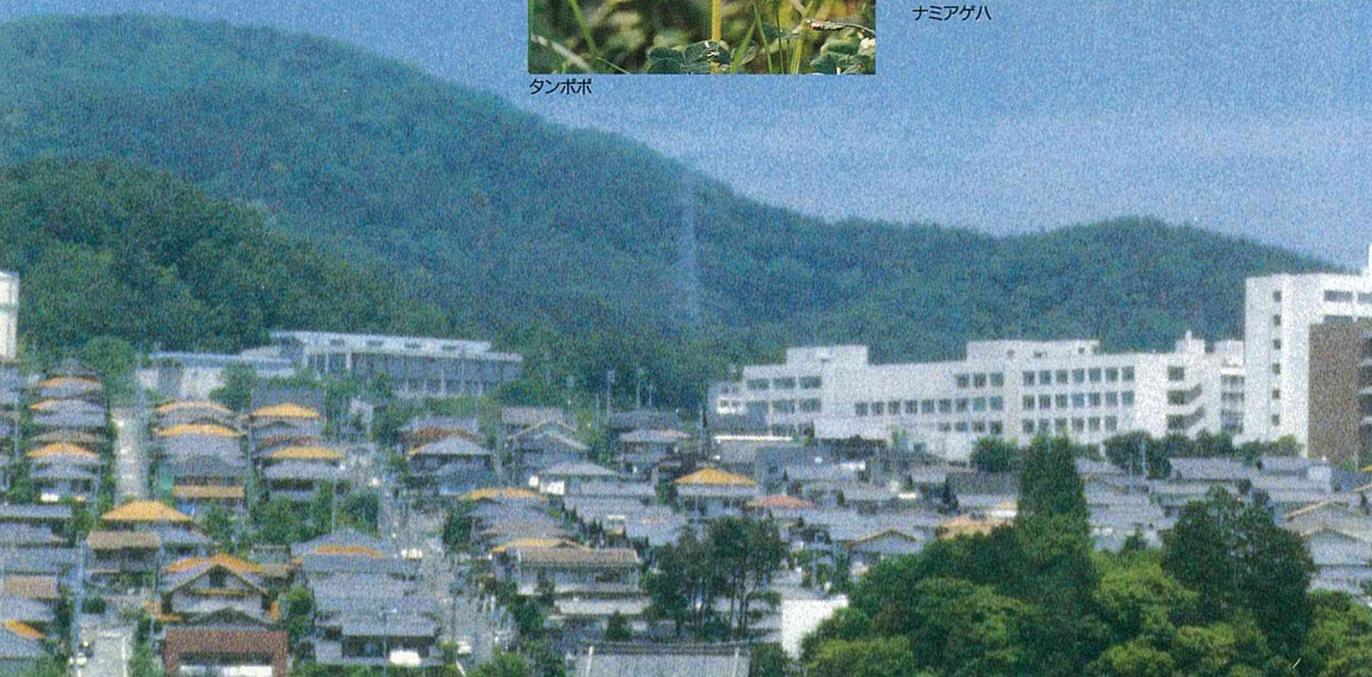
ジョウビタキ



タンポポ



ナミアゲハ





イカル



テングチョウ



アオスジアゲハ



イヌタデ



ホオジロ



ユゲラ



オドリコソウ



サカハチチョウ



# 大阪外国語大学歌

松永信成 作詞  
永井幸次 作曲

世界をこめし戦雲ようやくはれて  
東の空に暁の明星ひとつ  
これぞ大阪外国語大学

政略の雲世界をつつむとも  
言わずや「光東より来る」と  
偉いなるかなわが外語の使命

(反句) 

建てよ建てよ	平和の旗
叫べ 叫べ	愛の言葉
輝やかせ	文化の光

(反句)

## The College Song

of the Osaka School of Foreign Languages

Translated by Glenn William Shaw

昨日は芦よし茂りし浪速津  
今日はとどろくわが日本の心臓  
そこにおどるはわが青春の血潮

(反句)

生駒の山の緑蔭こまやかに  
ちぬの海面波きよきあたり  
ここぞわれらが魂の故郷

(反句)

北シベリアの水とぎす野より  
みなみ南洋の浪かすむ涯際  
わが健児らの活動の天地

(反句)

The clouds of war that filled the world  
At length have drifted from the sky  
In the smiling east at dawn  
One bright star is shining high  
That's the school that talks all tongues  
That' our own Daigai, Daigai  
Lift on high, lift on high  
The banner of the dove  
Shout aloud, shout aloud  
The message of world love  
Make to shine, make to shine  
Civilization's light

# 目次

ごあいさつ 山田 善郎  
山口 博恭

## 第1編 通史

プロローグ 開校式—大正11年11月11日—	3
第1章 大阪外国語学校の創立—背広の時代—	
(1) 創立に至る経緯	5
「本校創立 由林蝶子」	
林竹三郎の遺言	
中橋徳五郎の教育観	
高等教育機関増設計画	
外語新設へ100万円の寄付願い	
(2) 草創期の外語	11
外語設置	
入学式	
教官の顔ぶれ	
校舎の概要	
もう一つの大阪外国語学校	
ユニークな制服・背広	
校歌	
校友会創立	
校友会誌『咲耶』	
開校式	
生徒募集一時停止	
最初の卒業式	
配属将校	
(3) 別科と五教	33
別科	
第五臨時教員養成所	
(4) 大正から昭和へ	41
思想・社会運動の波	
外語社研の発足	
京都学連事件	
中目校長譴責	
生徒主事の配置と訓育費	
第2章 第2次世界大戦と外語—詰襟の時代—	
(1) 大戦前夜の外語	47
中目校長排斥スト	
西語部白紙答案事件	
詰襟へ服制変更	
「満州事変」と外語	
満蒙研究学生大会	
大阪外語学生新聞	
わが世の春・蒙古語部	
中目校長退官	
烈士之碑	
(2) 戦争と語学	64
兼修語の変更	
支那語部増員	
亜刺比亜語部新設	
露語部増員	
安南語	
ビルマ科新設	
(3) 勤労働員と学徒出陣	70
勤労奉仕	
校友会解散・報国団結成	
勤労働員	
通年動員	

	授業停止	
	修業年限短縮・繰上げ卒業	
	臨時補習科	
	学徒出陣	
(4)	外語から外専へ……………	78
	大阪外事専門学校	
	皇国ノ道ニ則リテ	
	「語部」から「科」に	
	授業ヲ行ハザル日	
	消えた岸和田疎開	
	幻の新徽章	
	母校炎上	
(5)	旧制時代の研究活動……………	85
	大陸語学研究所	
	西南亜細亜語研究所	
	海外視察録	
	蒙和・和蒙辞典の編纂	
(6)	終戦・高槻への移転……………	90
	動員解除	
	間借り授業	
	林蝶子死去	
	高槻移転	
	学校本部再移転	
	外専規則改正	
	「支那」から「中国」へ	
	女子学生受け入れ	
	復興委員会	
第3章	大阪外国語大学の成立——角帽の時代——	
(1)	戦後の教育改革……………	99
	米国教育使節団報告	
	教育刷新委員会	
	教育基本法、学校教育法の制定	
	新制中学校への敷地割譲	
	外専存亡の危機	
	大学基準	
	大学設置委員会	
	一府県一大学	
	新制国立大学実施要綱	
(2)	新制大学への道……………	104
	単独移行の選択	
	外専最後の入学者	
	最初の難関・外国語学部	
	大学設置申請書の提出	
	文部省案で単独移行内定	
	大学規模の圧縮	
	南棟校舎全焼	
	井上元教授の著作権寄付申し出	
	教官会議記録から	
(3)	新制大阪外国語大学の設置……………	113
	国立学校設置法の公布	
	遅れた開校	
	平沢初代学長	
	無痛分娩	
	外大初の入学者選抜	
	第1期募集校	
	入学宣誓式	
	開学記念式	
(4)	大学初期の姿……………	118
	教授会規程の制定	
	学則と教育理念	

	外専最後の卒業式	
	初期の教学体制	
	一般教育科目	
	専門科目	
	教職課程の設置	
	表札だけの研究室	
	大学間の格差	
(5)	高槻から大阪へ……………	128
	復帰の第一歩	
	第9特別委員会の結論	
	前期・高槻、後期・大阪	
	上八への統合・完全復帰	
	創立35周年記念祝典	
(6)	別科から短大へ……………	130
	別科	
	留学生別科(留学生日本語教育センター)	
	留学生の母・山本みち教授	
	専攻科	
	短期大学の併設	
	短大の問題点	
	二部即時編入要求	
第4章	大阪外国語大学の発展と変容——ジーンズの時代——	
(1)	外大の整備拡充……………	141
	ベルシア語学科	
	モンゴル語学科	
	朝鮮語学科	
	イタリア語学科	
	デンマーク・スウェーデン語学科	
	インド・パキスタン語学科	
	タイ・ベトナム語学科	
	ポルトガル・ブラジル語学科	
	インドネシア・フィリピン語学科	
	日本語学科	
	アラビア・アフリカ語学科	
	トルコ語専攻コース	
	第二部の成立	
	第二部の改革	
	推薦入学と社会人特別選抜	
	大学院の設置	
(2)	大学紛争と制度的改革……………	152
	紛争の背景	
	本学紛争の発端・新館封鎖	
	自力で封鎖解除	
	1・27教授会声明	
	「入学式粉碎」から最初の機動隊導入まで	
	学長選挙改革案と牧学長代行の選出	
	7・2機動隊導入の経過	
	大学臨時措置法案	
	全学バリケード封鎖	
	学外授業	
	警察力要請やむなし	
	最後通告	
	二度目の機動隊導入	
	荒廃した学園	
	学内正規授業再開	
	大学改革への模索	
	大学改革問題特別委員会	
	カリキュラム改革	
	後期学年進行制の撤廃	
	単位と履修方法の改訂	

	副専攻科目の履修	
	学長選挙の改革	
	学生・職員の意向調査	
	牧学長の選出	
(3)	将来計画委員会設置と箕面移転	181
	上八放棄の教授会決定	
	万国博覧会跡地の浮上と消滅	
	F候補地・小野原	
	将来計画委員会の発足	
	『将来計画の基本構想』	
	創立50周年記念式典	
	難航した土地買収	
	小野原地区断念	
	幻の小野原キャンパス	
	粟生間谷地区の提示	
	ランク1位・茨木の脱落	
	宝塚市山本地区の浮上	
	伊藤阪大教授の調査報告書	
	粟生間谷の決定	
	長引いた地元交渉	
	工事着手	
	受教育地確認仮処分申請	
(4)	外大の研究活動	196
	『学報』の発刊	
	『学報』から『論集』へ	
	『学術研究双書』の刊行	
	研究誌・語学テキスト	
	学会	
	科研・特定研究・学特経	
(5)	外大と国際交流	204
	本学における国際化の意義	
	外国人教師の受け入れ	
	教官の海外派遣	
	大学間学術交流協定	
	留学生受け入れと日本語教育	
	国際関係コース	
	学生の海外派遣・留学	
	帰国子女の受け入れ	
	地域社会での国際交流	
(6)	公開講座	209
第5章 大阪外国語大学の新たなる発展を目指して		
はじめに		
(1)	諸問題の根源——「言語」——	212
	言語という魔物	
	外国語教育・研究	
(2)	大阪外国語学校——「鶴的存在」——	214
(3)	外大に「大学」はあるか？	216
	外大出発時の2つの問題	
	外大アカデミズム	
(4)	第1次改革構想	220
	大学改革問題特別委員会	
	将来計画委員会	
	改革構想と移転	
(5)	第2次改革構想	226
	改革へ向けての再スタート	
	新構想案の概要	
	新構想案の方向	

第2編 部局史	
まえがき	239
第1章 教育研究組織	
(1) 語部・語学科第一部	241
中国語学科/朝鮮語学科/モンゴル語学科/インドネシア・フィリピン語 学科/インド・パキスタン語学科/タイ・ベトナム語学科/ビルマ語学科 /アラビア・アフリカ語学科/ペルシア語学科/英語学科/ドイツ語学科 /デンマーク・スウェーデン語学科/フランス語学科/イタリア語学科/ イスパニア語学科/ポルトガル・ブラジル語学科/ロシア語学科/日本語 学科/一般共通・教職・共通講座/保健体育科目	
(2) 語部・語学科第二部	451
中国語学科/英語学科/ドイツ語学科/フランス語学科/イスパニア語学 科/ロシア語学科	
(3) 留学生別科の歴史	471
第2章 事務・厚生補導組織	
(1) 専門学校時代	485
諸規程の制定 学校事務の分掌 各課の所管業務 各課の陣容 主幹と学科主任 戦後の改正	
(2) 大学時代	492
事務局の発足と学生部の設置 保健管理センターの発足 事務機構の整備 組織の変遷 諸規程の変遷 学長選考規程 学生部長選考規程等 教授会委員会規程 学則の改正	
(3) 土地・建物	502
1. 戦前	502
開校当時の施設 増改築の足どり	
2. 戦後	504
高槻学舎 戦災後の大阪学舎 復興の足どり 懐かしの上八 箕面学舎 敷地造成 建築工事 移転作業 大阪学舎を大阪市に譲渡 落成式典	
第3章 学生生活	
(1) 専門学校時代	515
1. 学業	515
学科目 外国語 合併授業 第二教官室 英語外国人教師の不在 体操・教練 成績評価 授業料とその減免 所要学費	

2.	入学	523
	募集定員	
	受験資格	
	入試科目	
	無試験検定の導入	
	入学志願の動機	
3.	卒業	526
	総数5,666名	
	就職	
	大学進学状況	
	海外進出	
4.	厚生施設	532
	青雲寮と悠々寮	
	運動施設	
	花園運動場	
	教官官舎	
5.	課外活動	535
	校友会創立のころ	
	対外試合	
	東外戦	
	運動部優勝の記録	
	創立記念陸上競技大会(記念祭)	
	万国風俗行列	
	弁論活動	
	万国語学大会	
	音楽部	
	語学講習会	
	国際交流	
(2)	大学時代	551
1.	入学	551
	学生定員	
	定員割れ	
	臨時増募	
	志願者の傾向	
	入試制度	
	奨学金制度	
	『学生部広報』の発行	
	合宿研修(学科別懇談会)	
2.	卒業・就職	559
	総数15,109名	
	新旧同時卒業の就職難	
	経済復興で好転	
	求人競争の激化	
	就職斡旋部	
3.	厚生施設	564
	花園学生寮	
	向陽・もみじ・粟生寮	
	体育館	
	サークル共用施設	
	合宿所	
	山の家	
4.	課外活動・諸行事	567
	外大祭(間谷祭)	
	対東京外国語大学定期競技大会	
	リレーカーニバル	
	全学駅伝大会	
	近畿地区国立大学体育大会	
	合同寮祭	
	夏祭り	
	課外活動団体(サークル・クラブ史)	573

第4章	附属図書館	
(1)	創設期	643
	外語図書館公開の方針	
	図書7,626冊	
	図書課長と図書課	
	図書館規程	
	閲覧室	
	戦争と図書館	
	陳舜臣の回想	
	高槻時代の図書館	
	悠々寮文庫	
(2)	成長期	651
	大学附属図書館の発足	
	79,449冊でスタート	
	上八図書館完成	
	蔵書10万冊突破	
	洋書比率の増大	
	国立大学初のLL導入	
	石浜文庫	
	移転準備	
(3)	発展期	660
	建築設計基本要綱	
	新キャンパスに近代的図書館	
	31万冊の図書移送	
	ブック・ディテクション装置	
	コンピューターシステム	
	地図コーナー	
	貴重図書	
	特殊文庫	
	学術講演会(石浜文庫記念)	
	図書館委員会の発足	
	蔵書45万冊に	
	視聴覚教育施設	
	目から耳から・	
	衛星から	
第5章	関係諸組織	
(1)	教職員組合	669
	初代委員長・西沢修	
	『組合新聞』第1号	
	大学管理法案反対運動	
	労働条件の改善	
	第二部設置への取組み	
	懇親活動	
	事務局長出張問題	
	人事問題で組合脱退者も	
	紛争と大学改革	
	六者協学習会	
	安保破棄宣言	
	移転問題への取組み	
	全学移転対策会議	
(2)	学生自治会	673
	緑風会の誕生	
	学園復興運動の先頭に	
	授業料値上げ反対・教育復興闘争	
	食堂奪還、寮生活刷新運動	
	大学法案反対闘争	
	吹田事件	
	細胞解散事件	
	自治会再建	
	11・1 国際行動デー	

安保闘争	
学長三選反対決議	
学寮自治で全学スト	
自治会解散通告	
第二部自治会の発足	
大学紛争の教訓	
学舎移転への取組み	
第一部自治会活動停止	
(3) 大学生協同組合	682
食堂経営協議会	
外大生協創立	
第1回総代会	
組織部設置とサービス拡大	
食堂、地下へ移動	
赤字との闘い	
「受益者負担は不相当」で確認書	
出資金引上げ	
法人格の取得	
赤字克服・黒字体質へ	
箕面移転後	
(4) 大学後援会	688
父兄会の発足	
父兄会費問題	
大学後援会の創設	
地方別懇談会	
『CAMPUS NOW』の発行	
(5) 同窓会(咲耶会)	694
1. 戦前	694
『会報』第1号	
同窓会会則	
会 員	
役 員	
入会費・会費	
中目校長胸像の建設	
同窓会支部の拡大	
2. 戦後	697
学園復興への取組み	
卒業生組復興委員会	
初代会長・繁村長孝	
戦後初の会員名簿	
幹事長から会長へ	
創立記念式典(35周年、50周年)	
『きんきら50年』発刊	
山口博恭会長の就任	
女性副会長の誕生	
同窓会誌『扉』	
同窓会『本部通信』	
『咲耶』創刊	
大学移転記念事業募金	
1億5,000万円達成	
烈士之碑移転	
記念会館	
山の家	
国際交流センターに記念像寄贈	
『70年史資料集』の発行	
国際交流基金への援助	
第3代会長に早原瑛	
資料編	710
附 録	724
年 表	740
編集後記	761

## 凡 例

- (1) 本70年史の記述は、大阪外国語学校の設置(大正10年12月9日)に至るまでの経緯を創立前史として含み、以後、大阪外事専門学校を経て大阪外国語大学となった本学の平成4年3月末までの歩みを対象としている。
- (2) 本70年史は、第1編・通史、第2編・部局史のほか、資料編、付録、年表から成る。
- (3) 用字用語については原則として常用漢字および現代かなづかいによった。  
引用文は原文のままとし、歴史的かなづかいは残したが、旧字体は新字体に改めた。  
文意を損わない範囲で句読点を補ったり、一部省略したものもある。引用文の出所は〔 〕内に示した。
- (4) 敬称、敬語は原則として省略した。
- (5) 年号は元号を用い、必要に応じ西暦を併記した。  
(ただし、第2編・部局史のうち、第1章の各語学科史、第3章の各サークル・クラブ史に関しては、執筆者、寄稿者が多数に及んだため、各個人の意向を尊重して、必ずしも(3)、(4)、(5)の原則どおりではない部分もある。この点は部局史の「まえがき」で断っているとおりである)
- (6) 本学の変遷に伴って、各語部・科・語学科の呼称も変化する。たとえば「支那語部」は「支那科」「中国科」を経て「中国語学科」に、「馬來語部」は「マライ科」「インドネシヤ科」から「インドネシア語学科」を経て「インドネシア・フィリピン語学科」となる。  
本70年史では、「支那語部」「支那科」など当時、固有の名称として使われていた場合を除き、可能な限り「支那」は「中国」と改めた(「支那」から「中国」への呼称変更については、第1編第2章で触れている)。  
細かいことであるが、外専から大学初期までの「アラビヤ」「イスパニヤ」「ロシヤ」科・語学科が「アラビア」「イスパニア」「ロシア」語学科のように、「ヤ」から「ア」表記に変わるのは昭和34年度『大学便覧』からである。本70年史では、そのときの学則上の表記に従ったが、繁雑を避けるため、大学移行後はすべて「ア」表記とした。
- (7) 本学出身者については、人名のあとに専門学校・大学の別、出身語部・語学科、卒業回数を〔A〕〔B〕〔C〕の記号・数字の組合せによって( )内に示した。(C7)は大阪外国語学校支那語部第7回卒業を、(大D10)は大阪外国語大学ドイツ語学科第10回卒業を意味する。

### 索引記号(〔A〕〔B〕〔C〕)

- |                           |                    |
|---------------------------|--------------------|
| 〔A〕 ナシ → 大阪外国語学校、大阪外事専門学校 | II → 第二部           |
| 大 → 大阪外国語大学               | 院 → 大学院            |
| 短 → 大阪外国語大学短期大学部          | 臨 → 第五臨時教員養成所      |
| 〔B〕 C 中国語学科               | E 英語学科             |
| K 朝鮮語学科                   | D ドイツ語学科           |
| M モンゴル語学科                 | DM デンマーク・スウェーデン語学科 |
| IN インドネシア・フィリピン語学科        | F フランス語学科          |
| IP インド・パキスタン語学科           | IT イタリア語学科         |
| T タイ・ベトナム語学科              | S イスパニア語学科         |
| B ビルマ語学科                  | PB ポルトガル・ブラジル語学科   |
| A アラビア・アフリカ語学科            | R ロシア語学科           |
| P ペルシア語学科                 | J 日本語学科            |
| 〔C〕 卒業回数                  |                    |

---

# 第1編 通史

---



# プロローグ

## 開校式——大正11年11月11日

記念すべく又意義ある我大阪外国語学校の開校式が今日11月11日に開かれることになった。

人の心を澄み渡らせる様な清澄な秋の空気を透して朗らかな青空から美しい太陽の光がアーチと万国旗に飾られた学舎の藁に映じてゐる。総てが生むもの、心の明るさと生れ出づるものの歓喜とに包まれたかの様に思はれるのであった。午前9時既に校庭は数多の来賓と学生によって充された。開会の時刻たる午前10時となるや学生来賓一同は第4師団軍楽隊の奏する行進曲と共に本日の式場である講堂に入場する。来賓である文部大臣、各国使臣を初め朝野の来賓一同が着席するや式は君が代の合唱に初まって校長の式辞や各来賓の祝辞、生徒総代の祝辞が次から次へと朗読される。式場は緊張した静粛と感激に充された。やがて祝辞の朗読が終ると全員起立の下に全学生に依って我校歌が合唱された。青春の日の思出と歎び籠めて歌ふ高らかな歌声が感激の潮の如く式場に充ち広がった。

かくて11時30分式は終はり再び起る行進曲の奏樂裡に諸員は立食の会場に入り盛大な饗宴が開かれた。再び三度起る万歳の声が心地よく秋の大空に響き渡るのであった。

＝草薙記＝

(大正11年12月発行・大阪外国語学校校友会誌『咲耶』創刊号から)



# 第1章 大阪外国語学校の創立

(背広の時代)

## (1) 創立に至る経緯

〈「本校創立 由林蝶子」〉

「本校創立 由林蝶子 捐建設費 以助之」——箕面市粟生間谷の大阪外国語大学キャンパスの一隅に建つ同大学記念会館2階に、亡夫・竹三郎の遺志を継いで大阪外国語学校創設のため100万円を寄付した林蝶子の顕彰銅板が保存されている。大正11(1922)年、大阪市東区(のち天王寺区)上本町8丁目に開校した同校玄関の壁面を飾り、永くその功績をたたえてきた銅板は、昭和20年3月の大阪大空襲にも焼け残り、昭和54年、本学の箕面移転に伴って移されたものである。

林竹三郎は慶応3(1867)年1月18日、山中庄兵衛の三男として生まれ、明治21(1888)年8月、林嘉助の養子となったのち家督を相続、寺西テフ(のち蝶子)と結婚、一男一女をもうけた。竹三郎は個人船主として帆船で北海産物を輸送する回漕業を営んでいたが、時勢の進展とともに鋼船を採用し、明治38年には750トンの貨客船を大阪鉄工所で建造したのをはじめ大正2年までの間に第1～第8大運丸を建造し、室蘭一呉一長崎間の定期航路を開設した。大正3年、第1次世界大戦が勃発すると、わが国海運界は戦乱の拡大とともに未曾有の活況を呈し、竹三郎も大阪市西区立売堀北通6丁目の自宅洋館を事務所し、大阪一欧州間のピストン大量輸送を手がけ、2,000万円にのぼる利益をあげたと伝えられ、大正6年には直接国税11万円を納める多額納税者の一人となるなど、この時期に輩出した典型的な「船成り金」の一人であった。大正7年、病に倒れた竹三郎は事業組織を林汽船株式会社に變更、同年7月12日午後3時30分死去した。52歳であった。

〈林竹三郎の遺言〉

7月14日付『大阪朝日新聞』に次の記事がある。

公益事業に100万円を寄付せんとす

故林竹三郎氏の遺言

本年決定の大阪府多額納税者中一躍第2位を占めたる市内西区立売堀北通6丁目海運業林竹三郎(52歳)氏は食道癌にて12日午後逝去せり。氏は明治33年頃より逐次海運業に地歩を占め明治43年大汽船本位の海運業を計画して以来、拮据<sup>きつぎよ</sup>励精<sup>れいせい</sup>欧州大戦乱起



頭彰銅板

こるに及び遂に今日の富を至せり。その病みて再び立つ能はざるを知るや直に遺言書を作りて金100万円を親類、知人、傭夫に遺贈する旨明示し、別に金100万円を社会の公益事業に寄付すべき旨を遺言したり。右につき遺族は故人の意を体し適当なる用途を協議し居れるが追て大阪市の有力者にもその意見を聴き近く公表するに至るべしと。

竹三郎の葬儀は7月18日午後4時から四天王寺本坊で行われたが、伏見宮文秀女王殿下の御使が参列され、供花は伏見宮、賀陽宮をはじめ100余、弔辞は大隈侯、石黒男爵ら10数通、会葬者は3,000余人にのぼり近來の盛儀といわれるほどであった。葬儀に先立ち、各新聞に死亡広告が掲載されたが、嗣子林正三、妻テフ、親類総代山中福之助、寺西当治郎につづいて友人総代として中橋徳五郎、野元驍、堀啓次郎、山岡順太郎ら大阪商船関係の人物が名を連らねているのが目を引く。

なかでも中橋徳五郎は通信省鉄道局長を最後に民間入りし、明治31年7月、岳父田中市兵衛の後を継いで大阪商船社長となり、大正3年11月、社長を辞任するまで積極的な新航路開設を進め、同社中興の祖と言われた。宇治川電気社長、日本窒素肥料会長も兼ね、大阪商船社長辞任後は立憲政友会に入党し、大正6年6月には幹事長に次ぐ総務委員の要職にあり、このあと原内閣の文部大臣に就任している。中橋が林竹三郎の葬儀の友人総代筆頭にあげられたのは、同じ海運業界仲間として親交があったという以上に、大阪経済界さらに中央政界の大立物であったという事情も見逃せない。

ところで林竹三郎は、100万円の寄付を遺言するに当たって、どのような公益事業を脳裏に描いていたのだろうか。大正7年といえば、岩本栄之助の100万円の寄付になる中之島の中央公会堂が竣工(同年10月)目前であった。前年の大正6年には、同じ船成り金の森平蔵が財団法人私立樟蔭高等女学校を設立している。古くは明治37年に開館した大阪図書館(現府立中之島図書館)への住友家の寄付も竹三郎の記憶にあっただろうが、具体的に何を念頭に置いていたかは明らかではない。

昭和3年に本校卒業後、京大に進んだ大阪商人論などで知られる「大阪学者」阪大名誉教授、文化功労者の宮本又次(F4)は「大阪女傑論」[『大阪春秋』第8号]の中で、母校創立者について、こう書いている。

「大阪外国語学校の基金を国家に寄付した林蝶子も大阪が生んだ女傑といってよいが、女傑というよりも、むしろ温厚な、大阪の御寮人というタイプの女性であったろう。……蝶子は夫の遺志を継ぐべく府民のための学校づくりを考えて、時の文部大臣中橋徳五郎を訪う。……中橋は国際人養成の外国語学校を提案し、東京にあって大阪にないのはおかしい、と言った。蝶子の腹は決まり、文部省に100万円を寄付、この資金をもとに外国語学校が出来上がる。……『なんでもよいから専門学校を』と、別に注文をつけずに中橋に相談を持ちかけたあたりも、大気<sup>(マツ)</sup>で、気散じな所がある。そしてあとは恬淡としている」

事実はこのとおりであったろう。しかし、この時期、大阪外国語学校1校だけが生まれただけではない。大阪外語のほかには高等学校10校、高等工業学校6校、高等農林学校4校、高等商業学校7校、薬学専門学校1校、計29校という高等教育機関大増設計画が進められようとしていたのである。

#### 〈中橋徳五郎の教育観〉

中橋徳五郎は大阪商船社長を辞任したのち大正5年12月の衆議院議員選挙に金沢市から7項目の重点政策を掲げて立候補したが、第1次世界大戦での日本の国際的地位向上を踏まえて、当面の急務の第1を外交問題、第2は教育政策と位置づけ「高等教育制度を拡張整頓し、有為の青年を養成し、社会の各方面に適材を配置するのは国運の隆盛発展を期する根本要義なり。独逸が今日腹背に連合軍の大兵を受け、対峙敢て屈せざる者、其の困する所、一に教育の力にあり。他山の石、以て我が玉を琢くべし」[『中橋徳五郎伝』以下の引用も同書]と訴えた。

当選を果たした中橋は翌6年2月の政友会茶話会での演説でも高等教育の普及を力説した。「欧州戦乱の終息に伴い、戦後第一に起こるべき問題は科学の競争である。別言すれば知識の競争である。列国競争の波が押し寄せる場合に際し、今日の如き教育程度を以て優位に立つことができようか」と問いかけ、「特に最も不足を感じつつあるのは高等教育機関である。毎年中学校を卒業する者は2万人以上、そのうち高等学校、各種専門学校へ入学志願する者が約1万人。なおその外に前々からの中学卒業生で順繰りに志願する者が毎年1万2、3千人あるから、志願者の数は2万2、3千人に達するにも拘らず、入学を許可される者は僅かに3千5、6百乃至4千人くらいで、全体の5分の1にも足りない。即ち年々1万4、5千人以上の子弟は門前払いを食う勘定である。……その結果、多くの高等遊民即ち浮浪人を生ずるに至っては、国家のため実に憂ふべき大損害と言はねばならぬ」と、高等学校、専門学校から締め出される中学浪人増加の現状を厳しく批判、さらに「かの北米合衆国の如きは、大学の数が600ほどある。しかるに我邦では僅かに数ヶ所の大学があるに過ぎぬ。仮りに官私立の各種専門学校を一種の大学と見做して計算するも、その数70の上には出でぬ」と、高等教育機関増設が急務中の急務であると強調したのである。中橋の



創立者 林蝶子

この持論を、生前の林竹三郎が耳にしていたかどうか、それが後の企業利益の社会への還元、公益事業への寄付という遺言につながったかどうか知る由もないが、2人の実業家の親交が林蝶子を通じて大阪外国語学校誕生に結びついたことは否定できない。

中橋の教育重視政策は、当時台頭しつつあったサラリーマン、官公吏ら有識無産階級、いわゆる小市民階級の要求に合致するものであり、政党としては無視できないものであった。こうして教育政策は、ついに政友会の4大政綱のトップに掲げられるに至る。

#### 〈高等教育機関増設計画〉

大正7年、全国に波及した米騒動で倒れた寺内内閣に代わって同年9月26日、原内閣が誕生する。政友会を率いる政党の党首という資格で首相に任命されたのは原敬が初めてであり、爵位を持たない衆議院議員が首相になったのも、これが最初。当時の国民は「平民宰相」と呼んで原内閣の誕生を歓迎した。中橋徳五郎は文部大臣として入閣する。通信省出身の中橋は初め通信大臣を希望したが、原敬から「教育施設の改善提案は君の素論であり、わが4大政綱の第1に掲げられた大政策だから、君こそ文部大臣の最適任者であらねばならぬ」と勧められて受諾した。就任後1カ月、中橋文相は第1、第2次の西園寺内閣で書記官長を務めた南弘次官を呼び、かねてからの主張に沿った高等教育機関増設計画の立案を命じた。南次官以下の文部官僚は、昼夜兼行の精力的作業で、来るべき第41議会(大正7年12月27日～8年3月26日)に向けて成案をまとめ上げた。計画の内容は大正8年度から13年度までの6カ年間に高等学校10校、高等工業学校6校、高等農林学校4校、高等商業学校7校、外国語学校1校、薬学専門学校1校の合計29校を新設、さらに既設各種専門学校と既設各大学の規模を拡張するほか、官立医学専門学校5校と東京高等商業学校を単科大学に昇格させるという画期的なものであった。

増設計画の基礎となった大正6年現在の入試状況を概観すると、官公私立高等学校、専門学校生徒収容力は13,884人。これに対し入学志願者は55,927人で入学歩合は100分の25であった。これを官立と公私立に分けると、100分の20と100分の47となり、収容力不足は官立においてとくに著しいものがあつた。一方、同年の中学卒業者は21,107人であ

ったから、入学志願者の中にはその年の新規卒業者ばかりでなく、過去数年の卒業者が多く含まれていたことになる。

この原因は初等中等教育の普及により、年々上級学校への進学希望者が増えているのに対して、それを受け入れる学校が絶対的に不足していたためであって、このまま放置すれば受験浪人累増の傾向に拍車がかかると憂慮された。この解決のために、高等教育機関の増設計画が緊急策として打ち出されたのである。

増設計画はまず計画達成後の入学志願者数を想定し、それが現在の収容力に対しいくら不足するか、次いでその不足を充足するに必要な学校はいくらかとして、はじき出された。すなわち、計画達成後の大正14年の中学卒業者を28,500人とみ、その3分の2が進学するとして19,000人、中学卒業以外の志願者を1,000人として合計20,000人を入学志願者の総数とおさえ、これを基準とした。これに対し、収容力は大正6年現在の13,884人に、既に計画ずみの大正8年度に増える分2,305人を加え、医科大学へ昇格する医学専門学校分554人を差引くと15,635人となるので、基準の20,000人との差4,365人分を、文部省直轄学校の増設で収容しようとするものであった。

この計画が完成する暁には、学校数は高等学校25校、高等工業学校18校、高等農林学校10校、高等商業学校12校、外国語学校2校、薬学専門学校2校、合計69校となり飛躍的な増加が見込まれた。

この計画に対し、12月25日「高等教育機関拡張ノ計画有之趣被聞食 思召ヲ以テ内帑金一千万円下賜候旨御沙汰被為在候」と、宮内大臣を通じ、皇室から1,000万円が支出されることが伝えられた。明治憲法下、皇室からの財政援助があるということは、同計画実現にとって、錦の御旗を得たようなもので、議会での反対論議を封ずる有効な手段となったことは否定できない。裏に原敬の政治工作があったのではないかとする見方もある。こうして、総額4,453万420円、うち皇室からの1,000万円を除く残余の額については公債発行と借入金でまかなうとする「高等諸学校創設及拡張費支弁ニ関スル法律案」が大正8年2月、開会中の第41議会に提出された。

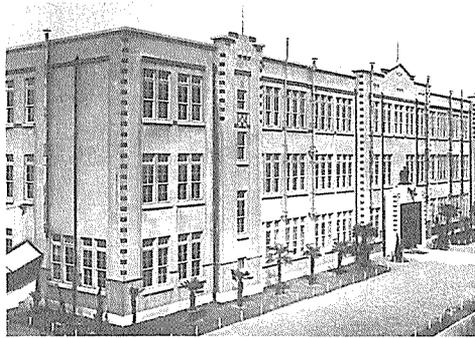
#### 〈外語新設へ100万円の寄付願い〉

高等教育機関増設法案の議会提出に先立つ大正8年1月24日、林蝶子は亡夫の遺志を実行に移した。増設計画に対する内帑金支出のことは、すでに公にされていたし、第二(大阪)外国語学校新設が含まれていることも中橋文相から聞いていたであろう。大阪府知事あてに、外国語学校建築費として100万円の寄付願いと、まず50万円の預金証書を提出した。以下、新聞記事を引用する。

林未亡人より100万円

外国語学校新設費としていよいよ提供す

市内西区立売堀北通6丁目12番地 故林竹三郎氏未亡人林てふ子は故人の遺志を継



鉄筋コンクリート3階建の校舎本館

ぎ今回大阪府に新設さるべき外国語学校の建築費として100万円の寄付願を、50万円の浪速銀行預金証書とともに24日代理人としててふ子未亡人の親族なる寺西当治郎、宇治電社長中川浅之助、浪速銀行営業部長中尾直太郎の3氏府庁に出頭、林知事に差出したり。因みに他の50万円は必要に応じて何時にても差出すべしと。右に就き林府知事は曰く「此100万円は故林竹三郎氏が教育界のために尽くして呉れとの遺言によって今迄其儘に残されてあったものを今回外国語学校の新設されるに際して、てふ子未亡人の名義で寄付になったので府では喜んでお受けした次第だが、外国語学校の建設費として尚残ったならば内容の整備費にも当てる積りである。建設費の予算は約100万円だが大正9年度に亘る継続事業で位置等は未だ決定して居ない」云々

このあと林蝶子が残り50万円を寄付し、100万円を完納したのは大正10年3月31日であるが、米10kgが3円4銭、入浴料金は6銭と文字通り銭湯、新聞購読料は1円20銭だった時代である。当時の100万円といえは現在の30~40億円にも相当しよう。これだけの金をボンと社会に投げ出すとは、いかにもスケールの大きい話ではある。

第二外国語学校新設については、中橋文相が貴族院予算議会で次のように説明している。

「大阪に外国語学校を一つ。これは今日、東京に外国語学校がありまして、だんだん需要が多いのでありますから…… 今日30億にも35億にも貿易が進んで、外国へも人がどんどん出ますし、日本の航路が全世界に蔽うという勢ひでありますから、これでは到底足りない。足りないのは関西に1校、貿易の中心として一番盛んな土地で人物も往来する大阪の土地に、外国語学校を作るといので、その計画を致しております。これは寄付者も決まりまして、経常費の方の都合がつきますれば、何時でも実行の出来るやうになっております」

東京外語1校だけでは足りない、貿易の中心・大阪にも絶対必要であるという思いが伝わってくるようである。

また議会審議では、増設計画を進めるに当たり政府は地方からの寄付を初めから予定しているのではないか、また寄付を強要する傾向があるのではないか、という点で、かなりの議論があった。これに対し政府側は「従来は財政難の時期もあったので、歴代の当局者が

地方の寄付を受けて僅かずつ学校を設立してきたが、それではいつまでたっても救済できないから、やむをえず、公債または借入金をもってこの計画を遂行する」と、国家みずから支弁する方針を言明する一方で、「地方が苦痛を感じず、地方人民に迷惑を及ぼさぬ程度であれば、その地方の者が希望し寄付を致すというならば、それは取っても宜しい」と苦しい答弁を繰り返した。それだけに、相談には乗ったが、強制したわけではない林蝶子の寄付は、中橋にとって心強いものだったに違いない。「寄付者も決まらまして……」と、胸を張って答えられたことであろう。法案は衆・貴両院で可決され、第41議会は閉会。高等教育機関増設計画にゴー・サインが出された。

当時の高等教育機関増設に関しては、大阪外国語学校以外にも次のような寄付の実例があった。

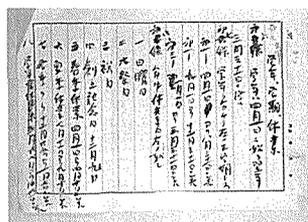
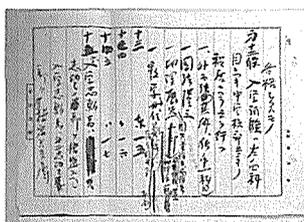
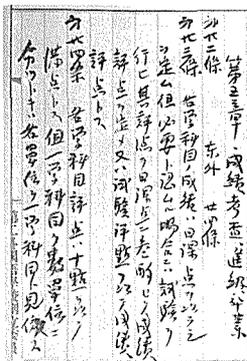
- ①水戸高等学校(現茨城大学)大正9年4月17日設置。第1次大戦により巨万の財を築いた内田汽船社長、内田信也が出身地茨城県の要請をうけ水戸高校建設資金として100万円を寄付。
- ②大阪高等学校(現大阪大学)大正10年11月8日設置。大正8年5月の臨時大阪府会で林市藏知事から「大阪府下に高等学校を建設する費用として80万円を負担するよう求められたが、文部省と交渉の結果、40万円は国庫負担と決まったので40万円を府と市で半額ずつ負担して応じたい」と提案、承認される。
- ③三重高等農林学校(現三重大学)大正10年12月9日設置。施設費総額89万円の半額を県が負担し、その財源としては設置地元からの寄付金6万円、30万円は県積立金から繰入れ、残りは県費より入れるというもの。

## (2) 草創期の外語

### 〈外語設置〉

大阪外国語学校の創設準備は急ピッチで進められた。まず大正9年9月、天王寺中学が阿倍野へ移転した跡地である大阪市東区(区域変更により大正14年4月1日以降は天王寺区)上本町8丁目187番地の敷地で校舎建設が始まった。施工は大阪・天満の松村組だった。翌大正10年5月23日には松山高等学校教授・中目覚(なかのめ・あきら)が第二(大阪)外国語学校創立委員に委嘱された。明治7(1874)年5月23日生まれの中目にとってこの日は満47歳の誕生日であった。この年10月には鉄筋コンクリート3階建の校舎本館が完成している。

校舎本館完成を見届けたように大正10年12月9日、勅令第456号により「『東京外国語学校』ノ次ニ『大阪外国語学校』ヲ加フ」という形で文部省直轄諸学校官制が改正され、ここに正式に大阪外国語学校の設置が公布された。同時に同日の勅令第457号により、職員定員も校長1人、教授9人、書記4人と決定。翌12月10日には前記の中目覚が大阪外国語学校長に任



学則草案 (中日用箋)

学則草案 (第二外国語学校創立委員)

命された。さらに12月12日には文部省告示第497号により、大阪外国語学校の事務所は当分の間、文部省内に置くと定められた。外語校長に任命された中目覚は松山での新聞取材に応じ、次のとおり抱負を語っている。創立委員としての7カ月間に想を練ったものであろう。

「東京の外国語学校は、文科、貿易科、拓殖科等に別れてゐるが、大阪のは科を別けないことにした。海外貿易に従事するものを養成するのが目的で実際に役に立つ人間を作りたいと思つてゐる。蒙古語と印度語とは1年置きに募集する考えだが、その他は年々募集する。外国教師は蒙古、支那、馬來、英、仏、独、露など各1名宛雇入れることになつてゐる。印度語は日本人にするか土人にするか尚未定だ。本科生の外に専修生も收容することになつてゐる。語学のみを教える東京の方では陸海軍の委託生が多く80名許りゐるが大阪では会社や商店の委託生が相応多いであらう」

印度語の教師について「日本人にするか土人にするか未定」と語り、新聞も堂々と報じているところなどは今日から見れば非常に奇異な感じがする。インド人あるいは現地人とすべきところであろうが、第1次大戦に参戦、勝利をおさめ、世界帝国主義列強の一角を占めるに至った当時の日本の「一等国」意識のおごりが言わしめたものだろうか。

つづいて12月14日の新聞は、大阪外語の募集語部、生徒数、入学資格、授業料などの要項をいっせいに報じた。また12月29日には文部省令第49号により、学校の目的、修業年限、設置語部、履修学科目、教授時数などを定めた「大阪外国語学校規程」が制定されるなど、翌年春の開校を控え、大正10年はあわただしく暮れていった。

明けて大正11年1月14日の文部省告示第9号によって、それまで文部省内で取扱つてきた大阪外語の事務は、1月16日からすべて大阪の外語校舎内に移された。開校へ一段と拍車がかかる。

1月16日付の官報は「本年四月入学セシムヘキ当校本科生徒ヲ募集ス 其ノ要項左ノ如シ」と生徒募集要項を掲載している。それによると募集人員は支那語部35、蒙古語部10、馬來語部25、印度語部15、英語部35、仏語部30、独語部20、露語部20、西語部10の計9語部200人、選抜試験の科目は▽国語および漢文▽外国語(英、仏、独のうち1)▽東洋史(本

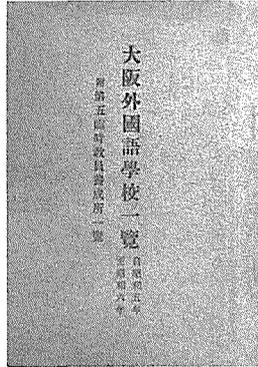
年に限る)▽数学(代数、幾何)の4科目。受験資格は中学校、商業学校、農業学校の各卒業生および専門学校入学検定合格者。入学検定料は5円だった。2月10日から同月末まで出願を受け、試験は4月1日午前中、外国語が2時間半、午後は東洋史が1時間半、翌2日は午前中2時間半が国語・漢文、午後1時間半が数学、このあと4月3日から6日まで口頭試問、身体検査が行われている。

大正10年制定の大阪市歌もうたう「東洋一の商工地」に、ようやく実現した官立外国語専門学校ということで受験生の間での人気も高く、募集200人に対し志願者は1,344人。志願者が多いため試験は上八新校舎のほか、近くの高津中学校、上宮中学校でも行われた。ちなみに、この年の官立高等学校の入試は、国語・漢文、歴史、地理、化学、代数・幾何、外国語各科目について3月18日から22日まで実施、身体検査も3月27日までに終わっており、これら高等学校受験者が試験の遅い大阪外語受験に流れ込んで志願者数増につながったという側面も見逃せない。

4月10日には文部大臣の許可を得て「大阪外国語学校学則」が制定された。3月9日付で認可を申請していたものである。前年暮れに制定された「規程」をより具体化し、本校の目的、設置語部、教授時数と内容、入学・進級・退学・卒業、服制などを細かく規定している。中目校長は、第二外国語学校創立委員就任直後から大阪外語の「学則」制定作業を進めた。現在も大学庶務課に中目校長自身の毛筆による学則素案が残されているが、使用されている原稿用紙には「第二外国語学校創立委員」あるいは「中目用箋」と印刷されており、開校直前から使われ始める「大阪外国語学校」と印刷されたものは含まれていない。素案の中には「第十三条一東外一五、第十四条一東外一六」と書かれているところも多く、東京外語の学則を参考にしたことを物語っているが、新しく大阪にできる学校にふさわしい特色を打ち出そうと苦心した跡も数々うかがわれる。

特色の第1は学則第1条に「本校ハ国際的実務ニ従事スベキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外国語ヲ教授スル所トス」とうたい、国際的実務従事者養成をずばり打ち出している点。東京外語の「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ現代諸語及其ノ他ノ学科目ヲ教授スル所トス」と比べると、より直截的といえる。第2は、東京外語が英、仏、独、露から始まる西洋語部のあとに支、蒙、泰、馬來などの東洋語部を配しているのに対し、大阪外語は東洋語部を先に置いて西洋語部をあとに配し、東洋語優先・重視の姿勢を打ち出している点。中国大陸および東南アジア・インド貿易の中心であった大阪を強く意識したものといえよう。また東京外語が各語部を文科、貿易科、拓殖科に分けているのに対し、大阪外語は本科一本。中目校長が就任時に語った「海外貿易に従事する者を養成するのが目的で、実際に役に立つ人間を作りたい」という実学志向が一貫しているといえよう。第3の特色は、折襟背広の制服に象徴される服制であろう。ユニークな制服は生徒だけでなく大阪市民をも驚かせるものであったが、これは後で述べる。

「学則」をもう少し具体的に見ると、前記第1条の目的につづく第2条以下で本科を支那、



『大阪外国語学校一覽』(昭和5年度版)

蒙古、馬來、印度、英、仏、独、露、西の9語部とすること、修業年限は3年、本科生のほか研究生、選科生、別科生を置くこと、本科、選科あるいは別科生として委託生を受け入れること、授業料は年額50円(第1学期15円、第2学期20円、第3学期15円)とする、などが定められている。また学科は外国語のほか修身、国語、歴史、地理、地理実習、社会学、教育学、言語学、法律経済、商業、商業実習、商品、商品実習、体操の多岐にわたり、とくに外国語は専修、兼修合わせ週教授時数33時間のうち第1学年は21時間、第2学年は32時間のうち18時間、第3学年では34時間のうち16時間を占めた。のちに「やたら外国語の多い貿易学校」と評される側面があったことも、あながち否定はできない。

#### 〈入学式〉

大正11年4月15日、大阪外国語学校の第1回入学式が挙行された。志願者1,344人のうち入学試験に合格した本科生240人、選科生1人、委託生14人の計255人が入学した。競争率は蒙古語部の1.4倍から最高は英語部の12.0倍、平均5.3倍の高率だった。14日付官報には入学許可の本科生240人全員の名前が掲載されたが、そのなかにのちに母校教官となった蒙古語部・精松源一、英語部・森沢三郎、独語部・熊谷俊次、露語部・岩崎兵一郎の名を見出すことができる。また、この日入学した選科生1人は、大阪外大所蔵の「石浜文庫」で知られる蒙古語部・石浜純太郎であった。

「茲ニ本校第一回入学式ヲ挙グルニ当リ一言諸子ニ告グル所アラントス 諸子ハ一千三百有余名ノ志願者ヨリ選抜セラレタル優秀タリ今ヤ入学ノ許可ヲ得其得意ヤ想フベク父母ノ欣ヤ亦察スルニ余アリ 諸子ハ此榮譽ヲ荷フト同時ニ本校職員ト協力一致シテ堅実ナル校風ヲ作成シ本校将来ノ発展ヲ計ルノ大責任ヲ有ス 其ノ創建セル基礎ニシテ薄弱ナランカ本校ノ将来ハ恰モ沙上樓閣ノ如ケン

今ヤ本校ハ東洋商工業ノ中心タル此地に創設セラレタリ 抑々本校ハ国際的実務ニ従事スル者ヲ養成スル所ニシテ諸子ハ教育勅語ノ趣旨ヲ奉体シ内ハ国民ノ品位ヲ高メ外ハ国際的親善ヲ計ル国家有用ノ材タルベキモノナリ 諸子ハ其本分トシテ学生ノ体面ヲ重ンジ本校所定ノ規律命令ヲ遵奉シ毫モ違背スル所アルベカラズ 夫レ語学ノ学

習ハ一ニ各自ノ堅忍不拔ノ精神ニ存ス 天稟ノ如何ハ問フ所ニ非ズ 況ヤ諸子ハ已ニ簡拔セラレタル優秀ノ者ニ係ル 既ニ学習ノ天性ニ於テ欠クル所ナシ 成功ト否トハ全ク其努力如何ニ在リ 又指導ノ任ニ当レル教官ニハ其名声天下ニ嘖々タル人少ナカラズ 此ノ如キ良師アリト雖モ諸子ニシテ自ラ勉勵セザランカ大ニシテハ国家ニ貢献スル所ナク小ニシテハ一身ノ不利ヲ釀スヤ必セリ 諸子須ク奮勵自重セヨ 今第一回ノ入学式ヲ挙グルニ際シ聊カ所懐ヲ述ベテ式辞トス」

生徒を前にしての中目校長の第一声であった。

大正11年版『外語一覽』の本科生徒本籍別調べ(9月末現在在籍生徒236人)によると、北は北海道から南は鹿児島まで34道府県にわたっている。最高はやはり地元大阪の66人、次いで兵庫25人、京都20人、あと岡山12人、奈良11人が2桁台。つづいて和歌山、香川が8人、福岡、愛知、徳島7人などが目立ち、全体としては近畿が132人、56%を占めトップ、中・四国51人、九州21人を含めた西日本となると204人で86%と圧倒的に多い。あとは東海・北陸28人、北海道・東北3人、関東(東京)1人の順。一方、年齢調べでは最低が18歳1カ月、最高は英語部の30歳、支那語部の28歳3カ月などが高い。平均では蒙古、西語部の各19歳4カ月から露語部の21歳5カ月まで、ばらつきがあった。

なお、入学式が行われた4月15日、勅令第240号をもって本校職員定員に教授4人、助教授3人が加えられ、校長1人、教授13人、助教授3人、書記4人の陣容となった。

#### 〈教官の顔ぶれ〉

授業は4月17日から始まった。開学当初の職員の顔ぶれを見ると、中目校長のほか、教授は高木敏雄(独語)、佐久間信恭(英語)、亀田次郎(国語・言語学)、千葉良祐(英語)、生田鹿之丞(修身)、井上翠(支那語)、稲村純一(地理)、伊藤資生(商業)、松永信成(露語)と、高等官3等から7等までの9人。助教授は小川正(印度語)、岡田演之(仏語)の2人。傭外国人教師は韓穆精阿＝ハンムチンガ＝(蒙古語)、ヘルマン・ボネル(独語)、バチー・ピン・ワンチク(馬來語)、ミゲル・ピサロ・サンブラノ(西語)の4人。講師(就職順)は瀬川亀(馬來語)、飯沼峯次郎(西語)、浦川源吾(漢文)、長谷川卯三郎(社会衛生・兼学校医)、ニコライ・アレキサンドロヴィチ・ネフスキー(露語)、アルフォンス・ウルリック(仏語)、マハデバ・ロール・シロフ(印度語)、吉本正秋(英語)、大野熊雄(剣道)、佐藤久平、ペドロ・ピリャベルテ(以上西語)、高島正俊(体操)、新村出(言語学)、羽田亨(蒙古語)、ウィリアム・ヘンリー・ヒックマン(英語)、関恩福(支那語)の16人。このほか囑託に浜野正平(柔道)がいた。さらに中目校長と同じ松山高等学校の書記から転じた田中鶴之助ら書記4人、雇員7人という陣容で職員総数は44人だった。

大正11年秋には職員総数が51人にふえた。教授陣に新たに在外研究中の松本重彦(アラビヤ語)が加わり、さらに講師だった吉本正秋(英語)が昇格して計11人に、助教授は十亀泰吉(体操)が入り計3人に、講師は山本茂(独語・体操)、チャールス・ケネス・パーカー(英



吉野美弥雄

語)、山下芳一(仏語)が加わって計18人に、嘱託も山門秀雄、入間田悌信(ともに学校医)が加わって計3人となったためである。

新設大阪外語の教官選びは、どのような基準で進められたのだろうか。開校後間もなく、助教授として外語に迎えられた吉野美弥雄・大阪外大名誉教授は「外語学校今昔」[同窓会広島支部発行『扉』第4号・昭和37年3月]で次のように回想している。

「東西に国立外国語学校が存在することになったが、大阪に新設される外語は東京外語の分校や出店のようなものになっては意義が薄い。大阪は大阪独特の行き方をしようではないか、ということに方針が決まり、それには校長はじめ主立った教授は出来るだけ東外出身者を敬遠する方針をとらざるを得なかったということである。一般からは英独仏三カ国ぐらゐは東外の厄介にならずとも容易に物色されようが、特殊語にいたっては他に求めることは至難なことではないかと懸念された。しからば現実には、どのように選ばれたか見てみよう。

まず初代校長の中目覚先生は東大出身で、永く旧広島高師で教鞭をとり、のち旧制松山高校の新設と同時に同校教頭として転出し、松山から外語創立の責任者として迎えられた人である。堂々たる立派な体躯の持ち主で豪放磊落な人であった。専攻はフランス語とかドイツ語とか聞いているが、なにしろ20カ国の言語に通じていると噂されていた。このような外国語の大家が校長に推戴されたことは当然であるが、実は他にも上述したようなわけもあったように思われる。中目さんが創立事務の責任者になって、その補佐役として第一番に任命された教授は地理の稲村純一さんであった。従って稲村さんは開校前すでに創立事務にもたずさわった人である。稲村さんは中目さんの旧広島高師時代の愛弟子であったことも、うなずけることである。

次に各語部の主任教授として迎えられた先生方は英語の佐久間信恭(米・留)、千葉良祐(東大)、仏語の上田駿一郎(東大)、岡田演之(東外)、独語の高木敏雄(東大)、高橋周而(東大)、支那語の井上翠(他学)、馬來語の瀬川亀(他学)、西語の飯沼峯次郎(他学)、印度語の小川正(東外)、露語の松永信成(東外)、アラビヤ語の松本重彦(東大)、——以上あげたところでも、初代の教授陣容は東外を敬遠した陣立てが見られるので

ある。さらに学年進行による増員を見ると、英語の浅山於菟(東大)、上田畊甫(他学)、仏語の目黒三郎(東外)、独語の山本茂(他学)、西語の佐藤久平(東外)、支那語の吉野美弥雄(他学)、馬來語の内藤春三(他学)、印度語の沢英三(東外)——ここでも東外を敬遠した形勢がうかがえる。

また語部の配列順序が、東外は西洋・東洋となっているのに対し、大阪は東洋・西洋となっている。これは中目校長の考えであったが、当時はこれを非難する向きもあったということだ

そう言われれば東京外語出身者は少ないようでもあるが、敬遠というのは当たるまい。中目校長の度量から判断すれば、東大、東外に限らず広く他学出身者にまで門戸を広げ、第一級の人材を求めた結果と見るべきであろう。

#### <校舎の概要>

上本町8丁目に出現した鉄筋コンクリート3階建の校舎本館、同2階建の講堂などから成る新校舎は当時としては人目をひくものであった。大正10年5月、中之島に完成した5階建の旧大阪市役所が塔屋を含めての高さ52m、当時、大阪市内では最も高い建物で、東横堀川以東の高台・上町台地には、まだ府庁、大軌(近鉄)上本町駅ビル(いずれも大正15年完成)、NHK大阪中央放送局(昭和11年完成)もなかったころである。大正11年11月11日の開校式の来賓祝辞に「輪奐の美」(宏大にして壮麗な美しさ)という賛辞があったのも、必ずしもオーバーではなかったかも知れない。市立小、中学校建設に当たって見学に訪れる関係者も絶えなかったという。

新校舎の規模、敷地買収および建設費用などについては、開校式における文部大臣官房建築課長・柴垣鼎太郎技師の工事報告が具体的で興味深いので、全文引用する。

「本日本大阪外国語学校ノ開校式ヲ挙ゲラル、此式場ニ於テ本校創設工事施工ニ関スル報告ヲ致シマスルコトハ洵ニ光荣ナル次第デアリマス

曩ニ政府ハ大正8年度ヨリ13年度ニ至ル6ヶ年度ノ継続事業トシテ高等諸学校ノ創設拡張計画ヲ立テラレマシタ 其ノ計画中ノ第二外国語学校ヲ95万6,190円ノ予算ヲ以テ大阪市ニ創設スルコトニ決定致シ敷地ヲ撰定詮議ノ結果天王寺中学校敷地5,543坪余ヲ45万4,557円98銭即チ1坪82円ヲ以テ買収スルコトニナリマシタ 予算全額ノ95万6,190円ヨリ土地ノ買収金ヲ引キマスルト残金ハ50万1,632円ト云フ少額ニナリマスル上ニ敷地ガ狭イ故是非トモ校舎ヲ3階建ニ致サナケレバ運動場ガ取レヌコト、ナリマスシ之ヲ3階建ト致シマスニ付テハ市街地建物取締規則ノ制限ガアリマスノデ木造ニハ致シ難ク已ムヲ得ズ鉄筋コンクリート3階建ニ建設スルコト、相成リマシタ 此ノタメニ工費ヲ増加スルノミナラズ物価騰貴ニ遭遇致シマシタタメ益々予算不足ヲ告ゲマシテ其増額ノ詮議ヲ仰グタメ工事ノ施工ニ遅延ヲ来タシマシテ今日未ダ施工中ノモノガ之レ有ルコトハ甚遺憾ニ存ズル次第デアリマス

<p>洋人前店 洋服店 洋人前店 洋服店</p>	<p>大阪外國語學校 生徒募集</p>	<p>NEW DEI</p> 
--------------------------------------	-------------------------	--

「大阪外國語學校生徒募集」の広告  
大正10年12月23日付『大阪毎日新聞』

大正9年9月二起工シマシテ今日マデニ竣工致シマシタ建物ハ本館鉄筋コンクリート3階建364坪 講堂鉄筋コンクリートギャラリー付平家建145坪 図書閲覧室木造平家建48坪 生徒控所木造平家建80坪 其他附属家屋95坪余ニシテ目下工事中ニ属スルモノハ鉄筋コンクリート造3階建16坪ノ書庫ト2階建20坪ノ倉庫トデアリマス 此外周圍境界ト門トヲ施工致シマスレバ大体本校ノ創設工事ヲ完了スルコトニナル次第デアリマス

只今マデニ土地ノ買収ト建築工事トノタメ支払マシタル金額ト目下工事中ノ契約金額トヲ合算致シマスルト総額104万4,297円76銭トナリマス 又竣工致シマシタ本館ノ一坪当リ工費ハ地坪ニテ1,081円 延坪ニシテ360円ニ相当致シ講堂ハ675円 図書閲覧室ハ268円 生徒控室ハ232円デアリマス

本校創設費ニ充ツルタメ林氏ヨリ金100万円ヲ寄付セラレタルコトハ工事施工ノ任ニ当ル私共マデモ深く感謝致シテ居リマス 又工事着手以來無事ニ其工程ヲ進ムルコトヲ得マシタコトハ閣下並ビニ諸君ノ御援助ニ依ルコト、是亦鳴謝致シマス

尚多少ノ残工事ガ之レアルコトユエ相変ラズノ御援助ヲ願ヒマス」

敷地買収費が建設費のほぼ半分を占めたこと、それでもなお狭い敷地に運動場を作らなければならないため校舎を3階建てにしなければならなかったこと、3階建てにするには木造ではなく鉄筋コンクリート造りにしなければならず工費増加を招いたこと、さらに物価騰貴が加わって予算増額折衝に手間どり工事が遅れたことなどが述べられているが、開校当初からの敷地の狭さは、このあと外語——外大の発展の足を引っばる要素となったことは否定できない。

大阪外語の校地選定については、国が是非とも大阪市内でなければならない、と強く主張したと伝えられる。本科のほか、昼間働いて夜間に学ぶ勤労学生のための別科設置を学則にうたっている以上、交通の便の良い市内に限られるわけで、別科設置に熱意を示した中目校長の主張であったかも知れない。しかし、大阪外語開校当時の大阪市域といえ東、西、南、北の4区だけ。面積わずか58.45平方\*、平成3年現在の24区、220.37平方\*のわずか4分の1に過ぎない。外語と同じ大正10年に設置された旧制大阪高等学校の建設敷地

が、当時はまだ大阪府下東成郡天王寺村であったことを思うと、大阪市内で十分な広さを持つ適当な敷地確保は難しかったのかも知れない。大阪市が東成郡と西成郡の44カ町村を市域に編入、人口211万4,804人、面積181.68平方\*。となり、東京市を抜いて日本第1位の都市「大大阪」となるのは、大正14年4月1日の第2次市域拡張以後のことである。

敷地買収単価が1坪82円だったということは地価狂乱騰貴の今日から見れば、まさに隔世の感を禁じ得ない。公共事業用地の買収価格などの基準となる国土庁の地価公示によると、平成3年1月1日現在の大阪圏の住宅地の平均価格は地価高騰にやっと歯止めがかかったとはいえ、1平方\*あたり50万8,200円、市内はさらに高く、天王寺区に例をとると、商業地の上本町6丁目2-26地点が1,060万円、住宅地の上本町8丁目7-12地点は191万円。いま外語のあった上本町8丁目に5,543坪3合9勺(約18,300平方\*)の敷地を得ようとすれば、ざっと350億円必要という計算になる。このように狂乱バブル地価を基準とする限り、林蝶子が寄付した当時の100万円は、実に770億円という膨大な額だったことになる。

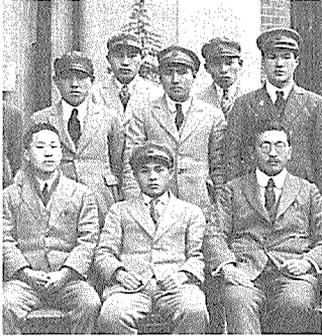
とにかく周囲に塀も門もない校舎で授業が始まったわけだが、学校西側に軒を連らねる長屋の背面が丸見えで、天気の良い日などは赤い矩形の布地やオシメが、へんぼんとひるがえり、野球のボールが食事の最中に瓦を破って飛び込んできたと長屋から絶えず苦情が持ち込まれるなど、庶民的過ぎる環境だったようである。

#### <もう一つの大阪外国語学校>

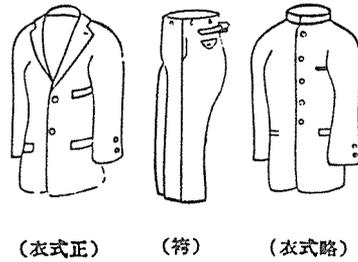
大阪外国語学校というのは由緒ある名前である。戦後の学制改革で京都大学に包括された旧制第三高等学校は明治2年5月、大阪に開校した<sup>せいみつ</sup>舎密局の流れをくむものであるが、舎密局はその後「洋学校、理学所、開成所、第四大学区(のち第三大学区)第一番中学校、開明学校、大阪外国語学校、大阪英語学校、大阪専門学校、大阪中学校、大学分校、第三高等中学校という複雑な改変の過程」[[『京都大学七十年史』]をたどる。第三高等学校と称するようになったのは明治27年6月以降のことである。大阪外国語学校を名乗ったのは明治7年4月から12月に大阪英語学校と改称されるまでの短い期間であったが、歴史と伝統ある校名であった。

時代は変わって大正10年12月9日、勅令第456号をもってわが大阪外国語学校が設置されるのであるが、12月23日付『大阪毎日新聞』社会面最下段に「大阪外国語学校生徒募集」の広告が掲載されている。ようやく本校校舎が上本町8丁目に完成したころであるが、広告の大阪外国語学校所在地は上福島北3丁目、社会人を対象に英語と英文タイプを教える夜間学校であったらしい。まったく同名のこの学校から、のちに本校へ抗議が持ち込まれた。教務課長だった高橋周而は、昭和26年6月刊のドイツ語学科誌『Der Deutsche Baum』2号に寄せた『外語』の昔ばなしで、次のように回想している。

「いつだったか衆議院議員選挙の時、滋賀県で名乗りをあげたHなる人があって、多分その経歴に書いたらしく、同県警から「貴校卒業生Hについて左記事項の回報がほし



背広服の学生



「学則」に示された制服

一、正式衣ノ前釦ハ三個ヲ附スルコトヲ得  
 二、衣釦ノ數ハ不體裁ナラサル限リ適宜増減スルコトヲ得

い』という照会があった。調べたところ、本科、別科とも該当者がないので、その旨返事をしておいた。後になって大阪外国語学校という所から『後に出来たのに自分達の校名を横取りしてけしからぬ。民業圧迫だ』と大袈裟な抗議を持ち込んで来た。お生憎と申し度いところだが、抗議なら文部省へ行くべき筋合と放任しておきはしたものの、以後なるべく官立大阪外国語学校ということにした。これでH氏の件が読めた。

すると又なんでも田辺だったかと思うが、塾のようなのが大阪外国語学校と称して生徒募集のビラを配っているというので、文書で交渉してもラチがあかず、庶務課長が談判に出向いたことがある。しかし、こんなことはあまりヒステリックにならなくともよい。薬でも化粧品でも売れゆきがよくなると偽造品が出る。教育界で一番詐称偽装者を持っているのは恐らく東大でしょうが、その当事者は別段問題にしていないうだ。逆説的にいえば、詐称学生が出たり偽称学校があるようになるのは本物の学校とその生徒が重きをなしている証左で、世間は即座に類別してくれるでしょう」

### 〈ユニークな制服・背広〉

外語学則中にある生徒心得の第1条は「授業若クハ儀式ノタメ登校スルトキハ必ず本校規定ノ服装ヲナスベシ 但シ已ムヲ得ズシテ和服ヲ着用スル場合ニハ予メ生徒課ノ許可ヲ受クベシ」と規定しているが「本校規定ノ服装」というのがユニークなものだった。学則に定める服制は、制服が折襟の背広、生地は羅紗、メルトン、スコッチ、セルで色はネズミ ▽襟章は七宝、濃紺の盾形アームで、「EX ORIENTE LUX ET PAX」(光と平和は東方より)の文字入り ▽ボタンはネズミ色で本校徽章を付したもの ▽本校徽章はO (Osaka)、L (linguae, lingvoj) 2字を組み合わせたもの ▽制帽は羅紗、ネズミの海軍帽 ▽帽章は金モールの本校徽章 ▽カラーは白のソフトダブル ▽ネクタイは色、品質とも任意だが、ネクタイピンは七宝銀地に紺字でC (支那)、M (蒙古)、E (英)、R (露)など所属語部の頭文字を入れる ▽靴は任意 ▽外套は開き襟、生地は羅紗、メルトン、スコッチで色は黒——と細かく定められ、このほか夏期には、ネズミ、白、霜降りの立襟略服、麦稈帽、ヘルメットの着用が許されていた。

学生といえば黒の詰襟が常識だっただけに背広を着た官立学校生徒には大阪市民も驚いたようである。学生自身の反応はどうだったろうか。入学許可の第一報が学校指定の滝川洋服店から届いたことに驚いた合格者は、洋服屋をたずねて、さらにびっくりすることになる。同窓会編『大阪外国語大学70年史資料集』に寄せられた“背広の時代”経験者の感想を見ると「ハイカラ」というものから「チンドン屋」に至るまで賛否はこもごものようである。

「背広、ネクタイの制服はよかった。他校に例がないのでよく目立った。外出するときにはフォーマルな感じで、着て歩くのが好きだった」「合格を洋服屋が知らせることから、制服が背広であることを知った。噂は聞いていたが驚いた。洋服の感じはハイカラであった。帽子は同色で、学生帽より上の縁が張っている感じで、運転手と同じやと言うのもいて人気はなかった」「中目校長が外国のスタイルを取り入れて背広、ネクタイとした。生地は英国製で値段は40円ぐらいした。当時、朝日新聞社の給料が50円ぐらいであったから、いかに高価な制服であったかがうかがわれる。帽子はケンブリッジ大学を真似たもので、制服は三越(百貨店)の音楽隊にそっくりと言われた。学生はこの制服が不満で、黒い詰襟に変えるよう中目校長に提案したところ、しばらく考えた結果『この服がいやなら明日から学校をやめよ』と言われ、次の日校長に謝りにいった」「当時の円タク運転手の制服に似ていることから運転手と間違われ、今度創立された外国語学校の制服だと言っても半信半疑の顔をされた」「ハイカラ過ぎて他には見られなかった。帽子が帽子なので私はいやだった。悪くいうとチンドン屋のようであった」

なお昭和6年度入学生から制服は黒の詰襟(立襟)服に変わるが、昭和7年度入学生の一人は「私が入学した当時、3年生の先輩はみんなネズミ色の背広に赤い外語ネクタイの制服だった。2年生以下は黒の詰襟学生服だったから、もう2、3年早く入学しておれば背広姿を楽しめたのに、と残念がったことも忘れられない」と感想を寄せている。ユニークな背広の時代は昭和8年3月、第9回卒業生を最後に短い歴史の幕を閉じることになる。

#### 〈校歌〉

「世界をこめし戦雲ようやく<sup>は</sup>霽れて 東の空に<sup>あけ</sup>暁の明星ひとつ これぞ大阪外国語学校 建てよ建てよ 平和の旗 叫べ叫べ 愛の言葉 輝かせ 文化の光」— 1番から5番までの歌詞の最後に繰り返される「平和の旗」「愛の言葉」「文化の光」のリフレイン。第1次世界大戦終結後の解放感、大正デモクラシーの高揚という時代背景、さらに理想主義的な建学精神を色濃く表わし、制服の襟章にラテン語で記された「EX ORIENTE LUX ET PAX」(光と平和は東方より)にもふさわしい校歌を、生徒は胸を張り、誇らかに歌った。作詞は校友会の初代文芸部委員長も務めた露語部の松永信成教授。東京外語露語部および東京帝大英文科卒。敬虔なクリスチャンであり、学者であり、日夏耿之介らと同人誌『仮面』を発行した詩人でもあった。作曲は大正4年に大阪音楽学校(現大阪音楽大学)を創立した永井幸次であった。病氣勝ちの松永は休職中の大正13年6月、33歳で死去、実質在職期間はわずか



校友会誌『咲耶』

1年余りだったが、外大になった後も歌いつづけられる校歌と図書館に寄贈された膨大な蔵書「松永文庫」によって永く名をとどめている。

#### 〈校友会創立〉

授業開始から1カ月後の5月には校友会が創立された。規約によれば「本会ハ大阪外国語学校校友会ト称シ会員ノ親睦ヲ図リ知徳ヲ研キ体育ヲ奨メ身心ヲ錬磨シ以テ校風ヲ宣揚スルヲ以テ目的トス」るもので、「大阪外国語学校職員及ビ本科生徒ヲ以テ組織」され、会の目的を達成するため、次の7部を置くとした。

武芸部(柔道、剣道、相撲、弓術、射的、馬術、水泳) ▽文芸部(弁論ヲ練リ雑誌ヲ編輯シ演芸会、音楽会、美術展覧会等ヲ催シカメテ学校文化ノ宣揚ニカム) ▽陸上運動部(各種オリンピック競技ヲ奨メ会員ノ身心ヲ錬磨ス) ▽端艇部(漕艇) ▽球戯部(野球、庭球、蹴球、ゴルフ等) ▽旅行部(遠足、跋涉、登山旅行) ▽会務部(会計庶務)

#### 〈校友会誌『咲耶』〉

12月には早くも校友会誌、『咲耶』創刊号が発行されている。『咲耶』の名は、古今集仮名序にある「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」——応神天皇の時に、「論語」「千字文」をわが国にもたらした王仁が詠んだというこの和歌から取られたものであることは言うまでもない。創刊号は、校友会創立に関して「一体、学校の教育といふものは教員が教壇に立って其の蘊蓄を傾倒した丈けで全部である訳のものでは決してない。知識といふものが我々の生活の要素として主要なものの全部でない以上、学校の教育は単に知識を授ける以外に我々の生活に必要な他のものをも授け且つ訓練せねばならない。壮健な身体、勇健な精神、優雅な情想、協同一致、親和相愛、これらは皆、円満なる知識、熟練なる技術と共に我々の生活に主要な条件であるが如くに、学校教育の主要なる務めである。斯うした要素を完全に円滑に満足せしめんとするため、校友会といふものの存在を必要とする結論に達した。校友会はその組織と行為の方法とは学校とは違ふけれども、その目的とする処は相等しく我々の学校修養の完全を計るにあるので、決して我々の遊びの機関で

はない。学校と校友会は決して別個の二物ではなくして本質的に同一のものである。そのいずれの一つの活動が鈍っても学校修養の完全は期せられないし、学校教育の成績は上がらないものである」と述べている。

具体的には4月19日に中目校長が高木教授を校友会創立委員長に、生田教授と瀬川講師を同委員に任命、生徒側からも各語部代表9人が創立委員に委嘱された。5月1日委員会を開催、校友会規約原案を審議し、5月5日に創立総会を開き、会長に中目校長を推戴、各部委員長(教授、助教授、講師)および各部の生徒委員を委嘱して、職員、生徒一体となった校友会が創立された。生徒会員の会費は年9円、職員会員の会費と合わせた初年度予算は2,857円。各部割当て額は武芸部400円、文芸部700円、陸上運動部500円、球戯部900円、旅行部200円、会務部157円。財政上の理由から、端艇部発足は見送られ、6部でのスタートとなった。今日の外大体育会、外大文化部連絡協議会を合わせたような体育・文化サークル活動の源流といえよう。

ところで『咲耶』創刊号はA5版67頁。松永信成教授の後を継いで文芸部委員長となった馬来語部・瀬川亀講師の「支那史に表はれたる支那とジャバとの交通」が巻頭を飾り、以下生徒寄稿の「校風論」、モリエールの戯曲の翻訳、詩、随想など盛りだくさん。この年日本を訪れた「浦塩(ウラジオストク)極東大学」学生一行の歓迎会の模様を伝える「ロシアの学生を迎えて」では「本校はじめての外賓は我露語部で引きうけるのだ、と他語部の人に羨やまれた」と誇らしげに書いている。

#### 〈開校式〉

大正11年11月11日、晴れわたった秋空の下、開校式が華やかに行われた。本編冒頭に掲げたプロローグは、文芸部委員・草薙正夫(D1)が校友会誌『咲耶』に執筆したものである。なぜ11月11日が創立記念日となったのか。授業開始は大正11年4月17日、勅令第456号で本校が設置されたのは前年の12月9日。学則原案でも、この記念すべき12月9日が創立記念日とされていた。それが正式決定のときには11月11日と変わっていた。第1次世界大戦の休戦協定がコンピエーニュの森で調印されたのが1918(大正7)年11月11日。その朝5時に署名が行われ、それに基づいて午前11時までには一切の戦闘行為が終わったという世界史的事実に因んだものだった。万事につけて新機軸を打ち出した中目校長らしい創立記念日設定といえよう。こうして大正11年11月11日と、11(イレブン)が三つ並ぶ佳き日に開校式が行われることになった。しかも、午前11時が式典のクライマックスになるように計画されていた。「世界をこめし戦雲ようやく霽れて……」の校歌が、プロローグにもあるように「感激の潮の如く式場に充ち広がった」のは、午前11時前後であったろう。

今茲壬戌十一月十一日我が大阪外国語学校創立記念日ニ當リ文部大臣閣下ヲ始メ朝野紳士ノ貴臨ヲ辱ウシ茲ニ開校ノ式ヲ挙グルヲ得ルハ本校ノ甚ダ光栄トスル所ナリ  
熟ラ人類文化發達ノ径路ヲ繹ヌルニ人々互ニ觀摩シ団体相勵ミ國々相依リ以テ其ノ



開校式—  
アーチで飾られた正門  
(前に立つのは市電の架線支柱)

長ヲ競フニ由ラザルハナシ 而シテ之ガ媒介ハ専ラ言語ニ藉レルガ如シ 言語ノ一科  
豈ニ之ヲ忽ニスベケンヤ

我が国文運発達ノ萌芽ハ遠ク難波ノ御代漢籍ノ輸入ニ始マリ漸次我が固有ノ精神ト  
相煥発シテ平安文化ノ華ヲ開キ江戸文明ノ果ヲ結ビタリ 明治大正ノ発展モ亦タ西洋  
文明ノ輸入ニ負フ所大ナリト謂フベク広ク智識ヲ世界ニ求ムト宣ヒシ聖旨ヲ思フゴト  
ニ感激ノ至ニ堪ヘザルナリ

今ヤ世界ノ文運ハ隆々トシテ向上シ其ノ底止スル所ヲ知ラズ 欧州大戦終熄シテ我  
ガ国ノ国際的關係愈々繁ク経済的地位益々重キヲ加フルコトマタ前日ノ比ニアラザル  
ナリ 是ヨリ益々各国ノ長ヲ採リ粹ヲ抜キ一ハ以テ世界ノ文運ニ貢献シ一ハ以テ我ガ  
国経済上ノ地位ヲ確保セザルベカラズ 此時ニ当リ大阪ノ地ニ我ガ外国語学校ノ新設  
ヲ見タルハ大ニ意義アルコトナリ 其創立ニ際シテ林蝶子女史アリ亡夫ノ遺志ヲ継ギ  
巨費ヲ捐シテ建設費ニ充テ此ニ奠然タル校舎成レリ 若夫レ内容ノ充実ト学生ノ教養  
トニ関シテハ不肖微力ナリト雖モ教職員一同ト共ニ協力尽瘁シ以テ国家ガ本校ヲ設立  
セル精神ト寄附者ノ好意トニ副ハンコトヲ期ス 而シテ之ガ達成ニハ來賓各位ノ後援  
ニ俟ツ所大ナルモノアルハ言ヲ須タザルナリ 本日開校ノ式ヲ挙グルニ当リ一言所感  
ヲ述ベテ式辞トナス

中目校長の式辞につづき文部大臣・鎌田栄吉(代理・松浦専門学校局長)、東京外国語学  
校長・長屋順耳、大阪府知事・井上孝哉、大阪市長・池上四郎、大阪商業会議所会頭・今  
西林三郎らが祝辞を述べた。今西は、大阪貿易語学校を経営する商議所会頭として

「語学ハ通商貿易上ノ一大利器タリ 今ヤ列強戦後ノ経営ニ鋭意努力シテ熄マズ 従  
テ世界ノ産業競争ニ対シ優勝ノ地位ヲ占メントセバ勢ヒ外国語ニ堪能ナル人士ノカニ  
須タザルベカラズ 語学研究ノ必要ナルコト夫レ此ノ如シ 此ノ時ニ方リ本校ノ開設  
ヲ見ルハ洵ニ天ノ時ヲ得タルモノナリ 殊ニ之レヲ我国商工業ノ首都タル大阪ニ設立  
セラル又地ノ利ヲ得タルモノト謂フベシ」

と、本校開校を喜んだ。

(大阪貿易語学校=通商貿易市場の拡大に伴って語学教育の必要性が高まったため、

大阪商業会議所は大正元年に翻訳係を置いて無料で中国文や英文の翻訳を行い、市内の業者の要請にこたえてきたが、第1次世界大戦勃発で、その必要性が一段と高まったため大正3年12月、大阪市東区(のちに北区に移転)に大阪貿易語学校を設立、英語、中国語、ロシア語のほか商業・貿易実務の教育に当たった。大阪外語設立後の大正14年7月には語学校としての使命を終えて大阪貿易学校と改称、貿易実務に専念する中等商業学校となった)

外国語学校にふさわしく、ドイツ大使代理、フィンランド公使、フランス領事も出席、本校創立費寄付者・林蝶子(代理)も

「大阪外国語学校工竣へ業已二創ム 嚮ニ校舎縦覧ノ挙アリ 今日更ニ開校ノ典ヲ挙ゲラル 豈慶賀セザランヤ 庶幾クハ夙夜此校ニ登リ学業ニ従事スル師弟諸士ハ夫ノ河水ノ滾々トシテ止マザル如ク勉勵奮励本校ト共ニ名ヲ社会ニ赫然タラシメンコトヲ一言以テ祝辞ニ代フ」

との祝辞を寄せた。生徒父兄総代・石橋為之助(D1・石橋博の父)につづいて、東洋語部を代表して中村昌行が中国語で、西洋語部からは草薙正夫がドイツ語で別項の祝辞を述べている。

今日は我們大阪外国語学校開弁の記念日實在是可喜的日子了朝野紳士光臨行這麼盛大的礼實在有幸之至了大阪的地方不但是日本商工業的中心点本来是日本文化發生的地方我們学校既然開辦在這麼好的地勢後來的發達一定是比別处很興旺的近来歐戰完了世界局面忽然一變各国收起兵戰可是又打起商戰來了平和時代的其器以語言為最要緊的我們入這個学校鍊本事我們的前程固然是很有望可是我們的責任真也不輕哪今天我代表支那蒙古印度馬來各語部說幾句吉言聊表賀喜的意思

支那語部生徒 中村 昌行

(本日はわが大阪外国語学校が開校した記念の日であり、大変喜ばしい日でありませぬ。各界の名士多数のご来臨をえ、かくも盛大な式典を行うことができましたことは、まことに慶賀の至りであります。大阪は日本の商工業の中心であるばかりでなく、もともと日本文化発祥の地でもあります。我々の学校がこのような好適の地に開校しえたことは、今後の発展を約束されたと言えましよう。

世界大戦が終わり、世界は一変して武器の戦いは収まり、商業による戦いが始まるうとしています。このような平和な時代においては、言葉こそが重要な武器であると言えるでしょう。本校において語学を磨くなら、我々の前途は洋々たるものがありますが、その責任は決して軽くはありません。

本日、私は支那語、蒙古語、印度語、馬來語の各語部を代表して、簡単ではありますが喜びの気持ちを表わした次第であります)



記念祭の絵画展覧会—昭和2年秋  
(前列左から3人目鍋井克之画伯)



ヘルマン・ボーンルのピアノ伴  
奏でドイツ語（歌曲）の勉強

Gestatten Sie mir zuerst, Ihnen, die Sie uns die Ehre und das Vergnügen Ihres freundlichen Erscheinens zuteil werden lassen und so liebenswürdig sind, das heutige Fest mit uns zu feiern, im Namen der englischen, der französischen, der deutschen, der russischen und der spanischen Abteilung unseren verbindlichsten Dank auszusprechen. Das Erlernen der modernen ausländischen Sprachen hat heute, besonders in der Nachkriegszeit, infolge der veränderten internationalen Verhältnisse immer mehr an Bedeutung gewonnen. Unsere Schule ist zwar eine Schwesteranstalt der vor Jahren errichteten Fremdsprachenschule zu Tokio ins Leben gerufen, aber die beiden Anstalten weisen doch in mancher Beziehung Verschiedenheiten auf. Denn die Zeit fordert es, die Umstände tun es auch. Und so werden wir denn auch mit allen Kräften danach streben, den veränderten Zeitumständen zu entsprechen. Möge unserer lieben Schule dank der wohlwollenden Unterstützung der hochverehrten Gäste und ihrer Gleichgesinnten ein gesundes Gedeihen und Fortkommen künftighin beschieden sein! Das ist unser aufrichtiger Wunsch.

M. KUSANAGI

(Schüler der deutschen Abteilung.)

(先ず最初に、ご親切にもご出席の榮譽と喜びを賜わり、本日の式典を私達と共に祝って下さる皆様方に、英・仏・独・露・西語部を代表して、深甚なる謝意を申し述べます。現在使用されている外国語を習得する意義は、特に戦争の終わった今日、国際情勢の変化に伴って一層高まっております。我が校は何年も前に創設された東京外国語学校の姉妹校として誕生しましたが、両校には多くの点で相違があります。それは時代の要請があるからであり、また事情によってそうなるからでもあります。それゆえ私達は全力をあげて時勢の変化に対応していくよう努力いたします。尊敬する来賓各位ならびに考えを同じくする皆様方のご好意あふれるご支援により我が愛する母校に今後健全なる繁栄と進歩が与えられますように。これが私達の心からの願いで

あります)

式典のあと、一皿の洋食(ランチ)が出され、来賓、父母、生徒は講堂の南北に張られた天幕の中で立食した。本館2、3階の教官室、食堂では校友会文芸部による絵画展覧会「はるべ」が開かれた。校友会創立の項で述べた「今は春べと咲くやこの花」に因んだ命名である。府下中学校と専門学校生の絵画を展示しようと、各校へ呼びかけ、約400点が集まった。世界各国児童画展も同時に行われ、チェコスロバキアからの出品もあったという。時事新報社の後援も得て二科会の小出権重、普門暁を迎え審査の結果、時事新報社賞を獲得したのは天王寺師範、女子師範、市岡高女からの出品作だったが、本校からも本科の佐藤、岡本、別科の林が入选した、と文芸部委員・榎田猷太郎(R1)は報告している。翌12日には陸上運動部の開校記念第1回陸上競技会が開かれ、一般競技のほか提灯競走、障害物競走が観客の人気を集めた。第4師団軍楽隊に送られてスタート地点の浜寺公園に向った語部対抗のマラソン選手たちは10<sup>分</sup>16<sup>秒</sup>(16<sup>分</sup>\*)強を走り抜いて上八校庭に帰ってきた。優勝者は支那語部・渡辺雪松、タイムは64分であった。

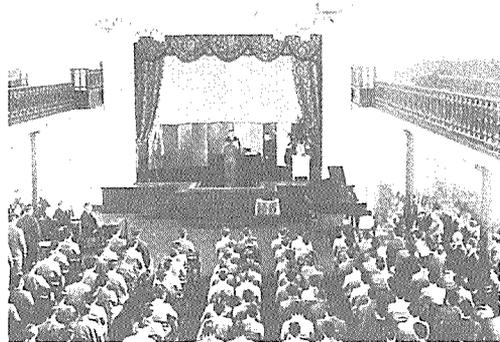
当日、一番人気を集めたのは各語部が趣向を凝らした仮装行列であった。支那語部の各階級風俗、蒙古語部の宗教儀式風俗、馬來語部の嫁入り行列は、それぞれのお国ぶりを表現、印度語部の「奴さんの木曾踊り」は滑稽味たっぷり。仏語部の小学生に扮した遊戯は、懐かしの日々を追憶させ、「世人の恋愛観」と題した英語部の仮装行列は、当時の世相を風刺的に描いたものだったという。

講堂では関恩福講師仕込みの支那語部の合唱、外国人教師ヘルマン・ボーンルのピアノ伴奏による独語部の「荒野のバラ」合唱、チャールス・パーカー自ら指揮した英語部の「ルール・ブリタニア」合唱のほか、露語部的一幕劇・チェーホフの「解剖学」が演じられた。

模擬店にもぎやかに催された。第1回生の記憶を総合すると、支那語部は中国茶、露語部はサモワールを借りてきて紅茶、蒙古語部はぜんざい、馬來語部は関東煮、独語部は10銭均一の菓子、仏語部は三色ケーキを販売した。「何処を見ても平和の風が漂ってゐる。南館の南の模擬店の方からは強烈なブラジルコーヒーの香りや気を浮々させる様な蓄音機のメロディーが流れて来る。グラウンドでは喜びに満ちた声に混じって楽隊の楽の音が響く。平和な歓喜の雰囲気に浸って、夕暮れの空が怪しくなっても、観衆は動こうとしなかった」と文芸部委員・板倉吉三(E1)は『咲耶』創刊号に書いている。—平和で国際色豊かな開校式であった。

#### 〈生徒募集一時停止〉

大正12年度は蒙古語部の募集が行われなかった。学則第10条「時宜ニ依り所設部中、某部ノ生徒募集ヲ為ササルコトアルベシ」の初適用である。「時宜」の基準などは不明だが、当該語部に対する社会の需要の度合や生徒受入れに必要な教授陣の不足などの理由があったのかも知れない。この規定は昭和19年4月、外事専門学校に転換するまで存続したが、実際



卒業式（昭和8年3月）

に一部の生徒募集が行われなかったのは昭和5年が最後。募集停止の例を語部別に見ると、蒙古語部は大正12年、13年と昭和2年の3回▽西語部は大正13年、昭和2年、5年の3回▽印度語部は大正14年と昭和3年の2回▽露語部は大正15年の1回、4語部で計9回にのほり、結果として大正15年から昭和8年(昭和7年を除く)まで、蒙、印、露、西いずれかの語部の卒業生が欠ける事態となった。2年つづけて生徒募集のなかった蒙古語部の場合、大正11年の第1回入学生は、一度も下級生を持たないまま卒業し、他の印度語、露語、西語部にしても一時的に下級生あるいは上級生を欠くという結果が出たわけである。募集停止で問題となるのは病気による長期欠席あるいは成績不良で進級できず原級に止め置かれる者の扱いだが、学則第36条は「学校ノ都合ニ依リ其ノ学年級ヲ欠クトキハ之ニ止マルヘキ者ニ休学ヲ命ス。此場合ニハ第20条第2項ヲ適用セス」とした。第20条2項は、引続き1年以上欠席した者は除名すると定めているが、これを適用しないで、除名はされず授業料を免除するというもの。つまり、留年しても募集停止で下級生が入ってこない場合は行き場がないから休学しなさいというわけである。大正11年入学の蒙古語部生の場合、もし留年したら2年続けて休学しなければならなかったわけだが、幸い全員進級した。学則第36条による留年休学に該当したものは全部で9人を数えた。そのまま退学するケースが多かったが、休学に耐え辛抱強く5年がかりで卒業した者も2人いたことが追跡調査で明らかになっている。

#### 〈最初の卒業式〉

大正14年3月19日、第1回の卒業生188人が外語を巣立った。

本日茲ニ大阪外国語学校第一回卒業式ヲ挙グルニ当リ一言以テ卒業生諸子ニ告グル所アラントス

夫レ一國ノ文化ヲ促進シ国力ヲ豊富ナラシメンニハ大ニ教育ノ普及徹底ヲ図ルト共ニ広ク外国文化ヲ吸収消化シカヲ産業貿易ノ振興ニ致サザルベカラズ而シテ国家ノ我が大阪外国語学校ヲ創立セル目的ハ此等ノ重要ナル任務ヲ担当スベキ人材ノ養成ニ在リ

諸子今や業ヲ終へ校門ヲ出デ或ハ学芸界ノ人トナリ外国文化攝取ノ衝ニ当リ或ハ教育者トシテ育英ノ任ニ就キ或ハ実業界ニ入りテ対外活動ニ從ヒ国富増進ノ途ニ努力セントス諸子ノ任ヤ実ニ重且大ナリト言フベシ諸子夫レ之ヲ努メヨ

修身処生ノ道ハ諸子ガ本校入学以来遺憾ナク之ヲ学ビタル所ナルモ今諸子ヲ送ルニ当リ特ニ諸子ノ注意ヲ喚起セザル可ラザルモノアリ

諸子ハ常ニ徳ヲ養ヒ人格内容ノ充実ヲ図ラザル可ラザルコト其ノ一ナリ

諸子ハ常ニ外国語ノ智識ヲ活用セザル可ラザルコト其ノ二ナリ

諸子ハ特ニ崇祖報國ノ念ヲ厚ウセザル可ラザルコト其ノ三ナリ

夫レ諸子ハ重任ヲ担フテ遠キヲ行ク者常ニ人格ヲ磨キ徳器ヲ養フノ必要ナルハ絮説ヲ要セザルガ如クナルモ今や社会ハ既往ニ於ケルガ如ク単ニ才能ノ人ニ満足セズ信頼スベキ人格ノ士ヲ要求スルニ至レルヲ思ハバ諸子ハ須ラク此ノ点ニ対シ深く留意スル所ナカル可ラズ

次ニ本校授クル所ノ学科ハ外国語ヲ主トシ本校ノ特色モ亦茲ニ在リト雖モ元來外国語ハ形態ノ教科ニシテ内容ノ学ニ非ズ即チ修学求道ノ手段若クハ対外活動ノ手段タルニ外ナラズ故ニ諸子ニシテ万一外国語ノ修得ニノミ甘ンジ之ヲ活用スルニ非ズンバ国家社会ノ諸子ニ対スル期待ニ副フコトヲ得ザルノ憾ミナシトセズ

輒近世界大戦ノ影響ヲ受ケ文明諸国民ノ間ニハ大ニ国際意識ノ発達セルモノアリト雖モ亦一面国家観念ノ更ニ強烈旺盛ヲ加ヘタルハ諸子ノ等シク認ムル所ノ現象タラズンバ非ズ蓋熱烈ナル愛國心ハ海外發展ノ第一義ニシテ世界的経綸ノ實現モ國際的精神ノ発揚モ一ニ茲ニ基ヅクヲ知ラバ諸子ハ須ラク日本伝統ノ精神タル崇祖報國ノ念ヲ厚ウシ以テ激烈ナル民族競走場裡ノ優勝者タルヲ期セザル可カラズ諸子夫レ切ニ之ヲ思ヘ

諸子ヨ予ハ他日海外各地ヲ遊歴スルノ機アル可キヲ信ズ其時ニ際シ世界ノ隨所ニ活動スル諸子ニ会シ既往ヲ談ジ未來ヲ論ズルヲ得バ予ガ育英ノ樂何物カ之ニ若カン

中目校長の告辞に対し、各語部代表が各国語で答辞を述べたが、西語部代表・福村寿のスペイン語の答辞だけが残っている。

Excelentísimos Señores, Señor Director, Señores Profesores:

En nombre de la sección de español de la Escuela de Lenguas Extranjeras de Osaka tengo el honor de manifestar nuestra gratitud a tantos señores distinguidos de este país y de países extranjeros que honran esta ceremonia de graduación, y al Director y Profesores.

Ahora, la influencia de su Majestad el Emperador brilla en todo el mundo y nuestro Imperio florece de día en día, a la manera del sol que sale.

La mayor felicidad de nuestra vida es haber podido llegar a recibir este honor, gracias a la inspección severa del director y a la amable enseñanza de los profesores



寄せ書き（卒業生アルバムより）

por espacio de tres años.

Sin embargo, desde ahora empieza también el cumplimiento de nuestros más arduos deberes.

Gran parte de nosotros va a dedicarse a ocupaciones de carácter internacional, siguiendo el propósito de nuestra Escuela.

Las esferas de nuestra actividad son principalmente Sur América y Méjico. Así nuestra vida será como un viaje.

Y, nosotros con esta fecha de hoy, partimos del puerto hacia algo completo, magnífico y lleno de promesas.

Nuestro viaje es de océano, y aún no se ha decidido con certeza la ruta. Hemos de descubrir una nueva.

No podemos predecir si nos encontraremos con tempestades, o si encallará el buque en que vamos.

Debemos navegar siempre adelante sin equivocarnos el camino, con la mirada en la brújula y la mano en el timón, llevando con ánimo sereno las penalidades y los sufrimientos que traen consigo las navegaciones de exploración. De este modo, esforzándonos, llegaremos a ser hombres valiosos en este país del sol naciente y en todo el mundo.

Nunca olviden Vds. esta sentencia.

“EX ORIENTE LUX ET PAX”

Cumplan con sus deberes, siendo diligentes, durante todo el día, durante toda la noche.....

Gracias a quienes nos obsequian, y a todos: “SALUD”

（ご来賓の皆さま方、校長先生、諸先生方、大阪外国語学校西語部を代表して感謝の言葉を申し上げられることを光栄に存じます。

今や陛下の御稜威は全世界にあまねき、我が国は朝日のように日に日に繁栄を続けております。

私たちの人生での最大の幸せは、3カ年にわたり校長先生の厳しい監督と諸先生のあたたかいご指導のおかげで、この名誉を受けることができるようになったことでもあります。しかしながら、今から私たちのもっとも困難な義務の遂行も始まります。

私たちのかなりの者が、わが校の意図するところに従い国際的な仕事に就こうとしております。私たちの活動分野は主に南米とメキシコであります。だから私たちの生活は旅のようなものとなるでしょう。

さて、今日をもって、私たちは完全な、すばらしい、約束に充ちたものに向かって船出いたします。私たちの旅は大洋をいきます。それにまだはっきりと針路は定まっておられません。私たちは新しい針路を発見しなければなりません。私たちは嵐に遭うかも知れませんし、私たちの乗っている船が座礁するかも知れません。私たちは路を間違えずに、羅針盤を見つめ、かじ棒を握って、探検の航海がもたらす困難や苦難を冷静にうけとめながら航海しなければなりません。このように努力して、私たちは日出づる国でも、世界全体の中でも価値ある人間になり得るのであります。

皆さま、この言葉を忘れないで下さい。「光と平和は東から」 日夜、勤勉に自分の義務を果たして下さい。

私たちをおもてなし下さった方々にお礼申し上げます。皆さまに「乾杯」

式後、北浜角の野田屋から取り寄せたフランス料理で立食パーティーがあり、ビールも出された。創立基金寄付者の林蝶子からは、紅白のまんじゅうと蝶三匹をあしらった扇子が全卒業生に贈られた。

当時は第1次大戦後の不況時代。さらに新設校ということもあって、第1回卒業生の就職は、はかばかしくなかった。英語部は中等学校英語教師への道があって、恵まれていた方だったが、他語部では、縁故を頼っての数少ない就職組が皆からうらやましがられる有様。巡査の試験を受けて合格しながら、専門学校卒業生の来るところではないと言われて断念した者もあったが、職種の選りごのみなどできない厳しい就職難時代だったのである。

#### <配属将校>

大正14年4月13日、勅令第135号で陸軍現役将校学校配属令が公布された。その第1条は「官立又ハ公立ノ師範学校、中学校、実業学校、高等学校、大学予科、専門学校、高等師範学校、臨時教員養成所、実業学校教員養成所又ハ実業補修学校教員養成所ニ於ケル男生徒ノ教練ヲ掌ラシムル為陸軍現役将校ヲ当該学校ニ配属ス但シ戦時事変ノ際其ノ他已ムヲ得サル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス 前項ノ規定ニ依ル将校ノ配属ハ陸軍大臣文部大臣ト協議シテ之ヲ行フ 配属将校ハ教練ニ関シテハ当該学校長ノ指揮監督ヲ承ク」(私立校と大学



銃器庫



初代配属将校 渡辺喜一中佐

についても学校の申請により配属できるとした(第2条)

第4条は「陸軍大臣ハ現役将校ヲシテ本令ニ依リテ将校ヲ配属シタル学校ニ於ケル教練実施ノ状況ヲ査閲セシムルコトヲ得」とあり、官公立の中等学校以上のすべての教育機関に対して配属将校を義務づけるとともに、配属将校は教練に関しては学校長の指揮監督を受けるとしながらも、軍による教練実施状況の査閲の道を開いた。学校本来の教育体系に、それとは異質な軍事教育体系が割り込んできたのである。

第1次世界大戦終了後、世界的に軍縮を求める動きが高まり、わが国でも戦後不況による財政難などもあって、大正11年2月、海軍軍備制限に関するワシントン条約調印につづき、陸軍でも軍縮が実施された。軍縮で余剰を生じた多数将校の処遇は陸軍にとって大きな問題であり、当時不足気味だった中学校教員に就職させる方途を講じたが、時間と手間がかかる上、多数の将校を予備役に編入しなければならないという問題もあった。このため将校を現役のまま中等学校以上に配属し、学校教練を強化しようとしたものである。当時、中学卒業以上の志願兵に対しては在営年限1年、その後、教育召集期間3ヵ月となっていたが、在営期間を短縮し経費節減をはかるためにも学校での軍事教練でこれを補うことが必要であるとされたのである。

本校でも開校以来、兵式体操としての教練が実施されてきた。学則の「野外演習及射撃演習規程」第1条は「体操ノ一部トシテ野外演習及射撃演習ヲ行フ」と規定している。予備役の高島正俊陸軍少佐、田中亀太郎特務曹長が体操教官として指導に当たったが、教練とは名ばかりの、のんびりしたものだったようである。初期の教練経験者の証言によると「制服が汚れないようレインコートのような上っぱりを着てやった。中学ほど厳しくなく、三八式銃の手入れは小使が全部やってくれ、生徒はやらなかった」「中学と比べ熱も入らず、叱られたこともなく、のんびりしていた」「週一回ほどあり、ゲートルは巻かなかった。銃は持つが、すんだら銃器庫に返すだけで跡始末は係がやり、大名みたいだった。将校はおとなしく、生徒の顔色をうかがってやるくらいで、きびしいことはなかった」「野外演習というのがあって信太山で兵隊ゴッコをして兵舎に泊まったが、夜遅くまで騒ぎどおしで、青春の躍動を満喫した」というのが実態だったようである。

現役将校の学校配属による軍事教練実施に対しては、「文部省が軍部に引っぱられて実施するのではないか」という批判があったとおり、失職将校の救済問題を抱えた軍の方が積極的であったことは否定できない。現役将校配属実施に際しては、軍部による教育干渉であるとして民間教育団体、学生団体から猛烈な反対が起こり、東京帝大内には全国学生軍事教育反対同盟が設立された。大阪外語生徒にも何らかの動きがあったと思われるが、記録として残されたものは見当たらない。この間の事情はともかく、配属令公布から2週間もたたない同年4月24日、歩兵第37連隊陸軍中佐・渡辺喜一が着任した。他の高等・専門学校では強圧的な軍事教練指導に反発、配属将校とトラブルを起こしたところもあったが、渡辺中佐は「平和の旗・愛の言葉・文化の光」の校歌に象徴される新設外語の自由な校風を配慮したのか、生徒にはかなり寛大に対処したようである。中目校長の指揮監督能力も大きかったであろう。校友会誌『咲耶』第4号には、大正14年12月11日、師団司令部付・新井少将によって行われた教練査閲の状況が渡辺自身によって報告されている。訓練科目は各個教科(前進・停止、射撃)分隊散開教練、小隊密集教練、学科諮問等であったが、査閲官の所見は「成績良好」であった。大佐に昇進した渡辺は昭和2年7月末に転任したが、記念に備前長船盛光の白鞘日本刀一振が贈られている。

なお、配属将校による学校教練実施の結果として、大正15年7月「一年志願兵及一年現役兵服務特例」が定められ、教練を修め検定に合格した高等・専門学校卒業生は、従来のように在営期間1ヵ年を要せず10ヵ月後に帰休を命ぜられることになった。

本校へは渡辺のあと和泉市蔵、谷口豊祐、木戸渉、大島秀一郎、福村良成、原田久男、本多秀雄、今田俊夫ら佐官クラスが配属されるが、時代が戦時体制色を強めるにつれて学校教練も厳しさを加えていった。

### (3) 別科と五教

#### 〈別科〉

大阪外国語学校長に就任した中目覚は、本科だけでなく、昼間職業を持つ人々や家庭婦人を対象にした外国語夜間授業の抱負を打ち出した。「別科」開設構想である。当時の新聞記事によれば「別科は9月に募集予定で、この方は定員を決めないで出来るだけ沢山收容する。殊に英仏独語に限り女子部を設けるつもりで午後4時から6時まで授業することにして女学生や家庭の婦人を收容したいと思ってる。別科の男子部は7時から9時の計画である」と語っているとおり、本科開設から約5ヵ月後の大正11年9月2日、抽選により男子341人、女子59人、計400人の別科生の入学を許可、9月13日から授業を開始した。

先発の東京外語にも、午後4時半から授業を始める専修科はあったが、女子生徒は在籍せず、女子部制度もなかった。別科とはいえ官立専門学校が女性や家庭婦人にまで外国語



高橋周而

教育の門戸を開放したことは中日校長の優れた時代認識に基づくものといえる。

大正9年3月、かつて「青鞥社」を主宰した平塚雷鳥は市川房枝、奥むめお、岡本かの子らと「新婦人協会」を結成した。男女の機会均等のほか、婦人、母、子供の権利を擁護し、利益を増進するとともに、これに反する一切を排除する——とうたった綱領は、一部インテリ女性だけでなく広く家庭婦人、さらに堺利彦、大山郁夫、下中弥三郎、秋田雨雀ら男性文化人にも支持され、それまでの女性解放運動には見られない力強いものとなった。そして機関誌『女性同盟』の発刊、男女普通選挙権の請願、さらに女性の政党加入・政談演説会を禁止した治安警察法第5条2項撤廃請願運動などを積極的に進めた。政党への加入は依然認められなかったものの、第45議会で政談演説会の主催・傍聴を認めさせた「新婦人協会」は、大正11年5月、治安警察法第5条2項撤廃祝賀会を東京・神田仏教会館で開催、これは、わが国初の婦人政談演説会となった。大阪外語の別科女子部創設は、こうした大正デモクラシーの潮流に沿うものであったことは否定できないだろう。ただし、同じこの年3月来日したサンガー夫人に対し、内務省は産児制限は国力を弱め、家族制度を破壊するものとして、産児制限に関する公開講演禁止を条件に上陸を許可している。女性解放とデモクラシーの成熟度を測る上で興味深い事実である。

ところで、大正11年度の大阪外国語学校学則の第12章「別科」および「別科細則」によると、まず、「簡易ノ方法ニヨリ外国語ヲ教授スルヲ目的トシ別科ヲ設ク」に始まって修業年限は2年、設置語科は男子部が支那、馬來、英、仏、独、露、羅匈各語科(ただし実際に授業が行われたのは支、英、仏、独の4語科だった)、うち英、仏、独語に限り女子部を置いた。授業時間は1週6時間、男子部は月、水、金曜日午後7時から9時まで、女子部は月、水、金曜日午後4時から6時までの各2時間。英語は中学校卒業者を標準とした授業内容であったが、その他の外国語は、すべて初歩からの授業だった。

当時は旧制高校でも英語、ドイツ語が中心で、フランス語を教えるところは少なく、外語の別科はそれを補充する役割もあった。魯迅の翻訳などで知られる中国文学者・竹内好も大阪高等学校在学中、別科に通い、目黒三郎からフランス語を習っている。

入学資格は中学校卒業者または同等以上の学力があると認められた者で、志願者が募集

人員を越える場合は抽選で入学者を決定すると決められていた。また授業料は本科生同様、年額50円(第1学期15円、第2学期20円、第3学期15円)、服装については「登校ノ際ハ洋服又ハ袴ヲ着用スヘシ」とだけ規定されており、第2学年修了者には修了証書を交付した。

別科初年度の募集人員は、細則では男子部約170人、女子部約80人、計約250人と定められていたが、実際には前記のとおり男女計400人に入学を許可している。希望者には広く門戸を開放しようという方針の現れだったのだろう。もっとも文部省統計年表による大正11年度の別科入学志願者数は男子757人、女子64人、うち入学者は男子374人、女子64人。女子は全員入学許可となったわけだが、その後の第1学年在籍生徒調査によれば男子294人、女子49人、計343人と、入学許可時点に比べかなり減っている。年額50円という本科生並みの、当時としては高額な授業料の負担に耐えられず、入学を許可されながら通学を断念した者、あるいは中途退学した者もあったと思われる。

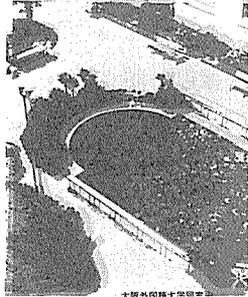
大正13年3月、別科は第1回修了者を送り出すが、その数男子100人、女子20人。第1学年在籍時に比べ男子は約3分の1、女子は半分以下に激減しており、不況下、働きながら学ぶということが、かなり厳しいものだったことを物語っている。なお、女子の場合、大正15年、昭和2年は志願者が10人に満たなかったため、採用は行われなかった。

初期の別科生徒に関しては、当時の学校一覧に在校生、修了生の名前を残すだけで、詳細は明らかではないが、前出『Der Deutsche Baum』2号に掲載された高橋周而名誉教授の「『外語』の昔ばなし」には、別科生についての興味深い記述がある(以下要約引用)。

「別科生のなかには着流しで登校する者もあったが、見逃していた。さすがに前列には着席しなかった。今の別科生は眼前直接の必要から来ている向きが多いようだが、昔は差し迫って必要ではないが、余裕のあるに任せ少し勉強しておこう、すぐに役立たなくてもよいという人が多いように見受けられた。年配も長じていたし、受験生らしいのは少なかった。受験準備の者が多くなってからのことだが、彼らも無籍者でいたくはないと見え、本科の徽章をつけ始めた。学校では予想もしなかったことだが、ある筋から、外語の生徒で昼間から授業をサボって盛り場をほつき歩いている者が少なくないと注意があった。上六辺のことはよく分かっているし、出欠簿をにらんでみても臍に落ちない。そのうち先生方も同じ心配をされるので探ってみると別科の若い者だと分かって、とんだナンセンスに終わった。授業は19時から始まったと思うが、冬でも火の気のない教室だから、なかには一杯やって来る先生もあった。飲酒自体は構わないが、酒に飲まれると問題です。どんなことがあったのか分からないが、生徒が不平を申し出たり、休講ともなれば、時間と交通費を数え上げて、とがめに来るのがある。遠い所を折角登校したのに休講というのでは気の毒なので、別科の授業には病気をおして出られた先生もあるし、学校も出来るだけ代講の手配をした。こういう文句を言うてくるのは皆、30歳を越したオヤジ達で、ご自身一杯やってきているのもあったかも知れない。聴講生のなかにはご年配の船会社の重役さんあり、また人力車

## きんぎら50年

大阪外国語大学同窓会50周年記念誌



大阪外大同窓会50周年記念誌  
『きんぎら50年』

で通学して授業中、車夫を待たせておいて授業が終わると〇〇医院という弓張提灯をつけさせ車上悠々と帰宅するお医者さんあり、生徒と呼ぶには全くしっくりしない。また毎時間決まったように仮睡している人があり、あまり変なので一教官がたずねたところ『子供に勉強せいせいと申し付けてますが、まず親父からこの通り垂範のため通学してますので、実は私自身〇〇語を覚えたい訳ではありません』と答えたというので、開いた口がふさがらなかったことがある。子供の躰代わりに授業料を払う気らしい。

在学2年で卒業となるのだが、熱心にもう一度2年生の学習をするという希望の人が少なくない。しかし制度の上では卒業と同時に学籍を削るし、その上で再入学となると入学料を徴収することになる。それならばというので、2年の終わりに卒業を希望しない者は申告するように掲示して、不合格でなし、卒業でなし、と妙な取扱いをしたものだ。もっとも中には学費を会社から頂いているのだから、とも角卒業証書を手に入れて上役に見せなければならぬから、改めて入学料を払ってもう1年やるという人もあり、こうして何年もかかって数カ国語を修得した人もいる。卒業なんてどうでもよい。好きだから、時間があるから勉強しておこうという人たちの増加を望む次第である。

女子の志願者が多い、と英仏部には女子の学級が新設された。生徒のほとんどは和装で袴を着けた者もいたが、多くはりゅうとした服装で当節なら駒織御召といったところ、これまた女生徒と呼んではしっくりしない。実際お母さんもいた。Yさんという、既に少尉になっているご子息のある方で、いつも帯付きで登校されていた。二年配だけに教材中少しエロチックな場面になると『先生、先生』と立ち上がりざま『もう結構です。あとは私が皆さんに言ってあげます』と、さえぎった、などという愛嬌話も。何しろ若い先生より世間が分かっているんですから。

かと思えば女性数人が廊下で永々と密談してから一人だけ事務室に入ってくる。話を聞いてから『それはあなたの問題ですか』と尋ねると『いえ、あの方のことなんです』と、ようやく一人を指す。恐る恐る入ってきたその女性は顔赤らめながら低声で話し

出しましたが、何でもない手続き上の件。調べてみたところ、ご本人は女高師の出身。こんな内気の方は戦後の人々には思いもよらないでしょう。

それから一度はお目にかかったK博士の容姿佳麗なお嬢さんの話。登校のついでに父君の書状を差し出されたので開封すると、本科生W君の身上問合せで、その目的は聞かなくてもわかるし、こうした場合の型どおりの返書を認めて再びお嬢さんに託し、それっきり忘れていた。ところが後に聞くと、若い二人はめでたく結婚したというではないか。なーんだ、自分のことだったのか、笑わせるなあ、というようなこともあった」

別科に学んだ人にも登場してもらおう。以下は、いずれも同窓会50周年記念誌『きんきら50年』から。

「大正15年9月に別科独逸語科に若干名の補欠募集があったので入試に応じたところ、運よく希望が達せられた。私はその年4月に大阪市立衛生研究所に勤務したばかりであった。この頃はなげなしの財布をはたいて丸善から月賦で一、二冊揃いのブロックハウスの百科辞典を買い込んで喜んだものである。同じ研究所の同僚である長崎医大薬学出の田村秀雄君(独)や富山薬専出の岩狭与三郎君(英)もせっせと通ったものである。中にただ一人、関西大学在学中だった浅井義臣君という黒の学生服の篤学の人もまじっていた。本校の事務職員だった本田要太郎君も仲間であった。授業の終わるのは午後の9時前だったが、必ず正面玄関脇にお抱えの人力車が迎えにきていた。それに乗る人は医学生で颯爽と帰りを急ぐという風景であった。今から考えると隔世の感がある」——武藤六三郎(D5)

「大正11年、希少価値と入学率のよい蒙古語部を受験、パスしたが、叔父が中国語をやれというので一年後に受け直そうと思ったが、その年の秋から夜間の別科で中国語が開講されることになったので、本科に在籍のまま別科に入学し、2年間で修了できるので、不勉強者の私だったが昼夜通学することになった。本科だけでもやっとなのに別科も修了したが、主幹で謹厳な井上翠先生(ニックネーム 来了麼)や吉野先生(同・朋友)から、昼間は学科のほかにテニスをやり忙しいのに晩までよく来るなあ、と微笑をたたえ不思議そうな顔で言われたのを今も忘れない」——西山泰清(M1)

「来了麼」というのは当時使われていた中国語のテキスト「急就篇」の一番最初のフレーズであった。

最後は、10年間授業料を払った人で締めくくろう。

「早稲田大学のフランス文学科を病気のため中退して、生れた大阪におった。病気がすこしよくなったので、別科(夜)でドイツ語をまなんだ。願いにより修了を延期することができたので、第2学年は4年間やった。これがすんで、昼の本科生にまじって、ロシア語を3年やった。つまり選科生。だから、体操とか、商業なんて時間には出席する必要がない。それを、あいつはいつもズボラしている、と思っていた人もあった

学 科	修 身	英 語	仏(独)語	国 語	哲 学	教 育	言語学	体 操	計
第1年	1	20	3	2		2	2	2	32
第2年	1	20	3	2	2	2		2	32

らしい。選科生は、制服制帽を強制されない。ソフトをかぶっていったら、生徒課の人が「君の服装は……」なんていったこともある。また、夜の別科にもどり、支那語を2年やった。だから、合計10年間授業料を払ったわけだ。さらに、蒙古語をやりたかったが、からだの調子がわるくて、それをやめにしたのは、今でも残念」——川崎直一 (R11)

のちの本学言語学教授である。

い

#### 〈第五臨時教員養成所〉

大阪外国語学校開校1年後の大正12(1923)年4月5日、文部省告示第263号により、外語に第五臨時教員養成所(以下、五教と略称)英語科が付設され、中目覚外語校長が同所管理者に任命された。臨時教員養成所は、師範学校・中学校および高等女学校の教員養成を目的に、文部大臣の指定する帝国大学や直轄諸学校に置かれたものである。

4月24日制定の五教諸規則によると、師範学校・官公私立中学校卒業生・専門学校入学検定合格者・小学校本科正教員免許状を有し、出身学校の推薦を受けた志願者のなかから試験の上選抜、修業年限は2年(大正15年以後は3年)。生徒には希望により一定数を限り学費月額25円(年額300円)を支給した。なお学費支給を受けた者は修業年限と同一期間、教職に従事する義務が課せられた。五教英語科の初年度入所志願者は193人。うち入所者は40人、倍率4.8倍の難関で、うち30人が給費生であった。5月7日から授業を開始したが、週授業時数は別表のとおりで、上田畊甫主任はじめ外語教授陣が授業を担当した。

臨時教員養成所の設置は古く明治35(1902)年にさかのぼる。高等師範学校だけでは教員養成に不足をきたすための臨時的措置で、この年、第一(東京帝大)、第二(一高)、第三(二高)、第四(三高)、第五(東京外語)までの臨時教員養成所が設置され、国語漢文、英語、数学、物理化学などの教師の養成に当たった。明治39(1906)年には東京女子高等師範学校に第六臨時教員養成所(英語・家事)が設置されるが、この年すでに第一、第四、第五臨教が廃止され、明治の第1期臨時教員養成所は大正3(1914)年には第六臨教を残すだけとなっていた。

ところが第1次世界大戦後の中等学校の急増にともなって、再び臨時教員養成所が設置されることになった。この第2期の臨時教員養成所設置は大正11(1922)年から昭和4(1929)年まで、16校に及んだ。

さて大阪外語に付設された第五臨教に話を戻すと、スタート時の英語科は大正12、13、14年(15年は生徒募集停止)昭和2年の4回、大正15年設置の歴史地理科は1回、昭和3年設置の国語漢文科も1回、計6回の入学者を受け入れただけで、その短い使命を終える。歴史地理科は昭和4年3月、英語科は昭和5年3月、国語漢文科は昭和6年3月、それぞれ最後の卒業生を送り出し、五教は8年間の歴史の幕を閉じた。3科通じての入学者は208人、退学・死亡者を除いて卒業者は191人だった。臨時教員養成所という性格を反映して入学時の年齢も最低17.2歳から最高40.2歳までと幅広かった。入学競争率も大正15年の歴史地理科の4倍を最低に、金融恐慌の昭和2年は英語科12.2倍、昭和3年の国語漢文科12.1倍という高率だった。

短い期間ではあったが、五教生徒は制服も折襟背広に代表される外語生徒と同じ、校舎も教授陣も共通だった。片や「国際的実務ニ従事スヘキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外国語ヲ教授スル所トス」の本科生。片や「師範学校、中学校及高等女学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス」の臨時教員養成所生徒というように、目的が違うだけに、両生徒同士、反りが合わない、折り合いが悪い面もあったとの証言も一部にはあるが、大部分の生徒は和気あいあいと学園生活を送った。以下は前出『きんきら50年』から引用した五教OBの回想記の一部である。

「当時の制服は薄鼠色の背広で、帽子も同じ布地で作られ、異色あるスマートな姿は町の話でもあった。頭髪をていねいに手入れしてピカピカ光らせているおしゃれもあれば、真新しい帽子のてっぺんを十文字に引破り、それにインクをぶっかけ、頭髪をのぞかせてバンカラを気取る者もいた。年齢もまちまちで僕等のクラスときたら、40歳を越した陸軍中尉前田(幸義)君を別格として30代は2、3名、20代はざらで、中学を出た、いとあどけない生徒と机を並べ、ローリングスという19歳の美青年(今なら少年)の先生から英会話を習ったものである。当時は生徒数も少なく、本科生と僕等の間には何のへだてもなく、極めて親密で、卒業後も長くその関係は続いていた」——梶本政信(臨1)

「大正14年入学し、英語の教師になるため力一杯勉強に打ちこもうと考えていた矢先、露語部富田氏ら数名が教室にやってきて、野球部に入部するよう勧誘があった。実は後で分かったことだが、外語の職員に私の母校米子中学野球部の大先輩鹿野先生がおられて、山陰からどえらい奴が来たと話されたい。かなり強烈的な勧誘だったので辞退しきれず、本職の三塁手としてユニホームを着ることになった。最初の試合は8番打者、相手はどこだったか忘れたが、4打席4安打と活躍したため、次の試合



第五臨教卒業生の会誌「五教」

から4番に格上げされた。最後の年、北畠の旧大阪高校との定期戦では向い風を利用して私の速球が自由自在に変化したので、三振を確か15奪い大勝したことを覚えている。その年の秋、日本に遠征してきた米国女子チームと甲子園で対戦したのもまた懐かしい。女子軍といってもバッテリーは旧プロ選手、このチームに初めて勝ったのは、わが外語だけだった。初めは勉強だけと思っていたが、今から考えると野球部に入ってよかったと思う」——土江清治(臨3)

各種の部活動では本科生、五教の別なく、青春を共有した様子がうかがえる。こうした交流を背景に、大正11年本科開校後間もなく設立された外語校友会に、昭和2年6月から五教生徒も加わるようになった。校友会誌『咲耶』第6号は「我々の多年の懸案だった本科と第五臨時教員養成所の握手が実施されたことは、まことに喜ばしいことである。思ふに同一校舎内に学び同じ先生に教えられ、守るべき規則も同一であるのに今迄何等の親睦機関がなく全く別個のもの様になって居たのは甚だ遺憾に堪えなかった。事実我々は只一緒に居るとか或は同じ場所で勉強するとかのみでは真の心の融合は出来ない。互ひに騒ぎ互ひに語り合ってこそ初めて打解けることが出来るのだ。この意味に於て校友会の諸部の事業は絶好の機関である。今後はお互ひに親睦を図り大いに智徳を研ぎ体育を励み心身を錬磨し協力一致以て光輝ある我校の校風を益々宣揚し度いものである」と、本科と五教の提携を喜んでいる。

中目校長(五教管理者)も、折にふれて五教生徒5、6人ずつを校長室に招いて昼食や茶菓を共にした。卒業式に当たっては本科生徒だけでなく、必ず五教卒業生に温かい激励の言葉を贈った。以下は大正15年3月19日の卒業式告辞である。

教員養成所卒業生諸子ニ告グ 夫レ教育ノ要ハ子弟ト寝食ヲ共ニシテ能ク子弟ノ肺肝ヲ洞察シ兄ノ愛父母ノ慈ヲ以テ之ヲ導キ一挙一動其ノ範ヲ示スニアリ 教室ニアリテ教科書ヲ教授スルガ如キ教育ノ一部分ニ過ギズ 是レ予ガ屢々諸子ニ告ゲタル所ナリ 諸子赴任シテ某学科ヲ担任スルニ至ラバ単ニ子弟ニ智識ヲ授クルヲ以テ足レリトスベキニ非ズ 其身体ノ發育徳性ノ涵養ニ深ク留意セザルベカラズ 自ラ小専門家ヲ以テ任ジ他ヲ顧ミザルガ如キハ予ノ採ラザル所ナリ 諸子ノ従事セントスル教育ハ

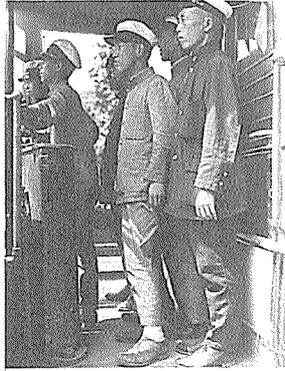
献身的事業ナリ 物質上ノ報酬ハ極メテ薄シト雖モ他日門下ヨリ有為ノ士ヲ輩出スルヲ見バ何ノ樂カ此ニ過グルモノアラシヤ 此樂コソ諸子ノ最大ノ宝ナレ 諸子何ゾ財宝ナキヲ憂ヘンヤ 夫レ富貴ハ浮雲ノ如ク頼ムニ足ラズ 而モ門弟子ガ敬慕ノ念ハ永久絶ユル時ナケン 楚書ニ曰ク楚国以テ宝トナスナシ惟善以テ宝トナスト 孟子モ天下ノ英才ヲ得テ之ヲ教育スルハ大ナル樂ナリト伝ヘリ 諸子何ゾ宝ナキヲ憂ヘンヤ 今ヤ諸子中等学校教師ノ任ニ就カントス 即チ一地方ノ師表タリ 須ク身ヲ修メ徳ヲ研キ以テ国家ガ諸子ヲ教養セルノ趣旨ニ副フベキナリ 諸子夫レ之ヲ勉メヨ

教育への情熱がひしひしと伝わってくる告辞であるが、卒業生もこれに応じて中学校・高等女学校で教職の道にはげんだ。教員不足解消という臨教設置の目的どおり就職難の時代にもほぼ100%の就職率だった。第2期臨時教員養成所卒業生の有資格教員中に占める割合を大正13年～昭和5年の間で見ると、師範学校で平均8.06%(昭和4年度 9.8%)、中学校では 7.86%(昭和5年度 8.9%)、高等女学校では 9.26%(大正15年度 9.9%)で、有資格教員の10%弱にとどまるものに過ぎなかったが、高等師範か帝大を出ていないと校長になれないという当時の慣例にもかかわらず、学制改革後の高等学校校長に就任した五教卒業生も数多く、卒業後60年を経た今なお教育・文化関係で活躍している人々が多いのはたのしい。

#### (4)大正から昭和へ

大正15年12月25日、元号が「大正」から「昭和」に変わった。1週間しかなかった昭和元年が明けた翌2年3月19日、大阪外語は第3回卒業生180人を送り出した。「大喪ニ付臣民喪期間。学生生徒児童ヲシテ左ノ通心得シムヘシ。(一)謹慎静肅ヲ旨トシ奉悼ノ誠意ヲ致サシムヘシ。(一)服装其ノ他ノ裝飾ハ目立ツヘキモノヲ避ケシムヘシ。(一)娛樂ノ為ニスル催ハ之ヲ遠慮セシムヘシ」という文部大臣訓令に従って、卒業式も「諒閣中ニツキ来賓ヲ招待セズ質素ニ挙式、口頭ヲ以テ心身ヲ鍛錬シ職務ニ勉勵スベキ旨ヲ諭セリ」との記録しか残されていない。国内ではこの年3月14日、衆議院での片岡藏相の失言から東京渡辺銀行などが休業、銀行取付け騒ぎが起り全国に波及した。金融恐慌の始まりである。一方、中国大陸では国民革命軍が3月24日、南京を占領。このとき列国領事館を襲撃するという南京事件が起り、わが国も英、米、仏、伊各国と共に謝罪を要求。若槻内閣の幣原外相は外交交渉による解決を訓令するが、次の田中内閣は5月28日、国民革命軍の北伐進行に対して居留民保護を理由に中国山東省への関東軍出動を命令、以後三次にわたる山東出兵は「満州事変」への道につながっていく。激動の昭和は、不況と対中国武力干渉で幕を開いた。

〈思想・社会運動の波〉



スト破りの学生運転手—大正13年  
7月6日（朝日新聞社提供）

ところで大正末期から昭和初期にかけては社会主義思想、なかでもマルクス・レーニン主義の研究と実践を中心とした、いわゆる左翼運動が全国的規模で高等・専門学校にも浸透した時期であった。大正6年11月のロシア10月革命によるソビエト政権樹立、大正7年の米騒動に代表される不況と生活困窮、さらに第1次世界大戦後、世界的に広まったデモクラシー思想を背景に、大正7年には京都帝大生による学労会や東京帝大新人会が生まれ、以後、各高等・専門学校に社会科学研究組織「社研」が結成されていく。大正11年7月には日本共産党が創立され、同年11月には大学、高専などの社会思想研究団体、学生連合会（のち学生社会科学連合会、通称「学連」）、翌12年1月には関西学生連盟（のち関西連合会）が結成された。

#### 〈外語社研の発足〉

大阪外語も、この時代の流れと無縁ではなく、大正13年1月、社会科学研究会が発足している。仏語部1回生・磯崎巖、同2回生・原田耕らが中心となって組織したもので、会員数は15～16人だったといわれる。磯崎は大阪外語エスペラント会も設立している。

このころ大阪で市電ストが起こった。8時間労働、住宅補助支給、不当解雇反対などの要求に対し大阪市電当局は組合つぶしを狙って、すべての要求を拒否、3,000人の市電労働者は大正13年7月3日夕刻からストに入ったが、市電当局側は臨時乗務員募集のポスターを印刷してスキップ（スト破り）を募った。青年団や在郷軍人などがまず出動したほか、当局側の働きかけに応じて大阪高商、大阪高工、市立工業などから学生有志団が加わり、2～3時間の実地訓練のあと運転手あるいは車掌として各車庫に配属され電車を動かした。新聞は「学生義勇団」ともてはやした。7月7日、新聞紙上に前記の学生連合会の名で学生スキップに対する抗議文が掲載された。

「ジャンバルジャン（ユーゴー『レ・ミゼラブル』の主人公）の犯罪の一半の責任が社会にあることを知っているわれわれは、一層強い理由で今回の争議の責任の一半が社会ならびに市電当局者の肩にあることを反省しなければならないのではなからうか。『社会的正義』『市民の公敵』等の言葉に興奮して事の真相を錯覚することは悲しむべきこと

である。……われわれは同じく学窓にある友として、諸君の行動が単に一時の憤激と興奮との陶酔的気分より出たものでなく、真に意義ある効果をもたらさんがために、諸君の今一層の反省的活動をうながしたいと思う」

この公開状は前日、京都聖護院の某所に集まった東大、京大、同志社、三高、大谷大、大阪外語などの東西学生有志団が作成したもので、代表として京大生・淡徳三郎が大阪高商の武田校長に手渡した。この東西学生有志団に大阪外語代表として参加していたのが磯崎巖であった。

#### 〈京都学連事件〉

大正14年4月公布された治安維持法が最初に適用されたのが京都学連事件であった。同年12月1日、京都府下各学校では軍事査閲が行われる予定だったが、これより先の11月15日、京都市内や同志社大学構内に軍事教育反対のピラが張り出されているのを特高刑事が発見。京都府警は12月1日、京大社会科学研究会などを捜索、不穏文書出版の出版法違反で京大生ら33人を検挙した。家宅捜索で出てきたのは書店で売っているドイツ語の原書ばかりだったということや、大学自治、学問の自由侵害という教授、学生の激しい抗議で全員が釈放され、警察のメンツは丸つぶれとなった。しかし、事件はさらに第2次検挙にまで発展した。警察当局は内務省、司法省と綿密な打ち合わせの上、社研関係学生の全国いっせい検挙に踏み切った。まず大正15年1月10日、学生社会運動の出版物は厳重取締りの対象となった。1月14日、新聞記事の掲載が禁止されるなか、翌15日から4月22日まで東京、京都、大阪、神戸などで、いっせい検挙が行われ38人の学生らが治安維持法違反、不敬罪などで起訴された。38人の内訳は学生33人、卒業生4人、学外者1人であった。京大生がもっとも多かったが、東大、慶大、日大、同志社大、明治学院、早稲田高等学院、大阪外語、神戸高商の学生が含まれており、京大関係では大阪市電ストのときもふれた淡徳三郎や慶大の野呂栄太郎、大阪外語では独語部3年黒川健三、仏語部3年原田耕の二人が名を連ねていた。すでに大阪外語を中退していて、代議員でなかった磯崎巖は検挙をまぬがれ、事後処理に当たった。

(磯崎巖の名前は同窓会名簿にはない。磯崎は、ペンネームの伊東三郎で広く知られている。昭和7年、共産党農民部長として検挙されたが、若くして語学の天才といわれたエスペ란チストであり詩人であった。著書に『日本エスペラント学事始』(鉄塔書院)『エスペラントの父・ザメンホフ』(岩波書店)『コトバの歴史』(中央公論社)などがある。渋谷定輔、埴谷雄高、守屋典郎編『伊東三郎——高く たかく 遠くの方へ——遺稿と追憶』(土筆社)の中では、労農運動を経て松竹映画京都に身を置いた原田耕が伊東の思い出を語っている。黒川健三は晩年、神戸の浄土宗阿弥陀寺の住職、黒川泰秀師として知られた)

この事件は同年9月中旬まで一切の報道が禁止されたが、1月26日、若槻内相は貴族院

本会議で「思想の研究の範囲より一歩たりとも実行の域に進むものがあれば、断じて仮借するものではない」と言明。また岡田文相は5月13日、全国高等・専門学校長に対し、生徒の左傾思想取締りに関する内訓を傳達し「社会科学研究会、読書会等なんらの名義を用うるを問はず、左傾思想研究を目的とする団体の設立を許さざるはもちろん、生徒が個人としても左傾思想に陥る恐れある研究をなさざるよう注意すること」「生徒が左傾団体に加入し、実際運動に関与し若くは危険思想を鼓吹することを禁止すること」などが示された。

9月15日、記事掲載禁止が解除されると、新聞はいっせいに「秘密結社暴露」「学界未曾有の不祥事」と書き立てた。

#### 〈中目校長譴責〉

なお、この事件に関連して大阪外語の中目校長は責任を問われ、9月28日付で文官懲戒令により譴責<sup>けんせき</sup>の処分を受けた。東大総長、京大総長、神戸高商校長も同じく譴責処分であった。

公判は昭和2年4月から京都地方裁判所で始まったが、事件担当の検事正は「大逆事件にも比すべき恐るべき犯罪である」と語った。被告学生らは研究の自由を主張し、治安維持法の適用は不当であると主張したが、全員有罪。控訴審でも35人が有罪となり上告申立ては却下され「デッチあげ事件」と称されながらも学生側の全面的敗北に終わった。治安維持法による思想の自由弾圧は、このあと一層凶暴化し、天皇制国家と対立するあらゆる思想の排除がわが国教育の基本政策に据えられ、ファシズムへの道を開いていった。

昭和3年3月15日の3・15事件、翌4年4月16日の4・16事件と、たてつづけに治安維持法は共産党弾圧に猛威をふるう。3・15事件では、起訴されたもののうち41%が高等・専門学校以上の卒業生(中退も含む)と在学中の学生・生徒であり、時の検事総長も「今回検挙された人々のなかには非常にまじめな分子が多い」と語らざるを得なかった。さらに文部省思想局の調査資料によれば、両事件の起訴者のうち高等・専門学校以上の学生・生徒は「実に41校、232名といふ驚くべき数に上り、実に我が教育に於て空前の不祥事であった。女子学生党员16名の含まれてることなど最も注目に値することである」と述べている。このなかには大阪外語の中退生3人(独・露・支各1)も含まれていた。

#### 〈生徒主事の配置と訓育費〉

京都学連事件、さらに3・15事件を契機に文部省は学生・生徒の思想運動に対し、より一層積極的な対策を講ずる必要に迫られた。その一つは放校・除名者や中退者に対する調査であった。

学生生徒放校除名無期停学処分及退学ノ都度通報方(昭和3年5月18日、専門学務局通牒)

貴学校学生生徒ニシテ不都合ノ行為アリシ為ニ放校除名又ハ無期停学等ニ処セラレ

タル者及事由ノ如何ヲ問ハス中途退学シタル者ハ其ノ都度氏名、本籍、現住所及事由ノ概要ヲ具シ無遅滞御通報相成度此段通牒ニ及フ

追テ本通牒ニ抵触スル從來ノ通牒ハ廃止サレタル義ト御含ミ相成度

学校を追われたり離れたあとも執拗な追跡がつづけられたわけである。

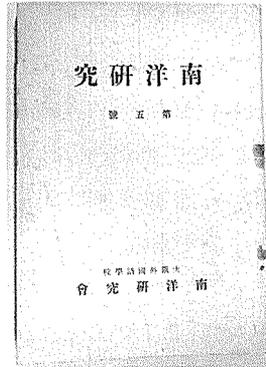
もう一つの動きは昭和3年10月30日、文部省専門学務局に学生課(昭和4年に学生部、同9年に思想局となる)が設置されたことである。

学生課は

1. 内外ニ於ケル社会思想ノ調査研究ニ関スルコト
2. 学生生徒ノ思想ノ調査研究ニ関スルコト
3. 学生生徒ノ思想的運動ニ関スルコト
4. 其ノ他思想問題ニ関スル調査研究ニ関スルコト

を掌握するものであった。学生課の設置と同時に、直轄諸学校官制を改め、従来の学生監(大学)、生徒監(直轄諸学校)を廃止し、新たに学生主事、生徒主事を置いた。学生監、生徒監という名前では、取締りという面だけが強調される嫌いがあるという理由で主事としたと説明されているが、実際には以後、学生主事、生徒主事による思想取締りが強化されたのは皮肉な結果である。こうして「校長ノ命ヲ承ケ生徒ノ訓育ヲ掌ル」ため大阪外語の初代生徒主事に任命されたのが志水義暲で、生徒課長を兼ね修身・社会学を担当する一方で、生徒の思想善導に当たった。なお生徒主事補は印度語助教授の山本健太郎が兼務した。ここでいう思想善導とは、本省学生課の指導の下に生徒の進歩的思想、とくにマルクス・レーニン主義思想を取締ることが事実上の任務であった。この時期、すでに大阪外語社会科学研究会は公然とは活動できなくなっていたが、レーニンの『帝國主義論』はじめ『支那大革命』などをテキストに、各語部にわたる読書会活動は会員の下宿などに場所を変えながらつづけられていたからである。「教練で生徒が教室から出払った間に、生徒課の職員が共有ロッカーや机の中を調べ、不穩文書が入っていないか点検して回っていた」「生徒主事が来てからは語部の分割、孤立化が進められた。各語部が連合で何かをやるということは許されなかった」というのが当時の状況であった。

学生課設置に先立って閣議は昭和3年9月11日、思想善導施設費15万6,000円余の支出を決めている。思想善導のための学生課設置経費や学生・生徒主事の俸給、さらに訓育費からなる学生生徒指導訓育臨時施設費を含むものであるが、このうちの訓育費というものは、「師弟相互ノ情誼アル小集会其ノ他適當ノ施設ヲ講ジ以テ兩者接触ノ機会ヲ多カラシメ、行住坐臥ノ間ニ学生生徒ヲ訓化スルト共ニ其ノ趣味好尚、思想的傾向、生活状態ヲ察知シ、以テ指導訓育ノ実ヲ挙ケントスル」もので「一例ヲ挙グレバ教授自宅其ノ他ニ於ケル小集会ノ茶菓費、弁当費ニ使用シ得ル」ものであった。思想取締りをムチとすれば、訓育費は懐柔のためのアメといえようか。訓育費の他費目への流用は禁止されていたから、大方は飲食費に使うしかなかったらしい。



『南洋研究』

本校の場合も「(昭和6年)6月7日、例の思想善導の特別費を利用して、1, 2, 3年仲良く奈良へ出かけた。浅井(恵倫)先生を先頭に、続く者50名で(南洋研究)会員のほとんど全部が参加した。これも他の語部では見られぬ馬来語部特有の統一ぶりを示した行事であった」[『南洋研究』5号]と旅行に使われたほか「訓育費で教授にメシを食わせてもらった」さらに「座談会をやって思想善導センパイなるものが出た」など、滑稽<sup>こっけい</sup>というか馬鹿げた場面もあったようである。

#### 中国語翻訳のアルバイト

昭和4年10月24日、ニューヨーク株式市場の大暴落(「暗黒の木曜日」)で世界恐慌が始まり、不況風が吹き荒れる。就職難はさらに深刻化し、この年封切られた小津安二郎監督の松竹映画「大学は出たけれど」が共感を呼ぶ。外語の生徒も親の仕送りだけでは苦しかった。

私らのクラスに、翻訳で小遣金を稼ぐことを思いついた4、5人のグループがいます。町なかに堂々と「支那語翻訳 井上翠事務所」と看板を掛け、あちこちを駆けずり回って注文は取ってくるものの、自力では訳せんから先生に訳してもらおうわけです。そのうちに井上先生の耳に入って大目玉を頂戴です。「いやしくも官立の学校の先生が商売するとは聞こえもよくない。あの看板はすぐおろせ。だが、翻訳の方は見てやる」ということで、看板を「支那語翻訳事務所」に改めて半年くらい続けました。

以上は同窓会広島支部『扉』第26号に掲載された外大創立45周年記念座談会での住田照夫(C7)の回想である。このころ「アルバイト」という言葉はまだ使われていないが「苦学」と呼ぶには明るくユーモラスであり、教師と生徒のつながりの深さもうらやましい。

## 第2章 第2次世界大戦と外語

(詰襟の時代)

### (1) 大戦前夜の外語

昭和6年9月18日、中国東北部・奉天(瀋陽)の東北・柳条湖の鉄道爆破を引き金に日中両軍が衝突、「満州事変」が勃発した。中国側でいう9・18事変である。以後、日本は日中戦争(当時は「北支事変」のち「支那事変」と呼ばれた)さらに太平洋戦争を経て悲惨な破局まで15年戦争の道をころがり落ちていく。事変は、日本陸軍によって企てられた国際的謀略であった。わが国の「生命線」とされた満蒙を完全に日本の勢力下に置くことによって、国防の安全と国内の不況を一挙に解決しようというねらいであった。だが、「満州事変」の真実は当時の国民には隠されたままだった。真相が明らかになったのは実に昭和20年8月の敗戦後のことであった。

大阪外語では設置10周年を迎えるこの年2月、中目校長排斥の同盟休校が発生、また学則改正によって自由のシンボルとも見られた折襟背広の制服が詰襟に変わったことに象徴されるように、満蒙問題が時代の脚光を浴び、「非常時」が流行語となって戦時体制への傾斜が強まっていく。

#### 〈中目校長排斥スト〉

大阪外語生 盟休を決議

1、2年生が大会で 昨夜から校内に籠城

大阪外国語学校ではかねてから同校長中目覚氏の対生徒の態度に不満を抱き、不穏の気がみなぎっていたが、23日午後3時放課後、各語部1、2年生は一斉に「生徒会を開け」と叫んで大講堂に集まり、校内の各所、講堂の入口等に嚴重な見張りを置き生徒のほかは教授といえども入場せしめず、24日午前零時すぎに至るまで食事もとらずに大会を続けた。右はかねて中目校長が教育者にあるまじき私行上の風聞があり、教育方針についても一定した指導精神なきため教授間にも緊張を欠き授業もうまく行われなるとして不満に思っていたところへ数日前、支那語、馬來語の生徒2名が欠席していたのに教授が出席をとらなかつたため出席簿に出席となっており「代返」<sup>かど</sup>の廉で譴責処分を受けたことがあり、他の生徒が同情して校長のところへ陳情に出かけた

ころ、校長は「生徒が処分されるのは不運で、刑事被告人が罪にひっかかったようなものだ」と放言したというのが直接の動機となり、校長排斥の火の手があがったもので、まず校長に自決を促す旨の決議文を作成、校長に提示したが、これまた一蹴されたので……24日からストライキに入る旨決議をなすとともに結束を強固にするため全員約300名は講堂、食堂などに籠城し、24日午前1時ごろから更に生徒大会を開き「背後に思想的背景の絶対がない旨」を声明し、徹宵協議を続けた……

昭和6年2月24日付の『大阪朝日新聞』は社会面に2段4本見出し、生徒大会の写真入りで以上のように盟休を報じた。事件の発端は「代返<sup>だいへん</sup>」。授業に出席せず出欠点呼に代理で応じたものがあったため、学校側は2月19日、出席簿改竄<sup>かいざん</sup>に当たるとして馬來語部1年生18人、英語部2年生2人、蒙古語部2年生1人、計21人に謹慎2日の処分を行った(新聞記事の支那語部は誤報)。馬來語部、英語部2年生は下級生や級友の処分取消しを校長に陳情したが認められなかったため、23日放課後、各語部1、2年生が講堂で生徒大会を開き、各語部から4人、計36人の代表委員を選出し、校長不信任の決議文を作成、代表委員が校長に面会を求め校長の前で読み上げた。決議文は

1. 昭和4年6月、陛下大阪御臨幸の際、御陪食に召されたる校長に御下問あり。  
之に対する奉答に於て亜細亞方面滿蒙、印度、波斯、アラビア其の他書籍を集め研究せしむるに力を注ぐとあるが本校の実情は然らず
2. 「亡国の民スメル民族が我皇室の祖先なり」と生徒に話されることあり
3. 「天皇は愛すべし敬すべからず」と説かれることあり
4. 本校に於ては拝賀式に勅語を奉読せられず

以上の諸項は皇室に対し不敬或は不謹慎なる言なり。故に処決の要あり。

というもの。これに対し校長は

1. 実情に何等の相違なし
2. 他人の説を述べたるものにして之を主張せるに非ず
3. 神聖視し崇敬するに止めず親愛し奉るべしと説きしもの
4. 本校に於ては入学及開校記念日に奉読するを以て最も適当有効なりと認む仍<sup>なほ</sup>て以上の項目により処決の必要を認めず。

と答えた。さらに処分取消し陳情に訪れた生徒に対し「学校の方針に不満な者は退学するか休学せよ」と発言したのは事実か、との質問には「事実だが、不用意な発言だった」と認めた。このほか生徒間に流布されている校長の私行上の風評についての質問については「事実無根である」と断言したが、生徒側は納得せず、24日からのストライキを決議。各語部から協議、食糧、休息、警備の各委員を選出、24日から完全ストライキに入った。志水生徒主事の示した「生徒大会は認めない、警備部を解散させよ」などの要求も一蹴。警備部は成行きを心配して駆けつけた父兄たちさえ校内に一步も入れず、食糧部は学生食堂で炊き出しを行い、生徒たちはにぎりめしをほおぼりながら文部省へ陳情委員を派遣す

る案などを協議しながら籠城をつづけた。

一方、学校側は24・25両日の臨時休校を決定するとともに、職員会議を開いて対策を協議、3年生の卒業試験、就職問題を控えているため24日中に生徒大会を解散させる方針を固め、父母、教授を通じての個人的説得で解決を図ろうとしたが、生徒側も父母あてに「心配するに及ばぬ」というハガキ数百枚を発送して切り崩しに対抗した。籠城一昼夜を経た24日午後、生徒側の疲労も目立ち「生徒総退学を執行すべし」などの議論も出始めるに及んで、同窓会委員が調停に入った。

調停案は、校長に対しては(1)いわゆる不謹慎な言動、風儀問題につき釈明する(2)放言問題については遺憾の意を表明する(3)この事件に関し犠牲者は出さない、の3点。生徒側に対しては、ストライキを行ったことに遺憾の意を表明する、という内容で、同夜9時から校長が盟休生徒に対し1時間にわたって23日代表委員に行ったのと同様の説明を繰り返した。生徒大会はこのあとストを続行するかどうか論議したが、結論を持ち越したまま、25日午前零時すぎ籠城を解いた。

25日午前10時から校友会食堂で開かれた代表委員会には、同窓会調停案のほか、「学校側が校紀肅正を期し教授の内容充実を図るため生徒総代会を認め意見の発表を許すこと」などを条件に盟休打切りを決定し、午後1時から講堂で開かれた生徒大会もこれを可決した。このあとの校長との会見で、中目校長は(1)生徒総代会を認めてその意見を学校行政に参酌することは文部省の許さぬところであるから不可(2)将来の言動を慎むことという要求は自ら省みてすべきことで諸君に強いられるべきことではない(3)犠牲者を出さぬことについては同窓会の先輩にすでに話してある一と答えたため、大会は再び紛糾、代表委員36人が辞任し、改めて委員を選出して論議を重ねたが、結局午後11時半になって同窓会先輩のあっせん各語部代表9人が校長と会い(1)犠牲者を出さないこと(2)生徒総代会の件は学校当局で適当な方法を考慮する一ことで合意、代表が校長に陳謝して一件落着、生徒側は26日午前零時に解散式を行った。

ストライキに3年生が参加しなかったのは、25日からの卒業試験を控え、3年生だけが23日から臨時休校だったという事情のほか、1、2年生側に就職を考えて3年生を巻き込まない配慮も働いたようである。スト最終段階では「3年級の中に合流を計画するものあり 極力阻止に努む」という報告が学校から文部省に行われているが、学校からの逐一の報告のほか、大阪府警察部からも盟休についての報告が行われているのが注目される。

#### 〈西語部白紙答案事件〉

3年生の卒業試験は結局1日延期され、26日から3日間行われたが、ここで西語部の白紙答案事件が起きた。当時、西語部主幹と商業の学科主任を兼任していた相沢正美教授によると、某教師の某科目の試験で全員がそろって白紙の答案を提出した。これは教師に対する不信行為として直ちに問題になった。白紙ならまだしも、答案用紙の裏面に「燕雀安

んぞ鴻鵠の志を知らんや」と大書したのが発見された。一読しての感じでは、燕雀(教師)を嘲笑する鴻鵠(生徒)と取れるので、明らかに教師を侮辱したものとして評議会では厳重処罰を主張する教授もあったが、同情論を述べる教授もあって処罰者を出さずに済んだ。しかし卒業判定会議で再びこの問題が蒸し返され、首謀者とみられた2生徒の運命も危うくなったが、相沢主幹の努力で全員無事卒業に漕ぎつけたということである。

〔「外語時代を顧みて」相沢正美・『扉』7号〕

校長排斥ストの場合、教育勅語奉読や皇室に対する不敬などをあげた決議文を見る限り右翼的ストの色合いも濃く、陰に「生徒をおどらせて喜ぶ教師らしくない教師の存在」を指摘する声も聞かれたが、相次ぐ左翼思想弾圧・取締りや生徒主事制導入以後強まる一方の学校側の強権的管理体制への反発という底流に加えて、日ごろの教授陣や授業内容への不満、図書館蔵書の不備、さらに生徒総代会の意向を学校行政に反映させようという生徒自治意識の高揚などの諸要素がからみ合っ、同盟休校という形で爆発したものといえる。開校以来、外語に漂っていた自由な空気が次第に圧殺されていくことへの危機感があったことも否定できない。一見、右翼ストとも見えた外語盟休に対し、各地の高等・専門学校から応援電報が多数寄せられたが、いずれも左翼系団体からのものだったということは、外語ストの本質を示したものといえよう。

生徒意見の学校への反映という点は「学校当局が適当な方法を考慮する」ということで、不徹底のまま押し切られた形で事件は落着したが、この時期に外語に二つの事件が発生したことは偶然ではない。前章で触れた京都学連事件のあと、岡田文相の「左傾思想取締内訓」に抗議して結成された全日本学生自由擁護同盟は、昭和3年以降、学内変革闘争に積極的に取り組み始める。

(1)時間割作成、出欠、及第判定制度の改善、評議員会の自由化、学生・生徒取締り法規反対 (2)食堂の改善、授業料値上げ反対、就職難解決のための人事課設置、講堂・教室等の設備改善 (3)学友会・校友会の自主化、機関紙発行・講演会開催に対する干渉反対 (4)学生・生徒自治委員会の設立並びに権限の拡大、学校行政への学生・生徒の参加

などを求める運動は、従来のような少数の社研会員による突出した革命的行動から、広く一般学生・生徒を巻き込んで運動の幅を広げようとするものであった。

こうした学内改革運動は、従来のマルキシズム思想運動とともに、昭和3年から昭和6、7年にかけて急速に増加、昭和6年には事件数、処分者数ともピークに達する。盟休40件を含む思想事件の処分者(大学、高等・専門学校、中学校を含む)は昭和3年度は264人、4年度293人、5年度は788人、6年度は実に867人の多数にのぼった。これら学生・生徒の思想運動の高まりも、「満州事変」以後は、相次ぐ弾圧の強化、社会全体の戦時体制化、軍国主義化の進行に伴って急速に衰えていくことになる。

なお中目校長の後を継いだ葉山万次郎校長も山形高校校長時代に盟休事件を経験している。昭和3年6月、赤痢患者が多数出たため、生徒側は試験延期を要求したが一蹴された

ため葉山校長排斥に発展、6月23日から7月1日までストに入ったが、当局は強硬姿勢を崩さず、首謀者6人の放校で事件は落ち着いた。

### 〈詰襟へ服制変更〉

昭和6年4月、学則中の細則「服制」の一部改正によって、同年度入学者から、正式衣はこれまでの折襟背広から立襟背広(詰襟)に変わった。変更部分の主なものは別表のとおりだが、従来は略式衣として認められていた詰襟が正式衣となったわけである。ただし従来は服、帽子とも霜降りネズミ色だったのが、黒に改められた。EX ORIENTE LUX ET PAX の銀文字入り七宝襟章(左襟)は、C. M. Rなど各語部徽章(右襟)に変わった。

服制変更の理由としては、うちつづく不況下、折襟背広のメルトン生地などは英国からの輸入品で高価過ぎることなどが挙げられているが、生徒間の服装の乱れも一因であったようである。正式衣、略式衣のほか、たとえば豪傑肌の蒙古語部などは和服を着て登校、教練もそのまま実施するという有様だし、一方、仏語部などはベレー帽に背広、ボヘミアンタイに白ズボン姿、露語部にはルパシカ姿もあるという具合で、良くいえば自由で個性的、悪くいえば、てんでバラバラ。止むをえず他校並みの普通の襟詰学生服にしまったというのが本当のところであろう。ただし付則に「昭和5年度以前ノ入学者ニハ旧制ヲ適用ス」とあるとおり、背広の制服はこの後2年間生きのびたわけである。

服	改正前			改正後		
	折襟背広	メルトン、セル	霜降りネズミ	立襟背広	絨(サージセル)	黒色
襟章	盾型アーム(左襟)	七宝	銀縁濃紺地銀文字	各語部徽章(右襟)	金属	銀色
釦	本校徽章付	ネリ	ネズミ	本校徽章を刻す	金属	金色
帽	円形学生帽	メルトン	霜降りネズミ	円形学生帽	絨	黒色
帽章	本校徽章	金モール	金色	本校徽章	七宝	ネズミ色にコバルト色を配す
外套	開き襟	羅紗メルトン、スコッチ	任意	任意	任意	任意

以下、服制について林和夫(F2・大阪大学名誉教授)が外大同窓会記念誌『きんきら50年』に寄せた一文を紹介しておこう。

国際的マナーは在学中からという訳で、学生制服としてグレーの背広が採用されたことを特筆しておく必要がある。ネクタイは各自の好み、靴は毎朝磨くこと。当時は大学、高校、専門学校はあえてバンカラを誇示し黒一色の詰襟服を着ていたが、それを尻目に大阪外語は官立校としては百八十度の変身。「卒業したら一流仕立ての背広、キッドの靴、粋なイタリア製のソフトを……」と卒業式の祝辞にはつきものの中目先



「詰襟の時代」

生のご注文は今もなお語り草。

だが数年を経ずしてこの背広の制服は校長の先見の明にもかかわらず、明治以来の画一性を好む伝統と時流、とくに当時の学生からの要望に屈して、個性のない詰襟に戻ってしまったことは、かえすがえすも残念、その発案者中目先生ご自身の無念さは想像に余りある。

#### 〈「満州事変」と外語〉

「満州事変」以後、満蒙問題はこれまで以上に現実味を増して国民各層に受け止められるようになった。学生も例外ではなかった。昭和6年の外語校友会弁論部の活動記録を見ると、9月29日に秋季校内弁論大会が開かれているが、弁論テーマは「真の日本民族精神に還れ」「支那排日に関する一考察」「満蒙政策に対する私見」「日支問題考察」「国際問題所感」など、満蒙中心の時事問題がほとんど。個々の論旨は明らかではないが「時正に満州風雲急なる時期、会が校友の心を動かす事亦大にして大盛会裡に開会。国を思ひ、世界を思ひ、人類幸福を思ふ切実なる言を以て論陣を展開す。然しその各々が結局歸して一つなる結論を持って居たる事予期したる所にして且我々の一層欣快とする所なり」と総括されているところを見ると、当時の社会情勢からして大体の方向は想像できよう。

弁論部に限らず、英語部は11月1日の創立10周年記念祭呼び物の万国風俗行列に「満蒙の嵐」と題する催しを企画、奉天城総攻撃に参加した飛行機、タンクなどの活躍を実戦さながらに演じ、観衆をうならせたという。前年結成されたばかりの航空研究会は10月31日から校内で航空展覧会を開催、記念祭当日は久保田耕治(馬來語3年)搭乗のアヴロ機が校庭上空を低空飛行して花束を投下した。12月12日には音楽部のグリークラブが中之島の中央公会堂で開かれた大阪高等専門学校及び大学連合の満蒙兵士慰問金募集大音楽会に出演、収益415円を寄付している。

#### 〈満蒙研究学生大会〉

こうした動きの延長線上に現われてくるのが外語満蒙研究会による満蒙研究学生大会で

ある。「満州事変」が中国東北地方全域占領を目ざした関東軍の謀略によるものであるという真実は隠されたまま、政府は事変の原因について、中国軍が満鉄線路を爆破したため日本軍が自衛のため軍事行動を開始したとの声明を発表、当時のマスコミ代表である新聞もこぞって「支那軍の暴戾」<sup>ぼうれい</sup>ぶりを非難する論調を展開した。こうした報道機関の一方的報道は、内務省のきびしい検閲と言論統制によるものであったが、真実を知らされない国民は、次第に戦争支持の方向に誘導されていった。

一方、中国側は事変翌日の9月19日、柳条湖事件を国際連盟に報告、21日には正式に提訴した。連盟は23日、緊急理事会開催を提案、30日には連盟理事会が事変解決を日中両国に要望する決議案を採択、さらに10月24日には日本に対し、次回理事会開催予定日の11月16日までに日本軍が満鉄付属地内へ撤兵することを求めた勧告案を13対1で可決した。反対1はもちろん日本であり、わが国は世界の世論の前に完全に孤立するに至った。

外語蒙古語部有志で結成する満蒙研究会は、日本の国際舞台での孤立は国際連盟の日本および満州に対する認識不足が原因であると理解した。

外語に「蒙古満州及び之に関係ある諸方面に関する研究調査を目的」とする満蒙研究会が生まれたのは大正12年。同会設立の目的は次のようなものであった。

「世の進歩は時代により消長こそあれ決して止まるものにあらず。今や大戦(第1次)後の世界は各国何れも自国の文化の発展、ひいては植民地及び領土の開発に大なる努力をなしつつあり。例せば英国の如き米国の如き其の著しきものなり。其の効果たるや吾人の忽にすべからざるものあり。

之に反し我が大日本や如何、思此処に至れば甚だ痛歎に堪へず、明治27・8年戦役(日清戦争)に支那より得し台湾は果して如何程の発展をなせしや。朝鮮にせよみな其の好例なり。就中我が国と一時も離ること能はざる、我が国の死活問題に関する満蒙の発展微々として振はざるは我が国にとりて一大事たらずして何ぞや。之れ我が国為政家の罪に帰することを得れども又一面我が国民の満蒙に関する知識の欠乏に起因するものなり。(中略)

かかる状態を以て如何にして満州の発展を期するを得んや。今や日本は年に70万人の人口の増加ありと聞く。この限りある土地に於て限りなき人口の増加を如何にして調節すべきや。産児の制限か、果た又海外移住か。吾人は第一に海外発展に指を屈するのみ。さらばとて四方の彼方を眺める時果して我が国民の心を安じ定住し得る国ありや否や。四方皆排日の声に閉ざさるるに非ずや。然かもそのうちひとり我が満州は排日の風、塵ほどもなく広茫たる沃野は手を広げて我が国民の移住を待てり。ああ実に満蒙こそ我が国民の死活問題たるの地なり。此処に於てか蒙古語部の有志相謀りて蒙古の研究を目的とする満蒙研究会を設立せり。これ時宜に適せずして何ぞや。(以下略)」「校友会誌『咲耶』第2号」

以上のような目的を持つ満蒙研究会が、日露戦争以来の「生命線満蒙」の危機に際会し

て「連盟の認識不足の蒙を開くべく」〔11月12日付『大阪毎日新聞』〕 11月13日、満蒙研究学生大会を開いた。

愛国心に燃ゆる 若き六百の学徒

連盟理事国代表に声明書発送

大阪外語満蒙研究学生大会

全日本学生のトップを切って満州事変に奮起した大阪外語生徒の満蒙研究学生大会は13日午後3時から同校講堂で開かれた。集まるもの全校生600を超え、学校側からも志水、山本らの諸教授が来聴、蒙古語部3年の大月桂君を議長に、支那語部3年の岩佐忠哉君發起人を代表して「国際連盟はいまや国際正義のための団体ではないことを明らかにした。しかも支那の学生大衆は先頭に立って国家のために戦ってゐる時わが日本の学生はどうであるか。今こそわれわれ学徒が敢然として学生による国民外交の実践へ踏み出すべき秋である」と声涙下る熱弁を振ひ、続いて各語部各年から1名ずつの代表弁士が登壇、会場を圧する愛国的な熱情の中に24弁士がこもごも賛成演説を行つて

1. 満蒙の野に戦ふ皇軍へ慰問と激励の電報を本庄関東軍司令官あて打電のこと
1. 芳沢全権にも同様感謝と激励の電報を發すること
1. 帝国の公正なる態度を世界に明かにするため国際連盟事務局あて声明書を作成、16日までに到着するやう打電のこと
1. 国際連盟の13理事国代表にそれぞれ13ヶ国語で同様帝国の公正な態度を示す声明書を郵送すること

を満場一致決議し、さらにこの電報の費用として学生一同が1人30銭ずつ贖金することを申合せ、進んでこの運動を全日本学生のものとなすため、満蒙問題研究会関西学生連盟の成立を提唱することを決定、関西の大学、高等・専門学校に猛烈な働きかけをなすこととし、各語部各年から2名の委員を選出、全委員登壇起立裏に岩佐君大会宣言を拍手裏に朗読可決、最後に大阪外語満蒙研究会万歳を三唱して同6時散会した。

#### 宣 言 書

日本帝国と密接なる関係にある満州に突発せる今次の満州事変は、今や日支間の地方的問題に非ずして全世界の重要問題として国際連盟が干渉するに至れり。われら学徒も日本国民として固より深甚の注意を払うものなり。思ふに満州問題の性質は全世界の問題として取扱はるべき問題なりや。然らず、誠にこれ国際連盟及び各国当局の満蒙に対する認識不足と支那の虚構的宣伝にほかならず、恰かもこれ油の燃ゆるに水をもって消す如し。知らずや油焔は水にて消し難く、ますます水に浮きて燃ゆるを。知らずや油焔に水の如き国際連盟の認識不足的言動が如何に中華民国を躍らすかを。

国民外交の必要は人、声を大にしてこれを説く、世はまさに宣伝時代とはまた人のいふところなり。見よ中華民国及び学生の如何に虚構的排日宣伝に熱中せるかを。しかもこれが如何に国際連盟の認識材料となれるかを見る時われらの起つゆゑん實にここにあり。

しかれどもわれらは徒に中華学生の後塵を押し虚構的宣伝をなさんとするものに非ず、どこまでも事実を事実とし日本のいはんとする正当なる立場を海外に闡明せんとするものなり。勿論、われら学徒は政治的運動をなすに非ず、ゆゑにわれらはあくまでも学徒として行ふものにして、絶対に第三者に乗せられ利用誘惑せられざることを期す。

右宣言する。〔11月14日付「大阪毎日新聞」〕

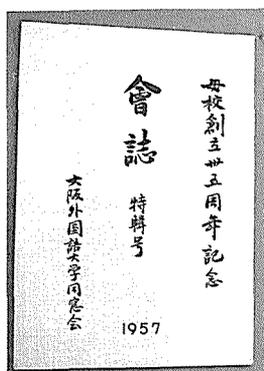
「帝国の公正なる態度」を世界に明らかにしようとした「若き600の学徒」の行動は「愛国心に燃ゆる」ものとマスコミに持ち上げられた。事実をおおい隠しての軍部の独走、戦争反対勢力の弾圧、言論統制によるマスコミの追従という当時の状況のなかで、純真多感な学生の行動が結果的には国策迎合・侵略戦争支持に結びついていった悲劇がここにあった。

文部省学生部が昭和9年2月11日現在で調査した各直轄学校及び公私立大学、高等・専門学校の修養・研究団体のうち「特ニ其ノ目的、主義、綱領等ニ於テ国家主義的立場ヲ標榜セリト認メラルルモノ」の一つに大阪外語の満蒙研究会の名前があげられている。

会の創立が昭和6年11月13日となっているのは事実には反するが、この日は満蒙研究学生大会が開かれた日であり、同日の行動によって文部省は「現下ノ社会情勢ニ鑑ミ此ノ種団体ノ穩健ナル発達ヲ奨励スルト共ニ特ニ周密ナル指導ト監督トヲ加フルコト緊要ナリト認メ」たということであろう。

大阪外国語学校（団体数1）	
団体名	満蒙研究会
創立	昭和6年11月13日
主義綱領	満州ニ於ケル我国ノ特殊ナル立場ヲ明ニシ更ニ之ヲ中外ニ説明セントスルヲ以テ目的トス
会員数	約500名
指導監督者	生徒主事 志水義障
事業行動	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 関西ニ於ケル各大学専門学校宛参加ヲ勧誘セリ</li> <li>2. ブリアン議長宛日支問題解決ニ関シ打電セリ</li> <li>3. 満州派遣軍宛感謝ノ電報ヲ発シタリ</li> <li>4. 我が国ノ簡単ナル歴史ヲ諸外国語ヲ以テ書キ之ヲ諸外国ニ発送ヲ計画セリ</li> </ol>

なお表中に示されたブリアン議長とは、日本軍の撤兵勧告案を決議した国際連盟理事会の当番議長を務めたA・ブリアン仏外相である。



創立35周年記念「会誌」特輯号

### 〈大阪外語学生新聞〉

「満州事変」後も左翼思想運動は地下でつづけられていた。文部省思想局の思想調査資料によると、外語での“不穏ピラ散布”事件が学校側から報告されている。昭和6年11月1日、創立記念第10回陸上競技大会当日、運動場と校内展覧会場に「大阪外語学生新聞号外」と称するピラが散布された。目撃生徒の証言では外部からの侵入者によるものらしいが、ピラの内容は (1)形式的無内容な記念祭をやめろ (2)学校当局の欺瞞をバクロせよ (3)記念祭を廃して学校を休校せよ (4)進歩的諸君は外語学新の旗の下に一などであった。

つづいて11月16日にも授業開始前の教室に (1)総代制度の自主化を闘いとれ (2)自主的生徒大会を闘いとれ一などを訴えた学生新聞号外がまかれたが、学校側は今回は生徒によるものと認めている。

さらに11月24日には、号外ではなく大阪外語学生新聞第3号が教室、廊下、便所などにまかれた。第3号は美濃判西洋紙半面刷りの3頁、印刷、体裁ともに整っており、「2月のストライキをムダにするな」のスローガンにつづいて (1)教師に対して不満はないか (2)授業はおもしろいか (3)図書館の本はあれで十分か (4)食堂のメシは高過ぎはしないか (5)諸君 総代会議は我々のものだ一などを掲げ、学内改革闘争の継続を訴える一方で、11月13日に行われた大阪外語満蒙研究学生大会に触れて「満蒙研究会本部 暴力団本部と化す」と批判しているのが注目される。

### 〈わが世の春・蒙古語部〉

「満州事変」によって蒙古語部は“わが世の春”を謳歌するようになる。昭和7年度の同部入学志願者数は108人、6年度の41人に比し一躍2.6倍にふえた。同部志願者が100人を超えたのは開校以来初めてであった。

満蒙を独立国とし、日本の保護下に置くという関東軍の方針に従って、昭和7年3月1日には早くも清朝の廃帝・溥儀を執政に据える新国家「満州国」が建国宣言を発表していた。実態は関東軍が統治の実権を握る、まったくの傀儡<sup>かいらい</sup>国家ではあったが、「五族協和」「王道樂土」のスローガンは満州ブームをあおり立てた。

「大学は出たけれど」(昭和4年)という松竹蒲田映画の題名そのままに、世界恐慌のあおりで不振をつづけた大学・高専卒業者の就職難も、ようやく長く暗いトンネルを脱し始めた。昭和7年4月21日付『大阪朝日新聞』は「就職戦線にも陽光のきざし」として「数年来就職難に泣いた学士様も今年は満蒙景気に乗って素晴らしい新調の背広服に春の新生活を謳歌してゐる。年中東奔西走して頭痛鉢巻だった学校の先生も今年はどうやら夏休みまでに片付きそうだと樂觀の状態」と伝えた。外語についても「卒業生172名、就職希望者150名。満鉄2、江商4、京都府警察部3、日立製作所1……など35名が確定、満州国へは印度語1、支那語3、蒙古語2、合計5名が採用され、このほか個人的に就職確定したのも20~30名あるので、ここも約半数は売れてゐる」と報じた。以下は、精松源一名誉教授(M1)の回想である。

昭和6年に満州事変が起こると、その年の暮れに当時中国語の先生であった故吉野(美弥雄)先生と満州の奉天にあった関東軍司令部に、時の司令官本庄(繁)將軍慰問のために母校を代表して派遣されたが、満州や内蒙古では零下15度の夜道を歩いて、寒いというよりは針で刺すような痛さに、暖国育ちの私には到底堪えられないほどであった。

満州事変後は満蒙への国民の進出は目覚ましく、蒙古語の必要性が痛感されるようになってからは、学生の学習意欲も高まり、特務機関やその他で活躍出来るようになってくると、わが蒙古語部もわが世の春を謳歌するようになった。満蒙で働くにはまず精神の鍛錬が必要だということで、学生たちの間では学内で、時には母校近くの禅寺で座禅したり、日本精神の涵養のために、その道の先生の講話を聞くなど一致団結して身心の修養に努めていた。しかし中にはそれに熱中するあまり、学生の本分に反する行動に出る者もあった。卒業も目前に控え、教室のストーブに座布団を押しこめて燃やしたり、教室の後の白い壁一面に「後にく学生に告ぐ」と題して、慷慨の情を訴えた事件があり、学科主任であった私は、当時の校長に呼びつけられ、面責されたこともある。〔『きんきら50年』〕

#### 〈中目校長退官〉

昭和8年9月27日、中目校長が依願退官し、後任校長に第七高等学校造士館長・葉山万次郎が就任した。中目校長は大正10年12月10日の就任以来在職11年10ヵ月、足かけ13年にわたってユニークな外語創設と基礎固めにかかわってきただけに、中目校長を抜きにしては大阪外語の歴史は語れないであろう。

中目覚は明治7(1874)年宮城県仙台市生まれ。83歳の時に外大同窓会発行の『母校創立35周年記念会誌』に寄せた「80年間の思い出」によると、仙台藩の小身士族の出身で、第二高等中学校(後の高等学校)補充科2年生の時、学資がつづきそうにもないから官費の学校へ入ろうと決意。そのころロビンソン・クルーソーなどを読んで世界を回ってみたいと

思っていたので海軍兵学校を受験したが近眼で失敗したとある。この少年期の夢は後年、オーストリア留学から韓国、シベリア、満州、中国出張視察、さらに外語校長となってからも中国、アメリカ、メキシコ、エチオピア、蘭領東印度、フィリピン視察と、世界を股にかけ、ドイツ国文化勲章、フランス政府のフランス語教育功労章を受章するなど「世界男」と呼ばれるようになって実を結んだといえよう。

仙台の第二高等学校から東京帝大に進み、卒業時に恩賜の銀時計を受けた折紙つきの秀才は金沢の第四高等学校ドイツ語教授から広島高等師範教授となり、専攻もドイツ文学から地理学に変え、アルプスの氷河研究をテーマにウィーン大学留学のきっかけをつかむ。大正8年、松山高等学校創立に際し教頭として赴任、のち官立第二外国語学校創立委員を経て大阪外国語学校初代校長に就任したことは、第1章にも触れた。当時の新聞は、中目校長を8カ国語に通じた「語学の天才」と紹介している。

「氏は二高出身後、帝大の独文科に入ったが、語学の天才の閃きは既にこの時に発芽し、正則に学びもせぬ仏蘭西語を自由自在に操って外人の雇教授をして舌を巻かしめ、大学を出る時には英、独、露、仏、伊、支等8カ国語を覚え込んで同僚を驚かした。その後日露戦争に我が軍が樺太を占領するや、島に渡って土語を研究し遂に立派な文典録を作り上げ、更に北海道で発見したアイヌ族の難解な絵文字をスラスラと解いたことがあり大学時代に朝鮮へ修学旅行した時には今迄一度も口にできなかった朝鮮語をべらべらと喋舌って通訳の任に当たったことがあり、世界の何処に行っても相手の口元さえ見て居れば自由自在に話が出来ると自ら人に話すほど語学速修の達人である」〔大正11年1月8日付「大阪毎日新聞」〕

記事中の「北海道で発見したアイヌ族の難解な絵文字」解読の件は、小樽市手宮洞窟の壁面にある古代トルコ文字に似た線刻のことであるが、これが古代文字か、後世の落書きかは大きな論争となったものである。詳細を述べる紙数はないので省略するが、フランス政府文化芸術シュバリエ勲章を受章した小林忠雄(F6)は「中目先生によるこの古代文字の解読の正否は今後の言語学者の研究の成果によるものであるが、先生が、これは古代文字であると判定されたことは全く正当であると判明し、その研究の方向に誤りはなかった」〔外大同窓会機関誌『咲耶』14号〕と書いている。

語学の達人であったことは、万人の認めるところであった。林和夫(F2・大阪大学名誉教授)は二つのエピソードを紹介している。

アメリカの学生野球団が国際親善のため来校した。初代校長、中目覚先生は音にきく外国語の天才。グラウンドの歓迎式場では、先生の流暢な英語のスピーチを今やおそしとかたずをのんでいた。

開口一番、キャプテンに向って貴君達は日本語がおわかりだろうね、ときいた。「ノン」それでは国際語としてのフランス語はいかが？「ノン」それでは、残念ながら貴国の言葉でごあいさつを述べよう……。

堂々たる前置きである。しかも含蓄がある。



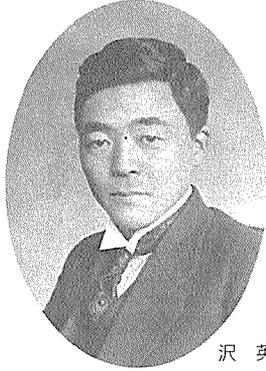
校長はドイツ語が専門であるがフランス語もお得意。その実力を知ったのは、駐日フランス大使で世界的詩人ポール・クロオデルが来校し、全校の学生に講演をした時、通訳を引き受けられたからである。詩人のややセカセカした話しぶりに比してゆうよう迫らぬ態度での気軽な通訳、その巧みさに一同舌をまいたが、初学者にもよく聞き取れた、机とか時計、時速80軒の自動車とかのやさしい単語はその名訳の中に一つも出てこないで失望した学生も多かった。その反面、クロオデル氏が日本や中国の文化に対する深い敬意、能や歌舞伎への愛と理解、最後に外国語の徹底した修得が如何に世界の文化交流に必要なかを語る時、通訳者中目氏自身の趣味、教養、語学的感性が動員されて、絶えず講演の主意をつかんで、その他は思い切り割愛するという、場数をふんだ通訳者の老練さに感心し些末な単語にひっかかっていた我が身の浅はかさを悔いた次第であった。〔『きんきら50年』〕

「世界男」にふさわしく、外語教授にも盛んに海外出張を命じた。

「先生方の外国出張の事を少し話して置きましょう。学校というものは、今もそうかも知れませんが、その頃はあまりに理論が多過ぎた様に思いました。専門学校の卒業生は高等学校と違って、直ぐ社会へ出て働くのだから、理論よりも実務に重きを置かねばならぬと存じます。それで学則にも実務という言葉は何条かに入れた様に記憶して居りますが、その頃まで実務などという言葉を使った学校は何処にもありません。同様に学校の英語というものも、英語ではなく英学でありました。英米人と話の出来ない先生が英学を教えるのだから、学生の方でも読めるけれども話は出来ぬと言って、当然の様な顔をして居る者が多かったのです。そこで外国語学校の先生とも謂われる方々がその言葉の使われる所へ行った事もないのでは面白くない。そうかと言うて文部省の在外研究員は毎年一人以上はむずかしく、後には一年に一人もむずかしくなりました。留学でなくとも宜しい、夏休み位に行っただけでも良いと考えました。幸い外国旅費というのが後には段々減らされましたが、初めの中は年に六千円ありました。是だとシベリア往復の二等で夏休みの前後に十日程の休暇を取れば八十日程になり往復に二十四五日かけても二月近く独仏辺で滞在出来ます。この方法で三人程ヨーロッパへ行ってもらいました。また欧米語の先生でも近くの中国とか東南アジアの国々を見ておく方が良いので、中国・フィリピン・ビルマ・ジャワ・バリ・香港・ウラジオ・ハバロフスクなどへ夏休みに行ってもらった先生方も沢山あります。又アメリカの太平洋岸地方へ商業の先生に行ってもらった事もあります。

斯ういう出張は、目に見える利益は余りないでしょうが、外人に対する態度などの上に効果がある訳です」〔前出「80年間の思い出」〕

馬來語の浅井恵倫教授もその一人で「(海外出張は)大ていは夏休みの間、長くて1年。



沢 英三

私は赴任の翌年(大正14年)内藤春三教授と一緒に夏休み間の馬來半島の出張を命ぜられた。本多平八郎教授の世界早回り旅行、高橋周而先生のシベリア線を利用してドイツへ行き、アッという内に帰国の離れ業などを記憶している。駆足旅行と切りつめた旅費が中目校長の趣味だったらしい」〔前出『母校創立35周年記念会誌』〕と述べている。

東洋語を優先した語部配列は大阪外語の特徴の一つにあげられているが、ここにも中目校長の見識がうかがわれる。

「学校が出来た大正の後半頃までは、外国と言えば欧米、欧米と言えば英仏独米という風に考えられて居りました。私は日本以外は皆外国、接触の最も多いのは近い国々でなければならぬ。そうすれば語部の順序もアジア諸国を先きにして英仏などは其次に来るものと考えて、語部の順序をつけ是が今日に至って居りますが、初めは、なぜ英語から始まらぬか、中目という男は、つむじ曲りだとひやかす人もありましたが、今日になって見ると何もおかしい事はありません」〔前出「80年間の思い出」〕

実は、中目校長は以上のような考え方をさらに進めて、外語は英・独・仏語は独立語部とせず、第2語学とすればよい、と考えていたことが、沢英三・印度語部教授によって明らかにされている。

「語学行政に関し一見識を持っていられた(中目)先生は、あの英語万能時代において本校英語部だけの入学志願者募集中止を文部省に提議したところ、文部官吏の頭では外国語といえは英語しかないと思っているので駄目だった、と仰せられていた」〔『アーリヤ学会会報』15号〕

「英・仏・独の諸語は大概の大学高専にも課せられてある言葉で、格別外国語学校の特色になるわけでもないから第2語学として置いても充分だと思う。第一、英語部など募集しなくてもよかったのだが文部省の役人の頭がその気になれないので止まなく募集せぬわけにゆかなかった」〔『アーリヤ学会会報』23号〕

もし中目構想が実現していたら、外語の姿は大きく変わっていたことであろう。

東洋語重視、国際的実務従事者の養成、背広制服の採用など新機軸を打ち出した中目校長は、大阪にできたばかりの外語PRにも積極的だった。以下は西山泰清(M1)の回想で

ある。

「2年生の春、(中目)校長から呼ばれた。私が大毎主催の全国庭球選手権に参加し、3、4戦まで勝ち進んでいたことが新聞に出たのを見て、校長は学帽を被って試合に出るよう要望された。その通りしたが、準々決勝で力及ばず敗退した。しかし、校長の新設学校宣伝心の強いには、学者ながら立派なものだと感心させられた」

〔『きんきら50年』〕

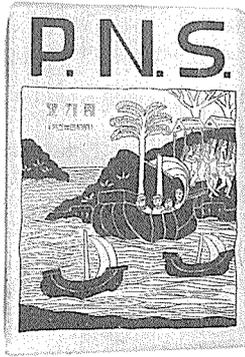
生徒の目に映った中目校長は、180<sup>cm</sup>、90<sup>kg</sup>、堂々たる体格の偉丈夫、でっぷり太って赤ら顔、申し分のない押出し、性格は豪放磊落<sup>らいらく</sup>、独特の東北弁が純粹で淡白、飾り気がなく包容力のある人柄を感じさせた。学者というより政治家タイプの一面もあわせ持っていたようである。松山高校教頭時代は、よく花街で芸者をあげて遊んだという酒豪でもあった。恩賜の銀時計まで受けながら、東大教授コースに残れなかったのは、酒がわざわいしたというわさもあるが、真偽のほどはわからない。少々のことでは動じない豪気な性格は、時として不用意な放言につながったようである。商業担当の相沢正美教授は、中目校長と後任の葉山校長について次の一文をものしている。

「葉山先生も中目先生同様、東大ドイツ文学の出身で中目先生の後輩に当り一高教授、文部省督学官等を歴任、山形高校長から七高造士館長に転じ、中目先生の後を襲って(というより中目先生の推輓によって)外語校長となられたのである。中目先生は、明治時代のいわゆる豪傑型であったのと比べて、葉山先生は同じく一見豪放なように見えながら、しかも極めて用意周到一言一句もいやしくもしないという細心なところがあった。さきに述べた昭和6年春の盟休も、ある教官が出席をとり違えたのを学生が抗議したが聴き入れられず、ついに中目校長に直訴(?)するに及び、学生の抗議が余りに執拗なのに業を煮やした中目先生が、『そんなに学校のやることに気が喰わないならストライキでも、何でもやってみろ』とつい口をこらしたのが動機だった、(むろんこれ一つだけではなく、外にもいくつかの原因があって、たまたまこの一言がきっかけになったと思われるが……)と伝えられた程、時として相手構わず放言するという不用意な面もあったが、葉山先生は在職9年、教官からも学生からも一度も尻尾をつかまれるような言動が絶無であったことは、これを証明しているであろう」

〔『扉』7号〕

稚気愛すべき、親しみやすい人柄が伝わってくるようである。

「お前は酒を飲んで60代で死ぬ番に当たっている」という亡父の説に従い、在職中に死んでは学校に迷惑をかけるからと、外語の基礎が固まったの見届け、数え年60歳を迎えたのを機会に退官した中目校長は、北京興亜学院長、太平洋戦争敗戦後は米占領軍軍政府教育顧問を務めたあと故郷・仙台に帰り、昭和34年3月27日、84歳の生涯を閉じた。前夜、入浴のあと晩酌を楽しみ、翌朝、遂に目覚めない旅路に立ったという。全党院海山明道居士ースケールの大きい「世界男」にふさわしい大往生であった。



西語部会  
「P・N・S」創刊号



烈士之碑

### 〈烈士之碑〉

昭和12年7月7日、盧溝橋での日中両軍衝突を発端に戦火は上海にも拡大、日本は中国との全面戦争に突入する。国際連盟総会は、日本の行動は9カ国条約・不戦条約違反とする決議を採択、ルーズベルト米大統領も日本、ドイツを侵略国家として非難したが、すでに昭和8年に連盟を脱退している日本の為政者が耳を傾けるはずもなく、国民も「皇軍大勝利」に酔い、南京占領を提灯行列で祝った。西語部会誌『P・N・S』9号には「12月15日 此の日午前は南京陥落祝賀式、夜は祝賀大提灯行列。外語600健児は延々長蛇をなし夜の大阪市中を行進し、天もコゲヨとばかり提灯の波々々……天地をどよもす皇軍大勝万々歳」とある。南京での中国捕虜、市民に対する虐殺、掠奪事件などは知る由もなかった。

7月18日付『大阪毎日新聞』は「支那語講習にお嬢さんが2人 大陸飛躍の健げな心」という見出しで、大阪外語が16日から開校した「第1回初等支那語講習会」の盛況を伝え「支那のお友達に正義日本を知らしめるため」という女学生と、満州にいる婚約者に嫁ぐ若い女性をクローズアップしている。

同じ紙面には「皇軍将士と政府に激励、感謝の電報 府会全員協議会で満場一致可決」「北支で働きたい”健げ・妙齢の見習看護婦が曾根崎署へ切なる願い」「嘗ての赤の闘士が皇軍兵士へお守り札を贈る 貧しい職工の誠意」「派遣兵の家賃全免を勧告 借家人組合から各家主へ」「勇士の家族へ“補助”のスクラム 鉄工所の全従業員が餼金！」さらに「銃後の熱意愈よ沸る 汗の結晶を、お小遣の貯金を 本社募集“慰問袋資金”へ続々」など見出しがおどりと、戦争報道一色の当時の世相を物語っている。

7月20日付『大阪朝日新聞』には次の記事がある。

#### 武勲・死の凱旋 外語出の3名

昨年12月9日、満州熱河省磨盤山で特務機関として活躍中名誉の戦死をとげた大阪外語蒙古語部卒業生 大月桂、足立武夫、吉本富士3君の遺骨は19日午前7時半神戸入港のうすり丸で故国に死の凱旋、家族、先輩、知友らに迎へられ午後2時9分着列車で大阪に帰って来た。

なほ大阪外語校では校友会、同窓会、蒙古語部など共同で今秋10月、3君の慰霊祭を行ふべく準備中である。

大月桂(M8)吉本富士(M9)足立武夫(M12)は卒業後いずれも関東軍特務機関員として内蒙工作に従事中、包圍攻撃に遭い戦死したもののだが、これより先、昭和8年8月13日には満州・竜江県参事官だった中川勝(M4)が、同11年11月30日には仏山県参事官・吉村勝露生(C4)が、いずれも当時は「匪賊」と呼ばれた反満抗日軍の襲撃により戦死していた。外語同窓会では、以上5人の「烈士」の顕彰と鎮魂のため「烈士之碑」の建立に乗り出す。

当時満州にいた岩佐忠哉(C8)の回想によれば、「兵隊は戦死すれば靖国神社に祀られるのに、満州国の建国に献身する者が何故、神に祀られないか」という疑問から「外語神社を作れ」と同窓会各支部に呼びかけ、学校にも申入れたが、神社設立はどうしても許可にならないとの見通しから、「烈士之碑」に変更になった〔『扉』26号〕という。ちなみに岩佐は、先の満蒙研究学生大会のときの発起人代表であり、大月は大会議長という間柄の同期生であった。

校友会会議は9月15日、皇軍慰問資金と碑建設のための寄付金募集を決定、10月3日には5人の慰霊祭が行われた。

日中戦争勃発に伴って外語教官、卒業生、さらに生徒の中にも戦場へ駆り出されるものがふえて行った。8月16日には英語部3年、倉垣清己が「暴支膺懲ノタメ歎呼ノ声ニ送ラレ出征」〔英語部会誌『E・D・U』13号〕していった。9月11日、第2学期が始まり登校した生徒は、葉山校長、平沢生徒主事の訓示のあと、剣道師範・富樫弘三、体操助教授兼生徒主事補・森脇正夫、印度語教授兼生徒主事・山本健太郎の出征を知らされる。9月21日には教練・体操講師・江口庫一郎少佐、10月13日には西語講師・武内恒次が召集を受けた。

「日支事変更に進展す。直接吾等の語部に影響す。即ち武内先生、召集の報を此の日突如受けらる。戊申詔書奉読式後、江口先生と同じ壇上に立たる。送別式後、生国魂神社へ全校生、皇軍武運長久を祈る」〔前出『P・N・S』〕。

教官だけでなく、会計課勤務・川合敏之ら事務職員、さらに多数の卒業生が中国戦線に動員されていった。

そして日中戦争勃発のその年、早くも最初の犠牲者が出た。陸軍戸山学校出身の剣道師範・富樫弘三が10月26日、山西省平定付近の戦闘に小隊長として戦死した。12月3日、外語生徒一同は武装して富樫少尉自宅前で遺骨を迎えた。同窓会では満州だけではなく、中国戦線での戦死・戦病死者も含めて合祀するための「烈士之碑」建立募金運動を進める。

命ヲ鴻毛ノ軽キニ比シ義ヲ泰山ノ重キニ準ヘ以テ忠君愛國ノ至誠ヲ顯揚ス是レ日本精神ノ精華ナリ 而シテ母校創立日尚淺クシテコノ精華顯現ノ士ヲ出セルハ豈ニ我等ノ誇ナラザランヤ(中略)

夫レ義ニ死シ職ニ殉スルハ固ヨリ吾人ノ本懐ニシテ是等諸君ニ於テモ死シテ悔ナカ

ルヘシトハ雖モ其ノ氣魄ニ応ヘ英靈ニ報イ以テ名ヲ不朽ニ伝フルハ當ニ吾人ノ責務ナルヘシト信ス 翻ツテ思フニ將來ニ於テモ単ニ滿蒙ノ天地ノミナラス洋ノ東西ヲ問ハス又語部ノ如何ニ拘ラス我カ同窓会員中邦家ノ為メ身命ヲ擲チ職ニ殉スルノ士ノ出ツルナラムコトハ予期スルニ難カラサルトコロナリ

是等義烈者ノ遺徳ヲ偲ヒ其ノ冥福ヲ祈リ併セテ後学啓発ノ資トセンカ為メ茲ニ烈士之碑建立ノ議ヲ發起セリ冀ハクハ協賛ヲ賜ハラントヲ〔烈士之碑建立趣意書〕

同窓会員はじめ教官、職員、生徒からの募金総額は母校創立費寄付者・林蝶子からの1,000円を含め5,329円50銭に達し、昭和13年6月5日、「烈士之碑」除幕式と、この日まで戦死、殉職が確定した11人の碑前祭が行われた。碑石は讃岐・五剣山産の庵治石、高さ1丈6尺、台座の高さ1丈、地上2丈6尺(約7.8m)。碑面は当時の文部大臣・木戸幸一侯爵の題字、碑背は葉山万次郎同窓会長(校長)の撰文を大阪の書家・伊藤東海が揮毫、施工は大阪天満の石匠・平清。碑の合祀者は昭和63年11月12日現在160人、彼らも戦争の犠牲者であったといえよう。外大箕面移転に伴って移された碑は、記念会館に抱かれるように、ひっそりと建っている。

## (2) 戦争と語学

外語の各語部は、専修語のほか、1～3カ国語を兼修語として履修していたが、日本の中国大陸侵略政策の進行、さらに東南アジアへの武力南方進出政策に伴って、兼修語の変更、さらに語部新增設が進められた。

### 〈兼修語の変更〉

まず昭和10年4月から露語部3年の兼修語である独語が蒙古語(週4時間)に変わった。「露語修得者ハ主トシテ北滿地方ニ就職シ、独語ノ知識ヲ要スルモノ殆ド無キニヨル」というのが変更の理由であった。

さらに同12年4月からは蒙古語部3年の兼修語が、満州語から露語となった。理由として「規程中満州語ト称スルハ古代満州族ノ用語ノ意ニシテ現今ハ殆ド廢語ニ近キヲ以テ之ヲ削リ、滿蘇両国ノ關係ハ極メテ密接ナルノミナラス蒙古語ノ研究ニハ露国人ノ著書ニヨルヲ便トシテ本校蒙古語部卒業生ノ大部分ハ満州国内ニ就職シ又ハ事業ヲ営ムノ実況ナルヲ以テ同国語タル支那語ト共ニ露語ヲ学習セシムルヲ要ス」とある。

### 〈支那語部増員〉

昭和14年4月からは支那語部定員35人を70人に倍増、従来1学級だったものを2学級とした。すでに昭和12年7月7日の盧溝橋での衝突で、日中戦争が始まっており「大陸政策

遂行ノ為支那ノ国語ニ堪能ニシテソノ事情ニ精通セル多数ノ人材ヲ必要トスルハ言ヲ俟タザル所ニシテ」というのが増設の理由であった。14年度の支那語部志願者は553人、入試倍率は7.8倍であった。ちなみに12年度は171人、4.6倍、これが日中戦争勃発後の13年度は404人、8.6倍にはねあがり定員倍増後の14年度も依然高い倍率を示した。

支那語部増員に当たっては、2年速成科を主張する文部省と、3年正科を要求する大阪外語の間に意見の対立があったようである。当時の葉山万次郎校長の思い出を引用する。

「そもそも支那語定員増設は当時の文部政務次官・内ヶ崎作三郎氏が支那視察中の思い付きとして支那語の重要性を唱導し、東京、大阪両外語にそのお土産を配布した形だから、まことに以て御好意忝なしとお礼こそ言え、文句などは起こらないと政務次官は思っていたろう。だが今度の増設支那語部は2年間の速成科とせよとの指令である。そこで私は井上(翠)先生その他と協議したが、2年では中途半端で物にならぬ。卑近な例をとれば、この子は月足らずで生まれましたので脚が弱くて困りますと、いくらお母さんが泣きごとを言っても、その子は一生発育不十分であるのと同様に、特設速成の生徒は、無理に卒業させても殆ど役に立つまい、というのが結論であった。そこで私は当該教員の意見を基礎にして正科3年説を主張したが、一度は否決となった。

この時、私は内ヶ崎政務次官を衆議院に訪問し、食堂で昼食をとりながら話をした。初めは懇談のつもりであったが、内ヶ崎氏とは学生時代からの知り合いで懇意な間柄であったから、いつの間にか兩人とも公人たる資格を忘れて、無遠慮な口論を始めたのであった。(中略)翌年また正科3年説を持ち出す時には、中国人ならずとも面子に係わる と思い、心中ひそかに決意していましたが、幸いに私の希望が遂げられた訳です」〔『母校創立35周年記念会誌』〕

ただし、東京外語の場合は、速成科2年という文部省の指示を受け入れ、大阪外語より1年早く昭和13年4月から本科とは別に修業年限2年の特修科を設置、第1期生47人を受け入れた。入学倍率は5倍であった。

#### 〈亜刺比亞語部新設〉

昭和15年4月からは亜刺比亞(アラビア)語部が新設され、開校以来の9語部が10語部となった。助教授・中野英治郎と外国人講師のエム・マッキイ・タシカンディが授業を担当した。亜刺比亞語部設置の理由は次のように述べられている。

亜刺比亞半島ヲ含ミ地中海ノ西岸及南岸ニ亘ル尠大ナル諸地方ト本邦トノ貿易ハ近時頓ニ激増シ国交亦逐年敦睦ニシテ其ノ趨勢ハ将来益々旺盛ナルヘキニ拘ラス此地域ニ用ヒラルル亜刺比亞語ヲ教授スル機関ナキヲ以テ急速ニ亜刺比亞語部ヲ新設シ其ノ必要ニ備エムトス

アラビア語は、日本で唯一、大阪外語に設置され、開校以来、馬來語部と印度語部の兼

修語という形で授業が行われていたが、受講生減少のためか、その後の兼修語変更によって、馬來語部は昭和4年度から、印度語部でも昭和10年度から廃止されてしまった。丸5年のブランクののち、ようやく独立語部として復活したわけだが、この時期に改めて設置された背景に、同地方の石油資源確保をめざす海軍の強い要請があったといわれている。

#### <露語部増員>

昭和16年4月からは露語部定員が15人増員され30人となった。「ソ連邦ト本邦トノ関係ハ最近特ニ複雑且微妙ニシテ露語ニ堪能ニシテ其ノ事情ニ精通セル多数ノ人材ヲ養成スルノ急務ナルニ鑑ミ……」が理由であった。増員の背景にノモンハン事件の反省と、将来の対ソ戦準備の必要性があったことは明らかである。

昭和14年5月12日、満州国と外蒙国境地帯にあるノモンハンで満州、外蒙両国軍隊が衝突、両国の背後にある日ソ両軍が出動、ともに戦車、飛行機を動員する本格的な局地戦争を展開した。最大の仮想敵国であるソ連の実力をはかろうとする関東軍の威力偵察とされていたが、日本軍はソ連軍の機械化部隊によって壊滅的な打撃を受け、近代装備の劣勢を思い知らされた。しかし敗北の詳細は国民には知らされなかった。この年9月1日、ドイツがポーランドに侵攻、3日には英、仏がドイツに宣戦布告し第2次世界大戦が勃発したため9月15日、日ソ間に停戦協定が成立した。

#### <安南語>

昭和18年4月からは仏語部の兼修語に安南(ベトナム)語が加えられた。

「仏語部卒業生ニシテ仏領印度支那ニ於テ各般ノ業務ニ従事スル者勸カラサル上、最近世界ノ客觀的情勢特ニ東亜共栄圏建設ノ必然性ヨリ觀テコノ地方ノ本邦トノ関係ハ今後倍々緊密化シ該語部卒業生ノ活躍地トシテ最モ期待セラルベキト亦贅言ヲ要セズ、而シテコノ地方ノ人口ノ約7割ヲ占メ且文化的ニモ他ノ土着諸民族ニ優越スル安南族ノ用語トシテ広く安南、東京、交趾支那方面ニ通用スル安南語ヲ解セザルコトノ不便ハ既ニ過去ノ経験ノ教フル所ナリ」

週4時間の授業は外国人講師、範大秦が担当した。

日本国中が「紀元2600年」奉祝にわいた昭和15年、日中戦争は4年目を迎え解決の目途も立たず、米、みそ、砂糖、マッチなど10品目の切符制が実施され「ぜいたくは敵だ」が合言葉となる一方、ヨーロッパ戦線ではドイツの電撃作戦が成功、4月にはデンマークとノルウェーを制圧、5月にはオランダ、ベルギーに侵入し6月14日にはパリを占領した。6月10日にはイタリアが英、仏に宣戦布告し、6月18日にはドゴール将軍がロンドンから対独抗戦をよびかけ、自由フランス委員会を設立するが、親独ベタン内閣は22日、独仏休戦協定に調印、降伏し、英国は孤立する。日本にとっては東南アジアの英、仏、オランダなどの植民地獲得のチャンス到来と受け止められた。ドイツ軍の勝利に幻惑された陸軍は

「バスに乗りおくれるな」と、武力南進と日独伊枢軸強化を主張、この主張を取り入れた第2次近衛内閣は7月26日、「八紘一宇」の実現、「大東亜新秩序」の建設、「国防国家」の建設方針などを内容とした「基本国策要綱」を公表した。つづいて7月27日、大本営・政府連絡会議は「世界情勢の推移に伴う時局処理要綱」を決定、対米・英戦争を想定した武力南進政策が打ち出された。8月1日には松岡外相が「大東亜共栄圏」確立に関する演説を行い「皇道の大精神に則り、先ず日満支をその一環とする大東亜共栄圏の確立を図る」ことを「我国現前の外交方針」とすると言明した。

こうして9月23日、日本軍は北部仏印(仏領インドシナ=ベトナム)に進駐し、東南アジアへの武力進出の第一歩を踏み出す。これに対し米国は対日くず鉄全面禁輸を断行。9月27日には日独伊3国同盟がベルリンで調印され、日本と米、英、仏、中国、オランダなど連合国との対立はさらに激化した。翌昭和16年7月28日にはさらに南部仏印への進駐が開始されたのである。9月6日の御前会議は「帝国国策遂行要領」を決定、対米外交交渉の期限を10月上旬、戦争準備完了の目標を10月下旬とし、実質的に日米開戦を決定した。こうして12月8日、陸軍はマレー半島に上陸を開始、海軍はハワイ真珠湾攻撃を開始して太平洋戦争が始まった。

#### 〈ビルマ科新設〉

太平洋戦争の敗色すでに濃い昭和20年4月、ビルマ科が新設され、11語科となった。前年19年4月1日に大阪外国語学校から大阪外事専門学校と校名変更した外専は規程の上ではタイ科、ビルマ科、フィリピン科を設置することにしていたが、実際に新設された最初のものがビルマ科で、外専初の語科新設でもあった。

ビルマ科新設の理由は、記録に残されたものはないが、太平洋戦争緒戦における東南アジア、フィリピン、ビルマ制圧など南方新占領地拡大に伴う「大東亜共栄圏」構想の延長線上でタイ、ビルマ、フィリピン語科設置が計画されたことは明らかである。昭和17年9月1日、東条内閣の閣議は「大東亜省」の設置を決定、翌18年11月5、6日には東京に「大東亜共栄圏」内の諸国、新独立国の首脳を集めて「大東亜会議」が開かれた。日本の占領地に成立していた中国行政院長・汪兆銘、満州国総理・張恵景、フィリピン共和国大統領ラウレル、ビルマ首相バーモ、タイ国ワン・ワイタヤコン殿下が出席、「大東亜共同宣言」を採択して閉会したが、同じ11月22日からカイロではルーズベルト大統領、チャーチル首相、蒋介石総統の米・英・中首脳会議が開かれ、日本の戦後処理に関するカイロ宣言を採択。さらに11月28日にはルーズベルト大統領、チャーチル首相、スターリン・ソ連首相によるテヘラン会談が開かれ、ソ連の対日参戦などが協議されていたのである。

新設ビルマ科には23人が入学したが、ビルマ語教師が発足時から確保されていたかどうか不明である。昭和20年度教官別担任学科目及毎週授業時数資料によると、ビルマ語の教授は「新任甲」、傭外国人教師は「同丙」と記載されているだけである。教授陣が確保され

たとしても、すでに昭和20年3月の大空襲で校舎は全焼、生徒は学校をよそに勤労働員に明け暮れる毎日であったことを思えば、ビルマ科は誠に不幸なスタートを切ったと言わざるを得ない。

外語一外専は「満州事変」、日中戦争、太平洋戦争と、うちつづく15年戦争の波間に翻弄<sup>ほんろう</sup>された。次節以下で述べる卒業繰り上げ、勤労働員、学徒出陣など、学生生活の受けた影響は日本の大学、高等・専門学校すべてがそうであったといえるが、外国語という世界への窓口を数多く抱えつづけた本校の場合、ひときわ敏感に、しかも幅広く時代に反応せざるを得なかったし、国家もそれを要求するという宿命を負わされていた。

左翼運動全盛期には露語部というだけで官憲からいらまれたのは見当違いだったとしても、「満州事変」が起こると、蒙古語部がもてはやされ、日中戦争後は支那語部が人気の的となった。亜刺比亜語部新設には海軍の強い要請があったといわれ、露語部増員は対ソ戦をにらんだものだった。太平洋戦争突入後は、英語は「敵性語」と目の仇にされる一方で、馬來語部に志願者が殺到、安南語、ビルマ語が取り入れられた。

戦争と共に歩んだ外語一外専であったといっても過言ではないであろう。この節の最後に、太平洋戦争末期に入学した八木浩(D23・大阪外国語大学教授)が『きんきら50年』に寄せた「窓のない学窓の思い出」を引用したい。

上本町の外語に入学したころ、まだ空襲もなかった。なつかしい古い校舎で、しばらく勉強することができたのである。私達はおそらく辞書を買えた最後の学生たちだったと思う。一冊の辞書を買うのにもひどく困難だった記憶が残っている。二回生が歓迎してくれたが、先生の号令で握手攻めの形だった。みるみるうちにその二回生も数がへっていった。三年生はもう始めからいなかったように思う。いちばん印象深く残っているのは、半年もなかったかと思うドイツ語の授業である。それはミリタリズムのドイツ語であった。山本茂先生はなんの段階もふまずに数日で全強変化動詞を丸暗記させ、まちがえるとひどい目にあった。シラーのむつかしい詩を朗読、暗記させられて、女性の声まで出すけいこもあった。それこそなんの科学性もない精神主義で、暗記また暗記であったと思う。今日の学生なら、必ずストライキでこたえることだろう。熊谷俊次先生の文法はほとんど朗読方式で進み、一人一人が読み終るやいなや、練習問題があたった。へまな質問をすると、ひどく叱られ、答えてももらえない。おそろしく速いのだが、感心にみんなくいさがっていた。ポーネル先生はキャッチボールでもするように、何度も会話をくりかえされ、学生はいいやいやでも口を動かしつつげざるをえなかった。強制また強制の連続だった。今日の学生なら一日で逃げ出すだろうが、当時は席を失ったらさいご、工場労働がまちかまえていたのである。学校を休むものなどまれであったと思う。このような軍国主義の語学は社会の軍国主義と即応して、少しも当時は異様ではなかった。それはわれわれをまちかまえていた軍隊と戦場への準備を思うに、むしろ親切だといえる面すらあったのかもしれない。そ

して語学を考える場合、むしろある段階ではそれが必要でさえあった。社会は平和に、学問は厳しく、と思うことがその後しばしばである。

半年もたたぬうちに、工場へいかななくてはならなくなった。大阪のものすごい兵器工場や造船所にかよったが、それも長くはなく、こんどは奈良や和歌山へ勤労働員された。稲刈りのアルバイトは学園生活のなかに楽しさを加えたように思う。今でも学問と労働は両立するものだ、と私は考えている。しかしそれも長続きせず、こんどは全学生が名古屋まで動員されてしまった。もはや学窓は完全になくなり、ひどい戦場であった。愛知航空機株式会社で神風機の鋸打ちを毎日やったが、爆撃をうけつづけ、工場はふきとび、山中の飛行場へおいやられた。ここでも米軍機が飛ぶ下でいのちがけであった。その間に大阪の町も、母校もすっかり灰になっていたのである。私の家も焼け、妹が撃たれて死んだ。灰になった名古屋から、灰になった大阪へもどってきたが、外語はみじめな廃虚だった。やがて空白ののちに、高槻の工兵隊の兵舎あとの授業が始まるのである。ドイツ語の文法の3分の1も知らず、やがて卒業ということになった。なんの思想もなく、軍国主義のパンフしか読めず、いたずらな反抗心のみを抱いて、青春があつというまにすぎていった。勉強がしたい、一からやり直さねばならない、およそこういう筋書きは、私の世代の学生に共通だったにちがいない。しかもそういえる人はいちばん幸福な人といえるであろう。「きけわだつみの声」など読む人は、はるかにはかない、かげろうの生命のことを悲しむことであろう。それはまた多くの外語の先輩の声でもあった。

外語の戦中カリキュラムは時代の流れにおされて、侵略の語学となっていた。そのことは日本中の大学にいえることであるが、まだ学問の場として未発達な語学学校にとっては、ちょうど青年期をたたきつぶされたようないたでではなかったかと思われる。語学教材にはヒットラーのことが日本中使われており、外語においても例外ではなかった。それをとりまく帝国主義イデオロギーが、倫理や歴史や経済や軍事教練に満ちていた。もちろん文法や国文学やドイツ文学の古典には、そんなものがみられないといえようが、軍国主義と対立的な要素はかけらも許されなかったのである。社会の全体に対するこのような無批判性は、結局、全体を国家の方策に屈服させてしまわざるをえなかった。そのことは日本のどの学校にもあてはまる。しかし外国語学校校歌の誇らしげなりフレインだけが私たちを絶望の底から勇気づけたことはたしかである。軍歌乱れとぶ中で、あの歌がみんなのほこりであった。私たちはまた、押入れの中やトイレの中で、ひそかにろうそくの光でも、ゲーテやシラーを読んで、ドイツ語で暗記し、そこに時代の闇の中に射す光を見出したように思ったものである。(後略)



勤労奉仕（樞原神宮）

### （3）勤労働員と学徒出陣

#### 〈勤労奉仕〉

日中戦争後、戦時状況に対応するため教育体制の上でとられた施策の第一歩が勤労奉仕作業実施であった。文部省は昭和12年7月31日「支那事変ニ関シ執ルヘキ措置ニ関スル件」を通牒し、「国民拳ツテ愈々奉公精神ヲ振作昂揚スルト共ニ派遣応召軍人ヲシテ後顧ノ憂ナカラシムルコトハ刻下極メテ緊要ノ事」として、児童・生徒に応召軍人遺家族への援護と勤労奉仕を指示した。この勤労奉仕は、戦争遂行のため上からの国民統合を推進しようと8月24日決定された政府の「国民精神総動員実施要項」の重要な運動目標の一つとなった。

昭和13年4月には「国家総動員法」が公布されるが、文部省が従来の勤労奉仕を集団的勤労作業と称し、学校教育の一環として行うよう指示したのは同年6月9日付「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」の通牒による。同通牒は「集団的勤労作業運動ハ実践的精神教育実施ノ一方法トシテ現時ノ教育刷新上大ナル示唆ト意義ヲ有スルハ勿論特ニ現下ノ時局ニ処シ極メテ緊要ナルコトト認メラル、ニ付テハ」として要項を示し、実施期間は夏季休暇の始期、終期その他適当な時期に、おおむね5日間と定め、作業種目は

- 1、校庭、農場、農園、演習林等学校設備ニ関スル手入レ其ノ他ノ作業
- 2、応召軍人ノ遺族家族ニ対スル農事家事等ノ手伝
- 3、神社寺院ノ境内地ノ清掃、設備ノ修理
- 4、都市防空設備、公園、運動場其ノ他公共設備ニ関スル簡易ナル作業
- 5、軍用品ニ関スル簡易ナル作業
- 6、開墾其ノ他ノ農業作業
- 7、道路改修、埋立其ノ他土木ニ関スル簡易ナル作業
- 8、其ノ他

が挙げられた〔福間敏矩『学徒動員・学徒出陣』〕。

また「参加者全員寝食を共にして規律節制の内に訓練ある生活を体験せしむること」と

して当然、教職員の参加も求められた。このような集団勤労作業や奉仕は、当時ドイツのナチス党主導で行われていたアルバイト・ディーンスト(労働奉仕)運動の影響によるものであった。

この勤労奉仕は、外語でも「事変下の学生は唯漫然と夏休みを過ごすべきにあらず」として昭和13年から始まり、夏休みが始まってすぐの7月11日～16日は西洋語部、夏休みが終わる前の9月6日～10日は東洋語部が、校舎内外、運動場の清掃と花園運動場の草取りを行っている。(面積約3万3,000平方尺の花園運動場は前年の昭和12年7月31日、大阪府中河内郡英田村＝現・東大阪市松原南1-1-46＝に新設された。買収の経緯は、第2編でふれる)

翌昭和14年3月31日、文部省は「集団勤労作業実施ノ件」により、集団勤労作業を「漸次恒久化」し、「夏季又ハ冬季ノ休業ノミニ限ラズ隨時之ヲ行ヒ」「正科ニ準ジテ之ヲ取扱フコト」を指示した。外語でも1月26日「外語700健児打って一丸となり榎原神宮の勤労奉仕に参加す。校長の聖諭打下をきっかけとして建国ゆかりの地に奉仕隊旗をひらめかして生徒一同は顔に汗して終日奉仕した」〔『P・N・S』10号〕のを皮切りに、▽5月6日、住ノ江公園に造営中の大阪護国神社敷地工事 ▽9月6日～9日、校内清掃、大阪護国神社敷地工事、花園運動場草取り ▽9月30日、榎原神宮外宮造営工事一と、勤労奉仕の回数もふえてくる。

またこの年夏には、「興亜青年勤労報国隊」の派遣が開始された。同隊は「東亜新秩序の建設は青年の大陸認識と其の実践的奉公とに俟つこと大なるものあり、仍て本年夏期に於て一般青年並に学生生徒を大陸に派遣し、現地に於ける国防建設文化工作並に内地に於ける農業生産拡充計画遂行上必要なる飼料の生産等を行はしめ、之等の集団的勤労訓練を通じて興亜の精神を体得せしむると共に、直接生産並に建設等の事業に協力せしめんが為」組織されたもので、外語からは通訳要員として小泉名美男(M16)ら22人が参加している。一行は7月2日、全校生徒による盛大な壮行式のあと東京へ向かい、内原訓練所で1週間の訓練を受け神戸から輸送船で塘沽へ。ここから北京、石家荘などを経て8月下旬帰国の途についたが、往路の船上ではノモンハン事件での不利な戦況を知らされ、復路では独ソ不可侵条約締結を見た平沼内閣が「欧州情勢複雑怪奇」と声明して総辞職したことを聞かされた小泉は「何か深みに引きずりこまれるような感じが若い私の胸をえぐった」〔『きんきら50年』〕と書いている。

昭和14年は戦時立法の多い年であった。4月には脚本の事前検閲やニュース映画の強制上映を決めた映画法、米穀配給統制法が公布され、6月には国民精神総動員委員会が学生の長髪禁止、遊興営業の時間短縮、ネオン全廃、パーマメント廃止などの生活刷新案を決定。9月1日は初の「興亜奉公日」と決められ、以後毎月1日に実施、バー、料理屋などは酒不売で休業、ネオンも消えた。この日、ドイツ軍がポーランドに進攻、第2次世界大戦が始まった(興亜奉公日は昭和17年1月8日から、太平洋戦争完遂のため毎月8日の「大

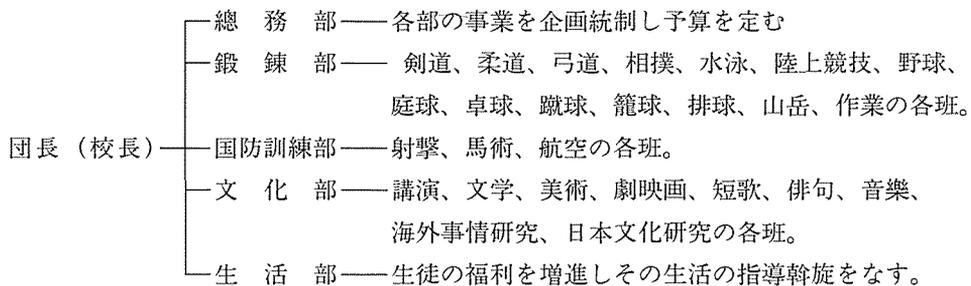
詔奉戴日」に切り換えられた)。10月1日には厚生省が初年度体力章検定実施を決め、15～25歳の男子が走・跳・投・運搬・懸垂の5種目について体力テストを受け、初級・中級・上級の判定を受けることになった。外語では10月18、19両日、上八校庭と花園運動場で全校生が検定を受けた。

昭和15年の勤労奉仕には食糧増産が加わってくる。5月に大阪・平野区平野の休閑地に本校作業場が設けられ、毎週2回各学年が交代でトウモロコシや大豆を栽培した〔『P・N・S』12号〕。文部省は昭和16年2月8日には「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」を示し、1年を通じ30日以内は授業を廃して作業にあてることができ、その日数は授業をしたものと認めるとした。花園運動場周辺も耕やされ、サツマイモが植えられた。

### 〈校友会解散・報国団結成〉

昭和16年2月11日、紀元節式典のあと、従来の校友会を解散して新たに報国団の結成式が行われた。校友会の改編は直接的には前年9月17日の高等学校長会議における文部大臣指示事項によるもので、報国団への組織替えの理由は「学校ガ教学ノ本義ニ基ク修練道場タルノ体制ヲ確立シ学校長以下教職員一体トナリ生徒ノ全生活ヲ通ジテ其ノ教導ノ任ニ当リ教育ノ全一的効果ヲ期スベキ」であり、そのためには「校友会其ノ他校内団体ヲ再組織シテ現下重要ナル諸種ノ修練施設ヲ加ヘ」た団体として「而シテ此ノ団体ノ指導精神トスルトコロハ自我功利ノ思想ヲ排除シ報国精神ニ一貫スル校風ヲ樹立セントスルニ在リ」というものであった。準則として示されたものは、組織として総務部、鍛錬部、国防訓練部、文化部、生活部を置き、たとえば鍛錬部は「勤労奉仕作業、剛健旅行、合宿訓練等ヲ加ヘテ之ヲ再組織シ専ラ行的ナル身心鍛錬ヲ為ス」とされた。要するに国策遂行のため一個の教育団体を設定し、学校長の命令系統の下に一元的に運営しようとする方式であり、勤労奉仕や防空訓練などに直接的に対応できるよう学校運営の軍事的再編〔高橋佐門『旧制高等学校全史』〕を意図したものと見える。これ以後、各大学の学友会、高等・専門学校の校友会は、すべて報国団に編成替えされ、8月には文部省に学校報国隊本部が設けられた。

外語の報国団組織も別図のとおり、準則に示されたとおりのもので、鍛錬部に含まれて



いた野球、庭球などの球技も、勤労働員の強化に伴って、事実上できなくなってしまう。5月1日には報国団最初の鍛錬行事が実施されたが、1、2学年は花園運動場までの行軍、3学年は信太山演習地で今田配属将校指揮による3日間の訓練であった。〔『P・N・S』13号〕

#### <勤労働員>

昭和16年7月28日、文部省は「青少年学徒国防事業協力ニ関スル件」を通達し「防空関係作業、飛行場ノ補修、軍需品ノ製造修理其ノ他国策遂行上緊要ナル国防事業」に関しての勤労働業も正科に準じて取扱うことになった。10月16日には勅令924号により、大学・専門学校の修業年限短縮・繰上げ卒業の措置が打ち出されるが、修業年限短縮については、のちに触れる。この年12月8日、日本は米・英に宣戦布告、太平洋戦争に突入するが、戦局の進展につれて軍の動員が増加する一方で、産業界の労務事情が逼迫<sup>ひつぱく</sup>、軍需産業は深刻な人手不足に陥り、以前にも増して学徒の労働力が注目されるようになってきた。このため政府は昭和18年6月25日「学徒戦時動員体制確立要綱」を閣議決定した。その方針は「大東亜戦争ノ現段階ニ対処シ教育錬成内容ノ一環トシテ学徒ノ戦時動員体制ヲ確立シ学徒ヲシテ有事即応ノ態勢ヲラシムルト共ニ之ガ勤労働員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ至誠ヲ傾ケ其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシメントス」るものであった。これまでの集団勤労働業は勤労働員と改められた。10月12日には、さらに「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が閣議決定され、勤労働員は「在学期間中一年ニ付概ネ三分ノ一相当期間」実施することとなる。16年2月に勤労働業の期間を30日とした基準はここで破られた。昭和19年1月18日には「緊急学徒勤労働員方策要綱」が決定され「動員期間ハ一年ニ付概ネ四カ月ヲ標準トシ且継続シテ」行うとした。前年10月の「一年ニ付概ネ三分ノ一」の線と同じものであるが、動員期間が断続するものではなく、継続するものとされたのが著しい特色であった。

#### <通年動員>

昭和19年に入ると戦局はますます不利となり2月25日、政府は「決戦非常措置要綱」を決定し、原則として中等学校以上の学徒は「總テ今後一年、常時之ヲ勤勞其ノ他非常勤務ニ出勤セシメ得ル組織態勢ニ置キ必要ニ応ジ」て動員することとした。この決定を学校の程度・種類に応じて具体化したものが3月7日の「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」であり、動員期間の限度を取り払い、年間を通して行う通年動員が決定された。

昭和20年のある授業 「太平洋戦争の戦況が窮迫するに伴って、われわれ22回生は入学後1年半教室で学んだだけで兵器造りに動員されたが、その頃から一人二人と学徒出陣で戦場へもぎとられ、敗戦の年昭和20年に入ると、40人の英米科も私を含めて三人しか残っていなかった。残留者は週日は陸軍工廠の旋盤工場

へ通っていたが、日曜だけは上八の教室へ帰って授業を受けた。

その日曜の授業に他の二人は姿を見せなかった。私がひとり前列窓側の陽あたりのよい席に座っていると、吉本正秋先生が入ってこられた。黒い表紙の出席簿を開くと、東、荒井……とアルファベット順に、全員がそろっていた頃と同様に出席をとっていかれた。……返事したのは勿論私だけだった。吉本先生はそれから森本<sup>(ママ)</sup>(森沢?)先生からの白い巻紙の手紙をひろげ、所用のため大阪を離れているので誠に申訳ないが授業にこられない、皆さんによろしくお伝えしてほしい旨の内容を、やはり全員に聞かせるように大きな声で読みあげられた。吉本先生は手紙をしまうと、戦地にいる皆さんがぜひ元気でいてほしいと、これも話しかけるように言われて『今日は早いですが、これで授業を終わります』と丁寧に礼をされ、寂しそうに出て行かれた。

それから間もなく、3月の空襲で校舎は焼失、日曜の授業もなくなって、残留のわれわれも戦場へ駆り出された」〔高坂旭(E22)『きんきら50年』〕

#### <授業停止>

米軍による本土空襲が激化し敗色濃い昭和20年3月18日、政府は「決戦教育措置要綱」を決定し「国民学校初等科ヲ除キ、学校ニ於ケル授業ハ昭和20年4月1日ヨリ昭和21年3月31日ニ至ル間、原則トシテ之ヲ停止ス」ることとした。5月22日には「戦時教育令」が公布された。この勅令には特に上諭が付せられたが、上諭は教育勅語を引用して「一旦緩

監督教官出動割当表 (自)10月1日～(至)10月31日

19.9.27

日	曜	造兵廠	日立造船所	日	曜	造兵廠	日立造船所
1	日	2年東洋語部授業	国 沢	17	火	山本磯	和田
2	月	田 中	峯 田	18	水	沢	山本健
3	火	吉 本	和 田	19	木	国 沢	—
4	水	伊地智	白 井	20	金	熊 谷	森 沢
5	木	林 昂	—	21	土	山本健	田 中
6	金	金 子	吉 野	22	日	—	林和夫
7	土	山本磯	庭 田	23	月	金 子	林 昂
8	日	—	小 田	24	火	峯 田	田 中
9	月	束 田	長谷川長	25	水	山本健	上 田
10	火	稲 村	森 沢	26	木	白 井	2年西洋語部授業
11	水	住 田	山本茂	27	金	内 藤	林和夫
12	木	長谷川信	2年西洋語部授業	28	土	伊地智	庭 田
13	金	小 田	和 田	29	日	—	長谷川信
14	土	構 松	内 藤	30	月	吉 田	構 松
15	日	2年東洋語部授業	束 田	31	火	和 田	佐 藤
16	月	吉 野	吉 田				

急ノ際ハ義勇奉公ノ節ヲ効サンコトヲ論シ給ヘリ」と前提し「今や戦局ノ危急ニ臨ミ朕ハ忠誠純真ナル青少年ノ奮起ヲ嘉シ」とあり、学徒に対し最後の奉公を求めたものであった。〔文部省『学制百年史』〕

本校でも年を追って勤労働員が強化されていったが、昭和20年3月の大空襲で校舎が被災、書類も焼失したため詳しい実態はわからない。同窓会50周年記念誌『きんきら50年』や『大学70年史資料集』の回想記に頼らざるを得ないが、19年に入ってから工場関係では淀川製鋼所、日立造船所、陸軍造兵廠、食糧増産では奈良県波多野村、和歌山県小倉村での稲作労働など、翌20年は陸軍造兵廠や名古屋市・愛知航空での航空機製造に動員されている。愛知航空への動員では椎野宏一(支那科1年)が3月12日の名古屋大空襲の犠牲となった。

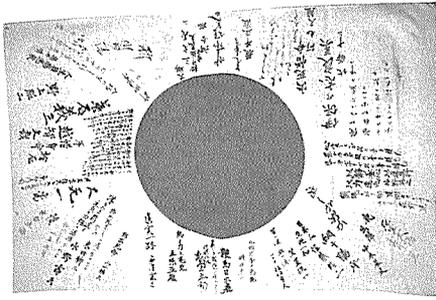
別図は18年入学の22回生が動員されていた19年10月中の造兵廠、日立造船への監督教官出勤割当表である。勤労働員の間を縫って隔週1回授業が行われていたことがわかるが、この時代は教官も学問の伝達者より労務管理者の役割の方が大きかったようである。

#### <修業年限短縮・繰上げ卒業>

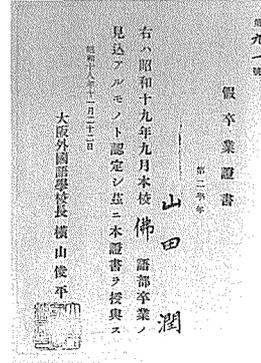
学徒を労働力として利用する勤労働員がいろいろな形で進められる一方で、直接兵力として補充するための学校の修業年限短縮、さらには学徒への徴兵延期制度廃止による学徒出陣も進められた。

まず昭和16年10月16日、勅令924号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」により大学、高等・専門学校の修業年限は「六月以内之ヲ短縮スルコトヲ得」とされ、文部省は同日省令をもって大学・専門学校の修学年限を3カ月短縮し、17年3月卒業予定者を16年12月に繰上げ卒業させることとした。17年度からは大学・専門学校のほか高等学校・大学予科も6カ月短縮して9月に卒業させることとした。(高等学校・大学予科と中学校については学制を改め、18年から前者は修業年限3年を2年に、後者は5年を4年に短縮、18年4月入学生徒から施行した)

修業年限短縮・卒業期繰上げについては文部省から9月5日、学校あて事前に内報があったが、学校側の驚きは大きかった。相沢正美教授によれば「正に青天の霹靂へきれきの如きショックを受け、事態の容易ならざるを知らしめられた。しかし、まだ日米開戦とまでは予想し得なかった。ともかく急に学科課程の再編成にとりかかり時間割も作り、直ちに2学期中に全科目を終了するように陣形を整えた。学生側に与えたショックも一通りではなかった。誰も繰上げ卒業を喜ぶものはおらず、ただ時局の推移のただならぬのを憂えるのみであった」〔『扉』9号〕という。こうして繰上げ卒業者のための臨時徴兵検査が学校に設けられた検査場で12月1日から20日まで行われ、合格者は翌17年2月から入営することとなった。暮れも押し詰まった12月26日、本校第18回生が卒業していった。わが国教育史上初の繰上げ卒業であり、3月に第17回生を送り出したのにつづく年2回の卒業式であっ



「日の丸」の旗に寄せ書き



仮卒業証書

た。独語部会誌『我等の独逸語部』は「急迫する世界情勢は青年学徒の力と熱を要求する」として、この空気を次のように伝えている。

本年(16年)度卒業は12月末と決定。一方、12月1日から20日迄の間に於て臨時徴兵検査が行はれる。これに合格したる者の入営は明年2月。卒業生は忙しい就職試験、卒業送別会、試験、検査、卒業、就職、入営—それこそ盆と正月と暮が二重、三重になって押し寄せた感じ。だが、マゴついてゐる者など一人も居ない。「さあ鍛錬だ」とグラウンドに飛び出し、又山を野を歩き入営用意を急ぐものが出る。又「軍人に賜はりたる勅諭」を既に謹誦してゐるもの。頼もしい風景である。

#### <臨時補習科>

この修業年限短縮は、卒業者を早期に兵役につかせることによって戦局の進展に伴って不足してきた軍の将校、幹部候補生要員を急いで確保する必要と、上級学校進学者以外は一日も早く社会に送り出し、労務不足を解消するという二つの狙いを持ったものであったが、専門学校繰上げ卒業者のうち大学進学志望者については、大学入学が4月になるので、1月～3月までの間は各学校に「臨時補習科」を設けた。本校でも12月27日、文部大臣の許可を得て臨時補習科学則を新たに制定、外国語(英、独、仏のうち1科目選択)9時間はじめ経済、法律などを含む週24時間の授業を行った。

この年、専門学校から大学への進学が制限された。前出『我等の独逸語部』は、臨時補習科開設に触れて「今年(16年)3月迄は本校は何等上級進学に制限を受けなかったのであるが、今年は愈々本校全部で18名だけ許可といふ本省のお達し。これは過去5年間の大学入学者数の平均数の由。所謂『実績』である。さて我がドイツ語部は18名中の6分の1を占めて即ち3名が上級進学の校長先生の推薦状を受ける事となった」と書いている。

#### <学徒出陣>

修業年限短縮措置につづいて昭和18年には学徒徴集(徴兵)延期制度が廃止され、在学のまま応召、入営となる、いわゆる学徒出陣が始まる。

大正14年「陸軍現役将校学校配属令」により学校教練が導入されたのに伴い、在学中の学生生徒は一定年齢まで徴兵が延期されることになり、昭和2年の「兵役法」では中等学校以上の在学者は27歳までの徴集延期が認められていた。この在学徴集延期はその後、戦時体制の進展とともに改められ昭和14年には26歳となり、さらに16年10月16日には、先に述べた修業年限短縮とともに学校種類別の徴集延期期間短縮が打ち出され、専門学校は22歳(早生まれ)～23歳(遅生まれ)までとなった。そして18年10月2日、勅令第755号「在学徴集延期臨時特例」が公布され「当分ノ間在学事由ニヨル徴集ノ延期ハ之ヲ行ハズ」と、これまでの徴集延期は停止された。そして在学中に徴兵年齢(20歳)に達していた者は直ちに臨時徴兵検査を受け12月1日に入営させられた(ただし大学、高等・専門学校(理、工、医、農、教員養成校)は入営延期が認められた)。これら臨時徴兵検査を受けて入営する生徒のうち、翌年(19年)卒業見込み者に対しては18年11月に仮卒業証書を授与し、翌年9月に卒業させる措置もとられた。在学徴集延期について12月24日には「徴兵適齢臨時特例」により徴兵年齢は1年繰下げられ、19歳となる。

昭和18年10月21日、東京・神宮外苑競技場で文部省、学校報国会共同主催の出陣学徒壮行会が行われた。雨の中、銃を肩に水しぶきをあげて分列行進するニュース映画の鮮烈な映像は60歳以上の日本人の脳裏に焼きついて忘れられないものであろうし、戦後も昭和史の一断面として、折にふれてテレビで放映されているから戦後世代にもなじみ深いものと

きけわだつみのこえ 網干陽平、昭和19年4月外専マライ科入学、20年7月入営、同年8月8日、日本海羅津丸上にて戦死、18歳。

「入学の日はずなわち工場へ行く日であった。入学式をすませて運動場で工場動員の班分けをしている時、網干君は『語学の勉強はいつ始まるのか』と真剣に私に詰め寄ってきた。返す言葉は容易に見つからなかったが、工場に行っても出来るだけ多くの時間を授業に割くことになっている旨を告げて、やっと納得してもらった。しかし工場の寮での授業も極めて不十分に行われたきりで、やがて多くの学生は入営＝戦死の途をたどっていった。網干君もその一人であったが、入学の日、学問への情熱を示した彼の真剣なまなざしは、私にはありありと思ひ浮かべられる」〔白井正『扉』第11号〕

彼の手記は『きけわだつみのこえ(日本戦没学生の手記)』(東京大学出版会)に収録されている。

「南進の夢儂なく消えて敵の上陸に競々としている。マライ語も英語も棄ててしまい、一介の事務員として兵士の卵として平々凡々な日々を過ごす、この心持ち。特別幹部候補生は歩兵を希望した。命は惜しい。然し俺は死なねばならぬ時は徒らに興奮などせず従容と死ぬる自信はある。また諦められる。……死ぬはする。然し死ぬない。只成るがままの他はないのだ。……俺は死んだら可憐なハコベ草の花になりたい。他には知られず、権力家勢力家の醜い闘争や惨めな最後を外に、満身に神の恵を享受しつつ楽しみつつ静かに嬉しく死んで行きたい」

なったシーンであろう。大阪での大学高専出陣学徒合同壮行式は11月16日、中之島公園で  
挙行された。

「商大、関大、大高、浪商、外語、大阪専門、昭和高商の出陣学徒〇〇名は執銃帯  
剣姿で集合、征途を送る残留男女学徒19校1万5,000、男子は教練姿、女子は制服制帽  
に身を固め、送るもの送られるもの、皇国に殉ぜんとの心はただ一つ。餞けする激励  
の辞、これにこたへる学徒の決意、『海ゆかば』の斉唱と奏楽にのる感激につぐ堂々の  
分列式、すべてが征く学徒に皇国に生まれた幸をしみじみと感ぜしめる荘重な門出の  
式であった」〔『毎日新聞』〕

外語独自の壮行式は、これより先11月11日に行われている。創立記念式について支那語  
部2年・鈴木正三らの壮行式があり、式後、出陣学徒全員と残留学徒200人が男山八幡宮に  
参拝、武運長久を祈った。11月22日には出陣学徒に対する仮卒業式が行われ、独語部2  
年・田村幸雄が決意を述べている。

勤労働員によって学校から工場へ追われ、さらに学徒出陣で戦場へ駆り出されるのが日  
常化するに及んで学校教育は息絶えた。最後の決戦段階突入を告げる昭和20年5月の「戦  
時教育令」は「まさに学校の教育的玉砕」〔文部省『学制百年史』〕であった。

## (4) 外語から外専へ

昭和19年3月28日の勅令第165号により文部省直轄諸学校官制が改正され、大阪、東京両  
外国語学校とも4月1日から校名を外事専門学校と改められた。これに伴って4月26日  
には文部省令第29号により官立外事専門学校規程が定められた。

### 〈大阪外事専門学校〉

昭和16年10月の修業年限短縮、同18年6月の学徒戦時動員体制確立要綱などで戦時教育  
体制が強化されてきたが、18年12月24日には、前にも述べた「教育ニ関スル戦時非常措  
置」(10月12日閣議決定)に基づく「学校整備要領」が文部省から発表された。同要領は  
(1)教育内容の徹底的刷新と能率化(2)戦争遂行力増強のための技術要員養成などを掲げ、  
大学、高等・専門学校全般について理科系の増員・拡充と文科系の減員・整理・転換を進  
める一方、要領と同じ日に発表された徴兵適齢1年繰下げに合わせ、19歳の徴兵年齢まで  
に専門学校教育をほぼ終了できるように入学資格、修業年限を改める措置をとった。

こうして当時の官立高等商業学校11校のうち彦根、和歌山、高岡の3校は工業専門学校  
に、長崎、名古屋、横浜3校は工業経営専門学校に転換させられ、残った小樽、福島、山  
口、大分、高松の5校も「商業」の文字をはずされ、経済専門学校と名称を変更させられ  
た。商業は非生産的な私利追求行為であり戦力増強に貢献しないという当時の政府の考え

方を反映した校名変更であり、「外国語」という言葉さえ忌避されたのか東京、大阪両外語とも「外事」専門学校と名称変更させられてしまった。さらに東京外専はこれまでの修業年限4年を3年に短縮され、大阪外専でも入学資格を中等学校4年修了以上とすることで徴兵年齢での専門学校教育終了体制を整えた。

### 〈皇国ノ道ニ則リテ〉

各種官立専門学校規程の制定に伴って、専門学校はすべて一律に規則第1条に「皇国ノ道ニ則リテ」という文言を入れるよう求められた。「国際的実務ニ従事スヘキ者ヲ養成スル目的」とした大阪外語学則は廃止され、外専規則第1条は「専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及其ノ言語ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トス」と変えられ「皇国教育」が押しつけられた。外事専門学校規則制定に際しては、文部省専門教育局長から雛形ともいべき準則と留意事項が細部にわたって通達され、ほとんど文部省指示どおりに規則がつけられたのである。

校名変更に対し東京外語では強い反対があったと伝えられ、大阪外語でも横山校長以下、だれもが感服しなかったといわれる。「ガイゴ」の響きに憧れていたのに「ガイセン」に変わって「げっそりした」という新入生も多かった。一方、同年6月7日付で陸軍司政長官から本校校長に就任した尾崎卓郎は、就任あいさつの中で「外語なら断わったのだが、外専だから一層重大意義を感じて受諾した」との意を述べた〔「在職27年の回顧と今後の方針」沢英三『アーヤ学会会報』15号〕という。名称だけでなく、教育目的の根本的な変容を感じ取っての所感であったろうか。

### 〈「語部」から「科」に〉

外専になって、本科は東洋語部、西洋語部という分類から第1部、第2部に分けられ、これまでの「語部」も「科」と呼ばれるようになる。第1部は支那科、蒙古科、タイ科、マライ科、インド科、ビルマ科、フィリピン科、イスパニヤ科、アラビヤ科(ただし、タイ科、ビルマ科、フィリピン科は規則に名前が挙げられただけで、実際の設置はビルマ科が昭和20年4月、他はいずれも戦後となる)、第2部はドイツ科、フランス科、ロシア科、英米科の計10科。支那、蒙古、英米科を除き、従来漢字表記だったものがカタカナ表記に変わったほか、従来は西洋語部に属していた西語部がイスパニヤ科として第1部に入り、また西洋語部のトップに置かれていた英語部が英米科となって第2部の最末尾に置かれたのが目立つ。「敵性語」として国鉄駅から英語を追放したり、たばこの「バット」「チェリー」を「金鶏」「桜」と改名した排外国粹主義は、太平洋戦争突入後さらに強まり、「鬼畜米英」と称するだけでは足りず、けもの偏をつけた「狹狹」まで登場したこの時代の空気を示すものであろう。長岡十四雄(D19)は、通学の市電の中でドイツ語の予習をしていたら、乗客に「敵性外国語の本を読むな」と言われ「オッサン、これドイツ語やで」と答

えると「スンマヘン」と相手があやまったという笑い話のような事実を報告している。〔『70年史資料集』〕 イスパニヤ科の第1部入りは、今世紀初頭までスペイン領であり、太平洋戦争後は「大東亜共栄圏」の一員とされたフィリピンを念頭に置いたものであろう。

「我々の関心は今や漸く必然的に中南米から比律賓<sup>フィリピン</sup>へ転じて参りました。大東亜戦争の推移が新しい天地を我々に提供するに至った今日、この方面の研究調査は我々の新しい責務であります。比島に於ける皇軍の作戦、宣撫工作、建設工作等に絶対必要なものは我々の語学に依る協力であります」〔『P・N・S』13号〕という一文が時代の雰囲気をよく伝えている。

授業内容も変わった。別表は第1部の学科目と授業時数であるが、地理、歴史、民族及び文化、思潮史、政治、宗教史を含む「外事」が新しく学科目に加わったほか、教練も第1学年では総授業時数の15%という高率を占めるようになる。

第1部学科・授業時数

学 科 目	第1学年授業時数	第2学年授業時数	第3学年授業時数
道 義	70	35	35
国 語	70	70	— ( 70)
教 練	196	112	112
体 操	70	70	70
外 国 語	560 ( 700)	560 ( 665)	525 ( 630)
外 事	105 ( 70)	140 ( 245)	245 ( 315)
地政概説	—	—	70
経 済	140 ( 70)	140 ( 70)	210 (—)
法 律	70 ( 105)	70 (—)	— (—)
産業技術	70 (—)	70 (—)	— (—)
△教育学	—	—	70
計	1,351	1,267	1,267 (1,302)

(注) △印は選択、 ( ) は第2部の時数、 ( ) なきは同一

#### <授業ヲ行ハザル日>

外語学則では年中休業日を日曜日、大祭日、祝日、創立記念日と春・夏・冬季休業日と定めていたが、外専規則は「授業ヲ行ハザル日左ノ如シ」として、祭日、祝日、創立記念日は従前どおりだが、新たに「学校長ニ於テ必要ト認ムル場合ニハ日曜日、並ニ7月末、8月中、12月末、1月始、3月末其ノ他ニ於テ授業ヲ行ハザルコトアルベシ」とした。すでに学徒の勤労通年動員が決定しており、また学校休業日の変更は文部大臣の許可を要しないという文部省令を受けての規則制定であった。

### 〈消えた岸和田疎開〉

外語末期の昭和19年春ごろ、大阪府南部、岸和田市への学校疎開が検討課題にのぼる。すでに18年12月21日「都市疎開実施要綱」が発表され、19年1月26日には東京、名古屋に改正防空法による疎開命令が出された。疎開の目的は都市人口を分散させ空襲による爆撃の被害を少なくするためであり、連合軍の猛爆でハンブルクを徹底的に破壊されたドイツがベルリンの人口疎開に踏み切った教訓に学んだものであった。以後全国主要都市で生産にかかわりのない老人・子供を都市から撤去させる人口疎開のほか、軍需工場などの生産疎開、延焼を防ぎ消火活動を容易にするための建物疎開が進められた。大阪でも1月19日、府都市疎開実行本部が設置され、重要施設周辺にある密集建物の強制取りこわしが始まり、この年夏以降、国民学校初等科児童の集団疎開も本格化する。

本校でも学校移転実行委員会をつくり、岸和田市当局者との協議や移転予定地の視察も行ったが、結局は延期と決まる。この間にどんな経緯があったのか、詳細は不明である。

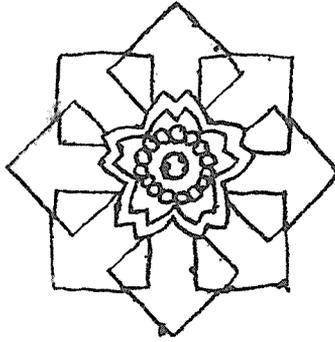
『岸和田市史』も「学校を誘致したいという動きは高等教育についても古くからあった。それが具体的になったのは、戦時中の大阪外事専門学校誘致の運動である。昭和19年、私立南海商業学校が廃校になったとき、当時校舎が狭くて困っていた大阪外事専門学校を岸和田市に誘致しようとした。具体的には、市立実践女学校を南海商業学校跡に移し、同女学校校舎を外事専門学校に充てるという構想で、市も意欲的であったが実現しなかった」と記すにとどまっている。

外大庶務課保存の古い資料、昭和19年8月16日付「学校移転実行委員会規程廃止ノ件」には「岸和田市へノ本校移転一時延期トナリタルニ付標記規程ノ廃止相成度……」とある。この時、移転が実現しておれば、その後の外専—外大の歩みはどうなっていたであろうか。上八に居残った校舎は、あとで述べるように翌20年3月の大空襲で焼失してしまう。

### 〈幻の新徽章〉

「敵性語」のことは前にも述べたが、昭和19年10月ごろ、文部省からOとLを組み合わせた「敵性文字」を使っている本校徽章を他の意匠に変更せよという訓令が届いた。以下、白井正・元教授の一文を引用する。

「数年前から徴兵検査場で徽章が敵性文字でケシカランと憲兵にどなられたなどということが度々あったし、中学校で英語の授業時間を極度に減ずるといった血迷ったやり方も行われていたので、徽章改定の訓令は来るべきものが来たというわけであった。……尾崎校長から訓令を見せられた私たち(当時は吉田孝次郎教授が庶務課長、白井が生徒課長)は、いろいろ相談したが、外語創立以来の伝統ある徽章であり、多くの同窓諸兄の母校愛のシンボルともいうべきものを軽々しく変えるのもどうかと思われるが、一方、陸軍省の一課に墮してしまっただけと言われていた当時の文部省の命令を無視することの学校全体に及ぼす影響も考えざるを得ず、私なりに考えた結果、事をで



幻の新徽章图案

きるだけゆっくりやろうということにして、まず某工業学校に依頼して図案科生徒に徽章图案を募ったが、やがて送られて来たものの大部分が、当時のスローガン八絃一字を象ったもので、外語校歌の精神にそぐわないものばかりでした。結局、京都高等工芸学校図案科教室に依頼することとなり、主任教授にお会いし图案の御参考までにと校歌のお話もしておいた。

1カ月も経ってから案が出来上り石膏模型も送られて来た。これならマアマアということころだったが、さて新しく多数の帽章を製作するには当時の資材不足もあり、適当な業者も見付からないうちに、その意匠に意に添わない点もあるから考え直したいとの京都の教授の意向もあって、新图案を待っている間に20年3月13日の空襲で校舎は焼失、徽章どころの騒ぎではなくなった。仮りに新しい案ができたとしても資材欠乏、業者は四散という状況の下では新しい帽章をつくることは不可能であったろう。そのまま8月15日を迎えて、ついに徽章は創立当時のものが持ちこたえられたわけである」〔「想い出・その1」『扉』11号〕

「できるだけゆっくりやろう」の結果、外専側から文部省専門局長あてに新しい学校徽章認可申請を出したのが翌20年3月2日。別図のような图案を添え「京都工業専門学校・向井寛三郎教授ノ考案ヲ基礎トシタルモノニシテ桜花ヲ芯トシテ八方ヘ矢尻ヲ放射シ、コレニヨリ『日本』ヲ中心トシテ諸外邦ニ発展シ『八絃一字』ノ精神ヲ実践スルノ意ヲ表シ以テ本校ノ使命ヲ表徴シタルモノナリ。尚実物ハ中央桜花ノ部分ヲ浮出シトス。材質ハ現下ノ資材関係ヲ考慮シ木質ニ金属粉ヲ吹付ケタルモノニヨル予定……」とした新徽章は3月6日、認可される。ただし、新徽章はついに陽の目を見なかった。敗戦後の20年12月14日「新徽章ノ意匠ハ終戦後ノ我国ノ国際的地位ニ副ワザル点ヲ含有スルコト。新徽章ハ現下ノ資材難ニ因リ原型ノ作製遅延致シタル為未ダ実物出来セザリシガ旧徽章ハ其ノ原型ヲ製造業者ニ於テ保有シアリテ実物ノ入手容易ナルコト」を理由に旧徽章の復活を文部省に申請、承認された。白井教授の記述と多少食い違う点もあるが、いずれにせよ新徽章が图案だけにとどまり、生徒の帽子の前面に輝くことのなかったことは、母校の伝統にとって喜ばしいことであった。

### 〈母校炎上〉

昭和20年3月13日夜から14日未明にかけての大阪大空襲で上八校舎は壊滅的な被害を受けた。校舎全館を全焼、門衛詰所、本館北側の2教室、便所1棟、書庫、倉庫だけが焼け残った。3月15日付『毎日新聞』は「B29大阪を本格夜襲 盲爆の火災消止む 90機中71機屠る」の見出しを冠し、次の二つの大本営発表を伝えている。

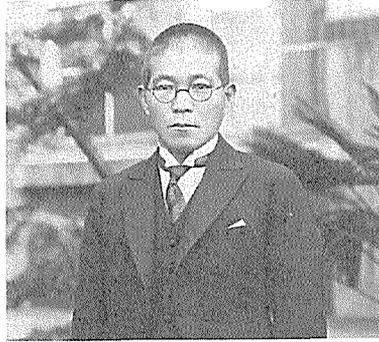
「昨3月13日23時30分頃より約3時間に亘りB29約90機大阪地区に来襲、雲上より盲爆せり。右盲爆により市街地各地に被害を生ぜるも火災の大部分は本14日9時30分頃までに鎮火せり」

「昨3月13日夜半より本14日未明にわたり大阪地区に来襲せる敵機の迎撃戦果次の如し 撃墜11機 損害を与えたるもの約60機」

しかし、大本営発表を信じる者は、かなり以前からいなくなっていた。「14日9時30分頃迄に鎮火」というのも、実情は降りそそぐ油脂焼夷弾に対しては消火活動などは全く無力であり、すべてのものが燃え尽きるのを待ったというのが本当のところであった。来襲したB29の機数にしても、米軍発表資料などから「マリアナ基地発進295機、大阪上空到達・投弾274機」〔小山仁志『大阪大空襲』〕あるいは「出撃301機、爆撃279機」〔三省堂『日本の空襲』〕とされ、実に大本営発表の3倍以上のB29が大阪に襲いかかったわけである。投下焼夷弾 1,732.6ト、焼失面積 8.1平方<sup>キ</sup> (約 21平方<sup>キ</sup>)。大阪府警察局の被害報告によれば全焼 13万4,744戸、半焼 1,363戸、死者 3,987人、重傷763人、軽傷7,737人、行方不明678人、罹災者50万1,578人〔小山・前出書〕にのぼった。

米軍による本土空襲は開戦翌年の昭和17年4月18日、航空母艦から発進したドゥーリットル(J. H. Doolittle)中佐指揮の陸軍機16機が東京、名古屋、神戸などを爆撃したのが最初であったが、このころは指揮官の名前をもじって「do little (ほとんど何もしなかった)空襲」と笑える余裕がまだあった。しかし18年2月のガダルカナル島(戦死・餓死者2万5,000人に達し「餓島」の名も生まれた)撤退に始まり、アッツ島につづいてマキン・タラワ両島守備隊が「玉砕」(全滅)、19年6月にマリアナ群島のサイパン、7月にはグアム、テニアン各守備隊が玉砕するに及んで本土空襲が迫ったことは、だれの目にも明らかとなった。6月16日、中国基地からの北九州空襲で初めて姿を見せたB29は、11月24日にいよいよマリアナ基地から発進して東京を初空襲、12月13日には名古屋、19日に大阪を襲い、以後しばしば本土上空に出現し、晴れた日には4本の飛行雲を引きずって銀色に輝く機体、夜間でも腹に響くような特有の爆音でそれとわかるB29は、火の雨の焼夷弾とともに空襲体験者には忘れられないものとなる。

偵察のときは高々度をかすめて逃げるように飛んだB29が、3月13日夜は密雲が低く垂れこめていたため、2,000～3,000<sup>フ</sup>の低空から次々と大阪に襲いかかった。当夜の模様を防空要員として母校に残っていた片岸嘉造(A23)の「母校空襲炎上の事」〔外大『咲耶』2号〕と、身をもって書庫を延焼から守った白井正・元教授の「炎と熱風—上八校舎の戦



白井 正

災」〔同7号〕および「思い出・その2」〔『扉』13号〕から再現すると一。

3月5日、第1学年生徒が名古屋の愛知航空へ動員されたあと、印度語部と亜刺比亜語部の25人が防空要員として母校に残留することになった。すでに9日夜半から10日未明にかけて東京が、11日から12日未明にかけて名古屋が空襲されており、「次は大阪」と多くの市民が覚悟した。13日夜11時半ごろ空襲警報発令、学校裏手の新築アパートを借り上げた青雲寮から鉄カブト、ゲートルの防空服装に身を固めた防空要員が学校に直行した。その夜に限り警報がなかなか解除にならず、防空壕を出入りすること二度、三度。いつもと雰囲気が違うと話しているうち、北西方向の空が急に明るくなった。聞きなれたB29の爆音も「きょうはやけに低い」と思ううち、次々投下される照明弾のため空全体が明るくなり、やがて空中ではじける親子焼夷弾の破裂音が交錯、そして打ち上げ花火のような火の帯が次々と降ってきた。空襲警報には慣れ切っていた片岸も、衝撃が全身を駆け抜けるのを感じる。「空襲でなければ、それは美しい夜の光の絵模様」であったが……。

やがて炸裂した一連の焼夷弾が学校の東側上空を流れたと思うと、横門東隣の竹材店に落下、山と積まれた竹が、すさまじい勢いで燃え始め、この火が学校の用務員宿舎に向かってきた。小宮町の校長官舎や外国人教師官舎にも火が迫ったとの連絡で、応援に駆けだす生徒に「敵機の機銃掃射に気をつけろ」と叫ぶ東田延尾教授の声が響く。用務員宿舎を焼いた火は道をまたいで木造2階建のアラビア語辞典編纂室(生徒控室の階上)、さらにアラビア語教室に移った。火勢で窓ガラスがパリパリとはじける。2台の手押しポンプではどうしようもない。火は中国語教室を伝い3階建本館に移り、一部は武道場へ広がった。もはや燃えあがる本館西側の一角を呆然と見上げ、火魔の跳梁を他人事のように眺めるばかりであった。

小宮町の生徒課長官舎に住んでいた白井教授は、尾崎卓郎校長、本田要太郎会計課長と前後して校舎に駆けつけた。警報発令前、すでに四天王寺の塔を目標に焼夷弾が投下されていたらしい。上本町一帯では校舎周辺の民家がまず燃え始め、やがて校舎にも運動場にも焼夷弾が落下し始めた。校長は「御真影」(天皇、皇后の写真)を安全な場所に移すため、花園運動場の合宿所へ、東田教授は勤労働員の報酬を預け入れた生徒個人名義の貯金通帳

と関係書類をいち早く持ち出した。強まる一方の火勢に、防空要員の生徒に避難を命じた白井教授は、校舎の最期を見届けようと玄関奥の土囊のうの陰にひとり立っていた。そこへ校門横の尼寺、来迎寺の老尼とお手伝いの女性が毛布をかぶって救いを求めてきた。近所の洋服店の老女も避難してきた。三人をもっとも安全と思われる書庫に入れ、自らも書庫の床に横たわった白井教授が疲労からウトウトしはじめた時、老尼が「書庫の2階に火の粉が入ってくる」と知らせてくれた。真っ暗ななかを手さぐりで2階にあがると、書庫に接する図書課事務室が燃え盛っており、熱風にあおられた火の粉が窓と窓枠のすき間から書庫に入り込んでいた。窓の鉄扉が錆びて掛け金が用をなさず、すき間ができていたのである。窓際の床には故・山本磯治教授の遺族から寄付された漢籍が未整理のまま積まれている。白井教授は熱風と炎で顔や手に火傷を負いながら、錆びた掛け金を引っぱり扉を閉める作業をつづけ、辛うじて書庫は難を免れた。書庫を出て見た夜明けの校舎周辺は一面の焼野原、粉塵を含んだ細く黒い雨が降っていた。病院に担ぎ込まれた白井教授はベッドに横たわると同時に意識を失った。

焼け残った書庫入口の鉄扉2枚は、上八から箕面に移され、今も図書館1階書庫に保存されている。

## (5)旧制時代の研究活動

これまで本校開校から空襲による校舎炎上までの歴史をたどってきたが、ここでは旧制専門学校時代の研究活動について概観する。

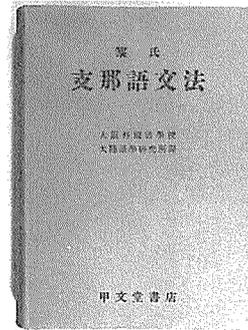
### 〈大陸語学研究所〉

大陸語学研究所については、伊地智善継(C15・元学長)が『きんきら50年』に寄せた「大阪外国語学校大陸語学研究所記」が詳しい。それによると、「大阪外国語学校大陸語学研究所」は昭和16年10月1日、外語付設の研究機関として発足した。研究所規定第1条にあるように「主トシテ現代支那語及ビ之ニ関連ヲ持ツ其他東亜大陸諸民族ノ言語ヲ研究スルヲ目的」としたものであり、当面の研究目標を現代中国語の言語理論的研究に置いたが、将来は中国語と親縁関係を持つ東アジア、東南アジア諸言語の研究にまで範囲を拡大する構想であった。

同研究所は金子二郎教授(のち学長)の年来の抱負によって生まれたもので、所長は規定により外国語学校校長とされていたが、実際の運営は金子教授が担当した。官制に基づく付設研究所設置が当初の要望であったが、当時その可能性がなかったので、研究所運営経費は主として神林棟一東洋印刷株式会社社長の寄付でまかなわれた。終戦で閉鎖されるまでの約4年間、所員として研究に当たったのは住田照夫、小田信秀、伊地智善継、富田竹



「支那研究」



「黎氏支那語文法」

二郎、高田久彦の5人、他に大原信一、武田浩二、陳徳仁、手島伸和らが一定期間、研究に従事した。

研究所発足当時、日本の対中国侵略はすでにドロ沼状態にあったが、良識派の間では中国語研究・教育の科学化と中国文化再認識が唱えられていた。一方、日中戦争に便乗して、全く無反省に中国語教育に当たった研究者も多かった。そんな状況下、大陸語学研究所は言語理論研究を深めることによって明治以来の中国語研究教育の歴史を一新しようと、カールグレンやミュリーら西洋中国語学者、さらに黎錦熙、趙元任ら中国碩学の業績に学んだ。

研究所発足以前から大阪外語支那研究会では会誌『支那及支那語』を発行していたが、同誌の編集を引き受けることになった研究所は以後、中国語学のすぐれた業績紹介に取組み、カールグレンの『北京語発音読本序説』、『現代支那方言の記述音声学』、黎錦熙『国語運動史略』、『比較文法』、趙元任の『北京語の語調の研究』などを同誌上で紹介、さらに昭和17年には同研究所訳による『黎氏支那語文法』を出版した。このほか富田竹二郎を中心にミュリーの『シナ語構成論』を翻訳したが、校正段階で空襲に遭い焼失してしまう。倉石・伊地智訳の『比較文法』および研究所共同編集の『発音辞典』が陽の目を見たのは戦後の出版によってである。

#### 〈西南亜細亜語研究所〉

「大阪外国語学校西南亜細亜語研究所」が設立されたのは、前記大陸語学研究所より1年遅い昭和17年、すでに日本は太平洋戦争に突入していた時期である。「西南亜細亜ノ現代語ニ関スル研究及編纂ヲ主目的トシ是等ヲ通ジテ当該地域ノ文化ノ攻究、日本語ノ進出並ニ本邦文化ノ紹介ニ当ル」同研究所の運営は外務省の補助金でまかなわれた。

この年4月10日、葉山万次郎校長が退官、代わって東京帝大哲学科卒業後、松本高校、静岡高校教授を経て東大庶務課長だった横山俊平が就任した。2年後の19年4月27日、陸軍司政長官に転出する離任あいさつの中で「在任中、西南亜細亜語研究所の設立以外には仕事らしい仕事は何もしなかった」と述べたといわれる〔「在職27年の回顧と今後の方

針」沢英三『アーリヤ学会会報』15号〕が、同研究所の実際の生みの親はウルドゥー語、ペルシア語担当の沢英三印度語部教授であった。昭和15年の亜刺比亜語部新設に当たって、外務省アラビア語留学生組の中野英治郎を助教授に迎えるのに尽力、さらに同省の後援で我が国初のペルシア文字母型と活字の作製を指導し、この活字を使った『印度文典』を出版するなど外務省と関係の深かった沢教授が、今度は西南亜細亜語研究所創設の補助金を引き出したわけである。

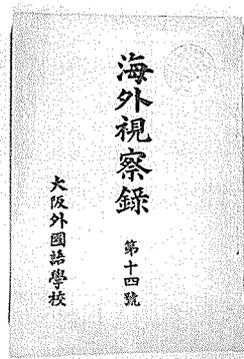
「昭和18年9月に卒業した私は、母校の西南亜細亜語研究所の助手を拝命した。それと同時に大阪外国語学校から『囑託ヲ命ズ』という辞令をもらった。それには『但シ給与ヲ給セズ』とあったことを記憶している。研究所のほうは辞令などなかったが、月給は60円であった。……じつは西南亜細亜語研究所がいつ創設されたか、これまた私は知らないのである。日本の西南アジア研究がお寒い状態で、その方面の言語の辞書ひとつないのは情けないことだと、沢英三先生が外務省を口説いて、補助金をとられたと聞いている。とりあえず辞書づくりから始めることになり、私が卒業後、インド語辞典編纂のお手伝いをする事となった。だが、アラビア語も同時進行、あるいは1年先行していたかもしれない」

直木賞作家、陳舜臣(I P20)が外大発行の『わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)』に寄せた「西南亜細亜語研究所のころ」の一節である。

同研究所の最初の仕事はアラビア語辞典の編纂であった。17年9月、外務省から招いた林昂・助教授を主任に、外国人教師エム・マッキイ・タシカンディ、伴康哉(I P15)、のちに教授となる川崎直一(R11)と田中四郎(A19)が参画した。インド辞書編纂は18年4月から始まり、沢英三、サント・ラーム・ヴァルマー、山本健太郎に陳舜臣が加わって作業が進められた。しかし、20年3月の空襲で、両語辞典編纂用のカード、参考資料のすべては灰となってしまった。研究所費のことで上京中の沢と林は琵琶湖畔を走る夜行列車の車掌から大阪空襲を知らされる。翌朝、外務省に着いた二人は校舎炎上の悲報を聞いて絶句した。インド語辞典計画は、この時点で一応、打切られた。アラビア語辞典の方は、補助金継続を認められたが、教授になった林が21年6月、実業界入りのため退官、研究所自体が消滅した。

### 〈海外視察録〉

海外旅行好きの中目初代校長が、しばしば教授にも夏休み利用の海外出張を命じたことは前に述べたが、その出張報告は大阪外国語学校編集・発行の『海外視察録』にまとめられ、大正11年の第1号から昭和8年の第14号まで、つまり中目校長在任中は欠かさず発行された。研究活動と呼ぶに値するかどうかは別にして“古き良き時代”を感じさせる『海外視察録』の目次と執筆者を掲げておく。



「海外視察録」

海外視察録			
第 1 号	我が朱印船の安南通商に就て 支那の国語教育に就きて	瀬川 亀 井上 翠	大正11年11月
第 2 号	バルマ記	稻村 純一	大正12年10月
第 3 号	米国太平洋岸の商業教育 香港の政治	伊藤 資生 小西 茂	大正14年3月
第 4 号	蘭領東印度概観	山上 万次郎	大正14年10月
第 5 号	米墨見聞記	中目 覚	大正14年10月
第 6 号	満州に於ける満人と其言語及書籍 英国博物館訪書録 英領馬來に於ける土民教育に就いて	渡部 薫太郎 鴛 淵 一 内藤 春三	大正15年3月
第 7 号	青島概記 極東シベリアに於ける教育事業の現状	熊谷 俊次 岩崎兵一郎	昭和2年3月
第 8 号	訪英印象 滞英見聞雑記	吉本 正秋 上田 畊甫	昭和3年3月
第 9 号	長江遊記 東阿不利加遊記	中目 覚 中目 覚	昭和3年11月
第 10 号	古書あさり其他 波斯見聞雑録 アルゼリア事情	本多 平八郎 沢 英三 小西 茂	昭和4年3月
第 11 号	比律賓紀行 バリ島	野田 慶一 内藤 春三	昭和5年3月
第 12 号	バスクの国	目黒 三郎	昭和6年3月
第 13 号	イタリア日記	中目 覚	昭和7年3月
第 14 号	満州国と移民問題 大連市設小売市場瞥見 満商に対する日商の地位	大平 頼母 北川 延尾	昭和8年3月

#### 〈蒙和・和蒙辞典の編纂〉

蒙和・和蒙辞典の編纂は、教授だけでなく生徒も参加した点が特筆に値する。大阪外語の外国人教師・韓穆精阿(ハンムチンガ)の『蒙和辞典』は昭和3年に出版されたが、工

藤広忠(M5)によれば「クラスの思い出の最たるものは『蒙和辞典』の編纂である。韓穆精阿先生を中心として、クラスの有志ががり版で仕上げた労作であった。装丁はお粗末であったが、三省堂などの英和大辞典なみの大きさと、赤表紙の辞書のできあがったときのクラスの喜びはひとしおであった。嬉しげな韓先生のお顔も印象的である。この辞典を発行してくれたのが、学校裏通りの古書店甲文堂であったが、この店の主人は蒙古関係の参考書を多数探し出してくれ、私どもの勉強を助けてくれた」〔『大阪外国語大学70年史資料集』〕という。師弟が力を合わせた手づくりの辞典であった。

それから10年後の昭和13年2月9日付『大阪毎日新聞』は社会面トップに

11人の学生スクラム組んで

努力、遂に完成した

蒙古語の辞典

大阪外語にこの珠玉篇

の見出しを掲げ『和蒙辞典』完成を伝えた。当時、蒙古語の辞典は下永陸軍大佐が偕行社から出版したもの、東京外語出版のもののほか、前述の韓穆精阿の『蒙和辞典』があったが、和蒙辞典として独立したものはなく、偕行社版の上・中・下3巻のうち下巻が和蒙辞典の形式をとっていたが、明治末の出版で早く絶版となっており、新しい安価な辞典が求められていたという。『和蒙辞典』編集を企画したのは当時3年生の蒙古語部14回生で、青山農、大谷満、川口輝典、阪上(旧姓・北川)敏一、城戸岩雄、横田(工藤)長利、崎山喜三郎、高居寛一、谷沢譲二、中谷国夫、山本条治の11人。もちろん、精松源一教授や外国人教師・福隆呵が指導、校閲の労をとったが、生徒たちは昭和12年6月から図書館の教官閲覧室を借り受け夏休みも返上、2万余語を書き終わったのが10月、北区都島南通、ぐろりあ書房に依頼し、2,300部を印刷、翌13年2月11日の紀元節当日を期して定価5円50銭で発売された。菊版435頁、表紙はモンゴルの砂漠を想起させる黄土色の布製、背は黒皮に『和蒙辞典』と金文字が刻まれ、ケースに納められていた。翌14年には第3版まで発行されたが第3版の改訂、増補には後輩の池田邦三、森和(いずれもM16)が協力した。

ぐろりあ書房の丹羽善次は、その著書『ぐろりあ物語』で、当時の模様を次のように偲んでいる。

「大阪外国語学校は以前から教材やテキストの印刷を引き受けていた。その縁で蒙古語部の学生諸君から、この和蒙辞典の出版企画の話があり、印刷製作費を支払う目当てもないが、なんとか引き受けてくれないかとの相談を受けた。また、できればその出版も引き受けてほしいとの申出であった。何分こうした学術的な労作で、特殊な内容のものであり、果たして売れるものかどうか、全く見当もつかない企画で、最初はずいぶん考えさせられたが、学生諸君の純真な熱意にほだされ、犠牲を覚悟で全面的に引き受けることに決めた。

学生諸君の喜びは限りなく、11人が堅くスクラムを組み、和蒙辞典編纂会を設立、

毎日放課後閲覧室にこもり、寝食を忘れて、2万余の語彙をアルファベット順に配列、整理、検討に没頭した。もちろん、私も日参していっしょに編集作業に当たった。……かくして、ようやく出来上がった時の喜びと、学生諸君の感謝はどれほどであったか！……私の書棚に残るこれを手にとるとき、当時の学生の面影や、その苦労や感動がこみ上げてくる。この企画と刊行に参加した学生諸君は、卒業と同時にこの辞書をしっかりと抱いて満蒙に向かったが、そのほとんどは日本軍国主義の犠牲者として、満蒙の広野で人知れず若い命をなげうってしまったことであろう」

## (6)終戦・高槻への移転

昭和20年4月10日、この年から新設されたビルマ科を含む11科に380人が入学したが、すでに「決戦非常措置要綱」により4月からの1年間授業停止が決まっており、新1年生はそのまま香里の陸軍火薬廠に動員され入寮、上八校舎へは焼け残った北側教室に少数の事務員と防空要員の生徒が登校しているだけという状態がつづく。そして広島、長崎への原爆投下、ソ連の対日宣戦布告。8月15日の戦争終結詔書の「玉音」放送を外専生徒のほとんどは動員先で聞いた。

### <動員解除>

「敗戦の日、まず考えねばならぬことは工場から学生を引きとることであった。私は動員の意義が失われた以上、一刻も早く学生の引揚げをと尾崎校長に進言したが、陸軍司政長官だった校長は、上からの命令がなければ一步も動かないという軍隊の習性が抜けず、私の意見は採用されなかった。そこでとりあえず各工場に引揚げ準備をするよう伝えた」〔「想い出・完」白井正「扉」14号〕

「上からの命令」は翌8月16日に出た。文部省は地方長官、学校長あてに農業、運輸、通信従事者を除く学徒動員解除を通達した。

「一般工場事業場ニ出勤中ノ男子学徒ハ各般ノ情勢ヲ勘案シ現地関係機関ト連絡ノ上可及的速カニ動員解除スルトシ帰校ノ上晴耕雨読ヲ行ハシムル等貴官ニ於テ適當ノ措置ヲトラルベシ……女子学徒ニ付テハ直ニ動員ヲ解除スルヲ建前トシ土地ノ情況ニ依リ貴官ニ於テ授業ヲ繼續スルヲ適當ト認ムル場合ノ外何分ノ指示アル迄授業ヲ休止セラルベシ」

女子学徒については授業のことに触れているが、男子学徒に対しては「晴耕雨読」など「適當ノ措置」を指示したにとどまっている。空襲で学校や家を焼かれ、食べるものにも事欠く敗戦の混乱期に「晴耕雨読」を持ち出す神経が疑われるが、事態の激変に文部省自身どう対応したらよいか、わからなかったというのが実情であろう。外専学徒も動員先から、

まず故郷に帰省した。

8月24日、文部省は学校教練、学校防空関係の訓令など戦時関係19法令の廃止を指示、つづいて8月28日「時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」を通牒し、9月中旬からの授業再開を求めた。

「学校(女子ノ学校ヲ含ム)ノ授業ノ実施ニ付テハ平常ノ教科教授ニ復原スル様措置スルコト、学生生徒ヲ帰省セシメタル学校ニ在リテモ遅クモ九月中旬ヨリ授業ヲ開始スルコト……戦災ニ因リ未ダ授業開始ノ目途樹タザル学校ニ在リテモ関係諸機関ト連絡ノ上校舎設備竝ニ教職員学徒ノ宿舍ノ調達等ヲ図リ……成ルベク速ニ平常ノ教科教授ヲ開始スルコトニ努力シ……」

8月28日といえば、この日連合軍先遣部隊が神奈川県・厚木飛行場に到着、連合国総司令部(GHQ)が設置され、30日にはマッカーサー最高司令官が厚木に到着、わが国は占領下に置かれた。

#### 〈間借り授業〉

こうしたなか外専でも昭和20年9月から大阪高等学校と近くの五条小学校の教室を借りて授業が再開された。二つの離れた学校へ出向いての授業だけに、時間割のやりくりには、かなりの困難を伴った。生徒にしても一日授業を休むと、次の授業がどこで行われるかわからないという状態であった。また小学校では机も便所も小さく窮屈この上ない。どこへ行っても間借人の気兼ねから落着いて授業もできない有様。さらに当時は食糧の配給も途絶えがち、教職員、生徒ともに食べるのに精一杯で、とても正常な授業が行われる状態ではなかった。適当な校舎を求めるうち、高槻市から外専誘致の話が持ち込まれる。(岸和田市からも誘致の動きがあったとする一部卒業生の証言もあるが、具体的なことは明らかでない。『岸和田市史』は、前に述べた昭和19年の大阪外専誘致運動については簡単ながら触れているが「以後、岸和田市に高等教育機関を誘致しようという案は、<sup>うが</sup>噂程度の域を出ず、具体化しなかった」と記述するにとどまっている)

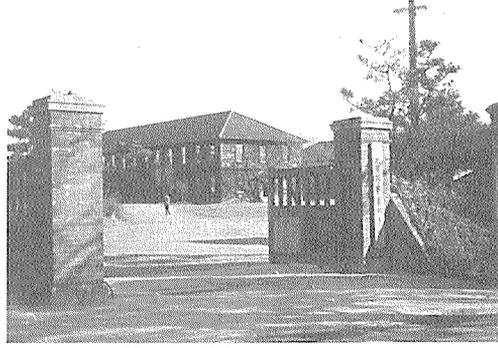
#### 〈林蝶子死去〉

高槻移転の話が持ち上がっていた昭和20年11月10日、肝臓病で大阪日生病院入院中の林蝶子がこの世を去った。72歳であった。蝶子刀自の逝去を11月11日付の新聞で知った本校関係者、卒業生の多くはこの日が母校創立記念日であることに思い当たり、在りし日の温顔を脳裏に描いて無量の感慨にひたったことであろう。葬儀は16日午後、四天王寺本坊で営まれた。

「右は大阪市に官立外国語学校設立の議あるや該校創立費として金壱百万円を寄付し高等教育機関の拡充に資せんとす 其の巨額の私財を投して帝国教育の進歩発達に貢献せし行為は洵に奇特にして其の功績顕著なりと認む」(文部大臣鎌田栄吉の上奏文)として、林



生徒控所2階に増設された教室



高槻学舎の正門（外専時代）

蝶子は大正13年5月31日、勲三等瑞宝章を授与されたが、当時、女性が勲三等を受けるのは稀であった。叙勲以後は創立記念日はじめ卒業式や四大節（四方拝、紀元節、天長節、明治節）式典の折に黒紋服の胸に勲章を帯びて参列するのが常だったという。官立学校としては珍しい風景であった。茶湯、生花に親しんだほか絵筆もにぎり、夏には雄蝶・雌蝶の墨絵を描いた扇子を教職員に配ったりもした。

林蝶子は本校創立基金のほかにも公益のため私財を寄付、大正9年から昭和17年の間に4度、紺綬褒章を受章している。まず大正9年に大阪市最初の産院である北区・本庄産院開設のため1万円を寄付▽昭和に入ってから、榎原神宮拡張などを進めた「紀元2600年」奈良県奉祝会へ1万円寄付▽外語の支那語部増員、亜刺比亜語部新設による教室不足解消のため3教室を寄付▽金剛山頂にある葛木神社に参籠所と付属建物を寄付。このほか大阪市立天王寺産院への寄付など、貢献は幅広い。

林竹三郎、蝶子夫妻の墓は天王寺区下寺町2-1-32、浄土宗大光寺にある。昭和54年9月、外大が箕面へ移転、上八を去るに当っては伊地智学長や同窓会有志が墓前に移転を報告した。

#### <高槻移転>

昭和20年11月に入って高槻市への移転が本決まりとなった（高槻移転については、沢英三教授が『アーリヤ学会会報』15号に、アラビア語教授だった「林昂君の尽力で高槻市の工兵隊跡を借りることになり……」と記しているが「尽力」の内容は明らかでない）。移転先は同市官有無番地、旧陸軍工兵第4連隊跡。同年末から翌21年正月にかけて外専生徒は旧兵舎を校舎として整備するため連日、時には泊り込みで高槻に出向いた。旧練兵場は工兵隊の訓練のためか凹凸が激しく石ころだらけで、つわものどもの夢の跡そのままに雑草が生い茂り、またバラックの兵舎は焼夷弾攻撃に備えて天井板が全部はぎ取られ、化け物屋敷さながらの荒涼たるたたずまい。とにかく兵舎の一棟を寮に、倉庫の一棟を図書館にあて、残る兵舎も間仕切りをして急ごしらえの教室に仕立て上げ、21年2月1日をもって外専は上八から高槻へ移転、授業を開始した。間借り授業から脱し、全校教職員、生徒が

1ヵ所に集まる高槻学舎が誕生したのである。

この年3月30日、尾崎卓郎校長が退任し、稲村純一教授が校長事務取扱に就任。文部省の後任校長選考は遅れに遅れ、平沢俊雄校長が発令されたのは8月22日。新校長が目にした高槻学舎の実情は、みじめなものであった。

散々苦勞の末ようやく掛けられた黒板、幅のせまい長机、三人ならべばぐっとしわむ長腰掛、そちらにもこちらにも雨もり、腐った土台、波うつひさし、うす暗い廊下、構内のぬかるみ、破れたガラス窓等等、今から思えば別世界のことのような気もする。戦災の余燼未だおさまらず、世をあげて生きることの最低線をさまよう時代だったから全く無理もないことだけれども、何処を向いても全く不備、何から手をつけるかに惑う有様であった。〔『創立35周年記念会誌』〕

#### <学校本部再移転>

高槻へ移転して半年もたない21年7月1日から学校本部は上八へ再移転した。9月14日、学校から文部省に提出した「学校本部再移転の件報告」によると、「本年2月1日より高槻市所在の元工兵連隊を借入れ一時全校移転いたしました。去る7月1日より本部は之を旧所在地に復帰いたしましたからここに御報告申し上げます」とあるだけで、復帰の理由は述べていない。事務所の位置変更は10月16日付官報所載の文部省告示112号で認められたが、再移転の背景には教職員の給与問題があった。

「焼け跡・闇市」に象徴される敗戦国日本の国民生活は、インフレと食糧難に苦しめられた。「一億総中流」とも「金満・飽食時代」ともいわれる現在からは想像もつかない時代である。21年2月17日、インフレ抑制のための新円発行・旧円預貯金封鎖を決めた「金融緊急措置令」が公布されるが、インフレの勢いは止まるところを知らず、都市では衣類などの売り食い、家計をまかなう「タケノコ生活」が常態化する。外専の授業料も21年から年額100円が240円に、寮費も36円から48円に値上げされ、学生生活は深刻な打撃を受ける。寮生にとって一番深刻だったのは食糧難である。食事は旧軍の炊事場を利用し、地元で雇い入れた賄方に頼ったが、配給米は遅配・欠配つづき。

「寮生のために花園グラウンドの畑でとれた甘藷が差入れられた。食糧休暇が必要だった。若人のお腹は、薯のまわりに米粒がまばらについた食事ではすぐむじくになった。夕方から一晩中、洗濯場近くで誰かが飯盒炊さんをしていて、飯盒の中には時に近所の畑の薯や豆があった。バリバリッ、バリバリッと異様な音が八幡町の市民を驚かした。それは東北隅の倉庫の板壁が剥がされる音で、燃料めあての仕業だった。冬になると、寝具のマットを破って藁を取り出し、室内で燃やして暖をとる大胆な者までいた。毎夜わたくしはズボンをはいたまま寝て、何時火事が起きるかと戦々兢々としていた」

単身赴任して旧将校集会所の一室に住み、寮生と一緒に食堂の団子汁を食べて暮らした

小林武三教授の追憶〔『学生部広報』37号〕である。いつ火事が起きるか、という心配はのちに現実のものとなるが、まず食べることに皆必死だった。5月19日東京で開かれた飯米獲得人民大会「食糧メーデー」には「国体はゴジされたぞ、朕はタラフク食ってるぞ、ナンジ人民飢えて死ぬ」と書いたプラカードまで登場した。食糧生産手段を持たない都市勤労生活者は、まさに危機的状況であった。こうした状況を反映して当時の教職員給与には学校所在地によって格差が設けられていた。戦災都市の大阪市は甲地、これに対し高槻市は乙地指定で、給与ランクは甲地より低かった。高槻に移転した外専は当然乙地であったが、給与条件を少しでも良くしようと、平沢校長は生徒の父母や同窓会の尽力で上八校舎の一隅にバラックの事務所を建ててもらい、ここに本部を移転することで甲地給与を受けることに成功する。はっきり言って危ない橋を渡るヤミ行為であった。しかし、法の番人としてヤミ買いを拒否し、配給だけの生活を守った東京地裁・山口忠良判事が栄養失調で死亡する(22年10月)という過酷な時代にあって、法を守っているのは餓死するしかないというのも現実の姿であった。

螢の光・駅舎の灯 敗戦直後の混乱のなか、昭和21年2月から高槻の旧工兵隊跡校舎で授業が始まったが、今日からは想像もできない食糧難時代。歌舞伎俳優・片岡仁左衛門一家5人が食物の恨みから使用人に殺された(3月15日)り、飯米獲得人民大会(食糧メーデー)代表が首相官邸に座り込んだ(5月19日)りした年である。学問よりも食べるための買い出しに精出す外専生徒も少なくなかった。この年は秋から冬にかけて毎晩のように停電した。最低生活給を要求中の電産(日本電気産業労組協議会)が停電ストを開始したほか、それだけでなく戦後、家庭の必需品となっていた渦巻ニクロム線を埋め込んだ簡易電熱器が、サツマイモやトウモロコシパン、団子汁などの代用食づくりや暖房用にフル稼働、あちこちの家庭でヒューズを飛ばしていたのである。唯一、停電しない場所は国私鉄の駅であった。省線(現JR)や京阪神急行(現阪急)の高槻駅には、螢の光窓の雪ならぬ駅舎の灯を求めて、外専生徒が寮や下宿から三々五々集まってきた。試験前になるとその数はさらにふえた。一団の中には現学長・山田善郎(S24)の姿もあった。

#### 〈外専規則改正〉

終戦から丸1年経過した昭和21年8月16日、ようやく文部省令26号によって官立外事専門学校規程の一部改正が行われた。大戦中の昭和19年、すべての専門学校の目的に「皇国ノ道ニ則リテ」を加え、「外国語学校」の名称まで「外事専門学校」と変えさせた規程の手直しである。これに伴って本校規則の一部改正も10月30日申請、翌22年1月15日認可され、21年4月1日にさかのぼって適用された。出足の遅いきらいがあるが、主な改正点が戦時色の払拭にあったのは当然のことであり、第1条中の「皇国ノ道ニ則リテ」を削除、「国家有用の人物を錬成する」を「育成する」に改めた。さらに第3条の本校に置く学科を「中

国科、蒙古科、インドネシア科、インド科、ビルマ科、アラビヤ科、英米科、フランス科、ドイツ科、ロシヤ科、イスパニヤ科」とし、旧規則にあった第1部、第2部の別を廃したほか、東洋語科の支那科を中国科に、マライ科をインドネシア科に改めた。さらに西洋語科の配列を外語時代と同じ順序に戻し、第2部の末尾だった英米科がトップに返り咲き、フランス科がこれに次ぎ、第2部トップだったドイツ科は3番目に落着き、第1部の仲間入りをしていたイスパニヤ科が西洋語科に戻された。「皇国ノ道ニ則リテ」を入れたり削ったり、語科配列をいじくり回したり、大戦中から大戦後にかけての文部省の対応の無定見ぶり、さらには学校側の自主性のなさを今日指摘するのはたやすいが、軍部独裁から一転して敗戦・占領という、かつて経験したことのない激動期ということを考えれば、混乱ぶりを責めるのは酷かもしれない。

#### 〈「支那」から「中国」へ〉

定見のなさといえは「支那科」が「中国科」となったのも、文部省自身の見識に基づくものではなく、中国側の要求に発した外務省の方針によるところが大きい。昭和21年6月6日付、外務次官から文部次官あての「支那の呼称を避けることに関する件」は、次のように述べている。

「中華民國の国名として支那といふ文字を使ふことは過去に於ては普通行はれていたのであるが、其の後之を改められ中国等の語が使はれてゐる処、支那といふ文字は中華民國として極度に嫌ふものであり、現に終戦後同国代表が公式非公式に此の字の使用をやめて貰ひ度いと要求があったので、今後は理屈を抜きにして先方の嫌がる文字を使はぬ様にしたいと考え、念のため貴意を得る次第です。

要するに支那の文字を使はなければ良いのであるから用辞例としては

中華民國、中国、民国。

中華民國人、中国人、民国人、華人。

日華、米華、中蘇、英華。

などのいづれを用ひるも差支なく、唯歴史的地理的又は学術的の叙述などの場合は必しも右に拠り得ない。例へば東支那海とか日支事変とか云うことはやむを得ぬと考へます。

ちなみに現在の満州は満州であり、満州国でないことも念のため申添えます」

こうして戦後、中国という呼称が広く一般に定着するのであるが、「支那」から「中華民國」への呼称変更はすでに戦前昭和5年に決定されていたことである。1912(明治45)年1月1日、孫文が南京で臨時大總統に就任、国号を「中華民國」と定め、アジア初の共和政体が成立したが、翌大正2年10月6日、日本政府は中華民國を承認、以後「支那共和国」と呼ぶことを決定した。それが昭和5年10月29日の閣議で、正式呼称を従来の「支那」から「中華民國」に変更すると決定したのは、南京新政府の抗議その他を考慮した結果で

あった。この決定に対しては、善隣外交の立場からの賛成派、「シナ」という古くからの日本語を廃止する必要はないが、漢字の「支那」が侮辱を意味するなら適当な漢字に変えればよいとする中間派、自らを世界の中心にある中華と呼ぶことは尊大であり、欧米各国が「チャイナ」で済ませているのに、わが国だけが中華民国とよび直す必要はないという反対派の意見が新聞の投書欄をにぎわした。しかし、この呼称変更は結局は根づかなかった。日清戦争以後、次第に国民の間に植えつけられた、いわれなき中国蔑視は、日中戦争によってさらに増幅されていったからである。

#### 〈女子学生受け入れ〉

女子教育の振興は戦後教育改革の重点目標であった。昭和20年10月、幣原内閣の成立に際し、連合国総司令部(GHQ)は憲法の自由主義化および人権確保の5大改革を指示したが、その一つに婦人解放と男女同権が含まれていた。これに基づいて同年12月、政治面では衆議院議員選挙法改正によって婦人参政権が実現、教育面でも「女子教育刷新要綱」が閣議決定され、男女の教育機会均等、女性に対する高等教育機関の開放などが、21年度から実施されることになった。

大正11年9月に夜間の別科を開設、当時としては珍しい女子部を置いて家庭婦人や女生徒を受け入れた歴史を持つ本校ではあるが、本科は制度上、女性が排除されてきた。女性への門戸開放初年度となった21年の本科入学志願者は11科で1,810人、平均倍率5.9倍であったが、注目の女性志願者は英米科の1人だけ。まさに紅一点であったが、占領下の英語ブームを反映して18.8倍という難関に涙をのんだ。

翌22年度は志願者1,745人中、女性はアラビヤ、英米、フランス、ロシア4科の7人。うちフランス科へ穴山(旧姓・堀)昂子、アラビヤ科へ塩見(井尻)智子が合格、この二人が入学第1号となった。外専最後の入学者となる23年度の女性志願者は英米の15人をトップにフランス、ロシア、イスパニヤの4科計26人、入学者はフランス科の赤木(浅野)富美子、小泉(糸田)恵富子、俵(中野)萌子、松野(長浜)由子、佐藤(藤田)保子、渡部(山口)薫子、ロシア科の高橋水枝、イスパニヤ科の石井(平松)幸子の計8人であった。フランス科の赤木、俵、佐藤、渡部は外専卒業後、新制大阪外国語大学3年編入の道を選び、外専最後の卒業生であり、かつ大学第1回の卒業生となった。

大阪外国語大学となった昭和24年度以降も女性入学者数は1ケタ台で推移するが、28年度から2ケタ台に転じ、以後年を追って増加、56年度に至って女260人、男253人と、ついに女性入学者が男子を上回る。57年度は再び男性が女性を上回ったが、58年度以降は常に女性優位がつづき、全入学者の70%に迫る勢い。外専一外大卒業女性は「女の時代」を担って社会の各方面で力強く生きている。

## 〈復興委員会〉

昭和22年の新学期から学園復興運動が活発に展開された。高槻学舎の施設整備がいっこうに進まないのを見た学生がまず立ち上がった。住田照夫教授の回想記「高槻学舎のころ・復興委員会」〔『学生部広報』40号〕によると、6月のある日、自治会委員長の近藤鞆、委員の川村昭二(いずれもC24)が学生大会の決議をたずさえて平沢校長をたずね「学生は自分で働いて得た金を復興資金として寄付することになった。これを先輩、教職員を含む全校挙げての運動に発展させてほしい」と要求した。学生の自力復興の熱意に応えようと、在校生組、職員会組、卒業生組、父兄会組の名を冠した各復興委員会を基盤とした復興委員会常任委員会(委員長・平沢校長)が組織され、委員会事務局長には住田教授が就任、図書館拡充費200万円、研究所創設費、建物改装修理費、什器調度品整備費各100万円、総額500万円の母校復興計画予算が組まれた。

在校生組復興委員会は大阪市水道局や清掃局の仕事に従事し、自分たちの汗で資金を稼いだ。

「『さあ！出発！！』私達学生労働者の群は動き出した。焼跡の水道の鉛管掘りが仕事であった。今でいうアルバイトだが、当時は勤労奉仕とでも呼んでいたのだろう。早速新聞が取材した。〈辞書をもつ手にツルハシを、大阪外語生の俄か労働者連〉〈学園復興事業の資金稼ぎに〉。各紙によって見方もちがっていた。私はおそれず挑戦した。コネのある奴は通訳でもやれ、なんにもない奴は私と行こう！本町から大阪城周辺部まで、大阪水道局の下請けとして鉛管を掘りまわった。見渡す限り焼けただれた大阪の中心部は焦げたアスファルトだけが、それでも街の筋目を通していた。続いての仕事は市の清掃局。ゴミ集めと、ドブさらえであった。これはいかにも辛い仕事であったが、学生達は歯を食いしばって聖汗を流した。町のはずれに焼けのこった人々が肩をよせ合って生きているのをたしかめる充実感が心を支えていた。夏休みも冬休みも作業はつづいた」〔『焼けあと』近藤鞆『きんきら50年』〕

職員会組では教官、事務主任が本俸の1ヵ月分を拠出した。卒業生組は戦前各地にあった同窓会支部の再建に努め、復活した同窓会支部から資金協力を得た。父兄会は在校生父母からの募金を求めるため岩崎兵一郎教授の尽力で新しく発足させたもので、現在の外大後援会の前身である。復興委員会設立後1年を経た23年6月現在の募金額は70万9,206円35銭〔『復興委員会会報』1号〕昭和24年4月現在で100万7,377円91銭〔『アーリヤ学会会報』15号〕に達した。

復興委員会がまず調達したのは学生机であった。大阪市内の製造業者と交渉したが予算面で折り合いがつかない。たまたま外語卒の先輩・富田幸左衛門(R3)が社長をしている揖斐川造船(株)に木工部があり、その部長も露語部卒の同窓であることを思い出した住田事務局長は早速、岐阜県下の同社を訪ね窮状を訴えたところ、木材原価抜き、工賃だけの安値で学生机(椅子つき)300脚を提供してもらえることになった。寸法切りのままの机と椅子は

鉄道便で高槻学舎に運び込まれ、夏休み期間中、職人数名が泊り込んで組み立てた。現在の机に比べればお粗末な机であり、しかも全校生分をまかなうには足りない数ではあったが、当時の復興委員会の財政では精一杯のものであった。昭和44年の大学紛争の折、バリケードに積み上げられた学生机の中に、紛れもない当時の机を発見した住田教授は「思わず目がしらが熱くなった」と記している。

復興委員会の活動は、その後教官机や図書館の書架製作、学生・職員便所の改修、水道管の拡充・敷設へと発展していった。

## 第3章 大阪外国語大学の成立

(角帽の時代)

### (1) 戦後の教育改革

敗戦を機に、日本の国政全般は連合軍司令部(GHQ=以下総司令部という)の占領下に置かれ、教育も大きな改革を迫られる。文部省が初めて戦後教育の基本方針を示したのは昭和20年9月15日に発表した「新日本建設の基本方針」である。

「大詔奉戴ト同時ニ従来ノ教育方針ニ検討ヲ加ヘ、新事態ニ即応スル教育方針ノ確立ニツキ鋭意努力中デ、近ク成案ヲ得ル見込デアルガ、今後ノ教育ハ益々国体ノ護持ニ努ムルト共ニ、軍国的思想及施策ヲ払拭シ、平和国家ノ建設ヲ目途トシテ、謙虚反省只管国民ノ教育ヲ深メ、科学的思考力ヲ養ヒ平和愛好ノ念ヲ篤クシ、智徳ノ一般水準ヲ昂メテ世界ノ進運ニ貢献スル」というもので、総司令部の意向を先取りしたものとみられるが、総司令部は10月22日「日本教育制度に対する管理政策」以下、同年末までに四つの指令・覚書を発し

- (1) 軍国主義および国家主義的教育の禁止
- (2) 教育関係の軍国主義者、超国家主義者の追放
- (3) 神道教育の排除
- (4) 修身、日本歴史および地理の授業停止

を求めた。

#### 〈米国教育使節団報告〉

以上は戦時教育体制から平時教育体制への切替へと、軍国主義教育の一掃をめざす戦後処理のための諸措置であったが、戦後の抜本的な教育改革の方向を決定したのは、総司令部の要請で、昭和21年3月に来日した米国教育使節団の勧告である。G・D・ストッダードを団長とする教育専門家27人からなる使節団は3月5日来日、南原繁東大総長を委員長とする「日本教育家の委員会」の協力を得て3月31日、官僚統制の排除および6・3制など教育の民主化を勧告した報告書をまとめ総司令部に提出。総司令部は同報告書の趣旨を全面的に承認し、今後の教育改革路線を示すものとして4月7日発表した。

### 〈教育刷新委員会〉

一方、米国教育使節団に協力するため設けられた「日本教育家の委員会」は昭和21年8月、内閣の教育刷新委員会に改組・拡充され、前記報告書をもとに戦後教育改革の具体案づくりに取組むことになる。9月7日開かれた第1回総会の席上、吉田内閣総理大臣代理の幣原国務大臣は、今回の敗戦を招いた原因は、せんじ詰めれば教育の誤りにあったと指摘した。教育刷新委員会は以後、142回の総会を開催、内閣総理大臣への建議事項は35件に及ぶが、12月27日の第1回建議は(1)教育の理念および教育基本法に関する事(2)学制に関する事であり、ここでは教育基本法制定の必要と内容の概略が、また6年制の小学校-3年制の中学校-3年制の高等学校-4年制の大学という、いわゆる6・3・3・4制の一貫した単線型の学校体系が示された。

### 〈教育基本法、学校教育法の制定〉

こうした建議に基づいて文部省が法律案を作成し、総司令部の民間情報教育局(CIE)の修正と認可を経て、国会審議の上、昭和22年3月31日、公布されたのが教育基本法と学校教育法である。

前年21年11月3日に公布された日本国憲法(新憲法)は「国民の教育を受ける権利」を明文化したが、教育基本法は新憲法に則り、教育に関する基本的理念と諸原則を明示したものである。

一方、学校教育法は、6・3・3・4制の新学校制度の輪郭を定めたものであるが、従来は学校の種類ごとに学校令が定められていたのを、幼稚園から大学まで含めて単一化し、法律で定めた点が特徴的であった。内容的には(1)教育の機会均等(2)学制の単純化(3)義務教育年限の延長(4)高等教育の普及と大学の門戸開放-を制度化した画期的なものであった。

この学校教育法は22年4月1日から施行され、学制改革による新制の小・中学校は22年度から、高等学校は23年度から、大学は24年度(一部公・私立大学は23年度から)発足することになった。米国教育使節団報告書の発表からわずか1年という、あわただしい新学制のスタートであった。

### 〈新制中学校への敷地割譲〉

昭和21年2月、高槻市へ移転してとりあえず安住の地を得たかに見えた本校であったが、新学制の発足に伴って、思わぬ試練に遭遇する。新しく義務制となった新制中学校には、小学校と違って母体となる旧制の学校がなかった。旧制の中学校は、すべて新制高校移行の道を選んだからである。独立校舎を建前とする新制中学校を設置しなければならなくなった市町村当局は、たちまち苦境に立たされた。高槻市も例外ではなかった。新制中学校設置に悩む同市の強い要請と、仲に入った当時の西崎文部省出張所長の「義務教育優

先」の方針から22年秋、外専は校舎と敷地の約半分を割譲せざるを得なくなる。運動場も竹矢来で南北に二分され、北側半分は新制高槻一中のものとなった。敷地全体を確保して外専の復興を図ろうとした学校側の計画の前途に早くも暗雲が立ちこめた。

教育改革の理念と方向は間違ったものではなかったが、財政的裏づけがないままスタートしたというのが新学制の実態であった。文部省は22年、とりあえず学校施設補助金を補正予算に計上したが、到底追いつかず、新制中学校建設による地方財政破綻の責任を負って辞職した市町村長は、22年だけで170人にのぼったと伝えられる。新学制発足当初、なんとか独立校舎を持ち得た新制中学校は15%に過ぎず〔文部省『学制百年史』〕このため“青空教室”や不正常授業が全国的に行われる。施設だけでなく教員も足りない実情を時事川柳は「6・3制 野球ばかりが強くなり」と皮肉った。

#### 〈外専存亡の危機〉

学校教育法の制定で、高等教育機関としては4年制の大学だけが置かれることになったため、旧専門学校令によって設立された本校は存立の基盤を失うことになった。大正11年の開校以来25年を経て、母校は新制大学移行か、廃校か—の岐路に立たされたわけである。もとより教職員、生徒だれ一人として廃校を望む者はいない。何としても新制大学移行を実現しなければ生き残る道はない、というのが共通した認識であった。新制大学発足のスケジュールは昭和24年4月と決まっている。しかも大学移行のために与えられた準備期間は、わずか2年しかない。しかし、当時はまだ新制の大学の形態をどのようなものとするか、具体的にどうすれば新しい大学に移行できるかに関して、政府、文部省の方針がなかなか決まらなかった。空襲による上八校舎焼失、さらに移転した高槻校舎・敷地の高槻一中への割譲という、新制大学移行にとって明らかなマイナス材料を抱えて、存亡の危機に立たされた外専関係者は、将来への不安を募らせながら、国の方針決定を見守った。

#### 〈大学基準〉

新制度の大学設置のための認可基準を定める準備作業は学校教育法制定作業と並行して進められた。大学設立認可については文部省は従来から一応の内規を持っていたが、戦後の新大学制度実施のためには内規の根本的見直しが必要という声が高まり、文部省は21年11月、東京都下官公私立10大学の総長・学長を委員に大学設立基準設定協議会を設け、総司令部民間情報教育局の指導の下に基準改定に着手した。しかし、より広く全国大学の意見を聞くため22年5月、大学設立基準に関する全国大学連合協議会を開催、ここから大学基準協会が生まれ、先に大学設立基準設定協議会が提案した案を基礎に協議の結果、7月8日、協会の方針として「大学基準」を決定した。学校教育法施行規則第66条によって「大学(大学院を含む)の設備、編成、学部及び学科の種類並びに学士に関する事項は、別に定める大学設置基準による」とされた設置基準がここに出来上がったわけである。この

「大学基準」は、「趣旨」と12項目の「基準」を定めたものであるが、大学を設置する際の基準にとどまらず、設置後の大学の質的向上にも活用できるものとするため単に「大学基準」と称され、以後31年に「大学設置基準」が新たな文部省令として制定されるまで実質的な法令基準の役割を果たす。

「大学基準」が決まったあと文部省は旧制高等・専門学校に対し、新制大学への移行形態について希望調査を行っている。22年7月28日発の「新学制転換について官立高等学校大学予科の希望報告依頼の件」は、(1)新制高等学校に転換する場合＝国立高等学校案＝(2)単独に大学になる場合(3)他の大学、専門学校と合併して大学となる場合(4)既設の大学の一部となる場合—の4ケースについての問題点を指摘した上、希望報告を8月15日までに提出するよう求めた。同じような希望調査に対し、ほとんどの専門学校は(2)の単独移行を強く望んだが、同年11月には、C I Eの勧告による官立大学、高等・専門学校の地方移譲構想まで浮上して新学制転換の前途はさらに混迷の度を深めた。

#### 〈大学設置委員会〉

こうした状況の中で23年1月15日、大学設置委員会(24年6月、大学設置審議会と改称)が発足した。文部大臣の諮問に応じ、大学基準協会代表22人、高等・専門学校代表11人ら計45人の委員からなる同委員会は先に決まった「大学基準」に従って新制大学の設置認可に関する審査を行うことになった。委員会はまず公・私立12校の新制大学について23年4月から設置を認可した。残りの旧制高等教育機関は24年度からの新制大学発足めざして設置申請提出準備に入る。すでに前年秋から岡山、広島、石川、富山、鹿児島など各県で県内全官公立校を統合して総合大学設置をめざす運動が活発化していた。

#### 〈一府県一大学〉

このころ、総司令部民間情報教育局は、新制国立大学の設置について、大学の都市集中を避け、教育の機会均等を実現するため一府県一大学の方針を貫くことなど11原則を文部省に要請した。前に述べた大学・高専の地方移譲構想は、専門学校長会議、大学教授連合などの反対で立ち消えとなっていたが、一府県一大学の方針は、これまで大学を持たない府県の新設運動には力強い援護射撃となる一方で、東京、大阪など大都市の専門学校にとっては、一難去ってまた一難と受け止められた。

23年5月に入ると、文部省は新制大学切替え予定の旧帝国大学、官立諸学校に対し、国立新制大学切替措置要領案を送付し「国立総合大学は附属の予科、専門部等を包摂するのは勿論、できる限りその所在地の高等学校、専門学校等を合併して一般教養の教育を確保すると共に、力めて専門学科の充実を図り総合大学としての実をあげる」よう求めた。総司令部の強い要請で6・3・3・4制の新教育制度実施に踏み切ったものの、敗戦下の財政貧困、さらに大学設置に当たっては教授候補者数の絶対的不足という厳しい状況の中で

「各地方に散在する学校をそれぞれ数校ずつ合同して大学に転換することによって無駄を排除し、長短相補い、経営の節約をはかる」〔日高第四郎『教育改革への道』〕以外に道はない、というのが当時の政策担当者たちの結論であった。単独での大学移行を望む外専にとって、この合併・統合方針は、前途に立ちほだかる巨大な壁と映った。

#### 〈新制国立大学実施要綱〉

昭和23年6月22日、総司令部の一府県一大学原則を受けて、文部省は次のような11原則からなる新制国立大学実施要綱を発表した。

新制国立大学の実施に当たっては、その大学が同一府県内の同一都市又は同一の場所にあることが望ましいが、現状に副わないものがあるので、現在の学校の位置、組織、施設等の実情に即して次の諸原則によって切替え、なるべく経費の膨張を防ぐと共に、大学の基礎確立に努める。

- (1) 国立大学は、特別の地域(北海道、東京、愛知、大阪、京都、福岡)を除き、同一地域にある官立学校はこれを合併して一大学とし、一府県一大学の実現を図る。
- (2) 国立大学における学部または分校は、他の府県にまたがらないものとする。
- (3) 各都道府県には必ず教養および教職に関する学部もしくは部を置く。
- (4) 国立大学の組織・施設等は、さしあたり現在の学校の組織・施設を基本として編成し、逐年充実を図る。
- (5) 女子教育振興のために、特に国立女子大学を東西2ヵ所に設置する。
- (6) 国立大学は、別科のほかに、当分教員養成に関して2年または3年の修業をもって義務教育の教員が養成される課程を置くことができる。
- (7) 都道府県および市において、公立の学校を国立大学の一部として合併したい希望がある場合には、所要の経費等について、地方当局と協議して定める。
- (8) 大学の名称は、原則として、都道府県名を用いるが、その大学および地方の希望によっては、他の名称を用いることができる。
- (9) 国立大学の教員は、これを編成する学校が推薦した者の中から大学設置委員会の審査を経て選定する。
- (10) 国立大学は、原則として、第1学年から発足する。
- (11) 国立大学への転換への具体的計画については、文部省はできるだけ地方および学校の意見を尊重してこれを定める。意見が一致しないか、または転換の条件が整わない場合には、学校教育法第98条の規定により、<sup>\*\*</sup>当分の間(旧制のまま)存続することができる。

\*\* 但し、旧制の専門学校の第1学年は24年度には募集しない予定である。

## (2)新制大学への道

新制大学設置に対する国、文部省の方針は以上のような経過を経てようやくその輪郭を明らかにしてきたが、本校の対応はどうであっただろうか。文部省の方針から明らかなおと、外専が生き残るための選択肢としては(1)大阪大学など総合大学あるいは単科大学に合併される(2)他の高等・専門学校と一緒に一つ一つの大学をつくる(3)以上どちらにもなれない場合は単独で大学移行をめざす—の三つしかない。しかし(3)の単独移行は真にやむを得ない場合に限られる、いわば例外措置である。こうして各大学、高等学校、専門学校、さらに師範学校それぞれにパートナーを求めて、あわただしい動きを始めた。伊地智元学長の証言によれば、大阪外語で蒙古語講師を務めたこともある羽田亨・元京大総長から京大の一学部にといい非公式の打診があったほか、大阪大学からの誘いもあったという。東京と並んで全国に二つしかない官立の外国語専門教育機関として独自の伝統と歴史を誇ってきた本校にとって、他大学に統合されるということは、廃校にも等しい変革と受け止められたに違いない。大阪第一、第二両師範学校は独自に大阪学芸大学創設に動き出したとの話も伝わってくる。外専としては早急に態度を決めなければならない。

### 〈単独移行の選択〉

外専の前途をめぐるっては、いろいろな噂が飛びかった。世は占領下時代である。「戦争中、軍に協力して『大阪士官学校』という別名までもらった大阪外語を進駐軍は戦犯のふるさとと見ている」「当然、とりつぶされて廃校になる」「いや、学芸大の語学部という形でしか残れないのだ」—このほか独自の歴史文学で幅広いファンを持つ文化功労者・日本芸術院会員、司馬遼太郎(M21)の母校を語る座談会での次の発言も当時の空気を伝えるものといえよう。

「旧制の廃止のとき、廃校にするという考えが文部省にあった。廃校にするならちよ  
うど大阪帝国大学というのが理科系しかないから、文科系を創りたいから、西洋語部は  
大阪大学が引き取って、東洋語部は京都大学の人文科学研究所が引き取る。これでもと  
の小学校の敷地だけになるという話を、「なるほど、そうですね」と聞いた覚えがある。  
しかし、外語の先生方が反対したらしい」〔週刊朝日編『青春風土記・旧制高校物語  
2』〕(「もとの小学校の敷地」とあるのは、大阪外国語学校が設立された旧制天王寺中  
学校移転跡地のことと思われる)

廃校か他大学との統合かの岐路に立たされた当時の平沢俊雄校長は、金子二郎教務課長とともに生き残りを賭けて大学単独移行の困難な道を選んだ。平沢校長、金子課長らは東京外専と連絡をとりながら大学移行への方策をさぐる一方、文部省にも陳情を重ねた。「我々の母校は大学となるか廃校となるかの二つよりほかに道はない。我々は我々の母校をして、何としてでも大学へ持ってゆかねばならない」—『復興委員会会報』第1号が伝え

る当時の金子教務課長の決意である。生徒も立ち上がった。まず母校の施設充実・整備を、と復興委員会が組織されたことは前章で述べたが、大学単独移行の目標が決定してからは、学園復興を進めることが即大学移行実現につながるのだ、と運動に拍車がかかる。自治会（当時は緑風会と呼ばれていた）委員長の近藤鞆(C24)らは東京外専、文部省へも出向いた。

「私達は外語が生きている、否、平和国家にこそ生かさねばならぬのだという運動を起さねばならぬと決心したのだった。東京外語へも出向いた。文部省にも押しかけた。東京までは13時間もかかったし、各車両は超満員、乗車するのに6時間も並んで待たねばならなかった。外食券を持って行っては石神井の東京外語横の食堂に列を作って、うすい雑炊を分け合って食い乍ら議論し、作戦をねった。今でいう共闘のつもりか。天理外語へも出かけた。戦災を知らぬ、財源の豊かな私立校であったが、共通の苦しみを理解してくれ、交流を約束してくれた。外語は生きているという認識が世の中に満ちはじめた」〔「焼けあと」近藤鞆「きんきら50年」〕

#### 〈外専最後の入学者〉

大学移行への見通しがはっきりしないまま外専は23年度入学試験期を迎える。23年1月に配布した入学志願者心得には、学制改革に伴う次の注意が印刷されていた。

近く実施される学制改革によって本年入学者は在学中、次のいずれかの転換措置を受けることとなり必ずしも本人の希望通りにならない場合もあると思われるから予め承知しておくこと

(イ)現制のまま卒業する場合

(ロ)本校が新制大学になる際、本校又は他の大学の相当学年に編入される場合

(ハ)本校が新制の大学になる際、本校又は他の大学への優先的入学を認められず、新制高等学校の卒業生と同一条件で改めて入学試験を受けなければならない場合

以上の注意と、ほとんど一字一句変わらないものが旧制浪速高校の志願者心得にも掲載されているところを見ると、文部省からの指導があったものと思われる。ちなみに、その後の経過を見ると、23年度入学の浪速高校生は、新制大阪大学に包括されたため、新制高校卒業生とともに改めて入学試験を受けて大阪大学あるいは他の大学へ進む(ハ)のコースをたどった。高校在学は1年間だけだった。一方、本校入学者の場合は(イ)の現制のまま卒業と(ハ)の二つのコースをたどった。それ以外に(イ)の現制のまま卒業したあと、大阪外大の3年に編入というケースも存在したことは、〈女子学生受け入れ〉のところで述べた。いずれにしても翌24年の学制転換実施で、高等学校、専門学校とも、この年の入学者が最後となったわけである。

なお、23年度高専進学志願者に対して初めて文部省の進学適性検査が全国一斉に実施された。進学適性検査は翌24年度から29年度まで新制大学進学志願者に対して実施されることになる。

## 〈最初の難関・外国語学部〉

大学単独移行への最初の難関は、外国語大学に対する認識の問題であった。当時の文部省、さらに大学設置委員会内部には「外国語は学問の補助的手段に過ぎない」したがって「外国語の教授・研究のための大学など、あり得ない」という意見が支配的であった。22年7月決定の「大学基準」で「大学の学部の種類は法学、文学、経済学、商業、医学、理学、工学、農業、その他学部として適当な規模内容があると認められたものとする」と広く規定され、その結果、このあと成立する新制大学には家政学、薬学、外国語学、教育学など旧制大学では認められなかった学部が誕生するのであるが、大学設置委員会が発足したころは、まだ「学部ハ法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学及商業ノ各部トス」という旧大学令時代の考え方から抜け切れず「外国語学部」という新しい考え方になじめなかったようである。

「何しろ外国語の大学なるものはありえないとする議論が大学設置委員会や文部省筋で支配的であり、何はともあれその難関を突破せねばなりません。東京外語や私立外語その他関係方面によびかけ、種々の経緯をたどり苦心の結果、外国語学部が認められ単独で大学となる道が開かれました」〔「思い出・外語－外専－外大」平沢俊雄 『きんきら50年』〕

平沢元学長は簡単にしか触れていないが、外国語学部を認める基礎となった外国語大学設置基準案については神戸市外大発行の『神戸市外国語大学二十年史』が詳しい記述を載せている。

「当初、外専の昇格については、一般大学基準に対する特殊基準としての学芸大学基準が適用されようとした。が、それは東京外専井手校長等の反対に遭った。井手校長等の手で作られたのは、学芸大学基準のカテゴリーのなかで、独自の内容をもつ『外事大学設置基準案』。ところが、その報告を受けた大学設置審議会は、『この案は、単に外専を4年制に引き伸ばしただけのものである。外国語学習は、あらゆる学術研究の手段であって目的ではない。外国語教育を主たる目的とするような大学は世界のどこにもない』という理由で、否決してしまったのである。

本学は、外専創立以来、単に語学のみでなく、これを基底とする文化一般についての理論と実際の研究に重点をおいて、実践してきている。大学設置審議会の理論こそ、われわれの望むところのものである。外大は、このわれわれの従来の語学を主体とし、それに法経商科目を加え、外国の文化を総合的に把握研究することを目的とする、いわゆる“外国学”(Foreign Study)の学府でなければならない。教授会は、この構想を推進することを決定した。

ただ、大学の名称については『外事大学』は、中国語に照らすと、別の意味になること、『外国学大学』は性格を的確に表しているが、世間一般には熟していない、との意見で『外国語大学』ということに落ち着いた。しかし、英語の呼称では、University

of Foreign Languages ではなく、University of Foreign Studies と決まった。

金田校長は、この案に基づいて、中央の審議会委員と各外大側を説得し、新しい基準案を再提出して、昇格を承認してもらう運動にのりだすことになった。

金田校長は、まず審議会小委員会の糸魚川祐三郎委員(いといがわ・すけさぶろう、横浜経済専門学校長・東京高商卒)と会った。同氏は、金田校長の考えを聞いて「その構想なら、なんら問題はなからう」と賛成した。「近く小委員会が開かれるから、あなたもオブザーバーとして出席してその構想を説明してほしい」と、付言されたが、金田校長は、小委員会の委員に東京商大の上田辰之助教授を追加することを要望した。上田教授の学界における権威と、堪能な語学の上にたつ識見、そして素晴らしい説得力によって、新基準案を作成してもらおう、という見通しから出た要請である。

小委員会での議論は、上田教授を中心にして運ばれた。順風満帆そのものだった。そして、神戸外専の構想そのままの外大基準案ができあがった。

最後に外大の名称をめぐる、いろいろな案が練られた。といっても、終始笑い声の絶えない議論であったが。

初めに、『外事大学』と『外国語大学』がとりあげられた。前者は文部省、後者は神戸外専の案である。「“外国語大学”は語呂が悪い」と誰かがいった。同調する人が出た。神戸案の旗色がわるくなった。そのとき、上田教授が立ちあがって、ユーモラスなエピソードを紹介した。それは、同教授が戦時中、北京大学に招聘されていたときの話。－“外事”とは、北京の俗語で、『有婦の夫が、他の女性関係をもつことを指す』のだそうである。そして、日本の『外事専門学校』が、北京大学の教授間で、大いに物笑いになったことがある、と。

この体験談が報告せられるや、委員会はたちまち神戸案に傾いてしまった。金田校長は、最初の外大基準案に強硬に反対した若干の審議会委員を歴訪した。そして、新しい神戸案のバックボーンである“外国学”の目的と意義を述べて、了承を得ることに成功した。程なく、この案は審議会をパスした」

参考までに、審議会をパスした神戸外専の外国語大学設置基準案とは、次のようなものであった。

### 外国語大学設置基準案

#### 1. 目的

外国語大学は外国の言語とそれを基底とする文化一般につき理論と実際にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語をとおして外国に関する理解を深めることを目的とする。

#### 2. 組織

(1)外国語大学の組織は学芸大学基準による。

(2) 外国語大学においてはその研究教授の対象である言語又は文化圏の相違によりそれぞれの分科を設ける。

### 3. 課程

(1) 一般教養科目に関しては大学基準による。

(2) 専門科目に関しては特定の外国語の専門的素養の上に、その外国語の用いられる地域の人文・社会・自然を研究する為に必要な科目を主要科目として設ける。

### 4. 単位

(1) 一般教養科目に関しては大学基準による。

(2) 専門科目に関しては3.(2)に該当する主要科目につき60単位以上、その他の科目につき20単位以上を履習させる。

### 備考

(1) 外国事情研究のため標本室・資料室等をもつことが望ましい。

(2) 外国語による生活を体得する為に役立つような施設をもつことが望ましい。

(3) 外国語別に外人教師をもつことが必要である。

(4) 外国語授業に於ける1組の学生数は30名を超えないことが望ましい。

外大基準案づくりに、大阪外専がどのような役割を果たしたのか、前記『神戸市外国語大学二十年史』に記述はない。同史が述べている「東京外専井手校長等の手で作られた外事大学設置基準案」に、大阪外専も積極的に関わったと思われるが、残念ながら資料もなく、くわしいことはわからない。しかしこのころ伊地智善継元学長は、新しい外大基準案作成のため、今橋にあったC I E図書館に通い、E・O・ライシャワー教授の「地域学」(Area Study)の論文を調べた、と証言しており、「地域学」を「外国学」に発展させた神戸外専案と、同じ方向をめざしていたことがうかがわれる。ともかく「外国語学部」を認めさせるという最初の難関は切り抜けられたのである。

#### <大学設置申請書の提出>

昭和23年4月22日、大阪外事専門学校から文部省へ「国立大阪外国語大学設置申請書」が提出された。コピー機器もワープロもない時代だけに、すべて手書き・ガリ版刷りのB4版100頁にも及ぶ分厚いもので、その目次は次のとおりであった。

(1) 国立大阪外国語大学設置要項

(2) 学則要項

(3) 校地(図面添付)

(4) 校舎等建物(図面添付)

(6) 学科別学科目又は講座

- (7)履修方法及び学位授与
- (8)学部学科別学生収容定員
- (9)教職員組織
- (10)最近の予算決算
- (13)現在経営している学校の現況
- (14)将来計画の概要

目次は文部省の示した記載様式に従ったものであるが、(5)の図書標本機械器具等施設は(1)の設置要項に含めて記載されているため省略されおり、(11)(12)は直轄学校には関係のない項目のため記載がない。

(1)の国立大阪外国語大学設置要項の「目的及び使命」は次のようなものであった。

本大学は諸外国の言語とそれを基底とする文化についてその理論と實際を深く教授研究し国際的文化活動に従事する人材を育成すると共に言語、文化に関する学術研究の進歩に貢献せんとするものである。

(即ち広義のPhilologyの大学として広く諸外国の言語とその文化を対象とするが、それは現代を中心として過去に溯り凡そ網羅的に殊に所謂特殊外国語を教授研究する大学としてユニークな存在となり又文化交流の重要な窓口たらしめんとするものである。かくして本大学に於て養成せらるべき人材は将来実業界、官界に於て国際的業務に従事する者、新聞人、言語、文化の研究者乃至諸学校の外国語教師等となることが予想せられる)

また、名称では「大阪外国語大学(又は国立大学大阪外国語学校)」としており、創立時の「大阪外国語学校」への愛着の深さをしのばせている。

「学部学科の組織」では、中国語、朝鮮語、蒙古語、インドネシア語、インド語、ビルマ語、タイ語、安南語、トルコ語、ペルシア語、アラビア語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、イスパニア語、ロシア語、ポルトガル語の計18語学科を置くとしており、外専の11学科に比べ、7語学科の増設を企図しているのが注目される。「大学開設の時期」は、もちろん昭和24年4月1日であった。

「今度は大学設置申請書の作成です。現実に即しつつ、審査に合格するように、学科組織、教員組織を始めとして、教室、図書その他施設全般についての大部の書類作成なのです。幾多の関所を乗り越えて申請書の提出にこぎつけました。そして現地視察となり委員諸氏からのいろいろの質問に応答、種々の条件をつけられましたが、めでたくゴールイン、先生方は全員合格と決定した時の喜びは忘れられません。舞台裏の大事な仕事をしていただいた故岩崎さん、金子さん始め諸先生、上田さん、小沢さん始め事務の皆さんのご苦勞は言葉に尽し得ません。申請書の先生全員合格ということは全国稀有のことだとききました」〔「思い出・外語－外専－外大」平沢俊雄「きんきら50年」〕



校舎焼失を伝える10月25日付『大阪外大新聞』7号

## 〈文部省案で単独移行内定〉

昭和23年7月発行の『大阪外大新聞』第6号の第1面に次の記事がある。

### 外語大学へ

#### 単独移行内定す

#### 明春20講座で開講

新学制切り換えによる本校の大学移行問題は種々の屈折を経て、文部省案として6月22日、我が大阪外事専門学校は、大阪外国語大学(仮称)へと単独移行が決定した。単独大学移行は全国専門学校が多くが希望する所であったが、予算・設備の面から見てこれは不可能なことであり、全国官立校を如何にまとめるかが注目されていた。文部省はこれに対し5月末、一応府県別ブロック内において統合、合併による新制大学をもくろみ、ことにそれぞれの特殊性を生かして全国に70校の新制大学を設置する案が出来たのである。

本校は東京外専と共に外国語修得という特殊事情の下に立つ学校なので、他校との統合、合併はその特色を全然失ってしまい、又分散のうきめに合うから、強く単独昇格が要望されて来たのである。

しかし本校は戦災校であり、過日の新制中学分譲問題にもより、単独移行は相当困難視されていた。幸い学校当局の努力が文部当局に認められ、本校の特殊性から今回単科の外国語大学案が決定発表されたわけである。

その実施は明24年度からであるが、この7月末までに開かれる大学設置基準委員会で内容につき審議され、大蔵省による予算の面が通過すれば、今秋文部省側より実地に設備面の視察がなされ、その上で明年4月名実共に発足するわけである。講座数は予算の関係上、20講座がまず開かれるほか、詳細は未だ不明である。

同紙第2面には「7月19日午後1時より本校において父兄会定例委員会が開かれ、会務報告の後、新制大学移行問題に移り、在学生、卒業生復興委員会と協力して図書館、教室等の校内設備を充実させることを目的として新制大学移行父兄後援会を結成、外国語大学建設に積極的に協力することになった」との記事もある。

### 〈大学規模の圧縮〉

これより先、7月1日の外専教官会議協議事項記録(庶務課保存)には、「校長から上京中の大学申請につき話せられ、先に提出の申請書を更に圧縮作成がえの上提出すること」と記録されている。さらに「夏季休暇は去る29日定期身体検査実施の結果、学生間には相当カッケ患者がある。これは食糧事情の関係もあることと思わる等の理由にて、休暇は来る7月5日から実施繰上げのこと(なお9月は6日から始業のこと)」と、いわゆる「食糧休暇」が実施されていたことも物語っている。

7月15日の教官会議協議事項記録には「別紙大阪外国語大学組織要項につき校長及び金子課長から説明あって承認に全員一致可決なった」とあり、新組織要項が添付されている。先の教官会議での「更に圧縮作成がえの上提出」に当たるものと思われるが、それによると、学科は中国語、蒙古語、インドネシア語、インド語、ビルマ語、アラビア語、英語、ドイツ語、フランス語、イスパニア語、ロシア語の11語学科。講座は中国語、英語各3講座、フランス語2講座、他の語学は各1講座、ほかに言語学、歴史学、国語学・国文学、教育学・哲学、経済学・法学が各1講座の計21講座となっている。先の設置申請書の18語学科、24講座に比べ、7語学科、3講座の圧縮であり、学生定員も申請書の1,520名から1,120名への減員となっている。

9月16日の教官会議では校長から「大学移行問題につき過般本省より劔木(亨弘・学校教育局)次長等来校及び大阪外国語大学を大阪外事大学と名称がえ等のこと」が報告されており、この時点では、まだ文部省が「外事大学」にこだわっていたことがうかがえる。

### 〈南棟校舎全焼〉

曲折を経ながらも大学単独移行の前途に希望の灯がともった矢先の昭和23年10月12日、南棟2階悠々寮から出火、南棟校舎を全焼するという悲運に見舞われた。

「10月12日午前10時45分ごろ本校南棟2階悠々寮東寄りの北9号室壁より出火、全学生の消火作業も空しく遂に火は全棟に回り他を類焼する危険さえ見えたが、漸く盛となった消防隊の活躍により正午ごろ全棟576坪を全焼して鎮火した。損害は約1,700万円に上る見込である」〔10月25日付「大阪外専新聞」7号〕

空襲で上八校舎を失い、大学移行を目前に今また火災で高槻の南棟校舎一棟を灰にした外専は、大きな打撃を受ける。「やはり廃校か」と教職員、生徒たちも動揺した。しかし寝具、日用品、学用品を全焼した上、住む場所もない93人の寮生に対し在校生は資金カンパで救援の手を差しのべた。復興委員会の資金で整えた机、椅子、黒板などは階下の教室から生徒の活躍で運び出され被害を免れた。北棟1、2階の教官室を教室に改造、18日から正規授業が再開された。

前出の『大阪外専新聞』7号は、今回の火災で新制外大移行はどのようなのか、金子教務課長にインタビューを試みている。金子課長の談話は次のようなものであった。



井上 翠

本火災により寮及び教室の一部を失い学生間では大学移行に関し悲観説を唱える者もあるが、現在すでに教室の配置転換を終り正規の授業を開始されたことによっても実質的には本校の授業には何らの支障のなかったことがわかる。

学校側としては上八・高槻両校舎の二本立を計画、上八校舎に1学年分の教室を整備し、高槻校舎は、先に新制中学に貸与したスレートぶき校舎1棟及び守衛室裏の倉庫1棟を本校内に移動、火災前まで寮として修理中であった1棟を教室に改築、外事大学実現に一層の拍車をかけることになった。何れにしても新制大学移行に関しては校舎が一日も早く復興されることが先決条件であり、これには全校生の一丸となった強力な活動が期待される。全校生徒諸君は母校愛に燃え固く団結して復興運動にあたられるよう切望する次第である。

#### 〈井上元教授の著作権寄付申し出〉

校舎火災から1週間を迎えようとする日、金子課長、住田復興委員会事務局長あてに手紙が届いた。

母校復興事業にさらに大きな負担となる今回の火災復旧のため応分の協力をしたいが、老齢であり、また先の戦災で全財産を失ったので、残された『中国語大辞典』の著作権を中国研究会に寄付するから復興に役立ててほしい、という内容で、末尾には「10月15日 井上翠」と記されていた。外語一外専を通じて中国語教授を務めた『井上ポケット支那語辞典』『井上支那語中辞典』の著者が、30余年にわたって心血を注いだ『中国語大辞典』の著作権の寄付を申し出たのである。井上元教授の行動に感謝した卒業生組復興委員会は卒業生一人当たり1,500円以上の寄付を呼びかけ、大学単独移行への協力を要請した。県、市など自治体が財政的にも強力に後押しした地方新制総合大学のケースとは違って、本校の場合は卒業生、在校生の父母に頼る以外、道はなかった。外国語単独大学の選択、さらにその実現のための自助努力の双方に、いわゆる“外語純血主義”のバネが強力に働いた。

### 〈教官会議記録から〉

教官会議協議事項記録は、まだつづく。11月4日「大学移行に付其後の報告のこと及び本校に委員会をつくる、その委員は教授全体を委員としたもの、外に専門部門の小委員会をつくること、又特別委員、常任委員会をつくること等」

12月16日「報告事項 平沢校長から現地視察員日程決定に伴う上京報告▽金子教務課長から (1)教室、教官室移転の件 (2)大学の授業計画に就て」

24年1月20日「校長より昨年末新制大学設置現地視察委員の本校視察模様を話せらる。金子教務課長より教務関係に付、新制大学、学年末行事、学業成績特点等のことに付協議あつて卒業式は3月10日(前年は3月15日)と決定した」

2月10日「校長から過日本省に於て開催ありし際の大学法試案要項を謄写版刷りとしお手元へ只今配布致しましたから、これに付御覧おき願いたい旨述べらる。次に新制大学になりし上、教授会設置に付ては充分研究して作りたいと考えておること。次に大学行政会議に出席のこと。この会議は来る14日から2週間の永き期間であるから留守中は宜敷とのこと話さる。本校の新制大学切換えのことに付ては大阪府知事に校長直接面談の上頼んでおいたこと話さる。在学生中新制大学入学者に対し心得等のこと知らすこと」

メモといつてもよいほど簡潔に過ぎる記録であり、具体的な事実を的確につかみ得ないもどかしさは否定できないが、一歩々々大学単独移行実現に近づきつつあること、23年暮れには設置可否を最終的に決定する大学設置委員会メンバーによる現地視察も終わり、24年2月10日の時点では大学設置の認可はほぼ確定的となつていたことがうかがえる。

## (3)新制大阪外国語大学の設置

新制大学設置の最終審査決定は昭和24年3月16日の大学設置委員会総会最終日に行われた。大阪外国語大学は他の68国立大学とともに開設が決定され、同月18日文部大臣に答申された。

### 〈国立学校設置法の公布〉

昭和24年5月31日、法律第150号によって「国立学校設置法」が公布された。これによって大阪外国語大学は、大阪外事専門学校を包括し、外国語学部1学部だけの単科大学として設置された。また国立学校設置法施行規則別表第1により職員定員は105人と定められた。

国立大学の名称	位置	学部	学校教育法第98条の規定による学校で左欄の国立大学に包括されるもの
大阪外国語大学	大阪府	外国語学部	大阪外事専門学校

(別表第1)

国立大学の名称	学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	その他の職員	計
大阪外国語大学	1	27	11	10	1	55	105

大学単独移行の悲願は、ここにようやく実を結んだのである。

このことは「高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス 専門学校ニ於テハ人格ノ陶冶及国体観念ノ養成ニ留意スヘキモノトス」(専門学校令第1条)とされた専門学校から「……學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を發展させることを目的とする」(学校教育法第52条)大学への質的転換を迫られるものであった。また「大学には、数個の学部を置くことを常例とする。ただし、特別の必要がある場合においては、単に一個の学部を置くものを大学とすることができる」(同法第53条)に示されるように、数個の学部を置く総合大学が常例であり、本学のような単科大学は「特別の必要がある場合」、つまり特殊性が存在理由として認められたものであった。

#### <遅れた開校>

新制大学は本来は昭和24年4月からのスタートを目標にしていた。3月には新制高校の第1回卒業生が大学の門をたたく。このため「国立学校設置法」も、もっと早い時期に成立していなければならないはずであった。それが遅れたのは、当時の政治的事情による。23年10月、第2次吉田内閣が成立したが、民主自由党の議席数は30%台と少なく、早期解散が予想された。12月解散、24年1月の総選挙で民主自由党はようやく過半数を確保し、2月に第3次吉田内閣が成立、第5特別国会が開かれたのが2月11日、同国会で24年度国家予算が成立したのは4月20日のことであり、新制国立大学の設置は、その後にならざるを得なかった。

文部省は4月初めの段階で、やむなく6月開校の方針を打ち出すが、国立学校設置法案の衆院提出は4月27日、5月19日に参院に付託され、26日に参院本会議で可決、5月31日になって、ようやく法律150号として公布、即日施行となったのである。全国で15万人以上と予想された国立新制大学受験希望者をやきもきさせたことは言うまでもない。

#### <平沢初代学長>

「大学には学長、教授、助教授、助手及び事務職員を置かなければならない」(学校教育法第58条)との規定により、大阪外国語大学設置と同一日付で平沢俊雄が初代学長に補され、兼ねて大阪外事専門学校長を命ぜられた。また初代事務局長には同日付で大阪第一師範学校庶務部長・坂口半造が補された。庶務、会計、施設等に関する事務をつかさどる「事務

局」と「厚生補導に関する部」は、国立学校設置法施行規則で国立大学に置くことが義務づけられた組織であった。「厚生補導に関する部」は「教務部」として発足、8月1日、金子二郎教授が初代教務部長となった。

#### 〈無痛分娩〉

学長につづき教授、助教授、講師も5月31日から6月末にかけて「外国語大学教授兼ねて外専教授」あるいは「外国語大学助教授兼ねて外専教授」という形で次々発令された。大学への移行にあたって、包括校(外専)の教官は、新制大学教官としての資格審査を受けなければならなかったが、外専教官陣は一人残らず大学設置委員会の資格認定をパスしたのである。この時の平沢校長の喜びは前節でも述べたが、教官全員合格というのは他大学には見られない稀なケースであった。事実、旧高等・専門学校、師範学校など数校が統合して誕生した新制大学の場合、資格審査に合格せず、したがって大学に任用されなかったという例は全国的に見られたのである。

このように教官の出血を伴わず、純血を保ったままの大学単独移行は、学内で「無血革命」あるいは「無痛分娩」とよばれたが、このことが、大学になっても依然として専門学校的な教学・研究体制をひきずる結果となったことは否定できない。大学という新しい革袋はできたが、中には古い酒が盛られたわけであり、大学紛争後の昭和47年4月に発足した教授会委員会・外大将来計画委員会での改革テーマに取り上げられることはのちに述べる。

#### 〈外大初の入学者選抜〉

新制大学の入学者選抜については、すでに昭和23年9月、文部省から選抜実施要項が示されていた。その主要点は次のとおりであった。

##### 入学資格

1. 新制高等学校を卒業した者。
2. 通常の課程による12年の学校教育を修了した者および通常の課程以外の課程によりこれに相当する者。
3. 新制高等学校を卒業したと同等以上の学力があると認められた者。
  - (1) 旧制高等学校高等科または大学予科第1学年を修了した者。
  - (2) 専門学校第1学年を修了した者または中等学校卒業程度を入学資格とする専門学校予科第1学年を修了した者。
  - (3) 男女高等師範学校・実業教員養成所または臨時教員養成所の第1学年を修了した者。
  - (4) 師範学校本科または青年学校第1学年を修了した者。

(5) 各都道府県において行う新制大学の入学資格認定試験に合格した者。

#### 入学選抜期日

1. 入学考査期日

昭和24年3月10日から4月20日まで。

2. 入学者の決定

昭和24年4月末日までに行う。

#### 入学試験方法

1. 入学試験の結果は、筆答試験と身体検査および出身学校長から提出される調査書の各成績を総合して決定する。
2. 筆答試験は進学適性検査と学力検査との両者を実施する。
3. 適性検査は、国立・公立・私立を問わず実施しなければならない。国立学校においては、本省が問題を作成し、入学試験と一応切り離して、全国いっせいに実施する。
4. 学力検査は、国語・社会・数学・理科・外国語の5教科群を出題の範囲とし、新制高等学校卒業の学力程度を出題の標準とする。

入学資格では、新制高校第1回卒業生ばかりでなく、旧制高校・大学予科、専門学校などの各1学年修了者にも広く門戸を開放し、新制大学に吸収しようとしているのが目立つ。また入試方法は、前年度に高等・専門学校進学希望者に対して実施された進学適性検査を新制大学にも導入し、(1)全国いっせい進学適性検査 (2)各大学の学力検査 (3)出身学校長からの調査書の3本柱を総合して合否を判定するとされた。何分、広範囲な志願者を対象に初めて行われる入試だけに、文部省からは、その後も各大学創設事務責任者あてに入学資格、出題範囲について詳細な指示が通達され、万全の準備が進められた。24年に入ると進学適性検査実施要項が発表され、同検査は1月31日全国いっせいに行われることが決まった。

#### <第1期募集校>

進学適性検査は予定どおり行われたが、前述のように国会審議の遅れから当初予定の24年4月開校は到底望めなくなってしまった。文部省は2ヵ月遅れの6月開校を決定する。3月31日、各大学創設事務責任者を集めて行われた入試最終打合せでは、入試は6月中に第1期と第2期に分けて実施することが示され、大阪外大は東京、京都、大阪大学などととも第1期募集校(翌年度から第2期校)と決まった。ちなみに東京外大は第2期募集校であった。

5月9日、文部省は入学試験日程を発表、第1期校は6月8日から、第2期校は6月15日から、願書受付は第1期、第2期とも5月13日から26日まで、合格発表は遅くとも6月

29日までに行うことなどが決まった。

6月8日の入試実施まで1ヵ月しかない。本学教職員は学生募集要項や入試問題作成など開学準備に忙殺された。外大入試の学力検査科目、出題範囲、身体検査を含めた実施日程の詳細は、当時の資料を欠くため明らかではないが、別表のとおり中国、蒙古、インドネシア、インド、タイ、英、ドイツ、フランス、イスパニア、ロシアの10語学科280人の募集に553人が志願、283人が入学した。ビルマ、アラビア語学科は隔年募集で初年度の募集はなかった。なおタイ語学科は24年度から設置されたもので、外大は外専時代の11科にタイ語学科を加え計12語学科でスタートしたわけである。

学部	学 科	募集人員	志願者数	入学者数
外 国 語 学 部	中 国 語 学 科	50	76	44
	蒙 古 語 学 科	15	6	6
	インドネシア語学科	20	22	20
	イ ン ド 語 学 科	20	29	27
	タ イ 語 学 科	15	12	10
	ビ ル マ 語 学 科			
	ア ラ ビ ア 語 学 科			
	英 語 学 科	60	205	68
	ド イ ツ 語 学 科	25	39	25
	フ ラ ン ス 語 学 科	25	57	33
イ ス パ ニ ア 語 学 科	25	69	27	
ロ シ ア 語 学 科	25	38	23	
	計	280	553	283

本籍(都道府県)別の入学者は次表のとおりであった。

本籍 男女別	大阪	北海道	岩手	山形	茨城	東京	新潟	富山	石川	福井	山梨	静岡	愛知
男	68	1	1	1	1	6	1	3	2	7	1	2	4
女	2												
計	70	1	1	1	1	6	1	3	2	7	1	2	4

本籍 男女別	岐阜	三重	滋賀	京都	奈良	和歌山	兵庫	鳥取	岡山	島根	広島	山口	香川
男	3	8	6	37	13	12	22	4	8	2	7	7	9
女							1					2	
計	3	8	6	37	13	12	23	4	8	2	7	9	9

本籍 男女別	徳島	愛媛	高知	福岡	佐賀	大分	熊本	宮崎	鹿児島	中国	朝鮮	フィリピン	計
男	3	9	8	2	1	4	3	2	5	2	2	1	278
女													5
計	3	9	8	2	1	4	3	2	5	2	2	1	283



「角帽の時代」始まる。しかし角帽を愛用する学生は少なかった

#### 〈入学宣誓式〉

大学第1回入学生283人の入学宣誓式が6月27日、高槻学舎で行われた。平沢学長は告辞の中で、一時は廃校まで噂されながらも全校あげての努力で新制大学発足に漕ぎつけた喜びを情熱をこめて語った。この日、父兄会からは学園復興の一助にと、木造平屋建建物1棟と渡り廊下(約150平方メートル)が寄付された。大学誕生を祝う贈り物であった。授業開始は7月4日。外大1学年と外専2、3学年が同居する学園生活のスタートであった。

#### 〈開学記念式〉

外語・外専から外大へも引き継がれた創立記念日の11月11日、午前10時から大学開学記念式が高槻学舎講堂で挙行された。来賓の中には赤間文三大阪府知事、今村荒男阪大総長らの顔も見られた。式後、大阪朝日新聞社会部次長・前ローマ特派員、衣奈多喜男(F6)の記念講演が行われた。〔『アーリア学会会報』16号〕

## (4) 大学初期の姿

#### 〈教授会規程の制定〉

大学発足に伴って諸規程も次々制定された。もっとも重要なものは教授会規程であった。「大学には、重要な事項を審議するため、教授会を置かなければならない。教授会の組織には、助教授その他の職員を加えることができる」という学校教育法第59条の規定に基づき、昭和24年10月7日、まず教授会規則が制定された。旧制度下では、大学にだけ学部教授会の設置が認められており、高等・専門学校、師範学校などには、学部教授会に相当するような自治的管理組織はなかったが、この第59条によって旧制時代の大学自治権が新制大学すべてに拡大されたのである。(大阪外国語学校時代も学則細則の「教育事務分掌規定」によって「本校教育事務ヲ管掌スルタメ評議会、主幹、学科主任及び教授会ヲ置ク」と定められていたが、ここにいう教授会は、学校長の諮問に応ずるためのものでしかなか

た)

本学最初の教授会規則は、わずか3条から成る簡単なものであった。

#### 大阪外国語大学教授会規則

- 第1条 本学に教授会を置き学長、教授を以て組織する。  
教授会には助教授その他の職員を加えることができる。
- 第2条 学長は教授会を招集してその議長となる。
- 第3条 教授会は次の事項を審議する。
- 1、法令の規定する事項
  - 2、その他本学運営上重要な事項

#### 付 則

この規則は昭和24年10月1日より施行する。

この教授会規則は翌々26年6月28日改正され、新しい教授会規程が制定された。規則第1条の「助教授その他職員」を「助教授及び常勤講師」としたほか、同第3条の審議事項に重要な規則の制定・改廃に関する事項、人事、教務、学生の補導・厚生に関する事項を加え明確化をはかった。さらに「教授会は構成員の3分の2以上が出席しなければ議事を開くことができない。議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる」との条文が追加された。

教授会規程は、このあと学長に事故ある場合の年長教授による職務代行、専門事項を調査、審議するための教授会委員会の設置などの条項を加え今日に至っている。なお、規程には明記されていないが本学の教授会は早い時期から助手以上の全教官によって構成される民主的なものであった。

このほか昭和24年、25年度中に制定された諸規程は次のとおりであった。

制定年月日	規 程 名	その後の変遷
24・12・15	文書処理規程	
//	当直員服務心得	当日直規程(37・5・1)
25・1・26	職務規程	事務組織規程(35・4・1)
//	分課規程	事務分掌規程(35・4・1)
25・3・30	附属図書館規則	
//	内地研究員研修規程	
25・6・1	職員服務規程	

#### <学則と教育理念>

大学の基本となる大阪外国語大学学則が制定されたのは、これより遅れて昭和26年12月13日(施行は26年4月1日)であった。学則第1章総則の第1条は、本学の使命と目的を次のように述べている。

本学は、外国の言語とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって教授研究し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通じて外国に関する理解を深めることを目的とする。

ちなみに大阪外国語学校の学則第1条は次のとおりである。

本校ハ国際的実務ニ従事スヘキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外国語ヲ教授スル所トス

以上いずれにも「国際的」という言葉が使われているが、本学の学則は、専門学校時代の外国語教授からさらに踏み込んで、言語と文化の教授研究を通じて外国に関する理解を深めるといふ、本来の意味での「国際化」を志向している点が大きな特徴である。

このことは第1次世界大戦後の大正デモクラシー高揚期に誕生した大阪外国語学校の建学理念である「EX ORIENTE LUX ET PAX」（光と平和は東方より）を継承、発展させる一方、第2次世界大戦の反省から、より広く世界に目を開く外国語大学への転生をはかったものといえよう。以下は本学が掲げる教育理念である。

#### 大阪外国語大学教育理念

本学は、外国の言語とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって教授研究し、国際的な活動をするために必要な広い知識と高い教養を与え、外国に関する深い理解を有する有為な人材を育成することを理念としている。

#### <外専最後の卒業式>

昭和26年3月10日、大阪外事専門学校本科第27回の卒業式が行われ、226人が巣立った。外専最後の卒業生であった。3月31日には国立学校設置法が改正され、大阪外事専門学校は廃止となり、大正10年12月の設置以来、30年間の歴史に幕を閉じた。開校以来送り出した卒業生総数は5,666人にのぼる。以下は外専最後の卒業生であり、外大第1回卒業生でもある玉村文郎(同志社大学教授)の回想「高槻学舎最後の卒業生」の一節である。

「わたしたちの外語入学は1948年、敗戦後の物資欠乏時代であった。下駄ばき、払い下げ軍服の学友が多かった。校舎が在学中に焼け、廃校のうわささえ流れていた。フランス科の先生方も、わたしたちの在学中に、みな変わられた。専門学校が新制大学に衣がえしつつあった時期で、旧制最後の卒業式が1951年にあった。卒業まじかに、ようやく落ち着きを得たように記憶する」〔『きんきら50年』〕

3月24日には別科最後の修了式が行われ、145人が修了証を手にした。のちに述べるように大学別科は2ヵ月後に開設されることになる。

#### <初期の教学体制>

学校教育法第52条は、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と

規定している。

「広く知識を授ける」とあるのは、大学における一般教育をあらわすものであり、「深く専門の学芸を教授研究」することは、すなわち専門教育・研究を意味する。このように新制大学は一般的・人間的教養の基盤の上に、専門的学問研究と職業人養成を一体化しようとする理念を掲げて誕生したのである。ここに言う一般教育重視は、米国教育使節団から「普通教育を施す機会があまりに少なく、その専門化があまりに狭すぎ、そして職業的色彩があまりに強すぎる」と指摘された旧制の高等教育機関の弊害を是正しようとするものであった。

本学の教育も以上の線にそって行われたのであるが、初期の教学体制はどのようなものであったか。学則も制定され、1年から4年までの学生がそろって前期、後期課程が完成した昭和27年度について見てみよう。

学則では全課程を4年(前期2年、後期2年)とし、前期課程を修了した者でなければ後期課程には入れないとされ、授業科目は一般教育科目(26年度までは一般教養科目と呼ばれた)と専門科目、体育科目に分けられた。また全課程修了の認定を受けるためには4年以上在学し、最低限度、別表の単位を取得しなければならなかった。(1年の授業は30週を下らないものとし、講義または演習については1週1時間15週をもって1単位、実習は1週2時間15週をもって1単位、体育実技は1週3時間15週で1単位)

科目 \ 単位数	前 期	後 期	計
一般教育科目	36	—	36
専 門 科 目	28	56	84
体 育 科 目	4	—	4
計	68	56	124

#### 〈一般教育科目〉

一般教育科目は各学科共通とし、A、B、C各系列の学科目についてそれぞれ3科目(12単位)以上、合計9科目(36単位)以上を選択して前期2年間での履修が義務づけられた。ただし、「年度によって開講しない学科がある」と断わっているとおり、開学初期には教官確保の関係もあって、すべての学科がそろっていたわけではなかった。

A	人文科学系列 哲学・論理学・倫理学・心理学・宗教学・言語学・国史学・東洋史学・西洋史学・考古学・文学・国語国文学・美術・音楽
B	社会科学系列 法律学・政治学・経済学・商業学・統計学・社会学・人文地理学
C	自然科学系列 数学・物理学・生物学・人類学・天文学・地学・自然科学概論・自然科学史

〈専門科目〉

専門科目は、各学科とも (1) 専攻科目 (卒業論文を含む) (2) 兼修外国語 (3) 専門教育科目に分かれ、それぞれ最低、別表の単位取得が義務づけられた。

専攻科目は、前期では専攻外国語と、その言語圏の文化一般に関する基礎的事項について講義と演習、後期は言語・文学、法律・経済・商業に分けてそれぞれ講義と演習が行われた。

専攻外国語実習は、講読、作文、会話等について前期、後期を通じて行い、第1課程から順次第4課程に及んだ。

兼修外国語は、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、イスパニア語、ロシア語のうちから1以上を選んで前・後期で所定単位を履修しなければならなかった。

中国語 英語 ドイツ語 フランス語 イスパニア語 ロシア語 学科	学科	科目	単位数		
			前期	後期	計
	語 攻 学 科 目	語学 文化] 講義・演習	8	16	24
		実習 { 第一課程 第二課程 第三課程 第四課程	8	8	16
			8		
		卒業論文		4	4
		兼修外国語実習	4	4	8
	専門教育科目		16	16	
	計		28	56	84

蒙古語 インドネシア語 インド語 タイ語 ビルマ語 アラビア語 学科	学科	科目	単位数		
			前期	後期	計
	語 攻 学 科 目	語学 文化] 講義・演習	8	16	24
		実習 { 第一課程 第二課程 第三課程 第四課程	6	6	12
			6		
		卒業論文		4	4
		兼修外国語実習	8	8	16
	専門教育科目		16	16	
	計		28	56	84

研究外国語は別表に掲げる外国語のうちから1以上を選んで履修することができる(ただし年度により開講しない外国語がある)とされた。

- A インド・ヨーロッパ語族  
 インド語群——サンスクリット語・プラークリット語・パーリー語・ヒンドスタニー語・ベンガル語  
 イラン語群——アヴェスタ語・古代ペルシア語・中世ペルシア語・現代ペルシア語  
 ギリシャ語群——古代ギリシャ語・現代ギリシャ語  
 イタリア語群——ラテン語・イタリア語・フランス語・イスパニア語・ポルトガル語・ルーマニア語・プロヴァンス語・カタロニア語  
 ゲルマン語群——ゴート語・ドイツ語・オランダ語・英語・スウェーデン語・ノルウェー語・デンマーク語  
 スラヴ語群——古代ブルガリア語(教会スラヴ語)・ロシア語・白ロシア語・ウクライナ語・ポーランド語・チェック語・ブルガリア語・セルビア語  
 ケルト語群——アイルランド語
- B ウラル・アルタイ語族  
 フィンランド語・ハンガリア語・トルコ語・ウイグル語・蒙古語・満州語・朝鮮語
- C セム語族  
 アッカド語・アラビア語・ヘブライ語・アラム語
- D インド・シナ語族  
 中国語(北京語)・中国語諸方言・タイ語・ラーオ語・チベット語・ビルマ語
- E オーストロネシア語族  
 インドネシア語・ジャワ語・タガログ語
- F ドラヴィダ語族  
 タミール語
- G その他  
 安南語・クメール語・アイヌ語・スワヒリー語・アメリカ土語・エスペラント

専門教育科目は、別表に掲げる学科目のうちから4科目(16単位)以上を選び後期に履修が義務づけられた。

- A 言語文学部門  
 哲学・東洋思想史・西洋思想史・宗教学・美学・社会心理学・史学概論・国史学・東洋史学・西洋史学・世界近世史学・史学史・民俗学・言語学・文学・国語学・国文学・新聞学
- B 法律経済部門  
 憲法・行政法・国際法・民法・商法・社会法・外交史・国際関係論・社会学・経済学・経済史学・経済史・経済地理学・財政学・統計学・金融論・産業経済論・商業経済論・国際経済論・経済政策・社会政策・経営学・商品学・簿記論・会計学・配給論・貿易論・貿易実践・交通論・保険論
- C 教職部門  
 教育原理・教育心理学・青年心理学・教科教育法・教育実習・教育哲学・教育史・教育社会学・教育行政学・教育統計学・図書館学

最後に、体育科目は講義と実技についてそれぞれ2単位計4単位を前期に履修するものとされた。

一般教育科目の編成にあたっては教官の確保に苦勞した。本学では旧制専門学校時代にも法律、経済、商業・商品学、教育学、歴史・地理など「国際的実務」に必要な若干の一般教育科目の授業は行われてきたが、自然科学系列をも含む広範な大学の一般教育科目にまでは到底手が回りかねた。

国立学校設置法一部改正により本学の27年度職員定員は別表のとおり101人と改められたが、現員は149人、併任、別科講師を合わせると175人、絶対的な教官の不足を非常勤講師でカバーせざるを得なかった当時の窮状がうかがえる。

区分	学 長	教 授	助 教 授	講 師	非 常 勤 師	講 師	外 教 国 人 師	外 講 国 人 師	助 手	事 務 官	技 官	雇 員	医 員	傭 人	合 計
定員	1	19	19	8					5	12	1	23		13	101
現員	1	16 併2	17	12 併1	35 別23	12	1		5	13	0	20	2	15	149 併3 別23

(備考=併は併任者、別は別科講師、いずれも外数である)

「着任して、まだ学校の事情も十分のみこめない内に、早くも大学昇格問題に取りくまなければならなくなった。当時は今日のような教授会も各種委員会もなかったので、金子教務課長が中心になって、教官の銘々の意見を徴しながら、計画が進められた。私も相談をうけて、歴史学科のことはもちろん、他の一般教育科目の編成や、教官の配置などについて意見を出した。私は外語に就任する前、14年間京大や東方文化研究所(現京大人文研東方部の前身)の研究室にいて知り合いも多く、また京都に住んでいた関係で、京都方面の講師の依頼を委任せられたことも少なくなかった。一般教育の自然科学の編成に困って、自然科学史という科目をつくり、人文研の藪内清教授に出講をたのんだり、森暢氏に来てもらって美術史を開講したのも、その頃のことである。ちょうど、あちらこちらに一斉に大学が誕生したので、優秀な教官を獲得する仕事はしんどかったけれども、やりがいのあることだと思ってやった」〔「思いつくまま」外山軍治「学生部広報」41号〕

新制大学開校前後の一般教育科目編成や講師確保の苦勞の一端をしのばせる記録である。

#### 〈教職課程の設置〉

ここでは教職課程について簡単に触れておく。戦後の教育改革の方向を決定づけた米国教育使節団報告のことは前にも述べたが、同報告は4年制大学での教員養成についても勧告。これを受けた教育刷新委員会は、(1) 教員は大学において養成すること、(2) 特に

小・中学校の教員養成のため、従来の師範学校・高等師範学校に代わる学芸大学・学部の設置を主張、国立大学設置11原則の中で、各府県には必ず教員養成のための大学・学部を置くこととした。

一方、大学での教員養成に必要な教育課程は教員の資格付与条件とも関連するので、新たに「教育職員免許法」が制定され、昭和24年9月から施行された。それによると免許状は普通(1、2級)、仮、臨時の3種で、普通免許状は原則として大学で教職専門科目を含む所定単位を修得した者に授与される。こうして学芸(のち教育)大学・学部以外の大学・学部、つまり本学のような外国語学部だけの大学においても、免許法に定める単位を修得すれば、専門の学問を修めながら教員資格が得られる画期的な開放制度がとられることになったのである。

昭和24年度版『大学便覧』には、教育学担当として非常勤講師・小田武の名前はあるが、教職課程も教育学講座もまだない。本学に教職課程が置かれたのは翌25年度からである。同年度の『大学便覧』に初めて哲学と抱き合わせながら哲学・教育学講座が登場し、教職科目として教育原論(小田武)、教育哲学(大井慶雄)、教育社会学(作田啓一)、教育統計学(田村市郎)が掲げられたが、教職課程設置初年度だけに、教授陣も教科数も当然、十分なものではなかった。

文部省が決めた「大学において教員養成の課程を置く場合の審査に関する申し合せ」では、教育に関する学部・学科を持たない本学のような大学が教職課程を置く場合の基準として「専任教員を少なくとも3名を置くもの」とし「専任教員は原則として教授または助教授とし、うち2名は教職課程を本務とする」と定めていた。しかし、新制大学発足当初、教員養成大学・学部以外で専任教員3名を確保するのは非常にむずかしかった。本学の場合も、教職課程を本務とするのは小田武だけであった。

こうした現状を考慮して、文部省、大学設置審議会は25年9月、前記審査に関する申し合せに付則を設け、30年3月末までは、(1)専任教員は2名以上(原則として教授または助教授)とし、教職課程を本務とすること、(2)専任教員2名の場合は兼任の教授、助教授または講師1名以上を置くことと定め、基準を緩和する一方、すでに教職課程を設置している大学についても、25年9月30日までに改めて設置申請書を提出するよう求めたのである。

このとき本学が提出した教職課程設置申請書の控えが残されているが、それによると免許種別は高等学校および中学校の外国語科(英語、フランス語、ドイツ語、中国語その他)と社会科(歴史)。当時の12語学科総定員1,120名のうち教職課程単位取得希望者概数を200名と設定し、同課程希望者は一般教育科目、専門科目のほかに教職課程として教育原論、教育心理学(または青年心理学)、教科教授法、教育実習(以上必修)、教育哲学、教育史、教育行政学、教育社会学、教育統計学、図書館学(以上選択)を4年間に履修(必要最低単位20単位)しなければならないとしている。教育実習校は本学に近い上宮中学・上宮高校で

あった。

問題の教員組織については、英語教授法に老田三郎、中国語教授法に吉野美弥雄と2名の本務教授(他に英、中国、フランス、ドイツ語の兼務教授6名)を配し、教育学関係の本務助教授2名(ともに新規採用予定)、さらに兼務講師4名(うち2名は新規採用予定)、計14名で申請している。

こうして昭和26年3月31日付で文部省から教職課程設置について正式の承認が得られたが、(1)外国語科に関しては適当であるが、社会科に関しては不十分である。(2)教育実習指導の責任者を明確にする必要がある。(3)専任教員を増強する必要がある—などの留意事項が付記されていた。

新規採用は思うように運ばなかった。予定した4名のうち、実際に本学に赴任したのは、教育原論・教育史の助教授・岩井竜也と図書館学の講師・仙田正雄の2名だけであった。こうして26年度から教育学講座が哲学から分かれて独立、同年度の教職科目は教育原理、教育社会学、教育史(以上岩井)、教育統計学(田村)、図書館学(仙田)であった。翌27年度からは教育学講座に教育心理学の講師・島崎郁が、さらに28年度からは岩井に代わって助教授・東郷豊治が加わった。東郷は教育原理、青年心理学、教育実習を担当、30年からは教授として、以後長く本学の教職課程を支えた。

28年3月に本学から送り出された第1回卒業生245名のうち教職課程単位取得者が何名いたか、また何名が実際に教職についたかは大学側資料を欠くため明らかではない。教職課程修了者がすべて教職につくとは限らないが、昭和31年度版『同窓会会員名簿』によれば、大学第1回卒業生中、教職についているものは38人にのぼっている。

教育職員免許法は昭和28、29年とひきつづき一部改正が行われ、これに伴って本学では改めて教員養成課程の認定を文部省に申請しているが、このときの免許種類は中学校1級、高等学校2級、免許教科は中・高校とも外国語(英、ドイツ、フランス語その他)と社会、国語である。

免許法は平成元年4月にも改正されたが、最近の本学教職課程の詳細は『授業科目履修案内』に譲る。

#### <表札だけの研究室>

教室など施設の不備は前にも述べたが、研究室も例外ではなかった。大学発足後間もない24年12月刊の『アーヤ学会会報』16号には「我々が現在6人して占めている名前ばかりの研究室」改善を求める沢英三教授の「語学大学の在り方」と題する一文が掲載されている。

「大学教授たるものは今古の別なく飽迄も研究をもってその生命とし、学問の<sup>うんごう</sup>蘊奥を極めることにあらねばならぬ。その目的達成のためには大学の特徴とする研究室の完備こそ急務とせねばならない。いすと机さえあれば教室も事務室も出来る。しかし

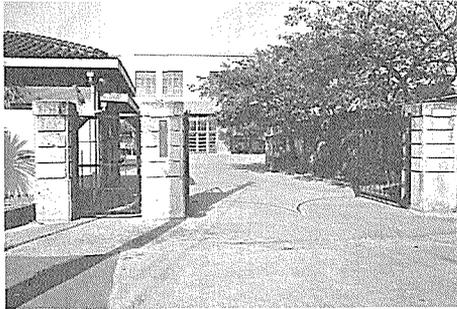
研究室は出来ない。ところが遺憾なことには、我が校の自称研究室は全然名実の伴わない研究室で、可燃性の部屋に、いすと机が置かれあるばかりだ。火災と盗難を恐れて手持の書籍一冊も置く気になれない。中国語とイスパニア語の研究室にだけ申訳ばかりの本が置かれている。盗難を防ごうとすれば、一室に二人以上入れるのは無理だ。何と言ってみても金のない現状では、第二の林蝶子氏でも出現せぬ限り本当の研究室を望むのは不可能事を望むに等しい。少くとも私の在職中ぐらいは、研究室という名札だけで辛抱するほかあるまい。上八時代の一般教官室の方がまだ多くの書籍を持ち出してあっただけに、現在の研究室よりは数倍ましであった」

### 〈大学間の格差〉

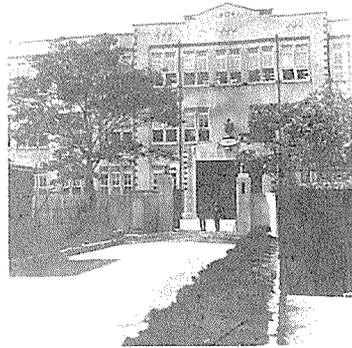
沢教授は大学間の格差についても触れている。

「とにかくにも、この度の学制改革によっておびたしい大学が生まれ出た。そうでなくてさえ、従来から各大学や各専門学校の間には学校差というものがあったが、いっせいに大学昇格を見た今日、この学校差が一段と激しくならざるを得ないのは当然である。同じ官立仲間でも新米の大学よりは、やはり先輩格の旧制度時代からの大学の方が幅をきかし、格式が一段上のように見られるのが普通であろう。そうして、その旧制大学を並有する諸大学のうちでも、いわゆる単科大学よりは総合大学の方が一層上になり、更に総合大学のうちでも北大とか九大のような比較的規模の小さいものより、やはり東大とか京大とかのように古い歴史と大きな規模を誇り得るものの方が格式が上に考えられるのもけだし自然であろう。聞くところによると、東大関係の全職員は無慮5,000名、同じく京大は3,500名、阪大は2,500名といわれる。これに対し、我が大阪外国語大学は61名の教職員と44名の事務職員とを含む総員わずか105名から成る新米の単科大学で、その規模の小なること、全国官立大学のうち最後から第二位であるという。山高きが故に貴からず、大学も規模だけ大きいからとて、あながち偉いわけでもあるまいが、要はその大学が質的に本然の使命を立派に生かし得るかどうかということで、その価値が判定されるのではあるまいか。単にその規模の大小だけに基いて世の評価を受けるものなら、差当り我が校などはたまったものでない。何しろ、我々新米大学教授は、ところてん式に下段から上段へと押し上げられたようなものである。役者も舞台も格別変わったわけではない。千両役者が新に登場したわけでもない。だから、成り上り者とけなされるようなことがあっても致し方もなさそうである。専属教授に未だ一人の博士もいない大学なんて、淋しいものに相違ない。大学の生命とする研究室も前記の始末である。名実伴う大学たること、大学教授たることまた難いかなである」

総司令部民間情報教育局の一府県一大学構想から出発して一府県に必ず一つ、東京、大阪など大都市では数校の設置が認められ、国公立立合わせて200校もの新制大学が誕生した



大阪学舎の正門。右は大正12年のもの



この時期、「駅弁大学」が流行語となった。外国語の専門学府としての歴史とプライドを保持してきた本学にとっても「名実伴う大学」への質的充実・発展が新たな課題であった。

## (5) 高槻から大阪へ

### 〈復帰の第一歩〉

昭和26年5月7日から、一般教育、体育の前期課程を終了した第3学年の授業は大阪学舎で行われることになった。24年度末に別館教室1棟の新築、25年度末には本館の一部復興が完成したため、高槻から上八への復帰の第一歩であった。

空襲で上八校舎を焼失、高槻へ移転したあと、学校当局は高槻での復興・大学移行という将来計画を構想したが、第2章で述べたように、義務教育優先の方針から新制高槻一中に敷地の一部を割譲せざるを得なくなったため、高槻、大阪、花園の3ヵ所を念頭に置いた将来構想を考えなければならなかった。そのころ文部省は上八の焼け跡処理について、焼けた3階建本館を何とか利用する方法はないかと考え、建設省大阪事務所が調査した結果、3階を切り取って下部補強工事を加えれば4階建にすることができるという結論に達した。ところが取り壊しにかかってみると、上層建築は不可能とわかり、本館再建計画は練り直しを迫られた。

「昭和20年3月14日の空襲で、校舎のほとんどが焼けた。3階建の堂々たる建物は、じつは木造だったのである。当時の旧制高校や専門学校の建物は、たいてい木造か煉瓦であったはずだ。私はその翌日駆けつけたが、書庫が健在だったのでほっとした。書庫だけが鉄筋だったのである」〔「西南亜細亜語研究所のころ」陳舜臣「わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)」〕

### 〈第9特別委員会の結論〉

戦災で校舎を失った国立学校の復旧整備は遅々として進まなかった。こうした学校が、

そのまま新制大学に移行した。数校が統合したところでは、施設が分散した「タコ足大学」が常識となっていた。文部省はこのような状況を改善するため、25年10月、大学設置審議会に第9特別委員会を設け、国立大学の総合整備計画の基本方針を諮問した。同委員会は各大学の施設の現況を個別に調査し、翌26年5月、その結論を答申した。

6月2日付で日高第四郎文部次官から本学学長あてに通知された方針は「高槻を大阪に統合すること」であった。同通知には「なお、下記の報告が地方新聞に掲載されるような場合、思いがけない支障たとえば整理すべき施設をできるだけ有利に処分しようとするときに大きな障害となることなども予想されますので、発表の時期、方法、範囲等については地方事情等を十分に御考慮の上、貴学のしかるべき御判断に一任いたします。本省関係においても少数の関係官とその他大学設置審議会関係委員とが承知しているのみで発表いたしません」という注意書きが添えられていた。同通知を受け取った事務局は、直ちに赤鉛筆で〇と書き込んだ。

文部省の方針を待つまでもなく、少ない定員で高槻、大阪の2ヵ所で学校を運営することは到底不可能なことである。高槻断念、上八復帰が決断されたが、実現までにはなお長い年月を必要とした。義務教育である6・3制校舎整備のため、国立学校の施設整備は後回しとなる。27年度までに国・公立学校の施設整備に投入された国の予算は約318億円であるが、うち国立学校分はわずか約49億円〔文部省『学制百年史』〕に過ぎなかった。

#### 〈前期・高槻、後期・大阪〉

27年4月21日から後期課程(第3、4学年)の授業が大阪学舎で行われるようになった。本館復興事業の26年度末完成によるものである。高槻学舎には第1、2学年のみが残った。

この年11月23日、大阪学舎で母校創立30周年記念祝賀同窓会が開かれ、高橋周而、上田畊甫、山本茂、鴛渕一、目黒三郎ら旧教官を含む250人の参加者は、母校の大学昇格と上八への部分復帰を祝った。

#### 〈上八への統合・完全復帰〉

27年度以後、前期・高槻、後期・大阪の分散授業が31年度までつづくが、大阪学舎の西館完成により、32年4月1日からは前期授業もすべて大阪学舎に移り、本学の上八への統合・完全復帰が実現した。21年2月から11年2ヵ月に及んだ高槻時代は、ここに終わりを告げたのである。

上八への統合は実現したが、それで問題が解決したわけではない。3年制の専門学校でも狭い敷地に4年制の大学が戻ってきたのだから、施設の不備は目に余った。

「高槻から大阪へ帰ったのは、帰ったというよりも行くところがなかったからだという方が正確かも知れない。当時の学長平沢俊雄先生のお伴をして、校地を求めてあちこち歩いた記憶があるが、当時の大阪はいかにして食うかということで一ぱいで、

大学の敷地など心配してくれる人は誰もなかったのである。将来行き詰るであろうことは百も承知の上で、上八の故地に再建の礎を築かねばならなかったのである」〔「創立50周年に寄せて」金子二郎「きんきら50年」〕

#### 〈創立35周年記念祝典〉

昭和32年11月11日、大学、同窓会、父兄会共催による母校創立35周年記念祝典が大阪・中之島の中央公会堂で開かれた。式典を機に中断していた同窓会誌も復刊され『35周年記念会誌(特輯号)』として発行された。その中で平沢学長は、上八統合実現を喜ぶ一方で「然し、教室も研究室も不足しているし、体育館も学生控室も講堂もないし、この度のお祝いをする場所もなくて他に借りなければならない有様である。大学らしい大学とするには前途誠にはるかなるかなである」と書いている。大学誕生9年目の偽らざる感想であろう。

外大が高槻を離れたあと敷地、施設はどうなったか、『高槻市史』の記述を引用する。

「敗戦色の濃くなった1945(昭和20)年4月10日、工兵第四連隊は大阪師管区工兵補充隊となり、敗戦時には1,825名の兵力を数えたが、9月12日には解体されることになった。

工兵隊補充隊解体後のその用地と施設については、一時、その学舎を大阪空襲で失った大阪外事専門学校(現大阪外国語大学)が使用していたが、1957(昭和32)年4月より完成した本校舎(大阪市天王寺区)へ移転したので、高槻市はその跡地利用のため、かつて工兵隊へ用地を寄付した経緯を明示しつつ、猛烈な払い下げ請願運動を展開したのであった。その結果、第1中学校・教育研究所・母子寮を旧兵舎を利用して設置することができたのであり、その他市民グラウンド・市民会館・島上高校などの教育・文化・スポーツ施設が続々と設けられ、平和な郷土建設にふさわしい姿へと転生したのであった」

## (6)別科から短大へ

#### 〈別科〉

昭和26年5月21日、夜間の別科が開設された。「大学には、専攻科及び別科を置くことができる。……大学の別科は、前条に規定する入学資格(大学入学資格)を有する者に対して、簡易な程度において、特別の技能教育を施すことを目的とし、その修業年限は1年以上とする」(学校教育法第57条)に基づくものであった。

本学では、旧制専門学校時代にも「簡易ノ方法ニヨリ外国語ヲ教授スルヲ目的トシ」て、大阪外国語学校開校以来、別科(夜間・2年)を開設してきたが、前述のように外専廃止に伴って別科も消滅した。

社会の要請に応じて、当然、大学にも別科を設置しなければならない。26年3月には旧制最後の別科修了生が出る。26年4月開設をめざして準備が急がれた。25年12月、別科設置認可申請書を作成し、翌26年2月、文部大臣に認可を申請したが、申請書は別科設置の理由を次のように述べている。

「本学外国語学部に於ては外国の言語とその文化について理論と実際にわたり教授研究しているのであるが、現に外国関係の業務に従事している者で、その業余の時間を利用して外国語の実験的な知識を身につけたいと考える者が、殊に大阪の土地柄からも尠ならずあり、かかる者のために何等かの施設を設けることを要望されているので、これに応じて社会教育の一端として、又大学の一般社会への開放の意味を含めて、今般下記要項の如く本学に別科を設置したいと考える。なお、利用者の便宜から、それは必ず夜間に於て授業を行うこと及び修業年限をなるべく短くすることが望ましいと認められるので、この点がこの施設の特色となるものであることを申し添える」

別科設置の目的及び使命は「外国関係の業務に従事するものが差しあたり必要とする外国語に関する教養を短期間に授けること」とされ、修業年限は1年(30週 600時間)であった。就学の便を考慮して授業は高槻学舎でなく、上八の大阪学舎で行うこととされた(旧制の別科は一足早く高槻を離れ、すでに24年4月から大阪学舎で授業が実施されていた)。

開設語科は中国、インドネシア、インド、タイ、英、ドイツ、フランス、イスパニア、ロシアの9語科、学生定員は中国、英両語科が100人、他の7語科はいずれも50人の計550人(フランス語科も最初は100人を申請したが別科審査委員会は50人にする条件をつけて承認)であった。

別科の授業は外大教官の兼担が原則であったが、土・日曜日を除く1週5日、毎日4時間、1週20時間、年間30週600時間の授業をこなすためには非常勤講師の委嘱が必要であった。予算折衝のため上京中の坂口事務局長から4月27日、上田明吉庶務課長あてに1通の電報が届いた。

六タテノーヒソノミコミツイタベツカカイコウセラレタシサカグチ

「六タテ」は第1四半期、「一ヒソ」は非常勤職員手当の略号で、「予算の見込がついたから別科を開校せよ」という連絡であった。東京芝局発信が午後3時8分、外大着信が同4時23分。電話事情が極端に悪かった当時、緊急連絡には略号を使った電報が大いに利用されていたようである。

26年6月、第1回の別科生303人が入学した。9語科550人の募集に対して、どれくらいの応募者があったのかは資料が見当たらないため明らかではないが、中国語科29人、英語科84人、フランス語科96人、ドイツ語科67人、イスパニア語科27人、計5語科303人の入学が26年度別科学籍簿から確認されている。インドネシア、インド、タイ、ロシア語科は初年度入学者を欠く。

翌27年度以降はインドネシア、インド、タイ語科の募集を停止、残る6語科のみの募集

となったが、この年は募集定員400人に対し、510人が応募、323人が入学した。初年度に定員を上回る入学者があったのはフランス、ドイツ両語科だけだったが、27年度は英、フランス、ドイツの3語科入学者が定員を上回った。この傾向はその後もつづき、30年度にはイスパニア、ロシア語科も加えた西洋語科すべてが定員を上回る盛況を見せたのに反し、中国語科入学者は定員の25%~50%と低迷した。

31年度から別科の修業年限は2年に延長された。「いくら『簡易な程度において』といっても、1年間では上っ面をなでるに過ぎない」「もっと勉強したい」という学生の要望に応えたものであったが、修業年限延長前も延長後も入学者数はともかく、全課程を修了するものは非常に少なかった。26年度から33年度まで計8回にわたり毎年300~400人の入学者を迎えながら、修了者数は第5回(31年3月修了)と第7回(34年3月同)の各91人が最高で、最低は第8回(35年3月同)の25人。出席不良による退学、授業料不払いによる除籍が非常に多く、修了者数は入学者数の3割から1割という実情であった。

戦後の混乱期に、昼間働きながら学ぶことのできるきびしさを物語る数字ではあるが、別科を修了しても特別な資格が与えられるわけではないという点が、勤労学生の勉学意欲をそぐ結果になった点も見逃せない。こうして別科は、33年開設の外大短期大学部にその使命を引継いで9年間の歴史を閉じる。送り出した修了者は488人であった。

#### <留学生別科(留学生日本語教育センター)>

昭和29年4月1日、本学に留学生別科が設置された。文部省が受け入れる外国人留学生に対し、必要な日本語及び日本事情に関する教育を行うためのもので、定員30人、修業年限1年であった。

これより先、27年4月に対日平和条約が発効、米軍駐留下という条件付きながら独立を回復したわが国は、戦後、欧米諸国が政府資金によって日本からの留学生を多数受け入れたことにこたえるため、政府予算による海外諸国からの留学生招致を計画、文部省は29年度から「国費外国人留学生制度」実施に踏み切った。留学生には研究留学生と学部留学生の二種類があり、研究留学生は欧米諸国から招致するもので、大学・大学院または研究所で1年間、専門研究に従事するもの。一方、学部留学生は東南アジア諸国から招致するもので大学の学部にて正規の学生として入学し所定の課程を終えれば学士の称号が与えられるというもの。この学部留学生に対して、大学学部入学に先立って1ヵ年間、日本語教育を行うため、文部省の要請で東京、大阪両外大に留学生別科が設置されたのである。

富田竹二郎元教授によれば、留学生別科設置以前にも本学ではタイ語科聴講生として常時8~10人のタイ国私費留学生を受け入れており、これら留学生のための別科開設を学長を通じて東京外大とともに働きかけたところ、文部省も認めてくれたということであるが、両者のタイミングがうまく一致したというべきであろう。

国費外国人留学生の初年度受入れ計画は「予算720万円、東南アジア21名、欧米諸国9

名」であったが、実際に来日したのは「東南アジア関係17名、欧米関係6名、計23名」〔『文部省82年報』〕であった。うち本学が受け入れたのはタイの5人とスリランカ(セイロン)の2人、計7人。このタイ留学生から、のちの同国農林大臣、タマサート大学総長、エネルギー公団総裁らが生まれたということである。留学生別科は、これら国費留学生のほかに私費留学生も受け入れたことが、次の記事からうかがえる。

セイロンから初の国費留学生＝ランカー即ちセイロン共和国(注＝北半の国語はタミール語、南半の国語はシンガル語即ちシンハリース語即ちセイロン語)から日本政府による初の国費留学生2名が仏国汽船ラオス号にて本月26日横浜着のうえ来学することになった。一行は海路、28日朝神戸港上陸の由。

なお、去る17日以来、タイ国私費留学生としてチャントナナ・トゥマヴィタヤ嬢が加わったので、これで本学外人留学生別科総人員は国費・私費合わせて11名ということになる。〔29年11月刊「アーリヤ学会会報」26号〕

35年度からは、わが国の賠償金によるインドネシア政府派遣留学生受入れも始まり、39年度からは修業年限が6ヵ月となった。留学生の増加に伴って定員も40年度118人、54年度148人、55年度186人、56年度には219人と増員された。これに応じ教官定員も年を追って増強された。

留学生の種類も多様化し、これまでに留学生別科で、国費研究留学生のほか教員研修留学生、日本語・日本文化研修留学生を受け入れてきた。そのほかに私費留学生として中国、フランス、マレーシア、インドネシア政府派遣留学生などがあり、受入れ総数は99ヵ国、4,067人にのぼる。

留学生別科受け入れ実績調査(1954年～1986年)

国費研究 留 学 生	私 費 留 学 生	外国政府 派 遣 留 学 生	仏 政 府 派 遣 給 費	日本語・ 日本文化 研 修 生	計	聴 講 生	聴講生についての 内 訳
3,647	79	18	3	26	3,773	294	国 費 61 私 費 112 他大学より 99 それ以外 22 (内訳不明、含)

なお、平成3年4月12日、留学生別科を留学生日本語教育センターに改組し、新たに学部留学生(従来は東京外大附属日本語学校に配属されていた学生)20名を受け入れた。

このほか本学の大学院修士課程が受け入れている国費研究留学生、教員研修留学生、中国政府派遣留学生(進修生)および私費留学生についても、日本語教育の面で協力体制を取っており、最近5カ年間この種の留学生の平均受入れ数は18人、10ヵ国にわたっている。

(留学生別科についての記述・資料は、外大将来計画委員会・国際交流専門委員会調査報告書『大阪外国語大学における国際化の現状と将来構想』および「戦後の日本語教育施策



山本みち 昭和29年大阪府立女子大(英文科)卒業、同年本学留学生別科講師として着任、46年同教授、47年定年退官

の発展」大倉美和子『わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)』による)

#### 〈留学生の母・山本みち教授〉

ところで留学生別科の初年度専任教官定員はゼロであった。非常勤で迎えられた山本みち講師ただ一人が教壇に立ち、日本語を初歩から教える一方、衣食住の相談にも応じなければならなかった。住宅事情が悪かった当時、留学生のための下宿さがしは一番骨の折れる仕事だった。外国人と聞いただけで、まず断られるのが普通だった。知人をたずね回り、やっと引受けてもらっても、学生の方から「ベッドがない」「シャワーがほしい」と不満が出る。下宿先からは「留学生は一番風呂にしか入らず、湯を半分以上使う」などの苦情がくる。山本講師はその都度、下宿先に足を運んで文化・習慣の違いを説明し、双方に納得してもらった。こうした苦労は昭和40年3月、花園に留学生寮が完成するまでつづいた。

留学生別科一筋に18年、約30ヶ国800人の教え子を公私両面にわたって親身に世話した山本教授は「外国人に日本語を教える教授法の研究が遅れている。国は研究を積極的にバックアップする姿勢を示してほしい」と、最後まで留学生教育に思いを残して47年3月末、定年退官した(大学院に日本語学専攻が設置されるのは5年後の52年4月である)。インドの教え子からは「退官したらぜひ遊びに来てください」という手紙が届いた。マスコミは“留学生の母”の退官を大きく報じた。〔47年1月30日付『読売新聞』、3月3日付『朝日新聞』〕

#### 〈専攻科〉

昭和31年4月1日、専攻科が設置された。学校教育法第57条は「大学には、専攻科及び別科を置くことができる。大学の専攻科は、大学を卒業した者又は監督官庁の定めるところにより、これと同等以上の学力があると認められた者に対して、精深な程度において、特別の事項を教授し、その研究を指導することを目的とし、その修業年限は、1年以上とする」と規定しており、本学も将来の大学院設置を念頭に置きながら、まず修業年限1年、

全日制昼間の専攻科設置に踏み切ったのである。文部省に提出した専攻科設置申請書は、その目的と使命を次のように述べている。

「本学外国語学部においては外国の言語とその文化一般について、理論と実際の両面に亘つて教授研究しているが、これら学部卒業生に対し、その修得せる教養を基盤として、更に高度にして精深な学識と研究能力を与え、併せて本学教官の後継者を育成せんとするものである」

さらに「特に外国語学部の如き特殊なる学部においては、他に適当な機関のない現状において是非本学に設置を希望する」とも追記した。

最初に設置申請書を提出したのは27年10月であったが認可が得られず、毎年申請を繰り返し、ようやく31年度からの設置が認められたのである。外国語専攻科の専攻科目は、学部語学科と同じ中国、蒙古、インドネシア、インド、タイ、ビルマ、アラビア、英、ドイツ、フランス、イスパニア、ロシア各語学専攻の12部門であった。申請定員は各部門5人、計60人であったが、31年4月1日改正の学則第37条に示されている専攻学科と学生定員は別表のとおりである。

中国語専攻	3名	アラビア語専攻	1名
蒙古語専攻	1名	英語専攻	3名
インドネシア語専攻	2名	ドイツ語専攻	2名
インド語専攻	2名	フランス語専攻	2名
タイ語専攻	2名	イスパニア語専攻	3名
ビルマ語専攻	1名	ロシア語専攻	2名

その後、学部での学科新設に伴って専攻科の専攻科目も増設され、42年度からベルシア語専攻、43年度には朝鮮語、イタリア語各専攻が加わり、専攻部門は15部門を数えるに至った。これら専攻科の設置は、次章で述べる大学院設置のための大きな布石となったのである。

なお、44年度から大学院外国語学研究科(修士課程)が設置されたため、専攻科は朝鮮語、モンゴル語両専攻だけを残し、他は廃止された。45年度には専攻科にデンマーク語専攻が新設されたが、49年度に大学院外国語学研究科の中国語専攻が、中国、朝鮮、モンゴル語を含む東アジア語学専攻に改組されたため、専攻科の朝鮮、モンゴル語専攻は廃止された。以後、専攻科はデンマーク語専攻1部門を残すだけで現在に至っている。

#### 〈短期大学の併設〉

昭和33年4月1日、大阪外国語大学短期大学部(夜間・修業年限3年)が本学に併設された。英語、イスパニア語、中国語の3語科でスタートした短期大学部は翌34年度にドイツ語、フランス語、ロシア語の3語科を増設、6語科となった。国立の夜間短大のうち外国語の短大は全国唯一のものであった。短大発足に伴い大学別科6学科の生徒募集も順次停

止された。

短期大学制度は学制改革の暫定措置として生まれたもので、当初の学校教育法には規定がなかった。新制大学への切替えに際し、教員組織や施設の不備のため4年制大学への転換が認められなかった公・私立の旧制専門学校は50校にのぼったが、これら旧制校をそのまま存続させることはできないため、大学設置委員会は2年制の大学設置を教育刷新委員会へ建議。文部省も24年5月、学校教育法の一部を改正し、暫定措置として25年度から2年または3年制の大学を設けることとし、これを短期大学と呼ぶことにしたのである。国立の短期大学が発足したのは翌26年度からであった。

短期大学設置基準によると「短期大学は、高等学校の教育の上に2年または3年の実際的な専門職業に重きを置く大学教育を施し、よき社会人を育成することを目的とする」とされているが、学校教育法上の規定では、あくまで暫定的なものと考えられたため4年制大学の修業年限の特例として扱われ、目的・性格は必ずしも明確なものではなかった。

しかし、短期大学は4年制大学に比べ父母や学生の経済的負担が少ないこと、短期間に実際的な専門職業教育が受けられること、特に女子高等教育の場として手ごろであると受けとめられたため、制度発足の25年度には149校の公・私立短大が誕生、その後も増加の一途をたどる。そのほとんどは昼間・2年制のものであった。

こうした短期大学の発展を背景に、関西財界から「勤労学生のために夜間の外国語短期大学を設置してほしい」との要望が高まった。昭和25年6月の朝鮮戦争勃発を契機に起こった「特需」景気で、敗戦後停滞していたわが国の生産活動は活発化し、企業経営も好転、経済界は隣国の動乱による繁栄を謳歌するに至る。電気洗濯機、掃除機、冷蔵庫が「三種の神器」と呼ばれ、家庭電化時代が到来、31年に経済企画庁が発表した経済白書では、技術革新による発展が強調され「もはや戦後ではない」が流行語となった。

財界からだけでなく、大阪府高等学校定時制教育振興会からも、定時制高校卒業後の「受け皿」として、短期大学設置を望む声が強まり、本学短期大学部開設に際しては同振興会から1,000万円の施設整備費寄付も約束された。

こうして本学は32年4月開校めざして31年9月、夜間3年制、英語、スペイン語の2語科だけの短期大学部設置を文部省に申請したが、このときは設置認可は得られなかった。教員組織の不足か施設不備か、理由は明らかでないが、その後、中国語を加え3語科とした設置申請が認められ、33年度からの開学に漕ぎつけることができたのである。4月に入試、5月16日、短期大学部第1回生116人を迎えて入学宣誓式が行われている。翌34年度からドイツ、フランス、ロシア語科を増設、6語科の入学者は189人。入学定員は英語科が50人、他語科はいずれも30人であった。

この短大は本学に併設された、いわば独立の短期大学であり、したがって学長、事務組織などは本学とは別個に設けられるべきものであったが、本学自体の規模も小さかったため、短大学長は外大学長が兼任、発足当初は事務長も大学庶務課長の兼任であった。

前に述べたように別科の教官はすべて外大教官の兼任であったが、短大では専任教官が  
ついた。学部各語学科の助教授、講師が短大の教授、助教授にプロモートされたが、それ  
でも足りないので、非常勤講師という形で学部教官の応援に頼らざるを得なかった。

短大では学部を置かず学科を単位として構成されており、学則によると授業科目は一般  
教育科目、専門科目、兼修外国語科目、体育科目に分かれ、3年間で62単位(36年度まで)  
を履修するものとされた。37年度からは別表のように70単位となった。これは学部の卒業  
要件124単位(36年度まで)～148単位(37年度以降)のおよそ半分であり、なかでも一般教  
育科目は学部36単位に対し12単位と1/3に圧縮されており「外国語を通じて国際実務に従  
事するに必要な専門的教育」(短大学則第1条)に重点が置かれていたことがわかる。

	一般教育 科目	専 門 科 目		兼修外国 語 科 目	体育科目	計
		専攻科目	専門教育 科 目			
1 年	12	14	12	4	2	70
2 年		10		4		
3 年		12				
計	12	36	12	8	2	70
		48				

### 〈短大の問題点〉

短大の目的・性格が明確なものでなかったことは先に述べたが、そのため教育現場では  
多くの悩みや問題を抱えていたようである。小林武三短期大学部主事が『学内報』6号  
(38年10月1日発行)に寄せた一文を引用する。

#### 暗い夜間短大

私たちの短大も創設6年目、教官定員も24名という国立短大では一番の大所帯にな  
り……御同慶にたえません。こうした順調な歩みを続けている短大も、制度上たいへ  
ん曖昧な点が多く、その上夜学であるため難問題がたくさんあります。「短大卒業生は  
学部3年に編入する資格があるか」「短大を卒業しても高校卒としてしか待遇されぬ」  
等学生の質問や訴えを耳にする毎に、私たちは身を切られるような辛さを覚えました。  
短大設置基準には短大は「4年制大学との連けいの役割をも果たすことができる」と  
明記していますが、現実には国公立大学の門はかたく閉ざされています。またかりに  
編入の道があっても、働く者が職を放棄しなければならず、犠牲があまりにも大き  
すぎます。高校卒業で就職したという理由で、せっかく3年間堂雪の功を積んでも短大  
卒業生として待遇してくれないのが一般企業の態度でした。

## 併設短大の問題点

国立の夜間短大は「短期大学部」と「部」を加えて呼びます。「部」がつくために母体学部の一学部であるような誤解を招きやすいので、設置基準の解説で「その併設する大学の一学部でない」と強く断っています。こうした説明にもかかわらず、一方では併設短大にはそれ自体の施設・設備もなく、予算も定員も一本である実情から、母体学部と併設短大との現場にはいろいろな解釈がうまれる余地ができ、問題がまき起されるのも避けられないと思います。こうした便宜的な取扱いが行われながら、教官の身分だけは学部と短大の間にハッキリ一線がひかれています。第二学部ならば、「任大阪外大教授、命短期大学部勤務」といった扱いができますが、短大と学部との関係ではできません。「併設」という用語は「附置」とはちがって、国立夜間大学にだけ使われています。6月の国立短大協議会で文部当局から、「附置という用語は研究所や病院等その母体大学が使用する場合に使う」旨の説明がありました。もともと短大は発足当初から「大学」の仲間に入れるのに難色が示され、その結果「当分の間」といった扱いを受けることになり、やがて「専科大学」の別枠入りが考えられたりしましたが、それまでに伸びた私立女子短大側の強い政治力に「専科大学」案は潰れ今日ではもう大学の枠からははずすことができにくいように思えます。ただ国立併設短大だけが、制度上の不備の皺よせを受けたまま10年以上も放置され、後から誕生した弟分の「高専」（工業高等専門学校制度）が脚光を浴び、豊富な予算の裏づけで手厚い扱いを受けるのを見せつけられては短大たる者いささか僻まざるを得ません。文部省はさすがに「短大は瘦せても枯れても大学だから専門学校とは違って研究の使命がある」と区別をつけてくれます。栄養不良の短大がどうやら養育に値すると判断され「当分の間」という条件が除かれる時機も近づいて来たように思えます。

小林主事の予想どおり「当分の間」という暫定措置規定は、39年6月の学校教育法一部改正で削除され、短期大学は恒久的な制度となる。目的も「深く専門の学芸を教授・研究し、職業または實際生活に必要な能力を育成する」と明確化された。さらに短大卒業者の4年制大学への編入学も可能となった。

しかし、このころすでに本学では短大の限界を見極め、昼間の4年制大学と同じ資格がとれる夜間の学部、つまり外国語学部第二部設置の方針を固めつつあった。第二部設置を望む声は短大在大学生の間からもしばしば聞かれたばかりでなく、定時制高校側からも強く要望された。経済高度成長の波に乗って社会全般に高学歴志向が強まっていたのである。

### 〈二部即時編入要求〉

第二部の成立については次章で述べるが、40年4月の開設を前にして、39年秋から短期大学部学生の「二部即時編入」運動が活発化する。第二部の開設に伴って、40年度の短大生募集は停止されることになるのだが、短大学生たちは「我々の心のふるさとが失われて

しまう」と短大廃止に反発、さらに40年3月に卒業することになる3年生は「もっと勉強したい。第二部ができるなら我々を二部4年生として受け入れてほしい」と希望、短大自治会は学生集会を開いて教授会に要求を提出する。

勤労学生の当然といえば当然すぎる切実な願いであったが、当時の森沢三郎学長は「国立学校設置法では新設大学は第1年次から始まる。初年度は1年生しかいない」という原則論から一步も譲らない。学生の二部即時編入要求に理解を示す講師、助手ら若手教官陣は短大当局の機械的な対応に反発。教授会で「原則はともかく、学生の気持ちを汲んで代表が文部省に出向き事情を説明して問題解決の糸口をさぐる努力をすべきだ」と、柔軟な対応を求めたが、結局この主張は認められず、短大学生の第二部即時編入は実現せずに終わった。

国立ではないが大学設置審議会の認可を得て28年度から4年制の第二部を設置した神戸市外国語大学では、二部を希望する短期大学学生を選考のうえ、それぞれ相当学年に編入して初年度に第1、第2、第3学年を開設、翌29年度には第二部を完成させ、勤労学生の要望に応えている。〔『神戸市外国語大学二十年史』〕

本学ではその後43年度に至って経過措置として短期大学部卒業生の第二部4年への編入を認めた。このため短大卒業かつ第二部卒業という経歴の持ち主も多い。

本学併設短期大学部は44年3月31日、開学以来11年間の任務を終え廃止された。卒業生総数は632人にのぼる。



# 第4章 大阪外国語大学の発展と変容

(ジーンズの時代)

## (1) 外大の整備拡充

中国、蒙古、インドネシア、インド、タイ、ビルマ、アラビア、英、ドイツ、フランス、イスパニア、ロシアの12語学科を持つ新制大学として新しいスタートを切った本学は、大学としての基礎を固める一方、留学生別科、専攻科、さらに短期大学部も設置してきたが、安保闘争と経済高度成長を決定づけた国民所得倍増計画策定で始まる1960年代以降、わが国の国際化に対応して語学科の新設と改称・改組を重ね、学問領域を広げる一方、短期大学部を発展的に解消した第二部、さらに大学院外国語学研究所(修士課程)を設置し、大学組織の量的拡大も進めていった。この間、大学の在り方の見直しを迫る大学紛争、本学学舎の箕面移転を経験したことは、記憶に新しいところである。

語学科新設の経緯などは、第2編第1章の各語学科史の項でも取り上げられるので、以

年度 (昭和)	語 学 科 新 設	改 称 ・ 改 組 (旧 名 称)	そ の 他 の 事 項
36	ペルシア語学科		
37		モンゴル語学科 (蒙古語学科)	
38	朝鮮語学科		
39	イタリア語学科		
40			第二部設置
41	デンマーク語学科	インド・パキスタン語学科(インド語学科)	
44			大学院設置 大学紛争
52		タイ・ベトナム語学科 (タイ語学科)	
54	ポルトガル・ブラジル語学科		箕面移転
59		インドネシア・フィリピン語学科 (インドネシア語学科)	
60		デンマーク・スウェーデン語学科 (デンマーク語学科)	
62	日本語学科		
63		アラビア・アフリカ語学科(アラビア語学科)	

下は年を追って新設、改称・改組のあと(別表参照)を簡単にたどってみる。

#### 〈ペルシア語学科〉

大学として最初の新設は36年度のペルシア語学科であった。本学とペルシア語との関係は古く、大阪外国語学校時代の大正14年から、当時の印度語部の兼修語としてわが国最初のペルシア語を開講した歴史を持っている。最初は天理外語で英語を担当していたナンド・ラル・カプールが教えたが、昭和4年からはペルシア出張から帰国した沢英三印度語部教授の担当となり、のち山本健太郎教授が加わった。大学になってからも初年度の24年から研究科目、のちには研究外国語として両教授がペルシア語を担当してきており、独立語学科として新設に踏み切る条件は早くから整っていたといえる。この時期、わが国の経済成長に伴って、石油輸出機構(OPEC)の一員であるイランに対する社会的関心が高まってきたという時代的背景も見逃せないであろう。

新設ペルシア語学科の教官陣は学科主任山本健太郎、伴康哉、加賀谷寛、(以下兼担)勝藤猛、モルケ・カーゼム・プールであった。

#### 〈モンゴル語学科〉

37年度から蒙古語学科はモンゴル語学科と改称された。直接の動機は前の年36年11月27日の国連総会でモンゴル人民共和国の国連加盟が承認されたことによるものであった。「蒙古」はモンゴルの漢字音訳であり、中国では「モングー」と発音するが、日本では「モウコ」と漢音で読み、正しい音を現わしたものではない。わが国では戦前、外蒙古、内蒙古と分けて呼んでいたが、内蒙古は中華人民共和国成立以来、内蒙古自治区となり、外蒙古は1921(大正10)年の人民革命を経て、1924(大正13)年のモンゴル人民共和国成立以降、中国の支配を離れ完全な社会主義独立国家である以上、蒙古という呼称はふさわしくなく、国連加盟を機会に正しい民族国家の呼び名であるモンゴルに改めることにしたものである。

本学のモンゴル人教師は、24年度大学便覧に名前のあるウルジートを最後に、以後日本人教師のみによる教育がつづいたが、47年2月に至ってわが国とモンゴル人民共和国との国交が樹立され、52年12月、ウランバートル大学からスレンギーン・モーモーが赴任、以後、外国人教師不在の問題は解決した。

#### 〈朝鮮語学科〉

昭和38年4月1日、本学14番目の語学科である朝鮮語学科が新設された。大学になってからは、36年度のペルシア語学科に次ぐ2番目の新設である。わが国と一番近い隣国という地理的条件からして、古代から深い文化的かかわりがあり、現にわが国には約70万人の在日韓国・朝鮮人が居住しており、日本で一番多く使用される外国語が朝鮮語なのである。にもかかわらず、わが国における朝鮮語・文化研究の歴史が浅いのは、明治43年(1910)年、

わが国による韓国併合以来、第2次大戦終結まで実に35年間に及んだ苛酷な植民地支配によるものと言わざるを得ないであろう。

東洋語重視を掲げた歴史を持つ本学においても朝鮮語が研究語学として取り入れられたのは、ようやく昭和37年度からであり、塚本勲が担当した。それが翌38年度に早くも新語学科誕生となったのである。文部省の理解もさることながら、本学の朝鮮語重視の熱意が認められたものといえよう(ちなみに東京外大の朝鮮語学科設置は昭和52年である)。

初年度学科主任は中国語の金子二郎の兼担、塚本と外国人教師・金思燁が朝鮮語入門と会話、岡崎精郎が「朝鮮の土地と歴史」についての講義を担当した。語学科新設と同時に始められた「中之島朝鮮語講座」、さらに52年からの「いかいの朝鮮図書資料室」は、教員、大学院生、学生有志による市民運動として定着している。

#### 〈イタリア語学科〉

東海道新幹線が開業、東京オリンピックが開催された昭和39年の4月1日、イタリア語学科が新設された。東京外大、京都大学に次ぐわが国で3番目のイタリア語教育・研究組織である。イタリア語はすでに大阪外国語学校時代から仏語部の兼修語であり、日野月明喜、徳尾俊彦らが授業を担当した。大学になってからも徳尾に教えを受けた附属図書館事務長・宮本幸三郎が研究外国語としてのイタリア語を担当してきており、こうした長い蓄積と日伊の文化的・経済的交流の高まりを背景にイタリア語学科が新設されたのである。開設初年度は学科主任の宮本幸三郎と池田廉が担当。外国人講師は専任のワクが取れず、星光学院のイタリア人神父の協力を頼った。専任外国人講師アレッサンドロ・ベンチヴェニを迎えたのは翌40年度からである。

#### 〈デンマーク・スウェーデン語学科〉

国立大学では唯一の北欧研究機関であるデンマーク・スウェーデン語学科は、まず昭和41年4月、デンマーク語学科として新設された。60年に至ってスウェーデン語課程が加わり、デンマーク語学科は複合語学科デンマーク・スウェーデン語学科として新発足したのである。

本学で研究外国語として初めてデンマーク語の授業が開講されたのは33年度からであり、哲学の大谷長が担当した。28年4月、本学に赴任した大谷は、キェルケゴール哲学が専門で、学位論文「キェルケゴールに於ける授受の弁証法」によって37年3月、京都大学から文学博士の学位を受けた。大谷の存在がデンマーク語開講、さらにデンマーク語学科新設につながったことは否定できない。デンマーク政府からはデンマーク語大辞典全28巻はじめキェルケゴール著作集など多数の貴重図書が本学に寄贈された。

一方、研究外国語スウェーデン語の開講はデンマーク語学科新設の41年度からであり、附属図書館視聴覚資料係長の小室昌久が初級スウェーデン語を担当した。

#### <インド・パキスタン語学科>

昭和41年度からインド語学科はインド・パキスタン語学科と改称された。1947(昭和22)年8月のインド、パキスタン両国の分離独立に伴って、従来のウルドゥー語はパキスタンの国語、ヒンディー語はインドの主要公用語というように性格がはっきりしてきた。外語一外専時代、ウルドゥーを主体にヒンディーを従としてきた本学も、新しい情勢に対応してわが国との文化・経済的なつながりが深く、人口も多いインドを念頭に、大学ではヒンディーに重点を置くようになる。将来的にはヒンディー、ウルドゥー両語をそれぞれ独立の語学科にする構想が沢英三教授らによって練られたが、当時の貧しい文教予算では許されるはずもなく、結局は大学昇格から17年を経て複合語学科の形でインド・パキスタン語学科となったわけである。

単独語学科の新設を申請しても文部省はなかなか承認しないが、既設語学科の拡充・改組という形の複合語学科なら概算要求も通りやすいところから、以後、数多くの複合語学科が誕生し、学生定員増、さらに教官定員増につながっていった。

#### <タイ・ベトナム語学科>

昭和52年度にはタイ語学科にベトナム語専攻が併設され、タイ・ベトナム語学科が発足した。ベトナム語は戦前、昭和18年から「安南語」の名で、大阪外語仏語部の兼修語に取り入れられた歴史を持つ。大学昇格後も研究外国語としてベトナム語が挙げられていたが、実際に開講したのは34年度からで、大阪外語仏語部卒業で『ベトナム語入門』の著書もあるフランス語学科の黒木義典が週2時間、初級ベトナム語を担当した。こうした実績の上に立ってタイ・ベトナム語学科が成立したのであるが、1975(昭和50)年4月、南ベトナムの無条件降伏、解放戦線軍のサイゴン(現ホーチミン市)無血入城で終結したベトナム戦争を通じて高まったベトナムへの関心も、この語学科発足の背景の一つに数えられよう。

新発足の前期半年間はベトナム語専任講師が不在だったため、東京外大、京大東南アジア研究センター、民族学博物館からの非常勤講師に頼った。東京外大からの竹内与之助は大阪外語仏語部卒業後、政府から派遣され旧サイゴン市で日本語教育に従事、帰国後、東京外大に招かれたという経歴の持ち主である。52年10月になって高橋保、富田健次が着任、翌53年度にはベトナム人講師レ・ヴィエット・チュン、初代客員教授レ・ヴァン・フックを迎え、ようやく教授体制が整った。

#### <ポルトガル・ブラジル語学科>

昭和54年度からはポルトガル・ブラジル語学科が新設された。わが国に初めて渡来した西欧人がポルトガル人であったことから、パン、カステラ、ボタン、ピロード、カルタ、シャボンなど日本語化したポルトガル語は数多い。一方、南米のポルトガル語圏であるブラジルは、明治41(1908)年に初めてわが国の移民を受け入れて以来80数年、現在120万人を

超える最大の日系人集団が生活している。1960年代以後の高度成長に伴う日本企業のブラジル進出も目ざましく、このような背景から本学にもポルトガル・ブラジル語学科が新設された。

本学におけるポルトガル語教授の歴史は古い。大阪外国語学校開校当初から西語部の兼修語であり、大正13年には鹿野久市郎、昭和2年にはポルトガル人講師カルロス・コリチラーノ・デ・コウト、3年から16年まではペドロ・ピセンテ・デ・コウト、17年からはウェンセスウ・ジョセ・デ・コウトの名が見える。独立語部としてもおかしくない陣容であった。大学になってからも初年度の24年からイスパニア語学科の国沢慶一が担当。41年度以降は非常勤講師の小嶋厚子、河村昌造が加わった。

#### <インドネシア・フィリピン語学科>

昭和59年度からインドネシア語学科は、フィリピン語課程を加えたインドネシア・フィリピン語学科として新発足した。フィリピン語専攻コースは、わが国の国公立大学でも唯一のものである。

フィリピンはスペインにつづくアメリカの植民地時代、さらに第2次世界大戦中は日本の軍政時代を経験するなど苦難の時代を経て1946(昭和21)年7月、フィリピン共和国として独立した。わが国とは政府開発援助(ODA)や商社、銀行、メーカーの進出、さらに近年はフィリピン労働者の日本流入も増大、経済的関係は深い。しかし、同国の言語、文化研究の歴史は浅く、本学が関連外国語科目の研究語学に初級タガログ語を取り入れたのは57年度からであり、『フィリピン語入門』の著者である和泉模久が担当した。新語学科初年度からは津田守が前期第1課程のフィリピン語文法、講読を担当、客員教授ビエンベド・ルムベラの着任は60年度からである。

#### <日本語学科>

昭和62年4月1日、日本語学科が新設された。本学で一番若い新設語学科である。日本を離れ外国で暮らしてみると、それまで見えなかった日本の側面がいろいろと見えてくる、とは外国生活を経験した人々がしばしば口にするとところである。毎日の生活の中で絶えず異文化と接するうちに、それまで特に気にせず当然のように受けとめていた日本文化・社会構造の特徴がはっきり意識されてくるということであろう。初期の留学生別科(現・留学生日本語教育センター)の日本人教官も、留学生の質問を通じ、改めて日本語および日本文化の特性を見直すという、外国生活者と似たような経験をしたものである。このように異文化との比較による日本語および文化・社会構造の客観視、つまり外<sup>そと</sup>から見た日本という視点を導き入れて生まれたのが、日本語学科であった。

飛躍的な経済発展を背景に国際社会の中での比重が高まるにつれて、外国人の日本語学習者数は急激にふえてきた。政府の日本語教育振興策も昭和55年以降、積極的に展開され

るようになり、本学の日本語学科新設もその一環ではあるが、単に日本語教師養成という狭い意味ではなく、広く世界に向けて日本の言語・文化を発信する役割も担うものであることは言うまでもない。

本学にとって日本語学科設置は長年の懸案であった。43年度から東京外大に特設日本語学科が設置されたが、本学でも45年6月の教授会で、当時の牧学長代行から、特設日本語学科設置の計画があり、研究委員会を設けて慎重に事を運びたい旨、報告されている。その後、将来構想の一環として日本語学科が計画され、初めて概算要求書に登場したのが52年、しかし同年4月1日付で大学院に日本語学専攻が増設されたこともあって、学部日本語学科新設要求は先送りされた。61年2月の第1回日本語学科設置検討委員会から同年12月の設置準備委員会に引継がれ、討議を重ねること18回、ようやく62年度からの新設が決まったのである。

日本語学科最初の採用人事も学内公募で行われ、吉田金彦、小泉保が決定。翌63年度には小矢野哲夫、大倉美和子が加わった。

#### <アラビア・アフリカ語学科>

アラビア語学科は昭和63年度からスワヒリ語専攻を加え、アラビア・アフリカ語学科と改称された。日本の82倍の面積を持つ巨大な大陸アフリカで話される1,000近い言語のうち、もっとも重要なものは北アフリカのアラビア語と、東部・赤道アフリカの10ヵ国(タンザニア、ケニア、ウガンダ、ザイールなど)約7,000万人が使うスワヒリ語である。大阪外国語学校時代の昭和15年から亜刺比亜語部を設置してきた本学は、わが国の大学で唯一のスワヒリ語専攻コースを置くことによって、アフリカ言語・文化研究、新しいアフリカ学の拠点づくりに踏み出したのである。

本学のスワヒリ語教育・研究の歴史は、昭和37年度後半から研究語学の1科目として田中庸雄が担当したのが最初である。40年度から50年度までは五島忠久、51年度は不開講であったが、52年度からは宮本正興、57年度からは中島久が担当してきた。一方、56年度からはスワヒリ語がアラビア語学科の第4講座に組み込まれたため、60年度には外国人講師アマニ・ジュマ・カシニアが迎えられた。スワヒリ語専攻コースが発足した61年度からはスレイマン・ジュマ・オマルと稗田乃、63年には守野庸雄が加わり、アラビア・アフリカ語学科として新発足したのである。

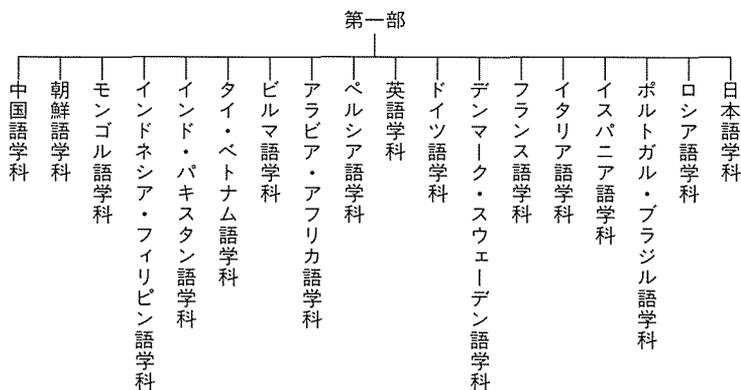
#### <トルコ語専攻コース>

平成4年度からペルシア語学科にトルコ語専攻コース(15名)が増設された。

トルコはアラブ諸国、イランと並ぶ代表的イスラム文化圏であり、欧米ではほとんどの中東研究機関でトルコ語研究が進められている。本学でも昭和53年度から関連外国語科目の研究語学に取り入れられ、『トルコ語文法読本』などの著書もある勝田茂が担当、62年度

からはペルシア語学科の後期講座に組み込まれた。さらに、平成2年にはチュルク系諸言語コレクションを購入するなど、基本図書も充実してきたため、トルコ語専攻コース増設に踏み切ったものである。

トルコ語専攻コースの発足により、12語学科でスタートした本学第一部は、別表のように18語学科・24専攻を擁するまでに成長した。大阪外国語学校創設時の9語部に比べれば、その教育・研究領域の拡大は誰の目にも明らかである。しかし、大学移行から40年余を経て到達した今日の姿が、急速な国際化を迫られているわが国の社会・経済的な要請に十分応え得るものであるかどうか、さらに世界の言語をカバーして外国の言語・文化研究のキー・ステーションを旨とする本学として、将来の大学改革の方向はどうあるべきかについては、さらに学内での論議を深める必要があろう。



### 〈第二部の成立〉

「働きながら学び、学士号も得られる夜間の大学を」という勤労学生、さらに経済界の要望にこたえ、昭和40年4月1日、本学に外国語学部第二部(中国語、英語、ドイツ語、フランス語、イスパニア語、ロシア語の6語学科)が設置された。学校教育法第54条「大学は夜間においても授業を行う学部を置くことができる」は大学教育の機会を勤労学生にも広く開放しようとの理念に基づくものである。第二部設置に踏み切った背景は前章〈短期大学部〉の項でも触れたが、40年1月提出の外国語学部第二部設置認可申請書も次のように述べている。

本学第二部は教育の機会均等の見地から地域社会の勤労青年のために、大学の門戸を開放するとともに、国際的な活動に必要な語学力と実務能力を兼ねそなえた人材の育成を求める地元産業経済界など各界の強い要望に応じて、外国語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際を教授研究し、貿易と産業経済の両面にわたって我が国の国際的地位の発展向上に寄与することを目的とする。

この時期、横浜国立大、九州工業大などのように短大の限界を見極めて第二部設置に踏

み切った大学は多かったが、本学第二部は外国語学部としては国立大学で唯一の夜間学部であった。40年4月1日施行の改正学則によれば、第二部に置かれる学科と入学定員は別表(A)のとおり6語学科、220人、前期3年・後期2年の5年制であることを除けば、学科課程は第一部とほとんど同じであり、卒業に必要な単位数も別表(B)のように144単位と、第一部の148単位に比べ専門科目が4単位少ないだけであった。

別表 (A)

学 科	入学定員	学 科	入学定員
中国語学科	30	英語学科	70
ドイツ語学科	30	フランス語学科	30
イスパニア語学科	30	ロシア語学科	30

別表 (B)

科 目	単 位 数		
	前 期	後 期	計
一般教育科目	36	—	36
専 門 科 目	40	64	104
体 育 科 目	4	—	4
計	80	64	144

第二部設置のもう一つの背景に、教官定員増大の狙いもあったようである。正木恒夫教授は昭和51年・二部英語学科発行の『英米研究の手引』に寄せた「二部英語科の歩み」の中で次のように記している。

「1965年になって、短期大学部は更に5年制の二部に「昇格」するが、それは教育内容そのものの充実や、学生の要求に促がされて起こった変革というより、「短大」教員の学内差別に対する抵抗が、大学上層部の拡張主義と結びついて実現した、上からの改革という性格が強い。貧困な文教予算の下で、国立大学は競って学部や学科の増設を企て、それを通じて人員や予算の拡大をはかる。その際予算要求のテクニックが先行して、学問的、教育的配慮が置き去りになることすら少なくない。残念ながら我々の大学も、その例外ではなかった。(中略)人員と予算の上では二部の恩恵に浴しながら、二部学生に対する教育にはきわめて冷淡であり、むしろこれを厄介視するのが教授会の大勢であった。二部に教員を採用する場合には、「当分御苦労だがいずれ一部の方へ」などという口約束が、半ば公然と行われた」

教官数の多い中国語、英語学科は別として、その他の語学科は、第一部の教官定員増がないため、第二部設置で増えた教官定員を一、二部で共有することによって、ようやく大学らしいゼミナール中心のカリキュラムが編成できるようになった、つまり「二部の恩恵」に浴した、というのが当時の実情だったようである。開設初期のカリキュラムの内容などはどうであったか。再び正木教授の一文を引用する。

「二部発足当時のカリキュラムは、ほぼ一部のそれを踏襲していた。卒業に必要な単位数は、一部とほとんど同じ144単位(45科目)であり、その中心をなすのが学年進行によるクラス編成の実習科目(講読、作文、会話、LL)であった。ほんのひとにぎりの講義科目(英語学、英文学)が、かろうじてカリキュラムに大学らしい彩りをそえている程度で、もちろんゼミもなかった。しかも開講科目のほとんどが必修科目であり、

かつ学年進行制が厳格に守られていたから、学生は常に留年の不安にさらされ、教師は教師で落第生を出さないための成績操作に四苦八苦する有様だった。このような貧弱で硬直したカリキュラムは、外国語学校創立以来の伝統をうけつぐもので、それは戦後外事専門学校が外国語大学に生まれ変わっても、大きくゆらぐことはなかったのである」

第二部は以上のように多くの問題を抱えてスタートしたのであったが、44年の大学紛争を経て、大きな変容をとげる。

#### 〈第二部の改革〉

大学紛争の経過と、その後の制度的改革に関しては次節で述べるが、第二部の改革については、ここで簡単に触れておく。第一部と共通する点も多いが、45年度からの新カリキュラムの特徴は、次のようなものであった。

- (1) まず学生に自主的学習時間を与えるため、卒業に必要な最低単位をこれまでの144単位から124単位に削減、さらに必修科目を最小限にとどめた。これは第一部においても従来の148単位を144単位に改めたほか、後期の必修負担を軽減した措置と狙いを同じくするものであった。
- (2) 学習に系統性を持たせるため、言語、文学、文化(歴史、思想、政治、経済)の3分野にわたって専門書講読、講義からゼミナールに至る学習体制が整備された。
- (3) 語学実習については初級のみを必修とし、他は選択とすることによって、卒業後、高度の語学力を必要とする者と、しない者の間に選択の幅を認めた。
- (4) 学年進行制(落第制)が廃止された。
- (5) これまで前期での履修が義務づけられていた一般教育、保健体育科目は5年間にわたっての履修が可能とされた。これも第一部の改革と共通したものである。

#### 〈推薦入学と社会人特別選抜〉

昭和54年1月、国公立大学入試の共通1次学力試験が実施され、全国225会場で32万7,000余人が受験した。共通1次のスタートである。本学入学志願者は第一部、第二部とも1次試験で国語、社会、数学、理科、外国語の5教科を受験しなければならない。このことは高校卒業後就職し、何年かたって改めて夜間大学をめざす志願者にとっては明らかに不利である。こうした志願者に共通1次を免除できる制度はないか、と考え出されたのが第二部の推薦入学制度である。昭和51～55年度は18歳人口激減期に当たり、定員確保のため他の二部大学でも競って推薦入学制度を導入していたのである。

こうして(1)高校卒業あるいは卒業見込みの者のうち、学業成績、人物ともに優秀で、能力および適性について出身高校長が推薦する者(2)高校調査書の学習成績概評がA段階の者およびこれに準ずる者—について書類審査と面接、さらに英語、小論文の簡単なテス

トを実施し、募集定員の30%程度を受け入れる推薦入学制度が54年度から採用された。なお、平成3年度からは学習成績概評B段階以上およびこれに準ずる者と改められた。

59年度からは社会人特別選抜制度が実施された。生涯学習の発想から、社会人にも大学の門戸を開放しようというもので、高校卒業あるいは大学入学資格検定合格など、大学受験資格を取得してから4年以上を経過し、かつ満22歳以上の社会人を対象に、志願理由書、職場の上司の推薦書など調査書審査と面接および筆記試験によって募集定員の30%程度を選抜する制度である。

社会人特別選抜制度実施に伴って、前記推薦入学制度による受入れ人数は募集定員の20%程度に減らされた。推薦入学および社会人特別選抜両制度による受入れが定員の50%を超えることは許されないための措置である。

共通1次試験に代わって平成2年度からは大学入試センター試験が発足したが、本学第二部はセンター入試、推薦入学、社会人特別選抜という三つの異なる制度を通じて現役合格組から社会人、主婦、定年退職者まで、学習意欲に燃える人々を幅広く受け入れ、ユニークな生涯教育の場として成熟しつつある。帰国子女の受け入れについては、国際交流の項で触れる。

#### 〈大学院の設置〉

昭和44年4月1日、本学に大学院外国語学研究科(修士課程・修業年限2年)が設置され、中国、南アジア(インドネシア、タイ、ビルマ)、西アジア(インド、パキスタン、アラビア、ペルシア)、英、ドイツ、フランス、イタリア、イスパニア、ロシアの9語学専攻(14コース)が置かれた。これに伴って31年度から設置された専攻科は朝鮮、モンゴル語専攻を残し廃止された。

旧制大学令では、特に大学院の目的を示す条項はなかったが、学校教育法では「大学には大学院を置くことが出来る」(第62条)さらに「大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的とする」(第65条)と明記され、大学院は学部の単なる延長ではなく、大学院独自の地位と使命が制度的に認められた。新制大学院について当初文部省は、研究水準を維持するため、旧制大学系の大学または学部の上に置くのを原則とするという方針を取った。25年に私立4大学に大学院設置が認められたのを皮切りに、国・公立大学では第1回卒業生が出る28年になって大学院が設置される。大学院は修士課程と博士課程から成り立っているが、ともに研究者や大学教員の養成が主な目的と考えられていた。それが38年1月、中央教育審議会の答申に基づき、修士課程については従来の研究者養成の目的のほかに、社会的要請が高まってきた高度な専門的職業人の育成という目的が加えられた。こうして新制の大学、学部の上にも大学院修士課程の設置が推進されるようになる。

本学でも専攻科の実績を基礎に、42年度からの大学院外国語学研究科の設置を計画、文

部省に申請した。41年5月26日付『大阪外大新聞』56号は、「来年度(42年度)から本学に大学院が設置されることがほぼ確実になっている。……今年(41年)東京外大に大学院が設置されたこと、大阪外大は東京と同時に設立されるはずだったのを1年延ばして来年に設置するとの約束ができていないことなどから、よほどの事態が生じない限り設置される見通しである」と伝えたが、予想に反して42年度設置は見送られてしまった。

42年4月30日付『大阪外大新聞』60号によれば、本学が構想した①アジア第1(東アジア)②アジア第2(東南アジア)③アジア第3(西南アジア)④ヨーロッパ第1(ゲルマン系)⑤ヨーロッパ第2(ローマン系)⑥ヨーロッパ第3(スラブ系)のうち、アジア第3にケチがついたという。文部省の規定によると、論文審査のできる正式教官(1とする)と、補助教官(0.5とする)合わせて4.5が必要とされているが、アジア第3はいわゆる1の教官が少なく、0.5の教官を寄せ集めて4.5にしていたため、「2級酒を何本寄せ集めても1級酒にはならない」という理由で流れてしまった、と伝えている。

同新聞は、申請却下の理由について「文部省がこれを認めなかったのは、純学問的な動機からではなく、むしろ日ごろ文部省の言うことを何も聞かず、何かとたてついてばかりいる外大に対するいやがらせではないかという見方が強い」と報じ、外大教職員組合もその機関紙で「公式的な却下の理由の背景に、文部権力の大学支配への巧妙なカラクリがある」と伝えた。当時の文部省と本学との関係の一端がうかがえるようである。

曲折の末、大学院設置は44年度から認められることになったのであるが、いずれにしても大学昇格から20年、青年期に達して本学も大学院を置き得る大学に成長したのである。

本学大学院規程(44年7月31日制定)による初年度入学定員は別表(1)のとおりであった。

大学院外国語学研究所設置から5年を経過した49年4月1日、研究科中国語学専攻が、中国、モンゴル、朝鮮を含む東アジア語学専攻に改組された。これに伴い専攻科の朝鮮、モンゴル語専攻は廃止され、後発のデンマーク語専攻だけが残ったことは前章〈専攻科〉の項で触れた。

別表(1)

専攻	修士課程	
	昭和44年度 入学定員	総定員
中国語学専攻	8	16
南アジア語学専攻	12	24
西アジア語学専攻	14	28
英語学専攻	8	16
ドイツ語学専攻	6	12
フランス語学専攻	6	12
イタリア語学専攻	2	4
イスパニア語学専攻	8	16
ロシア語学専攻	6	12

別表(2)

専攻	修士課程	
	平成3年度 入学定員	総定員
東アジア語学専攻	16	32
南アジア語学専攻	12	24
西アジア語学専攻	14	28
英語学専攻	8	16
ドイツ語学専攻	6	12
フランス語学専攻	6	12
イタリア語学専攻	2	4
イスパニア語学専攻	8	16
ロシア語学専攻	6	12
日本語学専攻	6	12

52年度からは研究科に日本語学専攻が増設され、研究科は10専攻(16コース)となった。平成3年度の各専攻別入学定員は別表(2)のとおりである。

## (2)大学紛争と制度的改革

### 〈紛争の背景〉

1960年代後半を世界的規模での「反乱の時代」ととらえる見方がある。ヨーロッパで、アメリカで、アジアで、学生や青年が既存の体制に対して幅広い抗議、異議申立てを行った時期である。

ベトナム戦争は1965(昭和40)年2月の北ベトナム空爆開始、3月の南ベトナム上陸というアメリカの直接介入で泥沼化の様相を示し始め、以後全米各地でベトナム反戦運動が高まり、徴兵拒否運動も起こる。一方、既存の価値意識に反逆したヒッピーたちは、長髪、ジーンズ、サンダルというスタイルでマリファナを吸い、愛による人間同士の結びつきを求めて体制に背を向けた。

1966(昭和41)年夏には中国で文化大革命の嵐が吹き荒れる。『毛沢東語録』を振りかざした紅衛兵は旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣の、いわゆる「打破四旧」を叫んで街頭に進出、旧ブルジョア思想の持ち主と見なされた人に三角帽子をかぶらせ市中を引き回した。

1968(昭和43)年、フランスで「5月危機」が火を噴く。5月3日、学生運動の拠点であったパリ大学ナンテール分校が警官隊と学生の乱闘事件鎮圧のため閉鎖され、翌4日にはソルボンヌも閉鎖された。大学を封鎖された学生は、学生街カルチエ・ラタンで抗議集会を開いたが警官隊は催涙ガスを使用。闘争はバリケードを築いての市街戦の様相を呈し、やがて労働者を巻き込んで全国的なゼネストと工場占拠に拡大した。ドイツ西ベルリンでは、非常事態法制定に反対する学生が5月末にゼネストに突入。このほかイタリア、スペイン、メキシコ、ブラジル、タイでも学生騒動が頻発した。わが国でも、昭和40年以降、世界の若者と歩調を合わせるように学生運動が激化の一途をたどる。

当時の学生運動組織の状況を概観すると、60年安保闘争に全力をあげて取り組んだ全学連は、昭和36年、指導理論をめぐって抗争、全学連の主流は革マル系が占めるようになる。39年末に民青系全学連が再建されたが、これに対して過激派三派は41年末、三派系全学連(中核派、社会学同諸派、社会学同解放派)を発足させ、ここに全学連は革マル、民青、三派という三つの派閥に分かれた。

三派系は42年10月、佐藤首相の南ベトナムを含む東南アジア訪問抗議デモで警官隊と衝突し学生一人が死亡した第1次羽田事件以後、第2次羽田事件(42年11月)、米空母エンタープライズ寄港阻止闘争(43年1月)、王子野戦病院開設阻止闘争(43年2～5月)、新宿騒擾事件(43年10月)、フランス「5月危機」を思わせる市民も巻き込んだ「神田カルチエ・ラタ

ン」の道路バリケード占拠(44年1月)、4・28沖縄闘争(44年4月)、さらに佐藤首相訪米阻止闘争(44年11月)にかけて街頭での多角的ゲリラ行動、火炎ビン闘争など激しい政治闘争を展開。45年3月には三派系の流れをくむ赤軍派による日航機よど号ハイジャック事件に発展した。

一方、民青系は学内問題への取組みを通じて勢力を伸ばしたが、反民青系の諸集団もこれに対抗して大学改革から大学解体までの旗印を掲げ、全国的な激しい紛争に突入していくことになる。

大学紛争の萌芽はすでに昭和40年に見られる。この年1月、慶応義塾大学で学費値上げ反対全学スト、9月にはお茶の水女子大学で新学生寮管理規程反対スト、翌41年1月には横浜国大の学部名変更をめぐるストと学園封鎖、さらに早稲田大学では学費値上げ反対と学生会館運営参加要求をめぐる全学共闘会議学生の大学本部占拠に始まり、明治大学、中央大学でも全学バリケード封鎖などの紛争が起きた。42年は国際基督教大学、東京教育大学、法政大学、43年に入ると東京大学の医学部研修医問題に端を発した紛争が全学に拡大、日本大学でも20億円の用途不明金問題から学園民主化を要求する全学共闘会議が大衆団交を要求、封鎖・占拠がつづくなど、43年から44年にかけて、学費値上げ反対、学寮・学生会館の管理運営、学生参加、学園民主化、医局の改組、大学改革など、さまざまな課題と政治要求をからませた大学紛争は全国に波及し、紛争発生は「43年度67大学、44年度は127大学」〔文部省『学制百年史』〕にのぼった。大学紛争での特徴となった「全共闘」という組織形態は41年の早大紛争の際に登場、ヘルメットに覆面、角材・鉄パイプ＝ゲバ棒というスタイルは前にも触れた42年10月の第1次羽田事件に登場して以後、あらゆる政治闘争、大学紛争の場にその姿を現わすことになる。

本学における紛争も、以上のような一連の状況と無縁のものではなく、全国的な紛争の一環であったことは言うまでもない。昭和44年には早くも『砦の上にわれらの世界を』(東大全共闘)、『知性の叛乱』(山本義隆)、『叛逆のバリケード』(日大文理共闘委)、『獄中記』(秋田明大)など当事者による大学紛争の記録が次々出版されているが、本学関係の紛争史はまだない。“外大戦争”とも呼ばれた激しい紛争を「歴史」として総括するには、なお時間を必要とするということであろうか。

#### 〈本学紛争の発端・新館封鎖〉

昭和44年1月19日、東大安田講堂を占拠していた学生が機動隊に排除され、東大紛争は沈静化に向かうが、本学の紛争は翌20日未明の上八校舎新館封鎖で始まった。

1月20日付各紙朝刊はいっせいに「大阪外大も封鎖騒ぎ」と報じた。「大阪外大も」というのは、すでに京大、阪大、神戸大、関大、関西学院大など関西の各大学で学園封鎖がつづいていたからである。新聞報道によれば、封鎖学生はF I S(国際主義学生戦線)、毛沢東思想青学共闘会議、コンミュンなどを中心とする反代々木系で「東大勝利」「民青粉

砕」「東大機動隊導入反対」を叫び、新館入口に机やイスでバリケードを築き立てこもった。『朝日新聞』は「学内には紛争のもととなるような問題は今のところないが、東大紛争にからんで代々木系に対する反発から、代々木系の拠点である同大学を反代々木系がねらったのではないかとみている」という「大学側の話」も載せている。

午前11時から開かれた緊急教授会は

- (1) 早期自主解決に全力を尽くす。
- (2) 封鎖学生に対し次のとおり呼びかけを行う。

占拠学生に告げる(全文)

君たちの行動は本学における研究、教育の自由を否定し、また学園の自治を侵害するものである。われわれはこれに対して非常な憤りを感じている。われわれとしては、今後、本学の教職員、学生と協力して速やかに君たちの占拠を解除する強い決意を持っている。本学学生諸君に問題があれば、それを率直にわれわれに示してほしい。

占拠学生諸君、直ちに封鎖をといて退去しなさい。

再びいう、直ちに退去しなさい。

- (3) すみやかに正常な状態に戻すため、教職員、学生とともに全学的な集会を開いて対策を協議する。

との3点を確認した。

#### <自力で封鎖解除>

同日の授業はすべて臨時休講となった。金子二郎学長自らマイクで封鎖学生に解除を呼びかける一方、午後1時半からは玄関前で一部・二部自治会、教職員組合、生協、寮代表と学生部長を議長団に全学抗議集会が開かれた。各語学科代表は全員、封鎖反対の討論内容を報告した。

早期自主解決を求める学生、教職員約300人は集会後も学内にとどまり、外部からの封鎖支援学生に備え徹夜で警戒に当たった。一・二部自治会の学生300人は21日午前3時、生協ホールに集まり両執行委の提案した封鎖解除実力行使を圧倒的多数で承認、行動隊を編成した。その後教授会代表3人と学生代表3人が封鎖学生に解除を説得したが、聞き入れられないため、午前9時半ごろから教職員につづいて行動隊、一般学生約500人が、旧館からの廊下づたいに新館に入り封鎖解除行動に出た。教職員の説得で学生間の暴力事件はなく、封鎖は約30時間で解除された。大学事務局がまとめた「封鎖から解除までの経過」は次のとおりであった。

## 封鎖から解除までの経過

[1月20日]

- 2:30 学生約25名(内女子3名)守衛室、宿直室を襲いかぎを奪い、守衛、宿直員を軟禁して新館封鎖を開始。
- 6:00 封鎖完了。軟禁していた職員を解放。職員直ちに事務局長、庶務課長宅に報告。事務局長、学長に急報。
- 6:20 庶務課長、会計課長登校。  
二部主事室および二部事務室を対策本部として関係者に登校を要請。
- 6:40 事務局長登校。
- 8:00 学長、学生課長登校し、封鎖学生に呼びかけを行ったが反応なし。
- 8:20 学生部長登校。
- 8:50 緊急措置として、学長の判断により、教授会の招集、全学集会の開催および本日の臨時休講を決め、その旨それぞれ手配し掲示する。
- 11:00 緊急教授会で「早期自主解決」の基本方針を決め、封鎖学生に撤去の呼びかけをすることとする。
- 12:30 学長、封鎖学生に撤去の呼びかけを行う。
- 13:00 正面玄関前で全学集会行われる。(17:30 まで)  
教授会の定めた方針により、封鎖解除を行うことに決める。
- 18:00 教授会を開き、「封鎖解除について教職員が先頭に立ち、暴力衝突を避ける。解除についても説得姿勢を堅持」することとする。
- 19:30 学生部長、田中(四)、大河内教官の3人が封鎖新館に入り説得に当る。  
(21:00 退出)
- 20:00 封鎖応援の他大学生約30名、正門、南門から突入を企ったが、学内学生に追いかえされる。学内学生、正門、南門を内部から封鎖する。他大学生、新館南側窓口から約10名侵入、封鎖に合流。
- 21:00 封鎖学生、重要書類の搬出を了承し、事務職員中に入り書類搬出。
- 22:00 教授会、学生の実力排除要求に慎重策をとる。

[1月21日]

- 1:30 学内学生の再度にわたる実力排除要請で、教授会再度説得に努めることを決める。
- 3:30 牧、田中(四)、荒谷教官、中に入り説得。(7:00 退出)
- 8:00 学長、窓越しに直接説得。
- 8:20 学長から正式に退去命令を出す。
- 9:10 学長、再度直接説得。
- 9:20 学長、説得の効なしとみて、マイクにて最後通告として「ただちに退

去」を呼びかける。

9：25 学生の衝突を避けるため、教職員が先頭に立って行動開始。

10：00頃一部学生、新館北側窓ガラスを破り、封鎖解除行動に出たため、教職員が緩衝地帯を作り、建物内部にて説得に努める。

11：30 封鎖学生説得に応じ、自主的に全員退出。

11：40 教職員、封鎖解除。

11：50 封鎖学生、中庭で集会後、1：30 頃学外に退去。

大方の予想に反する早期解決について『読売新聞』は「この大学独特の雰囲気—教官と一般学生との強い結びつきが大きな背景となっていたからである。同大学は語学の単科大学……小単位クラスなので、どちらかといえば家族主義的な意識が強い。京大で見られたような教官と学生の離反感はまったくなく、教官もすすんで(反代々木系と代々木系)両派の間に入り、緩衝地帯となった。それにしても一般学生はよくがんばった。代々木系約300人、反代々木系約150人の間に立って、つねに紛争解決への主導権をにぎり、ともすれば過激な行動で反代々木系に対しようとする代々木系執行部の行き過ぎを可能な限り押しとどめた。夜を徹し、雨にぬれ、一般学生が懸命に流血の防止に尽くし、しかもその効果をあげたことは、全国的な学園紛争の中で注目すべきケースだった」と論評した。しかし、この封鎖解除はあくまで前哨戦に過ぎず、本学の紛争は、このあとさらに激しさを増していくことになる。

#### <1・27教授会声明>

ひきつづき再封鎖の事態も予想される情勢のなか、教授会は1月27日、次の声明を発表、暴力的封鎖行為に対しては全学の総意を結集して大学の自治を守るという決意を明らかにした。

#### 声 明

先般の一部少数学生による新館封鎖は、大学という場においてありうべからざる行為であると認めざるをえない。今回は幸いに全学の良識によって被害は最少限にとどめられたが、かかる暴力的な行為は、学問の自由と大学の自治を否定するばかりでなく、外部勢力の好ましからざる介入を招く恐れのあることを深く憂えるものである。

大学という場にあっては、すべての思想はたとえそれが少数意見であっても、尊重されるべきであることは言をまたない。特に現在は、大学の理念や体制を深く検討すべき時期にあっている。いかなる人もその主張を提示して根気よく相互の討論をつづけ、あるべき大学の実現に向って努力しなくてはならない。教授会もまたその決意をもっている。

もしこのような理性的討論が行われなくて再び先般の如き事態が起これば、教授会は、全学の総意を結集してかかる行為を排撃し、学問の自由と大学の自治を守る強い

決意を有することをここに表明する。

昭和44年1月27日

大阪外国語大学 教授会

#### 〈「入学式粉碎」から最初の機動隊導入まで〉

本学紛争期間中、学内には無数のパンフレット、ビラが飛び交った。大学当局と「民青支配の自治会」を名ざして糾弾する全闘委(全学闘争委員会)、さらにDM闘委(デンマーク語学科闘争委)、A闘委(アラビア語学科闘争委)など各語学科闘争委のビラに対抗するように、一部・二部自治会、教職員組合、生活協同組合、花園寮運営委員会、さらに以上五者からなる五者協議会によるパンフレットやビラが連日発行された。当然、当局側の教授会声明、紛争を契機に発行されるようになった『学生部広報』(昭和52年4月15日発行の第49号から『ひろば』と改題)も加わって、アジと提案、訴えが交錯した。いずれもが本学紛争の一側面を伝えるものであるが、それらすべてを取りあげるスペースはない。紛争発生後、学生の父母からは大学側の対応について問合せの手紙が相次いだ。これらの問合せに答える意味で8月10日に発行された『学生部広報』第5号は「紛争の経過と解決への展望」を次のように述べている。前に述べた1月20日の新館封鎖と自力排除以後8月までの経過が簡略にまとめられているので全文引用する。

#### 紛争の経過と解決への展望

一部学生諸君による「バリケード封鎖」が基因となって、現在、本校の施設はまったく荒廃し、学生相互間、また学生と教職員間の感情的疎隔はきわめて深刻なものとなるにいたっている。また、さる7月1日から2日の未明に至る封鎖実力解除による学生の負傷者は50名をこえている。しかも、現在なお封鎖がつけられ、大学の事務は停滞し、教授会の招集はもとより、大学改革のための各種委員会の開催も極めて困難な状態にある。

この事態には、われわれとしても深く責任を自覚するものであって、紛争の解決にこれまでも、できるかぎりの努力をしてきたつもりである。また、来る9月1日より大学を再開するという学生諸君との約束もかならず実現したいと思っている。ここに、あらためて紛争の経過を手短かに述べ、なお今後の解決の方向を展望しておきたいと思う。

#### (1) 紛争の経過

今春以来の紛争の発端は、4月15日大阪府中小企業会館ホールで行われた入学式へ「入学式粉碎」を叫んで全闘委(全学闘争委員会)学生が乱入したことであるが、その根源は1月20日の新館封鎖にある。「東大闘争支援・東大への機動隊導入反対」という本学とは直接関係のない目的で突如として断行された新館封鎖は、教職員・学生の全学的な力によって一日のうちに解除されたが、その後2月14日、井上清京大教授講演会



全関委学生の襲撃を報じた『外大新聞』第69号

などによって、封鎖の心情的支持者も次第にふえてきたものと思われる。

2月18日、C1教室において「学長団交」と称して、金子(前)学長が長時間軟禁状態におかれる事件が生じた。同日、自治会執行部を中心とする全学対話集会在徹夜で開催され、教職員・学生による大学の管理・運営方式、いわゆる「全学協議会」方式が討論された。その後、封鎖支持派の学生と学生部長との間に、長時間の会談が行われ、また学生部長団交も行われた。なお、もし理性的討論が行いうるならば、学長との話し合いも可能であるという態度を学長も度々表明した。

4月17日、ふたたび「学長団交」と称して全関委学生が突如学長室に乱入し、金子(前)学長に対する長時間にわたる軟禁状態の結果、学長は血圧高進のために入院せざるをえない状態になった。その日、教官の一部と全関委学生との話し合いが徹夜で行われ、学長室の占拠は一時的に解かれた。

ところが、その頃からデンマーク語学科の一部学生によって語学科闘争委員会が結成されたが、彼らは留年の白紙撤回その他の三項目を要求し、語学科教官の対応態度を不満として5月2日に研究室を占拠した。つづいて、アラビア語学科の一部学生も、田中(前)教授の言動について自己批判を要求して研究室を占拠した。またその頃(5月7日から9日にわたって)大学改革粉碎を呼号する一部学生によって、改革問題特別委員会の委員数名が連日つるしあげられるという事件も発生した。5月のあいだに各語学科の学生がつぎつぎ語学科闘争委を結成し、研究室の占拠をひろげていった。5月19日には、全関委学生の突然の襲撃によって、自治会執行部学生が数人負傷入院するという事件が発生した。

6月6日、大学側の招集によって開かれた紛争解決のための全学集会において、多数学生は教官側の反対をおしきって「バリケード即時解除」の決定をおこなった。そして、同日夕刻、正門と旧館のバリケードは解除されたが、その過程でふたたび重傷4名を含む学生20数名の負傷者を生じた。

その間、教授会においては、デンマーク語学科の留年問題やアラビア語学科の教授批判問題を精力的に討議して、それぞれ一応の解決を見うるにいった。一方、大学

当局としては、学外授業を含む授業再開計画の準備を着々すすめてつづつあった。ところが、7月1日午後から、自治会を中心とする学生が突如封鎖の実力解除を開始した。1日から2日未明にかけて、学長代行以下教官達の必死の制止にもかかわらずおこなわれた封鎖学生と封鎖反対学生の豪雨中の激突は、まさしく「外大戦争」ともよぶべき凄惨な事態を現出するものであった。双方で50数名の負傷者が出たのみならず、中庭に面した学舎の窓ガラスは一枚のこらず割られ、廊下や校庭にはこわれた椅子や机が散乱し、また教室や廊下の一部は火焰瓶の爆発によって黒く焼けただれろという惨たんたる状態になったのである。大学執行部は7月2日未明、人命の危険を救うため、ついに機動隊の出動を要請して流血の格闘を制止するのやむなきにいたった。この機動隊出動要請また出動時点について、学生諸君の間でいろいろの誤解や曲解もあるようであるが、すでに先日の「学生諸君に告ぐ」（7月5日）の中でも詳述したように、われわれとして、それはまことに遺憾なことではあるが、真にやむをえなかったものと信じている次第である。このようにして事態のそれ以上の悪化は回避されたが、しかしその後、全闘委学生によって再度封鎖が行われ、また学内においてしばしば教官個人に対するきびしい糾問がおこなわれ、多くの教官や学生にとって学内に入ることすら危惧を抱かざるをえないという、まことに好ましからぬ状態を現出するにいたった。このため執行部は、7月14日に全闘委の学生に退去命令を出し、その後、学生の立入を禁止して学内の整備にあたった。しかるに7月19日全闘委の学生数名は、教授会に出席すべく登校した牧学長代行をとらえ、大学執行部との団交を執拗に要求した。かれらは当日6時から開かれた話し合いを、一方的に、かれら自身の要求を貫徹する団交であると公言し、長時間にわたる事実上の軟禁状態の中で、しかも暴言、ゲバ棒、殴打等の威かくをもって、牧学長代行に対し、かれらのいう「確認書」に署名するよう強要した。翌々日の教授会においては、この「確認書」をもって不当な強要によって成立したものとしてすべて破棄すべきことが決定された。全闘委学生はこれによって再び封鎖を強化するにいたった。

## (2) 今後の展望

われわれとしては、大学においては教育・研究という仕事はどんなことがあっても継続しなければならないものと思っている。また、学生の修学・進級・卒業というプロセスについても決してこれを単なる日常性業務とは考えないのである。したがって、これらを阻害する封鎖という事態を正当なものとして認めることは絶対にできないのである。もちろん、学生諸君の提起した大学の諸問題に対してはできるかぎり誠実に対応し、これまでひとつひとつ問題を解決してきたし、今後もその姿勢を堅持してゆくつもりである。封鎖状態を見のがし、授業再開を無期限に延引し、そのために多くの学生諸君がいわゆるネトライキ状態におちいるならば、それは何ら問題の本質の解決にならないはずである。



本館前のバリケードを排除する学生に角材で襲いかかる過激派学生＝昭和44年6月（産経新聞社発行『写真集おおさか100年』から）

こういう事態に対処して、われわれとしては一方では大学改革を精力的に推進しつつ授業の再開をはかり、また一方ではすべての学生諸君と理性的な話し合いを行うことによって、最終的には封鎖をおこなっている学生諸君みずからの手による自主的な解除を実現させたいと考える。われわれは右の原則に立って、9月1日より大学の機能再開に全面的に努力しつつある。しかし、現在の困難は、われわれ教職員の努力だけではけっして解決しうるものではない。外大の学生諸君全体が人類社会の文化遺産を正しく継承し発展させるという教育の本義を自覚し、外大学生としての責任を果たしてゆく積極的姿勢と行動が不可欠である。

重ねていうが、われわれとしては9月1日以降万難を排して授業を再開する所存である。すべての学生諸君は是非登校して全学一体となって事態の打開に協力されたい。学生諸君はもちろん、ご父兄の深い理解と厳しいご鞭撻をお願いする次第である。

8月10日

以上の経過に述べられた全闘委の5・19襲撃は、自治会書記長はじめ女子学生を含む20数人の重軽傷者を出し、紛争発生後、初の流血事件となった。教授会は5月20日「全大阪外大生に訴える」次の声明を発表した。

昨19日の夜、非武装無防備の学生に、封鎖学生の一部が襲撃、暴行を加え、女子を含む20数名の重軽傷者を出し、数名は入院加療中である。その後の封鎖拡大のため、20日現在本学はほとんど全面的な授業停止と、予定された諸行事の中止を余儀なくされている。いろいろな複雑な問題をかかえた現時点において、これらの事件の発生をみたことは本学の興廃にかかわることとして、教授会は深甚な憂慮をいだかざるを得ず、理性の府である大学における暴力を断乎糾弾すると共に、今後この種の問題を再び起こさないような対策を検討している。

このときにあたり、全学生諸君が冷静な行動と道理ある話し合いによって、本学の持つ諸問題の解決に積極的に協力されることを要望する次第である。

教授会は6月6日にも「封鎖の不当性について」の声明を出し、「一方的に不法に大学の施設を封鎖破壊することは許しがたい暴力である。それは政治権力の介入を招き入れる絶

好の口実ともなる。現に全大学人が反対する大学立法が、これによって成立をはかられているのである……研究教育の機能を果たすことができない故を以て紛争校の烙印を押されれば、学校の存廃にもかかわる」と、すでに5月24日、国会に提出された「大学の運営に関する臨時措置法」を念頭に置いて、学園の危機に憂慮を表明している。

#### 〈学長選挙改革案と牧学長代行の選出〉

紛争発生の年、昭和44年は金子二郎学長の任期満了(6月10日)を控え、学長選挙が予定されていた。4月14日の教授会では、学長選挙に備えて、学長候補者選挙管理委員会の設置が議題にのぼった。

しかし、『学生部広報』第5号も触れているように2月18日開かれた五者協議会主催の全学対話集会で大学当局との間で

- (1) 大学自治は学生・教官・職員の三者で構成される。
- (1) 外大の重要事項に全学の意思を反映させるため、全学協議機関が必要である。
- (1) 全学協議機関早期実現のため五者協、教授会ですぐに取り組む。
- (1) 学長選挙に何らかの形で全学の意思を反映させる。

などが確認された。これを受けて教授会は3月7日に第一次大学改革問題特別委員会、4月10日には第二次同特別委員会を発足させ、全学協議機関の設置問題や当面の急務としての学長選挙規程の改正問題に取り組むことになった。こうした事情から特別委員会の答申が出るまで、選挙管理委員会設置は見送られることになった。

ところが、4月17日、全闘委の要求する大衆団交で長時間、軟禁状態に置かれた金子学長は血圧高進のため警察病院に入院、結局その後、入院中のまま学長退任願いが出されるに至る。次第に激化する紛争に対処するため、教授会を開こうとしても学長=議長がいないため開けない。「学長に事故ある場合は年長の教授がその職務を代行する」との規程により、4月18日の臨時教授会は吉田孝次郎教授を議長に選んで開かれたが、その後は議長になるのを辞退する年長教授が続出、定足数に達せず「参考教授会」ということで終わったこともしばしばであった。

新館2階が全闘委学生によって占拠され、デンマーク語学科研究室も同語学科生によって占拠されたあと、5月10日に開かれた臨時教授会では、年長教授の辞退を見かねた牧祥三教授が議長を引受けた。6時間に及んだこの日の教授会では、デンマーク語学科のほか、インド・パキスタン、アラビア、ビルマ各語学科にも紛争の動きがあることが報告された。5月28日には中国語学科闘争委により中国語研究室が占拠された。

5月初旬『大学改革問題特別委員会の報告および当面の提案』(大学改革問題資料第1集)がまとめられた。うち「あたらしい学長選考の具体的方式案」の主な内容は次のとおりであった。

- (1) 本学の教官、職員、学生は選挙管理委員会に対し、学長候補者を推薦することが

できる。

- (1) 選挙は学長候補者数を一定数までしぼる第1次選挙と、最終的に一人を選ぶための第2次選挙に分けて行う。
- (1) 第1次選挙は教官、職員、学生の三者が投票し、三者の区分ごとの得票数については、それぞれの有権者数に応じ比重の均等化をはかる。
- (1) 得票総数上位2～5名までの者を第1次選挙当選者とし、第2次選挙は第1次選挙当選者について教官のみが投票、過半数を得たものを当選者とする。
- (1) 学長任期は現行の4年制(再選を含めて6年どまり)を3年制(同5年どまり)に改める。

この学長選挙改革案は5月15日の教授会で若干修正のうえ、教授会第1次案として承認された。この第1次案は全学に公示し、改めて教官、職員および学生の意見を聞いたうえで教授会の最終決定に持ち込むこととされた。大学移行後間もない昭和28年4月16日制定の学長選考規程は、学長選挙資格者を「学長、専任の教授、助教授、講師、助手、文部事務官及び文部技官」と定めていたが、その後の改正で「文部事務官及び文部技官」が削除され、助手以上の教官だけが資格者とされていたため、職員だけでなく学生にも第1次投票権を与えるこの改革案は自治会側からも高く評価された。

しかし6月10日の学長任期満了を前に学長選考規程改正は間に合わない。このため臨時措置として学長事務取扱を選考することとなる。5月24日の教授会で投票の結果、第1次投票では牧祥三、林栄一が上位二人となり、決選投票の結果、牧が学長事務取扱に選出された。学長が退陣、学長事務取扱が選出されるのは紛争期に相次いだケースであった。東大の大河内総長のあと加藤総長事務取扱が選出されたが、東大紛争のマスコミ報道などを通じて、正式名称の事務取扱より代行という呼び方が一般化する。

金子学長退任のあと6月11日就任した牧学長代行は、同日の教授会で伊地智学生部長、広実二部主事、林学生委員長を加えた4人による合議制執行部を発足させ、紛争処理に当たることになったが、全闘委側封鎖学生と、これを排除しようとした自治会側学生の衝突から7月2日、ついに最初の機動隊導入を要請するに至った。

## 〈7・2機動隊導入の経過〉

機動隊導入に至る経過については、7月5日、全学生に配布された牧学長代行名の「学生諸君に告ぐ」で次のように述べられている。

学生諸君に告ぐ

私は7月2日早朝、機動隊を導入するに至った経過をのべ、併せて若干の疑問点に答えておきたいと思う。

7月1日夕刻より、封鎖を続けていた全闘委側の学生とこれを排除しようとした自治会側学生との間に衝突がみられ、次第に激しくなっていたため、7時半ごろ、機

動隊は独自の判断で出動し、一応、校門前に待機しつつ警戒態勢をしくにいたった。このまま放置すれば警察が大学に入り、一般学生を含め、両派の学生多数が逮捕せられるなどの不幸な事態をみるにいたることは必至と判断した私は、8時すぎ「退去勧告」を出し、両派の学生に説得を続けたが、結局、受けいられるにはいたらなかった。

この間、一時小康を保っていた乱闘が夜半すぎから再び激化し、暗夜、雨の中で、殴りあい、投石、火焰びん、放水などにより校内は戦いの場と化していった。事実この間に、多数の重軽傷者を出している。状況を一言で形容すれば凄惨というにつき、外大戦争とよぶべきものが現出したのである。

ここにいたり、学生に生命の危険が迫ったと判断した私は、図書館事務室に集まっていた25人ほどの教官たちにはかった後、2日午前3時15分、機動隊の導入を要請するに至った。機動隊導入のやむなきにいたった事態を生みだしたことはまことに遺憾であるが、あの時点では、あるいはもっと早く導入を決断すべきであったかもしれない。乱闘は多少の波をもちつつ継続されていたが、この間にも「機動隊要請にふみきったから早く学外へ去るように」との説得が自治会側に対してつづけられたため、4時50分ごろに至り、自治会側の大部分は校舎の北側の道路に出た。私は5時半に「退去命令」を出し、5時52分機動隊が学内に立ち入るにいたったのである。

以上が大体の経過であるが、ここで一、二の問題点についてのべておきたい。その第一は3時15分に機動隊を要請しながら、ゲバルトのなくなった5時半に退去命令を出し、5時52分に機動隊が入ったことについてである。まず、出動を要請しても、学内の状況を説明するのに時間を要したこと、警察側の事情を想像すれば上部との連絡、出動態勢の準備などに時間をついやしたことがあげられる他、警察も独立した機関である以上、いつ、どのような形で、何の目的で入るかということは、大学の意見を参考にしつつも、独自に判断するのである。また、確かに5時半の時点ではゲバルトは中断されていたが、3時ごろ全闘委側に捕った自治会側学生の身柄が心配されたし、いわゆるゲバ棒、鉄パイプ、石、火焰びんが学内に多数残されていたことは十分に予想され、再度闘争がくりかえされるのは明白で実現されうる危険が存在した。逆にいえば、あの時点で決断しなかったならば、激突が完全に終結したという保証はなかったのである。さらにいえば、ゲバルト問題を除いて考えても、大学が大学としての正常な機能を復活させる責任が存在していたのである。

第二に大学当局が自治会のみを退去させた後に機動隊を導入したのではないかという、いわゆる「まま子」問題についてのべる。われわれの基本的態度は、すべての外大生はあくまで外大生としてあつかうものであるが、たとえそれが誰であろうとも、現行法に違反し、暴力行為におよんだり学校の秩序を乱す場合には糾弾せざるをえない。この立場に立って、1日の8時すぎから、両派の学生に説得をつづけたのであり、

自治会側は4時50分ごろ、この説得に応じて退去し、全闘委側は学内に残ったのであるから、これに対して退去命令を出さざるをえなくなったのである。夜半すぎからは、實際上、全闘委側を説得できる状態になかったこと、それにもかかわらず、4時ごろ、林学生委員長がマイクで「とに角、一時行動を中止しろ」とよびかけたが、石と火焰びんのみが返答であったことも申しそえなければならないであろう。

最後に、退去命令に従って出てきたものを警察が身体検査をし、写真をとり、かつ、逮捕者を出した点についてのべる。先にのべたように、警察は独立した機関としての行動をとる。機動隊が学内に入るのは、学内において法に違反した行為が存在すると確信した場合である。その目的にそって、警察側が独自の行動、捜査をすることを、教育者としてはしのびがたいことであるが、われわれは断るわけにはいかず、学校の事情を話して、了解を得られる範囲の行為しかおこないえないのである。このことは、大学の自治や管理運営などに警察が介入してはならないのと同様である。私としては、退去命令に従って出てきた学生が警察によって門内におしとどめられた際、機動隊長に抗議して「逮捕は困る」とのべ、学生を学外に出してもらおうようにしたのである。

以上、あれだけの混乱の中であるから、多少の事実誤認や判断のちがいはあったかもしれないが、大局的には間違っていないと思われる経過のべ、説明を加えてきた。すべての外大生は大学側のとった態度に対する批判は批判として、こん後、このような不幸な事態を発生させないように一致協力されるように望んでやまないものである。

7月5日

機動隊導入による封鎖解除後も事態は好転しなかった。7月19日の封鎖派学生による牧学長代行軟禁状態での団交、「確認書」署名と破棄のあと再び封鎖が強化される。

#### <大学臨時措置法案>

7月24日、自民党は衆議院文教委員会で「大学の運営に関する臨時措置法案」（以下、大学臨時措置法案と略記）を混乱のうちに強行採決した。8月3日には参議院本会議でも異例の審議省略のうちに採決、成立し、国会は大混乱に陥った。

大学臨時措置法案は、4月30日の中央教育審議会答申「当面する大学教育の課題に対処するための方策について」に基づいて政府が5月24日国会に提出したもので、大学による自主的な紛争収拾のための努力を助けることを主眼としながらも、大学の自治能力が失われるような最悪の事態に陥った際には、設置者は教育研究機能を停止することができると定められた。同法案は国会提出と同時に「大学の自治を侵すもの」と大学人の反発を買った。本学教授会も5月31日「封鎖、占拠、暴力行為などの事態に乗じて、大学の自治、研究教育の自由に対する権力的干渉を企図するものである」とする反対声明を発表した。

さらに衆議院での強行採決後、同法案が参議院に送付される段階で教授会は法案破棄を訴える陳情団派遣を決定。森塚、芝池、法橋、正木、村田(武)、西村の6教官が上京、8

月2、3、4の3日間、参議院文教委員会各委員はじめ各党議員に法案の廃棄を陳情した。

参議院での強行成立後、8月5日開かれた緊急教授会は改めて次の声明を発表し、臨時措置法の撤廃を要求した。

#### 声 明

大学紛争が長期化し、大学における研究、教育の機能が停滞しつつあることに対して、われわれは大いなる責任を感じ、教職員、学生一体となって紛争解決に真剣な努力を傾けてきた。そのやさきに、「大学紛争の自主的解決をたすける」という大学運営臨時措置法なる法案が議会上程された。われわれは、この法案の内容をつぶさに検討した結果、それが大学の自治をおかすおそれがあり、国家権力の介入を招き、大学問題の解決をいっそう困難にさせるものであるという結論に達し、すでにその旨の教授会見解を発表し、かつ教授会代表を東京に派遣してこの法案を廃案にすべきことを請願してきた。しかるに、8月3日この法案は参議院でまったく審議を行わないままに強行採決された。

そもそも、大学における研究、教育に重大な関係を持つ法律は、超党派的立場において広範な国民各界の了解を得ることなしに成立不可能である。したがってこのような異常な状況で成立した法律の權威を認めることはできない。われわれは、このような大学法案の強行採決に強く抗議し、かつこの法律の撤廃を要求するとともに、同時にまた大学の自治という根本原則にそって大学問題を自主的に解決せんとする強い決意を有することをここに表明するものである。

8月5日

#### 〈全学バリケード封鎖〉

声明で「大学問題を自主的に解決せんとする強い決意」を表明したように、8月29日の教授会はデンマーク語学科紛争の発端となった留年問題について、留年となっている旧1年生2名について追試験を実施する例外的措置を了承、留年制度やカリキュラム編成への学生参加問題は9月1日の大学問題説明会以降、学生との討論を通じて解決する方向を打ち出し、8月10日の『学生部広報』第5号の方針どおり、9月2日からの授業再開を決定、学生にも通知された。すでに8月17日から施行された大学臨時措置法が、大学側に自主解決を急がせる重圧になっていたことも否定できなかったであろう。しかし、9月1日、全闘委の封鎖は全学バリケード封鎖に拡大、教職員の学内立入りも拒否されるに至った。

9月2日、学外で開かれた教授会では、事務局長から、現在大学の管理権は全闘委によって全面的に排除され、事実上“全闘委管理大学”となっており、国有財産管理上からも社会的責任上からも即刻解決されるべきで、教授会の明確な方針が出れば、それに従いたい旨発言があった。学長代行からは封鎖解除について(1)学生間の流血は避ける(2)教職員による排除は困難である(3)従って、止むを得ない場合、警察力による排除が考えら

れるが、具体的方法は執行部で考え、教授会にはかりたいとの見解を表明した。

9月2日発行の『学生部広報』第8号は牧学長代行名による次の「再び学生諸君に告げる」を掲載した。

#### 再び学生諸君に告げる

諸君。本学に解決を必要とする問題が山積していることは、諸君も認めていることと思う。しかし、その中でも封鎖問題は、一番重大にしてかつ解決の困難な問題であると思う。ここでは、この問題を中心にして率直に諸君に語りかけたい。

先ず第一は、「封鎖」が大学やまたそれを構成する教職員・学生のひとりひとりの運命にとって、いかなる意味を持っているかということである。私はここで封鎖に関する抽象的談義をしようと思わない。具体的に考えたいのである。この封鎖は、すべての学生は修学・進級・卒業を無限に中止すべきであると強要しているのであり、結局本学は廃校にすべきと命令しているのである。(大学運営臨時措置法と関連させなくてもそうである)もちろん、もし、本学の全構成員が民主的な討論を通じて、修学を中止し大学を解体し教職員・学生がちりぢりに離散することを主張するならば、それもやむをえないであろう。学長代行としてはこれは死ぬよりつらいことではあるが、それも已むをえない。しかし、一部学生だけの強要によって廃校にすることは、私には絶対に承服できないことである。ひとりひとりの学生がこの学園に4ヵ年在学して学習する為に、どれだけの努力を積み重ね、どれだけの出費を負担していることか。それを考える時、大学の授業再開を単に「日常性への回帰」などといってすませるものでない。

諸君。第二には、どうしたらこの封鎖を解決し、大学の授業を再開し大学改革を推進するかという問題についてである。私は夏休み中に個人的に種々の学生に接触し、また種々の集会を通じて学生諸君の意見を聴いている。学生諸君の意見はおおむね次のタイプに分かれるであろう。

1. “無関心タイプ” “先生、まだ封鎖があるんですか。7月2日に解除されたのではありませんか” どうせ学校が何とかしてくれるから、授業再開の通知があれば登校しよう、と考えているらしい。この考えは依存心が強く、無責任であることはいうまでもない。

2. しかし、多くの学生が封鎖にはいろいろの観点から様々の関心を持っているのは事実である。その一つとして“単純タイプ”。“授業は学校が保証すべきだ、何故保証しないのか”しかし、単純に官僚的命令主義で、事態は解決しないし、また教授会の無能を責めるだけではこの難局は打開しえないのである。

3. 同じく単純タイプの中には、「機動隊を導入したら直ぐ片づきますよ」と考える学生諸君もいる。大学は治外法権であり、いかなることがあっても警察権力の侵入を認めない、とは私は思わない。しかし、警察官の制服を見ると直ちに不快な感じを持つ学生諸君は別としても、機動隊による解除には疑義を感じる諸君もいる以

上、機動隊によって物理的に封鎖を解いても、それが直ちにその後の大学正常化につながるか、やはりうたがわしいのである。

4. 実力解除タイプ。封鎖を大学の自主的努力によって解決すべしという立場であるが、しかし、教職員・学生の物理的な力によって排除することは、過去の経験によって不可能であると結論してよいと私は思う。のみならず可能不可能は別として、私は学長代行として、死傷を覚悟して解除に突入せよとは、これまでにいったことはないし、今後もいうつもりはない。学園闘争における死傷を憂慮することは、“やすっぽい人道主義”であり、それは“日常性の概念”である—というような意見は、断じて賛成できない。

5. “哲学タイプ”。封鎖学生の提起した問題を真剣に受けとめ、1年でも2年でもこの問題を討論して行き、授業などは意に介さないという態度である。東大全共闘が大学問題について鋭い問題提起のあったことは認めるし、本学でも次元が異なるが、問題があることは十分認めなくてはならない。しかし、大学や学問の本質の問題は哲学的に追求すれば、或いは人間一生の問題でもあるし、また哲学的な思索や賑やかな討論だけで解決できないものである。もちろん、すべての学生諸君がそれを希望すればそれもまた必ずしも無用のわざではないが、ともあれ、これには相当の忍耐と覚悟のいることが知られねばならない。しかも、それを“日常性に埋没”しないでやりぬくことは、実際のところ、非常にむづかしいことである。

諸君。このようにいう私自身も、当面、本学における封鎖対策問題については、実は名案はないのである。一老ドイツ学者として、学生諸君よりも大学問題についてやや知識があるかとも思うが、どの考えも欠陥があって、万能の方法はないようである。私も、教授会も、日夜この問題に全力をあげてとりくんでいる。諸君もまた全知全能を傾けてほしい。第一に、どの考えも万能でないとしたら、どれが「ベター」であるか、ということである。第二に、実行可能な現実的処理を考えてほしいということである。現在全学バリが行われ、教職員が学園内に立入ることは拒否されているし、また一般学生も封鎖学生によって被告として糾弾されている。そして、外大は「全闘委大学」となったのである。たとえ、以前のいわゆるオープン・バリエードにもどったとしても、大学の機能再開が保証されなければ、実質的に全学封鎖と同じであろう。もはや大学問題は、現時点では諸君ひとりひとりの重大な現実問題となっている。封鎖が9月を越えることは許されないのである。

9月2日

#### 〈学外授業〉

9月2日からの授業再開方針が、いわゆる“全学バリ”によって不可能となったのを受けて、学外授業計画が立案された。学外授業を実施しても大学全体として正常な授業を

行っているとはいえないが、個々の授業は正規の授業(卒業、進級の条件となる)の一部として認めることが教授会で確認された。宿題については、専攻語学関係のものは各語学科の自主性によって取扱いを決定すること、一般教育、共通専門については担当教官と学生との話し合いで学年末までを目途に適宜提出期限を決めることとされた。

一般・共通科目の授業は、別紙時間表によって9月8日から実施された。教室は学生部が学外に借り受けた上本町9丁目の関西ビニール会館3階であった。ちなみに同会館4階には事務局も移転してきていた。

各語学科もそれぞれビルや公民館、寺までも借りて“寺子屋”授業をつづけた。前記関西ビニール会館に封鎖派学生が押しかけたこともあり、教室借用を申し込んでもトラブルを恐れて断られるケースも多かった。イスパニア語学科の授業は労働会館、教育会館、自授業計画表

#### 週間授業区分

曜日	項目	授業等の区分	備考
月		一般共通	
火		専攻語学	
水		専攻語学	
木	委員会・外人専任教師	教授会	二部の授業には関係ない
金		専攻語学	
土	一般共通	教授会・委員会	二部の授業には関係ない

#### 一部・一般共通科目 時間割

時限	1	2	3	4	5	6
曜日	9.00~10.10	10.20~11.30	11.40~12.50	13.20~14.30	14.40~15.50	16.00~17.10
9月8日(月)	外国経済事情 西欧 梅津	外国経済事情 アフリカ 梅津	社会心理学 大 峯	日本国憲法 安 部	日本国憲法 安 部	日本国憲法 安 部
9月13日(土)	国際政治学C 巢 山	近代経済学 沢 村	産業経済論 山 本	地誌 君 塚	地誌 君 塚	地誌 君 塚
9月22日(月)	言語学 崎 山	音声学 岩 倉	教育原理 島 崎	東洋史学A 外 山	日本文学史 吉 田	民法II 貝 田

#### 二部・一般共通科目 時間割

時限	1	2	3
曜日	5.50~6.50	6.55~7.55	8.00~9.00
9月8日(月)	外国経済事情 西欧 梅津	外国経済事情 西欧 梅津	外国経済事情 西欧 梅津
9月13日(土)	日本国憲法 安 部	日本国憲法 安 部	日本国憲法 安 部
9月22日(月)	教育社会学 島 崎	教育社会学 島 崎	教育社会学 島 崎

転車会館を転々とした。

ロシア語学科の授業は天王寺・阿倍野からバスで15分、さらに徒歩3分という住之江区万代西の外大外人教師宿舎で行われている。ロシア語学科の場合、9月9、10、12日の時間割が残っているが、毎日第1限午前9時半から第8限午後8時40分まで各学年の講義、実習、演習が目白押し、途中に大学問題の討論が組み込まれているのが目をひく。

授業が学外で行われたばかりでなく、事務局は関西ビニール会館、大学執行部は上本町4丁目を東に入ったNHKの集会・宿泊施設を借り受け、毎朝ここへ出勤、夕方になると庶務課長が封鎖状況、学生の動きなどを報告に訪れるという状況であった。教授会はこれより早く、5月ごろから封鎖派学生の乱入を避けるため農林会館、教育会館、自転車センターなどで開かれてきたが、全学バリケード以降は中小企業会館、農林会館など、すべて学外で行われるようになっており、すべての面で学校疎開が日常化した。

#### <警察力要請やむなし>

9月13日の教授会では、封鎖派学生に対し最後の最後まで説得をつづけ、もし成功しない場合は警察力行使を要請することも止むを得ないという方針が確認された。機動隊導入を含む封鎖解除に関する執行部案に対する賛否無記名投票の結果は、賛成49、反対34、白票3であった。

9月20日の教授会は、17日と19日の英語学科の学外授業が英語学科闘争委の学生に妨害されたという報告のあと、封鎖対策について審議したが、席上、牧学長代行は「現在は緊急な状況にあるとの認識に立って解決方法を考える時期である。執行部案についての賛否投票では過半数の賛成を得ている。したがって同案を実施するについて、反対の投票者も、以上の点を考慮のうえ、この際一致協力願いたい」と発言している。

#### <最後通告>

9月26日、牧学長代行名の「当面の事態とわれわれの決意」と題するパンフレットが発行された。そのなかで封鎖派学生に「最後の反省をうながすため」24日、次の3項目の申入れを行い、早急に回答するよう求めたことを明らかにした。

- (1) 諸君は早急に一切の占拠封鎖を解くべきである。
- (2) 諸君のこれまでのあやまった行為によって、われわれの大学は物心両面にわたり深刻な荒廃をうけるにいたったが、しかし、もし諸君が早急に一切の占拠封鎖をとき、また今後大学の正常な教育・研究ならびに事務運営を妨害しないことを約束するならば、われわれ大学執行部としては教授会が諸君の責任を一方向的に追及することのないよう誠意をもって努力する。
- (3) あわせてまた、われわれ大学執行部としては、今後の大学運営や改革問題討議に関して、教授会がつとめて諸君の意見を尊重するよう、責任をもって努力する。

「当面の事態とわれわれの決意」の最後は「もしも諸君がこれを拒否されるならば、もはや問題の『自主的解決』は、従来とはまったく違った方法で進められざるを得なくなるであろう」と締めくくられていた。3項目申入れは封鎖派学生への“最後通告”であった。

### 〈二度目の機動隊導入〉

しかし、3項目申入れは拒否された。10月1日付『毎日新聞』夕刊は、封鎖自主解除の最後通告を蹴られたため、大外大も機動隊導入は必至、との次の観測記事を掲載している。

「封鎖派の全闘委とアゴラ(広場)闘争委は、早くから大学の打診を受けていたが、30日午後までに封鎖の自主解除を拒否する旨回答した。大学側はすでに最悪の場合は機動隊の出動要請もやむを得ないとの態度を決めており、大外大も機動隊の手で封鎖解除に踏切るとは必至となった」

そして翌10月2日早暁、7月2日に次ぐ二度目の機動隊導入・封鎖解除が行われた。午前5時半、牧学長代行はじめ教職員約30人が大学正門ほか4ヵ所でマイクで学内占拠者に即時退去を呼びかけ、5時45分ごろ正門、北門、西門、南門および南グラウンド南入口から5班に分かれ、機動隊員約80人とともに学内に入り、バリケードを撤去した。学生の姿はなく、封鎖解除は約1時間で終了した。このとき大学近くで暴力行為などで指名手配中の本学学生一人が逮捕されている。封鎖解除後直ちに正門に「立入り禁止」の掲示がなされた。

同日、牧学長代行名の「封鎖解除に当たって学生諸君に訴える」が全学に配布された。

#### 封鎖解除に当たって学生諸君に訴える

諸君。本日(10月2日)私は機動隊の出動を要請し、教職員が先頭に立って機動隊とともに、全学バリケードを解除した。

私はかねてより二つの路線を主張し、自治会との団交においてもこのことを明らかにしてきた。一つは、学生諸君と理性的な話し合いを行うことによって、封鎖派学生諸君みずからの手による「自主的な解除」を実現させるということ。二つは、生命の危険・人権の重大な侵害あるいはそれらを招来するような学校の無管理状態がある時は、警察権の行使を要請せざるを得ないということ、これである。第一が上策で、第二が下策であることは言うまでもない。

諸君。7月19日、私が封鎖派学生と団交を持ったことは、すでに学生部広報第5号にのべておいた。その時の状況をもう一度ここでのべることによって、彼らとの話し合いというものが、どのようなものであるかを学生諸君に理解してもらいたい。封鎖派学生諸君はその団交の冒頭から「これは団交ではない。ましてや話し合いというべきものでもなく、一方的に大学側を糾弾する集まりであって、牧学長代行はイエスカノーを答えるだけでよいのだ」と公言してはばからなかった。長時間の軟禁、聴くに耐えない暴言、ゲバ棒による威嚇だけではない。あまつさえ、私をこずきまわし、頬

を殴打するという状態さえ生まれた。恐らくこのような暴力的行為は他大学でもそう多くはないであろう。しかし、それにもかかわらず、私たちはその後もさらに封鎖派学生諸君を説得しつづけた。それはすでに「当面の事態とわれわれの決意」（9月26日）の中でのべたとおりであって、なおまた最後には「3項目」の申し入れを行ってこれら諸君の最後の反省を促がした次第であった。彼らの主張は要するに「11月（佐藤訪米阻止）、70年（安保反対闘争）を目的として、学校当局に対する一切の幻想をたち切り、非妥協的に闘う」ということであった。彼らがこのような態度を固執するかぎり、私及び教授会としては彼らと合意に達することは到底不可能だったのである。

諸君。諸君も知るとおり、5月から断続的に行われていた封鎖は、9月1日に至って、全学バリケードにエスカレートした。この全学バリは、本学の立地条件にも関係するであろうが、恐らく全国に例を見ないものとおもう。教職員、学生は立入ることが拒否され、大学はすべて「全闘委」の管理するところとなった。大学の自治、学問の自由はまったく踏みにじられ、学園における物心両面にわたる荒廃はさらに拡大、深刻化した。そうした無残な破壊はまったく私の心を暗たんさせ、大学紛争解決の為に学内の努力をつくさずして警察力を導入したり、またいわゆる管理者の立場からのみ学内秩序の回復を計ることは、もともと私の反対するところである。しかし、現状はあまりにも異常であり、事態はまことに緊急である。また、いうまでもないが、学外授業が財政的に場所的に見て、今後継続しうる可能性は、まったくない。

諸君。このような事態にかんがみ、私は9月以来、種々の解決法をもって教授会にはかった。教授会は非常な緊張と苦渋の中で、慎重に審議をかさねた。その結果、9月13日の教授会において、封鎖派学生に対して最後の最後まで説得をつづけ、もしそれが成功しない場合、最小限度の警察力行使を要請することもやむを得ないという方針を確認したのである。

研究・教育を使命とする大学においては、たとえどのように困難な事情があろうとも、警察力の援助のもとに事態の処理にあたることは極力さけるべきだということはわれわれも十分承知している。しかし、封鎖派学生諸君がついにわれわれの説得に耳をかさず、しかも学園をこれ以上荒廃させることが許されないとすれば、われわれにとって有効な措置は結局のところただひとつしかない。私は今日、私の責任において、必要な最小限度の警察力の援助をえて、占拠・封鎖を解除することとする。なおまた、私としては、われわれの学園において今後再び占拠・封鎖その他人権の侵害に属する事態などをくりかえすことのないように、断固たる決意をもつものである。

諸君。今日、封鎖解除がおこなわれても、現在の大学問題が解決されたことにならないことはいうまでもない。大学問題の解決は、一般にいわれているほど容易なものではないのであって、われわれとしては今後たゆみなく大学の改革、研究・教育の刷新にとりくまねばならないと考える。



紛争で荒らされた研究室



窓ガラスも割られた西館と新館

諸君は今回のわれわれのとった措置をくれぐれもよく了解し、われわれの大学の新しい出発のために協力されるよう心から希望する次第である。

### 〈荒廃した学園〉

封鎖解除後の学内の荒廃ぶりは目を覆うばかりであった。4階建新館の窓という窓はガラスが割られ、壁は一面の落書きで埋められていた。新館3階の研究室は壁が打ち抜かれ、ドアがなくなり、研究図書が散乱、教官私有の図書、書店から委託された教科書などが学外に持ち去られていた。伊地智学生部長の研究室内は、同教授が中国語辞典編纂のため作成した資料カードが床一面にばらまかれていた。会計課がまとめた紛争関係経費は別表のとおり939万余円にのぼっている。

紛争関係経費一覧

項目	金額(円)	内訳
会場借上費(教授会)	381,030	事務室借上、各種委員会
// (教室)	611,050	
// (学長控室)	95,100	
// (学生大会)	56,930	
// (その他)	291,000	
印刷費	236,860	学長告示、学生部広報
通信費	663,217	電報・切手(支出済354,770)
物品修理費	1,354,770	机修理費(研究室関係修理見込500,000含む)
会議費	232,180	
備品費	576,210	
消耗品費	237,359	教職員待機中食費
学内清掃整備費	507,530	
警備員経費	1,950,000	ガードマン雇上費(4名)
電話復旧費	60,000	
机補足費	1,801,200	474脚
自動車借上費	293,300	
車庫借上費	42,500	3台分
計	9,390,236	

### 〈学内正規授業再開〉

施設の破壊状況が予想外に甚大で研究室、教室、机やイスの修理、整備に時間が必要なため、10月2日から12日まで教職員以外は学内立入り禁止の措置がとられ、立入り禁止期間中は機動隊員が学内に駐留したほか、教官による警備班も編成された。大学運営臨時措置法の施行以後、紛争重症校では機動隊導入—封鎖解除—一定期間の機動隊駐留という解決パターンが定着したが、本学も例外ではなかったのである。

10月13日の月曜日からようやく学内正規授業が再開された。授業再開に当たっては「学内における秩序の維持について」および「学内立入り時間の制限について」の二つの告示が出され、封鎖・占拠による大学業務の阻害、角材、鉄パイプ、石塊、火炎ビンなどの凶器持込み、授業・研究活動の妨害などが厳に戒められたほか、月曜から土曜まで午後10時以降翌朝8時30分までの夜間(日曜日、祝日は昼夜間)学内立入りが禁止された。こうして週日の夜間と日・祝日は昼夜間の機動隊の学内駐留、さらに教官およびガードマンのパトロールが常態化する。

授業は徐々に平常に復していった。『学生部広報』第11号は開講3日目の15日の開講率は一、二部とも90%前後に達し、ほぼ平常なみに回復したと伝えている。その後も正門付近で全闘委学生と自治会側学生の口論が時折、見られたが、11月7日昼前には「全闘委」「中核」「第4インター」の文字入り赤旗をつけた鉄パイプを持つヘルメット着用の学生10数名が南門から学内に入りデモ、窓ガラスを割り抗議の学生に乱暴を働き、学長代行の退去命令で午後2時ごろ退去するという事件が起きている。機動隊の昼間の正門前待機および夜間駐留が廃止されたのは、11月27日であった。

### 〈大学改革への模索〉

大学紛争を契機に大学問題は社会的、政治的な関心事となった。戦後のベビーブームの波から生まれた、いわゆる「団塊の世代」が大学に押し寄せた昭和40年度以降、大衆化・巨大化した大学は、一方で旧態依然たる管理・運営体制を抱えたまま、新しい脱皮を求められることになる。文部省の中央教育審議会への諮問「当面する大学教育の課題に対処するための方策について」(昭和43年11月)はじめ、各政党、日本学術会議、国立大学協会、経済同友会、日本教職員組合などからも、今日の大衆化された大学の在り方、将来ビジョン、管理・運営体制その他の問題に関する意見が相次いで発表される一方、紛争を抱える各大学でも当面の最重要課題として改革案の模索が急がれた。

### 〈大学改革問題特別委員会〉

本学でも、紛争に先立つ第二部カリキュラム闘争、さらに全闘委による新館封鎖という状況を背景に、五者協議会(教職員組合、一部・二部自治会、寮自治会、生活協同組合)の大学改革申入れを受けて昭和44年3月7日の教授会で第1次大学改革問題特別委員会を発

足させた。相浦委員長以下、岡倉、沢村、芝池、片岡、広実、田辺、大河内、岡本、正木の10委員は、数次にわたる討議の結果、3月29日(1)大学の自治とそれにない手(2)改革の必要性とその方向(3)学長選挙について一概略的な基本方向を示した答申を提出した。答申は、大学を構成する教官、職員、学生のうち、教官のみが自治に関与し得るという従来の「教授会自治」論は崩壊せざるを得ないとした上で、大学の主要構成員である学生は、憲法、教育基本法の視点からしても、能力に応じて教育を受ける権利を持つ主体的存在であるばかりでなく、大学の自治、学問・思想の自由の重要なにない手であることが承認されなければならないとし、職員、学生をも加えた全学協議機関の設置と、学長選挙についても職員、学生の意見を十分反映させる必要があると指摘した。

これを受けて、さらに具体的な方向を教授会に答申するため、4月10日、第2次大学改革問題特別委員会が発足した。メンバーは黒木委員長以下、巢山、八木、相浦、芝池、塚本、正木、梅津、岡本、法橋の10委員であった。

特別委員会は、まず緊急の仕事として6月10日で任期の切れる学長の選考規程改正に着手、5月初旬に『大学改革問題特別委員会の報告および当面の提案』(大学改革問題資料第1集)をまとめ、学生にも第1次投票権を認めた学長選挙方式案を打ち出し、5月15日の教授会で第1次案として了承されたことは、すでに述べた。これより先、5月7日には黒木委員長、8日には相浦委員が全開委に連れ出され、特別委員会の審議内容を公開するよう強要されるという事件もあり、これらの行為に対し、特別委員会は抗議声明を発表したが、まさに嵐の中の改革案づくりであった。このあと特別委員会には岡倉、村田、吉田(弥)、田辺、荒谷、栗原、小貫の7委員が新たに加わり、広報活動を充実させることになった。

6月20日の教授会では、広報、長期計画、管理制度改革、教学制度改革、研究体制改革、学生の地位に関する改革などの諸委員会が成立、大学改革の具体案作成を急ぐことになった。各委員会は既存の教務委員会、一般教育等委員会などと協同して7、8月の2ヵ月間にわたって精力的な作業を進め、9月1日『大学改革問題第1次中間報告』をまとめあげた。機動隊による全学封鎖解除で学内授業が正常化したあとの11月27日には『大学改革問題資料第3集』という形で「学科課程試案(一部)」が発表された。いずれも全学的討議を経て最終改革案を作成するための「たたき台」ではあったが、長期計画、管理制度、教学体制、研究体制、学生の地位など、すべての面にわたって踏み込んだ方向を打ち出したものとして注目された。

### 〈カリキュラム改革〉

本学紛争の底流にカリキュラムの問題があったことは、関係者がひとしく認めるところである。外専から外大への“無痛分娩”による単独移行の結果、大学になってからも依然として専門学校的な教学・研究体制をひきずることになったことは前にも触れたが、外国語大学という名のとおりに、専攻語学は1年から必修であり、きびしく鍛えられるが、語学

以外の一般・専門教育は専任教官も少なく非常勤講師まかせでカリキュラムも貧弱、ゼミナール制度もないという“箱詰め授業”や教官一人がしゃべる“立ちんば教授”が常識であった。

もちろん、いつまでもこのままではいけないと気づいている人々は多かった。旧制大学で講義や演習を実際に経験してきた中国語、英語学科などの若手・中堅教官によって早くから自分の授業の中で、従来の専門学校的な授業にとどまらない、大学らしい新しい授業を行おうとの試みはなされていた。カリキュラム改革への底流は動き始めていたのである。

しかし、この面で最もドラマティックな変化を見せたのはドイツ語学科であったろう。昭和40年度のドイツ語学科の後期演習で「現代ドイツの社会と文化」をテーマとした2コマ連続のゼミナール形式の授業が試みられたのをきっかけに、41年度から言語、文学だけでなく文化(歴史・思想)、政治・経済を4本柱とする4つのゼミナールが開設され、大学らしいゼミ中心の教育課程に移行する。もちろんすべての語学科でゼミ制度が確立されたわけではなく、学年進行制にしばられた語学中心の詰め込み授業も一方ではつづいていたのであり、こうした背景からカリキュラム改革要求は次第に高まりを見せるに至る。紛争中、毎日新聞社が企画した「大学とは何か・学生との総討論」に出席した本学3年在籍・松尾良樹の次の発言は、当時の教学体制の一面を伝えたものといえる。

「ウチは外国語大学という名前でもおわかりのように、外国語学部1学部しかない単科大学なんですが、外大の卒業生には求人率が30倍です。ところが教科内容が貧弱で、われわれ外大生の意識としては、外大は大学じゃない、これは外国語の知識を授ける塾にすぎないというふうに大多数の者が認識している。教科内容も1、2年の間は、いわゆる一般教養科目があるんだけど、それもよその大学の講師だとか教授だとかを時間講師という形で雇ってきて、非常にいい加減な形で行われている。ほかの大学にある教養課程というものが、われわれの場合は、高校の延長でもなく高校以下の内容で行われている。そのかわり1年から語学の訓練があって、まさにスピーキング・マシンとして、しゃべる言語技術者として養成されているわけです。内容は貧弱なんだけれども、就職の段階になると、各商社、メーカーからひっぱりだこ。設備にも金をかけないで、最も安上がりに産業界が要求している人材を養成している(後略)」〔44年7月16日付「毎日新聞」〕

語学ばかりやらされて、きちんとした講座もないという学生の不満は、紛争中に登場した「語術教師」「語学バカ」「アカデミズムの欠如」「反害大」(阪外大)などのスローガンからも読みとられよう。

「3外大と言われたなかで、語学をもっとも忠実にやっていたのは大阪で、東京はいわゆる“事情”に重点が移り、神戸市はどちらかといえば外国語を伴った貿易・商業を使命にしていたと大別できる。となると、無いものねだりで、大阪の闘争スローガンには、カリキュラム上、語科内の政治・経済、思想・歴史講義の設置を望む声が

強く、東京へ行ってみると、石油会社の入社試験に大阪外大は8名通ったのに、東京外大は1名だけ。試験のアラビア語で差が出たからで、これは語学をなおざりにした大学当局の責任である—と、タテカン(立看板)してある。神戸市では、そもそもドイツ語科すら置かない大学に、哲学・思想が存在するはずがない、と学生がブツている有様。団交の席で「君らが3大学の間でお互いに大学の籍を変えてみたら……」と言ったら、さすがにどっと笑っていました」

以上は、二部主事として紛争解決に当たった広実源太郎名誉教授の後日談であるが、ここからも本学学生のカリキュラム改革要求の切実さがうかがえる。

### 〈後期学年進行制の撤廃〉

こうした状況から、紛争後まず手がつけられた制度面の改革は、カリキュラム編成を含む教学体制であった。デンマーク語学科闘争の発端が留年問題であったことから、学年進行制に伴う留年制度がクローズアップされた。教学体制改革委員会は、専攻外国語における学年進行制を廃止し、純粋な単位制度に転換することが可能かどうかを議論したが、科学的語学教育という見地からは段階制も必要であるとして、結局、後期についてのみ学年進行制を44年4月にさかのぼって撤廃することにした。つまり後期(3、4年)においては留年制度がなくなり、自主的学問研究の機会が広げられた。

### 〈単位と履修方法の改訂〉

つづいて45年度から卒業所要単位と授業科目の履修方法が変わった。まず第一部の全課

科 目		単 位 数
一般教育科目		36
保健体育科目		4
専 門 科 目	語学文化 講義・演習	24
	専攻外国語実習	第1課程 10 第2課程 10 第3課程 24(注)
	卒業論文	8
	専門教育科目	20
	兼修外国語	8
	関連外国語	自由選択
	計	144

(注)本年度(45年度)4年次に在学するものの専攻外国語実習第3課程は、従来の第3・4課程と合わせ20単位とする。

程を終了し卒業するための必要最低単位数が別表のとおり144単位(37年度以降44年度までは148単位)となった。従来に比べ兼修外国語の8単位減、専攻外国語実習第3課程での4単位増によるものである。

履修方法については、これまで前期での履修が義務づけられていた一般教育・保健体育は、原則として1、2年次での履修が望ましいが、4年間にわたっての履修も可能とされた。

専攻科目のうち専攻外国語実習は、これまで第1課程から第4課程までの4段階制だったものを、第1課程(1年次)、第2課程(2年次)および第3課程(3、4年次)の3段階制とした。後期における学年進行制撤廃に伴う措置である。さらに後期第3課程については、

#### 履修の方法

授 業 科 目		最低履修単位	履修年次	単位計算基準	備 考	
一般教育科目	A 人文科学系列	12	1・2年次履修が望ましい	週2時間(1回) 通年4単位	各学科共通 各系3科目 以上選択必修	
	B 社会科学系列	12				
	C 自然科学系列	12				
保健体育科目	体 育 概 論 保 険 衛 生	2	原則として 1年次	週2時間(1回) 半年各1単位	必 修	
	体 育 実 技	2	原則として 1・2年次	週2時間 2年間2単位		
専攻科目	語学文化 } 講義・演習	8	原則として 1・2年次	週2時間(1回) 通年4単位		
		16	3・4年次			
	専攻外国語実習	第1課程	10	1年次		週2時間(1回) 通年2単位
		第2課程	10	2年次		
		第3課程	24	3・4年次		週2時間 通年4単位
卒業論文	8	4年次			必 修	
兼修外国語	初 級	4	1年次履修が望ましい	週2時間(1回) 通年2単位	8単位は同一 外国語に限る	
	中 級	4	2年次履修が望ましい			
専門教育科目	A 言語文学部門 B 法律経済部門 C 教職部門	20	原則として 3・4年次	週2時間(1回) 通年4単位 但し教育実習は 2時間2単位	各学科共通 選 択 必 修	
	関連外国語		3・4年次	週2時間(1回) 通年4単位 または2単位	自 由 選 択	



第3次団交で「学長選挙民主化即時実現」を迫る学生。  
左立っているのが牧学長代行  
(昭和45年10月20日、C1教室で)

従来週2時間授業1回で通年2単位であったのを4単位とする単位数基準の変更を行い、後期での必修の負担を軽減した。

兼修外国語は従来は前・後期各8単位、計16単位が必修であったが、後期の兼修外国語は関連外国語として自由選択制となり、ここでも後期必修が削減された。必修として残された兼修外国語8単位も、1、2年次での履修が望ましいとしながらも、4年間にわたってもよいとされた。

なお、46年度から授業科目名の改正があり、別表のように従来の「専門科目」が「専門教育科目」に、「専門教育科目」が「関連科目」に、「兼修外国語科目」が「外国語科目」と変わった。

昭和46年度

科 目		単 位 数	
一般教育科目 .....		36	
保健体育科目 .....		4	
外国語科目 .....		8	
専門教育科目	専攻科目	講義・演習	8
		実 習	16
	実 習	前期	10
		第1課程	10
		第2課程	10
	卒業論文	24	
関連科目 .....	8		
関連外国語科目 .....	20		
合 計		自由選択	
合 計		144	

#### 〈副専攻科目の履修〉

「大学改革問題第1次中間報告」および「学科課程試案」では、カリキュラム改革の一環として複数専攻制度の新設も打ち出された。特定の文化圏における学問的研究、社会的活動には複数言語の専攻が必要であり、そのため主専攻のほかに副専攻としての外国語を

学習できるようにするというのが狙いであった。

この複数専攻制度は47年2月10日施行の「副専攻科目履修に関する内規」によって、47年度からタイ語学科の希望者に対する中国語副専攻履修という形で実現した。タイ語学科がタイ・ベトナム語学科に改組されたのに伴い、54年度からはタイ語の副専攻は中国語かベトナム語、ベトナム語の副専攻は中国語、タイ語、フランス語のうち一科目が選べるようになった。

副専攻科目を履修する場合の修得単位、履修年次は別表のとおり定められた。

科目	種別・ 講座 学科目	講義・演習	実 習		
			第1課程	第2課程	第3課程
専攻科目	語学	24単位	10単位 (第1年次)	10単位 (第2年次)	12単位 (第3・4年次)
	文化				
副専攻科目	語学		10単位 (第3年次)	10単位 (第4年次)	
計		24単位	52単位		

#### 〈学長選挙の改革〉

新しい学長選挙規程の制定は難航し、学長代行制がつづいた。金子学長退任後10ヵ月を経た昭和45年4月30日付『大阪外大新聞』は、一連のカリキュラム改革に対しては、「制度面で前進」と一応評価しながらも、学長選挙問題に関しては「現在、旧制度のままで新学長の選出を急ごうとする大学当局と、学長選挙民主化を要求する六者協議会(教職組、院生協、一部・二部学生自治会、生協、寮自治会)との間に激しい対立を生み出している」と伝えた。

紛争各大学が目にした東大7学部代表団と加藤総長代行との「確認書」に対しては内閣法制局が、法律的な問題点を指摘したのをはじめ、文部省は44年2月8日、「確認書」が「学生、院生、職員もそれぞれ固有の権利をもって大学の自治を形成する」としたことに対し「これが学生、院生、職員が大学の管理運営に何らかの形で参加する地位を認める意味とすれば、それは従来の考え方を根本的に変革し、大学制度および大学の自治のあり方の根幹にふれる重大な問題である」との所見を発表。つづいて中央教育審議会の特別委員会も3月7日、「学園における学生の地位についての中間報告」で「学長、学部長候補者の選考について学生の信任投票などを行うことを大学の正規の手続きとすることは、人事権に対する実質的な関与となる場合があり、不適当である」と総会に報告、紛争大学での学生参加・民主化要求を牽制した。

さらに8月に成立させた「大学の運営に関する臨時措置法」で大学紛争をねじ伏せた文部省は、翌45年、学生、職員も参加した神戸大学学長選挙に対し、学生参加は教育公務員

特例法に触れる恐れがあるとして、学長発令を遅らせた例などに見られるように、大学自治への介入あるいは高圧的姿勢が目立ち始める。

44年2月18日の五者協と教授会の「2・18全学集会」での確認事項および大学改革問題特別委員会答申に盛られた、学長選挙への学生、職員の意見反映という本学の方針も、その方法をめぐって微妙に揺れ動き始める。次節で述べるように、42年6月の教授会で、万国博跡地への大学移転を決議し、移転問題が次の最重要課題となっていた時期だけに、揺れは増幅された。45年10月15日付『大阪外大新聞』のインタビュー記事「牧学長代行に聞く」からは、その間の事情が読みとれる。

——学長代行が置かれてから、かなりの期間になるが「学長選挙」については、どうなっているか。

学長代行 本年3月に新学長を選出する予定であったが、教授会や自治会にも聞いたところ新規定によるべきだということだったので一応とりやめた。しかし、この前教授会が示した新規定の原案では文部省がイエスとは言わない。学長代行でも社会的な承認が薄いときである。まして移転問題という課題があるときに、文部省の発令もない学長を選んでも仕方がない。

一方、学生諸君の方では、この原案でもなまぬるいと言う。つまり現在では、文部省と学生間に大きな対立がある。移転問題があるときに、もう一つ大きな問題を背負い込むことはない。移転という課題を解決するのが第一課題である。そのためにマイナスになるようなことは、やらないでおきたい。

#### <学生・職員の意向調査>

46年2月6日の自治会との交渉で、大学当局は5、6月中の学長選挙実施を目標に、4月20日を目途に新選考規程案発表に漕ぎつけたいとの意向を明らかにしたが、自治会側は①学長選挙に全構成員が参加する権利 ②学生の候補者推薦権 ③学生の信任投票権(実質的な除斥権)④教授会に対して学長のリコールを請求する権利—以上四つの基本権利を提案。教授会では「文部省から発令されないような学長は選ぶべきでない」「移転が決まってから……」などの意見も出て、結局、新選考規程案発表も学長選挙実施も先送りされてしまう。

この時期、すでに万国博跡地移転の可能性は消え、他の候補地探しが精力的に進められていた。学長選挙をいつまでも延ばすわけにはいかない。5月27日の教授会は、学長選考規程に関する特別委員会設置を決め、幹事・山口学生部長のほか中西、加賀谷(東洋語学科)、法橋、畠中(西洋語学科)、栗原、上山(二部)、島崎、安部(共通・留別)の各委員を選出した。

7月には箕面市小野原地区移転が決定、10月末には、第1次選挙で選ばれた学長候補者について、学生、職員の意向を徴する意向調査方式案によって47年1月に学長選挙を実施

する方向が固まった。12月2日の教授会は学長候補者選考規程と選挙管理委員会規程および意向調査に関する申し合せ事項(いずれも案)を賛成78、白票4の多数で仮決定、学生、職員に提案したあと最終決定することとし、翌3日付の『学生部広報』25号で公示した。

意向調査というのは、学長、教授、助教授、講師、助手による第1次選挙で選ばれた学長候補者上位5人について、学生、職員の意向を調査するもので、職員、大学院生および専攻科生、第一部、第二部学生の4群に分けて投票により行われる。投票結果は各群ごとに投票率、候補者別信任票数、白票数を記載した調査票を作成して公示。この調査票を参考にして第1次選挙資格者による第2次投票を行い、過半数を得た者を当選者とするという方式。

この新しい学長選考規程案について、牧学長代行は前記広報を通じて「理想的な改革案に比べ、なお未だしとして不満を生ずるかも知れないが、従来その意見を表明する手段を持たなかった教員以外の大学構成員の意向調査の方向に大きく前進している点」に理解を求め、さらに全国75国立大学中、いまだに学長代行制を温存しているところは本学を除き僅か5大学に過ぎないとした上で「本学は教学改革、移転計画等を将来の構想として大きく発展しようとしている。その時にあたり紛争時の外容を残存した学長代行制は、今や新しい前進の大きな桎梏となり、今後の有害な支障となりつつある」と、協力を訴えた。

#### 〈牧学長の選出〉

年明け47年1月13日の教授会では、学長代行から大学移転の予算内示があったこと、候補地は箕面市小野原地区であることが明らかにされたあと、新しい学長選考関係規程を正式決定し、選挙管理委員会(黒木委員長)を発足させた。

自治会、院生協議会は意向調査に対して「文字どおり調査のみであり実際的な形で学長選に参加できていない」、さらに「大学の構成員が個々の権利をもって大学の管理運営に参加するという理念が欠けており、何よりも移転のため学長代行では不都合であるという条件が先行している」と批判した。

第1次選挙は1月27日行われた。上位5人は牧祥三、外山軍治、畠中敏郎、岡倉古志郎、林栄一であった。初の意向調査は2月7、8両日行われた。2月10日、黒木委員長の意向調査結果報告のあと行われた第2次選挙では牧が過半数を得た。3月1日付で文部省から学長発令があった。どこの国立大学にもその例を見ない2年8ヵ月という長期に及んだ学長代行期は、ようやく終わりを迎えた。

### (3) 将来計画委員会設置と箕面移転

第3章で述べたように本学が高槻から上八への完全復帰を実現したのは昭和32年4月で

あったが、3年制の外語一外専時代のままの狭隘な敷地に4年制の大学が帰ってきたのだから、将来行き詰まることは誰の目にも明らかであったし、事実、その後の研究室、教室の新增築で容積率は90%に達し、キャンパスには空き地もなくなった。建物面積を例にとると、文部省基準でも38,984平方メートルに必要なのに、18,293平方メートル(昭和50年現在)しかなく、基準の50%にも満たないなかで教育・研究が行われていたのである。狭い敷地をどうするか、施設の将来計画はどうあるべきかを検討するため、昭和39年4月1日、長期計画特別委員会が設立された。金子二郎学長が42年4月30日付『大阪外大新聞』に寄稿した、「いわゆる『移転問題』について」によると、限られた敷地の中で横に伸びられない以上、高層建築化して上に伸びる案も計画されたが、「近畿圏の既成都市区域における工場等の制限に関する法律」の成立によって学校の新增設は制限されることになり、高層化計画はつぶれ、花園運動場への校舎移転も考えられたが、地盤が軟弱で大きな建築物は不可能ということで結局これも断念せざるを得なかったという。

#### 〈上八放棄の教授会決定〉

結局、39年7月9日の教授会は、上八校地を放棄して適地へ移転するという根本方針を決定する。ただし、それには二つの大きな条件がついていた。

一つは、移転先が夜間学部の授業が行えるところでなければならないということ。昼間の勤務先から夕方仕事を終わって駆けつけるのに、大きな不便があっては、勤労者のための大学という条件に欠けるからである。

もう一つの条件は、上八校舎を保有したままの部分的移転、たとえば第二部を上八に残して第一部だけの移転はできないということ。部分移転は大学分散につながり、不便を生じるというほかに、移転に当たっては現在施設を財源(当時の概算で30億円以上)として、不足分を国庫に頼るのでなければ実現性は薄いという認識によるものであった。

移転の根本方針を受けて、長期計画特別委員会が算出した必要校地面積は、文部省令大学設置基準や将来の拡張も考慮に入れて約8万坪(約26万4,000平方メートル)。教職員、同窓会などの協力で移転候補地探しが行われ、20ヵ所以上の候補地から比較的有望と思われる6地点を選び、9月3日と7日の両日、特別委員会委員による実地視察も行われたが、いずれも一長一短、合格点に達するものはなかった。

このあと、移転候補地として万国博跡地が浮上してくるのであるが、その後の本学移転史については、昭和47年4月に発足した将来計画委員会の広報部会ニュース『新しい外大のために』(昭和47年6月・第1号発行、57年7月・第13号から『これからの外大』と改題)に詳しい記録が残されている。さらに本学同窓会誌『咲耶』創刊号(昭和58年4月刊)から12回にわたって連載された山口慶四郎名誉教授(R12)の「母校移転事情覚書」にも、経過と数々のエピソードが紹介されているので、ここでは移転史の大筋だけをたどっておく。

### 〈万国博覧会跡地の浮上と消滅〉

特別委員会が候補地の現地視察を行っていた、ちょうどそのころ、大阪千里丘陵で開かれる日本万国博覧会の跡地への移転が浮上する。万博用地買収に当たり大阪府は地主説得のため跡地には大阪府下3国立大学を移転させるとして39年9月、まず跡地利用の是非について本学の意向を打診してきたのを手始めに、40年10月以降は本学と大阪府との意見交換、万博予定地視察、文部省と3国立大学との協議が本格化、42年6月には文部省の指示により関係省庁に正式に万博跡地確保を要請する一方、6月8日の教授会で、他に有力候補地がない限り万博跡地に移転することを決定した。9月には閣議で文部大臣が万博跡地を国立大学に利用させるよう要望、本学の万博跡地移転への夢はふくらんだ。

ところが万国博覧会が成功のうちに終了すると、事態は大きく変わった。大阪府からの移転招致の話は霧散してしまい、利用方法は大蔵大臣の諮問機関である万国博跡地利用懇談会の手によだねられた。大学紛争で一時ストップしていた本学の移転問題は、万博跡地確保をめざして再び活発化、45年10月末には移転委員会も発足。政・財・官界への陳情も繰り返された。以下は『文藝春秋』昭和58年3月号に、退官後の牧名誉教授が「爽快な印象」と題して寄稿した一文である。

私は、田中角栄氏にただ一度会って話しただけである。そして今に強烈で一種爽やかな思い出の人として、留めている。

当時、昭和45年、私は大阪外国語大学の学長責任者として、大学移転の問題で事務局幹部の人たちと、文字通り東奔西走の日々を過ごしていた。

昭和45年は、万国博覧会が大阪で開催された年である。その敷地、千里丘陵一帯を5年前に買収するにあたり、将来、万国博終了後、跡地は国立大学を集めた学園地区に利用するとして、私たちの大学にも大阪府知事からここに移転の呼掛けがあり、文部省からもこれに応ずるようにとの勧告があった。そして教師も学生も、全学一致して移転に賛成した。

ところが万国博計画が立派に成功し、かつての不毛な竹藪で蔽われた土地が、美しい風姿と高い価値とをもった地区に変貌すると、そのとたんに大学移転招致の問題はどこかにふっ飛んでしまった。大阪府知事も文部省も「話が難しくなって……」と言うだけで要領を得ない。

そのため、万国博が終わった45年9月頃からその年の暮にかけて、私たち自身が財界、政界、官界の有力者たちに陳情運動を始めた。だが結果的にはすべてが徒労であった。有力者たちは、みな一応多忙な時間を割いて話を聞いてくれた。そのなかには時の蔵相、今の政界元老、福田赳夫氏もあった。みな「聞き置く」だけで具体的な援助はもちろん、しかとした返辞をした人はひとりもなかった。次第に愚直な陳情者の自分が憐れで、惨めで堪らなくなってきた。

最後に適当な紹介者によって、時の自民党幹事長、田中角栄氏に面接する機会がで



「万博跡地移転は望み薄？」  
と報じた『大阪外大新聞』  
(1971年3月20日号)

きた。昭和45年も押しつまった12月23日朝 8 時40分、私宅にとの指示があった。私と大学事務局長とはタクシーで、その後有名になった目白台の邸宅に定刻前馳せつけた。大きな門扉はピタリと閉ざされていて、人ひとり、車一台もその辺りには見られない。季節は年の暮、冬、時刻も早朝である。なるほど訪問者も、陳情者もまだ来てないな、と思いつつ、インターホンで案内を乞うと、すぐ門扉が左右に開いて私たちの車は乗入った。とたんに仰天した。門と玄関とのかなり広い車寄せに、すでにずらりと車がひしめき並んでいるのである。(中略)指定の 8 時40分からそれほど遅れない頃に、秘書から面会は10分間という注意をうけて部屋にはいった。

あの頃の、総理就任数年前の角栄氏は、心身ともに一番充実していたのではないだろうか。時間節約のため坐らないでと注意されていたので、ソファに寄り添った。秘書に立って私たちは陳情した。もう何十人かの客と対応したあとだが、疲労の色も見せないで真剣な面持ちで私たちの話を聞いていた。

説明が終わったとたん、しゃがれ声で一気に反応があった。問題の核心にすぐ触れた。万国博跡地利用については、いま数十件の要請が出されている。この調節はどうてい不可能、だからここ10年、20年あのままにして、請願者が次第にシビレを切らして退却したあとで利用の断を下すはずだー。

角栄氏は私たちに口をはさませないで、力強く説得的にこの様に語って、最後になお言いそえた。「大学が都市から郊外に出るのなら、もっと遠い閑静な田園地帯に移るべきだ。あの跡地付近もやがて人家に埋まってしまうんだから」

もうその時、つぎの陳情者たちが部屋にはいつてきていた。

私の田中角栄氏会見は、この一回の10分間だけであった。全学念願の万国博跡地への移転は物の見事に一蹴されたのである。

だが、角栄氏の論拠と結論はともあれ、私たちはまことに爽快な気持で目白台の邸宅から師走の戸外に出てゆくことができた。今まで数十人の有力者たちと対して、誰からも得られなかった明確な答え、そのものずばりの断案を与えられたのである。そして今まで数十人と対して、一方的にただ陳述するときに覚えたあの卑屈な、みじめ

な小さな陳情者の感じはなかった。人がひとりの質問者として迎えられ、相手が正面からそれを受けとめてくれたときの、あの爽快さがいつまでもあった。

「彼の一言で断を下した」という牧学長代行は万国博跡地に見切りをつけた。田中角栄邸に同行した前川春雄事務局長は大阪市内はもちろん、岸和田、堺、羽曳野、茨木など一から出直しの土地さがしに飛び回った。10件以上の現地調査の結果、6件にしぼり込まれた候補地はAからFまでのアルファベットを付して、移転委員会に諮ったうえ教授会に提案された。

#### 〈F候補地・小野原〉

昭和46年6月10日の教授会では、学長代行および事務局長から

- (1) 万博跡地への移転は、現状では実現が困難なので、第二候補地を探していること。
- (1) 候補地は大阪府内であること。特に夜間部学生および非常勤講師の交通の便を考慮に入れていること。
- (1) その候補地としてA、B、C、D、E、Fの6ヵ所があがったが、F候補地が一番条件がよいこと。
- (1) 土地買収の事情から、現在のところF候補地の所在は公表できないが、その時期が来れば発表すること。

などが報告された。このあと当面第1案としてF候補地を推すことの可否を諮った結果、出席76人中、72人が賛成。ここにF候補地、つまり箕面市小野原地区が圧倒的多数で決定されたのである。ただし、この決定は、定足数不足時のものであったため仮決定とされ、7月8日の教授会で改めて正式決定として承認された。

牧名誉教授の回想によれば、小野原地区は、有地成光庶務課長の友人が箕面市の教育課長をしていた関係で教示されたもので、上八敷地の10倍に当たる約15万平方メートルの原野。大阪大学吹田キャンパス、中・高・短大を持つ金蘭会学園の北側に位置するというところで魅力を感じたという。本学の箕面市との関わりあいの最初であった。

小野原地区仮決定の翌6月11日、牧学長代行、前川事務局長らは、箕面市役所に黒山宣雄市長を訪ね、移転用地買収について協力を要請した。同行した当時の山口慶四郎学生部長は、このときの模様を「母校移転事情覚書」で次のように伝えている。

「箕面市の幹部はわれわれの突然の訪問、それも大学移転にあたっての協力の要請でさぞ驚いたことだろう。

箕面市はその前に新船場繊維団地を誘致し、この折不祥事が発生、その傷がようやく癒えかけていた頃であった。このことを面談の時に箕面市側から話題にした。黒山市長は陪席の中井武兵衛助役(現市長)の方に、『君、どうする?』といったような面持ちで目を向けた。中井助役の口をついてでてきた言葉はつぎのようだったと記憶する。

『ご協力しましょう。箕面市には短大はありますが、4年制大学はまだありません。』

それも国立の有名大学である大阪外国語大学がこの市へおいでになるというのであれば、ご協力するという線で関係方面に相談をかけてみましょう。外大がこれでも当市には財政的になんのプラスもありません。しかし緑豊かな文化都市の建設を標榜する当市としては歓迎します。これによって箕面市の品格があがることを期待することにしましょう。後日、よい返事をすることにします」

黒山市長もうなずいた。期待以上の明快な返答に牧学長代行の顔はほころんだ。

昭和46年6月11日。こうして外大移転に青信号が点ったのである」

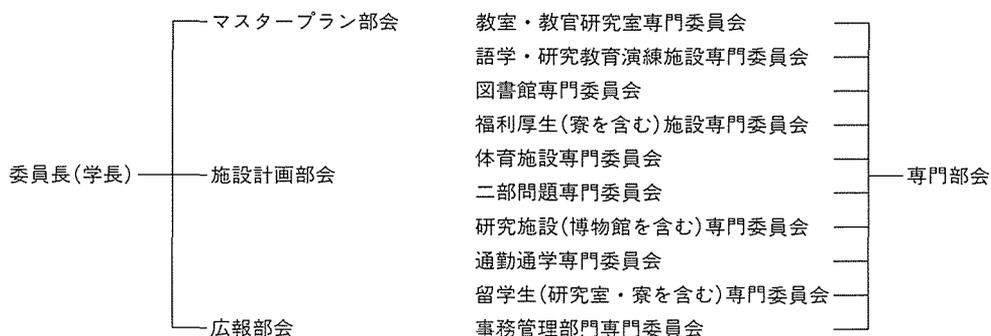
46年暮れになって、財政投融资による移転用地買収予算が47年度大蔵原案で認められた。47年1月13日の教授会では、学長代行から大学移転の予算内示があったことが報告された。この日は新しい学長選挙関係規程が賛成多数で可決されており、移転問題と、学長選考問題は同時進行していたのである。

部外秘とされてきたF候補地であったが、47年1月28日の『読売新聞』は、大阪外大の移転敷地購入予算28億円が47年度の財政投融资計画に盛り込まれ、箕面市小野原の丘陵地帯へのキャンパス移転が決まったことを報じた。

#### 〈将来計画委員会の発足〉

前節で述べたように、昭和47年3月1日、牧祥三が本学第4代学長に就任、移転問題への本格的取組みが始まるが、まず4月20日の教授会で、将来計画委員会が正式に発足した。移転問題を「本学100年のあり方を決する大事」〔『将来計画の基本構想』の序〕として、当面の移転問題だけでなく、外国語教育・研究の理念、教学体制、二部問題、留学生別科のあり方など広く本学の将来計画全般を検討するためのものであった。委員会にはマスタープラン、施設計画、広報の3部会が設置され、委員長に牧学長、マスタープラン部会長に芝池靖夫教授、施設計画部会長には外山軍治教授、広報部会長には相浦泉学生部長が就任した。さらに施設整備計画を具体的に検討し作業を進めるため、各種専門委員会も置かれた。発足当初の委員会組織は別表のとおりであった。

#### 将来計画委員会組織



各会議には学生代表らのオブザーバー参加も認められ、全学的な取組みが図られた。

### 〈『将来計画の基本構想』〉

将来計画委員会のマスタープラン部会は、発足5ヵ月後の47年9月21日には早くも『将来計画の基本構想(未定稿)』を、翌48年4月5日には、その定稿『将来計画の基本構想』(以下「基本構想」という)をまとめあげている。そこで述べられている「将来計画立案にあたっての基本的立場」は次のとおりであった。

#### 将来計画立案にあたっての基本的立場

1. 本学の将来計画は、本学における教育研究の発展が常にわが国の学問研究の発展動向と緊密に対応すべきものとして、あわせてまた、わが国と世界各国との経済上・文化上の接触・交流関係の不断の拡大に正しく対応すべきものとして、策定されなければならない。
2. 本学の将来計画は、一般に外国語教育の本来のあり方に基づき、また本学学則第1条の趣意にのっとり、単に外国語学そのものの学問分野のみならず、外国の歴史・思想・文学・政治経済、さらにそれらの学問的基礎をなす人文・社会科学および自然科学の諸分野もあわせて総合的に考慮されるものでなければならない。
3. 本学はかつて学制改革にあたり、それまでの3年制の専門学校としての管理・教学体制をほとんどそのままの規模で継承したため、その後における年々の制度的整備にもかかわらず、全体としての体制はなおきわめて不備不十分な状態にある。そのことは以下の所述のなかからも容易にうかがいしられるはずであって、今後教育研究体制はじめ、管理・厚生・補導等の諸制度・諸施設の拡充・改善はぜひとも現状の整備充実と並行しておこなわなければならない。

B5版43頁にのぼる「基本構想」は、以上述べた(1)基本的立場(2)本学の教育研究体制ならびに諸施設の現状と、それらの整備・改編・拡充の基本方向(3)各セクションごとのあり方の3章からなり、(2)のなかの教育研究体制の整備・改編では①教官定員の充足 ②語学、文学、文化(歴史・思想)、政治経済の4講座制=4系列制の確立 ③いくつかの関係語学科を何らかの形式によって相互に関係づける語学科グルーピング ④新しい学科および研究資料センター等の増設 ⑤教官、研究室等の第一部・第二部区別固定化の解消など相互関係の調整一などの基本方向が打ち出された。

将来計画委員会発足後、1ヵ年足らずで「基本構想」がまとまったのは、マスタープラン部会の精力的な作業もさることながら、大学紛争を機に生まれた大学改革問題特別委員会はじめ全学あげての真剣な改革論議の積み重ねがあったことは否定できない。

「基本構想」の語学科グルーピングで言及されていたベトナム語、スウェーデン語、アフリカ語などは昭和52年以降それぞれタイ・ベトナム語学科、デンマーク・スウェーデン語学科、アラビア・アフリカ語学科として新発足。新しい語学科増設で必要性が指摘され

た日本語学科は、52年度の大学院日本語学専攻、62年度からの日本語学科新設となって結実したことはすでに述べた。このように、将来計画委員会発足後の本学の発展と変容は、すべて「基本構想」の線にそったものであると同時に、将来計画委員会は現在も大学改革について数多くの構想を提起しつつけている。平成3年3月には、学内特別経費に基づく研究プロジェクトの結果である「大阪外国語大学における学部教育課程の質的充実と改革モデル策定に関する研究」が、『これからの外大』第17号(特別号)として発行された。これからの外大はどうあるべきか—本学の将来像については最終章で触れられるであろう。

#### 〈創立50周年記念式典〉

ところで箕面市小野原への移転めざして将来計画委員会が発足した昭和47年は本学創立50周年を迎える年であった。大学が主催、同窓会と後援会が協賛しての記念事業が盛大に行われた。

創立記念日の11月11日午前11時、牧学長と繁村長孝同窓会会長は、故林蝶子女史の墓前に参拝、母校誕生半世紀の喜びを報告した。さらに式典には蝶子女史の娘婿である会社役員、林進氏と林家の分家の二代目、林政生氏も招待された。大学側が、ゆかりの人々を捜し求めて消息が明らかになったもので、進氏は「みなさんが故人のことを再び思い出してくださいれば幸いです」〔昭和47年11月10日付『読売新聞』〕と語った。午後1時から大阪府中小企業文化会館で開かれた記念式典では25年以上勤続教職員を表彰、式典のあと教職員、学生はホール、同窓会は東洋ホテルでそれぞれ祝賀パーティーを開いた。式典出席者全員に記念絵はがきが贈られたほか、学内では新聞局協力の「外大の歴史を考える」をテーマとした写真展示が行われ、50年の歩みをたどった。

11月25日には大阪科学技術センターに多摩美術大学長・真下信一、作家・司馬遼太郎を迎え記念講演会が開かれている。

外語—外大を通じて歌われた「キンキラ節」にちなむ同窓会50周年記念誌『きんきら50年』も刊行された。元・前・現学長、教授はじめ、外語1回生から別科、第五臨時教員養成所、さらに短大から大学19回卒業生まで170余人が寄稿した記念誌は、このとき記念事業として教授会に提案されながら実現しなかった「外大50年史」に代わる貴重な資料となっている。

#### 〈難航した土地買収〉

話を移転問題にもどそう。施設計画部会も多忙をきわめた。47年5月11日の第1回部会につづき、18日には早くも本学と同じ単科大学である奈良教育大を視察。その後も教室、研究室、図書館、学生寮、運動場それぞれの面積や配置について検討を加え、48年度概算要求提出に間に合うよう6月15日までに小野原地区の整地・建物配置案3種類を作成した。学生自治会、教職員組合などで構成する全学移転対策会議も対案を作成、6月22日の教授

会は以上4案のうち、将来計画委員会が賛成多数で決定した第3案を概算要求の添付資料とすることを決定した。

7月11日、牧学長、相浦学生部長、芋田事務局長らが箕面市役所を訪問。中井助役から「箕面市で土地買収を引受ける。8月中は地元を刺激しないよう配慮されたい」との要望があった。

移転問題は順調な滑り出しを見せた、と思われた。48年度の学生募集要項には初めて、「本学は数年後、大阪府内北西部に移転する予定である」と明記された。

文部省との打合せも活発化した。9月29日、本省で計画協議会第1回準備会が開かれたのにつづき、12月11日、翌48年2月16日、3月15日と計4回の準備会を経て5月2日には正式な計画協議会が本学と文部省との間で持たれた。牧学長も出席したこの会議で「用地買収および地盤調査がまだ完了していない時点なので、今後の用地買収により敷地の形態に大きな変更が生じた場合には再度計画協議会を開催することになるが、大筋においては本協議会をもって終了する」との合意が成立した。

この結果は5月10日の将来計画委員会と教授会に報告された。「本学のゾーニングプランは一応、文部省との合意に達した」としながらも、「ただ現在のところ用地買収は30%程度なので、多分に不確定要素がある」とする学長説明に一抹の不安を感じた教官も少なくなかった。不安は的中した。

#### 〈小野原地区断念〉

48年度中に買収完了の予定だった小野原地区は、49年3月末に至っても土地買収が実現しなかったのである。財政投融資による土地買収資金を年度内に消化できなくなった事務局は、財投資金返還を決定する。

前任の前川事務局長は、大学紛争が解決すると、すぐに永年の懸案である移転問題を取りあげ、自らも熱心な推進者となった。しかし後任の芋田事務局長は一練達の事務官ではあったが一次次に発生する不測の困難な事態に直面して次第に消極的、悲観的態度に傾き、最終的には予算返上により、移転計画からの全面的撤退も止むなし、と考えるに至っていたのである。

49年3月22日、牧学長、芋田事務局長らは文部省を訪れ、予算返上を申し出た。このあと牧学長は予算獲得に際して尽力をとおいだ大蔵省出身の岩尾農林漁業金融公庫副総裁を訪ねる。

「牧学長は無念やる方なかった。しかしどうしようもなかった。事務局幹部と別れて、これまで絶大な支援をうけた岩尾一(はじめ)氏(第七高等学校で牧教授にドイツ語を教わった。もと大蔵省理財局長)に挨拶とお礼のため、重い足をひきずって訪れた。経過説明をうけた岩尾氏は「牧先生、それでは外大の移転はずっと先になりますよ。あるいは実現しないかもわかりません。財投資金を返却してはなりません。文部省に

たいして行った申し出をすぐに取り消すべきです』こういって岩尾氏はすぐ電話をとり、文部省の三角(みすみ)会計課長を呼び出したのである。(中略)

牧学長は岩尾氏のアドバイスを受けてまた文部省に駆けつけた。もちろん一人で。すでに文部省の正面玄関の扉は閉っており、裏門というか、会計検査院寄りの横門から庁内に入り、三角会計課長を執務室に訪ねた。「外大学長がいまからそちらに行くので、言分を聞いてやってくれ」という内容の電話を岩尾氏からすでに受けていた三角課長は、「外大からの移転予算返上ということはすでに省の幹部会議のところまで通じてしまっている。再度、この会議にかけてなんらかの結論をだすことにするので明日まで待ってほしい」といった主旨の返答をした。(中略)

翌3月23日の早朝、牧学長は自宅から東京の岩尾氏に電話を入れ、前夜の三角課長との面談の経過を伝え、文部省の幹部会議がこの日開かれる前に安嶋管理局長と三角課長とに再度働きかけをするよう懇請した。

23日午後には、約束どおり、三角課長から外大に電話連絡があった。それによると、文部省は外大に寛大な結論を下したのである。一旦は切れたかと思われた糸が繋がったのである。後日、牧学長が耳にされたことであるが、この日の文部省幹部会議では、安嶋局長と三角課長とは岩尾氏の働きかけの結果で、きわめて好意的に外大移転のこの重要時に対応したとのことである」〔山口慶四郎「母校移転事情覚書」〕

岩尾副総裁の本学移転への尽力は、このときばかりではない。これより先、小野原買収費28億円、その後地元の要求に基づいて6億円が加わり、土地買収予算34億円が文部省および大蔵省から認められたのも氏の終始好意的なあっせんによるものであった。

追加の6億円が認められたことで箕面市の態度も変わった。箕面市の幹部の一人は後日、牧学長に次のように語ったということである。

「中井市長は別として、初めのうち私たちは外大の移転計画をお手伝いすることに必ずしも乗り気ではなかったのです。6億円の追加を求めたときも、本省がこれを認めず、そのために移転が中止になるのも市としては結構だと思っていました。しかし意外にスムーズに追加予算を認めたことを知らされ、私たちも「これは真剣に移転計画に取組まねば……」と思い直しました」

小野原地区買収失敗の背景は、昭和47年6月、田中角栄内閣発足後の日本列島改造ブームに伴う地価暴騰があげられよう。とくに都市近郊での土地ブームはすさまじく、小野原地区も例外ではなかった。関係地主の数が多かったことも事をむずかしくした。地主60人のうち、不在地主を中心とした22人は早期に買収に応じたが、残る38人は協議会をつくって箕面市側と交渉に入ったが、「国の指示価格3.3平方メートルあたり平均115,000円に対し、協議会側は平均235,000円を要求」〔昭和49年12月26日付『毎日新聞』〕して話合いは難航。結局箕面市は49年暮れに至って最終的に買収を断念、地元および本学に対して正式に通告した。万博跡地につづいて小野原地区もまた移転候補地から脱落したのである。

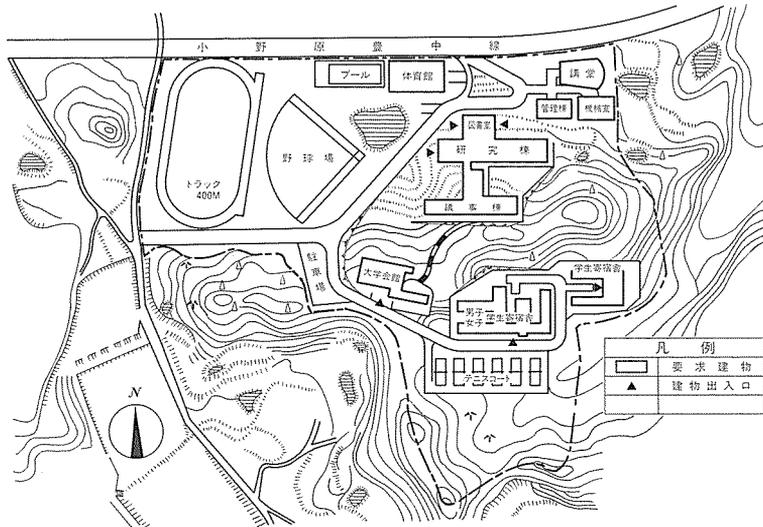
なお、小野原ですでに買収済みの13,675㎡(これは、かつての上八敷地の広さに近いものである)は箕面学舎(1)として残され、教職員宿舎その他に用いられている。小野原移転計画の遺産である。

#### 〈幻の小野原キャンパス〉

今となっては幻と化した小野原地区敷地造成ならびに校舎建物配置図が、49年5月10日発行の『新しい外大のために』第5号に掲載されている。48年10月18日の将来計画委員会での配布資料で、5月の文部省との計画協議会で大筋合意を得たゾーニングプラン最終案を多少手直したものである。粟生間谷キャンパスにはない講堂やプールも計画されていたことがうかがえる。

奈良教育大、京都教育大、愛知教育大さらに神戸大の視察結果も盛り込んだ、施設計画部会の労作であった。小野原キャンパスは実現しなかったが、同部会で蓄積された作業結果は、このあと現在の粟生間谷キャンパス向けに洗い直され、さらには横浜国大、埼玉大、静岡大の視察結果を付け加えて実を結んだのである。

－小野原地区敷地造成ならびに校舎建物配置図－



#### 〈粟生間谷地区の提示〉

現在の校地である粟生間谷地区が本学に提示されたのは、前出「母校移転事情覚書」によれば49年3月16日となっている。48年度中の小野原地区買収が不可能となった時点で、箕面市が代替地として示したものであったが、前にも述べたように財投資金返上騒ぎの直前であり、牧学長らが初めて現地視察に向いたのは4月24日のことであった。視察結果は翌4月25日の将来計画委員会、さらに5月2日の教授会に報告され、粟生間谷を適地の

一つとするが、大阪府北部に限らず、さらに広範囲にわたって適地を求める方針が了承された。

当時、粟生間谷以外に候補地として検討対象にあげられていたのは、府北部では茨木市の郡山団地に隣接する宿川原地区、府南部では羽曳野市尺度地区のゴルフ場跡地、同じく羽曳野市駒ヶ谷地区、和泉市内田地区であり、バスを借り入れて教職員、学生による実地調査も行われた。

#### <ランク1位・茨木の脱落>

6月13日の将来計画委員会は投票により候補地のランク付けを行ったが、1位は茨木市宿川原、2位粟生間谷、3位羽曳野市駒ヶ谷、4位和泉市内田で、この順位は教授会でもそのまま了承された。本学は直ちに茨木市宿川原地区の所有者である民間法人と買収交渉に入ったが、最終的には価格について合意が成立せず、7月末になって脱落する。ランク1位が消えてしまったのである。

7月1日には文部省で移転に関する統合整備等事務連絡会議が開かれたが、文部省側からは粟生間谷地区は地形上、敷地造成などの技術的困難性が考えられるので再検討を求める慎重論が述べられた。神戸大のように南斜面にある校地は暴風雨のとき崖崩れの危険性があり、学校の建築には不向きであるという指摘であった。

#### <宝塚市山本地区の浮上>

このころ阪急沿線の兵庫県宝塚市山本地区が新たに候補地にのぼり、7月4日の将来計画委員会に報告された。交通至便であるが大阪空港の航空騒音に問題があるので番外候補地として調査、検討されることになった。同時にランク4位の和泉市内田地区は、市当局は誘致に積極的であったが、関係地主が86人の多数にのぼり、小野原の苦い経験からはずされた。

こうしてランク2位の粟生間谷、3位の羽曳野市駒ヶ谷、番外の宝塚市山本地区が残されたわけだが、粟生間谷に慎重論を唱えていた文部省内部には山本地区をよしとする空気が強かったようである。小野原の件で箕面市に不信感をつのらせていた事務局が本省寄りの姿勢をとったことも無理からぬところであった。

#### <伊藤阪大教授の調査報告書>

しかし、将来計画委員会は粟生間谷の地形、造成工事、治水についての調査を大阪大学工学部・伊藤富雄教授に依頼した。すでに民間2社による調査報告が提出されていたが、文部省の慎重論を受けて、さらに技術的な問題点を解明しようとするものであった。8月9日の将来計画委員会は、茨木が脱落した現状では、粟生間谷以外ないのではないかという学長発言を受けて、「①番外となっている山本地区を第1候補とはしない ②伊藤教授の

調査結果を待つ最終決定とするが、粟生間谷を第1候補として作業を進める」ことを確認。8月17日の教授会はこの答申を賛成56、反対15、白票7で承認した。

#### 〈粟生間谷の決定〉

伊藤教授の調査報告書は10月24日提示された。報告書の内容を要約すれば「①土質は極めて良好であって高層建築に適する②地形が非常に起伏に富んでいるため造成上の困難があるが、敷地造成基本計画を実行するに要する造成費は当初の予想以下であり、地価プラス造成費の合計額は適正な金額であるので、この土地の開発は国土利用上、好ましい」というものであった。この報告を受けて同日の教授会は「文部省との協議を前提として、本学の移転候補地を粟生間谷にする」ことを決定したのである。

10月28日、文部省で2回目の統合整備事務連絡会議が開かれた。牧学長は10月24日の教授会決定を説明するとともに、現在においては教官、事務局、学生等の各層を含めた全学の意思統一ができていることを力説した。明けて50年1月9日の将来計画委員会では、本学が粟生間谷を移転候補地に決定したことを了承するという文部省内示があったことが学長から報告されている。

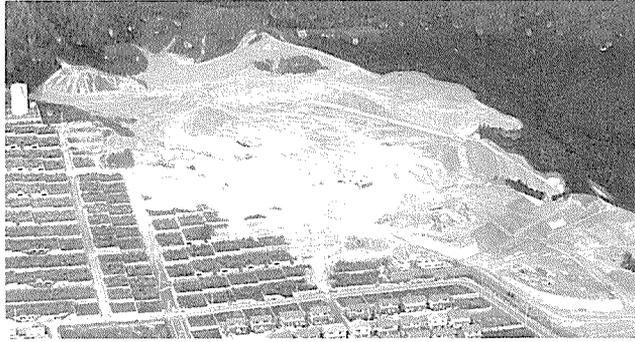
1月30日の教授会では、移転予定地内の未解決の土地買収交渉が基本的合意に達したことが報告され、また今後の土地造成と建築に関して、大阪大学土木工学科・伊藤富雄教授と同建築工学科・足立孝教授の意見を参考聴取することも了承した。土地所有者である阪急電鉄以外のもう一人の地主も買収に応じ、箕面市開発公社から粟生間谷の土地買収完了の報告が入ったのは3月22日であった。

#### 〈長引いた地元交渉〉

昭和50年度に入って移転のための諸作業が本格化した。4月7日、粟生間谷山ノ口地区代表に、4月15日には阪急間谷住宅住民代表に対し、本学移転のあいさつならびに説明会を開いた。4月25日には箕面市役所で記者会見を行い、粟生間谷移転を正式に発表した。

これより先、4月21日に文部省で開かれた計画協議会では、本学の示した土地造成計画、建物配置計画が原則的に了承された。ほぼ現在のキャンパス配置に近いものであった。

地元代表へのあいさつにつづく住民への説明会は7月19日を皮切りに8月8日、9月6日と3回に及んだが、造成・建築工事に伴う騒音、交通などの公害対策、高層建物による日照権、電波障害、プライバシー侵害から自然破壊への心配まで住民側要望が相次ぎ、箕面市を交えた話合いに持ち込まれた。これに対し本学は、工事中進入道路は既設の間谷住宅用道路と並行して別につくり、両者の間は天幕で仕切る▽グンプやミキサー車の通行時間は午前8時半～午後6時までとする▽間谷住宅にもっとも近い研究・講義棟(C棟)を当初計画の高層(7～8階建)から中層(4階建)に設計変更することなど、誠実に対処した。こうして翌51年2月5日、工事開始について住民側の同意が得られた。



粟生間谷キャンパス用地の造成

しかし、間谷住宅自治会の内部事情から問題がこじれ出した。改めて協議やり直しの要求が持ち出されたのである。工事執行に関する協定書づくりの話合いは一向に進展しなかった。予算執行上のタイムリミットは迫ってくる。11月4日の将来計画委員会および教授会は、ひきつづき公害問題など自治会要求事項についての協議をつづけることとして工事着手を了承した。

#### <工事着手>

51年11月12日、飛鳥建設による造成工事が開始された。「現地で若干のトラブルがあったが、現在は静穏になっている」と25日の教授会で報告されている。着工後もつづけられた話合いの末、間谷住宅自治会との間に基本的了解が成立したのは翌52年2月18日、了解事項を具体化した協定書調印式が行われたのは7月2日のことである。中井箕面市長立会のもと、自治会、施工業者、本学の三者が調印した。本学代表は牧祥三前学長の後を継いでこの年の3月1日就任したばかりの伊地智善継学長であった。

11月24日行われた研究・講義棟(A棟・8階建)の地鎮祭には、竹中工務店を祭主に、梓設計、近畿電機のほか関連工事担当各社、地元住民代表も参加した。

54年9月1日、箕面市大字粟生間谷2734に移転▽9月25日、箕面学舎で授業開始、上八学舎の土地・建物を大阪市に譲渡▽56年10月31日、箕面学舎体育館で統合移転・学舎完成祝賀会一年表の短い記述の間から全学関係者の苦勞と喜びがにじみ出てくるようである。39年7月の上八離脱・適地移転の教授会決定から実に15年。万国博跡地、小野原、さらに茨木市宿川原、宝塚市山本と揺れ動いて、ようやくたどりついた粟生間谷一苦難に満ちた長い道のりであった。

本学移転史のなかで、なお特筆すべきこととして中井市長を中心とした箕面市の多年にわたる好意と助力がある。地元の無理解に基づく激しい反対や過大な要求を粘り強く説得・調停し、解決に導いた同市関係者の努力への感謝を我々外大にある者は忘れてはならないであろう。

### 〈受教育地確認仮処分申請〉

本学移転史の締めくくりとして、第二部学生による受教育地確認仮処分申請に触れておこう。

移転問題の最大のネックは、通学の足をどう確保するかという問題であった。教授会が粟生間谷移転を決定した昭和49年10月当時、移転地に最も近いのは阪急バスの「豊川住宅」であったが、翌50年春には粟生団地の入居開始で、バス路線が延長され、最寄り停留所は「粟生団地」となった。53年4月発行の『ひろば』53号は、学生、教職員の通学方法として、千里中央、北千里あるいは茨木、箕面、阪急石橋から小野原經由粟生団地までは阪急バス利用、粟生団地からキャンパスまでは徒歩約18分のコースを掲載しているが、将来計画委員会の通勤・通学問題専門委員会は、キャンパスまでの路線延長と増便、さらに学生便を要求して、箕面市、阪急電鉄の協力を求めながら阪急バスと粘り強い交渉を進めた。

移転直前になって外大キャンパスまでのバス路線が開設されたが、54年8月、第二部学生17人が大阪地裁に受教育地確認の仮処分を申請した。申請人の主張は、第二部学生は第一部学生と異なり、大学を選択するに当たって大学の所在地と自分の勤務場所、仕事内容を十分考慮した上、大学を決定しているのであり、従って在学中に大学側の一方的な都合で大学を移転され、受教育地を変更された場合、憲法第26条に保障されている「ひとしく教育を受ける」権利を侵害される恐れがあるとした上、移転およびこれに伴う受教育地変更は無効であるとして、従来どおり上八学舎で教育を受ける学生としての地位を有することを仮に定めるよう裁判所に求めたのである。

小野原からさらに北へ2.5\*も離れた粟生間谷への移転だけに、足の問題を重視した将来計画委員会の第二部専門委員会は、52年6月1日現在で、勤務先からの現在の通学所要時間、移転後の通学予想時間などを含めた第二部学生実態調査を実施している。調査の結果、従来職場から1時間以内で通学できた学生は全体の86.1%であるのに対し、移転後は直行バス便による時間短縮を考えると19.1%に過ぎず、1時間半を超える者が全体の30.3%に達した。

従来のような午後5時50分授業開始では大多数の者が遅刻してしまう。このため移転後の授業開始は30分繰下げて午後6時20分からとし、さらに従来の90分授業を80分授業に、さらに休憩時間も20分を10分に短縮、2限の終了時刻はこれまでどおりの午後9時10分を維持し、短縮された授業時間については夏、冬休みを各1週間遅らせ補講を行うなどの措置がとられた。

裁判では、国立大学における学生の在学関係、大学移転は司法審査の対象となるか、移転に学生の同意は必要か、移転に係る設置者の裁量権の範囲などについても争われたが、結論からいえば、この仮処分申請は55年3月14日、却下された。

裁判所の判断は長文にわたっているが、(1)移転後の新学舎は大阪の都心部・梅田から1

時間前後で通学可能であり、必ずしも交通事情の極端に悪い辺りな地域にあるとは言えない (2)申請人のなかには通学時間が1時間以上も増大するため不便をこうむる者が相当数あることは否定できないが、通学が事実上不可能あるいは著しく困難となったとは解せられず、また申請人主張のように、移転が第一部学生を優遇し、働きながら学ぶ第二部学生の立場を故意に無視し、その犠牲の上に強行されたとは認められない (3)移転に伴う申請人らの通学条件の悪化を十分斟酌しても、大学設置場所の変更が設置者の合理的裁量の範囲を逸脱したものとは到底認められない—などが却下決定の理由であった。

その後のバス増便、千里中央からのノンストップ学生便導入などにより、80分短縮授業が90分授業にもどったのは、平成2年4月からである。

#### (4)外大の研究活動

「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授・研究し、知的・道徳的及び応用的能力を発展させることを目的とする」(学校教育法第52条)を引くまでもなく、研究は大学の生命である。本学の教官は国内外の学会で幅広い研究に従事しているが、ここでは本学発行の出版物・紀要類、本学を拠点とした研究、学会活動に焦点を絞る。

##### 〈『学報』の発刊〉

本学の紀要『大阪外国語大学学報』(以下『学報』という)は昭和27年5月30日に第1号が発刊されている。この年4月28日には対日平和条約が発効、わが国は占領時代を脱して独立を回復した。平沢俊雄学長による次の「発刊の辞」も、敗戦後、日本の国是とされた平和国家、文化国家建設への意気込みと独立回復の喜びにあふれたものであった。

今日我国は世界の平和をいたし以て人類の福祉に貢献することを理念として多難な道を歩んでいるが、これを実現するためには、言語を通して世界諸民族との真の相互理解をはかり共存共栄の道を講ずるよう格段の努力をすることが最も強く要望せられる。また我国は文化国家の建設を念としているが、文化の発展は異質的なものに媒介せられて反省と自覚とを促されることによって著しく実現せられることが最も多いのである。我々は虚心坦懐、広く世界諸民族の文化を深く研究し、ここに雄深高雅なる日本文化を創造して以て人類の文化に寄与するよう、あらゆる努力をなすべきである。思うてここに至れば、私は本学の使命の重大なるに肅然として襟を正さざるをえない。我々は目下貧しい施設のうちに忍びがたきを忍び、あまねく全世界に於ける諸言語につきその現象に関する研究、その原理的な研究はもとより、言語が運載する文化一般にわたり教授と研究とに不断の努力を傾倒している。今回平素の研究の一端

を江湖に発表するために学報を発刊することとなり、その第一号を茲に公にすることにした。あたかも平和条約発効の時に際会し、我々はその喜びを胸底深く感じつつ、独立国家の前途の多難を惟い、不退転の勇を鼓して使命の達成に邁進したいと思う。

1952年4月28日 独立の日に当たって

発刊の辞につづく第1号の目次を次に掲げておく。

Arnoldの恋愛詩	老田 三郎
ミストラルとプロヴァンス語	畠中 敏郎
秋水軒尺牘中に引用せる典故と解註	吉野 美弥雄
米国中西部方言の音声構造に就いて (I)	林 栄一
新文字による外蒙古口語文典の特徴と従来の文典との比較	精松 源一
中国語の言語単位	伊地智 善継
中国仏典所見のパーニニ	村田 忠兵衛
Dukonsonantaj Kombinoj en Esperanto	川崎 直一
イスパニヤ展望	国沢 慶一
「イーゴリ軍遠征の物語」考	岩崎 兵一郎

第2号(28年7月刊)には森沢三郎、八木浩、J・L・アルバレス、第3号(30年4月刊)には熊谷俊次、長谷川信好、ヘルマン・ボネルの名も見える。『学報』は35年4月刊の第8号までは毎年1回、36年4月の第9号以後は原則として年2回発刊され、本学教員の研究成果を総括する場となってきた。

#### 〈『学報』から『論集』へ〉

『学報』は平成元年3月の第77号を最後に終刊、新たに『大阪外国語大学論集』(以下『論集』という)と名を改め、平成2年1月に改題第1号が発刊された。発刊担当の教授会委員会も、それまでの図書委員会から新設の学術出版委員会に変わった。

『学報』という表題については、従来から論議があったため、図書委員会が二度にわたるアンケートの結果、『論集』に改めることを決議、平成元年4月から発足した学術出版委員会に申し送って改題が実現したのである。

『論集』は平成3年12月発刊分で、早くも第6号を数える。

#### 〈『学術研究双書』の刊行〉

学術出版委員会は『論集』発刊のほか「学術出版事業を推進し、その他本学の学術研究の振興に必要な事項」も担当するため創設された。同委員会最初の出版事業が『大阪外国語大学学術研究双書』(以下『研究双書』という)の発刊であった。

『論集』第1号のあとがきで、学術出版委員会は『研究双書』について次のように述べている。

「メディアの転換期に当り、わが国の活字離れが急激に進みます中で、私どもの学術研究の成果を世に問うことは、日毎に困難になりつつあることを痛感させられております。本委員会はそうした趨勢に対する私どものささやかな抵抗の拠点であります。そうした試みの一つとして、『大阪外国語大学学術研究双書』の刊行を企画、目下その最初の試みが進行中であります。

予算等多くの制約があります中で、いかに効率的に私どもの研究成果を世に問い続けていくかについては、まだまだ多くの論議と工夫の余地があるように思われます。是非多くの方々のお知恵やご経験を汲み上げて、創意豊かな活動を展開したいと念願している次第です」

平成2年3月、別表のようにまず『研究双書』(1)(2)が、翌3年3月には(3)(4)、4年2月には(5)(6)が発刊された。出版社の採算ベースには乗りにくいものを大学が援助し年2冊、1人1冊の出版を目標としたもので「待望久しかった学術的快挙」(山田学長の「創刊の辞」)であった。

『大阪外国語大学学術研究双書』

(1) 『レフ・トルストイと革命運動』

著者 エルヴィン・オーバーレンダー、監訳・解説 法橋和彦

(2) 『ロシア語アクセント研究』

著者 神山孝夫

(3) 『社会言語学—言語は社会の不平等を克服するか—(抄訳)』

著者 フリチョフ・ハーガー、ハルトムート・ハーバーラント、ライナー・パリース

訳者 乙政 潤

(4) 『Dwelling Space in Eastern Asia (東南アジアにおける住居空間)』

著者 Richard Zgusta(リチャード・ズグスタ)

(5) 『ラ・アラウカーナ(第1部)』

原作 アロンソ・デ・エルシーリャ

訳・解説 吉田秀太郎

(6) 『私の精神鑑定集』

著者 志水 彰

〈研究誌・語学テキスト〉

各語学科、研究室、本学に本拠を置く各種研究会からの研究誌・論文集、テキストも多い。研究誌については第2編部局史の各語学科史の中で触れられているものもあるが、ここでは附属図書館に収められているものの誌名と発行主体を列挙しておく。

研究誌(順不同)	
THE REEDS	(英語学科)
英米研究	(英語学科)
印度洋	(アーリア学会)
白象	(タイ語学科)
国際経済研究	(国際経済研究会)
MAS Y MENOS	(西語部会)
ロシア・ソビエト研究	(ロシア語学科)
ETUDES FRANÇAISES	(フランス語学科)
朔風	(モンゴル語研究室)
印度民俗研究	(印度民俗研究会)
IDUN	(デンマーク語学科)
JUA	(スワヒリ語研究室)
評林	(法経学会)
STUDIUM	(大学院研究室)
SPRACHE UND KULTUR	(ドイツ語学科)
日本語・日本文化	(留学生日本語教育センター・日本語学科)
日本語・日本文化研究	(日本語学科)
モンゴル研究	(モンゴル研究会)
日本語と中国語の対照研究	(日本語・中国語対照研究会)
ESTUDIOS HISPANICOS	(イスパニア語学科)
アーリア学会会報	(インド・パキスタン語学科)
NEBULAE	(言語学サークル・ネビュリー会)
外国語・外国文学研究	(大学院修士会)
視聴覚外国語教育研究	(視聴覚教育委員会)
コミュニケーション研究	(視聴覚教育委員会)
ビルマ研究	(ビルマ語学科)
アフリカ文学研究	(アフリカ研究室)
木曜会	(木曜会)
世界のわかものよ	(間谷祭実行委員会)
現代中国研究	(現代中国研究会)
槿域	(朝鮮語学科)
スワヒリ & アフリカ研究	(アラビア・アフリカ語学科)
アジア学論叢	(アジア研究会)

- テキスト  
 Textbook of Colloquial Egyptian Arabic : for language laboratory, Vol. 1  
 1978. 3 福原 信義(編)
- Audiovisueller Deutschunterricht für Mittelstufe  
 1978. 3 乙政 潤 (編著)
- ベトナム語中級視聴覚教材 1980. 3 富田 健次(編)
- Introduzione alla pronunzia italiana 1980. 3 藤村 昌昭(編)
- Comme un boomerang(ブーメランのように)  
 1981. 3 Rossigneux, Jean-Claude (編著)
- ペルシア語の発音・ペルシア語の書き方  
 1981. 2 モルーケ・カーゼンプール(吹き込み) 岡崎 正孝(資料作成)
- Português : Falar e entender : curso intermediário  
 1982. 3 河野 彰
- Introduction aux gestes français 1982. 3 Rossigneux, Jean-Claude,  
 大木 充
- L. L. ビルマ語会話 1982. 3 南田みどり
- トルコ語教本 1982. 7 勝田 茂
- フランス人の身ぶり辞典 1983. 2 大木 充,  
 Rossigneux, Jean-Claude(編著)
- Exercícios de pronúncia portuguesa 1983. 3 河野 彰
- ベトナム語重要文法語彙用例集 1 1984. 3 富田 健次
- Português moderno através de extratos  
 1984. 3 有水 博
- ビルマ語入門—発音編・文字編— 1985. 3 南田 みどり
- スワヒリ語テキスト 1986. 3 中島 久(編著)
- 昕听说説：中文課本 1986. 3 上神 忠彦(編著)
- 家と世界(シナリオ) 1988. 3 溝上 富夫(訳)
- フィリピン語テキスト 1988. 3 津田 守 (編著)
- ペルシア文字の書き 1988. 3 ラジャブザーデ、ハーシェム(編)
- 実践ロシア語教程(和文露訳) 1988. 3 小野 理恵(編著)
- Dansk lydlære for japanere 1989. 1 Andersen, Nina Møller
- スペイン語ルーマニア語比較文法・会話 1989. 1 伊藤 太吾
- 実用中等モンゴル語 1989. 2 橋本 勝、ルハックワー
- カセット・ヒンディー語入門 1989. 3 溝上 富夫

ロシア語入門教科書	1989. 3	生田 美智子・プロートニコ ヴァ	
フランス語からスペイン語へ	1989. 10	伊藤 太吾	
タイ語の重要な文法と会話	1990. 3	宮本 マラシー	
大都会(シナリオ)	1991. 3	溝上 富夫 (訳)	
ベトナム語・タイ語 “からだ言葉” 拾葉 (1) 「あたま」	1991. 3	富田健次・宮本マラシー	
The First Step to Kanji (part I, II)、 The Second Step to Kanji (part I)、 基本文型			留学生別科
文型練習問題	1982. 3	山口幸二・大倉美和子・蔭山 昭子	
読みの練習			留学生別科
漢字入門	1986. 2	吉村 近男	
中級日本語 I	1974. 10	改訂	留学生別科
中級日本語 II	1978. 6	改訂	留学生別科
Vocabulary and Composition	1983. 2	小林明美・藤戸淑子	
Curso de Japonés—Pronunciación y Diálogos—	1984. 3	大倉美和子・蔭山昭子・宮本 正美	
科学の森	1990. 3	北浜 栄子	
外国人留学生のためのはじめての農学	1991. 1	山本 進	
スライド目録(付解説とテキスト)			
イラン編	1981. 3	岡崎正孝	
ロシア編	1981. 3	ロシア語学科(編)	
パキスタン編	1982. 3	麻田 豊 (編)	
ドイツ文化史編	1982. 12	布施俊夫 (編)	
ロンドンと詩人達	1984. 1	大橋克洋	
北インドを中心とする服飾・装飾	1985. 3	インド・パキスタン語学科(編)	
トルコ編	1986. 3	勝田 茂 (編)	
ルーマニア編	1987. 3	伊藤太吾 (編著)	

#### <学会>

本学で開催された各種学会は、地方学会まで含めると多数にのぼるが、全国規模の学会

を拾うと以下のとおりである。

日本イスパニヤ学会	第3回(1957年10月12日)
日本語学会・大会	第59回(1968年10月19～20日)
”	第93回(1986年10月11～12日)
イタリア学会・大会	(1981年10月24日)
アジア政経学会・全国研究大会	第35回(1981年11月7～8日)
ポルトガル・ブラジル学会	第16回(1982年10月23日)
”	第21回(1987年10月17～18日)
国際法学会・春季大会	(1984年5月12日)
東南アジア史学会・研究大会	第31回(1984年6月9～10日)
日本オリエント学会・大会	第28回(1986年11月1～2日)
日本モンゴル学会・秋季大会	(1987年11月21日)

以上のほか、開催月日の記載はないが、中国関係では日本中国語学会第9回全国大会が1958年に、同第32回全国大会が1982年に、現代中国学会第37回全国大会が1987年に開催されている。また本学に朝鮮語学科が設置された翌年の1964年には朝鮮学会が本学と大阪城内博物館で開かれた。

#### <科研・特定研究・学特経>

研究者が個人またはグループで国の研究費補助を受けて進める研究は、科学研究費によるもの(科研)、特定研究経費によるもの(特定研究)、教育研究学内特別経費によるもの(学特経)に大別される。

科学研究費は、すぐれた学術研究を格段に発展させることを目的とした研究助成費であり、研究者が自発的に計画する基礎的研究のうち、わが国の学術の動向に即して特に重要なものを取上げて研究費を配分し、高度の研究成果を期待するものである。

この科学研究費は、研究の目的、性格、研究組織の形態などによって、さらに重点領域研究、総合研究、一般研究(研究費の額、研究期間によってA、B、Cに分かれる)、奨励研究A(37歳以下の研究者が一人で行う研究)、国際学術研究などに分けられている。一方、特定研究経費は、経常的な研究経費では実施することが困難な各種研究プロジェクトなどを推進するための経費である。

また教育研究学内特別経費は、大学における教育研究の高度化、個性化、活性化の推進に資するよう配分されるものである。教育研究の充実・発展を図るため、学長の判断によって適切なプロジェクトに対し特別に措置する経費であって、執行に当たっては画一的に各語学科に配分したり、教官研究費の補完的経費としないよう求められている。

昭和14年の科学研究費交付金以来の古い歴史を持つ科学研究費に限らず、前記費用、経費による本学教官の研究実績は、これまで数多くの研究報告書にまとめられているが、こ

ここでは平成3年度分に限った研究テーマと研究者・グループ代表者を掲げておく。

#### 科学研究費(科研)

- 一般A 「世界史上における人と物の移動・定着をめぐる総合的研究」  
勝藤 猛 ほか 9名
- 一般B 「『世界システム』の変容と国民統合—世界史における覇権交代—」  
松田 武 ほか 10名
- 一般B 「名詞の限定表現の研究—冠詞と指示詞の意味論構築—」  
坂原 茂 ほか 3名
- 一般B 「中華民国期における華北地域と東北地域の政治的・社会的統合状態に関する実証的研究」 西村 成雄 ほか 2名
- 一般C 「スワヒリ語・スワヒリ文学の生成と発展に関する研究」  
宮本 正興
- 一般C 「パソコンによる現代アラム語諸方言語彙集の作成」  
高階 美行
- 一般C 「イタリア中世・ルネサンス期のノヴェッラの発展過程とその歴史的背景に関する研究」 米山 喜晟
- 一般C 「世紀転換期におけるイギリスのインド支配とイギリス帝国体制の変容」  
秋田 茂
- 奨励A 「1970年代以降の学歴とライフコースの関連に関する計量的研究」  
岩井 八郎
- 奨励A 「中世英国詩人チョーサーの写本・刊本研究—カンタベリ物語を中心として—」  
田尻 雅士
- 国際学術研究 「フィリピン語学習教材の開発および本邦におけるフィリピン語教育の現状と課題」 津田 守 ほか 4名(うち学外者2名)
- 国際学術研究 「モンゴルにおける古代スキーの発祥と伝説および子どもの遊び」  
松下 唯夫 ほか 4名(うち学外者3名)

#### 特定研究経費

- ① 「世界秩序の変容とアジア研究の課題」  
赤木 攻 ほか 22名
- ② 「大阪外国語大学における中国研究の条件および教育効果に関する調査・研究」  
西村 成雄 ほか 11名
- ③ 「英語圏世界の総合的研究—新しいアプローチを<sup>もと</sup>索めて—」  
内田 憲男 ほか 14名

④「外国語・外国文化の研究・教育の評価方法とシステム」

乙政 潤 ほか 10名

⑤「フランス語学文化の基底と表層」

赤木 富美子 ほか 9名

教育研究学内特別経費(学特経)

①「本学における教育研究体制の総合的改革とカリキュラムの高度化プラン」

西村 成雄 ほか 10名 (将来計画委員)

②「大学院の修士課程の改革と博士課程設置の方策の研究」

大野 徹 ほか 8名

③「総合文化学科設立に伴う講座およびカリキュラムの編成」

(「外国語大学における環境・開発教育の在り方と方法論についての研究」)

油谷 朝子(神前 進一) ほか 43名

④「相浦文庫の整理と目録作成業務」

貝田 守 ほか 21名(学術情報係、図書館委員)

⑤「言語の対照研究と語学教育」 近藤 達夫 ほか 32名

⑥「ライフスタイルに関する運動強度の測定」

辻 忠 ほか 3名

⑦「高度な対面コミュニケーション能力育成の方策の研究」

溝上 富夫 ほか 27名(視聴覚教育委員)

## (5)外大と国際交流

### <本学における国際化の意義>

本学の前身である大阪外国語学校は「国際的実務ニ従事スヘキ者ヲ養成スル」ことを目的に掲げ、大正11年開校した。時代的制約はあったものの、大阪外国語大学教育理念に示される「国際的な活動をするために必要な広い知識と高い教養」を備え「外国に関する深い理解を有する有為な人材」の養成と軌を一にするものであり、本学の国際化志向は70年を経た今日も変わることなく受け継がれてきていると言えるであろう。

では、国際的あるいは国際化とは何かと問われると、人によって必ずしも一致した認識があるわけではない。しかし、昭和63年2月に将来計画委員会国際交流専門委員会がまとめた調査報告書『大阪外国語大学における国際化の現状と将来構想』は、巻頭に将来計画委員会委員長・山田善郎(学長)の「本学における『国際化』の意義」と題する次の一文を掲げ、本学の国際化のあり方を示している。

近時の通信交通手段の飛躍的な発達、政治、経済活動の世界的な規模拡大は、地球上のいかなる地域のできごととも直ちに国境を越え、海を渡って遠隔の地にまで、その影響力を及ぼすようになってきた。要するに国際化の波は人間生活のあらゆる面に波及し、世界は今や多極的な「相互依存」の関係が一段と深化の度を加え、その結果として汎世界的な「相互理解」の徹底が強く求められている。これらの「相互依存」や「相互理解」の必要性は、文化、政治、経済、社会等々多次元にわたり、およそ人間の活動でその範疇外に出るものは何ひとつなくなってきたと言っても過言ではない有様である。このような本格的な国際化の時代を迎えて、本学の果たさなければならない使命と役割は今までもますます大きくなってきていると言わざるを得ない。(中略)

真の国際化を押し進めるに当っては、広く他を知り己れを知ることが不可欠な必要事となってくる。もともと我が国の国際化のパターンは、どちらかと言えば、歴史的に欧米先進国を理想化し、一方的にそこから優れた文物のみを受け入れようとする摂取吸収型であったと言える。それはそれなりに大きな効果を収めたことも事実である。しかし、ここ4半世紀、国際社会における日本の位置も急激な変化を遂げるに至った。今後はそのようないわゆる「受信型」にのみ止まることなく、日本の文化を正しく世界に伝えるため「送信型」をも積極的に考慮に入れて、相互理解の助長に資すべきであるし、また従来欧米諸国に比して、圧倒的に情報量の少なかった非欧米諸国、さらにはマイナーと呼ばれる言語と文化に関する情報の獲得を急ぎ、西欧世界にのみ収斂されがちであった我々の意識も正す必要がある。

いずれにしても、本学が外国語を中心とした人文、社会科学の広い学問領域をカバーしている特色に依拠して、現下の国際社会における本学の存立意義を再認識し、今後ますます発展・深化していくであろう国際化に対応するべく教育、研究のための条件整備を図ると共に学問水準をより高めて、将来国際場裡において、世界のあらゆる人々と手を取り合い人類生存のために貢献し得る有為の人材を育成する必要がある。

以上のような「相互理解」をめざす本学の国際交流は、外国語大学という特性と深くかかわって多岐にわたるものとなっている。

#### 〈外国人教師の受け入れ〉

まず人の面の国際交流についてみると、本学は第一部18語学科24専攻、第二部6語学科専攻から成っているが、すべての専攻語にネイティブ・スピーカーとしての外国人教員を配置しており、教学と国際交流がワンセットで行われる点が大きな特色である。外国人語学教員は昭和56年度41人だったものが、10年後の平成3年は72人と急増しており、語学部門だけでなく一般教育科目の外国人教員採用も行われている。外国人研究者の本学来訪も

平成2年度だけで100人近くに達した。

#### 〈教官の海外派遣〉

一方、本学教官の海外派遣も活発化しており、昭和47年度に設立された国際交流基金に基づくもののほか、文部省の在外研究員(長・短期)や中国派遣、さらに科学研究費補助金、アジア経済研究所、学術振興会、DAAD(ドイツ学術交流会)などによる派遣が最近10年間で約500人にのぼっており、今後さらに増加することが予想される。

#### 〈大学間学術交流協定〉

以上のような人的交流の基礎の上に、諸外国との大学間学術交流協定や学生交流協定が積極的に結ばれてきた。昭和57年6月、中華人民共和国・北京語言学院と学術交流協定を締結したのを皮切りに、59年8月には同・復旦大学、同・厦門大学と協定を結んだ。期間満了に伴う更新などもあったが、平成3年12月現在の協定校は、平成3年6月に協定を再締結した復旦大学をはじめ別表のとおり6カ国15大学にのぼっている。このあと計画中のものとしてアメリカのウィスコンシン大学マディソン校、ハワイ大学などがあげられている。

大学間国際学術交流協定校等 (平成3年12月1日現在)

協 定 校 名	国 名	協定締結年月日
北京外国語大学	中華人民共和国	1986年9月27日
大連外国語学院	//	1988年8月29日
上海外国語学院	//	1989年12月1日
復旦大学	//	1991年6月26日
ペルー・カトリック大学	ペルー共和国	1988年1月27日
モロレス州立自治大学	メキシコ合衆国	1988年1月27日
エル・コレヒオ・デ・メヒコ	//	1988年8月15日
アテネオ・デ・マニラ大学	フィリピン共和国	1988年3月12日
フィリピン大学	//	1988年3月24日
聖スコラスティカ学院	//	1988年3月24日
エセックス大学	イギリス	1988年7月1日
シェフィールド大学	//	1989年8月21日
ハノイ総合大学	ベトナム社会主義共和国	1989年8月3日
ハノイ外国語大学	//	1989年10月26日
ホーチミン市総合大学	//	1990年6月7日

#### 〈留学生受け入れと日本語教育〉

留学生の受け入れおよび日本語教育の実施も教学・交流が一体となったものである。外

国人に対する日本語教育は、第3章で述べたように昭和29年の留学生別科設置以来の実績を誇っており、これが留学生日本語教育センターに改組された平成3年以降、私費・国費合わせ年間300～400人の留学生を受け入れている。

大学院修士課程の日本語学専攻設置(昭和52年)、学部の日本語学科新設(同62年)は、日本語教育にたずさわる人材養成ということだけでなく、日本語と日本文化を国際社会に発信、流通させる、いわゆる「送信型」国際化への転換を意図するものとして、大きな意味を持つことは、すでに述べた。

### 〈国際関係コース〉

教学内容での国際化としては、昭和52年4月から任意選択制でスタートした国際関係コースがある。当時、本学の将来構想の一つの柱として国際関係学科の新設が検討課題にのぼっており、同コースの開設は国際関係学科のための基礎づくりの一環でもあった。

平成3年度の授業科目は別表のとおりで、一般教育科目については、人文の分野から2科目8単位、社会の分野から3科目12単位の計5科目20単位以上、関連科目については5科目20単位以上をそれぞれ選択履修する。修得単位は卒業必要単位に算入することができ、同コースの所要単位修得者には、卒業証書および成績証明書に国際関係コース修得証明が付記されることになっている。現状ではまだ十分なものとは言えないが、将来のコース内容充実が検討されている。

#### 一般教育科目

人文の分野			社会の分野		
哲学	美学	人文地理学	法学	経営学	
倫理学	日本史学	心理学	政治学	社会学	
論理学	東洋史学	文化人類学	経済学	国際関係概論	
宗教学	西洋史学		貿易論		

#### 関連科目

東洋史学Ⅰ、Ⅱ	外交史	政治思想史演習	地理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
西洋史学	国際政治学	近代経済学	地誌Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
国際法Ⅰ、Ⅱ	国際政治学演習	マルクス経済学	社会学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ
国際法演習	国際政治学特殊講義	国際経済論	
国際私法	政治思想史	外国経済事情	

### 〈学生の海外派遣・留学〉

本学学生の海外留学希望は年々増加しており、留学先も幅広い。昭和47年度から実施された文部省の学生国際交流制度に基づく国費留学を例にとると、留学先は香港中文大学はじめ慶熙、ウィスコンシン、ディジョン、ランス、エセックス、ペルー・カトリック、シーラーズ(イラン)、カイロ、チュニス、アテネオ・デ・マニラ、聖スコラスティカ、

フィリピン、ハノイ外国語各大学などにわたり、毎年この制度を利用して7～9人が留学している。

このほか中国、韓国、モンゴル、スペイン、メキシコ、インド、パキスタン、インドネシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、ドイツなど各国政府・政府機関の留学制度や大阪府国際交流財団、ロータリークラブなどの奨学金による留学、さらに私費留学を加えると、本学の留学者は年間80余人に達する。

本学ではこれに対応して、正規の海外留学で所定単位を取得した者には本学の単位算定基準に照らして卒業単位に認定する方針をとっている。

以上のほか、在学中に調査研究や海外研修を目的に、専攻言語圏だけでなく世界各地を旅行して異文化理解を深め、実体験に基づく国際感覚を身につける学生が多いのも、国際交流の一つに数えられよう。

#### 〈帰国子女の受け入れ〉

わが国の経済・企業活動の世界的な規模拡大に伴い、保護者の海外勤務のため外国で教育を受ける海外子女(小・中・高生)が増加、昭和56年には3万人、62年には4万人を超えるに至る。一方、60年には、この海外子女の帰国が1万人を突破、日本の学校への適応が大きな社会問題となった。国際化の落とし子とも言える、いわゆる帰国子女問題である。

本学でもこの問題を討議した結果、63年7月の教授会で、第一部、第二部とも翌年度からの帰国子女受け入れを決定した。共通一次試験(平成2年度から大学入試センター試験)を免除し、小論文と外国語(英、中国、ドイツ、フランス、イスパニア、ロシアのうち1科目)の学力検査を主体とする帰国子女特別選抜制度が平成元年度からスタートした。

#### 〈地域社会での国際交流〉

箕面市への学舎移転から13年、本学は同市との協力による地域社会での国際交流にも努めている。

箕面市は昭和60年11月、第3次総合計画を発表し、本学が立地する東部地域を「多彩な国際交流・学術研究が期待できる大阪外国語大学等を軸として、市民レベルによる留学生との交歓や市民が国際感覚を身につける場を整備すること等により、自然・レクリエーション機能を生かした国際交流がはかれる文化的地域空間を形成する」構想を打ち出した。

さらに国際交流推進のため、(1)「国際交流の森」整備 (2)国際理解を進める講座・行事の実施 (3)大阪外国語大学留学生との交流促進 (4)ホームステイバンク制度の設置などの具体的計画も発表された。

62年3月に開かれた同市の国際交流施策懇談会には本学関係者も出席、主として留学生の受け入れ状況や生活実態を紹介した。交流施策をめぐる同市と本学の接触が進むうち、両者による協議会設置の機運が高まり、教授会の承認を得て62年9月、箕面市・大阪外国

語大学国際交流促進協議会が発足した。

同協議会発足を機に、箕面市は本学留学生を自宅に招いたり旅行したりして友好を深める留学生ホームビジット事業はじめ、国際交流ボランティア制度、国際理解市民講座など多様な活動を展開。一方、本学は箕面市や市民団体の主催する各種行事、講演会などに講師やパネリスト派遣などの形で積極的に協力している。国際交流をめぐる地域と大学が協力しあう新しい試みは着実に根づきつつある。

## (6) 公開講座

「大学においては、公開講座を設けることができる」(学校教育法第69条)という規定は、大学の門戸を広く一般市民にも開放しようとする趣旨に基づくものである。戦前、大阪外国語学校時代からすでに「初等支那語講習会」などを開設した歴史を持つ本学は、大学になってからも昭和20年代後半から30年代にかけて第69条の趣旨ののっとり、市民のための夏期語学講座を開設してきた。

41年度には「大学開放講座」と銘うって「中国語と中国文化講座」(7～8月、週3回・42時間、100人)と「デンマーク語初級講座」(9～11月、週1回・42時間、50人)を開設。中国語講座は住田照夫、小林武三、伊地智善継、辻本春彦、芝池靖夫、相浦杲ら、デンマーク語講座は大谷長、森岡治夫、Inga Schlanbusch が担当した。〔『学内報』18号〕

大阪・千里で日本万国博覧会が開かれた45年の8月(3～5日)には本学附属図書館の肝煎りで「世界の文字」をテーマに市民公開講座を開講、アンケートの結果、翌年も開設を希望する声が強かったため、46年8月2～4日、「世界の文字・その2」の公開講座を開いたが、万国博ムードにあおられて盛況だった前年に比べると聴講者数は1/3のさびしさであったという。

こうした市民講座の積み重ねの上に立って、53年度から学則の上にも「本学に公開講座を開設することがある。公開講座については必要な事項は、その都度定める」という第59条が加わり、公開講座講習料等に関する規定も制定された。53年度の公開講座は、タイ・ベトナム語学科による「ベトナム語(言語・文化)講座」であった。55年度以降は毎年1～4回、社会人、女性あるいは外国人を対象として本学や箕面市内の生涯学習センターを会場に、一般市民に親しみやすいテーマ、あるいは湾岸戦争勃発時には中東問題など今日的なテーマを選んで開講し「開かれた大学」をめざしている。

開講年度	講 座 の 名 称	開 設 時 期
昭和53	ベトナム語(言語・文化)	6・12～7・26
55	バレーボール教室	7・21～8・1
	イスパニアと中南米(言語・文化)	9・1～12・1
56	ポルトガルとブラジル(言語・文化)	9・2～11・27
57	中国語(言語・文化)	9・3～12・1
58	文明の十字路口・シルクロードとイラン	9・13～11・25
	女性健康教室	9・8～59・2・23
59	イスラムと世界	9・7～10・26
	健康教室	9・6～60・2・14
60	イラン世界・過去と現在	9・20～11・15
61	外国人のための日本語夏期集中講座	8・4～8・15
	バルカンの言語と文化	8・7～9・25
	東南アジア(言語・文化・社会)	9・19～62・2・13
62	外国人のための日本文化夏期集中講座	8・17～8・28
63	外国人のための夏期集中講座・日本の言葉と文化	8・1～8・12
平成元年	外国人のための日本語夏期講座	7・31～8・31
	ロマンス諸語の特性	9・5～12・21
	世界の現代文化	9・16～11・4
	アジアのおんな・その過去と現在	9・20～10・25
2	外国人のための日本語夏期講座	7・30～8・10
	アジアから見た環境問題	10・17～11・28
3	中東問題の背後にあるもの	6・25～10・4
	世界文学の名作	9・14～11・16

## 第5章 大阪外国語大学の新たなる発展を目指して

### はじめに

大阪外国語大学(以下、特に必要とする場合を除いて「外大」)は単一学部の小規模な大学ではあるが、この70年の間に巣立った卒業生数は2万余人に達する。その卒業生を一冊に収めた大阪外国語大学同窓会の最新名簿(『1991年度会員名簿』)の巻末に付されている「勤務先別索引」は、卒業生がいかなる分野で活躍しているかを示していて、たいへん興味深い。経済界では商社や銀行、それにメーカーなどが目立つ。中学校や高等学校を中心とする教育界で教壇に立っている者は全国に及んでおり、日本の英語教育を支える役割の一端を担っているといえる。大学で教育・研究に取り組んでいる者も相当数にのぼる。また、新聞社や放送局をはじめとしたマスコミ関係、さらには官界にも、幾多の有能な人材を送り込んでいる。著述業や外大とは縁遠いと思われる弁護士や公認会計士といった自由業を営んでいる者も、少数ではあるが存在する。

同じ名簿のもう一つの索引も、外大の特徴を十分に映し出している。索引の名称は「都道府県別索引」となっており、卒業生が北海道から沖縄まで在住都道府県別に分けて並べられている。しかし、沖縄の次には、アメリカ、ブラジル、中華人民共和国……と外国名が続き、各々の国に在住する卒業生名が挙げられているのである。その数はおおよそ1,500名にのぼる。全卒業生の1割弱が海外に在住しているといっている。この数字が高いのか低いのかは判断できないが、卒業生が地球規模で活躍しているという外大と海外の強い関係を物語るには十分であり、余談かも知れないが、「都道府県別索引」という名称では全てをカバーできないことだけは確かである。

大学が最終的には輩出した「人材」で評価されたとしたならば、この2つの索引が物語るとおり、外大にも及第点をつけることは可能であろう。加えて、「少ない卒業生の中に直木賞作家などが数人いて、国会議員が一人もいない小さな国立大学」という、よく耳にする外大評も、「自由と文人の雰囲気は漂う」とでも表現できるユニークな校風を見事に表わしている。

70年にわたるこうした輝かしい営為と蓄積を無駄にしないためにも、本章が用意された。従って、本章は、これまでの章とはやや性格を異にする。ここでは、前章までの歴史を受

けて、「大阪外国語大学」を、少し遠くから眺めてみることになる。外大を対象化し批判的に観ることによって、外大がはらんでいる問題点を抽出し、新たな発展への努力の方向を探る作業である。言語、外国語教育、新制大学、大学紛争、外国(地域)研究、大学改革などといったことがらが主たる対象になるであろうし、扱う時期も新制大学後、それも紛争期後ないしは移転後の比較的近い過去が多くなるであろう。

## (1) 諸問題の根源 — 「言語」 —

### <言語という魔物>

70年前の大正11(1922)年に大阪外国語学校として出発して以来今日まで、この教育・研究機関が一貫して関わってきた中心は、「言語=ことば」である。言うまでもなく、人間の生活は言語によって成立しているし、言語は諸文化の中でも最も基本的な文化である。少し極端かも知れないが、「言語=人間」といってもおかしくない。

しかも、基本文化としての言語は他の文化領域とも深く関係している。たとえば、親族名称は親族や家族の構造の表現であるし、挨拶言葉は人間関係を鋭く規定している場合が多い。また、言語は各民族の精神性そのものであり、主観的産物である。「しぶい色」といったとき、科学的に説明できないのはもちろんであり、日本語という言語の中での十分な生活経験がない限り、理解は困難である。英語の red と日本語の「赤い」は必ずしも同じ色ではないし、英語の water、日本語の「水」、タイ語の naam(ナム)も、辞典の解説では一致するかも知れないが、各々が意味する内容には差がある。このように、言語はきわめて幅が広く奥の深い文化であり、なかなか正体がつかみにくい存在であるといえよう。まさに、「言語は魔物」なのである。

大阪外国語学校として出発した当初から、とてつもなくでかい「魔物」を扱いの主たる対象としてきた、いや、せざるを得ない外大は、本来的にやっかいな代物を抱え込み対峙せざるを得ない運命にあったといえよう。70年の歴史を通して外大は様々な諸問題に出くわすが、根源的には一切が言語そのものが有する、こうした性格に発していると結論づけてもよいであろう。

しかも、外大が扱う言語は主として外国語である。もちろん、その前提として日本語があるのは言うまでもないし、1987年に日本語学科が設置されてからは日本語自身も扱いの対象範囲に入れられている。諸外国語と日本語、つまりは諸異文化と日本文化という余りにも大きく掴みにくい存在との格闘が外大の歴史なのである。

### <外国語教育・研究>

外大が任務の一つとしてきた外国語の教育・研究は、一般にいかなる意義をもっている

のだろうか。

言語そのものが文化であり、かつその背景に巨大な文化を有していることから、異文化理解の第一歩として外国語学習が古くから重視されてきた。とりわけ、わが国の外国語教育は、西洋の近代科学や文化の輸入と並行して発達してきた。江戸時代の蘭学による医学や植物学の取入れ、明治期の政治・経済思想の受容などは、すべて外国語学習の上に成立したのであった。今や我々が我がもののように日常的に使用している「社会」、「個人」、「美」、「恋愛」、「存在」などの語は、悪戦苦闘の外国語学習の中から生み出された幕末から明治にかけての造語である〔柳父章『翻訳語成立事情』〕。また、日本の大学の淵源であるとされる洋学所(1855年設立、後の開成所)は蘭学教授の場であり、オランダ語を中心とした外国語教育が施されたのであった。

外国語の教育・研究が異文化理解、異文化受容にとっていかに大切かを、近代日本の代表的な宗教家であり思想家である内村鑑三は、「外国語研究の利益」と称する章で次のように述べている。

宏量ならんと欲せば、外国人の思想をその最善最美の点において探らんと欲せば、吾人は外国語の深き精しき研究を要す。

これを訳言すれば、彼の語を知らざるは彼を知らざることなり。彼の語に通ぜずして彼と親密の交わりを結ばんことは、ほとんどでき得べからざることなり。外国語の知識より来たらざる外交は表面的礼式にすぎず。彼を信じ、彼に信ぜられ、心情の深き奥底において彼と共に永久の平和を結ばんと欲せば、彼の語に通じ、彼の想を解し、彼の感をもってわが感となさざるべからず。自国の語のみに満足する国民は、畢竟するに攘夷鎖国の民たるを免かれず。〔内村鑑三『外国語の研究』52～53頁〕

外国語の教育・研究の意義は、全く逆の方向にも求められる。つまり、外国語の学習は自己ないしは自文化の理解を促進するのに効果的なアプローチでもある。詩人ゲーテは、「一外国語を暁得するは一新世界を発見することなり」と述べる一方で、「外国語を知らない者は、自国語について何も知らない」とも言っている。他を知ることにより、比較が可能となり、より高い次元で自己を知ることができるからであろう。実際、外国語の翻訳に一度でも真剣に取り組んだことのある者は、外国語よりもその訳としての適切な日本語が見あたらず苦勞したり、新しい語彙を発見したりすることが常であるのをよく知っている。日本文学を代表する俳人芭蕉も、中国の平均的インテリよりも杜甫をよく理解しており、そうした外国文学への深い造詣が彼自身の日本語を豊かにし、あの名句を生んだという〔渡部昇一『日本語のこころ』〕。前の内村も、同趣旨のことを次のように述べている。外国語教育・研究の意味するところは、きわめて遠大であるといわなければならない。

外国語の研究は愛国心を滅殺すると。ああ奇異なる反駁かな。英語に精通し、『マリア・スチュアート』の名作を編みし詩人シルレルは、愛国心に欠乏せし人なるか。…  
…(略)…福沢諭吉氏が彼の英語に精通するによりて日本国に尽くせし功績は、いか

に偉大なりしぞ。国を愛せざる者こそ、自国の文字をのみもって満足すべけれ。〔内村  
鑑三「外国語の研究」55頁〕

さて、外国語教育・研究上のいま一つの大切な点は、その習得の難しさである。確かに、いくつかの外国語を自由に操ることばの達人はいる。しかし、それは一般的ではない。多くの者にとって、外国語の習得は困難なことであり、また「魔物」であるせいか、到達点を置くことも不可能で、新聞が読める程度といった曖昧な基準は設けることはできるかも知れないが、どの程度でその言語をマスターしたといえるかとなると、お手上げである。外大で学ぶ言語の多くが入学後初めて出会うものであるだけに、短期間に習得可能なカリキュラムを編成することは、教材や辞書の開発なども含めて、試行錯誤の連続を強いられる。この「言語特有の習得の難しさ」は外大のあり方を考える上で、大きな要素となる。

## (2) 大阪外国語学校 — 「鶴的存在」 —

大阪外国語大学の前身である「大阪外国語学校」では、言語をどのように捉え、どう扱っていたのであろうか。

「大阪外国語学校規程」の第1条は、「本校ハ国際的実務ニ従事スベキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外国語ヲ教授スル所トス」とうたっている。この規程からみる限り、「学校」の目的はきわめて明確である。「国際的実務従事者」の養成、つまりは海外貿易従事者を育てることに他ならない。そして、その限りにおいて必要な「現代外国語」を習得させるというわけである。「学校」が目指したのは、「貿易取引に必要な外国語ができて、実務を上手に処理できる人材」の養成であった。

そこでは、言語はあくまでも「手段」としての位置づけであった。海外との商取引をスムーズに運ぶための言語の運用能力が求められた。言語の有する伝達機能が重視されており、その背景にある諸民族の文化に対する考察や研究への考慮は、ほとんどといっていい程なされていなかった。本科には「専修外国語」として9つの外国語が用意されたが、別表に示したようにその言語に従い「語部」と称する下位分類がなされた。この「語部」という名称にも、言語を文化として捉えるよりも、機械的な手段とみる考えが反映しているように思えてならない。

詳細なカリキュラムはわかっていないが、昭和3(1928)年当時の学則第5条に挙げられている学科一覧をみる限り、簿記をはじめとする商業に関する科目の授業時間数が意外に少なく、授業のほとんどは外国語科目の実習に充てられていた。おそらくは、前に指摘した「言語特有の習得の難しさ」が圧倒的な授業時間数の多さを必要としたであろうし、「外国語が操れるビジネスマン」養成機関としてのユニークさを社会に訴えるためにも外国語学習に力が入られたのであろう。

いずれにしても、専門学校としての「学校」は「幸せ」であった。目的が明白であり、言語の捉え方もシンプルに徹底しており、それに沿ったカリキュラムが編成されていたからである。組織としての明確な中心線が存在していたといえよう。

にもかかわらずである。学生の中には、「学校」の姿が明瞭に見えず、おぼろげな疑問を抱きながら毎日の外国語学習に追われる者がいた。創立されてから約20年を経て、「学校」の姿がおおよそ完成していたであろう昭和16(1941)年に、ある学生は「教室雑記」と題するエッセイの冒頭に次のような一文を残している。少し長くなるが、以下に引用する。

「外国語学校といふのは何しろ日本に東京と大阪に二つしかない丈に仲間が少ないので何かにつけて仲々難しい」と何日だつたか或先生から伺った事がある。「確かに鶴的存在」と云つて了ふとなんだか悪く聞えるのでいけないが、殊に我がドイツ語部のやうにドイツ語を第一語学として毎年相当数の大学進学者もある所は、高校の文乙みたいな感じが一寸しないでもない。然し、所謂共通学科の内容をみてゆくと、結局「語学に主きを置いた高等商業学校」とでも云ふのが或は一番適当かも知れない。それにしても高商とも大いに違う所があり、結局外国語学校は外国語学校さと云ふ事になる。

大体からして、外国語学校の認識論?をやり返すと云ふ事自体が必要な事なのであるが、然し外語に入った当座は大抵の人がその性格が一寸掴めないで戸惑ひするものらしい。ドイツ語を勉強して居れば絶対に間違はない。こりや確かにその通りだがそれでもやはり問題がある。仮に教科書以外に何か読まうといふ健気な心掛になった時を考へてみても、文学方面にするか経済方面にするか等と考へてあれこれ迷つて、結局その人の好みの方に定まるのであらう。尤も小生の如く迷つてゐる間に、何も読まずに卒業して了ふといふ情けない男も居るがこれはお話にならない。語学その物の上達にはその教材の内容等は殆ど問題にならないとは云はれるものゝ、やはり面白いと思ふものでなければ仲々続くものではなさそうだ。そこで夫々の好みと云ふ事になる。従つて友人間では滅多に読んでいる本が揃ふ事等はなく、正に群雄割拠の状態を呈する。〔飯尾通直「教室雑記」「我等の独逸語部」12頁〕

あてがわれた教科書をもとに外国語の習得に専念する「学校」の典型的な姿とともに、果してこれでいいのだろうかという青年の素朴な疑問がひしひしと伝わってくる。外国語を勉強していれば確かに「絶対に(貿易業界に就職できるのは)間違いない」ではあるが、その次を考えた途端に頭を抱える学生がいたのである。「学校」の性格がわからず、苦悶している一学生の姿が浮かんでくる。「学校」を「鶴(ぬえ)的存在」とは、まことに言い得て妙といわざるを得ないであらう。旧制高校のようであつてそうでなく、高商のようであつてそうでない、外国語学校の性格の不明確さを「鶴的存在」と表現しているのである。言語をある程度明確に位置づけていた「学校」にしても、「言語=魔物」という論理から完全に脱出できなかったといえるかも知れない。

「鶴的存在」問題は、「学校」時代には表面化しないまま、戦時下の「大阪外事専門学校」時代を経て、戦後の「大阪外国語大学」時代へ先送りされていくのである。

[別表] 大阪外国語大学 専攻語の歩み

大阪外国語学校 (1922年)	大阪外事専門学校 (1944年)	大阪外国語大学 (1949年)
支那語部	第1部	中国語学科
蒙古語部	支那科	朝鮮語学科(1963)
馬來語部	→中国科(1946)	蒙古語学科
印度語部	蒙古科	→モンゴル語学科(1962)
英語部	マライ科	インドネシア語学科
仏語部	→インドネシア科	→インドネシア・フィリピン語学科(1984)
独語部	(1946)	インド語学科
露語部	インド科	→インド・パキスタン語学科(1966)
西語部	ビルマ科(1945)	タイ語学科
亞刺比亞語部 (1940)	イスパニア科	→タイ・ベトナム語学科(1977)
	アラビア科	ビルマ語学科
	第2部	アラビア語学科
	ドイツ科	→アラビア・アフリカ語学科(1988)
	フランス科	ペルシア語学科(1961)
	ロシア科	英語学科
	英米科	ドイツ語学科
		フランス語学科
		イタリア語学科(1964)
		デンマーク語学科(1966)
		→デンマーク・スウェーデン語学科(1985)
		イスパニア語学科
		ポルトガル・ブラジル語学科(1979)
		ロシア語学科
		日本語学科(1987)

### (3) 外大に「大学」はあるか？

〈外大出発時の2つの問題〉

昭和24(1949)年に、全国のすべての公的高等教育機関、つまり帝国大学、官立(単科)大学、専門学校、高等学校、師範学校が文部省により再編統合され、「大学」として再出発したのは周知のことからである。明治以来のヨーロッパ型の大学(学位を授与する機関)からアメリカ型の大学(中等教育終了者を受け入れる高等教育機関)への転換と捉えられる新制国立大学の発足は、確かに「大学」という名称に統一されたように一律的ではあったが、

その内容からみれば次の3種に分かれていた〔天野郁夫『変革期の大学像』〕。

- 1) 完全な学位授与権を有する(全ての学部博士課程の大学院をもつ)大学
- 2) 不完全な学位授与権を有する(一部の学部博士課程をもつ)大学
- 3) 学位授与権を全くもたない大学

しかも、教育研究組織にも2つのタイプが導入され、人事や予算の上で格差がつくられた。旧帝国大学、官立大学を後継した大学・学部や医学部と歯学部には「講座制」が、専門学校、高等学校、師範学校を引き継いだ大学・学部には「学科目制」がしかれた。つまり、学位授与権をもつ学部が講座制で、もたない学部が学科目制というのが原則であった。外大は、もちろん3つ目の種類の大学であり、学科目制であった。いずれにせよ、外大は出発時から、すでに教育・研究面における劣悪な条件を背負っていたといえよう。

しかし、外大の出発には、それ以前にもっと基本的なところにおいて重要な問題が存在した。それは、一言で言えば、「学校」から「大学」への単独移行の問題であった。言葉を変えるならば、「大阪外国語学校」および「大阪外事専門学校」を通じて蓄積されたものが果して「大学」として耐え得るかという核心的問題であった。昇格問題を審議した当時の大学設置委員会や文部省では、「語学」を専攻の中身とする「大学」という枠組みに関して疑問が提出されたようである。もっとも、当時平沢俊雄校長のもとで教務課長として単独移行に直接携わった金子二郎は、後に就任した学長時代に、「学校」から「大学」への移行には問題はなかったと述べてはいる〔『大阪外大新聞』昭和38年4月12日号〕が、結果としては、他の専門学校等との合併による大学移行という形をとらず、単独移行を選択し、紆余曲折を経ながらも、「外国語学部」一学部からなる「外国語大学」として、それに成功する。「語学」専攻が「大学」で受け入れられたのであり、国立大学としてはその種のは大阪と東京の2校のみとはいいながら、きわめて珍しい大学が誕生したのであった。その経過については第3章で述べておいたので、参照されたい。なお、大阪と東京の志向は、そのロケーションの違いからか、いつの時代も少し差をみせている。しかし、いい意味でも悪い意味でも互いにライバルであり仲間として今日に至っている。また、蛇足になるが、「外国語大学」はきわめて日本的であるといつてよい。学部レベルや Institute で外国語教育や外国研究を行っているところは多いが、外大のような全大学レベルでの教育・研究機関は諸外国にはあまり例がない。だから、外国人には外大は理解しにくい。どんな大学かとなすねられ、説明するのに苦労した経験を持つ人が多いに違いない。もっとも、知る限りでは、中国、韓国、ベトナムには類似したものがみられる。「外国語大学」というのは儒教文化圏に特有なのかも知れない。

さて、新生した大阪外国語大学の学則第1条は、「本学は、外国の言語とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって教授研究し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通じて外国に関する理解をふかめることを目的とする」とその使命を定めている。「学校」のそれと比較して、大きく違うのは、「言語」と並んで「文

化」を射程にいれ、「教授」のみならず「研究」を付加した上で、養成されるべき望ましい人材が「貿易実務従事者」から「国際人」へ変更されている点である。「文化」と「研究」を大きく掲げるなど、「大学」としてふさわしい目的づくりに向けての苦心の跡はみられるが、「学校」時代の目的より明確さが後退し、曖昧化したことは否定できない。それは、まさに「学校」時代にはらんでいた「鶴的存在」の拡大化の方向であった。

「大学」が5歳を迎え基礎固めを終えかけていた昭和30(1955)年度の『大阪外国語大学便覧』では「昭和30年度学科課程と履修」の中で、専攻科目を次のように説明している。

専攻科目は前期においては専攻外国語と、その言語圏の文化一般に関する基礎的事項について講義と演習を行い、後期においては「言語・文学」「法律・経済・商業」に分けてそれぞれ講義と演習を行う。専攻外国語実習は、講読・作文・会話等について、前期、後期を通じて行い第1課程より順次第4課程に至るものとする。

これが、「～語学専攻」という専攻の中身である。「大学」にふさわしい内容を整えないままに「言語」と「文化(文学・法律・経済・商業)」という「二兎」を追う形での「鶴的存在」の拡大といえよう。それは、同じ『便覧』に並ぶ各語学科のカリキュラムを調べてみると、圧倒的に「言語」習得を目的とする内容に偏っていることからわかる。「言語特有の習得の難しさ」に加えて、「文化」を目的とする科目を並べようとしても、不可能な事態があったと推察される。それは、次に述べる出発時の外大が抱えたもう一つの問題と大きく関係しているのである。

その問題も、実はすでに第3章で述べておいたので簡単に記すことにするが、一般に「無痛分娩」とか「無血革命」とか呼ばれた事象である。従来の「学校」の教官全員が「大学」の教官としての審査をパスしたことである。全員が欠けることなく引続き「大学」で教壇に立てたこと自体は、確かに喜ばしいことであった。しかし、反面において、「学校」の内容のままで、看板を「大学」に変えただけの形に流れてしまったことは否めない。新しく「文化」の教授・研究を強化しようにも、それを担うだけの人材を欠いていたというのが事実であろう。

以上の「鶴的存在」の拡大化と「無痛分娩」後遺症という2つの問題は、存続か廃校かの瀬戸際という当時の状況下ではいたしかたのないことであった。しかし、「大学」という新しい器に盛るには不十分な内容であった。また、教官組織をはじめとしてすべてが「語学科」を基本に置くという体制が敷かれた。教務、研究、人事、予算など多くのことがら12の「語学科」を単位に「語学科自治」を尊重し運営されるシステムであった。この「語学科体制」は、「学校」時代の「語部体制」の継承であり、以後40年間にわたって作動し、強化されていくことになる。

いずれにしろ、2つの問題が引き起こす矛盾は、高槻と上八の二校舎での分散授業が上八校舎に統合され、やっとなら戦争と新制への移行による混乱を脱出した昭和32(1957)年ころから少しずつ頭をもたげ、一部の語学科の隔年募集が廃止になる昭和38(1963)年ころには

外大のあり方をめぐっての議論が学生の中からあがってくる。

### 〈外大アカデミズム〉

前に掲げた別表「大阪外国語大学 専攻語の歩み」にみるように、昭和36(1961)年のペルシア語学科の新設を皮切りにいくつかの新しい語学科ができはじめ、「大学」移行時の12語学科に新語学科を加えていくという量的拡大がはかられる。地球上の諸民族の夥しい言語に比べ、わずか12の専攻言語というのはいかにも貧弱であり、量的拡大は当然の努力であった。その後、量的拡大路線が定着し現在までに至っているのは、第4章(1)でみてきた通りである。

しかし、その一方で、カリキュラムをはじめとする外大の質的問題に対する検討は、置き去りにされていた感がある。各語学科の講義題目や講義内容要旨を記載した昭和38年度の『学生便覧』を読み返してみると、一部の学科では「文化」に関する科目が増えているものの、3～4年生を対象とする後期専門課程にあっても、ほとんどの学科において言語習得を目的とした科目、つまり「語学」関係科目で満たされていることがわかる。厳しくいえば、「学校」時代を「大学」になってからも引きずってきているといえるのである。「鶴」の正体を明らかにする作業を怠ったままになっていたのである。

昭和35(1960)年ころから、外大の積年の根本的問題をめぐる議論が噴出してくる。在校生の間からは「大学になったとはいふものの、教育内容は専門学校時代と同じではないか」という意見、さらに新入生座談会では「語学中心で失望、ほしい大学らしい雰囲気」といった声が聞こえるし〔『大阪外大新聞』昭和41年5月26日号〕、一般教養科目についても「講義に新鮮味がない」とし、試験中のカンニング行為を学生による一般教養軽視の表れとしている〔『大阪外大新聞』昭和42年4月30日号〕。要するに、1960年代を中心に、「外大アカデミズム」問題が真剣に問われ始めたのである。

その意味で、東京外大と神戸市外大でも取材し、どの外国語大学にも同じ共通した問題が存在していると指摘した、「外大アカデミズム」を考える『大阪外大新聞』掲載の長編論文記事は、きわめて注目に値する。外大の現実を衝いていると思われる一部を以下に引用する。

外大生は片手に原書、片手に法経の参考書を持つと言われる。また就職関係の先生からは「今後は、外国語に秀でるというだけではなく社会に出てもすぐ役立つ法律、経済の知識が必要です……」といった意味あいの発言が聞かれる。事実、専門教育課程における約半数の講座が法律、経済関係である。この分だと、外大経済学部説が流れ出るのも無理からぬことであるが、現実はどうであろう。経済学の場合、本学専任の先生は2名、これで1,300の学生の面倒を見ようと言うのだから、いくらがんばって見たところで、駅弁大学の経済学部にもかなうまい。皮肉な現象ではあるが、最も学究的学問であるはずの経済、法律も、就職のためのささいな水的役割しか果たし得てな

いのではあるまいか。順序は逆になったが、専攻科目を見てみよう。外大便覧を参照しつつ論を進めていきたいのであるが、この便覧で知るかぎり、系統的な地域研究が為されている語科は、皆無と言っても言いすぎではあるまい。それも研究の進んでいるはずの西洋語科の場合、ひとしおその講座内容の無秩序と無計画が想像されるのは一体どこに責任があるのか。「語学さえやっておけば売れっ子の西洋語をやっているのだから就職は安心だ」という安易な考え方が、教える者にも学ぶ者にもあるのではなからうか。総てを就職という功利的目的に結び付けて学ぶ学問が果して学問の名に値するものかどうか、そしてまた「学問の自由」を叫ぶとき、果して、侵害される危険を持つ学問であるものかどうか、大いに疑問の余地は残るのである。何れにせよ今日の外大には、一本筋の通った学問体系というものは存在していないと言えよう。

〔『大阪外大新聞』昭和37年11月21日号〕

そして、この論文記事は、今後の外大の方向づけとして、「外大文学部説」、「外大言語学部説」、「外大経済学部説」などを検討した上で、「地域研究」という新しい概念を紹介し、これを採り入れた「外大国際学部」を「外大の道」と提唱している。

この記事は当時大きな反響を呼んだようで、次の昭和38(1963)年4月12日号では教官4名を交えての「外大アカデミズム発展の方向を探る」と題する座談会特集を組んでいるし、同年の11月7日号でも「外大発展のカギは？」と題する特別記事を掲載している。

以上のような外大に「大学」はあるのかという「外大アカデミズム」問題論議は、ほぼ次のような方向に進みかけていた。つまり、外大は外国語と外国文化の究明を使命として課せられた希有な大学であるが、語学偏重の現状から脱し、将来的には地域研究を一つのモデルとして教育・研究体制の改革をはかっていかねばならないという方向づけであった。

昭和44(1969)年の大学院修士課程の設置は、アカデミズムを考える上での一つの大きな成果であった。しかし、底辺によんでいる不満を背景として外大の一部に燃え上がったアカデミズム論議は、教授会などの場で公式にとりあげられることなく、うやむやに流れてしまった。それは、別の角度からみれば、次にくる大学紛争の種を用意する準備過程でもあった。

## (4) 第1次改革構想

〈大学改革問題特別委員会〉

昭和44(1969)年を頂点とする「外大戦争」とまで称された激しい大学紛争の経過については、第4章(2)ですでに述べたので繰り返さない。外大紛争の原因が直接的には青年反乱という時代状況にあるとしても、そうした状況に反応し起爆剤として受け入れるだけの条件が外大内に十分存在したことは、前節の1960年代後半の「外大アカデミズム」をめぐる

動きから明らかであろう。その「戦争」と並行の形で進められた改革への努力については、第4章(2)で詳しく説明しておいた。昭和44年3月に教授会決議により急速発足した「大学改革問題特別委員会」のもとに精力的に展開された改革運動である。同委員会で討議され示された改革案(詳しくは、大阪外国語大学大学改革問題特別委員会『大学改革問題特別委員会の報告および当面の提案(大学改革問題資料第1集)』1969年5月、『大学改革問題第1次中間報告』1969年9月、『学科課程試案(大学改革問題資料第3集)』1969年11月)などを参照されたいが、大学における学生の位置を積極的に評価しているのは当時の紛争状態からすれば当然のことではあるが、全編を貫いているのは外大の施設と人員の貧困や外大アカデミズムの問題であり、大幅な改革の必要性を指摘している。

翌昭和45年度から、後期学年進行制の廃止、履修単位の変更、副専攻科目制などが即刻実施されたのは、明らかに「戦争」とこの改革努力の影響であった。後に少し尾を引く学生・職員の意向調査を織り込んだ新学長選考規程の施行も「戦争」が生んだ改革であった。今からすれば若干の問題を含んでいたし、改革を貫く基本的理念が必ずしも十分に練られたわけではなかったが、外大の歴史を通じてこれほど短期間に部分的とはいえ改革が実際に成されたことはなく、非常時にしか改革できない大学という存在をよく物語る教訓でもあった。ただ、残念なことに、この委員会と改革への熱意は「戦争」の終息とともに自然消滅してしまったようである。この時の改革運動は今日ではあまり語られないが、その精神と成果は後述の将来計画委員会へ継承されていったと考えられる。

#### 〈将来計画委員会〉

さて、「戦争」が終結し一応の落ち着きを取り戻し、第4代学長として牧祥三が就任した昭和47(1972)年に、包括的な大学改革を目的とした将来計画委員会の設置が4月の教授会で決定され発足する。

この将来計画委員会についても第4章(3)で触れた通りである。将来を見据えた外大における改革への取り組みが、初めて教授会という公的な場に持ち込まれた点で、その意義は高い。また、委員会の全体組織は、マスター・プラン、施設計画、広報の3部会に分かれ、かつそのもとに10に及ぶ専門委員会が置かれ、ほとんど全ての問題に検討を加えるという大規模なものであった。そこには紛争が突き付けた大学のあり方を教官が厳粛に受けとめ、なんとかしなければならぬという気持ちがあったといえる。

その後の将来計画委員会での改革論議は、次のような形で公にされている。

- (1) 『「あたらしい外大のために」特集シリーズ・第1号 将来計画策定にあたっての  
 若干の問題点—マスター・プラン部会第1回中間報告書—』昭和47年8月31日
- (2) 『「あたらしい外大のために」第2号 将来計画の基本構想(未定稿)』昭和47年9  
 月27日
- (3) 『「あたらしい外大のために」特集シリーズ・第3号 施設計画に関する専門委員

会よりの報告』昭和47年11月

- (4) 『「あたらしい外大のために」 施設計画特集号』昭和48年4月
- (5) 『将来計画の基本構想』昭和48年4月5日
- (6) 『「あたらしい外大のために」第4号 各学科研究室へ「将来計画の基本構想」の充実改善をはかり、さらに長期構想を作成するにあたってのお願い』昭和48年9月
- (7) 『「あたらしい外大のために」特集シリーズ・第5号 長期計画構想等について  
の各学科の意見書』昭和49年1月31日
- (8) 『新しい外大のために(大阪外国語大学将来計画委員会広報部ニュース)』
  - 第1号(昭和47年6月25日)      第2号(年月日なし)
  - 第3号(昭和48年3月5日)      第4号(昭和48年10月13日)
  - 第5号(昭和49年5月10日)      第6号(昭和50年3月25日)
  - 第7号(昭和52年2月10日)      第8号(昭和53年1月20日)
  - 第9号(昭和53年7月5日)      第10号(昭和54年7月20日)
  - 第11号(昭和55年8月30日)      第12号(昭和56年6月25日)
  - 号 外(昭和50年2月14日、昭和54年2月20日)
- (9) 『これからの外大』(『新しい外大のために』改題)
  - 第13号(昭和57年7月8日)      第14号(昭和63年4月7日)
  - 第15号(平成元年6月22日)      第16号(平成2年6月1日)
  - 第17号(平成3年3月28日)

以上の膨大な資料は将来計画委員会の足跡であり、検討を加えてみれば、大学に関するほとんど全ての問題がとりあげられ、論議がなされたことがよくわかる。

#### 〈改革構想と移転〉

将来計画委員会が発足した昭和47(1972)年から約20年間、各年度の同委員会は積極的な論議を重ね様々な改革構想を提案してきた。特に、48年4月に刊行された『将来計画の基本構想』及び『「あたらしい外大のために」 施設計画特集号』は、前者が外大のソフトを、後者がハードをそれぞれ扱ったもので、その後の改革論議の出発点となった。

『将来計画の基本構想』では、現状の問題点として、外大を批判的に次のように捉えている。

- 1) 「学校」時代の体制規模を継承維持してきたために、教官数が不足している。また、物的諸施設もきわめて不備・不十分である。
- 2) 本学における教育研究のあり方を基礎づけるものとしての一定の統一的な学問体系が確立していない。「外国文化」とは何なのか。外国語教育、一般教養または専門教育とのつながりはどんなものか。一体「外国語大学」とは何を教育研究する

ところなのか。共通の認識が欠如している。

- 3) 組織としての「語学科体制」はタテ割で、相互間の閉鎖性がかなりつよい。各地域ごとの特殊な言語・文化現象についての知識の吸収が第一義となり、普遍的・一般的な価値の自覚ないしは追求がたちおくれやすい。大学における外国語教育なるものは本来きわめて総合的・包括的な学問であり、「科学としての外国語・外国文化の研究能力の体得」の方向を意識的に追求させる教学上の配慮が必要である。

- 4) 本学における言語教育はわが国大学教育界の最高のものでなければならない。

こうしてみる限り、「語学」を学問としてとらえながらも、外大の存在を「鶴的存在」以上に切り開けない苦悩が感じられる。

ただ、そこでは、ハード面はおくとしても、ソフト面では第二部、大学院、留学生別科、総合的研究施設や研究資料センターの開設を含んだ幅広い教育研究体制の整備・改編がとりあげられ、中でも比較的斬新で具体的な構想には、次のようなものがあつた。

一つは、「四系列制」と呼ばれるもので、「外国語学(言語および文化)についての総合的な教学体系を本学において全体的・統一的に確立するためには、現在若干の語学科で行われている『語学・文学・文化(歴史・思想など)・政治経済』の四講座制を可能なかぎりひろく一般化することが当面もっとも有効であり、また現実性をもった措置ということができよう」〔『将来計画の基本構想』9頁〕と説明されている。つまり、「語学」をきわめてひろく捉え、従来言語の技術的習得に偏重してきた方向をあらためようという考えである。

二つは、語学科の「グルーピング」である。つまり、いくつかの小語学科(教官定員の少ない学科)を合体して新しい語学科に編成するという考えである。その理由として、言語・文化教育の均衡的発展、新設外国語科目の位置づけ問題、教官定員数の不足対策が挙げられている〔『将来計画の基本構想』11頁〕。

こうした新しい構想を示しながらも、この基本構想は「現行教育研究体制の大枠の維持」をうたっており〔『将来計画の基本構想』6～7頁〕、一部から出てきている複数学部制を志向する外国語文系統と国際関係論系統への分離などの過激な構想は否定している。その限りでは、在来体制の改編・整備を目指した保守性の濃いものであったといわざるを得ない。一般教育などもとくに変更を行う必要を認めていない。

この基本構想がそれほど革新的性格を持たなかった大きな理由は、改革構想と並行して進んでいた「移転計画」にあつたともいえる。

移転については第4章(3)を参照して欲しいが、諸施設を拡充しようにも余裕のない狭隘な上八の地からの移転計画が昭和47年ころから本格化しており、用地の獲得や施設計画にもエネルギーが割かれていた。つまり、改革構想は移転と対になっていたといえる。新しい入れ物ができあがる時に新しい内容を盛り込むことが、1970年代の外大の願望であつた。一般に、1970年代は大学が「闘争の時代から改革の時代」を迎え、各大学が改革案づくり

に没頭した時代でもあり、「案」が日本中に満ち溢れ、「薄皮饅頭」と皮肉られたものであった。当時の学長牧祥三は、その辺りを十分に理解しかつ心配していたのであろう。改革基本構想が出され、移転計画もほぼ見通しがついたので昭和50(1975)年3月に次のように述べている。

いろいろな大学においてかつて造られた諸改革案の多くが、周知のように、大学紛争の中での間に合わせ案のごときのものであり、いわゆる「あん」のみ多くして終に餅屋の店頭のごとくして、実現されたものが少なかった点に、世間の批判があった。しかし私たちの大学のマスタープランが、少なくとも諸大学のかつての改革案と基本的に違う点は、私たちの場合は現実の移転と言うことを条件にして構想されていることにある。移転地である粟生間谷の敷地は、上八の本校および花園運動場の約三倍の広さを持ち、またそこに設置される建物は、現在の約二倍のものが考えられている。これらの数量的増加は、かならずや当然に大学の内的構造に質的变化をもたらすであろう。そしてそればかりでなく、狭隘な上八校舎からの脱出、解放を悲願としてここ数年結ばれてきた全学の意欲は、移転を単に地理的移転に終わらせないで、私たちの外国語大学の充実発展の契機としてとらえるであろう、と私は確信している。〔『新しい外大のために』第6号、1頁〕

基本構想から2年後の『『基本構想』とその後』と題する『新しい外大のために』第6号では、筑波大学、広島大学、大阪大学での改革の試みを紹介しながら改革の必要性を訴え、歴史学科や国際関係学科などの非語学学科の増設案を示している。しかし、「全学的に考えてみる体制ができていないことは大きな欠陥である。……(略)……具体的な評価や総括は諸学科の報告をまとめて考えてみたい」〔『新しい外大のために』第6号、5頁〕ときわめて慎重な態度が目立っている。

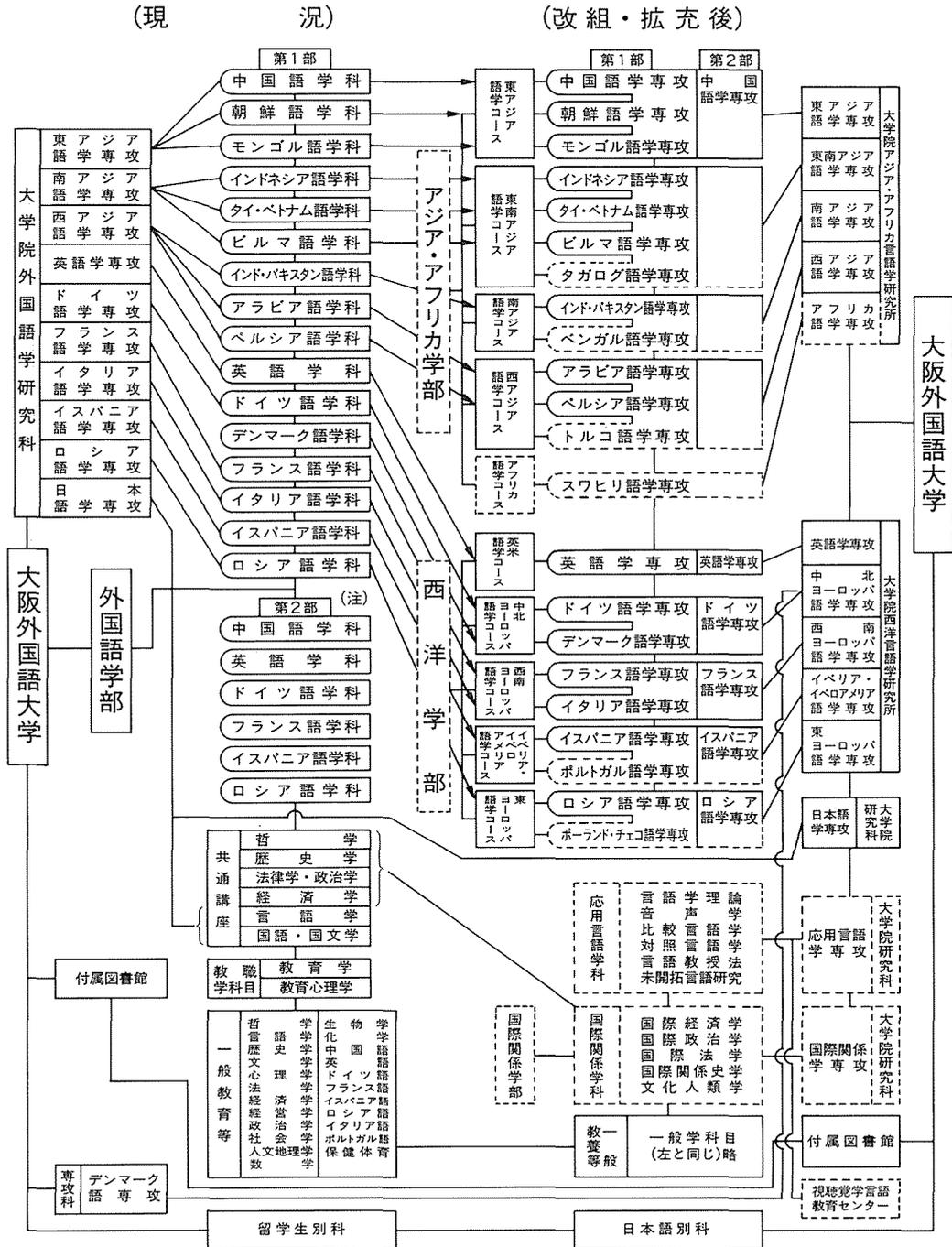
また、昭和52年2月の『新しい外大のために』第7号では、「アジア・アフリカ言語学部」と「西洋言語学部」の複数学部への将来的展望にたった斬新な語学学科拡充・改組案が提案されている。また、国際関係学科の設立が正面から提案されているし、大学院に日本語学専攻を新設する案も出されている。

こうした一連の改革構想が総括的に提示されたのは、昭和52(1977)年度の将来計画委員会マスター・プラン部会の手によってであった。昭和53(1978)年3月の報告は以下の内容から成り立っている。

- 1)学部複数化と語科グルーピングについて
- 2)応用言語学科新設と大学院博士課程開設問題について
- 3)国際関係学科新設について
- 4)第二部改革構想について
- 5)留学生別科について
- 6)その他の課題について

加えて、付録として「改革構想系統概図」が付されている。この図は、昭和47(1972)年に始まる改革への取り組みの一定の到達点を的確に示しているため、以下に掲げる。

《図-1》大阪外国語大学の改革構想に基づく系統概図



(注) 改組、拡充後、それぞれの語学コース第2部へ移行する。

その後も、将来計画委員会では改革構想をめぐりいろいろと議論がなされたが、基本線は1977年度案をでるものではなかった。

残念なことに、改革案は数多く出されたが、教授会で正式にとりあげられ審議され、文部省に対して毎年提出される概算要求に実際に盛り込まれることはなかった。一度だけ、改革構想の中核であり、その足がかりと期待された「語学科グルーピング案」が、昭和54(1979)年度概算要求案審議段階で提案されたが、結局は教授会で採択されなかった。委員会レベル以上に改革論議がおよんでいなかったからかも知れない。また、昭和56(1981)年10月には箕面の新学舎の竣工式がとり行われ、改革のハード面での大事業がほぼ成ったことに安心したのか、将来計画委員会はもちろん引き続いて存続し活動したが、その後の教育・研究体制を中心としたソフト面での改革志向がやや低下した。誤解を恐れずに言えば、前にあげた牧祥三元学長の「薄皮饅頭」という心配が的中したといえるかも知れない。

## (5) 第2次改革構想

諸々の社会的制度の中でも、大学とは頑固なまでも改革を拒む保守的存在の最たるものらしい〔喜多村和之『大学淘汰の時代』中央公論社、1990〕。第1次改革構想はいわば構想倒れの形になり、ほとんど死にかけていた。

平成元(1989)年9月の将来計画委員会会議では、昭和57(1982)年頃からグルーピング構想が立ち消え、国際関係学科構想も終焉してしまった旨の報告が委員長からなされている。外大の改革への営みを報告する広報誌『これからの外大』が昭和57年から6年間の長きにわたって刊行されていないことも、改革への努力が一時的にストップしたことの証である。そのあたりの事情を、同じ委員長は、平成元(1989)年3月23日に将来計画委員会により開かれた「シンポジウム：外大のあり方を考える」の席で、80年代を次のようにまとめる形で説明している。

将来計画委員会は、3部会制で発足したが、その当初から各部会の任務については相互の間に齟齬があった。すなわち、施設部会と渉外・広報部会は移転の実現が到達目標であり、到達点であったが、マスタープラン部会にはこのような具体的な到達時点も目標も設定されていなかった。

昭和54～55年に移転計画がほぼ完了した時、渉外・広報部会も施設部会も任務を達成したといえたが、マスタープラン部会は、案をつくりあげたにもかかわらず、その案が教授会で審議され承認されるには至らなかったために、任務を達成したとは言えなかったばかりでなく、その後の作業で何を達成すべきかという具体的目標をも失った。

一方、施設部会の案はすべて概算要求にのせられ、教授会で審議された。つまり、

施設の要求については全学的コンセンサスが成り立ったのに反して、マスタープランにはそれがなかったため、マスタープランを背景として施設の要求を作るといふ本来あるべき関係が失われた。

移転後の将来計画委員会の活動が移転前に比べて何となく生彩を欠くのは、このせいである。そして、この関係が明確にされないまま委員会は存続してきた。将来計画委員会が何を以て任務とするかについてのコンセンサスがなくなると言わざるを得ない。

〔「これからの外大」第15号、18頁〕

80年代を通じて、改革構想の実現に向けての努力は頓挫したといってよい。上の引用に述べられているとおり、改革論議が委員会内部に留まり全学的レベルまで引き上げられなかったことや、強力なリーダーシップが存在しなかったことが頓挫の大きな理由であったといえよう。

しかし、改革論議が将来計画委員会を中心にほぼ切れ目なく約20年間も継続されたことは、大きな資産であった。その資産の上に、新たな改革への動きが平成2(1990)年頃から高まってくるのである。

その高まりの背景には、いくつかの理由が考えられる。

1つは、教官の量的膨張と変質である。語学科の増設・整備という方針により、新しい語学科が増え大学全体の規模が大きくなり、教官数が大学発足時と比較して3～4倍に膨張した。そして、何よりも、70年代以降の「四系列制」カリキュラム編成という方針により、語学そのものを専門とする教官と並んで、文化＝地域研究を担当する教官が増加したことが大きい。また、一般教育等を担当する教官も増えた(たとえば、昭和47年度の学部の学生数は1部が445名、2部が220名、教官定員134名で、15年後の昭和62年度はそれぞれ630名、225名、171名である)。ちなみに、昭和28(1953)年の専任教官数は約50人であるが、語学以外の教官は歴史学、法律学、経済学、教育学など数名に過ぎない。また、注目すべきは、70年代後半から80年代前半にかけては、いわゆる戦後の新生外大の初期を担った教官が次々と退官し、その一方である60年代後半の大学紛争を経験した若い層が新任教官として着任し、世代交代が進んだ時期でもあった。こうした教官層の増加と世代交代は、旧来の言語と文化の位置づけないしは外大における教育研究のあり方への疑問の深まりを促進した。新しい血が改革を志向したのである。

2つには、環境の変化とでも言えるであろうか、外的な要因である。外大をとりまく教育・研究環境ないしは社会状況の大きな変化である。周知のように、70年代以降の世界的規模における急激な変動は、わが国の国際的役割を増大させるとともにさらなる国際化を要求する事態を招いている。こうした状況下で、外国語あるいは外国＝地域研究はますます重要性を帯びてきている。そのせいであろうか、外大以外の大学で外国語ないしは外国研究が盛んになってきた。もはやそれは外大の独壇場ではなくなりつつある。つまり、外大にはのんびりと構えている余裕はもはやなく、より内容を充実させ従来の外大に優るユ

ニークな新しい大学を創り出さない限り、その存在意義を厳しく問われる事態を招来する恐れがある。こうした危機感が外大に生まれてきているのである。

3つには、これも環境の変化であるが、日本における大学そのものを取り巻く状況の大きな変わり方である。最も大きな理由は、大学就学年齢である18歳人口の激減予測である。2000年までに18歳人口は総体で4分の1が減少するといわれ、当然ながら魅力のない大学は見捨てられることになる。つまり、これから大学はサバイバル・ゲームの時代に入ることになり、各大学は様々な問題を抱えながら「冬の時代」を迎えるのである〔「特集これから大学はどう変わるか」『中央公論』平成3年11月号〕。これに追い打ちをかけるかのように、文部省は平成3年7月、大学設置基準を大幅に改正し（大学設置基準の一部を改正する省令）、制度的緩和、カリキュラム編成などの自由化、自己評価システム導入などを骨子とする新基準を定め、社会の批判に耐え得る大学を目指した改革に自ら取組むよう大学に促している。また、生涯教育などに力をいれ地域社会に生きる大学を要求している。個性豊かで魅力ある大学づくりが大学人一般に課せられた課題となっており、外大も安閑としていられなくなったのである。

#### 〈改革へ向けての再スタート〉

以上のような状況を反映して、頓挫したかにみえた改革論議が再度頭をもたげてきたのは、移転からちょうど10年を経、山田善郎が新学長に就任してしばらくした平成元(1989)年頃であった。昭和57(1982)年以来途絶えていた将来計画委員会の広報誌である『これからの外大』も昭和63(1988)年に復刊された。将来計画委員会においても、前にも述べたように、外大のあり方をめぐってシンポジウムが開催されるなど、過去の総括と反省が行われ、新しい出発が検討され始めたのである。

また、このころ外大の教育の実状を掘り下げるいくつかの研究プロジェクトが発足し、次のようないくつかの成果が報告され、改革論議を応援した。

- 1) 大阪外国語大学教育課程調査研究会『教育課程編成に関する改善調査検討資料(その1)』1987年3月。
- 2) 大阪外国語大学教育課程調査研究会『教育課程編成に関する改善調査検討資料(その2)』1988年3月。
- 3) 大阪外国語大学『わが国における外国語研究・教育の史的考察(上)－現状分析と回顧－』1989年3月。
- 4) 大阪外国語大学『わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)－歴史と展望－』1990年3月。
- 5) 大阪外国語大学一般教育調査研究プロジェクト『一般教育の将来構想に向けての現状分析(中間報告)』1990年3月。
- 6) 大阪外国語大学『大学における語学教育と異文化研究』1990年3月。

7) 大阪外国語大学大学院問題研究会『博士課程創設に関する提言』1990年3月。

その後、将来計画委員会の活動は一段と活発化していく。平成2(1990)年2月9日に「グルーピングの可能性」について具体策を検討するよう、将来計画委員会が教務委員会に申し入れを行ったという具体的行為に見られるように、もはや議論のための議論をする時期でないことを、外大人が悟り始めていたのであった。平成2年度の第1回将来計画委員会の会議(平成2年4月19日)でまっさきに出た意見は、「将来計画委員会が〈夢〉を語るのは当然であるが、それを具体化させるプロセスを検討する必要が増大している。特にグルーピング構想などは長期にわたる懸案事項のまま今日に至っている」といった趣旨のものであった。また、「平成3年度概算要求事項」審議が行われた平成2(1990)年6月7日の教授会では、「社会的にみても、本学にも抜本的な改革が要求されており、概算要求もそうした改革構想に則った案が策定されるべきであり、将来計画委員会は改革構想の具体化を急いで欲しい」との発言がなされるなど、委員会の外からも「外大のあり方」を具体的に示すよう委員会に対して要求がなされ始めた。

こうして、構想の具体化と全学的コンセンサスの確立が、将来計画委員会の当面の努力目標となる。平成2年度第5回会議(平成2年6月21日)では、学長も特別に出席し「教授会での議論や内外の諸状況からみて、外大の存在理由が多面的にみなおされてしかるべき時期にきている」と発言している。委員会では、グルーピングの原理となる「大講座制」などが具体的に討議され始める。また、広く学内から意見を求めるため、「世界と日本の中で明日の外大をさぐる」と題する拡大将来計画委員会がシリーズで開催されたし、外部から有識者を招いての講演会やシンポジウムも企画された。平成2(1990)年度の委員会の活動記録である『これからの外大 第17号』が300頁にもおよぶ大作であることが、この年の改革論議がこれまでとは異なった高まりであったことを十分に反映している。

平成3(1991)年3月再選された山田学長は、新学年度の冒頭の4月18日の教授会で所信表明を行い、大学改革を優先的課題として取組むことを明らかにし、概算要求(平成5年度)として文部省に提出できる具体的な外大の新構想案の早急な取りまとめが必要なことを強調した。教授会は、新構想案の起草を将来計画委員会へ付託することに合意し、これまで委員会レベルでの論議に終始していたきらいのある改革論議が初めて本格的に全学的なレベルに引き上げられることになった。

教授会からの付託を受けた平成3(1991)年度の将来計画委員会は、きわめて精力的に活動した。これまでの20年間の改革論議の蓄積を大切にしながらも、「全てを解体し、白紙状態から構築する」という方針のもとで作業を開始した。会議はほとんど毎週開かれ、深夜におよぶことが多かったし、必要によっては土曜日や日曜日も潰された。委員会がこれほどの活動をみせたのも珍しかったし、庶務課や会計課を中心とした事務局の対応も積極的であった。

将来計画委員会の新構想案は、同年5月16日に初めて教授会に示されて以来、委員会と

教授会との間でキャッチボールが繰り返される形で深められていった。本格的第1次案が7月4日の教授会に提案され、それを受けて4つの専門部会(夜間主コース問題、語コース問題、総合科目・基礎関連科目・教職科目・専門科目問題、大学院・研究体制・国際交流・生涯学習問題)が設置され、夏季休暇を返上しての審議が重ねられた。専門部会での意見を参考にしてさらに練り上げられた第2次案が教授会に出されたのは、10月30日であった。11月7日の教授会では10月30日案をベースにした「大学改革に係わる平成5年度概算要求骨子案」が認められた。より具体的に詰めるために、新たに「大学改革準備委員会」が設置され、改革作業はこの委員会の手に移る。そして、文部省との交渉も開始されつつある。

### 〈新構想案の概要〉

さて、改革作業の流れを追うのが少し長くなったが、上述の平成3(1991)年度の将来計画委員会が精力的にまとめ、11月に教授会でその大筋が認められた改革構想案を土台に、外大の期待される「新たな発展像」を簡単に紹介してみたい。

**【改革の目的】** とりわけここ20年来の世界的規模における急激な社会変動の中で日本における「国際化」はますます重要性を帯びてきている。諸外国の文化を理解し、海外においても日本人として諸分野で活躍できる人材が強く求められている。今日の変動の特質は諸民族の再生をめぐる諸問題のごとき「地域の再認識＝個別化」と環境問題のごとき「世界への統合＝普遍化」の相反する二方向への同時進展にあるといえよう。こうした新しい変動に対応する課題に積極的に取り組み、真に国際的な人材を養成するために改組再編成を行う。

**【理念と基本構想】** 外国語学部の使命は次の3点における教育と研究に要約できる。

- 1) 地域(国家・民族)に固有の文化
- 2) 普遍科学的にとらえた世界的・地球的問題
- 3) 日本語・日本文化の普遍的認識

つまり、外大の理念は、「世界諸地域の言語習得を基本に、民族・地域の文化を理解する一方で、平和や環境といった世界的課題に挑戦し、外に向かって〈日本〉を発信し得る高等教育機関であること」である。

この理念を生かすために、改組にあたっては、以下のように基本構想を考える。

- 1) 広域的地域研究および教育体制の構築(地域問題とはいえ、今日では一国家とか一民族といった既成の小区分を考慮するだけでは解決は困難である。そこで、従来の小地域を単位として編成されていた学科および講座を大規模化し、広域的で弾力的運用をはかる)
- 2) 〈個別〉と〈普遍〉の交流(従来の外大の教育課程は〈地域＝個別〉を考究す

る課程に偏っており、〈普遍〉を追求する課程との有機的関連を欠いていた。そこで、新しく、〈普遍〉を考究するための学科を新設する。このことにより、新しい理念にふさわしい〈個別〉と〈普遍〉の交流が可能となり、より高次の教育・研究段階への展望が開ける)

- 3) 語学教育の効率化と教育課程の柔軟化(本学の存在の基本は言語を基礎とした教育・研究にあるのは言うまでもない。従来の語学重視を踏襲し、より一層の語学教育の効率化をはかる。また、従来の語学科や講座の枠をはずし、十全な相互乗入れを常態とする柔軟な教育課程を構想する)
- 4) 情報化と国際交流の推進(諸地域間のコミュニケーションが重要視され、めざましい機器の革新により世界はますます狭くなりつつある。外国研究を本来の使命とする本学では、外国の大学との交流や留学生の受け入れの一層の充実や日本語・日本文化の外国への発信も十二分に保証する)
- 5) 就学形態の多様化と開かれた大学の推進(高等教育に対する需要の形態は急速に多様化してきており、従来の夜間学部制度は現状に対応しきれなくなってきた。本学の抱える知的資産を学外に公開し、一般市民の要求に応えねばならない。また、大阪を中心とした地域の活性化に寄与しなければならない)

【学科および専攻課程編成】 これらの基本構想を実現するには、より広い単位での学科および講座が必要となる。加えて、設置される大学科、大講座は決して閉鎖的で固定的であってはならない。基本的に教育と研究の組織を分化する考えに立ち、学科は学生の所属先であり、講座は教官の所属先とする。まず、外国語学部の従来の18学科を次の2学科に改組する。同じく、学科内に設けられている小講座を改組再編し、各々の新学科に以下の講座を置く。各々の講座は様々な専攻課程を用意する。

- 1) 総合文化学科・・・(個々の地域をも尊重しながら)世界の相互関連を総合的・科学的にとらえる。

比較文化講座(比較文化専攻)

国際関係講座(国際関係専攻)

日本語・日本文化講座(日本語専攻、日本文化専攻)

言語・情報講座(言語学専攻、情報・コミュニケーション専攻)

開発・環境講座(開発・環境専攻)

- 2) 地域文化学科・・・(世界的視野に立ちながら)個々の生活領域に根ざす有機的地域文化をとらえる。

アジア I 講座(東アジア地域文化専攻)

アジア II 講座(東南アジア・オセアニア地域文化専攻)

アジア・アフリカ講座(南アジア地域文化専攻、中近東地域文化専攻、ア

外国語学部

前期課程 (1・2年次)  
〔専攻語〕

- 日本語  
外国人留学生
- 中国語
- 朝鮮語
- モンゴル語
- インドネシア語
- フィリピン語
- タイ語
- ベトナム語
- \*カンボジア語
- ビルマ語
- ヒンディー語
- ウルドゥー語
- \*ベンガル語
- アラビア語
- ペルシア語
- トルコ語
- スワヒリ語
- ロシア語
- \*ポーランド語
- デンマーク語
- スウェーデン語
- ドイツ語
- 英語
- フランス語
- イタリア語
- スペイン語
- ポルトガル語

後期課程 (3・4年次)

- 比較文化専攻
- 国際関係専攻
- 日本語専攻
- 日本文化専攻
- 言語学専攻
- 情報コミュニケーション専攻
- 開発・環境専攻
- 東アジア地域文化専攻
- 東南アジア・オセアニア  
地域文化専攻
- 南アジア地域文化専攻
- 中近東地域文化専攻
- アフリカ地域文化専攻
- ロシア・東欧地域文化専攻
- 中・北欧地域文化専攻
- 南欧地域文化専攻
- 北米地域文化専攻
- 中南米地域文化専攻

総合文化学科

地域文化学科

\*は、新設要求専攻語である。

フリカ地域文化専攻)

ヨーロッパI講座(ロシア・東欧地域文化専攻)

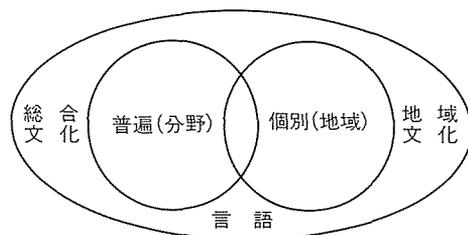
ヨーロッパII講座(中・北欧地域文化専攻)

ヨーロッパIII講座(南欧地域文化専攻)

アメリカ講座(北米地域文化専攻、中南米地域文化専攻)

この両学科の関係概念を図示すると次のようになるであろう。

《図-2》総合文化学科と地域文化学科の関連



【第二部の夜間主コースへの再編と生涯学習コースの設置】 余暇時間の拡大や高齢化社会の到来、さらには継続学習の必要と知的文化的需要の高まりを背景に、生涯学習への社会的ニーズは強まり多様化してきている。従来の「勤労学生に学習機会を提供する」という第二部のあり方の修正が必要で、文化的な役割を担う地域社会の一員として、広く社会人に対して学習機会を提供できるように改革しなければならない。そのための具体的な措置として、第二部を夜間主コースに再編するとともに、昼夜両コースを通じて、正規の学習課程の一部を生涯学習コースとして地域に開放する。また、外国人への日本文化紹介短期コースであるエルダーホステル制度のような国際的生涯学習にも力を入れる。

【一般教育の改革】 従来の人文・社会及び自然の分野での履修を義務づけている一般教育制度は専門教育との連携もはかりにくく、今日の学際的領域における学問の発展にも合致しないので、その名称を廃止する。一般教育の理念を生かすために、より柔軟な制度のもとに「基礎教育科目」を置く。

【入試と履修】 入試は、原則として、各専攻語(中国語を初めとする25言語)ごとの定員数により行われ、前期課程を中心に専攻語の学習を行う。その一方で、基礎科目や総合科目で自らの関心を確かめ、適当な時期を選んで、2大学科および各専攻課程への振り分けが行われ、後期課程には専攻課程を履修する。

【大学院改革】 以上のような学部改革を受けた上で、博士課程を擁する大学院構想を早急にとりまとめる。

《図-3》新構想による教育課程概要

4 年次	関連科目	専攻科目講義 専攻科目演習 専攻語演習	卒業論文	副専攻語実習
3 年次				
2 年次	総合科目	基礎科目	専攻語実習	
1 年次				

〈新構想案の方向〉

以上が、平成3(1991)年度の将来計画委員会が策定した新改革構想案の概要である。今日の社会からの要求を踏まえて、建学理念であり存在理由でもある外国研究＝地域研究(Foreign Studies)の原点に立ち戻り、これまでの改革論議の蓄積を参考にしながら練った案である。この構想案の基本的特徴は以下の通りであろう。

最も大きな特徴は、部分的ではなく全学的改革である点であろう。改革は、唯一発足間もない留学生日本語教育センターをのぞき、第一部、第二部、一般教育の教育・研究組織全てに関わっている。したがって、細部の点についてはまだまだ不明確な点もあるし、短期的に実現できるものでもない。最低でもおおよそ10年間程度の期間をみておかねばならないであろう。文部省と粘り強く交渉していくことが要求される。

「語学科体制」の廃止が具体的な特徴の最たるものである。教育や研究の基本的単位を語学科におく体制が「語学科体制」であり、「学校」時代から今日まで作動してきたシステムである。ほぼあらゆる問題が、語学科の主体により、語学科の権限により解決されてきた。しかし、ここにきて、とりわけその学問的狭さと閉鎖性とは、学問の命である「比較および批判の場」からの逃避をもたらし、組織的にも弾力性を欠き麻痺症状をきたしている。「語学科体制」下のカリキュラムでは、今日の社会の流動性に対応できず、教育・研究の進歩発展が抑えられている。また、昇任人事などの面でも効果的でなく、人事の停滞は大学の活力をそぐ恐れがある。これらの理由から、大講座制の導入が図られたのである。

言語を基礎とした〈普遍〉と〈個別〉の教育・研究という方向が構想案のユニークなところであり、新しい外大の方向であろう。従来の〈個別〉に偏った体制の改造であり、語学科関係以外の全ての教官に等しく教育と研究の義務が課せられることになる。一般教育が廃止され、2大学科制下で語学教育と専門教育が行われる制度である。

また、語学を〈普遍〉と〈個別〉の教育・研究の基礎と位置づけ、地域文化学科の学生はもちろんのこと、比較文化専攻などの総合文化学科の学生にも語学を要求しているのは、他の大学にはみられないユニークさである。大講座制と大学科制のもとでの弾力的カリキュラム運営などが、このユニークさをより補強するであろう。

生涯教育や地域に生きる大学も一つの方向として意図されている。

最後につけ加えておこなうならば、論議の過程では、大学の名称の変更も提案されたという。大阪外国語大学という名称が、語学学校という誤った印象を一般に与えてきており、誤解を生み易く、今回の改革案とはより離れていくからである。名称変更は容易に行えないことと、英語名にまだ救いがあるということで見送られたが、いずれは問題化するかも知れない。

これから数年、外大はこの構想案の実現に向けて試練のまっただ中を歩むことになる。「外国語教育・研究」から〈普遍〉と〈個別〉が行き交う「外国(異文化)教育・研究」へと大きくとらえられる構想が決して満点とは言えなくとも、少なくとも70年の歴史の上により新しい発展をつけ加える方向での努力目標であることはまちがいない。

#### [参考文献]

- 天野郁夫『変革期の大学像 日本の高等教育の未来』日本リクルートセンター出版部、1980  
飯尾通直『教室雑記』『我等の独逸語部』大阪外国語学校独逸語部、1941  
内村鑑三『外国語の研究』講談社、1988  
大沢勝 他『講座・日本の大学改革 第1～4巻』青木書店、1982  
喜多村和之『大学淘汰の時代』中央公論社、1990  
鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店、1973  
柳父章『翻訳語成立事情』岩波書店、1982  
渡部昇一『日本語のこころ』講談社、1974

#### (雑誌・新聞)

- 『中央公論』(1991年11月号)  
『現代』(1991年4月号)  
『大阪外大新聞』大阪外大新聞局

#### (学内刊行物)

- 大阪外国語大学『わが国における外国語研究・教育の史的考察(上)－現状分析と回顧－』  
1989年3月  
大阪外国語大学『わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)－歴史と展望－』  
1990年3月  
大阪外国語大学大学院問題研究会『博士課程創設に関する提言』1990

#### (将来計画委員会刊行物)

- 大阪外国語大学将来計画委員会『新しい外大のために』1～12号  
大阪外国語大学将来計画委員会『これからの外大』13～17号



---

## 第2編 部局史

---



## まえがき

部局史の「部」という言葉は、一般には総合大学などのいくつかの学部を表すものであろう。従って本学のような単科大学の歴史に部局史を設けるのは、おかしいかも知れない。しかし第一部の諸語学科、そして別科、短期大学部から発展して生まれた第二部の諸語学科および一般・共通は、それぞれほぼ完全な独自性を持っていて、単なる学科というよりはむしろ学部に近いところもある。従って事務局、学生部、図書館、保健管理センターその他とあわせて、あえて部局史編を設け、各語学科それぞれの歴史および事務系部局等について、ここで詳しく扱うことにした。

第1章—教育研究組織—の語部・語学科および一般・共通の歴史については、それぞれの学科・部門の先生方に執筆をお願いした。通史編では、各学科・部門の特記すべき出来事やかつての名物教授のプロフィールといった、この機会に是非記録にとどめたい、いわば外大70年の歴史のひだとも言うべき血の通った個々の事実に触れることが出来ないのも、それらの事情に詳しい先生方に内容をすべてお任せして書いて頂こうと思ったからである。また一般・共通については幾人かの卒業生の方々も原稿をお寄せ下さった。皆さんそれぞれにお忙しい中、快くご協力頂けたことにこの場を借りて心からお礼を申し上げたい。各学科・部門の歴史を語るということは、とりも直さず自分の恩師や先輩教授達について語ることである。従って寄せられた原稿は当然すべての人名に敬称が付き、大変丁寧な文体で書かれていたが、編集委員会の責任で敬称等を省き、可能な限り通史の文体に合わせて、簡潔な常体文に書き改めた。年史という性格ゆえのこの作業をご理解、ご寛恕頂きたいと思う。

もっとも手記あるいは回想録に近い文体で書かれ、手を加えるとひどく不自然になったり、もとの文の雰囲気著しく損なうと判断された原稿は敬称、敬語等そのままでも収録した。そのためこの章は全体としては文体の統一を欠くことになった。また、内容も文の長さも不揃いのため、いささかお読みになり辛いかも知れないし、少し不体裁だが、寄せられた原稿を大切に扱い、執筆者の意図を出来るだけ生かそうとした編集委員一同の努力に免じてお許し願いたい。なお、提出されたものをそのまま、あるいは敬語表現等を省いただけで収録した原稿には末尾に執筆者名を入れさせて頂いた。

これまでに授業を担当した全教授名、使用したすべてのテキスト、毎年のカリキュラム、あるいは卒業生達のコまかい動静等々、膨大な資料を提供して下さいました学科もあった。70年の歴史を限られた頁数の中に収めるため、また各学科・部門の間で記述の内容と分量のバランスをとるため、いくつかの資料は心ならずも収録を諦めざるを得なかったが、それだけの資料を集め、提供して下さいましたご好意に編集委員一同心から感謝している。



# 第1章 教育研究組織

## (1) 語部・語学科第一部

### 1. 中国語学科

〈初代教授井上翠〉

大正11年、大阪外国語学校創設に際して初代支那語部(中国語学科前身)教授に迎えられたのは井上翠である。「高等官五等、評議員、支那語部並蒙古語部主幹(主任)」として同年3月に赴任した。48歳である。山口高商教授であった井上は、特に請われ、10年を限って赴任したという。事実、昭和11年3月「家事都合、依願免本官」の後は再び山口高商に講師としてもどった。

井上の経歴は別稿伊地智善継「中国語学科と私」さらには『松濤自述』や二見剛史「京師法政学堂と日本人教習」(国立教育研究所紀要115号)、「京師法政学堂と井上翠」(鹿児島女子大学紀要9巻1号)などに詳しいので、多くはそれに譲るが、中国語はかなり晩学である。井上は明治8年3月10日、姫路藩の藩校好古堂書学寮教授、書家井上松香(自身おそらくこれを継いでであろう松濤と号した)の次男として生まれた。中学4年で父君を失い、苦学のすえ習字および国漢の文検をとり、明治35年、東京府立一中の教諭。その後、当時の日中親善の機運に応じ、また「父自身も一度は中国にわたって彼の地の書家と意見を交換したいという希望を漏らしており、このようなことが潜在意識として心底に」あって、当時一橋の高商に付設されていた外国語学校清語学科別科に中国語を学ぶ。28歳の時である。その後、中国留学生の教育機関宏文学院教授となり、中国留学生に日本語を教える。

回顧すれば明治35年春、予は兵庫県龍野中学校より東京府立第一中学校に転じて上京するや、時恰も日華両国外交漸く軌道に乗りはじめ、彼我官民往来しだいに頻繁となり来たり。予はその現状を察知し、かねて研究を継続せんと希へる独逸語を棄て、断然華語研究に没頭するに至れり。これ予の終生の事業の発端にて、これより東京外国語学校夜学に通学し、新たに華語研究に精進する事となれり。(略)華語辞典は一として参考に資すべきものなく、不便きわまり無し。予はやむを得ず、休日ごとに上野公園なる帝国図書館に入り、遍く西洋人の著述に就きて研究を進め、是に因りて大に

自信を得ると同時に、西洋人には漢字にて現せる日本語と華語との区別判明せず、著書中に往々兩國語を混同して取扱へるあり。(略)是に於て予は愈よ華語辞典は邦人の手によらざれば、の信念を固むるに至れり。(略)此の頃清国留學生の我国に渡來するもの陸續として至り、帝都に留學せる者のみにても数万を數へ、是等の學生を收容する學校も多數設立せられ、留學生教育は我が教育界に於ける喫緊重要なる問題となれり。是に於て予は第一中學校を辭し、嘉納治五郎氏經營の宏文學院に轉じ、中華學生に日本語を教授する事となり、茲に又た日華辭典の編纂の必要を痛感し、之が編纂に着手せり。(『華語大辭典』序言、『松濤自述』)

明治40年秋、機會を得て清國京師法政學堂教習として北京に渡ることになる。われわれにとって興味深いのは、井上の中國語への傾斜が中國留學生の教育、中國留學生の世話に發していることである。魯迅が日本に來たのは明治35年、「上野の桜もどうということはない」といって仙台に去るのは明治37年、その間2年は宏文學院で日本語を學んでいる。魯迅の心に深い印象を残した日本人は「藤野先生」であつたが、井上もちょうどその頃同じく留學生の間にあつた。そして留學生に向けられる誠意、熱意は當人を中國語に駆り立てるものとなり、日華辭典の編纂に向かわせたのである。

宏文學院で日本語を教えるに當って、必要上日華辭典の編纂を思い立ち、言海を參考本として仕事に取りかかっている最中に招聘を受けたので、その原稿本を携えて北京に行きましたが、「百聞一見に如かず」で、内地で苦心慘愴の末やっと訳出した言葉も事實に當面すると簡単に解決が付き、清國にはこの物はないと思つて數十言を費やして説明を付した言葉も、眼前に實物を發見しては、啞然としたこともありました。何でも宝の山に入り手をむなしくしてはならぬと、歡喜に満ちた努力は着々はかどつていきました。この日華辭典は内地にいてはできない仕事ですから、どうしても在燕中に仕上げる必要があるので、私は全力をこれに傾注しました。巖谷博士は常に私を激励して下さつて、「井上君、この頃は顔の色が悪いぞ。まず一杯飲んでゆっくりやるがよい」とたびたび饗應を受けました。原稿全部脱稿した時、博士は初めから終わりまで目を通して下さいました。支那語辭典の材料収集の方面もこれに付隨して着々進行しました。(『松濤自述』)

この成果は後述のとおりである。『井上ポケット支那語辭典』の卷頭には「謹みて本書を故法學博士巖谷孫藏氏の靈前に捧ぐ」とある。

明治44年歸國。北京で總教習であつた服部宇之吉博士の推薦があつて東京外國語學校に奉職する話がまとまる寸前にまでいく。しかし結局この話は壞れ、広島中學校に行き、山口高等商業學校講師、教授を経て本學に赴任することになる。

井上の中國語に対する姿勢は「徂徠先生の卓見」(『鵬翼』17号)、また『井上支那語辭典』序言のなかに見ることができる。

徂徠菽生先生は訳文筆蹄の序文の裡に「故に予嘗て蒙生のために學問の法を定む、

先ず崎陽の学(長崎の学、中国語)を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てす、絶して和訓廻環の讀をなさしめず、(略)書を読むには速やかに和訓を離れんことを欲す、此れ即ち真正の読書の法なり、其の初は力を得易からず、極めて迂回なるが如くなれども、其の実は捷法直径、此に過ぎたるものあるなし」と説かれている。今より百五六十一年前に於て既にかかる卓見と進歩せる教授法を以て諸生を指導された。宜なり護園俊才輩出し、学風一世を風靡せること。

辞典序言には：

中国は四千年来文物燦然たる古国なり。特に言語は孔門四科の一に居り洗練に洗練を経て今日に至れり。故に現代語中にも多数の古語典故を存し普通談笑の間に使用せらるるは他の国の国語には其の類を見ざる所なり。然るに我邦の中国語学者は現代語の範囲に踰躓し、漢学者はまた古文の壘を株守し兩者の間に一道の溝渠を画し疎通を欠きたり。従って辞書の如きも漢語の方面には古來良著無きに非ざるに現代語の方面に於ては徒に西洋人の後塵を拝するは我が学界の為遺憾とする所なり。

祖徠の卓見が今の日本の中国学に生かされていないこと、日本の中国語学者と漢学者とが一道の溝渠を画すことの遺憾が述べられているが、この「一道の溝渠」を越える道を開くことが井上の学問の展望であった。中国語辞典もそのなかのひとつのステップにすぎない。この考えは井上の後を受けて赴任した金子二郎に受け継がれ、後述の倉石武四郎博士との共同作業となり、大陸語学研究所の創設となって新たな展開を得る。一言で言えばそれはわが国の中国認識の奇形をつくものであるが、やがては「(今次)戦争は華語を軽視せるより始まり、ついに悲惨極まる結末に終りしものとなれり。今にしてなほ覚醒せざれば、東亜和平の実現は永久望む能はず、世の識者以て如何となすか」という幻の大辞典の序言の結末に記された言葉につながるものであった。

井上は学生の人望を集めた。本学を去る時、卒業生たちが「涙ぐましい留任運動を起こし、そして壮麗な邸宅を寄贈」したこともうかがわれる。この家は井上の郷里姫路に建てられた。後に戦災で焼失するが立派な二階建ての家であったという。棟梁は美談に感じ庭石を寄付し、税務署は初年度の公課を軽減する道を講じてくれたと伝えられる。一年生はいつも井上が自ら教えたが、おかげで学生は電車でも便所でもたえず暗誦をしなければならなかった。急就篇冒頭の「来了麼、来了」をもじって学生たちは先生を「来了麼先生」と呼んだ。試験はいつも抜き打ちであった。また一年生の夏休みの宿題は例年急就篇の習ったところを半紙一枚6字で習字をして提出することであったという。

井上の業績はなんといっても辞典である。その生涯は辞典編纂と共にあったといっても過言ではない。辞典はいずれも「徹頭徹尾予独自の執筆に係り」「他人の援助を藉らず其原稿の浄書より校正の役に至るまで自らこれに当たれり」というのが特長である。世の榮譽を顧みず、生涯をかけて孜孜として辞典に打ちこんだ。昭和20年7月、姫路の空襲で大辞典の原稿を失った時の感慨はいかばかりか察するにあまりある。

旬日を経て之を発掘せるに、亜鉛箱は雨水の侵入を受け、原稿は水浸しとなり一部分は文字消滅し、一部分は模糊となり、赤字を以て校訂せる部分の如きは殆ど消滅せり。前に日華辞典は大正12年東京大震災の厄にかかりて原稿の一部を焼き、今また大辞典は水火の災を被るとは何たる因縁ぞや。自ら不幸中の幸福を慰めつつ、日々屋外広庭にて之を乾燥し、破損せる箇所を繕ひ湮滅せる文字を修理すること数月に亘れり。顧みれば大正3年初めて筆を下せしより、茲に三十余年を経て、漸く原稿の整理完成を終りたり。今後世に出づるは果して何れの日にあるべきか。〔『井上華語大辞典』序言、〔松濤自述〕〕

昭和29年『井上中国語新辞典』が出版された際、金沢で開かれた中国語学研究会(現在の日本中国語学会)年次大会の席で、80歳を迎えた井上に醵金を募り、その学恩に感謝する記念式が開かれている。発起人には倉石武四郎、吉川幸次郎をはじめ、竹田復、竹内好、松枝茂夫、実藤恵秀、奥野信太郎、熊野正平、内田道夫、目加田誠ほか当時の日本を代表する中国語、中国文学者が名をつらねている。あまり例を見ないことであり、たいへんな栄誉であった。大辞典の原稿が完成まぎわに戦災でその大部分が失われたことは誠に惜まれるが、今、井上の辞典として次のものを挙げることができる。ポケット辞典はいずれも数十版を重ねている。

『支那語辞典』昭和3年9月初版、文求堂

『日華新辞典』昭和6年8月初版、文求堂

『井上ポケット支那語辞典』昭和10年3月初版、文求堂

『井上ポケット日華辞典』昭和12年7月初版、文求堂。昭和28年、江南書院で復刻されている。

『井上支那語中辞典』昭和17年初版、文求堂

『井上中国語新辞典』昭和29年4月初版、江南書院。これは戦後研究室が協力してできたものである。

井上は昭和32年6月9日、京都東山今熊野の自宅で82歳の生涯を閉じた。

#### <専門学校からの教員>

開校1年後の大正12年4月、助教授として吉野美弥雄が赴任する。

吉野は明治26年生、岩手県出身、大正8年山口高商支那貿易科卒である。つまり井上の眼鏡にかなった優秀な教え子であった。卒業後農商務省海外実務練習生として天津に1年留学、その後も天津日本商工会議所嘱託としてとどまっていたのを呼び返されたのである。当時すでに『北支那の物産』という著書があった。戦前大阪中央放送局の中国語講座を担当し、これにもとづくテキスト類が多数ある。また授業で力を注いだ時文や尺牘の研究、中国語の破音や重念の研究で知られる。温厚誠実で学生の面倒を根気よく見た。声は大きかったが、激した言葉はなかった。授業を休むことが絶えてなかったので学生たちは「烏

が鳴かぬ日はあっても」を「吉野先生が休まれる日はあっても」といいかえたという。昭和34年3月定年退職、名誉教授。昭和37年10月、70歳で急逝した。

井上、吉野を助けた初代の外国人教師は関恩福である。

同治13年生、満州旗人、大正11年7月小樽高商より赴任した。

先生は光緒の頃、北京英国公使館で英国人に華語を教授されましたのが初めて、その学殖の深いことが、だんだんと在留外人間に認められるようになりました。日本人のなかにも氏の教えを受けた人が多数ありましたが、服部宇之吉博士並びに夫人もその一人でありました。明治40年の頃小樽高商に招聘され(旧職員記録では大正2年9月より同11年7月まで)、大正11年まで勤続されましたが、大阪外語の創立で、小樽から転任してこられました。義理堅い人情味豊かな好人物でありました。晩年学生卒業生からも惜しまれましたが、終に辞職され北京に帰られました。多年教育に尽瘁した功勞によりまして、勲五等に叙せられ、恩給給与の恩典を受けられました。外国人で恩給を受けたのは実に異例であります。(『松濤自述』)

関は北京日本公使館、北京正金銀行などでも教えている。日本語は余り上手ではなかったようだが、主として会話の時間を担当し、昭和18年まで20年にわたって在任した。『鵬翼』誌に「中元迷信」「才幹」などの論考を、『支那及支那語』(昭14、8-9)には中国語の小説を寄せている。学殖をうかがうに十分な美文である。

昭和4年になると、非常勤講師浦川源吾が担当していた漢文に山本磯治が赴任する。

山本は明治29年生、奈良県出身、広島高師国漢科卒で福井三国中学、鳥取倉吉中学などを経て本学に来た。当時の学生の目には「新任の山本先生は謹厳そのものの感じのする方」であった。掃葉山房の石印本を使って、四書集註や左伝、国語、韓非子などを教えたが、自分でも学生と机を並べて中国語を学んだ。

井上、吉野、山本、関の時代は昭和11年まで続く。

井上先生はますますご健勝で勝尾寺の山道を十八丁走られたことは有名なもので、一同先生の温顔に接して勉強にいそしんでおります。先生は最近「談論新篇」上級書をご編纂中で八月中に脱稿、また過日日華辞典が出版されたことはすでにご承知のとおりであります。吉野先生もあいかわらず活動ぶりを発揮され昨年度は生徒主事になられ、本年正月には学校を代表して満蒙地方に出かけられました。山本先生はご病気のため長らくご休講中、この度全快され今春よりあの温厚な姿で流るるがごときご講義をなさることになりました。時折ラケットを手にしてスポーツに時を割いておられる先生を見ることがあります。関先生もあいかわらずお元気で最近先輩佐藤三郎治氏の中国語会話文を太平レコードに吹き込まれました。(昭和7年7月『鵬翼』)

昭和11年井上が退職する。後を受けて赴任したのは金子二郎である。

明治38年生、群馬県出身、大正15年第2回の卒業生である。最初の同窓教授であった。卒業後すぐ外務省留学生として北京に留学、その後外務書記生として中国に滞在していた

のを呼び戻されたのである。赴任すると、当時の外国語学校としてはまったく新しい試みであったが、魯迅や周作人の現代文学作品を読み、中国の現代文化について講じた。その後も一貫して中国の現代文化を教育の中心に据える努力をしたが、これはその後の中国語学科に大きな影響を与えるものであった。中国語というものがきわめて実践的なものであり、中国語学が実践的にしか成立しなかった時代に、新興の白話文学や当時の中国の現代語文法の先駆けをいち早く取り込んだのである。折しも京都大学教授倉石武四郎博士は中国古典を専攻する学生に中国語を教え、次のように主張していた。

これまでわが国民が中国について語学的研究をするのに、漢文という方法と中国語という方法とが、はっきり区別されていた。かくして同じ源から流れ出た中国の言語文字が、まるで違ったもののように誤解され、しかもお互いに領土を定め、縄張を守ったために、つまりは双方とも不具者になってしまうという不幸な結果を生じ、漢文といえ古くさいものと思われ、中国語といえ実用一点張り定められ、これが学問の進歩を妨げ、中国の認識を覆った最大の原因である。(略)

わが国の中国語教育の方法が稚拙であり、自然国民が中国に関する知識を欠き、その認識に乏しいことが、ただいまの事態において如何に深刻な結果を生じているか、あるいは将来も生ずる虞がないか(略)憂慮に堪えない。(『支那語教育の理論と実際』序文、岩波書店、昭和16年)

このなかにわれわれは時の流れを感じずるのだが、当時においてはやはりたいへんな識見であった。やがて金子とこの倉石博士との出会いが成立する。

わたくしが謝冰心先生の「寄小読者」の翻訳を出しますとき、はじめにその一部分をとりだして小さなプリントをつくりました。そしてそれを知っているかたがたにおわけしまして、どこかでまとまった訳を出すことはできないだろうかという相談をもちかけたことがあります。その後その小さなプリントを、もちろんそのかたにさしあげたのではないんですけれども、それをフッとご覧になってわざわざわたくしを訪ねて来てくださった方がある。それは大阪外国語大学の学長もされた金子二郎先生です。そのみならず、自分がこれから育てようと思っている弟子がある、それをあずけるからどうでもしてくださいといわれるのです。その弟子というのが今の大阪外国語大学教授の伊地智善継さんです。なぜこんなことをいうかといいますと、これは、わたくしども東京大学、京都大学など、もとの帝国大学系統の学校と、外国語学校とが手を握るようになった最初の因縁だからです。さきほどから申しましたように、外国語学校の先生につくられた本は利用していましたけれども、それはほんの教科書や字引として利用していたというだけで、本当にお互いが相談しあって、これからどうしようなどと考えるようになりましたのは、これが最初でした。(倉石武四郎「中国語五十年」、岩波新書)

二人の出会いは「合作」に発展する。中国語をめぐる兩岸から同じ理想を持って歩み寄

った両者の「合作」はこの後の中国語学科の展開に新しい方向をあたえるものとなった。やがて後述の『支那及支那語』誌が刊行され、大陸語学研究所ができる。またこれまで使われなかった新しい教材が多数準備されるが、いずれもこの「合作」の結果である。「金子二郎教授はひさしきにわたって中国語の教鞭をとり、つとに中国語と中国文化との関連に着眼し、多くの後進を誘掖された。従来 of 外国語学校の教育は金子教授によって革新されたといっても過言ではない」とは金子の還暦に際し、中国語学研究会関西支部が刊行した『中国語と中国文化』（光生館、昭和40年）の序文によせられた倉石会長の言葉である。金子は昭和40年から44年まで、森沢三郎の後を受けて第3代学長をつとめる。44年退職、名誉教授。昭和61年1月、80歳で逝去した。

昭和14年より中国語は従来の1学年40名から80名に増募されることになる。2クラス制である。それに応じて住田照夫が赴任する。明治42年生、大阪府出身、昭和6年第7回の卒業生である。大阪貿易学院の出身で、外語入学前から中国語がすでによくできた。当時の学則12条「中国語部希望者にありては中国語、露語部希望者にありては露語を以て受験することを得」によって中国語で入学した。「英語は困ったが、中国語は3年になるまで追いつくものがないかった」という優秀な学生であった。昭和17年から19年まで北京に滞在、北京大学法学院で教鞭をとる。時文、尺牘が専門であるが、これは従来3年生を対象に教えてきた井上、吉野の伝統を継ぐものであった。後に『中国貿易用語辞典』『中国現代商業通信文』などの労作を出している。昭和50年定年退職、名誉教授。

昭和16年には小田信秀が助教授として赴任する。

大正6年生、福井県出身、昭和13年第14回卒業生である。昭和19年12月、広東語習得のため軍属となって広州に向かう途中台湾沖で乗船が撃沈され、終戦まで台北で北京語を教えたという。昭和21年に復員。戦後の混乱で健康を害し昭和22年12月学校を離れた。

昭和16年大陸語学研究所が設立されると、伊地智善継が赴任する。

大正8年生、大阪府出身、昭和14年第15回の卒業である。昭和14年から1年半兼松商店天津支店に勤務、前述のごとく京都大学選科を経て赴任。金子と倉石博士の「合作」のいわば体现者である。伊地智の仕事は中国語を如何に科学的に教えるか、まずは中国語を如何に科学的に捉えるかに収斂している。倉石博士の「中国語教育の方法が稚拙であることが如何に深刻な結果を生じているか」という認識をもっとも忠実に、また長きにわたって具現した一人ではなかろうか。大陸語学研究所時代から中国語学に関する多くの論文があり、中国における中国語の研究は「小学」であるが、中国語をヨーロッパの言語科学、とりわけlinguisticsの立場で研究した日本での先駆けである。にもかかわらず、テキスト『中国語の話し方』（後に『中国語入門』）はもっとも執着した仕事のひとつである。何度も手を加え、版を改めているが、これは教育から出発する伊地智の考えに出るものであったろう。学生部長を前後2回にわたってつとめ、大学紛争中の多難な時代に大学行政へ貢献した。昭和52年から57年まで牧祥三の後を受け第5代学長である。昭和57年任期満了退職、名誉教授。

昭和18年関恩福の後任として金毓本が赴任する。光緒29年生、満州旗人、民国15年南開大学文科経済系を卒業、民国29年から大連高商の講師であった。終戦直後昭和21年にいったん退職するが、同22年10月再度外国人教師にもどり、昭和55年退職するまで36年の長きにわたって発音指導と会話の授業を担当した。日本人教師の細かい質問に根気よくつきあってくれた得がたいネイティブ・インフォーマントであった。自身でも伊地智と協力して中級テキスト『東京—北京』（昭和40年、北辰印刷）を出している。

戦後昭和21年、小林武三が赴任する。明治41年生、長野県出身、昭和5年第6回卒業生である。昭和10年から名古屋高商で教鞭をとり、助教授、教授。昭和19年陸軍教授として士官学校に移り終戦を迎え、当時の外専に迎えられた。住田と小林が高槻学舎で復興に尽力した話は当時の卒業生が口々に語るところだが、学内に住み込んで生協と食堂の面倒を見ていた小林は時代が時代だけに大変であった。目に見えないところで学生が支援を受けた例は数知れない。小林は夜間の勤労学生のために力を尽くし、それを自らの使命の如くにしていった。夜間の別科が開設されたのは昭和26年である。やがてそれは短大となり、二部となる。小林はつねにこれらと共にあって、昭和36年には短大の、昭和40年には二部の主事として夜間学生のために活躍した。表現論や作文、文法を専門としたが、性格そのままに、丹念にカードをとり、例文を集め、理論より実例で示すという学問であった。文法論はいかにして学生の語学力を伸ばすかというためにのみあった。昭和49年定年退職、名誉教授。昭和62年8月、78歳で逝去。

昭和24年、専門学校の終わりになって辻本春彦が赴任する。大正7年生、奈良県出身、昭和16年東京大学支那哲学・支那文学科卒業、天理外国語学校、陸軍幼年学校教官を経て赴任した。昭和16年からすでに大陸語学研究所の研究会には参加していたという（『咲耶』創刊号）。辻本は本学に中国の伝統的中国語研究「小学」をもたらした人である。「漢文という方法と中国語という方法」がわれわれの研究室で融合していくには、やはり辻本の赴任を待たねばならなかった。少なくとも語学研究について言えば、伊地智の言語科学的な研究と辻本の「小学」的な研究が車の両輪となってはじめてその後の講座の展開があったといえる。辻本は特に音韻史を専門とし、その音韻史の講義は難解でしばしば学生たちを煙に巻いたが、大学になって多くの音韻史専門の後進を育てた。昭和58年定年退職、名誉教授。昭和58年、伊地智、辻本の退官を記念して、教え子たちの論文集・伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念『中国語学・文学論集』（東方書店）が刊行された。

専門学校時代を通じて関恩福、金毓本のほか多くの中国人教員の出講を煩わした。判明しているものについて名前と時期（一部不明）を記す。

常阜基（大正13年4月～14年10月。昭和12年～14年）

周慶慈（昭和2年～13年）

劉俊逢（昭和14年5月～18年3月）

柳龍光（昭和14年11月～15年）

王鴻恩(昭和15年4月～16年9月)

李景新(昭和16年～)

王之淳(昭和17年4月～20年3月)

陳根霖(昭和17年6月～)

沈容(昭和18年3月～)

徐鶴齡(昭和18年3月～19年3月)

張源祥(昭和21年2月～)

劉激誼(昭和22年5月～26年3月)

劉光斗(昭和23年4月～)

### 〈学生生活〉

専門学校時代の外国語授業時数(1回50分)は1年生で中国語17時間、英語が3時間あった(昭和18年『学校一覽』)。2年、3年になると少し減ったが、中国語は1日2乃至3回の割である。テキストは時代によって変動があるが1年で『急就篇』『官話指南』『華語初階』、2年で『中等官話談論新篇』、3年で時文、尺牘、例えば井上翠『初等支那時文読本』、同『高等時文教本』、浅井新太郎『華文跬歩』などであった。語学の授業のほかに国語漢文、言語学、地理、歴史、法律、経済、商業、体操などがあつた。さすがに中国語の力は群を抜いていたらしく、外務省留学生採用試験では、

最後に中国語ですが、毎度ながらの言い分ですが、井上、吉野、関の三先生を戴く我等大阪外語の生徒にとってこの試験は実に「算什麼」です。私も今回受験に際し本校生徒たることの如何に幸いなるかを痛感した一人です。(『鵬翼』7号)

語学は予定の通りと言うよりも、あんまりあつけないくらいにできました。皆先生の御賜物と感謝しておりますが、他の学校から来ている人は、とても容易な会話や書き取りにも、かなり頭を痛めていたらしいです。(略)受験者は中国志望のものが三分の二と見て60名くらいはありますが、中国語での受験者は今年は15、6名あつたと思います。いずれも東西両外語の中国語の生徒が多数を占め、ちょっと外語出身者の語学実力検定試験の観があります。(『鵬翼』8号)

といった調子で、300字をこえる書き取り問題を暗記して来て正確に示すだけの語学力があつた。

語部ができ卒業生が出ると学生と卒業生の組織「支那研究会」(後に中国研究会)が発足する。「本会は中国に関する各種の事項を研究し併せて会員相互の連絡をはかるを以て目的」とし、「その目的を達するために機関誌を発行する」というものだが、機関誌が『鵬翼』、研究誌(大正14年より)が『支那研究』であつた。『鵬翼』は最初は年2回、『支那研究』は年刊であつたがともに遅れがち、ほぼ年1回の割で刊行されている。『鵬翼』は戦後復刊第5号(昭和26年)まで続く。これらには創作、翻訳、論文、旅行記、近況報告などさまざま

な寄稿があるが、それぞれの時代の学生生活、中国をめぐる思いが生々しい。次にいくつかを拾って、一部分を抄録する。

○「展望台」(『鵬翼』8号、昭和4年)

親しい日中人が相会すると必ず言う、お互いの心の中はよく了解していると。そしてこの儀礼に似た言葉から直ちに所謂日中親善なるものが実現しそうである。然し国家の立場から考えるとそう簡単には行かぬらしい。

我等学徒は国内の政治問題に対してかれこれいうのを憚るが、中国のかかる問題に対してはいろいろと論じる自由を持っているらしい。がもっと両国の関係が密接? になった場合、あたかも国内の問題を軽々しく云々することができないように、中国の問題をも軽々しく論断することができない時が一度は来る。

所謂中国通なるものが既往中国の盲目的崇拜者であったり、特異な風俗紹介者であったりする。また夢を捜しに中国へ行った文士もいる。しかしもっと突っ込んだ新しい中国の社会観を見せてくれる人は少ない。我々は中国に対する妙な優越感を捨てて、もう一度よく中国を眺めてみる必要がある。

○「兵隊の居る北京」(『鵬翼』18号、昭和14年)

「ジリジリ —— 」と電話がけたたましく鳴る。「ハイハイこちらは偕行社の勤労報国隊本部ですが —— 少々お待ち下さい。」(略)

北京偕行社の我々の一日はこんな調子で過ぎていく。こんな生活をやっている、どうも中国へ来て居る様な気がしない。殆ど毎日の様にこの事を考える。中国を掴みたい。(略)

白塔に上がって、北京を見下ろす。地上で見る北京とは凡そ異なった美しさだ。ところざらわず植えた新緑の木々。森の都北京。その間に点在する例の絢爛たる建物の美しさ。とりわけ、紫禁城は美しい。まるで絵のようだ。北京は上から見ていい様に作ったものであろうか。東安市場によって、王府井の王府亭で晩飯を食べホテルに帰ったのは、大方9時であった。(略)

長浜君と東外の大沢、浅田の三君は今日は憲兵隊に勤労奉仕に行くことになり、学生は土井君と二人で偕行社に行った。今日は休みなのか、偕行社の下の食堂は兵隊で満員だ。ビールを飲んで氣勢を挙げている。元気に歌う軍歌の陰に、私は望郷の想いを聞いた。(略)

今日は実際驚いた事が起こった。突然住田先生からお電話で、松村君に召集令状が下ったとのこと、しかも松村君の居所がわからないとの事。多分天津でしょうと返事をし、天津に電話をするやら、住田先生のところに飛んで行くやら、天津の尼子先輩から、まだわからぬかと掛かってくるし、夕方まで忙しいやら、心配するやらしたが、夜松村君から電話があってほっとした。祝辞を述べ、彼氏の武運長久を祈る。

○「中国研究会の活動概況」(『鵬翼』復刊4号、昭和25年)

研究サークル活動

金子教授「浮生六記」、伊地智教授「国学概論」のそれぞれのゼミナールのサークル活動は授業開始とともに活発に動き出した。(略)

九月末。愈々待望の「発音辞典」刊行される。一昨年末以来、刊行資金集めに奔走していた研究会員はこの決定版の実現するに及びただちにこれが銷路を東西に求め全力を傾注した。(略)

十月。「中国語学研究会」の十月例会が開かれ、住田教授の直接法による中国語の授業が東海から九州に至る各地の二十数名の中国語教師の参観に供された。

中国解放地区の文学作品、ルポ、論文集等続々入る(内山、大安書店)。就中、学生待望の趙樹理の作品、柳谷の「蝦球伝」及び毛沢東の「整風文献」、「論人民民主専政」等の入手は学生の中国に対する興味をいやがうえにも高め、新中国に対する正しき認識の糧になるものと思われる。

二月。かねて新中国の動静を知る資料を欠き、学生教師の間で焦眉の問題となっていたが、中国の新聞「文匯報」及び「大公報」がそれぞれ中国研究所、内山書店を通じて到着した。研究会も新しい時代の要求にこたえて力強い発足をする。

「中国人民文芸叢書」二十数冊内山書店より入手。直接、中国の作品と取り組める我々中国語学生は幸福といえないだろうか。

中国をめぐる時代ははげしく変転した。しかしそのいずれの時代にも学生たちは中国に対して純情であり、ひたむきであった。

外国語学校時代、中国語の学生は3年生になると中国旅行があった。行き先は年によって多少違いがあったが、例年7月下旬から約3週間北京、上海、南京、天津、東北地方をまわった。幸いなことに、この旅行には外務省から第三種補給生の名目で旅費が支給されていた。昭和13年頃で一人当たり80円程度であったという。もっとも帰国後各自が報告の論文を書かねばならなかったが(『支那研究』の論文のいくつかはこの報告に由来している)、ともあれこの時代に結構な外国旅行ができた。これは学生たちに時宜を得た語学的刺激と、中国についての現実的な認識を与えるよい機会であった。教員が同行する公式日程が終わると現地で解散するのがつねで、多くの学生はその後も中国で活躍する先輩(といっても過半の卒業生が中国で職についていたが)を訪ね一か月以上も中国に滞在した。

三年生の魂は既に中国に飛んでいる。試験何するものぞといった風に、顔を合わせると旅行の話をしている。無邪気なことではある。(『鵬翼』8号、近況より)

7月20日 真夏の海に出帆の銅鑼が鳴り響いて、しっかりと交わす固い握手。五色のテープは心と心をつないで綾と乱れる。憧れの大中国よ、我等若人往かん哉。さらば暫しの別れよ。諸先生よ、さようなら。いつまでも打振る帽子、帽子。(略)

7月22日 上海沖に停泊。この辺から海の色が変わり次第に土色を帯びてくる。4時半愈々揚子江に入る。茫漠一望の大水原。嗚呼是が川か、是が川か。小さな自然におしこめられて、それに馴れた我等には総てがあまりにも大きい。夕映えのその景色亦言はん方なし。静かに暮れ行く大揚子江。(略)遡航約3時間遂に上海の土を踏む。旅館にて小憩の後先輩の案内で夜の南京路の散策に旅の疲れも忘れて初めて見る中国の街に驚異の眼を見張る。(略)

7月31日 北京。公使館におられる我等の大先輩二氏来訪される。蒙古部出身のS氏が何くれとなく親切に世話して下さい。珍しくも満鉄経済調査課M氏来訪され、我々は時ならぬ珍客に談話つきるところを知らなかった。(略)

学校にて会得した中国語が良く了解されるので自由行動を待望していた。宿の中国人とお上手な会話をなす者あり、東安市場へ行く者あり、彼処にて俺の言うことがわからぬと小言を言う者あり、悲喜交々。(『支那研究』9号、旅行記より)

四五日前憧憬の北京に着いて好奇の目をもって立った同じ月台。間もなく発車の時間である。私これから一人で心細いというと送りに来てくれたK君が「中国語のオーソリティーが何を言うんだ。これからほんとうに一人で自分の中国語をテストする絶好のチャンスじゃないか」とひやかされたり、力づけられたり(略)七時過ぎ天津着。K君の従兄さんの家にご厄介になるべく駅から洋車をとぼす。(略)家に入ったものの調度の真新しいところから推すと新婚早々らしい。こりゃ罪なことをしたと思ったがもう遅い。「ままよ中国旅行は心臓だ」とご厄介になることにした。大変親切にして頂いてなお心苦しい。(略)正午、乗船すべく波止場に行ってみると奉天で解散して別れたB君に会う。互いに一別以来の出来事や傑作に花を咲かす。そこへちょうど人を見送りに来た中国語2年のH君も来合わせ非常に嬉しかった。誰かが中国も広い様で狭いものだねといったのでドッと笑う。

時代が下るにしたがって戦争色が濃くなる。学生たちは無邪気であるが日本の中国侵略の影がダブっている。

例年、秋には創立記念陸上競技大会や万国語学大会が語部対抗で開かれた。万国語学大会は弁士が外国語で弁じ、同じく学生の通訳がそれを日本語に訳すというペアで行う弁論大会であった。昭和7年からの試みと思われる。

一年ぶりに触れる優勝旗。かくて吉野先生を先頭に、輝く二本の優勝旗を押し立てて、語部一同夕やみ迫る花園運動場を一周した。ああこの感動。

11月1日午後6時から講演部主催の第13回万国語学大会がガスビルにて開催された。定刻既に超満員といった盛況ぶり。わが語部を代表して——四君が出場、一同の期待に背かず堂堂の論陣を張って多大の感銘を与えた。中国生活10年余という聴衆の

一人曰く「内地でこんなに洗練された北京語、山東語が聞けるとは夢にも思いませんでした」と。(『鵬翼』より)

若さあふれる学生生活がくりひろげられている。

#### 〈大陸語学研究所と『支那及支那語』〉

昭和16年10月大陸語学研究所が発足した。大阪外国語学校付設の研究所である。といっても、国の予算がついたわけではないし、寄付金でまかなわれる細々としたものであった。5人ばかりの若手の教員や研究所員が図書館の一室で雑誌の編集や翻訳、研究会を開いたにすぎないが、中国語の研究を目的とする研究所は日本でこの後にも先にも例がないであろう。どんな研究をしていたかは後述の『支那及支那語』に見られる論文や油印の出版物にうかがうことができる。世間に向かって数え得る成果は微々たるものであったが、ただこれがわれわれの中国語教育にもたらした影響は誠に大きいものであった。結局は先に述べた金子と倉石博士の「合作」、二人の熱意がもたらしたものであった(伊地智善継「金子先生そして黎錦熙先生」『咲耶』7号)。

研究所の規定は次の如くである。主な部分を引く。

##### 大阪外国語学校大陸語学研究所規定

- 第1条 本研究所ハ大阪外国語学校ニ付設セラレ、主トシテ現代中国語及ビ之ニ関連ヲ持ツ其他東亞大陸諸民族ノ言語ヲ研究スルヲ目的トス
- 第2条 本研究所ハ大阪外国語学校大陸語学研究所ト称ス
- 第4条 本研究所ガ其ノ目的ヲ達成スルタメ必要ナル研究事業ヲ行フト共ニ、現代中国語学及ビ其ノ他ニ関スル書籍雑誌等ノ編集並ビニ出版、講演会及ビ講習会ノ開催ナド諸般ノ付帯事業ヲ行フ
- 第9条 本研究所ノ経費ハ左ニ掲グルモノヲ以テ之ヲ支弁ス
- 一、寄付金
  - 一、寄付金ヨリ生ズル利子
  - 一、第11条ノ規定ニヨル前年度繰越金
  - 一、其ノ他ノ収入

所員やその活動については別稿伊地智善継「中国語学科と私」や「大阪外国語学校大陸語学研究所記」(『きんきら50年』)にゆずるが、研究所が戦中戦後にかけて出版、復刻した翻訳やテキスト類で、今確認できるものを挙げる。多くはミチヤ商店印刷、光輝堂印刷などの油印でA5版である。

『黎氏支那語文法』大阪外語大陸語学研究所編訳、昭18、甲文堂書店刊、100頁。『比較文法(詞位与句式)』黎錦熙著、倉石・伊地智訳、251頁。『説話教本』上巻、下巻、上198頁、下105頁。『中国語文法綱要六講』黎錦熙著、研究所訳、54頁。『中国語言学論文集』研究所所編、83頁。『中国語基本文型』研究所編、大原信一担当、62頁。『趙

元任「Mandarin Primer」』伊地智訳。『John De Francis「中国語初歩」』伊地智訳(これは前15課のみ、後半は1952年11月大原信一訳で同じく油印で出されている)。『呉語教本』研究所編、沈容担当、67頁。『支那語会話教本』研究所編、王之淳担当、104頁。『中国語教本』86頁。『説話範本』上、下112頁。『標準中国国語課本』白滌洲著、69頁。『補助動詞的研究』博良勲著、48頁。『助詞的研究』同、73頁。『国学概論』曹聚仁編、100頁。『国語運動史略』劉復著、魚返善雄訳、77頁。『半農雜文』研究所編、60頁。『中国新文学的源流』周作人著、66頁。『魯迅雜感集』研究所編、72頁。『現代中国女流作品選』研究所編、57頁。『胡適文選』66頁。『十三年』李健吾、33頁。『中国文学読本』研究所編、118頁。『辺城』沈從文、118頁。『從文自伝』上、下、下66頁。『雷雨(第一幕)』82頁。『国文講話概説集』研究所編、63頁。『文学革命運動』陳子展、59頁。『中国古代社会研究』郭沫若、20頁。『新民主主義論』毛沢東、55頁。『白話注釈論語抄』研究所編、94頁。『支那時文教材』116頁。『中国商業尺牘教本』78頁。『中国商務尺牘』34頁。

『支那及支那語』は昭和14年2月より、大阪外国語学校支那研究会、代表者小田信秀編集で、大阪宝文館から月刊誌として刊行された。A5版、各号50頁前後。「高級な中国語研究雑誌として、また言葉を通じて広く中国文化に触れたいという根本態度」で編集され、毎号の内容は中国語に関する論文や紹介のほかに、新聞のニュースにかかわって中国語の原文や現代の小説、詩などであった。かなり専門的な論文のまじる雑誌であった。

東京の雑誌(「支那語」「支那語雑誌」など)が学習的であったのにたいして、大阪の「支那及支那語」は黎錦熙の「国語運動史綱」や趙元任の「北京語の語調研究」などの翻訳連載や、書き下ろし小論文などで構成されており、研究的な性格を有していた。(略)戦後の中国語学の発展に寄与された大阪外国語大学の先生方の学風が、はやくもここに表れているようである。(略)ここには、戦時下でありながら、私のいう「支那語派」と「漢文新派」の協力による、新しい中国語学の方向への模索がみられることに、私たちは注目しなければならない

とは後に早稲田大学安藤彦太郎教授の評価である(『中国語と近代日本』岩波新書)。この雑誌は一時は発行部数4,000部をこえたというが(『鵬翼』18号)、やはり時代の反映であろう。しかし、戦争が激しくなって昭和18年8月停刊。同年10月『支那語文化』と改題して再刊するがこれも2号で停刊した。次に主な掲載論文や翻訳を拾ってみる。

まず翻訳では、胡適「国語文法研究法」、カールグレン「北京語発音読本序説」「現代支那方言の記述音声学」(「中国音韻学研究」の一章)、黎錦熙「比較文法」、趙元任「北京語の語調研究」、シュレーゲル「マレー語における中国語借用詞」、劉復「四声変化実験の一例」、羅常培「現代方言研究の展望」などである。論文では、ヨゼフ・スパー(当時京大留学中のベルギー神父)「ミュリー先生」、高畑彦次郎「チベット語族と南方語族に対する支那語の言語学的寄与」、伊地智善継「軽声についての諸問題」、大原信一「重念・軽声と強

さアクセント」、高倉正三遺稿・吉川幸次郎序「蘇州話訳稿」、金子二郎「中国における語文運動に関する覚え書き」、住田照夫「応用文件工場規則抄」、富田竹二郎「ミュリー著『支那語構成論』について」などである。

『支那語文化』には、倉石武四郎「黄承吉とその学問」、吉川幸次郎「韓昌黎集私記」、頼惟勤「韻の分類について」、金子二郎訳沈從文「ランプ」などが掲載されている。

#### 〈大阪外国語大学中国語学科〉

昭和24年5月、大阪外国語大学が発足する。中国語学科は学生定員50名、中国語学第一講座、中国語学第二講座で、教員は吉野、金子教授以下中国人教師を含め専任7名で出発する。翌25年のカリキュラムはまだ前期2年が示されるだけだが、講義は金子教授の「中国文化概説」、伊地智助教授、辻本講師の「中国語音声学・文法論」が開かれるだけで、他は1年生、2年生各5コマ10単位ずつの実習であった。1年生は住田、小林両助教授を中心にテキスト『説話範本』『中国語教本』で「口頭的方法による」入門教育が行われた。大学への本格的な脱皮は担当教員が専門化し、後期の講義、演習が整備されることによって進む。新しく迎えられた教員とその頃の活動を見よう。

昭和27年、中国政治経済担当の講師として芝池靖夫が赴任する。明治45年生、昭和10年第11回の卒業生である。北京大学法学院で中国政治経済史を専攻、満鉄調査部、大阪府商工経済研究所を経て本学に赴任した。大学発足後の中国政治経済講座の要となって活躍するが、当時の学生の関心を集めたのはなんとも新中國の社会主義建設であった。1950年代は総路線、大躍進、人民公社のいわゆる「三面紅旗」の時代であった。人々は新生中國に注目していた。その中國の現状およびその前史としての中國近現代史は芝池を中心に演習が開かれ、多くの学生を集めた。上八時代芝池の研究室は新館四階の中國語第三研究室であった。ここには関西の各大学の中國近現代の思想史、經濟史を専門とする研究者がよく集まって、研究会が開かれた。現代中國学会は本学関係者が積極的に参加した学会であるが、その関西例会はしばしばここを利用していた。現代中國学会の第14回全国學術大会(昭和39年)および時代は下がるが昭和62年の第37回大会は本学で開かれている。芝池は昭和40年に教授、その後二部主事、図書館長などを歴任して、昭和53年定年退職した。退官記念論文集『中國社会主義研究』(ミネルヴァ書房、1978)は芝池はじめそのゼミで育った研究者たちを中心とする中國現代史研究会が行った共同研究の成果である。中國現代史研究会はその後も本学関係者が中心となって活動を続け、中國の現代史学会と學術交流が進んでいる。

昭和34年になると現代文學担当として相浦杲が赴任する。大正15年生まれ、昭和20年第22回の卒業生である。昭和24年京都大学文學部卒業、京都学芸大学を経て本学に赴任すると、学生とともに中國の文學雑誌『人民文學』を読み、毛沢東の『文芸講話』にもとづく中國の新しい文學を紹介した。「『文芸講話』はまことに正確である。(略)中國の文學のな

かから、西欧のそれに似たようなものを捜し出すようなことをしてみたり、深刻めいたふうに、仲間だけにしか通用しないような、作家論や作品論をやることは少なくとも新しい中国の文学に対する姿勢としては不適當である」（『新中国文学』3号）というのが当時の相浦の主張であった。『新中国文学』はその相浦を中心に本学関係者が作った当時の3号雑誌である。昭和39年8月には日本で多大の関心呼んだ北京シンポジウムに「日本人の中国像—日本文学を通してみた—」をひっさげて参加した。昭和45年には「中国文芸の創造的な研究と交流の場をめざし」中国文芸研究会が組織され、会誌『野草』が創刊される。当初は季刊、昭和49年以降は年2回の刊行となるが、17号までは本学の文学研究室で編集された。これはその後日本で数少ない中国現代文芸研究誌として引きつがれるが、第48号は相浦の追悼号となった。昭和41年教授、49年学生部長、56年図書館長をつとめ、平成2年12月逝去した。外大文学研究室を中国近現代文学研究の日本におけるひとつの中心に育てた功績は大きい。

上八の第一研究室(文学研究室)は金子、相浦を中心に活動した。昭和31年、金子を代表者に魯迅総合研究会が組織された。折しも魯迅逝去20年で中国で魯迅研究のひとつの高揚期であった。魯迅を単に「文学者として見るだけでなく、中国精神の象徴」として考えるというこの組織は、科研の助成を得て、広く関西の24名の研究者で共同研究を行った。『中国研究』（江南書院刊）はその成果の発表誌であった。昭和31年9月から翌年7月まではほぼ月刊で刊行された。

昭和36年短期大学部に緒方一男、中川俊が赴任する。緒方は昭和16年第17回の卒業生、諺や「歇后語」また紅樓夢の研究で知られるが、昭和45年教授、46年より二部主事をつとめ、昭和59年退職した。中川は大正11年生、昭和18年北京聖心学院卒。赴任後は第一研究室で金子、相浦と共に魯迅および現代文学を研究し、昭和56年教授、62年に退職した。二人とも終始夜間学部にあって勤労学生の教育のために尽力した。

昭和21年より外国人教師として大阪中華学校より劉激誼が来ていたが、昭和26年退職する。その後任には岳守謙が赴任した。1910年生、京大経済学部の留学生であった。しかし華僑の大陸への帰国が再開されると、28年9月辞任、帰国する。後任は徐新元であった。大阪華僑総会副会長をつとめていたが、34年3月急逝する。その後を受けて、彭沢周が赴任する。1926年生、安徽省出身、武漢大学歴史系を卒業後、昭和28年より京大文学部大学院で日本近代外交史を専攻していた。本学では発音、会話を担当したが、同時に専門の近代史を講じ、後述のごとく中国文化講座を担当した。昭和56年帰化(伊原と改姓)、同年あらためて日本人教授として採用されたが、昭和59年辞任した。

また時代は少し下がるが、昭和59年森博達が助教授として赴任した。音韻史の専門家として中国語学の講義を担当したが、平成2年3月辞任した。

中国語学研究室がこの間に行った活動を次に示す。まず刊行物として主なもの。

研究室編『中国語発音辞典』昭和24年、中国研究会刊、油印、800頁。呂叔湘、朱德熙

著、研究室訳『中国語法修辞講話』(一)昭和33年、江南書院刊。吉野美弥雄他共編『簡約中日辞典』昭和33年、江南書院刊、コンサイス版900頁。研究室編『中国常用字典』昭和33年、江南書院刊、コンサイス版130頁。大原信一・伊地智善繼編『改訂版中国語表現文型』昭和35年、大安書店刊。『中国語学論集』(科研総合研究「現代漢語の語法学的研究」の成果)昭和44年、油印、102頁。研究室編『中国定期刊行誌所掲中国語法論文分類索引』昭和62年、油印、148頁。

また本学学生の入門教育用にテキストとして『中国語の話し方』『中国語入門』『基礎中国語』『総合中国語入門』などを編集した。『中国語入門』は北京語言学院編の『合本中国語教科書』と長く併用したテキストである。しかし1970年代以降は北京語言学院で優れた入門教材が開発され、『基礎漢語』『実用漢語課本』あるいはその縮約版を利用した。中国語学研究室は日本中国語学会と密接なかわりをもった。会誌『中国語学』72号から93号までは研究室で発行し、昭和33年第9回全国大会、昭和57年第32回大会は本学で開催された。昭和58年から2年間伊地智教授が理事長をつとめ、研究室でその会務を担当した。

また研究室では中国よりの留学生の増加にともない日本語と中国語の対照言語学的研究に関心を寄せ、50年より年刊で『日本語と中国語の対照研究』『日本語・中国語対応表現用例集』を刊行した。

昭和47年6月に卒業生を中心とする集まり大阪中国語懇話会が発足する。学内で講演会が開かれ、会誌『中国の言語と文化』は昭和54年第6号まで続けられた。

大学としてのカリキュラムは昭和41年になっていわゆる四本柱、語学、文学、文化(近現代史)、政治経済の4講座制が確立する。前期2年の実習は変化がないが、後期の講義演習に関してはこれまで語学と文学、後に語学、文学、政治経済の2ないし3講座で進められてきたものが整備される。次は昭和41年度学生便覧に見る3、4年生の講義演習の枠組みである。

語学	中国語文法論	伊地智教授	中国語音韻史	辻本教授
文学	中国文学史	相浦助教授		
文化	中国近代史	彭 客員	「十批判書」	辻本教授
政治経済	中国貿易概論	住田教授	中国経済史	芝池教授

これにそれぞれ相応する講読実習がつけ加えられる。学生はそれぞれの専攻に従って卒業論文を書いた。現在も基本的にこの枠組みを踏襲している。

昭和44年から大学院修士課程が設置され、東アジア語学専攻のなかに中国語学が設けられた。平成2年まですでに20回にわたって44名の修了者をだした。最近の顕著な傾向は中国人留学生の増加である。いずれも対照言語学や比較文学を研究している。

中国の開放政策が進むに従って、中国の大学との学術交流が進展した。昭和55年、金毓本退職後は中国教育部(後に国家教育委員会)の支援を得て、北京語言学院より客員教授を招くことになった。それぞれ任期2年ですでに孫鈞政、李景蕙、高増良、盧曉逸、趙金銘

が赴任し、現在張亜軍先生が在任中である。また昭和62年以降中国の次の各大学と学術交流協定を結び、教育研究上の相互交流を深めている。北京語言学院、北京外国語学院、復旦大学、上海外国語学院、大連外国語学院、厦門大学。

ふり返って、専門学校時代の「中国語」には日本の中国侵略の影がつねに、どこかにつきまとった。そしてそれと同じように、大学の「中国語」には新中国の政治、いやその中国の政治をめぐる日本の政治情勢が抜きがたく影響した。それは直接現代を学問の対象とする難しさであるが、研究室で、また学生が日頃とりあげる問題は生々しく人々の「今」とかかわっていた。中国語を学ぶことは中国革命の進んだ経験を学ぶことであると素直に信じた学生は少なくない。昭和35年の文化クラブ案内を見ると中国革命研究会がある。後の文革期にはもちろん毛沢東思想研究会があった。その後には開放政策の時代が続く。政治を離れられないのは我々の宿命のごとくであった。しかしただ言えるのは、学生はいつの時代にも中国に対して純情であり、ひたむきであった。彼らは鏡に映すがごとく、そのままにその時代の中国を映している。それはせつないばかりに忠実であった。昭和40年代は多難な、悲しい時代であった。中国をめぐる日本の左翼陣営の対立は、共に中国を学ぶ仲間が対立し、互いに傷つかねばならぬ事態をまねいたからである。学生だけに限った話ではないのだが、現代を扱うとはなんと過酷なことか。これが平穩になるのはここ10年であらうか。

やがて大学は箕面に移り、共通一次入試の時代に入る。女子学生が激増する。昭和59年に女子学生が6割を超え、やがて7割を超えるまでになる。

最近の学生の動向を見るに、卒業後の進路も、また中国語との「つきあい方」も随分多様化してきたように思う。学生は必ずしも「職業」のために中国語を学ぶというばかりではなく、知的に豊かな生活を送る一つの手段として中国語を学んでいるようである。それに伴ない教室の雰囲気も変化した。その背景には、学生が外大に求めるもの、ひいては社会が外大に求めるものの変化を見てとることができる。

外大70年の歴史は専門学校30年、大学40年である。大学になってからの終わりの10年は変換を求められながらその道を模索してきた10年である。この10年の検討から新しい学科づくりをしなければならないところにきている。それは「中国語」のみならず、「外国語」をめぐる世の変転に「大学」がどう対応すべきかという大きな問題につながっている。

最後に現職者について記しておきたい。

大河内康憲 昭和7年生、昭和33年大阪市立大学大学院修士修了。昭和40年講師採用、53年教授。中国語学担当。

是永駿 昭和18年生、昭和46年大阪外国語大学大学院修士修了。昭和55年助教授採用、64年教授。中国文学担当。

西村成雄 昭和19年生、昭和44年東京都立大学大学院修士修了。昭和44年助手採用、62年教授。中国文化担当。

- 佐々木猛 昭和23年生、昭和52年大阪外国語大学大学院修士修了。平成2年助教授採用。中国語学担当。
- 杉村博文 昭和26年生、昭和51年大阪外国語大学大学院修士修了。昭和51年助手採用、59年助教授。中国語学担当。
- 青野繁治 昭和29年生、昭和57年大阪外国語大学大学院修士修了。昭和63年助教授採用。中国文学担当。
- 田中仁 昭和29年生、昭和59年広島大学大学院博士課程単位修得。昭和59年講師採用、63年助教授。中国文化担当。
- 上神忠彦 昭和16年生、昭和40年大阪外国語大学専攻科修了。昭和43年講師採用。中国語学担当。
- 古川裕 昭和34年生、昭和61年東京大学大学院修士修了。昭和63年助手採用、平成2年講師。中国語学担当。
- 深尾葉子 昭和38年生、昭和62年大阪市立大学大学院修士修了。昭和62年助手採用、平成3年講師。中国政治経済担当。
- 宿玉堂 1936年生、哈爾濱市出身、1961年遼寧大学中国語言文学系卒業。昭和57年客員教授採用。
- 張亜軍 北京語言学院派遣客員教授。平成2年赴任。

なおこのうち西村教授、佐々木助教授、青野助教授、田中助教授、上神講師は現在二部所属である。

引用文を含め「支那」は固有の名称の一部として使われている場合を除き、できる限り「中国」に改めた。引用文では一部、仮名遣いを改めたものがある。

追記 本稿は中国語学科・住田照夫、伊地智善継兩名誉教授ならびに大河内康憲教授より資料提供を受け、編集委員会の責任で作成した。

## 中国語学科と私

### (1)

日本における中国語の研究教育の歴史は長い。近世に蘭学という西洋学が日本に生れるまで、古代、中世、近世のすべての時代を通して中国についての学問は日本の学問の淵源であった。それはいわば西洋における神学に似たような地位にあった。そういう特異な状況は、当然に日本における中国語の研究教育に大きな特徴を与えた。きわめて大胆に言うなら、近代以前の中国語の学習や教育は、1)中国語は外国語であるという意識が希薄で、「聞き、話し、読み、書く」という外国語学習の正当な態度が成立しにくかった。2)中国語は他の外国語と違って親しみやすく、そのために中国語学習は容易であるという安易な

考えを植付けた。3)さらに、中国文化の精華は古典にあって、現代語の学習は価値が小さく、貿易取引や中国進出のための実用語学の価値が認められても、それは西欧の文化を吸収するための西洋語学の比ではない、といったものであった。こういった考えは戦後も続いたのみならず、今も人々の意識のどこかに残存しているかもしれない。

近代日本の中国語の研究の歴史は、明治維新から第2次大戦の敗戦までの80年間である。明治4年、日清修好条約が締結されたが、その年外務省は漢語学所(中国語を教えるが最初の頃は南京方言)、洋語学所(ロシア語とドイツ語を教える)を設立した。明治6年にはこの二つは文部省に移管され、外国語所と改称され、また同じ年開成学校(東京大学予備門の前身)の語学部(英語とフランス語を教える)を開成学校より分離し、外国語所と合併させて東京外国語学校を設立した。当時、日本各地に外国語学校と称する学校が作られ、高等教育機関の予備課程を受け持ち、後に旧制高等学校へと発展した。東京外国語学校は修業年限4年であり、これを上等、下等の2年ずつに分け、高等教育機関に入るものは下等2年を学習すればよく、社会の実務につくものは上下4年を学習する必要があった。ここで教育された外国語は英、ドイツ、フランス、ロシア、中国で、ややおくれて朝鮮語が加わった。しかし、この東京外国語学校は明治18年に廃止され、その際西洋語の学生は東京大学予備門に移され、中国語、ロシア語、朝鮮語の学生は東京商業学校に移された。当時、支那語科の学生であった宮島大八とロシア語科の学生であった二葉亭四迷は一つ橋の前だれ連中と一緒にになれるかといって退学したと伝えられる。東京大学予備門は後に第一高等学校となり、明治末年までに第八までの旧制高等学校が設立されたが、中国語を課すところはなかった。明治10年開成学校は東京大学となり、その文学部に和漢学科が設けられ、中国文学、中国哲学、中国史などが教授されたが、中国語を課すことはなかった。

明治19年、東京大学は東京帝国大学と改称され、明治30年から明治末年までに各地に帝国大学が設置されたが、中国語に関するかぎり事態はどこも同じであった。明治20年、東京商業学校は高等商業学校となった。ここでは中国語が第二外国語として教えられた。明治32年には高等商業学校付属外国語学校を東京外国語学校として独立させたが、この新東京外国語学校では英、ドイツ、フランス、ロシア、スペイン、中国、朝鮮、イタリアの8カ国語が教えられた。明治35年、高等商業学校は東京高等商業学校と改称され、これと同時に神戸高等商業学校、続いて山口、長崎などに高等商業学校が設置された。これらの学校では英語が必須として課せられたが、中国語もドイツ語、フランス語などと共に選択外国語として教えられた。

大正になると、6年制小学校、5年制中学校、3年制高等学校および専門学校、3年制大学といった近代的学校制度が整備され、かつ普及したが、とりわけ大正10年には日本政府は高等教育機関の飛躍的拡大を実行に移し、高等学校10校、高等商業学校7校、高等農林学校4校、薬学専門学校1校、外国語学校1校を新設した。そしてこの新設の外国語学校こそ、わが大阪外国語大学の前身大阪外国語学校であった。

このように高等商業学校と外国語学校における中国語は明治大正期における日本の中国語教育を支えてきたものであったが、これは日本の中国進出と貿易取引の拡大につれて大きくなってきたものであった。昭和になるとやがて日中戦争、太平洋戦争が始まり、「日満支一体化」というスローガンが唱えられ、貿易取引のための中国語は次第に戦争のための中国語の色を濃くしていった。

## (2)

一般にアジアの言語が先進国の人々に教えられる場合、最初は宣教師や外交官が布教や外交の目的で編んだテキストが用いられ、次いで現地の初等中等教育の国語教科書が用いられ、そして最後の段階で言語学的分析にもとづくテキストが開発されるものである。

明治4年、中国語教育が始められたとき、先生は長崎の唐通事出身者であり、テキストはかれらの家に伝えられた『漢語跬歩』であった。しかし明治9年、南京語学習から北京語学習に教育方針が変わったためこれらのテキストは不適當になった。たまたま当時北京駐在の英国公使トーマス・ウエードの『語言自邇集』(1867年刊)が日本にもたらされた。当初はこの本の筆写本をテキストとして利用していたが、後にこの本を基礎として改編したテキストが出版された。はじめは広部精の『亜細亞言語集支那官話部』(明治12年)、呉啓太・鄭永邦(唐通事出身)の『官話指南』(明治15年)であり、後に広く使われた宮島大八の『官話急就篇』(明治37年)であるが、これらは類書中の白眉であった。私も外国語学校1年のときこの『急就篇』によって吉野先生から中国語の手ほどきを受けた。これらのテキストは、類書も含め、『語言自邇集』のデザインを踏襲したものであった。意味的分類を施した単語のコレクション、相互に関連をもたない単文のコレクション、一定の話題による問答のコレクションという編成である。朗読と暗誦によって語句を記憶し、次第に社交会話に熟達するようにデザインされている。

昭和に入ると、これらのほかに読本的教科書が生れる。1920年から30年頃までの中国の小学国語教科書より抜粋された文章を中心に童話、民話、現代文学作品などが加えられ、発音練習教材や簡単な文法分析が添えられていた。これらは明治期の会話テキストのように練られたものではなく、一応近代的語学教科書の体裁を整えていたが、これによって文法翻訳法による教育を試みてうまくいくはずはなく、結局従来の朗読と暗誦によって訓練するしか仕方がなかった。

## (3)

大阪外国語学校が大正10年に設立されると、支那語部主幹(中国語学科主任)として井上翠先生が山口高商より移ってこられた。その下に吉野美弥雄先生、山本磯治先生(古典担

当)、関恩福先生が赴任され、語部の陣容が整えられた。

井上先生の経歴については『松濤自述』(大阪外国語学校中国研究会、昭和25年刊)に詳しいが、明治35年28歳で東京府立一中教諭として、習字、漢文を教えられた。当時の国漢主任は後に文学博士として有名になられた福井久蔵氏であり、漢文教員には錚錚たるメンバーがいた。先生が教えられた生徒には谷崎潤一郎、辰野隆、また別の学年には土岐善麿、黒田鵬心らがいたという。当時は北清事変の後で中国は変法自強の策を樹て、範を日本に取るべく視察団が訪れたが、教育視察団は必ず東京一中を参観した。そのなかには呉汝綸(桐城派散文家、同治の進士、後京師大学堂総教習、洋学派の名士)がいた。先生はもと英独など各国語に通曉し比較文法をやろうと考えていたが、この日華親善の風潮に影響され中国語に転向された。まず東京外国語学校別科に学び、明治37年に修了、明治39年宏文学院(留学生予備教育学校、院長嘉納治五郎)で中国留学生を教えられ、翌年北京の京師法政学堂教習として中国に渡られた。

以上、主として近代学校教育としての中国語教育について述べてきたが、明治時代の中国語教育は同時にまた民間教育としても実施された。時には民間教育としての方が質としては優れていた。民間の中国語教育を受けた人の中には、西欧の植民地主義に対抗して、日本と清国が和親しようという人々、西欧の東漸を憂いつつも、西欧資本主義の仲間に加わり、中国市場に参入しようとする人々、富国強兵の近代国家を作ろうとした官僚体制を喜ばず、儒教を基盤として道徳と知識の発達した国家を建設しようという人々があつたが、これらのうち井上先生の立場はどちらかといえば一番最後の人々に近かったように思う。当時、日本人が中国語学習に用いた辞典は多くは西洋人の著した中英辞典であり、わけてもHerbert A. GilesのChinese English Dictionaryであつた。当時120円もしたという。大阪外語が設置され授業が始まった時、この辞典が国費で購入され、教室の中に備えつけられ、教員学生が共同で使用した。そういうわけで、井上先生が北京に渡られた目的のひとつは、日中辞典や中日辞典の編纂であり、北京滞在中まず日華辞典の編纂に着手し、続いて支那語辞典の編纂に移り、昭和10年『ポケット支那語辞典』、同12年『ポケット日華辞典』等を文求堂より出版され、日本の中国語学習者のほとんどがこれを使用したといつても過言ではない。

私個人の学習経験を申し述べると、吉野先生より主として『急就篇』、宮越健太郎著『支那語教科書』を習い、関恩福先生より『華語初階』という会話書を習った。吉野先生の授業には必ず「背念」(暗誦)があり、関先生は毎回「黙写」(書き取り)があり、常に朱の入った答案を返していただいた。わたしの入った昭和11年に井上先生は退官され、後任として金子二郎先生が外務省(当時新京総領事館在勤)から教授として赴任された。千日前の北極星というレストランで行われた歓送迎会の状況は今も脳裏に鮮明である。井上先生については中学の恩師久保田早苗先生(漢文担当)が井上先生の子息を受け持たれたこともあつて、外語には井上という大先生がいると常々おっしゃっていたのを覚えている。ぴんと伸

びた背筋、威厳に満ちた浅黒い顔、炯炯たる眼光、今なお忘れることができない。金子先生には2年になってから『狂人日記』『阿Q正伝』『周作人小品文』などを習った。現代文学作品を中国語の教材に使ったのは恐らく初めてではなかろうか、と先生からお聞きしたことがある。『急就篇』『官話談論新編』『今古奇観』などにやや物足りない思いをしていたわれわれには、魯迅や周作人に目を見張る思いであった。これらの現代中国の文学作品を十分理解できたわけではないが、自分たちの持っていた思想的関心と共通する何かがあった。『急就篇』で得た語学力は今から思えば低いものであったが、発音、語彙、文法の基礎が養われた。金子先生は文学作品だけでなく、支那事情も講義され、われわれはこの講義を通じて現代中国が日本のみならず、欧米でもより深く研究されているのだということを理解した。

#### (4)

中国語に「異軍突起」(別の部隊が突然立ち上がる)という言葉があるが、中国語研究の「新しい波」はやはり徐々に芽生えつつあった。東京の魚返善雄氏、京都の倉石武四郎博士がその旗手であった。金子先生が、商社を退職して中国から帰国しぶらぶらしていた私を帯同して、京都の倉石先生のお宅を訪問されたのは昭和15年の暮れであった。金子先生は倉石先生と度々あって日本の中国および中国語研究について論じあわれていたようである。その結果とってよいのだろう。昭和16年10月大阪外国語学校に付設の研究機関として大陸語学研究所が設置された。所長は規定上大阪外国語学校長であったが、金子先生が全責任を持って運営に当たられた。研究所経費の多くは神林棟一氏(東洋印刷社長)の寄付によるものであった。開設から閉鎖まで4年間、所員として研究にたずさわったのは住田照夫、小田信秀、伊地智善継、富田竹二郎、高田久彦などであり、このほかに一時期、大原信一、武田浩二、手島伸和、陳徳仁が参加した。これと前後して印度語部の澤英三教授、山本健太郎教授を中心として西南亜細亜語研究所が設置され、伴康哉、陳舜臣が助手として研究に当たっていた。

日中戦争はその頃すでに泥沼状態を呈していた。われわれは五四運動以来の中国の歩みを肯定しつつ、一方では日中間の相互理解の欠如が戦争の原因であるというあいまいな観念論で自己弁護していた。そして、戦争の泥沼化が深まれば深まるほど学問に浸りたくなくなるという奇妙な心理状態にあった。当時大阪外国語学校に出講されていた高畑彦次郎博士のもとでカールグレンの『中国音韻学研究』(趙元任訳)を読んだ。また少し後になるが、石浜純太郎先生のもとで大阪言語学会のメンバーの方々、特に川崎直一先生らとともにイエスペルセンの『The Philosophy of Grammar』を読み、大変に啓発された。このようにして、言語構造の基本原則に立脚して中国語を分析しなければならないことを痛感した。

昭和14年以来大阪外国語学校支那研究会は『支那及支那語』という雑誌を出していたが、

大陸語学研究所発足以後はその編集を研究所が受持つことになった。この雑誌は語学雑誌というものの現代中国の政治、社会に関する紹介や評論、現代文学作品の翻訳、紹介を行っていたが、次第に言語の科学的研究に傾斜していくことになった。

また、単行本としては『黎氏支那語文法』の完訳を昭和17年に出版した(1985年、第1回国際漢語教学討論会が北京で開かれた際、故黎教授の愛嬢の黎沢裕女史にこの訳本を寄贈した)。富田竹二郎君は当時ミュリーの『The Structural Principles of the Chinese Language』(1932年刊、フランドル語原本の英訳本)をきわめて丹念な注釈を付して完訳したが、ちょうど校正中に空襲に会い、宝文館の印刷所で校正刷り、訳稿のすべてを焼失した。倉石・伊地智訳の『黎氏比較文法』は戦後の混乱期にがり版印刷によって前後2巻に分けて出版しようと試みた。前巻は出たが後巻はついに日の目を見なかった。

ともあれ、われわれの「新しい波」は昭和16年から18年にかけてのわずか2年半であったが、日本全土が爆撃にさらされる以前、国立学校という一種の聖域の中で、戦争の被害を直接被らず、腹はいささかひもじくはあったが餓死するほどのこともなく、旧図書館の一部にあった教員閲覧室で、毎日本を読んだり、原稿を書いたりすることができた結果である。それは今にして思えば一種の奇跡であった。この「新しい波」については倉石武四郎著『中国語50年』(岩波新書)、安藤彦太郎著『中国語と日本近代』(岩波新書)でふれられている。

## (5)

昭和20年3月13日、大阪大空襲によって校舎は焼失し、われわれの根城は槿花一朝の夢に終わった。昭和21年、校舎は高槻市の工兵第4連隊跡に移転して授業を再開した。金子先生は教務課長として、住田先生は翌年設けられた復興委員会の委員長として、また戦後名古屋高商から移ってこられた小林武三先生は学生課委員として母校再建に尽力された。中国語学科の諸先生の働きぶりはまさに獅子奮迅のそれであったといっても過言ではない。金子先生の仕事は移転事業、教員人事、教務課程のすべてであり、住田先生の仕事は予算不足を補うための募金、また机、椅子、黒板などの備品の整備であった。小林先生は校舎内の旧将校集会所に住み込み、生活協同組合を作って学内に食堂を作り、高槻市の食糧営団支部に出かけて米穀配給の交渉に当たられた。

中国関係の出版社はおおむね東京にあったが、これも空襲によって壊滅した。中国語のテキストを入手できなくなったことは困ったことであったが、これはまたわれわれにテキストを編纂する機会を与えてくれるものであった。もちろんわれわれの理想とするテキストを新しく作ることは一朝一夕に行くものではなかったが。私は昭和18年『華語集編』という雑誌に「支那の国語運動と日本の支那語」という一文を寄せたことがある。今その雑誌は手元にないが、中国の国語運動の中には中国語の音声、音韻、語彙、語法、語史の研

究から教科書の編纂方法まで含まれていて、それは見方によれば宝の山であるにもかかわらず、日本の中国語の教員がこれを利用しないことを論じたものであった。住田、小林両先生の共同の仕事として『説話教本』(上下2冊)が出たのは昭和25年頃である。このテキストは黎錦熙、白滌洲著『復興説話教本』(全体8冊)を底本として改編したものであった。『復興説話教本』は(1)「日常用語」、(2)「看図講述」、(3)「有組織的演進語料」、(4)「会話」、(5)「故事」、(6)「注音符号」、(7)「演説」という7種の体裁からなっている。(3)はグアン式教授法の「series」にあたるが、これに命令訓練、問答訓練を加えてグアン式の単調さを補っている。小林先生が学生と共同して大きな掛け図を作り、(2)「看図講述」の訓練をされていた情景がいまだに脳裏に鮮明である。このテキストは住田先生の友人であったミチヤ商店のご主人の好意によって出来たものであるが、これと前後して、何十種ものテキストをお願いして出した。一時は全国の大学から注文を受けた。おかげでほとんど売れない専門の論文集も出すことができた。高名凱、趙元任、張世祿、林語堂などのすぐれた論文を集めた『中国語言学論文集』もそのひとつである。私は長らくこれを演習のテキストに用い、今諸大学で中国語を教えている諸君も最初はこのテキストによって学んだのである。

そのころ私はしばしばアメリカ文化センターに通ったが、ある日倉石先生からアメリカにおける中国語教育と中国の地域学的研究の現状をできるだけ具体的に調べるように言われた。どの大学で何時間中国語を教えているか、何パーセントが大学院に進み、学位論文のテーマはどのような傾向にあるかといったことである。約200枚の原稿にしてお渡ししたが、これは当時の東大の教養部の構想と関係があったらしい。すでに東大教授を兼ねておられた先生はこれを持ってすぐ上京された。私はこれをもとに昭和25年「アメリカの中国語学」を『中国語雑誌』に4カ月にわたって連載した。後にフルブライト交換教授としてカンザス大学に行った時、先生方の教えに従って出来るだけ多くの大学を訪ねることにした。

私が地域学関係の論文で最初に読めと教えられたのは、ライシャワー、フェアバンク両教授の「地域学における極東の理解」であった。そのなかで彼等は「中国が徐々に方法論の中に導入されつつある一方、方法論が中国に導入されて行くやり方」を結論部で述べていたのを今も覚えている。彼等は中国学というものが言語学や社会科学を導入することによって新しく発展する必要のあることは言うまでもないが、教育の方法としては最初から専門を分化させることが危険であることを強調していた。一つにはアメリカ人が親しみのない言語の学習に莫大な時間と精力をつぎこまねばならないこと、二つには、自己の属する文明では既に常識となっている評価の方式や基本原理が、伝統や文化を異にする世界では先ず専門化に先立って獲得されねばならないという主張である。これが彼等の出発点であった。アメリカの大学を見て先ず驚いたのは、地域言語の教育のきびしさとその能率の高さであった。エール大学極東語研究所の授業風景は誠に猛烈であった。大クラスにおけるアメリカ人教授の理解授業、小クラスにおける中国人担当のドリル授業、学生には毎週

アクチュアルプランという時間割が渡されており、例えば、月曜日1時限第10課理解授業、2時限第10課ドリル授業(練習問題1—3)のように書かれている。しかも練習問題2はLL使用規定第30条によるといった注記があって、「それはまるでボーイングの飛行機を飛ばす時のマニュアルと同じだ」と教員は笑っていた。多くの大学で地域学課程を選ぶ場合それと並行して集中的言語課程を受けその単位を獲得しなければならない(同じ中国語の授業に集中的課程と非集中的課程とが並行して実施されている)。ハーバード大学の地域学課程は大学院にのみ置かれている。これは本格的な地域学研究に入るには地域言語の訓練が大変困難なものと考えられたからであろう。しかし学部でこれが置かれている大学が存在するのも事実である。この地域言語教育のきびしさはパリの東洋語学校、ロンドン大学のアジア・アフリカ学院でもほぼ同じであった。

## (6)

昭和41年、学科および学科目が拡充改組されて、中国語学科では中国語学、中国文学、中国文化、中国政治経済の4学科目制度になった。これは意識的にせよ無意識的にせよ、地域学課程を目指したものであった。このことは学問の進化からして当然のことであり、学生に方法論的自覚を与えるに有益であった。

中国語学の講義・演習は辻本先生と私、中国文学は金子先生と相浦杲君、中国文化は彭沢周先生、中国経済は芝池靖夫先生が担当した。小林先生と緒方一男君は新設の短期大学部そしてさらに第二部に移り、小林先生は第二部主事として、夜間学生に献身的な努力を傾けられることになった。

中国語学実習は『説話教本』の時代から『中国語入門』の時代になった。ハーバードに趙元任の『Mandarin Primer』、エールにジョン・ド・フランスの『Beginning Chinese』、ルーベンにミュリーの『The Structural Principles of the Chinese Language』があったように、この『中国語入門』(金子二郎編となっているが実際には金毓本先生を中心に何人かの教員が共同して作った)を発展させたいものと考えていた。

このような教育体制は比較的長く続いたが問題がなかったわけではない。第一に、ハーバードの地域学演習などはある回数講義を受けると各種の専門家と一緒に討論することによって学生にひとつの「統合」が与えられるよう仕組まれているが、われわれの講義・演習は有機的結合をもたずに運営され、また3年生であまりにも早い専門化が行われた。学生は語学、文学、文化、経済の方法論的知識を十分に持たなかったから、それを中国に導入することができず、また中国的な文化の全容を知らなかったから中国が方法論のなかに導入されることもなかった。われわれは語学と文学とか文化と経済など複数の講義・演習に参加させることによってこの欠点を克服しようとしたが、学生のなかにはそれはアカデミックな大学教育ではなく、専門学校的教育であると主張するものがいた。また第二に、語

学力の不十分な学生がかなりいて、演習がうまく進行しなかったことである。彼等は結局手軽なパンフレットや古い本を引用するしか仕方がなかった。語学のゼミに参加した学生が比較的少数であったのは利用すべき翻訳資料が少なかったからかもしれない。

しかし、にもかかわらず、われわれの学科から多くの人材が生れた。中国に関するそれぞれの分野の研究業績によって大学教員をしているものが多数いる。恐らく彼等は地域知識を研究する過程で語学力をみがかねばならないことを知り、聞き、話す能力とは別に、直接資料を読解する能力に関してはかなり高い水準に達したものであろう。「地域知識は将来の勉強によって何とかなるが、語学力はそうはいかない。先生のところの卒業生は語学力だけはまあ安心できる」とはしばしば聞かされた言葉である。実社会に進んで活躍するものも多い。北京の同窓会に出席すると如実にそれを感じることができる。かつて元大阪市立大学長森川晃郷先生、元大阪大学長若槻哲雄先生と大阪外国語大学北京同窓会に招かれ出席したが、両先生は100名にも上る中国語学科の卒業生の盛況を前にして感嘆して止まない様子であった。

支那研究会、大陸語学研究所が引き起こした「新しい波」はわれわれの戦後の発展の原動力になった。それは疑いを入れない。もし必要ならもう一度このような学内学会を作って学生と卒業生が顔を合わせてはどうだろう。「外国語教育の成否は、外国語課外活動の如何にかかっている」のである。

(伊地智 善継)

## 2. 朝鮮語学科

大阪外国語大学に朝鮮語学科が設置されたのは、1963年4月1日である。1927年に東京外国語学校の朝鮮語部が廃止になって、奇しくも36年、国公立大学では初めてのことであった。

1961年の夏、釜ヶ崎で騒動があり、あつい夏であった。筆者は、京都の加茂川のほとり川端丸太町上ル教育会館内「日朝協会」で、木元賢輔事務局長(後の日本・朝鮮研究所事務局長)と「仕事」をしていた。木元さんが、ふと思い出したように、「今度、大阪外大に朝鮮語学科ができるそうや。ところで教師がない。朝鮮語なんかやるやつ、いてへんからなあ。金子二郎教授がさがしている。あんた応募したらどうや」。早速、外大へ、それから自宅に電話した。「履歴書をもって、すぐ来い」ということであった。京都市東山区の、京都女子大のテニス・コートを見おろす、和風の潇洒なお宅で面接を受けた。金子中国語学科主任が朝鮮語学科をつくろうとされたのは、「外大に中国・モンゴルとあるが朝鮮半島がとんでいる」と明快であった。その十年前から、先生は朝鮮語学科創設に力を入れてこられ

たそうだ。最初、「寄附学科」を考えられたようである。そういえば、外大そのものが「寄附大学」である。当時、大阪府にあった在日韓国人が経営するS紡績に話をもちかけ、文部省の内諾も得たが、「朝鮮」を「韓国」にかえるべきだとのS氏の強い要望があり、最終段階でこわれふり出しにもどった。文部省が、やっと重い腰をあげたのが、1961年春ごろのことである。「教官を求めて、東京・京都・大阪をさがしたが、人がいない。朝鮮語を話せるのはいたが、入国管理局やI署の刑事だった。朝鮮研究が、こんな現状とは……」となげかれた。1、2ヶ月たって、呼びだしがあった。「数人の朝鮮人に君の朝鮮語、その他について聞いた。泉井久之助先生の推薦があった。君を推す」ということであった。1962年4月からの学科新設があるので、途中ではあるが10月から一コマ研究外国語として朝鮮語を開講するので担当するように、ということであった。ところが、しばらくすると、中止するとの連絡があった。また、しばらくすると、やはり、10月から始める、ということである。金子先生と森沢学長の意見の相違ということを後に泉井先生から聞いた。ともあれ、10月から一コマ、火5限、玄関入って左側、前庭に面した教室ではじまった。学生は30名ぐらいだったと思う。最初の授業を終えたとき、胸をつき刺す感動があった。踊るように四天王寺の五重の塔まで走った。1958年秋、木元さんと河原町丸太町下ルのD書店の店先で、朝鮮語市民講座(無料)をはじめたが、外大で朝鮮語を教えるとは……夢想もしなかった。

学生にまじって言語学の川崎直一教授が聴講しておられた。川崎先生によると、昭和10年代に、外語に朝鮮語と満州語を担当している方がおられた。朝鮮語はそれ以来のことである、ということであった。満州語は69年、江実講師が講義された。

1961年秋、文部省は62年4月からの朝鮮語学科の設置を決めた。61年末、大蔵省の予算案は、これをカットした。

1962年12月30日、京都放送深夜12時のニュースは、「文部省は、来年度より大阪外国語大学に朝鮮語学科を設置することに決定……」と告げた。京大構内で芝生にすわり、午前3時までひとりトリスを飲む。

同じころ朝鮮民主主義人民共和国のピョンヤン放送(日本向け)は「日本政府は、国立大学に朝鮮語学科を設置するなど日韓会談ムードをあおり……」と論評した。

1963年にはいって、森沢学長、金子先生、金思燁先生、筆者の4人が、上六の「百楽」で祝杯をあげ、朝鮮語学科の未来について語った。森沢、金子両先生の外語創立期の話は、興味深いものであった。森沢学長は「塚本さんは、教祖みたいだネ」、金子先生は「塚本君は、酒に強くなると外大の教師になれない」といわれた。強くなったが、内臓をいためた。上六に「弁天」「赤ふんどし」あり。学生愛用の喫茶店は「MJB」「田園」「パリ」「ローマ」「ロンドン」。

金思燁先生は、天理大学におられたのを、客員教授としてお呼びしたもので、初年度から、ということで、これも金子先生が文部省との交渉に努力された。金先生が外大にかわられるということで、高橋享天理大学教授(元京城帝大朝鮮文学教授)と「摩擦」があった。

筆者も高橋先生からお話をうかがったことが、再度ある。どういうわけか、すべて朝鮮語で会話が行われた。高齢のためか、朝鮮人と思っておられたのか。

1963年3月。天理市守目堂の天理大学の宿舎におられた金先生宅で教科書づくりを行った。同じ階におられた菱山忍天理大助教授(大阪外語露語部卒、京大講師、後に京都産業大学外国語部長)宅に、十日間とめていただき、金先生宅に通った。先生はタイプライターをたたかれた。これがハングル・キョージェである。

1963年4月1日。朝鮮語学科開設。教授陣は、金子二郎主任教授(中国語学科と兼任)、金客員教授、岡崎非常勤講師と専任講師になった筆者である。(以下は別表に記す)第一期定員15名に十数倍が応募した。合格者は7名。うち5名が入学した。来ない2人に手紙を書こうとしたが、金子先生に止められた。

64年度に9名、65年度、11名、66年度には15名入学、定員に達した。

研究室は玄関を入り右に曲って右側、その北側が教室で、烈士之碑の前であった。しばらくして、研究室は、新館四階の中国語の隣へ、教室はA8となった。これは箕面に移転するまで変わらなかった。

A8は、夏はむし暑く、冬は冷たい(石油ストーブがはいっていたが)、あまりいい教室とはいえなかった。横に細長く、教師も学生もやりづらかった、と思う。窓の外に小さな庭らしきものがあり、緑が少しあって、ほっとした感じがするのであった。その向うの公園で大相撲の土俵がおかれたりすることもあった。教室の手前には、中庭があり、ひと息いれるのによかった。外大全体がせまくるしく、古びていたが、正面玄関のあたりに桜があり、春は風情があった。烈士之碑を柔道場の方にまがると、「堀川」という小さなサンパツ屋があった。いつ、なくなったのであろうか。

当時は二期校であり、そのことは、朝鮮語学科は勿論、外大の性格に大きく影響を与えていた、と思う。また日本人全体が、朝鮮半島に対する認識が弱く浅かったことで、そのことも、初期の朝鮮語学科に有形無形の作用をもたらした。

金先生と筆者のコンビで朝鮮語を担当するのであったが、若く浅学の筆者には、骨のおれることであった。金先生は、韓国生れ、韓国育ちで、中学校から京城帝大まで、日本語で教育を受けられた、韓国の文学博士である。筆者も大学院のおわり頃、1年半ほど、古典を習った。外大では、週十時間、集中的に授業を行う。教師の方もむつかしく、その上、もうひとりの先生がネイティブの文学博士では、たいへんである。筆者は、在日朝鮮人にもまれて、辞書も参考書もない「独学」である。やさしい(?)といわれる朝鮮語を、遠まわりして、むつかしく学んできた。教室ですぐボロをだし、顔をあかくしたことが、どれほどあったらうか。なんとか教えられるようになったのは、5、6年のちのことであろう。しかもそのころは、『朝鮮語大辞典』で忙殺される時期であった。このころをふりかえって、「どうしようもない」思いがする。学生諸君に申しわけないというのか、これがチョウセンやだといえればいいのか。

1963年に『朝鮮語大辞典』にとりかかった。これは金先生の意見に筆者が賛成してはじめてのだと思う。一期生は『東亜辞典』をカードにはりつける作業をした。『辞典』については、同書上巻「編者の言葉」に詳しいのでここでははぶくが、67～68年ごろ、外国人と日本人(100名以上)による「反対運動」(悪質な妨害、公的な場はもちろん、深夜の脅迫電話まで)があって筆者は、心臓発作をおこし、死ぬ思いをしたこと、数ヶ月休学したが、阪大で治療をうけ、また再開したこと、学生のべ300名が協力したこと、あの時、負けずに再起してよかったと今思っていることをつけ加えたい。

1963年の秋ごろ、日朝協会大阪府連の堀江壯一事務局長と相談して、A8教室で、「朝鮮語市民講座」をはじめた。なかなか、盛況であり、A8が、あふれることもあった。筆者としては、京都での講座の継続のつもりであった。金子先生は、「朝鮮語科ができることを世間に知らせるためにも、はじめてよい」といわれた。講座は無料であったが、金もうけをするという人たちがいた。無料とわかると「売名だ」といいふらした。その後、学生が講師をひきつぎ、自主運営するようになり、教室はA8からEへ移った。「教室の不正使用」ということで、大学当局と筆者との間に、ながい間、葛藤があった。移転で危機に瀕したが、中之島の中央公会堂をかりることで、大阪外大中之島朝鮮語講座として確立、現在にいたっている。歴代の講師に敬意を表したい。なお、講座の生徒から数名の専門家が生まれている。

1963年頃、英語学科卒業のP氏(朝鮮人)が、「日本と朝鮮のため、朝鮮語学科創設を祝して」約500万円(?)ほど寄付された。森沢学長は、感謝状をおくった。朝鮮語図書を購入。1963年4月ごろNHK国際局「ラジオ日本」(朝鮮向け放送)が、朝鮮語学科の設置を紹介した。取材にきたT氏は、一期生と一緒にになって、学ぶようになる。

1963年12月、外大会議室で「アルタイ言語学会」が開かれた。精松源一教授がモンゴル語について講演され、筆者は、「日本語と朝鮮語の系統」と題して話した。石浜純太郎先生が来席、時々、居ねむりをしておられた。

1964年、朝鮮学会が外大と大阪博物館(大阪城内)で開かれた。「外大に朝鮮語学科ができたから」ということである。朝鮮語関係では、河野六郎東京教育大学教授が、講演をされ、司会者の梶村秀樹氏、宮田節子氏の指名があったので、意見をのべた。末松学習院大学教授、姜徳相現一橋大学教授などと上六で酒をくみかわした。

1964年5月、雑誌『権域』を発行、編集委員、金子・金・塚本。朝鮮奨学会曹基亨関西支部長の協力があつた。「権域」という題名について、寺尾五郎日本・朝鮮研究所専務から批判がある。1992年、院生より『権域』復刊の話あり。

1967年から卒業生(4名)がでたが、初期のころ、就職がむつかしかった。大阪の会社、数十をまわり、就職を依頼した。

1969年度から、集中講義(江・佐々木講師)がはじまった。「外大に前例がない」ということで、なかなか実現しなかったものであるが、大学紛争のムードで開講になった。

1974年に朝鮮語学科に大学院がもうけられた。天理大、大阪府大、大阪市大、東大などから入学者があり、研究・教育・辞典編集において、発展、充実した。院の修了生から、阪大、広島大、一橋大などのドクターコース進学者がでた。

1967年、北嶋助教授が日本語学会で「朝鮮語辞典の編纂」を発表(於関西学院大)。これは日本語学会の要望によるものである。この年、語劇は「王様の耳はロバの耳」。

1977年5月に教師と院生、辞典のスタッフでかたらい「猪飼野朝鮮図書資料室」準備室を奥田一廣院生の下宿においた。10月小阪の大発ビルの一室に移り開設した。卒業生の波佐場氏の口ぞえで、朝日新聞が応援してくれた。筆者は図書6,000冊を提供、図書室(無料)と朝鮮語講座(有料)をはじめた。

1980年鶴橋のカネイチビル(大阪市天王寺区下味原)に移転し現在にいたる。

1988年同所で「いかいの朝鮮・韓国塾」を設立。この年の語劇は「結婚相談所」。

1978年、「朝鮮語電話講座」をはじめめる。好評で回線がきれそうになり、電話局から苦情がでる。東京・横浜でもはじめめる。電話11台。

1979年に共通一次世代になる。語学科の雰囲気もずいぶんかわった。この年の語劇は、「銃」。

1979年から81年ごろ、名古屋・岡山・大阪で「朝鮮語一日講座」、教官、学生、院生のべ40名。

1980年ごろ「朝鮮語と日本文化展」を大阪(森ノ宮)と東京(虎の門)でひらく。教官・院生20名。亀甲船(李朝時代の軍船、秀吉の水軍に打撃を与えた)をつくり、トラックで東京にはこぶ。永井道雄氏(朝日新聞論説委員)講演。秦正流氏(朝日新聞社重役・R12)来場、辞典のゲラをみて、「これは君たちだけでつくったのかね」。院生諸君、夜は新宿街にくだす。

1983年、女子学生が男子より多くなる。

1985年、金元客員教授が大阪府の片山蟠桃賞をうける。

1985年10月、314教室に、「(日本の)法律を守りたくないのなら、(朝鮮人は)日本からでてゆくがよい!!」という落書きがあり、問題となった。

1986年2月、大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典(全3巻)』を刊行、角川書店。日本翻訳文化賞受賞。金石範氏は「朝鮮語学会事件」の罪を償うと書く。

1986年。「新入生いかいの一日旅行」はじめめる。

1987年。差別をめぐる研究・言論の自由弾圧といじめに対して抗議自殺があり、ながく問題を残す。朝鮮語小辞典編纂中止。「猪飼野図書室」休室。この年の語劇は「O・ヘンリの朝鮮語化」。

1988年、語劇は「ディープ・ブルー・ナイト」。

1990年、清瀬義三郎則府ハワイ大学教授が「アルタイ語と女真語」で集中講義。海外からの講師ははじめて。

以上、簡単に記したが、より深いことや核心についてふれられないのは残念である。将来にまちたい。

次に各界で活躍している卒業生達についてくわしく述べたいのだが、残念ながら十分に語るだけの紙面がもう残されていない。職種別にその状況に簡単に触れるにとどめる。そして最後に、これまで朝鮮語学科をになって来た専任教官・非常勤講師を年表の形であげておく。

学科創設当時は就職が大変難しく、苦勞も多かったが、その頃の努力が実って最近では比較的バランスよく各分野に就職出来る様になった。

公務員になっている人々は外務省釜山領事をはじめ7名、マスコミ関係では朝日、毎日、読売各新聞社、NHK等で十数名活躍しており、ソウル特派員も出ている。会社関係では三菱商事、伊藤忠、丸紅を初め多くの商社、シャープや横河電機等のメーカー、三和、大和、第一勧銀、北海道拓殖等の銀行、野村、山一、大和証券、住友生命等の金融機関、これらにそれぞれ20名前後が就職しており、大韓航空、JAL、キャセイ等航空会社、交通公社関係、百貨店、日本アイビーエム、NTT、リクルート等々活動範囲はどんどん広がってきており、いわゆるシステム・エンジニアも数名出ている。他にも、キリスト教会の神父・牧師になっている人、映画関係の仕事をしている人、大阪大学歯学部の学生、中退して作家になっている人、針灸師になった人、鮮魚店を営む人などがある。

しかし圧倒的に多いのは教職についている卒業生である。大学で専任教官、非常勤講師として教壇に立つ人も多く、それに高校、中学等で働く教員を加えるとその数は50名近くになる。高校の朝鮮語教師もでている。これ迄30年間の卒業生数から考えると、その占める比率は随分高い。

専任・非常勤教官年表

年 号	専 任	非 常 勤 講 師
1961		塚本勲
1962		塚本
1963	金子二郎、金思燁、塚本	岡崎精郎
1964	金子、金(思)、塚本	岡崎
1965	住田照夫(主任)、金(思)、塚本	岡崎、野村得治、有光教一
1966	金(思)、塚本	岡崎、野村、佐々木隆爾、高木美寿、山手治文、笹川儀三郎
1967	金(思)、塚本	岡崎、佐々木、高木、山手、笹川、金東勲、井上秀雄
1968	金(思)、塚本	岡崎、佐々木、笹川、金(東)、井上、井口和樹、南方博、小野田求、北嶋静江

年 号	専 任	非 常 勤 講 師
1969	金(思)、塚本、北 嶋	岡崎、佐々木(集中)、金(東)、井上、井口、小野田、 江実(集中)
1970	金(思)、塚本、北 嶋	岡崎、佐々木(集中)、金(東)、井上、井口、小野田、 江(集中)、山口慶四郎
1971	金(思)、塚本、北 嶋、井口	岡崎、佐々木(集中)、金(東)、井上、小野田、江(集 中)
1972	金(思)、塚本、北 嶋、井口	岡崎、金(東)、小野田、江(集中)、小林(集中)、永 島暉臣慎
1973	金(思)、塚本、北 嶋、井口	岡崎、金(東)、小野田、江(集中)、永島、太田、芝 池
1974	金(思)、塚本、北 嶋	岡崎、金(東)、江(集中)、永島、太田、芝池、井 口、玉城繁徳、小野田
1975	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、江(集中)、永島、太田、芝池、井 口、玉城
1976	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、江(集中)、永島、太田、井口、玉 城、浜田敦(集中)、松野
1977	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、江(集中)、永島、玉城、浜田(集中)、 中塚明、李文子
1978	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、永島、江(集中)、玉城、浜田、李、 前田綱紀、田村まり子、小林(集中)
1979	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、永島、玉城、浜田、李、前田、田 村、高(集中)、生越直樹、吉川守
1980	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、永島、玉城、前田、田村、高(集中)、 生越、大西三千緒、奥田一廣、金静子、安田、吉川、 井出至
1981	金(思)、塚本、北 嶋、小野田	岡崎、金(東)、永島、玉城、前田、生越(ま)、生 越(直)、大西、奥田、金(静)、安田、高(集中)、小 西、後藤、吉川、田中
1982	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	岡崎、金(東)、永島、玉城、前田、生越(ま)、生 越(直)、奥田、高(集中)、小西、李、大村、梶井、 井口、吉川、田中
1983	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	岡崎、金(東)、永島、玉城、前田、生越(ま)、奥 田、高(集中)、李、大村、梶井、吉川、左項内
1984	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	岡崎、金(東)、永島、前田、生越、奥田、李、大 村、梶井陟、益田、申(集中)
1985	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	岡崎、永島、前田、奥田、李、梶井、長璋吉、益 田、岸田、高(集中)、野崎

年 号	専 任	非 常 勤 講 師
1986	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	申、金(東)、李、前田、永島、梶井、岸田、野崎、永井、大村、菅野修一、梶村秀樹
1987	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	永島、梶井(集中)、長(集中)、高(集中)、藤戸、永井、張禎淑、金(東)、菅野、梶村、上田正昭
1988	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	永島、長、大村、永井、張、金(東)、菅野、奥田、申(集中)、上田、梶村
1989	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	永島、永井、張、金(東)、菅野、奥田、三枝壽勝(集中)、高(集中)、韓丘庸、清瀬義三郎則府、井上秀雄、梶村、河内
1990	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	永島、永井、張、菅野、奥田、三枝(集中)、大村(集中)、高(集中)、韓、姜徳相(集中)、井上(集中)、原田環(集中)、鄭早苗、清瀬(集中)
1991	塚本、北嶋、金 (静)、小野田	永島、張、菅野、奥田、韓、姜(集中)、井上(集中)、原田(集中)、東潮、鄭、青山秀夫(集中)、岸田、申(集中)、清瀬(集中)

(塚本 勲)

### 3. モンゴル語学科

モンゴル語科の創設は本学開校と踵を共にする。以来24年間、敗戦の日を迎えるまで日本の大陸進攻と共に成長し、一見して華麗な歴史をうたってきた。そして伝統は戦後社会の混乱の中で、新しい指標を持たぬまま一転して暗い数年を歩むことになる。

「心猛くも鬼神ならず人と生れて情はあれど母を見捨てて波越えて行く友よ兄等と何時また会わむ」これは蒙古放浪歌の一部である。誰の作詞、作曲によるものか全く不明であるが、学生は事あるごとにこの歌を高唱し、語部歌や「中公旗の歌」に舞ったという。モンゴルの大地とモンゴル人に青春の夢を馳せ、ただひたすらそれを愛し続けたのである。これらの歌には軍歌に共通する雄壮と感傷の混有は認められるが、日本を豪語する何ものもない。いま、モンゴルの地を旅してこれらの歌を想うとき、そこに詩情すら覚えることがある。「砂漠をいでて砂漠に沈む月の幾夜かわれらの旅路明日も川辺が見えねば何処に水を求めむ蒙古の砂漠」……荒漠たるモンゴルの大地、草原に生きる恵まれぬ人たち、野性に満ちた語科の伝統が若者の夢に通じる路をしっかりと支え通したのである。

「ある日、生駒の山でみんなで裸踊りをしてました。その時、たまたまお詣りにやって来たおばに見つかったのです。家へ帰って大変でした」一卒業後、家業を継いで実業家としてたち、モンゴル語研究者としても著名な本学非常勤講師宇野章(20回)の言葉である。上八学舎内の池での裸、教室での放尿や大書落書きなどこの種の話は枚挙にいとまがない。

精松源一(1回、現名誉教授)も語科と学校との間にたって随分苦勞したようである。「満州・蒙古」の特殊な環境と活動の日々は、大阪外語蒙古語部卒業生の親交と連帯の絆を深めるとともに遠く母校の後輩達を鼓舞した。戦後開かれた何度かの語科同窓会に、常に70名を超える出席者を迎えたことはその事情を物語るものである。

昭和13年、校庭に烈士之碑が建立され、内蒙古政府の徳王が来校した。日中戦争の勃発を機にこの頃政府は若い学徒の雄飛の気概と大陸への夢を巧みにくすぐり、彼等を自ら敷いた国策の路線にのせるべく意を注いだ。15期(昭和11年入学)の前後3年にわたり、政府は蒙古語部生の有志に旅費(90円)を給与して、7・8の2ヶ月「満蒙」旅行をすすめている。9月になっても帰国しない学生もいたという。級友の「卒業後は蒙古へ」の固い盟約は血判状の作成にまで及び、実際当時の卒業生のすべてが特に家庭に事情のある者を除いて蒙古の地に馳せたという(15回、安達一郎談)。中公旗の歌詞の中にもそのあたりの事情がうかがえる。「お前行くかと手を握りゃ熱い涙のホロホロと仇は必ずとってやる心おきなく国のため」。世上の風潮は語学教育にも反映している。敗戦を迎えるまで蒙古語部の学生は専攻のモンゴル語以外に中国語(週5時間)、ロシア語(週2時間)、英語(週3時間)を履修した。しかも昭和10年までは満州語の授業も課せられていた。必修する外国語の洪水の中で、どれ程モンゴル語が研修できたであろうか、極めて疑問といえる。こうした戦争への急激な傾斜は、やがて学徒動員の名のもとに学生を軍需工場へとかりたて、櫛の歯の欠けるように一人、二人と級友が戦場に去って行った。授業はわずかに週1回に過ぎなかった。「学校教練が終って帰校したとき、校門に皇軍玉砕の報が張り出されていたのを見た。あの時のことが今も忘れられない」(22回、秋山吉之助)。この頃は、不安と窮乏の中に一縷の僥倖をつないだ末期的な学生生活であった。

語部の豪気バンカラの気風とは別に、一方学究の場としての素地も徐々に醸成され、モンゴル研究の中心母体としての地歩をかためていった。昭和3年に出版された韓穆精阿、鴛淵一、精松源一共著の蒙和辞典は日本におけるモンゴル語学の夜明けを告げる貴重な労作であり、萩尾長一郎(4回)の蒙日辞典は当時の新語を多く集めた斬新な辞書として評価された。大阪外国語学校満蒙研究会の名で語部誌も刊行されている。本学図書館石浜文庫と岡本俊雄(11回)の寄贈により、その一部が母校に保存されているが何号迄出されたのかさだかでない。50年を経た現在もモンゴル研究の資料として十分示唆に富む内容をそなえている。古川園重利(5回)の訳業『外蒙古独立史』、『動乱の東トルキスタン紀行』も史料として貴重である。戦後、北川四郎(11回)は外交官時代の現地での実務と資料をもとに『ノモンハン』を著述したが史実を忠実に著した公平の書としてモンゴル人民共和国の歴史家の称賛を得た。平成元年、現在モンゴル人民共和国東洋研究所所長、副博士バト・バヤルが研究員として本学に来校した際に、是非会いたい人の名に司馬遼太郎(21回)と北川四郎をあげたことは語科の大きな誇りであった。創価大学教授麻生達男(8回)は在蒙18年の蘊蓄を晩年の集大成に見るべく期待されたが、惜しくも急逝し遂にその著書が世に出ることは

なかった。生前2年間母校で会話を教えたが、その誠実な人柄がなつかしい。「モンゴルから引揚げて来て28年目、ある日突然一念発起し、今一度モンゴル語を一からやり直すことにした」宮地亮一(17回)はその時已に50歳を越えていた。キリル文字によるモンゴル語の新聞・書籍の独習と研究は自営業の傍ら連日深夜に及び、自力で『外蒙古資料集』1～10号を出し、日本・モンゴル協会の理事としてウランバートルに宿願の訪問を果たした翌年、その紀行を本にまとめるや忽然と世を去った。華々しく燃えつきたという思いである。第10回の卒業生徳広弥十郎は戦後日本に引揚げてのち郷里の高校で教鞭をとる傍ら日・蒙・漢辞典の編纂を志した。その努力は延々定年後も続けられ、完成したカード数は10数万枚にも達したが、彼もまた印刷製本化を前に不帰の客となった。しかし滝子未亡人の辞書完成への執念と同窓萩原正三(10回)の熱い友情は遂に萩原自らの全文手書きの書として徳広の遺志を結実させ1989年上巻50部が世に出た。この著述に対して県は彼の功績をたたえて出版文化賞を贈っている。戦後間もなくガリ版刷り袋として出版された萩原正三の『蒙古語文法』とその後に出された『新旧文字対照蒙古語文法』はモンゴル語学習者には好箇の参考書といえよう。パンカラの気風に代表されるかに見える蒙古語科の面貌のかげにアカデミズムの伏流のあったことを忘れてはならない。

司馬遼太郎(21回、本名福田定一)の『街道を行く』(五)は彼のモンゴル紀行を筆にしたものである。この書を読んでモンゴルを訪れる人が多い。如何なる美文を以てしても遠く及ばぬ彼の透徹したモンゴルを見る眼とこの国への深い愛情と理解が人々の心をとらえるのであろう。作家司馬遼太郎については余にも著名であり、あれこれ紹介するまでもないが、モンゴル人民共和国においても「モンゴルを知る、モンゴル語を学んだ作家であり歴史家」として広く知られている事を書き添えておく。このほか戦中・戦後の『朔風』に卒業生多数の論文が寄せられ、工藤広忠(5回)の専門的小論が何度か新聞に掲載されている。

戦前、戦中22年のモンゴル語教育の歴史は精松源一教授と4人のモンゴル人教師によって支えられた。鴛淵一が初代蒙古語教授として赴任したと聞くが精松は一度も授業を受けたことがなかったという。鴛淵はモンゴル語創設のために書類上モンゴル語所属の教授になっていたのであろうか。

モンゴル人教師は韓穆精阿、フールンガ、ウルトン・バートル、スンプルバト、そして戦後4年間ウルジートへと続く。いずれも内蒙古人であり韓穆精阿とフールンガは物故したと聞くが他の三人については杳としてその消息を知る人がない。秋山吉之助(22回)は「岡本俊雄先輩にスンプルバト先生が内モンゴルのシリングルにある蒙文研究所におられると聞いて手紙を出したが遂に返事をいただけなかった。文化大革命の犠牲になられたのでは……」と卒業後50年にもなろうという今も恩師を思う情切なるものがある。

戦後の高槻学舎は旧工兵隊がそのまま校舎として転用され、便所には昔ながらの縄のれんがさがり、教室の壁に張った南京虫よけの目張りが茶色に褪せた何の彩色もみられぬ如何にも兵舎然とした建物で、その中で『元朝秘史』や『アルタン・トブチ』が講じられたの

である。

高槻学舎でのある日、清水栄次郎(25回)は帰路につくべく教室を出た。広い校庭にボンと一人精松がしゃがんで何かしている。已に日暮れ、何をしているのだろう、「先生」の声に精松はそこに清水を認めて言った。「これはねえ君、食べられるんだよ」。その手には摘まれたばかりの野草の束があったという。美しいがしかし、今歩むモンゴル語科の長い暗い燧道を思わず斜陽の一こまである。

戦後は学生たちの多くがアルバイトに明けアルバイトに暮れる生活を繰り返した。貧しい日本の社会では家庭教師を雇う余裕のある家などめったになく、アルバイトは専ら食べるために肉体を酷使する重労働であった。そしてアルバイトに出た翌日は精松の顔色を気にしつつ、そっと席についたものである。まだまだ先生の恐い時代であった。遅刻すると教室の入口に立って入室の許可を待たねばならなかった。学生は貧しく詰襟と靴は下駄と作業服にかわり、教師は国民服に運動靴、その中でタイ国帰りの富田(当時モンゴル語科生に中国語を教えていた)のずば抜けておしゃれな服装が異彩を放った。校門の掲示板に数枚就職案内のはり紙があり、見ると新制中学と銀行だけ。今を思えば何もかも寒々とした光景であった。

こうした無明の4年間を除いて終戦までは「雄々しく起てよ若人よ希望に燃ゆる大阪の外国語学校蒙古部の見よ意気天に冲するを」の語部歌のことばそのままに蒙古語部とモンゴル語は若者の未来に通じ、また智欲への道を開いて来たのである。

吉沢族(15回)が内モンゴルで八路軍に捕われようとした時、モンゴル人が彼を囲んで護ったという。モンゴルの大地に身を投じて働いた蒙古語部の卒業生が軍隊や軍人と異なる点は彼等が無欲にモンゴルとモンゴル人を愛していたことである。岡本俊雄(11回)は彼がかつて交友したモンゴル人を、毎年その知人や家族まで含めて自費で日本に招き、また今もってありし頃のモンゴルとその家族の消息を追い求めている。『一人のプリヤートモンゴル人と日本青年の出会い』(上・下)は彼の熱い思いをこめた著作である。蒙古語部は多くの卒業生を満蒙の地で失ったが、若くして散華したそれらの人々はすべてモンゴルとモンゴル人を愛し、遂に不帰の旅人となった事であろう。今日の学生がアルバイトをして金をため、モンゴルを訪ね、モンゴルに心の橋をかけようとするのと何の変るところもない純粹さである。そして、その大きな舞台の表と裏をしっかりと支えて来たのが名誉教授精松源一であった。モンゴル人民共和国との国交樹立の前から日本・モンゴルの学術・文化のかけ橋として尽力し、モンゴルに大阪外国語大学モンゴル語学科の名を広く知らしめた功績は大きい。1971年モンゴルを訪れ、帰国後「ウランバートルで精松先生の弟子であると言うのを誇りに思った」と荒井(25回)は言う。精松が昭和34年自費で世に送った『新蒙日辞典』は戦後初のキリル文字によるモンゴル語辞典として余りにも著名であり、精魂傾けての編纂であった。その後、定年をはさんで完成した和蒙辞典が出版社の引きうけ手なく今も眠ったままであるのは残念である。

1949年新制大学として出発。モンゴル語学科は隔年の学生募集で、精松源一、荒井伸一が常勤、石浜純太郎、宇野章が非常勤として教鞭をとっていた。一学年の学生数は4～5名で、ある年は女子学生が1名という時もあった。終戦によって大陸との関係は断絶して、国民の関心はほとんどモンゴルにはなく、アメリカやヨーロッパにだけ目がむいている時代であった。

司馬遼太郎が『梟の城』で直木賞を受賞したのも、このころである。受賞の前の年であったと思うが、産経新聞文化部の記者として活躍していた若い司馬が、学生たちに話をしたいと来校し、教室で戦中の苦労話をしたことを思い出す。戦車隊の兵士としてソ満国境で従軍していたとき、地面から錆びたコインをひろいあげたときのことを、ことこまかく話した。戦争に対してはきわめてさめた目でみつめていたことが印象に残っている。

若い頃の荒井伸一は、登山をこよなく愛し、いつもの巧みな話術で山頂に達したときの醍醐味をよく話し、授業にうるおいをそえた。

1960年には、ウランバートルで初めて国際モンゴル学会が開かれ、精松が出席した。まだモンゴルとは国交がなく、東京にもモンゴル大使館がないころで、イルクーツク経由でウランバートルに入るのであるが、イルクーツクのモンゴル領事館で、2～3日間待機させられ入国ビザを入手するという大変な時期であった。世界のモンゴル学者が一堂に集まったの会議で、1950年代の末に全面的な農牧業の集団化が完了し、いよいよモンゴルも経済発展の基礎を築くことができた時代で、世界に自国の再生と発展を誇示したいという、みずみずしさが感じられる学会であったときいている。精松は、帰国後よくモンゴル製のゴワゴワの黒の皮ジャンパーを着て、学会の模様を授業で熱心に話していた。カメラをウランバートル市内の公園におき忘れたのであるが、翌日そこへいってみると、ちゃんとそれがそのままそこにあったので、モンゴルは泥棒がいない国であるとどこへ行っても、その話をした。市場経済に移行し、血眼になって利益をもとめて奔走しているウランバートルの都市住民の今日の姿からは想像できず、まさに隔世の感がある。

1968年に精松が退官してからは、小貫、橋本が加わり、荒井のもとに常勤の教官が3名になる。学生募集はすでに数年前に毎年募集になっていた。1972年にモンゴルとの国交も回復、東京にモンゴル大使館が設置され、1970年代の半ばからは、留学生や教官の交換がはじまり、1977年12月に最初の交換教授としてS.モーモーが上六の外国人教師宿舎に入った。昭和20年代なかばにウルジートが帰国して以降、モンゴル人教師不在の時期が久しく続いたが、モーモーの赴任により懸案とされていた外国人教師の問題は解消したのである。彼はモンゴル人民共和国で数少ない音声学者であり、本学のモンゴル語教育に大いに尽力した。次いでモンゴル国立大学のバヤンサン、バトスレン、更に科学アカデミー東洋研究所のルハクワ、そしてウランバートル教育大学のオトゴンスレンが1989年10月に赴任して現在に至っている。

1979年に箕面に移転。あのゴミゴミした上六界限がとてまなつかしい。今から思えば貧

困の中であったからこそ、カリキュラムの改革など学生は熱心に運動をすすめたのであろう。問題意識が鮮明で、あの狭いキャンパスは、熱気に満ちていた。移転後、物質的条件は改善されたものの、その代償として失われたものが多いような気がする。

狭隘な上本町学舎時代は個人研究室などなく、すべて相部屋であった。精松は退官後も久しく非常勤講師として勤務し、研究室に来て専任教官(荒井、小貫、橋本)と一室に机を並べていたことが懐しく思い起こされる。

1972年2月に日本・モンゴルの国交が樹立し、その後、両国の文化交流がゆっくりとではあるが進展してくる。1975年にモンゴル国立大学に日本語講座が開設され我が国より日本語講師が派遣された。本学からは1976年より隔年毎に我がモンゴル語学科専任教官3名が順次1年間の任期でモンゴル国立大学に赴任し日本語教育に当るようになった。このように相互に交流できるようになった事は極めて意義深いことと言えるであろう。このような交流が可能になったのは日本・モンゴル間に文化協定が締結されたことによるものであるが、教師の交換に止まらず留学生の交換も行われることになり、1977年には本学よりモンゴル国立大学へ初の留学生1名を送りこんでいる。1970年代の半ばモンゴルから初の留学生が来たが、我々教官3名は彼を大阪空港まで出迎えた。その留学生は粋なハットを少し斜にかぶり、さっそうとしたその出で立ちがモンゴルの詩人ナツァックドルジの面影にそっくりでなかなか印象深く残っている。その頃留学生寮はまだ近鉄沿線の花園にあったが、現在は新学舎のキャンパス内にある。

1961年度まで蒙古語学科と称していたが、翌年度よりモンゴル語学科と改称された。毎年15名の新入生を迎え入れることになりにぎやかになってくる。蛩カラ風で鳴らしていた蒙古語学科も昭和30年代の終り頃から女子学生の姿も毎年2、3名見えるようになり彩りを添えるようになる。昭和40年代に入り大学紛争が各大学で吹き荒れた。本学も学内封鎖になり、授業が出来なくなり、近くのお寺などを借り、畳の部屋で授業を行ったことを思い出す。紛争以後授業のカリキュラム体制にも大きな変化が生じる。従来全て必修であった語学実習が、3年以降必要単位数を取得する形で全て選択制が取られるようになった。同時に言語、文学、文化と言う三本柱の体制が確立し、授業科目の設置数も増加して現在に至っている。昭和49年には既設の大学院修士課程東アジア語学専攻内にモンゴル語学コースが設置され、それまでであった年限1年の専攻科はなくなった。大学院修了後更に他大学大学院博士後期課程に進学する学究派もいる。またモンゴル人民共和国から留学生が来るようになって既に10数年になるが、内モンゴルからの留学生も見えるようになり、モンゴル語学コースで修士号を取得した留学者も2名いる。長い間、中ソ間の不和のあおりを受けてモンゴル人民共和国と内モンゴルとの交流は疎遠となっていたが、モンゴル(共和国)と内モンゴルの若者が同席して互に意見が言えるようになった光景をこの目で見て嬉しさが湧いてくる。最近モンゴル、中国両国間の関係も好転し、モンゴル人民共和国と内モンゴルとの交流は盛んになりつつある。

モンゴル人民共和国は1989年12月に始まったペレストロイカにより政治・経済体制に大転換が生じ、1921年の革命以来築いてきた社会主義体制に別れを告げ、中立化への道をたどろうとしている。市場経済導入により個人企業の数はい日に増加しつつある。いま物不足とインフレで経済的混乱期にあり大変な時期を迎えている。モンゴルは1941年に文字改革に踏みきり、それまで用いていたモンゴル文字からキリル(ロシア)文字に切り換え、新しい正書法が立案実施されて現在に至っている。併し近年の民主化はモンゴル人の伝統文化の復活を促すこととなり、チンギス汗以来モンゴル人が用いてきたモンゴル文字が再びよみがえろうとしている。1994年からはモンゴルの公用文字としてモンゴル文字を採用することが決定されている。

内外の目まぐるしい激動期に突入し、我がモンゴル語学科も新しい色々な困難の一つひとつ乗り越え大きく変貌していかねばならないであろう。

モンゴル語学科の同窓会誌として『朔風』があるのでこれについて簡単に触れてみたい。『朔風』のおこりは戦前にある。残念ながら創刊号が見出せず正確な発刊年が不明であるが、第2号は昭和7年3月に発刊されている。当時大阪外国語学校蒙古語部に満蒙研究会が創始された。創刊号から第9号まで定期的に刊行された。第9号は昭和15年4月に刊行されている。どうやら第9号で一時途絶えたようである。内容は論文、随筆、紀行文、彙報、会員消息、会員名簿等々で構成されており、かなりバラエティーに富んでいる。例えば第6号(昭和12年3月発行)は「渡部先生三烈士追悼号」となっている。渡部先生とは日本における満州語研究史に残る大きな功績を果した渡部薫太郎のことである。昭和11年11月に死去した。当時の大阪外国語学校長、葉山万次郎や満蒙研究会長、精松源一の追悼の辞、弔詞等が掲載されている。又、本学の石浜文庫で知られる東洋学者石浜純太郎(大正14年蒙古語部選科卒)の論文「ブリアト蒙古語の分類」が掲載されているがこれは静安学社例会での講演の大要である。N. Poppe教授の「ブリアート方言」について略述し紹介している。モンゴル語部の研究誌としての役割を十分に果していると考ええる。太平洋戦争の時期に至り、当誌は中絶し戦後久しく発刊されないままになっていたが、昭和35年に復刊した。併し号数は、又もとに戻り第1号(No.1)と記している。第2号は昭和39年に刊行。復刊第1号には精松源一の文“『朔風』の復活について憶う”等がのっているが、第1、第2号ともに会員名簿と言ってよい。第3号は昭和41年に、第4号は「精松源一教授退官記念号」として昭和43年に刊行された。第3号、第4号は論文や翻訳も掲載されており、戦前の『朔風』に内容的にも匹敵する。その後昭和46年に第5号が出版されたあと再び中断したが、昭和60年に再刊される。これまた号数はふりだしに戻り第1号となる。研究室と卒業生との連携により再刊を見ることができた。安達一郎、藤多毅(外語15回及び16回卒)の尽力も大であった。装丁も立派なものになり内容的にも論文あり随筆ありで計15編が掲載されている。寄稿者も外語時代の人、大学時代の人と様々で充実している。以後同じような体裁で第2号が昭和62年に、第3号が平成元年に発刊された。平成4年には第4号が発刊され

ることになっている。尚、その発行と並行して隔年に一回朔風会総会が開催されて来た。本年(平成4年)も総会を開く予定でその準備に取りかかっている。平成2年の総会では司馬遼太郎を招いて講演が行われ大変好評を得た。次にモンゴル語科の講師(非常勤)について若干触れておこう。

戦前については幾分不分明な所があるが、『蒙古語大辞典』(陸軍省編昭和8年)で知られる鈴江万太郎(当時参謀本部勤務)が隔週に来阪し蒙古語を教えていた。

戦後になって石浜純太郎(東洋史担当)、宇野章、内田吟風(現在神戸大学名誉教授・東洋史担当)、麻生達男、加藤義雄、橋本勝、山口幸二、庄垣内正弘が昭和40年代後半までに教鞭をとった。それ以降、言語関係の分野では長田夏樹(現在神戸外大名誉教授)、石馬祖俊、角道正佳、樋口康一、谷博之、塩谷茂樹等が、文学関係では赤石洋通、芝山豊が、又、文化関係では村井宗行、今岡良子が担当してきた。その中には現在なお引続いて担当している人もかなりある。

本文で幾度か言及した石浜文庫のカタログが昭和54年3月に本学より刊行されたが、モンゴル語研究室より荒井伸一、橋本勝が編纂に協力した。5万冊に及ぶ膨大な書籍の目録であり外大の名を世に高めた。

昭和45年には日本モンゴル学会が創設されたが、現在同学会役員として橋本(理事)、角道(幹事)がその任に当たっている。昭和62年11月には本学で日本モンゴル学会秋季大会が開催された。外国からも学者が参加しフィーツェ(当時東ドイツ)やチョイジンジャブ(内モンゴル)等のモンゴリストの顔も見られた。散会後本学記念会館で懇親会が催されたが、院生、学生等の協力も得て全て成功裡に終わった。

最後に最近の研究活動についてふれておきたい。

1989年の夏、専任教員小貫、非常勤講師今岡の指導の下に、学生・院生が中心になって、20数名が参加、研究調査隊が編成され、50日間にわたるモンゴルのゴビ・遊牧地域の予備調査がおこなわれた。

翌年、この調査にもとづいて、「ゴビ・プロジェクト」が構想され、日本・モンゴル共同の第一次ゴビ・遊牧地域研究調査が始まった。92年の夏には、第三次の調査がおこなわれようとしている。

このプロジェクトには、自然・社会・人文科学の各分野の研究者が、全国各地の大学・研究機関から参加して、日本・モンゴル双方あわせて80名に及ぶ大部隊に成長している。参加者達は、モンゴルの広大なゴビ・遊牧地域に21世紀に生きる新しい地域社会の再生と創造をめざして調査を続けており、94年には、これら一連の基礎調査の成果をふまえて、国際シンポジウムが開催され西紀2000年にむけて方針が打ち出される予定である。

このプロジェクトは、科学の総合性という利点から、従来のモンゴル研究を大きく変革していこうとしているだけでなく、地球上の砂漠と遊牧草原に解決を求めるこの営為は、今日地球が直面している人間と自然の正しいあり方を模索する、現代の実践的課題でもあ

る。当学科の遊牧地域論、歴史等を専攻する教官・学生・院生達が、これらの事業の中心を担い、重要な役割をはたしているのである。

(荒井 伸一・小貫 雅男・橋本 勝)

## 4. インドネシア・フィリピン語学科

### 〈I. 語科の沿革〉

大正10年12月9日に大阪外国語学校が創立されると同時に、馬來語部が設立される。

昭和19年4月1日に学校名が大阪外事専門学校と改称されるや、馬來語部もマライ科と改称される。

昭和21年4月1日にマライ科をインドネシア科と改称。

昭和24年5月31日に大阪外国語大学が設置され、インドネシア語学科となる。

昭和44年4月1日に大学院外国語学研究所(修士課程)が設置され、南アジア語学専攻の中にインドネシア語学が設けられる。

昭和59年4月1日にインドネシア語学科がインドネシア・フィリピン語学科と改称され、今日に至る。

### 〈II. 歴代の教官〉

初代の教官は瀬川<sup>ヒサン</sup>亀とバチー・ビン・ワンチクであった。

瀬川は明治24(1891)年3月23日生まれで、大正2(1913)年に東京外国語学校馬來語本科に入学し、翌年2月に退学、シンガポールで仕事をしたあと、大正11年3月10日、大阪外国語学校講師となり、大正12年3月30日に退職した。

バチー・ビン・ワンチクは1884年3月15日生まれ、1902年セランゴール国ヴィクトリア学校卒業、大正3年6月6日から大正10年3月31日まで東京外国語学校教師を勤めた。翌年の大正11年4月1日に大阪外国語学校外国人教師となった。そして、昭和13年3月31日に任期満了退職をした。

大正12年4月には内藤春三が着任した。明治26(1893)年3月23日生まれ、大正3年9月関西大学専門部商業科中退後、大正6年3月大阪商業会議所主管私立大阪貿易語学校専科馬來語科を卒業し、私立大阪貿易語学校馬來語教師勤務、南洋貿易株式会社、村田商会英領新嘉坡支店、大阪府立図書館、ムーフ・フィップス・エンド・セーラス株式会社勤務を経て、大正12年4月大阪外国語学校馬來語部教師に任用された。大正12年6月同校講師に昇任、次いで大正14年4月助教授に昇任、昭和8年7月には教授に任ぜられ、昭和33年3月31日定年により退官、引き続いて昭和33年4月より昭和48年3月まで大阪外国語大学非常勤講師を勤めた。内藤は大阪外国語学校に就任以来、53年間に亘って教育と研究に従事し

たが、特に商業インドネシア語に造詣が深かった。昭和43年11月には多年調停委員を務めたことに対する謝意として大阪地方裁判所長の表彰を受け、昭和55年8月にはインドネシアと日本の友好関係増進のため教育及び文化の分野において尽力した功績に対してインドネシア共和国教育文化大臣より表彰を受けた。昭和60年12月8日には勲三等瑞宝章を受けた。

大正13年には浅井<sup>エリン</sup>恵倫が着任した。浅井は明治28(1895)年3月25日生まれ、東京帝国大学で言語学を専攻して大正7年7月9日卒業、大正13年4月5日大阪外国語学校講師となり、大正15年3月1日には同校教授に昇任した。その後、昭和9年3月から昭和11年3月までオランダのライデン大学に留学し、博士号を取得した。帰国後、ただちに台北帝国大学の助教授となった。

昭和13年にはバチー・ビン・ワンチクにかわってハジ・イスマイル・ナジールが着任した。ナジールは1912年5月14日生まれ、1929年4月メダンの回教専門学校を卒業、昭和11年5月1日天理外国語学校講師嘱託となったが、昭和13年4月7日大阪外国語学校外国人講師嘱託となり、昭和14年3月31日大阪外国語学校外国人教師となった。昭和47年11月には、勲三等瑞宝章を受けた。そして、昭和56年3月31日に大阪外国語大学外国人教師任期満了退職をした。著書として『標準インドネシヤ語会話』(昭和19年1月、玄鹿洞書院発行)がある。このナジールの後任が現在のアイプ・ロシディである。

昭和22年には中西竜雄が着任した。中西は昭和14年3月大阪外国語学校馬來語部を卒業、昭和22年1月大阪外事専門学校の講師に迎えられ、昭和24年6月には大阪外国語大学講師に、昭和26年3月には助教授にそれぞれ昇任、昭和37年4月には教授となり、昭和56年4月定年で退官した。中西は長年にわたり専攻分野の研究と教育に対してのみならず、学科と大学の管理運営に対して果たした功績により大阪外国語大学名誉教授の称号を授与された。また、昭和63年11月には勲三等旭日中綬章も受けている。著書として『インドネシア語文法と会話』(1957年7月、江南書院発行)、『図解インドネシア語会話』(昭和39年7月、海文堂発行)がある。

昭和33年4月には松浦健二が着任した。松浦は昭和4年7月7日の生まれ、昭和26年3月大阪外事専門学校インドネシヤ語科を卒業、昭和33年4月1日大阪外国語大学助手に迎えられ、昭和38年4月には講師に、昭和41年2月には助教授にそれぞれ昇任、昭和42年3月辞職した。現在は京都産業大学教授である。著書に『インドネシア語入門』(昭和59年9月、泰流社発行)、訳書に『西洋かぶれ』(アブドゥール・ムイス作、1982年6月、井村文化事業社発行)、共編に『東南アジア社会文化事典』(東京堂)がある。

昭和41年4月には松岡邦夫が着任した。松岡は昭和11年6月15日生まれ、昭和35年3月大阪外国語大学インドネシア語学科を卒業、昭和41年4月大阪外国語大学の助手に迎えられ、昭和42年8月には講師に昇進し、翌年の昭和43年3月に辞職した。現在は京都産業大学教授である。著書に『インドネシア語の学び方』(昭和58年1月、大学書林発行)、『イン

ドネシア語文法研究』(平成2年7月、大学書林発行)、共著に『インドネシア語を読もう』(昭和61年7月、大学書林発行)がある。

### 〈Ⅲ. 現在の教官〉

現在、インドネシア・フィリピン語学科インドネシア語専攻の専任教官は、外国人教師アイブ・ロシディ、松尾大教授、森村蕃教授、松野明久助教授の計4人である。

アイブ・ロシディは、1938年1月31日インドネシア西部ジャワのジャティワンギー生まれで、前述のハジ・イスマイル・ナジールの後任として1981年4月1日、大阪外国語大学客員教授に迎えられて今日に至っている。インドネシアの著名な詩人・作家でもあり、詩や短編小説のみならず、文芸評論、スダ文学・文化研究と紹介など活動分野が広い。アイブ・ロシディの現在の担当科目は、インドネシア語実習(会話、LLなど)、インドネシア文学(講義)、インドネシアのイスラム思想史研究(実習)、インドネシア文化特殊研究ゼミ(実習)、インドネシア語学研究(大学院)である。著名であるばかりか、にこやかで厚厚な人柄により教官及び学生に慕われ、尊敬されている。

松尾大は、1938年5月10日生まれで、大阪外大第9期生である。1981年4月1日に本学に赴任し、今日に至っている。松尾の現在の担当科目は、インドネシア語実習(1年、3・4年)、インドネシア文学(演習)、マレー古典文学(講義)、インドネシアの言語と文化(1年講義)、インドネシア語演習Ⅰ(大学院)である。

森村蕃は、1940年3月17日生まれで、大阪外大第11期生である。1968年4月1日に本学に赴任し、今日に至っている。現在の担当科目は、インドネシア語実習(1年の文法と作文、2年、3・4年)、インドネシア語学研究(講義)、インドネシア語演習Ⅱ(大学院)である。

松野明久は、1956年7月2日生まれで、東京外大出身である。1983年4月1日に本学に赴任し、今日に至っている。松野の現在の担当科目は、インドネシア語実習(1年2年)、インドネシア語文法演習、時事インドネシア語(3・4年実習)、インドネシアの言語文化(3・4年実習)である。

教官各人に関して何か書くことはないものかと思い、学生諸君に尋ねてみることにした。すると、彼らの返事は「教官諸氏に共通していえることは、学生達の面倒をよくみる」とのことだった。

### 〈Ⅳ. 同窓会と南十字星文庫〉

本学馬來語・インドネシア語卒業生がつくる同窓会として、南十字星会がある。馬來語部設立以来の卒業生がその会員である。

この南十字星会によって『内藤春三先生ご退官記念誌—内藤先生とともに50年』が1973年に発行されたが、この記念誌に内藤自身がよせた文は、往時の馬來語をめぐる関心の高

まりを伝えている。日本軍による真珠湾攻撃後、「大陸の戦線中支より南支、仏印更に南に進むに従い国内俄然南方に対する関心高まり至る所南方講座、語学講習が開設された。その要請に応じて小生の身辺頓に多忙となり17年より20年に至る4年間は文字通り東奔西走寧日なき日を過すことになった」「受講者は実におびただしい数に達した」「戦時中語部の志願者は25.6倍の高率に達した。これは開校以来各語部を通じてかつてない最高の記録であって一躍時代の寵児となり正に黄金時代を築いた。……」とある。

また、本学図書館のコーナーには馬來語・インドネシア語卒業生によって寄贈された書籍から成る「南十字星文庫」がある。この文庫の設立は昭和55年7月で、現在、蔵書はおよそ2,300冊を数える。冊数は少ないとはいえ、貴重な文献をも含み、研究と教育に貴重な存在である。

(森村 蕃)

#### 〈V. フィリピン語学・文化講座の歩み〉

本学における「フィリピン語及びフィリピン研究講座」の歴史はまだ決して長くはない。それでも多くの本学教官、非常勤講師、事務官、その他の人々に支えられ、また学生及び院生諸君の参加により本講座は着実に歩みを進めることができた。1992年現在で、既に34名の学部卒業生及び1名の大学院修士課程修了者たちが文字通り世界各地、各方面で飛躍を続けているのである。

ここでは本講座の動向(但し、各年度における開設科目、講師陣およびその授業など通常の諸活動以外)を、年月を追って報告していきたい。

- |             |  |
|-------------|--|
| 1984年 4月1日  | インドネシア語科がインドネシア・フィリピン語学科に改組される(インドネシア語と並行してフィリピン語の履修が可能となる)。 |
| 4月10日       | 1回生8名が初めてフィリピン語を選択する。  |
| 9月          | フィリピン国立大学(UP)総長(当時)Atty. Edgardo Angara(現上院議員)が本校を公式訪問。      |
| 1985年 4月1日  | 教官として津田守助教授が着任。  |
| 4月10日       | 1回生5名がフィリピン語をインドネシア語と並行して選択する。                               |
| 5月1日        | 客員教授としてUPフィリピン語・フィリピン文学科からDr. Bienvenido Lumberaが着任。         |
| 1986年 3月初旬  | 教官と在学学生8名がUPを友好訪問。特にフィリピン語・フィリピン文学科と交流を計る。                   |
| 4月1日        | 1回生時より、フィリピン語プロパーでの専攻が可能となる。                                 |
| 4月10日       | 1回生3名が初めてフィリピン語を専攻とする。                                       |
| 1987年 4月10日 | 1回生の7名がフィリピン語を専攻とする。   |
| 9月初旬        | 文部省奨学生として梶谷哲がUP言語学科、宮原暁がアテネオ・デ・                              |

- マニラ大学社会学・人類学科に留学(～88年7月)。
- 10月初旬 UPフィリピン語・フィリピン文学科講師Mr. Reuel Aguila(詩人で戯曲作家)が国費研究留学生として来学(～1989年3月)。
- 11月初旬 私費留学生として市川泰史がアテネオ・デ・マニラ大学コミュニケーション学科に留学(～1988年10月)。
- 1988年2月 学科定員30名のうち、10名を独自に「フィリピン語専攻」定員として募集。第二次試験競争率8.3倍(学内で最高)。
- 3月初旬 UP、アテネオ・デ・マニラ大学、および聖スコラスティカ学院大学  
～下旬 と大阪外大がそれぞれ学術文化交流協定を締結。  
フィリピンに関するテーマを卒論とした4人が初めて卒業。  
客員教授Dr. Lumberaが帰国。
- 4月1日 Dr. Lumberaの後任として、UPよりDr. Rosario T. Yu(同大フィリピン語・フィリピン文学科の前主任)が着任。
- 4月10日 フィリピン語専攻10名入学、加えて日本語学科から1名がフィリピン語を副専攻とする。
- 5月9日 「ジャパゆきさんに関する全国会議」(埼玉県)講師として来日したアテネオ・デ・マニラ大学のProf. Cynthia N. Lumbera(本学の元客員教授の夫人)が本学を訪問。
- 5月16日 大阪府私立高等学校社会科研究会(加盟は92校)にて津田教官が「フィリピンの社会と変革」と題して講演。
- 6月6日 日本政府(国際協力事業団)招へいによるフィリピン人理工系学生25名が来校し、丸一日交流する。
- 6月中旬 私費留学生として小山貴章がアテネオ・デ・マニラ大学へ、研究生1名(美馬直子、本学イスパニア語学科88年3月卒)がUPマスコミ研究所大学院へ留学。
- 6月23日 箕面市教育委員会主催の生涯学習推進事業市民大学講座「アジアの国々から見た日本」(全6回)に津田教官が講師となる。
- 7月18日 フィリピンのフォークシンガーグループ、Inang Laya (Ms. Karina C. DavidとMs. Betty Abraham)が本学を訪問し公演。
- 8月下旬 文部省奨学生として一の瀬晋がUP、加島督枝が聖スコラスティカ学院大学に留学(～1989年7月)。
- 9月2日 国際交流基金の招へいによるUPアジア研究センター所長のProf. Ajit Ryeが本学を訪問。
- 11月3日 「外大祭」の第2日、本学科学生と関西フィリピン人留学生協会(FILSAK)との交流パーティを開催。

- 12月11日 大阪SGGクラブ(通訳・ガイド・ボランティア・グループで蜂谷純子が副会長)の6周年記念会が箕面市文化センターで開かれ本学科の教官、客員教授、外人講師が招かれる。
- 1989年2月23日 本学大学院、南アジア語学コースの修士課程に「フィリピン語専攻」として初めて2人が合格。
- 2月28日 フィリピン語専攻コース(定員10名)の二次試験競争率が16.9倍となる(なお、これは本学最高)。
- 3月25日 大阪府主催「府民のつどい……アジア太平洋地域国際女性フォーラム」基調講演講師、前国際連合アジア太平洋地域経済社会委員会(ESCAP)社会開発部女性と開発に関する地域アドバイザー、現UP経済学部教授のDr. Rosa Linda Tidalgo Mirandaが、本学訪問。
- 3月28日 卒業式と同時にフィリピン専攻同窓会が創立される。
- 4月10日 1回生10名が入学。加えて日本語学科より1名がフィリピン語を副専攻とする。大学院に2名入学。
- 5月11日 UP第三世界研究所所長のProf. Randolph S. Davidが来学し、講演。
- 5月14日 津田教官宅で学科オープンハウス。学生、教師及びその家族を含めておよそ60名が参加。
- 6月9日～11日 四国学院大学社会学科(横山正樹助教授ゼミ)との合同合宿(香川県)。
- 6月26日 第1回フィリピン研究会が本学で開催される。出席者はRuben-Habito(上智大)、佐竹真明(四国学院大学)、瀬戸健寿(大阪外大)、津田守(大阪外大)、鶴嶋雪嶺(関西大)、松尾大(大阪外大)、宮本勝(民博)、森澤恵子(大阪市大)、横山正樹(四国学院大)、吉川洋子(京産大)。
- 7月13日～16日 第3回国際フィリピン研究会(ケソン市)が開催され、津田教官が報告者及びパネラーとして参加。
- 7月27日～8月4日 ハワイ大学主催、東南アジア研究夏期研修(SEASI)に津田教官が報告者として参加。また、「日本と東南アジア」と題して同大マノア校での夏期集中講義を担当。
- 8月28日～9月1日 毎日放送(MBS)テレビ『早起きワイド』(5:30～6:30)に津田教官が連続5回インタビュー出演。
- 9月～10月下旬 文部省奨学生として山田悦子がUPフィリピン語・フィリピン文学科へ、宮脇摂がアテネオ・デ・マニラ大学政治学科に留学。私費留学生として松尾敏がUPロスバニョス校に留学。

- 10月8日 UPフィリピノ語・フィリピン文学科講師Ms.Elizabeth Villaが国費研究留学生として来学(～1991年3月)。
- 10月12日 聖スコラスティカ学院よりMs.Ivet Caringalが留学生別科所属の日本語・日本文化研究生として来学(～1990年9月)。
- 10月12日～11月16日 同志社国際高校にて津田教官、Yu客員教授などが、延べ5回、開発教育としての「フィリピン講座」を担当。
- 10月14日 箕面市主催の公開講座にて「現代フィリピン文学の潮流」と題してYu客員教授が講演(出席者75名)。
- 10月25日 本学主催の公開講座にて「フィリピンにおける女性の権利と社会的存在」と題してYu客員教授が講演。
- 11月24日 箕面市教育研究会にて津田教官が市内小・中学校の教員、校長等60名に「アジアの中の日本とフィリピン」と題して講演。
- 12月24日 フィリピンより来日している国費留学生18名、及び日本人学生数名が津田教官宅でクリスマス・イブを過ごす。
- 1990年1月14日 UPフィリピノ語・フィリピン文学科講師Mr.Rolando de la Cruzが国費研究留学生として来学(～1991年9月)。
- 1月24日 箕面市立第4中学校にて、同校1年生160名を対象に「フィリピンから見た日本」と題して津田教官が講演。
- 3月～4月 私費留学生として松岡美樹がUPロスバニョス校、山岡美穂がUPディリマン校に留学。
- 4月8日 関西フィリピン人留学生協会(FILSAK)総会に、本学教官・客員教授・学生が出席。
- 4月10日 定員増に伴う1回生24名が入学、加えて日本語学科より1名がフィリピノ語を副専攻とする。
- 5月11日 ハワイ大学フィリピン研究所よりDr.Elias T.Ramos所長が来学。
- 5月12日 同所長がフィリピン研究会で報告(“State and Prospects of the Philippine Studies in the United States; Their Relevance with in the Context of Asian Pacific Perspective”)。
- 5月15日 歴史家Renato Constantion教授夫妻が来学。
- 5月25日 兵庫県立東灘高校より大津和子教諭(『社会科:一本のバナナから』の著者)が来学し特別講義。
- 6月7日 聖母被昇天修道会(マニラのAssamption College元学長)のSr. Maria Carmenが来学し、「フィリピンの教育」と題した特別講義。21日には「フィリピンの宗教」と題して講義。
- 6月8日 竜谷大学より鶴見良行教授が来学し、「私のフィリピン研究」と題

- して特別講義。
- 6月21日 ハワイ大学東南アジア研究所よりDr. James Collins所長が来学し、学長を表敬訪問。本学アジア研究会にて“Southeast & South Asian Studies in the United States”と題して講演。7月13日豊中市立婦人会館主催の公開講演会にて本学講師Rolando Yu(聖スコラスティカ学院大学准教授)が、「フィリピン政治の現状」と題して講演。
- 8月22日 文部省奨学生として中村コンが聖スコラスティカ学院大学女性学研究所に留学(～1991年6月)。
- 10月6日 Far Eastern Economic Reviewマニラ支局編集部員、Mr. Rigoberto D. Tiglao(元Manila Chronicle経済部長)が来学。
- 10月29日 UPマニラ校よりProf. Amado Mendoza, Jr. (経済学)が来学。
- 11月27日 UP社会学部Prof. Randolph S. Davidが来学し、「滞日フィリピン人の社会学」と題し特別講義。
- 12月14日 客員教授Dr. Rosario Yu訳の『窓ぎわのトットちゃん』のフィリピン語版(大同生命国際文化基金発行)出版記念会(Cultural Center of the Philippinesにて)。
- 12月17日～22日 東京大学教育学部にて津田教官が「フィリピンの教育と文化」と題して集中講義(冬学期)を担当。
- 1991年1月23日 聖スコラスティカ学院大学よりAssistant Prof. Salvacion Dorado(環境教育)が国費研究留学生として来学(～1992年3月)。
- 2月5日 本学第1回Integrasyon(全学年による年度末の学習発表会で寸劇、歌唱、詞の朗詠、スピーチなど)。
- 4月10日 1回生27名が入学、加えて日本語学科より1名がフィリピン語を副専攻とする。大学院に3名が入学(内1名は本学英語学科卒業生で1名はフィリピン人)。
- 5月10日 新入生歓迎特別プログラム開催。フィリピン政府観光省大阪事務所からスタッフがゲスト講師として来学。
- 6月13日 津田塾大学にて、津田教官が「フィリピンとフィリピン人に学ぶ: アジアの中の日本の視座から」と題して講演。
- 6月17日 大上正直助教授(在フィリピン日本国大使館の前政務担当書記官)が着任。
- 7月26日 マカティで開催されたマニラ外語会に津田・大上両教官が出席。
- 8月下旬 文部省奨学生として杉本直子がアテネオ・デ・マニラ大学英語学科へ、澤田公伸がUP大学院へ留学(～1992年6月)。

- 9月24日 静岡県立大学国際学部にて津田・大上両教官が特別講義。
- 9月下旬 大阪府国際交流財団奨学生として橋本信彦がUPフィリピン語・フィリピン文学科へ留学(～1992年7月)。
- 10月8日 UP図書館学部大学院よりMs. Felicitas de la Rosa(フィリピン文献学)が、国費研究留学生として来阪。
- 10月26日 UP映画研究所所長Dr. Lumbera(元本学客員教授)が来学。
- 11月6日 本学留学生別科の元留学生Mr. Harold Galang(武蔵野音大大学院)によるピナトゥボ火山被災者のためのFILSAK主催チャリティ・ピアノコンサートが吹田市立シアターで開催される。
- 11月22日 筑波大学客員教授のDr. Cherry Ballescas(UP社会学科准教授)が来学。
- 1992年1月19日 マニラ国際マラソンに男子1回生1名と2回生2名が参加完走。
- 2月4日 第2回Integrasyon(3回生による初の本格的語劇発表を含む)。
- 3月下旬 Yu客員教授が帰国。後任としてProf. Oscar L. Evangelista(歴史学、UPディリマン校の前副学長)が来阪。

(津田 守)

## 5. インド・パキスタン語学科

### < I. 印度語部からインド・パキスタン語学科(ヒンディー)へ >

#### (1)

印度語部は支那語、蒙古語、馬來語、英語、仏語、独語、露語、西語とともに本学創設の最初から設けられていた。しかし、そこで言う印度語とは当時のインドの言語を巡る政治、社会情勢を反映して、実はより正確にはヒンドゥスターニー語と呼ばれるものであって文字、語彙その他の性格から言ってむしろ今日のウルドゥー語に近いものであった(このヒンドゥスターニーという名称そのものは、昭和39年まで研究外国語の一科目として、名前だけではあったが生き延びることになった)。従って厳密に言えばヒンディー語の教育、研究史はまったく戦後のものなのである。

創立時の印度語部における授業時間数は第1学年では、印度語18時間、英語3時間、第2学年では、印度語12時間、英語の代わりにアラビア語6時間となり、第3学年もこれと同じである。大正13年に大幅な規定の変更があったが印度語部に関するものだけを記すと、授業時数が印度語が第1学年から第3学年までそれぞれ12、7、5と減らされたほか、英

語の重視が顕著となり第1学年で9時間と増え、さらに第2、第3学年ではアラビア語5時間とともに英語は6時間に増加となった。翌14年印度語部は規定が改正され、印度語と英語の授業時数に変化はないものの新たにペルシア語が兼修外国語に加えられアラビア語との選択となった。さらに15年の規定改正により英語のみ第1学年からそれぞれ8、5、5時間となった。ちょうど1時間ずつ減った勘定である。この後も規定の細かい改正は繰り返されるがこれ以降大筋において変化はない。ただ当時印度語部内で親睦と研究の目的で結成されていた「アーリヤ学会」から昭和2年2月に発行された『印度語』第5号によると、第3学年の6時間中ヒンディー語も兼修されていたとあるのは興味深い。おそらくデーヴァナーガリー文字の学習が中心であったのだろう。なお前記「アーリヤ学会」は外語創立とともに印度語部内に結成された「ヒンドスタニー会」の後をつぎ昭和2年に新たに名称を変更して発足したものである。会誌の名称もそれにあわせて『曼陀羅』から『印度洋』に改称された。『曼陀羅』は第4号まで続き、その後『印度洋』第5号に受け継がれたというわけである。

アラビア語について言えば印度語部の兼修語という形であったが、その頃日本で唯一、本校に設置されていたものを受講生減少のため、わざわざ文部省に申請して廃止にしている。ただ、後に昭和15年独立の語部として再生した。現在インド・パキスタン語学科に開設されている古典語としてのサンスクリット語及びパーリ語のかわりに、アラビア、ペルシア語の授業が印度語部内でなされていたということは、現代語重視の方針とともに、上に述べたような当時の印度語の性格とも関係のあるところであろう。

創立時の印度語部の主任は小川正助教授、外国人講師はマハデヴァ・ロール・シロフであった。着任順からして、厳密に言うならばシロフが本学印度語部の最初の教官であった。小川は東京外国語学校ヒンドゥスタニー語科の第1回卒業生であったが一年余りで退官した。その後大正12年9月に澤英三が小川の後任として赴任した。澤の戦後の回想の記「在職廿七年間の回顧と今後の方針」（アーリヤ学会会報15号、昭和24年）によれば、マハデヴァ講師は澤の赴任に先立って米国に留学して既になかったが、ヒンディー畑の人で、ウルドゥー文字が書けなかったそうだとある。澤は東京外語を大正9年に卒業（第4回卒業生）したのち三年間のインド自費留学を終えて帰国したばかりであった。以下、しばらく同じ回想記に従い創立直後からの印度語部外国人講師の移り変わりを追ってみる事にする。大正12年1月より昭和3年3月までカリームが講師を務めた。その後、後任に困り、当時、天理外国語学校で英語の教師をしていたグプタが、昭和3年から2年間印度語部教師としてベンガル語を担当することとなった。グプタはその後英語科に転科した。昭和4年からは、グプタと重なる形で、ラーラー・アッターール・サイン・ジャインが昭和9年まで、今度はヒンドゥスターニー語を教えた。アッターール・サインはそれより先、東京外語で三ヶ年勤務の経験があった。昭和9年5月からは、ラーラー・マダン・ラルール・ジャインがインドから赴任した。本校が英国大使館を経て正式にインドから招いた最初の、そしてまた最後の教官

となった。それまでの外国人講師はほとんど皆神戸等において貿易商を営んでいた人ばかりであったのである。マダン・ラルの後、サント・ラーム・ヴァルマーに代った。ヴァルマーはその後、昭和37年3月、75歳で逝去するまで実に25年近くに亘って教壇に立つこととなった。この間、27年12月から翌年の2月まで、ヒンディー語重視の方針から、臨時講師として、関西在住のジャスワルを招いている。氏の母語はブラジ方言であり、サンスクリット語に通じていた由である。ヴァルマー逝去後、一年間R.S. ケーターン、38年より二年間J.M. グヴェー、40年にはU. ヴァルマーと目まぐるしく交替した後、41年4月にラクシュミーダール・マラーヴィーヤが赴任した。その後、平成2年4月より同4年3月まで本学科始まって以来最初の女性客員教授であるスジャーター・クルシュレーシュタが赴任した。最後にまとめとして戦前に印度語部教官として赴任した人々を担当科目とともに赴任順に並べる。( )内は在任期間である。

マハデヴァ・ロール・シロフ：ヒンドゥスターニー、(1922.4.1~1922.12.31)

小川 正：ヒンドゥスターニー、(1922.5.10~1923.7.16)

松本重彦：アラビア、(1922.8.2~1929.7.1、京城帝大転任)

カリーム：ヒンドゥスターニー、(1923.1.6~1928.3.31)

澤 英三：ヒンドゥスターニー&ペルシア、(1923.9.12~1961.3.31)

ナンド・ラル・カプール：ペルシア、(1925.4.11~1926.3.31)

山本健太郎：ヒンドゥスターニー&ペルシア、(1927.3.31~1966.3.31)

グプタ：ベンガル、(1928.4.15~1930.3.31)

アッターール・サイン：ヒンドゥスターニー、(1929.4.1~1934.3.31)

マダン・ラル・ジャイン：ヒンドゥスターニー、(1934.5.15~1938.3.31)

サント・ラーム・ヴァルマー：ヒンドゥスターニー、(1938.4.7~1962.3.1)

澤の回想記には、外国人講師ばかりではなく、戦争を挟んだ戦前、戦後の混乱期についての貴重な記述も多い。印度語部に関することでは、『印度文典』を印刷するために外務省の後援を得て、本邦で最初のペルシア文字の活字を製作したことにふれるべきであろう。多くの苦労の後『印度文典』は昭和18年1月に発行された。それからさらに2、3年後に大阪の一篤志家出間照久氏の協力を得て、より小型のペルシア文字活字と梵字、すなわちデーヴァナーガリー文字活字を作成した。同じ頃、やはり外務省の援助を受けて印度語の辞書編纂の仕事にも着手した。昭和18年4月、まず澤、ヴァルマー、山本の三人で始めたが、同年9月より(正式には10月1日より)、印度語部を卒業したばかりの陳舜臣が助手として、正式には西南亜細亜語研究所助手として参加した。ほかに同じく助手として、陳の一年後輩の高瀬昇平がいた。さらにサンスクリット関係語の吟味のために京大名誉教授の榊原亮三郎博士、日本語の吟味のために国語科主任の吉田にも協力を仰いだ。西南亜細亜語研究所の所長は当時の校長横山が兼ねた。しかし、それも昭和20年3月の大阪大空襲ですべてが文字通り灰となってしまった。

## (2)

この章では戦前からの語学教育について以下の順で述べる。

- (1) 語学教育に関する学科の体制の変遷
- (2) ヒンディーとウルドゥー両語の教育に関する概略(ただし、ウルドゥー語については新制大学誕生以前まで)
- (3) 戦前から新制大学発足前までの語学教育について
- (4) その後現在までに用いられた教科書類および授業内容について
- (5) 戦前、印度語部内で教えられていた兼修外国語としてのペルシア語、アラビア語

(1) 創立時の印度語部における授業時間数は先述したように第1学年では、印度語18時間、第2および第3学年で12時間となっていた。1時間とはこの場合50分授業である。したがって、週18時間として計90分、現在ヒンディー語科で1年生は実習は週5時間、1時間について90分の授業であるから、計450分。つまり時間で言えば昔は現在の倍あったということである。また当時は1年間を3学期に分けていたようであるが、単位計算とは関係がなかったようである。

昭和24年から27年までは時間および単位については各学年一律でなく、しかも学生便覧からでは窺えない混乱がかなりあったようである。第1期生について言えば、彼らが2年生に進級してからは卒業まで各学年8時間(8単位)と決まった。しかし26年に1年生であった卒業生の記憶では、講読、会話それぞれ週2回で4単位ずつ、文法週1回で2単位の配当であったという。このほかに文化史の授業が週1回で4単位あったそうであるから、合計週6コマ、14単位となる。今文化史の授業を除くと、5コマ、10単位であり、4コマ、8単位となるべきところと食い違いがあるが、なぜそうなったのかよくわからない。昭和28年から40年までこの実習8時間、8単位体制が続く。したがって、卒業までには計32時間32単位を修得するということになる。

41年から44年までは各学年10時間10単位、計40時間40単位に変わる。大学紛争を経た昭和45年度から、4年間を3つの課程に分け、3年次、4年次を一括して第3課程とした。第1、第2課程は10時間、10単位変わらず、第3課程は12時間、24単位とし、その合計はしたがって32時間44単位となって現在に至っている。戦前とは修業年数その他が違うために単純に比較はできないが、仮に昭和8年の12、9、8に準じて、4年生にも8時間を配当するものとして計算すれば、37時間となり、これは前にも言ったように50分授業であるから、総時間数は30時間50分となる。現在は32×90分で、しめて48時間となる。大変な違いであるが、その効果のほどはさてどうであろう。

(2) 専門学校時代、3年次において副次的にヒンディー語の教授がされていたことは間違いないが、詳しいことは不明である。14期卒業生の記憶によれば3年生になってから学年

始めより週2回のヒンディー語の授業があったとあるが、実質的には文字の修得が目的であったと思われる。

大学になってからの新しい学科の基本方針は当時の澤の以下の言葉に明らかである。「我が印度語学部としては、印度の新情勢に順応して、従来と逆にヒンディーを主に、ウルドゥー語を従にして教授する意図である。(中略)理想からいえば、両語それぞれ独立の語学部にして、一方には梵語を、他方には、ペルシア語を必須兼修語にしたいのだが、今のところ経済的に到底許されそうもない」(前記回想記より)。27年秋にも次のように語っている。「過渡期における一時的便法として、新制大学になって以来、我々は前期二ヶ年にはヒンディーを、後期二ヶ年にウルドゥーを課している次第である。しかも、そのヒンディーたるやかかつて独立を見るまでユー・ピー州あたりで行われてきたヒンドスターニーまがいのヒンディーをやってきたが、近く教科書のそろい次第、純ヒンディーに切り替える段取りである。もともと、インドの諸学校でも、ヒンディー・ウルドゥーの担任者は別個であるから、事情さえ許せば、本学でも両者別々に担任さるべき性質のものであろう」(アーリヤ学会会報21号)。これに従い昭和24年から32年までは入学時にまずヒンディーから始め、3年次および4年次の授業の一部を割いてウルドゥーの初歩的な知識を与えた。1期生についてはヒンディーとウルドゥー半々の授業であったが、その後徐々にウルドゥーが減らされた。33年から42年度は、入学時にはヒンディーから始めるが、2年次からヒンディー課程とウルドゥー課程に分れた。ただし、教員の不足のため昭和41年度入学者のみは1年次にウルドゥーを学び、2年次で上記の2課程に分れた。現在の如くはっきりと両課程に分れたのは昭和43年からである。

(3)講読：教科書の多くが当時インドの小学校で使われていたものであることからして、授業の目的もほぼ中級程度の読解力を身につけることにあったと考えて大過なかならうと思われる。ただ、現在、後期の学生たちにとっても読みこなすことが相当に困難なプレームチャンドの作品が、ほぼ一貫して3年次で講読に用いられたらしいことは一方で当時の学生たちのレベルの高さを窺わせるものである。戦前の学生たちが備えていたであろう日本語の深い教養を考慮に入れれば不思議なことではない。

文法・作文：ともに教科書は用いられず、板書が中心であった。テキスト名として *Hindustani Conversation Grammar* などの名前があがっているが、学生たちにそれぞれ与えられたわけではなく、教師が日本語に翻訳しつつ口述したものである。作文の授業は主として澤が担当したようである。

会話：会話の授業はインド人教官が担当した。戦前に赴任したインド人教官の内、ヒンドゥスターニーの会話を実際に教えたのは4人である。いずれの教官の授業でも教科書類は用いず、英語による指導であった。

#### (4) a. 新制大学発足から1957年頃まで

講読：この間前半の数年について言えば、教科書、辞書ともに戦前のものに変わず、なお授業内容も専門学校時代とまず同じものであった。講読の教科書は相変わらず、インドの小学校で使われるものをガリ版刷りのプリントで使用したが、その後現地から取り寄せた刊本を使うようになるにつれて、次第に内容も戦前のものから大きく変わっていった。戦前付け足しのような形で教えられていたヒンディー語と、この頃から教えられるようになったヒンディー語とは両者の間に大きな違いがある。戦前はヒンディーとは言いながら、ウルドゥー語の文章をそのままに、ただ文字だけをヒンディー文字すなわちデーヴァナーガリー文字に変えたものが主であったので、学生たちは文字に慣れさえすれば、内容の理解ということについては何の困難もなかった。

東京外国語大学の故土井久弥教授が書いたものなどを見ると、このヒンドゥスターニーからヒンディーへの方向転換に関しては、大阪のほうが東京に10年先んじたようである。あるいはその理由の一つに澤が戦後日本に来たインド人兵士たちと直接、接触する中でヒンディー語の未来をいち早く見通したということを挙げてよいかもしれない。

文法：この変化は文法書にも早く現れ、大学1期生は1年生の時から、ナーガリー文字による『印度語入門』（澤英三、朝日新聞社、1948年）を使用した。便覧を見ると、26年の2年生用に同じく澤執筆になる『印度文典』の名が挙がっている。これは1943年に丸善から出た版で、ウルドゥー文字を使ったものであるが、山本が用いたとある。この他に澤執筆の『日印会話用語集』（1947年）なども学生は参考書として用いた。辞書は戦後しばらくは入手が困難で、せっかく輸入できても数が足らず学生全員に行き渡らないという悲劇も起きた。

会話：担当者が戦前と同じサント・ラーム・ヴァルマーであったことから、日本人教官のようにヒンドゥスターニーから純ヒンディーへとあっさりと切り替えることもできず、やはり“ヒンドゥスターニー・バートチート”(ヒンドゥスターニー会話)のままであった。ただ文字はナーガリー文字であった。教科書はやはり使わず、板書が主であった。昭和28年の1年生の会話の授業をまとめたノートを見つると、体系的とは言われないものの、その例文の内容が豊富で、かつ程度の高いことに驚かされる。

#### b. 1958年から現在に至るまで

講読：この頃から、ようやく講読教科書に文学者の作品や名のある言語学者の編纂したものが目立つようになってくる。ヒンディー文学者で最も早い例は58年のジャイシャンカル・プラサード、言語学者の例では60年のS.K.チャテルジーの名を挙げることができる。また、61年の4年生用のテキストに*Bharatiya Samskriti*の書名が見えるが、これが本格的にインド文化に触れた、講読としては最初の授業であったようである。60年代半ばに入ると谷村、糟谷と講師の陣容が充実したために講読テキストはますます多様化していった。

1968年より完全にヒンディー、ウルドゥーの2語体制に分れてから、一面の弊害として両方の言語を修得する便宜が失われた。この弊害を補い、かつヒンディー語自体の知識を豊かなものにする目的から、1977年度より2年次の学生にウルドゥー文字習得を義務づけている。

文法：1964年からは古賀執筆の『ヒンディー語教科書(1)、(2)』さらにその改訂版が用いられるようになり、80年頃まで使われた。また同じく古賀により著された『ヒンディー文法』がやはり同じ頃まで使われた。その間英語による本格的な文法書も使われた。他にも溝上富夫『ヒンディー文法、アジア・アフリカ文法便覧、No.13a』、田中敏雄・町田和彦共著『エクスプレス・ヒンディー語』、溝上富夫編『カセットヒンディー語』、古賀勝郎『基礎ヒンディー語』、R.Snell & S.Weightman *Hindi Teach Yourself* その他極めて多様なものが使われている。

会話・作文：ヴァルマーが急逝したため後任の外国人教官に適切な人材がなかなか得られず、結局1966年にラクシュミーダル・マーラヴィーヤが着任するまで、内容のある会話の授業が行われなかったのは不幸なことであった。また、同教官より始めて現在に至るまで作文の授業も主として外国人教官が担当するようになった。マーラヴィーヤのヒンディー語はサンスクリット系の語彙の多い、極め付けの純粋ヒンディーであり、ようやくこの時から講読、文法の内容にふさわしいヒンディー語会話の授業がなされ始めたといつてよいだろう。作文についても日本のおとぎ話、あるいはインドに関する日本語のエッセイを翻訳したり、またいわゆる自由作文を書いて、学生が提出したものを、添削するという本格的な形での授業はマーラヴィーヤの時代より定着した。

辞書：Bhargavaの*Standard Illustrated Dictionary*しか入手できない時期がかなり長く続いたが、その後次のような辞書が比較的安価にかつ容易に入手できるようになった。

M. Chaturvedi & B.N. Tivari, *A Practical Hindi-English Dictionary*

H. Bahari, *Learners' Hindi-English Dictionary*

K. Bulke, *An English-Hindi Dictionary*

K. Prasad, *Brhat Hindi Kosh*

1975年に初めて土井久弥編『ヒンディー語小辞典』(大学書林)がでたことは、何といても本邦のヒンディー語学習者にとっては限り無い朗報であった。また、語彙数は少ないながら、古賀勝郎編『ヒンディー語語彙集』が1971年に出た。

(5)大正15年、印度語部発行の雑誌『曼陀羅』に、アラビア語は2年次で文法を終わり、3年では読本を読むという記事がある。また、2年生のうち6名がアラビア組で残りはペルシア組であったともいう。概して、ペルシア語選択者が多かったと見える。先述の如くアラビア語が廃止されてからは、2年生から学生はペルシア語か英語かどちらかを選択するようになった。予想される如く、ペルシア語を選択するものの数は例年2、3名、時に

は一人ということもあった。昭和12年度を例に挙げると、2年生の授業は全部で8時間、その内、澤が講読、山本が文法(講読・作文の練習を含む)、マダグ・ラールがサアディーのゴレスターンの講読をヒンドゥスターニーと英語を操りながら教えたようである。3年生では7時間の授業時間があり、Sad Hikayat(百物語)、イラン史の講読があった。その他に、文法教科書として*Persian Conversation Grammar* (但し、教師による口述)を使った。辞書では昭和10年9月、『現代波斯語辞典』を200冊翻刻した事実があるので、おそらくこれを学生は用いたと思われる。戦前に赴任したインド人教官はいずれも、その頃のインドの知識人の通例としてペルシア語に堪能であったので、ヒンドゥスターニー語の傍らペルシア語を教えることに何の不自由もなかった。

### (3)

前述のように新制大学発足と同時に戦前の印度語部の名称はインド語学科と変わった。学生定員は1958年4月より30名とされた。58年度入学者については2年次、すなわち59年4月よりヒンディー語専攻とウルドゥー語専攻とに分れることとなった。66年度より学科名がインド・パキスタン語学科となるに従い定員も5名増えて35名(内訳はヒンディー18名、ウルドゥー17名)となったが、入学時よりヒンディーおよびウルドゥーの各専攻語毎に学生が分れるようになったのは2年後の1968年4月からであった。またヒンディー語科については1986年度より臨時措置として10名増の28名の定員となって現在に至っている。

戦前から今日までの卒業生総数は1,364名。内訳は以下の通り。

- 1 大阪外国語学校:1925年3月第1期卒業生15名より始め、1943年9月(9月となっているのは当時普通であった繰り上げ卒業のため)の13名まで、計232名。ただし第4、7期の卒業生は0。
- 2 大阪外事専門学校:1944年9月の14名より、1951年3月の16名まで、計99名。1、2ともに全員男子であることはいうまでもない。
- 3 大阪外国語大学:1953年3月の23名より、1991年3月の43名まで、計1033名。この内、ヒンディー、ウルドゥーの両専攻に分れてからの卒業生はヒンディー409名に対してウルドゥー459名。

戦後男女共学となってからの男女比率は、大学1期生から8期生までの総数165名のうち女子はわずか4名、全体に占める比率は2.4%、9期生から39期生までは総数868名のうち女子は257名(ヒンディー課程は144名、ウルドゥー課程は113名)、同じく比率は29.6%と飛躍的な増加である。1990年度はヒンディー29名中22名、ウルドゥー14名中9名、総数43名中では31名が女子、比率が72%と一時と全く逆転していることがわかる。専攻科修了者は6名。1969年4月の大学院外国語学研究所(修士課程)の設置にともない西アジア語学専攻の中にヒンディー、ウルドゥーの両語が設けられた。現在までの同課程修了者はヒンディー1名、ウルドゥー4名となっている。

## 戦後新たに着任した教官について

専任教官の着任順による一覧は次の通り。括弧内の数字は在任期間。

村田忠兵衛(1948. 4～1978. 3)、古賀勝郎 (1958. 4～ )  
加賀谷寛 (1961. 4～ )、濱口恒夫 (1966. 4～ )  
内田紀彦 (1960. 4～1968. 5)、桑島 昭 (1966. 4～ )  
溝上富夫 (1968. 4～ )、麻田 豊 (1978.10～1981. 9)  
松村耕光 (1982. 4～ )、高橋 明 (1987.10～ )

## 非常勤講師(ヒンディー実習担当者)

守野(旧姓田中)庸雄(1962. 4～1963. 3)、谷村干城(1966. 4～1977. 3)  
糟谷博子(1969. 4～1979. 9)、高橋明(1983. 4～1987. 9)

## 外国人教官(常勤)

L. D. マーラヴィーヤ(1966. 4～1970. 3及び1973. 8～1990. 3)  
スジャーター・クルシュレーシュタ(1990. 4～1992. 3)  
ギリーシュ・バクシー(1992. 4～ )

## 外国人非常勤講師

ラーデー・シャーム・ケートーン(1962. 4～1963. 3)  
ジャグディーシュ・ダヴェー(1963. 4～1965. 3)  
ウメーシュ・ヴァルマー(1965.?～1966.?)  
L. D. マーラヴィーヤ(1970. 4～1973. 3)

(高橋 明)

## <II. インド・パキスタン語学科(ウルドゥー)>

### 1. 歴史

加賀谷寛がインド語学科に講師として着任したのは昭和36年4月、同年3月に定年退官した澤名誉教授の後任であった。

ウルドゥー語の教育は1960年代前半までは、なお新制大学発足後の過渡期から脱していなかったようである。教官定員の不足とともに、教材、図書、外国人教官も当時なお不十分であった。加賀谷は関連の図書の充実に取り組んだが、定員枠の拡大はままならなかった。

昭和41年には、濱口恒夫(大IP10)を迎え、その後、1978年10月に、麻田豊が着任した。麻田は1981年9月30日をもって東京外国語大学に移った。1982年4月、松村耕光(大IP28)が着任、以後、加賀谷、濱口、松村の3名の専任教官によってウルドゥー語関係の教育・研究が行われてきている。

このころまで外国人の教官を得ることも困難で、関西在住のインド人の方に協力を依頼

していた。昭和39年から45年まで講師であったグレーリヤもその一人で、1894年生まれであるから、当時すでに高齢であった。ウルドゥーの外国人教官を格段に充実できたのは、パキスタンのカラチ大学文学部ウルドゥー学科スタッフであったA.K.カシュフィー(1970.4~1973.7)を迎えてからであった。カシュフィーは1932年インドのカーンプル生まれで、分離独立に際して、学生であったがパキスタンを支持して家を出て単身カラチに移った。新設のカラチ大学を修了後、アメリカのコロンビア大学に留学した後、昭和45年から3年間、大学紛争が過ぎ去った直後の本学科で教育に従事した。授業では学生を本国式に厳しく指導した。カシュフィーはまた本学のウルドゥー語図書の実のため助言と激励を与えた。それまで空白の多かったウルドゥー語の関係図書はこの時期から大きく改善されるようになった。あらゆる意味でカシュフィーはウルドゥー語教育のための恩人の一人で忘れることはできない。続いてナースィル(1975.10~1977.8)が同じくパキスタンのパンジャーブから来学、ウルドゥー語を教授した。ナースィルは詩人でもあり、パルウェーズ・パルワーズィーを号した。このあと、カラチ大学の社会学者アスラム・シャーが来学したが、シャーは本学科の教官も参加した文部省海外学術調査(大阪市大経済研究所)のプロジェクトの協力者として活躍した。1979年10月より客員教授として教鞭をとることとなったアスラム・シャーは、1981年10月にパキスタンに帰国、その後任としてタバッサム・カーシミリーが、1981年12月、ラホールより着任した。

非常勤講師としては、とくに南アジア経済論の古賀正則(現一橋大学教授)、現代ウルドゥー文学研究者の片岡弘次(現大東文化大学教授)をはじめ、次の人達から本学科は多大の支援、助力を頂戴している。

恵谷俊之(1965.4~1967.3)、近藤治(1969.4~1970.3)

石田康雄(1970.~1973.3)、山根聡(1989.4~1989.9及び1992.4~)

## 2. 教材

初期のウルドゥー語教材に関しては、よく分からないが、読本として、次の名が見える。

*Urdu Primer*, Allahabad, 1950(昭和31年度)、*Hilal-e Urdu*, Karachi, 1955  
(昭和34年度)

文法書としては、一時期、加賀谷が1960年代後半に作成したブルー・コピーのウルドゥー語入門教材(B4約60枚)が使用されていた。

現在、日本のウルドゥー語の初級教育で広く用いられている文法書は、蒲生禮一著『ウルドゥー語入門』であるが、この文法書の出版されたのは1977年で、既に10年以上も前のことであることから、現在この文法書に対する副読本的な文法書、或は、文法マニュアルのようなものを作成し、初級者への文法事項の徹底を図ることが求められている。

大学の3・4年段階のウルドゥー語学習者にとって、現在、最も必要とされているのは、恐らく、文学関係の教材の充実であろう。インド、パキスタンの文化、社会、政治、経済、

宗教等については、英語の数多くの優れた文献があり、日本語の文献もかなり存在している。しかし、ウルドゥー文学関係の英語文献は数少なく、また、日本語文献は微々たるものであると言わなければならない。

(加賀谷 寛・松村 耕光)

### 〈III. 言語〉

本学が新制大学として発足した1949年度のインド語学科の唯一の講義は、村田忠兵衛の「インド古代言語史」であった。この授業の内容については「大学便覧」にも記述のない時代であり、ノートも残されていないので、知る術もない。村田は1957年度に「古代中世インド言語史概説」の講義を行っている。これはインドの地理的背景の中で民族と言語の概観をした後、印欧語族、インド・アーリア語を三期に分けて概説したものであった。また、1955年度と1959年度には、澤英三が「ヒンディー・ウルドゥー語史」と「インド語史」の講義を行っているが、いずれも口述筆記と板書による授業で、特定の教科書などの利用はなかった。村田は、1965年度と1967年度の両年度にそれぞれ「インド言語史」と「インドの言語と文学」の授業を行っているが、前者では言語思想の発達史も考察している。

本格的なインド・アーリア言語学の論文を演習としてとりあげたのは、1961年度の内田紀彦(現園田女子大学教授)による、R.L.Turner, *Some Problems of Sound Change in Indo-Aryan*の講読が最初である。翌年の1962年度には内田は、この分野での古典的名著である、S.K.Chatterji, *Indo-Aryan & Hindi*を読んでいる。ヒンディー語の歴史的研究や他のインド・アーリアンとの比較研究にはなくてはならない本書は、その後も継続的に、古賀勝郎(1967年度、1980年度、1983年度)によって講義されている。古賀は、ヒンディー語で書かれたヒンディー語史の本として有名なDhirendra Varma, *Hindi Bhasha ka Itihas*の講読を1967年度にはじめており、また、1972年度には、Amba Prasad 'Suman', *Hindi Bhasha Atit aur Vartaman*を読んでいる。古賀は同年には、Dhirendra Varma, *Braj Bhasha*も読んでいて、これは初めてのヒンディー語方言学の教授であった。このように、言語学のひとつの大きな柱は歴史言語学であるが、もうひとつの柱である共時言語学の講義は、インド本国ならびにアメリカ合衆国での発達段階に応じて、1970年代後半から、溝上富夫がヒンディー語実習のなかで担当するようになった。記述文法はKamtaprasad Guru, *Hindi Vyakaran*、語用論は、R. C. Varma, *Acchi Hindi*、同 *Hindi Prayog*など、その他、ヒンディー語言語学雑誌のなかから論文を選んで読んでいる。また、80年代になると社会言語学の文献が現われ出したので、この面の講義も重視している。一般学生の関心も、純粹の言語学よりはこちらの方にあるようだ。R.N.Srivastava編、*Hindi ka Samajik Sandarbh*, Bholanath Tiwari, *Hindi Bhasha ki Samajik Bhumika*, Malik Mohammad, *Rajbhasha Hindi: vikas ke vividh ayam*, L.M.Awasthi, *Khari Boli Hindi ka Samajik Itihas*等をこれまでテキストとして使ってきた。最近ではG.B.理論を駆使して優れた論文を書く学生も現わ

れはじめた。

ベンガル語、パンジャープ語等の姉妹言語を修得すると、当然にインド・アーリアン比較文法に関心が起きるので、1983年度から、これを演習のひとつとしている。もっとも、1970年度には、すでに、ウルドゥー語の客員教授カシュフィーが「近代インド・アーリアン比較文法」を開講しているが、使用したテキストは分からない。溝上はJohn Beames, *A Comparative Grammar of the Modern Aryan Languages of India* と、1990年度から、Colin P. Masica, *The Indo-Aryan Languages* を使用している。

(溝上 富夫)

#### 〈Ⅳ. ヒンディー語・ウルドゥー語以外の南アジア諸語の授業〉

外国語大学になってから、ベンガル語を選択科目として初めて教えたのは、1963年の内田だがインド留学を控えていたので、実際に授業があったのは夏休みまでの週4時間(2コマ)1単位という変則的なものだった。正式に、インド・パキスタン語学科でベンガル語を2単位の選択必修科目として教え始めたのは、1968年助手として採用された溝上富夫である。新奇さもあって、最初はかなり数の受講生があった。その後、年によって受講生の増減はあるが、溝上海外出張の1975年を除いて毎年開講して現在まで続いている。但し、1985年からは、追手門学院大学教授、シオンディプ・タゴールが非常勤講師として出講している。現在では、後期の演習4単位となっている(但し、大学院は2単位)。

ベンガル語は文法が簡単なので1年で十分に文法は終えることができ、かなりまとまったものを読むことができる。過去の受講生総数は、100名を越えている。現在は、初級だけしか開講していないが、スタッフにやや余裕のあったときには、中級あるいは上級も設けたこともあった。しかし、ここ10年桑島昭が後期の演習(4単位)のベンガル近代史にベンガル語の文献を読んでおり、受講生は少ないが、これが事実上の中級講読の役目を果たしている。社会科学の分野でも、ベンガル語の研究価値はあるのである。テキストは、はじめはベンガル人の子供が使う古典的な「正書法読本」を使っていたが、文語文法で実用的ではないので現在では、口語文法を中心に教えている。

パンジャープ語を後期の演習科目として開講したのは、1982年が初めて溝上が担当した。自著の『文法便覧』を用い、バガト・シングの伝記を読んだ。ついで1986年にも一度開講したが、このときは、『文法便覧』を終えてから『パンジャープ語会話集』を読んだ。その後パンジャープ語は開講していない。

タミル語は、移転直後の1980年に初めて開講した。これは、パンジャープ語と同様、日本の大学では初めてのことであった。非常勤講師として徳永宗雄(現京大助教授)を招いた。タミル語は3ヶ年続いたが、現在は開講されていない。

(溝上 富夫)

## 〈V. 宗教・思想(その1)〉

インドの宗教及び思想についての学習・研究が本学科の学生のみならず、古くインド文化の伝播したインド周辺諸国の言語文化に関わる諸学科の学生にも甚だ重要なことはここに詳述する必要もない。村田忠兵衛が担当した本学科の授業の一つであったインド思想史が1955年以降東洋思想史Bとして後期専門教育科目(後に関連科目哲学史Ⅲ)の一つに含まれた理由もそこにあったものと思われる。

村田がこの分野の授業を担当したのは1953年度が最初で「法・財・愛を中心とするインド人の生活思想」のテーマで「インド思想を哲学以前の段階で論じる」のが目標であった。それ以降村田は1977年度まで毎年この分野の授業を担当した。ただし、1951年度には「南方仏教史」の授業をタイ語科とビルマ語科の共通講義として行っている。また、1953年度には「インド、セイロン、ビルマ仏教史」の題目で上座部系統の仏教思想を講義した。これはビルマ語学科の前期の講義であった。1954年度には初めてインド思想史の題目でバラモン教の成立課程に重点を置いた講義を行ったが、これはインド語学科のみの授業であった。

1955年以降東洋思想史B(インド思想史)の授業で村田が行った講義は大別次の四つのテーマに分類することができる。(Ⅰ)は仏教概説で、いわば主に晩年の講義であり、(Ⅱ)は仏教思想史の題目でインド仏教史や教団の史的発展についての講義、(Ⅲ)は大乗仏教思想の史的考察で「三国仏教史」などもこれに含まれる。(Ⅳ)はインド人の社会思想乃至は生活思想を論じたもので、プラーナや古典梵文学を素材として論じたものであった。

村田退官後は奥田清明(四天王寺国際仏教大学教授)が1978、1979年度とインド思想史の概説を担当したが、1980年度から1988年度までの9年間は奥田真隆がプラーナ聖典やヒンドゥー教の概観を中心とした講義や演習を行った。1989年以降今日までは長崎法潤(大谷大学教授)がインド文化史研究Ⅰ、Ⅱの中でインド宗教思想史の概説とシャモンの宗教を中心に講義を行っている。

(古賀 勝郎)

## 〈VI. 宗教・思想(その2)〉

イスラム(回教)については、山本が昭和25年頃、アラビア語学科で講義し、昭和37年には、インド語学科で「回教史」を講義していた。インドのイスラムについては、同じ頃、村田が「インド史概説」の中で講義していた。昭和36年、加賀谷が後期講義で「インド・ムスリムの近代思想史」を担当し、昭和39～40年、「近代イスラムの諸潮流」の題で同じく講義がなされた。その後、加賀谷は前期で今日まで、「イスラム概説」の講義を行い、イスラムの宗教文化の基礎知識の学習を重点においている。この講義はペルシア語、アラビア語学科の学生にも共通科目である。また、加賀谷はウルドゥー語実習(後期)で、19世紀以降の南アジア・イスラムを叙述したMuhammad Ikram著 *Mauj-e Kausar* を連続して使用してい

る。

(加賀谷 寛)

## 〈Ⅶ. 文学〉

### 戦前の文学研究：

ウルドゥー文学に関しては1932年に当時印度語部内で発行されていた『アーリヤ学会会報』などに澤執筆になる、プレームチャンド、ガーリーブなどの紹介記事があることから、戦前も幾らかは関心が持たれていたことは推測できる。しかし、澤に限らず、同じ頃東京外国語学校で教鞭を取っていた蒲生禮一も研究の力点はペルシア語・イラン文学に置いており、ウルドゥー文学に関する研究はまず二次的なものであった。本学でもプレームチャンドの作品が講読授業に用いられていたことは既に紹介したが、文学そのものが研究・教育の対象とされていたとは考えにくい。

### 戦後の文学研究：

1955年になって、澤の講義題目として「ヒンディー・ウルドゥー語史並びに文学史概説」が現れる。おそらくこれが教室における文学史研究および教育の始まりであっただろう。この概説講義は57年の便覧にも記載がある。プレームチャンド以外の作家としては、57年にクリシャン・チャンダルの名が見える。翌58年、ジャイシャンカル・プラサードの作品が澤により後期実習科目で取り上げられた。この頃がヒンディー文学講読の始まりとってよかろう。

1959年古賀、さらに60年の内田とヒンディー語教官陣の顔ぶれが変わるにつれて、より多彩なヒンディー文学の作家と作品が教室で読まれるようになっていった。ジャンルにおいても広がりを見せ、フィクションのみならず、自伝、随筆集などが取り上げられるようになった。64年度にはインド人英語作家の作品の名までが便覧にあげられている。こうした研究の深まりを受けて、ヒンディー文学史を単独で取り上げた演習の授業が古賀により1964年に行われた。テキストはH.P.プラサードの「ヒンディー文学序章」およびR.C.シュクラの「ヒンディー文学史」であった。さらに中期ヒンディー文学の教育・研究についても古賀が道を開いた。便覧にその旨、記載はないものの1978年に中期ヒンディー文学史、翌79年にトゥルスイーダース作ラームチャリットマーナスの講読授業がなされた。

1966年、谷村、さらに客員教授のマーラヴィーヤが加わるに及んで文学研究・教育はいっそう充実することになった。谷村の講読は20世紀の主要作家の散文作品が中心であったが、語学としての講読がそのまま文学研究につながるというまことに希有な授業であった。マーラヴィーヤは散文作家に加えて、それまで顧みられることの少なかったヒンディー現代詩を取り上げた。1983年より高橋が現代短編小説の講読を担当している。

ウルドゥー文学の教育・研究は、1961年に着任した加賀谷の他、麻田、片岡(1974.4~1985.3)、松村により担当されてきている。各客員教授も日本に於けるウルドゥー文学の教育・研

究の発展に尽力している。使用されたテキストは、各教官の個性を反映して様々であるが、プレームチャンド、マントー、グラーム・アッバース等の小説がテキストとされることが多い。

(高橋 明・加賀谷 寛・松村 耕光)

#### 〈Ⅷ. 文化概論〉

主として新入生のための導入部としての役割を担った前期の文化概論は、桑島が1966年度に始めた段階では「現代インド事情」と名付けられていたが、その後、「インド・パキスタン概説」と改められ、ここ数十年は、「南アジア概説」あるいは「現代南アジア概説」として定着している。

担当については、桑島と濱口が1年おきに交代して行った時期もあったが、その後文化概論二つ、あるいは三つを桑島、濱口およびその他の教官で並行して担当している。

1970年代の末から、概論の内容は、南アジアの現代史(この起点についての論争はともかく、第一次世界大戦以降)と現状分析を二つの柱に据えることになった。そして、特定の教材を読むよりも、南アジアに起りつつある現実のなかで現代史についても考えるようにしている。その年に行われた南アジア地域の選挙の結果などは、資料を入手できた段階で一緒に学び、インドの選挙運動に使われたという映画主題歌「エーク・ドー・ティーン」を「鑑賞」したこともある。

今後の課題としては、南アジア地域を一つの完結した世界としてとらえることなく、世界的規模で起っている現実、歴史的变化と組み合わせながら、南アジアの政治と社会の特質を紹介し、とくに、現在南アジアに生きる人達が何をどのように考えているかの一端でも伝えることができればと思っている。

(桑島 昭)

#### 〈Ⅸ. 歴史〉

インド史もしくは南アジア史関係の授業は、1950～77年度は村田忠兵衛がインダス文明からイギリス植民地時代までの文化史概説を担当した。その間、恵谷俊之が1963～65年度に中世史を、澤英三が54、56、58、60年度に近世史(ムスリム支配時代)を講義した。村田の退官後前期のインド史概説は1978、81～84年度は近藤治(追手門学院大学教授)、79～80年度は長島弘(長崎県立国際経済大学教授)が担当し、85～87年度は河合明宣(京都大学講師)が近代史を中心に論じた。1991年度は中里成章(神戸大学教授)が通史の講義を担当している。なお1989、90年度には長崎法潤(大谷大学教授)が後期のインド文化史を担当した。

近・現代史は、1966年度以降主としてインドについては桑島昭が、パキスタンについては濱口恒夫が、講義・演習あるいは語学実習の授業としても担当しているが、通史となると南アジア史専門の歴史学者が関西には少なく、担当講師の確保が困難に直面した。従って、

1988、90年度には濱口が、社会経済史を中心に概説を講義した。

#### 〈X. 政治経済(その1)〉

学科の授業科目に、専門の研究者によるインド経済論(のちのインド・パキスタン経済論もしくは南アジア経済論)が開設されたのは1960年代に入ってからのものである。それまでは1951年度に村田忠兵衛がインド政治経済史を担当し、54～61年度はS.R. ヴェルマーがインド経済地理の題目で英語で講義した。インド経済に関心をもつ多くの学生は、すでに1955年度以来共通専門教育科目に置かれていた尾崎彦朔(大阪市立大学名誉教授)の東南アジア経済論を受講した。当時はまだ「南アジア」という名称は一般的に用いられておらず、東南アジアに含まれることが多かった。尾崎は「後進国経済論」つまり今日の発展途上国経済論を中国、インドネシア、インドの事例を中心に講義した。この科目は1962～63年度には学科との共通科目とされた。

1964～82年度は古賀正則(現一橋大学教授)が学科内の授業科目としてインド・パキスタン経済論(76年度から南アジア経済論)を担当し(68～69年度のインド滞在期間を除く)、政治経済の現状分析を通して南アジア地域研究を論じた。1967年度から濱口恒夫が植民地インド経済史を担当するようになり、南アジア経済について歴史的研究と現状分析の双方による授業態勢ができあがって、今日に至っている。1968～74年度には経済史学の西村孝夫(大阪府立大学名誉教授)もインド木綿工業史およびイギリス東インド会社史を中心に経済史を講義した。桑島昭の現代政治史を加え、さらに講義・演習だけでなく専攻語の実習科目をも含めるならば、これだけの南アジア政治・経済論を授業として開設する大学は当時はほかになかった。なお1977年度からは前期の授業として南アジア経済・社会概説(濱口)が開設されている。

その間1976、78年度には、古賀正則が中心になって大阪市立大学経済研究所において、本学、大阪府立大学、東京外国語大学の研究者からなる調査団(団長尾崎)が組織され、インド・パキスタンにおける農村から都市への人口移動と言語・文化変容に関する現地調査(文部省科学研究費海外学術調査)が実施された。これは現在頻繁に行われている組織的現地調査の嚆矢となった。その際に調査団が心掛けた、現地研究者との対等協力と調査・研究成果の現地学界への還元は、いまでは海外調査の常識となっている。

その後南アジア経済の現状分析の授業は、1983～84年度の国際経済学の杉谷滋(関西学院大学教授)、84～88年度の農業経済学の宇佐美好文(大阪府立大学助教授)、89～90年度の労働経済学の木曾順子(熊本商科大学専任講師)を経て、1991年度は脇村孝平(大阪市立大学助手)が計画的経済開発、三上敦史(大阪学院大学教授)が企業経済を中心に講義している。

なお本学の南アジア研究者は、過去20年以上にわたって学外の関西在住研究者とともに南アジア研究会を組織し、研究者の相互交流と研究成果の一般市民への普及をはかってきた。1980年代に入って東京にも同様の南アジア研究会が発足し、両者の活動の基礎のうえ

に1988年に「日本南アジア学会」が設立されたことも特記してよいであろう。

(濱口 恒夫)

### 〈政治経済(その2)〉

インド近・現代史やインドに関する社会科学の領域でヒンディー語教材を探すが、大変困難な時期があった。インドのヒンディー語地域で活躍する歴史家や社会科学研究者の多く、あるいは殆どの人が、その研究成果を英語で著わし、ヒンディー語で出版されたものが、革命家の伝記に限られていたからである。1970年代末までは、後期実習には、当時デリーで発行されていたヒンディー語週刊誌『ディンマーン』に掲載された政治評論を教材として多用した。上八キャンパス時代の教材で強く印象に残っているものが二つある。一つは、マラヤーラム語からヒンディー語に訳されたケーララの農民運動家A. K. ゴーパールンの『自伝』で、この人の飾らない、親しみやすい人柄をしのばせるものがあった。もう一つの書物は、P. C. ジョーシー『インドの村落』である。インド独立後の土地改革の成果と問題点を1961年頃までを叙述の下限として整理したこの書物は明快に氏の視点を提示したもので、ヒンディー語、英語を問わず、この研究領域での一つの水準を示している。

1980年代に入って、教材としてラーフル・サーンクリットヤーヤンの古典的ともいえる小品をいくつか採用した。この時期になると、インドにおいてヒンディー語の政治・外交・経済について書く人達も多くなり、大学のテキスト用に編集されたインド現代史の入門書も出るようになった。その代表的な作品がA. K. シンの『今日のインド』である。必ずしも教科書として書かれたものでないが、インド経済の専門家として知られているP. H. プラサードの『不均等経済発展下のインド』も現状分析の視角を濃縮した形で提出した好著である。3、4年用の実習では、最近では、できる限り、一冊を現代史、他の一冊を現状分析にあてるようにしている。

南アジアの現代史の演習も、当初は、参加者全員にインド、あるいは他の地域からテキストを取り寄せることが難しかった。1980年代の初め頃までに、パキスタン現代史のほか、ネパールの現代史や南インドの現代史を取り上げた。1980年代半ばから、シュミット・サルカール『近代インド1885-1947』を4ヶ年連続してテキストとして使用し、その殆どを読み終えることができたが、イギリス帝国史を専攻する本学の秋田講師が参加されたことは学生にとっても大きな刺激となった。

1977年度から続いているベンガル近代史の演習では、ベンガル語のテキストを使用している。テキストのなかでは、カムルッディン・アフマド『バングラデシュにおける中産階級の精神の展開』が興味深かった。

(桑島 昭)

## 〈Ⅴ. 古典インド研究、古典語及びその他の科目〉

古典インド研究の科目と先述のインドの宗教・思想関連の科目とを峻別することは甚だ困難である。先述の村田の1953年度の授業「インド人の生活思想」をこの項目に入れることもできよう。

村田忠兵衛はインドの総合的な理解を重んじた世界的な規模におけるインド学の成立を論じるため前後13回に亘って「インド学史」と題する講義を行っている。

一方、インドの古典文学をその広い背景とともに理解させようとの見地から演習形式の授業が1955年代の後半に試みられたことがあったが機が熟さず継続できなかった。

1973年度に村田が行った講義「マヌ法典を中心として見たインド人の社会思想・法律思想」も単発的なもので、この後には続いていない。ようやく1987年に岡田行弘(現神戸女子大学瀬戸短期大学助教授)が古典インドの社会・習慣をダルマシャストラの概説という形で論じこの分野で新しい頁を開いた。翌年には二大叙事詩を概観し、バガヴァッド・ギーターを論じた。続いて1989年には小林信彦(京都大学助教授)が叙事詩から古典文学への移行を論じた。

外国語学校以来本学科の第二言語ないしは兼修外国語としてペルシア語やアラビア語が採用されたのに対し、サンスクリット語は専攻のヒンドスターニー語(ウルドゥー語)との関連の稀薄さから採用されなかった。本学で最初にサンスクリットの授業が行われたのがいつなのか古い記録が得られず確認できない。確実な記録では1948年4月1日に大阪外事専門学校講師に任命された村田忠兵衛が同年よりサンスクリット語を教え始めた。村田の言(「梵語学半生記」、アーリヤ学会会報第17号、昭和25年6月)によれば、1948年度には「大阪外専に、古典語学科創設の途が開かれ、ギリシャ、ラテン、ヘブライと並んで、サンスクリット、パーリ語学科が創められ、不肖にその任務を与えられたのは、誠に望外の光栄という他ない転機で……」ということであるが、その後の展開ではそのようにならなかった。外国語大学に古典語講座の開設は当然望ましいことであったが、残念ながらそれは文部省の認めるところとも大学内部の合意を得るところともならなかったようだ。

大学になってからも村田は退官する1977年度まで研究外国語(後に関連外国語科目中の研究語学)の一科目として毎年教えた。しかしほぼ初級課程のみの授業であった。中級課程は1950年代に前後4回開かれたのみであった。1952年度に榊亮三郎の『解説梵語学』をテキストとした以外はほぼ板書に終始した。和文梵訳の練習問題が特徴的な授業であった。1978年に村田の退官に伴い小林信彦が担当することになった。1979年度には初級に加えて中級クラスが開かれた。1980年度からは小林に代った奥田真隆が担当し、1988年度まで続けた。1989年度からはサンスクリット初級はパーリ語と並んで本学科の後期演習科目の一つとして組み入れられている。そしてサンスクリット文学入門への道はインド古典文化研究の授業に続いている。1991年度からは1989年度から担当した小林に代って松村恒(親和女子大学助教授)が担当しているが、I.P.語科に限らず西洋語科を含む多数の語科の学生が受講して

いる。

サンスクリット語と並ぶ古典語で南方仏教の聖典語でもあるパーリ語の授業もほぼサンスクリットと同時に開始されたものと思われる。1948年度の職員表にはサンスクリット語、パーリ語担当として村田忠兵衛の名が記載されている。手元の記録としては大学の授業が開始された1949年にタイ語科の実習の授業の一つとして毎週2時間通年2単位とされ「タイ語としての巴利語」の題目で村田担当とあるものが最初のものである。しかしタイ語の授業の一環としてはこれが最初で最後のものである。翌年すなわち1950年度からは研究外国語の一つとなっており、サンスクリット語が毎年開講されたのに対し不定期にしか開講されていない。1954年度においてはこれは研究外国語ではあるがビルマ語科3年生との共通講義ともされている。1956年度のこの授業もやはり研究外国語であると同時に「ビルマ語のためのパーリ語概説」と題され3年生の講義ともなっている。

このようにパーリ語の場合は毎年ではなく不規則に隔年、あるいは、2、3年の間隔でそれもビルマ語学科後期専攻科目(実習)と共通した形で講義がなされることが多かった。1966年度から1977年度までは毎年ビルマ語学科の後期課程の実習の一つとして研究外国語と共通の授業がなされた。これもサンスクリットの場合同様板書を中心とする授業でテキストは用いなかった。村田退官後は、1979年度に奥田清明がビルマ語科とは関係のない研究語学の一つとして授業を始めたが、翌年からは奥田真隆に代り1988年度まで続いた。1989年度からはI.P. 語学科の後期演習の一つとして長崎法潤が担当しているがビルマ語科などI.P. 語科以外の受講生も多い。

サンスクリット語、パーリ語以外のいわば古典語とすべきものにプラークリット語があるが、この面での最初の授業は1968年度に開設された奥田清明の中期インド語史である。プラークリットの概説であったが、事情で中断し、復活されたのは1973年度のことである。この年はプラークリット諸語のうちジャイナ教の聖典語アルダマーガディー語がとりあげられたが、翌年はプラークリット研究(I)としてプラークリットの概説とジャータカ概説の演習が行われた。1975年度はプラークリット(II)としてその続きが行われた。1976年度からはパーリ語を含むアルダマーガディー、アパブランシャ語など中期インド・アーリアン諸語の文献講読の授業が行われたが、これも教官の都合により1978年度をもって中断したまま今日に至っている。

(古賀 勝郎)

## <Ⅶ. 卒業生>

インド・パキスタン語学科の卒業生は、各分野で活躍する(あるいは、した)ユニークな人材が豊富である。以下に、主な人を紹介しよう。

文壇では、誰一人知らぬ者はない陳舜臣(20回)。江戸川乱歩賞、直木賞、大佛次郎賞を受ける。戦時中、母校の西南亜細亜語研究所の助手をしていたが、敗戦により「中華民国

国籍」となって国立大学の教官になれないため、神戸で貿易に従事しつつ、文筆にいそしむうちに、本当の作家になってしまった。あの「差別法」がなければ、作家陳舜臣は生まれなかったということになるが、さてどうであろう。

(地方)政界では、永年堺市長を務めた故我堂武夫(3回)がいる。九州帝国大学を卒業して、しばらく大阪府の代用教員(住之江女学校)をした後、昭和11年より堺市役所勤務、昭和30年から47年まで助役を務めたあと、47年から59年迄市長。57年、勲三等旭日中綬章受章、59年堺市の名誉市民となる。

財界には、伊藤忠の副社長を務めた松井弥之助(16回)がいる。伊藤忠のラングーン事務所長からタキロン化学へ出向、経営を建て直して社長に就任、安宅産業の経営危機に伴い、同社の最高顧問として派遣される。このとき、マスコミに対して「私は占領軍司令官として行くのではない」といったことから「松井マッカーサー」といわれた。同社が伊藤忠に吸収合併されたのに伴い、伊藤忠の専務に就任、さらに副社長になる。昭和58年退任。同社には、常務をつとめた故見次貢祐(7回)もいる。ライバルの丸紅には専務をつとめる竹内正蔵(27回)がいる。三井物産旧役員で現在、京葉都市サービス(株)常務の三枝亨(25回)はインドとクウェート勤務の経験があり、アラブの専門家として知られ、『アラブの生活・ビジネス慣習とつきあう法』(共著、有斐閣)の著作がある。

官界には伝統的に外務省に人材が多い。ボンベイ総領事の武藤友治(大1)はヒンディー語の達人で、池田勇人首相の訪印の際通訳をつとめたのはよく知られている。また、氏の寄贈図書が、母校に武藤文庫としておさめられている。後輩のエジプト公使、金子義和(大9)は、キャリア組に抜擢された数少ない外交官のひとりである。

ジャーナリストとして活躍する人も多い。朝日新聞の笹川正博(20回)、毎日新聞の椎屋紀芳(大10)等がいる。椎屋には冤罪事件に関する著書『冤罪はこうして作られる』(風媒社、1982)もある。

学界では母校に多いのは当然としても、インド学を越えた分野で活躍する人もまた多い。主な人は次の通り。

太田一雄(5回)法学博士、松蔭女子学院大学学長、理事長等を務め、勲三等瑞宝章、兵庫県功労章を受章。現在、国際法務研究所所長。氏は、戦前から終戦に至るまでの間、スバス・チャンドラ・ボースとともにインド独立運動に関わった。その際、インド語の語学力を遺憾なく発揮した。故民秋重太郎(5回)宗教学、昭和18年から31年まで、同志社大学神学部教授、31年から40年まで梅花女子短期大学の2代目学長。39年から40年まで梅花女子大学の初代学長を務めた。神学博士。一井修(6回)都市経済論、立命館大学教授を経て、1953年より1983年まで近畿大学教授、退職後同大学名誉教授。勲四等旭日中綬章授与。伴康哉(15回)アラビア語、本学アラビア語学科教授を経て四天王寺国際仏教大学教授。神木良三(大4)証券論、大阪商業大学助教授。湯山明(大5)インド哲学、国際仏教研究所所長。守野庸雄(大7)スワヒリ語学、東京外国語大学ア

ジア・アフリカ言語文化研究所教授。平島成望(大8)開発経済学、明治学院大学教授。奥田清明(大9)インド哲学、四天王寺国際仏教大学副学長。浜渦哲雄(大10)エネルギー論、アジア経済研究所。小林明美(大11)日本語教育、大阪外国語大学日本語教育センター所長兼教授。和田幸子(大11)国際経済論、九州国際大学教授。新井俊一(大12)英語、相愛女子短期大学教授。三上敦史(大13)経営史、大阪学院大学国際学部教授。奥平竜二(大13)ビルマ語、東京外国語大学教授。須田悦生(大14)国文学、静岡県立大学教授他。

中学・高校で教鞭をとる者も多いのはいうまでもない。そのなかには、大同生命国際文化基金より、ウペンドラナート・アシュクのヒンディー語長編小説『崩れる壁』の翻訳を出版した、大阪府立港南高等学校教諭、三木雄一郎(大31)がいる。

女子学生が増えるにつれ、これまで見られなかった新職種に進出しつつある。すでにスチュワーデスが4名出ており、琴演奏家、ファッション・モデル、医者も出ている。女性の活躍の先鞭をつけたのは、インド映画祭実行委員会事務局長、松岡環(大19)で、インド映画といえばこの人といわれるほどマスコミでも有名である。その他にも、卒業後も自らの興味と関心にしがたって、地道に研究を続けている人たちの多いことを付言しておく。

(溝上 富夫)

### 〈Ⅷ. 語科関係の図書〉

図書の充実はあらゆる段階の教育研究の機関において当然求められる事柄であるが、本学が新制大学として発足し発展するに際しては最重要視されるべきものの一つであった。

新制大学発足時に本学が置かれた教育研究の条件乃至は環境が如何なるものであったかの一例として本学科の状況を記録しておくことは無益ではなからうと思う。敗戦このかた1960年代の始めまで極度に外貨事情の苦しかった状況では外国からの図書購入は非常に制限されていたために研究資料どころか教科書の取り寄せすら不可能な時期が続いたのであった。因みに1961年度の記録によると教官研究費は個人3万円、1講座の図書購入費は2万円で、それらの合計額のほぼ全額が図書の購入にあてられた。ところが当時の円とルピーの交換レートは1ルピーが75円、書店のレートは1ルピーが120円であった。1991年現在、図書の購入費は教官研究費の一部からのみ費出されるが教官研究費は一人年額約30万円である。書店のレートは1ルピーが約13~14円となっている。ということは、この30年間研究費は実際上増額されていないのに現在インド、パキスタンからの図書購入が比較的容易なのは円とルピーの交換レートのおかげでしかないということになる。

以下に1963年度末に行った我々の調査による外大図書館蔵の本学科関係図書の概要の記録を示す。僅少ながら誤差はあろう。なお、「旧分類」は新制大学発足前(1949年以前)の本学図書館独自の分類表による。「新分類」はそれ以降の日本十進分類法による。

#### [旧分類]

宗教・童話(H1)〔159〕、歴史〔37〕、伝記〔14〕、史料〔4〕、地理〔50〕、  
地図〔2〕、考古学〔3〕、語学史・文学史(H10,S9)〔19〕、詩歌(H20,S1)  
〔21〕、戯曲(H9,S1)〔10〕、小説(H30,S3)〔33〕、自伝(H6)〔6〕、評論・随筆(H4)  
〔4〕、叢書・選集・全集・読本(H22,S3)〔25〕、辞典・文法・会話(H78,S23,P13,D10)  
〔124〕、芸術史〔1〕、音楽・歌謡〔1〕、美術史〔6〕、法律〔5〕、  
政治〔12〕、経済〔10〕、植民地〔2〕、外交〔2〕、随筆〔2〕、年鑑〔3〕  
総数〔555〕

〔 〕点数(H=ヒンドゥスターニー語などの近代インド・アーリアン語によるもの及び旧インド関連のもの、S=サンスクリット語、P=パーリ語・プラークリット語、D=ドラヴィダ語)

#### [新分類]

逐次刊行物〔7〕、ジャーナリズム・新聞〔1〕、哲学〔5〕、哲学各論〔17〕、東洋思想〔27〕、心理学〔1〕、歴史〔34〕、アジア史・東洋史〔94〕、伝記〔13〕、地理・地誌・紀行〔46〕、社会科学〔43〕、政治〔51〕、法律〔7〕、経済〔79〕、財政〔3〕、統計〔4〕、社会〔36〕、教育〔12〕、民俗学・風俗習慣〔13〕、  
植物学〔1〕、動物学〔1〕、技術・工学〔4〕、建設工学・土木工学〔1〕、  
金属工学・鉱山工学〔1〕、化学工業〔1〕、産業〔8〕、農業〔17〕、蚕糸業〔6〕、畜産業〔3〕、商業〔5〕、芸術〔10〕、インド諸語〔284〕(ヒンディー語〔160〕、ウルドゥー語〔39〕、サンスクリット語〔76〕、パーリ語〔9〕)、  
インド諸文学〔470〕(ヒンディー文学〔349〕、ウルドゥー文学〔34〕、ベンガル文学〔67〕、その他のインド諸文学〔20〕)  
総数〔1,305〕

約30年後の今日の蔵書数を詳細に紹介することは出来ないが、1991年7月末現在の語学及び文学関係のものに限って記すと次のような状況になっている。

ヒンディー語学〔626〕、ウルドゥー語学〔318〕、ベンガル語学〔101〕、サンスクリット語学〔136〕、パーリ・プラークリット語学〔74〕、パンジャブ語学〔46〕、ヒンディー文学〔6,158〕、ウルドゥー文学〔2,657〕、ベンガル文学〔1,257〕、パンジャブ文学〔281〕、サンスクリット文学〔198〕、インドの英文学〔80〕

#### 学科関係の特殊文庫

本学には石浜文庫を始めとする特殊文庫があるが、インド・パキスタン語学科の関係では、卒業生の武藤友治(大学1回卒)の寄贈(1974年)になる武藤文庫と澤英三名誉教授の寄贈(1983年)になる澤文庫とがある。武藤文庫には総数1,092点が収められており、主要なも

のはヒンディーの文学書(661)及び歴史学関係(84)のものであるが、不安定な出版事情の続くヒンディー語出版界では今や得難い1950年代と1960年代前半の刊行物が多数含まれている点に特徴がある。

澤文庫は総数1,189点で、ウルドゥー文学(124)、ヒンディー文学(85)、ウルドゥー語学(55)、ヒンディー語学(42)に関するものが主要であるが、インド・パキスタンの分離独立前のウルドゥー語及びヒンディー語の初等教科書を多く収蔵しているのが特色である。

(古賀 勝郎)

#### 〈XIII: 視聴覚資料について〉

ヒンディー語やウルドゥー語の視聴覚教材は1960年代までは、リングフォン(ヒンドゥスターニー語、ほかにSP盤1枚だけのベンガル語もあったが)とアメリカ陸軍で使っていたSpoken Hindustani以外には目ぼしいものはなかった。1年生だけにL. L. の授業がはじまったのは、1962年からであるが、その頃どういう教材を使っていたかの記録はない。恐らく、Native Speaker自身が吹き込まれたのであろう。1966年に、初めて本格的なヒンディー語の客員教授として、ラクシュミーダル・マーラヴィーヤ氏を迎えるが、氏は、どちらかといえばあまり機械に頼らないで教えることを好まれる、やや古いタイプの語学教師であった。しかし、氏の就任によって、美しい折目正しいヒンディー語に接触できるようになったのは学生にとっても教官にとっても大きな福音であった。同じことは、1970年、初めてパキスタンからウルドゥー語の客員教授カシュフィー氏を招聘したことについても言える。1970年代になると音声資料の方は、市販のものが徐々に増えてきた。World Travel Seriesとかいうのがあれば、必ずヒンディー語のが含まれているので、それらを徐々に買い揃えていった。インドやパキスタンからも豊富にカセット・テープが発売されるようになった。1989年現在、南アジア諸語(当然、ヒンディー語とウルドゥー語が中心だが、パンジャブ語やシンハラ語といったものもある)に関する音声資料集は、合計約60種類ある。

1980年代に入ってから顕著なできごとは、ビデオテープの普及であり、世界でもっとも映画の盛んな国、インドの映画のビデオも簡単にかつ大量に手に入るようになった。これは語学教育の歴史で革命的なできごとと云ってよいほどのことである、1982年に、ヒンディーでは初めて、2年生にヒンディーの映画のビデオを使った授業を導入し、以後毎年続けている(担当は溝上)。毎年、1本ずつ違う映画を使っているの、ほぼ10本を鑑賞したことになる。1991年度に使っている映画は、インド・パキスタンの分離独立を背景にした「熱風」という有名な作品で、テキストのシナリオはアメリカのカリフォルニア大学出版から出されたものを使っている。学生に興味を持たせ、映像を通して南アジアの文化を印象深く理解させるといふ点では、効果的である。ウルドゥー語でも、1988年以来、松村がビデオを使った授業をしている。現在、外大全体で映画資料の数は2千点を超えるが、そのうち、南アジア関係の資料は100点を超える。インドのTVドラマシリーズで有名になった「ラーマヤナ」全34巻、「マハーバーラタ」全46巻も揃っている。

(溝上 富夫)

## 6. タイ・ベトナム語学科

### 〈タイ語学科の創設と基礎づくり〉

昭和24(1949)年の大阪外国語大学の発足と同時に、タイ語学科も出発した(大学は12学科構成で発足したが、タイ語学科のみが新設で、他の11語学科は専門学校時代からの継承であった)。その出発と基礎固めには、富田竹二郎という個性が大きく寄与していた。大阪外国語学校(英語部)の出身で、戦前の昭和17年に日タイ交換学生としてチュラーロンコーン大学に留学し、タイで終戦を迎え、昭和21年7月に引き揚げ船で帰朝した後、大阪外事専門学校に講師(中国語)として任用されていたのが富田であった。その富田を教官として、6月に迎えた第1期生9名(退学1、死亡1、卒業7)、それに富田が辛くも持ち帰った数冊の辞書と教科書というささやかな資産でもって、ともかく第1歩を踏み出したのであった。募集定員15名、隔年募集でのスタートであった。

それから約20年間、気鋭の富田のもとに学科の基礎造りが進展する。いかにしてタイ語教育の環境をつくるか、つまり教材(教科書)の作成が当初の課題であった。コピー機がなかった当時、テキストづくりは謄写印刷に頼らざるを得なかった。凝り性の富田は印刷技術を特別に習得し、当時としては美しい数々のテキストを作りだした。後にタイプが入ると文字が格段と読み易くなる。初期の学生が今でも愛着を持っている『タイ語教本現代新聞篇』(1952)、『泰文・ローマ字対照タイ語成人識字讀本』(1955)、『中泰対照西漢演義』(1957)、『タイ語書簡文集成』(1957)、『タイ語教本論説編』(1958)などは初期の「富田テキスト」の典型であろう。語学に欠かせないのは辞書であるが、学生は、富田がタイ国から特別に取り寄せたSo Sethaputra *The New Model English-Thai Dictionary*と蕭元川『暹羅辞典』を駆使しテキストに取り組んだ。昭和19年に大東亜出版がリプリントして出版したG.B. Mc Farland *Thai-English Dictionary*を求めて古本屋回りをする学生も多かった。授業はほとんど富田一人が行ったが、ラーマ5世時代にタイ芸術局に美術専門家として招聘されたことのある三木栄が、非常勤講師として「ラーマキエン物語」を講じた。また、昭和26年4月からは客員教官ポストが設けられ、サティエン・パンタランシー(タイ国学士院会員、平成2年死去)、スッポン・マンコーンカーン(現、JIM THOMPSON THAI SILKの営業部長)、チット・ウィパーサタワット(帰国後、テレビ3チャンネルのニュース解説などを担当・故人)の3名がそれぞれ短期間勤めた後、昭和33年から当時阪大に留学していた青年コーサー・アーリヤー(現、京都精華大教授)が採用された(昭和52年までの約20年間勤務した)。これらタイ人教官の存在がタイ語教育に大きく寄与したのは、言うまでも

ない。特にコーサーは優れた日本語能力を生かしタイ語会話のテキストなどを編纂する一方で、学生とともに囲碁や麻雀に親しむなど、その穏やかな人柄は皆から好かれた。

昭和32年に上八校舎への統合がなるまで、前期学生は高槻校舎で、後期学生は上八校舎で学んだ。加えて、昭和38年までは隔年募集であったため、上級生と同じ校舎に学ぶ機会が極端に少なく、お互いに顔を知るのさえ困難であったという。

昭和28年に第1期生を送りだしたのを機に、「白象会」という名の同窓会も発足した。また、その同窓会が『白象』と称する研究雑誌を昭和29年に刊行したのは、初期のタイ語学科のタイ研究にかける意気込みの表れと言えよう。残念なことに、『白象』は3号で廃刊になっているが、『白象第3号 タイ国歴史年表』(1958年)を超えるタイ専門年表が未だ無いように、その内容は当時の日本におけるタイ研究の先端をいくものであった。また、富田が完成させた『日泰双用タイ語(日本語)基礎』(江南書院、昭和32年)および『日泰双用日泰会話辞典』(江南書院)は、タイ語学科学生待望の書であっただけでなく、日本におけるタイ研究の出発点として、広く社会の評価を受けた。

そうした懸命の努力にも関わらず、卒業生の就職は芳しくなかった。戦後の日タイ関係が正式に始まるのは昭和30年であり、経済交流や文化交流はまだまだの状態にあったからであろう。また、タイ語学科があることさえ、一般には知られていなかった。当時の富田の名刺には、名前より「タイ語学科」の方が大きく太い文字で印刷してあったという。

女子学生の第1号は、後に短期間助手および非常勤講師を勤めることになる昭和30年入学の田島(旧姓、林)佐和子である。以後、男女比がほぼ拮抗し始める昭和50年代半ばまでは、毎年平均して2～3名の女子学生が入学している。また、タイ語に興味を持つ他大学からの聴講生の姿もみられた(たとえば、西田竜雄、矢野暢、水野浩一、桜井笙子、岡田平など)。

#### 〈隔年募集廃止と教官拡充〉

専任教官が日本人とタイ人のそれぞれ1名というきわめて貧困な教育・研究体制から抜け出すには、昭和38年まで待たねばならなかった。同年は隔年募集の廃止ということもあり、念願であった教官の拡充が実現し始める。まず昭和38年度に前述の田島が助手を勤めた後、39年には外務省特別語学研修生としてチュラーロンコーン大学留学を終えた吉川利治(昭和38年卒)が教壇に立つ。吉川は、富田のテキスト作りを手伝う一方で、タイを総合的に紹介した『タイ国概説』(昭和41年)を著わすなど、学生のタイ理解を促進した。また、翌40年には、京都大学東南アジア研究センター派遣研修生として南タイで臨地調査を行っていた矢野暢が任官し、教官3名体制が実現した。後に日本の東南アジア研究の新たな地平を築くことになる矢野は、わずか3年間で広島大学に転出したが、タイの政治論を初めとする新鮮な講義が学生の勉強意欲を鼓舞した。矢野の後任として、チュラーロンコーン大学留学中の赤木攻(昭和42年卒)が44年に採用される。以後、15年間、富田(語学・文学)・吉川(歴

史・文化)・赤木(政治・社会)のトリオによる教学体制が続く。

こうした教官スタッフの拡充は、当然のことながら、富田が確立した従来の語学教育の上に、地域研究を重ねる方向での発展を意味した。昭和40年前と後のカリキュラムの違いは大きい。タイ語(言語)の教育研究はもちろんであるが、タイの歴史・政治・経済・宗教などといった分野の授業科目が、多く並び始める。非常勤講師の顔ぶれも、佐々木教悟(大谷大学、南方仏教)、石井米雄(京都大学、タイ歴史)、水野浩一(京都大学、タイ農村社会)、田辺繁治(国立民族学博物館、タイ歴史地理)、北原淳(神戸大学、タイ経済史)など、多彩で強力な陣容を揃えていた。

昭和40年を迎える頃、日本の経済発展は自ずと東南アジア諸国との貿易関係を深め、日タイ関係も高まりを見せ始めていた。富田は、昭和41～43年および47～49年タンマサート大学教養学部、チュラーロンコーン大学文学部の日本研究講座主任として派遣され、タイにおける日本語教育ないしは日本研究に大きく貢献した。また、吉川は昭和44～46年、赤木は昭和50～52年、各々両大学の同講座の客員講師を勤めた。こうした教官の長期タイ国出張は、長い目で見た場合、教育や研究に大きな利益をもたらした。たとえば、日本でも一二を争うと言われる大阪外国語大学のタイ語文献の豊富さは、長期滞在時の収集に大きく依拠している。

上八という地の利を生かした、喫茶店、麻雀屋、飲み屋などを利用してのつきあいは、学生間の親睦を増したし、夏休みを利用してよく行われた能登半島などへの合宿語学科旅行も和気あいあい、小語学科の良さである家族的雰囲気が満ち満ちていた。そのためか昭和43～44年の大学紛争期でも、タイ語学科の学生は比較のおとなしく、研究室は占拠されたが、その学生の中にタイ語学科の学生はいなかった。公民館や寺院を借りての「寺子屋式」授業に、逆に本来の教育を感じた者が多かった。

昭和49年の入試において生じたタイ語学科受験生による「答案すり替え事件」は、新聞の社会面のトップ扱いだった。好ましい事件ではなかったが、忘れてはならないだろう。

紛争期頃から、在学中にタイへ旅行する学生がでてきた。また、就職の方もよくなってきた。タイへの進出企業が増加するなど、日タイの経済関係が緊密化してきたのが大きな理由であるが、社会的にも「タイ語学科」の存在が知られてきたことが大きかった。企業の駐在員としてタイを中心とした東南アジアで働く卒業生も多くなり、「大阪外国語大学同窓会バンコク支部」は日本の大学の同窓会としてはバンコクで最大を誇るようになった。

#### <タイ・ベトナム語学科への拡充改組と富田教授の退官>

昭和52年、大阪外国語大学にベトナム語学専攻が、タイ語学科をタイ・ベトナム語学科と発展改組することにより設けられる。同年4月からの半年間は専任教官が不在で、講師(非常勤)として竹内与之助(東京外国語大学)、江口久夫(国立民族学博物館)を招き、ベトナム語教育が開始された。高橋保(ベトナム政治・経済)及び富田健次(ベトナム語学・文学)の2

名が専任教官として着任したのは10月であったが、第1期生8名(休学1名)に対する懸命な教育に終始したスタートであった。

翌53年にはハノイ総合大学から初代客員教官としてレ・ヴァン・フックが、54年には白石昌也(ベトナム近現代史)が専任としてスタッフに加わり、教育研究体制がほぼ整うことになる。しかし、高橋は54年頃から病気がちとなり、2年間の休職後退官した。その後任として、57年には五島文雄(ベトナム政治・経済)が着任する。また、62年には白石が横浜市立大学に転出し、その後任として63年には桃木至朗(ベトナム古代・中世史)が採用された。加えて、56年には第2代客員としてグエン・ルック(ハノイ総合大学)が赴任したが、以後客員は昭和59年から第3代レ・ヴァン・クアン(ハノイ総合大学)、62年から第4代ファム・ヴァン・ロック(ハノイ外国語大学)と交代する。こうした有能な専任に加えて、藤原利一郎(京都女子大学、ベトナム史)、川本邦衛(慶応義塾大学、ベトナム歴史・文学)、桜井由躬雄(京都大学、ベトナム史)、さらには外国人講師としてレ・ヴィエット・チュン、グエン・ゴック・フエン・ニユン、チャン・コン・クイ、ファン・ドゥック・ロイなどの多彩な非常勤講師が招かれた。

昭和56年には待望のベトナム語学専攻第1期生が社会に出ていき、「昇龍会」と称する同窓会も発足した。ベトナム語学専攻新設から、一貫してその充実に尽力したのは、富田健次である。富田竹二郎と同姓であることから、親戚との誤解を受けることもたびたびであるが、テキスト作りを初めとする教育・研究の基礎条件の整備という課題に取り組んだ開拓者が同姓であったのは、奇縁としかいいようがない。学科内では「富田兄」と「富田弟」との呼称が使用された。

タイ・ベトナム語学科の生みの親でもある富田(竹)は、昭和59年定年退官を迎える。その前年、タイ国立シーナカリンウィロート大学は、外国人としては初めて、教養学(タイ語文学の部)名誉博士号をおくり永年にわたる功績を評価し称えた。また、同年10月、日本を公式訪問されたシリントーン王女は、大阪外国語大学に立ち寄られ、図書館やベトナム語富田(健)のLL授業に興味深く見学されたり、教官やタイ語学専攻生と親しく歓談された。その際の富田(竹)の歓迎の辞を著名紙タイラットがとりあげ、「素晴らしい挨拶で、日本にこそ正調タイ語が生きている」と報じたのも、関係者を喜ばせたものであった。

富田(竹)の退官により一つの時代が終わり、新たな時代に入りつつある。教官スタッフでは、タイ語学専攻に吉川、赤木に加え、昭和61年から宮本マラシー(タイ語学)が着任した。また、20年にわたって客員教官を勤めたコーサーに代わって昭和52年モンコン・チャンバーンが赴任した。モンコンは詩人でもあり、日本での滞在経験を『大阪ーバンコク便り』(全5冊、1978~83)にまとめるなど健筆を示した。滞在中の昭和60年に夫人が病没されたのは、残念なことであった。昭和62年帰国したモンコンの後には、チューラーロンコーン大学から女性教官3名を相次いで招請した。「王語」の研究者ウォーラナン・アクソーンポン(昭和62~平成2年)、タイ語学者として著名なナワワン・パントゥメーター(平成2年~平

成3年)、タイ文学研究者インオン・spanワニット(平成3年~)の各教官である。

ベトナム語学専攻は、15年間という創設期を終了しつつある今日、富田(健)、五島、桃木の気鋭のトリオが健在で、新たな飛躍が期待されている。また、客員も、平成元年からはモダンダンスを趣味とするグエン・ミン・フン(ホーチミン市総合大学)を迎えている。

大学院(修士課程)は昭和44年に設置された(ベトナム語学は昭和62年から)が、語学科からの進学者はまだ少なく、修了者は今日現在では数名にすぎない。今後、より多くの学部生の進学が望まれる。

他の語学科同様女子学生の数が急速に多くなり、昭和50年代後半からは半数以上を占める年が普通になってきた。教室でも前の方は女子学生、後ろのはしっくに男子学生という光景がみられる。外大生にとって外国旅行はきわめて有益であるが、タイはもちろんのこと、ベトナムへの旅行も容易になり、夏休みなどを利用して多くの学生が出かけるようになった。在学中に10回以上の海外旅行をする者もいる。また、海外留学や海外研修も増えてきており、在学中に短期間タイやベトナムなどの大学に学ぶ者もいる。野津幸治(昭和59年卒)のように、卒業後シーナカリンウィロート大学の大学院に学び、修士号(タイ学)を得るなどの例もある。特に、ベトナム語学専攻では、ハノイ総合大学、ホーチミン市総合大学、ハノイ外国語大学と大学間交流協定を締結し、国費私費の留学生を毎年送り込んでいる。

今日、タイ・ベトナム語学科は、わが国におけるタイおよびベトナム研究の一翼を十分に担うだけの力量を示すまでに発展した。富田(竹)がライフワークとして完成した『タイ日辞典』(養徳社、1987)は日本のタイ語学研究の世界へ向けての誇りであると高く評価されている。『タイからの手紙』(井村文化事業社、1979)をはじめとする富田(竹)による一連の翻訳は、タイの文学を本格的に日本に紹介することになった。タイの文化史や民俗方面の研究に大きな成果をあげてきた吉川は、最近第2次大戦期の日タイ関係史に精力的に取り組んでおり、泰緬鉄道に関する貴重な史料を発掘し注目を浴びている。永年タイの政治社会分析にとり組んできた赤木は、『タイの政治文化—剛と柔—』(勁草書房、1990)により、第2回アジア・太平洋賞(特別賞)に輝いた。タイ人であることを生かした授業で人気のある宮本は、挨拶などの言語社会的研究を行う一方で、新しいタイ語の教科書作りに力を入れている。

『ベトナム語の基礎知識』(大学書林、昭和63)など一連のテキストで日本におけるベトナム語教育に大きく貢献している富田(健)は、民族俗字チュノムの研究やベトナム語の分析に鋭意取り組んで数多くの論文を発表し続けている。五島の守備範囲はベトナムの政治・経済である。社会主義国ベトナムの経済発展をベトナム語資料を駆使しながら追っている。桃木は、漢文史料とベトナム語史料が扱える日本でも数少ないベトナム史研究者である。北ベトナムと南ベトナムの史の変遷の差に注目して綿密な実証性に富んだ論議は、東南アジア史学界でも異彩を放っている(残念なことに、桃木は平成4年4月、大阪大学教養部に

転出予定である)。

すでに還暦を迎えているタイ語学科の第1期生は、昭和28年に世にでた。以後今日まで、タイ・ベトナム語学科が送りだした卒業生は概数で550名に及ぼんとしている。タイ語学専攻生の「白象会」とベトナム語学専攻生の「昇龍会」の名簿をながめてみると、様々な分野で活躍していることがわかる。一般によく言われる外大生=商社というイメージは全く感じさせない。企業に勤務している卒業生が圧倒的に多いが、教育畑をはじめとする公務関係に従事しているものもある。加えて、勤務地は外国、とりわけバンコクであるものが多い。また、日本語教育や外交、さらには国際交流や国際放送など、国際関係の最先端で活躍している者も目立ち、外国語大学出身の特徴がよく生きている。女性の社会進出度が高いのも、指摘しておかねばならない。興味深いのは、今のところ、政治家がまったくいないということであろう。

#### 〈歴代教官一覧〉

##### 専任教官

###### タイ語学科(1949～1976)

富田竹二郎(49・4～84・3)

田島佐和子(63・3～64・4)

吉川利治(64・4～ )

矢野暢(65・4～68・3)

赤木攻(69・4～ )

###### タイ・ベトナム語学科(1977～ )

###### タイ語学専攻

宮本マラシー(86・10～ )

###### ベトナム語学専攻

高橋保(77・10～82・3)

富田健次(77・10～ )

白石昌也(79・4～87・9)

五島文雄(82・4～ )

桃木至朗(88・10～92・3)

##### 客員教授

###### タイ語

サティエン・パンタランシー(51・4～ )

スッポン・マンコーンカーン

チット・ウィパーサタワット

コーサー・アーリヤー(58・4～77・3)  
モンコン・チャンバーン(77・4～87・3)  
ウォーラナン・アクソーンポン(87・4～90・3)  
ナワワン・パントゥメーター(90・4～91・3)  
インオーン・スパンワニット(91・4～)

ベトナム語

レ・ヴァン・フック(78・12～81・6)  
グエン・ルック(81・7～84・3)  
レ・ヴァン・クアン(84・4～87・5)  
ファム・ヴァン・ロック(87・6～89・3)  
グエン・マイン・フン(89・4～)

非常勤講師

タイ語学

三木栄、吉田稔、尾崎彦朔、田島佐和子、石井米雄、佐々木教悟、矢野暢、  
水野浩一、田辺繁治、北原淳、辻井博、橋本卓、林行夫、野津幸治、黒田景  
子

ベトナム語学

竹内与之助、江口久夫、桜井由躬雄、藤原利一郎、川本那衛、真保潤一郎、  
石沢良昭、新田栄治、三尾忠、八尾隆生、大西和彦、大野美紀子、片山須美  
子

【参考文献】

- 大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科『タイ・ベトナムと日本 富田竹二郎教授退官記念  
論文集』1984.
- 宮本マラシー「日本の関西地区におけるタイ語教育」『わが国における外国語研究・教育  
の史的考察(上)——現状分析と回顧——』大阪外国語大学、1989、42-54頁。
- 富田健次「日本におけるベトナム語教育・研究」『わが国における外国語研究・教育の史的  
考察(上)——現状分析と回顧——』大阪外国語大学、1989、55-61頁。
- 富田健次「続・日本におけるベトナム語教育・研究」『わが国における外国語研究・教育の  
史的考察(下)——歴史と展望——』大阪外国語大学、1990、106-129頁。

【資料提供者】

吉田稔(昭和30年卒)、田島佐和子(昭和34年卒)

(富田 竹二郎・富田 健次)

## 7. ビルマ語学科

### 〈ビルマ語学科の開設〉

大阪外事専門学校にビルマ科が設置されたのは、昭和20年4月1日の事であった。第1期生の入学式は、陸軍香里火薬廠で挙行された(伊地智善継「原田先生が赴任された頃」『原田正春先生追悼文集』外大教職員組合1982)。授業時間は1週20時間で、その内16時間を教授が、残り4時間を外国人教師が担当する事になっていた(『昭和20年直轄諸学校職員定員令改正に関する説明書』)。日本人教授は、民族、文化、地理、歴史等の科目を、外国人教師は専らビルマ語を受け持った。ビルマ語の初代日本人教授として着任したのは、東京大学言語学科でビルマ語を研究していた矢崎源九郎(後、東京教育大学教授。故人)であった。矢崎が昭和21年に転出した後、服部正一(後、教授。退官)が非常勤講師として昭和22年に教壇に立った。服部と相前後して原田正春(後、教授。故人)も教壇に立つ事になった(服部正一「原田さん、安らかに」『原田正春先生追悼文集』)。昭和23年には教授不在を補うため、川崎直一(言語学教授、後退官。故人)が学科長を兼任し、服部、原田は専任講師としてビルマ語の授業を担当した(1948年『大阪外専学生手帳』)。昭和24年の新制大学発足に伴い、教官スタッフは川崎教授(兼任)、服部講師、原田助手という形になった(昭和24年度『大阪外国語大学便覧』;昭和26年3月20日教官会議配布資料『昭和26年度教官配置』)。こうした教官配置は昭和30年代まで続いた。

### 〈初期の学生〉

昭和20年のビルマ科創設と同時に入学した1期生は23名、翌21年の2期生は5名、3期生は9名、4期生は11名であった(『文部省年報』「入学志願者・入学者・倍率の推移昭和21-23年」No. 2)。上八学舎が戦災で消失したため、高槻市にあった陸軍工兵第4連隊の旧兵舎が昭和21年以降教室として使用された。ビルマ科の教室に割当てられたのは旧下士官室であった(松井和郎メモ外専27)が、教室は昭和22年になってもまだ銃架が片付けられておらず実に殺風景であった(服部正一メモ)という。外事専門学校時代の入学者の内、めでたく卒業まで漕ぎ着け得たのは、1期生16名、3期生4名、4期生9名で、2期生はゼロであった(大阪外事専門学校『本科卒業生原簿』)。学業を最後まで全うし得なかった人が少ないのは、在学期間が食糧事情の極端に悪い終戦直後と重なっていた事と無縁ではない。大阪外事専門学校は昭和26年に廃止されたが、その2年前の昭和24年5月には大阪外国語大学が設置されている。専門学校の廃校と新制大学の発足とが既に明らかであった昭和23年の入学者たちは、もちろん旧制専門学校生徒として3年後そのまま卒業できるが、希望すれば1年修了後再受験して新制大学に編入することも可能とされた。ビルマ科から新制大学への進学者は1人だけであった(松井メモ)。

### 〈大学発足後のビルマ語学科〉

昭和24年に大阪外国語大学が設置されたが、ビルマ語学科は、アラビア語、蒙古語およびこの年に新設されたタイ語の3語学科と共に隔年募集という事になり、ビルマ語学科の募集は発足初年度には行われなかった(昭和24年度『大阪外国語大学便覧』)。新制大学発足後初めてビルマ語学科の募集が行われたのは、昭和25年になってからである。朝鮮戦争の影響と外国語といえば英語一辺倒と言ってもよい当時の社会風潮を反映して、入学者数が定員を割込む状態が暫くの間続いた。15名の定員がどうにか充されるようになったのは、第2志望の制度(2語学科を併願し、第1志望の語学科が不合格であっても、第2志望の語学科に余裕がある場合には第2志望の語学科に入学する事が認められる制度)が廃止された昭和31年以降である。

### 〈女子学生の増加〉

新制大学発足後隔年募集が続いていたビルマ語学科が毎年募集に切替えられたのは、昭和37年である。この頃から、女子学生の入学者が目立つようになった。ビルマ語学科に初めて女子学生が入学したのは昭和29年であるが、6年後の昭和35年以降は、昭和40年を除いて、毎年女子学生が入学するようになった。女子学生の進出はその後も年を追うにつれて盛んとなり、昭和49年には男女比がほぼ半々となった。こうした均衡状態が暫く続いた後、共通一次試験制度の導入と共についに男女比が逆転、定員15名に占める女子学生の人数は昭和54年8名、55年8名、57年8名と女子優位時代に入った。共通一次制度導入と並行して18歳人口の増加に対処するため定員を10%程度超えて合格させる方針が取られたせいもあるが、昭和61年には女子の入学者だけでついに15名に達した。女子優位時代は、昭和63年14名、平成元年15名と、その後も続いているが、女子学生の大量進出はビルマ語学科特有の現象ではなく、文科系大学に共通する現象である。

### 〈大学院ビルマ語専攻修士課程の設置〉

大阪外国語大学に2年間の大学院修士課程が設置されたのは昭和44年のことであるが、外国語学研究科南アジア語専攻の中にビルマ語講座も設けられる事となった。ビルマ語講座の担当教官は、学部と同じ服部、原田、大野3教官の兼任であった。ビルマ語専攻の大学院生第1号は昭和49年入学の南田みどり(現ビルマ語学科助教授)であったが、ビルマ語専攻の院生はその後も断続的に現われ、平成元年までに合計9名がビルマ語学で文学修士の称号を授与されている。その内、堀田桂子(昭和57年修了)と原田正美(昭和61年修了)の両名は、文部省のアジア諸国等派遣留学生試験に合格して、それぞれ2年間ずつビルマのラングーン(現ヤンゴン)大学に留学している。また、昭和60年には、韓国外国語大学の卒業生である朴章植、崔再鉉の両名が韓国政府派遣のビルマ語研究生として派遣されて来た。

勉学態度が真摯であった二人は、その後大学院に進学し、平成元年見事ビルマ語の修士課程を修了して帰国した。二人とも釜山外国語大学に1992年度新設予定のビルマ語学科で教壇に立つことになっている。

#### 〈客員教授の着任〉

学生定員も教官定員も少なかったせいか、ビルマ語学科には当初、外国人教師、いわゆる客員教授の割当てがなかった。毎年、概算要求を続けた結果、昭和49年度予算でやっとビルマ語の客員教授1名が定員化された。昭和50年2月、ビルマ政府から派遣された初代の客員教授ウー・ウンが着任した。永年の念願であった客員教授の着任は、ビルマ語学科を鼓舞すると共に、教育、研究面でも新鮮な刺激を与える事となった、ウー・ウン(筆名ミントゥウン)は1930年代にビルマで勃興した新しい文学運動「キッサン・サーペー」の担い手の一人であり、当代一流の詩人としてビルマ文壇の重鎮でもあった。65歳という年齢であったにもかかわらず、ウー・ウンは任期を2年間更新して昭和54年に帰国した。後任は大学翻訳出版局の局長を務め、ビルマ語辞典の編纂に長年取り組んで来たウー・ティンフラで、昭和55年に着任した。ウー・ティンフラもウー・ウン同様任期を更新したものの、健康を損ねて58年に帰国した。3代目の客員教授はラングーン大学ビルマ文学部の助教授ウー・エーペーで、昭和58年に着任、任期を2回も更新して平成元年に帰国した。4代目のウー・ミャテインも、ウー・エーペーと同じヤンゴン大学ミャンマー文学部の助教授で、平成元年12月に着任、4年1月に帰国した。

#### 〈教官スタッフの新旧交替〉

隔年募集から毎年募集に変わり、それまで2学年しかなかったビルマ語学科の学年が1年から4年まで全学年揃う事がはっきりした昭和40年、専任教官を1名増員する事が決定された。新たに助手として採用されたのは、京都大学大学院でビルマ語を研究していた大野徹であった。それと同時に、ビルマ語学科の学科主任を兼任していた言語学教授の川崎が兼任を解かれ、教授に昇格した服部が学科主任に任命された。服部は昭和53年定年を迎えて退官した。後任の教官に任命されたのは、ビルマ語専攻の大学院修士課程修了者の第1号である南田みどりであった。教官スタッフは、学科主任が原田教授、大野助教授、南田講師の三名となった。昭和56年原田が現職のまま永眠した。ビルマ語学科の創設以来語学科の発展に尽力してきた原田の死は、語学科全体に大きな衝撃を与えた。それは、癒しがたい痛手でもあった。昭和57年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に勤めていた藪司郎が助教授として転任して来た。現在のスタッフは、学科主任大野教授、藪教授、南田助教授の3名である。

### 〈非常勤講師陣の充実〉

専任教官のこうした新旧交替と並行して、専門分野の細分化、精密化に伴う授業体制の充実化を目指して非常勤講師の拡充が図られた。語学科創設以来今日までの非常勤講師を列挙すると、次のようになる(順不同)。

村田忠兵衛(パリー語、インド語学科専任教官。故人)

西田龍雄(言語学、京都大学教授)

尾崎彦朔(東南アジア経済論、大阪市立大学名誉教授)

梅津和郎(国際経済論、大阪外国語大学名誉教授)

桂満希郎(ビルマ語、タイ矢崎総業)

今川瑛一(ビルマ政治、創価大学教授)

桐生稔(ビルマ政治、中部大学教授)

斉藤照子(ビルマ経済、東京外国語大学助教授)

伊東利勝(ビルマ経済史、愛知大学助教授)

酒井敏明(ビルマ地理、帝塚山大学教授)

平木光二(パリー語、東方研究会)

平林輝雄(ビルマ語、伊丹高校)

ビルマ語学科の非常勤講師としては、1992年現在、次の6名が講義を受けもっている。

池田正隆(ビルマ仏教、大谷中、高校)

森田和彦(ビルマ文化人類学、名古屋市立中央高校)

長野康彦(チベット語、国立民族学博物館助教授)

渡辺佳成(ビルマ史、岡山大学助教授)

鈴木千裕(ビルマ美術)

原田正美(ビルマ古典文学)

### 〈教育、研究面での進展〉

語学科発足後暫くの間は日本人学生に使えるような満足な辞書も、教科書もなかったため、教官たちが作成したガリ版刷りのプリントで授業が行われた(岡本節穂メモ、外専27)。こうした状態は、昭和40年代頃まで続いた。学生たちにとって最大の願望は、日本語で引けるビルマ語辞典の出現であった。しかし、作成しても売れる見込みのない辞書の刊行を引受けてくれるような奇特新出版社などなかった。この絶望的状况を打開してくれたのが、昭和47年に設立された「日本ビルマ文化協会」である。この協会は、太平洋戦争当時、ビルマ戦線に従軍した戦友たちが母体となって設立された社団法人で、日本とビルマとの友好親善を深めることを目的としていた。日本、ビルマ両国間の文化交流に役立つ具体的なプロジェクトを模索中だった日本ビルマ文化協会と、客員教授を迎えて語学科内での教育、研究面の充実、整備を進めていたビルマ語学科との間で「ビルマ語辞典」編纂の話し合い

が持たれたのは、昭和51年のことであった。編纂作業はビルマ語学科が責任を持ち、出版経費は文化協会が引き受けるということになった。経費は、昭和52、53兩年度にわたる文部省科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受けることによってまかなわれた。総ページ641ページ、収録語彙約2万にのぼる我が国初の『ビルマ語辞典』が、こうして昭和54年に刊行された。

辞書の刊行だけでなく、教官個人による研究成果も続々と刊行されるようになった。ビルマ語の教科書としては、原田による『ビルマ語入門』(江南書院昭和33年)、『基礎ビルマ語』(大学書林昭和41年)、大野による『英語対照ビルマ語会話』(大学書林昭和57年)、『現代ビルマ語入門』(泰流社昭和58年)、『ビルマ語四週間』(大学書林昭和61年)、『やさしいビルマ語読本』(大学書林平成3年)、『東南アジア大陸の言語』(大学書林昭和62年)、藪による『ビルマ語会話練習帳』(大学書林昭和57年)等がある。また、大野による『パガンの仏教壁画』(講談社昭和53年)、『ビルマの仏塔』(講談社昭和55年)のようなビルマの仏教文化遺産を紹介した書物も出版されている。

一方、ビルマ文学作品の翻訳も、トヨタ財団のような民間財団の助成を得て、盛んに行われるようになった。ビルマの文学作品が初めて邦訳紹介されたのは原田によるジャーネージョー・ママレーの『血の絆』(毎日新聞社昭和53年)で、原田はこの翻訳によって日本翻訳家協会から翻訳功労賞を授与されている。トヨタ財団の翻訳助成によって出版されたビルマの文学作品は、その大部分が村井文化事業社から刊行されている。例えば、南田の翻訳になるマウン・ターヤの『路上に佇みむせび泣く』(1982年)、ミヤタンティンの『剣の山を越え、火の海を渡る』(1983年)、テインペーミンの『東より日出るが如く』(1988年)、大野による『現代ビルマ短編小説選』(1983年)、セインセイン『迷路の旅』(1985年)、ウー・ペーマウンティン『ビルマ文学史』(監訳1992年)等である。ビルマの民話も、『ビルマの民話』(古橋政次と共訳、大日本絵画工芸美術昭和53年)、『ビルマ(ミャンマー)の昔話』(偕成社1991年)等という形で、大野によって翻訳紹介されている。

#### 〈ビルマ語文献と視聴覚資料の整備〉

ビルマ語の文献は、昭和30年代中頃までは皆無に等しい状態であった。ビルマ語文献がある程度纏まった形で研究室に入ったのは、ビルマ語学科学生2人(山口保、美濃部親良)、京都大学大学院生1人(山口巖)を伴った原田の「ビルマ文化調査隊」が戦後初めてビルマを訪れた1957年になってからであった。その翌年には、ビルマ語学科の学生4名(大野徹、山本岳彦、蔭山豪、原田稔)による「第二次ビルマ文化調査隊」が2か月間ビルマを訪れた。ビルマ語文献は、その後も原田や大野のビルマ出張、及び歴代客員教授の着任などと並行した形で少しずつ増えていった。

ビルマ語文献が飛躍的に増加したのは、図書館の中に杉本文庫と原田文庫とが設置された1983年、1986年になってからである。前者は、1980年から3年間ラングーンの日本人学

校校長であった杉本良己(現在、米子市立山陰歴史館副館長)が蒐集したビルマ語文献を大阪外国語大学に寄贈したことによって設置された。この文庫は、ビルマの歴史、政治、経済、産業、社会などに関するビルマ語文献とビルマ関係英文文献とを合わせておよそ830点で構成されている。その中には、ビルマ文字で印刷されたパーリ語經典20巻や手書きの貝葉といった貴重な資料も含まれている。

原田文庫は、故原田教授の遺族からビルマ語の教育研究に役立てるようビルマ語学科に寄付された浄財を財源としてビルマで買い集められた文献を中心に、1958年の「ビルマ文化調査隊」が蒐集して来た文献を加えて構成されている。ビルマ語文献とビルマ関係英文文献、邦文文献とを合わせ900余点から成る。この中には、19世紀に出版された貴重本も含まれている。

ビルマ語の視聴覚教材は、他語学科に比べるとまだ決して十分とは言えない。図書館の視聴覚室に納められているビルマ語のカセットテープは21巻、ビデオテープはVHSとベータマックス両方合わせて21本だけである。ビデオテープのナレーションは5本が日本語、16本はビルマ語となっている。ビルマ語ビデオテープの中には、放映済みの番組をダビングしてくれたマンマー・テレビ及び独自の取材をしている民間のスタジオTT&Tからビルマ語学科に寄贈されたものもある。

#### <卒業生達の活動分野>

ビルマ語学科の卒業生は平成3年3月現在で、400人に達する。その活動分野は実に多岐に亘っている。昭和60年3月当時の調査によれば、卒業生総数は354人であった。その内訳を分野別によると、教育界50人、工業42人、貿易39人、運輸20人、金融19人、官公庁16人、販売16人、自営16人、放送・新聞12人のようになっていた(大野徹「アジア諸言語の教育—大阪外国語大学の場合—」東京外国語大学外国語学部教育改善協議会『外国語学部の教育改善協議会報告書』昭和62年)。全体の7分の1に相当する50人が教育界に進出して、中学校や高校で英語の教師をしている。中学校や高校でビルマ語が教えられていない以上、英語の教師として教鞭を取らざるを得ないという事も言えるが、元来ビルマ語学科に入学してくる人の大半は元々語学が好きであるとか、得意であるとか、成績が良かったとか言うように、語学に関心の深い人が多い事も関わりがある。工業に従事している人の数が2位を占めているが、これは工業世界に於ける輸出入部門の従事者が多いということである。ここ数年の傾向を見ると、金融、流通、交易の分野に進出する人が多いから、以上の数字はかなり修正を要する事は否定できない。

(大野 徹)

## 8. アラビア・アフリカ語学科

### 〈1. アラビア語学科〉

#### 〈創設前後〉

本学にアラビア語部(当時は亜刺比亚語部と表記された)が開設されたのは、昭和15年4月であるが、アラビア語の授業は大阪外国語学校創設時から予定されていた。大阪外国語大学インド語学科発行『アーリア学会々報』第37号で、澤英三は「定年退職に当りて」と題して次のように述べている。

「大阪外国語学校の中目初代校長は西洋の学問を修めた人に似合ず東洋趣味豊かな方であった。大阪外国語学校創設に当っても語部序列を決めるのに東洋語を西洋語の前に置いたり、インド語部の第二語学としてアラビア語やペルシア語を課したりしたのも、その現われといってよからう。(中略)学校創立早々からインド語部にアラビア語が課せられたが、この世界一にむずかしいと言われるアラビア語には当時の学生達は皆困り果てていたようであった。言葉それ自体のむずかしさ以外に担任の松本重彦教授にどしどしいじめられたことにも困るらしい。同教授は当時少なくなかったいわゆる怖い先生の一人で、数々の逸話を残して元の京城帝大に転出された方。とにかく、そのアラビア語がやがて独立語部として発展したことは御覧の通りで、東京外国語大学でも今春からその独立語学科を設置するに至ったし、かつてのインド語部の憎まれっ子アラビア語も、今や就職界における寵児にのし上がってしまった。(以下略)」

澤がこのように指摘しているのは、昭和36年(1961年)のことである。本学庶務課人事記録には前記松本重彦の履歴書が保存されているが、松本はわが国の高等教育機関で正規のアラビア語の授業を持った最初の人物であったようである。澤が指摘しているように極めてきびしく、始業のベルが鳴る前には教室の前に控え、ベルが鳴ると同時に教室に入って、時間一杯授業を続ける。予習や宿題が出来ていない学生は立たせる。授業の視察に来た役人であっても教室に入ってくると、当てて答えさせる。近くの教室で大きな笑い声などが聞えると、不謹慎であると言う、など今では伝説となっている数々の逸話を残している。

ところが、松本は数年アラビア語を教えて京城帝大に移ってしまい、教える先生がなくなって、どうやら数年でアラビア語の授業は不開講となってしまったらしい。松本は戦後中央大学に帰り、同大学におけるイスラム研究の伝統を築くことになった。日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局発行『日本とアラブ』—思い出の記—その1(昭和55年9月)には慶應義塾大学教授(故)前嶋信次の松本に関する次のような談話が紹介されている。

「とにかく松本さんという人は、この日本でアラビア語を最初に研究した草分けであります。アラビア語研究の業績があるのかないのかそれはよくわかりませんが、戦後などは相当高齢になっておりまして余談ではありますが、京城帝大のときの弟子だった中央アジア史の嶋崎昌氏をも中央大学に迎えました。本当に昔風の自分の弟子な

ものですから「君、たばこを買って来てくれたまえ」といった調子だったそうです。しかし、晩年は極めて寄るべのない状態で、自分の教え子の一人に、おれの退職金も何もかも皆君にやるからおれの老後を見てくれということで、70歳になったとき、その学生の家にひきとられて、そこで亡くなられたというような話を聞いております」

前記『アーリア学会々報』第15号の澤の「在職27年間の回顧と今後の方針」によると、「さて本校では創立時代における2・3年級の第二語学は英語とアラビア語であったが、大正14年度から始めてペルシア語が加わり、アラビア語を希望しない者はペルシア語を選べることになった」とある。このアラビア語の授業を受け持ったのが前記松本重彦であり、その後任には山本健太郎が予定され、教壇に立つまでは図書館勤務となった。しかし、澤の前記15号においては、「皮肉にも印度語部におけるアラビア語兼修希望者は年々減る一方で、第五期生中では池本喬君一人きりになった。同君はすべての学科において優秀であったが、印度語部における最後のアラビア語兼修者としての記録の持主でもある。かくして、印度語部のアラビア語は終止符を打ったことになった」とあり、山本はペルシア語の教師になるために、昭和6年、10ヶ月ばかり、ペルシアへ出張することになった。

アラビア語部新設についても、同語部誕生の産婆役を務めた澤の『アーリア学会々報』第15号に詳しく述べられているので、これを要約すると一。

このような学科の新設を発議した関係者の間には、東京外語に置くという案もあったようだが、それよりも当時の財団法人回教協会経営説の方がはるかに有力であった。本学は、かつて印度語部の兼修語ではあったが、前記のような事情から、本邦唯一の存在となっていたアラビア語授業の廃止を文部省に申請して、昭和10年3月末日限りでこれが認められていた手前、語部新設のために積極的に出られない立場にあった。従って、この語部新設が認められることになった時、当時の葉山校長は教官会議の席上で「まるで駒からひょうたんがでたようだ」と奇言を発するような結果になった、とのことである。一方、アラビア語部創設について、昭和2年に本学ドイツ語部を卒業して外務省で活躍し、後に駐サウジアラビア大使となった(故)田村秀治は、『歳月の流れ』(タハ・フサイン著、田村秀治訳、1973年11月11日発行、ジャセプ出版)および自著『アラブ外交55年/上』などにおいて、「(1937年11月11日)母校創立記念日に母校を訪れた。例年華々しい催しがあったが、その年は日支事変の拡大で行事は取り止められていた。幸い葉山校長、ドイツ語を三年間教わった恩師高橋教頭および経済学の教授である小西教務課長の三先生にお目にかかることが出来た。私はアラビア語を話す国々における日本製品進出状況を詳しく説明し、同語がわが国にとっても重要性を増していることに鑑み、東京外語に先んじてアラビア語部を設けられるように勧めた。私の話を熱心に傾聴された校長と両恩師の尽力により、文部省は同語部設置を認めた。かくて、昭和15年4月に第一期生の入学となったのである。当時としては、これは画期的なことであった」と述べている。自ら「私は同語部誕生の産婆役を勤めることになった」と述べている澤と、田村秀治の回想が、どこでどのようなつながりがあるのか、

両氏とも故人となった現在、確かめようがない。

澤の前記『アーリア学会々報』第15号によると、「とにかく、同語部は成立し、昭和15年の春、第一回の生徒募集をやったところ募集人員15名に対し49名の応募があった。最初のアラビア語教官として、同年5月2日に来任したのはメッカ生れのエム・マッキー・タシカンディ君(今年=昭和24年=40歳)であった。次いで外務省アラビア語留学生上りの中野英治郎君(本学独語第六期生)が同年5月31日付で助教授に任命せられたが、同君は惜しくも17年7月13日に病没せられた。待望のアラビア語部のため、惜みて余りがあり、これ以上の不幸はなかった。(中略)タシカンディ講師は20年の秋まで比較的眞面目に勤めていられたが、一度辞職してまた招かれたりした。昨年=昭和23年=の8月末日を以って正式に講師解嘱となり……」とある。また「意志の人横山校長」の項で、澤は「本校着任早々最初に着手せられたのは、中野君の病気以来、永らく欠講となっていたアラビア語の授業を充実させることにあった。そのため私も二度ばかり外務省に出頭して校長の片棒を担いだのであった。その結果アラビア語の留学生上り大原与一郎副領事と林昂書記生の両君から毎週前期と後期とに分けて、交々東京から教えに来てもらうことになった。(中略)それから林君を本校へ引抜くために随分苦心していられた」とあり、教授体制を整えるのに外務省のアラビストの協力を得ようと相当苦勞している。ここに登場する大原与一郎(明治34年生れ)は大正15年、外務省アラビア語第一期留学生としてエジプトに留学した人物であるが、その後昭和40年から同49年までアラビア語学科で非常勤講師として教べんを執った。外務省は大原に次いで、田村秀治、中野英治郎、川崎寅雄、代田守、林昂らを次々にエジプトに留学させ、アラビスト外交官を養成していた。当時としては教授陣については外務省に協力を求めざるを得なかったであろう。これらのうち川崎はのちに東京外大に、また林は大阪外大の教授陣に加わった。林昂教授は昭和21年6月24日に退職し、のちにアラビア石油で活躍した。田村秀治は前記著書の中でこの間の事情を次のように記している。

「私がカサブランカに勤務している時、高橋教頭から懇篤な書状をもらって、一年先輩の支那語の金子教授と同等の待遇にて教授に就任するよう要請された。私はこれを辞退し、京都出身の先輩大原兄か大阪府八尾出身の後輩中野君のいずれかを採用されるよう進言した。学校側は卒業生をもって固める方針であったので、中野君を助教授として迎えた。しかし彼は一年余で病に倒れてしまい、困った学校側は外務省に泣きついて、在職中の大原先輩と後輩の林君を隔月出講させてもらうこととした。学校側は敵国との外交官交換が決まれば帰国するはずになっていた私を、戦時中のみでも転任させてほしいと要望してきたが、私に教職につく意図のないことを十分知る外務省は、林君自身の希望もあって、彼を転じさせた。しかし、林助教授が終戦後他へ移ってしまったので、学校当局は大変困り、たびたび私に相談してきた。

新制大学に昇格することが内定した母校ではアラビア語教授が必要になり、横山(平沢であろう)校長自ら金子教務主任とともに私を訪れて、母校への転出を強く要請された。しかし、多数のアラビア語出身の後輩を整理し、私を残してくれた外務省の恩義に報いる日を期待している私は、この再度の申込みも辞退した。もしこの時母校へ転じていたら、私は金子学長の後を継いだかも知れない」

さて平成3年9月現在、アラビア・アフリカ語学科のアラビア語関係の専任日本人教官4名すべての直接の恩師、伴康哉(現四天王寺国際仏教大学教授)および田中四郎(のち京都外国語大学教授)についてであるが、澤によると(『アーリア学会々報』第15号)、横山校長時代に西南亜細亜語研究所が学内に設立され、外務省の援助のもと、まずアラビア語辞典の編集が企画された。「時に(昭和)17年の9月。林君が主任になり、タシカンティ君から手伝わってもらうほかに、昭和16年のアラビア語部選科の中途退学者であり、当時東京放送局に勤務中の伴康哉君(印度語部15期生)を私が呼びに行き、辞書を手伝いながらアラビア語部選科二年生としてアラビア語の授業をも受けてもらうようになったのは、19年の4月のことである。同君は、将来のアラビア語担任教官になることを約束されていた。ところが尾崎校長時代に入って、同君が突如応召される身になったので、研究所は大いに困った。(中略)20年の末頃、林君が研究所へ連れてきたのが田中四郎君(アラビア語部一期生)で、年を越すと間もなく本校の講師となり、いつの間にか助教授となってしまった」と述べている。その後の二人の活躍については改めて紹介するまでもないことである。現在のアラビア語学科主任教授池田修が昭和27年4月～昭和31年3月、アラビア語学科に在籍していた当時は隔年募集で、伴と田中がアラビア語の授業を担当しており、山本健太郎が形式上の学科主任で、講義を持っていた。専任の外国人教官はまだ居なかったが、ずっと後になって一時ワニース・ラガーイというエジプト人画家が非常勤で会話を教えていた。

#### 〈戦後の発展〉

昭和24年に新制大学に移行して、アラビア語学科と称するようになってからしばらくは、隔年募集(定員15名)が続いた。つまり、1・3年が在学する年と2・4年が在学する年とが交替に訪れると言うわけであるが、この頃は、インド語学の山本教授が学科主任で「西南アジア民族史」(前期講義)「コーランの講読」(後期実習)等を担当していたようである。この頃の開設コマ数は、前期が実習4と講義1、後期が実習4と講義2となっている。記録では、伴は専ら講義を担当して千夜一夜物語・古典詩・歴史書等を読んでおり、田中は会話・作文を教えていた。驚くべきことは、この頃既に口語の重要性に着目してその授業があったことのみならず、セム言語語学の講義があり研究外国語の中にはヘブライ語(中級まで!)・アッカド語・アラム語等が開講されていたことであろう。伴、田中の慧眼と学識に深く頭をたれざるをえない。

隔年募集から毎年募集になったのは、記録によれば昭和37年度からであるが、昭和36年には「年度によって学生を募集しない学科がある」との但書があるものの全学科で募集されているようであるし、更に昭和35年度にはアラビア語学科の募集があるので、アラビア語学科に関する限り、実質上、昭和35年度から毎年募集となっている。

新制大学になって第4回(昭和30年度)卒の池田修は早くも34年には非常勤講師として招かれ、文法・講読の多様な授業を担当している。これに伴い、前出の山本は、昭和35年には学科主任ではあるものの授業は持たず、翌36年にはその学科主任の職も伴に譲った。こうして毎年募集の開始と相まって、アラビア語学科の原形が整ったと言えよう。又37年からは関西大学の藤本勝次に出講願うことになり、教育内容の充実がはかられていった。その後藤本には、在学生のみならずアラビア語学科卒業の若手が、あらゆる意味の薫陶と世話を受けることになるのであるが、洒脱な講義ぶりや学生の未熟な関心を温かく導く包容力とにより、ある意味では、学生から専任教官以上の信頼を得ていた。今にして思えば、語学三昧の学徒に「人間の歴史・文明とは何かも考えてみなアカンヨ」と説くその気持ちや、学生の心を魅了していたのである。

昭和41年は池田が専任教官として着任すると共に、前出の大原が非常勤講師として出講することとなり、アラビア語学科の講義陣容がさらに整っていった。この年限りではあったが、戦後初めてアラブ人教師ワニース・ラガーイを迎えた年でもある。43年頃よりは、イスラーム税制史とイブン・ハルドゥーン研究の大家、森本公誠にも出講願えるようになり、学生たちは語学そっちのけで、イスラーム文明とは何かと生協の食堂で互いに議論をたたかわせたものである。こうして、その後約10年間ほどのアラビア語学科の教育体制が整っていったのであるが、その背後に学科主任・伴の努力と人柄があったことは明らかである。

勿論、この当時は学生運動の盛んな時代で我が母校も一時封鎖などと言うことをむかえ、田中が他大学へ移るということも経験するのであるが、こうした困難な時期にアラビア語学科の教育の態様が整い、その後の発展の基礎が築かれたのは歴史の為せる業としか言いようがないであろう。全学的には、例えば、前期の各学年で実習5コマ講義1コマとなったことや、後期の学年進行制が廃止されると共に、各学科の講座の規模に応じて「語学」「文学」「文化」「政治・経済」の4本柱を基本にした教育内容を整える努力が始まったのも、この頃のことであった。他方、アラビア語学科に関しては、イラクで一年間の研鑽をつんだ池田が帰任したのが44年であるし、田中の後任として新進の福原信義(大学第14回41年卒)が着任したのは、46年早々のことであった。又、大学院修士課程の「西南アジア語学科専攻」が開設されたのも、45年度からのことであった。

やがて本務校で忙しくなった藤本は出講出来なくなったが、諸情勢の変化により、留学生を初めとするアラブ諸国出身の関西在住者も徐々に増え、ナビール、シェリーフ、ムハンマド・スルターン、ウマル、ダハブレ等の諸氏に非常勤とはいうものの、ほぼ途絶えることなく出講してもらえたのも、実に幸運であった。78回転のSPレコードのリングホン(竹針

で聞くものもあった)に耳を澄まし、ザーザーという音のかけから「バービルベート キピール」などと聴こえてきたのに感動を覚えた時代でもあった。

しかし、こうした状況もやがて48年の石油危機を境として変化の兆が見え始め、49年には大原の後をうけて竹田新(大学第18回45年卒・大学院アラビア語専攻第1回)や、愛宕あもりが非常勤として出講することになったのみならず、アラブ世界の基軸国エジプトに池田が再度の研修へと出かけた。翌50年、池田の帰国後間もなく、オイル・ショックに伴う結果としてアラビア語学科に学生定員10名増の連絡があると共に、カイロ大学文学部「日本語・日本文学科」への教師派遣協力の依頼があったのである。この結果、帰国後間もない池田は51年秋、落ち着くゆとりも無いまま再度エジプトのカイロ大学への仕事に赴いたのである。又、これに伴い、竹田が52年初め専任教官として着任した。

この頃には既に、追手門学院大学の磯崎定基が非常勤としてコーランやハディースを中心とする講義を担当していた。つまり、語学教育を基本としつつも、それを基礎に森本の歴史学、磯崎のイスラーム学、竹田の地理学や文化論などの講義が、伴の古典文学とセム語学、池田の現代文学と文法学、福原のアラビア語/セム語学等と、それぞれの専門に迫った講義内容へと発展していったのである。

このような中で迎えた54年は、あらゆる意味で新時代を画する年となった。学舎が箕面に移転すると共に、待望の客員教授としてカイロ大学よりタッリーマを迎えることが出来たのである。教官一人一人に個室の研究室が割り当てられ、さらには学科毎に共同研究室も備わるようになった。従来がひどすぎたのであるし、交通の便も良くないとは言え、広く新しい教室とズラッと続く教官研究室を目の当たりに見て、まさに大学の研究教育にふさわしい雰囲気が出来たと感激すると共に、身の引き締まる思いがしたと言ってもオーバーではない。

長い歴史を通じて膨大な蓄積を持つアラビア語文献とイスラーム文化に通暁しているタッリーマを迎えたことは、教官にとり心強い限りであった。気さくな人柄で、若手の教官が人知れず悩む単純な疑問に気安く答えてくれた。学内のみならず、タッリーマは学外の諸研究会でも知恵袋として活躍した。藤本や池田を慕う関西の若手が集まる原典講読会を通して、「オッホッホッホ」と愉快そうに笑うタッリーマの学恩を受けた者の数は計り知れない。数年前から非常勤として出講していた高階美行(大学19回46年卒)が専任となったのも、この頃の56年である。

タッリーマを迎えて絆が強まったカイロ大学文学部とその「日本語・日本文学科」へは、池田の後も途切れることなく、福原(53年より)、竹田(55年より)、高階(57年より)と続いて出かけ、イスラーム文化とアラブ世界の現状をつぶさに体験できたことは、教官の自信となったのみならずアラビア語学科の研究教育のレベルアップに大いに寄与した。福原はその後再度にわたって出かけ(59年から2年間)、「日本語・日本文学科」の自立に向けて大いに努力した。その結果、日本で研鑽を積んでいたエジプト人留学生も、種々の困難を乗

り越えて無事日本で学位を取得して母校に帰任する者が生まれ、カイロ大学に出かけてそれなりの微力をつくした我々の努力も近年になって実を結びつつあるのは、喜ばしい限りである。とりわけ、第1期生でアラビア語学科に足掛け9年もの長きにわたり非常勤として貢献したイサムが平成3年秋に無事カイロ大学に帰任したことは、アラビア語学科としては大きな痛手ではあるが、今後の両学科の関係発展のためにも祝福されるべきことであろう。

他方、文部省の国際学生交流制度が整っていく中で、前述のとおりカイロ大学にいた池田は、本学アラビア語学科学生のカイロ大学への留学に関して文学部長スプヒー・アブドル・ハキームと協議を重ねたが、53年に帰国した後その成果が実り、文部省の奨学金による学生の留学が制度として実現することになった。これに基づく第一回の留学生として、当時本学大学院修士課程に在籍していた藤井章吾が派遣されたのは、54年夏のことであった。更に少し後になるが、訪日中であったチュニジアのチュニス大学ブルギバ現代語研究所所長のマアムーリーとの間でも同様の協議が進み、同大学への留学生の派遣が可能となった。これら両大学への留学生派遣は、全国的な文部行政の枠内で行われるので、各年度に定まった人数の枠があるわけではないが、最低でもどちらか一方の大学に1名の枠がこれまで認められてきている。年度によっては、両大学に複数名認められたこともある。いずれにしても、当然ながら平素の学業成績に基づいて推薦が行われるので、学生諸君の勉学の励みになっていることは言うまでもない。

こうした発展の一方で、学科の歴史そのものを担い学科の研究教育の気風を育て、現スタッフ全ての恩師でもある伴の退官の時(59年3月)を迎えなければならなかった。学生が怠けていても厳しく叱るわけでもないのに、隅々にまで気合いの入ったプリントを謄写版で刷って授業をするその姿に、全ての学生は緊張したものである。学生時代の思い出がすべからく伴の思い出につながるというのは、外交・貿易・マスコミ等の様々な分野で活躍する、我々全ての教え子に共通する思いである。専門のセム語学の分野では、手掛けた仕事のほとんどが日本で最初の第一級のものであり、しかも、全てを戦前戦後の困難な中で進めたことを皆知っているが故に、驚嘆と崇敬の念は一層のことである。伴と離れることになり、残された若手教官は不安の思いにかられたが、四天王寺国際仏教大学に移った後も、幸いにも非常勤として63年度まで引続き学生・教官共々指導を受けることが出来たのであった。尚、伴の意向で、数年前より池田が学科主任となっていた。

タッリーマの後任として58年にはカリームが来日したが、事情により任期途中の帰国となり、59年秋にはカイロ大学よりナスルを迎えた。細身で長身のタッリーマとは正反対で親しみやすいナスルは、学生にも人気があると共に柔軟な性格から日本の生活にもよく馴染み、平成元年まで勤めることになった。

この60年からは古林清一(主としてエジプト近代史)と若い藤井章吾(主として現代文学)が非常勤で授業を担当することになった。又、61年に磯崎が東京に移ったので、新しく余

部福三に出講願うことになった。しかしこの頃の大きな変化は、60年秋より池田が学生部長の要職に就いたこと(63年秋まで3年間)や、大学受験人口の増大に伴う文部行政、アラビア語学科卒の若手研究者の輩出等と関連している。最後の点から言えば、西尾哲夫、竹田真理、森高久美子等有能な若手の力を借りて学生の世代感覚にあった教育が可能となって来たことは、その他の専門で他大学に勤めることになった卒業生の存在と共に、当学科の研究上の社会的責任を果たすという責務から見て、単に数が増えてきたというのみに留まらない意味を持つものと言えよう。

時があい前後することになるが、本学から出されていた「スワヒリ語講座」設置の要求が文部省の目に止まり、折衝の結果アラビア語学科の一講座として受け入れられることになった。56年秋には、同講座の教官として宮本正典、中島久が着任した。翌57年から学科定員も、同講座設置に伴い10名増の35名となったが、当初はアラビア語専攻の学生が、選択必修の形で履修単位の一部にスワヒリ語を取っていた。しかし、61年からは同一学科内でアラビア語専攻(25名)とスワヒリ語専攻(10名)が別々に入試を行うことになり、それぞれの履修課程が設けられることになった。更に62年度からは、大学受験人口の増大に伴う臨時定員10名がスワヒリ語専攻につくことになり、スワヒリ語専攻の定員は20名に増加した。そして63年には、学科名称も「アラビア・アフリカ語学科」となると共に、増員に伴い稗田乃が着任した。平成3年からはスワヒリ語専攻に更に15名の定員増が認められ、その現定員は計35(定員25+臨増10)名となった。こうして全体として60名の定員となったアラビア・アフリカ語学科は本学の中で、もはや決して小さな学科ではなく、教官・学生共に二つの専攻が仲良く協力しあい研鑽を積んでいるのが現状である。スワヒリ語とその文化圏は、アラビア語とは異なる固有の独自性を持ち全体としてアフリカという大きな地域に属しつつも、同一のイスラーム文化を共有するという点でアラビア語と共通する事項も少なくないので、それぞれの努力と共同が更に大きな結実を生み出して行くものと期待されている。

さて、アラビア語専攻の話に戻れば、スワヒリ語と専攻が分かれたことを一つの契機として、62年からは前期2年間の実習をA・B二クラスに分けることとなった。定員15名の時代のような小人数による授業で、複雑なアラビア語の文法修得を更に効果的にするためである。同時に、数年前からの経験に基づき4ないし3コマは共通のテキストを使い、学生の理解と学習効果を計ることとなった。前期2年間で、語彙集等を除いても合計800頁にもよる英文の教科書に、時には悲鳴を上げつつも学生は良く奮闘している。この経験を基に独自の教科書編纂の可能性を目下検討しており、ゆくゆくは当学科の教育に適合したものを目指しているところである。

ところで、平成元年には客員教授として、再度タッリマを迎え教官一同再会の喜びを分かち合ったのであるが、既に4年にわたる前任期中の経験もあり研究上も円熟の域に達して、前回以上に当学科の分かち難いスタッフとして研究教育に邁進している。更に3年

秋には、イサームの母校赴任に伴い、その後任としてサフワーンを迎えた。アラブ人離れた日本語を話したイサームとは異なり、紳士然として控え目な人柄のサフワーンの会話の授業は、シリア方言を話すこともあって、学生には新鮮な刺激のようである。

以上が、平成3年秋までの「亜刺比亚語部」・「アラビア科」・「アラビア語学科」・「アラビア・アフリカ語学科アラビア語専攻」の歴史の概略である。

## 〈2. スワヒリ語専攻の沿革〉

### 〈前史〉

「外大70年史」にかかわるエピソードといっても、我々のスワヒリ語専攻は今から6年前、1986年4月の発足であるから、思い出を語るにはまだ早すぎる。この専攻に学ぶ者は、学生も教官も、誰もが元気潑刺、清新な気概に満ちあふれており、まだ思い出を語ろうなどとは思わない(あるいは、それほど老化していない)。おもしろいエピソードなどは、まだまだこれから先のことであろう。

スワヒリ語が本学のカリキュラムに初めて登場したのは1963年4月のことで、全学科の学生に受講可能な関連外国語科目(研究語学)として開講された。おそらく当時は、全国の大学で最初の、しかも唯一の授業科目であったと思われる。1963年といえば、一挙にアフリカの17か国が独立して「アフリカの年」といわれた激動の年から3年後、日本アフリカ学会創設の1年前である。

スワヒリ語開講にむけてかなりの努力が学内で傾けられたことと思うが、寡聞にしてその間の事情を知らない。ともかく、日本におけるスワヒリ語の草分けの一人である守野(旧姓田中)庸雄(現東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)が非常勤講師としてこの授業を担当した。『スワヒリ語会話練習帖』(大学書林、1980年)などを著わしている守野は本学インド語学科の出身であるが、独力でスワヒリ語を勉強したという。これぞまことの「スワヒリ人」ではあるまいかと疑われるほどその風貌は個性的であった。1965年、東京外国語大学にアジア・アフリカ言語文化研究所が設置されると、守野は助手として就職することになり、大阪を離れてしまった。

そこで、1965年4月から、日本におけるスワヒリ語・アフリカ言語学の文字どおりの草分けである、現大阪大学名誉教授五島忠久が非常勤講師として週1回、この授業を担当することになったのである。五島は東京大学文学部言語学科の出身で、学生時代からスワヒリ語を中心にアフリカの言語に深い興味を抱いていたという。しかし、当然のことながら、卒業後、その方面での職は得られず、旧制高校の英語教師になり、のちに大阪大学に転じて、英語学、英語教育の分野で一大権威となった。五島には、いくつかのスワヒリ語学関係の論考のほかに、『スワヒリ語文法入門』(大学書林、1963年)、『アフリカ語の話』(大学書林、1963年)、『アフリカ諸言語の構造と関係』(A・ワーナーの著書の日本語訳。三省堂語

学文庫、1944年)など、草創期の我が国のアフリカ言語学に関して貴重な仕事がある。五島は、もともと英語、あるいは印欧語一般の文法的性(ジェンダー)に興味をもち、「性の遍歴」が自分をアフリカの言語に追い立てたと述懐し、アフリカ語の研究は「本職のかたわら、いわば趣味として」やってきたとも述べている。五島の勇氣ある選択と学問的遍歴がなければ、我が国のアフリカ言語学の出発はおそらく半世紀近くも遅れを取るようになったであろう。

1977年4月からは宮本正興(当時、立命館大学)が出講することになった。宮本は、京都大学大学院でアフリカ言語学を専攻した第一号で、やはり独学組の一人であった。五島と同様、宮本も「性の遍歴」からアフリカ語へ追い立てられた一人であったが、その遍歴が昂じたためか、案の定、卒業後はその方面での職が得られず、英語教師として立命館大学で働き、主として英語とアフリカ文学を教えていたのである。

関連外国語時代のスワヒリ語の授業で、守野・五島がどんな授業をし、どんな学生が受講していたのか、知る由もない。おそらく当時は受講生の数も少なく、その分だけ充実した内容の授業が展開されていたものと推測される。1960年代に、スワヒリ地域に関する総合シンポジウムが本学で開講されたが、これには二人の存在はもちろん、草創まもない日本アフリカ学会の会員であった梅津和郎(現名誉教授)、加賀谷寛(インド・パキスタン語学科)などの力が大きかったものと思われる。それに、東京外国語大学に比べて、アジアの諸言語を重視している本学の風土、また大阪の企業が早くから東アフリカに進出していたといった進取の風土が、スワヒリ語を本学に初めて開講する契機になったのではないかと想像されるのである。

宮本は上八学舎から箕面学舎への移転期をはさんで5年間、週に一度出講した。当時の受講生は、各学科、特にロシア、ドイツ、スペイン、ビルマ、ヒンディーなどから学年当初は20~30名もいた(もっとも学年末には10名程度に減っていた)。スワヒリ語そのものよりも、もっぱらアフリカの雰囲気大切にしていた宮本は、学生の中に競争を駆り立てるような試験は一切やらず、学年末には皆勤賞、あるいは精勤賞のしるしとして単位を認定していたから、自主的に努力しないかぎり、ほとんどの学生はそれほどスワヒリ語自体の力にはつかなかっただろう。学生の中には毎年受講しにやってくるのが数名いて、授業よりも年に一、二度のコンパを楽しみにしている風情があった。だがこの古き良き時代は、次の段階で一新されることになる。

#### 〈スワヒリ語学設置〉

1981年4月から、アラビア語学科第四講座としてスワヒリ語学(定員10名)が設置されることになったのである(もちろん、関連外国語としてのスワヒリ語はそのままで現在まで開講されつづけている)。

宮本は上八時代から、アラビア語の伴康哉(現名誉教授)などからスワヒリ語講座の新設

要求について何度か相談を受けることがあったが、この年度の要求は他の方面から出ていたものだったので、いざ設置が認められると、全く予期していなかったことだけに、どの学科に付設してよいものか、学内ではかなりの戸惑いがあったと聞く。結局、言語の系統は違っても、地域的に隣接し、文化的な影響関係も強いアラビア語学科がこの講座を引き取るようになった。スワヒリ語講座はいわば継子として誕生したのである。

かくして1981年10月1日付で宮本と中島久が着任した。中島は宮本とほぼ同年齢であるが、北大大学院言語学科の出身で、同大学のアフリカ言語学専攻の第一号であった。ここにスワヒリ語はアラビア語学科学生の副専攻言語として、一定限度つきでアラビア語の単位と読みかえるという制度が発足したのである。こうして、毎年数名程度の学生がスワヒリ語を選択し、後期の3、4年ではアフリカ関係の講義・演習に専念するというようになった。スワヒリ語は表舞台に半分だけ顔をのぞかせたのである。

しかし、舞台に半分まで顔を出せば、あとは全身をさらけだしたいというのが人情で、以後は、アラビア語学科の協力を得て、ごく自然な勢いで専攻創設にむけてはずみがついた。

1986年4月から、文部省の臨時増募計画が始まると、スワヒリ語副専攻は、これに便乗して、学生定員20名の専攻コースとして、独自の入試選抜を始め、独自のカリキュラムを編成して、実質的には一学科としての体裁を整えることになった。88年4月には稗田乃が着任した。稗田は京大大学院でアフリカ言語学専攻の第四号であったが、大阪工業大学で英語を教えていたのである。

スワヒリ語専攻の第一回入試は応募者18名、合格者は16名だった。その頃は急ごしらえのスワヒリ語専攻自体の存在が受験界に知られておらず、応募者が定員を下回るという事態に冷汗をかいたものだが、入学してきた16名は一致団結、いついかなるときもキャンパスを徒党を組んで遊動し、昼食も全員一緒といった仲間意識を誇示し、少々薄気味の悪いほどであった。しかしこの第一回の卒業生は、スワヒリ語専攻の基礎をしっかりと築き、後につづく伝統を創始してくれた。何人かの名物学生がいるが、名前をあげるには記憶がまだ生々しすぎる。

#### 〈学科名称変更〉

88年4月から学科名称が「アラビア・アフリカ語学科」に変更され、1991年4月大学院西アジア語学専攻にスワヒリ語が増設され、同年10月には我が国最初のスワヒリ語外国人教師サイド・アフメド・モハメド・ハミス(当時ナイロビ大学)を招聘することになった。また、1991年度には念願の「アフリカ文化講座」(定員15名)の設置が新たに認められ、それに伴い、現在の学生定員は35名となっている(臨時増募分の10名は、近い将来に返還する予定)。なお、関連外国語としては、スワヒリ語の他にギクユ語、リンガラ語、ヨルバ語が開講されている。

## 〈現状〉

スワヒリ語専攻は、1991年3月現在、卒業生41名、学部学生111名、院生1名となっている。

スワヒリ語専攻として独自の入試選抜を始めるにあたり、当時の学生部長から「就職は大丈夫か」と念を押されたことを思い出す。幸い、卒業生の就職は順調であり、商社、マスコミ、船舶、自動車会社、銀行など他学科と比べて遜色はないように思う。大手企業では、アフリカ部門を持っているところもあり、当然アフリカ地域での活躍が期待される者も少なくない。もちろん、スワヒリ語を直ちに活用できるような職種は、現地でボランティアとして活躍するとか、NHKの国際局へ就職する場合などをのぞいて、少ない。しかし、最近の南アフリカの激動が示しているように、スワヒリ語を窓口として広くアフリカを学ぶこの専攻の将来については、楽観してもよいのではないか。たとえば南アフリカ共和国が従来の公用語である英語とアフリカーンス語に加えて、ズールー語とコーサ語といったアフリカ言語の公用語化を考えているように、また東アフリカのスワヒリ語作家はもちろんのこと、アフリカの各国で作家たちがますますアフリカの言語でも書き始めていることに象徴されているように、アフリカの言語と文化の重要性はますます高まってくるに違いない。いま我々にとっていちばんの責務は、こうした事態に立ち遅れることのないようカリキュラムを一層充実して「アフリカ学」の内容の向上をはかることだと思われる。スワヒリ語専攻が自らの「70年史」を書くことになる西暦2050年頃には、全アフリカの人口は21億、スワヒリ語の人口は優に4億を超えるだろうと国連は予測しているのである。

(池田 修・高階 美行・宮本 正興)

## 9. ペルシア語学科

### 〈前史〉

ペルシア語学科は昭和36年に開設されたが、本学におけるペルシア語教育の歴史は、大正時代にさかのぼる。

ペルシア語は、最初は印度語部で教育された。沢英三が、本学印度語部機関誌『アーリヤ学会々報』第15号(昭和24年6月18日)で回想しているように、大正14(1925)年度から、本邦でははじめて大阪外国語学校の印度語部でペルシア語が開講された。それまでは、2・3年級の第二語学は、英語かアラビア語であったが、ペルシア語が加わったため、アラビア語を希望しない者は、ペルシア語を選べることとなった。

沢は、インド流のペルシア語の発音では面白くないので、昭和3年、自費でペルシア(イラン)に行き、発音の研究に努めた。そのあと、コーカサス、トルコ、バルカンを振り出しに、独、仏、英、白、伊などの主要都市を訪問し、帰国。そして昭和4年から、ペルシア語の授業も担当するようになった。

当時、京城帝大に移る松本重彦のアラビア語の授業をもつために、教壇に立つまでは図書館勤務をしていた山本健太郎(IP2)は、10か月ばかり、ペルシアに出張し、帰国後、アラビア語及びペルシア語の教鞭をとることとなった。

昭和14年に印度語部を卒業し、本学のアラビア語学科教授でもあった伴康哉名誉教授(IP15)は、古賀勝郎編『学生の70年史』(大阪外国語大学インド・パキスタン語学科、1991年11月11日)の中で、当時を思い出している。伴は、印度語部の生徒であったとき、授業科目のうちでは、ペルシア語にいちばん興味を覚えたという。印度語部では、主としてウルドゥ語を教え、ヒンディ語は3年生になって、週3時間あった。しかし、ペルシア語は、2年生で8時間、3年生で7時間の授業があった。沢英三は、フィロットの『高等ペルシア語文法』から多くの用例を引いて、高度の統辞論を講義した。山本健太郎は、印度語の時間には、たびたび精神訓話をしたが、ペルシア語の時間では、会話にも講読にも、活気溢れる授業を行ったという。

ペルシア語の授業の前史は以上のようなもので、充実したものであった。沢は、大阪外大のペルシア語学科のみならず、アラビア語学科の基礎を固めたのだった。沢の見識と、中目覚初代校長の見識の賜物といっても過言ではない。

#### <学科新設>

昭和36年、大阪外国語大学にペルシア語学科の設置が認可された。沢はすでに定年退官した後であった。1期生の入学試験は5月に入って行われたため、競争率は27倍に達したと聞いている。そのため、この年度に入学した学生は、文字どおりの難関を通過した個性豊かな人材であった。授業は、山本健太郎と東京大学から赴任した加賀谷寛、京都大学から赴任した勝藤猛の3人によって行われた。山本と加賀谷は、インド語学科に所属していたので、学年進行によるペルシア語学科の欠員を補充するため、昭和39年4月、井本英一が広島大学から助教授として赴任した。ペルシア語学科設置と育成に関しては、当時の学長であった森沢三郎が、山本と学生部長の片山忠雄と共に尽力した。ペルシア語学科は、このように、さまざまな人々の力添えをうけて成立したのであった。

#### <学生>

学生は1学年定員15名のところ、いつも2、3名多めに採ってきた。卒業生の名簿を見ると、実に社会の各方面で活躍している。またどの学年からも、1人か2人、進学して学問を続ける人が出ている。本学で教鞭をとっている人たちもいるが、他大学で研究・教育に

従事している人もいる。外大の特徴として、在学中に、自分の専攻する言語が話される国へ旅行したり、留学する学生があとを絶たない。わがペルシア語学科でも同じで、人によっては、曾遊の地で、今は社会人として仕事をしている。

#### 〈教官〉

大阪外大のペルシア語学科は、古代イランや中世イランの言語の研究の灯も消さないように配慮している。そこで、古代・中世イラン語の専門家である伊藤義教先生に非常勤講師として学生の指導を願った。先生には、京都大学定年退官後も、指導をお願いした。その結果古代・中世研究も、学統を継ぐ人が何人か出ることとなった。この傾向は、他大学のペルシア語教室には見られないものであるので、ぜひ持続したい。現在は本学留学生日本語教育センターの奥西峻介(大P18)と、非常勤の森茂男(大P22)が古代・中世イラン学を指導している。

イランの人文地理は、最初、京都大学の織田武雄先生にお願いしていたが、退官になったあとは、関西大学の末尾至行先生がイランの人文地理を受けもっている。

外国人としては、昭和35年5月からモルーケ・カーゼンプールが、沢英三の推輓により、無給でペルシア語の会話・作文を教えた。昭和37年7月1日付で、外大備いとなり、38年4月1日から外国人教師として学生の指導にあたったが、昭和60年3月31日付で退官し、マダガスカルの北方にある、インド洋上のセイシェル諸島の一島に引退した。

カーゼンプールのあとは、もとのイラン帝国の外交官であったハーシェム・ラジャブザーデが、昭和60年4月1日に着任した。イラン文化史を専攻し、学界で活躍している。

昭和45年10月1日、岡崎正孝がアジア経済研究所から助教授として着任した。イラン近世・近代史を専攻し、カナートの研究の専著のほか、ペルシア語文法、ペルシア語読本などの著書、学術書や小説の訳本など多数がある。英語による著書と論文もあり、海外の学界でも活躍している。

嶋本隆光(大P24)は、ペルシア語学科卒業後、カリフォルニアの大学でさらに研鑽を積んだ。非常勤講師としてイスラム関係を受けもっており、論文も多い。

昭和57年4月1日付で、勝藤猛がペルシア語学科から、共通講座の歴史学に転出した。その後も、大学院その他で協力している。

勝藤の後任として、香川(藤元に改姓)優子(大P28)が、昭和57年4月1日付で助手として採用された。藤元は、現在は専任講師として、イラン現代文学を専攻している。

#### 〈将来〉

平成4年4月から、山田善郎学長の尽力で、トルコ語学科が併設され、ペルシア・トルコ語学科として出発する予定である。勝田茂(大P20)は、ペルシア語学科を卒業後、トルコのアンカラ大学で研究を進め、帰国後は、非常勤でトルコ語の授業を受けもってきた。目下、

外大は将来の研究体制を模索しているところである。ペルシア語学科も新しく出直すことによって、一層の発展を期待するものである。

(井本 英一)

## 10. 英語学科

### 〈英語学科の歴史〉

- |                                     |            |
|-------------------------------------|------------|
| 1 英語部/英米科/英語学科の歴史                   | 林 栄一       |
| 2 昭和から平成へ：再調整と拡張                    | 金山 崇       |
| 3 現況・研究誌・同窓会                        | 舟阪 晃・田川 弘雄 |
| 4 吉本正秋先生の思い出                        | 島田 昇平      |
| 5 森沢三郎先生の片影                         | 片山 忠雄      |
| 6 “Every cloud has a silver lining” | 森塚 文雄      |

英語学科の歴史、教官、客員教授の研究や業績、授業の様子、エピソードなどを、かつての学科主任の先生方を中心に、専ら主観的に、お書きいただいた。

まず、林栄一先生には、永年、学科主任と、その後、学長を務められたということから、広い観点から学科の歴史を概観していただいた。

つぎに、昭和60年から平成3年までの学科内の動静を、金山崇教授が執筆した。

現主任の舟阪晃が学科の現況と学科発行の研究誌について、また田川弘雄教授が学科同窓会について執筆した。

以上を本学科の通史とすれば、以下の三先生には、そこで描ききれなかった学科の各時代の一断面をお書きいただいたことになる。

すなわち、島田(嶋田)昇平先生には、外語初期の教官である吉本正秋先生の思い出を綴っていただいた。

つぎに、片山忠雄先生には、英語学科を論ずるとき、先輩のほとんどの人がなんらかのかたちでお名前をだされる森沢三郎先生の思い出をお書きいただいた。

最後に、森塚文雄先生には、学園紛争のご経験や、移転前後の学科内の雰囲気を実にお伝えいただいた。

(舟阪 晃)

### 〈1. 英語部/英米科/英語学科の歴史〉

大阪外大の前身は、林蝶子氏が亡夫の竹三郎氏の遺志に添って浄財を寄せることにより創設された大阪外国語学校であったが、当時は語部と呼ばれた数少ない9つの専門学科の、西洋語部門の筆頭に「英語部」が誕生したのであった。古いことなので私自身はよく知ら

ないのであるが、初期の頃は佐久間信恭、浅山於菟、千葉良祐といったような先生がおられたとのことである。正直に申してそれらの先生がたに接したことがないから、私自身が体験したことから話を始めると、私は、昭和12年(1937)4月に入学したのであるが、当時の主幹(今の学科主任)は吉本正秋先生であった。先生は東京外語の出身の方で、村夫子然とした洒脱な人柄で、昔かたぎとってよいことば使いや態度で学生にも接しておられた。まさに「おやじ」という愛称がピッタリの、威厳がありながら親しみがもてる先生で、授業では独特の英文和訳の妙でわれわれを魅了された。たとえば、“Nature takes its own course”は「止めて止まらぬ恋の道」といった吉本節がそれである。先生はまた酒の好きな方だったから、酒にまつわる幾多の逸話がある。たとえば酔っぱらって、羽織、袴のままで池の中を歩いたとかいう話であるが、どこまで本当なのかわからない。とまれ古きよき時代の、人間くさい学校の一断面を見せつける人物であった。先生は、われわれ学生がお宅にお邪魔すると、服装を正して対面されたが、暗くなると石油ランプに点灯され酒なども出してもてなされるので恐縮するばかりであった。それにしても先生は没せられるまで、遂に電灯をつけることを拒否されたということで、これにはちょっとした事情があったからだと思いが、頑固に主張を通された古武士の風格を垣間見た感じである。吉本先生に続いて上田畔甫先生がおられた。広島高師のご出身の容姿端麗な英国紳士の典型のような方であった。出雲の方言を出さぬように苦勞されたとかで、日本語の方は能弁ではなかったが、こと英語に関しては美声できれいなキングズ・イングリッシュの発音は、うっとり聞きほれる程のものであった。博学多識の、これこそ英語の先生と万人が認めるようなお人柄で、まじめで羽目はずすようなことはなかったと思う。息子さんを亡くされて気落ちされた一時期があったが、娘さんのご主人が英語の先生で、お孫さんも外大の英語学科を卒業、会社勤めののち教職につき、三代の英語の先生を出した一家のほまれをこよなく大切にされていた。亡くなられたときは98歳であったが、最期までしっかりとされていた。白寿のお祝をしたいと有志と話をしていたのだが誠に残念なことであった。

本多平八郎先生は外語の名物教授であった。徳川の旗本八万騎の中でも、その名の聞こえた本多平八郎忠勝の末裔であることは間違いのないところだが、直系でなく分岐された家系であることは、先生ご本人から聞いた。とまれ江戸っ子肌の野人めいた人柄は多くの人を魅するところがあった。正義感の強い、そして鼻っばしらの強いところは生まれつきであったのだろう。戦争中に陸軍の将校とケンカをして包帯をして学校へ来られたと聞く。校長とケンカをしたり、ストライキをもちたてたり逸話の多い方であった。人情のあつい直情径行という形容がぴったりあたる先生で、学生にも人気が高かった。英詩に親しまれ、晩年は日本の詩歌の英訳に精魂を傾けられ、次々と短歌の英訳集を出版されていたが、その圧巻は『万葉集』であった。そのため外務省から文化使節として欧米を講演して廻られた。先生にとってはよい花道であったと思う。先生は戦時中一時退官され、戦後復帰されたと聞く。

本多先生は前述のような詩人肌の方であったから、学校の事務的な仕事は苦手であったため、本多先生が主任であった戦後一時期の雑務は森沢三郎先生が実際はやっておられたようである。外事専門学校という名称になっていた——英語部は英米科と称していた——大阪外語が、戦後の学制改変で4年制の大阪外国語大学に昇格して初めての外語自前の学長になられた方として、森沢先生のことは今更くどくど述べる必要はないと思うが、英語部第1回の卒業生として、その翌年には早くも母校の教授陣に加わった大先輩である。私が学生であった頃は、丸刈りの坊主頭で飄々と気さくにわれわれの相手になって頂いたものである。抜群の記憶力と早口で聞く方が困った話はよく知られている。英語部では西洋史を教えて頂いたが、他の語部では英語の授業をなさっていたはずである。書は弘法大師流とかで、すらすらと書かれる文字は達筆であったし、和歌も随分とよい作品があったようである。学長時代の後半では、留学生別科(現・留学生日本語教育センター)の設置や短大から二部へと推移する問題では、ご苦労があった。

昭和10年代には、米国コロンビア大学のPh.D.、大平頼母先生がおられたが、英語部では商品学を教えておられた。他の語部では英語を教えておられた筈で、これは前述の森沢先生と軌を一にする。商品学というのは、自然科学の面が大きかったのか、先生はいつも白衣の実験服をまとい、授業にも顕微鏡などを持ちこんだ場合がままあった。これまた飄飄たるお人柄であったような印象が残っている。

ここで、当時おられた二人の外国人教師の先生のことにも述べておかねばならない。一人はイギリス人でWilliam Jonesという方であるが、和歌山高商とかけもちで毎週精勤に顔を見せておられた。おだやかなイングリッシュ・ジェントルマンで、日本人学生の性向も十分のみこんだよい先生であった。学生も親しみをもって接していた。もう一人はGlenn William Shaw(尚紅蓮という漢字で署名されることもあった)というアメリカ人で、日本語は非常に達者(殊に読み書き)であった。日本の文学作品(たとえば、倉田百三『出家とその弟子』、菊池寛『藤十郎の恋』、芥川竜之介『羅生門』など)の英訳や、日本の風物に関する随筆などかなりの著作がある。朝日新聞の社友としての寄稿もあり、なかなか筆の立つ人であった。俳句にも日本人のものとは肌あいの異なる面白い作があった。第二次世界大戦の初期、日米関係が緊張したとき帰国されたが、そのとき「おさらばと柿、菊、きのこ、金木犀」というKのアリタレーションを踏んだ句を残された。先生は日本の敗戦後、占領軍の文化使節として再来日、旧交をあたためられたことがあった。アメリカ人らしい活動的な方で、授業は主として、日本文学の小品などを材料とした英訳を課し、黒板で学生の訳文を即座に訂正し説明し、またその訂正した訳文を暗記させて会話の練習に用いるなど、チョークの粉まみれになりながらの毎時間で、精力的なそのやり方は、非常に印象的で実力をつけるものであった。1年生のときは週に5時間も先生の授業があったのは驚異的なドリルであったと感心する。

以上で私が外語の学生として在学したときの話は終わるが、私は卒業してから、九州帝

国大学の英文科に進み、そこを卒業して兵役につき、21年復員、一時NHKに勤めていたが、森沢先生から母校に帰ってこないかとのお誘いを受け、22年の8月外専の英米科の末席を汚すことになった。同時に採用されたのが羽田三郎氏で、これは吉本先生と上田先生が定年退官されたのを埋めた格好になったらしい。何しろ終戦間もないときで、何の手続きもなしにいきなり教官会議で紹介されただけだったから、今ではおよそ考えられないことだが、とにかくその後は黒板を背にした生活が始まり、外語の内側から学校を見ることになった。その時の主任は老田三郎先生だったと思う。食糧も手に入れかねた時代で、校舎も高槻の兵舎跡であり、何一つ満足な設備はなかったが、空気はおおらかで、これから頑張るぞといった気持ちが充実していた。そのときの英米科の教官は本多、森沢の両先生のほかには老田三郎、甲元健雄、片山忠雄、庭田四郎の諸先生に新参の私たち2名であった。外国人教師も母語話者はなく、インド人のGupta、ドイツ人のSchwabの両先生であったが、これもこの時としてはやむを得なかったといえるであろう。

老田先生は比較的早く逝去されたが、学問的には非常に厳しい方で、授業でも学生が間違いをすると、大きな声で笑ったりされたが、これには学生も閉口したらしい。大変な読書家で、書籍に精通されていた学者であった。甲元先生は一言一句もいやしくない精密流麗な和訳で定評があった。温厚真面目な紳士で、老田先生が名大に行かれたあと、学科主任をやって頂いたが、誠実に事務的な仕事をこなしておられた。お身体はあまり丈夫でなく、京都からの通勤はこたえ、定年をまたず橘女子大学に移られた。お二人とも京大の出身で、従来の外語の雰囲気とは些か異質な感触があったが、昭和24年、新しい学制により大阪外国語大学となり、旧語部・科も学科と改称され、主幹も学科主任教授と呼ばれるようになったことと、直接関係ないことではあるが、新しい体制に相応した先生方であった。同じような意味で、庭田四郎先生も異色であった。先生は東大の言語学科のご出身で、我が国の英語学の草分けである市河三喜先生の系譜に属すると申してよいかもしれない。口数の少ない黙々と勉強をなさる方で、派手なことはお嫌いであったが、これは一つにはご病気のせいで、療養所での長い闘病の末おなくなりになったのは残念なことであった。あとは、片山先生であるが、この方は英語部の先輩であり、高等教員検定に合格されていて、実用面でも、学問面でも抜群の実力をもっておられた。よい意味において外語の正統を継承されていた方で、私などはいつも教えられてばかりいた。先生は台北帝大で、英文学者の矢野禾積先生の下で勉強されたことがあったと聞いているが、正に篤学の士と申してよい。土佐の出であって、「いごっそう」という頑固なところもあったとなつかしく思う。定年退官のあとは、追手門学院大学に行かれた。羽田さんは畏友ともいべき俊才で、その実際の英語の運用のすばらしさは衆目の認めるところ。語学の才能というのは、勿論修練の甲斐はあるものの、天賦のものがあり、その意味で羽田氏は外語の本来的系譜に属する。Business EnglishやESSの指導にはうってつけの教官であった。一時、住友商事に転出されたことがあったが、暫くして復職された。本多先生が戦時中一時致仕されたことを思

い出すが、復職後も、当時の風潮で大学には「語術」は不用であるという、浮ついた考え方が勢力をもつことがあって、羽田氏は青山学院大学の経営学部に転出されてしまった。後年、日本商業英語学会の会長をされたこともある。彼が去ったあとを佐藤年男氏にお願いして商業英語を担当してもらった時期があったが、彼も数年にしてアメリカの大学に留学したままになってしまった。この科目はその後、向高男氏に引き受けてもらった。なお、一時在籍したが辞職してしまったうちで、ユニークだった人に、佐竹静枝さんがいる。才色兼備の人であったが、ドイツ人と結婚して今はドイツに在住している。小生(林栄一)は、ずっと居続け、学生課長、附属図書館長、学科主任を務めたあと、昭和57年から62年まで学長職に就いていた。退官後、園田学園女子大学で再び学長を務めている。もう一人忘れてならぬのは、森塚文雄先生で、この方は広島文理大出身で英語学の専攻。丁度大学院の申請をしているとき、前述の羽田氏が転出してしまったので、その椅子を埋めるべく神戸商大からお迎えした方で、途中からだったにもかかわらず、英語学科の中に本当によくとけこんで頂き、学生の世話も親身になってしてもらい、一同感謝していた。

外国人教師について、今は昔の人だけを述べてみると、一時期を画した名物教授はアメリカ人Austin Faricy先生で、これはチャーチルも貰ったというローズ・スカラーシップでオックスフォードの大学院に学んだ、本来は古典語専門の博学多識の学者で、一般意味論の造詣が深かった。それにもましてユニークであったのは、アメリカでも相当名を知られたハープシコードの演奏者でもあったことで、グリークラブ、その他の指導や英語の外語節を作詞作曲して学生とよく交わって頂いた。定年退官後帰国されたが、先年訪問して頂いた。80歳はこえられたのではないかと思う。Faricyさんと殆ど同時だったが、William Gilkeyさんも印象深い。この人も音楽家でピアノは玄人だった。外語をやめてから帰国されていたが、再来日、目下は日本のある宗教法人の本部で国際宣伝に尽くしているとのこと。その他フルブライトの資金でそれぞれ一年ほど働いてもらった人たちが数人いる。McIntosh、Spalding、McCormick、Ashmead、Lovell、Ellis、Bedfordの諸氏がそれぞれ、おのおの異なった持ち味で学生を教えてもらった。今となってはなつかしい限りである。

カリキュラムも、だんだん英文科的になり、学問的講義が多くなって、外語的な要素や雰囲気は薄れてきたのは、外語マンとしては一寸さびしい気がするが、時代の要請とでもいうべきか。

私が昭和62年に退官した当時の英語学科には森塚文雄先生をはじめとする日本人教官11名、外国人教師3名が在職していた。なお、外国人教師のうち、Stirk氏の前にはRobert P. Inglis氏がいたが病没、またNelson氏の前任者としてThomas M. Pendergast氏がいた。

(林 栄一)

## 〈2. 昭和から平成へ：再調整と拡張〉

昭和60年から平成3年までの6年間、主任としての私にはやはり色々沢山の思い出すべ

き出来事があったように思える。上八時代に比べてより大きな様変わりが英語学科にあったことは否定できないようである。

森沢、甲元、片山、林、森塚の諸先生がつぎつぎと退官され、昭和生まれのスタッフだけになったことがそのひとつ。次に、従来のスタッフの中核を占めていた語学、文学に加えて文化、政治・経済関係のスタッフをふやせたことで、これまで努力目標として悩んできた事項の整理がついたことである。文部省の要請をうけて臨時増募として定員を10名増やし70名としたのもひとつの様変わりであろう。

この6年の間に甲元健雄、森沢三郎の両先生が亡くなられた。森塚文雄、林栄一の各先生がご退官になると大正世代の方がゼロとなり、戦争の影響もあってか、かなり年下の私などが年長者のひとりになって昭和60年4月を迎えた。その年新任の秋田氏を加えて教官スタッフは次の通りであった。英語学担当:金山崇、舟阪晃、加藤正治。英米文学担当:田川弘雄、舟阪洋子、内田憲男、斉藤隆文。英米文化、政治・経済担当:向高男、松田武、秋田茂。客員教授(外国人教師):J.E.Kulas、I.C.Stirk、W.R.Nelson。その後、英語学に田尻雅士氏が昭和62年に加わった。更に同年秋には、現代米文学担当として渡辺克昭氏を迎えた。翌年、羽田三郎先生ご退職後の久しい空白を埋めて活躍された向高男氏が惜しまれつつ他大学に去られたあと、同年、代わって高橋伸光氏がビジネス英語担当として着任し教学体制を整備することを得たが、年号も改まった次の年、20余年、女性専任スタッフとして業績を残された舟阪洋子氏が事情あって他大学に転任され、学科としてうち続く衝撃に時の移り変わりを痛切に感じた次第であった。しかし幸運にも同年、英語学担当に正保富三氏を、米文化担当に杉田米行氏を招くことができた。平成3年度はこの16人の体制で迎えることになった。

学生定員増で教官スタッフも上記のように増えたが、日本語学科より来る副専攻学生6名を受け入れる必要があり、従来の一学年2クラス制を3クラス制として、小人数編成で授業効果向上を計った。体制の変更で生じた問題点がスタッフの尽力で乗り切れたのは本当に嬉しいことであった。なお男女学生比が昭和60年辺りの5:5からここ3、4年は3:7と女子に比重が傾くまでに至った。毎年かなりよく粒の揃った入学生を迎えて、教える側としては、さあ来いと意気込むのも楽しい限りであった。卒業後の就職、進学の様子は幸いこの6年間まことに良好で、昔の主任の先生方のご苦勞は殆ど知らずじまいであっただけに、当時は振り返ってひとしお慰む日々でもあった。

大学院修士課程については、大きな転機を待っている現在であるが、英語学専攻修了者の学界での活躍はまさに目ざましいものがあり、その伝統に恥じぬようスタッフ一同努めてきた。英文学担当の上山政義氏ご退官のあと正木恒夫氏を、英語学には好田實氏を加えて、金山崇、舟阪晃、I.C.Stirk、田川弘雄、J.E.Kulas、松田武の8名が担当スタッフであった。

英語学科の慣例によれば退官するまで務めるはずの主任の役を勝手ながら6年終えたと

ころで打ち切らせてもらい、代わって主任交替制が始まることとなった。

以上、年月の濾過を十分に経ていない多すぎる色々の記憶を披露するのはこの際控えさせて頂き、学科内の大まかな変遷を辿るにとどめた。

(金山 崇)

### 〈3. 現況・研究誌・同窓会〉

#### 〈学科の現況〉

森塚文雄先生ご退官後、85年4月から金山崇先生が、主任を引き継がれ、学科内に、いろいろの係を作られ、すべての教官が、それぞれ役割をになって学科の運営に貢献するという方式をとられた。これまで、ややもすると、面倒なことはすべて主任に任せるという傾向があったが、この方式では、各教官が、それぞれの立場を自覚し、新しい雰囲気が生まれたと思う。とはいうものの、主任は、まさに「雑用係」で、諸々の雑事が先生の負担を大きくしたことは想像にかたくない。

90年の夏休み前ごろであったと思うが、先生の方から、主任を交替してほしいというご希望が出され、一同困惑したが、日頃のご負担を思い、この際、新しい体制をとることになった。ところが、見渡してみると、年上の先生は、諸般の事情で、お願いできないことがわかり、91年4月から、私が「雑用係」を引き受けざるをえない仕儀にいたった。

そもそも、本学の主任は、その職務を明記した規定があるわけでもないし、辞令がおりるわけでもなく、特別の権限があるわけでもない。いわば、学科の窓口にすぎない。

そこで、私は、主任は、ひとつには、大学と学科、学科と学生などの間の連絡係であるとし、また、学科内の仕事を割り振る手配師と定義し、しかも、数年のうちに、どなたかと交替するというこで、お引き受けすることにした。

さて、学科の通史について、二先生にお書きいただいたが、その締め括りとして、学科の現況を簡単に紹介しておきたい。

92年3月現在、英語学科には、四つの講座があり、それぞれの内容と、教官の配置はつぎのようになっている。金山教授の記述と重複するところもあるが、一覧として掲げておく。

- |                        |                |
|------------------------|----------------|
| (1) 英語学(歴史英語学)：金山 崇教授  | 田尻雅士講師         |
| (現代英語学)：正保富三教授         | 舟阪 晃教授 加藤正治助教授 |
| (2) 英米文学(アメリカ)：田川弘雄教授  | 渡辺克昭助教授        |
| (イギリス)：内田憲男助教授         | 斉藤隆文助教授        |
| (3) 英米文化(アメリカ史)：松田 武教授 | 杉田米行助手         |
| (イギリス史)：秋田 茂助教授        |                |
| (4) 英米経済(商業英語)：高橋伸光講師  |                |

客員教授James Edward Kulas、Ian Christopher Stirk、William Robert Nelson

## 〈研究誌〉

英語学科には、二つの研究誌がある。ひとつは、*The Reeds*で、わが国の古今の文芸作品の翻訳と研究解説を目的としている。他方は、『大阪外大英米研究』で、そのタイトルが示すように、英語英文学に限らず、英語学科に所属する教官の種々の研究分野を包括する、主に邦文による研究誌である。

まず、*The Reeds*は、1955年3月に創刊され、1965年までは、毎年刊行され、それ以後は、やや不定期になっているが、1981年頃からは、『大阪外大英米研究』と交互に、二年に一回、刊行するのを原則としている。

*The Reeds*第一巻(1955)には本多、片山、森沢、羽田、甲元の各氏が寄稿しており、奥付の代表者は本多平八郎教授になっている。それ以後、初出の執筆者をあげていくと第二巻(1956)では、林氏、第三巻(1957)では、山県氏がみられ、第四巻(1958)では、島田氏、第五巻(1959)では大井氏、第八巻(1962)では、金山氏の名前がみられる。第十巻(1965)は、森沢氏の退官記念号で、鶴野氏の名前がはじめて出ている。第十一巻(1967)では、正木氏、第十二巻(1968)では、好田、佐藤氏が、第十三巻(1972)では、上野、田川氏、第十四巻(1976)では、Faricy、Gupta、松田、森塚、竹中氏が、それぞれ初出である。第十五巻(1981)では、Kulas、Pendergast、舟阪(晃)、向、大橋氏、第十六巻(1983)では、斉藤(隆)、舟阪(洋)氏、最新の第十九巻(1990)では、正保氏がみられる。

以上、第一巻から第十九巻まで、巻頭言を除いて、執筆数は111編にもなる。*The Reeds*は、国内ばかりでなく、国外の大学、研究機関にも送付され、海外への日本文化の紹介の面で大きな貢献をしてきている。

つぎに、『大阪外大英米研究』は、*The Reeds*より4年おくれて、1959年10月に第一巻が刊行され、それ以後、原則として隔年に出版されている。最初の執筆者は、大井、甲元、島田、森沢、林、羽田、片山の諸氏で、甲元健雄教授が代表者である。それ以後、第四巻(1964)までの初出名として、上山、竹中、庭田氏があげられる。第五巻(1966)は森沢氏の、また、第六巻(1968)は甲元氏の、それぞれ、退官記念号で、金山、鶴野、池田〔現・舟阪(洋)〕、舟阪(晃)、正木、佐藤、田川、森塚、上野氏がはじめて執筆している。第八巻(1974)では、好田、杉本氏、第九巻(1975)の片山氏の退官記念号では、中山、斎藤(勝)氏が、十一人の執筆者のなかに含まれている。第十巻(1977)では、二宮、内田氏、第十一巻(1979)では、渡部、松田氏、第十二巻(1980)では、斉藤(隆)、Inglis、Kulas、向、Pendergast氏、第十三巻(1983)では、Stirk、大橋氏がみられる。第十四巻(1985)は、森塚氏の退官記念号で、十三人の執筆者のなかに加藤氏の名前がはじめて現れている。第十五巻(1987)は、林氏の退官記念号で、十六人の執筆者のなかには、Nelson、秋田、岡田氏が含まれる。第十六巻(1988)は、上山氏の退官記念号で、十四人の執筆者のなかに、池上、渡辺、田尻、各氏の名前が初出している。第十七巻(1990)では、大津氏の、最新の第十八巻(1992)では、高橋氏の名前がみられる。

以上、第一巻から第十八巻まで、執筆数は173編に及んでいる。

本学科の二つの研究誌を、執筆者名を中心に、みてきたのであるが、これはまさに、本学科の歴史そのものであるといえる。このような伝統の礎を築かれた先輩諸氏に敬意を表するとともに、現職のわれわれは、次の世代のために、おおいに研鑽を積み重ねなければならないと痛感している。

(舟阪 晃)

#### 〈英語学科同窓会－EDU〉

EDUとはEnglish Department Unionの略語で大阪外国語大学英语部会のことを意味し、「本会は会員相互の親睦を図り、母校同窓会と密接な連絡の下に英語学科の発展を期する」と会則にうたっている。

英語部会は1963年に創設された。創設に参画された前学長林栄一先生に聞くと、むしろ学生の発案で、先輩たちが啓発され、当時の学長であった森沢三郎先生を中心に組織され、親睦も一つの活動ではあったが、会誌を発行することが主目的であったとのことである。

手元に1966年発行の会誌3号「森沢先生御退官記念特集号」がある。巻頭に森沢先生の「気ままについて」という随筆がある。その数年前、学長就任時に自動車運転仮免許の英語の表示L(learner)を示し「学長職には初心者だから宜しく」と挨拶をされたことがあったが、これを聞いたあるEDUの会員が先生に激励の歌を贈り、先生が森沢流の洒落で返歌をされたというエピソードがこの随筆に紹介されている。このやりとりからも会員相互の親密な交流ぶりが伺える。

Learnerと宣らせど君が  
learning, leadership人疑わず

Little learning, less leadershipのわれ  
laughing-stockとならずに済むこと least likely

この会誌は単なる追憶文集ではなく、かなり学問的な論集であり、学界に名の高い山口秀夫、片山忠雄、林栄一、羽田三郎、寺村秀夫、大井浩二氏の名もあり、現職の金山、正木、田川も投稿している。

この会誌の「事業報告」に次のような記事がある――

「英語部会発足以来3年の歳月が流れました。EDUができた頃は私達は1年生であったわけで、発起人会・学内打ち合わせ会に何度か出席しておりましたが、文字通り末席を汚すといったところでした。事実、専門学校や臨時教員養成所などをはじめとする先輩諸兄がずらっと50人以上も列席されていたのはまさに壮観で、何か精神的に圧迫を感じるほどでした」

たぶん4年生であろうと思えるこの学生が終身会費の徴収や名簿の作成に努めている様

子が何われ創設の頃の熱気が感じられる。

会誌は1974年の「本多平八郎先生追悼特集」以来出ていない。

親睦会は隔年に、会場を学外や学内に変えて開催され、15回を数えている。各回、100人ぐらいの参加者があり、東京、名古屋などから馳せ参じてくださる方もあり、いつも盛況であった。

最近では創設時の熱心な学外幹事が物故されたりして、活動が低調になっている。また、会費が学内食堂のうどんが15円であったところと同じ1,000円のままに据え置かれているので、会誌の発行はおろか、総会の案内状をだす郵便代にも事欠く経済状態にも活動不振の原因がある。現在でも入学時のオリエンテーションで学内幹事が会則を印刷した入会案内を配布し、1,000円を徴収し、殆ど全員が会員になってはいるが、上記のような事情で、学生が英語部会の活動に参加する機会が殆どないのが実情である。

(田川 弘雄)

#### 〈4. 吉本正秋先生の思い出〉

無謀にも、行く先々のことも考えないで、ただ英語が好きだからという単純な気持ちで、外語の試験を受けて入学してしまった。天罰はてきめんで、授業料未納の張り紙が、学生の昇降口のようなところに張り出され、その中に私の名前があった。

ほかに方法が思いつかなかったので、教官室のお席に吉本正秋先生を訪ね、話をしはじめたところ、先生は場所を不相当とお考えになっただけで、人けの無い隣の会議室へ私を連れて行かれ、話を聴いて下さった。張り紙のことを申し上げると、先生は「今後どうするつもりですか」(先生は学生に対してでも、「ですか」口調で話される先生であった)と尋ねて下さった。「学校をやめて、働きながら勉強をして、中学教員の検定試験を受けてみようと思います」と答えると、先生は「それは生やさしいことではありません。この外語で三年勉強すれば、中等教員の免許状が得られるので、その方法を考えることにしましょう。とにかく、急なことなので、明日また、この場所へ何時何分に来て下さい」とおっしゃった。

翌日、所定の場所へ行ったところ、封筒をお出しになって、「先ずこれで当座を凌いでください」とおっしゃった。会議室を出て、封筒を開けてみると、二十円が入っていた。そして私は急場を凌いだ。

その日の放課後、母校の中学校にM先生を訪ね、一部始終を話したところ、「幸いにも家庭教師の口があるから、そこで働いて、急場を凌ぐように」とのことであった。その翌日、吉本先生を教官室に訪ね、昨日の御厚情を謝し、後日御返却申し上げます旨伝えた。そのうちに、二十円が整ったので、心からの感謝を籠めて、かつての封筒で御返却申し上げた。

今から六十数年も前のことである。

(島田 昇平)

## 〈5. 森沢三郎先生の片影〉

森沢三郎先生は英語部一回生で、出身校は旧制高知県立安芸中学校である。この学園には山田孝雄が教鞭をとっていたことがある。もっとも先生の入学数年前のことゆえ、この異色の国語学者が先生に及ぼした影響の有無・程度等は明らかでない。それはともかく、先生の国語への関心は本物であった。大正15年講師として母校の教壇に立たれた年、槻の木の人となられたのがその証である。槻の木は早稲田の詩人教授窪田空穂の主宰する国文学・短歌の研究団体である。これによって先生の歌歴は外語在学中又はそれ以前にさかのぼると推測される。歌風は空穂流で人生的・現実的である。ただし先生の場合、ストイシズムという背骨が一本ぴしっと通っている。槻の木の同人として先生が能の中核ともいうべき謡曲に興味を持たれ英語による紹介を思い立たれたのは怪しむに足りない。1940年、41年に上智大学から日本文化紹介を目的に発行されている*Monumenta Nipponica*に発表された『小督』と『俊寛』の英訳がその成果である。特異な訳業である。具体的に言えば、原文における単語の含意が必要に応じて明示され、構文のルーズな箇所は補完されている点である。おそらく原文によって謡曲を味解しようとする欧米の学徒に的をしぼった翻訳ではあるまいか。少なくともかく解するときこの英訳は真価を認められるのではあるまいか。翻訳者として先生の力量が最高度に発揮されているのは英語学科の機関誌の一つたる*The Reeds*に発表された西鶴の英訳であろう。国語・英語の知識と英語の運用能力をフルに駆使されているこの訳業はおそらく今後とも余人の容易に及び難い高みに達している。なお『永代蔵』か『胸算用』が完訳されていたらと願うのは望蜀の嘆とやらであろう。

先生が英詩和讃と命名された英詩の和訳は訳詩としてのみならず、詩語における文語・口語の使用、音数律、假名づかい、漢字制限等に関する先生の見解を窺うためには必読の業績である。紙幅の都合もあって、实例はあげ得ない。

先生は多才の人、しかもゆくとして可ならざるはなき万能の士であった。1942年大阪宝文館出版のH.A.Gilesの*Civilization in China*の全訳や『商業英語開眼』、『実践のビジネス英語』等を抜きにして先生の業績を云々するのは烏滸の沙汰である。が、筆者は失格者である。本稿を片影と題したゆえんである。また先生の多面的知的活動の背後にあったデモンに関しては1965年発行のEDU所蔵の「気促ものの弁」の一節を一読されたい。

英語教師としての先生は当時の旧制高校等における教師の側の一方的な講読は意識して排除されたようである。訳読の授業においてreadingとtranslationを担当するreaderと、それを検討するcheckerにわけられた等が先生の語学教育観を例示している。英語百般に精通され、また百科辞典そのものの知識の持ち主たる先生にとって一方的な講読はある意味において願ってもない授業法だったかもしれないが、あえてこれを避けられたのである。先生はかつてある大学問題に関して「問題は実情の評価であり、またhow?の問題でもある」とし、さらに「来るべきものも常に考えつつ歩まねばならぬことも自明の理である」と書かれている。この三点を視野に入れて英語教育における教養派、実用派の論戦に対する先

生のご見解を伺い得ぬのは千秋の恨事である。淋しくもあり、残念でもある。

Requiescat in pace

(片山 忠雄)

<6. “Every cloud has a silver lining”>

私の外大在任中の16年間の印象はと聞かれて、私の脳裏に浮かぶ回答は標題の“Every cloud has a silver lining”(どんな黒雲にも銀白の裏付けがある)という諺に尽きる。

悪天候について空の旅に挑んだ人なら誰しも経験することがある。それは、飛行機が低く垂れこめた雨雲の層を突き破って急上昇した途端、つい2、3分前下界を覆い尽くしていた陰鬱さとは打って変わった天上界の明るさで、そこには文字通り雲一つない青空のもと燦々と降り注ぐ陽光を浴びて白銀色に輝く雲海が限りなく広がっている。あたかも下界を覆う黒雲もその裏は常に銀色に輝いているように、我々は如何ほど絶望的な逆境にさいなまれようとも勇気と忍耐とをもって進めば必ず活路は展げるものだという教訓が、この諺には含まれているように思われる。

西日本における外国語教育のメッカ・大阪外国語大学で教鞭をとる幸運に恵まれて春風駘蕩・順風満帆の筈の私の人生行路も、学園紛争という暗雲に閉じこめられた幕あきであった。着任の挨拶を済ませたばかりの会議室で全共闘の諸君から団交を迫られて先ず度胆を抜かれ、続いて講義最中の教室になだれ込まれて授業も中途放棄の憂き目に会ったりで、不安と焦燥、果ては絶望の淵に陥りかかった私であったが、幸いに学長はじめ諸先生、とりわけ英語学科の同僚の諸先生の心からの慰めと励ましのお言葉が何よりの救いであった。時ならずして、政治イデオロギーの論争から真理探究の論争へと大学本来の姿に還ろうとする真摯な欲求が全教官、全学生の中に澎湃として広まるにつれて、外大での紛争も何時しか沈静化の方向に向かった。

英語学科の諸先生は皆さん大阪外語生えぬきの俊才揃いで、既に旧くから知己の間柄であった片山・林両先生は勿論、中堅の金山・田川・大井の三先生、新進気鋭の舟阪先生、紅一点の才媛池田(現・舟阪)先生は皆誠実温厚なお人柄で、外大の学風に溶け込んでいく私を温かく迎えて下さった。

紛争の爪跡も痛々しい上本町の旧学舎を去って、緑色濃い箕面の新学舎に移転して後は近代的設備を誇る教室の窓ごしに広がる北摂の自然に眼を馳せつつ、優秀な学生相手の授業の一こま一こまは真剣そのもので、私の全生涯でもっとも充実した数年であった。

さながら白銀色に輝く雲海上をひた走る空の旅の如く満ち足りた私の外大生活が呆気なく終わってから早や7年近い歳月が流れたが、私の心は常に懐かしい外大と共にあり、創立70周年を関した外大のとこしえの発展を祈りつつ、拙い筆を擱かせて頂く。

(森塚 文雄)

## 11. ドイツ語学科

大阪外国語学校は、大正11年支・蒙・馬・印・英・仏・独・露・西の9語部を持って発足した。従って当時独語部と称した今日のドイツ語学科の歴史は母校の歴史と共にある。その70年の流れを概観すると、ドイツ語学科の場合、1)徹底した語学教育中心の外語・外専時代、2)旧制の良さを保持しつつ、新制大学への脱皮をはかった過渡期としての外大初期、3)ゼミナール体制を確立した新しい外大時代、の三つに区切ることが出来よう。以下その区分に従って学科の歴史をたどってみる。

〈外語・外専時代〉大正11年(1922)～昭和23年(1948)

大阪外国語学校一覧によると、その学校規定に専修語学としてのドイツ語は1年・2年17時間、3年11時間とある。兼修語学として新たにオランダ語が加わり、一般科目も修身・国漢・地歴・法経の他に社会学・商業・商品などが増える3年生はともかくとして、1・2年生は週17時間、毎日3、4時間のドイツ語の授業を受けていたわけである。そして専任教官としては日本人3名、ドイツ人1名の名前しかあがっていないから、少数の教官が何回も授業をもち、徹底的に語学力を叩きこんで行った様子がうかがえる。従ってこの時代を語るには授業を担当した先生方を中心とするのがよかろう。資料は少ないが、その中から諸先生のプロフィールを描き、先生方をめぐる出来事などを通じてこの時代の学生生活をしのぶこととする。

開設時のドイツ語部の教官は高木敏雄とヘルマン・ボーンルである。高木教授は東京帝大で独文学を専攻した比較神話学者で、五高、東京高師、松山高校教授を経て大正11年3月、初代の独語部教授に任ぜられた。同時に教頭格の教務課長も併任し、同年6月には文部省在外研究員として1年間のドイツ留学を命じられたが、病を得て12月18日桃山病院で亡くなった。享年46歳。病名は腸チフスだったという。田中源三郎(D1)によれば、「高木先生はよい先生だが、ドイツ語ができないと君はアホか、馬鹿か、と授業は厳しかった」(70年史資料集)。

ヘルマン・ボーンルは1884年にバーゼル福音伝道教会牧師の2男としてガーナに生まれた。シュパイエルンのギムナジウム卒業後、ハレ、エルランゲン、テュービンゲン大学で神学と哲学を学び、シュトラスブルグ大学でゲルマニスティクとヘブライ語の国家試験に合格、更に1914年エルランゲン大学で哲学博士号を取得した。その後、青島(中国)のドイツ人学校教師となり、同時に中国語を学び、東洋学の研究に入った。この年11月日本軍に捕われ、6年間を日本で過ごしたあと、再び青島に赴いて2年間の福音伝道教会の任務を終え、大正11年に設立された大阪外国語学校講師となった。以後昭和12年外語との契約満期により一旦帰国し、ミュンヘン大学に招かれるが、それが不調に終って昭和13年再び外語の教壇に戻ってからは、ライプチヒ大学からの二度の招聘にも拘らず、終生この仕事を離

れることはなかった。この間昭和16年12月8日にはドイツ政府より「教授」の称号を授与されている。ポーネルは作家ヘルマン・ヘッセや、その従兄弟の著名な日本学者W・グンデルトと親交のあった立派な研究者であった。

高木教授の後任として大正12年5月1日に赴任したのが高橋周面である。高木教授と同じく東京帝大独文卒、四高教授、弘前高校教授を経ての着任であった。前任者同様、副校長格の教務課長を併任した。高橋教授はこの役職を昭和17年の退官まで20年間務め、中目、葉山の二代にわたって校長を補佐したのである。

高橋教授が教務課長併任のため、ドイツ語部主幹(学科主任)は大正11年9月11日に就任した山本茂講師が務めた。山本講師は陸軍士官学校卒、同校の教官をもつとめた陸軍歩兵大尉、大正8年4月から1年間東京外国語学校で依託学生としてオランダ語を研究した経歴により、オランダ語講師兼任であった。文部省在外研究員として昭和2年より2年間ベルリンに派遣された後、昭和4年4月教授に昇任した。

ドイツ語部第1期生の熊谷俊次は大正14年3月卒業後、4月から既に授業を担当していたが、翌15年5月には講師に就任、6月の中国への出張後、8月には助教に昇任した。こうして外語・外専の専門学校時代のほぼ全体にわたってドイツ語部の学生を教育し、指導した高橋、山本、熊谷、ポーネルの4先生が大正の末に出そろったのである。なお熊谷助教は昭和6年教授に昇任、昭和12年、13年を在外研究員としてハイデルベルクで過す。この時代は上記4先生が1、2、3年の計45時間のドイツ語授業のほとんどを担当し、いわゆる非常勤講師は非常に少なく、期間も短い。わずかにポーネル夫人のハンナが大正14年から昭和8年まで8年間授業を担当しているのが目立つ程度である。そこで4人の専任教官を中心に話を進めて行くことにする。

専門学校時代に独逸語部の学生たちが出していた雑誌『我等の独逸語部』や『きんきら50年』、『70年史資料集』、『おじいさまー亡父高橋周面の追憶一』などを読むと、おぼろげながら高橋教授像が浮び上がってくる。高橋は背は高くなく、田舎風の風貌で、よく光る目と低い、力のこもった声に特徴があったらしい。教え子たちの話によく出てくる一つの点は教育者らしい根気のよさである。溝辺竜夫(D4)によれば、「高橋先生で忘れられないのは質問のされ方である。例の押えたような、低いが、しかし力をこめた、端切れのよい明快な口振りで質問される。つぶらな、よく光る眼をぐっと見開いて、学生たちが誤訳したところを任意に指名して質問される。正解が出るまで延々と根気よく指名されるのである」(70年史資料集)とあるし、山中一郎(D13)も、入学後最初の質問に先生が、「『君は何の目的で外語に来たのか』と端の方からひとりひとりに問いかけられ、みな頭を掻いたり、口の中でモグモグ言って、大した応えが出ないから、いい加減途中でお止めになるだろうと思っていたが、先生はなかなか執念深かった」と記している(きんきら50年)。また現阪大教授の赤井慧爾(大D2)も、余り勉強しない学生を教えていると、教師はいらいらしてしまっ、つい正解を与えてしまうが、高橋先生の様な根気よい授業こそ外大に必要であろ

う、と語っている(70年史資料集)。もう一つは高橋のこの上なく緻密な教育方法である。細かい文法的な考察を無視して散漫な訳を続けていると、「待てよ」と高橋の低いが重いストップ命令が出、「そこのderは何だ」、「何格だ」、「変化を言ってごらん」、「何故そうなる」と矢継ぎ早に問い詰められたという。この教授法は終始変らなかつたと見え、初期に教えを受けた人も晩年に習った人も同じことを言う。晩年も何故そこにコンマがあるか、何故定冠詞が使われているか、などをくわしく吟味することを求められ、ミスプリントさえ、筋の通った説明が出来ねば許してもらえない厳密さであったそうだ。高橋がある時、「或種の書物はどこか誤りがないか、あれば容赦はせぬぞと睨みつける様に精読しなさい。又或種の書物はどんどん読破して、なるべく多くのものに接するようにせよ」と言われたのを記憶にとどめている人があるが(豊鳴覚城D19)、勿論高橋も精読のみを是としていたわけではなく、ただ外国語の学習者は、特に初歩の段階ではあくまで正確を期し、深く読むことを学ばねばならぬと厳しく身をもって教えていたのであろう。もっと高橋の学識にも触れたいが、残念ながら資料が乏しい。あるいは、ドイツ文学に通暁し、漢籍をこよなく愛し、また四高教授時代には同僚西田幾多郎にドイツ語の読みの深さを感嘆されたという高橋は、そうした学識、教養を内包する人格主義の実践者であったと考える方がいいのかも知れない。

山本は陸士卒で、陸士教官もつとめた人物だけに、陸軍式の考えが外語の学生の反発を招き、就任早々からもめごとがあつたらしい。ドイツ語に対して大きな情熱を持ち、また実際にも大変出来たことは、遺された立派な語学関係の蔵書、またそこに認められる様々な色鉛筆でつけられたおびただしい印から充分に推察できる。しかし、あまりにも激しい軍隊式のやり方だったために、昭和9年の春には山本教授排斥事件が起つた。表面上の理由は、我々はオランダ語の授業を受ける権利があるが、山本教授は兼任のオランダ語を少しも教えてくれない、だったが、真の理由は上述の通り、指名された学生が恐怖にかられて震え声で朗読する様なスパルタ式授業への反発だったといわれる。各学年が山本の授業をボイコット、二年生が中心となって学校当局ならびに山本との話し合いが続いた。山本は、「ドイツ語は3年間の授業でも不十分である。まして第二外国語であるオランダ語を1年やった位で物になる筈がない。それよりドイツ語をもっと勉強せよ」、また「人間の性格は変えられない」との主張を繰り返し叫んだが、約1ヵ月の紛争でどうにか解決し、授業に復帰した。この事件は当時の校内でもほとんど知られることもなく、外部マスコミにも洩れず、学生に一人の処分者も出ずに主張が認められた珍しい事件であった。オランダ語の授業は徳教授の担当となり、性格は変えられないと主張した山本の授業も内容が一新して、ようやく本来の授業に入れる様になった。この事件の間中、山本の授業時間には全員が図書館に集って自習したが、その態度は全く模範的で、誰一人として勝手な行動をとるものではなく、平素の授業時間と変る所なく真面目に行なわれたという(70年史資料集)。これは当時のドイツ語部の学生が真面目で、精神的に立派な大人であったことを証明する話であ

る。

前にも触れた通り山本はドイツ語の達人であり、昭和2年から4年にかけてのベルリン在外研究や昭和15年暮から翌年7月にかけての山下軍事使節団随行等を通じて得たドイツに関する詳しい知識は素晴らしいものであった。また、今日は詩の朗読をやったかと思うと明日はドラマ、次は会話といった天衣無縫な授業振りも教師の型にはまらぬ一種の魅力だったかも知れない。ただ、もともと軍人であり、時代が軍国主義の時代であったため、持ち前の激しい性格もあって時流に深入りしすぎた点が不幸であった。そのため昭和21年8月に一旦免官になった。しかし26年12月に解除され、27年から非常勤講師として復職して、33年に亡くなる迄元気に教壇に立った。

熊谷俊次は当時のスタッフで唯一の外語卒業生であるから、学生たちも特別な親しみを抱いたようである。ドイツ語学科研究室機関誌“Sprache und Kultur”2 — 熊谷教授追悼号 — の略歴を見ると、熊谷が大正15年5月に講師に就任したのは25歳の時である。当時の在校生にはまさに親しい兄貴分だったことだろう。学生たちの熊谷に対する印象が段々と変わって行くところが面白い。D8、D11などごく若い頃の教え子は「先輩の親しみ、気易さがあり、いつも無理を聞いてもらった。よき相談相手であった」と語り、D19頃では「授業時間数が最も多く、かつ我々の先輩であるという点で一層親しみを感じた。高橋先生の精読に対して、専ら多読で鍛えられた。辞書と首っぴきの予習は大変だった」と先輩としての親しみはあるものの、兄貴分というより、もう他の先生たちと対等の先生と見ている。D23になると、「先生の文法はほとんど朗読方式で進み、読み終わるやいなや練習問題があたった。へまな質問をすると、ひどく叱られ、答えてもらえない。恐ろしく速いのだが、感心にみなくいさがっていた」と熊谷独自の教授スタイルがもう完全に出来あがっていた。どの時期を見ても、熊谷が自分の任務を一貫して真正直にこなしている姿勢がしのばれる。

ヘルマン・ボーネルは、自著のテキスト“Fragen und Übungen”(1928年三島書房)を中心に、ドイツ語会話を教え、学生たちにドイツの色々な面を紹介しながら、キンキラ節に歌われる休講無しの授業を行った。毎時間簡単な日常の表現を声を出して反復練習させ、具体的に天井、床、窓など室内の部品や家具の名称から始まって、人体の各部位の名前、更にドイツの地理や歴史等をドイツ人らしく詳しく、組織的に一つ一つ徹底的に教えこんだ。ボーネル先生にはチューリンゲンの森の中まで習った、と言っている卒業生がある程である。また大正11年11月12日、開校式2日目のドイツ語部の催しがボーネルのピアノ伴奏による「荒野のぼら」合唱であった様に、よく講堂でピアノを弾いて学生たちにドイツの歌を教えた。それらの多くは“Das Wandern”、“Mein Kamerad”などワンダーフォーゲルの愛唱歌であり、若き日に青少年運動(Jugendbewegung)に参加したボーネルの青春時代をしのばせるものであった。ボーネルは皇帝、天皇を敬い、時間にルーズなことを極端に嫌い、毎日規則正しい研究教育生活を営む謹厳な学者であったが、授業中には時にメルヘンの中に出てくる動物の鳴き声をそっくりに真似てみせて学生たちの心を開かせたり、熱心に語

劇の練習を助けるやさしい教師でもあった。

ポーネル夫人ハンナは、有名な中国学者R.ヴィルヘルムの夫人の妹で旧姓ブルームハルト。青島で知り合ったヘルマンと1923年(大正12年)夏に結婚、大正14年から昭和8年まで8年間にわたって教壇に立ち、夫を助けた。名門の出らしい、はっきりした性格のこの夫人に出来のよくない学生等は相当きびしく鍛えられたようである。昭和8年以降は授業を担当しなかったが、夫ヘルマンの膨大な量の教材のタイプを打ち、家庭、特に軽井沢へ学生たちを迎えて歓待するなど、終生夫の仕事を陰で支えた。

外語・外専時代の最後に、資料が少なく、よく分からなくて残念だが、この時代のドイツ語部についていくつかの出来事等をあげておく。

『我等の独逸語部』昭和6年6月15日号は一面トップに独逸語夏期講習会をあげている。「我がOGD会が要望の声に答えて講習会を催すことを発表するや世上轟々たるセンザチオンを捲き起こしている」とあるから、これが第一回だったのであろう。定員は初級300名、上級150名とかなりの規模である。初級は山本教授、上級は熊谷助教授ほか他校で教鞭を取る卒業生達、語部学生は帰郷を遅らせ、総動員でポスターを掲示し、ピラを撒き、とあるからまさに語部をあげての催しである。在校生はまた受講生のそばに立って、先生の説明の合間に受講生の質問にも答えている。この上八校舎での講習会についてはD13卒業生の記述もあり、昭和10年代にも引き続き行われていたらしい。

『我等の独逸語部』同上号はまた昭和6年5月中旬のドイツ巡洋艦エムデン号の大阪寄港を伝えている。山本主幹の唱える生きた語学研究を实践すべくドイツ語部生は、一人が水兵数名を受持って市内見物や京都・奈良の案内、また府市主催の歓迎会では府当局の依頼により通訳として一週間にわたって大活躍し、日独親善に大いに貢献している。なおドイツ巡洋艦の訪日はこの時だけでなく、後にもあった様で、『70年史資料集』には昭和11年の神戸入港の話がある(岡壽夫D11)。この時は有志数名と小規模だったようだが、水兵達をつれてユーハイムに入り、いざ勘定となると店のドイツ婦人が出て来て、「学生さん、お金ありません、兵隊さんをたのみます」と言われたという。如何にも当時の神戸らしい話である。

この『我等の独逸語部』には福岡支部通信という欄があり、九大へ進学したOGD会員の近況を伝えている。このあたりに、共通科目を見れば高商の様などころもあるが、高等学校の文乙的でもあったドイツ語部の性格がうかがえる。昭和ひとけたから10年代は、九大が多いが、戦後は京大・阪大へ、更にその大学院へ進学した人も多い。

そういう関係でのちに高等学校、専門学校、そして戦後は大学で教壇に立った卒業生の数は非常に多い。卒業生の活動はあまりに多岐にわたっているので、ここでは詳しく述べられないが、旧制・新制を通じて専門学校・大学等の教員が多いこと、そして特に旧制専門学校の卒業生に朝日・毎日新聞等でジャーナリストとして華々しく活躍した人々が多かったことは少なくとも指摘することが出来よう。

〈過渡期としての外大初期〉 昭和24年(1949)～昭和39年(1964)

第一編の通史編に見られる通り、動員、繰り上げ卒業、上八学舎の炎上、あちこちでの間借り授業など戦中、戦後の試練を経て母校は昭和24年高槻学舎で大阪外国語大学として新しくスタートを切った。最初は全ての授業を高槻で、昭和26年からは大阪学舎の復興成って前期高槻、後期上八で授業が行われ、昭和32年4月からは全授業が上八で行われた。高槻のもと工兵隊兵舎の教室には、八木浩(D23)が『きんきら50年』に「窓のない学窓の思い出」と題した一文を寄せた如く、廊下側に窓がなくて暗く、表に面した窓はあちこち破れて、冬には暖房も何もない教室に寒風が吹き込んだ。そんな教室でも熊谷は必ずコートを脱いで、背広姿で講義したし、ポーネルは姿勢よく教室に入ると、“Die Luft ist schlecht.”と全ての窓を勢いよく開け放って、清浄な空気を教室一杯に取り入れながら授業を行った。この上なく貧しい時代であったが、寒さ、貧しさを吹きとばすこの二人の授業に象徴される様にさわやかで元氣あふれる時代でもあった。

制度が変わって新制大学となり、外語時代の独逸語部、外専時代のドイツ科がドイツ語学科に改称され、3年制が4年制に、授業に講義、演習、実習と3つの種類が出来たり、授業が1コマ90分で2時間になり、単位制になるなど色々な制度上の変化はあったが、急なことでもあり、教室スタッフはもとのままなので、恐らく当時授業を担当していた人々の意識の中にはそれ程大きな変化はなかったと思われる。ノート講義の形の授業が少数増えるなどの工夫はあったが、選択授業などはまだほんの少数で、大半はクラス全員が一緒に受ける語学の授業、それを数名の教官が担当するという専門学校時代の体制が当時は続いた。

この時代のスタッフは昭和21年からは学科長が熊谷教授、外国人教師はポーネル、昭和21年から講師として授業を担当していた赤阪力(D10)が昭和24年から助教授となり、更に昭和27年からはD23、京大独文卒の八木浩が講師として加わった。以上4人の専任教官の他に高橋周而名誉教授が昭和27年3月まで、免官解除になった山本茂が昭和27年4月から33年1月の逝去まで、大阪市大の溝辺竜夫(D4、九大独文卒)が昭和30年から33年まで、大阪府大の木村寿夫(D5)が昭和27年から41年まで、そして昭和33年から立命館大の牧祥三(D3)が非常勤講師をつとめた。

熊谷教授は、授業を始めるとまず一人の学生を指名して訳させる。準備不足や難解な箇所があって如何にその学生がしどろもどろになろうと、絶句しようと、絶対に途中で口をはさまず、頑として最後までやらせ、そのあと自分の訳文を聞かせるという厳格で堅実な授業のスタイルをこの頃には完成していた。熊谷の授業はいつも私語はおろか咳払い一つ聞こえず、質問もない静けさの中で進行したものである。しかし、稀にフト脱線する時に、学生達は熊谷から思いがけぬやさしさ、あたたかい人間味を感じることがあった。

ポーネルはこの時期週4日、毎日4時間の授業を規則的にこなしていた。1、2年の授業は会話が中心で専門学校時代とあまり変わらなかったであろう。ただ、時々つかつかと

一人の学生の前に進み、前に出て何かドイツ語で話せ、と命ずることがこの頃多かった。級友の前に数分立たされる学生は、「天井は上です。床は下です、私には父が一人あります」、くらしいところで1年生なら絶句し、目を白黒させていたが、このやり方のおかげでドイツ語会話の度胸がついたのは確かである。

大学後期になるとボーネルは文学史を講じた。恐らく、もう専門学校ではなく、大学なのだ、と考えてのことであつたらう。勿論ボーネルは学生の語学力については熟知していたから、全ての教材はハンナ夫人の手できれいにタイプして配られ、ボーネルが全文を自分で日本語に訳し、色々ドイツ語で説明を加えた。その誠実な授業振りはまさに感動的であつた。この様な授業を行うためボーネルの講義の準備は厳格をきわめ、毎日午睡のあとの4時からの一番充実した時間をこれに当てていた。ここにはまた、あくまで原典に忠実に沿うて離れず、それを註解し、論じてゆく、したがって翻訳を付すことがいつも出発点である、というボーネル自身の外国文化に対する研究態度がにじみ出ている。

昭和30年に入ると神戸のドイツ領事館から“Deutschland — Spiegel”というニュース映画を借り出して、毎週金曜に上級生に見せてくれた。この時期ドイツ語学科の上級生は週に三回もボーネルの教えを受けていたことになる。

赤阪助教授はその円満な人柄とドイツ語・ドイツ文化にとどまらぬ博学で学生に親しまれ、慕われた。どんな時もおだやかで、赤阪の怒っている顔を見た者などいないであろう。研究室の運営一切を引き受け、時間割の作成や就職の世話など時間と労力を要する仕事を独りでこなしていた。この時期は大変な就職難の時代であつたから、赤阪の尽力で職を得、今も感謝している卒業生は多いに違いない。

八木講師は当時シュテファン・ゲオルゲの研究者で、自らも詩集『玄海灘の舞踏』を出版する詩人であり、また阪神地区の若手研究者達とドイツ文学研究会「クヴェレ」を結成し、会の推進力ともなっていた。授業にも熱心で、昭和28年結婚の翌日早くも大学に現れ、熊谷主任教授を狼狽させたエピソードがある。

非常勤講師として週一回の出講だが、溝辺はアカデミックな雰囲気のある講義で、また木村はその卓越したドイツ語の力でそれぞれに学生を惹きつけた。

昭和34年に短期大学部(夜間)ドイツ語科が新設され、翌35年春赤阪助教授が同語科の主任教授に就任、それに従って第一部(昼間)では八木講師が助教授に昇任し、そして公募により乙政潤(大D4)が助手に就任した。

昭和30年代半ばは語学授業の近代化、機械化が非常に話題になった時代であつた。学生一人一人の机にテープレコーダーを備え付けた語学演練装置(以下LLと呼ぶ)が関西の国立大学では最も早く、昭和37年に外大に設置された。もとより外国語教育に熱心な教官の揃っている外大のこと、多くの教官がLL研究に意欲的に取り組んだが、最も熱心で、また授業のデータなどを駆使して成果をあげたのは乙政であつた。乙政は外大LL研究のリーダーたるのみならず、研究成果を阪神ドイツ文学会、更には日本独文学会でも報告、ドイツ語

教育へのLL導入の全国的な先駆者となった。

この時期ドイツ語学科は学科の顔とも言うべき偉大な先生を次々に現職のまま失うという不幸に見舞われた。昭和38年のヘルマン・ボーネル、そして昭和40年の熊谷俊次である。思えば昭和30年8月の高橋周面の逝去に始まり、33年1月には山本茂と、ドイツ語学科を創設以来30余年にわたって担ってきた人々が4人共昭和30年から40年までの間に去って行ったことになる。

ボーネルは昭和38年6月24日帝塚山の官舎で亡くなった。昭和12年から13年にかけての帰国後は25年にわたって帰りたいとも言わず、飛行機嫌いでもあったボーネルが、この年急にドイツへ帰ると言い出し、インド洋経由の船便で帰国すべく準備を進めていた最中の急性肺炎による突然の死であった。何か感じるころがあったのだろうか。享年79歳。神戸ユニオン教会で盛大な葬儀が行われ、今は再度山に教え子たちが建てた墓地に生前好きだった銀杏の木などに囲まれて眠っている。ボーネルの遺徳を偲ぶ催しとしては、自然石の墓碑を建てた時の募金運動「遺徳顕彰会」の他、昭和51年7月19日浪速会館での「ボーネル先生を偲ぶ会」、更に昭和59年11月から12月にかけて、八木浩が行った「ヘルマン・ボーネル先生の業績を讃える会」がある。ボーネルの業績を克明にたどり、全てを整理、紹介した八木浩の資料によれば、ボーネルの珍しい学術業績のうち、とりわけ重要なものは下記のものとなる。

神皇正統記 第一、二巻(序論、訳、注、解説) 1935、1939

聖徳太子(訳と注) 1936

日本国現報善悪霊異記(序論と訳と注) 1934

弘法大師 1943 Monumenta Nipponica IV

世阿弥と能(序論と訳) 1943-56

茶室掛物 禅語通解(序論と訳) 1943

ハンナはボーネルの没後帰国し、故郷バート・ボルで余生を送った後、1971年に逝去した。

ボーネルの後任さがしは熊谷俊次が中心になって奔走し、ブレスラウ大学で1932年に博士号を取得し、既に10年前から姫路でカトリックの布教者として活動する傍ら、大阪市大等で教壇に立っていたカタリーナ・ライマンを迎えることとなった。ライマンは以後、昭和56年外大に外国人教師定年制が導入される迄、17年にわたって学生の指導にあたることになる。

若い者が呆れるほどの健啖家であった熊谷俊次が急にものが食べられないと言い始めたのは昭和39年の暮れであった。尤もその前にも異常の前兆はあった。ボーネルが亡くなった時にはしっかりしていた熊谷が、この年の8月に愛弟子で、卒業後も親交のあった『パリ入城記』などで有名な朝日新聞の守山義雄(D7)が亡くなった時に非常なショックを受け、まわりの者が驚く程力を落としたのである。以後熊谷の体調はみるみる衰え、身体を

ひきずる様にして昭和40年2月の卒論試問に出たあと、入院した。入院後暫くは元気を取り戻したかに思えたが、もともと大変律義で、礼儀正しい熊谷が若い教師の見舞いにもひどく恐縮する程気が弱くなり、病勢はどんどんつのがって6月16日遂に亡くなった。病名は肺癌、享年64歳。定年まで10ヶ月を残しての死であった。夫人に先立たれた淋しい晩年ではあったが、三人の子供達に囲まれての安らかな最期であった。『英語よりドイツ語へ』(昭和12年、白水社)をはじめ、語学関係の著書、論文を残した。

この章を終える前に昭和40年に行われた重要な実験に触れておかねばならない。この頃学内の若手・中堅教官の間でそろそろ専門学校体制を脱却してゼミ中心の真に大学らしい体制に移らねばならないとの声があがり始めていた。この試みを最初に本格的に行ったのが、八木・乙政であった。この二人は、情熱的な八木と常に冷静な乙政と、一見性格は正反対に見えるが、新しいものに挑戦する勇気とあふれるエネルギーは共通であった。既に二人は非常勤の若手教官もまじえて語学、歴史、思想と広くドイツ文化諸領域の書物を読む輪読会を始め、昭和40年早々にドイツ語研究室機関紙“Sprache und Kultur”をスタートさせていたし、また後の大学紛争期には語科学学生と次年度の授業のあり方について協議する「カリキュラム検討委員会」を発足させたり、いくつかの研究プロジェクトを立てるなど常に新しい考えと行動力で研究室をリードして行くことになる。昭和40年度の大学便覧には次のような題目と授業の内容説明がある。

現代ドイツの社会と文化(後期演習)      八木助教授  
乙政講師

下記テーマに従ってゼミナールを行い、1)ファシズムを起源的に理解し、2)それに基づいて文学・言語を研究し、3)戦後への展望と生き方を求め、4)専門化を克服したドイツ研究の可能性をひらく。(ワイマール共和国は八木、第三帝国は乙政担当)

2コマ(4時間)連続、3・4年選択必修のこの授業は担当教官にとって初めて試みるゼミナール形式の授業だけに大変苦勞の多い試行錯誤の連続だったに違いないし、また学生の方も、それ迄は受動的に受ける語学授業しか知らなかったのだから、報告や意見の発表など初めて授業の中で主体的に振る舞うことを求められて戸惑いもし、準備にも追われたことであろう。この授業に参加した全ての人々の勇気と努力は高く評価されるべきである。この試みを契機として外大は新しい時代に入ることになる。

#### <新しい外大>

昭和41年以降の外大は1人の教官がクラス全員を対象に授業を行うのは前期1、2年の間だけで、後期3、4年になると多くの教官が多くの授業を行い、学生達は、それぞれに自分の関心と計画に従って授業を選択し、参加する時代に入った。これによって教室内での共通の体験が減るというマイナスも生じるが、学生一人一人が自分の勉学の対象を選択

して学べるようになったことは大きな進歩であり、大学のあるべき姿に近づいたと言えよう。ただ、この多様化に伴い、教官数が一気に増大し、出入りも激しくなるので、これから先は、個々の教官についてこれ迄の様に詳しくは触れられない。

昭和41年4月にドイツ語学科は熊谷俊次の後任として、七高教授を経て立命館大学文学部教授であった牧祥三(D3)を主任教授として迎えた。牧はそれ迄既に八年にわたって非常勤講師として週一回外大に来ており、その真摯な学究的姿勢と若々しい柔軟な考え方に学生のみならず、教官達も感銘し、深い尊敬の念を抱いていたのである。リベラルな精神の牧の下でカリキュラム改革は順調に進んでいく。八木・乙政の提案どおり、独文学科でない外大のドイツ語学科では語学、文学だけでなく、更に文化(歴史・思想)と政治経済と合計4本の柱を考えることになった。こうして昭和41年に一気に4つのゼミナールが開設されたのである。初年度は語学は乙政、文学は八木、文化は牧が担当し、政治経済はまだ専任者でカバーできないので大阪経済大学の松本剛・助教授に担当を依頼した。松本はこのゼミを2年間担当した。

ゼミナール中心の体制をとる以上、当然講義や実習もそれと対応する形を取らねばならない。例えば文学ゼミを選択した学生は、文学実習で専門書をじっくり読み、少なくとも語学・文学の講義が聴けるのでなければ、ゼミだけでは不十分である。また一方上級会話や作文などの純語学的な授業はそのまま残し、学生の高い語学力はこれ迄通り維持しなければならない。この両方を実現するためには多くの、そして色々な専門を持った教官スタッフが必要である。それを可能にしたのが昭和40年の短期大学の第二部昇格であった。5年制の第二部は教官定員がそれ迄の3名から5名になった。そしてこの定員増により、昭和43年に東大教養学部修士の栗原優を、44年には京大経済学部修士の村田武を迎え、短期大学部時代から在籍の赤阪力教授、葉賀明・助教授(D25、京大独文卒)、布施俊夫講師(大D7)と合わせて総勢8名で4つのゼミがすべて専任でカバーできる様になった。

語学(赤阪・乙政)、文学(八木・葉賀)、文化(牧・布施)、政経(栗原・村田)。

4つのゼミのうち語学と文学を担当する者が専任にいるのは外国語大学として当然であったが、文化と政経を受け持つ者をも専任のスタッフとして持ち得たことは、ドイツ語学科が新しい外大の一語学科として発展してゆくのに極めて有利な条件であった。とりわけ文化ゼミは学則第1条に照らしても外大に必須のゼミナールであった。しかし、この重要なゼミの担い手のうち年長の牧は3年後には学長代行となって学科から離れねばならなくなったため、文化ゼミの運営は主に年下の布施が行うことになった。ドイツの歴史と思想という大きな領域を対象とするこのゼミには関心の方向が全く異なる様々な学生が集まるので、ゼミの運営は難しかったが、布施はその後就任した若い担当者達と力を合わせてこのゼミを発展させ、20年後には歴史と思想の2つのゼミに分けることが出来るまでに育て上げた。

この4ゼミ体制は昭和57年まで続く。ただし、この間にかなり人事の変動はあった。大

学紛争を学長代行として見事に乗り切って牧祥三が昭和47年に圧倒的な支持をうけて学長に就任したので、ドイツ語学科の主任は八木教授となり、文化担当に大阪大学社会学科助手井上純一(大D13)を迎え、同年春栗原助教授の神戸大学文学部転出に伴い、政経担当に京都大学経済学部大学院で財政学を修めた芦田亘(大D16)が、同年秋葉賀助教授の滋賀大学転出により、大阪外大ドイツ語学科修士友田舜三(大D18)が新たに加わった。まず外大でドイツ語を専攻し、その上で財政学を学んだ芦田の学歴は、彼の中に経済ゼミを主導しつつドイツ語教育をおろそかにしない、いかにも外大らしい教師像を育んだ。また友田は優れたドイツ語の運用能力に恵まれ、それに更に磨きをかけると共に、外国語の背後の文化に関心を向けて、異文化コミュニケーション論を研究し、後に言語文化ゼミを開設することになる。昭和49年にはドイツ語学科に1名定員増があり、名古屋大学文学部修士で変形生成文法の研究者野村泰幸を迎え、これで語学関係のスタッフは3名となった。人事異動は更に続き、昭和54年の春には長い間学生に慕われ、親しまれ、紛争期に第二部主事として苦勞した赤阪力教授が、この年の夏の箕面新学舎への移転を前にして、定年退官した。32年にわたる勤務であった。後任として大阪外大ドイツ語学科大学院でシュッテリウスの規範文法を研究した高田博行(大D25)が加わった。昭和55年には井上助教授が立命館大学へ去ったので、京都大学文学部大学院でハイテッカーを研究した高田珠樹(大D24)が文化ゼミ担当の後任となり、昭和57年には村田助教授の金沢大学転出に伴い、東京外大ドイツ語学科卒、名古屋大学大学院で政治学を修めた小野清美がドイツ語学科初の女性教官として加わった。

昭和57年までの人事の変遷をあわただしくたどってきたが、ここで昭和52年2月に任期満了で学長の職を退いた牧祥三について改めて語らねばならない。牧がドイツ語の学科主任に着任したのが昭和41年4月、そして44年6月にはもう大学紛争解決のため学長代行となり、47年3月には学長に就任して完全にドイツ語学科教授の座を去ったのだから、学科所属は計6年、学科主任としては僅か3年しか在籍しなかったことになる。にもかかわらず、牧のドイツ語学科に対して果たした役割は大変大きい。先に述べたドイツ語学科の専門学校体制から大学体制への脱皮も、八木、乙政という大きな推進力があつたとはいえ、牧の存在なしには考えられない。牧は会議の精神を大切に、若い教官の発言にも真剣に耳を傾けて、良いと思えばためらうことなく採用した。従って研究室のスタッフは自由に張り合いを持って発言出来、非常に真剣に話し合える良い習慣が出来た。この良風は今日も続いている。勿論牧には大変厳しい一面もあり、会議に遅れると理由の如何を問わずたしなめられたし、牧が教室からチョークまみれで帰って来た時、若い者が気をきかせてお茶など出すと、「そんなヒマがあつたら勉強せよ」と逆に叱られた。しかしそんな牧の厳しさの裏にひそむ真のやさしさに触れた者は本当に牧を仰ぎ見たのである。学長代行となり、紛争の真只中にいた時でさえ、沢山の資料に目を通さねば書けない力作の論文を発表し、自分は大学教師なのだ、事務屋ではないのだ、との姿勢を貫き、まわりの者みな身のひきしまる思いであった。牧の書いた論文はいろいろな研究誌に掲載されているが、その主な

ものは牧学長退官の際にドイツ語学科研究室によって、『歴史と解釈』—牧祥三論文集—としてまとめられた。なお牧には更に、退官後10年にわたる歳月をかけ、膨大な資料を調べ上げて書いた生地岡山県津山の郷土史『美作地侍戦国史考』がある。誠に驚嘆すべき意志の力とエネルギーである。昭和62年10月16日に大学記念会館で行われた自らのルーツを探り、時代の全体的な流れを観察しようとするこの畢生の力作の出版記念パーティーには、お祝いにかけつけた多くの人々にまじって、多忙をきわめる作家司馬遼太郎も出席し、二度も読んだとこの書について多くを語り、絶大なる賛辞を呈した。

学科でのもっとも長期にわたる活躍を望んでいたのに、早々と学長にとり上げられたことはドイツ語学科としては残念であったが、牧祥三が学長として大変な忍耐力と優れた指導性を発揮して紛争の解決に、またその後の大学移転の実現につくした大きな功績は学科としても誇らしいものである。

外国人教師の方は昭和39年以来ライマンが教職と布教活動の二重生活という多忙の身でありながら、ていねいな授業と時に学生を自宅に招いて手料理でもてなすという女性らしい心遣いで17年間立派につとめた。50年代に入って、諸外国との人の行き来も昔ほどむずかしくなくなったので、外国人教師にも定年制を適用しようという声が高まり、多くの名物外国人教師達と共にライマンも感謝され、惜しまれつつ、昭和56年に外大を去った。以後ドイツ語学科では他の多くの学科同様外国人教師は2、3年の交代制をとっている。これまで西独チュービンゲン大学日本学修士ペーター・ペルトナー、東独カール・マルクス工科大学教授ヴォルフガング・ゼルトマン、オーストリア・ザルツブルク大学助手マンフレート・ゼルナー、西独フランクフルト大学日本学修士ギドー・ヴォルグリング、そして現在のもと東大講師でNHKドイツ語講座の担当者、ミュンヘン大学博士ヨアヒム・ヴァイラントと5人の人々が次々やって来て、それぞれ個性ある授業を行っている。

昭和61年4月14日に八木浩教授が胃癌のため亡くなった。享年59歳。八木の生涯は時間との凄絶な戦いだったと言えよう。若い頃から八木は歩くのが早かった。話すのも早かった。あれは常により多くを学び、より多くを考え、現状に満足せず、前へ前へ、よりよい可能性を求めて憑かれたように突き進む八木の理想主義的な生き方から生まれていたであろう。いまわのきわに、混濁した意識の中で八木が叫んだと言われる「さあ、皆さん出発しましょう」という言葉のなかにそれははっきりと現われている。ドイツ語学科の学科主任として次から次へとアイデアを出し、それらをすべて実行しようとした。そのいくつかが学科の良き制度として定着している。学科をリードする主任の仕事だけでも忙しいのに、他に学内では学生課長、図書館長などの大役を果たし、更に学外では日本独文学会、阪神ドイツ文学会で理事などの要職を歴任し、ワイマール友の会会長、日独友好協会、平和運動のリーダーをつとめ、その上演劇の方面でも活躍した。この八面六臂の活躍から、夜中の12時以前に電話をしても八木さんはつかまらない、と言われたのは有名である。それでいて沢山の本を読み、しばしば学会で研究発表を行い、多くの著書、論文を残した。

論文の主なものは八木の没後、教え子達の手によって八木浩著『詩と演劇—ブレヒトと現代ドイツ文学—』（三修社1987年）にまとめられた。

少年のように純真な、やさしい心の持ち主であった。ひとの不幸に涙を流し、お祝いごとにはいちばん嬉しそうな顔で手をうって喜んだ。特に亡くなる1年半前に全力をふりしぼって行った「ヘルマン・ボーンネル先生の業績を讃える会」と銘うった記念展は八木の入魂の大事業であった。八木にはすでに自分の運命について何らかの予感があったのかもしれない。時代を越え、国境を越えたその美しい師弟愛はドイツ語学科の歴史を飾るものとしていつまでも讃えられるであろう。

ドイツ語学科は八木教授の後に昭和61年10月にビュヒナー研究家の九大独文修士山元孝郎を迎え、更に学科の教官定員増で昭和63年に近畿大学よりブレヒト研究家の市川明・助教授(大D21、院6)を迎えた。市川はヴァイラントと共にNHKドイツ語ラジオ講座の講師もつとめている。一方、学生の方も大学受験者の急増に伴う臨時増募計画に協力して、昭和61年よりドイツ語学科の定員を、長い伝統を破って25名から35名に増員した。学生達の就職も順調だし、受験生のレベルも、1990年10月3日のドイツ統一が若い人々の注目を集めたのか、ここ2年来特にあがっているので、学科としてはこの35名定員を恒常化する方針である。

昭和41年に4ゼミ体制をとってから18年目の昭和58年に人気ゼミで学生が集中しすぎる政経ゼミを二分し、政治ゼミと経済ゼミに分け、前者を政治学専門の小野の、後者を経済学の芦田の担当とした。そして昭和63年にドイツ文化への接触と理解を異文化コミュニケーションという新しい観点からとらえようとする言語文化ゼミが加わった。前にも触れた様に、この新しい学問分野に以前から意欲的に取り組んできた友田が担当している。更に昭和64年には文化ゼミを分割し、歴史ゼミと思想ゼミとした。前者は布施、後者は高田珠樹の担当である。昭和61年の学生定員増により、3、4年の学生が計70名なので、ゼミも4つから7つに増やし、これでバランスがとれた。下にもう一度全てのゼミと担当者をあげておく。

- 言語ゼミ : 乙政教授、野村助教授、高田(博)助教授
- 文学ゼミ : 市川助教授、山元講師
- 言語文学ゼミ : 友田助教授
- 歴史ゼミ : 布施教授
- 思想ゼミ : 高田(珠)助教授
- 政治ゼミ : 小野助教授
- 経済ゼミ : 芦田教授

勿論学科の授業はゼミだけでなく、講義や実習がある。これらの中にも大変充実した授業が多い。その一つの例に上級作文がある。昭和30年代には大阪府大から非常勤講師として出講していた前述の木村寿夫(D5)が素晴らしいドイツ語を駆使して学生達に多大の感銘

を与え、その後一時期乙政が担当して、これまた手堅い授業で好評を得た。乙政がLLとゼミ担当で手がまわらなくなったため、昭和45年以降はずっと布施がこの授業を担当しているが、学生達の独作文に対する熱意は昔と一向に変わらない。今は3、4回生用の選択授業であるにも拘らず、70名近いほとんど全員が毎年この授業に参加している。この時間に象徴的に現れている様に、学生達がドイツ語の習得に対して今も積極的で、強い意欲を持っているのは心強い。

これら講義・実習も昭和41年に新体制に入ってからその時間割も増え、61年の学生増で更に多くなった。そのため専任教官だけでは到底まかない切れず、毎年学外から沢山の非常勤の教官の援助を受けている。その中にはかつてドイツ語学科で学んだ人々も多い。

ドイツ語学科の専任教官はそれぞれの所属する学会で個々に研究活動を行っているが、研究室としての活動も盛んに行っている。その一つは前にも述べた研究室機関誌“Sprache und Kultur”で、昭和40年に第1号を出してからずっと続き、現在第24号を印刷中である。その他デンマーク語学科と共同で行った『中北欧比較文化研究』（①1980年-③1982年）、学科単独の『日本とドイツー今日の相互交流と影響一』（①1985年-②1986年）、学科と学内の異文化研究に関心のある教官の共同研究『異文化コミュニケーションと語学教育』（1988年）、『大学における語学教育と異文化研究』（1989年）等があり、それぞれについてくわしい研究報告書を出している。

最後にここまでの記述の中に盛り込めなかった大切な事項をあげておこう。

#### <大学院について>

昭和44年に外大に大学院修士課程が出来、今日迄に21名がドイツ語学科大学院で学んだ。修士課程修了者は外大ドイツ語学科に教官として残った3名をはじめ、その多くは各地の大学で教職についているが、その高い語学力を買われて高度の専門職として証券会社に就職し、フランクフルトで市場調査などに活躍する人も出た。大学院修了者の新しい道として注目される。現在の大学院在籍者は1年3名、2年4名である。

#### <女子在学生の増加について>

男女共学が始まったのは専門学校時代の終わり頃からだが、ドイツ語学科では女子の入学は昭和31年卒大学4回の1名に始まり、昭和41年卒14回まではせいぜい3名どまりだった。それが以後5名から7名、さらに9名と増え、昭和56年には男子9名女子10名とついに逆転現象が起こった。その後2年は再び男子が多かったが、共通一次入試の2年目、昭和55年入学、59年卒業のクラスで男子12名、女子13名と女子が男子を越えてからは男女差は広がる一方である。高等学校のように男子何名、女子何名と定員を分けよ、との声も時に学外から出るが、それは賢策ではないだろう。成績の良い女子を閉め出し、あまり成績の良くない男子を入れることは全体のレベルダウンにつながる。女子の大学院進学、就職

も好調であるし、海外勤務の女子卒業生も幾人もいる。フランクフルト大学の日本語学科学生も大半が女性であり、文学部、外国語学部の女子大化はこのところ国際的な現象のようである。

#### 〈学生の海外渡航、留学〉

昭和30年前半までは北海道旅行が精一杯で、後半になってようやく1クラスから1人か2人がドイツへ行けば大騒ぎだったが、ここ数年来夏休み等に私費で渡欧する学生が急増した。しかし、ただの観光旅行ではなく、あちらでの語学講座に参加したり、卒業論文の史料集めなどの目的をもって行動している学生が多い。最近はこういう旅行を一度して、卒論の試問の後、卒業式までの間にもう一度出かける人さえ少なくない。またロータリーの奨学金や私費で一年間留学する学生も年平均2名くらいある。

#### 〈ドイツ領事館賞〉

『我等の独逸語部』昭和6年6月15日号に第7回の2人の卒業生:永井豊太郎、留岡秀雄にドイツ領事館賞が授与されたことが出ている。この領事館賞は、途中多少の断絶はあったが、今日まで続いており、毎年卒業式前に大阪・神戸ドイツ総領事館から立派な書物が何冊も送られてくる。ただ外大の移転後は、不便になったせいも、卒業式に領事館からの出席がないのは淋しい。

以上ドイツ語学科70年の歴史を概観して来た。最後に現状に目を向けると、各教官の教育研究への意欲、全学的な問題への貢献度、研究室としてのまとめり、学生との相互理解と協調関係、どの面から見てもドイツ語学科は学内でも充実した学科の1つと言えよう。ここ迄導き支えて下さった諸先生、諸先輩に心からお礼を申し上げ、現状に満足することなく一層の努力を続ける積りである。

(布施 俊夫)

## 12. デンマーク・スウェーデン語学科

#### 〈語学科沿革史〉

本語学科は、デンマーク語とスウェーデン語の教育と研究を専門とするわが国唯一の国立大学機関である。私立を含めても、他には神奈川県平塚市所在の東海大学文学部北欧文学科(1967年設置)があるのみである。なお、デンマーク語については、さらに1年課程の専攻科が設けられている。

まず、本語学科がデンマーク語学科の名称のもとに設置されたのは、1966(昭和41)年4

月のことであった。設置実現に直接にして最大の貢献をなしたのは、いうまでもなくケルケゴール研究で著名な大谷長の、長年にわたる不断の尽力であり、またそれを支えたデンマーク文部省の協力であろう。しかし、時代は折しも「所得倍增政策」が効果をあらわして国の財政事情に余裕が生まれつつある頃であった。そんな状況の中で、おそらく明治維新以来はじめて、政策担当者にも実益最優先—外国語教育の関連でいうならば「大言語」主義の枠—を脱して、デンマーク語という文化移入以外にはさして実用性がないと思われるマイナーな外国語に理解を示すところのゆとりが芽生えるという、時の運もあった。

設置当時、人口約400万のデンマーク本国を別にすれば、デンマーク語のみで単一の学科をなすことは、北欧圏にあっても一般にきわめて異例と見なされ、北欧で最大の人口と経済力を有するスウェーデンの国語を外したありようは、来訪した関係者の驚くところであった。いっそう充実した北欧研究を実現すべく、その後、忍耐強く、スウェーデン語課程も併設するための要求が続けられた。その結果、1985年度から今日のデンマーク・スウェーデン語学科となり、毎年デンマーク語専攻15名、スウェーデン語専攻10名の定員で学生を迎えているのである。この定員に関しては問題があり、近い将来教員の増員を条件に、1992(平成4)年4月より学生定員数をデンマーク語、スウェーデン語それぞれ20名とする運びとなっている。

#### 〈教育の概念〉

本学の特徴として、当語学科にあっても教育の基本的な目標は、第一にデンマークとスウェーデンの現代語の運用能力修得である。とくに1、2年次の教育は、もっぱら日本人専任教官と本国人の専門家が担当している。それと並行して、北欧全域の事情と文化について概観する講義が行われる。後者では、レポートを課して、学生の北欧に対する興味を実質的なものとする努力が払われている。

わが国一般にはスウェーデンとデンマークが代表していると意識される北欧は、中小平和国家、民主自由主義社会、世界随一の福祉制度などのシンボルと解されているといえよう。このような意識を踏まえて、3、4年次の授業は、学年と専攻言語による分離は行わず、学生の選択に応じて言語、文学、歴史、社会問題を扱う科目を学ぶことができるようになってきている。そしてその仕上げとして卒業論文が課されている。なお、この、両専攻言語課程の相互乗り入れは当語学科の顕著な特徴ともいえるが、それはデンマークとスウェーデンの両国が外見的に類似の社会を築いていることと、両国語が言語学的にいうならば姉妹関係にあることによる。さらには、不足している担当教員のやりくりも背景にある。

暫定的な評価によれば、全体的に学生たちの専攻言語の運用能力、とりわけ口頭によるそれは年とともに高まっている。他方、北欧関係蔵書が格段に増しているにもかかわらず、原語による読書量はふえているとは言えない。いずれにせよ、かなりの程度までデンマーク語やスウェーデン語、さらには両言語を使える青年は、わが国では今後も当分ユニーク

な存在であるにちがいない。

#### 〈学科スタッフ〉

1966年度にデンマーク語学科として発足した当時は、哲学の大谷長教授(学科主任兼担)と森岡治夫助手が教育にあたった。そして67年度に岡田令子、68年に菅原邦城(大A14)が赴任した。その後森岡の退任を受けて73年度に間瀬英夫が赴任した。

1985年度にスウェーデン語課程の併置にもなつて菅原が配置替えになった。その後任として86年度に新谷俊裕(大DM25)がデンマーク語担当として、また同時にスウェーデン語担当として清水育男が加わつた。

外国語教育に本国人の分担が不可欠であることは言をまたない。デンマーク語学科の初期はInger Schlanbusch女史等在日の人々に講師として協力してもらつた。やむを得ない事情とはいえ、彼らは必ずしも国語教育の専門家ではなかつた。のちに、大学全体で外国人教員雇用に関する申し合わせがなされた機会に、当語学科は、最長5年間を限度にデンマーク本国から教員を公募し、現代デンマーク語あるいは文学の専門家を招聘している。彼らは、Henrik Galberg Jacobsen(1981-83年)、Anne-Mette Ipsen(1983-85年)、Nina Møller Andersen(1985-88年)、Martin Paludan-Müller(1988年—現在)の諸氏で、それぞれ学生たちに深い印象を残している。

一方、スウェーデン語課程は、はなはだ異例なことに、発足当初から現代にいたるまで「客員教授」のポストを与えられずにいる。そのため、Astrid Meier-Wichmann夫人をはじめ在日スウェーデン人の好意的な協力に依存しているのが現状である。

スタッフは日常の教育と同時にそれぞれの専門分野の研究を行っている。すなわち、岡田：現代デンマーク文学(Karen Blixen研究により関西学院大学文学博士)、間瀬：言語学・音声学(主としてデンマーク語・スウェーデン語比較研究)、菅原：北欧の言語・文学(主としてアイスランドとスウェーデン)、清水：ノルド語の歴史(主としてスウェーデン語史)、新谷：デンマーク語文法。研究の成果は単行本として出版してきた。また多くの論文類を大学の紀要『大阪外国語大学学报』や所属学会機関誌に発表している。さらには、語学科独自の雑誌として1973年にIDUNを創刊し、1990年にはIX号を発行した。次号は、1992年春を迎える岡田教授の退官記念号となる。

#### 〈学生および卒業生〉

1970年から1991年までデンマーク語を修めた卒業生は約280名になり、スウェーデン語課程卒業生は1989年から1991年まで28名となっている。卒業生の大部分は本大学卒業の多数が進む方面に出て、それぞれの分野で健闘している。

彼らの一部は、わが国ではいまなお未開拓のままである北欧研究に敢えて挑戦する勇気を示してきた。そして、北欧各地あるいは国内の他機関で勉強、研鑽を積み、すでに北欧

の言語(学)、文学研究、歴史学の各分野で新進気鋭の学者として頭角を現している者もいる。

(デンマーク・スウェーデン語学科研究室)

### 13. フランス語学科

〈I. 創立より第二次世界大戦敗戦まで〉(大正11年～昭和20年)

大正11年、大阪外国語学校の9語部のひとつとして仏語部は創設された。最初の卒業生は23名、3人の専任教官と外国人教官のもとで、きびしい語学教育を受けた。創立期から第二次世界大戦までのこの時期を通じて、語部の中心となる目黒三郎が、母校創立35周年記念の同窓会誌によせた思い出によると、翌12年、目黒は、他語部同僚の期待と温かい出迎えを受けて、「西も東もわからない」大阪に赴任する。語部の教官は、学科長は陸軍少尉・岡田演之、講師山下芳一との3名であり、「五月末にフランスから、マルシャン氏が、マルシャン・メトッドなる教授法をひっさげて着任されました」とある。このメトッドは、教科書も自ら作ったものを使用、一切日本語を用いない独特の教授法で、全国から参観者が訪れたという。9月在外研究のため、横浜を出帆した岡田にかわり、上田駿一郎がフランスから帰国し、学科長を務め、北大からスピテを迎えて陣容が整った。昭和5年上田が退任、目黒が学科長となる。その後幾つかの変遷があって、昭和6年、戦後の時期を通じ語部の中心となる畠中敏郎が目黒のもとに赴任する。畠中は、本校3回の卒業生であり、京都大学文学部図書館助手に任じられていた。その博識は、フランス文学、プロヴァンス語のみならず、日本明治大正文学、中世の謡などにも及び、比較文学の泰斗でもある。目黒、畠中の教え子の中原(後出)の思い出によれば、他に相前後して丸山、小川の両教官も在任したが、いずれも若くして逝去した模様である。当時の学生は、フランス映画や詩に憧れる文学青年も多かったようだが、先ずマルシャンの教授法で鍛えられていた。クラス誌『ら・ぷりゆむ』に寄せられた畠中の一年生時代の思い出によると、マルシャンは、「週17時間の仏語のうち13時間を担当し、毎日2時間内至3時間で、一日だけわれわれはデュポン家(独特の教科書)から解放せられた」。少し進むと小演説もさせ、学年の終わりには、一年生が羽衣伝説をフランス語で話したという。マルシャンと中目校長の骨折りでの駐日大使ポール・クロードルが来校し講演した際、「何でも質問せよとの事で、同級4、5人がそれに応じ、私(畠中)もその一人であった。にこにこ答えたその温容は今もわすれない」と書いているが、生徒たちの語学力がうかがわれる。

昭和11年、仏語2回の卒業生でフランスから帰国した林和夫が着任、13年目黒が退官し、仏語3回の卒業生和田誠三郎が着任する。畠中、林、和田とも、目黒、マルシャンの愛弟子であるうえ、常に2名のフランス人教官に助けられて、充実した教授陣であった。恐ら

く文学研究への理解を深めつつも、完璧な仏語の習熟という語部の教育理念は変わらなかったと思われる。それはまた、戦中、戦後を通じてのフランス学科の伝統ともなり、40年後の大学院設立まで続いた教育方針でもあった。

昭和16年、日本が太平洋戦争に突入するとまもなく、畠中は、陸軍教授の資格で、仏印駐屯軍司令部付として、サイゴンに勤務するため、本校を去った。専任教官の補充もないまま、学舎炎上や、動員と繰り上げ卒業の試練の時期は、如何に過ごしたのだろうか？ 今は亡き林、和田とも、ついに語ることはなかった。

## 〈Ⅱ、戦後の時代、新制大学の出発〉（昭和20年～昭和44年）

昭和19年、仏語部は大阪外事専門学校フランス科と改称され、廃虚のなか敗戦を迎えた。21年から高槻市の、元工兵隊兵舎で授業が行われていたが、校庭らしき場所には、夏草が茂り、教室には銃架がならんでいた。戦場から帰ってきた者、陸軍幼年学校でフランス語を修得した者も含めた30数名が新しい日本の将来を夢見て、昨日までの敵国語に挑戦した。昭和22年全校で初めて女性がフランス科に入学した。フランス育ちで完璧な語学力の才媛であった。この人の優秀さの故か、続いて翌年6名の女性が同科に入学を認められた。全校の女性10名のうち、7名までがフランス科に集中していたのは、以後の学園の傾向の先駆ともいえるし、この7名は、その後全員が社会活動を続けて現在に至っている。同23年、14回の卒業生で京都大学文学部に学んだ田中栄一が教授陣に加わった。

いままで見てきたように、語科の教官は、代々教え子から教え子へと採用されており、教育理念や伝統は守られやすく、社会の変化に関わらず、語科は平穩に戦後を乗り切って行くかに見えたが、各地で新制大学が発足したのに伴い、大きな打撃を受けることになった。最年長で学科長であった林が、大阪大学教養部に移ったのを皮切りに、和田は大阪大学文学部に、最年少の田中までが同教養部に招かれて、2、3年の間に語科教官の全員が、母校でもあった外語を次々と去ったのである。

幸い復員して天理大学で教えていた畠中敏郎が、請われて学科長として、語科の再建にあたることになった。畠中は直ちに、同じく本校出身の後輩で、フランス語学の碩学であり、スペイン語、プロヴァンス語などにも博学な中原俊夫を招聘、2、3年後には、更に後輩で経済学の優秀な学者であった黒木義典を招き、着々と語科の再出発を果たした。昭和24年、新制大学として発足した後も教育方針に変化はない。そもそも畠中、黒木は、敗戦後もベトナムと日本との交渉通訳にあたり、中原は陸軍幼年学校フランス語教官であった位であるから、専門の研究の上にもまずフランス語の会話に堪能で、この点の教育は厳しかった。中原、黒木は、いずれも畠中の教え子でもあり、フランス語学科は、大語科ではないものの、個性ある三人に見守られて、学生にとって行き届いた教育が行われていた。昭和34年、短期大学部フランス語科発足に伴い、中原がその専任として移籍した。将来はもとの籍にもどるとの約束があった模様であるが、それは実行されず、昭和40年大阪外大第

二部として発足後も学科主任として、昭和47年定年退官するまで勤労学生のためにつくした。中原の移籍に伴い、フランス語学科には、田辺保が採用された。田辺は新制1回の卒業で、京大大学院修士、同博士課程修了の俊才、その後パスカル、シモーヌ・ヴェイユなどの哲学的研究者として有名である。フランス政府給費留学生としてパリ大学に学び、『純粹の極みの死—シモーヌ・ヴェイユ』など多数の著書がある。

この頃までのフランス語学科は、3名の教官のもと25名の学生が学ぶ、緊密な教育態勢が続いていたが、社会は、アメリカやヨーロッパ文明の摂取に懸命な時代を迎えていた。昭和40年、フランス語学科の学生定員10名の増加に伴い、赤木富美子が採用され、スタッフは4名となった。赤木は、新制1回の卒業生で、阪大修士、京大博士課程修了、フランス政府給費留学生としてパリ大学に学び、専攻は17世紀文学であった。この年、中原、杉山、松井、黒木、田辺、赤木の一部・二部教官の間の申し合わせにより、各自が平等に夜の授業も分担する、いわゆる共通ノルマが合意されたことは、一部・二部双方の学生にとって幸いなことであった。この申し合わせは全学に先駆けてフランス語学科が行ったもので、畠中主任教授も夜の授業を1コマ担当した。教官の所属の交替制は、まだ先のことになるが、共通ノルマの実施により、以後の採用人事は、一部・二部の共同態勢のもとに行われ、広い専門範囲の人材が集まるきっかけとなった。

昭和42年、杉山は広島大学に転出した。6月には上村清太郎が着任、翌43年には、新制大学3回の本学の卒業生であり、大阪市立大学大学院修士課程修了後、帝塚山大学助教授であった原田武が迎えられた。原田は、プルースト、ジュリアン・グリーンなど文学の深い研究の他、宗教、思想にも造詣深く、数度の渡仏の際、心を惹かれたカトリ派についての著名な著書『異端カトリ派と転生』の他、業績の多い優れた学者である。

### 〈Ⅲ. 大学院設置、学園紛争とその後〉(昭和44年～現在)

昭和44年、大学院外国語学研究科が設置された。この頃全国に起こった大学紛争は外大にも及んだ。フランス語学科では、4年生の数人も学舎の占拠封鎖に参加したのが特徴であるが、これら4年生は、むしろ思考の即時実現と人間的な絆を大学に求めている行動であったようだ。紛争の直前にも、その後にも、助教授は皆彼らの訪問を受け、思い出など語りあったことが、その雰囲気をよく説明している。過激な政治学生は、むしろ入学したばかりの1年生にいて、初歩の授業は全部つぶれた。しかし学生も教官も未熟で、「お前教官か」「何故他学科の学生を殴ったのですか」「ゲバルトですよ。ゲバルト!」といった低次元の応酬に終始したのは、学ぶために出席していた普通の学生に申し訳なかったと思う。フランス語学科の教官と学生の間には、反対派の学生同士のような感情的対立がなかったことも事実である。こうした中で、怪我をして逃げ込んで来た反対派の学生をかばって、封鎖の学生を恐れず、救急車を呼んだ、フランス語の教官があったと聞く。過激な学生に遠慮して教官が見て見ぬ振りをし、自分の大学の学生の死を招いたケースが、他大学であっ

たことを思う時、このキリスト教の信念にもとづく行為は敬服に値すると思う。結局は本学も警察の介入を要請して紛争は終わり、学生たちは、学園に戻った。おそらく、理想の挫折に生き延びた自己の弱さの思いを心に抱いて……。十五、六歳で動員され、家族を捨てながら、巨大な理想に殉じることのなかった我々の世代には、生涯彼らの負うべき自己不信の傷がよくわかる気がする。

大学とともに、フランス語学科も大きく変わろうとしていた。一、二年次に語学をみっちり修練し、三、四年次では、語学、文学、文化の専門ゼミを選択し、自由な興味に従ってより深くフランスを理解するという教育態勢が定着しつつあった。昭和45年、文学専攻の岩間正邦が採用された。岩間は、本学新制14回の卒業生で、大阪大学大学院博士課程在学中の赴任であった。フランス詩の専門であるが、天性の批評のセンスからヴァレリーの思想研究の論文や、小林秀雄についての独創的論文など文学的才能を兼ね備えた学究である。

昭和47年、畠中が定年退官、黒木が学科主任となった。同年、田辺が岡山大学文学部へ転出、続いて翌年3月には、中原、上村が同時に定年退官となった。上村は、本外国語学校の4回の卒業で、80歳を越えた今も船場育ちの熱意をもって、大阪弁擁護の論文に健筆をふるっている。この年フランス語学科は、初めて公募により採用された3人の新進学者を迎えた。岡本弘次、山形頼洋、和彗則明である。岡本は関西学院大学大学院修了、フランス政府給費生として長く在仏し、将来を嘱望された言語学者であり、外大教育にも大きく貢献したが、6年後、若くして惜しまれつつ世を去った。山形は、京都大学文学部哲学科、同大学院修了、緻密な哲学的思考と論理の展開で、学生のみならず、同僚も魅了したが、8年後大阪大学文学部へ転出する。和彗は、大阪大学出身の経済学修士で経済学は全ての学問を含むという信念のもとに、社会科学、文化人類学、フランスの移民労働者問題などまで幅広く学生の研究指導を引き受ける。以後に加わるスタッフとともに、発展変貌する外大にふさわしい教育者である。翌49年、京都大学文学部、同大学院博士課程修了の歴史学者、阿河雄二郎を得て、新しいフランス語学科文化の陣容は完成した。阿河は17世紀の専攻であるが、民衆一揆など社会史に深い認識を有し、その博学は、フランス革命期の研究や、『フランス共和国の肖像——闘うマリアンヌ——』の翻訳にまで及んでいる。

昭和55年には、言語学専攻の大木充が採用された。大木は、愛知県立大学卒業後、大阪外大大学院修士課程修了、フランス政府給費留学生としてパリ大学に学び、玉川学園大学に迎えられていた英才であった。はじめて本学修士がスタッフに加わる時代になったといえる。専門のフランス言語学の業績の他、言語教育の著書も多い。

昭和57年3月、惜しまれつつ黒木が退官した。昭和56年から赤木が代わって主任を務めていた。57年10月、哲学専攻の三宅祥雄がスタッフに加わった。三宅は岡山大学から大阪大学大学院修士課程修了、サルトルの専門で優れた業績があり、その明晰な頭脳でカリキュラムなど語科の運営を一手に引き受け、一方広く学生の興味に応じた指導により、深い

影響を与えている。

その後昭和59年、主任を始めとする一部・二部の組織的所属交替が合意をみた。教官の第二部から第一部への所属変更は、かなり以前から全学で行われていたが、主任の交替がないと、恣意的で不公平を招く。フランス語学科では、少数の教官の逡巡によって難航していた案件が漸く解決されたことになる。スペイン語に続いて全学で二番目の改革であった。このあと第一部主任は、昭和60年より松井、昭和61年より原田、平成元年より赤木、平成3年より原田と交替している。結束して躍進の時期にさしかかったと思う間もない、昭和61年の松井の急逝は、語科にとっての痛恨事であった。松井は新制3回の卒業で、京都大学大学院修士課程修了と共に母校に招かれたという秀才である。フランス語学の研究業績も多く、『フランス語の生理学』などの著書もある。その豪毅で気配りのある人柄は、今も全同僚の敬慕哀惜の的となっている。

その前年の昭和60年、言語専攻、京都大学大学院博士課程修了の三藤博が採用され、スタッフの少ない言語コースも、充実されつつあった時期であった。三藤は、フランス政府給費留学の権利を放棄して外大での教育に加わり、その明快博学の講義で松井の遺志をつぎ、数々の業績をあげて学界の注目をあびる存在となっている。

言語コースは、その後昭和62年坂原茂を迎え、充実した陣容を取り戻した。坂原は京都大学出身で博士課程修了後文学部助手、フランス政府給費留学生として在仏、金沢大学助教授を務めていた。言語認識の新しい学派が坂原を中心として形成される程の逸材であったが、惜しくも平成4年東京大学に招かれ本学を去った。

去り行くもの、加わるもの、教授陣の流れはあるが、常に第一級の学者を集め得たことは語科の誇りとするところである。70年の歴史を経て今また大きな変革の時期を迎え、輝く将来を期待する由縁である。

#### 〈IV. 客員教授たち〉

最後に、客員教授たちについて記述するにあたって、差し出がましいことながら、思い出をまじえた、少し詳しい描写を許して頂けるであろうか？ その理由のひとつは、外国の言葉を目指し、その国への興味を胸に入学した我々すべてにとって、はじめて出会う客員教授は、憧れの国そのものであり、しばしば、同胞の恩師よりも、忘れ難い存在であるのではないかということ。ふたつめの理由は、不思議なことに、フランス人教授たちを順に辿っていると、そこに我が国がヨーロッパに対して関わってきた道の移り行きが読み取れるようにさえ思えることである。ある歴史家によれば、歴史とは蛇行する川を、船に乗って下りつつ、その川を描写するようなものだという。船の位置が、ある岸辺を見えなくしたり、ある崖を険しく見せ過ぎたりする。つまり記述する人の時代と視点の影響を免れ得ないのである。その意味でこの項も筆者の独断と偏見に満ちたものに違いないが、フランス人教授たちを単に年代順に並べても何ものも語り得ない思いもするのである。筆者の憐

越に対して、御寛恕をお願いする次第である。

さて、戦前のマルシャン、スピテ、ロランについては、畠中敏郎の回想(『きんきら50年』など所載)に詳しいので、それに譲る。新制大学の1回生として卒業することになる我々が教わった、最初のフランス人は、ルアス(昭和18年~25年在任)。小柄で丸い頭、敏捷で表情に富み、アルコールが離せないといった、映画そのままのようなフランス人だった。第二次大戦中も東洋にいて、日本では町を歩くと「チャーチル、チャーチル」と指さされたと言っていたから、望郷の念もひとしおだったらしく、授業中にパリの妹から来た手紙の朗読を度々命じられ「親愛なるロベール」と読みだすとポロポロと涙をこぼし、授業はたちまちストップ。学校でも、もて余し気味だったらしいが、故国をさまよい出た冒険家のタイプで、我々には面白かった。

これに反して次に来たドゥ・リュイ神父(昭和25年~32年在任)には、深い感銘をうけた。我々のフランス人に対する概念をすべて覆すような人物だった。丈高く、真っ白な髪、真っすぐな姿勢。登校中に喘息の発作に襲われても、じっと立ち止まって、また歩み出すといった強靱な意志の持ち主で、神のみ心のままに、この東洋の敗戦国に留まって職務を果たしていた。もう40年も滞在し、「皆さんよりずっと前から、日本にいます」という言葉に、我々は、ミショネールという仕事に畏敬の念を抱いた。我々の卒業後、天寿を全うしたが、しゃんと、起き上って、聖体を拝受したということである。我々に、繰り返し暗唱させた授業の方法は今でも優れたものだと思っている。頭のいい、同級の友人たちは、「ジュスウイラキロン(私は北風だ)」で始まる美しい章句を今でも口ずさむことが出来るだろう。

その後に来学した、モナン(昭和33年~39年在任)も、一時教鞭をとったベジノ神父も、宣教師として来日したのは、偶然だろうか。思うに、あの荒れすさんだ、暮らし難い戦後の日本で、生意気な学生にフランス語を根気よく教えようとするには、普通以上の使命感が必要だったのではないだろうか。現在、フランス人教師の見付け難い夜の部の学生のために献身的に授業しているデ・スカンフレールも神父としての仕事の本務なのである。若く活気に溢れてはいたが、何ひとつ信じるに足るものを持たず、荒涼とした風の吹きすさぶ、学生たちの心のなかに、フランス文化の灯をともしようとしたこれらの人々に、我々は本当に報いることが出来たのだろうか。それは、何よりも、「精神」の文化だったのに、我々は、極めて物質的に成長した世界をつくってしまったような気がする。

モナンの素朴で明るい、自然児ともいべき性格は、フランスがシャンソンだけでなく、豊かに稔る広々とした小麦畑や、なだらかに続く丘の国であることを認識させてくれた。

さて、ここから筆者の思い出は、生徒の椅子からみたフランス人から、同僚としてのものになっていく。はじめて女性の客員教授が就任した時は楽しかった。あの時代でなければ考えられないようなこともあった。この女性は、カディ(昭和41年~42年在任)といって、褐色の肌と黒く輝く瞳の美しい人であったが、或る日、肩も露わなドレスで教室に現

れ、厳格な主任の畠中を驚愕させてしまった。「女子学生が真似しても困るから、貴女から注意して下さい」といわれて、おそろおそろ欧米と日本との服装観の相違を説明したこともある。宿舎によんでもらって行くと、彼女は、家ではよく着物を着ていた。そして日本をテーマに作曲したとあって、優しいピアノ曲をきかせてくれた。オーストラリアの人と結婚したばかりで、夫が好まないの、バターを多く使うフランス料理をあまり作れないと残念がり、筆者に御馳走してくれた。芸術的な繊細さと同時に、大学教授資格も取得している頭脳の持ち主で、筆者には、世界中を飛び回れる自由なさすらい人のように思われた。それが女性であったことが、未来を先取りしていたような気がして面白い。二年の後、彼女は蝶のように日本を去っていった。

それは、ちょうど1960年代で、日本は高度成長の真只なか、敗戦国の貧苦のなかから、先進国のあらゆる文化を吸収しようと、全力疾走していた。学園にも同じ熱い想いがみなぎっていたとおもう。学ぶ者、教える者も、荒涼たる祖国を救う何かを求めて、ヨーロッパに夢を駆せた。輝く近代を作り上げた合理主義の発祥地。真と偽とを判別する理性は、全ての人間に等しく分かち与えられていると提唱した「われらの父デカルト」。個人が自らの主張を守り、互いに意見を尊重し合う自由の国フランス。それは、何もかもを満たす、秘宝の宝庫のように思われた。あの頃の滑稽なほどの外国への憧れは、祖国の深い活力を今でも私に信じさせる。フランス政府が、貧しい日本から招いてくれていた給費留学生のなかには、あの苦いカフェのコーヒーを、日本では味わうべくもない美味な飲み物だと主張して譲らない者もいたし、パリの街路樹は、御堂筋のその倍はあるとも思われた。思えば、日本中が、夢をもとめて、国の外へ目を向けた時代だった。ただひたすらに外国から学ぼうとしていた。ある者は、それをアメリカに求めた。他の者は、ソ連に、あるいは中国に求めた。

だがこの頃、すでにヨーロッパは、病んでいた。幾人かのフランス人は、合理主義の世界に見切りをつけて、東洋の不思議な美のなかに、異質の思考のなかに、脱出の道を模索しようとしていた。1960年代の半ば着任したマダム・ロシェ(昭和41年～47年、および昭和50年～55年在任)の夫君も、そうした日本研究家のひとりだった。マダム・ロシェは、フランス女性に珍しい、気分の安定した、公正な性格の持ち主であった。だが、こういう言い方自身が、偏見を示している。私の出会った女性のフランス人教師は、皆忍耐強く、わがままでも、気分屋でもなかった。特にマダム・ロシェは、我々の偏見を改めるのに適した人だったと言えるだろう。当時の主任の黒木は、「彼女は、日本女性以上に大和撫子だ」と感心していたが、事実、この人は、仕事に出る日は、夫と二人の子供の分の食事をきちんと用意し、ひとつひとつ冷蔵して出掛けて来るという。二人の娘の教育は、本国から通信教育で問題を取りよせ、自ら教授し、後パリ大学に進学させた。その上、故国ノルマンディーに居た時は、舅、姑と同居していたのである。私は、再び、パリを遥かに越えて抜がる、小麦色の沃野を目に浮かべた。冗談だろうが、「アラン・ドロンなんて知らない。私の夫の

方が素敵だろう」といって、よく笑わせた。それでも、文学史の授業に本を一杯抱えて出て行きながら、「本の多さでごまかすのよ」と片目をつぶって見せるところは、やはりパリジェンヌ風だった。

彼女と交替で何年か教えに来ていたロシニュー(昭和47年～58年在任)は、モンパルナス生まれ、きびきびしていて、教室では、気が短かったそうである。快活で勢いよく、学生はフランス人の別な一面を学んだことだろう。とても楽しい授業だったという人が多い。丁度授業のない日が多く、青年といった方がふさわしい、この客員教授は、崇拜者たちに囲まれて、元気に話しながら校舎のまわりを歩いていた。後にミッテランが初めて大統領に選ばれた日、彼は、臨時休講にして、学生と盛大に祝ったそうである。希望に満ちた笑顔は、20年後の今日も無事だろうか? 日本語学の博士論文を書くため、再び来日中だときく。

徐々に、我が大学は、日本を教え導こうというフランス人から、少なくとも、日本から何かを得たいというフランス人を迎える事になっていった。遠い東洋の孤島に旅する志は変わらなくても、関係は相互的となり、それだけ理解は深まって来たのではないだろうか?

そして、現在の客員教授ポーロ(昭和58年より在任)を語ろうとする時、長い長い70年の道を、感慨をもって見渡している気がする。彼は、太宰治の専門家である。あまり外国では知られていない「あゆ」などを含め、幾つかの仏訳も完成させ、大抵の日本人より、この作家の日本語の魅力を味わえるのではないだろうか。この人は我々の国で楽々と生きているように見える。授業のない日にも大学に来て、学生や同僚と仕事をしたり勉強をしている。これがフランス人だろうか? 今この地球には、日本とかフランスとか、あまりこだわらない新しい人間が確かに存在しつつあるという感じがする。ポーロに限らない。講師としてフランス語を教えているマダム・ナカムラも、マダム・フジヒラも、日本を第二の祖国として、選んで来た人々なのである。いや、こんな言い方こそ、可笑しいのだろう。区別のあろう筈のないところに、何時までも、線を引こうとするなら、我々は、70年もこの大学を続けてきた意味がないというべきだろう。

(赤木 富美子)

#### 14. イタリア語学科

日本の歴史の中で、イタリア語がじっさいにいつの時代から聞かれたであろうか、と教室で風変わりな話題を提供すると、大方の学生は、まず明治の教育事情を思い浮かべる。お雇い外人の洋画家フォンタネージとか彫刻家のキオッソーネ、ラギーザらの活躍である。その推測はあながち間違いではない。日伊交渉史は、公式には「日伊修好条約」(1866年)に始まる。明治5年創設の東京外国語学校の、古いカリキュラムに、じじつイタリア語の

授業が隔年の開講とある。しかし、まれには、古く安土桃山時代のイエズス会宣教師のことを頭に描く者もいる。つまり巡察使のヴァリニャーノやオルガン上手で知られたオルガンティーノの頃である。専門書によれば、18世紀初頭のシドッティまで、初期イタリア人宣教師は少なくとも18名を数える。彼らの大半がシチリア人であること、そして当時のイタリアの政治や方言の状況、神学校の教育などを考え合わせれば、彼らの共通の話し言葉は、おそらくイタリア語ではない。ラテン語かイベリア半島の言語であったであろうか。彼らが設立した安土や京都の「セミナリオ」や「コレッジョ」での、外国語教育も、もし行われていたならばラテン語であったに違いない。ただし、ヴァリニャーノに従って、永遠の都ローマを訪れた天正の少年使節たちは、初歩的なイタリア語を覚えて帰った初めての日本人であったろう。なお語源にまで触れて、イタリア語に言及したのは、「ピストル」の語で、これが製造地のピストイアの町にゆかりがあることは、シドッティから学んだ新井白石の『菜覧異言』に記されている。

こうして歴史を振り返れば、わが国とイタリア語との出会いは遥かにルネサンス期にまで遡れる。しかし、近世では明治政府以降の教育制度(1886-1951)の下で、欧州の英・独・仏語の系列から外れたために、語学教育の面で大きく立ち遅れた。ただし、音楽や美術などの分野で、必要に迫られて学習した者は少なくなく、明治の国語辞典でもかなりの音楽・美術の借用語が見出される。今日、日常生活の隅々までもイタリア製品が溢れ、イタリアの借用語が「ピエンナーレ」から「パスタ」まで枚挙に暇がないことを思えば、普及のテンポに驚かされる。

さて、本語学科は昭和39年に新設された。東京外大、京都大に次ぐわが国で3番目のイタリア語教育・研究の組織である。この年は高度成長のピークで、新幹線の開通やオリンピック開催の年でもある。設立の起案は、附属図書館事務長で本学と京都大でイタリア語の授業を担当していた宮本幸三郎が、京大の野上素一教授の助言をえて、もっぱら作成に当たった。その中で、近年の目覚ましい日伊の経済的・文化的交流の実情に触れて、社会の実際要求に応える語学教育・研究の必要性が説かれている。この初年度は、しかし学科の認可や人事の遅れに左右されて、新学期のカリキュラム編成はかなり手こずった。語学は、主任の助教授宮本幸三郎が、京都大助手、非常勤講師の池田廉(翌年着任)と共に、担当した。外国人講師については、専任の枠が取れない事情もあり、4月に入って、旧学舎に近い星光学院を訪ねて、イタリア人神父の協力をお願いした。幸いに校長モーロ神父が窮状を見かねて、ご自身出講して下さることとなり、二人で安堵の胸を撫で下ろしたことが今も記憶に生々しい。この年のカリキュラムに、外国人教師の名が漏れたのはそのせいである。

ところで大局的に考えれば、語学科の創設に辿りついたのは、本学のイタリア語教育に対する長年にわたる熱心な取り組みがあればこそである。地道な努力がようやく実ったと言える。たとえば、本学の創設以来の古いカリキュラムの中で、イタリア語はフランス語学

科などの兼修外国語の中に入っている。フランス語学科徳尾俊彦教授がじっさいに兼任していた。その教えを受けた同窓生に、後の主任教授の宮本幸三郎(昭和6年フランス語科、11年蒙古語学科準卒)、フランス語学科の名誉教授畠中敏郎(昭和2年卒)、同黒木義典(昭和14年卒)がいる。なお畠中によると、当時のイタリア語の教材は、徳尾教授自身の作成のプリントであったとか。後に『イタリア語第一歩』(昭和14年)など数冊の優れた語学書を出した氏の、その草稿でもあったろうか。その以前の系統立った教科書としては、東京外国語学校教授粟田三吾と徳尾俊彦共著の『新編伊語読本』(昭和3年)がある。この本は、興味深いことに旧学舎の隣りにあった三島開文堂出版から刊行されたが、ここは語学科教官の数点の教本の版元でもあった。

さて、本語学科のスタッフがいちおう揃ったのは、第1期生が4回生となった昭和42年のことで、愛知学院大荒谷次郎が助教授に着任、客員教授にベンチヴェンニを迎えていた。ベンチヴェンニは昭和15年日伊交換学生として東北大に学び、後に京都大、聖心女子大などで教壇に立ち、本学の専任となった。真言密教が研究の関心事で(訳書に『正法眼蔵随聞記』)、晩年チベット語をも講じた。なお当時の非常勤講師に京都大野上素一教授、同志社大永井三明教授、大阪音楽大在里寛司教授、奈良産大間苧谷努教授がいた。永井教授は、西洋史の非常勤講師をも兼ねた。こうして創設期のスタッフは、いわば手探りの状態で教育に当たった。市内の手狭で古めかしい教育環境ではあったが、意欲的な個性に富む学生に恵まれた。語科の小冊子『アウラ・ノーヴェ』や、毎年の「イタリア語劇」は熱心な彼らの手で実現した。

昭和50年春、宮本幸三郎教授の退官。宮本は、本学の伝統とも言える実学の学風を身につけて、本学卒業と同時に、言語学者浅井恵倫の指導で台湾の高砂族の言語調査に参加した。後に満州語を修め、満州国の在ローマ、イタリア大使館に勤務、戦後帰国。文字どおりポリグロットのことは宮本のために作られたかであった。退官後も、中国語、ロシア語、あるいはルーマニア語と、多くの言語に親しんでいる。宮本の方言学への関心は、やがて助手に就任した本学出身の藤村昌昭に受け継がれている。

昭和53年、3講座制、学生定員30名へと拡充改組。その翌年には新たに京都産大より、米山喜晟助教授が着任し、新しい歴史の1ページが始まった。客員教授は、ベンチヴェンニ退官の後、日本文学研究者ミケーレ・マルラ(訳書『日本永代蔵』)、ジョルジョ・アミトラノ(訳書『山月記』)へと移り、現在アントニエッタ・パストレーサイコ教授が、会話などの指導に当たっている。なおパストレー教授は、トリノ大卒、ジュネーブ大修士で、安部公房の小説の翻訳家でもある。

終わりに現スタッフの研究・教育の状況について、簡単に記しておきたい。

池田廉は、荒谷、米山、郡らと共に『小学館伊和中辞典』を共編、主にルネッサンス文学を専門に、訳書『君主論』、『ガラテオ』など、論文に“Intorno alle 《allegorie esplicite》, con una proposta di interpretazione del sonetto CXXXVII delle *Rime*

*sparse*”、目下『カンツォニーレ』訳稿の刊行準備にかかる。

荒谷次郎は、京大博士課程を論文「イタリア・ロマン主義論」で修了、学会誌などに、近代思想史に関する数多くの論文を発表。また、『グラムシ全集』の翻訳、監修の担当など。教育面では、とくに英語からイタリア語への展開に重点を置き、イタリア語作文及び商業通信文を指導。大学院では、リソルジメントを中心に、デ・サンクティス、クロッチェ、グラムシの研究が中心。

米山喜晟は、京大博士課程修了後、京都府立高校、京都産大を経て、本学教授。研究の対象は中世から啓蒙主義期にわたり、現在3つのテーマと取り組む。ムラトリー研究、フィレンツェを始めとする中世都市の様々な問題、「ノヴェッラ」の研究である。論文“Sugli effetti della sconfitta di Montaperti”など多くの論文を、本学『論集』や雑誌に発表。訳書にヴィーコ『新しい学』（共訳）など。

藤村昌昭は、京大修士課程を経て、助教授。語史的立場からの標準語と方言の諸問題を掘り下げ、また翻訳における訳語のレベルに関して、主に隠喩、換喩を記号論的視野から研究の対象とする。上記のテーマに関する諸論文のほか、NHKのラジオ講座「イタリア語」、大阪日伊協会の「通信講座イタリア語」なども担当、それらのテキストの著書がある。

郡史郎は、東京外大の修士課程を修了、助教授。はなしことば、とくにイントネーションの実験的研究に取り組む。パドヴァの国立音声研究センターで10年来ほぼ毎年、共同研究を続け、その成果を国際学会や雑誌に発表。日本語についての関心も深い。著書に『やさしいイタリア会話』。

なお多年にわたり、語学・文化の教育に貢献された非常勤講師に、前述の方のほかに、次の先生がいる。桃山学院大教授藤沢道郎、プール女子短大教授脇功、大阪大助教授若山映子、大阪芸術大助教授武谷なおみなど。

(池田 廉)

## 15. イスパニア語学科

### <イスパニア語学科史概略>

イスパニア語学科の歴史は大正10年12月の大阪外国語学校創立と共に始まる。名称は西語部であった。第一回生は13名、昭和5年まで、3年ごとに募集しない年があったため、第三回、第六回、第九回の卒業生は存在しない。昭和19年4月、大阪外事専門学校と名称が改まるに及んで、西語部はイスパニア科となった。学生定員は25名であった。年により卒業生の数は増減する。第二次世界大戦も終わった翌年の入学者は17名と少ない。昭和23年度入学者のうち初めて女性一人がいた。学科史上記念すべき年であった。昭和20年3月の

空襲で校舎の大部分を焼失したため、翌年2月には府下高槻市の元工兵隊跡に移転し、ここで授業が行われた。木造二階建の旧兵舎であった。

昭和24年、大阪外国語大学となるに及んで、イスパニア科からイスパニア語学科と名称が変更され、従来の三年制から、四年制へと移行した。イスパニア語学科は12語学科の一つとしてスタートし、定員は25名となった。専門学校から大学への移行期であったため、新一回生の中には、嘗て専門学校在学中の者もかなり含まれていた。移行による学内特別措置があったと聞く。因みに外事専門学校は26年3月を以て廃止となった。授業は26年5月から三回生が大阪学舎で受けることになった。空襲で焼け落ちた学舎は三階建の上一階を削り取ったもので、キャンパス内に一部分木造の教室が新授業用に建てられた。27年には三、四回生が大阪学舎に移り、以後、32年の全面的移動まで、この状態が続いた。昭和32年、イスパニア語学科学生定員が一挙に倍増し、A・B二クラスに分けられることになった。この年もまだ女子学生は殆んどいない状況であった。

昭和44年4月、大学院外国語学研究科が設置されるのに伴い、イスパニア語学専攻も誕生した。院生定員は八名と決められたが、初年度は女性一人だけであった。以来、平成3年で二十一回の修了があったが、23名が修了し、その大半は大学教員として活躍している。イスパニア語学科はイスパニアの他に中南米の多くの国々の言語や文化を研究する必要上、今後教授陣の充実と地域別専攻のシステムの確立が重要な課題となる。

#### 〈歴代学科主任等、教官のこと〉

初代イスパニア語学科主任は佐藤久平である。明治21年の生まれで、大阪外国語学校創立と同時に西語部の教官となった。現在の東京外大の前身、東京外国語学校の卒業であった。西語部文法の権威として昭和32年3月定年退職するまで、長年に亘り学生たちの信望を集め、尊敬されたが、惜しくも退職したその年、故人となった。『標準スペイン語会話』（白水社刊）や『スペイン語第一歩』（白水社刊）などは、当時まだスペイン語関係の文献が少なかったため、貴重な学習書であった。学問に対して厳格であり、また同時にユーモアがあり、立派な人格者であった。佐藤の教えを受けた数多の卒業生のうち、やがて二代目の学科主任教授となったのが国澤慶一である。明治35年4月、府下岸和田市に生まれ、昭和3年、西語部を卒業した。背の高い、貴公子然とした風貌に、新入生たちは彼に教わる喜びを予感したものである。卒業年に囑託として教壇に立った。こうして佐藤、国澤の時代が続いた。学科主任になったのは佐藤が退職した後であるが、昭和43年4月1日を以て退官するまで四十年近く、母校で後進の指導に当たったわけで、国澤の世話になった卒業生の数は極めて多い。とりわけ国澤が在職の時代には、佐藤の時も同じだが、授業科目にいわゆる選択制はなかったから、入学した者は全員、彼の授業を受けた筈である。彼は昭和10年から一年半の予定で、スペインに、スペイン語教授法研究の目的で出張になったが、生憎スペインの市民戦争に巻き込まれ、フランスに避難するなど、貴重な体験をしたので、

授業を離れて色々と過去の思い出話をする時などは必ずと言ってよいほど、この時の事を話題にした。彼はまた、大学になってから、就職斡旋部長を務めるなど、イスパニア語の学生だけに限らず、色々とよく世話をした。43年の退職後は京都産業大学教授として約十年勤務したが、63年4月、84歳で亡くなった。彼は主としてスペイン語講読の授業を担当したが、文法に関する著書も数多く出し、当時スペイン語の学生は殆んど第二外国語としてポルトガル語の授業を受けたが、彼はその担当者でもあった。

外国人教師は西語部創設と同時に任用されている。記録によれば、大正11年6月、嘱託としてペドロ・ビリャベルデが教壇に立った。1887年スペインはログローニョの生まれで、音楽関係の学校を卒業し、大正6年に来日した。嘱託の期間は一年で、その後昭和8年に再び講師として教壇に立ったが、12年にやめた。その後19年から20年にかけて、専門学校時代にも授業を担当している。音楽が好きで、神戸に在住中は、ピアノのレッスンもしていたというが、すでに故人である。

ビリャベルデが初めて嘱託となった三ヶ月後に、もう一人のスペイン人、ミゲル・ピサロ・サンブラーノが傭外国人教師として着任している。1897年の生まれで、グラナダ大学文学部を卒業後、マドリードで歴史研究家として活躍する傍ら、日刊紙『エル・ソル』の記者としても健筆を揮っていた。彼は別科でフランス語の授業も担当したが、これは1年間だけだった。大正14年に一旦満期解雇となったが、大正15年から昭和8年まで、再び傭外国人教師として教鞭をとった。いつだったか、日本のイスパニア学会で、スペインの詩人で邦訳もあるガルシア・ロルカの研究発表があった折、日本人の発表者が、「ピサロに捧ぐ」とある詩の解釈の時、このピサロとは誰なのか分らないと言うと、先述の国澤が、即座に、それはミゲル・ピサロの事だと発言した。共にグラナダの出身だった二人は親友だったらしいのである。然し任期を終えると、日本を去り、スペインへではなく、東欧の国に赴いた、と国澤は説明した。昭和32年ニューヨークで亡くなった。

イスパニア語学科史上、最も大きな存在の外国人教師は、ホセ・ルイス・アルバレスである。1910年5月9日スペインはメディナ・デル・カンポに生まれ、マドリード大学で法律を学んだ他、フランスのボルドー大学、ドイツのゲッティンゲン大学に学び、1931年にはマドリード大学で法律を教えた。昭和10年来日、1月から大阪外国語学校外国人教師として教壇に立ち、途中、戦中・戦後を通じて二度本学を離れたが、以後、昭和56年に定年で退官になるまで、長期に亘ってわがイスパニア語学科の誇る名教授として数多くの学生の指導に当たった。80歳を迎えた今も、非常勤講師として本学に見えている。スペイン文学に造詣が深く、彼の指導を仰ぎ、今日母校に勤める者も、事ある毎に、今尚厄介になっている。

国澤の退官後の学科主任は角田理三郎である。広島県の出身で、明治41年生まれである。本学西語部第五回の卒業生で、卒業後はキューバの領事館をふり出しに外国の公館に勤務していたが、昭和32年、大阪外大講師として赴任した。主として時事スペイン語、とりわけ中南米の経済を担当し、その該博な知識と経験を懇切丁寧に学生に分け与えた。角田の

授業を受けた学生は、きっと卒業後も、実際の言語の運用にその知識を生かして活躍している事であろう。趣味も広く、また美食家であり、自分でも色々とスペイン料理など作り、同僚や卒業生を食事に招いた。昭和49年4月、定年退職した後、関西外国語大学教授として勤めた。

さて、非常勤講師について若干触れておく必要がある。だが、その前に、極めて短期間ではあったが、イスパニア語学科の講師を勤めた笹部健三の事を記さねばならない。大正10年に豊中市で生まれた。昭和17年、西語部第十九回生として卒業し、第二次世界大戦の折は軍人として、南方に従軍したが、昭和22年、大阪外事専門学校講師として赴任した。美声の持ち主で、彼が発音すると、スペイン語は一そう美しい言葉に思える程であった。残念乍ら宿痾のため二十五年の前期の授業半ばで職を退き、不帰の人となった。大学発足当時は、この様に、佐藤、国澤、笹部の三人が専任教官であったわけである。そして、非常勤講師としては、武内恒次がいた。東京の出身で、大正9年に東京外国語学校西語科を卒業し、昭和3年、天理外国語学校に赴任し、昭和11年から13年にかけて、大阪外国語学校講師として勤めたが応召し、再び教壇に立ったのは大戦後間もない昭和21年のことであった。専門学校時代から更に大学へと引き続き講師として出講し、昭和43年に亡くなるまで、長年に亘り、まるで専任教官のように、わがイスパニア語学科の学生たちを指導した。スペイン語文法を担当したが、晩年には多少聴力が衰え、大きな声で授業したので、聞く側にとっては、有難かった。いつも黒い革の鞆と風呂敷包みを持った姿が印象に残る。風呂敷包は大い脇にかかえていたが、中身は謄写版刷りのプリントであった。頑丈な体格だったからその様な言わば重労働にも耐えられたのだと思われるが、彼のトレード・マークのようなものだった。

もう一人、昭和32年から40年にかけて、瀬田栄之助が非常勤講師として勤めた。三重県は四日市市の出身で、昭和11年3月大阪外語西語部を卒業し、28年に天理大学イスパニア語科専任講師となり、後同大学教授になった。若い頃から、文学青年として小説などに手を染めたこともあった。大阪外大ではスペイン文学の講義を担当したが、中でもスペイン文学史上第二の黄金時代と呼ばれる1898年代の作家たちが専門である。バロハ、ウナムノの他、ロルカ、ヒメネスなどに関しても論文を発表している。四日市から上本町八丁目の学舎まで、電車を利用して通勤したが、当時としては大へん長い距離であり、それだけ疲れも多かったのではないかと思われる。まだ四十歳そこそこで病に斃れたことは惜しまれてならない。

昭和35年から、外国人非常勤講師として、ドミンゴ・レデズマ神父がスペイン語会話の授業を担当するようになった。スペイン人で、1905年に生まれ、神学校で学んだ後、日本へは20歳代後半に来て、布教活動に従事したため、日本語も上手で、日本の風俗、習慣にも詳しく、またよく溶け込んだので、日本人の食べる物なら何でも食べるといった具合であった。極めて温厚で、授業にも熱心であり、とりわけ学生の名前を覚えるのに天才的な能

力を発揮した。従って卒業生からも大へん慕われたが、昭和54年、四国は愛媛の方に移ることになって、大学を去った後は、専ら教会の仕事に携わった。とは言え、最初のうちは、四国からわざわざ出講した。教育に対する熱意の程を窺わせて余りあるエピソードである。

昭和32年度からの学生定員の倍増によって、イスパニア語学科の教官定員も僅かながら増えることとなった。加えて、33年における短期大学部の設置によりイスパニア語関係の教官は飛躍的に増加することになる。ここで当時の教官と研究室について回顧すれば、各語科とも、いわゆる大部屋の状態であった。尤も、高槻時代と比較すれば事情は改善された方であった。あの頃は、スペイン語の教官とドイツ語の教官が同じ部屋に机を並べるといふ有様であったが、過渡的な、而も戦後の混乱期の現象であった事を考える必要がある。因みに、教官の昼食も、出前のうどん一ぱいで済ませる人も少くなかった。イスパニア語学科に関しては、上本町に移った後は、研究室は正面入口の奥の一室であった。後に定員の増加と共に、新しく建てられた地下一階、地上四階のビルの三階の、西側の二つの部屋が割り振られた。しかし実際のところ、研究室とは名のみで、単なる休憩室に過ぎなかった。個室になるためには54年の学舎移転を待たねばならなかったわけである。ただ、大部屋の時代もそれなりの魅力を有していた。教官の相互の連絡が緊密となり、人間関係が円滑に営まれることが大きかった他に、学生の側からは、一つの研究室を訪ねれば必ず誰か教官に会えるという便利さもあった。

角田に続く学科主任は現在本学の学長である山田善郎であった。大学第二回生以降の卒業生は彼の授業を受けた筈である。イスパニア語史の講義を主として担当したが、一方、NHKで最初のテレビ・スペイン語講座も担当し、広く知られている。わがイスパニア語学科の誇る名士の一人である。学長になる前には二部主事、図書館長、学生部長なども歴任した。本学の前身、外事専門学校の卒業生である。

年と共に卒業生の中から教職につく者が現れ、今や十名の専任教官のうち殆んどが本学イスパニア語学科の出身者である。イスパニア語学科の教官組織における画期的なできごとは、昭和51年に採用された第一部、第二部教官の交替制である。従来も夜間の授業に昼間の担当者が参加することは普通の事と考えられていたし、その逆の場合もあったけれども、四年毎に交替するというこの制度の発足により、一部、二部の教官相互の交流が円滑となり、且つ授業の内容も充実するという点で、学生にとっても歓迎すべきことであった。

この制度の導入によって、山崎俊夫教授が第一部の学科主任となった。彼は短大時代、第二部時代を通じて、スペイン及び中南米の経済を主として担当した。本学の前身、外国語学校を卒業後、九州大学で経済、法律を学んだ。角田の担当したコースを引き継ぎ、長らくわがイスパニア語学科の教官として後進の指導に当たったが、昭和60年3月末日を以て定年退職した。

その後、中岡省治、吉田秀太郎、森本久夫(吉田の二部主事在任中)、染田秀藤(中岡の海外出張中)が学科主任を歴任した。

客員教授としては、グティエレス(メキシコ)、エスクテロ(スペイン)、ゴメス(スペイン)、マビラ(ペルー)、フェルナンデス(スペイン)、シルバ(チリ)らが二年交替で授業を担当した。

イスパニア語学科の現在のスタッフは、中岡省治、出口厚実、伊藤太吾、長谷川信弥(以上が言語コース)、吉田秀太郎(ラテンアメリカ文学)、堀内研二(イスパニア文学)、森本久夫(イスパニア近現代史)、大内一(イスパニア中世史)、染田秀藤(ラテンアメリカ史)、千葉泉(ラテンアメリカ文化)と客員教授のクラウディオ・バスケスから成る。それに非常勤講師として岡本庄輔、木村栄一、篠原愛人、高垣敏博、辻豊治、内藤みちよ、西川喬、西島章次、日笠真理子、東谷穎人、北条ゆかり、三原幸久、三好準之助、藪中暁、山中忍、ホセ・ルイス・アルバレス、ルイス・フェルナンデス・デ・ラ・フエンテ、センドン・フェルナンド・ブランコらの協力を得ている。

#### <学科内のできごと>

先に述べた教官組織の改善も、学内のできごとに含まれるかも知れぬが、ここではその他の事について述べることにする。

イスパニア語学科は、この様にして、外語時代、専門学校時代、そして大学時代と移行する中で次第に拡大、発展を遂げてきたが、とりわけ昭和44年の大学院の設置により新しい研究家が現れるようになった事の意味は大きい。尤もこれはイスパニア語学科に限られた事ではない。例の大学紛争の後に試みられた教学体制の改革は、いわゆる四本柱、すなわち語学、文学、文化、政治・経済のコース分けを一そう鮮明なものとし、教官の採用もこのコースに従って行われる事になるわけだが、わがイスパニア語学科でも専門化は一そう進んだ。

学生の側から見た学科内のできごとと言え、先ず第一に、メキシコ政府の留学制度(CONASIT)の発足(昭和40年)であろう。当初は、わがイスパニア語学科からも大勢の合格者を出し、大袈裟に言えば、授業に差支えが起きるほどであった。今日では自由に海外に留学することが可能になったが、それでもこの制度のもたらした恩恵は測り知れないものがある。今日もなお、この制度は続いている。

外大の文化祭の出し物と言え、従来、イスパニア語学科では語劇であった。けだしこれは、わが外大の名物の一つでもあった訳だが、そしてイスパニア語学科について言えば、全学科を挙げての行事であったが、残念ながら、例の大学紛争以降、従来の体制が崩れてしまい、任意のグループによる活動になってしまった。しかし、この、会話クラブによる新しい試みはその後も恒常的に引き継がれ、関西のスペイン語学科を有する大学との連盟の下、毎年、コンクールが行われていて、上演された作品の数も相当なものとなっている筈である。

<語科誌、研究誌など>

(イ)『西語部会誌』

イスパニア語学科の前身、西語部時代の同窓会雑誌として、昭和4年に創刊され、昭和16年、第十三号で廃刊となった。残念なことに、本学の図書館には全巻どころか一冊も見つからない。大方、当時は図書館に収める習慣がなかったためであろう。ただ個人的に何冊かを所蔵している人がいる程度である。茄子色の表紙に、縦書きに西語部会誌と大きな活字で書かれ、サイズもA5版と、かなり大きい。どなたか、全巻をお持ちの方がおられたら、ぜひ本学図書館かイスパニア語学科にお知らせ下さい。

(ロ)『Más y Menos』

『西語部会誌』が廃刊となって10年近くの歳月が経過した頃、この雑誌の趣旨を継承する形で、新しい語科雑誌が誕生した。それがMás y Menosである。淡い青緑色の表紙に、毛筆で題名が書かれている。アルバレスが書いたものであり、題名も彼が考えた。Másはプラスを意味し、Menosはマイナスを意味する。スペインにあった「+0-」（0は「又は」を意味する）という雑誌にヒントを得たそうである。装幀もタイトルも『西語部会誌』とは全く異なり乍ら、創刊はやはり西語部会ということで、No. X IVとなった。昭和28年(1953年)のことである。この新しい雑誌が、イスパニア語学科の卒業生と在學生を結ぶ太いパイプであったことは言うまでもない。たとえば1955年に出た第十六号では、外大創立以来の学科主任教授佐藤久平に関して、編輯後記(当時はこの字を書いていた)に、彼が病気のため原稿が書けない事に因で「佐藤先生は不意の御病気に罹られ、腹部切開手術を受けられ、現在阪大病院に御入院中です。お見舞に上った時『私も是非何か、書こうと思っていたし、又私として当然何か書くべきだとは思っているのですが、此んな状態だから、今度は書かれませんが、誌上にその旨一言、断わっておいて欲しい』というお言葉でした。全会員ござって先生の一日も早く御快癒なさいますよう、神かけて念願致すものであります」と記されているが、学生と教官、そして卒業生との密接な関係が至る処に窺える。当時は学生が編集に当たっていたが、会費の集まりが必ずしもよくなく、担当者は大変苦勞をした様である。

1957年に出た第十七号は佐藤・ピサロ両先生追悼号となった。大阪外大だけでなく、当時の日本西語学会会長永田寛定氏をはじめ、笠井鎮夫氏、水谷清氏など斯界の第一人者の追悼文が誌面を充たし、佐藤の存在のいかに大きかったかを明かす記念すべき号となった。

この様にして、Más y Menosは、昭和20年代末期から30年代全体を通じてのイスパニア語学科の様子を記す貴重な資料である。元来、同窓会誌であったため、記事は卒業生の書いた物を優先させたが、同時に在學生や教官の原稿もあって、バラエティに富んだものであった。そして巻末にはその年度の卒業論文の題目一覧表があり、卒業する者にとってはよい思い出となったに違いない。学生による会費集めと編集の仕事を通じて、卒業生との個人的な接触が得られたことは、今となっては懐しい事ではある。会社や銀行を訪れる学

生に、先輩はコーヒーや昼食をおごったものである。

しかし、こうした雑誌ではあったが、昭和40年に、廃刊に追いやられてしまった。一たん中断すると、再開は非常に困難になる。同窓会誌の性格が年と共に教官の研究誌に近いものへと変質していったことも、この雑誌が紛争時代、一部の学生の批判するところとなった原因でもあった。この雑誌が出ていた頃は、年に必ず一回、学内で西語部会の総会が開催され、古い卒業生も出席したものである。その折に、出来上った雑誌を手渡すのが恒例の行事であった。その様な事情もあり、この雑誌は卒業生と在在生を結ぶ貴重な絆であった訳だが、色々な事情があったとは言え、廃刊に追いやられた事は残念である。なお、西語部会なる語科の同窓会は今日、有名無実の状態になっている。学生の総数が増え、授業の選択制度が進み、卒業するまで専任教官の顔を知らぬ学生もいる状況と併せて、個人主義的な傾向が近年とみに著しくなっている事を考えると、時代の推移を痛感させられる。

#### (ハ)Estudios Hispánicos

さて、イスパニア語学科の同窓誌が消えた事情は先述の通りだが、しばらくして新たにイスパニア語学科研究室より、兼ねてから希望のあった学術研究のための、教官のみによる雑誌が生まれることになった。新しい雑誌のタイトルは全く本格的なEstudios Hispánicosというものであり、創刊号の出たのは1968年(昭和43年)3月である。創刊号はたまたま国澤慶一先生退官記念号となった。以後毎度、定年退職する教官には、記念号が組まれることになっているが、創刊時の執筆者の顔ぶれを見ると、国澤慶一の他に、角田理三郎、山崎俊夫、山田善郎、吉田秀太郎、中岡省治、森本久夫、出口厚実の名が見える。当時のイスパニア語教官スタッフがよくわかる。以後今日に至るまで、この雑誌は毎年一回欠かさず刊行され、1991(平成3)年には第23号が出た。言語、文学、文化と分類され、大学の学術誌と並んで、ますます重要な存在となりつつある。

#### <卒業生の活動状況>

七十年の長い歴史を回顧するとき、その歴史を彩った人たちの多いのに驚くばかりである。いや、現在も各界で華々しい活躍をしている人たちが少なくない。外国語学校時代の卒業生の初期の人たちの中にはすでに亡くなった人もかなりあり、歳月の移ろいを感じさせる。母校の教授を勤めた国澤、角田、笹部もすでに故人となった。これらの諸先生の薫陶を受けた卒業生で、アカデミックな分野で活躍中の人も多く、関西地区の主要な大学でスペイン語のコースのあるところでは、殆んど本学イスパニア語学科の卒業生の姿が見られる。この様な事情は、わがイスパニア語学科の歴史の長さと共に併せて、わが国における本格的な研究機関が従来少なかったことにも起因するものと考えられる。NHKのラジオ・テレビによるスペイン語講座の開設など、スペイン語の占める地位が全般に高まってきたこともあり、優秀な研究者が、とりわけ若い世代に現れはじめた事は喜ばしい限りである。そ

のような研究者の育ての親とも言うべき人として、数年前まで神戸外大の学長を勤め、それまでも、わがイスパニア語学科で教鞭を取った林一郎(大阪外語第23回卒)、そして本学の現学長であり、長年イスパニア語学科主任であった山田善郎の名を挙げることができよう。因みに本学イスパニア語学科の教官組織を見てもその大部分が本学の出身者であるが、近年、他大学の優秀な研究者も迎えて、人的交流と相互の研鑽に努めている。

卒業生の活躍の分野は広く、多様である。そしてそれぞれの分野で重要な役割を果たしていることは、例えば1991年版の大学同窓会の会員名簿を一瞥するだけで十分であろう。海外で活躍中の卒業生、とりわけ中南米諸国に駐在する人たちも多く、そうした人たちは、現地で、同窓会を作り、定期的に会っては親睦を深めている様である。中南米の各国の大使を歴任した後スペイン大使となった(現在は退官して三井銀行顧問)林屋永吉(S17)、またメキシコ大使を勤めた(現在は退官)内藤武(S17)など、官界で華やかに活躍している人もかなりの数に上るし、一方、経済界に目を向ければ住友商事副社長の三好英一(大S1)、伊藤忠商事取締役を経て現在ブラジルで日伯紙パルプ資源開発で活躍中の松永和泰(大S2)、同じく伊藤忠商事取締役の小林一雄(大S5)など、貿易、金融関係の企業で活躍中の人が目白押しである。また、マスコミ関係の分野でも、多くの卒業生が活躍中である。近年、女性の卒業生も増加しているが、彼女らの活躍ぶりも、今後大いに期待できる。

(吉田 秀太郎)

## 16. ポルトガル・ブラジル語学科

### <前史>

当語学科は、昭和54(1979)年4月に新設されたが、それ以前から主としてイスパニア語学科の学生が副専攻ないし選択科目として、ポルトガル語を履修していた。本学イスパニア語の故国澤慶一名誉教授、ブラジルの師範学校出の二世の故小嶋厚子(昭和34年度から逝去した昭和60年度まで)、ブラジル文学専門の竜谷大学の河村昌造(昭和42年度から昭和61年度まで)が非常勤でポルトガル語を教えていた。

### <語学科設立>

昭和53年、ポルトガル・ブラジル語学科が学生定員20名、語学、文学、文化の三講座制、教官定員6名で新設が認められ、翌54年4月イスパニア語学科の山田善郎教授が学科主任を兼任して発足に至った。

発足当初の2年間、専任は河野彰(言語)一人で、非常勤として前述の小嶋、河村、元朝日新聞論説委員の山口秀男(文化概論、昭和54年度から56年度まで)、京都外大のJulio Rodrigues(作文、昭和56年度以降現在迄)が出講しており、またイスパニア語学科との共通集

中講義として神戸大学の西向嘉昭のラテンアメリカ経済論(昭和54年度から56年度まで)があった。

#### 〈ポルトガル・ブラジル語学科の小舟〉

現在発足14年目のわれらがP・B語学科は、大学入学人口激減に向けての機構改革の荒波をまともに受け、現在の状況では、教官の組織がポルトガルとブラジルに二分され、それぞれ南欧大講座と南・北アメリカ大講座に吸収されることになりそうで、まったく先が見えず、かといって後を振り返ってれば、前から大波がおおいかぶさってきて、小舟が二つに割れそうである。

#### 〈卒業生諸君の顔がチラホラ〉

こんなボヤキをつづっていると、平成4年3月末で既に10回送り出した210名の卒業生から、背中をドシンとたたかれそうである。筆者が着任した時は、語科新設最初のクラスが新しく三年生になった年で、男子学生5名、女子学生7名のうち男子4～5名、女子1～2名と、毎回研究室でコーヒーを入れて、ブラジル近現代史、ポルトガル現代史の年表を読み、雑談したなつかしい手作り教育の思い出が残る。また、当語学科の客員教授は、山田教授が昭和53年ブラジルに出張した際、ブラジルの諸大学のうち最も高く評価されているサンパウロ大学から歴代送ってもらう了解がしたが、その最初の客員教授Virgilio Noya Pintoを、成田の空港構内へ入国ヴィザを持って出迎えに入ったのが、外務省から中年転職した筆者の本学での最初の仕事であった。翌年からは、ブラジル経済資料講読、商業文など、3～4年生一緒にの授業で30名以上のクラスになり、また最初の卒業論文のお手伝いが、どっと押し寄せ、この11年間、ただセカセカ目の前の仕事を片付けてきた気がする。

卒業生諸君には、在学中度々「新設語学科の評価は、最初の10回迄の卒業生に対する社会の評価で決まる」といって、おどかし、「社会人になったら才能はかくせ、周囲から努力家だと思われるように行動しろ」などと俗っぽい教訓もたれたが、必須の卒業論文を無理矢理ポルトガル語で書かせ、試問も客員教授と共同でポルトガル語でやってきたことが、社会に出て「なんとかしなければならぬ」時の少しは足しになっているであろうか？

平成3年4月、朝日新聞に本語学科第2回卒業生の上嶋誠司記者の1ページ大のブラジル特派署名記事が掲載された。これは勿論本人の才能で、教員側の努力とは関係ないので、早速同記者には、本学で講演してもらったが、彼に続く卒業生を、我々は期待している。

これ迄の卒業生のうち、5回目位迄の卒業生の中から、企業等から派遣されフランスや米国の大学院に留学中の者4名、また駐在員として、計10名以上がブラジル、米国、フランス、イタリア、独等で活躍中である。

## 〈教授陣〉

平成元年、『ポルトガル・ブラジル語学科、創立10周年記念論集』と題する131ページの小冊子を、我々の研究費で印刷した。その小冊子の後に、全卒業生の名簿(各人の卒論の題目入り)、歴代の教官の住所・氏名等を掲載したが、ここでは、教官名を年代順に列挙する。

- 1) 客員教授 歴代、サンパウロ大学マスコミ・芸術学部(ECA)の現職の準教授、助教授を客員教授として迎えている。Prof. Dr. Virgilio Noya Pinto(昭和56年度、18世紀ブラジル史)、Prof. Dr. Carlos Marcos Avighi(昭和57、58年度、移民史)、Prof. Dra. Sonia M. Bibe Luyten(昭和59、60、61年度、コミュニケーション論)、Prof. Dr. Marco Antônio Guerra(昭和62年4月以降現在迄、芸術史)。なお、初代のVirgilioは、ブラジルの史学会を代表する碩学で、現在サンパウロ大学マスコミ・芸術学部副学部長をつとめている。
- 2) 非常勤講師 前出の先生方の外、辻豊治(ラテン・アメリカ経済論、昭和57、58年度、現京都外大助教授)、片山きよ子(作文、57年度から62年度まで)、西嶋章次(ラテン・アメリカ経済論、昭和59年度以降現在迄、現神戸大学助教授)、Dr. Joseph Luyten(ブラジル文化史、元国立民博外来研究員、昭和60、61年度)、田所清克(ブラジル文学、昭和62年度以降現在迄、現京都外大教授)、Prof. Sonia Regina Guerra(会話、昭和63年度から平成2年度まで、サンパウロ演劇学校教師)、東光博英(言語、平成3年度以降、竜谷大学非常勤講師)、Carmem Ruggieri(会話、平成3年度以降、サンパウロ大卒、英国留学)。
- 3) 専任 前出の河野彰(言語、昭和54年より)、有水博(政治経済、昭和56年より)の外、東明彦(歴史、昭和57年度より)、濱口乃二雄(ポルトガル文学、昭和58、59、60年度、当学科主任、定年退官後、現在京都外大P.B主任教授)、林田雅至(ポルトガル文学、昭和61年度以降現在迄)。当語学科の専任の教官の研究活動は、それぞれ分野が異なるので、筆者も必ずしも良く把握はしていないが、河野は最近、ブラジルの社会言語学の分野に関心が向いているようである。東は、ブラジルの植民地時代の砂糖プランテーションの社会構造、黒人奴隷問題を中心としているようであり、また林田はポルトガル古典文献学、ジルヴィセンテの戯曲研究をライフ・ワークとしている由。いずれにせよ、皆30代の半ばから40代の初めの若いスタッフで、東が昭和61年及び62年度リオデジャネイロに(外務省調査員)、林田が平成2年度在研でサンパウロ大学に、河野が平成3年度文部省在外研究員としてブラジリア大学に派遣されており、まさにこれから研究活動の成果が一層発揮される段階を迎えている。50歳台半ばの筆者は、1974年ポルトガル革命とアフリカ領植民地の独立問題、またラテンアメリカ政経学会では、ブラジルの経済問題に

政治等が交差する局面を取り上げ(セラード農業開発とカトリック教会、ブラジル連邦会議における対外債務問題等々)、殆んど毎年口頭発表ないし論文にまとめている。

#### 〈在校生〉

当初、学生定員20名でスタートした当語学科は、昭和62年4月に臨時定員増で入学者が30名になり、その第一回の卒業生が平成3年に卒業した。また同じく昭和62年度より、新設された日本語学科の学生を毎年3名、1～2年生の間あずかり、専攻の学生と同じ専攻科目を教えている。

定員20名の頃は、大体男子12～3名、女子7～8名であったが、昭和63年卒の第6回卒業生から、男・女比が逆転し、女子2対男子1の比率となり、教室の雰囲気も、かなり変わってきた。以前は多かったブラジル研究会の会員、サッカー部員、ラグビー部員が減り、ピアノ・クラブ等で活躍している学生が多い今日この頃である。

(有水 博)

## 17. ロシア語学科

### 〈1)外語・外専時代：1922年(大正11年)から1948年(昭和23年)まで〉

露語部は1922年(大正11年)に9語部からなる大阪外国語学校の開校と同時に発足した。開設時の教授は東京外語の教授であった松永信成と小樽高商から赴任してきたニコライ・A・ネフスキーである。松永教授は1914年東京外語露語部を、さらに1918年に東京帝大英文科を卒業し、乞われて本学で1919年から教授として教鞭をとっていたが、1924年5月に退職した。この短い在任期間中に、松永教授は多くの足跡を残した。そのひとつが校歌の作詞である。大阪外語の開校記念日は、第一次世界大戦の休戦協定が調印された日にあたることもあって、詩人アレクサンドル・ブロークの研究家であり、詩文学に造詣の深かった教授は「世界をこめし戦雲ようやくはれて/東の空に暁の明星ひとつ」と反戦平和を高らかに歌った校歌を作詞した。教授の授業について第1回の卒業生である久保徳人は「私達の授業にも高学年になった時、ブロークの『薔薇と十字架』を使って私達を詩の世界に誘い入れた。その講義、授業は若い私達に対し限りない愛と信とを教えた授業だった」とその印象を語っている。(『大阪外国語大学70年史資料集』P.42)

1923年(大正12年)には十時惟親とオレスト・ド・プレトネルが教授陣に加わった。十時教授は東京外語を卒業後、長崎高商教授を勤めたのち来校、在任2年にして同志社高商(の外専)の教授に転出したがその後も非常勤として勤務、1946年ふたたび大阪外事専門学校講師となり、1951年まで本学で教鞭をとった。

露語部第1回生である岩崎兵一郎が1931年に教授に迎えられ、その後外国語学校が1944年に改称、大阪外事専門学校となって片岡孝(R20)が1945年に助教授として、1946年には丸山忠雄(R13)が講師(翌年教授)として教授陣に加わった。丸山は広島と大阪の陸軍幼年学校でロシア語を教えていた。

## 〈2〉外大期：1949年(昭和24年)から現在まで

1949年学制改革で大阪外国語大学が発足、ロシア語学科の初代主任に岩崎教授が就任した。教授は附属図書館長も兼ね、その任期が終わると、ひきつづき教務部長、その後名称が変わった学生部長の要職につき、1954年7月まで、ほぼ5年にわたり役職の激務を果たし、1956年4月に吐血、急逝するまで母校の発展に尽くした功績は大きい。岩崎には『露語前置詞の研究』、『英語からロシア語へ』などの著作がある。

丸山教授は1949年に学制改革で大阪外国語大学助教授になり、1958年に3語科で発足していた短期大学部に翌年ロシア語科を含む3語科が増設されたが、1961年から4年間その教授を勤めた。その間岩崎教授の亡きあと2年間学科主任の重責を果たしたこともあった。1982年に退官し、1988年に逝去した。

1956年10月岩崎教授の後任に戦前満鉄調査部に勤務していた高橋輝正(R3)が助教授として着任、翌年から主任として学科の運営にあたった。高橋は学生部長の任務にも就いた。1970年に定年退官後山口県で神職に就いたが、1983年12月に亡くなった。

1965年短期大学部が外国語大学第二部に改組され、ロシア語学科の教授陣も充実した。当時の教授陣は高橋、丸山の両教授に片岡、国本哲男の両助教授、小野堅、法橋和彦の各講師、武藤洋二助手であった。国本哲男(R25)は1953年に京大西洋史学科を卒業したロシア史の専門家で、1960年に外大に着任、1967年には教授となり、翌年に阪大に転出し、1989年言語文化部を定年退官した。小野堅(大R4)は大阪市大・院(経済)を卒え、1961年に、法橋和彦(大R4)は早大・院(文)を卒えその翌年に、武藤洋二(大R10)は長崎外国語短期大学から1965年に着任した。

更にその後1966年には岡本武(大R8)が京大・院(経済)から香川大学を経てメンバーに加わり、また68年にはモスクワ民族友好大学に学んだ田中泰子が就任した。そして69年には和歌山大学経済部から山口慶四郎(R21)が教授として加わり、ロシア語学科の経済担当教官は小野、岡本、そして山口と強力なスタッフとなった。国本が阪大へ去った後の歴史担当に同じく京大西洋史学科の文学修士で福井大学の西洋史担当教官荒武鉄郎が1971年に着任し、1970年に高橋、82年に丸山、87年に片岡、90年に山口が次々に定年退官した。70年には京大文学修士の石田修一が香川大学から入ってロシア語学を担当、そのご86年には上智大学、神戸市外大(院)から林田(旧姓小野)理恵、88年には東京外大(院)から神山孝夫をロシア語学担当に迎え、現在総勢9名の充実したスタッフを誇っている。

図書館長、教務部長、学生部長を歴任した岩崎に続き、定年退官した片岡は大学紛争時

に第二部主事をつとめ、さらに山口はこの時期の学生部長として大学紛争の解決に貢献し、また新学舎移転後には図書館長として地図コーナーを設立するなど活躍した。現職教官の中でも小野は第二部主事を務め、92年から岡本が主事を務めている。なお武藤と岡本はかつて学生課長を務めたことがある。92年には法橋が図書館長に選ばれた。

(岡本 武)

## I. ロシア人教師群像

### 〈1) 初代備外国人教師ネフスキイ〉

ロシア語学科最初のロシア人教師は、ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキイである。彼は、1892年2月18日(旧暦)にロシア帝国ヤロスラヴリ県ルィピンスクに生れた。同地のギムナジウムを卒業し、1909年ペテルブルク工科大学に入学したが、その翌年ペテルブルク大学東洋語学部中国・日本学科に転校、日本語を主専攻に、中国語を副専攻に選んだ。1914年同科を首席で卒業し、将来の教授候補者として研究室に残る。1915年、日本に官費留学生として派遣され、日本文学、民俗学を修め研究者として極めてめぐまれたコースを歩んでいた。

だが母国では1917年の2月革命で三百年にわたったロマノフ家による帝政が崩壊し、臨時政府と革命勢力であるソヴェトとの二重権力状態が続いたあと、10月革命でボルシェヴィキイが権力をにぎり、社会主義をめざす国家が生れた。

留学費用の送金がとだえたので、ネフスキイは、1917年から明露壹商会に勤めた。さいわい1919年、小樽高商のロシア語講師の職を得、1922年3月末まで奉職している。

1922年(大正11年)4月1日付で大阪外国語学校ロシア語講師に迎えられ、月手当375円を支給される。この年北海道の網元の娘萬谷イソと結婚した。1923年1月1日付で備外国人教師となって、経済的にも安定したネフスキイは、日本語、アイヌ語、民俗学、西夏語等、旺盛な調査研究活動を行う。

ネフスキイは自分で調査し原資料を集める行動的な開拓者型の研究者で、夏休みを、休息ではなく、調査旅行にあてた。着任の年には宮古島へ、1925年には西夏語資料入手のため北京へ、26年には再び宮古島へ、27年に曹族の言語研究のため台湾の山岳地帯へ、28年には三たび宮古島へ、というように精力的な研究活動を行っている。自分で採取入手した原資料から鋭い、独創的な論文が生れ、語彙集があまれ、翻訳がなされた。小樽高商時代から引き続いてアイヌ語・アイヌ民間伝承の研究を継続し、アイヌの少女を女中として大阪へ呼び、彼女がアイヌ語で語る民話を筆録し、ロシア語に訳している。

大阪外国語学校時代、30歳から37歳にかけて、ネフスキイは、アイヌと沖縄という日本の両端を追求することで日本語、日本文化の源をさぐろうとし、民俗学、言語学にもとづいて語源、民間伝承、風習等についても独自の鋭い見解を発表した。柳田国男、折口信夫等、日本を代表する学者と共同し、新興の民俗学に学際的な刺激を与えた。

レニングラードにはコズロフが中国で発見し、持ち帰った膨大な西夏語の資料がある。西夏語研究に狂人のようにのめりこんでいると妻にいわれるほどであったネフスキイにとって、レニングラードの西夏語資料は強烈な引力を持っていたと思われる。おそらく他の理由もあって、ネフスキイは、「一時的に」ソヴェトへ帰る決心をした。

1929年(昭和4年)8月31日付で彼は大阪外国語学校を退職した。この際、「在職中勤務勲励に付金八百五十円」が与えられた。月給425円であったから、2ヵ月分の給料を退職金としてもらったことになる。

ネフスキイが帰国した1929年は、ソヴェト史の一つの転換期である。この年に農民集団化がスターリンの指導の下に強行され、社会主義の経済的土台が急激に工業化の方向へ転換された。スターリン権力は、この強権から絶対的権力へ変わる。ネフスキイが帰国したのは、スターリン体制が最後の仕上げに入った時であった。ソヴェトで過ごしたネフスキイの人生最後の約10年間は、スターリン時代のなかでもっともおそろべきテロル(恐怖政治)の時期にあたる。レニングラードに帰るとネフスキイはただちに、レニングラード大学助教授に迎えられ、ソヴェト科学アカデミー付属東洋学研究所とエルミタージュで働くことになる。後に教授となり、1934年11月には、ソヴェトの学会における最高の地位である科学アカデミー正会員にネフスキイを選ぶよう求めた文書が東洋学の権威者たちによって提出された。ネフスキイは、いわば引っ張りだこで、研究と教育に体力のかぎりをつくした。彼は、西夏語の研究だけでも日に6時間から10時間をかけたという。

研究が総合と深化へむかって大きく飛躍しようとするとき、45歳のネフスキイは、1937年のある日、突然「日本のスパイ」として逮捕された。後からソヴェトにきた妻も逮捕され、夫妻は銃殺された。幼い娘エレナが孤児になった。

後の公式発表では、二人とも1945年に亡くなったとされているが、この死亡年が正しいとする根拠はない。日独防共協定の翌年に「日本のスパイ」として逮捕され、日本に14年間も生活していたネフスキイが、逮捕後8年間も生かされていたとは考えられない。ネフスキイは、「銃殺の時代」といわれ、エジョーフ指導下の政治警察が世界史上まれにみる人間狩りをしてきた時期の犠牲者である。当時の同様の例から判断すれば、彼は逮捕後1年以内に処刑された可能性が高い。

ネフスキイの学問的遺産のうち、西夏語に関するものは、『西夏文献学』(全12巻モスクワ、1960年)にまとめられ、死者に与えないという慣例をやぶって、この労作はレーニン賞をうけた。

アイヌ研究では、生前1935年にモスクワで『アイヌ民間伝承』が刊行され、1972年に復刻された。

大阪外語時代に三度も調査旅行をした宮古の言語学的民俗学的業績は、『宮古群島の民間伝承』(モスクワ、1976年)として公刊された。

台湾での実地調査の成果は、『曹族言語資料』と題して1935年に発表され、これも1981年

に復刻されている。

日本語で書かれた論考は、『月と不死』（平凡社、1971年）にまとめられている。

しかし、単行本未収録の論文、いまだ印刷されていない辞書の原稿、学問的な内容の書簡類等の刊行が待たれている。

ネフスキイは、夫人の琵琶の伴奏で義太夫を語り、浄瑠璃のレコードを聞きながらひげをそり、祝詞をロシア語に翻訳し、毛筆で日本語の手紙を書き、和服で座布団の上に正座して米飯を喫し、発音の特徴から日本人の出身地をあてることができ、顔を見なければ外国人とは思えない日本語を話したが、彼を日本語学者というのは誤りである。日本語は彼の研究領域の重要だが、しかし一分野にすぎず、彼の業績は、東北地方のオシラ様信仰から13世紀に滅亡した西夏国における天体崇拜にまでおよんでいる。

## 〈2〉プレトネル、ロマーエフ、レーベジェヴァ〉

ネフスキイより1年おくれてオレスト・ヴィクトロヴィチ・プレトネルが赴任した。彼は1892年7月26日生れで、ネフスキイと同年であり、大学での専攻も全く同じである。ペテルブルグ大学での卒業論文は、貝原益軒の『女大学』と『ドモストロイ』の比較研究である。大学院では古代日本語の音声学的研究を行った。

1917年、革命の年に外交官補として来日する。この頃ソヴェト日本学をになうことになるネフスキイ、コンラッド、アメリカ日本学の中心となるエリセエフなどが留学し、彼らは、柳田国男、折口信夫、金田一京助などと学問的に交流しつつ民俗学、日本文学を研鑽した。プレトネルも来日の翌年に、ネフスキイが発表機関にしていた『土俗と伝説』第3号に「Rusalka(自殺者の靈魂?)」という一文を発表している。

プレトネルは、1922年ロンドン大学へ留学し、ダニエル・ジョーンズ教授に音声学の指導をうけた。この時期の成果として、日本語の音楽アクセントについての論文(英文)がある。

1923年(大正12年)大阪外国語学校傭外国人教師となり、月手当375円支給される。1926年に『实用英仏独露語の発音』(同文館)を出版した。この本は、日本人の発音の特殊性を考慮して日本人のために4か国語の発音を概説したものである。プレトネルには『古代日本語の研究によせて』(仏文、1936年)などの言語学関係の業績だけでなく、紀貫之の『土佐日記』のロシア語訳もある。

プレトネルは、1939年3月31日付で本学を退職し、天理外国語学校に移る。日本が軍国主義国家になり、本人自身の表現によると、パーマネントを電髪と言い換える風潮にがまんできず、1941年4月、仏印総督府の招きでハノイ大学に就職し、日本語について講義する。1950年7月に再び来日し、翌4月1日に大阪外国語大学傭外国人教師となる。音声学、ロシア語発達史、フランス語発達史、ロシア語作文などの授業を担当し、1968年3月31日付で狭心症と老齢のため退官し、1970年に神戸で病没した。

1932年(昭和7年)にはアンドレイ・ルキッチ・ロマーエフが傭外国人教師になった。月俸

330円である。ロマーエフは、1882年生れで、神学校卒業後、1906年カザン大学法学部に入學し、1911年同大学を卒業後、バイカル州司法部に奉職する。以後、リチメ州、ハバロフスク、ウラジヴォストーク、北樺太アレクサンドロフスクで治安判事をつとめる。

アレクサンドロフスクで治安判事を勤めていた1920年秋に、北樺太の司法権は、日本派遣軍司令部に移り、これにともなって、ロマーエフは、日本派遣軍司法部顧問に任命された。同じ頃アレクサンドロフスク市議会により市長に選ばれる。そして、日本軍が撤退する前に北樺太をはなれて来日し、神戸におちついた。和歌山高商講師を勤めたあと、本学に就職した。

ロマーエフは、10月革命、国内戦、日本のシベリヤ出兵、北樺太占領とつづく歴史的事件に翻弄され、その結果として本学で教えることになったのである。この興味深い人物については資料がなく、その後半生は今のところ不明である。

イーヤ・エウゲーネヴナ・レーベジェヴァは、1913年11月9日チタに生れた。1932年に満州国立哈爾濱プーシキン高等女学校を卒業し、1934年、満州国立哈爾濱高等師範学校を卒業した。1936年、満州国立新京商業学校付設外国語学校のロシア語教師になる。

1946年、弟が留学生として東京大学で学んでいる日本へ移住し、翌年4月30日付で大阪外事専門学校外国人講師となり、月手当990円を支給される。同年11月1日付で備外国人教師に任命され、月手当が1800円となる。戦後多年にわたって本学のロシア語教育にたずさわった。引退後は経済的に恵まれず、晩年には教え子たちが「イーヤ先生を励ます会」を組織して、物心両面にわたって援助した。1991年10月11日に大阪で病死し、豊津のハリストス正教会での葬儀には教え子たちが多数参加した。

(武藤 洋二)

## II. ソヴェト(現独立国家共同体)との交換制度

本学が大学になってからも引き続き外国人教師は亡命ロシア人であった。専任、非常勤ともにロシア人教師が高齢化し、その上、旧世代のロシア人には、語彙が急速に変わっていく現代ロシア語を教育することができないため、ソヴェトからロシア語教育の専門家をまねく必要がでてきた。しかし、日ソ関係は正常化せず、ソヴェトへ行くにも共産圏渡航申請書が必要な時代であった。

数年の準備を経て、1968年レニングラード大学からガリーナ・ピャドゥソヴァ講師がはじめてソヴェト人客員教授として赴任した。ピャドゥソヴァは主としてフランスでロシア語を教え、カンボジアのシアヌーク殿下のロシア語教師をも勤めるなど外国人に対するロシア語教育に豊かな経験を持っていた。大学紛争が全国的に広がっている落ち着いた時期であったが、彼女は、精力的に教育にたずさわり、日本の生活も楽しんで、1年の任期をおえた。それ以後、任期1年、最近では2年で、ロシア語教育専門家が派遣され、学生は日本在住の外国人教師以外に在学中に二人または三人の違った独立国家共同体からの教師

に接することになっている。先生たちの本務校もさまざまで、レニングラード大学、キーエフ大学、ルムンバ大学、ウラル大学等々にわたっている。

この制度は、すでに20年をこえる歴史をもっているが、その間、数年のあいだソヴェトからの派遣がとだえたことがある。レニングラード大学東洋学部日本学科のボリス・レチキン助手が本学に勤務中の1973年、突然亡命を執行し、アメリカに渡ったためである。ソヴェト高等教育省は、一時的に本学への講師派遣を中止した。この事件を除いては、今日まで順調に派遣が続いている。

一方、ロシア語学科の教員がソヴェトで研究に従事し、ソヴェト人の日常生活にふれ、本学での教育・研究にその成果を反映させるという計画が実現することになり、1970年第1回目の派遣者として武藤洋二講師が訪ソすることになる。日本の国立大学の専任(国家公務員)がソヴェト政府から滞在費を支給されて長期間ソヴェトに居住する先例がないため、担当のお役人が許可していいものかどうかの判断がつかず、次官会議にかけられた。ここで許可が決まり、渡航関係の書類に次官会議決定という印が押されているので、共産圏渡航趣意書も免除され、ソヴェト行きが実現された。赴任先は、レニングラード大学東洋学部日本学科である。ここは、ネフスキイとプレトネルが学んだ所であり帝政ロシアおよびソヴェトにおける日本学のメッカで、言語、文学の分野で豊かな業績がある。

本学ロシア語学科は、レニングラード大学(現サンクト・ペテルブルグ大学)の日本語教育を助け、日本学者たちと学術交流を行い、同時にこの伝統ある大学で自らの研究にたずさわってきた。

本学ロシア語学科は、ソヴェトとの教育・学術の交流がきわめて困難な時代に、全国の大学にさきがけて相互派遣制度を発展させ、今日にいたっている。しかしながらソ連邦崩壊後、92年からロシア人教師は公募することにきりかえ、ながい歴史をもつレニングラード大学(現サンクト・ペテルブルク大学)との交流も一応うちきらざるをえなくなった。ロシア語学科ではこの交流の記念として同窓会からの資金援助をえて91年春には一カ月間、ダグマラ・ブガーエヴァ女史(文学博士)を大阪に招待した。

現在は一部、二部ともロシアの諸大学(主としてプーシキン大学、ウラル大学)に留学生枠を確保しており、毎年十数名の学生が現地でのロシア語・ロシア文学等の研修にはげんでいる。

(武藤 洋二)

### III. カリキュラムにみる外大ロシア語学科の歴史

#### <1> 外語・外専時代(大正11年(1922)～昭和23年(1948))>

この時期に関しては資料が乏しく、カリキュラムの具体的な内容を詳しく知ることは難しいが、概要は次のようである。

専修語学としての露語は1年生18時間、2年生18時間、3年生16時間(1時間=50分授

業)、兼修語学としての英語が1年生に3時間課せられている。他に、修身・国漢・地歴・法経・社会学・商業・商品などを履修することとなっている。14年に、露語(専修)が3年生では12時間になったが、新たに兼修語として英語の他に独語が4時間加えられている。大正15年には、露語を1年生、2年生には17時間、3年生11時間、兼修語学として英語を1年生に3時間、独語を3年生に4時間課している。昭和10年からは兼修語学の独語に変わって、蒙古語が3年次に4時間おかれている。

昭和19年12月20日に改正された「大阪外事専門学校規則」(昭和19年4月1日より適用)では、改正前「本校ハ国際的実務ニ従事スベキ者を養成スルヲ目的トシ主トシテ現代外国語ヲ教授スル所トス」とあったものを「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及其ノ言語ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ練成スルヲ以テ目的トス」と改訂(第1条)した。

授業は、道義、国語、教練、体練、外国語、外事、地政概説、経済、法律、産業技術、教育学(選択)。このうち外国語は1年次年間700時間、2年次665時間、3年次630時間。ロシア語科では、1年でロシア語595時間、2年で560時間、3年で455時間、英語を1年で105、2年で105、3年では第2兼修語を175時間履修することになっている。

第2次世界大戦後、再び「大阪外事専門学校規則」は改正され、(昭和21年4月1日から適用)、その第1条は「本校ハ専門学校令ニ依リ海外諸民族ノ言語及其ノ諸事情ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ、国家有用ノ人物ヲ育成スルヲ以テ目的トス」とうたっている。

ロシア科は専修外国語のロシア語を週18時間—1年、14時間—2年、14時間—3年に履修。兼修外国語(中国語、英語、フランス語、ドイツ語、イスパニア語)から2時間—2年、2時間—3年におさめることになっている。他の科目を併せて毎週計30時間の授業であった。この期の授業のいくつかに関して、卒業生の記述からひろってみる(『大阪外国語大学70年史資料集』参照)。

露語1回の久保徳人「……ネフスキイ先生の学者らしいユーモアなうちにも生徒を引っ張ってゆく厳格なロシア語の授業……」(同42P)。

露語部1回河野和一郎、松永教授について「……授業は上海から小説をとり寄せ、テキストに使った……」(同23P)。

プレトネル先生について「……プレトネル[原文のまま]は外交官出身でロシア語を教えるほか、全体として言語学を教えていた。……」(同23P)。

露語部3回大村平、ネフスキイ先生について「……驚いたのはネフスキイ先生が教室の教壇に上がるなりいきなりロシア語で『ストエタコイ』とやり始めたからだ。そして日本語は一言も話さない。後は黒板に話したことをフォネテックサインで説明しておられた。……」(同53P)。

岩崎兵一郎先生について「……岩崎兵一郎先生(外語ロシア語一回卒の先輩)は最も身近な先生で教材は露字新聞が主たるものだった……」(同53P)。

ロシア語科21回曾我哲郎、ロマーエフ先生について「……ロシア人らしからぬ規則正しい教え方が印象に残りました……」(同149P)

<2>外大初期(昭和24年(1949)~昭和39年(1964))>

学制改革により昭和24年から大阪外国語大学として出発する。ロシア語学科のカリキュラムは、専攻科目としてロシア語学・ロシア文化の講義及び演習を前期8単位、後期16単位、ロシア語実習を前期24単位、後期16単位、計64単位、それに卒業論文(後期)4単位となった。

授業内容をみると

講義：ロシア語音韻論(岩崎)、ロシア語形態論(岩崎)

実習：ロシア語形態論実習(岩崎)、時事文講読(丸山)、文学作品講読(片岡)、会話(レーベジェヴァ)

大学発足2年目の昭和25年度のロシア語学科の授業内容はつぎのようになった。

講義：ロシア語音韻論(岩崎)(1年生)、ロシア語形態論(一)(岩崎)(1年生)、同(二)(丸山)(2年生)、ロシア語措辞論(丸山)(2年生)

実習：(第1課程-1年生)——音韻論演習(岩崎)、形態論演習(岩崎)、作文(岩崎)、講読(片岡)、会話(レーベジェヴァ)

実習：(第2課程-2年生)——形態論(丸山)、措辞論演習(丸山)、講読(岩崎)、作文(岩崎)、講読(十時)、会話(レーベジェヴァ)

昭和25年度授業時間表によると、4時制限をとり、各教科1時限(100分)である。ロシア語学講座のスタッフは教授岩崎兵一郎、助教授丸山忠雄、講師十時惟親、講師片岡孝、外人教師イーヤ・レーベジェヴァ、以上5名であった。

昭和26年度には、前期を高槻学舎で、後期は大阪学舎(上八)で授業が行われることになった。前期の授業内容は基本的には前年度と同じであるが、後期(3年)では、講義に、ロシア文学史(岩崎)、ロシア作家研究(プレトネル)、実習に講読、作文(岩崎)、講読(ソビエト文学作品)(丸山)、講読(ロシア批評文学作品)(片岡)、会話(レーベジェヴァ)が開設されている。この年スタッフにオレスト・ド・プレトネル外人教師が加わった。

4学年が揃った昭和27年度の後期大阪学舎での授業は講義としてソビエト文学概説(丸山)(3、4年生)、ソビエト経済論(木原)(3、4年生)、ロシア文学史(1)(プレトネル)(3年生)、同(2)(プレトネル)(4年生)、実習に講読・作文(岩崎)、講読(片岡)、経済書講読(木原)、講読・会話(レーベジェヴァ)(以上3年生)、講読(岩崎)、講読(片岡)、経済書講読(木原)、作文(プレトネル)(以上4年生)が課せられた。スタッフに非常講師として京大から木原正雄が加わっている。

講義内容をみると、岩崎のロシア文化概説は、「欧亜両大陸にまたがる大国ロシアの自然、民族、歴史、政治、経済、芸術等の概要を紹介する」となっている。非常勤講師木原

のソビエト経済論は、「1. ソ同盟経済の史的発展、2. 社会主義経済の理論に分けて講義する」(テキスト、木原著『ソ同盟経済論』)。プレトネル教師のロシア文学史(1、2)は、革命前のロシア文学(二年連続講義)で、第1年にプーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、トウルゲーネフについて、第2年は、ドストエフスキイ、トルストイ、チェホフ、ゴーリキイについて、夫々伝記、時代と文学思潮、作品がとりあげられている。主要作品は「青銅の騎手」、「大尉の娘」、「死せる魂」、「悪魔」、「現代の英雄」、「父と子」、「カラマゾフの兄弟」、「罪と罰」、「アンナ・カレニナ」、「戦争と平和」、「コザック」、「六号室」、「わが生活」、「三人姉妹」、「フォマ・ゴルデーイエフ」、「どん底」である。

昭和28年度から非常勤講師として新たに、神戸市外大から松川秀郎(言語)、京都大から勝田吉太郎が加わった。松川は第1課程の講読と第2過程の作文を、勝田は後期のソビエト法論(講義)と法律書講読(実習)を担当した。勝田のソヴェト法論は、1.ソビエト憲法論、2.ソビエト民法論、3.社会主義社会と法の一般的諸問題についての講義であった。

昭和31年度から国本哲男が講師として、前期で、ロシア語音声、形態論(講義)、形態論実習、ロシア語措辞論(実習)を担当し、後期で、ロシア史論を講じている。「ロシア中央集権国家の成立」と「1497年の法典」研究が示された。

翌32年度のカリキュラムでは、前年急逝した岩崎の後任、助教授高橋輝正が各学年の実習を担当している。ロシア語時事文(2年生)、ロシア語商業文と外国貿易研究(4年生)などである。翌33年度には、前期でソビエト経済地理の講義を行い、リヤリコフ編『ソビエト経済地理』を中心にして、ソ連の経済一般を概観している。34年度には教授高橋が前期講義でソビエト憲法論を担当し、勝田は後期講義、ロシア政治思想史を担当し、「主として19世紀ロシアの政治思想の特徴を西欧精神史を背景として講義」している。

昭和35年度の後期講義では、国本担当のロシア経済史が登場する。36年度の同講義では、『プロダメート』の成立と発展、さらに国家独占資本主義への成長が講じられている。

昭和37年度から、非常勤講師として和歌山大学から山口慶四郎が出講し、後期講義、ソビエト経済論と同実習、講読(経済)を担当する。講義で山口は、「ソ連の現状分析を行うとともに、マルクス・レーニン主義経済学の理論の社会主義への適用」を論じている。

昭和38年度には、京都教育大学から村井研治が非常勤講師として出講し、後期講義、ロシア・インテリゲンチャ論を講じている。そこでは、「主として19世紀の文学を通して、ロシア・インテリゲンチャとその社会的背景とを広く考察」している。

昭和38年度には片岡が前期講義、ロシア音韻論を担当している。翌39年度には助教授片岡によるロシア語学概論(音声論・ロシア語史)が講ぜられている。

### <3>外大発展期(昭和40年(1965)以降)>

昭和40年度から外大に短期大学部を基礎にして、第二部(夜間部)が新設され、スタッフの陣容並びにカリキュラムも飛躍的に発展をみることになる。第一部ロシア語学科の学生

定員も40年度から50名となり2クラス編成となる。42年度からはロシア語学科のカリキュラムにも演習(ゼミナール)が設けられ、現在のカリキュラム体制の基礎がこの時点で出来る。開設科目の増加とともに非常勤講師による授業担当も徐々に増大していく。

昭和41年度、講師法橋和彦の後期講義、作家論、作品論を中心にした十九世紀ロシア文学史が開設された。そこでは「19世紀以前のロシア文学史の理解にもふれながら、とくにプーシキン、ゴーゴリ、ネクラソフ、ドストエフスキイ、トルストイ、チェホフ、ガルシン、マカレンコ、ゴロキイ、その他の主要作品を検討しつつ、ロシア批評(ベリンスキイ、チェルヌイシェーフスキイ、ドブロリューボフ、ピーサレフ、その他ボロフスキイ、ルナチャールスキイ、レーニン)との関係を美学的に研究」している。

昭和41年度には非常勤講師として京都大学から植野修司が後期講義、ロシア演劇史を、同じく、京大から山口巖が後期講義、ロシア語史を講じている。

カリキュラムを詳細にみていく余裕がないので以下、スタッフの異動との関連で主要な講義・演習について列挙して行く。

昭和42年	講師	岡本武	ソ連邦の政治と経済(後期講義)
	〃	同	過渡期におけるソ連社会の総合的研究(後期演習)
	〃	助教授 法橋	エルミーロフの「トルストイ論」および「トルストイと革命運動」(後期講義)
	〃	助教授 国本	デカブリストの乱(後期講義)
昭和43年	教授	片岡	ロシア文学理論概説(後期講義)
	〃	非常勤講師 村井	ロシア社会思想史(後期講義)
	〃	助教授 小野	ソ連における社会主義経済の発達(後期講義)
昭和44年	教授	山口	ロシア・ソビエト事情(1年講義)
	〃	教授 片岡	ロシア・ソビエト文学論II(後期演習)
	〃	助教授 法橋	ロシア文学特講(後期講義)
	〃	同	ロシア文学演習(後期演習)
	〃	講師 武藤洋二	ロシア・ソビエト文学論I(社会主義と文学)(後期講義)
	〃	教授 山口	ソビエト経済論(後期演習)
	〃	助教授 小野	ソビエト経済史研究(後期演習)
	〃	非常勤講師 菱山	語学特殊研究(文法)(後期講義)
	〃	同	〃 (文法)(後期演習)
昭和45年	非常勤講師	金子	法学(国家論)(後期講義)
	〃	講師 石田修一	基礎ロシア語文法(1年実習)
	〃	助手 田中泰子	〃(1年実習)
昭和46年	助教授	荒武鉄郎	文化史(ロシア・ソビエト史の諸問題)(後期演習)

” 同 ロシア史入門(前期講義)

昭和40年度以降概要以上のような陣容で各教官の専門分野の講義、演習、実習を担当してきた。因みに本学年度(平成3年)のスタッフ担当科目は以下のようになっている。

教授	石田修一	ロシア語史(後期講義)
	同	動詞研究(後期演習)
教授	法橋和彦	19世紀ロシア文学(後期講義)
	同	19世紀ロシア文学の諸問題(後期演習)
教授	武藤洋二	ロシア・ソビエト文学(後期演習)
	同	ロシア・ソビエト詩(後期実習)
教授	岡本武	ソビエト経済の歴史と理論(後期講義)
	同	ソ連ペレストロイカの分析(後期演習)
教授	小野堅	ソビエト経済史の諸問題(後期演習)
	同	ロシア・ソビエト政経入門(前期講義)
助教授	田中泰子	民話(後期演習)
	同	ロシア・ソビエト散文(Ⅰ)(後期実習)
	同	ロシア語(1年実習)
講師	林田理恵	ロシア語Ⅱ(文法・作文)(2年実習)
講師	神山孝夫	ロシア語学研究(後期演習)
	同	ロシア語Ⅱ(文法・作文)(2年実習)
	同	ロシア語Ⅰ(1年実習)

なお、91年度には教授荒武鉄郎がレニングラード(現在サンクト・ペテルブルク)大学へ出張中。90年度の担当科目は「ロシア文化史入門」(前期講義)、「ロシア・ソビエト史の諸問題」(後期演習)である。

70年代以降は学外から多くの非常勤講師をむかえ、名実ともに授業内容は多彩化、充実の一途をたどっている。

(小野 堅)

## 18. 日本語学科

### <設置目的>

日本語学科設置の目的は、①外国の言語とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって研究し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、日本語を通じて日本に関する理解を深める、②外国語大学としての特性を生かし、言語・文学・文化の比較対照などを通して、外国人に対する日本語教育(日本語・日本文化等)を施す専門家を養成

することを主眼とする、の二つである。この二つを目的に掲げて、1987年4月に発足した。

本学の18番目の語学科として誕生し、1991年3月に第一回の卒業生を送りだして、ようやく学科としての体制が完成したばかりである。

日本語学科の設置は、留学生別科が長年にわたって構想を全学に向けてアピールしてきたが、なかなか実現を見なかった。1977年に大学院に日本語学専攻が設置されたことで、その構想の一部が実現されたわけだが、その日本語学専攻の開設から遅れること10年、1987年に学部に学科が誕生し、学部・大学院が連結した研究・教育体制をもつにいたった。

#### 〈設置検討委員会〉

学科設置にあたっては、教授会委員会として日本語学科設置検討委員会が設けられた。学科新設のために全学的規模での委員会が設けられたのは、これがはじめてのことである。1986年2月から12月まで、10回にわたる委員会で、さまざまな観点からの意見を出し合い、教授会での議論も含めて精力的に取り組んだ甲斐あって、文部省・大蔵省の厳しい審査をパスして設置が決定された。1987年1月からは、いよいよ4月発足に向けて日本語学科設置準備委員会と委員会の名も決まり、全学挙げて準備作業にかかることになった。6講座(日本語学講座、日本語教育学講座、言語学講座、日本文化学講座、日本文学講座、比較語学・文化学講座)、学生定員40名、教官定員15名という本学始まって以来の大学科が誕生するわけである。しかも、この学科の学生は、1・2年のあいだ17語学科22言語のいずれかを履修することが義務づけられている。この履修言語を、副専攻語と名づけている。この制度により、日本語学科の学生は、各学科に何名かずつ分散して、当該学科の学生とおなじように、外国語の実習の単位をおさめなければならない。他学科教官の関心も当然、何名の学生が自分達の学科に配置されるのか、学習意欲をもった学生が自分達の学科に来るだろうか、という点に集まった。準備委員会で学科毎の受入れ数を何名にするかを話し合い、各学科と折衝し、最終案にこぎつけるまでには小泉準備委員会委員長の苦労は大変なものだったろうと思われる。学生が入学してくる前に、各学科での受入れ体制をつくっておくことがまず必要だったので、最終案が教授会で認められたときには、委員全員、ほっとしたものだが、このときには、学生の履修言語決定作業がどれほど大変なものかを、皆さほどよくわかっていただけてない。日本語学科の教官は後に、この作業のつらさを実感することになる。

#### 〈教官〉

教官定員15のうち、新規の定員増は10だけで、残る5は既存の定員表の中から振替えて充当することになっていたので、振替元の確定をするのにかなりの時間を要した。結局、留学生別科から3ポスト、共通関連科目の国語・国文学と言語学それぞれ1ポストの計5ポストの振替が確認され教育体制の器ができた。日本語学科最初の採用人事も学内公募で行

われ、吉田金彦教授(日本語学講座)、小泉保教授(言語学講座)が決定した。そして1987年4月、学科は2名の専任教官と41名の新生で発足した。1988年度には専任教官も5名になり、その後、年を追って教官数も増え、1991年度は総勢8名、1992年4月着任が決定している教官も含めると9名の学科にまで成長してきた。ただし、この間に3名の教授の退官・転出をみているので、学科としては5年ほどのあいだに11の採用人事を行ってきたことになる。定員数だけの教官がそろうまでには、まだしばらくの時間がかかりそうである。

#### 〈学生〉

1991年3月、第一期生26名が巣立っていった。入学したのは41名だが、4年のあいだには、副専攻語の単位が履修できなかったり、海外留学などのために休学したり、あるいは、別の道を求めて退学したりする学生があって、27名という数字になった。因みに、第二期生は45名が卒業した。

#### 〈副専攻言語〉

学生が履修する副専攻言語の決定は、入学式当日に行われる。17語学科が提供する22言語の中からどれか一つに決めるため、第三希望まで書かせた学生のアンケート用紙の回答と各学科への人数割当表をもとに、学科の教官全員で行うのだが、学生の希望する言語が英語と中国語に集中し、それをどう調整するかが頭のいたいところである。個人面談による教官の説得が成功するのに、午後9時までかかったこともある。外大での第一日目をこのようなかたちで終わる学生の気持ちは、あとで語ってくれたところでは「地獄の底に落ちたような暗澹たるもの」で、中には、親御さんから、「それは一体どこの国の言葉?」と言われたものもいるという。思うに、外大へ行けばだれもが自分の希望する外国語(ほとんどの場合それは英語と同義語)が学べるとの考えで入ってくる学生が多いため、それがかなえられないとなると、非常に落胆するのであろう。しかし、いったん外国語の実習のクラスに出て、その語学科の学生と一緒に学習をはじめると、だんだんその気持ちもわかっていき、熱心に勉学に励んでいるようである。「日本語学科の学生はよく勉強します」といろいろな学科の先生方から言われ安心することがしばしばである。こうして、学生は1・2年の間は週に5クラス外国語の実習の授業に出席するので、日本語学科の授業は、1年生が日本語学概論と日本文学概論の2クラス、2年生も、同じように、外国語の授業5クラスがあるので、日本語学科の専攻科目は言語学概論と日本語教育学概論の2クラスしかない。この授業の時間帯を決めるのもなかなか苦労が多い。この4つの授業を担当する教官は17語学科の時間割が確定してからしか自分の授業が何曜日の何時間目にするようになるかわからない。40人ほどの学生は、さまざまな語学科で実習の授業を受けているので、語学科の実習授業の空白時間帯にしか授業が組みこめないからである。幸い、教務係の尽力により、1年用と2年用に1つずつ、日本語学科指定時間帯ができたので、現在は4つの科目

のうち2つだけは、どの時間帯に決まるかわからない状況から解放されることになった。

日本語学科の学生の中には、2年生になっても、同級生の名前と顔が結びつかないというものもいるくらい、同級生同士が一緒になる機会が少ないので、学科としての一体感・連帯感が生まれてくるのかどうかという不安が当初からあった。この不安は全く解消されたわけではないが、毎年秋の間谷祭に日本語学科語劇を上演する中で、学生たちは何らかの学科の伝統をつくりだしていこうとしている。現在では、日本語教育をめざすもの、言語研究をめざすもの、文化研究をめざすものが、それぞれの関心に応じて、連帯感を、先輩・後輩の関係の中で、また同級生同士の中でもってきているようだ。

#### <日本語教員養成>

学科設置の主眼である日本語教員養成の成果は、残念ながら、今のところまだ表れていない。一期生の中には、日本語教員を目指しながらも、先の見通しの不透明さから、教員の道に進むことを躊躇し企業に就職していったものが何名かいる。二期生には教員になる道を歩み始めているものもいるので、近い将来、教壇に立つ卒業生が誕生するはずである。一期生、二期生とも、希望するものは、本学の留学生別科(現留学生日本語教育センター)の教官のご指導により、教壇実習を含む教育実習をすることができた。この実習を体験することで、日本語教員になる決意を新たにした学生も少なからずいる。

外国語学部の各語学科の外国語教育研究の成果を副専攻語学科というかたちで受けつぎ、また、留学生教育の長い経験をもつセンターに蓄積されている日本語教育研究の成果を受けつぎ、活かし、日本語学科教官の研究・教育の成果を吸収するというかたちで、外国語運用能力に長じ、かつすぐれた資質をもった日本語教員を多く送り出す。これが、外大日本語学科に寄せられた社会的要請にこたえることであり、学科設置の趣旨でもあるので、現在進行中の外大改革構想の中でも、このことを明確にしておく必要があることはいうまでもない。そのために、日本語学科の教官一同、努力を重ねているところである。

#### <教官往来> (着任順)

吉田 金彦(日本語学講座)	1987. 4 . 1	—————	1988. 3 . 31
		(本学国語国文学講座より)	(姫路独協大学へ)
小泉 保(言語学講座)	1987. 4 . 1	—————	1990. 3 . 31
		(本学言語学講座より)	(関西外国語大学へ)
小矢野哲夫(日本語学講座)	1988. 1 . 1		
		(本学留学生別科より)	
大倉美和子(日本語教育学講座)	1988. 1 . 1	—————	1992. 3 . 31
		(本学留学生別科より)	(京都工芸繊維大学へ)

- 吉田彌壽夫(日本語教育学講座) 1988. 5. 1 —————1989. 3. 31  
(本学留学生別科より) (桃山学院大学へ)
- 北 恭昭(日本語学講座) 1988.11. 1 (上越教育大学より)
- 三原 健一(比較語学・文化講座) 1989. 4. 1 (富山大学より)
- 林 博司(言語学講座) 1989.10. 1 (神戸大学より)
- 森栗 茂一(日本文化学講座) 1990. 5. 1 (甲子園大学より)
- 脇田 晴子(日本文化学講座) 1990. 5. 16(鳴門教育大学より)
- 平田 由美(日本文学講座) 1991. 4. 1 (京都大学より)
- 窪蘭 晴夫(言語学講座) 1992. 4. 1 (南山大学より)
- 鈴木 睦(日本語教育学講座) 1992. 4. 1 (神戸大学より)

<現教官紹介> (1)専攻分野 (2)主たる業績

主任 助教授 小矢野哲夫

(1)国語学(現代日本語文法、新語)

(2)①副詞の意味記述について — 方法と実際 —

(『日本語・日本文化』第11号、1982年、大阪外国語大学留学生別科)

②名詞と格

(『講座日本語と日本語教育(4)日本語の文法・文体(上)』1989年、明治書院)

③若いモンの言葉と「現代語」(『国語展望』84、1990年、尚学図書)

④けとばロジー(『小説city』1990年2月号から12月号まで、11回連載、廣濟堂出版)

教 授 北 恭昭

(1)日本語史

(2)①『倭玉篇 夢梅本 篇目次第 研究並びに総合索引』影印篇2、索引篇1  
1976年 勉誠社

②『倭玉篇 慶長十五年版 研究並びに索引』 1981年 勉誠社

③「日本語の辞書(1)」岩波講座『日本語(9)』1977年 岩波書店

④「易林と夢梅」『国語学(103集)』 1975年 国語学会

教 授 脇田 晴子

(1)日本中世史

(2)①『日本中世商業発達史の研究』御茶の水書店 1969年

②『日本中世都市論』東京大学出版会 1981年

③『室町時代』中央公論社 1985年

④『大系日本の歴史(7)戦国大名』小学館 1988年

⑤ 『日本中世女性史の研究 — 性別役割分担と母性・家政・情愛』  
東京大学出版会 1992年

⑥ 『母性を問う — 歴史的変遷』 (編著) 人文書院 1985年

助教授 大倉美和子

(1) 日本語教育学

(2) ① “Japanese for Today” (共著 1973年 学習研究社)

② “Curso Intensivo de Japonés para hispanohablantes”  
(共著 1982年 EI Colegio de México)

③ 「西語国民に対する教材開発の留意点」  
(『日本語・日本文化』 12号 1985年 大阪外国語大学留学生別科)

④ 「日本語とスペイン語の語彙の対照」  
(『講座日本語と日本語教育』 第7巻 1990年 明治書院)

助教授 三原 健一

(1) 理論言語学・対照言語学

(2) ① Variable Binding

*English Linguistics* Vol. 3 (1986年) 日本英語学会

② Argument Structure and Complex Predicate in Japanese  
『言語研究』 第92号 (1987年) 日本言語学会

③ 「X特定性」の概念と不定名詞句  
『言語研究』 第96号 (1989年) 日本言語学会

④ 「視点の原理」と従属節時制  
『日本語学』 3月号 (1991年) 明治書院

⑤ 『時制解釈と統語現象』 (1992年秋刊行) くろしお出版

助教授 林 博司

(1) 言語学

(2) ① 『言語学の潮流』 (共著、1985年、勁草書房)

② 『フランス語音韻論』 (共訳、1981年、研究社出版)

③ 「lui/yによる代名詞化について」 (『大阪外国語大学論集』 6号 1991年)

④ 「ルーマニア語二重代名詞について」 (『アジアの諸言語と一般言語学』  
三省堂、1990年)

⑤ 「遊離構文について」 (『ことばの饗宴』 くろしお出版 1990年)

助教授 森栗 茂一

(1) 日本文化学

(2) ① 『東京オリンピックと民俗学』 (単著、1992年、慶友社)

② 『河原町の民俗地理論』 (単著、1990年、弘文堂)

- ③「他界・鍛冶屋・村落」(共著、『他界観と村落』、1984年、雄山閣)
- ④「生業・社会伝承」(共著『大阪府民俗地図』1983年、大阪府教育委員会)
- ⑤「環東シナ海の形成と展開」  
(共著、『国際理解としての地理学』、1981年、大明堂)

助教授 平田 由美

- (1)日本文学
- (2)①明治中期読売新聞文芸関係記事目録  
(京都大学人文科学研究所調査報告書第三十六号1989年)
- ②近代文学における叙述の装置(『文学』52巻4号1984年)
- ③近代文学におけるロマネスクの系譜(『国語国文』54巻6号1985年)
- ④会話文と地の文(『人文学報』第59号1986年)

助教授 窪蘭 晴夫

- (1)言語学・音声学
- (2)①The Mora and Syllable Structure in Japanese  
*Language and Speech* 32(1989年)イギリス・キングストン出版
- ②Phonological Constraints on Blending in English  
*Yearbook of Morphology* 3 (1990年)オランダ・フォリス出版
- ③『英語の発音と英詩の韻律』(共著、1991年、英潮社)
- ④Modeling syntactic Effects on Downstep in Japanese  
*Papers in Laboratory Phonology II* (1992年)ケンブリッジ大学出版局
- ⑤*The Organization of Japanese Prosody* (1992年秋刊行、くろしお出版)

助教授 鈴木 睦

- (1)日本語教育学・日本語学
- (2)①アメリカ人学生の変化(1987年)AKR紀要創刊号  
Associated Kyoto Program Doshisha University
- ②日本語の依頼行為(1987年)AKR紀要創刊号  
Associated Kyoto Program Doshisha University
- ③聞き手の私的領域と丁寧表現(1989年)  
— 日本語の丁寧さは如何にして成り立つか —  
『日本語学』No1.8-2明治書院
- ④いわゆる女性語における女性像(1989年)  
『近代』67神戸大学近代発行会
- ⑤使役文の指導 — 初級から中級へ — (1991年)  
『日本語教育論集日本語教育の現場から』学研

### 〈学科研究誌〉

『日本語・日本文化研究』創刊号1991.11.1発行

1989・90年度には本学留学生別科との共同編集による『日本語・日本文化』第16・17号を発行したが、1991年度からは日本語学科独自の学科研究誌を発行することになった。「この紀要を公刊する目的は、わたくしたち教員の研究を世に問うことと、大学院外国語学研究所(修士課程)日本語学専攻在籍者の意欲的な論文を掲載して後進を育てることにある」(創刊のことばより)

(大倉 美和子)

## 19. 一般共通・教職・共通講座

### 〈一般教育の過去・現在・未来〉

大阪外国語学校創立から70年間、ずっとわかりにくいのが、現在「一般共通」と呼ばれているものの性格である。専門学校として、すべての生徒はどれかの「語部」に属している。職員のうち、例えば蒙古語の教授はもちろん蒙古語部に属する。しかし国語や地理の先生は、固有の生徒をもたず、すべての語部を通じて、国語や地理の授業を受け持つ。外国語学校という名の場で外国語以外の科目を教えるのは、学校の内外ともで肩身の狭い思いをした人もあろう。ただ語学以外の先生には、当時は貴重であった「文学士」という肩書きがつく人が多く、さらに非常勤には「文学博士」も何人かいる。

この事情は大学になっても変わらない。ただ大学設置基準によって、一般教育に関する授業科目が決められたため、「一般共通」科目の必要性が制度上認められた。第二次大戦後の日本の教育制度には、アメリカの政策による大変革をもたらされた。すなわち、日本の軍国主義を育成した要素のひとつは、専門を重視しすぎた偏狭な教育であるとし、大学ではまず一般教育を授け、その後で専門教育に入らせることによって、アメリカ型市民を養成する、という理想がかかげられた。その理想に反対する声はほとんどなかったように思われる。

ただしそれまでの日本の教育制度では、まず高等学校3年間で一般教育を行い、しかるのちに大学3年の専門教育を施す、というのが通念であった。旧制で合計6年分を新制大学4年でやることには無理があった。しかしアメリカ進駐軍の勧告と、日本側の理想主義的教育意欲の合体により、新しい大学が発足した。

理想はまもなくあやしくなった。その最大の原因は、日本の大学の数、したがって大学生の飛躍的な増加である。当然、大学間・学生間の格差が生じてきた。それとともに「大学とは何か」について、意見の一致がなくなった。時代の進展とともに古い大学観がなくなるのは当然として、それに代わる明確なものはない。

我々、大阪外国語大学、とくに一般共通の分野はどうか。基本的には、大正11年、開校時と同様である。例えば「言語学講座」というのがある。専任の担当教官はひとりである。固有の学生を持たないのは今までどおり。講座といっても、助教授も助手もない。といって他大学の教養部とも違い、1,2年生用の一般教養だけでなく、3,4年生のためのやや高度な専門教養の科目も受け持つ。講座あたりひとりであるから、一般共通の先生には「一国一城の主」という意識が強い。また多くは「大学出」で、語学科が主流である学内では、外様の存在である。学生についての責任が軽いため、学界なり社会での活動の余地が大である。

ただしここにも大学の一般的变化の影響、つまり定員の増加が見られ、1949年、新制大学発足時、10人ほどであったのが、92年には約3倍になっている。量的増加は当然質的な変動をもたらす。まさに大学改革の一環として一般教育の体制を考え直す時期が来ているといえる。

現在、本学の一般教育は、歴史的な転換点を迎えている。1987年に文部省の諮問機関として設置された大学審議会は、次々と改革案を打ち出し、1989年7月に同審議会の大学教育部会は、「一般教育と専門教育の区別の廃止」を、その冒頭にうたった最終報告書を提出した。これをうけて大学審議会が、1991年2月に最終答申を文部大臣に提出した結果、同年7月に大学設置基準の大綱化を含む省令改定が行われた。こうした大学審議会の審議の概要や答申の方向は、早くから知られており、これに対処を迫られるかたちで、本学でも大学改革案が模索されてきたのである。

そもそも新制大学に一般教育が導入されたのは、1946年の、第一次アメリカ教育使節団の勧告に由来する。日本の高等教育の専門教育偏重を批判し、アメリカの一般教育の理念を反映して、人文、社会、自然科学の3つの領域から構成される学問を通じて、人間的価値とのかかわりを重視する民主的社会の市民を育成すべしとするものであった。

アメリカのいわゆる一流大学は、4年間の学部教育を、一般教養教育＝リベラル・エデュケーションに費やし、学生の学問への関心を広げ、批判的に問題を迫及する能力を培い、自国の文化や異文化についての知識を増進させ、科学的真理探究の方法を学ばせることを目指している。しかし日本の大学は、これを1年ないし2年の教養課程を置くことで代替させようとした。4年間の学部教育における一般教養教育を、大学における前期教育として、一般教育・教養を課したのである。その結果、一般教養教育は、専門教育の予備段階、専門教育に入るまでの待合室のごとく扱われることになったのだといえよう。

大学設置基準で一般教育に関する授業科目は、人文、社会、自然の3分野から均等に合計36単位修得することを卒業の要件とすることとされた。1956年にはこれが省令化されたため、その弾力的運用に困難が生じた反面、大学設置基準に守られるかたちで、戦後40年にもわたって一般教育が温存される結果となったとも言われる。

さて本学では、概算要求の日程に迫られるかたちで、1990年から本格的に大学改革が教

授会で審議されている。様々な矛盾や異論、不満を内包しながらも、1991年11月には構想案の骨子が確認され、国際文化学科と地域文化学科の、二学科制がとられることになった。

一般教育についていえば、卒業要件としての一般教育の、3分野36単位という数値が取り払われ、個々の大学がそれぞれの理念にもとづき、多様な形態で教育を実施することを目的として、大学毎に自由なカリキュラムの編成が可能になり、卒業単位124単位という規定だけが拘束することになった。本学では旧来の一般教育科目は、総合科目、自由科目の名目で残るが、必修を課されるのは体育実技だけということになる。

そして一般教育担当教官は、概ね国際文化学科に所属することが予定されている。国際文化学科には、比較文化、国際関係、環境・開発など、いくつかの専攻コースが設定されようとしている。一般教育担当教官は、総合科目を担当するとともに、個々の専攻コースにおいて、卒論を含めた後期課程の指導に従事することになる。

1993年度にはともかく新たな制度下で学生募集を開始するというタイムテーブルである。「一般教育と専門教育の区別の廃止」という名分は、一応達成されるかに見える。しかしはたしてこれで本当に本学はよい方に向かって改革されるのだろうか。確かなことは、大阪外大百年史が編纂される時、一般教育及び一般教育担当教官に関するこの章は存在しないということである。そうした意味で、外大の一般教育は、今歴史的な転換点に立っているのである。その点からすれば、ここで廃止、編成がえを目前にした一般教育の現状と問題点を、70年史に記録しておくことは、充分意味のあることであろう。

現在一般教育科目として、外大でも大学設置基準に忠実に、人文、社会、自然の3分野にわたる科目が設定され、各分野均等に12単位ずつ、計36単位が最低修得単位として学生に課されている。

学生は、主として1・2年生のうちに、一般教育を履修する。大抵の人文系の学生がそうであるように、自然科学が苦手でも、なにがなんでも卒業するために36単位が必要なのだ。様々な資格取得に必要なだったり、学生の個々の事情もあって、はなはだしい場合は300人、400人という膨大な数の学生が一教室に押し寄せることになる。それが学問的情熱に裏付けられてのものなら、教師はうれしい悲鳴をあげるところだが、ただひたすら単位を欲しいだけに、履修届けを出して来るのだ。目的は単位であって、授業ではない場合が多いから、出席を取りさえしなければ、やがて学生は潮の引くごとく減ってくれる。ただこの方法を取ると、学年末に泣くことになる。試験場には再びものすごい数の学生が押し寄せ、見たこともない学生の、出来の悪い答案を、大量に採点させられることになるからだ。

そこで教師と学生のかけひきが始まる。ノートの貸し借りという醇風美俗は、現代っ子の中にも生きているから、出席もしなかった学生の成績が良くて、間違っただけで単位を与えたりしかねない。学生が減った時期を見計らって、出席を取ってみたり、忘れたところに小さな試験をして、授業出席者だけの新たなメンバーシップを確定しておく必要がある。

しかし学生の方も情報収集がいき届いていて、新学年に各語科で発行される新入生歓迎

パンフレットには、一般教育の教官紹介が必ずある。ここには学生側の目から見た教官の人物像や授業の寸評が、思わずうなってしまうほどの的確な言葉で表現してあったりして、少なくとも本章で後掲する教官紹介より、よほど面白いことは確かである。

ただこれが何のために作成されるかといえば、負担にならない、単位を取りやすい一般教育の授業を先輩たちから伝授しようというのが真相である。

某語科の新歓パンフの巻頭言にいわく、

大学生活になれてきたころ、生活に余裕が出てくるかどうかは、一般教養の取り方にかかっているということを覚えておいてください。出席を毎回取るような授業、朝1講目の授業などは結構キツイです。ですからまず自分が興味ある授業、そして時間割を無理なく作れるような授業、テストやレポートがあんまりしんどくない授業など、ポイントをいくつかおさえながらうまく取って下さい。

と、いたれりつくせりで、テストとレポートの別や回数、出席を取る率、おまけに受講のおすすめ度までが、5段階評価で表示してある。

かくてその名誉ある高得点の評価を受けた授業には、楽をしたい学生が殺到し、なるべく教室のうしろの席に陣取って、次の専攻語学の予習の為に辞書を引くか、隣の学生とのおしゃべりに余念がないという事態に陥るのである。

どうしてこういうことになるのだろうか。一般教育担当教官たちは、口をそろえて、大学の語学偏重の教育体制に問題があると言う。一般教育を履修する1・2年のうちに週5コマ、語科によると6コマの語学実習が必修として課されている。語学の修得は漫然と出席していればよいというものではなく、予習が不可欠で、毎日辞書を引く作業に追まられることになる。毎週のように試験を行う学科もある。これを落とせば、進級もおぼつかない。とても悠長に一般教育の授業につきあっている暇はないわけである。

一般教育の担当教官たちは、こうした彼らを傍目で見ながら、大学教育はこれでいいのだろうか、と、一様に思っている。学問というのは、辞書を引きながら究められるものではないだろう。少なくとも思索し、学問、研究の何たるかを考えるだけの時間の余裕が必要である。問題の設定、仮説の呈示、データの収集、論理の組み立て、そして結論に導くという知的営為の能力の育成は、それが一般教育の授業で可能であるとは決していわないが、一年生の初めからやみくもに学生を追い回し、語学の訓練をすることで疎外している側面もあるのではないか。外大の学生は、語学はできるし、よく勉強するので知識は豊富だが、思考力に欠け、したがって論文作成の能力に欠けるという批判は、他大学の先生からよく聞かされることである。一般教育の授業では、担当する側もなかば諦めぎみで、学生のじゃまにならぬよう、たんとんと授業をこなすほかない。

しかし人文科学と社会科学系の教官には、関連科目という形で、学生に諸分野の学問の原理や、研究の方法論を呈示する道が開かれている。これにゼミ形式で臨み、学生にも主体的に参加させるかたちを取っている教官も多い。また一般教育科目を関連科目の準備段

階、基礎訓練として配当し、両者あいまって極めて高度な学習の段階に到達することも可能である。

関連科目は、語学における専攻科目とセットの、いわば車の両輪として位置付けられており、専攻科目を発展的に生かす、あるいはそれを支える土台として、学問の系統的な見方、考え方を養い、総合的な視野に立つべく配置されたものである。そのレベルも、他大学における学部の専門科目に匹敵する内容のものを提供していると我々は自負している。また学生の側も参加に意欲的で、卒論までも関連科目の教官の指導で完成させる者も少なくない。

しかしこのように選択した関連科目を有機的に専攻科目と結び付け、大きな果実とした学生数は、全体からすればそう多いとはいえない。関連科目が専攻科目と両輪の車として轍を刻みうるケースは、極めて限定的だといえるであろう。

一方、関連科目にのめりこむあまりか、専攻語学をおろそかにし、何年たっても進級さえできず、やがて退学を余儀なくさせられた学生も少なからず存在する。高校生の段階で志望決定を余儀なくされた専攻語であり、おもわくはずれという事態もあって、勉学意欲が持続するとは限らない。偏差値との関係で、次善の語科を選択せざるをえなかった場合も少なからずあろう。こうした学生たちが、どうしても専攻語学に没入できず、関連科目に逃避してくるのかもしれないが、どうにかしてやりたくても、語科の壁の厚さになすすべもない。外大はこうした学生たちの存在を許さない体制になっているのである。これが普通の学部なら、なんとか4回生まで進級でき、語学ができなくても立派な卒論を仕上げることはできる。中退後の彼らの消息を、風のたよりに耳にするたびに、関連科目の成績が良かっただけに、「外大に来ていなければ……」と、慨嘆せざるをえないのである。

こうした状況がある一方で、語学の教官の立場からは、「まだまだ語学の時間が足りない、もっと語学を勉強させなければ」と言う声を聞く。またここは外国語大学であるという本分を忘れてはならないという声も強い。たしかに語学をマスターしなければなにも始まらない。だが語学の修得は、あくまでも手段であって、目的であってはならないのではないか。もう少し語学の履修に余裕を持たせる方法はないのだろうか。外大は“OSAKA UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES”であって“OSAKA UNIVERSITY OF FOREIGN LANGUAGES”ではないのである。

外大改革は、「一般教育と専門科目の区別の廃止」という、改正された大学設置基準の大命題に答えるかたちで、実現されようとしている。一般教育担当教官は、専攻科目を担当し、卒論を指導する学生を持つことになる。

ただ、国際文化学科に進学する学生でも、1・2年次に28単位の語学実習、3・4年次にも8単位以上の語学講習が課されることになっている。語学を修得することで、その言語を用いる地域の文化に親しみ、地域の眼を培うことを意図するゆえである。地域を見るミクロな眼と、世界全体を考えるマクロな眼の双方で、複眼的に国際関係を考えたり、地域

の眼からさらに他の地域を見ることで、等身大感覚の比較文化の視座を確立できようとの  
もくろみもあろう。また、地域の眼で再び日本を見直すことにより、日本文化の相対化も  
可能になる。こうした意図のゆえに配当される語学の単位なののだが、1・2年次の履修単位  
は、今とまったく変わらない。この単位履修が、現状のまま課されるとすると、学年進行  
制によって、専攻コースに進学もできない学生が多出する事態が懸念されるといえよう。  
また進学後も、十分な専門教育が、後半の2年間だけではたして可能なのか、危惧される  
ところである。

### 〈専門学校時代〉

専門学校時代の一般教育の概要を把握するために、創立当時の全科目の授業の内容を紹介  
する。修身が先頭にあり、教官に軍籍をもつ人がいるのが時代を示す。教官組織や授業  
科目は、創立時以来、専門学校期を通じて基本的に同様である。この伝統は、敗戦による  
軍事色の払拭を除いて、大学期にまで続いている。

大正11(1922)年11月11日、開校記念一覧冊子によると、学則第2章に規定された学科と  
程度は次のとおり。数字は1週間の時間数。

学年 科目	I	II	III
修 身	実践道徳 (1)	国民道徳 (1)	社会倫理 (1)
外 国 語	(21)	(18)	(16)
国 語	講読・作文・習字 (2)	講読・作文・習字 (2)	講読・作文 (2)
歴 史		東洋語部は東洋近世史 (3) 西洋語部は西洋近世史 (3)	
地 理	世界経済地理・内外植民地事情 (3)		
地 理 実 習	製図・図表製作・地理学測定等 1回		
社 会 学			社会学概論 (2)
教 育 学			教育学概論 (2)
言 語 学	声学学・言語学概論 (2)		
法律・経済		経済学(2)・商法(2)	国際法(2)・植民政策(2)
商 業	簿 記 (2)	商業通論 (2)	商業通論 (3)
商 業 実 習		タイプライティング・珠算 商業作文・実地見学等1回	
商 品			商品通論 (2)
商 品 実 習			商品鑑定・商品分布図・実地見学等 1回
体 操	体操・教練・競技 剣道・柔道1回 (2)	同 左	同 左

開校時の一般教育担当者：

教 授 国語・言語学－亀田次郎 修身－生田鹿之丞 地理－稲村純一 商業－  
伊藤資生

助 教 授 体操－十亀泰吉(陸軍歩兵軍曹)

講師(就職順) 漢文－浦川源吾 社会衛生－長谷川卯三郎 剣道－大野熊雄 体  
操－高島正俊(陸軍歩兵少佐) 言語学－新村 出

嘱託教師 柔道－浜野正平

文学士＝亀田次郎(1876-1944)については、東条操『国語学新講』筑摩書房、1965年に、何箇所か言及が見られる。その初版序(1937年)に「明治以後の国語学については、すでに先輩亀田次郎学士の『国語学概論』の名著があるが、明治の末年の刊行で、大正以後の記載を欠き……」とある。本文では、亀田著書を詳しく紹介し「明治42年の亀田次郎氏の『国語学概論』は最初の概論書であって、すでに系統論・文法論・声音論・文字論・品詞論・文章論の各部門を収めてある」という。また動詞の活用を論じた所では「亀田氏は四段活用をもって動詞活用の古形なりと断じた」という。また日本語とウラル・アルタイ語との類似を述べた所で、藤岡勝二の論文(1908年)の要点を紹介した後で「亀田次郎氏はこのほかに、関係代名詞の存在しないことを数えている」とある。

『外大70年史資料集』によれば、亀田の国語の授業は生徒に人気があったようで、1,2期生の数人が追憶を記している。それによると、近松の世話物浄瑠璃「心中天の網島」をテキストにしたようである。天満の紙屋治兵衛と曾根崎新地の小春の情死を題材とした作品で、事件の現場に近い上八の学校でこの人情悲劇を読んだことは、教師・生徒双方に深い感銘を残したであろう。

言語学の非常勤講師は新村出(1876-1967)、肩書は京都帝国大学教授(文学部言語学)文学士、文学博士。『辞苑』博文館、1935年の編者である。この題は抱朴子の著者として名高い中国、晋、葛洪の「字苑」から取ったという。この発行後すぐ改訂の作業にかかり、20年を経て増補版が『広辞苑』岩波書店、1955年として世に出て、今に至っている。1939年、日本言語学会を創設、会長となり、また学士院会員となった。

外語1期生によれば「当時、京大と連携があったようで、非常勤講師として新村出、成瀬無極[清、ドイツ文学]両先生の特別講義が何回かあった」という。

新村の後、京大言語学からの来講者として泉井久之助がいる。14期生の思い出によれば「泉井先生が日本の言語学の権威であることは聞き知っていた。講義は大講堂で行われたので、聞き取りにくく、感動の湧くものではなかった。しかし或る日、最前列に席を取って、講義内容を一言隻句ももらさず速記したことがある。家に帰って速記録を読み返してうなった。言語学の広さ、深さ、必要性をしみじみと感じたものである。」

なお京大言語学での泉井の後継者が、本学出身の西田龍雄である。

開校時の非常勤講師として、一般科目でないが、蒙古語を担当したのが、当時、京都帝国大学助教授であった羽田亨(1882-1955)である。羽田は1913-24年、新村の下で言語学講座に属し、ウラル・アルタイ言語学を講じていた。24年、教授昇任とともに東洋史講座に転じ、のち主任教授、京大総長(在任1938-45)、東方文化研究所長、貴族院議員、東方学会会長となり、我が国東洋史学界の大御所的存在であった。羽田によって外語と京大東洋史の縁が生まれ、今に至っている。亨の長男=明はやはり京大教授(西南アジア史講座)、明の長男=亨一は本学ペルシア語学科の出身、東京外大AA研助教授、3代続くアジア研究一家である。

昭和3(1928)年度、社会学担当の非常勤講師として、本田喜代治の名がある。肩書は大坂高等学校教授、文学士である。本田『社会思想史』培風館、1951年によれば、本田は東大文学部卒業、大正12(1923)年、大高教授、昭和20(1945)年、立教大学教授、25(50)年、名古屋大学教授となった。本田『近代フランス社会思想の成立』日本評論社、1949年の“あとがき”には、次のようにいう。「わたくしは、過去10年以上のあいだ、若干の翻訳は別として、じぶんのは殆んど書いていない。政府当局の監視がそれを許さなかったのだ。外国古典の翻訳ですら、わたくしの場合は検閲当局の目を気にしながらやらなければならなかった。……満州事変はすでに1931年に勃発している。日本ファシズムの圧迫は日々ますます強く、自由に物を言うなどということは思いもよらなかった。正しい真理を發表することは、それだけで一種の闘争だったのである。わたくしなどは、別に“闘士”でも、“革命家”でもなく、ただの一貧書生にすぎなかったのだが、それでも研究したものを正直に發表するだけのことに、かなりの危険を覚悟し、家族やじぶんの日常生活さえ非常におびやかされたのだった」。

本田は戦時中には、デカルト、ルソー、百科全書派などを研究していたようで、その成果が49年の著書である。

先に引いた70年史資料に、昭和16(1941)年12月8日朝の出来事をいきいきと伝える記事がある。筆者は馬來語部18回生である。

私は昭和16年12月卒業、卒業の直前に12月8日を迎えた。その朝のことが強く印象に残っている。いつもは大学ノートを開いて棒読みする老講師のどこにあのようなエネルギーが潜んでいたのかと、ふしぎに思った。「日米開戦」「米太平洋艦隊全滅」「帝国海軍真珠湾攻撃」12月8日の朝、3階大教室はこのニュースに沸きかえていた。8時から歴史の講義が始まるはずである。やがて教授が見えて教壇に上がる。いつもと違いかばんを持っていない。顔は青ざめ、ふるえているように見える教授を、私たちは一斉に見つめる。

「日本はすぐ負ける……」教授の声が教室に響きわたると、100人ほどいた私たち学生は総立ちになった。「国賊」「憲兵隊へ連れて行け」「ブタ箱に入れよ」……数人の学生が教壇にかけ上がり、教授の胸倉をつかみ、引きずりおろそうとした。「まず私の講

義を終わりまで聞け、憲兵隊へはその後でもよかろう」。やがて私たちが席につき講義が始まる。いつもと違い、ノートや原稿なしである。「アメリカの戦力は、今は日本の2倍である。しかしアメリカの生産力は日本よりずっと大きく、すぐに日本の20倍の戦力をもつことになる。……歴史は科学である。科学の法則は変えられない。日本はやがて敗退する。……諸君は死んではならない。生きて敗戦後の日本のために働かねばならない」

教授の目は涙でうるみ、講義は終わった。私たちは言葉も無く、教授を見送った。当時「日本は敗れる」と言ったことが憲兵隊に知れると、捕まって生きては帰れなかった。教授は生命を賭けて私たちに学問的真理を教えてくれたのである。すでにその年の9月からマレー語部の級友の半数が、軍の命令によりどこかで働いていて、姿はなく、私たち残りの者も12月に繰り上げ卒業で、軍に入隊することになっていた。その直前の講義であったので、大きな衝撃を受けた。

戦後、もとの級友の集まりでこの事が話題になった。教授の胸倉をつかんだのはオレだという者がいた。彼によれば、その人は大阪高等学校教授A氏〔氏名略〕だという。だから外語では教授ではなく、講師であったが、ここではあえて教授と書いた。

私の記憶ではこの方はB氏だと思う。――以上、卒業生の思い出。

外語一覧によれば、昭和15年ごろから20年ごろまで、外語で歴史を担当したのは、大阪高等学校教授＝市村其三郎である。Aとは名が違うが、職名が一致する。Bは別の科目担当の専任教授である。

次に『きんきら50年』から、仏語部21回生による「学窓の思い出」を引く。

学徒出陣、明日は我が身、といった私たちにとって、学園は心のオアシスであった。今日はA君、明日はB君・C君と、出征してゆくため、空席が目立ち始めた昭和17-8年ごろの教室では、一日一日が先生がたにとっては、文字どおりアルフォンス・ドーデ「最後の授業」の連続であったのではなかろうか。そのためか、コツコツと靴音高く教室の中を回りながら講義される先生がたの顔や肩に、私は溢れる寂しさを感じた。

恩師としては、言葉を愛することで有名であった高畑彦次郎講師の顔がまず浮かぶ。「言語学ハ言語史学デアル」として、科学的に言語を考察された先生の言語学概論は、いま読み返しても興味深い。戦時中、私が整備将校としてカンボジアのプノンペン飛行場にいたころ、南十字星の夜空の下、少年航空兵を集めて、高畑先生の授業の受け売りをしたものだった。明日は戦場へ飛び立つ彼らにとって、私の話は、日本の言葉の美しさ、言葉のもつ歴史性などを知る機会であったのであろう。ガソリン・ランプをともして、夜更けまで聞き入る童顔の瞳・瞳がキラキラと輝いていたことを、今でもはっきり思い出すことができる。

いままたの恩師の顔が次々と浮かぶ。経済学概論を講義された中谷實講師(京大助教授)、憲法・民法を厳しく且つ格調高くレクチャーされた白井正教授、中世史・近世史の

中で人間性のルネサンスを強調された森澤三郎教授(英語部)、人文地理学の一部門をなす経済地理学につき、東南アジアの住民がいかに関環境に順応して生活しているかを、力をこめて講義された稲村純一教授、温顔の風貌で春風のようにやさしく修身を教えてくれた平沢俊雄教授、ユーモラスな授業で定評のあった吉田孝次郎教授の平家物語、商業簿記の相沢正美教授など……

言語とは自分の思想を他人に伝えるための手段であると言われるが、外語生は、その前に、言語そのものの美しさをもっともよく知っていると、私は思う。——以上、思い出。

大正11年創立以来、一般教育は次第に充実しつつ昭和に入る。修身や教練は必須科目で、その担当者は欠けることなく続いている。昭和6年から、所謂「15年戦争」時代にはいる。とくに10年代後半は、戦局きびしく、生徒が戦地に赴くのに応じて、教官名簿にも「応召中」の語が目立つようになる。大戦末期の本校の一般教育の科目・教官のあらましを理解するため、昭和15、17、20年度の科目と担当者名を掲げる。次第に人数が減っていく教室の寂しさが、ここからもうかがえる。困難な条件の中で、文字通り必死になって授業に精出した教官・生徒に敬意を表したい。そして敗戦。授業科目の戦時色は払拭され、物不足ではあるが、明るい未来を夢見た時期、昭和23年、つまり新制大学直前のカリキュラムを載せることにする。

#### 大阪外国語学校一覧による一般教育担当教官氏名

昭和15年度(「応召中」を除く、以下同じ)

校長：葉山萬次郎

教授：地理—稲村純一、経済学・植民政策—小西茂、法律—白井正、  
修身・哲学—平沢俊雄(兼、生徒主事)、商業・会計学—相沢正美、  
国語・漢文—吉田孝次郎

配属将校：今田俊夫(陸軍大佐)

助教授：商業—東田延尾

嘱託講師：修身・教育学—金本正二、歴史—市村其三郎、国語・漢文—長谷川信好、  
言語学—高畑彦次郎、体操—山中安三、体操—荒井緑三、

武道教師：柔道—浅井貞吾、剣道—土田博吉

授業嘱託：珠算—辻覚次郎

17年度

校長：横山俊平

教授：地理—稲村、法律—白井(兼、生徒主事)、商業・会計学—相澤、  
国語・漢文—吉田、商業—東田、国語・漢文—長谷川

配属将校：今田

嘱託講師：体操－長谷川長三郎、歴史－市村、言語学－高畑、体操－峯田清太郎、  
 経済学－中谷實、体操－中野作藏、

武道教師：柔道－浅井、剣道－重岡昇

20年度(「応召中」多し)大阪外事専門学校

校長：尾崎卓郎

教授：道義・歴史－西川源一、国語－吉田、国語－長谷川、地理－稲村、  
 経済実務－東田(兼、生徒主事)、法律－白井

助教授：拓殖－塚田文次郎

嘱託講師：教練－長谷川、体練－浅井、体練－長谷川壽、歴史－市村、経済学－中  
 谷、産業技術－古賀正晴、教育学－小川正通

23年度

校長：平澤俊雄

倫理学・思想史・哲学概論	専任講師	大井 慶雄
国語	教授	吉田孝次郎
国語・国文学概論	同	長谷川信好
歴史	同	外山 軍治
地理	専任講師	稲村 純一
法律・民商法・国際法	教授	西澤 修
経済・経済政策	専任講師	澤村 榮治
言語学・民俗学	講師	石濱純太郎
言語学	教授	川崎 直一(ビルマ語学科長と兼)
同	同	庭田 四郎(英語学科と兼)
論理学・心理学	講師	西村 嘉彦
政治学	同	山本正太郎
教育学	専任講師	小田 武
統計学	講師	高木 秀玄
商業学	同	吉川 貫一

専門学校期一般共通専任教官在職年度(西暦による)

国語	亀田 次郎	1922-23	修身	生田鹿之丞	1922-23
地理	稲村 純一	1922-48	商業	伊藤 資生	1922-24
地理	山上萬次郎	1923-24	国語・漢文	渡辺 良法	1923-30
経済	小西 茂	1923-40	修身・教育・歴史	金本 正二	1924-29
修身・社会学・国語	佐伯 正	1924-39			
体操	大越 喜重	1924-25	商業	相澤 正美	1927-44

修身 志水 義暲 1927-34 体操 森脇 正夫 1931-41  
 国語 北西鶴太郎 1932-33 法律 白井 正 1936-46  
 修身・社会学 平澤 俊雄 1935-41 大学へ  
 国語・漢文 吉田孝次郎 1935-48 大学へ  
 国語・漢文 長谷川信好 1942-48 大学へ  
 商業 東田 延尾 1933-46

#### 〈大学時代〉

専門学校が単独で大学に昇格した時の喜びや不安は、通史編に叙述されている。一般教育の外山軍治、語学科の澤英三両教授の回想は、それを生き生きと物語る。大学としての体裁を作り、それにふさわしい内容を整えるのに、大変な苦労があったであろう。ともかく日本で最も規模の小さい国立大学のひとつとして、大阪外国語大学が誕生した。教官・学生のこまやかな交流が行われるコミュニティができたわけである。

新制大学初期、関西の国立大学の中で、文科系に古い伝統をもつのは、京大だけであった。阪大では、1948年に法文学部ができ、翌年、文学部が独立したばかりで、人材を京都関係に求めたものも自然の成り行きである。その底には、創立時の非常勤講師であった新村出、羽田亨といった東大出身京大教授と本学との人的つながりが想像される。

新制初期の一般教養科目と、専門教育科目(関連科目)の、科目名と担当者名を以下に挙げる。

新制大学 昭和24(1949)年6月、大学便覧による開講科目

一般教養科目(前期=1,2年次、全学科共通)

A列人文科学 B列社会科学 C列自然科学

専門教養科目(後期=3,4年次、全学科共通)

第一類 第二外国語 言語学概論 文化史

第二類 言語学特殊講義および演習その他

体育科目(前期)

課程履修の方法 [一般科目に関する要点のみ]

- 1 各学科とも、全課程を前期2年と後期2年に分ける。前期を修了しないと、後期に入れない。
- 2 前期で一般教養科目と体育科目を、後期で専門教養科目を、履修する。
- 3 一般教養科目はA,B,C各列から2科目以上、合計10科目、44単位を選択履修。
- 4 専門教養科目は、第一類24単位は必修、第二類は5科目、20単位以上を選択履修。

5 体育科目は必修。

講義題目

一般教養科目

倫理学	倫理学概説	大井
心理学	心理学概説	大井
歴史学	東洋史概説	外山
	西洋史概説	同
人文地理学	人文地理学概論	稲村
国文学	「万葉集」講読	吉田
	同	長谷川
法律学	法律学概論	西澤
	法律学演習	同
経済学	経済学概論	松井
	経済学方法論	同
	経済演習	同
数学	微分学・積分学・集合論概説	水嶋
生物学	生物学概論	佐藤
人類学	東亜の人種相	島

専門教養科目は24年度はまだなかった。

講座名	担当者氏名
言語学	川崎 直一 庭田 四郎(英語学科と兼任)
国語学	吉田孝次郎 長谷川信好
歴史学	外山 軍治
地理学	稲村 純一
哲学	平澤 俊雄(学長と兼任) 大井 慶雄
経済学	松井辰之助
法律学	西澤 修
自然科学	寺阪 英孝(大阪大学理学部と兼任) 水嶋香東士
体育	原 利一

非常勤講師：生物学－佐藤盤根 人類学－島五郎 商業学－吉川貫二 教育学－  
小田武 論理学－西村嘉彦 社会学－上子武次 統計学－高木秀玄  
民俗学－高橋盛孝

昭和26年度、専門教養科目(新制大学最初)於大阪学舎(一般教養科目は高槻学舎)

A 言語文学関係

番号	題目	担当教官
1	比較言語学	川崎
2	一般音声学	プレトネル
3	Jespersen : The Philosophy of Grammar	川崎
4	国語学概論	長谷川
5	明治の文学	吉田
6	平安時代の文学	長谷川
7	西洋思想史	大井
8	東洋思想史	木村英一
9	契丹・女真両民族史	外山
10	民俗学概論	高橋
11	The Outline of Christianity	R.Linde(英語による)
12	図書館学	仙田正雄

B 商業経済関係

13	経済学の基本問題	松井
14	国際経済論	同
15	産業経済論	同
16	経済史原論	/
17	財政学概論	/
18	統計学概論	田村市郎
19	憲法	杉谷 [=安部]
20	国際公法	嘉納 孔
21	民法	西澤
22	社会法	同
23	国際関係論	アルバレス
24	世界経済地理	稲村
25	Aの10と共通	
26	Aの11と共通	

以下、本学一般共通担当の専任教官を紹介するのに3世代に分ける。第1世代は、1955年度までに就任し、在職が或る程度長い人をいう。第2世代は、それ以後約5年以上在職し、92年までに退職した人、第3世代は現職の者を指すことにする。資料は、第1、2世代は、本人の著述、または後輩教官の提供の資料による。出身大学学部、大学院をつける。第3世代の紹介は本人の申し出にもとづく。

授業題目は数年分の履修案内を見て、おおよその分野を示す。斜線／の、前は一般教育科目、後は関連科目である。どちらかを欠くこともある。主な研究業績を出す場合、題と内容の一部または章節名による。『 』は単行本または雑誌、「 」は論文である。外大学報は大阪外国語大学学報の略。この題の「学報」は1989年から「論集」となった。

## 〈第1世代〉

### 言語学 — 川崎直一

大正8-11年、早稲田大学でフランス語を、昭和2-12年、大阪外国語学校でドイツ、ロシア、中国諸語を学んだ。19年、大阪外事専門学校、西南亜細亜語研究所でアラビア語辞典編纂に従事。22年、同校教授、24年、大阪外国語大学教授となった。

関連科目の言語学理論のテキストは以下のとおり(講義年度順)：

Jespersen, O., *The Philosophy of Grammar*, 1924.

Bally, C., *Linguistique générale et Linguistique française*, 1950.

Schöne, M., *Vie et Mort des Mots*, 1951.

Bloch, B. and Trager, G. L., *Outline of Linguistic Analysis*, 1942.

Saussure, F. de, *Course in General Linguistics*, 1959.

Ullmann, S., *The Principles of Semantics*, 1957.

小林英夫、言語学通論 1957、高津春繁、言語学概論 1957、川本茂雄、言語学概説 1954、

とくに20世紀の言語学・構造言語学の父といわれるソシュールと、ウルマンを何年もかけて学生とともに精読したことは、本学の伝統形成に大きな意義をもつ。また下記の書などを用いて、ロマンス語比較言語学、歴史言語学をも、長きにわたって講じた。

Elcock, W. D., *The Romance Languages*, 1960.

一般教養科目としての言語学の講義題目(34-41年度の受講生による)

「言語のアウトライン」34, 5年度      「言語の構造」39年度

「言語の問題」36      「言語学概説」40, 41

「言語のすがた」37, 38

言語学のほか、研究外国語として、ギリシア、ラテン、エスペラント3語の授業も担当した。

なお付言すれば、演習のテキストの問題がある。現在のようなコピー機械がなかった当時、テキストの文は川崎みずからが英文タイプを叩いて原紙に打ち、それを謄写版でローラーにインクをつけ、一枚ずつ刷ったものである。このことは他の言語についても言えることで、タイプのない言語であれば、教師が原紙に手書きしたものである。

国語学 — 吉田孝次郎 東京帝国大学文学部

文学の読み方／近代小説、夏目漱石の作品

『近代小説入門』堀書店、1949年の著書がある。その序にいう：大阪外事専門学校で近代文芸を講義したり、文芸部の合評会に出席したことが、本書の原稿のできるもととなった。私はかねて、教養としての文芸という意味で、作品の鑑賞吟味を土台とし、それら作品相互の有機的連絡を考えつつ、文芸思潮の展開、さらには時代と人生との関係の理解の助けになるような一種の文芸史があつてしかるべきだと考えていた。本書はこういう考えのもとに、明治の近代小説を扱ったものである。……文芸が一種の人生観なり世界観である以上、知的内容のみならず、情意・行動の方向をも含み、生き方を中心とするものと考えなければならない。そしてその本質的な機能は、読者の人生観に何らかの寄与するところにあること、したがって読者の生き方への影響・感化を及ぼす点にあることが明らかであろう。……一々梗概を述べたのは、実際に作品を読むことが困難な時勢であることを思ったからである。……

「作品を読むことが困難な時勢」とは敗戦後まもなくの時期のことで、本を買うのが大変で、或る哲学書が発売された時、書店の回りに長蛇の列ができたといわれる。吉田の授業は、焼け跡に暮らす学生たちの魂をうるおす千天の慈雨であつたろう。

叙述は、矢野竜溪の政治小説「経国美談」（明治16，7年頃）に始まり、石川啄木の評論「時代閉塞の現状」（43年、大逆事件、日韓併合の年）に終わる。

卒業生の回想によれば、近松「女殺油地獄」、明治の二葉亭四迷なども講じられたようである。

長谷川信好 京都帝国大学文学部

日本文学概説／日本の文学、国語史

「竹取物語試攷—人間無力観の文学」『外大学報』3、1955年

竹取物語とは、絶望と悲傷の文学であつた、人間無力観の作品であつた。本能とか感情とか人間的な力とか、そういう一切の人間性の尊重は、竹取物語の前半においてたしかに打ち出されていて、なるほどこの作品を組み立てている要素の一つではあるが、それは、それほど尊重すべき信頼すべき人間の力でも、結局は小さい限りあるものであり、無力なものにすぎないことを描いた作品であり、そういう人間性と対立して、その達成を阻害するものとして、かぐや姫という超自然的・超人間的な神仙女を拉し来つたのであつた。……竹取と並び称される伊勢物語は、人間中心、本能主義の文学であり、このふたつの系統が統一融合されたところに源氏物語が成立する。

歴史学 — 外山軍治 京都帝国大学文学部

東洋史概説／東洋近世史、唐代政治史

主著は『金朝史研究』東洋史研究会(京大)1964年。その後記によれば、羽田亨教授の指導の下、外務省文化事業部の助成による満蒙文化研究に参加し、満州史のなかでも金朝史の研究に従事した。研究室での文献読解のほか、1933、35年の2度、満州の史跡調査に参加した。本書は、女真族の建てた金朝内部の政治史、それと、この王朝に先だつ契丹族の遼朝、および金の南方にあった中国王朝宋、さらには渤海国、また興起しつつあったモンゴル族などとの国際関係を考察したもので、この分野で高い価値をもち、最近中国で本書の翻訳が出版された。

外山の研究のもうひとつの分野は、中国の書道であり、次の2著がある。

『中国の書と人』I、1971年。同II、86年、ともに創元社。

これは平凡社『書道全集』その他に発表した論文を集めたもので、王羲之、顔真卿、趙孟ら中国の書家に加えて、我が国にある隠元たち黄檗宗の帰化僧の墨跡にも説き及ぶ。図版が豊富で、見るだけでも楽しめる書物である。

他の著書：『岳飛と秦檜』富山房、1934年。『太平天国と上海』高桐書院、1946年。『顔真卿』創元社、1964年。『則天武后』中公新書、1966年。『隋唐世界帝国』人物往来社(東洋の歴史5)1967年。

哲学——大谷 長 東京帝国大学文学部

西洋哲学史、西洋倫理学史／近代思想、現代思想

主要著書：

『キェルケゴールにおける授受の弁証法』弘文堂、1953年、増補再版、東方出版、1982

『キェルケゴールにおける真理と現実性』創文社、1963(第1回田辺賞受賞)

『キェルケゴールにおける自由と非自由』創文社、1977

『真理と現実性』より：

「情熱には人間の破滅が存するが、しかしまた彼の高揚も存する。もしも弁証法的なもの反省が、情熱を強めるために用いられるのでないなら、客観的になるということは退歩である。そして、情熱の内に破滅する者ですら、情熱を失った者ほどに多くを失ったわけではない。なぜなら、前者は可能性をもっているからである」——キェルケゴール

同書、序言より：

キェルケゴールが取り扱っているあらゆる現実的な諸範疇を通じ、また宗教的な運動の弁証法を通じ、彼の真理概念がどういう役割のものとして見られねばならないか、また彼の主体性概念がどのような現実的関心をもつものとして規定され、従ってあらゆる生存段階を通じて宗教的理念性が発出するために、「主体性が真理である」という言葉で彼が表現するところのものが、いかなる意味で普遍的原理としてその妥当性をもちうるかを明らかにしようとするのが、我々の課題である。

なお凡例に、日本で古くから用いられている「セーレン・キェルケゴール」という呼称に本書は従うが、デンマーク語により忠実に表記するなら、「ソエーヤン・キヤケゴーア」となる、という。

経済学 — 松井辰之助 京都帝国大学経済学部

／産業経済論、経営学

『最近の景気変動と商工業の経営』兵庫県産業研究所、1951年

要旨：敗戦の1945年から49年まで、日本はかつてない激しいインフレに襲われた。日本経済の復興を促進するため、アメリカ政府はデトロイト銀行頭取ジョセフ・ドッジを派遣した。彼が示したインフレ抑制政策が「ドッジ・ライン」と呼ばれる。49,50年度の財政金融政策はその線にそって運営され、日本経済は深刻な不況に見舞われた。50年に朝鮮戦争が勃発すると、日本は多量の軍需物資の発注、いわゆる特需を受け、これにより不況は一掃され、戦争が経済復興を促進するという奇妙な結果を生んだ。戦後数年間の世界の動向の中での日本経済と、それに対応する中小企業の経営を論じたものである。

教育学 — 東郷豊治 京都帝国大学文学部

心理学／教育原理、青年心理学

『良寛』東京創元社、1957年(第9回読売文学賞受賞)

序：現代では、人間は誰も彼もみな、社会が要求する一定の規格に合格するように、行動している。型破りでは生活できない仕組みになっている。昔でも、破格調な行動はたちまち生活の困難を招いたであろうけれど、私たちの祖先でそれを立派にやってのけた人間がいる。その人は生涯をこころ豊かに乞食して歩き、山中にひとり棲んで自然の声に耳を傾けた。しかし里にも出て、子供と遊び、農夫と酒を酌んだ。子供と遊んでは日の暮れるのを忘れ、酒を飲んで田の畦に眠った。また詩人と会うては詩を語り、歌人を招いては歌を詠んだ。漢詩は400、和歌は1000に余り、批評家は口を揃えて、寒山 [中国の隠者詩人] の風雅を体し、万葉 [集] の余韻を伝えているという。さらにそれらの詩歌をしるした書は、今日に残っていて、見る人たちはまことによいという。その人は、良寛である。私は嘗て、彼の生活していた越後に10年あまり在住し※、その間にゆかりある諸家に伝える彼の遺墨を尋ねて歩くのが、何より楽しみであった。……もし拙著を通じ、この人の生涯を知って、誰かを勇気づけ、誰かを慰めるのに役立てば、それに越した喜びはない。

[※1940-50年、新潟県高田師範学校教授]

なお『良寛全集』上下、東京創元社、1959年、『全釈良寛詩集』創元社、62年もある。専門の心理学の分野では『性格の見わけ方』創元社、1956年がある。

法律学 — 安部濱男 京都帝国大学法学部

法の一般理論、日本国憲法概説/憲法、行政法

翻訳：オリヱヴェクローナ著『法秩序の構造—経験法学としての—』成文堂、1973年

原書：Karl Olivecrona, *Law as Fact*, 2nd ed., 1971, London.

原著者(1897-1980)はスウェーデン人、ウプサラ大学卒業、同大学、実践哲学専攻のヘーゲルストレーム教授の教えを受け、のちルンド大学法学部教授、1965年、退官。39年に同じ題の書物を発行し、碧海・太田・佐藤訳『事実としての法』勤草書房、1967年がある。原著者は日本語版への序でいう「わたくしの友人、安部教授は、1966年以来、再度にわたりスウェーデンを訪れ、わたくしとの間で、多くの稔り豊かな討議を重ねた。彼が本書の問題点とそれに対するわたくしの見解を隈なく知悉していることは、その訳出の正確さを保証するといえよう」。一方、訳者安部はいう「この日本語訳の刊行については、著者が原書の執筆にかかる時、すでに私との間に合意ができていた。爾来、数年間、私の渡瑞による討議を含めて、数えきれぬほどの質疑・応答が重ねられた。原書を私が訳するのではなく、私の口を通して著者に語って頂いたというのが、実感である」。

以上から見ると、安部の仕事は一般にある翻訳とはかなり違って、訳者が著述に参加しているといえる。

数学 — 水嶋香東士 大阪帝国大学理学部

数学概説、統計学概説／

阪大において正田建次郎教授の下で、代数学、とくに有限単純群の研究に従事していたが、大戦により、5年間の軍隊勤務と3年間の抑留生活を余儀なくされた。

敗戦後、学制改革が行われ、本校は外国語の専門学校から、新制大学に体裁を変えた。したがって大学設置基準の適用を受け、一般教育として、人文・社会・自然3系列の科目を置かなければならなくなった。従来、自然科学とまったく無縁で、数学が不得意であることを特色のひとつとしていた学校へ、水嶋は数学の専任教官として着任した。彼のみならず、外大全体として、自然系学科の充実には筆舌に尽くしがたい苦労があったろう。

数学の授業は高槻の工兵連隊跡地で始まった。水嶋の戦後はまだ続いている。さいわい数学の授業は実験設備がなくても、教室と黒板だけでやれる。さすがに伝統を守って、数学の得意な学生はまれであったが、みな平和な学園の有り難さを知っていたから、熱意をもって授業に出席し、あくび・私語・居眠りなどは一切見られなかったという。

講義の内容としては、解析学(微積分学)を中心にしたものと、代数・幾何学(線形代数学)を主とするものと、ふたつに分けて行われた。1955年ごろからは、社会科学にも幅広く応用されつつあった統計学に着目し、「経済学における極値問題」(『新しい数学』1967年)という論文を発表し、専攻を越えた講義を実施して、学生の啓蒙に努めた。

本学での水嶋のもうひとつの重要な仕事は、入学試験であった。本学は入試科目として

数学を課した。出題・採点の責任は当然、水嶋の肩にかかっていた。なお可否の判定は合計点により、1科目でも0点があれば不合格とした。だから数学が苦手でも0点できさなく、他の科目で補えば合格できた。奇しくも水嶋の定年退職の年から、共通一次学力試験(大学入試センター試験)が実施され、本学は数学・社会などに独自の試験を行わなくなり、大学入試は新時代に入ることになった。

彼の努力によって自然科学の学科がしだいに充実し、1965年、生物学科、67年、化学科にそれぞれ専任教官が配置された。さらに箕面への移転に伴って、実験設備をもつ研究室・教室がようやく建設され、また81年には物理学科が新設され、本学の自然科学系の学科は一応の体裁が整った。かくて水嶋の長年にわたる孤軍奮闘の成果が結実した。

### 保健体育 — 原 利一

日本体育会体操学校高等科(現在の日本体育大学)卒業、1949年、大阪外国語大学助教授、68年、教授、74年、定年退職。

体育科目も、大学設置基準によって義務づけられていた。不十分な施設・用具の条件の下で、授業としての体育のほか、東京外国語大学との定期競技大会の運営に、原はただひとりの専任体育教官として努力した。

課外活動では、例えばスキー実習が挙げられる。51年、有志学生8名とともに、野沢温泉スキー場で開設して現在に至っている。「吹雪の音を聞きながら、ヒュッテで一夜明けると、一面に新雪がきらめいている。目指す鞍部を望むと、稲妻のように雪煙を上げている信州の冬。白一色の山野を背景に、心ゆくまで滑り回ったあと、疲れた体を温泉の湯の中に横たえ、新しい友と語り合うも、楽しからずや」(「スキー教室30周年記念誌」より)。冬山の厳しい自然への挑戦と、若者の勇気を喚起する呼びかけがスキー実習の理念であり、その上に立って、学生に対する細かい教育に専念した。例えば、各自の能力に応じた正しく安全な基礎的スキー技術の習得、より高度な技術の個別的指導、大阪駅を出てから帰り着くまでの整然たる団体行動、各人の所持品(荷札、下足札、貴重品袋、食券その他)への配慮、宿舎における起床から就寝までの規律の維持(外出、マージャンは禁止)等々、徹底した管理教育を行った。

また体育授業の一部としてのリレーカーニバルは、58年から79年までの間、実施された。本学の上八学舎には十分な運動場がなく、他にグラウンドを求めなければならず、中百舌鳥、服部緑地、長居陸上競技場を使用した。そのほか、駅伝や球技などを通じて課外活動としての体づくりの普及に力を尽くした。

東京外大との定期戦では常に率先垂範、競技日程の作成、競技場の確保、審判の編成、東外大選手宿舎の手配などに心を尽くし、試合前日には体育会役員とともに泊りこんで万全を期した。

時代が移るとともに流行も変わったが、原は学生のあるべき姿の現れとしての服装に対

して、頑固なまでの信念を保持して実行させた。すなわち、授業としての体育では上下とも白の体操服、リレーカーニバルではランニングシャツと短いパンツ、東外戦の開会式では詰襟学生服という具合であった。原の活発な動作、人を威圧する大声、それでいてにこやかな笑顔、また彼の指揮下の学生たちの整然たる服装と態度は、大阪外大体育のよき伝統として記憶に留められるであろう。

学内にとどまらず、大阪府・滋賀県などにおける各種競技団体—バレーボール、陸上競技、スキー—での貢献も忘れてはならないであろう。

## 〈第2世代〉

大峯 顯 京都大学文学部

哲学概説/西洋近世哲学史、現代ドイツの思想

『フィヒテ研究』 創文社、1976年

フィヒテ哲学の理念、フィヒテにおける構想力の概念、対決期のフィヒテとシェリング、絶対的反省の問題、真理と意識、ドイツ観念論における神秘主義と形而上学、フィヒテ哲学と現代。

崎山 理 東京外国語大学フランス語学科、京都大学大学院文学研究科

言語学概論/構造言語学、一般音声学

『南島語研究の諸問題』 弘文堂、1974年

インドネシア語(マライ語)の研究、古ジャワ語(カウヰ語)の研究、マライ・ポリネシア諸語の歴史的・比較的研究。

山末 一夫 京都大学文学部

言語学概論/比較言語学

「ダルマティア語音素論」『外大学報』39、1977年

「ラテン語の空間表現」同48、1980年

「意味的側面からみたラテン語deponent動詞」同68、1985年

小泉 保 東京大学文学部

／構造言語学、語用論研究

訳注『フィンランド叙事詩カレワラ』上下岩波文庫、1976年

『日本語の正書法』大修館書店、1978年

『フィンランド語文法読本』大学書林、1983年

吉田 金彦 京都大学文学部

／助詞の研究、語構成の研究、万葉集

『日本語語源学の方法』大修館書店、1976年

少なくともその語の前形に始まり、可能なだけ遡源して行ってそこで停止せざるをえない上限形をもって終わる。これが語源の定義である。このような語源をく史

的語源>という。……これに対して、諸外国語との対照・比較によって得られる対外的語源がある。これによるとさらに古く遡ることのできる場合がある。これを<比較語源>と呼ぶ。……これらは言語における縦と横の座標である。この両者によって真の語源が明らかにされる。

吉田彌壽夫 京都大学文学部

／近代文学史、日本文学史の諸問題

「啄木の思想と文体」『現代短歌・作家と文体』雁書館、1978年

石川啄木の歌が、近代短歌史においてエポックメイキングなものであるとされるのは、その作品にもられた社会主義的思想によるのはもちろんであるが、それ以上に文体的特徴、すなわち『一握の砂』『悲しき玩具』に示された3行書きや、口語的発想法であろう。これらについては、今日まで多くの論者が賛辞を呈してきた。小論ではそのくりかえしをやめ、いままでなぜか避けられてきたように思われる、その消極面についてみてゆきたい。……啄木の3行書きは、近代的屈折リズムに進展したというよりは、むしろ短歌本来のリズムに先祖がえりしてしまったというべきであろう。

廣實源太郎 京都大学文学部

西洋古代・中世史、西洋近代史／17, 18世紀の国際関係、三月革命、両大戦間の研究

「ヨーロッパ史とオーストリア」『評林』XV、1988年

オーストリアはプロイセンとの戦いに敗れ、ドイツのヘゲモニーの争いからも敗退し、マジャー人との妥協して、オーストリア＝ハンガリー帝国に編成を組み変えた。それからは、ドイツ帝国と結んで第一次世界大戦に臨み、敗戦国となって、民族自決主義に従って国を解体させ、第二次世界大戦に臨むに際しては、ヒトラー＝ドイツに併合されて敗北した。これらは、オーストリアの国際的地位が、1870年代以後になると、もはや、南東ヨーロッパの地域的な指導国家としてでも、留まるだけの力を、政治や軍事的な側面ではもちあわせていなくなったことを示している。1955年の「国家条約」によって、永世中立国となったオーストリアの存在意義は、これらの歴史的教訓を生かしての、従来とは別のところに求められている。オーストリア自身も、そのことを自覚した上での進路の決定を行い、ヨーロッパでの、そして世界におけるオーストリアの意味を見出そうとしている。

間野 潜竜 京都大学文学部

東洋史概説/中国政治史の諸問題、東西文化交渉史、中国歴史地理研究

『明代文化史研究』同朋舎、1979年

明実録の研究、明代の儒学と陽明学、明代の仏教と明朝、明代の道教と宦官、儒仏道三教の交渉。

稲村 純一 広島高等師範学校地理歴史部

人文地理学概論／世界経済地理

君塚 進 京都大学文学部

人文地理学概論／地図学、ヨーロッパ地誌

校注「仏英行(柴田剛中日載)」『西洋見聞集』—日本思想大系66、岩波書店、1974年

岡倉古志郎 東京帝国大学経済学部

／国際政治史、国際政治学一般理論、国際政治学特殊問題

「第二次世界大戦後の世界政治の発展過程」1959年、『岡倉古志郎国際政治論集1—現代の世界政治』勁草書房、1968年

第二次大戦後の国際的発展の全過程をつらぬくもっとも重要な契機は、①社会主義世界体制の成立と発展、②植民地体制の崩壊の進展であり、これによって帝国主義が全体としていちじるしく弱化したことである。「第二次世界大戦後、一方の帝国主義陣営と、他方の社会主義諸国とのあいだの闘争は、反帝国主義陣営と帝国主義陣営との闘争という形をとり全世界をおおった。この二つの陣営の闘争は戦後の人類史のもっとも重要な要因である」とイェー・エス・ヴァルガ〔ソ連科学アカデミー経済学研究所教授〕も書いている。この闘争の結果、両陣営の力関係は、年ごとに反帝国主義陣営にとって有利なように転換してきた。まことに戦後の時期は、資本主義の社会主義への移行があらしのように急テンポで進みつつある時代といえる。

澤村 榮治 京都帝国大学経済学部

近代経済学概論、経営学概論／

「“世俗からの隔離”と“世俗への接近”」『評林』I 1970年

一般的に、ドイツ大学は科学の理念によって指導される学問の大学であり、イギリス大学は人間生活の政治的・社会的条件(紳士の教育)を重視する大学であり、アメリカ大学は科学研究の社会生活への応用に主眼をおく大学であるといわれ、その基盤をなす理念は、一応それぞれ、理想主義、現実主義、および実用主義であるとみなされている。……わが国の大学教育は、専らイギリス大学の教養的見解とドイツ大学のヒューマニズムとの洗礼を受けて育成されたため、アメリカの一般教育的思想をアメリカ大学人ほどに理解できないのは止むをえないといえよう。……専門教育こそ大学教育であるとし、一般教育を予備的な教育と同一視して、両者を上下の階層と考える謬見が跳梁するのは、大学教育の教育的境位を知らぬ、いわゆる“博学の妄想”の然らしめるところであろうか。

梅津 和郎 大阪外国語大学フランス語学科、京都大学大学院経済学研究科

貿易商社論／開発経済学の現状、外国経済事情

『現代世界と国際関係—シリーズ国際関係1』晃洋書房、1978年

勤労大衆が政治的に全く無関心であるか、または無関心を装って物質的な豊かさのみを追求しているソ連社会が、先進資本主義諸国がたどったと同じ運命をたどっていくのは必然的である。それにたいして、勤労大衆が政治過程に直接参加し、質素な生活のなかで奉仕に生きる喜びと満足を求めていく中国型社会主義は、ソ連型社会主義に優越する。それは、長期的には発展途上国の共感を得ることができよう。なぜなら、その方法は、働く大衆のすべてに平等な参加の機会を与え、平等な分配を通じて、国民的合意の成立と国民的士気の高揚とを保障していくからである。

島崎 郁 東京帝国大学文学部

／教育原理、教科教育法－社会

「集団主義教育論－人類愛への教育学」『外大学報』20、1968年

大澤 春吉 東京教育大学特殊教育学科、京都大学大学院教育学研究科

心理学概論／教育心理学、青年心理学、教育評価

「外国語学部学生の学力構造 I, II」『外大学報』40、43、1978、79年

世古口 雄三 京都帝国大学理学部

生命科学、生体におけるエネルギーと情報/

「視細胞外節におけるイオン過程の研究」『外大学報』38、1977年

「 $^3\text{H}-^1\text{H}$ 交換反応による視物質高次構造の研究」同46、1980年

### <第3世代>

#### 哲学

西村浩太郎は、近世形而上学を研究テーマとし、最近はライプニッツの思想の解明に取り組む。論文に「デカルトにおける神の観念」、「デカルトにおけるコギト・エルゴ・スムの位置」、「パスカルの賭け」、「象徴－愛に至らぬもの」、「ライプニッツにおける個性と超越」などがある。一般教育では哲学概論、倫理学概論を担当し、関連科目ではデカルト、パスカルや、親鸞、西田幾多郎の著作を読む。

一般教育で哲学、宗教学を担当する細谷昌志の研究テーマはカント、シェリング、キェルケゴールに関する宗教哲学及び宗教人類学である。関連科目では哲学史、哲学演習を担当する。『認識と超越』、『宗教学を学ぶ人々のために』の、共著書があり、論文に「理念と経験」、「表象の道」がある。

#### 言語学

近藤達夫は、夭折した山末一夫の後任として、神戸市外大から迎えられた。言語構造記述の方法や、言語類型論をテーマに研究し、『外国語としての日本語』、『英語の母音』の著書や、ジョン・ライアンズの『言語と言語学』の訳書がある。授業では言語学と音声学を担当し、言語構造の分析と体系把握を目指した言語学演習を行う。

1991年に奈良大学から転任してきた田野村忠温は、言語学、日本語学を専攻し、『現代日

本語の文法 I』を著わし、「否定疑問文における肯定と否定」、「否定疑問文小考」の論考がある。言語学概論などを担当し、言語学特殊講義では日本語の文法と意味について考察している。

## 国文学

国文学の専任教官は、吉田金彦が姫路独協大へ去って、現在尾上新太郎ひとりである。尾上の研究テーマは、文芸思想である。「小林秀雄の種の理論—日本戦時下における一文学者の真なる国際性について—」、「藤原俊成の歴史意識」などの論考があり、授業では小林秀雄や松尾芭蕉を通じて、言語問題にかつての人々がどうかかわってきたかを解明し、日本の文化伝統の本質を考えようとしている。

## 歴史学

歴史学では東洋史に勝藤猛、日本史に武田佐知子、西洋史に南川高志の三人がいる。

勝藤は現職で死去した間野潜竜のあとをうけてペルシア語学科から配置換えされ、東洋史を担当している、アジア史の比較研究を研究テーマとし、中国史、中央アジア史を講じる他、研究外国語として、アフガニスタン東部からパキスタンにかけて使用されるプシュト語を担当する。著書に『モンゴルの西征』、編著に『イスラム世界—その歴史と文化—』、また「『統治の書』について」、「ジンギス・カンの生年について」などの論文がある。

武田の専攻は日本古代史。一般教育では古代社会史を担当している。古代東アジアの国際関係や、古代の道路・交通を考え、かかる地理的環境にあった古代人が抱いた世界観を考察するなど毎年テーマを変えながら古代社会の特質を明らかにしようとする。関連科目では、前近代日本史の基本的文献を順次輪読する。著書に『古代国家の形成と衣服制』、論文に「日本古代における民族と衣服」、「中世法隆寺と唐本御影」などがある。

南川は、廣實源太郎が定年退官して流通科学大に移ったあと、京大文学部助手から着任した。専門は古代ローマ史、一般教育科目では史学史、都市生活史など、毎年テーマを改めながらヨーロッパを通時的に概説し、関連科目では古代ローマ史を素材に、西洋史研究の現状や方法論を講じる。共著の『ヨーロッパ的自由の歴史』や、「憎まれた賢帝ハドリアヌス」、「238年のローマ帝国—『軍人皇帝』と元老院の戦い—」などの論文がある。

## 人文地理学

人文地理学は、神前進一と高山正樹の二人が担当する。農村地理学を専攻し、東南アジアの環境と開発に興味を持つ神前には、『変貌するアジア』の共著、「マレーシアの地域開発」の論考がある。一般教育と語科の教官、そして学外非常勤が、リレー式に授業を担当して、学際的に地球規模で環境問題を考えようという「地球環境論」は、新しい外大教育を模索する試みであるが、初年度にこの講座を主宰したのが神前であった。

君塚進が定年退官した後をうけ、1990年に高山が着任した。都市地理学を専攻し、東南アジアの地域開発の問題点や、日本の大都市圏の構造の研究をテーマとし、「シンガポール；変容する都市国家の社会経済構造」、「大阪大都市圏の高齢化に関する若干の考察」などの

論文がある。

## 法律学

法学は民法を貝田守が、国際法、国際組織法を東泰介が、憲法、行政法を松浦寛が担当する3人体制をとっている。貝田は不動産物権変動と登記を研究テーマとし、『増補財産法概説I・II』の著書、「公務員の不法行為」、「登記官の過失」、「物権変動論序説」等の論文がある。授業では財産権の帰属と取り引きの状況や、婚姻、親子関係や相続の法的問題について講義してきた。貝田は附属図書館長も務めた。

東は国際組織の意思決定や、集団安全保障制度を研究の対象とし、『現代日本の国際関係』、『国際法の新展開』等の共著がある。「国連安全保障理事会の拒否権制度の再検討」、「国際連盟における全会一致の原則」等、国連関係の研究も多い。演習では国際紛争の平和的解決と国連の安全保障の仕組みの問題点などを輪番制で発表し、質疑応答を行う形式を取る。年一度の東京外大と合同の国際法セミナーも7年来の恒例になっている。

松浦寛の専門は環境法で、その公法の領域に属する諸問題を、既存の学問的枠組みにとらわれることなく検討することをめざす。『憲法・理論と演習』、『基礎法学』、『基礎憲法』等の大学向け教科書を分担執筆し、「環境権の根拠としての日本国憲法第25条の再検討」、「環境保全と費用負担」等、環境法にかかわる業績がある。授業では憲法、行政法、経済規制法、公法演習などを担当する。

## 政治学

政治学では巢山靖司が国際政治学を、森藤一史が政治思想史を受け持つ。巢山の研究テーマは、国際政治における大国と中・小国の関係の理論化である。『ラテンアメリカ変革の歴史』、『第三世界の変革』、『世界平和と「勢力均衡」論』、『「米ソ協調」と湾岸危機・戦争』などの著書があり、授業では国際政治の構造論を講じ、中小国家の独立、自立とナショナリズムを論じる。

森藤は幕末政治思想史が本来の研究テーマであり、「佐久間象山の神州観」、「佐久間象山と吉田松陰密航事件」、「横井小楠の国際関係観」などの論文がある。またR.E.ウォード、ロナルド・ドーア、ジョン・ホールなど、戦後の英語圏の外国人研究者の日本研究をテーマとした論考がある。授業は日本の政治の特質と政治学の課題を歴史的に考察することを意図している。

## 経済学

経済学には野村茂治と村上由紀子がいる。国際金融、国際マクロ経済学を受け持って講義する野村の研究テーマは、わかりやすいえば「人間の行動や感情の背景に、意識すると否にかかわらず、損得感情がはたらいっていることを示すこと」ということになるそうだ。国際経済論では国際協調の問題、国際支出の調整、為替レートの決定などを中心に講義している。

村上は梅津和郎の後任として、早稲田大学大学院博士後期課程から本学に着任した。労

働市場構造と産業組織の日米比較を研究の課題とし、「労働のインセンティブと年齢間賃金格差」、「雇用延長制度の運用実態と内容変化に関する調査研究」、「高齢化による年齢間賃金格差の変化」などの論文がある。授業では近代経済学、経済政策、経済学を担当し、マクロ経済学の基礎理論や、労働市場の諸現象を近代経済学の立場から講義する。

#### 教育学

教育学、教育哲学を担当する小林恭は、研究テーマに、哲学的身体論・言語論の視点から人間形成の諸問題を考えること、および禅仏教の人間観と現在社会の人間形成の関係を考えることをかかげる。アラン研究も課題のひとつであり、「読みの人間学的意味—アランの哲学の根底にあるもの—」の論考がある。他に「ことば・からだ・超越」、「デカルトの実態概念と自覚の構造」など。

#### 教育心理学

苧阪満里子が、大澤春吉のあとをうけて、京大教育学部助手から転任したのは、1985年である。言語、音楽などについての認知処理過程と大脳生理学を研究テーマに掲げ、“Peak alpha frequency of EGG during mental tasks : task difficulty and hemispheric difference”, “Peak alpha frequency shift during music perception.”などの論考がある。視聴覚教育の授業では、視覚的、視覚的情報処理過程の脳内メカニズムについて、実習などを含めつつ検討している。

#### 社会学

社会学には在職18年になる林彌富と、3年前に教官定員増によって着任した小林一穂がおり、共同で「現在世界と都市・農村」と題する関連科目を担当している。林は社会変動論を研究対象にし、株式会社と社会秩序、社会変動と家族の問題などを具体的テーマとして掘り下げている。最近の編著に『転換期と社会学の理論』がある。概論では、転換期にある現代世界が新しい時代を迎えるために、何を進歩とし、その中で解決すべき問題は何かを、戦後の社会学理論での社会構造論、現在の都市理論などから考えようと試みる。

小林は農村社会学を専攻し、「稲作農民の営農志向」などの論考がある。農村社会や農民生活の調査は、これまで山形の庄内地方、新潟の蒲原地方など、国内をフィールドとしてきたが、外大のメリットを生かして、タイ農村などに調査フィールドを広げようとしている。授業では日本で農村危機が問題になる一方、世界では食料危機が常に人間社会をおびやかしているが、こうした日本及び世界の農業問題と農村社会の現状を紹介する。

#### 文化人類学

ズグスタ・リチャードは、高校終了後アメリカに亡命したチェコ人である。イリノイ大学卒業後、ハワイ大学で文化人類学を学び、東大で学位を取った。東南アジア・北アジアおよびヨーロッパをフィールドとし、住民空間のシンボリズムの、通文化的比較を研究対象とする。“DWELLING SPACE IN EASTERN ASIA”の著書が外大学術研究双書の第4巻として刊行された。他に「モンテネグロにおけるザドルガと出自集団」がある。民族誌の

講義は英語で行われている。

## 数学

数学の兼田英二は、水嶋香東士の後任として、1978年に着任した。微分幾何学を専攻し、リーマン多様体の等長埋め込み問題に取り組む。論文に「ガウス・コダッチ方程式について」などがある。授業では数学および統計学を担当し、コンピュータの動作原理やプログラミングも講じる。統計学では、平均、標準偏差、相関係数など、基本的な統計量や、いろいろな推定、検定法について論じる。

## 物理学

中村明の専門は非線形問題。物理学、及び数理物理学の学術専門誌に発表した論文は、50余を数える。教養の物理学では、ハイテク社会の基礎をささえる、20世紀の現代物理学を、量子力学の完成のプロセスと、数年前から産業界で、はげしい研究開発競争のフィーバーをおこしている「超伝導」現象、そして「相対性理論」の3つのテーマの概論をしている。関連科目の情報理論では、コンピュータのベシック言語を講義している。

## 生物学

世古口雄三の後任として1987年に着任した井上寛は、「ショウジョウバエ集団の遺伝的多型の維持機構の分析」を研究テーマに掲げる。“Natural and laboratory hybridization between *Drosophila melanogaster* and *simulans*”, “Incipient reproductive isolation between *Drosophila nasuta* and *D.albomicans*”などの論文がある。生物学の授業では、血液型、染色体異常、免疫系など、ヒトを中心にした遺伝的現象について解説する。自然科学史では進化論の提唱から、解釈、補正までの道筋を解説している。

## 化学

油谷朝子は、「難分解性化学物質の微生物分解」をテーマにし、『食生活と健康』の、共著書がある。化学の授業では、「現代化学の世界」と題して、今日環境汚染の元凶として悪名高い化学ではあるが、生命現象の本質を明らかにし、最先端技術の発展の基礎となっていることを、水素からDNAまでの物質にそって、明らかにしようとしている。自然科学史では、原人時代から近代科学の成立までの技術と科学の発展過程を考察して、技術と科学の在り方を考察している。

## 新制大学期、一般教育教官についての受講生の思い出

### まえがき

大学期の卒業生から、何年かおきに人を選び、記憶に残る教師とその授業について、自由に書いてもらった。それらの原稿につき、編集委員会が表現上の修正を加えて整理した。執筆者は多くの受講生の代表という意味で、名前を出さないことにした。

編集作業進行中、このことを伝え聞いた2人の卒業生から、熱心な執筆申し出があり、

原稿を頂いた。委員会はその内容を検討した結果、特別な師弟関係、つまり学内では疎遠と思われるがちな学生と一般教育教官の間にも、学外でも生涯離れがたい絆が存在するという実例として、執筆者の氏名をつけて年史に留めることにした。

大井慶雄先生の哲学概論だけが印象に残っている。世界の長い歴史のなかで、さまざまな思想の流れが変遷するのを、私はなにかば驚嘆して承っていた。しかしもっとも感心して受けた授業なのに、私はサボリの学生だったらしく、試験のとき「西周」という問題が出て、何のことかと、あわてたことを覚えている。痛ましいことに30代で亡くなられた。

吉田孝次郎先生の国語学概論は、高校と違い本当に大学らしい講義で、大学の講義とはこういうものかと、目を開かれる思いがした。

西澤修先生の民法。改名についての話で、いったんつけられた名前は家庭裁判所の裁定がないと、改めるのは難しい。どの程度認められるかという例として、「阿部定」という女子が学校でいじめられたという理由が認められた、というのが、面白かった。

専攻語学がきびしくて力を注いだから、一般教育の方はサボッタという記憶がまずある。心理学の授業では、私が感性によって十分に会得していることに対して、先生は実験や変な理屈をつけてようやくたどり着くといった風で、心理学とは何とつまらない学問だろうと思った。

人文地理学の稲村純一先生。先生はご自分のノートを朗読して、学生に一文ずつ書き取らせるやり方の講義であった。たいていのむつかしい漢字は黒板に大きく書いてくれ、正確に写すよう求められた。朗読は明晰で、叙述のすみずみまで正確さが行きわたる感じであった。人間同士の通話において、言葉をおろそかにせず、わかりやすく、あいまいなところを残さずに、聞き手に伝えることの大切さを、講義の態度で示してくれた。

人類学の島五郎先生。私がこの授業を選択した動機は、どんな学問だろうかという幼稚な好奇心と、一般教養科目のうちで自然系列が少なかったことにある。けれども島先生のご自分の学問への打ち込み方に感激して、私は1年間、土曜日の1時限、高槻へ通って出席した。先生の講義方法も、ノートを作って来て朗読された。ただし学生の筆記速度など意に介せず、とうとうとして講じられた。内容は、人体の頭から足の先まで、人類学の立場から種々の特徴がどのように認められるかで、とりわけ、頭蓋骨のさまざまな角度に学問名がついていて、各々が分類の手がかりになること、さらに、先生が或る頭蓋骨を見る(あるいは、集める?)ために、わざわざ外国へ行った話などであった。「学問とは情熱である」ということを、強く私に印象づけてくれた。

統計学の西治辰二先生。上八学舎での後期の授業として受けた。最初たくさんいた受講生がどんどん減り、秋ごろには私ともうひとりとふたりだけになった。それでも先生は最初の時と少しも変わらぬやり方で、2人を相手に、ノートをひろげ、黒板を使って、授業

時間いっぱい、熱心に講義して下さった。——以上3先生とも非常勤講師。

島崎郁先生 私は先生担当の教育原理を受講した。一緒に出席した学生たちからは教師になった人が多い。ゆっくりと考え考え、より適確な言葉を選びながら説明され、とても個性的な風貌をもっておられた。受講生には自由に質問させ、その一つ一つに丁寧に答えて下さった。仲間に質問好きな者がいて、時々授業が中断したものだ。それでも楽しかったし、その時に学んだことが後の私には大いに役立った。

腰の低いお方で、私が教師になってからのこと、先生の友人である医師のメキシコでの研究発表のレジメのスペイン語訳を、私が依頼され、訳してさし上げたことがあった。その際あまりにも丁寧にお礼を言って下さり、恐縮したことがある。

昭和49年4月から51年3月まで二部主事を勤められたが、先生のあのご性格では、学生との交渉の場では大変苦勞されたのではないかと推察する。

梅津和郎先生 昭和33年入学の私は、その頃まだ若かった梅津先生の授業を選択した。厳しいが楽しい授業であったという印象が残っている。私は商業と経済文講読を受けた。前者では、毎時間ガリ版刷りの資料を渡され、その説明を先生から受けた。大阪梅田かいわいの商業地や神戸のトーアロードの戦後の発展の歴史を、その時に学んだ。具体的で、非常にわかりやすく、また私にとって初めての分野の知識であったから、とても面白かった。経済文講読は、国連の南北問題を扱ったタイプ印刷の英文を、2人ずつペアになって準備し、みなの前で発表するというやり方であった。英語に親しんできたつもりであったが、経済に関する文章は始めてであったし、それ以来南北問題に関心をもつようになったから、その意味で有益な授業であった。

それから約20年後、私の教え子たちがやはり梅津先生の授業を受けていた。そのひとりに先生の印象を尋ねたところ、とてもやさしい先生という返事であった。私には厳しい方という記憶があるだけに、先生は年月とともにやさしくなられたのだ、と思った。

篠田統先生(非常勤講師)の自然科学史。食物史の講義で、日本と東アジア(中国・朝鮮など)を中心として、文献と野外調査で得られた豊富な資料によって、食文化を興味深く分析して教えて下さった。毎週の授業を楽しみにしたものだ。学年末のレポートの題は、各人の郷里の雑煮の作り方についてであった。先生の講義態度は、豪放磊落のなかに緻密さがあり、学生たちを毎回のテーマに引きこむ魅力をもっていた。私は当時出ていた先生の著書『米と日本人』(角川新書)を買って愛読した。これは教科書ではない。授業では、米が東アジアや南アジアの膨大な人口を支えるすぐれた主食であることを、栄養学のデータから解明された。なおこの自然科学史の授業は、篠田先生以前は、藪内清先生、吉田光邦先生たちが担当されたようで、民族の生活の根底にあり、地味だが不可欠な文化を解き明かす内容のものであって、しかも代々、名講師による授業が続いたと聞いている。

吉田孝次郎先生の国文学。近代文学として夏目漱石をとりあげて講義された。先生の話しぶりは、淡々としてよどみなく、引きこまれるような感じであった。長いセンテンスで話しても、主語と述語が首尾一貫しており、途中で挿入句がはいっても文章の構成が決して乱れることがなかった。まるでラジオの放送を聞いているような錯覚を覚えるほど、流麗であった。また毎時間かならず「君たちはそんなことはしないかもしれないが、君たちの友達にはそんなことをする人がいるかもしれない」などと、意表をつく皮肉が飛び出すのが、おもしろかった。

外山軍治先生の東洋史学。『東洋史通論』(創元社)を教科書とし、中国の唐代史を教えてください。教室をわかせるようなものでなく、重厚な趣きがあり、歴史のおもしろさに触れる思いがした。後になって先生の『則天武后』(中公新書)を読み、授業のことを思い出した。のちに宮崎市定『雍正帝』(岩波新書)『中国に学ぶ』(朝日新聞社)『中国史』(岩波全書)を手にした。もし外山先生の授業にもっと熱心であったら、このような中国史の名著をより早く知ることができたのに、と後悔している。

高校生として私は中国史を勉強するのに、外山軍治先生ほかの『東洋史通論』を読んだ。あまり熱心に読んでぼろぼろになったので、もう一冊買った。外大へ入学すると、当然のように一般教育科目として外山先生の東洋史を選んだ。本物の先生は私が抱いていたイメージとはだいぶ異なっていたが、授業は大変興味深かった。後期になって、関連科目でも先生の授業に出た。司馬光『資治通鑑』の講読であった。漢文そのものはよくわからなかったが、雑談の中に先生の学問の方法が伺え、またお人柄にも強い印象を受けた。

次は岩倉具實先生の言語学である。その授業では、日本語のローマ字表記が主題であった。私は最初、この授業は冗談だと思った。こんな不合理なことを必死になって教えている先生はかなり変わった人、というのが、素直な印象であった。学年末になってレポートを書くことになり、家の近くの図書館で日本語の表記に関する本を何冊か読み、「ローマ字化反対」を結論とするレポートを提出した。評価は61点で、私の考えの欠点が赤インクで長々と書かれていた。それを見て私はむしろ爽快であった。この先生は一介の学生の未熟な考えを真剣に受けとめてくれている、という感謝の気持ちがあった。それにしても61点の1点が何となくおかしかった。

これとは逆に、人文地理学の君塚進先生の授業では、学年末のレポートを、柳田国男の著作を使ってまとめ、先生から大変お褒めの言葉を頂いた。そう立派な内容でないことは自分でわかっているが、あれこれ文献を捜しまわって調べた点が評価されたのであろう。かなり長いレポートであったが、先生は丁寧に読んでくださった。こんなことが学生にとっては、勉強の楽しさを増幅させるばかりか、自信をもたせることにもつながる。

多くの学生は要領よく単位を取ることをよしとし、1年次で大部分の単位を取ってしまうようであったが、私は1,2年に均等に分けて取った。この期間にできるだけ色々な本を

読もうと思ったからである。私の意見では、一般科目というのは、専門科目を掘り下げるための方法論や概念装置を与えてくれる点で、カリキュラムの中で重要な位置を占めるものである。しかし学生たちがこのことを十分に認識していないのは残念である。

田舎育ちの私には、社会主義、共産主義、マルクス主義などという言葉は、一種の隠語的な響きをもっていた。外大に入ってはじめてマルクス経済学の講義に出て、彼の理論に接した時、その精緻さに驚いた。私はキリスト教徒であるので、唯物論を受け入れる素地はもとよりなかったが、剰余価値説の巧妙な論理に感動した。その後、マルクス主義関係の書物を何冊か読んだが、やはり自分の考えとは異なるという結論に達した。しかしながら高校時代のロマンチックなキリスト教的世界観を大幅に修正する必要を感じた。つまり物質と精神とのバランスの重要性を知ったのである。

残念ながら何の感動も感じなかった授業もある。ひとつの教室に何百人もの学生が出れば、教師の方としても、個々の学生を一々記憶できないし、学年末の採点を思うと力が抜ける(?)のも、やむをえないだろう。こんな授業では活気もなく、集中力も持続できない。また授業中に政治宣伝をする先生がいたが、これも残念な現象のひとつである。

廣實源太郎先生(西洋史学) 先生は京都大学在学中に不幸な戦争に召集され、海軍中尉として任務を終え、再び大学に戻り、大学院に進学されたが、苦渋に満ちた戦争体験を酒の席などでうかがうたびに、戦争の齎す不幸と困難に打ち勝ち生き抜いた若き知識人の艱難辛苦が身に沁みて分かったものである。苦勞した私の母親と先生が同じ年という関係からであろうか、私は先生にたいして常に特別な感情を抱いていて、いつも子供のような気持ちでお話をうかがったものであるが、傷痕軍人を父にもつ私は、戦争体験は常に感慨深く拝聴した。そのお話しぶりは、齒に衣を着せず単刀直入で実に明快であり、快刀乱麻を断つという見本のような人であった。関西弁を基調とする中立的な日本語を話されるのであるが、威勢のいい巻舌音が耳に快く響いたものである。威風堂々たる立派な体軀・二枚目スターのような顔立ちにたいして、同性ながら憧れを感じ、嫉妬心を抱かずにはおれなかったのは一人私だけではなく、多くの同僚が異口同音に漏らす羨望の感想である。

先生は和歌山大学において西洋史の助教授・附属図書館副館長として活躍されていたところ、昭和41年4月から本学の西洋史の教授として、1部・2部で教鞭を執られた。教室ではその明快快活な人柄・豊かな知識・明晰な頭脳・鮮やかな弁舌ゆえに多くの学生を虜にし、私生活の場でも親しみ易い先生を慕う学生は多かった。各界に幅広い知己をもつ関係で、不況の折にも就職の世話をすすんでなさっているお姿にたいしては、教授・学者を越えた筆舌に尽しがたい敬服の念を抱かざるを得なかった。自ら率先して他人の厭がることをして下さったのも先生の特筆すべき美德のひとつであった。男女の庭球部の部長としての部員にたいする思いやりは、先生の定年退官後その任務をお引き受けした私としては恥じ入る程の心温まるものであった。特に移転後のコート開設・保守は先生のご指導なしにはあり

得なかったであろう。

先生は本当は静かな学研生活を望んでおられたのであろうと、誰しもが思うが、そういう意味では誠に残念ながら、しかし同時に大学としては大変有り難いことに、重要な役職をことごとく歴任して下さいました。そのことは、開学以来初めてのことである。第2部主事・学生部長・保健管理センター所長事務取扱・学長事務代理・附属図書館長などの学内の激務を粉骨砕身こなすエネルギーはどこにあったのであろうか。学外においては学術審議会専門委員・大学入試センター教科専門委員会委員・同新教育課程試験問題調査研究委員会委員・同試験問題特別専門委員会委員などとして、全国レベルの教育・入学試験に大いに寄与された。そのような忙しさの間隙をぬって、ご専門の西洋史の重要な都市への再三にわたる研究旅行も決して怠らなかつた。いつまでも御健康であられるようお祈りする。

哲学の大峯顯先生。筆者は47年に外大に入学し、翌年から先生の講義や演習に参加したが、講義内容は近世哲学史についての概説のほか、先生の御専門であるフィヒテとシェリングの関係を中心としたドイツ観念論やハイデッカーによるニーチェ解釈であった。演習ではしばしばドイツ語教材を用いられることが多く、我々ドイツ語学科の学生にとってはありがたかったが、他学科の学生たちの中には相当苦勞したり、初めから履修を諦めた人もいたようである。もっともロシア語など他の言葉を専攻した人の中にも、後に他の大学の大学院で哲学を専攻する人がいたから、その意味ではこのドイツ語のテキストを用いた演習は、ドイツ語の哲学の原書を読むよい機会であったと思う。講義や演習で当時扱っておられた主題は、後に『フィヒテ研究』（創文社）や『ドイツ神秘主義研究』（共著、創文社）などの著書に纏められている。

西洋史学—永井三明先生（非常勤） 「イタリア・ルネサンスの研究」イタリアのルネサンスの成立・展開・崩壊を論じた講義であった。高校世界史で言葉で覚えただけの「重装騎兵」「チフスの大流行」といったものに、一挙に現実感をもたせてくれた点、楽しい内容であった。例えば「重装騎兵」は身動きも自由にできなかったこと、歩兵は味方が不利になるとすぐ逃げ出してしまったこと、また当時の都市がいかに不潔であったか、等々。

言語学—山末一夫先生 「比較言語学」実例をどんどん挙げながら解説していかれた。土曜日の2時限にあった。ベルが鳴るずいぶん前から教室に来ておられ、時間より早く講義が始まり、終了のベルが鳴るのも知らんぷり。黒板いっぱい書かれた印欧諸語の例を眺めて私は、ああ、この先生は本当に言語学がお好きなんだなあ、と、半分は尊敬し、半分は呆然とさせられた。50歳になるまえにこの世を去られた。神のご加護あれ。

民俗学—福田晃先生（非常勤）・三原幸久先生 「世界の口承文芸」福田先生は日本の昔話、三原先生は世界のそれを、講義された。おふたりとも実際に各地に昔話採集に出かけられているので、単なる理論でない面白味があった。とくに福田先生は、日本の広さ、土

地柄の違いなどを、昔話を通して教えてくれた。ご本人は会津の出身で、今も薩摩と長州へだけは行かないということ、また沖縄の人々の心の広さのお話など、印象に残っている。

森 暢先生(美術史、非常勤講師)

岡部太郎(フランス語学科、30年卒業)

まだ戦後が色濃く残っていた昭和26年4月、私たちは高槻の陸軍兵舎跡の外大校舎に入学した。私にとって運命としか言いようがないのだが、その年に森先生も初めて大学の講師として、外大で美術史の講義を持たれることになった。

森先生を推薦されたのは、東方学術協会で森先生と知り合いであった本学東洋史の外山軍治先生である。私たちの入学直後の5月、森先生の提案によって、法隆寺の見学会が催された。学生たちは食べるだけでなく、文化にも飢えていたから、この会は超満員となった。この時、私は森先生の学者くさくない闊達さと、柔軟で自由な美術史観にすっかり魅せられてしまった。

それからは自分で幹事役を買って出て、毎月一回の美術見学会を先生にお願いした。当時の仲間に、東大寺観音院の新藤美也子君(蒙古語)、明和産業の亀山昌玄君(中国語)らがいる。

見学会には、森先生のお人柄もあって、外山先生はもとより、吉田孝次郎、長谷川信好(ともに国語)、東郷豊治(心理学)、赤阪力(ドイツ語)諸先生も参加された。神護寺や室生寺、唐招提寺などへの泊りがけの見学会を行い、その帰りはジャンジャン横町で、森先生を囲んで酒を飲みながら、人生・文化・芸術を論じた。その人の輪はあつという間に広がっていった。

先生の専門は襖絵や歌仙絵であるが、その美術史観は、従来の型にはまったものではなかった。「この仏さまはとても美しいでしょう。でもその美しさは人によって感じ方が違います。自分の目で美しいと思い、美しいと覚えることが大切なのです」。先生は他人や書物の目でなく、自分で考え、自分で覚えることの重要性を教えられた。

先生との触れ合いは、私たちが3年生になって上八学舎に移ってから、さらに深まる。週に一度、美術史の講義のあと、上六の喫茶店“深緑”や、ぜんざい屋“紅梅”、梅田のテレビ喫茶などで、先生のおごりで歓談するのが例となった。

先生の奥様は、劇団「くるみ座」主催の毛利菊枝さんで、先生の外語の講師料は自由に使えるうらやましい立場にあった。そんなことから、先生は単なる外語の一講師ではなく、人生の師という意味が重なっていった。

その頃には「美術同校友会」という会も発足し、京都、黒谷にある先生のお宅へも度々お邪魔するようになった。私たちが卒業した昭和30年、「熟柿会」が結成された。それは森先生を中心に、卒業生と在生学生を含めたもので、初めて会誌『阿修羅』を発刊した。その後36年間、毎年春と秋の2回、一度も欠かさず、奈良や京都を中心に一泊見学会を続けている。長谷川・赤阪両先生は今もお元気な姿を見せてくださっている。

会員は30年卒の私たちから、40年卒まで、約50人、女性が20人もいるのが特徴である。幹事役は友金守君(インド語35年卒)と藤田貞吉君(英語35年卒)で、現在の同窓会長、早原暎君もメンバーのひとりである。

森先生はまた外務省の嘱託として、長年外交官の卵たちに日本美術史を教えられた。外国へ行く日本人にとって日本美術の知識がどんなに役に立つかは言うまでもない。先生自身もカナダやアメリカ、南米、ヨーロッパ各国、オーストラリアなどへ、外務省の特別使節として訪問、日本美術史の講演をされ、国際文化交流に寄与された。

私も中日新聞パリ特派員時代、空港でばったり先生と出会ったことがある。先生から「外語の諸君は外国のどこにでもいるから、私も心丈夫だ」と言われたことがある。

先生は年を取られてからも、美術への情熱と研究心、それに若さを失われることはなかった。昭和59年、熟柿会30周年を記念して『阿修羅』記念号(第8号)を21年ぶりに発行した。先生はその冒頭にこう書かれた。「友情が生まれるのは、人生の上でそう度々あることではない。何より大切なのは、ともに歩んだ思い出と、人間の道を忘れてはならないことであろう。……人は人生を歩むにつれて、その環境とともにいろいろ変化する。何より恐ろしいことは、心の喜びを忘れてしまうことである。……阿修羅像が心の中でいつまでも美しく、また深い魅力をたたえているのは、いつも若々しい人間性がほほえみかけているからである。美しい人間性は、小さな野原の花にも愛情を示すし、大きい巖のような力にも圧倒されない。そこには美しい愛情の支えがあるからである」

その森先生も翌60年11月4日、84歳で亡くなられた。私たちは平成3年11月に、お墓のある黒谷、真如堂での七回忌に集まり、先生の思い出を語り合った。その追悼会には、外語熟柿会会員のほか、先生が教えられた京大、大阪工大、外務省の弟子たち50余人も出席した。

長谷川信好先生(国文学)

藤田貞吉(英語学科、35年卒業)

先生は昭和13年4月、大阪外国語学校に講師として赴任されて以来、47年3月に定年退官されるまで、34年の長きにわたって、国語学と国文学の授業を担当された。一般教養課程で先生の授業を選択する学生は多くなかったかもしれないが、先生が図書館長を勤められたことや(昭和32年10月～35年9月)、美術同好会のお仲間に加わり、京都や奈良の神社仏閣を訪ね歩かれたこともあり、教室ではお目にかからずとも、その温厚な淡々とした語り口を懐かしく思い出す人は少なくないであろう。

先生は昭和7年、京都帝国大学文学部(国語国文学専攻)を卒業後、研究費免除特典を受けて大学院に進まれた。大阪は母校上本町8丁目から東へ歩いて10分余りの桃谷に、今もご息女ご一家と一緒に住まいである。恐らくはここでお生まれになった大庄屋のボンボンであろう。この界限ではひときわ目立つ大きな木造の建物で、庭にはうっそうと樹木が生い茂っている。

この家を訪れて先生のお世話になった人は多い。最初の就職に失敗して、第二の勤め口をお世話頂いた者も少なくない。筆者の知る限りでも5指に余る。みな一流の大企業で成功している。かく言う筆者も一次就職にしくじったひとりで、退職後まだ旬日も経ないうちに某先輩から、うちへ来ないかと声をかけられたことがある。その会社はその時すでに一流企業であり、今は世界でもトップクラスの会社である。私はそれを辞退して我が道を歩んでしまったが、それが先生から命を受けた先輩のお話であったとは、なんと10余年の間知らなかった。その間何度も先生にお会いしていたが、先生は一言もこの事を口にされなかった。誘ってくれた先輩から聞いたのが10年以上もたってからである。

先生に就職の世話をさせて頂いて今大活躍している人たちの中には、知らないままの人もいようである。その男の顔を見るたびに「教えてやろうか、どうしようか」と考える。しかしいまだ教えてやってはいない。彼が先生の教え子として先生を心から敬愛していることが、私にはわかっているからである。またこの男がこの事実を知ったら、きっと泣きわめくであろうからである。

さて長谷川先生は、退官される以前から、自宅近くの神社で、毎月1回、万葉集の講座を開いておられる。私も一度参加したいと思いつながら、果たしていない。私は永遠に不肖の弟子であり続けることになる。それでも年に数回は先生にお目にかかる機会がある。それは文楽の鑑賞や、また美術同好会の集まりであったりする。そしてその都度、明治39年お生まれの先生のご健康とご長寿を嬉しく確認させて頂いている。

#### 大学期一般共通専任教官在職年度(西暦による)

##### 哲学

平澤 俊雄	1935-42, 46-61	大井 慶雄	1948-52
岩井 竜也	1951-52	大谷 長	1953-76
大峯 顯	1966-79	細谷 昌志	1977-
西村浩太郎	1982-		

##### 言語学

川崎 直一	1947-66	崎山 理	1967-77
岩倉 具實	1967-69	山末 一夫	1975-85
小泉 保	1980-89	近藤 達夫	1987-
田野村忠温	1991-		

##### 国語・国文学

吉田孝次郎	1935-70	長谷川信好	1942-71
吉田 金彦	1974-87	吉田彌壽夫	1964-87
尾上新太郎	1979-		

歴史学

外山 軍治 1947-74                      廣實源太郎 1966-87  
間野 潜竜 1975-81  
勝藤 猛 1982- (1963-81 ペルシア語学科)  
武田佐知子 1985-                      南川 高志 1989-

人文地理学

稲村 純一 1922-56                      君塚 進 1964-88  
神前 進一 1988-                      高山 正樹 1990-

法律学

西澤 修 1949-51                      安部 濱男 1953-80  
手塚 尚男 1965-66                      貝田 守 1969-  
東 泰介 1981-                      松浦 寛 1982-

政治学

岡倉古志郎 1967-75                      巢山 靖司 1968-  
森藤 一史 1976-

経済学

松井辰之助 1949-59                      澤村 榮治 1960-73  
梅津 和郎 1959-88                      山本 順一 1967-72  
山口 薫 1975-80                      野村 茂治 1981-  
村上由紀子 1990-

教育学

島崎 郁 1951-78                      東郷 豊治 1952-68  
小林 恭 1979-

教育心理学

大澤 春吉 1971-83                      苧阪満里子 1985-

社会学

林 彌富 1974-                      小林 一穂 1989-

文化人類学

Richard Zgusta 1990-

自然科学

寺阪 英孝 1949-57                      大阪大学理学部教授、幾何学講座

数学

水鳴香東士 1949-77                      兼田 英二 1979-

物理学

中村 明 1982-

化学

油谷 朝子 1972-

生物学

世古口雄三 1967-83

井上 寛 1987-

保健体育

原 利一 1949-74

鳴川 六司 1959-

辻 忠 1965-

松下 唯夫 1974-

沖本 昭子 1977-

小松 敏彦 1986-

(勝藤 猛)

## 20. 保健体育科目

### <体育施設>

花園(東大阪市にある全国高校・社会人ラグビー選手権の近鉄花園ラグビー場横)に33,000平方m(学生寮を含む)の運動場があった。ただし授業のために使ったことはない。

上八学舎の体育施設といえば、実に狭い、ただ広場があるとしか言いようのないグラウンド(中に金網で囲った立派なクレートニスコート1面。これは硬式庭球部OB会が寄贈したもので、授業では使用禁止)と、屋内施設として通用門西側に、これまで小教室として使っていたか、銃器庫だったかの部屋に卓球台一台を置いて卓球場と称していたものとの二つしかなかった。男子学生は勿論のこと、少人数であったとはいえ女子学生の更衣室すらない状態であった。

年度始めの授業内容説明会で、グラウンドは何処に、更衣は何処で、との質問が毎に答弁に困ったものだ。

1962年~1963年頃、前述の卓球場が取り壊され、管理・研究棟として、地下1階、地上4階の建物に建て替えられ、地下に食堂・売店が移転したので、「烈士之碑」横の食堂棟が半分は柔道場に、残り半分は卓球場(5台)として使用できるようになり、また厨房室が男子更衣室に、体育研究室横のレントゲン室が女子更衣室にと改良され、以前と比較すると幾分体裁が整ったという感じがした。

1979年箕面学舎に移った当初は、400m 6コースのグラウンドだけだったが実に広々としたところで思いっきり身体を動かすことのできる施設を得て喜んだものだ。施設も予定通り年々整備され、中でも一番感動したのは、体育館建設に伴う地鎮祭である。ドシャ降りの雨のなか当時の山田善郎図書館長とわれわれ体育教官が出席し、永年の夢が叶う嬉しさで一杯になった。その後クレートニスコート(5面)、バレーボール(3面)兼バスケットコート(2面)、これには夜間照明施設が完備されている。また全天候テニスコート(2面)、

ゴルフ練習場、洋弓場が整備完成した。1988年基準面積改正に伴い第二体育館が建設された。残るはプール建設のみとなったが、安全・管理の両面を考え屋内プールを希望しているので、なかなか要求が入れられず今日に至っているのが体育施設の現状である。

#### <用具>

1958年当時の授業はバレーボール、バスケットボールが主であったように思う。授業中に使用するボールは10個位で、それもゴムボールであった。戦時中ならいざ知らず戦後10余年経った今頃ゴムボールとはと呆れもした。また面白いことに、ピン球、テニスボール個々に通し番号がつけられてあり、ラケット類にも通し番号に加え大学名の焼判が押されていた。これについては予算、管理面から考えれば無理もないことを後日知った。予算は少額、用具は全て備品扱いとなっていた。一般的には機械・器具は備品であってもボール類は消耗品扱いではなかったかと思う。

これらも年次を追って改善され、現在は実施種目、1部8コース、2部5コースに使われる用具は種目により多少異なるが最低2人に1つ、いや1人に1つは持てるようになっている。本当に有難いことだと思う。

#### <授業>

1958年頃の実技授業は、1、2年男女合併で、場所的なこともあって限られた種目しか実施できなかった。前期はバレーボール、テニス。後期は11月初め頃まではテニス、以後バスケットボールといった具合であった。バスケットボールのときは、移動式ゴールであったので学生5、6人の手を借り簡単に所定の場所までゴールの移動は可能であったが、バレーボール、テニスとなればそうはいかない。支柱は嵌め込み式ではなく、支柱を引張る金具を木槌で地中に打ち込まねばならない。また一日の授業終了時には、クラブ活動に支障のないよう引き抜かねばならない。その繰り返し作業も大変だったし、ライン引きもしかりである。

こんな話もあった。1962～63年頃、管理・研究棟建設のため運動場が資材置場となり実技授業の場所がないので馬場町の大阪市立体育館を借用して実施した時期があった。体育館内部施設を借りたのではなく、外部のバレーボール・バスケットボールコートだけを借りたようだ。設備が整っているのでボールさえ持ち込めば授業ができる。準備運動を終え、ゲームに入る。余分の杭打ち、ライン引きもする必要がなく時間一杯汗を流すことができた。ところがあるとき途中で雨が降ってきて以後使用不可能となり、出欠をとってそのクラスを帰らせた。次のクラスがやってきたが、雨のため授業ができないので出欠だけをとって帰ってもらうと言うと一斉に電車賃の請求の声が出た。出せる訳がないと押問答をしていると、教場変更の説明のとき、上八～馬場町間の市電代は学校側で負担するといわれたとのこと。そんなことは私に知らされていない。後日、言った人に説明をうけてくれといっ

て、出欠点呼だけで授業を終了したこともあった。しかし現在は体育研究室の陣容も整い、施設も整った。これまでの授業の組立てを替え、前半・後半と一部分種目が違うが、種目選択制にし、より多くのスポーツ種目を経験してもらおうと同時に理解を深めてもらうように2年間で4種目を選択することを原則として、1部は8コース、2部は5コースを設け、1種目1教官、多少人数に差はあるが1コース40名程度で実技授業を実施している。施設・用具も充分あるので学生諸君も大いに活躍してくれている。

#### 〈短期大学部・二部〉

1958年4月、夜間の短期大学部が併設され、中国語、英語、アスペニア語の三語学科で夜間において開講されることになった。

保健体育科目は、4月～12月までが実技授業で後は体育理論の講義であった。実技授業で使う運動施設関係については既書に書いた通りで、ただ違う点は、照明設備である。完備されておらず要求をしても、電気許容量の点で難かしいといわれ、前期授業は日没もおそくなんとかできたが、後期になると日没が早く隣接家屋の灯りに助けられて授業を進めたことが多かった。

一期生が三年になった時のことと記憶しているが、数名の学生が来て研究室で雑談中、卒業旅行がないのか、もしなければ何かを企画実施してほしいといった。学生は、夫々に職をもっているのに、何時、何処で、どんなものかと考える中で、経験の余りない、日数のかからない適当なものと考えた結果、滋賀県マキノスキー場での「日帰りスキー教室」をやろうということになった。早速、滋賀県スキー連盟に指導員の派遣、医師、現地での休憩小屋、バスの配車等を手配し実施要項を作成、全学生に配布した。参加者は約300名だったと思う。当日は朝6時に正門に集合・点呼、6時30分出発。現在のように名神高速もなく、ラッシュアワーにかかりながら10時過ぎ現地に到着、開講式、指導員の紹介、諸注意、準備運動のあと、5～6名の直滑降テスト。この結果によって班別をし実習となるのである。約1時間の昼食休憩後4時30分まで班別指導となるが、終了近くなると技術も少々上達し面白くなるのか閉講式の集合合図にもなかなか応じてくれないで困ったこともあった。無事1日の実習を終え帰り着くのが大抵10時過ぎであった。記憶では7回実施要項を作成したが、うち2回は積雪不良のため中止。1回は積雪不良で場所を比良山スキー場に替え実施したが、リフト、ケーブルと乗り継がねばならないので到着までに可成りの時間を要した。不幸なことに当日は午後から強風、吹雪。流れる放送はリフト、ケーブルが運行停止になる可能性が強いので早い目下山してほしいとのことで実習1時間弱で中止。バス、リフト、ケーブルに乗りに行っただけの感があった。

1965年、短期大学部が二部に改組され、2年位経った頃、学生から体育大会を開きたいとの要望があった。施設探しに一苦勞をしたが、高津高校、外大花園グラウンド、大阪城競技場を借りることができ、青空の下で走り廻ることのできない二部生は、この日ばかり

は一杯の汗を流し大いに活躍をしたものだ。語学科対抗競技であったため、大語学科の英語学科が常に優勝していた。

また、日曜日に体育実技授業を3～4年実施したことがある。

11月中旬以降の運動場での授業は、本当に辛かった。授業での種目は主にバスケットボールで試合が中心、1試合10～15分で行うが終って次の試合までの待ち時間が長い。風邪をひかせては大変だと思ひ何か良い方法がないものかと考えた結果、二部教務係、学生と話し合い日曜体育実施となった。4月29日、5月3日、5月5日の休日の外に2回、計5回実施することとし、学生はそのうち3回は必ず出席することとした。学生は辛かっただろうが出席率は満点だったと思う。1979年9月、箕面学舎に移転したときはグラウンドは立派にあったけれど照明設備ができていなかったため上八学舎での日曜体育が非常に役立ったと思っている。同時に箕面の冬は大阪市内よりも厳しい。体育実技はなかったものの他教科の授業がなされていたので当時の学生は身体を馴れさせる機会があってよかったのではないかとも思っている。現在は、暑さ寒さなんのその1種目1教官、5コースに分かれ大いに活躍している。

#### 〈体育研究室の陣容〉

故 原 利一 (1949.5～1974.4定年退官、1989.9.27死去)

鳴川 六司 (1958.4非常勤、1959.10～)

辻 忠 (1965.4～)

松下 唯夫 (1974.4～)

沖本 昭子 (1977.10～)

小松 敏彦 (1986.10～)

研究室では個人の研究は勿論のこと、現在、1、2年の体育実技受講学生に年2回体力測定、生活実態調査を実施し、学生の体力、健康、食生活面に意を注いでいる。また初の試みとして1991年9月中旬より、教職員を対象に2ヶ月に1回、C棟2階運動生理、体育方法学の二教室で体力、健康、食生活の測定調査を実施し、年老いても健康で明るく楽しい生活を送られるようその処方箋作りに研究室では大いに張り切っている。

#### 〈学外・対抗の諸行事〉

リレーカーニバル、外大スキー教室がある。その他、詳細不明だが、移転時倉庫の整理をした際、駅伝競技、球技大会を実施したのではないかと思われるゼッケンが見つまっている。

### 〈リレーカーニバル〉

故原利一教授の、この狭い運動場では何も競技らしい競技ができない、せめて年に一度位は学生に青空の下で、伸び伸びと運動・競技をさせてやりたいとの念願から、1958年7月3日、当時日本一を誇った中百舌鳥陸上競技場で、全学休講とし、教職員・学生参加のもと第一回競技会が開催された。

名称のとおり、リレー種目が主で、100㍍、400㍍、教職員種目とあり、午前中は各種目の予選で、中休みと言っては失礼だが、この時間帯に教職員種目が行われた。午後からは決勝となっていた。

体育教官を中心に陸上競技部員等を夫々部署に配置し全国大会同様に実施された。競技は、語科対抗で、出場選手は種目別、語科別に色分けしたゼッケンをランニングシャツにつけ頑張ったものだ。また応援団賞なるものを設け、選考委員が各語科の応援風景を採点集計し賞を出したものだ。実に見事な競技会であったと思う。

出場選手は一人一種目と決められていたため、選手選考に当っては英語学科のような大語科は別として小語科においては大変苦労したのではないかと思う。しかし結果成績は大語科必ずしも強からずであった。なお、箕面移転後は実施していない。

### 〈外大スキー教室〉

本学のスキー教室は原利一教授によって創始され、今日に至っている。昭和26年1月に有志8名の男子学生によって、長野県野沢温泉スキー場において初めて行われた。参加者の熱望などから冬の野沢温泉スキー場だけに止まらず、春に志賀高原スキー場でも行われるようになった。

しかし、オイル・ショック以後の物価高などの影響はさけることができず、昭和51年から春のスキー教室を行うのみとなった。概要は次の通り。

- 昭和26年1月 野沢温泉スキー場において初めてスキー教室を行う(昭和50年まで毎年実施)。
- 昭和28年1月 女子学生2名初参加。貸スキーの購入。
- 昭和29年2月 片桐仙之介らの指導で(発哺-大沼地-熊の湯)、スキーツアーを行う(昭和31、32年にも実施)。
- 昭和33年2月 熊の湯-笠岳-山田温泉スキー場へのスキーツアーを行う(昭和34、35、36、37年にも実施)。
- 昭和38年1月 大学独自のスキーバッジ・テストを始める。
- 昭和38年2月 山田牧場スキー場(昭和44年まで毎年実施)と山田温泉スキー場で行う。
- 昭和41年1月 全日本スキー連盟バッジ・テストを毎年受ける(昭和49年1月中止)。
- 昭和44年2月 山田牧場豪雪のため、バス路を全員山田温泉までツアー。

大回転競技会を行う(昭和49年まで毎年実施)。

昭和48年1月 野沢温泉スキー場がスキー不可(除く上の平)のため、冬春のスキー教室を山田温泉スキー場で行う。

昭和48年2月 原教授定年退官記念パーティーに卒業生参加(後藤、矢追、森田、秋山、横山夫妻、谷山、川勝、稲垣：敬称略)

昭和49年2月 原教授定年退官。第二部学生2名初参加。

昭和52年2月 スキー資料館見学(野沢温泉スキー場)。

昭和54年2月 上の平スキー場へ全員ツアー。貸靴初購入。

なお、昭和51年からのスキー教室は、野沢温泉スキー場、山田温泉スキー場で隔年毎に開催している。

#### <大阪外国語大学・東京外国語大学定期競技大会(通称東外戦)>

両外大挙げて、一堂に相集う定期競技大会は1949年復活第一回が大阪千里山関西大学グラウンドにおいて、野球、硬式庭球、ラグビーの三種目で開催された。以後実施種目の追加があり、現在オープン種目を含め、男子14種目、女子8種目の22種目で総合優勝が争われている。平成3年までの成績は大阪の21勝16敗6分けである。

種目別の定期戦で数十年続けている大学は数大学あると思うが、二大学で22種目を同一日に一ヶ所で43年も続けているのは大阪・東京両外大のみであろうと思う。今後益々発展してもらいたいと思う。また昨今の入学者男女比は、女子70%と高く、男子種目特に団体競技種目については今後一考を要するところであると考ええる。

#### <研究・授業概要>

最後に1992年3月段階での現職の体育教官の研究テーマ、授業概要等について紹介しておく。

鳴川六司は、青年・中高年の健康管理に関する研究を行う。実技では主としてバレーボール、バスケットボールを担当し、『六人制バレーボール審判技術』、『地域・競技力向上指導者C級用新訂バレーボール指導教本』や、『体育実技教程』他の著書がある。概論では我が国のスポーツの発展過程を概説し、日本人の体力の現状、身体運動が体力に及ぼす効果等について解説する。

辻忠は、ライフスタイルと健康指標との関連を研究テーマにする。「大学生の生活時間構造の解析」と題した医学博士の学位請求論文がある。体育概論では、運動と神経系・筋肉系・循環器系などの運動処方、栄養、温熱環境の適応、生体のリズム等を、スライドで解説する。実技では、身体状況をチェックしながらソフトボール、サッカー、バドミントン、テニス等を、基礎・応用技術にわたって指導している。

松下唯夫は、体育方法論の研究をテーマにかかけると同時に、古代・近代スキーの起源に

ついて関心を寄せ、「アブ・ハミド旅行記による北ユーラシアのスキー」、「北ユーラシアのスキーと日本」、「菅江真澄の紀行文にみる立ちソリ(スキー)について」などの論文がある。他に方法論にかかわる『楽しくすべろう』、『ジャズ体操』、『親と子のスキー教室』、『ザ・スキーキャンプ』などの共著がある。

沖本昭子は、体育教官の中で唯一の女性教官であり、女子学生の健康、運動、栄養に関する調査研究をテーマにし、体操の動きづくりにも力を入れる。「健康、体力、運動、栄養に関する調査」他の論文があり、講義では女性の発育、発達に伴う運動とのかかわりを解説する。実技では、ジャズ体操、体力づくり、軽スポーツ、バドミントンなどを担当している。

小松敏彦は、体操競技での各種目における運動技術の運動力学的研究をテーマにかかげ、「大学周辺における坂道歩行のエネルギー消費量」、「動作開始のタイミングと呼吸・心電図パターンの関係」等の論文がある。実技ではソフトボール、サッカーと、体力向上を目的とした軽スポーツコースを指導する。体育概論では日常生活やスポーツ場面における健康・体力の捉え方を、体力科学の立場から、スライド、ビデオを用いて解説する。

(鳴川 六司)

なお、故原利一教授については一般教育・教職・共通講座専任教官の第1世代の項に紹介文がある。

## (2) 語部・語学科第二部

### 1. 中国語学科

<1957年>

上八の旧校舎の校門わきに数本の桜があった。毎年、新入生を迎える頃になると、絢爛と花を咲かせ、またその散りぎわの花吹雪が見事であった。私が別科の非常勤講師として大阪外大の門をくぐったのは、1957年(昭和32年)であったから、別科が開設されて7年目であった。

<研究室>

その当時は正面入口の廊下を左手にとった一階の奥まった二部屋が中国語の研究室で、ひとつの部屋に、学科主任の金子二郎先生、伊地智先生、辻本先生の机が隣りあって並んでいた。隣の政経研究室から、何かあると、芝池先生や住田先生がよくフラリと入ってみえた。あるとき芝池先生が、棒をたてたような調子で憤慨されていた(それが何についてだったのか忘れてしまったが)。金子先生は鉛筆を削りながら、日常茶飯事のことを聞いて

いるかのように、微笑されながら屈託がない。卑近な例で失礼だが、これを目玉焼でたてるならば、まず黄身をめぎしてサククリ箸に入れられるのが金子先生であり、自身の端から順次割いていかれるのが芝池先生という風で、まことによく調和のとれた家族的な雰囲気があった。伊地智先生が、いつも無雑作にかぶって愛用されていたのが、よく手に馴染んだベレー帽であった。それから後には小林先生が、また、真新しいフェルトのベレー帽を大黒さまの頭巾のように、頭にのせて歩かれるようになった。

別科が終る頃には、あたりはもう宵闇がせまっていたが、上六界限は華やかに活気づいて賑っていた。裏通りには飲み屋が軒をつらね、真夏の別科の帰りなどには、とりわけ住田先生にとっては、一杯の冷えたビールの誘惑がまっていた。

別科が開設されたのは1951年であったから、中華人民共和国が成立してから2年後にあたる。当時は女性で中国語を専攻しているという、「へーッ、またどうして」と聞き返されたものである。日中間はまだ暗い谷間にあった。しかし、戦前・戦中の中国観は、もはや崩壊してしまっていたので、どうしても現実に根ざした中国観を、新たにたて直す必要があった。そうしたとき、大阪外大でいちやく別科を開設して、中国語講座を一般市民に開放されたことは、まことに意義深いことであった。

#### <新中国文学>

この頃、私たちの研究室では『新中国文学』というささやかな雑誌を出していた。左介「回家」、鐘涛「営参謀長」、劉真「春大姐」といった作品を『人民文学』から翻訳、紹介したり、解説をそえたりした。また魯迅作品の会読会ももった。これは当時、名古屋大学教授宇都宮清吉氏の『漢代社会経済史研究』をモデルに、金子先生が構想された「魯迅総合研究」の一環として、始められた作業であったが、この研究はその後どうなったのか、あいにく私の手元には、それらしいものが残っていない。

#### <1958年>

別科が外大短期大学部として、発展的に解消されたのは、1958年(昭和33年)であり、この年は、中国では人民公社が創設され、百花斉放運動が高まりをみせた中国現代史の節目の年にあっていた。

とはいえ、当時の短期大学部中国語科に学ぶ誰もが、中国に関心あるいは興味をもっていたというわけではない。むしろ経済的にまたは個人的な事情などのために、昼間は定職につくかアルバイトをして働きながら、社会に出るためのワンステップとして、夜間部に通うといった動機が一般的であった。しかし彼らは夜間部で学ぶことの自覚と目標をもっていたので、教室でもそれぞれが真摯なまなざしで、はっきりとした自己主張をもっていた。

#### <1965年>

短期大学部は第8回の卒業生を送り出してから後、外国語学部第二部へと解消された。1965年(昭和40年)のことである。ときあたかも中国では、その後10年余にわたって吹き荒れた文化ファシズム—文化大革命の始まった年であった。やがて日本にも学園紛争をまき起して全国的に波及した。大阪外大も例外ではなかった。

#### 〈大学紛争〉

善段は教室でも、あまり目立つことのなかった学生が、にわかに白鉢巻姿で壇上に立ち、とりまく学生たちを前に叫び始めたのには、ただ傍観するばかりで言葉を失った。さらにバリケード、新館占拠、新館封鎖と事態は進行し、不自由な学外授業を強いられながら、同時に深夜にまで及ぶ団体交渉が続けられるなど、こうした異常な状況のなかで、二部学生の中から噴き出した不満や批判は、「外大の学問とは何か」という鋭く重い問いかけであった。二部中国語の研究室においても、悪戦苦闘の日が続き、ついに私はダウンして入院する始末となった。まことに腑甲斐ないことにストレスよりおこる胃潰瘍ということであったので、この紛争を語るには、私はどうやら失格のようである。その後も事態の収拾を図るために、将来計画委員会のメンバーの先生方をはじめ教職員、学生が力を合わせ地道な息の長い努力が重ねられたのであった。

#### 〈移 転〉

このころ、牧祥三学長のもとに、北摂連山の南端、箕面市への移転が決定されたが、これには二部の学生側からかなりの抵抗があった。とはいえ、あの狭隘な上八学舎に比べ、間谷の緑にかこまれた広大なキャンパスは、さすがに開放感に満ちていた。しかし、移転にともなって解決すべき問題は少なくなかったが、二部学生にとって、とりわけ厳しい問題は通学通勤(交通)の問題であった。アルバイトや仕事を終えてから、1時間以上もかけて箕面の新校舎に通うことは、かなりの負担であった。将来計画委員会二部専門委員会では、メンバーが夜は10時近くまで小野原のバス停に立って、下校時の通学状況を調査する一方、始業時間のくり下げなど、その対応におおわらわであったが、学生側もよく耐えて頑張ってくれたと思う。そうして数年後になると、マイカー通学の学生が増え、逆に教師が最寄りの駅まで送ってもらうケースも多くなったのである。それにつけても、懸命に駆けつけた授業が休講であったときは「砂をかむ思いがする」とはある卒業生の言葉である。教員の側にも急病や急用はありうることだが、二部の授業にはこうした状況への心くばりを忘れることはできないであろう。

#### 〈外国人教師〉

ようやく文化大革命が終結し、新しい時期に入った中国から1982年、人民服に威儀を正した孫鈞政先生が外大に来られて、二部の授業にも会話と作文を担当されることになった。これは本学から当時の中国教育部(現、国家教育委員会)に依頼し、派遣して頂いたもので

あり、2年毎に1名の漢語教員が選任され、孫先生の次には断髪の李景先生(女性)が派遣された。この頃にはまだ外国人専用の宿舎がなかったので、一般のマンションを借りての生活であったが、畳の上に座って、冬は電熱のやぐらこたつに膝を入れる生活がとても気に入られて、帰国されてからも、しきりに畳の生活を懐かしがっていた。温厚な先生であった。

終わりに、長らく学科主任をつとめられた小林武三教授が1987年8月に、そして、中国現代当代文学にご出講を願っていた第一部の相浦杲教授が1990年12月不幸にも逝去された。心より冥福を祈り、筆を措きたいと思う。

(中川 俊・元中国語学科教授)

## 2. 英語学科

二部英語学科の歴史は、1951年に開設された「別科」にさかのぼる。別科というのは社会人のための外国語教育と銘打った、修業年限1年のコースであったが、学外から講師を招いて適当にお茶を濁しておくことが多かったようである。この別科を発展させて、1958年には3年制の短期大学部が設置される。専任の教員が置かれ、カリキュラムも一応の整備をみるが、それは社会人に現職教育を、という建前から、英語の実技や商業英語を中心とする、技術主義的傾向の強いものであった。1965年になって、短期大学部はさらに5年制の二部に「昇格」するが、それは教育内容そのものの充実や、学生の要求に促されて起こった変革というより、「短大」教員の学内差別に対する抵抗が、大学上層部の拡張主義と結びついて実現した、上からの改革という性格が強い。貧困な文教予算の下で、国立大学は競って学部や学科の増設を企て、それを通じて人員や予算の拡大をはかる。教授会は勤労者教育への情熱にもえて、短大の二部昇格を承認したわけではなかったのである。教授会にはむしろ根強い反対の空気があり、それを押し切って昇格を実現させた大学上層部の意図は明らかだった。二部がいかに大学拡張のための手段視されていたかは、例えば二部教員の追及を受けるまで、二部に割り当てられた教官定員を一部に流用しようとしていたという事実一つを見ても分かるだろう。

このようにおよそ非教育的な便宜主義によって生まれた二部は、誕生の瞬間から学内において敵意と蔑視にさらされることになった。人員と予算の上では二部の恩恵に浴しながら、二部学生に対する教育にはきわめて冷淡であり、むしろこれを厄介視するのが教授会の大勢であった。二部に教員を採用する場合には、「当分御苦労だがいずれ一部の方へ」などという口約束が、半ば公然と行われた。二部の問題が教授会で討議されることはほとんどなく、教授会一本化などといっても、二部教員は事実上「お客様」にすぎなかったのである。

開設当時の二部英語学科は、文字どおり「夜学」のイメージそのままの、暗く冷たい空気に包まれていた。初年度の入試が一部の合格発表後に行われたこともあって、入学者には一部受験に失敗した非勤労学生が多かった。このことがいっそう学生たちのコンプレックスを強め、相互の結びつきを困難にしたように思われる。サークル活動も低調だった。終了のベルが鳴り終わると、学生たちはいっせいに姿を消してしまい、そこそこにむらがって談笑するという風景も、当時はほとんど見られなかったのである。

だが学年が進行し、学生数がふえるにつれて、二部英語学科の沈滞したムードにも、次第に変化のきざしが見えはじめる。ESSや演劇部などのサークル活動が根を下ろしはじめ、大学祭に英語劇を上演するクラスも出てくるようになった。当時は各学年とも毎週5ないし6コマの英語実習があったから、クラス単位で行動する機会が多く、従ってそこでの人間関係は今よりも濃密であったといえる。コンパやピクニックがひんぱんに行われ、クラス全員による語劇上演など、むしろ当然のなりゆきだった。クラスは二部生にとって、大学における基本的な生活単位となった。何となく大学になじめずにいる学生たちも、クラスでだけはのんびりと落ち着くことができた。その限りにおいて初期の厳格なクラス編成は、二部学生を大学に定着させる上で、大きな役割をはたしたのである。

ところがようやく活発化しはじめた自治会活動の中で、学生が真っ先にとりあげたのが、外ならぬこのクラス制度であった。それは学生にとって、外大カリキュラムの貧困を象徴するものだったのである。二部発足当時のカリキュラムは、ほぼ一部のそれを踏襲していた。卒業に必要な単位数は、一部とほとんど同じ144単位(45科目)であり、その中心をなすのが学年進行によるクラス編成の実習科目(講読・作文・会話・LL)であった。ほんのひとにぎりの講義科目(英語学・英文学)が、かろうじてカリキュラムに大学らしい彩りをそえている程度で、もちろんゼミもなかった。しかも開講科目のほとんどが必修科目であり、かつ学年進行制が厳格に守られていたから、学生は常に留年の不安にさらされ、教師は教師で落第生を出さないための成績操作に四苦八苦するありさまだった。このような貧弱で硬直したカリキュラムは、外国語学校創立以来の伝統をうけつぐもので、それは戦後外事専門学校が外国語大学に生まれ変わっても、大きくゆらぐことはなかったのである。その中心をなす発想を一言でいえば、外国語大学における教育目標は、実用的語学力の養成につきるということになろう。そのような語学力の養成には、たえざる反復練習以外に方法がなく、従って語学実習のコマ教は多ければ多いほどよい。学則にうたわれた外国の「文化一般」に関する「教授研究」にしても、それ自体が目的なのではなく、むしろ語学力を補強するための手段にすぎない。このような発想につらぬかれた伝統的なカリキュラムが、二部発足にあたってほとんどそのまま移入されることになる。勤労者のための大学教育とは何かを改めて問い直す姿勢が、教授会に全くなかった以上、それは当然のなりゆきだった。その際例えば余暇の大半を大学で過ごす二部学生の場合、時間割を必修科目で埋めれば埋めるほど、自由な学習や読書の時間が、いや予習の時間すらなくなっていくのだという明白

な事実、教師は誰一人気付かなかったのである。

学生たちはこのようなカリキュラムに対して、次第に不満を覚えるようになった。こんなことで、一体何を身につけて卒業できるのかというあせりや、はたして卒論が書けるかというもっと現実的な不安が、徐々に学生たちをカリキュラム改善闘争に結集させていく。彼らは最初、講義科目の増加を要求した。「大学」に入学したつもりの学生を待ち受けていたものが、高校の延長にすぎない英語実習であったとすれば、学生がせめて講義の中に大学らしさを求めようとしたのもむりからぬことであった。これはやがて「卒論を書ける授業を」という要求に発展し、その中で学生たちは、言語・文学・経済・法律等のコース制に基づくカリキュラムの再編を提案してくる。この運動は、二部英語学科における社会科学系教官の採用という、それなりの成果をもたらしたものの、カリキュラムの根本的な変革には至らなかった。提案そのものが多分に他大学の模倣にすぎず、内面的な必然性に乏しかったから、「外国語大学は経済学部ではない」というきまり文句によって象徴される、あの分厚い壁を打ち破ることはできなかったのである。

だが69年から70年にかけて、事態は予想外の早さで大きな進展をみせる。いわゆる大学紛争である。69年1月、過激派学生によって、大学本館がバリケード封鎖される。これがいったん解除された後、4月から5月にかけて激しいアジテーション(暴力行為を含む)が続き、6月にはついに全学バリケード封鎖によって、もはや授業の継続は不可能となった。警察力の導入によって封鎖が解除されたのは、やっと10月になってからのことだった。4カ月ぶりに学園に戻った学生たちを迎えたのは、天井の焼けただれた廊下や窓ガラス一いや時には窓わくさえもなくなった教室だった。そうした状況の中で、二部英語学科の学生たちは、カリキュラム改革の実現に向かって行動を開始する。すべての科目を学生の自由な選択にゆだねよという最初の要求は、当然のことながら教師側の強い抵抗に会い、白熱した論議がかわされるうちに、必修科目を系統的に配列し、かつ学生案より英語実習を強化した英語学科案ができあがる。これはさらに二部全体の討議にかけられ、他語学科の案とも調整をはかった上で、二部としての統一的なカリキュラム改革案にまとめあげられた。それがいよいよ教授会にかけられると、予想どおり悪意や無理解にみちた質問が相次いだ。二部学生の問題に、教育者としてまともに向き合おうとしなかった教授会のことである。実習科目を大幅に減らしたカリキュラム案が、外国語大学にあるまじき暴挙と受け取られたのもむりはない。「二部生は余暇の大半を大学ですごすのだから、必修単位を減らすことなしには、自習のための時間すら生みだせないのだ」という説明を受けて、今更のように驚く老教授の表情が印象的だった。が、ともかく、改革案は教授会を通過した。それは外大二部にとって、一つの決定的な瞬間であった。なぜならそれは、大学側の都合によって生まれた二部が、真に学生のための大学として、第一歩をふみだすことを意味したからである。

だからといって、二部英語学科の前に平坦な道がひらけていたわけではなかった。新カ

リキュラムがようやく軌道にのりだした頃、我々は次の大きな試練に直面することになった。79年、共通一次試験の導入と、大阪府北端箕面市への学舎移転である。科目数の多い「共通一次」は、高卒後年数をへた成年社会人志願者の受験をいちじるしく困難にするだろう。一方都心から1時間以上もかかる僻遠の地への移転は、大阪市内に職場をもつ勤労学生の通学を事実上不可能にする。この二つの難題を前に、二部は存立の基盤をおびやかされ、大学紛争以来の危機感に包まれることになった。「共通一次」に対しては、それを免除する推薦入学を実施することできりぬけることができたが、箕面への移転は上八学舎への通学を前提に生活設計を行ってきた在學生にとって、ほとんど解決不可能と思える深刻な問題だった。箕面へ行けば二部はなくなるというのが、多くの教師と学生の実感だったのである。

だが事実は予想に反し、二部は二つの試練にみごとにたえて生き残った。とりわけ英語学科は、推薦入学に続いて84年に導入された社会人特別選抜制度によって、主婦を含む多くの優秀な社会人学生を迎え入れ、生涯教育の場としてめざましい変貌をとげた。講義でも実習でもゼミでも、推進力となったのは、強い知的関心と明確な入学動機をもった、これら新しいタイプの学生たちだった。主婦として入学し、卒業後高校教員として第二の人生を歩みはじめたNさんは、「現役組から年輩まで年齢層も幅広く、昼間仕事を持つ学生も多い二部で、真剣に学ぶ人達の影響を受け、充実した五年間でした」と回想している。

以上二部英語学科の歩みを、学生たちの動きを中心にふりかえてきた。これをみても分かるように、我々はいわば自らを一部から異化することによって道をきりひらいてきたということができる。その意味では、今日大学改革の動きの中で、二部が昼夜開講の「夜間主コース」として、一部と同化することによって延命をはかろうとしているのは、何とも皮肉なことと言わざるをえない。

(正木 恒夫)

#### 二部英語学科歴任教員一覧(短大時代から)

氏 名	在 任 期 間	専 門 分 野
嶋田 昇平	(1958. 4 . 1 ~ 1970. 3 . 31)	アメリカ文学
上山 政義	(1958. 4 . 1 ~ 1988. 3 . 31)	イギリス文学
金山 崇	(1961. 4 . 1 ~ [1965. 3 . 31一部へ])	英語学
竹中 靖治	(1961. 4 . 1 ~ 1978. 3 . 31)	イギリス文学
鶴野 清信	(1962. 4 . 1 ~ 1973. 4 . 1)	貿易英語
正木 恒夫	(1966. 4 . 1 ~ )	イギリス文学
好田 實	(1967. 4 . 1 ~ )	英語学
上野 義和	(1968. 4 . 1 ~ )	英語学

氏名	在任期間	専門分野
中山 章	(1968. 4. 1 ~ 1975. 3. 31)	イギリス史
生方 郁子	(1968. 4. 1 ~ 1969. 3. 31)	アメリカ文学
森岡 孝二	(1969. 4. 1 ~ 1974. 3. 31)	アメリカ経済
斎藤 勝弥	(1970. 4. 1 ~ 1990. 3. 31)	アメリカ政治
池上 日出夫	(1970. 10. 1 ~ )	アメリカ文学
杉本 孝司	(1973. 4. 1 ~ )	英語学
二宮 厚美	(1975. 4. 1 ~ )	アメリカ経済
渡部 眞一郎	(1977. 4. 1 ~ 1981. 3. 31)	英語学
大橋 克洋	(1979. 10. 1 ~ 1992. 3. 31)	英語教育
岡田 新	(1981. 10. 1 ~ )	イギリス史
加藤 鉦三	(1984. 4. 1 ~ 1988. 10. 1)	英語学
大津 智彦	(1989. 4. 1 ~ )	英語学
オモテレ, オルレミ	(1991. 4. 1 ~ )	アフロアメリカ文学
山田 康博	(1992. 4. 1 ~ )	アメリカ政治

(好田 實)

### 3. ドイツ語学科

#### <短期大学部>

短期大学部ドイツ語科は昭和33年に中・英・西が出来たのに続いて、34年に仏・露と共に誕生した。それまでの別科では第一部(昼間)ドイツ語学科の教官が兼任の形で授業を行っていたのに対して、有職者に本格的な外国語教育をとの熱心な運動によって設置を認められた短大には3人の教官定員がついた。まず昭和35年4月にそれまで第一部助教授であった赤阪力が短期大学部ドイツ語科主任教授として就任し、翌36年4月に講師葉賀明(D25、京大独文卒)と助手布施俊夫(大D7)が採用され定員3名が揃った。授業時間数は1年が講義1、実習5の6コマ、2年は実習ばかり5コマ、3年は演習1、実習4の5コマ、計16コマ32時間であった。実業界から要望があつて出来た経緯もあり、当初は実習にドイツ語通信文や経済ドイツ語、3年の実習に時事ドイツ語を置くなど実社会に役立つドイツ語教育への工夫がこらされたが、僅か3年間ではある程度のレベルの語学力を身につけさせるのが精一杯で、どうしても語学教育が中心になっていった。ただ37年からはLLが出来、初年度から1年生は2回、2年目からは上級生に更に1回と「読み、書く」だけでなく、「聞

く、話す」にも大いに力点を置いたカリキュラムが作られた。授業の担当は前述の3教官の他、第一部よりヘルマン・ボーン、乙政潤の協力を得、その他近畿大の松内恵秀(D17)、関西大の丸山三友(D26、阪大独文卒)、桃山学院大の山内貞男(D1、京大哲学修士)等が出講した。

学生は初期はほとんどが有職の男性で熱心な真面目な人が多かった。卒業生の数は昭和37年の第1期生以降初めは定員30名に対して7名から10名程度と少ないが、教室内の人数はもっと多く充実していた。卒業するのが目的ではなく、自分の好きな語学を思い切り勉強しようとして来ていた人がかなりあった様である。若い教師が夏休み中も夜にドイツ語の読書会をやろうと提案すれば、毎晩熱心な学生が沢山集まって来る様な雰囲気があった。みんなのびのびと明るかったのは、彼らがある程度年配の社会人であったこともあるが、夜間学生の苦勞をよく理解し、誰に対しても親切にやさしく接した赤阪教授の人柄によるところが大きかった。

僅か6年ばかりしかなかった短大を前期・後期に分けるのもおかしいが、昭和37年以降の入学には高卒現役の若い人が急増し、同時に女子学生も増えた。若い人々の勢いはさすがに素晴らしく、卒業生も15、6名に増え、短大から一部(昼間)への難しい編入試験の合格者が幾人も出たし、他大学へ進学し、今では国立大学文学部の助教授になっている人もいる。

こうした向学心がますます募ってきた時期だっただけに、昭和40年春に短期大学部から5年制の第二部に昇格する時に問題が起こった。短大生たちは3年間勉強すれば充分と考えていたのではなく、大半の人はもっと長く勉強したいのだが、短大しかなかったからそこに入っていたのである。第二部に直ぐ第4年次用のクラスを作り、短大卒業生を4年生として入れて欲しいという即時編入の要求が短大全体から出てきた。しかし、この要求は、新設の大学には開設時第1学年のみを置く、という国立学校設置法のために結局実現出来なかった。昭和43年以降第二部に4年、5年の課程が出来てから、短大卒業生の懐かしい顔が沢山戻って来たが、何年ものブランクが語学的に打撃だったのか、あるいは昼間働いて夜に学ぶという生活のリズムが取戻せなかったのか、卒業論文を書いて卒業に至った人はあまり多くなかった。

## <第二部>

第二部では後期課程に入るとゼミを行い、卒論の指導をしなければならない。丁度この時期は第一部でもゼミ実現のための体制変革が行われていた時期だったので、ドイツ語学科第一部・第二部の責任者として、それぞれに学科主任は置くが、この学科主任を含めて全スタッフが第一部・第二部の授業を担当することとなった(ゼミ担当の教官の構成や人事の変遷については第一部ドイツ語学科史の項で述べた)。昭和43年春第二部最初の入学生が4年になった時、ゼミが2つ、そして翌年4、5年生が揃ったところで一挙に語学、文学、

文化、政経の4つのゼミが出来た。しかし、二部の場合は学生が昼間勤務の関係などで勉強に集中出来る時間が足りないせいか、ゼミ形式の授業に対応しきれず、十分な成果があがらないことが分ってきたので、3年生の実習でゼミの予備作業をすることにし、プロゼミナールという授業を作った。昭和47年には語学、文学、文化政経の3つのプロゼミが揃い、この体制が今日まで続いている。第二部の授業は一日に2コマしかなく、しかも月・水・金・土曜に限られているので(火・木は一般共通科目)、時間割の作成は困難を極めるが、それでも歴代の時間割担当教官の努力によって、可能な限りゼミに対応する講義や実習の授業が置かれ、また学生達が自分の関心に従って授業を選択できるように工夫が続いている。ドイツ語学科では全教官が区別なく一部・二部の学生を指導・教育し、一部の問題も二部の問題も等しく研究室全体でとり上げ、考えている。

第二部の第1期生は大変元気な人が揃っていた。学生らしい雰囲気満ち、皆仲が良く、立派なリーダーもいて、上々のスタートであった。しかし、いま卒業生名簿を見ると定員30名のうち卒業生は僅か5名しかいない。彼等が4年生の時に起こった紛争が大きく影響したのであろう。紛争自体も問題であったろうが、大学封鎖、休講が続いて通学のリズムを崩されたのも大きかったと思われる。仕事を終え、夜になってさあ大学へという生活は向学心に燃えて、張り切っている間に習慣化してしまわないと続かない。一旦途切れたら回復がなかなか難しい事は、所期の目的を果し、卒業に漕ぎ付けた人々の圧倒的多数がまる5年の人、つまり中断なく学び続けた人なのでも分る。

第2期以降卒業生は徐々に増え、多少の変動はあるが、大体10名以上、多い時には16名の卒業生を出して来た。大学の箕面移転が、特に就学条件の悪い二部生にどんな影響を及ぼすかは大いに案ぜられるところであったが、幸いドイツ語学科に関しては学生の努力にも支えられて、致命的な打撃とはならず、移転後最初の第11期生(昭和55年卒)こそ10名だが、翌年は15名と増え、第13期生(昭和57年卒)から第22期生(平成3年卒)までの間に5回も卒業生が20名を越えて、むしろ学生の定着率がどんどん上がっているのは喜ばしい。特に過去3年間卒業生数が連続して20名を越えているのは、学生定員の多い英語は別として、ドイツ語と中国語だけである。卒業論文に関しても、ゼミの中での指導が徹底し、テーマの選び方、作業の進め方に無理がなくなってきたため、途中で挫折する人が少なくなった。毎年何本か力作が出て、レベルも上がって来ている。

普通入試、推薦・社会人入試と異なった入試を受けて入って来るので年齢は様々だが、ドイツ語二部生は仲が良い。授業の予習もよく協力し合っているし、夜遅く授業が終わってからも、なお雑談している明るい声が聞えている。またお互いの車の乗り合いで交通の便の悪さを克服している仲間もいる。こうして大学が楽しいところと感じる人々が増えて来ていることも定着率を高めている一因と思われる。

クラブ活動も盛んでドイツ語二部から柔道、剣道の主力選手が出たし、現在もサッカー部、野球部で活躍している人々がいる。また文化系サークルでもオーケストラにリーダー

格の部員が出た。

二部生の卒業後の活動の評価は難しい。学生時代から在職していた会社で引き続き活躍する人々、卒業を機に転職し、それ迄の経験を生かして一層発展して行く人々、卒業後初めて正式に就職する人々があり、その区別がはっきりつかないからである。従ってここでは外大で初めて学んだドイツ語の知識を生かして活躍している人々にだけ触れておこう。第二部初期の卒業生で目立つのは、ドイツ語の先生になって教壇に立っている人である。第1期生に1人、2期生に2人、3期に1人、6期に2人、10期に2人とざっと数えても最初の10年間に8人もいる。この中には外大で学んだあと渡独し、長い年月にわたってドイツの大学で勉学に励み、遂にドイツの大学でドクターの称号を取得した人までいる。また一方、会社等に入ってドイツ語を使って活躍する人もかなりいる。日本の電機メーカーや証券会社のドイツ支店あるいは在ドイツ日本領事館で働いている人々で、この人々も外大で身につけたドイツ語をフルに活用していることになる。これからもこういう人々が沢山出て、国際社会で活躍してくれることを期待したい。

(布施 俊夫)

#### 4. フランス語学科

〈短大のころ〉

第二部フランス語学科は、第二部に属するほかの語学科と同様、短期大学部フランス語科を前身とする。短期大学部は昭和33年4月に中国語、英語、イスパニア語が、翌34年4月にドイツ語、フランス語、ロシア語が発足した。

短大にフランス語科が出来たころの外大フランス語学科の陣容は、畠中敏郎(F3)を学科主任として、中原俊夫(F8)、黒木義典(F15)の3教官であった(このころの学生定員は1学年25名)。このうち、中原俊夫が短期大学部専任として移籍し、その後任として田辺保(大F1)が採用された。

短大発足のころ専任教官は中原俊夫一名であったが、授業には他のフランス語学科の教官も協力した。所属の区別はあっても、昼間・夜間の授業を全員がなるべく均等に負担するというフランス語学科の光輝ある伝統は、すでにこのころに始まる。その原則は、30年以上を経て今日までつづいている。

36年4月に杉山毅(大F2)が、つづいて37年5月に松井三郎(大F3)が採用され、短期大学部はますます充実した。このころの授業はむろん今のようなコース制はなく、語学の実習を中心に行われていたようである。

6年にわたって計95名のフランス語科卒業生を出した短期大学部は、40年4月に募集停止となって第二部に移行する。短大の歴史はけっして長くなかったけれど、活気のある授

業が行われ、学生もよく教師の期待に答えていたと聞く。第一部の学生以上の学力の持ち主が何人もいたと、生前の中原俊夫がよく回想していたのを思い出す。

#### 〈第二部の発足〉

40年4月外大に第二部が設置されたころ、主任・中原を中心に、杉山、松井の3名が第二部フランス語学科のスタッフであった。その後、学年進行に伴って上村清太郎(F4)が着任し、42年11月に杉山が広島大学に転出したあと翌年4月に原田武(大F3)が採用された。そして、2年遅れて岩間正邦(大F14)が来任した時点で、第二部フランス語学科の陣容が整う。

この間、第一部の方では学生定員の増加で赤木富美子(大F1)が加わったから、このころ同時に、フランス語学科全体として第一部で4名、第二部で5名の教官定員が充たされたことになる。短大設置以前には3名しか教官がいなかったことを思えば、飛躍的な増加ではある。だがこの人数は今日も変わっていない。第二部フランス語学科は、44年の総定員法で助手定員1名をカットされるという不運にも見舞われた。代償として一般教育にポストを得たけれど、とくに第一部における学生定員と教官定員の比率からいっても、第二外国語としてのフランス語の受講者の数からいっても、教官数が何としても少ないとの感を禁じ得ない。

外人教官についていえば、第二部には専任の外国人教師が認められていないから、非常勤講師をお願いするしかない。フランス語の担当は第二部発足以来ずっと、ジルベール・デ・スカンフレールである。非常勤という立場にもかかわらず、ときには教室の外でも、専任以上に学生のために尽くしている。

#### 〈紛争の時期〉

おそらく外大70年の歴史のなかでもっとも痛切かつ衝撃的な事件は、44年に起こったあの大規模な学生運動であろう。全学封鎖、学外授業、学生のあいだの暴力衝突、機動隊の導入……。何しろ、前日までおとなしく授業に出ていた学生が(女子も)、突如としてヘルメットに手ぬぐいといういでたちで、角棒を持って教授会に乱入してきたのだった。

教官のあいだでも、いろんなドラマがあった。なるべくかかわりを持たないようにと、あまり大学へ出て来ない教官もいた。そんななかで、石を投げ角材を振りかざして今にも乱闘を始めようとする両派の学生のあいだに、涙を流さんばかりにして立ちほだかった教官もあった。その姿を、私はいつまでも忘れない。

学生との対応で苦慮したことは、第二部フランス語学科でも例外ではなかった。フランス語学科に自治会の活動家が何人かいたこともあって、容易ならぬ要求が次々に出た。授業を専門のコース別に再編成すること、後期の学習に向けて前期でプレゼミを設けること、などなど。いったん組みあげた時間割を、学生からの要求で、学年始めになって全面的に

組み替えたこともある。第二部の第1回卒業の人たちが、卒業論文を選択制にせよ、と申し出てきたのには大慌てした。提出間際になってからであった。卒論が書けるような指導体制が出来ていないという、それ自身はもっともな理由付けであった。

あのころは本当にいろいろなことがあった。大学で何回か徹夜をしたこと、日曜日まで大学へ出向いて学生と話し合ったこと。深夜(むしろ早朝)、会議が終わったあと、松井三郎に連れられて、黒木義典や田辺保と、当時寺田町あたりにあった松井のマンションを訪れ、夫人の手料理をご馳走になった記憶もある。

いくつかの行き過ぎがあったとはいえ、このころの第二部自治会の主張がすべて間違っていたとはいえない。その目指すところは、基本的に外大をアカデミックな学問の場にしようということにあった。文学、文化、語学の、コース別の学習という外大の大きな流れも、この時期に起源を発する。昨今では、教師が学問的な研究を勧め、かえって学生の方が言語の実用的な習得にこだわる傾向が一部分にみられるから、時間の経過とともに、すっかり立場が逆転したともいえる。

#### 〈世代の交替〉

さしもの紛争が鎮静に向かったあと、外大フランス語学科では教官の交替の時期に入る。47年春、畠中敏郎が定年退官、同年10月、田辺保が岡山大学へ転出、つづいてすぐ翌年3月には中原俊夫と上村清太郎が同時に定年を迎えた。

代わって、和彗則明、岡本弘次、山形頼洋の3人が、少し遅れて阿河雄二郎が着任、フランス語学科教官はすっかり若返った。フランス語学科ではひんばんに一部・二部の入れ替えを行っているから、誰がどちらの所属とも決められないが、畠中、中原の退官のあと、黒木義典が退官まで一部の学科主任を務めた。二部の方は松井三郎、原田武、赤木富美子、岩間正邦が交替して主任になっている。現在の学科主任は阿河雄二郎である。

54年4月に、思いがけず岡本弘次が不帰の人となり、1年おいて56年4月には、山形頼洋が大阪大学に転出した。代わって、大木充(院F2)と三宅祥雄がわれわれの同僚となった。

57年3月に黒木義典が定年より1年早く退官、少し遅れて60年4月に三藤博を迎えて、フランス語学科の若返りも一段落したかと思えた。だが、翌61年4月、不幸にも松井三郎を病魔に奪われたのは返す返すも残念であった。

短大時代からずっと二部フランス語学科とともに生きてきた中原俊夫も、平成元年11月、横浜で生涯を閉じた。フランス語のみならず、広くロマンス語一般の地道な研究に身を捧げた一生であった。その他界とともに、これらの言語に関する博大な知識が失われたと思うと惜しい。

亡き松井三郎の後任としては、62年10月、坂原茂を迎えた。

人が去り人が来るあいだには、キャンパスの移転という大事業もあった。上本町八丁目

の、あの倒産寸前の町工場にも似たおんぼろ校舎から見て、今はすべてが信じられないほど立派になった。だが、身を寄せあうようにして雑居の研究室で過ごした日々が、ときどきはなつかしい。燃えにくいダルマ・ストーブ(のちにはガスになった)のまわりで交わす雑談からは、ときに貴重な知識が得られた。10年近くも中原俊夫のそばで働く幸せに恵まれたのだから、もっといろいろのことを聞き出しておくこともできたのに。

#### <学生のこと>

移転の影響をもろに受けたのはむろん学生である。昔の外大は、何ととっても交通至便の場所にあった。授業以外の学生生活に、もう少し時間を割くこともできた。

もともと、学生の自主的な活動が最近とみにふるわなくなったのは、むしろ時代の変化によるところが多いのであろう。学生運動が華やかであったころは、教官が面と向かって学生から批判や難詰の言葉を浴びたり、授業のやり方について、あけすけなアンケートをやられたりした。だが、授業はあのころもっと活発であったと思う。ささやかながらクラス雑誌のたぐいや自主講座めいた試みも、しばしばあった(そういえば、自主講座に単位を与えよ、という要求を突き付けられもした)。昨今、講義をしていても、鋭い質問を受けることがすっかり少なくなってしまった。

もともと、変わり種の、型にはまらない学生が多いのが夜間学部の特徴なのだ。歳のいった社会経験豊かな学生、あえて通常のコースから外れた異色ある学生から、意外な発想、予期しない視点を示されたことも多い。

かつて短期大学部や第二部のフランス語学科に学んだ人々のなかには、私が知っているだけでも、NHKのフランス向け放送に携わっているI君、OECD日本代表部の現地職員として家族ともどもパリに定住している、頭文字でいえば同じI君、大手の商社で海外駐在員として働き、長年の功績に対して通産大臣から表彰を受けたT君など、国際的に活躍している人たちの名前が次々に浮かぶ。

そして一方、卒業後イスラエルへ渡ると言っていたバイク好きのT君、婦人服デザイナーを志していたY君、ちょっと気のきいた詩を書いていたYさんたちは、今どこでどうしているのだろうか。

今、私の手もとには最新の同窓会名簿がある。住所欄も勤務先も、空白のままの人が少なくない。目立った職につく必要は少しもない。今は消息不明のこの人たちも、どうか、それぞれの仕方で、この世界のどこかで、力いっぱい生きていてくれるように!

(原田 武)

## 5. イスパニア語学科

### 〈別科〉

我々の大学には、戦前古くから、昼間のコースに加え夜間の別科が設置され、向学の士に外国語学習の場を提供してきた。イスパニア語学科も昭和22年には別科に入学者を迎えている。

戦後、新制大学になってから、これが復活した。昭和26年度に1年制の別科として復活、昭和31年度から2年制となった。我々の学生時代に朝一時間目の授業があつて教室に入ると、前夜の別科の授業の名残りが黒板に残っていることも、時々あつた。語劇の準備で夜遅くまで残っていたら、別科の授業があるから、場所を他の教室に移せと注意を受けたこともあつた。このような別科にやって来る人たちは、おしなべて社会人ふうで、仕事を終えて急ぎ足で門に入って来る様子は、なんとなく昼間の一般学生とちがう雰囲気だった。こうした人たちも、やはり学生だなど思ったのは、そんな日の一日、六時ごろにやってきた何人かが、休講通知をみて踊り上がって喜んでいて、矢張り仕事のあと、勉強にくるといふような向学心旺盛な人たちでも、休講は嬉しいものなのだ、と我々の間で話したことを今でも覚えている。

### 〈短期大学部〉

このような別科を発展的に解消し、短期大学部が出来た。現在ある第二部六語学科の前身ということだが、発足当初からイスパニア語学科も設置され、初代学科長は当時の学部の学科長の国沢慶一であつた。国沢は、他に大学全体の仕事もしていて多忙だったにもかかわらず、短期大学部でも献身的に授業をした。角田理三郎をはじめ、学部の教官が全員出講した。学生定員30名の3年間の課程で、ようやく落ち着きを見せ始めた日本の社会、そこに生まれた学ぶ意気込みのようなものが感じられた。そのようなグループによくあることだが、学生の年齢もまちまちで、筆者のような助手クラスよりも年上の学生も数多かつたし、会社や研究所などで重要なポストに付いている人もいて、話をしているときなど、色々教えられることもあつた。

### 〈教員〉

教員スタッフでは、昭和35年に山崎俊夫が着任した。彼は、大阪外国語大学の前身の大阪外国語学校を卒業後、九州大学法学部と経済学部で学び、その後、鹿児島県立大学で、専任講師として、イスパニア経済学、イスパニア語、ポルトガル語を講じていたが、母校の招へいで当時の短期大学部イスパニア語学科に着任したのであつた。着任以降は、当時としては我が国で未開拓な分野のイスパニア経済学を中心として、数多くの業績を上げた。彼は昭和36年度から短期大学部の学科長としても、創設間もないイスパニア語学科のため

に尽力した。

この短期大学部設置の構想は、言うまでもなく、勤労学生のために外国語・文化研究の場を提供するといった社会的意味に加えて、当時の大学当局としては、大学全体の規模を拡大し教職員定員増を計り、これによって人事を円滑化するということをも、目的としていたと聞いている。このため、当時の昼間部からその意に反して、短期大学部に移った教官もあったようで、心なしか寂しそうにしている様子がうかがえるようなときもあった。設立当初のこととて、色々な問題があったのだろう、短期大学部専任教官だけの教授会が主事主宰のもとによく開かれたが、そのような会議でも昼間部に対するわだかまりのようなものが、末席の我々にもしばしば感じられた。しかし、このような気持ちが一種のいい刺激にもなっていたのだろう、新しいものを造り上げるのだ、という気概も溢れていた。

発足当時のイスパニア語学科の授業はどのようになっていたかを知りたく、授業科目履修案内を捜してみたが、昭和36年版しか見あたらなかった。聞くところでは、最初は、教務関係の仕事も学部教務課の片隅で処理していたようで、一冊にまとまった履修案内のようなものは無く、必要事項をガリ版で刷って学生に配布したとのことである。履修案内としてまとまった冊子になったのは、昭和36年かららしい。それによると、イスパニア語学科の授業は次のようになっている。

イスパニア語学科(昭和36年)

	種別	題目	担当教官	時間(週)	単位	備考
1年	講義	文法	山崎	2	4	
	実習	講読	中国	2	2	
	//	演習	沢田	2	2	
	//	講読	山田	2	2	
	//	文法	吉田	2	2	
	//	講読	前島	2	2	
2年	実習	作文	山崎	2	2	
	//	講読	国沢	2	2	
	//	商業イスパニア語	角田	2	2	
	//	講読	吉田	2	2	
	//	会話	アルバレス	2	2	
3年	演習	イスパニア語学及び中南米史	国沢	2	4	
	実習	時事イスパニア語	山崎	2	2	
	//	商業イスパニア語	角田	2	2	
	//	作文	武内	2	2	
	//	講読	前島	2	2	
	//	会話	アルバレス	2	2	

## 〈第二部〉

こうして発足した短期大学部であったが、これを基にして昭和40年に第二部が設置されることになった。しかしここで一つ問題がもち上がった。つまり、第二部移行にさいして、それまで短期大学部に在籍する学生を自動的に第二部にスライド入学させよ、という要求

が、学生自治会から提示され、これが不可能ということになって、当時の学生が授業ボイコットをして、その抗議の意思を示したことであった。我々への説明は、「新しい学部設置は、初年度は第一課程が、二年度は第二課程が……とする順年度方式によるべきであって、初年度に第五課程までが完成してしまうような形はありえない」ということであった。国立大学である以上は、文部省の規定に従わざるをえないけれども、よりいいものが出てくるのを横でみているしかない、それへの扉を閉ざされてしまう、という焦燥感は十分に理解できると思う。イスパニア語学科の学生諸君もこのボイコットに加わっていたが、大学当局の説明でこの動き全体もなんとか収束したようだった。こうした事態が落ち着いてから、何人かの学生が研究室にやってきて、正直な気持ちを説明してくれたが、そうした熱意に応えられなかったことには、なんとはなしに、申し訳ない気持ちがあった。

#### 〈教 員〉

こんな紆余曲折があったが、昭和40年、5年間の夜間コースとしての第二部が発足し、イスパニア語学科も、学生定員30名、教員スタッフ7名(兼担をも含む)で動きはじめている。こちらは、昭和47年には現在と同じ5名(山崎、三原、出口、伊藤、後藤)の専任教官を擁することとなった。これに加え、すでに短期大学部の時代から、外国人教授も出講している。文部省招へい教授として以前から教鞭をとっていたホセ・ルイス・アルバレスに加えて、フィリピン人で、マドリッドのコンセルバトリオ出身のカピストラノも、上本町八丁目時代だけではなく、箕面に移転後も、長く出講していた。アルバレスが定年退官した後は、歴代の客員教授、グティエレス、フェルナンデス、ゴメス、マビラ、バスケスが授業を担当してきている。大阪大学医学部にいたイスパニア人の医師カカベロスにも協力をあおいだ。

上述したように、イスパニア語学科では、短期大学部創立当時から第二部時代に入ってから、一部専任教官全員の第二部への出講があり、また逆に、二部専任教官の一部への出講がある、といった形で両者間に協力体制が存在した。しかし、第二部カリキュラムをより円滑に実施するための新しい方法を採用し、なお一層緊密な体制を造り上げることが必要であるとの認識から、昭和52年以降は、それまでの各教官の所属とは無関係にイスパニア語学科に属する10名の教官を二つのグループに分け、それぞれを第一部、第二部専任とし、あわせて、この所属は4年を満了した時点で相互に交替する、授業は全員が等しく第一部、第二部、3対2の割合で担当する、という体制を造り上げることが出来た。これ以後現在までこの体制のもとで、研究、教育が行われてきているが、第一部の問題も、また第二部の問題も、常にイスパニア語学科全体に関わる事柄として、提案し、議論し、決定する、という慣行が出来上がった。

この再編成により、第二部所属の教官は、山田、中岡、三原、染田、堀内の5名で、第一部所属の教官は、山崎、吉田、森本、出口、伊藤の5名となった。

### <カリキュラム>

カリキュラムについても、一応は専攻語だけを目標に授業をすればよかった短期大学部時代とは違って、一部と同じ授業内容を目指す二部としての体制は、大学紛争やその他諸々の試行錯誤をへて、不備な点も徐々に是正されていると思うが、一日四時間(二コマ)という限られた枠内に、一年次の専攻語学から後期四・五年次のための授業を、受講生に出来るだけ都合がいいような形で配置することは、大変な作業である。どんなに考え配慮したつもりであっても、学年始めには、来年のカリキュラムにはこの点を考慮して欲しい、といった申し出を受けることもあって、こちらが考え及ばなかったところを指摘されることが間々あったが、最近では、授業科目をほぼ固定して配置することで、学生にも長期的な受講計画が立てられるよう配慮をしているので、この種の要望は少なくなったとおもう。

### <卒業生>

このように色々と言ったこと、今のことを書きつづてくると、やはり短期大学部時代やその後第二部になってから、イスパニア語を通じて知り合った人たちの顔が浮かんでくる。年賀状を必ずくれる卒業生も何人かあり、「スペイン語の通訳試験を目指してがんばっています」と書いてあったりすると、なんとはなく嬉しくなってくる。はるばる南米のパラグアイから、本人の後任としてやって来れるような大学院生がいないか、「希望者があれば推薦しますので」といって、有り難いことに、国際電話をかけてくれた卒業生もいる。このような卒業生とはまったく違って、言葉も交わしたこともなく、教室で見掛けただけの人もある。たしか移転の年のことであつたと記憶しているが、夏休み前までは熱心に授業に通い、よく出来た何人かの人が、箕面へ移ってからは姿を見せなくなってしまった。同級生にたずねてみたら、仕事の関係で箕面へは通学できなくなったとのこと、もしひょっとしたらと思わぬこともなかったけれど、その答えを聞いたときには、どう言葉を返しているのかわからなかった。箕面への移転が大学にとって発展とすれば、そのかたわらにはこうした犠牲者もある。

### <将来>

いま、我々の大学では、よりよき将来を求めての大学改革構想がホットなテーマとなっている。大学の社会的役割を考え、我々の社会的貢献の可能性を考えると、また、今後の社会人入学の傾向の高まりを考えると、二部の重要性は増大する。こうした時代の要請に応じて、諸条件を整備することも、外国語大学の将来の発展を左右する大切な鍵の一つになるであろう。

(中岡 省治)

## 6. ロシア語学科

1951年に開設された大学別科は、その8年後、1959年に丸山忠雄教授(R13)、国本哲男講師(R25)をスタッフに短期大学部の一語科として発展的に改組されて出発した。1962年1月に法橋和彦(大R4)が助手として新規採用され、言語、文化、文学の三分野が整備された。外国人講師としてはレーベジェヴァ、ムスフエルト両女史が会話や作文の授業を担当した。

非常勤講師としては演劇界で活躍していた奥村剋三(大R3現・立命館大学教授)をはじめ、多くのユニークな人材に出講していただいた。

60年代初頭の短大ロシア語科生は、ほとんどが有職の男子学生で、女子学生は二学年にひとりぐらいのわりであったが、発足後5年目ぐらいから、ここでも女子学生の入学が男子のそれを超えるようになってきた。授業中の主導権も女子学生がにぎり、男子が女子の驥尾に付す風潮がしだいに顕著にみられるようになった。それにもなって発足当時はほとんどの学生が職業をもちながらの夜間学生であったのが、この頃になると男女を問わず卒業後の就職を希望する学生が増えてきた。世に「女子大学生亡国論」が唱えはじめられた頃のことである。

短大時代の学生と教官はよく茶話会をひらき、師弟関係をこえて友人、兄弟的なつきあいが濃かった。経済的に独立している人達が多かったこともあろう。この人たちの将来、ことに恋愛や結婚の相談やお世話は日常的だった。たとえば第五回卒業のK・Mさんは、当時京大の大学院を卒業、広島の大学へ赴任することになったH・Y君と卒業後結ばれる。その段どりに教室が応援した。縁は異なるものでK・Mさんの夫君は現在本学社会学担当の教授である。彼女と同期のH・Cさんはその頃、外大生協の専務理事をしていた富田君と、これは在学中に挙式している。彼女たちと同期のN・H君は、のちに学部編入したよくできる学生であったが、やはり短大時代に知りあったドイツ語学科の女子学生と卒業後結ばれている。彼女は退官後のいまも嬰鑠としていられる芝池元教授の娘さんだった。しかし、すべてがすべてうまく運ぶというわけではない。T・T君は大手メーカーに勤めるスポーツマンだったが、朴訥で意中のクラスメートに思いをうちあけることができず悶々としているうちに、その相手のほうはお見合いで結婚してしまった。当時、西鶴研究で著名な学者、京大の野間光辰先生からお話があり、先生の三女と、先生いきつけの京都三条の料亭「瓢正」(このお店はその年に亡くなられた川端康成氏が愛顧の家であった)でお見合のはこびとなった。そのとき先生から瓢正の主人が川端さん死去の報をきき、深夜車をとばし、供養の酒肴をたずさえて早朝に鎌倉にはせ参じたエピソードをきかされたことが妙に印象に残っている。T・T君はその後、二度ばかり彼女とデートをしたという話をきいたが、結局はうまくいかなかった。

やがて短大は二部に昇格することになるが、五年制の二部になってからは、短大時代のこうした学生諸君との交流も次第にうすれていった。

一部の研究室は上八学舎新館の三階にあったが、二部の研究室は正門に入って構内の階段をのぼり、左手に新館に通じる廊下をみて、まっすぐまた二段ほどの階段をおりて左手二つ目のだだっぴろい部屋だった。口の字型の簡易鉄筋校舎にかこまれた中庭は水はけがわるく年中湿っていて、雑草の園だった。研究室南面の窓の下がこの陰気で風通しのわるい庭だった。夏はいやにむし暑く蚊咬になやまされた。防虫網がついていなかったからである。冬は底冷えがひどかった。二台の石油ストーブをたいていたので、今度は空気が濁って重苦しかった。用務員さんが毎朝ストーブに石油をいれに来てくれていた。今から思えばそれがなつかしい。石油の匂いが研究室の朝の匂いだった。匂いで思いだすのは年に二回ほど床に油びきがされたときの匂いである。これは木の床の防腐防蝕のためだったのだろうが、心づよい匂いであった。用務員さんたちが定年で退職されていき、後任は不補充ということになってしまったので、今の大学では施設の清掃等の仕事はすべて専門業者にまかされている。用務員さんたちと朝晩の挨拶ができた昔がなつかしい。

短大では教務、学務にかんするすべての会議が主事室でひらかれた。主事室は正面玄関に入って右側のとつつきの部屋で、中国語の小林武三先生が二部昇格までを主事として勤められた。先生は苦勞人で人生の機微によく通じた優しい人格者だった。会議は円卓式で和気あいあいでも楽しいものだった。若い新任の先生がたと懇親の名目で飲んだり食べたりする会もひんぱんにもたれていた。短大教員あげての忘年会はとくに豪勢であった。当時の一流料亭であった南の「石亭」などがよく使われた。バレーボールの国際審判員をつとめていた体育の鳴川先生、フランス語の松井さん、ロシア語の丸山さん、事務長の坪井さん等々と酒豪ぞろいだった。会の肝いり役はいつも坪井さんだった。いったん学校をでると年齢序列などそのけで自由の雰囲気は十二分に味わえたものだった。それには他の理由もないことはなかった。短大教授会は存在してはいたものの、なんらの審議権、決定権をもたなかったからである。学部教授会の議事決定を、あとでただきだけで、形式的に事後承認せざるをえない機構になっていたからである。こうした鬱憤はスポーツの面でも発散された。野球の教職員チームに積極的に参加したのも短大教員であった。ドイツ語の布施さんは豪腕投手だった。土曜の昼からはよく他流試合にでかけたものだった。花園の悪いグラウンドもよく使われた。ビールと焼鳥が試合後の主な団らんのメニューだった。

短大教員は二部に昇格後、はじめて学部教授会のメンバーとなった。だが教授会の雰囲気は短大時代のそれとはまったく異質なものだった。審議事項は、例外なく学長サイドの説明で、疑義をさしはさむなどという慣習はここにはなかったからである。会議は静かであった。あまり静かすぎたので、たまに議長が学長が指名して意見をもとめるということがある。静かだが、緊張感はずっとみなぎっていた。沈黙の慣行がこの緊張感をうみだしていたのである。人事権は教授のみの人事教授会にあったので、発言は控えるというよりも、「言わざる」を良しとする空気が濃厚であった。

教授昇任への狭き門を開放し、学術を振興するために助講会(ほかの諸大学とことなり、助教授以下でつくられた)が組織され、大多数の教員がそれに参加した。その働きが今日の外大民主化の道をきりひらいていったのである。その緑の下の力持ちとなったのが旧短大教員層であったことは言うまでもない。

話は思わぬところへそれてしまったが、たぶんどの語科もこうした方面の事についてはページをさくゆとりがなかったであろうと考えて一言しておきたいと思ったからである。

短大が二部にきりかわって、旧短大生の一部は二部に編入して学業をつづけた。のちにロシア語を活かして活躍する多くの人材がこの人たちのうちから生れた。生森将人、柿内征四郎、橋盛彦、長沢孝司君等がそれである。生森君はのちに京大の文学部大学院にすすみ、現在は本学留学生日本語教育センターの教授、橋君は国際会議等の同時通訳者、柿内君は勤務のかたわら日ソ協会のロシア語の教師をつとめている。長沢君はソビエト経済学の領域で活躍している。橋君の卒論のテーマは「ロシアの語の革新」であった。長沢君は「社会主義経済学の端緒的範疇について」、柿内君は「ロシア語における語順からみた語の交換の限界について」であった。いずれも将来を約束する力作ぞろいであった。

こんにちの二部学生が、卒業論文を講義や演習の単位で代替して卒業するのが多くなってきているのをみると、昔の二部生が、一年、二年と卒業を延期しても、立派な論文を書いて社会へと出ていった頃のことが、これまたなつかしく思いだされるのである。志賀直哉に私淑した女流作家・網野菊さんの甥もそのひとりであった。ロシア文学を専攻した彼は300枚ちかい卒業論文をまとめあげて、わたしどもを感動させたものだった。

(法橋 和彦)

### (3) 留学生別科の歴史

#### <1. 昭和30年代——創成期>

研究留学生(大学卒業生)主体の予備教育(日本語教育等)組織として留学生別科(1年制)が設置されたのは、昭和29年(1954年)4月であった。

留学生の来日はその年の9月からであった。国費留学生が7名、私費留学生が4名、計11名、非常勤講師2名、事務職員ゼロで留学生別科の教育が始まった。

同時に設置された東京外国語大学留学生別科は学部留学生(高校卒業生)主体であり、その後、昭和35年4月から昭和45年3月まで留学生課程(3年制)、昭和45年4月から平成4年3月まで附属日本語学校(1年制)と目まぐるしく変化してきたのに対し、大阪外大の留学生別科は平成3年4月に留学生日本語教育センターに拡充改組するまでは組織の上では比較的安定していた。しかし、その内実が安定していたというわけではなかった。

設置当時、両大学とも教官定員の配置がなかった。学生定員は一応30名、修業年限は1

年と定められていた。

設置当初のカリキュラムの概要がどのようなものであったかは、資料がないが、教科書は国際学友会のものを使用したようだ。

29年10月開講と決まって留学生別科の主任はインド語科の沢教授であったが、何らの指示も与えられず、現在施設課室の辺りにあった古びた木造教室一つを提供されて既に来日して待機していたタイ留学生8名〔このあたりの数字は未確認——引用者〕の日本語教育をはじめなければならなかった。まず、教科書の選定の問題があった。戦前の日本語教育は主として中国からの軍事教育を受ける留学生と外国人宣教師のためのものであって、戦後においても大学入学を希望する留学生のためのものは、国際学友会にあるのみであった。従って教科書も同会発行の『日本語の話し方』『日本語読本』を採用せざるを得なかった。〔山本みち「退官にさいして」『日本語・日本文化』第3号〕

『大阪外国語大学便覧(昭和29年度)』(同窓会所蔵)に留学生別科非常勤講師として丸山三友(大阪大学独文助手)・久保秋雄・目黒三郎・沖二郎・三宅川正の名前が手書きで書かれているが、詳細は不明である。

「通史編」にもある山本みちおよび国本哲男は昭和29年9月15日に非常勤講師として採用され、当時山本は1時間350円、国本は230円の給料だった。専任の教官が誰もいない状態が昭和37年3月まで8年間続く。昭和30年3月31日、留学生別科第1回修了証書授与式が挙行された。修了者は4名。

教官には、当時京大の修士課程に在学中でロシア語科の非常勤講師であった現在の阪大教授国本哲男氏と私が非常勤講師として任命された。留学生別科の教務、奨学金関係事務、受入れ、会計等の文部省との交渉は当時の小沢教務課長が責任を持たれ、事務的には遺漏なく執行された。しかしその間別科新設に伴う予算措置がなされたにちがいないがこの使途金額について何ら知らされることなく、又別科のための教室建設費が予算化されていたにもかかわらず敷地難を理由に執行部だけの判断で辞退するなどのことがあり、開設当初から大学当局及び他学科教官の中に別科を育てて行く熱意が乏しかった。〔山本みち「退官にさいして」『日本語・日本文化』第3号〕

文部省に留学生課が設置されたのは昭和30年であった。

『大阪外国語大学便覧(昭和30年度)』(同窓会所蔵)には留学生別科非常勤講師として上記の山本みちと手書きで田中升三郎の名前があるが、これも詳細は不明である。昭和30年度の修了者は6名、以下31年度4名、32年度7名、33年度13名、34年度15名であった。

32年には、国費留学生の世話機関として文部省の外郭団体「日本国際教育協会」が設立された。

昭和35年からは、日本の賠償金によるインドネシア政府派遣留学生の受け入れが始まり、修業年限も1年から6か月に短縮された。しかし、この年度の修了式は3月の1回のみで、

修了者は9名。国本哲男は35年4月に短期大学部に専任講師として採用され、留学生別科には併任となり、36年10月まで続く。

昭和36年度には非常勤講師として山本・山崎俊夫(後にスペイン語学科教官)・国本哲男の名が見える。修了者5名。

国本哲男氏は同じ頃に直接法とやらで終始日本語だけを使って関西弁のアクセントでおしとおし、加えて得意の絵画にゼスチュア入りで要領を得た楽しい説明をしておられたが、それなりに苦労もまた効果も多かったようである。〔山崎俊夫「概念構成意識間国際衝突場裡大阪外国語大学留学生別科掌裏有情」『日本語・日本文化』第3号〕

山本みちが専任講師になったのは昭和37年4月1日であった。38年6月に国際学友会日本語学校の講師であった和泉模久(ひろひさ)も専任講師になっている。非常勤講師は山崎と稲垣正枝。

……37年4月ようやく専任講師となった。初期の留学生は学部入学を希望する高校卒業生で年も若く、入学後の勉学のためにかなりの程度の日本語修得の必要を感じていたので、学習意欲も強く、教師側の不慣れにも拘わらず、相当の効果を上げ得たものと信じているが、その中だんだん研究留学生(大学卒業生)の数がふえ、欧州、アメリカでの日本文化特に建築、美術再認識の気運に伴い、建築美術専攻の研究留学生が多くなった。〔山本みち「退官にさいして」『日本語・日本文化』第3号〕

この年、日本語教育関係者約300名を会員とする「外国人のための日本語教育学会」が創立された。

昭和38年度には主任教授として片山忠雄(英語学科教官)、専任講師、山本・和泉・山崎が、非常勤講師として稲垣・吉田弥寿夫・川上京子。修了者2名。

昭和39年度には吉田弥寿夫が専任講師になり、非常勤講師に田中健次の名が見える。この年、国費留学生の招致数が100名から200名に増加した。

昭和30年代後半に、専任教官がようやく認められた状態であった。

## 〈2. 昭和40年代——発展期〉

留学生の増加に伴い、学生定員が118名に増員され、教官定員も増えた。

また、待望の留学生寄宿舎が40年3月25日、東大阪市の花園運動場に完成し、その寮務主事として大塚鴻爾(こうじ)が採用された。

その40年度には主任教授(事務取扱)に中西竜雄(インドネシア語科教官)、専任講師に大塚(寮務主事)・吉田・寺村秀夫(大阪市立鶴見商業高等学校教諭であった)・山本・和泉、助手として川上。非常勤講師には稲垣・田中・河野睦子(あつこ)・大角寿美子・久保陽(よう)。

昭和41年4月1日に山本は助教授に昇任し、同年4月1日に留学生別科主任を命じられているが、翌42年6月15日には主任を免じられている。専任講師のメンバーには変化がなく、助手の川上は退職。非常勤講師として松井弘子・三島祐一・山口岩夫・稲垣・久保・和田克

司・西出郁代。

……「あかりをつけましょボンボりに。お花をあげましょ桃の花。五人ばやしの笛太鼓……」お人柄から自然ににじみ出るやさしい心遣いに陶酔の歌声がいつまでも、くり返しくり返し連綿と続いて隣の教室から聞こえてくる。そんな間にも、山本先生は手のつけられないわんぱく連を手際よくすっきりまとめて素晴らしい出来上がりを持って行かれる。実に見ごとなその御手並のほどにはひたすら舌を巻くほかはない。

〔山崎俊夫「概念構成意識間国際衝突場裡大阪外国語大学留学生別科掌裏有情」『日本語・日本文化』第3号〕

昭和42年度には主任教授として松岡満夫、教授に岩倉具実(言語学者で、岩倉具視〔当時の500円札に印刷されていた〕の孫なので「125円」というニックネームがあった)、助教授は山本・吉田、専任講師に大塚・寺村・佐治圭三(滋賀県の高等学校の教員であった)・和泉、助手に西出が採用されている。非常勤講師に山口・水谷喜一・玉村文郎・上神忠彦(後に中国語学科教官)・松井・三田村紀子。以上、教員数は15名。

この年9月30日付の山本みちへの人事異動通知書に「大阪外国語大学留学生別科運営委員会委員を解嘱する」とあるが、この運営委員会については詳細が不明である。またこの年に留学生別科日本語研究室編で『BASIC JAPANESE: INTENSIVE COURSE FOR SPEAKING AND READING. VOLUME 1, 2』が発行されている。

大阪外大の日本語プログラムというのは、元来が国費研究留学生で日本語を全く学習したことの無い者を対象にした6か月のコースということでスタートしたのだが、その初級を終わってから、もう少し日本語をやりたいという学生が間もなくぼつぼつ出始めた。また専攻の研究のために配置された大学へ行ってからも、それが京阪神の大学だと、週の半分ぐらいは外大で日本語の勉強ができるようなコースを設けてほしいという希望も出てきた。1966、7年頃のことだったと思う。〔寺村秀夫「文法随筆その2」『月刊日本語』1988年2月号〕

昭和43年度には岩倉具実教授が言語学講座に転出、寺村が助教授に昇任し、玉村が専任講師に採用された以外は変化がなかった。ちなみに非常勤講師は井上浩子・松井・三田村・宮地敦子・水谷・山口・大木隆二・田中健夫・弘喜代子・高橋哲也・堀伊哲夫・新井栄蔵・桂芳男。以上、教員数22名。このうち、宮地敦子は関西学院大学文学部教授となり、大木隆二は東京外大附属日本語学校を経て、岡山大学教授になった。

この年7月、『INTERMEDIATE JAPANESE(中級日本語)VOLUME 1』が、8月には『VOLUME 2』が、留学生別科日本語研究室編で発行された。執筆者は、寺村秀夫・佐治圭三・西出郁代・吉田弥寿夫・玉村文郎であった。

2人目の助手として、大倉(旧姓、上島)美和子が採用されたのは昭和44年度であった。非常勤は松井・三田村・水谷・大木・田中・高橋・新井・鮫島綾子・糟谷博子・谷村千城・岡本厚子・神谷馨・美濃部重克・布野良郎・大脇由紀夫。以上、教員数25名。

この頃から、留学生別科の教育が非常勤講師に負う割合が大きくなってきた。

大倉美和子は外大イスペイン語学科出身であった。

大阪外国語大学留学生別科においても、学習者の母語別クラス編成は満足すべき状態ではなかった。英語を媒介語として使っているクラスの他に、英語をまったく理解しない中南米のラテン系学習者のために、2クラスのスペイン語クラスを編成し、テキストはもちろんのこと、ハンドアウトの類まで、すべてスペイン語を用い、非常勤講師に至るまで、スペイン語を理解する教官が担当しているものの、それでもなお完全な意味での母語別編成とはなっていない。〔吉田弥寿夫「日本語教育の問題点」『日本語教育論集』〕

44年6月には学科の紀要『日本語・日本文化』第1号が発行されている。以後、原則として年度末に1号ずつ発行している。

昭和45年度には、松岡満夫教授にかわって吉田弥寿夫助教授が主任になった。45年11月、和泉模久辞職。

山本は昭和46年11月16日に教授に昇任し、翌47年3月定年退官している。

今日、わが留学生別科の教官は、4月採用予定の助手3名をふくめて総勢11名、先生がはじめて着任された頃と比べると昔日の感があるが、これもひとえに先生の積みかさねられた御努力が実を結んだのである。教室員全員の討議のもとに編纂した初級・中級テキストは、スペイン語訳もふくめて1冊、グローサリー1冊、漢字手引書2冊、同練習帖2冊、各専門別読本(理数系1冊、文科系1冊、法経系1冊)と続々できあがりつつある。その他、これらのテキスト作成のための予備段階として、文型研究、語彙調査、漢字熟語の選定および提出順序の研究、発音発声練習のためのテープ教材など、約10年前にやっと専任教官が認められた学科としては、着々と成果をあげつつある。これもひとえに山本先生の前衛としてのたたかいがあったおかげである。〔吉田弥寿夫「山本先生の御退官に際して」『日本語・日本文化』第3号〕

上記の「4月採用予定の助手3名」とは山口幸二・岡田英樹・春名万紀子であった。

47年3月には寺村秀夫が『AN INTRODUCTION TO THE STRUCTURE OF JAPANESE. BOOK 1』を自費出版している。この教科書は中級・上級の研究留学生のためのものであった。『BOOK 2』は48年2月、『BOOK 3』は50年12月、『BOOK 4』は56年12月にそれぞれ発行している。46年6月、佐治と玉村は国語学講座に配置換。

47年、国際交流基金が発足。

48年度には50年3月に退官予定の大塚に替わる寮務主事として氏原寛が採用され、助手に生森将人が採用された。49年3月、松岡満夫と佐治圭三は退官。佐治は大阪女子大学・中国のいわゆる大平学校の所長(5年6か月)を勤め、のち同志社女子大学・大阪大学を経て、現在京都外国語大学教授。この年、専任教官12名。10月に『JAPANESE FOR TODAY(新しい日本語)』が学習研究社から発行されている。この教科書は現在でも留学生日本語教育

センターの基本的な教科書として使用されている。

49年3月に春名万紀子も退職。

49年度には玉村文郎が退官し、同志社大学文学部に転勤。その著書には『THE PRACTICAL JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY』（海外技術者研修協会1970）、『仏文・日本文法入門』（文化庁1984）、『語彙の研究と教育(上)(下)』（国立国語研究所1984、1985）などがある。

この年、丸本隆が採用され、常勤教官12名。9月に『BASIC JAPANESE』のスペイン語版『JAPONES BASICO』（執筆は大倉美和子）が発行されている。10月には、『中級日本語』の改訂版が発行されている。改訂作業にあたったのは、寺村秀夫・佐治圭三・堀口和吉であった。国立国語研究所に「日本語教育部」が設置されている。

### 〈3. 昭和50年代——充実期〉

50年2月に山本進が助手で採用された。1か月後の50年3月に岡田英樹が立命館大学に転動したが、11月には『漢字概論』を自費出版している。4月には奥西峻介・仁田義雄が助手に採用された。同じく11月28日付で『基本文型』が発行されている。

50年3月に文化庁の「日本語教育研究協議会」（於国立国語研究所）において委託研究一年次中間発表がおこなわれている。山本が2月に採用されたのは、この発表に間に合わせるためでもあった。

51年度には国立国語研究所から田中章夫が教授として着任した。この時専任13名。また、『JAPANESE FOR TODAY』の文法説明部分のスペイン語版『JAPONES DE HOY』が発行された。執筆は大倉美和子と非常勤講師の蔭山昭子・宮本正美であった。

また、東京外大大学院に日本語学専攻修士課程が設置された。

……はじめて中国大陸から留学生がやってきたのは、1976年の春である。国交が回復して4年経っていたが、その頃の中国は、文化大革命ということが進行中というだけで、実際にどういうことが起こっているのか、外からはよく分からず、まだなんとなく神秘の国のイメージが残っていた頃である。大量の公費、私費の留学生ないし留学希望者が続々と来日している今日からみると、なんだか遠い昔のような話だがわれわれも他の国からの留学生たちも、まるで宇宙人を迎えるような好奇の期待で彼らを待ち受けていた。そこへ総勢7人、人民服に身を固め、胸を張り、一列縦隊にならんで彼らはやってきたのである。〔寺村秀夫「文法随筆その5——思い出す学生たち」『月刊日本語』1988年5月号〕

52年4月、大学院外国語学研究科に日本語学専攻が発足。この年、日本語教育学会が社団法人となる。

53年3月には西出郁代が退官した。現在、アメリカ・カルフォルニア州に在住。当時普及しはじめたビデオテープによるテレビ映像を教材化した『聴解練習資料I』が53年3月付

で発行された。作成者は寺村秀夫・山本進・大河内康憲(中国語学科教授)であった。

3月には、学科主任と教室会議議長の選挙があり、寺村秀夫と氏原寛がそれぞれ選ばれた。

同じく4月には仁田義雄が京都教育大学に転勤し、その後大阪女子大学を経て、現在、大阪大学文学部日本学科助教授。主な著書に『語彙論的文法論』などがある。替わって、神戸大学・東北大学大学院で仁田の後輩であった小矢野哲夫が助手になった。また、小林明美が助教授として着任した。

54年4月には寺村秀夫が筑波大学に配置換えになり、のち大阪大学文学部日本学科日本語学講座の初代主任教授に着任したが、平成2年2月3日に心臓病のために没。その著書に『日本語の文法(上)(下)』(国立国語研究所1978、1981)、『日本語のシンタクスと意味Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(くろしお出版1982、1984、1991)などがある。

学生定員は、54年148名、55年186名、56年219名と3年連続して増員され、教官も充実しはじめる。

54年7月から翌55年9月まで山本進は国際交流基金から派遣されて、香港大学言語センターで日本語を教える。

55年、新しいカテゴリーの留学生である「教員研修留学生」の受入れが始まる。「教員研修留学生」とは大学卒業以上程度の者で、35歳未満、日本語教育(6か月)を含めて1年6か月以内の留学で、教員養成学部等で特別研修をする。現在、日本全体で16か国の開発途上国から来ている。

この年に、丸本隆が茨城大学に転任。

56年、角道正佳が専任講師に、野田尚史(スペイン語クラス担当)が助手に採用。

57年から61年度まで、大学院レベルの渡日研究留学生を対象とする6か月の予備教育が中国の大連外国語学院で始まり、留学生別科の教官を中心に毎年3名ずつ文部省から中国へ派遣した。57年、大阪大学文学部日本学科の助手であった矢野敦子が専任講師に採用。日本事情の担当であった。また、成田徹男が助手に採用。

昭和58年には中曽根内閣によって留学生10万人計画が打ち出され、日本語教育機関の増加と日本語教師養成の問題が出てくる。

59年には野田尚史が筑波大学文芸・言語学系に転勤、現在は大阪府立大学に勤務。同時に、氏原寛が大阪市立大学に転任。吉村近男が助手採用。

60年、学部レベルの「日本語・日本文化研修留学生」の受入れが始まった。「日本語・日本文化研修留学生」は54年から東京外国語大学ですでに受け入れられていた留学生であるが、大阪外大ではこの年からである。この留学生は、大学3年次以上に在学中の者で、18歳以上30歳未満。日本語教育はなく、大学で日本語または日本事情の特別研修を受ける。現在、日本各地に29か国・地域から来ている。

この年、小林明美助教授が学科主任になる。

61年2月の日付で吉村近男が『漢字入門』を作成・発行。4月、寮務主事として田中四郎が着任。同年9月、矢野敦子退官。

62年、待望の日本語学科が設置される。(設置の経緯については、「日本語学科の歴史」の項を参照。)田中章夫が学習院大学に転勤。同じく、倉谷直臣が松蔭女子学院大学へ転ずる。

63年、大倉美和子と小矢野哲夫が日本語学科に転任。吉田弥寿夫が桃山学院大学に転任。専任教官現員8名に減。

昭和29年より研究留学生の予備教育は、大阪外大留学生別科が一手に引き受けていたが、留学生数の増加に伴い、平成元年度現在以下の9大学に拡充されている(括弧内は研究留学生および教員研修留学生の受入れ予定数)。

北海道大学言語文化部(20)、東北大学教養部(30)、筑波大学留学生教育センター(30)、東京大学留学生教育センター(30)、東京工業大学留学生教育センター(30)、名古屋大学総合言語センター(40)、大阪外国語大学留学生別科(219)、広島大学教育学部(30)、九州大学留学生教育センター(30)。

留学生予備教育の地域センター化が始まり、留学生教育も変革の時代をむかえた。

#### 〈4. 平成時代——変革期〉

平成元年に、山口幸二が立命館大学法学部に転勤。

平成2年4月には、岩井八郎が大阪大学人間科学部助手から助教授として採用。

平成3年3月、吉村近男辞職。

平成3年4月、留学生別科は改組され、留学生日本語教育センターが発足し、学部レベルの留学生を対象に日本語教育の外に数学などの専門科目の指導も行うことになった。

平成3年度春学期(センターの教育に関する規定第5条によって前期・後期という名称がそれぞれ春学期・秋学期に変更された)のカリキュラムは次の通り。

##### (1) 学部留学生コース

授業科目	授業時数						備考
	学期	週当たり授業時数		授業 週数	年間総時数		
		文科	理科		文科	理科	
日本語	春学期	時間 28	時間 28	週 19	時間 532	時間 532	日本語 28時間 文型 16時間 会話 4時間 ビデオ 2時間 テスト 4時間 特講 2時間
	秋学期	24	22	20	480	440	
	小計				1012	972	
日本事情	春学期	2	—	19	38	—	平成3年度 春学期 4月15日～7月27日 15週
	秋学期	2	2	20	40	40	
	小計				78	40	

政治経済	春学期	4	—	19	76	—	9月2日～9月28日 4週 4月11日 入学式 4月12日 オリエンテーション 6月17日～19日 中間試験
	秋学期	6	—	20	120	—	
	小計				196	—	
数 学	春学期	4	6	19	76	114	6月20日～21日 研修旅行
	秋学期	6	6	20	120	120	
	小計				196	234	
化 学	春学期	—	2	19	—	38	平成3年度 秋学期 10月7日～12月21日 11週 1月6日～3月7日 9週
	秋学期	—	4	20	—	80	
	小計					118	
物 理	春学期	—	2	19	—	38	
	秋学期	—	4	20	—	80	
	小計					118	
英 語	春学期	2	2	4	—	8	
	秋学期	2	2	20	—	40	
	小計			24		48	
計	春前期	38	38	15	570	570	
	春後期	40	40	4	160	160	
	秋学期	40	40	20	800	800	
	小計			39	1530	1530	

## (2) 研究留学生コース

### 初級レベル

必修科目	最低修得週時間数
文型・会話	12
漢字読解	4
日本事情	2
L.L	2
選択必修科目	最低修得週時間数
会話聴解	16
作文	
専門読解	
漢字	
合計	36

### 中級レベル・上級レベル

選択必修科目	最低修得週時間数
会話聴解	34
作文	
専門読解	
漢字	
文法	

#### (注)1. 試験

〈中間・修了試験〉及び〈初級レベル学生には各期2回、中級・上級レベル学生には各期1回口述試験〉が実施される。

#### 2. 科目修得の条件

授業日数の60%出席、試験で60点以上取得しなければならない。

#### 3. 修業期間中(6ヶ月間)の最低授業時間数

初級レベル648時間(週36時間×18週) 上級レベル612時間(週34時間×18週)

(3) 日本語日本文化研修留学生コース

授 業 科 目 等	単 位 数	備 考
日本語・日本事情特講	4(必修)	(1)研修期間 10月から翌年9月までの1年間 10月から3月までを「秋学期」 4月から9月までを「春学期」 (2)修得単位数 秋学期30単位、春学期30単位 (単位の計算方法は、外国語学部に準ずる) (3)選択科目 現代文法から音声までの10科目の中から 希望する科目を1年間で36単位選択履修 する。但し、登録制とする。 (4)諸活動研修科目、修了論文については (注)を参照。
現 代 文 法	36(選択)	
古 典 文 法		
文 型 解		
作 文 漢		
漢 字 会 話 聴 解 音 声		
諸活動研修科目	16(必修)	
修 了 論 文	4(必修)	
合 計	60	

(注)1. 諸活動研修科目

- ①毎週木曜日の3時限目、日本人学生の課外活動に参加する。
- ②外国語学部の授業(日本人学生対象)に出席する。
- ③大学主催の日本語ワードプロセッサ―講習会へ参加する。
- ④日本の伝統芸能(歌舞伎、文楽、狂言等)の鑑賞会へ出席する。
- ⑤箕面市のホストファミリー制度による行事、市主催の行事(書道、生け花、茶道等)に参加する。
- ⑥学期末の研修旅行に参加する。
- ⑦参加する行事や活動等については、指導教官と相談、指示をうける。

2. 修了論文

指導教官の下で、一定の課題につき研究させ、修了時に論文にまとめさせる。

また、平成3年5月1日現在の留学生数はつぎの通り。

国費外国人留学生

国 名	男	女	計
-----	---	---	---

(1)学部留学生

オーストラリア	2		2
ブラジル	1		1
インドネシア	3		3
マレーシア	2	1	3
フィリピン	2		2
シンガポール	3	1	4
タイ	3	2	5
合 計	16	4	20

(2)研究留学生

アルゼンチン	2	1	3
--------	---	---	---

国名	男	女	計
オーストラリア	3	1	4
オーストリア	1		1
バングラディシュ	1	1	2
ブラジル	5	1	6
ブルガリア	1	1	2
カナダ		1	1
チリ	2		2
コロンビア	2		2
コスタリカ	3		3
キューバ		1	1
デンマーク		1	1
ドミニカ		1	1
エチオピア	1		1
ドイツ	1	2	3
グアテマラ	1		1
香港	2		2
インド	1		1
インドネシア	10	1	11
イラン	1		1
イスラエル	1		1
イタリア	1	2	3
アイボリーコースト	2		2
ヨルダン	1		1
ケニア	1		1
マレーシア	10		10
メキシコ	3		3
モンゴル	1		1
ビルマ	2	2	4
ニュージーランド	1		1
ニカラグア	1		1
パキスタン	1		1
パナマ		1	1
パプアニューギニア	1		1
パラグアイ	1		1
ペルー	1		1
フィリピン	2	1	3
スペイン	2	1	3

国名	男	女	計
スーダン	1		1
シリア	1		1
タンザニア	1		1
タイ	4	6	10
チュニジア	1		1
イギリス		1	1
アメリカ	1		1
ウルグアイ		1	1
ベネズエラ	2		2
ベトナム	1	2	3
イエメン	1		1
ユーゴスラビア	1		1
ザイール	1		1
合計	84	29	113

(3)日本語・日本文化研修留学生

タイ	1		1
シンガポール		1	1
インドネシア		4	4
中国	1		1
オーストラリア		1	1
ニュージーランド		1	1
アメリカ	2		2
ブラジル		4	4
ペルー		1	1
フィンランド		1	1
アイルランド		1	1
オランダ	1		1
ドイツ	1		1
フランス		4	4
イタリア		2	2
ポーランド		1	1
ハンガリー	1		1
ソ連		1	1
イギリス		1	1
合計	7	23	30
総計	107	56	163

#### インドネシア政府派遣留学生

男	女	計
20	4	24

最後に、小林明美留学生日本語教育センター長のことばを引用しておこう（『大阪外国語大学留学生日本語教育センター概要——1991』2頁）。

……日本語の読む書く話す聞くの4つの技能を習得させ、各学生が日本語の運用能力を身につけ、大学で円滑な言語活動が行われるように指導することがセンターの主要な任務であるが、その指導を限られた時間と複雑な条件の下でどれほど効果的に実行できるかは、センターが常に挑戦すべき課題であろう。そのために教育にかかわる事項を調査研究し、教育の新しい理論や教授学習の方法を開発して、ためらわずに実践に移して行きたい。センターが挑戦的で創造的な活動をつづけることが、留学生の一人一人の期待に応えることであると信じている。

外国語学部から独立し、独自の組織となった留学生日本語教育センターではあるが、教育部門だけではなく、小林センター長のいう研究部門の創設、専任教官の補充、センターの建物の要求、等々、まだまだ残された問題も多い。

（山本 進）



## 第2章 事務・厚生補導組織

### (1) 専門学校時代

#### 〈諸規程の制定〉

大正10年12月9日、大阪外国語学校の開設が公布されると同時に、職員定員令により本校職員は校長1名、教授9名、書記4名と定められた。翌10日には第二外国語学校創立委員の中目覚が正式に初代校長に任命された。12日から文部省内に仮事務所が設けられ、翌年4月開校にむけての作業は慌しさをましていった。12月19日からは松山高等学校庶務課から田中鶴之助、九州帝国大会計課から物品会計官吏の加藤富松が、書記としてこの作業に加わる。

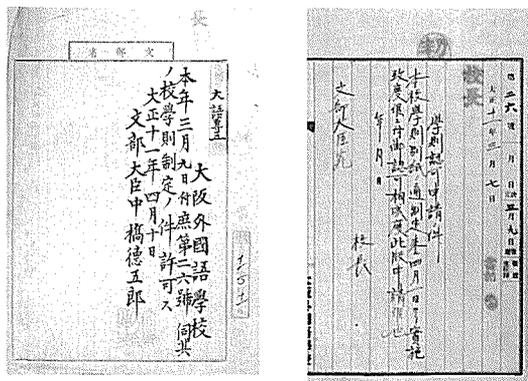
大正10年もおしつまった12月29日、文部省令第49号で「大阪外国語学校規程」が制定公布され、これにのっとして「大阪外国語学校学則」の制定が急がれ、11年3月7日文部省に申請、4月10日文部大臣の許可がおりた。

学則の制定と並行して学内の諸規程・細則の整備が進められ、開校までに、教育事務分掌規程、校務分掌規程、職員服務、生徒心得、出版物審査委員会章程(昭和8年8月廃止)など一連の規則体系がほぼ整った。このうち、校務分掌規程には次のとおり下部規程があった。

修学旅行規程、海外修学旅行規程(のち廃止)、野外演習及射撃演習規程(昭和12年野外教練及射撃演習規程と改正)、銃器及弾薬管理規程(大正14年体操用具管理規程と改正)、学級総代規程、図書館規程、文書処理規程、当直規則、巡視規則、非常時防備規程(昭和9年非常変災防備規程と改正)、物品会計規程細則

#### 〈学校事務の分掌〉

当初の校務分掌規程(昭和6年7月事務分掌規程と改正)によると、校務を分掌するため、教務課、生徒課、図書課、庶務課、会計課の5課が置かれ、各課には課長1名、課員若干名が置かれた。教務課長、生徒課長、図書課長および庶務課長は教授のなかから、ただし会計課長だけは会計主任書記を、校長が任命することになっていた。会計課以外の課長は担任学科の教授を兼務する一方で、校長の命を承け、その課の所管業務を掌理しなければ



「学則」制定の許可書と同認可申請書

ならなかったわけである。

### 〈各課の所管業務〉

各課の所管業務は開校以来数回にわたり部分的改正が行われたが、昭和6年度の規程を示すと以下のとおりである。

#### 教務課

- 一、授業及教授ニ関スルコト
- 一、教科用書ニ関スルコト
- 一、選抜試験及入学ニ関スルコト
- 一、学級編成ニ関スルコト
- 一、生徒ノ退学及休学ニ関スルコト
- 一、修学旅行見学及実習ニ関スルコト
- 一、生徒ノ学籍及成績表ニ関スルコト
- 一、生徒ノ諸願、伺及届ニ関スルコト
- 一、試験、進級及卒業ニ関スルコト
- 一、生徒出席簿ニ関スルコト
- 一、講堂、教室及教官室ニ関スルコト
- 一、教具教材ノ設備保管ニ関スルコト
- 一、参観人ノ取扱ニ関スルコト
- 一、其ノ他教務ニ関スル一切ノ事項

#### 生徒課

- 一、生徒ノ監督、指導並訓育ニ関スルコト
- 一、生徒ノ欠席、欠課、遅刻及早退ニ関スルコト
- 一、生徒ノ諸願、伺及届ニ関スルコト
- 一、生徒ノ掲示、広告及集会ニ関スルコト

- 一、生徒ノ保健ニ関スルコト
- 一、生徒ノ身分ニ関スルコト
- 一、生徒ノ宿所ニ関スルコト
- 一、生徒ノ兵役ニ関スルコト
- 一、学級総代ニ関スルコト
- 一、生徒ノ訓誨及懲戒ニ関スルコト
- 一、其ノ他生徒監督ニ関スル一切ノ事項

#### 図書課

##### 第4章 附属図書館に譲る

#### 庶務課

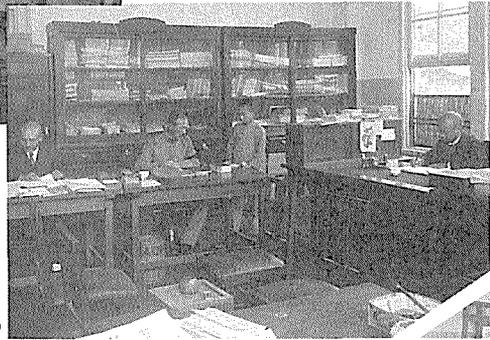
- 一、御真影及勅語ノ保管(昭和11年12月「御真影及勅語謄本の奉安」と改正)ニ関スルコト
- 一、校長ノ官印及校印ノ管守ニ関スルコト
- 一、職員ノ進退、身分及服務ニ関スルコト
- 一、規則及命令ニ関スルコト
- 一、学校一覧ニ関スルコト
- 一、学事年報及官報ニ関スル報告其ノ他学校全般ニ関スル統計報告ニ関スルコト
- 一、文書ノ接受及発送ニ関スルコト
- 一、公文書類ノ整理及保存ニ関スルコト(昭和9年3月削除)
- 一、儀式ニ関スルコト
- 一、当直ニ関スルコト
- 一、記録ノ編纂及保存ニ関スルコト
- 一、生徒ノ諸願、伺及届ニ関スルコト
- 一、卒業生ニ関スルコト
- 一、其ノ他、他課ノ主管ニ属セザル一切ノ事項

#### 会計課

- 一、予算、決算及金銭出納ニ関スルコト
- 一、国有財産及資金ニ関スルコト
- 一、物品ノ買入、売払、貸借及修理ニ関スルコト
- 一、土地及建物ノ當繕ニ関スルコト
- 一、物品ノ出納及保管ニ関スルコト
- 一、寄付受理ニ関スルコト
- 一、傭人ノ進退、身分及服務ニ関スルコト
- 一、警備及衛生ニ関スルコト
- 一、会計ニ関スル公文書ノ整理及保存ニ関スルコト



教務課(昭和初期)



生徒課(昭和初期)

- 一、生徒ノ諸願、伺及届ニ関スルコト
- 一、其ノ他会計ニ関スル一切ノ事項

以上、各課の所管業務をみると、就職斡旋の担当課が明らかでない。この点、昭和16年4月の規程改正で生徒課の業務として「生徒及び卒業生ノ就職ニ関スルコト」の一項が追加され明確になった。就職に関してはのちにふれる。

#### <各課の陣容>

大正11年『学校一覧』によると、開校当初の各課の陣容は次のとおりであった。

教務課長	教授	高木 敏雄	課員2名(兼務1名)
生徒課長	生徒監教授	生田 鹿之丞	課員2名(兼務1名)
図書課長	事務取扱教授	伊藤 資生	課員2名
庶務課長	講師	瀬川 亀	課員4名
会計課長	物品会計官吏	加藤 富松	課員3名

教務課長の高木敏雄はその年12月、病気で急逝したので、後任には同じくドイツ語の高橋周而が就任。教務課長は校長不在時その代理をつとめるなど校長に次ぐポストであったが、高橋は昭和17年3月まで長くその要職にあった。その後を継いだのは吉本正秋(英語)、上田畊甫(英語)、吉野美弥雄(中国語)、金子二郎(中国語)であり、語学担当の教授によって占められてきた。

生徒課長は初代生田鹿之丞にはじまり、生徒監(文部省直轄諸学校官制第9条によると、校長の命を承け生徒の訓育を掌る)が兼ね、修身を担当する教授の就任が一般的であった。昭和3年生徒監が生徒主事と改まった時、最初の生徒主事として生徒課長を兼ねた志水義暲も担任は修身であった。昭和10年8月その後を継いだ平沢俊雄は、はじめ生徒主事・生

徒課長で学科担任をもたなかったが、翌11年2月から17年9月大阪帝大学生主事として転任するまで、修身・社会学を担任した。昭和17年9月から21年3月までの激動の時代に生徒課長を務めたのは法律の白井正であった。

生徒課は生徒の監督や指導訓育を第1の仕事としていたから、生徒課職員には体操や教練の教官、従って陸軍軍人が多く所属していた。昭和初期、左翼思想が風靡した時代には、通史でも述べたように、生徒が教室にいない間に生徒の机に不穏文書がないか調べてまわるのも彼らの仕事であった。戦争が激しさをまし、野外教練は勿論、防空訓練、食糧増産、勤労作業が多くなるにつれて、生徒課職員もふえ、仕事も多忙を極めるようになる。

生徒課職員は昭和3年11月時点では志水課長以下、山本健太郎(印度語)、体操の川村清忠(歩兵大尉)、同じく田中亀太郎(特務曹長)、事務囑託の里辰三郎の5名にすぎなかったが、昭和7年9月には7名、昭和13年11月には9名、昭和17年になると11名にふくれあがった。課長白井正以下、相沢正美、金子二郎、小田信秀の教官4名のほか、江口庫一郎、山中安三(ともに応召中)、田中亀太郎、藤村哲彦、峯田清太郎、中野作藏、上平四郎司が所属していた。このうち予備役軍人は江口(少佐)、山中、峯田、中野(いずれも少尉)、田中の5名を数えた。当時の生徒課の多忙ぶりを相沢は次のように回顧している。

戦局の拡大につれ国民生活の上にも、一大変革が訪れた。食料は配給制になり、衣料は切符制となって日常生活は極めて窮屈になってきた。一人当りの米の配給は、一日二合三勺に限定され、国民は空腹を抱えながら、一億一心米英撃滅をモットーにそれぞれの職域を守った。学校の食堂も米の配給が減らされて、学生はだんだん顔色が冴えなくなった。しかし、幸いに大学、高専の学生には一人一日五勺の特別加給があったのでどうやら凌ぐことができた。この特別加給を貰いに行くのが私の仕事で、毎月末大阪府庁の係の処へ出かけて、加給の切符を貰っては米屋から受取っていた。在学生は、既に三年生が九月に卒業しているので実際には九百人いなかったが、そこはお役所仕事ののんきさで、ずっと最初の九百人分を配給してくれたので幽霊学生の分は、教職員の分に廻し、従来通り昼食は学校でとることができるようにした。しかし当面の責任者である私は心中ヒヤヒヤもので、いつ実人員の抜打調査に来られるかとビクビクしていた。もし幽霊学生が暴露したら私は全責任を負って辞職する覚悟でいたが、幸いにもそのことがなくて済んだのは天の助けともいうべきであった。

当時の生徒課は白井さんを課長に総勢八名とふくれ上って、到底元の生徒課では收容しきれなくなったので、教務課と庶務課とをブチ抜いて一室とし、ここへ移り教務課は旧生徒課へ、庶務課は校長室の隣りへと移転した。正に大生徒課の誕生である。ただに形が大きくなっただけでなく、それ相応に仕事もふえた。第一が今挙げた食糧の確保であり、次いで勤労作業、防空対策、強制貯金等が凡て生徒課の管轄であり、この外にたまには従来からの就職指導があったから正に一人三役四役ともいうべき状態であった。

勤労作業とは国家総動員法に基づいて国民全員が戦争完遂のため、戦力増強のため、各自のもてる力をフルに発揮すべく、各団体、各個人に課せられた仕事である。(略) 学生に対しては知事の要請に依って工場なり防空施設の援助をなす義務が課せられた。始めは月に一、二回であったが次第にその回数をまして、後には週一回位ずつ必ず駆り出された。その都度計画実施に当るのが生徒課で、しかも私の担当であった。〔「外語時代を顧みて」「扉」第9号〕

庶務課長の席に長くあったのは経済・英語の小西茂であった。大正14年8月から昭和16年8月まで庶務課長を務めるかたわら、法律・経済の、昭和10年8月以降は法律・経済学・植民政策の学科主任をも兼ねていた。

### 〈主幹と学科主任〉

教育事務を管掌するため、各語部に主幹1名が任命され「学業ノ進歩発達ヲ図リ之ガ実施ノ責ニ任ジ」ていた。また「各学科ノ統一ヲ図リ教育ノ効果ヲアゲルタメ」学科主任1名が任命され、(1) 教務課と協力して最も効果ある教授法の実施、(2) 教官の分担決定、(3) 教科用図書や器機、標本・材料等の選定や保管等に当たっていた。

昭和6年10月末現在の主幹および学科主任は次のとおりであり、語部主幹で学科主任を兼ねているのは支・蒙・印・仏・露・西の6語部、馬・英・独の3語部は別人であり、必ずしも同一人とは限らなかった。

主 幹		学 科 主 任		そ の 他
支那語部	井上 翠	支那語	井上 翠	評議員
蒙古語部	(助)精松 源一	蒙古語	(助)精松 源一	
馬來語部	浅井 惠倫	馬來語	(助)内藤 春三	評議員
印度語部	沢 英三	印度語	沢 英三	
英 語 部	吉本 正秋	英 語	上田 昉甫	評議員(吉本正秋)
仏 語 部	目黒 三郎	仏 語	目黒 三郎	教務課長(高橋周而)
独 語 部	山本 茂	独 語	高橋 周而	
露 語 部	岩崎兵一郎	露 語	岩崎兵一郎	生徒課長
西 語 部	佐藤 久平	西 語	佐藤 久平	
		修身・社会学・ 教育学	志水 義暲	
		国語・漢文	(講)北西鶴太郎	図書課長
		ペルシア語	(助)山本健太郎	
		蘭 語	(助)徳 勝雄	庶務課長
		地理・歴史	稲村 純一	
		法律・経済	小西 茂	
		商 業	相沢 正美	
		体 操	配属将校	
			谷口 豊祐	

(助)は助教授、(講)は講師を示し、それ以外は教授である。

その他、学校の機関としては評議会、主幹会、学科主任会、教授会があった。

評議会は校長が任命する7名の教官で構成され、うち4名は教務・生徒・図書・庶務の4課長をもって当てられていた。主幹会は評議員と主幹、学科主任会は評議員と学科主任、教授会は教授および助教授(必要のときは他の教官その他職員も出席)をもって構成されていた。

評議会は重要な教育施設、教授会は重要事項、主幹会・学科主任会は必要事項に関する校長の諮問機関であった。

以上を定めた教育事務分掌規程は昭和6年7月、教務分掌規程と改められ、内容も一部改正された。すなわち、主幹の目的が「生徒ノ紀律学業ヲ督励スル」ことに、学科主任が「当該学科ノ統一ヲ計ル」ことに改められた。評議会は評議員会に、教授会は教官会と名称が変わり、教官会の構成は「本校ニ勤務スル邦人教官(必要アル場合ハ当該会員ニ非ザル者モ列席)」と改まった。同時にすべての機関は必要事項に関する校長の諮問機関とされた。

#### 〈戦後の改正〉

昭和22年8月、規程改正があり、教務分掌規程、事務分掌規程、文書処理規程の3つが廃止され、代わって「大阪外事専門学校処務規程」が制定された。総則・事務分掌・文書処理の3章20条から成る簡素なものである。主な改正として、語部主幹と学科主任が廃止され、各学科に学科長が置かれた。学科長は校長により任命され、専攻学科目の授業計画、学科所属の生徒補導その他を処理することとされた。また、必要事項に関する校長の諮問機関として、学科長会議、教官会議、職員会議が設けられた。教官会議の構成についてこの規程では明記されていないが、その後の教官会議記録を見ると、教授、助教授のほか講師の名前も見られる。

事務組織として、教務課・生徒課・図書課・庶務課・会計課の5課制はそのまま存続したが、従来、教授が任命されていた庶務課長は、会計課長と同じく文部事務官をもってあてて改まった。

各課の業務分掌においては、兵役に関することや御真影(天皇、皇后の写真)・勅語の奉安など旧時代の規定は当然削除され、生徒の福利厚生(生徒課)、恩給や職員の身体検査(庶務課)、職員の福利厚生・共済組合(会計課)に関することなどが新しく加わった。この処務規程も2年後の新制大学移行とともに、再び以前のような3規程として再生する。

## (2) 大学時代

### 〈事務局の発足と学生部の設置〉

昭和24年の前半は新制大学への転換、第1回入学生の受入れなどに忙殺され、一段落をみたのは夏休み前の7月初めであった。

それから学内の諸規程の制定作業が始まる。まず10月7日教授会規則が制定され、大阪外国語大学職務規程、同分課規程が制定されたのは、25年1月26日であった。いずれも大学発足の24年6月1日に遡及して適用されることになった。

大阪外国語大学職務規程は5条から成り、教務部、事務局における部一課一係にいたる指揮命令系統を示し、専門学校時代、図書課に属していた図書館を独立の附属図書館とし、その事務は附属図書館長が統括することを定めた。校長のもとに、5課が併置されてきた開校以来の学校組織は、ここに終止符を打つことになった。

大阪外国語大学分課規程は、第1条で「本学本部に教務部及び事務局を置く」とし、第2条で教務部に教務課及び学生課を、第5条で事務局に庶務課及び会計課を、第8条で附属図書館に事務室を置く」と規定した。

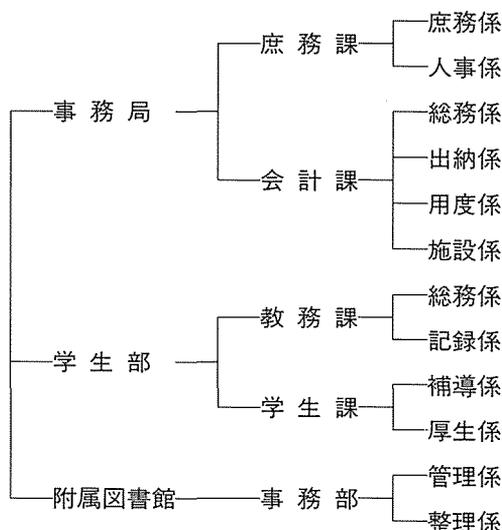
これは国立学校設置法施行規則第28条の「国立大学に庶務、会計及び施設等に関する事務を処理させるため事務局を、及び学生の厚生補導に関する事務を処理させるため厚生補導に関する部を置く」と定めたところに準拠したもので、同条第6項の「事務局長は事務職員をもって、事務局の部長及課長は事務職員又は技術職員をもって充てる」という規定によって、初代の事務局長に坂口半造、庶務課長に上田明吉、会計課長に渡辺肇が任命された。

同第6項後段の「厚生補導に関する部の部長にあつてはその大学の教授、助教授又は事務職員をもって、課長にあつては事務職員又はその大学の教授、助教授若しくは講師をもって充てる」という規定によって、教務部長に金子二郎、教務課長に小沢忠雄、学生課長に吉野美弥雄が任命された。

教務部は28年4月1日から学生部と名前が変わる。3月20日の教授会で名称変更が決められたものである。

35年4月には事務組織規程、事務分掌規程が制定され、それまでの職務規程、分課規程は廃止された。改正後の事務組織を表示すると別表のとおりである。

35年4月の改正で目につくのは、組織図での事務局と学生部の順序を変えたこと、さらに必要な場合は各課に課長補佐が置けるようになり、まず庶務課・会計課に置かれ、おかれて学生課は42年、教務課は52年に置かれるようになった。33年4月新設された短期大学部に事務室がおかれたのは36年4月で、その間の短大事務は学生部で代行されてきた。



#### 〈保健管理センターの発足〉

上八から箕面への学舎移転を前にした昭和54年4月1日、保健管理センターが設置された。学生、教職員を対象として保健管理に関する専門的業務を一体的に扱うための独立した厚生補導施設である。

戦後の学校における保健管理は、混乱期を脱した昭和33年の学校保健法制定以後、施策・施設の整備が進められるが、保健管理センターは39年の国立学校設置法施行規則の全面改正によって「学生の保健管理に関する専門的業務を行う厚生補導のための施設として国立大学に保健管理センターを置く」（同規則第29条の3）と定められたものである。同規則に基づいて文部省は全国立大学に保健管理センターを設置する計画を立て、まず41年度は東京大学など4大学に設置されたが、センター設置の理由に、大学生の精神神経障害者の増加をあげているのが注目される。学生の保健管理の第一課題は戦前、戦後とも一貫して結核対策であったが、高度経済成長期の昭和30年代後半から神経障害を訴える大学生が増加し始め、この傾向は短大を含む大学の学生数が100万人を突破(108万5,000人)した40年以降さらに顕著になっていたものである。大学入学後、理想と現実の落差に悩む、いわゆる「五月病」の増加もその一例であった。

保健管理センター設置以前の本学の保健管理体制はどのようなものであったろうか。外語・外専時代を通じて、生徒課の主管事項の一つに「学校衛生ニ関スル事」（大正11年）「生徒ノ保健ニ関スル事」（昭和3年）が掲げられており、嘱託学校医の名前も見えるが、保健管理の実態は明らかではない。

大学になってからは生徒課に代わって学生課がその任に当たるが、上八復帰後の学校医は主として近くの大坂警察病院に依存、のちの保健管理センターの礎石となる保健室が設置されたのは昭和35年10月であり、看護婦1名が配置されたのは11月1日付であった。警

察病院の内科医が毎週1回、学生の健康相談に当たったが、42年6月からは週1回、神経科医師による相談室が開設されるようになる。前述の神経障害増加に対処するためのものであった。

当時、学生部長として同センター設立にかかわった広実源太郎名誉教授の回想によると、46年度までに38国立大学にセンターが設置されるなか、本学でも保健室を早く保健管理センターにと、概算要求を提出しようとしたが、当時は学部数3以上、学生数4,000人以上の大学優先という制約があったうえ、「狭い上八学舎のどこに設置するんですか」と聞かれると返答しようがなく万事窮したということで、第二部(夜間)設置に伴う看護婦定員1名増で満足せざるを得なかった。

本学がようやく概算要求を提出したのは移転計画が具体化した49年度であり、人員要求は所長教授1、健康管理医として助教授・助手各1、カウンセラー講師1、X線技師1、保健婦1、事務職員2の計8名。施設要求は鉄筋コンクリート2階建260㎡、X線装置などの設備費、特殊経費を含め約2,500万円であった。その後毎年、要求を繰り返し、移転工事がかなり進んだ53年度概算要求でようやくセンター設置が認められたのである。設置許可内示があったのは53年10月であった。

こうして54年4月1日、保健管理センターが設置されたが、人員要求は大きく削減され、医師は教授・講師各1名、看護婦は1名増となったが定員削減との関係で実員増は見送られた。さらに、その年の秋までに箕面へ移転しなければならないため、上八校舎でのセンターは実体の伴わないままの発足とならざるを得ず、広実学生部長をセンター所長事務取扱に発令、保健管理センター準備委員会を成立させたにとどまる。

センター準備委員会は、医師については精神科医と内科医を確保することとし、大阪警察病院や大阪大学医学部に協力を求めて人選作業を進めた。こうして精神科医(教授)は国立呉病院から浅井敬一を迎えることになり、54年7月1日付で発令された。9月には保健管理センター規則、同センター運営委員会規程も制定された。

一方、内科医(講師)は阪大病院から太田妙子を迎え、55年3月1日発令した。学生課に所属していた看護婦2名の身分も保健管理センターに移され、箕面移転後、ようやく保健管理センターとしての実質的な機能を備えるに至ったのである。55年8月1日には、教授会の承認を得て浅井医師がセンター所長に就任した。初めは図書館棟に仮住まいだったセンターは56年5月、本部棟の完成で同棟2階の現在位置に定着した。

学生の健康への関心を高めるため、56年1月から『保健管理センター年報』、59年10月からは『保健センターだより』(CAMPUS HEALTH)も発行されている。

平成3年度末現在の保健管理センターの陣容は、所長教授(神経科)・志水彰、助教授(内科)・太田妙子、技官(看護婦)・小村マサエ、杉中敏子である。

## 〈事務機構の整備〉

事務機構の整備に伴って、これまでなかった新しい職位も設けられた。

- (1) 学生部においては、学生部長は本学教授のうちから、学生課長は本学助教授、講師のうちから選ばれてきたが、56年4月、学生部長の職務を助け、学生部の事務を整理するため、学生部次長(事務職員)が置かれた。翌57年4月から、本学教官が併任してきた学生課長のポストも事務職員をもってあてられることになった。
- (2) 59年10月、附属図書館事務部に図書館専門員が設けられた。図書館の事務のうち極めて高度かつ専門的な事項に係るものの処理にあたるものである。
- (3) 前記と同じように「極めて高度または特殊な専門的知識、経験等を必要とする特定の分野の事務を処理する」専門職員制度が設けられ、63年4月教務課に留学生に関する専門職員が、平成3年4月庶務課に国際交流に関する専門職員がおかれた。
- (4) 入試制度の多様化に対処して、本学にも平成2年6月、入学主幹が置かれた。入学選抜に関する事務を処理するもので、教務課所管の入学試験係を含んでいる。

## 〈組織の変遷〉

35年以降、現在までの組織の変遷を課ごとにみると以下のとおりである。

### 庶務課

- |          |                              |
|----------|------------------------------|
| 昭和46年10月 | 職員係を設け、庶務係・人事係所管の職員に関する事項を移管 |
| 平成3年4月   | 国際交流に関する専門職員を置く              |

### 会計課

- |         |                |
|---------|----------------|
| 昭和46年4月 | 施設係を分離して施設課とする |
| 47年4月   | 管財係を置く         |

### 施設課

移転候補地が小野原地区に決定したあとの46年4月、新学舎建設に対処するため、会計課所属の施設係を分離独立させ、新しく施設課が設けられた。課長1名、課長補佐1名(兼任)、企画係2名、施設係4名、実質7名でのスタートであった。

粟生間谷移転決定後、施設課は設備係、工営係に改組されたが、51年5月20日、学長の施設課強化要請を受けて人事委員会で検討の結果、9月になって事務局各課から各1名を施設課へ供出することになり、その補充はアルバイトによることとした。

10月から工営係は第1工営係と第2工営係に分けられ、前者は新営工事を、後者は営繕工事を分担することになる。学舎建設が進み本部棟の完成も近づいた56年4月、第1および第2工営係は統合されて工営係に戻った。55年1月には学内の衛生的環境を確保するため、環境保全係が設けられ、大学周辺その他への植樹が始められた。

## 教務課

昭和49年10月	学生課所管の留学生係を教務課の所管とする
52年10月	入学試験係を置く
63年4月	留学生に関する専門職員を置く
平成2年6月	入学試験係を入学主幹に移管

## 学生課

昭和38年10月	就職斡旋係を置き、厚生係所管の就職斡旋事務を移管
40年4月	留学生係を置く
55年5月	補導係を学生係と改める。厚生係所管の寮関係事務を就職斡旋係に移管し、寮務就職係と改める

## 図書館事務部

昭和37年9月	視聴覚資料係を設ける
42年9月	運用係を設ける
47年5月	運用係を第1運用係、第2運用係に分ける
54年10月	管理係を総務係、受入係と編成替え、第1運用係、第2運用係を運用係に統合す
59年10月	図書館専門員を置く
61年11月	学術情報係を置く

## 第二部事務部(短期大学部を含む)

昭和37年4月	総務係、教務学生係を設ける
54年4月	総務係、教務係、学生係とする
55年1月	総務学生係、教務係と改める
55年4月	総務係、教務係、学生係とする

## <諸規程の変遷>

「教育公務員特例法」は第4条第1項および第2項で「学長及び部局長の採用ならびに教員の採用及び昇任は選考によるものとし、その選考は大学管理機関がその定める基準により行わなければならない」と規定している。そのほか、学長の任期、教員の定年の決定、意に反した転任や降任、免職も大学管理機関の審査を経なければならないとしている。ここにいう大学管理機関とは、本学の場合、教授会であり、教授会に大幅な権限が与えられたわけである。

専門学校時代、文部省直轄諸学校官制の定めるところにより、校長は勅任官または奏任官で、課長の任命権をもち、教授会も校長の諮問機関にすぎなかったことからすると、抜本的な変革であったと言えよう。

## 〈学長選考規程〉

24年5月31日、大阪外国語大学が設置され、同日、平沢俊雄が本学の学長に補され、大阪外専校長をも兼ねることになった。前記特例法の規定にもとづく学長の任期や教員の定年を定めたものは、その時は未だできていない。学長選考規程が制定されたのは、それから4年後の28年のことである。その年3月18日の教授会で学長から選考内規について発議され、20日の拡大教授会で、教授、助教授、講師・助手からそれぞれ3名合計9名から成る学長選挙内規起草委員会が発足し、規程の制定に取りくむ。翌月の16日、学長選考規程と学長選挙管理委員会規程が教授会に提出され、審議の結果、決定をみた。記録によると、草案審議に先だち学長は「議長として議事を進めるべきではあるが、十二分に案をご検討願うため、私が退席した方がよいかと考えるので、議長は互選でご決定願って慎重に審議を願うことにする」と退席、事務局長、庶務課長もこれに続き、午前10時から始まった教授会が散会したのは午後9時であったと記している。

4月16日決定をみた学長選考規程によれば、学長の選考は教育公務員特例法に基づき教授会がこの規程により行うものとし、任期満了の時、辞任申し出の時、欠員の時、選挙により行うとされた。選挙資格者は本学教官のほか、文部事務官および文部技官を含んでいた。選挙は第1次と第2次に分け、次の方法で行うものとされた。

- (1) 第1次選挙は単記無記名投票によって行い、選ばれた者の氏名は五十音順に発表する
- (2) 第2次選挙は、前項の選挙によって選ばれた者について単記無記名投票によって行い、得票過半数の者を当選者とする
- (3) 得票過半数の者がいないときは得票多数の3名につき再投票を行い、なお得票過半数の者がいないときは上位の2名につきさらに投票を行う
- (4) 第2次選挙において得票同数の者があるときはこれを同順位とする
- (5) 学長選挙には選挙資格者全員の3分の2以上の投票を必要とする

任期は4年、再選を妨げないとされた。この規程により初の学長選挙が28年5月10日行われ、平沢俊雄が選ばれた。

その後、学長選考規程は32年4月、選挙資格者のうち「文部事務官および文部技官」がはずされ、36年4月には短期大学部設置に伴い、短大専任の教官も加えるという改正が行われた。

3回の学長選挙の経験をふまえて、40年2月、学長選考規程は学長候補者選考規程と改められ、選挙方法を中心に、より具体的、明確となる。

第1次選挙で第2次選挙の候補者上位3名を選出、第2次選挙では前記3名について投票を行い、得票過半数者を当選とする。過半数に達しない時は2名にしばって再投票し、過半数を当選、なお、いない時はもう一度投票し、得票同数の時は年長者を当選者とするという内容であった。

また、第2次選挙は第1次選挙の翌日実施と明記、同時に第1次の選挙結果は得票順に票数も付して、即日発表、掲示することになった。任期は変えないものの、但し書で「引続き6年を超えることはできない」と制限を設けた。

この改正規程で40年4月11日学長選挙が行われ、金子二郎が当選、6月11日森沢三郎学長のあとをついで第3代学長に就任した。それから4年、任期満了となる44年を迎え、本学にも学園紛争の嵐が吹く。紛争の途中で金子学長は病に倒れ学長を辞任、解決の糸口が見つからないままに学長不在の時間が過ぎていく。6月11日牧祥三が学長事務取扱となって指揮をとるに至って、事態は漸く動き出す。

問題の焦点は、事務職員や学生の意向を、学長選挙にどのように反映するかであり、46年5月、学長選挙に関する特別委員会が発足し、規程改正作業が進められた。12月2日協議会(=教授会)で改正案を仮決定し、事務職員、学生に配布して協力を要請したが学生自治会とは調整がつかないまま、47年1月13日の協議会でさきの改正案を正式に決定した。ここに至るまでの苦悩の道のりは通史第4章「学長選挙の改革」の項で述べた。

47年1月改正の主な点は次のとおりである。

第1次学長候補者について事務職員および学生の意向調査を行うこと(第6条第3項)とした。

第1次学長候補者を3名から5名とした。

第1次選挙の翌日に第2次選挙を行っていたものを、第1次選挙後10日以降20日以内に実施することとした。

任期4年を3年とし、再任の場合の任期は2年とした。

この新しい選考規程による最初の学長選挙が行われ、2月10日牧祥三を選出、3月1日学長に就任した。それより先、文書で文部省に規程改正の報告をしたのが1月24日。折返し2月10日付で大学学術局長から学長あてに通知が届く。いわく「報告は受理した。なお次の点についてはさらに検討されるように」として、「第1次学長候補者について事務職員、技術職員および学生の意向を徴するための調査を行うことは適当ではないこと。(第6条第3項)」と、今回改正の目玉である意向調査について、暗に否定的見解が述べられている。以後、新学長の辞令交付の際や選考規程改正を報告するたびに、文面は穏やかであるが、厳しい内容の通知が繰返される。

それから「意向調査」の処理について苦しい時代がつづく。第6条第3項が規程の文面から削除されたのは、63年3月のことであった。

なお、任期については59年11月8日の改正で4年となり、再任の場合には2年とし、引きつづき6年を超えることはできないことになった。

#### <学生部長選考規程等>

教育公務員特例法は学生部長、第二部主事、附属図書館長の選考についても、学長選挙

と同じく、教授会の定める基準に従って行うことを義務づけている。学長選考規程の制定につづいて、29年9月12日附属図書館長選考規程、38年7月11日短期大学部主事選考規程、38年9月12日学生部長選考規程が制定された。短大部の規程は40年4月その廃止と第二部の設置により、7月15日第二部主事選考規程と改まった。

各規程の条文は共通していて、選挙方法を除き学長選考規程に倣った点が多い。現在適用されている規程は次のとおり。

選考の時期	任期満了、辞任申し出、欠員の場合
候補者	本学教授
選挙資格者	学長、専任の教授、助教授、講師、助手
選挙の方法	選挙資格者の3分の2以上の単記無記名投票で過半数を得た者を当選とし、ない場合は上位2名で再投票 学長は選挙の結果を参考として候補者を決定
任期	2年とし再選を妨げず、引続き3年を超えられない

当初、学生部長の任期は1年であったが、41年8月1日から2年と改まった。なお、57年4月から学生課長は事務職員をもって充てられるようになったので、38年9月制定の学生課長選考規程は廃止となった。

#### 〈教授会委員会規程〉

昭和26年4月、「図書委員会を設置して円滑な運営を期したいので、委員会規程はおって制定することとし、とりあえず委員5名を選出したい」との発言を教授会記録に見ることができ。しかし教授会委員会規程の原型というべきものは37年3月1日制定の「大阪外国語大学運営委員会内規」であろう。内規はその目的を「全体教授会に付議すべき事項について予め討議するため」設けるものとし、委員長は学長、その他委員は各種委員会の委員長、学生部長、図書館長で、必要に応じ事務局長ほか関係職員も出席できた。全体教授会のメンバーがふえ、審議を尽くすためとられた打開策といえる。各種委員会規程におけるそれぞれの目的は次のとおり。

- 学業委員会(学科課程、授業その他学業に関する重要事項の審議)
- 図書委員会(附属図書館に関する重要事項の審議)
- 補導委員会(学生生活の諸問題についてその指導、援助の方針、計画を審議)
- 学報委員会(学報の発行、編集及び寄贈先の選定に関し企画審議)
- レクリエーション委員会(職員のレクリエーションに関し企画協議し実行)
- 学寮委員会(学寮の管理、運営に関し、その基本方針の審議、重要事項の決定)
- LL委員会(LLの設備、資料の維持拡充、LL授業・研究に関する方針の審議)

委員の構成、任期は委員会ごとの規程で別個に決められていた。

この内規のあとをうけたものが、40年4月1日制定の「運営委員会規程」である。教授

会規程に新しく第6条を設け、教授会に運営委員会を置くとした改正に対応したもので、目的は内規と変わらず、委員は学長、学生部長、図書館長、事務局長、主事および課長、教授会で選出された教官(計11名)で、任期は2年、引続き4年と明記された。

教授会運営委員会規程が整備されて、41年4月新しく制定されたのが「教授会委員会規程」である。教授会に常置委員会として、庶務、会計、教務、学生、図書の5委員会が置かれ、委員は第一部(東洋、西洋)4名、一般教育・留別2名、第二部2名の合計8名。各委員長は委員の互選によるが、庶務委員会だけは学長が委員長を務めるとされ(のち委員の互選となる)、任期は2年で再任はできないとされた。必要に応じて特別委員会を設けることとし、この時できたのは人事、入試実施、大学院設置準備、外国語学部基準準備、大学管理運営に関する意見書(案)検討の5委員会であった。同時に従来あった12の委員会および規則は廃止された。

49年3月8日、教授会規程第6条が「教授会は専門の事項を調査、審議するため教授会委員会を設ける。その規程は別に定める」と改正されたことをうけて、教授会委員会規程も改正された。その後7回の改正ののち現在の外国語学部教授会委員会規程に至るが、現規程の要点をあげると次のとおりである。

常置委員会には第1種と第2種があり、第1種委員会の審議事項と所管は次表のとおりである。

委員会名	審議事項	所管課
庶務委員会	学則、その他重要な規則の制定及び改廃並びに教官の海外出張等に関する事項	庶務課
会計委員会	予算及び概算の方針に関する事項	会計課
教務委員会	学科課程、授業計画及びその他教務に関する事項	教務課
学生委員会	学生の課外教育、奨学援護及び福利厚生等に関する事項	学生課
学術出版委員会	学術出版事業の推進及びその他本学の学術研究の振興に必要な事項	附属図書館 事務部

第2種委員会として、人事委員会、将来計画委員会、国際交流委員会、入学試験実施委員会、図書館委員会があり、それぞれに委員会規程を定めている。必要に応じ特別委員会を設けることができるが、「外国語学部教授会委員会に関する申し合わせ」によると、平成4年3月末現在、入学者選抜方法研究委員会、視聴覚教育委員会の2委員会がある。

#### 〈学則の改正〉

本学学則の構成は当初、第1章総則に始まり、第2章学年、学期及び休業、第3章学科

課程、第4章入学・退学・休学・復学及び転学、第5章試験及び卒業、第6章外国人学生及び聴講生、第7章別科、第8章入学科及び授業料、第9章賞罰で終わる、全文49条から成っていた。

学科の新設・名称変更、学年暦の変更、学生定員や授業料の改訂などがある都度、関係条文の挿入・削除・修正が行われるわけであるが、27年11月英語学科の定員増、授業料の改訂といった第1回の改正があつてから、平成4年3月までの改正は45回を数える。以下、年代をおって主要なものを略記する。

- 31年6月 その設置に伴い、第7章専攻科の規定を設けた。
- 36年4月 別科廃止により、第8章別科の規定を削除。これより早く短期大学部設置に伴い、短大独自の学則が33年10月制定されている。
- 37年4月 隔年募集の廃止により、第2条但し書「年度によって学生を募集しない学科がある」を削除。
- 38年4月 花園に学生寄宿舍完成に伴い、第9章学寮の規定を設けた。
- 40年4月 短大の廃止・第二部の設置により短期大学部学則を廃し、一部、二部を統合した学則に改めた。
- 45年4月 第3章学科課程の規定は修業年限と卒業資格に関するもののみを残し、他は学則とは別の「授業科目履修案内」に規定した。第5章試験及び卒業の規定も「案内」に譲った。
- 47年4月 第28条在学年限を第一部7年から8年に、第二部9年から10年に改めた。第5条学年暦を変更、第1学期4月1日から9月30日までを10月10日まで、第2学期10月1日から3月31日までを10月11日からと改めた(56年4月の改正で旧にもどる)。
- 49年10月 第2条の語学科ごとの学生定員の表示に、入学定員数のほか総定員数も加えた。
- 50年4月 第8章授業料等の金額表示を取りやめ、「文部省令」の規定に基づき定められた金額と改めた。
- 51年4月 第3章の2として、教育職員免許に関する規定を設け、付則で免許状の種類および教科を別表表示した。
- 53年4月 第11章公開講座の規定を設けた。
- 54年9月 大学会館および課外教育施設の規定を第10章として挿入した。
- 61年4月 学生の臨時増募に関連して、付則で61年～63年間の暫定総定員数を付記。
- 62年4月 前記と同じく、付則で62年～64年の暫定総定員数を付記。
- 平成3年4月 前記と同じく、付則で平成3年～5年の暫定総定員数を付記。
- 54年箕面移転に伴い、新しい事態に対応して諸規程が整備された。多くは施設の管理運

営に関するものである。その制定日と規程名を列記する。

54年 7月12日	交通規制要項
9月13日	留学生会館規程
”	保健管理センター規則
”	同運営委員会規程
11月29日	学寮管理運営規程
55年 1月17日	大学会館管理運営規程
6月26日	サークル共用施設管理運営規程

以下は施設の使用を規定したものである。

55年 5月29日	大学会館使用細則
6月1日	体育施設使用規程
7月1日	体育館使用心得
56年 9月17日	職員会館使用規程
58年10月13日	記念会館使用規程
59年 5月10日	合宿所使用規程、合宿所使用心得
7月12日	外国人教師宿舍貸与規程
11月22日	山の家使用規程、山の家使用心得

### (3) 土地・建物

#### 1. 戦前

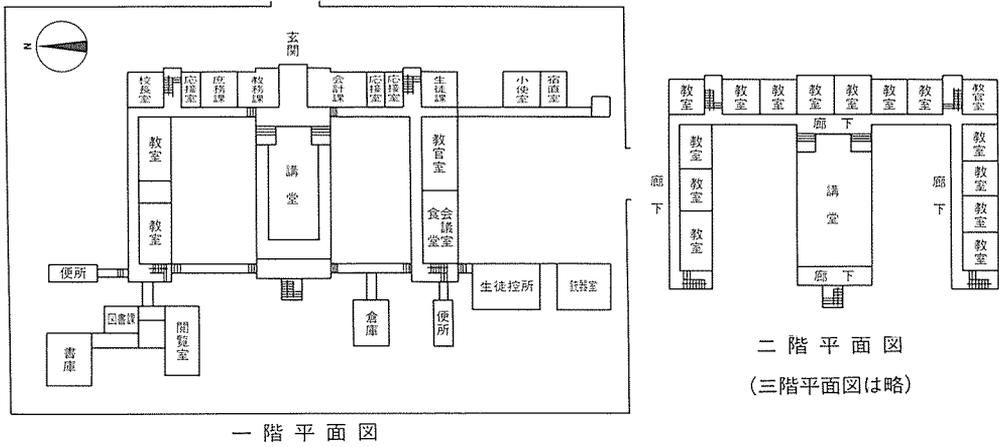
##### <開校当時の施設>

本校の施設については、大正11年11月の開校式で文部省の柴垣建築課長が概要を報告している(通史第1章「校舎の概要」参照)。そのなかで、完成したものとして、本館鉄筋コンクリート造3階建364坪、講堂鉄筋コンクリート造・ギャラリー付平屋建145坪、図書閲覧室木造平屋48坪、生徒控所木造平屋建80坪、その他付属家屋95坪余。工事中のものとして、書庫と倉庫がある旨述べている。大正11年当時、校舎の配置は図-1のとおりであった。(以下、校舎敷地および配置図は、すべて『学校一覧』『大学一覧』などに掲載されたものである)

##### <増改築の足どり>

開校ののち、増改築された施設の主なものを年代順に追うと、

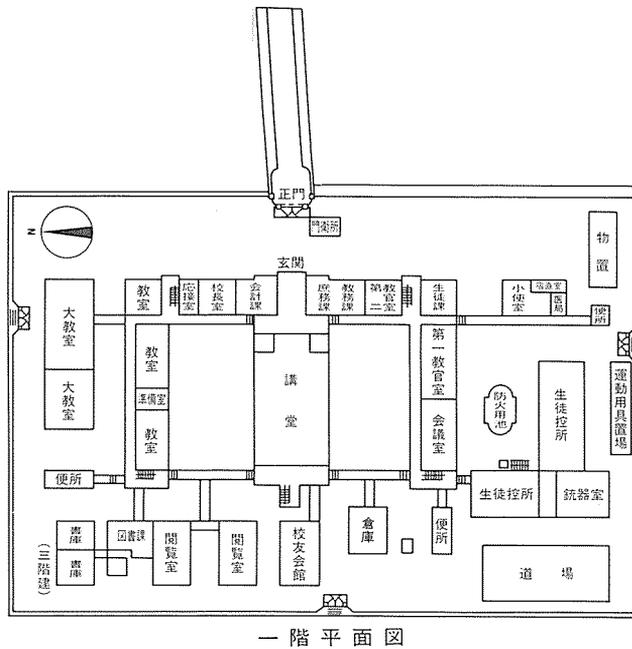
- |       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 大正12年 | 生徒控所・銃器室に隣接して、もう一つの生徒控所80坪を増築。 |
| 大正13年 | 生徒控所の西側に道場84坪を新設。              |



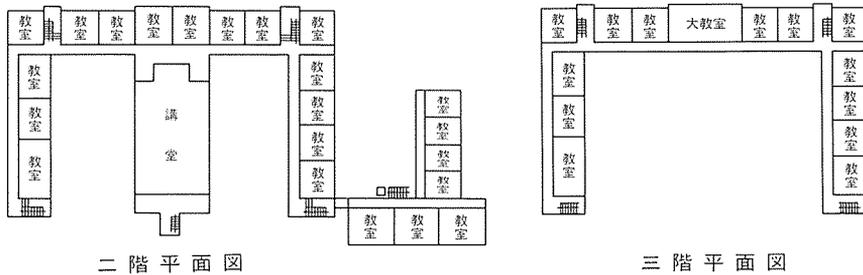
一階平面図

二階平面図  
(三階平面図は略)

〈図-1〉大阪外国語学校敷地及び校舎略図(大正11年11月)



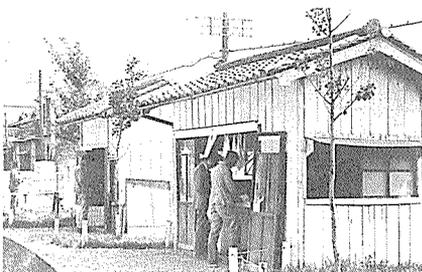
一階平面図



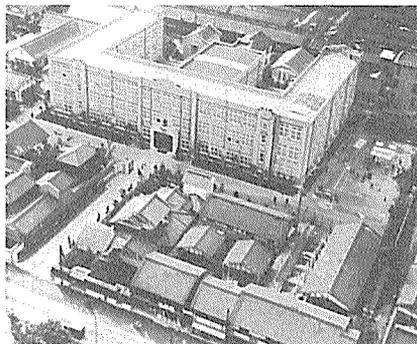
二階平面図

三階平面図

〈図-2〉大阪外国語学校敷地及び校舎略図(昭和17年11月)



通用門よこの売店



上八校舎俯瞰図(昭和7・8年頃) テニスコートがあり、まだ体操場も烈士之碑もない頃

- 昭和2年 学校東南隅に物置を新設。
- 昭和6年 職員閲覧室を増築。  
通用門そばに運動用具置場20坪を新設。(靴屋、文具店もあった)
- 昭和11年 本館北側のテニスコート1面をとりこわし、雨天体操場80坪を新設。
- 昭和15年 生徒控所、銃器室の上に7教室140坪を増設。(支那語部増員・亜刺比亞語部新設によるもので、林蝶子の寄付に係る)  
雨天体操場を48坪と32坪の教室に改築。

そのほか、早くから講堂の西側に校友会館(食堂)、教官室南側に小判型の小さな池があった。

以上の増改築があって、昭和17年11月の校舎のたたずまいは図-2のようになり、この姿で大阪大空襲に遭う。

校舎の南側通用門を出て道の向こう側に、東西約55m、南北約120mの運動場があり、三方を金網で囲まれ、民家にすぐ接していた。

開校翌年から、生徒や職員の増加などにより、事務室の配置替えがしばしば行われた。戦前は各教官それぞれの部屋があるわけではなく、大部屋に机を並べ他の教官との同室が普通であった。第一教官室32坪と第二教官室16坪とがあり、前者は本館南棟1階(講堂南側)に会議室兼教官食堂と隣り合わせにあり、焼失するまで位置は変わらなかったが、第二教官室は転々と所在が変わった。

## 2. 戦 後

### <高槻学舎>

高槻時代に関する資料は敗戦の混乱と度重なる移転のため、正確・詳細なものが乏しく、当時の教官・学生の記憶に頼らざるをえない。

高槻学舎の建物は外専が入る前までは陸軍工兵第4連隊の将兵が起居していた兵舎であった。従って「まだ、どこからともなくラッパの音が聞こえてきそうな校舎のたたずまい

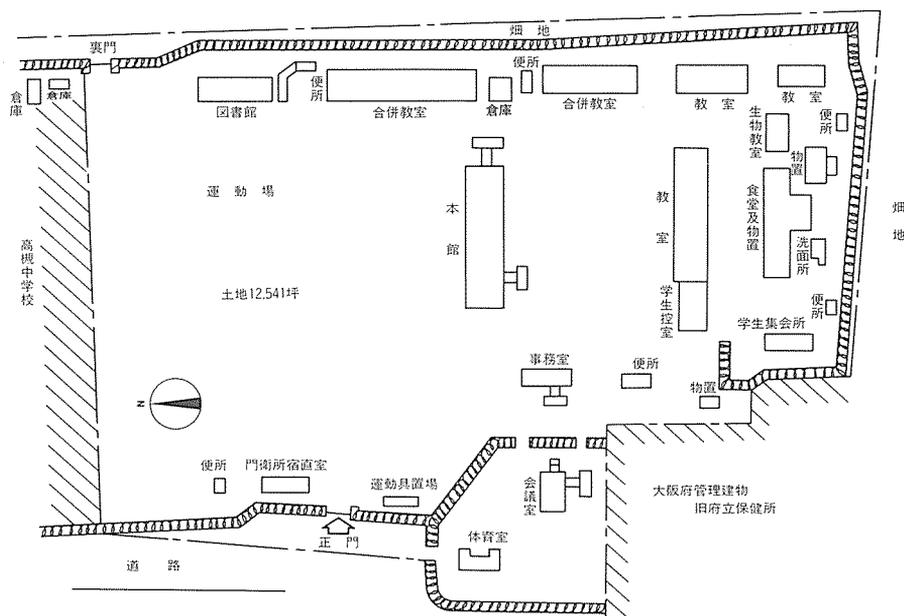
で、教室の壁には銃架が戦時そのままに残り、一種異様な雰囲気であった」[大F1・中内克昌『きんきら50年』]

「学校の敷地をとりまく土手にはからたちの生け垣はあっても、どこからでも出入り自在であり、正門には門衛がいても、こうした状況では手の施しようがない。教室も寮も全く開放状態で、施錠できるのは事務室と研究室だけだった」[小林武三『学生部広報』第37号]

校舎のたたずまいは殺伐たるものであったが、学校の近くにはキリシタン大名・高山右近の居城跡があったり、「教室の窓から、はるかに北摂の青い山なみが眺められ、学舎の周辺にも牧歌的な雰囲気が残っていた」[村田忠兵衛『ひろば』第52号]

何もかもが乏しい高槻学舎であったが懐しく思い出す卒業生は少なくない。高槻学舎の思い出を大F6・恒成喜久子は次のように語っている。

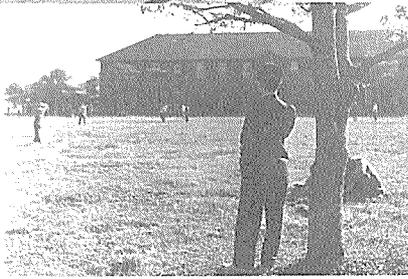
「高槻学舎の二階は大部分が教官室に当てられ、まるで獄舎のように薄暗く、小さな窓から光がさし込んでいた。一階に教室があった。寒い冬の日など四時限の授業が終りともなると、日がとっぷり暮れ、薄暗い裸電球の下で、凍りつくような寒さと闘いながら、中原俊夫先生や太宰施門先生の講義をうけたものだった。現在上八学舎にあるような暖房設備がなくても、皆よく寒さに耐えて授業をうけた。粗末な木造校舎の外には、草がおい茂る広々とした校庭があった。昼休み、放課後等、草むらに寝そべりながら、青春の血潮を燃やし、共に雑談にふけた。またクラブ活動の時、サークルになってコーラスしたり、口角泡を飛ばして議論に夢中になった。またある時は



〈図-3〉高槻学舎建物現状配置図



上八校舎本館(昭和26年5月)



高槻学舎 校庭の向こうに教室がみえる  
上は正門に至る松並木

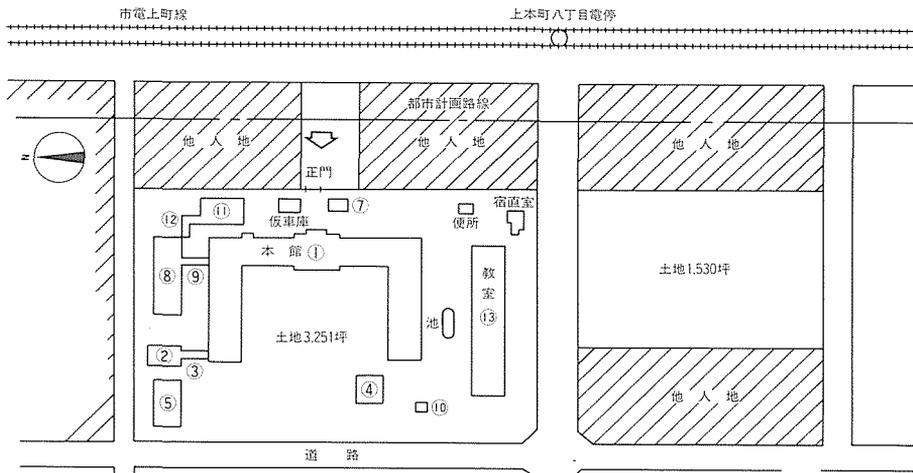
木蔭を求めて昼寝、読書を楽しんだ。授業も適当にエスケープして草むらの上で夢  
を楽しむ事が出来た。果てしなく澄み渡った青空、鳥の囀り、大地の感触、おい茂る  
草の若々しい芳香がいつもそこにあった。校舎こそ不備なものだったが、公害に毒さ  
れない美しい自然が目の前にあった。それを外大生は全て満喫する事が出来た」

[[きんきら50年]]

最後に昭和27年当時の高槻校舎のたたずまいを示すと図-3のとおりであった。

### 〈戦災後の大阪学舎〉

昭和27年当時の大阪学舎の建物配置図(図-4)を参考に、戦災の状況を再現してみる。



〈図-4〉 大阪学舎建物現状配置図(昭和27年11月)

20年3月の大阪大空襲で辛うじて焼け残った建物は、書庫⑤、正門門衛所⑦、平屋建教室・生徒控所⑧のほか、便所②、倉庫④、渡廊下③・⑨で、校内北側に集中している。

本館①の外壁は残ったが内部は火災で弱体化し、強度上3階建てのままとするには問題があった。⑧の教室・生徒控所は47年度までは食堂・仮講堂（卓球場・柔道場—32年3月竣工）として、48年度以降は仮講堂兼雨天体操場（卓球場・柔道場）として使用されてきた。

#### 〈復興の足どり〉

24年6月、父兄会から木造平屋建事務室130㎡⑪および渡り廊下20㎡⑫が寄付された。この建物で「烈士之碑」が隠される形となった。学生課が入っていたが、39年3月に完成した新館に移ったので4月取りこわされた。

25年3月、中庭の池の南側、旧生徒控所、銃器室のあったところに、木造平屋建教室406㎡⑬が新築された（のち38年に校舎増築のため取りこわされる）。

26年5月、長らく残骸をさらしていた本館①の東側正面だけが、3階部分を切り落とし、壁を塗りかえ廊下の床板を張るなどして、なんとか2階建に改装、2階を教室、1階を事務室として使用可能となった。これにより、3年の授業のみ大阪学舎で行うに至った。引続き北側と南側の3階部分を切りとり、東側同様の改装工事が着工された。

この年、高槻学舎に運ばれていた図書の一部が大阪学舎に戻されている。

27年、本館北側と南側の改装工事が完了、4月から大学3・4年の後期授業は大阪学舎で行うことになった。

28年2月、むかし講堂のあったところに鉄筋コンクリート2階建の教室・研究室が完成。29年4月、書庫南側に接して鉄筋コンクリート3階建の図書館延べ1,900㎡が完成。1階が事務室、2階が学生閲覧室、3階が映写室・教官研究室の一部に当てられた。

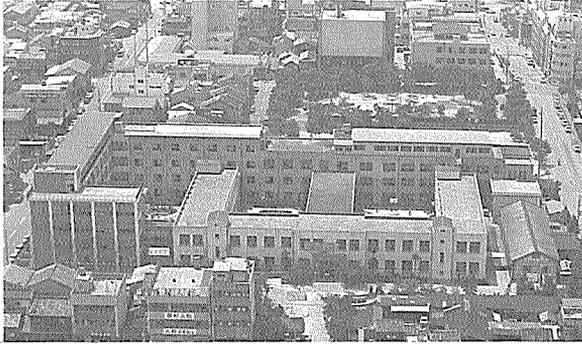
32年3月、図書館南側に接して新たに鉄筋コンクリート4階建の教室・研究室約1,650㎡が完成（西館と呼ばれた）。4月1日から1・2年の授業も大阪学舎で行われるようになり、11年ぶりに全学統合が達成された。この西館は34、35年度にさらに1階つき足して、1部5階建に増築。

25年建造の木造平屋建教室1棟（〈図-4〉の⑬）を取りこわし、そのあとに38年度工事として、地上4階・地下1階の新館延べ1,580㎡が39年3月完成。会議室・研究室・事務室・宿直室等に当てられ、本館との間は各階とも渡廊下でつながれ、雨降りの時の不便も解消、地階には食堂ホール・購買部・喫茶部等ができた。

41年3月末、図書館書庫の増築工事として、鉄筋3階建延285㎡が竣工、旧館書庫299㎡とあわせて584㎡となった。

同じ時期に運動場北側に軽量型鋼造2階建の教室も完成した。

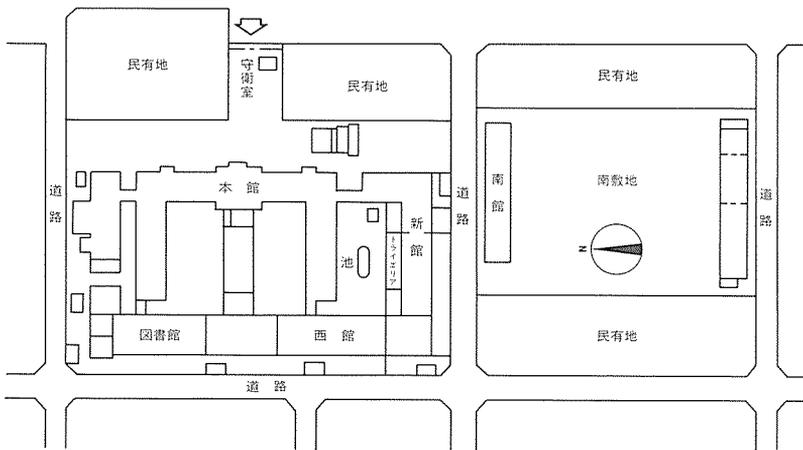
以上の工事を経て、54年箕面へ移転する前の大阪学舎の建物配置は図-5のとおりであった。



上八学舎俯瞰 校内の右下すみに烈士之碑が見える。そのすぐ上は戦前(昭和11年頃)から残る唯一の木造建物である(昭和45年頃)



正門周辺の美しい桜



〈図-5〉大阪学舎建物現状配置図(昭和54年4月)

### 〈懐かしの上八〉

「戦前はわりあい静かな住宅区域のなかにあった」上八周辺も、戦後、上六が私鉄ターミナルとして発展を重ねるにつれ、プレイ・タウン化の波が学校周辺にも押しよせ、変貌をとげていく。その様子を以下の手記がなまなましく伝えている。

「大学封鎖の時に、ホテル街の一角のお寺で自主講座を受けたことがある。ラブホテルの前を通り、お寺へ入っていくのが妙な気持であった。そこでは学年の区別もなかった。レポート提出、テスト等で単位を認められ、大学の2～3年目が過ぎていった。大学紛争がようやく収まったのは3年目の秋だったろうか。破れた窓ガラスがまだ修繕さ

れず、らく書きのある教室で、すきま風に身を縮めて勉強したように思う」[IIE3・茂木文子(旧姓土屋)『70年史資料集』]

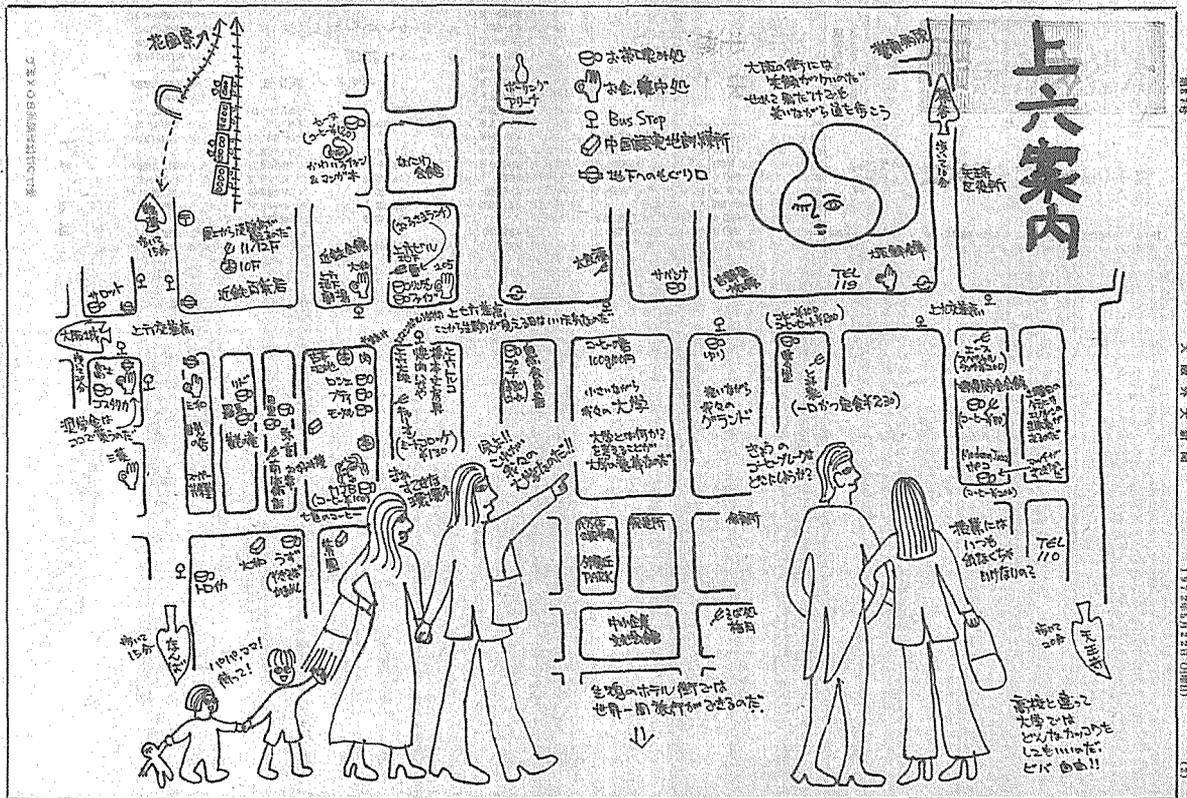
「上六校舎……私はあそこを思い出すたび、ホルモン焼の匂いがします。洋弓部に所属していた私は仲間と練習のため大学の周辺をランニングします。大学周辺……それはまさしくホテル街でした。ロンドン、パリ、ニューヨークなど、キャンパス内よりインターナショナルな名前が並ぶ、その建物のたち並ぶ中を走るとき、皆の足どりも何故か速くなるのでした」[大IP29・内藤恵子(旧姓三輪)前掲書]

「上本町界隈は大変ガラが悪い所であった。しかし、人間の生きている匂いがする街でもあった。百貨店のウインドー・ショッピング、古本屋の立ち読み、喫茶店や映画館、それに路地裏を歩く時のスリル。殊に思い出に残っているのは、春になると烈士之碑の前に咲いた桜、西隣の上汐町公園に咲いた桜の美しかったことである」[IIF12・三宅俊二『ひろば』第64号]

つぎ足しつぎ足しの建物であったが、なぜか大阪学舎と言わず、上八学舎と呼んで懐かしむ人も少なくない。

「4年間をふり返って懐かしく思い出されるのは最初の1年半を過ぎた、あの小さくてうす汚ない校舎での思い出がほとんどである。タクシーの運転手も通りすごしてしまうほど目立たない大学であった。しかし、私はあの上八校舎がたまたま好きであった。春には正門周辺は美しい桜でかざられ、正門を入ると烈士之碑がこちらをにらんでいた。烈士之碑を左へ折れると、そこにはつぶれかけた40畳あまりの道場があった。私は毎日そこで体中あざだらけになり、さわやかな汗を流したものだ。あの苦しいクラブも終わった後、地下にあったむし暑い生協食堂で牛乳をグッと飲み干し、仲間と話をしていると不思議に苦しさも吹っとんだものだ。授業と授業のあい間に行ったカルチェ、雀荘、南海飯店、カドヤ等、上八校舎周辺にはロマンがあった。誰か生協食堂にいるだろうと思って、授業がない日も上八校舎へ通った」[大P30・石田嘉一『ひろば』第67号]

「私にとって外大といえば、やはり上八校舎をまず思い浮べる。大学生活5年のうち3年半をそこで学び遊んだからだ。春、花吹雪が嬉しくて学校に来るのが楽しみだった玄関前。夏、蚊が多く暑くてたまらなかった階段教室。秋、外大祭の準備で夜遅くまで残って語劇の練習をした卓球場。冬、火つきの悪いストーブを苦心してつけ、暖かくなったところに終わったロシア語の授業。校舎は暗くきたなかったが、そこには何とも言えない味があったように思う。コンパの会場にも事欠かなかった上八では、クラスの人たちとの接触があった。学問を学ぶための大学ではなく、そこには生活を学ぶための、“私の大学”があったように思う」[IIR12・久山陽子(旧姓北畠)『ひろば』第64号]



1972年5月22日「大阪外大新聞」(新入生歓迎号)にのった「上六案内」

### 〈箕面学舎〉

箕面・粟生間谷に移転決定までの経緯は通史第4章に詳しい。移転地決定後の将来計画委員会の活動は、全体構想、基本設計の策定など、次第に現実味を帯びたものになっていく。

50年2月13日教授会は建物配置に関する次の6項目の基本原則を確認した。

- (1) 400坪のトラックを中央部に設ける。
- (2) 西南切土部分をアカデミック・ゾーンとし、高層建築は同部分の北側に配置する。
- (3) 東北切土部分に寮を設ける。
- (4) シンボル・ゾーンとしての広場を設ける。
- (5) 建物は部分的コンパクトとする。
- (6) 大学会館・管理棟は独立建物とする。

51年に入って、5月20日の教授会は建造物を含めて施設全体を計画する際の根底となる「基本設計」を承認。6月10日には昭和52年度新規概算要求事項の審議で、施設設備として、第2次敷地造成、研究・講義棟(A棟・B棟)および図書館の予算を要求することを決定した。

9月2日の将来計画委員会は「堅実を旨とし安易な理想案を排し」た施設整備年次計画(案)を策定、16日教授会で説明した。説明では「堅実というのはわれわれの大学の現実の作業能力と作業条件から規定される作業量、予算配賦の見こみにたって考えたということである。堅実策をとったため、昭和54年8月の移転当初、われわれが現地に見出すのは、最悪の場合、裸土も荒々しいグラウンドとA棟と図書館と大学会館(一部未完)だけという可能性」があると述べ、このような厳しい計画となったのは、54年8月が「償還のため、現有の建物と土地から、われわれが立ち去らなければならない最終的な時点であり、年次計画に当たっては至上的なタイムリミット」であることを強調している。

(注)昭和39年4月、国立学校特別会計制度の発足により、移転統合のため資金運用部資金から用地取得費の借入が可能となった。本学では昭和47年度に移転用地の取得費28億円(用地取得費総額は一般財源5億円を加え33億円)の借入が実現した。[『ひろば』第87号16頁]

#### 〈敷地造成〉

51年11月12日、いよいよ第1期敷地造成工事が始まった。その日が工事開始日とされたのは、ほかでもなく、本学の創立記念日に当る11月11日に最も近い「大安」の日であったからである。

もともと、粟生間谷の現地は山あり谷あり、起伏の多い丘陵地であった。そこに建物を建てるには平地にすることが先決であった。山を削り谷を埋める大土木工事の開始である。大型ブルドーザーや土砂運搬用スクレーパー等の大型機械が投入され、1年後の52年10月には標高127m～140m、総面積14万㎡の校地に姿をかえた。

この間、切盛土砂28万㎡、工事地域外へ持出した土砂4万8,000㎡、合計32万8,000㎡の土砂を移動。山を削った土で深い谷を埋め(最も深い所で30mに及んだ)、削りとったあとには建物を、埋立てた部分は運動場として使えるようにされた。すべて地盤沈下の影響をさけるための配慮であった。

#### 〈建築工事〉

続いて52年11月24日には研究・講義棟A棟、12月27日には同B棟ならび附属図書館建設に着工した。

53年に入って、5月には54年度概算要求施設として、研究・講義棟のB棟残り部分とC棟、運動場整備、体育館、課外活動施設、環境整備、学生寄宿舍、職員会館の順序で提出することが決まる。

この年は各地で記録的な猛暑が続き、西日本全体が雨不足に襲われた。しかし、晴天続きが建築工事、とくにコンクリートの打込みにさいわいして工事は順調に進捗、秋には図書館はじめA棟、B棟ともその形を整え、年末から54年初めにかけ、第1期工事の建物が次々と完成に至る。



新学舎の入口



「大阪外大発祥の地」の碑

11月に鉄骨鉄筋コンクリート造8階建のB棟が8分の3の増設予定部分を残して完成。1階は事務室、講師控室、印刷室など。2・3階は留学生別科関係の事務室、教室、ゼミナール室、研究室等、4～8階は主として各学科および一般共通関係の研究室、共同研究室、実験室等である。

53年12月、鉄筋コンクリート造2階建の大学会館が完成。1階は360人収容の食堂・厨房・購買・書籍部・談話室、2階は110人収容の軽食喫茶、会議室、集会所等である。

同じ12月、鉄筋コンクリート造5階建の図書館が完成。1階は事務管理部門、2・3階は利用運用部門となる。書庫所蔵能力は約40万冊、開架書架分5万冊。本学の年間予定増加冊数約1万1,000冊を考慮に入れると、約10年の余裕能力をもつものであった。閲覧席数は321席。1階には寮生・第二部学生の夜間学習利用に資するため、自習室を備えた。

続いて、鉄骨鉄筋コンクリート造8階建の研究・講義棟A棟が完成。1階は第二部の事務室、LL自習室、タイプ室等のほか学生控室があり、2～4階は大中小の講義室、合同講義室、ゼミナール室、談話コーナー等、5～8階は研究室、院生研究室、共同研究室、談話コーナーであった。

#### 〈移転作業〉

54年の春が過ぎると移転は目前の大事業となってきた。すでに、52年10月、将来計画委員会に特例的な組織として移転計画部会が設置され、その下に教務・図書・事務の移転計画検討委員会が設けられ、それぞれ関係事項について検討を重ねてきた。

53年10月5日の教授会では、管理棟ができるまでの暫定措置として、本来そこに入るべき事務部局を研究・講義棟と図書館に分散して仮住いしてもらうため、研究室配分案と研究室仮住い案が決められ、12月4日には、タイムリミットである54年8月31日までにすべての移転を完了するという「移転作業計画」も了承されていた。

移転作業により授業にも影響があるので、学則では7月11日から9月11日までとなっている夏休みを、臨時的に8月1日から9月24日までとし、7月中に授業や期末試験を終わ

り、前期授業を大阪学舎で終えてしまう方針も決められていた。

54年6月、移転計画部会はそのまま移行して「移転実施部会」となり、部会の事務部門である移転業務推進計画室も移転業務実施室に衣がえした。

移転作業は附属図書館から始められ、本移転は計画どおり、8月1日から研究部門、続いて各事務部局関係、その他の順に進められ、8月31日には宿直室、運転手控室、移転事務実施室を除き、大阪学舎からの移転はすべて完了した。

移転も終わりに近づいたころ、同窓会主催の「上八お別れ会」や近所への挨拶もすませ、最後には地区住民を招いてお別れパーティーを開き、発祥の地への別れを告げたのである。

#### 〈大阪学舎を大阪市に譲渡〉

9月25日新学舎で後期授業が始まった。同日、大正11年から60年近く、多くの国際人を育ててきた大阪学舎は大阪市に譲渡された。

のち、大阪市はその地に大阪国際交流センターを建設、62年9月21日から国際交流施設として利用されている。敷地には大阪外大発祥の地であると記した碑が建っている。

#### 〈落成式典〉

55年3月には鉄筋コンクリート造4階建の研究・講義棟C棟が完成した。1～2階は体育教科の研究室、実験室、更衣室、シャワー室等、3階は生物・化学関係の、4階は数学の研究室、共同研究室、教室等である。

56年1月には鉄筋コンクリート造3階建の職員会館が完成した。非常勤講師等の宿泊ならびに教職員の会議および研修等に使われる施設で、収容人員は16名、食堂のほか和室5、洋室4を備えている。

同年5月、鉄筋コンクリート造4階建の本部棟が完成した。A棟、B棟、図書館等に仮住いしていた各事務部局が本部棟へ移り、そのあとの研究室は教官に再配分され、長年の懸案であった研究室の個室化が漸く実現をみるに至った。しかし、その時点で研究室の予備は僅かを残すのみであった。

本学の施設整備も一段落したので、関係者を招いて落成祝典が学内で挙行されたのは、秋も深まる10月31日のことであった。

その後、61年5月にはC棟の北隣に鉄筋コンクリート造4階建の研究・講義棟D棟が完成、1階に教室、2階にビデオ教室と大講義室、3階に研究室と600人収容の階段教室、4階に研究室がある。

また平成2年3月にはD棟北隣に鉄筋コンクリート造4階建の研究・講義棟E棟が完成、1～3階は教室、3階には日本語教育実習室、4階には日本語研究室がある。



# 第3章 学生生活

## (1) 専門学校時代

### 1. 学 業

本節では旧制専門学校時代について、各学科史などには出てこない全校的に共通した事項だけに触れる。

#### <学科目>

外国語は勿論、商業実習や体操を含め13学科はすべて必修科目であった。ただ、中等学校教員無試験検定の取扱いを受けようとするものは、第3学年で会計学か教育学の随意科目のうち、教育学を履修しなければならなかった。

本校で学科選択制度が導入されたのは昭和21年4月のことである。選択科目としては、論理学・心理学、社会学、政治学、教育学、文学概論、国文学概論、民族学・民俗学、経済政策、統計学、国際法、民法・商法、商業学・商業実務、外国語(履修科目数には算入せず)の12科目で、3年間に5科目以上を選択履修するものとされた。

同時に、外国語でも兼修外国語の選択が認められた。すなわち、中国科、英米科、フランス科、ドイツ科、ロシア科、イスパニヤ科では兼修外国語(中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イスパニヤ語のうち、自己の専修外国語以外のひとつ)を選び、2・3学年を通じて履修すればよかった。前記以外の科の兼修外国語は、蒙古科では中国語、インドネシヤ、インド、ヒルマ、アラビヤの各科では英語のみであった。

それ以前にも、馬來語部ではアラビヤ語またはオランダ語、英語のうち一つ、印度語部ではアラビヤ語、ペルシヤ語、または英語のうち一つ、仏語部ではイタリア語、イスパニヤ語、または安南語のうち一つを選び履修する時期があった。

#### <外国語>

外国語の授業がやたらと多かったと述懐する人が多い。毎日の授業がどのようなものであったか、昭和16年の西語部3年の「授業時限表」を例にあげる。



大平頼母の商品実習

授 業 時 限 表	時限 曜日	I	II	III	IV	V	VI	VII
	月	西 佐藤	歴 史 森 沢	商 品 実 習 大 平	法 律 白 井	哲 学 平 沢	西 佐藤	西 国 沢
火	国 語	西	体 操	商 業	西	西		
	長谷川	国 沢		相 沢	ビリャベルデ	ビリャベルデ		
水	西	法 律	葡	葡	歴 史			
	ビリャベルデ	白 井	コート	コート	森 沢			
木	西	商 業	商 品	植 民 政 策	植 民 政 策			
	佐藤	相 沢	大 平	平 田	平 田			
金	商 品	商 業	葡	葡	西	体 操	西	
	大 平	相 沢	コート	コート	佐藤		ビリャベルデ	
土	西	哲 学	修 身	国 語				
	国 沢	平 沢	金 本	長谷川				

(注)西とあるは西語、葡とあるは葡語

すなわち、スペイン語が11時間、ポルトガル語が4時間、計15時間で週34時間のうち外国語は44%を占めた。ちなみにこの年の1年の外国語は20時間、2年では17時間であった。さらに詳しくみるため、昭和16年独語部3年の月曜日の授業の模様を、飯尾通直(D18)の「教室雑記」を引用して再現してみよう。

第一時間目は熊谷俊次先生の“Friedrich Nietzsche”の評伝といったもの。その次の森沢三郎先生の西洋史では、一番前に頑張って、もっぱらノートとノートの間に話される色々なエピソードを謹聴してゲラゲラ笑ったりする。三時間目の商業実習。大平頼母先生の御懇切な御説明にも拘らず、顕微鏡は「綿花の天然撚り」の神秘を私に示してはくれない。お昼前の一時間は白井正先生の国際法。実にお上手な一時間の御

講義振りに毎度乍ら感心する。一時間の昼休みを終って、五時間目は平沢俊雄先生の哲学。何だか分って来たような気分になって来る。六時間目の高橋周而先生のドイツ語、どの位注意して読んだら、一体、先生の言われることに気が付くようになるのだろうと思われ、それにつけても、上滑り的な自分の訳が物悲しくなったりすることがある。最後の奥野喜一先生のオランダ語、発音にドイツ語とは趣を異にした優しさといったものを感じて居り乍ら、自分が読むとゴツゴツしたものになって了うのは変だ。とに角かくの如くして、午後4時には月曜の授業はお終いとなる。[昭和16年12月『我等の独逸語部』特集・学園生活点描]

中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語はとも角、それ以外の外国語では辞書やテキストを揃えるには大変な苦勞があった。教官が自らがり版刷りで教材を作らねばならず、第一教官室(語学教官の控室)は時にはさながら印刷屋のような観を呈したという。

#### <合併授業>

外国語以外の一般科目の授業は、9語部を一定の人数になるよう、2組ないし4組に編成し、合併授業の形で行われた。

昭和15年度、第1学年の合併授業語部別編成を例にとると次のとおりであった。

修身、言語学 …………… 東洋語部 150名、西洋語部 140名の2組

地理、法律 …………… 支・蒙 95名、馬・印・亜・仏・露 100名、英・独・西 95名の3組

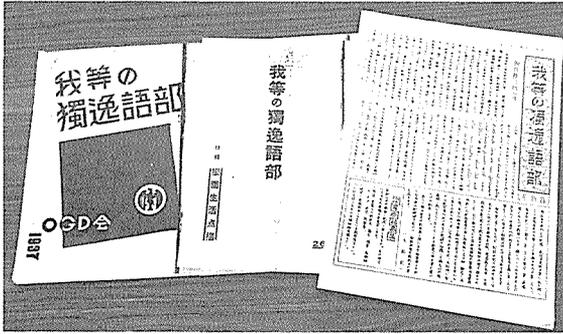
国語漢文、商業、体操 …… 支 75名、蒙・馬・印・亜 75名、英・仏 70名、独・露・西 70名の4組

#### <第二教官室>

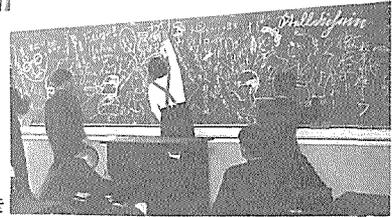
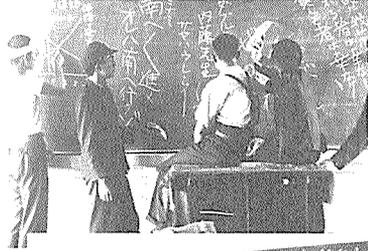
戦前、語学教官の控室は第一教官室とよばれ、共通科目教官の控室は第二教官室とよばれた。相沢正美は『扉』第11号(昭和39年3月)に寄せた「第二教官室物語」で、次のように述懐している。

「外語時代の卒業生の方ならば当時の外語の教官の控え室が二つあったことを記憶しておられるであろう。即ち語学関係の教官の屯する第一教官室(その隣りが会議室兼教官食堂)で、語学以外いわゆる共通科目の教官のたまり場がこの第二教官室である。

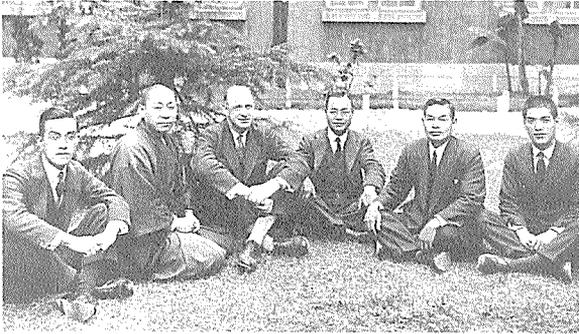
大正15年4月、私が外語の教師として赴任した時、第二教官室は二階の一隅にあった。そしてここに座っていた方々は国語の渡辺良法教授を筆頭に、言語学の浅井恵倫教授、軍事教練の渡辺喜一大佐と私の前任者であった伊藤資生教授(一学期切りで勇退)、及び法律の白井さんの六人に過ぎなかった。その後学生数の増加につれて教室が不足となったので、この教官室は教室に転用されることになり、我々は下の第二応接室を改造しそこへ移ることになった。それから急に人の出入りが激しくなった。まず



『我等の獨逸語部』



教室での落書き



グレン・ショウ(左から3人目)



ヘルマン・ボーン

漢文の山本磯治さんが入室、次いで国語の北西さんも室員となり、昭和5年から私と同僚となった東田延尾君(当時は北川姓)も新に加わった。渡辺さんが辞められてからは、東大出の秀才吉田孝次郎君がメンバーの一人となり、北西さんが九州へ転ぜられた後釜には、京大出身の長谷川信好君がその座を埋めることになり、さらに配属将校和泉市蔵大佐が入り、その補助教官として桃山中学(現在の桃山学園)から江口庫一郎少佐が来られたので一躍大世帯にふくれ上った。

これ等の方々はいわばレギュラーであるが、このほかにイレギュラーの講師は大部分共通学科なので、ほとんど第二教官室の仲間入りをするようになった。その内で特色のあった人々を挙げると、まず小西茂さんが英国に留学中、その穴埋めをした大阪商大の長田三郎氏(のち九大へ転任)、歴史担当(東洋語部)の大高教授、市村其三郎氏の二人であろう。

市村氏は明治時代の三大歴史学者と称えられた内の一人東大教授市村讚次郎博士のオイ御さんで、同じく東大で国史を専攻した方であるが、この人についての思い出は答案の採点である。試験が終わるとすぐ採点にとりかかるのだがその早いこと。フンフンとうなずきながら一人2分か3分で片付けてしまい、ものの1時間とたたぬ内に全

部調べ終るという超スピード。よく白井さんにそんなことで成績が分かるのかと皮肉られていたが、御本人は一向平気で、どうせ落第点はつけないのだから、これでいいんだと済ましていた。

国語は吉田、長谷川の両氏が居られたが、なお学級数がふえたので、京大から遠藤嘉基氏が応援に来られ、また浅井さんの留学(オランダ)中は言語学の講師に同じく京大から泉井さんが出講された。

学年末になると、各自の採点表を出し合って問題になりそうな人物を比べ合う。大抵それが一致するから不思議だ。かくていよいよ判定会議となると、案の定、語学教官側との対立となり、我々は共同戦線を張って中々譲歩しない。結局、校長は裁決に迷って票決に持ち込む。そうなれば多勢に無勢で押し切られてしまうのだが、それ迄に散々ねばって時間稼ぎをやり、遅くなると学校から夜食が出るので、それまで何としても持ち込むのが我々の戦術であった。

第一教官室と第二とは常に対立していた訳ではない。ふだんは個人的な交流が盛んであった。私は、東北会の縁故から、吉野、佐藤、目黒の三氏とは特別懇意であったので、よく第一教官室へ出入りしたし、就職事務を扱うようになってからは、各主幹との折衝に週何回となく出入した。また、第一からはよくショウさんやポーネルさんがやって来た。ショウさんは俳句について、ポーネルさんは日本の古典について、北西さんに質問に来た。ショウさんは自ら尚紅蓮と名乗るほど日本語、日本文に通じていたし、ポーネルさんも古典を自由に読みこなすほど、日本文に熟達していた。私も一度も読んだことのない神皇正統記を持ってきて、北西さんに堂々質問されている同氏を見て、我々は驚嘆しかつ畏敬したものだ」

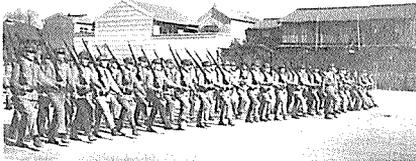
### 〈英語外国人教師の不在〉

戦前、各語部には外国人教師が必ず1名はいた。英語部ではグレン・ショウと和歌山高商兼務のヘンリー・ウィリアム・ジョンズの時代が長く続いた。日米開戦必至となって、滞日英米人は踵を接して本国へ引揚げていく。グレン・ショウが昭和15年11月に帰国したのに続き、ジョンズも16年3月本国へ帰り、英語部では専任の外国人教師不在の時代を迎えた。ショウやジョンズの代役を捜し求めた学校の苦労を、16年7月4日付『大阪朝日新聞』は次のように伝えている。

「残留英米人そのものが数えるほどしかおらず、八方手を尽して引張ってきたのが、もと神戸水上警察署の英語教師ガートルード・ラッシという66歳のおばあさんと、英国籍から日本に帰化した井手マリーの2人の女性。それに60歳で関西大学・浪速高校の講師のロバート・デ・フィンチャーとインド人のデイレシュ・チャンドラ・グプタの計4人で急場を凌ぐことになった。『つまりショウ、ジョンズの2人でやっていたところを4人でやるわけで、外国人教師も代用品というところでしょう』とは葉山校長



信太山での軍事演習(昭和10年頃)



狭い運動場での教練

近畿高専連合野外演習(昭和13年秋・北河内部にて)



の話」

しかし、ラッシュ、フィンチャー2人のアメリカ人教師の名は、18年1月発行の『学校一覽』から消えている。

#### 〈体操・教練〉

体操は週3時間(3年は2時間)あり、その内容は兵式体操のほか、狭い運動場での教練や武道であった。開校当初の「野外演習及射撃演習規程」では第1条「体操ノ一部トシテ野外演習及射撃演習ヲ行フ」とあり、野外演習は年1回第2学期に2日以内行ふと定められていたが、大正15年4月の改正で、毎年4日以上行ふことになった。陸軍現役将校学校配属令が公布され、本校にも陸軍歩兵中佐・渡辺喜一が着任して1年後のことである。

日中戦争がまさに始まろうとする昭和12年4月には、規程名が「野外教練及射撃演習規程」となり、第1条が削除された。すなわち「体操ノ一部トシテ」でなく、軍事教練として本格的なものへと移っていく。その頃から狭い運動場から出て、信太山や観心寺・千早城方面への野外教練に行ったという記録が多くなっていく。

はじめ演習の費用はその都度、参加者から徴収する定めであったが、昭和9年4月から、参加不参加にかかわらず、1学年2円徴収することとなり、12年4月からはさらに2円50銭に値上げされた。

その頃、学生生徒には徴兵延期の特典のほかに、幹部候補生への道が開かれていた。しかし、幹部候補生になるには、学校教練を修了し、その検定に合格した者に限るという厳しい条件がついていた。

昭和10年の「学校教練検定規程」第2条には「正当ノ理由ナシニ教練ニ欠席シタル者、其ノ他教練実施ニ於テ怠慢ナリシ者、思想正順ヲ欠ク者又ハ素行不良ナル者ニシテ屢々訓戒ヲ受クルモ改悛セザルモノハ合格トナスコトヲ得ズ」と明示されている。通常の入営期

間は2年であるのに、幹部候補生は10ヵ月で済むことから、軍隊生活を忌避したい学生生徒にとって、幹部候補生の道は大変魅力があり、そのため教練もおざりにできなかったのである。

12年秋から近畿高等・専門学校連合野外演習が始まる。参加14校が紅白に分かれて3日間、伊丹平野で熱戦を繰りひろげた。連合演習の増加を理由の一つとして、演習費用も13年度から3円に、16年度からは5円にと値上げが続いた。

昭和19年になると、学校教育の戦時非常体制、学徒勤労働員の強化のため、学校教練も従来どおり実施することは不可能となり、7月には「学徒勤労働員ニ伴フ軍事教育ノ実施ニ関スル件」が通達され、軍事教練の実施、査閲は学徒勤労を妨げない程度に行い、検定も平素の成績をもって合否判定するもやむをえない等の措置がとられるに至った。

#### 〈成績評価〉

学則第22条の「各学科ノ成績ハ出席ノ状況、学修態度、日課点ヲ総合シテ之ヲ定ム。但シ必要ト認ムル場合ニハ試験ヲ行ヒ、其ノ評点ヲ日課点ニ代フルヲ得」という規定によってもわかるとおり、平常点が殊のほか重視され、とくに外国語において著しかった。

しかも、生徒心得第7条では「欠席欠課ノ届出ニハ必ず所属語部主幹ノ検印ヲ受ケ、欠席欠課ノ翌日差出スヘシ。如何ナル事由アルモ5日ヲ超ユルヘカラス」と定められていた。「欠席日数が年間3分の1以上になれば、成績の如何を問わず落第、欠課は3時間で欠席1日に換算……無届けの場合は倍に計算」〔伴康哉（I P15）『学生の70年史』〕されるため、よほどのことがない限り、授業をサボることはできなかった。

こうしたきびしい成績評価も、戦争が激しくなり、勤労奉仕や通年動員、卒業繰上げなどによって、定められたとおりの授業が不可能となり、的確な成績評価もできない時代となる。

第20回卒業生から第24回生までの各人の学籍簿には、こうした戦争の影が次のような表現で残っている。

「入隊ノタメ学業成績ヲ欠ク」…… 第20回生の第3学年(若干名)  
第21回生の第3学年(相当数)

「勤労働員出動並ニ戦災ノタメ学業成績ヲ欠ク」  
…… 第22回生の第3学年(半数)  
第23回生の第2学年(全員)  
第24回生の第1学年(ほぼ全員)

外専卒業後、奨学資金を受けようとして学校からもらってきた成績証明書に、前記文言のスタンプが押されているのを見たある23回生は、「我々のクラスの2年の時の成績は全くブランクになっている。何だかそのところだけが人生の空白部分のような気がした」と述べている。

成績証明書 第二学年「勤労働員出勤並ニ戦災ノタメ学業成績ヲスク」(第23回生)

### 〈授業料とその減免〉

本科生(選科・研究科とも)の授業料は開校時、年額50円で、各学期初めに納付することになっていた。大正14年4月から65円、昭和4年4月から80円になり、以来昭和19年4月に100円となるまで、80円時代が続く。

戦後はインフレの進行とともに、21年240円、22年400円、23年1,200円と毎年のように値上げが続いた。

別科は初め本科と同じく50円であったが、その後、本科で幾たびか値上げがあったにもかかわらず、19年3月まで据置かれた。21年以降は本科の半額に抑えられてきた。

学則第62条には授業料を「期日内ニ納付セサルモノハ督促ヲナシ未納2週間ニ及フトキハ除名ス」と明記され、未納者に対する措置は殊のほかきびしかった。例外として、学校の都合で休学を命じられた者(生徒募集がなかった年の留年者)や兵役に服し入営中の者については、その期間免除された。

第五臨時教員養成所では「授業料ヲ徴収セズ」、かつ、年300円の学資支給の制度があったが、本科生に対し授業料免除の特典が認められたのは大正14年、実業学校教員養成規程により、卒業後その教員となる者に限られていた。

広範な授業料減免制度が生まれるのは外専時代になってからであるが、そこに至るまで何度か授業料減免の試みがあった。

当時授業料不納を理由とした退学者が、昭和2年18名、3年9名、4年17名、5年7名、6年12名もあり、これが学校当局をして授業料減免を試みるに至らせたのではないかと推測されるが、いずれも実現をみなかった。

昭和19年4月制定の「外専規則」により、授業料減免はようやく実現をみる。その第72条に「家庭ノ事情ニ依リ学資ノ支弁困難ナル者ニ対シテハ、詮議ノ上、授業料ヲ免除スルコトアルベシ」とされ、研究生に関しても、第56条で「学業・人物共ニ優秀ナル者又ハ特ニ必要アリト認メタル者ニ対シテハ研究料ヲ免除スルコトアルベシ」と規定された。

通史第2章(4)で述べたように「外専規則」は文部省作成の準則と留意事項にのっとりて制定された点が多く、第72条の規定も一字一句相違するところがない。長年、日の目を

見なかった授業料減免も、文部省の定めた通りにすれば実現したというのも皮肉なものである。前記と同じ経緯での産物として「特待生制度」がある。

本校学則では「懲罰」に関する規定が2条あるのみで、表彰に関するものは全くなかったが、この時「賞罰」と改められ、「生徒ニシテ克ク其本分ヲ尽シ以テ学徒ノ模範(文部省準則では亀鑑)トナスベキ者アルトキハ之ヲ表彰ス」ることとし、「前条ニ該当スル者ハ詮議ノ上之ヲ特待生トナスコトアルベシ 特待生ハ毎年之ヲ定ム」(第37条)とされ、授業料免除の特典が与えられた。

### 〈所要学費〉

ところで、外語3年間の学資はどの程度要したか。昭和9年4月の入学者心得に添付された「在学中学資概算」でおよそのことが分る。

在学学資概算

(単位円)

区 分	初 年 度	第二年度	第三年度
授 業 料	80	80	80
校 友 会 費	15	12	12
野外演習及射撃演習費	2	2	2
図 書 費 (教科書及参考書)	約25	約25	約25
学 用 品 (10カ月分)	約10	約10	約10
制服費 (服・帽・外套・靴・脚絆等)	約80		
武 道 用 具 品 費	約10		
下宿料並びに食費 (10カ月分)	約300	約300	約300
雑 費	約100	約100	約100
計	約622	約529	約529

注) 1. 制服費の概要 冬服 25円、外套 25円、帽 3円、靴・脚絆 7円、夏服 20円、計 80円内外。  
2. 通学費は含まない。

## 2.入 学

### 〈募集定員〉

語部別定員については「規程」や「学則」でとくに定められておらず、各年の募集広告や入学志願者心得によるほかない。

大正11、12年は合計200名、13年から昭和13年までは240名、この間年により語部で若干の増減はあったが、40名台は支・英、30名台は仏・独、20名台は蒙・馬・西、10名台は印・露の語部であった。昭和14年に支那語部35名増員、15年に亜刺比亜語部15名の新設、16年



教育に関する戦時非常措置  
(昭和16年10月16日「朝日新聞」)

には露語部15名の増員があったので、16年から20年までの募集は各年305名であった。

外語は教学の性格上、国際情勢・国の外交動向が入学志願状況に敏感に反映する傾向があり、とくに事件が起こると、特定の語部に志願者が殺到することが多くあった。その例として、①昭和6年勃発した「満州事変」の翌年の蒙古語部、②昭和12年7月盧溝橋事件・日中戦争の翌13年の支那語部、③昭和16年12月太平洋戦争勃発の翌年の馬來語部をあげることができる。それぞれの年の定員に対する志願者数の倍率は①5.4倍、②10.1倍、③23.1倍であった。③については「開校以来各語部を通じてかつてない最高の記録であって、一躍、時代の寵児となり、まさに黄金時代を築いた。しかし余りに激しい競争率に志願者は僻易して棄権するもの多く、試験当日は17～18倍に減少した」と内藤春三が語っている。  
〔南十字星会編・退官記念誌『内藤先生とともに50年』〕

#### 〈受験資格〉

中学校・商業学校・農業学校の卒業者、専門学校入学者検定試験合格者等に与えられていたが、昭和19年から中学4年修了者にも与えられた。しかし、これも19、20年の2年だけで、21年には再び中学校卒業者に戻った。

#### 〈入試科目〉

当初は外国語(英、仏、独語のうち一つ)、数学、国語・漢文、地理・歴史(国史及日本地理、東洋史、西洋史、世界地理のうち一つ)の4科目であった。地理・歴史で多かったのは国史で、国史とあわせ公民科の出題もあった。外国語について英、仏、独語の一つを選択受験できるのは東京外語と同じであった。昭和2年には支那語部志願者は中国語、露語部志願者はロシア語で受験できるようになった。英語の試験では英文解釈、和文英訳のほか書取と自由英作文とがあった。

入試科目での画期的な改正は、昭和3年入試から数学が廃止されたことである。数学を不得手とする受験生にとっては大きな朗報となったが、とくに志願者が殺到したという形跡はない。しかし、大阪外語受験の動機として、数学がなかったことを挙げる人は数えき

### 自由作文

下記ノ題ニテ50語乃至70語ノ英文ヲ綴レ。

昭和10年	If you had ten thousand yen to do as you liked with, what would you do with it ?
11年	The Pacific Ocean.
12年	An experience I can never forget.
13年	A letter to a friend wounded at the front.
14年	A letter to a friend who has been called to serve in the Army.

れないほど多い。

中村貢(C17)は『文藝春秋』昭和51年4月特別号のなかで「……官立(当時はそういった)のなかで数学の試験のない学校だったからこそ、型破りの若者を集めたのではないか、というのがよりよい説明になりそうだ。あのころ数学のないのはたしか上野の音楽学校(いまの芸大)と大阪外語だけだったと覚えている。音譜さえ読めない男が、まさか上野を志せるはずもなかった。しかも東京外語には数学の試験があった。敬遠して大阪へ、という二浪、三浪も少なくなかったはずだ。……数学嫌いへの救済校があったおかげと考えているのは、あながち私だけではなさそうだ」と書いている。

#### 〈無試験検定の導入〉

昭和19年度入試から無試験入学の制度ができた。19年4月から大阪外事専門学校となり「大阪外専規則」が4月1日から実施されたが、同規則第13条は「入学検定ハ人物、学力及身体ニ付之ヲ行フ 学力検定ハ試験検定及無試験検定トス」とし、14条で「無試験検定ヲ受クルコトヲ得ル者ハ当該出身学校長ニ於テ特ニ成績優良ナル者トシテ推薦シタル者タルコトヲ要ス」と定めている。無試験入学者の員数は学科募集人員の5分の1と枠を設けた。

開校すでに20年を越え、昭和3年以降、入学志望者に人物考査表を提出させるようになって約15年を経過したこの時期に、無試験入試制を導入しようとしたのは唐突のきらいがなくもない。すでに高等商業学校や高等農林学校の大半、さらに高等工業学校の相当数が無試験入試を実施していたが、本校を無試験入試採用に踏み切らせた背景に、二つの要因が考えられる。

昭和17年の入学志願者は太平洋戦争の影響を受けてか、各語部とも急増し、総数4,110名にも達した。ところが翌18年の志願者は一転して890名と激減し、平常の年に比べても半分近くまで落ちこんだ。同じく文科系の東京外語や官立高等商業学校では若干ふえこそすれ、志願者減少は見られず、学校当局にかなりのショックを与えたものと推測される。

追いうちをかけるように、その年10月12日には「教育ニ関スル戦時非常措置」がうち出

され、通史で述べたように、文科系諸学校の縮小・整理、理科系への転換、徴兵猶予の停止などが重なって、優秀な生徒を確保できるかどうか、危機感が高まったと思われる。

学校の対応は早かった。戦時非常措置が出て2週間後の10月26日には、無試験入学を「昭和19年度入学志願者募集期ヨリ実施致度候ニ付至急御許可相成度」とする規則改正案を起案、11月4日校長が文部省に持参している。外専規則そのものの制定は19年12月と遅れたが、4月に遡って適用され、無試験入試も実施された。しかし、この制度も19、20年の2回だけで、21年には廃止された。

#### 〈入学志願の動機〉

本学70年史編集に当たって、同窓会では卒業生に対し、一連のアンケートを実施、その結果は『大阪外国語大学70年史資料集』として平成元年1月発刊されたが、入学志願の動機についての回答を集約すると、次のようになる。

一つは外国語と外国文化への憧れともいえるもので、「中学校時代英語が好きでたまらなかつた」、「将来外国語で飯をくおうと思ったが、人のやらない語学をやれと言われドイツ語をやった」、「外国文学に耽溺、フランス映画にしばれた」、「外交官志望でそれには国際公用語のフランス語の勉強が必要」、「トルストイ、ゲーテなどを翻訳で読んだが、原文で読みたかった」など。

もう一つは海外生活への夢といったもので、「海外への漠然とした憧れがあった」、「大陸雄飛を夢みた、南方へ行ってみたい」、「外地で就職すると内地より月給が高かった」など。

そのほかでは「官立で授業料など学費が安あがりでいけると思った」、「数学が嫌いだった」、「官公立の文科系志望だったが、数学が不得手だった」、「高等学校のスベリ止めで受けた」などで、数学敬遠組はかなり多かったようである。

入学に関して戦後最大の変化は、女子への門戸開放であったが、外専への女子入学については通史ですでに述べた。

### 3. 卒業

#### 〈総数5,666名〉

大正14年3月の外語第1回を皮切りに、昭和26年3月、外専最後の第27回まで、外語・外専の本科卒業生総数は5,666名である。入学者および卒業生の語部・科別内訳は次のとおりである。

	入学者(A)	卒業生(B)	(A)－(B)
支那語部・中国科	1,375	1,184	191
蒙古語部・蒙古科	396	325	71

	入学者(A)	卒業者(B)	(A)－(B)
馬來語部・インドネシヤ科	714	555	159
印度語部・インド科	417	328	89
ビルマ科	47	29	18
亞刺比亞語部・アラビヤ科	107	89	18
英語部・英米科	1,112	965	147
仏語部・フランス科	799	643	156
独語部・ドイツ科	787	604	183
露語部・ロシヤ科	611	485	126
西語部・イスパニヤ科	554	459	95
合    計	6,919	5,666	1,253

入学者合計と卒業者合計との差1,253名は中途退学者および死亡者であり、入学者の18%に相当する。死亡者は年5名前後あったので、退学者は約1,100名となる。退学を事由別にみると、授業料不払いによるものが昭和2年から6年までに63名あり、当時不況であったことがうかがえる。7年から11年にかけて学業不振というのが44名、ほかに病気によるものもあるが、各年を通じ家事係累によるものが多くを占めている。

昭和7年度には不良行為による退学者が12名もあったことが突出している。説明によると、これは不都合の行為により退学を命じたる者という。

学則は懲罰の項で「不都合ノ所為アル者ハ其ノ軽重ニ応シ之ヲ処罰ス」とし、罰は譴責・謹慎・退学の3種類と定められ、退学せんとする者は事由を付し願出(学則第20条)ことになっていた。願出をうけた学校が「退学を許可」する形をとらず、放校にひとしい退学者が1年に12名もあったことは、当時、本校内でも激しい学生運動があったことを物語っている。

22回生の分割卒業 一般にあまり知られていないが昭和18年4月入学の22回生は、2回に分かれて卒業している。卒業名簿によれば、20年9月25日の卒業生は136人、翌21年3月23日のそれは126人、計262人。

雲雀久明(IN22) 「南方雄飛」を夢みて馬來語部入学、19年10月「赤紙」が来て入隊、旧満州派遣のあと本土防衛のため釜山經由帰国、宮崎県で終戦を迎える。20年11月復学。元のクラスメートは仮卒業か未復員で、ただ一人、一年下のクラスに編入され、21年3月卒業。

彦坂健一(IN22) 「南進」熱に17歳の血を湧かせ馬來語部へ。20年の初頭には旧満州に派遣され、ソ連参戦後は決死隊を志願、最後にはただ一人になって9月末、新京(長春)にたどりつき、街にあふれるソ連兵に驚き、初めて敗戦を知る。21年夏帰国。「まだ2年生である」と思い、復学のため高槻に移っていた学校を訪れた彼は、自らの卒業証書を渡され啞然とする。卒業証書の日付は、彼が一人旧

満州をさまよっていた時期であった。

道井直次(F22) 19年9月、特別甲種幹部候補生として入隊、豊橋予備士官学校卒業のあと内地で終戦を迎え、復員後復学。21年3月卒。

小野富次(E22) 20年正月、工兵隊入隊。復員後、学校を訪れたが「すでに卒業している」と言われ、「そんなバカな!!」と、復学を求めたが認められなかった。

当時のくわしい事情は明らかではないが、どうやら19年入隊の者は、修業年限不足ということで復学を認められたようである。しかし、20年入隊者は、通史で述べたように16年から実施された修業年限短縮・繰上げ卒業措置によって、20年9月に卒業させられてしまう。敗戦という事態を迎えたあともなお戦時中の非常措置が生きていたことになる。

勤労働員に明け暮れた末の学徒出陣——「思えば学校でいったい何を習ったのだろうか」(雲雀)「果たして自分は本当に卒業生なのかと自らを疑う」(彦坂) — 『70年史資料集』への寄稿からは、戦争で学業との縁を絶たれた22回生のうめきが聞こえてくるようである。

### <就 職>

開校初期は新設校であるがゆえに知名度も低く、不況期とも重なって、卒業生の就職には苦勞があったと推測される。「外語は国際人を作ることにある。卒業生を世話するところではない」と言ったといわれる中目校長も毎年5・6月頃には語部ごとに3年生を招いて懇談茶話会をもつなど、校長、主幹、庶務課職員が就職の心配をしたようである。めいめいが縁故をたよって落ちついたと卒業生の多くは語っている。そうしたなかで、英語部だけは英語教師が払底していたので100円以上の高給で引く手あまたであった。

昭和4年12月学校調べによると、第1回から第5回までの卒業生就職状況は次表のとおりである。

卒業生就職状況

(単位・名)

語部別 種別	支 語	那 部	蒙 語	古 部	馬 語	来 部	印 語	度 部	英語部	仏語部	独語部	露語部	西語部	計
官 公 吏	37		3		9		5		7	21	14	24	7	127
学 校	8		4		12		9		83	4	10	6	3	139
銀 行 社	38		15		36		15		17	21	31	19	18	210
新 聞 社	8		—		2		3		6	7	1	2	1	30
個人経営 商店工場	39		3		13		13		5	9	11	2	6	101

語部別 種別	支那語部	蒙古語部	馬來語部	印度語部	英語部	仏語部	独語部	露語部	西語部	計
上級学校 在学者	5	2	4	7	18	7	16	4	4	67
自 営	11	6	11	4	20	8	2	4	2	68
兵役其他	17	14	13	16	7	23	22	20	18	150
計	163	47	100	72	163	100	107	81	59	892

官公吏、銀行会社などへの就職が半数、残る半数は個人商店、自営業ほかである。教職につくものもかなりあり、英語部に多い。英語部出身の約半数を占め、英語教師が有利であったことを裏書きしている。大学進学者も8%ほどあり、英語部、独語部に多い。

その頃の就職状況を『大阪朝日新聞』の記事から見てみよう。

昭和4年1月19日付同紙は、三井、三菱など18の大会社および官庁が諸学校と会合して、「新社員の詮衡は卒業後にする」との協定が成立したとの見出しで、大阪外語の状況を次のように記している。

「一番就職の楽なのは英語部で、これは例年2月になってから高等師範方面の就職が決まったあとで、中等教員任用の申込みがくることになっているので、割合まだ落着いているが、その他では懸命だ。支那語部と英語部から朝鮮の鉄道局と朝鮮の警察方面の通訳として全部で6、7名の申込みがあり、独語部では大阪商大の図書館係員として2、3名、神戸・大阪の商店から2、3名といった程度。新聞社、白木屋などから若干申込みがあるが、まず一番困るのは蒙古語部だろうとみており、同部の卒業生20名の就職には学校も今から頭痛に病んでいる」

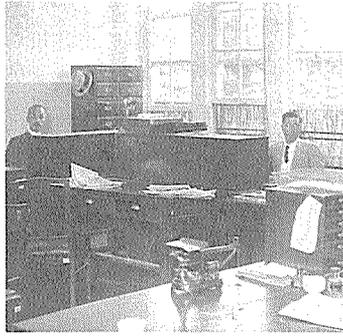
昭和5年1月30日付は「やっと学校を出て更に就職難の苦悩」の見出しで、大阪外語については

「ことし卒業生は180名、蒙古・西語部の卒業生はいない。卒業生はどこへでも口さえあればとび出して行く決心。年々学校の顔が古くなってきたので、その点は大分調子がよくなったが、と学校の話」

昭和6年4月21日付。「就職戦線も一段落 愁眉をひらく先生 初任給も10～30円の低下となる」の見出しで「大阪外語は比較的売行きわるく、3分の2が残っているが、それでも夏休みまでには7、8割は大丈夫片づく見込みと楽観している」と。

昭和7年4月21日付。「就職戦線にも陽光のきざし」の見出し。

「大阪外語は卒業生172名、就職希望150名。満鉄2、江商4、京都府警察部3、日立製作所1、菱美電気2、白石工業1、安村貿易1、朝倉貿易1、広島海外植民学校1などの申込みがあり、35名が確定。満州国へは印度語1、支那語3、蒙古語2、合



庶務課(昭和初期)

計5名が採用され、このほか個人的に就職確定したものは20~30名はあるので、こ  
も約半数は売れている」

昭和12年になると就職状況も転機を迎える。同年12月21日付『大阪毎日新聞』は「学生  
就職景気 決定や予約の赤札ベタベタ」の見出しで、「数年来の就職難を吹っ飛ばす天井知  
らずの好況」と伝え、大阪外語については

「ここから巣立つ若人は約200だが、最もすばらしいのは支那語部で34の全部が殆ど  
就職済み、これについてスペイン語も22中14が赤札を掲げ、英語、蒙古、馬來の各語  
も相当によく、その他各語部も例年に比べると比較にならぬ景気にほくほくもの」  
と伝えている。

さきに、昭和16年4月の規程改正で、生徒課と明記されるまで、就職担当課がはっきり  
していなかったと述べたが、内藤春三の語るところによれば、就職事務は庶務課で行われ  
ていた。馬來語部助教授内藤が、小西課長のいる庶務課に着任したのは昭和3年のこと。  
以来、昭和11年4月まで就職活動に当たった。以下は前出の「退官記念誌」に寄せた内藤  
の回想である。

「開校日なお浅き頃は新設校のため世に知られず、又先輩もなく、加えて経済界も  
不況にて求むるに職なく、各語部卒業生の就職は容易でなく、凡ゆる不利の条件を克  
服して苦難に耐え自ら活路を拓かねばならぬ状況であった。当時中等教員不足のため、  
二、三の大学その他に臨時教員養成所が設置され、外語には第五臨教が併置されて英  
語、国語漢文、地理歴史の教員を養成したので、英語部卒業生で教員志望者の就職だ  
けは容易で、かつ初任給も商社に比し恵まれた状況であった。従って年々志望者も多  
くなり、数年のうちに府下を始め近県の殆どの中等学校に英語本科並に臨教出身者  
を見るに至った。

昭和の初め十余年間は小生は各語部並に臨教の就職事務を総括担当し、卒業期とも  
なれば市内、神戸、京都をはじめ東京、横浜、静岡、浜松、名古屋等に出張して各商  
社を駆けずり廻った。わざわざの来訪ご苦勞と丁寧な扱いをうける所もあれば、又見  
え透いた門前払いに不快な感情を腹に収めねばならぬ時もしばしばで、セールスの苦

労を味ったが今五十年後の現状を見ると、<sup>うた</sup>転た今昔の感に堪えず歴史の尊さを痛感する次第である」

内藤のあと、その仕事を継いだのは商業担当の相沢正美で、昭和17年10月生徒課に移ってからはそちらで就職事務をも扱った。

「昭和11年4月、それまで庶務課で学生(というより卒業生の)就職事務を扱っておられた内藤教授が、徳助教授(少尉)の応召によって、授業が忙しくなったので辞任され、私にその後任を命ぜられた。この種事務には多少の自信もあった私は、進んでお引受けし、中尾俊夫君を助手に事務に当たった。

一人の卒業生を就職させるため、校長以下各教官が大車輪になって当っても容易でなかった昭和初期の不況時代とは打って違って、満州国の建設や南方圏への発展などに刺激されて、就職戦線は花盛り、正に羽が生えて飛ぶような盛況であった。加うるに太平洋戦争突入に及んでは、文字通り娘一人に婿八人の有様で、少し遅れた申込みは、すべて断わるという状態で、卒業式までには百パーセントの就職決定で、葉山校長は大満足、私も大いに面目を施すことができた。しかし、全く苦労が無かった訳ではない。中国語の申込に対し蒙古語を、英語の申込に対して、インドネシア語(当時馬來語)やインド語の卒業生をすり換えて、言葉巧みに先方を納得させるまでの苦心や、或る学生が採用内定の報を受けながら、最後の判定会議で留年(落第)と決まり、採用先へ詫びに行ったりした苦労があった」〔「外語時代を顧みて」相沢正美「扉」第8号〕戦争がもたらす好景気の影響を当時の外語も受けていたわけである。

#### 〈大学進学状況〉

昭和6年の「生徒必携」には、本校(本科)生徒に与えられた各種の特典が紹介されている。中等学校教員資格の無試験取得、徴兵猶予の恩典とならんで、大学進学について「本科卒業生ハ東北、九州帝国大学法文学部及ビ京城帝国大学法文学部入学試験ヲ受クルコトヲ得」と説明している。さきの学校調べでも、昭和4年12月現在、上級学校在学者は67名あり、進学先は九州帝大が多かった。

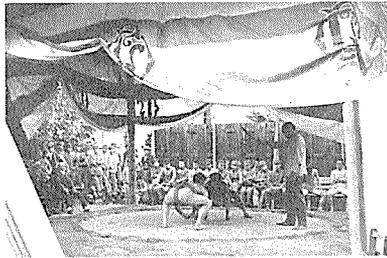
#### 〈海外進出〉

同窓会本部の会員分布概況によって、卒業生の海外進出をみると、昭和7年 208名(16%)、11年 444名(20%)、12年 507名(21%)、14年 614名(23%)と年をおって増加している。(カッコ内は全体に占める比率)。

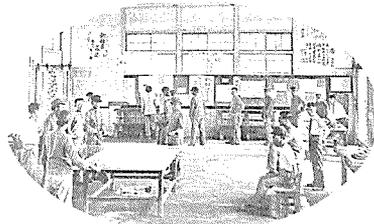
進出先を方面別にみると、中国大陸、中国東北部(旧満州)が80%を超えており、この方面への進出は支那語部、蒙古語部、露語部卒業生が圧倒的に多い。欧米への交通手段としては船と鉄道しかなかった戦前は、ヨーロッパといえは遥か遠い国のことで、当時の学生、卒業生が夢に描く外国といえは花のパリや霧のロンドンではなく、上海や哈爾濱(ハルビン)



干しものが見える狭い校庭でのサッカー練習  
(昭和8年頃)



相撲の土俵(昭和初期)



増築された生徒控所。諸掲示板が並ぶなかに卓球台も置かれていた(大正15年)

であった。

#### 4. 厚生施設

「本校ニハ寄宿舍ナラビニ指定下宿等ナシ」—昭和9年の本科入学者心得はこのような注意で終わっている。大正13年から昭和12年まで会計課、庶務課に勤務した事務官・中尾俊夫も「寮はなく、地方出の学生の一番の問題は下宿さがし。場所は学校付近500 $\text{m}$ 以内で大体中流の家庭が多く、下宿代は2食付で15円か20円どまり」〔同窓会誌『咲耶』第7号〕と述べている。

##### 〈青雲寮と悠々寮〉

本校に初めて寄宿舍が生まれたのは、太平洋戦争の局面が次第に不利となり、本土にも空襲の危険が濃くなってきた昭和18年のことである。同年3月、寄宿舍の新設を、寄宿舍規則制定とあわせて文部省に申請、27日許可を得たので4月から実施の運びとなった。

場所は天王寺区上汐5丁目14番地、学校からの道順を示すと、通用門を出て直ぐの東西の通りを西へ100 $\text{m}$ ほど行ったあたり、89坪の敷地に木造2階建延べ178坪の新築アパートを借入れ、寄宿舍とした。「青雲寮」と名づけられ、寮費は月3円であった。

ここに入寮した22回生(昭和18年入学)も、そこから通学したのは1年余り。20年3月、第1学年が名古屋・愛知航空機へ通年勤労働員に出発したあとは、印度語部、亜刺比亞語部生徒約25名が学校防空要員として留まり、この寮に寄宿することとなった。

そして20年3月13日の大阪大空襲で学校と同じく焼失の運命にあう。このあと本校の寄宿舎としては、戦後、高槻へ移り、旧兵舎の1棟2階を改造して、約100名収容の「悠々寮」ができたが、それも23年10月12日の火災で焼失、本格的な学生寮ができるのは新制大学になってからのことになる。

#### 〈運動施設〉

一方、運動施設としては、学校南側の道路をはさんで、東西100㍍、南北150㍍ほどの小さな運動場があった。東北に野球のバックネットがあり、西側には南北に100㍍トラックが走っていた。そこで、正課として体操や教練の授業のほか、課外には野球やサッカー、ラグビーのボールが飛びかい、陸上選手が疾走するという状況であった。

開校当初から、すべての運動施設が揃っていたわけではなく、大正11年10月には弓道部部員がセンベイ代を出しあって、校舎西側に仮の弓道場をつくった。庭球部ではテニスコートがなく、あちらこちらのコートを利用していたが、12年9月校舎北側にコート1面ができたので、コート開きを兼ねて校内庭球大会を開催している。13年2月には南西隅に84坪の道場(柔・剣道)が完成、同10月東南隅に相撲の土俵ができ、12年に増設の生徒控所には卓球台がおかれ練習ができるようになった。

#### 〈花園運動場〉

広い運動場がほしいという願いは運動部のみならず、学校側も同じであった。長年の懸案が解決して、花園に新運動場ができたのは昭和12年7月。当時の校長、葉山万次郎は同窓会の『母校創立35周年記念会誌』の中で、次のように述べている。

「花園運動場買入れの話の起りは、本校の敷地が同列の専門諸学校に比して著しく狭隘で、生徒の保健上更に運動競技の練習関係から見て甚だしく不足しているので、空闊な運動場が是非必要であるという、まことに筋道の立った要望である。原内閣時代の所謂高等教育機関拡張によって新設された高等諸学校の敷地は、所在地によって相異なっていて、二万坪、三万坪と云うのもあれば、大阪高校の様な一万坪位のもあった。然るに本校は夜学の関係上都心に近い場所を選ぶの必要から、差当り現在の敷地が選定されたので、早晚敷地拡張が問題になる可能性は、創立当初より潜在したものと思われる。処でその当時の文部省の内規として運動場の新設は一校一年度五千坪を限度とし、五千坪を越ゆる場合は、次年度に追加申請をすることになっていた。数多くの直轄諸学校の要求を、限度ある予算を以て処理するとすれば無理もないことである。しかしこちらとしてはあの運動場敷地を大軌(現・近鉄)から買上げるには、一万坪一まとめにしてなら坪十円ですむが、五千坪買ってあとは次年度では、話が旨く纏まらぬかも知れぬと云う懸念と、創立以来二十年近くの間、日本一狭小な敷地で隠忍して来たことに対する報償との双方から見て、是非一括一万坪を獲得したいのが、



学内食堂



大軌ビルの完成(大正15年8月)

学校側としての要望である。此時に申請書に添付した書類の中に、全国直轄諸学校の生徒定員と敷地との比率表があった。此表は当時の会計課長本田要太郎氏が考案且つ作製したもので、罹災しなかったら其原稿が今尚会計帳簿の中に見当ると思います。つまり生徒定員数を分母とし、敷地坪数を分子として割り出したもので、本校の定員九百余名に対し敷地は三千何坪かで、比率対照表中の最下級の最末位である。

さて問題はよし文部省が認めても、大蔵省主計局の査定で不合格になったら徒勞に終る訳だが、幸に谷口主計局長は此問題を大乘の見地から判断し、談判が割合円滑に進んで、十萬円で一萬坪の運動場が得られたのであった」

整備に暇がかかったのか、運動場開設祝賀運動会が開かれたのは約1年後の昭和13年6月3日であった。職員生徒一同が参列、開場式が行われ、式後、馬術部員4名が模範馬術を披露したり、航空研究部員・武田富昌(M15)がプスモス機で飛来、上空から花束を投下した。

夏にはサッカー部が合宿したが、生い茂る雑草に膝まで没する有様で、午前中練習をやめ草刈りに当てたり、夜は電燈のない合宿所でロウソクの光を頼りに図上作戦やルール研究をやったという。

#### 〈教官官舎〉

一方、教官官舎としては、天王寺区小宮町の506坪の敷地に4棟、住吉区住吉町1368(のち万代西1の46)の500坪の敷地に4棟あった。

前者は当時の大阪市電の停留所上本町8丁目と上本町9丁目の中ほどを東へ入ったあたりにあり、歴代の校長、生徒課長、会計課長および外国人教師1人の宿舎として、後者もっぱら外国人教師の宿舎として戦後も使用されてきた。

特別メニュー？「ソーライ」 昭和初期、外語生徒の昼食メニューは……。

我々の毎日の昼食は、弁当を持って来ている者もいたが、たいいていの者は学内の食堂か、うどん屋か、上八にあったおでん屋であった。それとても20銭くらい  
の食事、大軌の食堂(現在の近鉄百貨店の食堂)で食事するのが最高ではなかつた  
らうか。いよいよ財布が底をついてくると、運動場に沿って西へ少し行った所に、  
二人も入れれば満員になる回転焼屋があり、そこで無料の茶をがぶ呑みながら  
1個1銭の回転焼を何個か食って昼食の代わりにしたものだ。どういうわけか、  
この店を「エロマン」と皆が呼んでいた。

時には豪傑がいて、大軌の食堂でライスだけを注文し、これに卓上のソースを  
かけて、添えものの福神漬をおかずにして2皿、3皿と食った者もあれば、水を  
もらって食卓塩で握りめしにして食った者もいた。ソースをかけた飯を「ソーラ  
イ」と呼んでいた。いづれにしても3皿食って15銭で済んだ。(R9・青木茂)

昼めし所は、10銭の力<sup>りき</sup>どんの上七「力餅」のほかに、名前を何といったか、南  
の裏門の通りで直ぐ西隣にあった昼はめし屋で夜は飲み屋、おかみさんは京なま  
り、酒は月桂冠、ここもかなり利用した。

ちょっとふところ具合のよい時と、文なしに近い時は大軌の食堂だ。金がある  
時は30銭のカツライス。ない時は5銭の「ソーライ」……。 (E14・井上日出夫)

同窓会広島支部『扉』第62号の特集「昔の上八」に登場する懐かしの店とメ  
ニューである。

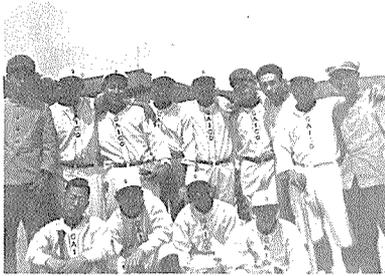
## 5. 課外活動

### 〈校友会創立のころ〉

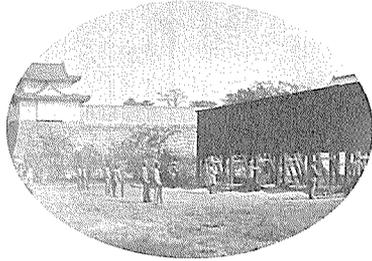
大正11年5月、武芸部・文芸部・陸上運動部・端艇部・球戯部・旅行部・会務部の7部  
でスタートした校友会は、翌12年に部の名称を実際に即して、柔道部・剣道部・弓術部(の  
ち弓道部)・馬術部・相撲部・水泳部・端艇部(のち漕艇部)・陸上運動部(のち陸上競技部)・  
野球部・庭球部・蹴球部(昭和7年、ア式とラ式に分かれる)・旅行部(のち山岳部)・弁論  
部(のち講演部)・雑誌部(のち文芸部)・音楽部・絵画部(のち美術部)・会務部(のち総務部)  
の17部と改めた。以後、新しい部として、卓球部(大正15年)、射撃部(昭和2年)、籃球部  
(昭和4年・のち籠球部)ができ、昭和13年には航空研究会が航空部として認められた。各  
部の活動も活発化したが、文部省の方針により、昭和16年2月、本校でも校友会を解散、  
報国団へと改編され、校友会活動は終止符を打った。

校友会発足直後はいづれも部員の確保に苦勞し、1人で複数の部を掛け持ちする者も珍  
しくなかった。比較的部員が集まったのは弁論部、音楽部、旅行部であり、あまり用具  
等を必要としないところであった。

運動部の悩みはヒト集めだけでなく、施設の不備も頭痛の種であった。例えば、柔道部・  
剣道部では学校に道場がないため、週1回の武道の授業もできず、柔道部は天王寺警察署



創設時の野球部員(大正13年)



城南射撃場での実弾射撃練習



東外戦ラグビー(花園運動場)

の、剣道部は天王寺の武徳殿の道場を借りて練習した。庭球部はコートがないので、練習は神崎川や本町の商品陳列所のコートまで出かけた。野球部は打ったボールが校庭をとり囲む長屋を直撃、瓦やガラスを割られたとの抗議があいついだため、キャッチボール以外はまかりならぬことになり、グラウンドを求め転々とした。

弓道部では部員がカネを出しあって校内西側に仮道場を作って練習してきたが、昭和6年職員閲覧室が増設された分だけ短くなり、対外試合は出来なくなった。射撃部は運動場西隅に1間半の胸墻(土手)を造って練習、実包射撃は放課後、城南射撃場へ行ってやるほかなかった。

以上は草創の頃の運動部の嘆きであるが、徐々に運動施設も整備され、大正12年9月校舎北側にテニスコート1面が、その年暮れに生徒控所の西隣に道場ができ、卓球台も用意され、大正13年10月には東南隅に相撲の土俵ができ、校内で練習もできるようになった。とはいっても、狭い運動場はそのまま、陸上競技やサッカー、ラグビーが入り乱れての練習は花園グラウンドができるまで続いた。自前の馬を持たない馬術部は大手前の騎兵第4連隊や輜重兵隊、砲兵隊で練習し、同様に、自前の艇を持たない漕艇部は大阪商大(現・大市大)等から借りて練習したり試合するといった状態から解放されることはなかった。

そうした中で、遅れてできた航空部が自前のグライダーを持ち、16年5月花園運動場でその命名式を挙行したのは異例のことで、時局の要請の然らしむるところであったといえよう。

### 〈対外試合〉

本校で最初の対外試合が行われたのは大正11年5月19日のことで、高野山へ全校1泊旅行をした際、高野中学からの申入れで、柔道、剣道の試合を行った。しかし、疲れと練習不足のため、あっさり負け緒戦を飾ることはできなかった。

本校と時を同じくしてできた大阪高等学校とは、早くから対抗試合を始めた。その最初と思われるのは野球の試合で、大正11年11月19日、秋晴れの北野中学校校庭で行われ、13A-9で勝った。その毎回の記録は校友会誌『咲耶』創刊号に「北陽の凱歌」と題して残っている。

野球部にかぎらず、他の運動部でも、3校リーグ戦とか5校リーグ戦と称し、定期的に対外試合を行った。相手校は大高、浪高、大阪商大、大阪歯科専、日本大学専門部、大阪高医、大阪薬専、神戸商大、天理外語、和歌山高商、三重高農、神宮皇学館等であり、交通至便の阪神間の学校が多かった。

### 〈東外戦〉

対外試合で欠かせないのは「東外戦」である。一時中断をみたものの、戦前から今日まで続く唯一のものである。その最初は大正13年7月14日、神崎川コートでの庭球試合で、結果は東外4-3本校であった。翌年は陸上競技、柔道、剣道、サッカーのほか、弁論部も加わり東京で開催、以後、夏休み中に交互に行うようになる。競技種目も次第にふえ、昭和2年～5年頃は8種目を数えた。東京遠征の時は講堂で選手激励会を開催して送り出すなど、全校あげての応援であった。

大阪毎日新聞社が本競技を後援して優勝盃を寄贈、大阪開催の時は大阪毎日社員から、東京開催の時は東京日日社員から手渡された。

年により参加しない競技もあったが、最もおそくまで続いたのは陸上競技で、昭和13年「現下の時局に鑑み、今後、一切の遠征を中止するよう」との学校の通達がでたあとも15年6月まで行われた。

### 〈運動部優勝の記録〉

各運動部とも、ヒト・モノ・カネの不足を嘆きながらも、競技会で日頃練習の成果を発揮している。『咲耶』に報告された戦績から優勝の記録を拾いあげる。ただし各競技会の規模や水準がどの程度かはわからない。

#### 弓道部

- ・大正15年11月14日 阪神武庫川で行われた第16回阪神連合大会で優勝。

#### 射撃部

- ・大正15年11月21日 京都深草射撃場で行われた京大主催・大阪朝日新聞社後援の第1回関西大学専門学校射撃大会で優勝。参加15校。

- ・大正15年11月28日 城南射撃場での第4師団管轄衛戍射撃大会で優勝。参加27校。この活躍が認められ、昭和2年、射撃会は校友会の一部となる。
- ・昭和2年11月20日 京都深草射撃場での京大主催第2回関西大学専門学校射撃大会で優勝。参加19校。
- ・昭和5年6月1日 大阪城南射撃場での関西連盟春季大会に優勝。
- ・昭和5年7月12日 京都深草射撃場での京大主催全国高等専門学校射撃大会で優勝。
- ・昭和6年7月 東京大久保射撃場での東大主催第5回全国高等専門学校射撃大会で優勝。参加35校。

#### 馬術部

- ・昭和2年12月4日 京都深草練兵場での第4回京都学生乗馬大会で優勝。
- ・昭和9年5月20日 関西学生連盟主催全国学生馬術大会で優勝。
- ・昭和15年10月27日 第25部隊での第16回関西学生馬術大会で優勝、中部司令官杯を獲得。参加18校。

#### 籠球部

- ・昭和6年1月17日 YMCAでの第2回全関西学生ユニオン籠球リーグ戦で10戦9勝1敗で優勝。
- ・昭和7年12月10日 YMCAでの第12回全日本総合籠球選手権大会大阪地方予選で優勝。

#### 卓球部

- ・昭和6年6月 南大江小学校での大阪府下大学専門学校リーグ戦で優勝。参加10余校。
- ・昭和8年6月18日 済美第5小学校での大阪学生連盟戦(2部)で優勝。
- ・昭和8年10月8日 関大専門部コートでの全関西学生秋季戦(2部)で優勝。1部に昇格。
- ・昭和8年11月19日 関大専門部コートでの大阪学生連盟戦で優勝。
- ・昭和9年11月18日 住吉中学校での全大阪学生連盟秋季リーグ戦(1部)で3たび優勝。

#### ア式蹴球部

- ・昭和7年12月4日 住之江公園での関西学生蹴球連盟リーグ戦(2部)で同率決勝の末、優勝。1部に復帰。

#### 排球部

- ・昭和9年6月17日 甲子園での全関西排球選手権で優勝。参加9チーム。
- ・昭和9年10月21日 神戸市民運動場での全日本排球選手権関西予選で優勝。11月

全国大会に出場するも第1回戦で敗退。

- ・昭和10年6月2日 福岡日日新聞社主催第3回西日本大学高専排球大会で優勝。参加10校。
- ・昭和10年6月23日 京大排球コートで京都排球協会主催第5回近畿男子排球大会で優勝。
- ・昭和10年8月4日 神戸市民運動場での第11回関西排球選手権大会兼全日本排球選手権大会関西予選で優勝。大阪代表として8月10日全国大会に出場し第2回戦で敗退。
- ・昭和11年6月7日 神戸市民運動場での関西排球協会主催第12回全関西排球選手権大会で優勝。参加14チーム。
- ・昭和12年5月9日 神戸商大での関西学生排球連盟春季連盟戦(2部)で優勝。11月の秋季連盟戦も全勝。1部2部入替決定戦で大阪商大に敗る。

#### 剣道部

- ・昭和12年6月 大阪府下高等学校専門学校剣道大会で優勝。参加14校。
- ・昭和15年6月 阪大での大阪府下高専大会で優勝。

#### 陸上競技部

- ・昭和13年6月18日 大阪市立運動場での大阪学生陸上競技選手権大会(2部)で優勝。1部に昇格。

#### 相撲部

- ・昭和15年6月 春季6校リーグ戦、11月秋季リーグ戦で2連覇を達成。

#### 〈創立記念陸上競技大会(記念祭)〉

昭和に入ると、各運動部とも基礎づくりを終えてゆとりもでき、語部対抗の校内試合が盛んに行われるようになった。そのなかで最大の呼びものは、陸上競技部の行事というよりは、全校的行事として開催された、毎年秋の創立記念陸上競技大会である。

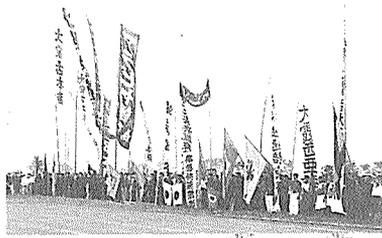
創立記念陸上大運動会とも記念祭とも呼ばれたこの大会は、創立記念日に当たる11月11日行われるを常としたが、昭和3年以降はこれより早く11月1日または10月下旬に行われるようになり、昭和13年からは会場を花園運動場に移して開催された。

競技種目は、トラックの部では100<sup>㍎</sup>競走、400<sup>㍎</sup>競走、1,500<sup>㍎</sup>競走、800<sup>㍎</sup>リレー。フィールドの部では、走幅跳、走高跳、三段跳、砲丸投、円盤投、槍投であった。すべて語部対抗の形をとり、採点方法は1等5点、2等3点、3等2点、4等1点として各種目の合計点で優勝を争った。当然のことながら生徒数の多い語部が有利なことは否めず、優勝回数は支那語部が多い。

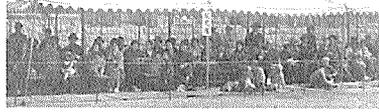
招待競技として大学高専を対象とする1,600<sup>㍎</sup>リレー、中学生を対象とする800<sup>㍎</sup>リレー



記念祭ポスター(昭和10年)



記念運動会応援風景



があり、その他余興として、拝借競走、風船玉競走、下駄競走、狼狽競走、世帯競走など職員や一般も参加しての競技もあった。

参考までに当時の記録を示す。

種目別記録

種目	開催時	第6回 昭和2年11月11日	第16回 昭和12年10月24日	第19回 昭和15年10月27日
◇トラックの部				
100 <sup>㍍</sup> 競走		12秒1	11秒5	12秒3
400 <sup>㍍</sup> 競走		1分2秒	1分1秒4	57秒6
1,500 <sup>㍍</sup> 競走		6分21秒4	5分14秒4	
800 <sup>㍍</sup> ・リレー		1分52秒	1分48秒4	1分44秒5
◇フィールドの部				
走高跳		1 <sup>㍍</sup> 55	1 <sup>㍍</sup> 70	1 <sup>㍍</sup> 65
走幅跳		5 <sup>㍍</sup> 43	5 <sup>㍍</sup> 75	5 <sup>㍍</sup> 88
三段跳			12 <sup>㍍</sup> 19	12 <sup>㍍</sup> 12
砲丸投		10 <sup>㍍</sup> 71	11 <sup>㍍</sup> 25	11 <sup>㍍</sup> 7
円盤投		27 <sup>㍍</sup> 49	29 <sup>㍍</sup> 75	26 <sup>㍍</sup> 96
槍投		41 <sup>㍍</sup> 17	40 <sup>㍍</sup> 35	
手榴弾投				62 <sup>㍍</sup> 65
◇招待競技				
1,600 <sup>㍍</sup> リレー(大学・専門学校)		3分47秒4	4分4秒4	
800 <sup>㍍</sup> リレー(中学校)		1分41秒9	1分41秒5	1分40秒6
400 <sup>㍍</sup> リレー(小学校)		1分12秒2		

(注)第16回大会での走高跳、三段跳の記録は当時仏語部2年平手嘉一(F15)のものである。彼は戦後、B級戦犯の罪に問われ巣鴨の靈と消えた。

## 〈万国風俗行列〉

校庭で陸上競技が行われている間、図書館閲覧室や一部の教室を開放して、各種の展覧会が開かれた。満蒙事情展、南洋展覧会、印度風俗展覧会、エスペラント展、外国新聞展、洋画展覧会、航空展覧会、万国観光ポスター展、未封切外国映画ポスター展など外語ならではのものが多かった。

生徒控室や中庭では各語部の趣向をこらした模擬店が開かれ、夕方からは講堂で音楽部の合同演奏会が行われた。しかし、なんといっても人気を集めたものは万国風俗行列(万国仮装行列)であろう。外国人教師から借りた、その国の民族衣装を身につけての踊りや行列、例えば印度語部の熱砂の舞や西語部の闘牛士の踊りなどに見物人は目を見はり、奇抜な着想の演しものに関心が注がれた。

### 珍行列 緊縮行進曲 大外語の催し

例年呼びものの大阪外語の英語部では2日の午後から「緊縮大行進」という一風変わった行列をやった。汚い着物を着て、まじめな顔付きの「緊縮組」がまず出て行進を始めると、あとから一升徳利を持った呑んだくれの「濫費組」の一隊が出て、双方が左右に分れ、綱引をやり、結局「緊縮組」が勝つという趣向だが、若人の夢の中にも1929年型流行の「緊縮時代」が入ったのかとほほえまれる。

以上は昭和4年11月2日の万国風俗行列の一齣を写真入りで報じた『大阪朝日新聞』の記事である。同日の他の催しも紹介したあと、「今年は記念祭の費用も減じて、大阪外語では例年1人当たり約1円を要したものを50銭に切りつめた」とつけ加えている。

商都の人気を集めたこの万国風俗行列も、戦前、自粛することが3度あった。1回目は大正12年9月の関東大震災のあと。2回目は昭和2年、大正天皇の大喪中につき「娛樂ノ為ニスル催シハ之ヲ遠慮セシムベシ」とする文部大臣訓令に従って。3回目は昭和9年9月、室戸台風が大阪を直撃、四天王寺の五重塔や200余りの学校が倒壊し、多くの犠牲を出した時である。

昭和12年7月に日中戦争が始まり、記念陸上競技大会もその姿を変えていく。その年11月1日の競技大会は「例年の記念祭より余興の気分を除き、真に学生としての非常時青年の意気を示すべく、外部への招待状、各語部余興、写真展を廃し、単に内輪のこととして」行われることになった。すなわち、開会式に先だって国旗掲揚、宮城遙拝、出征将士の武運長久を祈り黙禱、軍歌「天に代わりて……」を斉唱したことが『咲耶』17号にのこっている。

万国仮装行列はとりやめとなり、競技のほうは従来種目のほか、質実剛健な体力本位の武装競走(教練服を着て武装し着剣突撃してゴールに入る)や棒倒し、俵奪いが加わり、合い間には、馬術部選手の障害飛越の模範演技や剣道部一同による野試合が行われた。

昭和15年は「紀元2600年」に当たり、年間を通じて各種行事が行われたが、第19回の競技大会でも「金鷄輝く日本の……」で始まる紀元2600年奉祝歌を歌ったり、2,600に協同競



万国風俗行列

走や手榴弾投げ競争といった種目もあらわれた。

秋の一日、スポーツを楽しむ平和な祭典も、次第に体力増進・戦意高揚の色彩が濃くなり、戦局が厳しさを増すにつれ大会開催も困難となり、ついに昭和16年10月29日花園での創立20周年記念運動会を最後に中断、再開されたのは戦後、高槻においてであった。

記念運動会の一種目として、中学校や高等専門学校を招待してのリレー競技も行ってきたが、ほかにも中等学校を対象にした競技大会を主催している。剣道部は大正15年から、柔道部は昭和2年から関西中等学校剣道(柔道)大会を昭和15年まで毎年開催、参加校は60校を超えた時もある。排球部では昭和11年から15年まで、阪急電鉄の後援をえて優勝排球大会を開催した。

#### <弁論活動>

「ひとこと言っておきたいことは外語の校友会が殆んど運動部のための校友会であり、文芸部の如きはその予算も極めて少額なことである。しかもその少額な予算をさらに内部で5つの研究会(映画・劇・俳句・短歌・文学)に分けるのだから、1研究会の配当はさらに少額とならざるを得ない。他の部1回の試合費がわが部1年間の総費用という現状である」

以上は昭和7年度の文芸部の嘆きである。こんな状態であったから、ヴァイオリン部よりハーモニカ部やグリークラブの方が部員も集まり易く、活動も早かったのだろう。弁論部にも同じことが言える。

弁論部の特徴は、その演題に時代が反映されていることである。大正15年の京都学連事件に連座し中途退学した原田耕や黒川健三は大正12、13年の校内弁論大会で、“無産者とプロ文芸”“とらわれた人びと”と題して弁舌を振っている。その当時はそうした弁論もできたと推察されるが、この事件に関連して、弁論部は昭和3年3月発行の『咲耶』第7号で「……京都学連事件以来、内・学校当局よりは勿論、外・警察当局より、さかんにわが部

に対し注視の眼が向けられたのは自然の成行きであった。昨年度におけるわが弁論部が沈黙を守ったのも余儀ないことであった」と釈明している。

「満州事変」が起こった昭和6年の主要テーマは満蒙問題、昭和13年になると戦時統制経済、日満支ブロック、南進論などという演題の変化のなかに、弁論部の揺れ動くさまがうかがえる。言論抑圧の方向へと進む状況を昭和10年および12年の弁論部報は次のように伝えている。

「1934年は前年度より継続せる非常時意識がなお一層昂揚せられた年である。それは迫りくる1936年度の危機への接近と災害による国内経済恐慌の深刻化の故であった。……しかしながら、ここに考えねばならないことは、非常時の叫ばれて以来、嚴重な制限を加え来ったところの言論不自由問題である。それは近来、マルキシズム理論の影をひそめたことで明白な如く、自由主義的言動すらが官憲の手によって抑圧せられるファッショ的色彩の濃厚なる現状が如実にこれを物語っている。したがって学生弁論たるもの、また一層の不自由をば加えたのである。しかるが故に、1934年度におけるわが弁論部の行跡も言論不自由の限界の中において、非常時不安の糾明ないし研究をなしたのである」〔『咲耶』第14号・昭和10年2月〕

「学生弁論の華やかなりし時代はもはや過去の夢と化し、今や社会的にその存在さえ認められないのではないかと思われる。全く零落の一途を辿りつつある状態である。これは勿論社会情勢の目まぐるしき変遷が然らしめたものであると、一応は言いうるのであろうが、また一面、我々は自ら省みなければならない点があるのではなからうか。今や満州事変を機として、殊に2・26事件以後というものは、わが国における言論が極度に抑圧されていることは識者の等しく認めて、以て遺憾とするところである。けれども国家当局としても、この問題に関しては決してその不当を知らぬわけではあるまい。しかも現実にかくの如き抑圧を行わむとするに至りては、そこに何らかの止むべからざる必要を認むるからではないだろうか」〔『咲耶』第16号・昭和12年2月〕

昭和12年頃から、学校(厳密には国際連盟協会外語支部)による名士講演会の開催がふえていく。例えば高田保馬「日本民族と経済」、芦田均「支那事変と国際情勢」、浜中海軍大佐「最近の日米関係」、代議士・池崎忠孝「世界の変局とわが国の立場」などであった。

#### <万国語学大会>

弁論部活動として、学校PRも兼ね、昭和9年から夏休み中に四国、山陰、北陸、北九州に出かけて、地方巡回講演会を催したこともあるが、ハイライトは万国語学大会であろう。

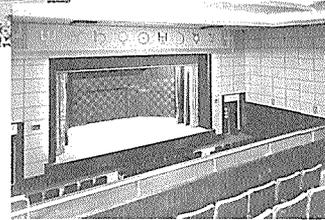
昭和2年11月13日午後6時、大阪毎日新聞社後援・第1回語学大会が大毎本社3階ホールで開催された。語学大会開催の経緯を相沢正美は次のように述べている。



地方巡回講演会のポスター  
(昭和10年)



会場の大阪ガスビルと講演会場  
(大阪ガス提供)



「兄弟校である東京外語が毎年各国語劇大会を催し、これが東都の呼びものになっていたので、本校もその向うを張って語劇大会を開きたいとの希望が学生間で盛んであった。しかし、予算上の問題があって実現に乏しいと考えたので、それに至る道程として語学大会を計画した」〔「外語時代を顧みて」〕〔扉〕第8号〕

以来毎年秋の恒例行事として、一度の中断もなく、昭和14年からは各国語講演大会と改められて続いた。

昭和9年まで大毎ホールで開かれてきたが、年々聴衆もふえ、8、9年頃になると、会場は手狭に感じられるようになったため、昭和10年第9回大会からは会場を大阪ガスビルの講演場(昭和8年3月開館)に移した。昭和15年第14回大会からは中之島中央公会堂に移し、17年を最後に幕を閉じる。

発表は各語部2名が1組となり、1人が外国語でスピーチ、もう1人がそれを通訳する形で行われ、専修語のみならず、兼修語の満州語、ペルシア語、ポルトガル語、オランダ語等による発表もあった。発表・通訳ともにもっぱら3年生が当たっていたが、16年には卒業線上げなどのため、各語部とも3年生の欠員が多く、2年生の出場が多かった。

どんな演題の講演であったか、参考までに第1回大会(昭和2年)と第14回大会(昭和15年)の使用外国語と演題を列記する。

#### 第1回大会

インド語	「印度の風俗」
オランダ語	「南洋における日本人材」
満州語	「吾人が満州語を学ぶ理由」
ロシア語	「所感」
中国語	「中国日本学生連盟成立の急務」
ドイツ語	「欧州に旅して」
ペルシア語	「波斯文学」
フランス語	「モガの出現と現代日本」

インドネシア語 「健全なる文明へ」  
 スペイン語 「移民に於て」  
 モンゴル語 「赤露の外蒙経略概要」  
 英語 「軍縮会議批判」

#### 第14回大会

アラビア語 「回教圏とアラビア語の伝播」  
 インド語 「印度情勢とウルドゥ語」  
 オランダ語 「蘭印問題」  
 フランス語 「仏印紹介」  
 モンゴル語 「辺境工作の重要性と青年」  
 ドイツ語 「大戦の華・ドイツ宣伝中隊の全貌」  
 インドネシア語 「椰子は招く」  
 スペイン語 「南十字星の下に」  
 ロシア語 「ソヴィエト断想」  
 中国語 「吾等何を為すべきか」  
 英語 「東と西」

昭和5年第4回大会以降、英語特別講演に外国人教師グレン・ショウが出演するようになって大会の人気はさらに高まった。しかし、15年11月16日、中之島中央公会堂での第14回大会に彼の姿を見ることはできなかった。彼は1週間前の11月9日、神戸港を発って帰米の途上にあつたのである。

大会は毎年11月11日の開校記念日前後に開かれることが多かったが、太平洋戦争勃発の翌17年は6月6日開かれ、インド人教師サント・ラーマ・ヴァルマが「大東亜戦争と英国」と題し、特別講演を行っている。

「今や日本は米国を完膚なきまでに叩きつけ、インドからもまた英国勢力を駆逐せんとしています。神様、1日も早くインドが自己の掌中に政権を握る日が来るようにして下さい。日本がインドに進撃を始めるならば、インド人の援助はあらゆる手段をもって、100パーセント日本のためになるであります」と説き、「多大の感銘を与えた」と翌日の『大阪毎日新聞』は報じた。しかし、前日6月5日のミッドウェー海戦で日本海軍が手痛い打撃を被ったことは、一般市民は当時知る由もなかった。

#### <音楽部>

##### ハーモニカ部

音楽部のなかで一番早く活動を始めたのは「大阪外語ハーモニカ・シンホニック・バンド」と称したハーモニカの会で、大正11年11月に誕生。指揮者の都合で一時中断があつたが、同12年5月に再発足、独語部2年八木弘(委託生)の指導と猛練習でメキメキと腕をあ

本誌と柿菊きのこ金木犀  
昭和十五年霜月

尚紅蓮



関西学生ハーモニカ・ソサエティ連盟大会に出演のハーモニカ部、指揮者八木 弘  
(大正15年1月中央公会堂にて)

上田耕甫の囁によりショウが  
色紙に書き残した別れの句

げ、13年2月には講堂で第1回公開演奏会を開催。「ホーム・スイートホーム」「風の結婚」「セレナーデ」「カルメン」等を吹奏した。その後毎年2、3回校内で演奏会を開いてきたが、14年1月には全関西学生連合大音楽会に出演するまでになった。昭和4年6月15日には宝塚大劇場での競演大会に初出演、児童会や教会に招かれての演奏の機会もふえた。昭和7年7月14日には初めてラジオ放送に出演、午後6時から20分間、大阪中央放送局J O B Kからの電波によって「校歌」、ガンヌ作「勝利の父」、「証城寺の狸ばやし」、「おひる」、「月の砂漠」の5曲が流れた。翌8年6月26日、J O B Kは第2放送を開始、当日夜、ハーモニカ部リーダー山脇四郎(E11)、加納正彰(D11)の2名が招かれ、ハーモニカ独奏と二重奏を放送した。1週間後の7月5日午後6時から20分間、ハーモニカ部全員の合奏が放送された。

ハーモニカ部員全員の合奏が放送された同日(昭和8年7月5日)の第2放送(午後8時~8時30分)で、グレン・ショウが「ハイカラな話」のテーマで趣味の講演をしている。『大阪朝日新聞』朝刊ラジオ面には、その梗概がのっている。

#### ハイカラな話

二重放送を祝して、ごくハイカラな話をしたいのです。ハイカラといってもクラシカルでもなく、アカデミックでもない、100%モダンなインテリ式の日本語を喋るという意味です。このごろでは外国語まじりでなければ日本語ではないように思われ、新聞には外国語のカタカナが毎日どしどしとふえ、この調子なら我々碧眼がむずかしい大和言葉を覚えなくともすむと思われる。例をあげてお話しすると、パパ、ママなどはよくいわれていますが、私はひとつこれについて次のような川柳を作りました。

パバママをいう子のママのアッパッパ

(注) アッパッパ=夏に婦人が着る簡単な洋服型の衣服・関西で言い始めた  
——広辞苑

レビューガールという言葉も流行しておりますが、いま沢山高野山に詣っておりますね、その他マネキンガール、金融マラソン等の言葉もよく用いられています。ある時、熊本へ行った時、宿屋で土地の新聞記者と会いました。ところが記者が私に一句作ってくれと言ったので、ちょうど雨が降っていたので、「雨」という題で次の如く作りしました。

いぬ、ねこの熊本にふる熊の雨

しかし、記者がその意味が分らないというので説明をしました。すなわち、英語では大降りのことを犬、猫を用いて形容するのであるが、熊本では犬猫でなしに熊だと。その翌日、この句が新聞に出て、その見出しに「この外人の句が分るか」と書いてあった。私は英語がますます盛んになっていけば、この私の句の意味も5、6年後には一般に分るようになりはしないかと思う。

ハーモニカ部に次いで大正12年6月ごろ、大阪音楽学校の両角氏を招いてヴァイオリン部ができ、同じころオランダ語教師グスターク・ベルンハルト・キューリットの指導でマンドリンクラブも誕生した。マンドリンクラブは岩井茂(I P 3)がリーダーとなってから活動も活発となる。

#### グリークラブ

グリークラブの誕生は大正15年4月である。部員も20数名集まり、片山謙二(F 3)、民秋重太郎(I P 5)が指導するに及んで急速に上達、その年6月19日にはマンドリンクラブ、ヴァイオリン部と組んで、第1回公開音楽会を講堂で開いている。その後、大阪音楽学校の長井斉を招いて指導を受けるようになり、練習の成果を春秋、講堂で開く音楽会で内外に披露してきた。やがてグリーだけでなく、マンドリン、ヴァイオリン、ハーモニカの各部との合同音楽会を開くことが恒例となり、聴衆もふえてきたので、昭和9年秋からは会場を大阪ガスビルに移して開催するほど盛況を呈するに至った。

グリークラブが生まれて間もなくの昭和2年11月26日、宝塚大劇場で宝塚音楽協会主催の第1回合唱競演会 Music Olympic Game of Chorus が開かれた。民秋重太郎率いる外語コーラス25名は、ウィリアムスの「ラーボード・ウォッチ」とドボルザークの「新世界より」から「故郷へ」の2曲を歌った。このうち「ラーボード・ウォッチ」はコンクールに先だち11月3日、前年完成の朝日会館で開かれた第1回明治節制定記念音楽会で一度歌った曲であり、「故郷へ」については長井斉が「ドボルザークの新世界よりゴーイングホームを恐らく初演した」〔昭和23年3月『合唱の友』創刊号〕と記している。

審査の結果、外語グリーは3位入選、学生団体では1位であった。部創設から日浅くして関西学生コーラスの古豪をおさえての榮譽にグリーの面々は「ステージ上に燦たる優勝

※/回夏期  
ズイン語  
講習会

大阪外国語  
7月14日  
朝8時-10時 夜  
大阪外語(上)  
7円  
申込50円  
受講150円  
志香楼・堂・丸善・美津堂  
三島書店・科校・市川商店



語学講習会ポスターと受付

盃を手に、しばし狂喜した」ということである。

民秋重太郎や清水脩(F8)といった名指揮者をえて、外語グリーの評判はとみに高まったが、専門家の印象はどうであったか。昭和6年1月16日開かれた第1回関西学生合唱連盟音楽大会について、19日付新聞紙上で新賀郷夫は次のように批評している。

「9団体をABCの3クラスに分類したい。各方面から観察して比較的難がなく、かなり美しくまとまっていたのをAクラスとすれば、これに属するものは関西学院、大阪外語、大阪医大、同志社グリークラブの4団体、……Aクラスに属せしめた4団体は、いずれも十分練習はできていたが、エクスペッションで傑出していたのは大阪医大で、一番美しいハーモニーを示したのは大阪外語であった……」

ハーモニーが安定して美しくなったのは長井斉の指導の結果であり、外語グリークラブの伝統ともなった。そして明治節奉祝合唱会や関西学生合唱連盟音楽会には毎年連続して出場、JOBKのラジオ放送「学生青年の音楽」にも出演、部員も最盛期には50名の多きを数えた。

昭和13年11月の関西学生合唱連盟第9回音楽会で、滝廉太郎の「荒城の月」、メンデルスゾーン「美しき死」を歌い優勝、指揮は上田彰夫(D15)、メンバーは第1テノール11名、第2テノール9名、バリトン13名、バス11名であった。

記録によると、「今宵外語は輝かん」「GAIGO Will Shine Tonight」が登場したのは、昭和4年6月のマンドリン部との合同演奏会が最初で、以来、春秋の校内合唱会では必ずこの曲から始まるのを常としてきた。しかし、昭和13年秋季合同演奏会で歌ったのを最後に、公開の場でのプログラムから消え去る。代わって「海ゆかば」「太平洋行進曲」「愛国行進曲」「紀元2600年奉祝歌」などの曲目がふえていった。

<語学講習会>

外国語学校の特長を生かして、語部主催によるドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語等の講習会が、夏休みを利用して上八校舎で行われた。

昭和6年6月発行の『我等の独逸語部』第4号に、ドイツ語夏期講習会の案内記事がの

っている。期間は7月15日から8月4日まで、夜7時～9時。募集人員は初級300名、上級150名、学歴・男女を問わず(このあと「婦人席の設けあり」とことわっており、当時の世相がうかがえる)、講師は大阪外語の教官とそれ以外の教師数人、受講料は教材費込みで5円、申込みは直接のほか、三島書店、丸善書店、阪急・大丸・大軌(現・近鉄)の各百貨店書籍部でも受付けた。

開講の趣旨は、ドイツ語の普及宣伝、ドイツ文化の紹介ならびに語部の書籍購入費の一部にするもので、講師の収入のためにするものでないことわっている。

講習会開催に当たっては、生徒も応援に出てポスター作成、私鉄ターミナルへの貼り出し、ピラ撒きや申込みの受付などのほか、講習会では生徒が講師の助手となり受講者の質問に随時応ずるなど補完的な役割を果たした。

こうした講習会の収支はどうであったか。昭和11年夏の独語部主催の第4回ドイツ語講習会の収支報告は次のとおりである。

収 入	聴講料	1,860円
	寄付その他	48
	合計	1,908
支 出	宣伝関係費	247
	講師・生徒の交通費	98
	教材費	39
	写真代・雑費	254
	合計	638
差引純益		1,270

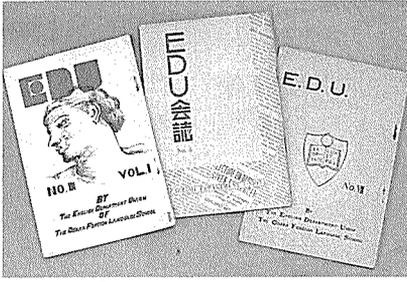
(備考)例年の講師への謝礼は本年度から名目を講師研究費と改め、純益の4割を当てることにした。但し、今回は機関誌発行費用300円を控除して残額970円の4割を講師研究費の総額とする。[『我等の独逸語部』]

戦後間もなく、中之島の阪大医学部を借りて、外専夏期語学講座が開催されている。昭和23年7月15日から8月4日まで、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語など聴講料は1科目につき250円であった。

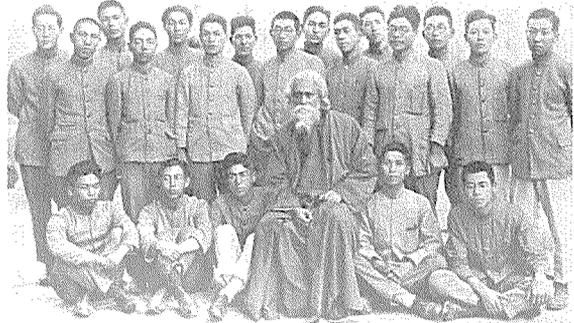
#### <国際交流>

戦前、外国学生との数少ない交流の機会として日米学生会議、日比学生会議があった。

日米学生会議は昭和9年、東京・青山学院で第1回会議が開かれてから、戦時中と戦後の一時期を除き、毎年日米相互に開かれてきた。日米両国の学生が約10日間、起居を共にし、政治・経済・社会・宗教等の諸問題について率直に討議、相互の誤解をとき友情を深



英語部会誌『E.D.U.』



哲人タゴールと記念撮影



アルゼンチンの水兵を迎えて

めることを目的としている。

本校が参加したのは11年の第3回会議からで、以後毎年、英語部生徒が出席した。14年南カリフォルニア大学での第6回会議には、のち学長になる林栄一が参加、のち首相となる東大生・宮沢喜一も一行に加わっていた。翌15年津田英学塾での第7回会議には英語部3年・柳生直行と同2年・のちの芥川賞作家・庄野潤三が参加している。会議終了後、柳生は英語部会誌『E・D・U』に報告を寄せ、次のように述べている。

「……今や日米両国の関係は思わしくありません。しかし、第8回の日米学生会議は是非とも開催されなくてはなりません。けだし国際関係の如何にかかわらず、この会議のもつ意義は重かつ大であるからです。両国間の誤解の除去、友好関係の増進に貢献するところ決して少なくないと信じます……」

日比学生会議は相手がフィリピンであるということ以外、議題や会議の進め方は日米学生会議と変わらず、本校が参加したのは第3回(昭和14年)と第4回(同15年)の2回であった。

以上のような恒例的行事以外にも、日本訪問の外国学生や視察団の応対に出て、国際親善に一役買うことも多かった。目にふれたなかから、いくつかを挙げる。

大正11年5月初め、ウラジオストク極東大学東洋語部生25名が来阪した折、露語部生が歓迎会を催し、楽天地や奈良を案内。

大正13年6月、朝日新聞社の招きでインドの哲人タゴールが来日、中之島中央公会

堂で講演した際、印度語部生徒が歓迎の辞を述べる。

昭和6年5月、ドイツ巡洋艦エムデン号が大阪入港、独語部生徒が乗組員の案内役を買って出る。▽6月、ジャワの華僑が経済視察に来阪、大阪商工会議所の依頼で馬來語部3年生が通訳を務める。

昭和11年5月、中之島中央公会堂で開催された国際雑貨見本市に英語部・印度語部生徒が通訳に。

昭和15年6月、東亜競技大会が甲子園、花園、橿原で開催され、西語部3年生がフィリピン選手の案内役に。▽6月、アルゼンチン巡洋艦が神戸入港、西語部2・3年生が下士官、水兵の大阪・宝塚見物を案内。

昭和16年春、フランス極東艦隊が大阪に寄港、仏語部生徒が乗組員の奈良・宝塚観光を案内。

外国人と接触の機会が少なかった戦前、習った外国語がどれほど通じるか、生きた語学の練習の苦勞を例示しておく。

昭和6年ごろ、外国人ことにドイツ人を大阪市内で見るとは稀で、ドイツ語の会話力に不安を抱いたので、新聞の外国船出入欄でドイツ船の入港を調べ、神戸港へ行って船員をつかまえ、ドイツ語会話の実力を試した。〔岡寿夫(D13)『70年史資料集』〕

昭和11年ごろ、米極東艦隊や英国東洋艦隊が神戸に入港したとき、元町あたりで水兵をとらえて、英会話の練習に利用した。〔和田順太(E14)『70年史資料集』〕

## (2) 大学時代

### 1. 入学

#### <学生定員>

昭和24年、新制大学として発足したときの1学年当たり学生定員は英語学科60名、中国語学科50名、ドイツ語、フランス語、イスパニア語、ロシア語の4学科は各25名、インドネシア語、インド語の2学科は各20名、モンゴル語、タイ語、ビルマ語、アラビア語の4学科は各15名で、計12語学科310名であった。このうち、モンゴル語、タイ語、ビルマ語、アラビア語の4学科は36年度まで隔年募集が続いた。

その後、新しい学科として36年ペルシア語15名、38年朝鮮語15名、39年イタリア語15名、41年デンマーク語15名、54年ポルトガル・ブラジル語20名、62年日本語40名の6学科が設置された。

#### <定員割れ>

昭和24年以降、入学者と定員との関係を見ると、若干の年度は別として定員割れの状態

が、とくに41年度から10年間定員445名の時代には、かなりの定員割れが恒常的に続いた。これは24年度から導入された国立大学の一期校・二期校制の影響によるものと考えられる。48年4月大学学術局長から「今年の入学者が定員に達しない大学は補欠入学などで定員を満たすよう措置されたい」との通知が出された。この年、本学では定員445名に対し入学者は399名であった。各語学科、教授会で審議した結果、すでに新学期も始まっており、これから補欠入学を受入れることは教育上種々の問題があること、それに見合う留年者がおり、補欠入学を認めると、L Lなど本学の教育施設の限度を越えるなどの理由で48年度はこれを見送り、今後の問題として、合格者決定に当たっては若干の入学辞退者の発生を配慮することになった。この結果、50年度以降定員割れの状態はなくなった。

#### 〈臨時増募〉

昭和58年になると、わが国の18歳人口は昭和60年の156万人を底に61年から増加に転じ、ピーク時の平成4年(1992)には205万人に達することが明らかになる。いわゆる第2次ベビーブーム(46～49年)世代が続々と大学受験を迎えるようになるからである。

大学設置審議会大学設置計画分科会は58年10月21日「昭和61年度以降の高等教育の計画的整備について」の報告のなかで、「18歳人口の急増が予定されている昭和61年度以降67(平成4)年度までを増募計画期間とし、68(平成5)年度以降計画的にその廃止を図る」とし、国立大学における臨時増募は国公私別、大学短期大学別の現況を勘案し、計画期間中約8,100人(年平均約1,200人でその初期に傾斜を図る)を目途とする試案を発表した。

学生の臨時増募については本学でも検討を重ね、59年3月16日の教授会で現入学定員(520名)に対し第一部は13.5%増の71名、第二部は10%増の22名、全体として12.5%増の93名をピーク時における臨時入学定員増の目標値とし、恒久的な増員計画は将来計画委員会で検討することになった。その後、第一部の増募計画を63年度までに前倒しするとし、61年度臨時増募はインド・パキスタン語学科、アラビア・アフリカ語学科、英語学科、ドイツ語学科各10名の計40名、62年度増募は中国語学科、ポルトガル・ブラジル語学科各10名および第二部各語学科1名の増員が行われた。

これらの結果、平成3年度の定員は中国語学科75名、英語学科70名、アラビア・アフリカ語学科60名、イスパニア語学科、ロシア語学科各50名、インドネシア・フィリピン語学科、インド・パキスタン語学科各45名、日本語学科40名、ドイツ語学科、フランス語学科各35名、イタリア語学科、ポルトガル・ブラジル語学科各30名、タイ・ベトナム語学科、デンマーク・スウェーデン語学科各25名、朝鮮語学科、モンゴル語学科、ビルマ語学科、ペルシア語学科各15名、合計18語学科675名となり、大学発足時に比べ2倍を超えるにいたった。

### 〈志願者の傾向〉

戦前は事変や戦争との関係で特定の語部に人気集中するという事例が見られたが、戦後は特定語学科に志願者が殺到するという事態は見当らない。昭和54年に共通一次入試が始まるまでは、志願者数は大体3,000～5,000人であった。ただ42年7,489名、43年6,801名と急増したのは、いわゆる第1次ベビーブームの影響である。共通一次入試以降は、一時的に突出した年もあるが、おおむね2,000人台で推移している。その中で英語学科の志願者は経常的に高い比率を占めるが、新しい語学科が設置された初年度は共通して志願者急増が見られる。39年のイタリア語学科は定員15名に対し志願者211名、41年のデンマーク語学科は15名に対し124名、54年ポルトガル・ブラジル語学科は20名に対し84名、62年日本語学科は40名に対し564名であった。日本語学科の場合は62年度予算審議が遅れたため、入学試験が4月中旬になって実施されたことも一因といえる。

### 〈入試制度〉

昭和24年度から53年までの入試は毎年3月下旬、外国語、数学、社会、国語の4科目について行われた。短大部入試は学部より数日おくれて実施されていたが、41年入試からは一部・二部共通して実施されるようになった。

23年から、全国一斉に国の進学適性検査が実施されたが、本学においてもこの進学適性検査との併用を29年度まで続けた。その配点は外国語200点、数学、社会、国語は各100点で、進適の成績も100点として計算された。

24年度から国公立大学に一期校・二期校制が導入され、本学では24年度入試は一期校で実施したが、25年度からは制度が廃止されるまで二期校として実施してきた。54年度から一期、二期校制が廃止され、国公立大学の入学試験の一部として大学入試センターの共通第一次学力試験が実施されることになる。

本学でも共通一次試験(国語、社会、数学、理科、外国語の5教科)と個別学力検査(いわゆる第二次試験)の併用で入学者選抜を行うようになった。

以来、本学における第二次試験は外国語、小論文の2科目について行われ、現在に至っている。外国語は英語のほか、ドイツ語、フランス語、中国語、イスパニア語、ロシア語も選択でき、ヒアリング(英問英答または英問和答)と読解力(部分和訳や内容把握に関する設問)、作文(部分英訳、時にはテーマを与えての自由英作文)の3項目についてテストし、小論文は57年度までは与えられたテーマについて800字以内にまとめるものであったが、58年度以降は長論文を読んで設問に答える形式のものとなった。配点は外国語150点、小論文50点、計200点と共通一次200点の合計400点であったが、60年度から外国語200点、小論文50点の計250点、共通一次250点の合計500点となった。

共通一次試験を境にしてみられる変化に欠試率( $\frac{\text{志願者}-\text{受験者}}{\text{志願者数}} \times 100\%$ )の低下と現役合格者の増加がある。共通一次以前の欠試率は東洋語関係が20%台であっても西洋語関係で45

### 小論文テーマ

54年度	ことばの正しさと美しさ
55年度	情報と真実
56年度	日本文化と外国語
57年度	文化交流と伝統

%をこえる学科があるなど、全体で30～40%と高い割合であったが、54年度には6%と大幅に低下し、以後、各学科とも5%前後で推移してきている。また、現役合格者の割合は53年以前は42%～55%と浪人優位の時代が続いてきたが、54年度には逆転して現役63%となり、平成に入ってから75%前後にあがり、現役優位が定着してきている。

共通一次試験のもとでは国公立大学の受験は1校に限られていたが、受験機会の複数化をはかるため、62年度からは国公立大学のA・Bグループ分けが実施された。すなわち、全国の国公立大学をA・B群に分け、A・B両群の試験日をずらし、受験生がA・B両群の1大学ずつを複数受験できるようにした。しかし、この結果、一部の大学を除き、合格者の中から入学辞退者が相ついだため、多くの大学が大量の定員割れを経験するという予想外のことがおこった。このため、一部の国公立大学では平成元年から分離・分割方式を採用するにいたる。

本学では、62年度はAグループ、63年度はBグループ、平成元年度からは連続方式A日程で第二次試験を実施してきた。

共通一次試験は平成元年度で打ち切れ、2年度からは大学入試センター試験にかわった。共通一次試験は「国立大学に入学を志願する者の高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とし、同一の期日に同一の試験問題により共同して実施するもの」(国立学校設置法施行規則第50条)で、年々激化してきた競争緩和と一期校・二期校に分かれたことで生じた大学格差の解消を狙ったものであった。ところが実施してみると、かえって大学間の格差を顕在化させる結果を招いてしまった。この制度のもとで受験生が出願する大学を決めるに当たっては、大学入試センターが2月上旬に発表する得点分布(総計および科目ごとの最高点、最低点、平均点、分布曲線、標準偏差など)と自己採点の結果をもとに決めるにしても、受験産業が大学入試センターのデータだけでなく、既往の大学進学実績のデータ、全国一斉の模擬テストのデータなどの蓄積を駆使してまとめた予想得点が大学選択の決定的な鍵となり、「入りたい大学」よりも「入れる大学」を選ぶ傾向が定着するにいたった。さきへのべた、欠試率の低下や現役合格比率の向上は受験生の安全志向を反映したものといえることができる。

本学においても「入れる大学」として選択したという学生は少なくない。そうしたケー

スを『わが国における外国語研究・教育の史的考察(上)』から引用する。

(1)インドネシア語

「インドネシア語を専攻する学生の動機は実に単純なものである。まず成績にみあった大学を選ぶという観点からインドネシア語(学科)を選んだというのが圧倒的に多い。日本中のほとんどすべての大学がそういう実態であるわけだが、それでもインドネシアというきわめて特殊な分野を選んだということが将来自分にどういう影響を与えるかということについて無自覚なのはやはり本人にとっても問題があるだろう。インドネシアというところはいろいろと面白いところだと教師の側は思っている、学生の方はインドネシアがマイナーであるとか、遅れた国だとかいう理由で自分がそれと一緒にみられるのがいやだと思い、インドネシアが嫌いになってゆくばあいが少なからずある」

(2)タイ語

タイ語勉強の動機についての質問に対し用意された回答のうち、「タイに興味をもつかどうかは別にして、とにかく、タイ語を勉強することによって、何か利益を得るかもしれないと考えたから」を選んだものは75%で、そのうち、82%は「とにかく国立大学に入りたいから。タイ語学科だったら何とか入れるかもしれないと思ったから」という回答であった。

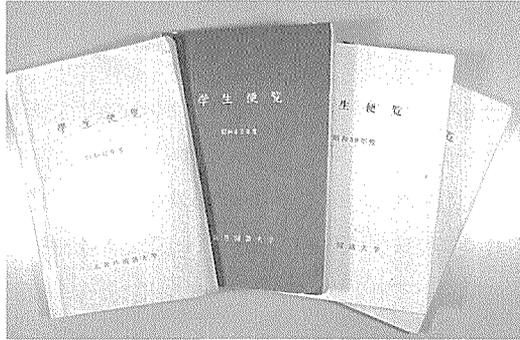
<奨学金制度>

学生のための奨学金制度は、戦前の大日本育英会の流れを汲む日本育英会が主なものであるが、ほかに地方公共団体と民間育英団体のものがある。いずれも人物、学業ともに優秀、かつ健康であって学資の支弁が困難と認められるものを対象としている。

『大学便覧』昭和27年度版によると、当時の日本育英会奨学金は前期在籍学生は月額1,800円、後期在籍学生は同2,100円で、返還は5年、10年、15年、20年、25年のいずれかによることになっていた。36年度から奨学金の種類が一般と特別貸与に分かれ、一般は月額2,000円、特別貸与のうち自宅通学者は同4,500円、下宿通学者は同7,500円で、返還は20年以内に年賦・半年賦・月賦のいずれかで行えばよく、義務教育従事者などには返還特別免除の制度があった。

本学で日本育英会の奨学金を受ける学生(第一部)は、37年度現在454名で、全学生1,395名の33%を占めていた。その後43年度までは30%台であったが、45年度から年々低下し、58年度には19.4%となった。60年代に入ると、再びふえて20%台となり、平成3年2月では、全学生2,892名に対し奨学生は696名、率にして24.1%となっている。一方、第二部の奨学生は40年度以降平成3年3月まで、10%台で推移している。

奨学金は数年おきに増額され、51年度からは一般は月額11,000円、特別のうち自宅通学者は13,000円、自宅外通学者は18,000円、大学院生は38,000円と1万円台を超える。



『学生便覧』

日本育英会の奨学金は発足以来、一貫して無利子が続けてきたが、貸与率の拡大を目的に、59年度から有利子奨学金制を新設、これまでの無利子の一般、特別を一本化して第一種、有利子の奨学金を第二種(年3%)とすることに改められた。

平成3年3月現在の奨学生は第一部・第二部あわせて第1種726名、第2種181名、合計907名で、ほかに大学院が14名である。奨学金は平成3年現在、月額自宅通学者29,000円、自宅外通学者35,000円、大学院生72,000円となっている。

日本育英会奨学金に関する本学の定めとして、『大学便覧』昭和27年度版に24条からなる、「日本育英会大阪外国語大学奨学生規定」を見ることができるが、51年4月に「日本育英会奨学生推薦基準」が制定され、以後それによって推薦が行われてきている。

以上の日本育英会奨学金のほか、大阪府育英会などの地方公共団体の奨学金、山岡育英会、電通育英会など民間の育英団体の奨学金があり、後者は年を追って団体数がふえている。本学学生でそうした奨学金を受けている者は、平成3年3月現在、第二部・大学院をあわせて83名に及ぶ。

#### 〈『学生部広報』の発行〉

『学生部広報』第1号が発行されたのは昭和44年6月3日である。その年1月20日未明の新館封鎖に始まる大学紛争がエスカレートしつつあった最中であり、B5判の大学用箋にタイプ印刷された次のような簡単なものであった。

##### 学生部広報 No.1

5月31日の教授会において、行われた決定は次のとおりである。

1. 大学臨時措置法案について 本学の主体性において、教授会の名を以って、反対声明を出すことにした。
2. デンマーク語科問題について 審議の結果、次回の教授会において、さらに詳細な検討を加え、最終的な結論を出すことにした。
3. アラビア語科問題について 田中教授の辞職申し出について慎重検討の結果、一

応辞職は承認するが、とりわけ新聞記事について、教授会に公開的な釈明、陳謝を田中教授に要求することにした。

発行の趣旨、いきさつについては何も触れられていない。

本学内の公式な情報伝達手段としては、庶務課発行の『学内報』があった。37年7月1日創刊号が出され、44年4月15日の第28号までが残っている。発行主体が庶務課であるため、記載内容は主に学内規程、各種委員会、人事異動、主要行事、日誌などが主体で、時に志願者・入学者調べ、就職状況などもあった。その創刊号に森沢三郎学長は発刊の辞を寄せ、本学では講堂など多数の参加に便利な話合いの場が備わっておらず、「学長からの一方的な話しかけでしかない告辞と称するものも入学式、卒業式の機会に限られている有様である。『大阪外大新聞』がその欠をみたくくれることは極めて望ましいことであるが、紙面や発行回数その他の点から相当制約が多いように思われるので、意見交換の場を拓げる上において、学内ニュースがある程度その役目を果たすことを期待している」と述べた。

表紙とも6頁のこの創刊号には、さらに6頁の付録がついている。付録の内容である「未完の言を補う（大阪外大新聞への期待）」と題された一文は、大部分が37年4月14日付『大阪外大新聞』に掲載された「自衛隊から聴講生8名が学園へ 焦点ぼかした教授会決定 学長、学生への信頼を欠く」という記事に対する森沢学長の質問と反論であった。『学内報』の性格の一端がうかがえるようである。

『大阪外大新聞』 本学70年史には『大阪外大新聞』からの引用記事がしばしば登場する。学生の眼から見た同時代史の一断面という意味で貴重な資料であるが、70年史編集委員会が目にするのができたのは昭和36年4月15日付の第26号以降のものであり、創刊号から第25号までは入手できなかった。

「大阪外大新聞は今号でやっと第60号を迎える。他大学と比べると号数の浅いのに気付かれるであろう。それは第一に歴史が浅いこと（安保闘争の前に東京、大阪、神戸の三外大合併新聞から独立したといわれている）。第二に発行回数が少ないこと……」[42年4月30日付・第60号「論説」とあるように、創刊当時の経緯は新聞局もつかんでいないようである。

「大学新聞のあり方」と題するこの「論説」は、外大新聞は、今や支配勢力の代弁者となったマスコミと対決する姿勢をとるものであり、学友の意見、要求の代弁者となることを目標とするが、「創価学会員から共産主義者まで」さまざまな思想をもつ学友に、特定の政治的見解を押しつけることは厳につつしみ、教職員と学生のコミュニケーションを密にすることによって外大の総合的民主的発展に寄与したい、と訴えている。

外大新聞局は、昭和53年4月、第112号発行のあと、活動を停止した。全員購読制の学内新聞として、休暇中を除き毎月1回発行を原則としてきたが、少数の固定局員による発行は負担が重過ぎるなどの理由から、モニター制度を採用、編集スタッフの増加を図った。しかしモニター参加者が予定数に達せず、ついに再建への期待をつないだまま、現在に至っても再刊の動きはない。

活版印刷10分<sup>以上</sup>にのぼる『学内報』は、3カ月に1回の割合で発行されてきたが、大学紛争のような急迫した事態に対応するためには間に合わない。こうした状況の中、大学の意思、決定事項を即座に学生に伝え、周知させるためのタイプ印刷による簡略な『学生部広報』が発行されるに至る。『学生部広報』は紛争中、12回発行されたが、第5号「紛争の経過と解決の展望」、第8号「牧学長代行・再び学生諸君に告げる」など、第12号を除き、すべて紛争に関係するものであった。『学生部広報』が活版印刷で発行されるようになったのは、大学に平静に戻った翌45年4月27日の第13号からである。第13号はその編集後記で次のように述べている。

「かつての紛争を契機として生まれた学生部広報も本号をもって13回を数えることになりましたが、今までの大学紛争を主とした内容を一新し、今後、大学の当面する諸問題、行事等をお知らせする場として、充実してゆきたいと思っています」

そうした考え方、方針どおりに内容も整い、年4～5回発行が常態化していく。年末あるいは年初号には、<sup>マダニ</sup>間谷祭、合同寮祭など秋のイベントや東外戦の結果報告、3月号には学長その他の卒業生に贈る言葉、卒業生による学園の思い出、時に学園を去る教官・職員の別れの辞、4月号では歓迎の言葉、各教室の紹介、年間行事予定、学割や育英資金、マイカーの注意など新入生関係の記事が盛りだくさんである。

第49号(52年4月15日発行)から名称を『ひろば』と改称、第50号からは学生委員2名が編集に加わっている。歴代学長の筆による題字が巻頭を飾り、平成4年3月28日発行分で『ひろば』も107号を数えるにいった。

#### <合宿研修(学科別懇談会)>

大学紛争を契機に、学生生活相談室(カウンセリングルーム)の開設や、新入生歓迎行事、統一外大祭の発足などをみたが、合宿研修(学科別懇談会)も新しい試みの一つであった。

合宿研修の目的について『学生部広報』第20号は次のように述べている。

「まず最も期待するところは、教官と学生、さらに学生間の親睦を深め、人間関係の融和を図ることである。とくに新入生にとって、大学は入学以前の浪人生活も含めて高校時代とは全く異なった環境であり、修学方法その他についても戸惑いを感じ、学生生活に不安を抱くものも多いはずである。これも合わせて解消するため、教官、学生が膝をまじえて学生生活について話し合う機会を、大学のキャンパスを離れて設けているのである」

主催は学生部であるが、懇談会の内容やプログラムは各学科の自由に任せられ、第1回の合宿研修は45年6月から7月にかけて、1泊2日の行程で、志摩賢島、紀伊長島、南紀白浜、日の岬、淡路島、琵琶湖方面に出かけた。第二部の合宿研修は高野山で行われた。しかし、日時・場所を各学科の自由選択にすることは、同行する事務職員や予算面の制約があるので、第2回からは場所を一定にし、日時をきめ何班かに分かれて実施するように

なった。

新学期開始後の早い時期、5月中旬から6月上旬に実施され、行く先は主として関西一円であるが、北陸や山陰などへ足をのぼすこともあった。貸切バスを利用することが多く、バスと宿舎の借上げ代は大学負担、食事その他は学生負担であったが、60年度からは宿泊費も学生負担となった。

合宿研修も20回近く続くと「同研修の内容が稀薄化してきているため、中止すべきとの意見」[63年11月24日教授会]も出るようになった。しかし、学生委員会と学科代表者との懇談の結果、従来どおり実施することになり、以後、毎年1,000人を超える参加者を数えて今日に至っている。

## 2. 卒業・就職

〈総数15,109名〉

平成4年3月28日、吹田市文化会館大ホールで初の第一部・第二部合同の第40回卒業式が行われた。この日外大を巣立つ第一部640名、第二部152名、大学院24名を前に、山田学長は「これからの『個衆の時代』において必要なのは個性の向上であります。今後、国際社会のなかで外国の人々に伍して仕事をし、また生活していく場合、他者とは違う『自分』というものを確立していかなければなりません。最近では数量的な価値観が横行して、教育の場では偏差値に血道をあげ、経済活動の面では何はさておいても収益をあげることにうつつを抜かし、下手をすると金儲けをこえる価値観をもてないままに推移してきた感があります。昭和の時代は物質的な側面では大成功をおさめたかもしれませんが、精神的側面では未熟なままで果てている思いもします。人としての然るべき価値観を見失うということはアイデンティティーを見失うということにほかなりません。このようなことでは国際社会への仲間入りはおろか、人間として誇りをもって存在していくための美意識を保つことすら難しくなってきます。……」とはなむけの言葉を贈った。戦後恒例となった、ドイツ国総領事館ほか在外外国公館からの記念品贈呈などもあった。

昭和28年3月10日、新制大学第1回卒業生を送り出してからちょうど40回、卒業生総数は15,109名となった(旧専門学校卒業生を含めると20,775名)。この40年間で目を見はることは女子卒業生の増加であり、第1回では9名にすぎなかったのが59年には男女同数となり、62年には男女逆転し、現在では卒業生総数で女子は5,000名を超え、男子卒業生の半数に達した。

〈新旧同時卒業の就職難〉

新制大学第1回生が卒業した昭和28年は、旧制大学にとっても最後の卒業生を送り出した年であった。朝鮮戦争の特需景気はあったものの、わが国の経済復興はまだまだという時代、就職の門はきわめて狭かった。当時をふり返って俵(旧姓中野)萌子(F27・大F1)は

次のように語っている。

私の卒業した昭和28年も神武以来の就職難といわれた年であった。まだ、日本経済は“戦後”の色あいを残していたし、高度経済成長はそれから数年後にやってくる。

おまけに学制の改革で、新制大学と旧制大学が同時に卒業生を送り出した。

あの時、私は外語の求人掲示板で、「フランス語の女子も可」というハリ紙を、たった3枚しか見なかったことを今でも鮮かに覚えている。とにかく、どこかへもぐりこめれば“オンの字”であった。それすら至難の時代であった。[『学生部広報』第43号]

第2回の卒業式まであと2カ月もないという、昭和29年1月21日の教授会で国沢助教授から就職斡旋状況について「現在102名内定しているのが約5割というところ」という報告があった旨、議事録に残っている。朝鮮戦争が終わったのが28年7月、それから半年後の経済界は特需を失って不況のさなかにあったということがその年の就職を厳しいものにしていった。

#### <経済復興で好転>

しかし、その後、経済情勢は一変する。電気洗濯機の普及にはじまり、掃除機、冷蔵庫とあわせ「三種の神器」ともてはやされて家庭電化時代の幕があく。神武景気・岩戸景気・いざなぎ景気とよばれる好況がほぼ一貫して45年までつづく。経済界の好況を反映して、この期間中の就職状況はおおむね順調に推移した。

昭和29年度から41年度までの就職状況を『大学要覧』から拾うと、29年度～44年度の間は、30、31、33年度を除き就職率(就職者/卒業生)は80%以上、時に95%のときもあった。卒業生の中には就職しない者もあるので就職率はもっと高かったといえる。

就職先を多い順にあげると、商社1位の時代が長く続き、34～36年度では半分を占めた。2位はメーカーで、1・2位は動かず、以下年度により順位の変動はあるが、教育、報道、金融がつづいている。教育方面へは好況時には減り、不況では増えるという傾向がこの期間に限らず見られる。

就職状況を当時の『大阪外大新聞』から拾いあげる。

36年4月15日・第26号 35年度就職状況は就職希望者254名に対し決定249名、就職率98%。一流会社への進出目立つ。

37年4月14日・第33号 36年度も好成績をあげる。希望者326名に対し決定320名、昨年を上まわる。商社・メーカー・報道などへ。

38年4月12日・第39号 37年度も好成績、希望者294名、決定289名、不況を反映して懸念されたが、3月末現在98%。

#### <求人競争の激化>

就職活動の実情を同じく『大阪外大新聞』から拾うと、36年10月27日・第31号は「就職

試験開始は10月1日からと協定されている。しかし、実際は殆どすべての会社が協定を破り求人を急ぎ縁故者が6月頃から内定したのをはじめとして、7・8月頃には就職関係者が夏休みをとれない程の忙しさとなっている」と協定が有名無実化していることを伝えている。

38年9月21日・第42号では「今年度はついにこの制限が撤廃されたため、夏休み一杯で就職戦線は山を越したかの観がある」と求人競争が年を追って激しくなっていく様子を伝えている。いざなぎ景気がピークに差しかかる45年には新学期の開始とともに就職活動も始まる。45年4月27日付『学生部広報』第13号はそのすさまじさを次のように伝えている。

「年々早まる傾向にあった就職戦線は、今年に入って早くも各社の動きが見られ、すでに本学にも150件以上の求人申込がきています。まだ授業すら始まっていない本学では殺到する求人にうれしい悲鳴をあげながらも、この早い動きに対処するについて些かの戸惑いを感じている次第です。年々早期化していく選考時期についてはいろいろな要因が考えられますが、いわゆる自由応募制の活発化がこの一因をなしているとも考えられます。

一日でも一刻でも早く他社に先駆けて選考試験を実施しようとする企業、より早く就職先を決定したい学生、このような状況に対処できない大学、三者三様の実情から生み出された自由応募制は全国的に拡がり、早期化現象に一層の拍車をかけているのではないのでしょうか。大学生活最後の年はそれまでの研究、教育の成果を問われる重要な時期であるにもかかわらず、4年に進級すると直ぐに就職問題に取り組みざるを得ない現状にある学生諸君は勿論のこと、大学としてもこの早期化現象に追随していくには、すでに限界すら感じています。しかしながら、本学としてはかかる複雑な現状にありながらも今年は大学推薦の体制を従来通り維持し、さまざまな弊害が考えられる自由応募については極力避けることを確認しています」

その後7月5日の『学生部広報』第15号は「新学期とともに始まった今年の就職戦線も、夏季休暇を目前にしてようやく一段落した感があります。5月の連休前後に選考試験を始めた大手商社、銀行、つづいてメーカー、中小企業等々。6月30日現在求人数750件中、約7割の企業がすでに採用試験を終了しており、例年終盤を飾っている学生間に人気のあった各新聞社も先日一次選考を終えたところです。……一方、女子学生の求人状況は求人難の時代にもかかわらず相変わらずきびしい」とのべている。

求人活動の激しさは46年になってピークに達する。45年度の就職戦線が一段落した時、各関係者の間で来年はもっと早まると予想はされていたが、46年が明けると、2月下旬には大手銀行、商社に始まり、5月中旬にはメーカーもほぼ求人活動を終え、6月下旬のマスコミ関係の採用試験をもって46年の就職試験も一段落という状況であった。

この年から国立大学協会の申合せにより大学推薦による就職活動は7月1日以降ということになっておりながら3年生在籍時に企業訪問をするという異常事態をみるまでエスカ



国沢慶一

レートした。

こうした青田買いも転機を迎える。昭和47年10月25日になって、国・公・私立の大学および短期大学の各協会は昭和48年度の大学卒業予定者の就職に関し申し合わせを行う。すなわち就職事務は事務系・技術系ともに7月1日より前には一切行わないこと、求人側に対する卒業予定者の推薦は10月1日以降実施を目途として行うこととし、求人側に対して全面的な協力を呼びかけることを決定。11月20日には中央雇用対策協議会も選考(採用内定を含む)は卒業前年の7月1日以降、会社訪問・説明会など求人活動は5月1日以降を骨子とする「新規大学卒業予定者の早期選考防止に関する決議」を行うにいたった。中央雇用対策協議会の決議は50年度からは求人活動開始9月以降、選考開始11月以降となり、51年度からはさらに「10月会社訪問解禁、11月就職試験解禁」と改められた。

就職協定はともすれば有名無実化しがちであったが、大学・企業では存続の意向が強く、63年からは産業界と大学で構成する就職協定協議会が主体となり「8月20日説明会・個別訪問開始、10月1日採用内定開始」という日程をきめ、それによって行われてきたが、それも守られていないのが実情である。

45年度から54年度にいたる10年は46年8月のドル・ショック、48年10月の第1次オイル・ショックで49年には物価が急騰、初のマイナス成長を記録、54年には第2次オイル・ショックがあつたりして不況の年が続いた。求人活動が過熱化した一般情勢に反して、この期間、本学卒業生の就職状況はそれ以前に比べると良くなかった。就職率をみても70%前半の年が多く、女子の就職はきびしかった。このため、51年度から学生課は「就職問題懇談会」を開設、毎年新学期の開始とともに就職説明会、卒業生を招いての懇談会を開くようになった。

55年度以降は構造的な学卒不足時代の到来とともに本学においても就職状況は年々好転、就職希望者100%決定という超売り手市場時代を迎えた。就職先も45年頃から商社と入れ替わってメーカーが第1位となり、ついで商社、銀行・証券等の金融関係と変動があり、公定歩合が史上最低の2.5%となった62年には金融関係への就職者は90名に達した。同じころからサービス産業への進出が顕著となり毎年50名をこえるようになり、とくに情報処理産

業への就職が増加、平成3年度では56名、うち54名が女子であり、一躍花形となった観がある。

#### <就職斡旋部>

最後に昭和33年度から40年代初めにかけて存在した就職斡旋部にふれる。就職斡旋部については27年3月20日の教授会議事録に「学長より報告事項として、就職斡旋部を新設することについて部長に国沢(慶一)助教授にお願い致し度」とあるのが最初であろう。昭和27年といえば新制大学第1回入学生が第4学年に進級した年である。

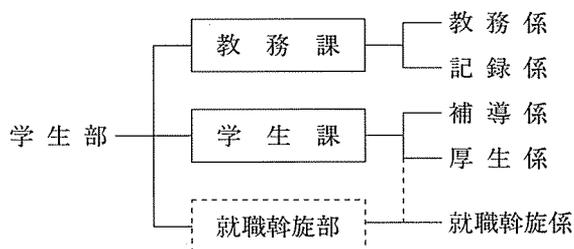
『大学便覧』(昭和30年度～37年度)、『学生便覧』(38年度～44年度)、『学生案内』(45年度以降)を見ると、就職斡旋部の二つの姿が浮かびあがってくる。

33年度『大学便覧』の「学生心得」には「就職希望者は所要の書類を添え就職斡旋部に提出すること」と事務手続が具体的に示されている。そして事務職員の項には、33年度から42年度までの間、学生部の教務課、学生課の次に就職斡旋部があり、その職員として部長国沢慶一と女子係員2名が現に配置されている。

ところが35年4月制定の事務組織規程では、学生部を構成するのは教務課と学生課の2課だけであり、事務分掌規程では就職斡旋事務は学生課厚生係の所管とされ、38年10月には学生課に新設された就職斡旋係に移管されており、どこにも就職斡旋部の名前を見出すことはできない。

学内諸規程のどこにもない組織について学生自治会はどう見ていたか、36年4月15日付『大阪外大新聞』第26号は「現在の就職斡旋<sup>〔マツ〕</sup>課は学内規約にもない幽霊組織」と指摘し、就職斡旋組織の委員会制への改組や規約作成を要求。この要求に対し「学長は就職斡旋課の不合理な点や規約にもない組織であることを認めながらも、斡旋業務の困難さを理由に、委員会制はできないとつっぱね、学生と意見が対立した」と伝えている。

就職斡旋部が微妙な存在であったことは、『大学要覧』39年度版に表示されている事務機構図にくみとることができる。下図のように就職斡旋部は点線で囲まれているのである。



昭和41年4月15日『学内報』第16号には、7カ条からなる就職斡旋部長選考規程が2月24日から制定施行されるとしているが、この規程により選考が行われたという記録は見当たらない。『学生便覧』の上で、42年度まで存在してきた就職斡旋部も、44年度版事務職員



花園学生寮

の項からは完全に消え、学内諸規程に合致して就職事務を学生課就職幹旋係で行うと示されるのは45年度『学生案内』からである。

点線囲みのついた組織ではあったが、国沢部長の献身的な努力を評価する卒業生は数多い。この時代の好景気にも支えられて、本学の就職状況も良好であった。

### 3. 厚生施設

#### 〈花園学生寮〉

戦時中の「青雲寮」、敗戦直後の「悠々寮」については、すでに述べた。学生寮について、本学では管理上あるいは学生補導上の理由から学校内には設置しないという方針を堅持してきた。しかし、30年代になってこの方針にも転機がくる。36年4月15日付『大阪外大新聞』第26号は、宿願の寮建設を次のように報じている。

「高槻時代以来、歴代自治会また学校当局の懸案であった寮建設が、このほど文部省との折衝もまとまり、正式決定のはこびとなった。

この問題がクローズアップされて、全学生のものとなったのは、さる33年夏の学生大会で、その前年上八に統合されて後、不要となった高槻学舎の売却費を寮建設にあてるよう、学校側に要望することに決まった時以来であった。そして寮建設対策委員会が設置され、学校側に学生側の意向の実現を要求した。(中略)寮建設は、学生の強い要望にもかかわらず、延び延びになっていたが、学校当局は今年度、校舎の増築と寮建設の二つの要求を文部省にだした。今年の1月にはいて、文部省学生課の確保していた国立大学関係文教施設整備費(約1億円)の中に、本学の分が組み込まれることになったので、急転直下、本学の建設が決定されたものである」

しかし、寮建設内定の文部省通知があったのは翌37年2月のことで、11月29日工事を開始、完成をみたのは38年4月であった。

本学花園グラウンド内に建設された男子寮は鉄筋コンクリート2階建延べ1,560㎡、4名収容(25㎡)の寮室が25、100名収容の食堂と浴室、ほかに図書室、娯楽室、談話室などがあり、寄宿料は月額300円であった。第2次分として120名収容の寮が隣接してつくられる予

定であった。

寮完成を機に、学寮委員会が発足、同委員会規程と学寮規程が4月1日制定された。ところが学寮委員に学生代表が含まれないことや、入寮を1年生に限ったことに学生が反発し、大学と激しく対立。学寮自治を求める運動は入寮拒否にはじまり、それを支援する学生自治会が全学ストをうつまでに発展した。結局、学寮規程を検討する過程で、大学が前向きの姿勢を示すことにより事態は一段落した。

40年4月改正された学寮規程では「在寮期間第1学年度、第1学年生」が「1年生を優先する」と改まり、入退寮に当たっては「あらかじめ学生代表の意見を徴することができる」と追加された。なお、学寮委員会および同委員会規程は、41年4月教授会委員会規程の制定と同時に廃止された。

学寮をめぐる紛争は、寮の自治獲得から受益者負担原則をめぐる対立へと変質していく。また、40年代後半になると、女子学生の増加により、女子寮の要望が高まっていく。

学徒厚生審議会の答申をもとに、昭和39年2月18日付で「学寮における経費の負担区分について」という大学局長通達が出されていた。通称「2・18通達」といわれるもので、その骨子は、学寮の管理運営に必要な基本的経費は大学が負担し、寮生の私的生活に要する経費は寮生が負担するというものであった。

「2・18通達」をめぐる反対運動は、40年ごろから全国的に広がり、本学においても、41年5月、寮の調理従業員の増員・公務員化を求めることから始まった。寮洗濯場の電気水道代や風呂の燃料費・水代の大学負担、トイレトペーパーの支給など、「2・18通達」の負担区分をめぐる、学校側と学生との対立はつづき、正常化には数年を要した。

この学生寮は当初、固有の名前はなく、規程でも「大阪外国語大学寮」とあるだけであったが、45年度版『学生案内』から「大阪外国語大学花園学生寮」と表記されるようになった。

#### 〈向陽・もみじ・粟生寮〉

箕面学舎の建設計画は、研究・講義棟、図書館を第一に、次いで福利施設、学生寮および留学生寮を含んだものであった。

寮を粟生間谷のキャンパス内に設けることは、寮生の日常生活上かなり不便であることから、北千里に近い小野原地区に設けるべきであるとの考えが強かった。しかし、小野原地区での箕面市の特定土地地区画整理事業(昭和53年～57年度)の進捗状況からみて、そこで建設は57年度にならざるをえないことが判明したので、同地区での建設を断念し、キャンパス内に設けることになった。

建設は53、54年度での2期に分けて行い、第2期工事完了時に男子寮160名、女子寮144名を見こみ、居室はすべてベッド、机、ロッカー付きの個室とし、8人ユニット方式で各ユニットに台所、補食室、洗面所、トイレが設置された。はじめの設計では細長い1棟の

建物となっていたが、地盤等の関係で、最終的に7棟に分けて建設された。

一方、日本人学生寮に先立ち、53年9月には留学生用として、鉄筋コンクリート造5階建、男子単身者80名、夫婦6組収容可能な寮が学生寮の南側に着工された。

54年2月になると、学生部広報『ひろば』でそれぞれの名称が公募され、男子寮は「向陽寮」、女子寮は「もみじ寮」、留学生寮は「栗生寮」と名づけられ、研究・講義棟等の本移転よりおくれで、9月21日、28日の両日、花園寮からの移転が終了した。

11月には学寮管理運営規程が制定されたが、規程では在寮期間は原則として通算2年を超えることができないとなっている。

### 〈体育館〉

本学が諸施設を完備した大学会館と体育館を擁するようになるのは、移転後の箕面学舎においてである。大学会館については、本編第2章「土地・建物」で述べたし、第5章「大学生生活協同組合」でも触れるので、ここでは繰り返さない。

戦前、体育館に相当するものとして、雨天体操場とよばれるものがあつた。昭和11年、校内東北角に立つ烈士之碑から西へ少し離れた所に、木造平屋建260㎡の雨天体操場が新築されたが、15年には合併授業用教室に改造された。空襲にも焼け残ったこの建物は、27年には教室兼学生控所として使用され、一時、食堂として利用されたが、新館完成後は仮講堂として、48年から箕面へ移るまでは仮講堂兼雨天体操場(卓球場・柔道場)として利用され、卒業式もここで行われてきた。

上八時代には体育館がないため、雨の日の体育授業に苦勞したほか、他大学との交流の場を欠き、近畿地区国立大学体育大会開催で他大学に迷惑をかける事態がしばしばあつた。「運動場は花園に、現在の運動場に地下1階(プール)、地上2階(体育場、合宿所兼部室)の体育館を建設する」[『ひろば』第62号]—これは昭和34年当時、体育の助教授であつた原利一が描いた構想であつた。20年後、この夢は箕面の新天地でプールを除いて実現を見る。「大学施設整備年次計画」第2期工事として、54年10月18日、雨の中で体育館着工の運びとなった。翌年3月に建坪1,211㎡の鉄筋コンクリート造2階建の宏大な建物が完成した。1階にはトレーニングセンター(316㎡)、剣道、柔道、空手道、合気道の格技場(317㎡)更衣室・シャワー等が設けられ、2階にはバスケットボール、バドミントン、バレーボール、卓球の球技場(1,209㎡)が設けられた。体育館落成を記念して55年6月21日、第1回学内バレーボール大会が開かれた。

63年3月にはバレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球、剣道、空手道ができる第2体育館が第1体育館の隣に完成した。

屋外の運動施設としては、54年3月に400mトラックを有する運動場(18,696㎡)が完成。大阪学舎の運動場の4倍近い広さのもので、サッカー、ラグビー、陸上競技、野球、アメリカンフットボールができる多目的グラウンドである。

54年11月には全天候型テニスコート2面、バレーボールコート4面、ハンドボールコート1面が完成。56年3月にはクレートニスコート5面ができ、のち屋外の施設にはすべて照明灯が設置された。東外戦の試合も一部を除いて学内で消化できるようになった。

#### 〈サークル共用施設〉

54年9月には鉄筋コンクリート造3階建延べ1,471㎡の課外活動施設(サークル共用施設)が竣工した。体育系・文化系サークルの活動を助成するための拠点として設置されたもので、共用室、音楽練習室、暗室、更衣室、集会室、器具保管庫などがある。

#### 〈合宿所〉

59年4月には鉄筋コンクリート造1階建203㎡の合宿所が、向陽寮の西隣にできた。体育系・文化系サークルを中心とする課外活動団体の合宿練習、研究会、ミーティングの場として設置されたもので、収容人員は40名(男子20名、女子20名)、30畳の和室1と15畳の和室2、シャワー室が設けられている。ほかに湯沸室、テレビ、冷蔵庫、扇風機、ストーブ、洗濯機なども備わっている。春・夏の休暇中は体育系サークルの利用が優先される。光熱水道費や貸寝具代は利用者の負担となる。

#### 〈山の家〉

学外合宿研修施設・山の家は、同窓会の大学移転記念事業募金によって建設され、本学に寄贈されたものである。(本編第5章「同窓会」参照)

初め大学と兼松江商の間で進められてきた岡山県英田町の研修センター建設計画がご破算になったあと、長野県北安曇郡白馬村に適地が見つかり、1,190㎡の土地に59年5月着工、鉄骨2階建延べ325㎡、収容人員45名の山の家が同年11月に完成した。1階に宿泊室、浴室、乾燥室、倉庫、2階に宿泊室、ホール、厨房、管理人室が配置されており、夏山登山、冬のスキーなどに利用されている。

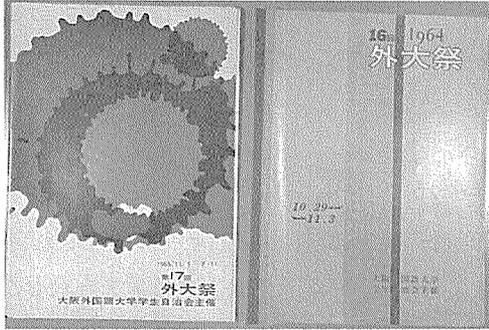
## 4. 課外活動・諸行事

#### 〈外大祭(間谷祭)〉

本学では開校以来、創立記念日に当たる11月11日を中心に各種記念行事を開催してきたが、昭和24年、新制大学になってからは「外大祭」の名のもとにイベントも多様化する。

学生の自主的な運営により、数日間にわたって本学その他の会場で日頃の研究と学習の成果を発表する一方、学生相互の交流と親睦を図るもので、体育系サークルの模範演技、フォークダンス、ファイアストームなどの前夜祭に始まり、語劇や研究発表、有名人の講演会、シンポジウム、映画会、模擬店など、さまざまな催しが行われた。

年を経るにしたがい、民謡コンクールやスポーツ祭典など新しい催し加わっていく。



外大祭プログラム



上八での外大祭



仮装して市中パレード(昭和53年)



高槻での外大祭



第14回(37年)には、最初の試みとして統一テーマが設定され、外大祭準備委員会の計画の一端として、総合雑誌『求索』が発行された。第15回(38年)には、外大祭を休暇と心得、帰省、アルバイト、旅行などで外大祭に参加しないものが多数にのぼるといふ状況に対し、マンネリ化を排して外大祭を全学生の手にとり戻そうという呼びかけが行われる一方、語劇偏重傾向への反省もおこっている。第16回(39年)は前夜祭に仮装行列がとり入れられ、外大―上六―細工谷―上六のコースを行進、中国語学科は創作劇「人民公社の一日」を上演した。

#### 外大祭統一テーマ

- 第14回(37年) 「反動の時代における僕達の課題」
- 第15回(38年) 「現代の停滞を突き破り われわれの未来を築こう」
- 第16回(39年) 「灰色の大地に若人の歌を 変革のバトスを」

外大祭は44年までは第一部・第二部別々に開催されてきたが、大学紛争を機に45年から第一部・第二部合同の「統一外大祭」として開催されることになった。第一回統一外大祭の様相を『大阪外大新聞』第74号は次のように総括している。

「初めての一・二部合同の統一外大祭は、これまでを上回る規模で行われ、12月1日のスケート大会で幕を閉じた。中でも『鉄道員』『神々の深き欲望』の二つの映画

と、司馬遼太郎氏の講演は人気を呼び、それぞれ中小企業会館に超満員の観客を集めた。一方、「公害」と「70年代の日本を考える」の二つの全学シンポジウム、各サークルシンボは予想以上に低調であった。語劇は八つの語科でとりくまれた。後夜祭は寒風の吹きつける中、史上最高の店が軒を並べた」

第5回統一外大祭(49年)では駅伝が行われた。「外大を出発し、生国魂神社の裏を抜け、大阪女子学園の坂を黄色い声援に送られてかけのぼる、という想定のもとに行われた駅伝だったが、人影はまばらで、参加も6チームという寂しいものとなった」[『大阪外大新聞』第99号]

54年箕面へ移転。大手前会館、四天王寺会館、中小企業文化会館など会場捜しのこれまでの苦勞から解放され、第10回統一外大祭からはすべて学内での開催となる。

第15回統一外大祭(59年)からは、学生の強い要望で、移転先の北摂間谷にちなんで、名称を「間谷祭」と改め、長年親しまれてきた統一外大祭の名称は、今後は副称としてカッコ付きで併記されることになった。

毎年マンネリ化打破、全学生の参加が叫ばれながらもどうにか開かれてきた間谷祭であるが、平成2年の'90間谷祭(第21回統一外大祭)は、「日ごろ、元気がなく何事にも冷めていると言われる外大生に、勉強、スポーツ、その他各方面で様々な花を咲かせてもらおう」[『ひろば』第102号]との願いをこめて、テーマも“咲かせましょう 咲かせましょう”と決まる。ところが開催が近づくとつれ、一部間谷祭実行委員が集まらず、二部学生が中心になって運営に当たるといふ異常事態を迎えた。この年は一部では自治会自体が存在しなくなっていたのである。

このため、平成3年の'91間谷祭(第22回統一外大祭)では、体育会、文化部連絡協議会、語劇団の3団体で一部間谷祭実行委員会を組織して取りくむことになった。テーマは「激動と融和」—僕たちには譲れないものが3つある。夢と心と専攻語—。11月13日から17日まで多彩な行事を繰りひろげた。江田五月・社民連代表の講演会のほか、A棟と図書館に挟まれた「墓石階段」特設ステージでは、受験生に贈る外大入学講座など、ユニークな催しもみられた。

#### 統一外大祭テーマ

- |           |                     |
|-----------|---------------------|
| 第12回(56年) | 「飛翔—平和と希望の未来に向かって—」 |
| 第13回(57年) | 「GET UP! 目覚めよ外大生!!」 |
| 第14回(58年) | 「俺は学祭だ!!」           |
| 第18回(62年) | 「そうでおまんにゃわ大阪」       |



全学駅伝大会



#### <対東京外国語大学定期競技大会>

「東外戦」の名で親しまれる東京外大との定期戦は、昭和15年6月13日、快晴の東京・芝公園運動場での陸上競技を最後に、記録から消える。戦後復活第1戦は昭和24年になってからである。

「東外戦復活を熱心に言いだした大阪側が当番校となり、汽車の確保、宿舎の準備、食糧の確保と運搬と、現今では想像もつかない苦勞の末、母校に整備された運動場がないため、関西大学のグラウンドを借りて第1回を行うまでにこぎつけたのである」

[野尻庄蔵(大IN1)「70年史資料集」]

記念すべき復活第1戦は野球、硬式テニス、ラグビーの3種目だけという、さびしいものであったが、第2回は陸上競技と男子卓球、第3回は男子バレーボール、第4回は男子バスケットボールが加わり、年を追って参加競技もふえていく。39年第16回ではオープン種目ながら、卓球とテニスの2種目に女子チームが参加するようになった。

箕面へ移転するまでの大会は、柔・剣道や屋内での球技試合はもっぱら市立中央体育館、陸上競技は長居競技場、テニス・サッカーは靱公園、ラグビーは花園ラグビー場、野球は森の宮球場や大阪球場で行われてきたが、箕面移転後は一部(陸上競技・野球など)を除き、学内で開催できるようになった。

東外戦の詳細については、各クラブ史に譲り、ここでは最近の東外戦成績のみにとどめる。

第43回大会は本学が当番校になり、平成3年10月16、17日両日、両大学約800名の選手、応援団が参加して開催された。あいにくの雨で野球と庭球は中止されたが、晴雨不問のサッカー、ラグビーや体育館使用の17競技が行われ、本学は16勝1敗という成績で圧勝した。

#### <リレーカーニバル>

『学生部広報』第23号(昭和46年9月20日)には「第14回リレーカーニバルは7月1日

(木)、長居陸上競技場で延べ600名が集まって行われ、小雨あがりのグラウンドにもかかわらず、対抗種目およびオープン種目に分かれて競技した。対抗種目ではインド・パキスタン語学科が総合優勝したとあり、種目別の記録が載っている。

対抗種目は100<sup>円</sup>競走、200<sup>円</sup>競走、1500<sup>円</sup>競走、リレーは400<sup>円</sup>、500<sup>円</sup>、800<sup>円</sup>、1000<sup>円</sup>、1600<sup>円</sup>の5種目、フィールドでは走高跳、砲丸投、このほかオープン種目として男子は100<sup>円</sup>、走高跳、走幅跳の3種目、女子は100<sup>円</sup>と走幅跳の2種目があった。

開催日時は6月末か7月初め、その日の授業は臨時休講となり、場所は最初の中百舌鳥陸上競技場、のち服部緑地公園であったが、40年からは前年完成した長居陸上競技場になった。

リレーカーニバルは高槻時代のオリンピック祭を引き継いだもので、33年から始まったが、このリレーカーニバルも54年を最後に閉幕、箕面移転後は全学駅伝大会にバトンタッチされる。

#### 〈全学駅伝大会〉

箕面移転を記念して54年から始まり、学生課と体育会の共催(はじめ体育会主催)で、12月初めの土曜日午後、体育系サークルを中心に開かれる。コースは男子の場合、B棟前をスタートして、山のロー-中村-あんらく橋-間谷住宅-B棟前帰着、女子はB棟前-山のロー-間谷住宅-B棟前までを各4人で走る。総合優勝の男子チームには学長杯、女子チームには学生部長杯が授与され、区間記録賞のほか、パフォーマンスがすぐれたものに特別賞がある。

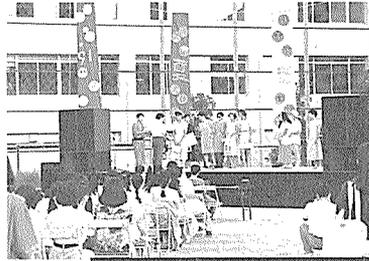
平成3年12月7日の第13回大会は、男子39団体156名、女子24団体96名、総勢252選手が参加、男女とも陸上競技部が総合優勝、タイムは男子が48分56秒、女子は49分39秒で、ともに大会新記録であった。

#### 〈近畿地区国立大学体育大会〉

近畿地区の14国立大学(別表)の間で、課外活動の健全な発達と相互の親睦を図るため毎年開催されている総合体育大会で、5月のラグビーを皮切りに、ほとんどの種目は8月下旬に集中して開催される。記録によると、本学は昭和39年8月第2回大会から参加、15種目のうち11種目に出場、庭球(女子)3位、柔道4位の成績をあげた。大会を主催、運営する当番校は持ちまわり制となっており、47年度は本学が当番校に当たっていたが、その年は本学創立50周年記念事業が予定されていること、さらに学舎の移転問題を理由に、当番校を辞退、代わりに51年度に引受けることになった。51年度第14回大会につづき、59年度第22回大会も当番校として開催、第14回大会は、花園テニスコートでの庭球以外は、会場を本学以外の施設に頼らざるをえない条件下での開催であったが、ラグビーが3位入賞を果たしている。



合同寮祭



夏まつり



平成3年度の第29回大会は、17種目のうち15種目に、本学男女300人が参加、柔道2位、水泳(女子)と軟式庭球(女子)が3位、バスケットボール(女子)4位と入賞し、成績も徐々に向上している。

滋賀大・滋賀教育大・京都大・京都教育大・京都工芸繊維大・  
大阪大・大阪外国語大・大阪教育大・神戸大・神戸商船大・  
兵庫教育大・奈良教育大・奈良女子大・和歌山大

#### <合同寮祭>

箕面移転を機に生まれた行事に合同寮祭、夏祭りがある。

合同寮祭は寮生相互の交流および親睦を深め、寮生活をさらに楽しく実りあるものにするため、55年から始められた。毎年12月初め、男子寮、女子寮が合同して、寮周辺で映画会、もちつき大会、バザー、留学生との集い、模擬店などを二日間にわたって開いている。

#### <夏祭り>

56年から始まった夏祭りは学生諸団体が、夏休みに入る前の最後の土曜日(7月上旬)を利用して、大学会館前に設けられたステージで、軽音楽部コンサートや女装大会、ビール早飲み大会、ゆかた美人コンテストなど多彩なイベントを開催、夕方からは盆踊り大会もあって、周辺の住民も家族連れで参加、大学と地域を結ぶ行事として定着してきている。

#### <課外活動団体>

『大学便覧』昭和33年版によると、課外活動のため「学生が団体を結成しようとするときは、所定の様式により、遅滞なく学生課を経て学長へ願出、許可をうけなければならない

い」とある。こうした団体が、当時どれだけあったか、正確には分からない。

昭和46年当時、体育会加盟サークルは、硬式野球部など22団体、文化部連絡協議会加盟サークルは外大アンサンブルなど16団体あったが、平成3年4月には前者が合気道部など40、後者が管弦楽団など30とふえており、当然のことながら女子の体育系サークルの増加が目につく。

以下は各サークル・クラブの個別史である。体育系、文連協すべてのサークル・クラブを網羅出来なかったのは残念であったが、多くの顧問教官、OB、また現役学生から原稿をお寄せ頂いた。いずれも大変熱のこもった力作で、ある運動部の原稿など主だった試合の出場選手全員の名前まで記されていた。ご協力頂いた皆さんのお陰でこの章の内容が生き生きと血の通ったものになった。この場を借りて心からお礼を申し上げたい。ただ、この年史には過去七十年間の大学の主な出来事全てを盛り込まねばならず、この章に与えられているスペースにも自ずときびしい制約があるので、あまりにも細かい部分や年史の内容として適さない記述は編集委員会の判断で省かせて頂いた。上記の事情をご賢察の上、ご了承頂きたい。

## サークル・クラブ史

### 1. 合気道部

大阪外大合気道部は昭和38年秋、当時ESS部員であった長岡慧(大E14)と土尾克己(大IN14)が中心となり同好会として発足した。そのころ曾根崎警察、福島体育館で指導にあたっていた小林裕和師範のもとで稽古をしていた土尾が長岡を誘ったのが始まりである。のちに師範に外大に合気道部をつくることをすすめられて、部長に当時英語学科の大井浩二講師を迎えて初代主将に長岡が就任した。ともにESS・OB部員ということで、はじめのころはあたかもESSの体育部の様相を呈していたそうである。

指導の方は最初は小林師範自ら定期的に来られ、後に浜崎さんが師範の代役として指導された。学内での稽古は、卓球場の隣にわずかの畳を敷いて行い、柔道部と交互に使用して、週3～4回、午後3時から5時頃まで、及び昼休みに20～30分木剣振りを行っていた。昭和42年春は当時主将の島田光夫(大S17)(現姓・弘末)の郷里高知市にて新歓合宿を行った。同じく幹部の戸倉光明(大IP17)(現OB会会長)は、学生合気道連盟の議長を務め、外大合気道部と他大学との交流の面で大きな役目を果たした。

昭和42年は体育会に部昇格を申請した年であり、その際には連盟の私立大学の合気道部に応援を受けた。中でも近畿大学は体育会会長、応援団長、合気道部主将ら5、6人が外大体育会に出席し、羽織、袴の姿で和紙に書いた推薦状の巻手紙を読み上げてくれたそうである。部昇格と並行してバッジも製作し(円形に OSAKA UNIV. of Foreign Studies をあしらったもの)、小林師範にも見てもらって図案を決定したそうである。

昭和43年5月、外大合気道部コーチに吉田光一を迎える。吉田はその後20年間外大合気

道部の指導にあたることになる。

同年は部誌『和気』創刊の年でもある。編集長は有延孝(大R19)。小林師範、大井部長をはじめ、OB、現役の原稿をあつめた約30ページのもので、OBの勤務先、住所、部の沿革、過去の合宿地を載せたページもある。これによると昭和39年の夏から合宿が始まり(飯山市)以来年2回夏と春の合宿が定着していたようだ。(他には岡山大学道場、小豆島、外大道場、富山市、高知市、松江市、檜原神宮……)。

昭和44年学園紛争のころは放水のため水浸しとなった畳で、びしょ濡れで稽古を続けた。

昭和47年、合気道部部长に朝鮮語学科塚本勲助教授を迎える。主将砂裕康。

創部からおよそ10年、部は部員20人程に落ちつくわけだが昭和50年前後から女子部員がほぼ毎年入部するようになり、一つの変化が訪れる。創部以来何名か女子部員はいたが毎年コンスタントにというほどではなかった。例えば昭和48年入部の前田裕子(現姓・安藤)の頃は、2年生に女子が1名(森際克子)のみで、男子部員と伍してやっていたが夏合宿には参加させてもらえなかった。その年、女子がもう1名入部して3人になったが、幹部の意向で夏合宿に参加させてもらえず、高野山で合宿していた大阪教育大学合気道部に合流させてもらったそうである(大教大には女子部員が多数いた)。そうして、1年の春合宿にやっと男女合同が実現した。女子部員をどう扱うべきか、練習量等の配慮など当時の幹部は悩んだだろう。上八の学舎では女子更衣室もなく、男子更衣室の中の二畳ほどの物置で着替えたそうだが、後に7、8人となると立っているのがやっとの状態だったとか。今では女子部員の存在無くしては考えられない外大合気道部にもかつてはこのような時代があったのである。

昭和49年8月、石川県能登半島定林寺で合宿。一夜「試胆会」を行った際、パトロール中の警官を部員と間違え“コンニャク”を投げつけて一同大目玉を喰う。

昭和52年創部15周年記念演武会。主将熊野誠治。

昭和53年5月3日、吉田コーチ著『合気道の型と技＝その上達の秘訣を解きほぐす』出版記念解説演武会を外大道場にて行う。和歌山大学、大阪経済大学、大阪女子大学、大阪府立大学、関西大学、大阪教育大学、神戸大学、甲南大学ほか、合気道関係者出席。

昭和53年11月18日、奈良市の航空自衛隊幹部学校合気道部と交歓稽古を行う。

従来寒稽古終了後に新旧幹部交替をしてきたが、春合宿終了後幹部を交替する。

昭和54年2月14日、朝日放送TVワイドサタデー生中継「壬生ばなし新撰組」に吉田光一コーチ、熊野誠治(当時4回生)、松島勇治(同)出演、天然理心流の型及び解説を行う。

昭和54年秋、主将小林裕之。上本町より箕面へ学舎移転するが、体育館が使えず、サークルBOX3階に30畳あまりの畳を敷きつめ、廊下にはみ出しながら、翌年6月まで稽古を続ける。また移転に伴い上本町時代はお寺を利用していた寒稽古の宿泊所の確保に困った。現在は合宿所を使っているが、この頃は帝釈寺に泊まった。

また小林が2回生のころ幹部交替にあたり7人いた2回生のうち4人が学業を理由に退

部を届け出、幹部になってから新入部員3人、5回生1人、4回生3人、3回生3人、2回生4人という状況で移転を迎えたが、幹部1人が留学、2回生1人が退部するなど部の存続に危機が訪れた時期であった。

昭和55年4月19日、主将柚木二三男、西野バレエ団西野皓三師範を招き指導を受ける。部員が「次回は是非由美かおるさんをご同行下さい」と西野氏を困らせた。

同年6月21日体育会武道部でようやく道場開きを行う。11月2日には合気道部主催で他大学合気道部を招き記念演武会を行う。アトラクションとして円心流居合据物斬—中西政春六段、神道夢想流杖術—杉原巖七段、福本堅志七段の表演。

昭和56年卒業生より部旗を寄贈される。今までの部旗を道場に残し、贈られた部旗を合宿等に持っていくようになる。

昭和57年9月12日、外大合気道部創立20周年記念演武大会を箕面武道場で行う。主将太田茂典。終了後箕面駅前サンプラザ6Fホールでレセプションを行った。

昭和59年2月25日NHK・TV「夢幻・新撰組屯所」に出演依頼があり、主将野村直美、副将三瓶修弘以下8名が早朝の加茂川畔で隊士の稽古シーンに出場した。

昭和59年7月、現役部員数40名(男子19名、女子21名)に達し、従来の最高を記録した。同時に女子部員が過半数をしめるようになる。昭和60年度幹部は、男子が主将浜畑寛1名のみで女子8名と共に務めた。昭和61年2月12日付の『日刊スポーツ』「大学の武道ギャル」特集に外大合気道部が竜谷大学柔道部と並んで女子部員の活躍状況が紹介された。

昭和60年は合気道部OB会、和気会が発足。

昭和61年2月永易美佐(現姓・野村)、女子部員として最初の三段位を許可される。このころ部員の増加と同時に技術の内容も一段と向上し、参段を許可されるOBが続いた—熊野誠治、柚木二三男、野村直美。

昭和62年度25代主将小田正樹は幹部一人で創立25五周年記念演武会を行うなど(於外大道場)大変な年であった。

次年度昭和63年度26代幹部は6名とはいえ全員女子ということで初の女子主将に三好智子就任。同年4月より、吉田光一コーチに替って池田憲夫OB、コーチに就任。7月に吉田コーチ謝恩演武会と送別会を行い、塚本部長はじめ、OB、現役約70名が出席した。OB会より吉田夫妻に記念品と花束が贈られ、また所属の大阪武育会より金一封と、小林師範より感謝の辞をいただいた。この年「AIKIDOU」Tシャツ製作。

平成元年、まっ赤なジャンパーに銀色で“和気”を背中にあしらった通称和気ジャンを製作、デザインは主将山田茂徳。

平成2年はまたしても幹部3名が全員女子で、井村啓子が2人目の女子主将となる。この年は新入部員の勧誘には苦勞し、留学生の有級者の入部が目立った。

合気道は老若男女を問わない武道であることからか、他の武道系クラブにくらべて、近年の女子部員の増加は著しく、大きな変化を見せている。また女子部員が増えるようにな

り、卒業部部員のカップルの誕生が3組もある。平成4年、創立30周年を迎える。

(合気道部主将 白木 貞)

## 2. アメリカン・フットボール部

昭和50年に第二部中国語学科の岩田欣治と山田克己を中心に創部(同好会として)。メンバー不足のため試合ができず、ほとんど練習に明け暮れていた。聞くところでは第二部の授業が終わってからの練習のため電車がなくなり、岩田の車(岩田工務店のトラック)で家まで送ったとか。クラブチームとの練習試合では学外の友達や合同練習をよくやっていた大商大の応援を借りてやった。

昭和51年には中切や英語学科の北埜など第一部の学生が入部しだす。この頃、フットボールの人気はけっこう高まっており、勧誘の決まり文句は「バックとヘルメットを抱えて歩くと女の子の方から声掛けてきて、めちゃめちゃもてるで!」。この前後4、5年で入ってきたメンバーのほとんどはこれに騙された。この年より正式に体育会のクラブとして認められた。初の合宿を信州木島平の大西荘で行った。対外的にも学連での登録が認められこの年よりリーグ戦に参加した。関西学生リーグ、近畿学生リーグ4ブロックの下位のリーグであった。他のメンバー校は大教、神戸、英知、金工大であった。小規模単科大学の悲しさで部員の少なさと、第二部学生中心のため練習が夜だけ。暑さに弱くスタミナ切れのゲームばかりで、前半リードしても後半逆転されることが多く、唯一の勝利は英知大戦のみであった。

翌52年より近畿学生リーグに編成替えになったが戦績としては見るべきものが残っていない。創成期の苦労としては第一に(いつでもそうだが)人数不足である。周知のようにフットボールのゲームではフィールドに出るのは11人だが交代自由で何の制約もない。最低でもオフェンス、ディフェンスとスペシャリストのキッカーと何人かのリザーブというふうに24~5人は必要である。ところが、リーグ最初の2、3年は外大の学生だけでは11人ぴったりしかおらず部員の友達4、5人を偽って登録し、外人部隊として協力してもらった。二番目には防具や練習器具に金がすごく掛かることである。50年当時で防具だけで15万円位必要であった。大卒の初任給より高かったのである。おかげでアルバイトにスタミナのかなりの部分を費やした。

54年には箕面へ移転し、フルコートのとれるグラウンドに変わった。そこで恐ろしいことが始まった。上八では練習のダッシュもせいぜい30ヤードだったのがいきなり100ヤードたっぷり走れるのだ。練習のメニューも急にハードになった。

そのせいかどうか判らないが、55、56年と連続してリーグ優勝し入替え戦に進んだ。それぞれ商大と岡山大に負けたが私の知るかぎりでは、チームスポーツでは外大史上数少ない一部リーグ昇格のチャンスではなかったと思う。他の部にはあった東外戦とか四外戦の様な定期戦が存在しなかったことに対しては一抹の寂しさを拭い得ない。

最後になるが、フットボール部のエピソードで怪我のことを書かずに終わるわけにはいかない。記憶の範囲で大きいものだけ列記しておく。

岩田	膝のじん帯損傷ギブス1カ月	山田	肘のじん帯損傷、尾てい骨ひび
吉田	鎖骨骨折ギブス1カ月	佐々木	頸椎捻挫
中切	けんさ骨ひび、肋骨骨折	北埜	鼻骨骨折
池田	鎖骨骨折ギブス3カ月		

(大R29 中切 淳)

### 3. 洋弓部

#### 〈創部当時の思い出〉

「洋弓」という耳新しい名まえを追谷和夫君(初代主務・第2代副将・昭和40年ロシア語卒)より聞いたのは、昭和36(1961)年秋であった。当時の大阪外国語大学の運動部は、どれも同好会的集まりとしか映らず、既設の運動部に入る気にもならなかった時だけに、「洋弓」ということばの新鮮なひびきに、「よし、この変わったスポーツをやってみよう」と、神田隆文(初代主将・昭和40年中国語卒)、田中郁三(昭和40年中国語卒)両君と、合計4名で洋弓クラブが発足した(翌年6月、大学から洋弓同好会として認められた)。

しかし、発足直後、次の問題に直面した。まず、だれも洋弓について知識、素養、経験がないことである。無からの出発であるため、資金を出しあって、『洋弓の手引』という小冊子と、竹製の弓ひと張り、竹製の矢数本を買い求め、手引書を見ながら、古畳をたてかけた的に向かって、交代で弓をひいた。次に、練習場をどうやって確保するか、これが最も頭の痛い問題であった。当時の上八学舎は、幼稚園の遊び場をちょっと大きくした程度の運動場しかなく、とても洋弓をやれる場所などはなかった。

そこで、学校の屋上(当時のC1大教室の上)に勝手に古畳を持ち込み、そこを“不法占拠”して練習を始めた。当然、学校当局の目にとまるところとなった。「基本通りにやれば危くない。他校にはすでに洋弓部があり、一般に普及しはじめている」等々学生課にこんな説明をしながら、屋上の確保、維持を計った。

幸いにして、屋上練習場は学舎の片隅にあったので、日頃大勢の人の目にふれることもなく、練習中のトラブルは起こらず、“既成事実”となった。この“事実”をさらに拡大させようと、古畳の的までの距離を20メートルから最長30メートルと拡げ、ついにはその屋上全部をクラブの練習場に変えてしまった。“クラブ室”も勝手に屋上通路(屋上への階段の上)に設け、ロッカーまで校内のどこからか探し出し、“クラブ室”に運び込んだ。強引で無茶な行動をしてきたが、まともなやりかたでは、クラブとして存続できない状況にあったことも確かである。

翌昭和37(1962)年4月に入り、新入生を含め部員募集に力を入れることにした。尾崎勝(第3代主務・昭和41年インドネシア語卒)、樋口有三(第2代主務・第3代主将・昭和41年

イスパニア語卒)両君が加わった。弓具の面では、神田君が初めてヤマハ製のグラスファイバーの弓(スタンダード)を購入した。当時としては、九千円とたいへん高価であった。この新型の弓を、みんなが羨ましがって代わる代わる試射したので、「弓が弱くなる」と、神田君が嘆いたものである。

8月末、日本楽器浜松レンジにて第1回の合宿を行った。参加者は総勢6名。弓は全員がヤマハ・スタンダードであったが、矢については、竹ありグラスファイバーありアルミありと、ばらばらであった。初めて見る本格的なレンジ(射場)と的の巻き藁に、全員感激した。50メートル、70メートル、90メートルを試射したのも、この時が最初であった。ほとんどの者が指に血豆をつくり、ヨードチンキで治療するたびに悲鳴をあげた。

夏合宿を経て、なんとか弓具だけは他校なみになりつつあったが、決定的な違いは他校のようなまともなレンジがないこと、実力と実績のないことであった。関西学連、大阪外大体育会にも入り、部員をふやさねばならないーといったふうに、問題が山積していた。昭和38(1963)年3月、ようやく関西学生アーチェリー連盟(略称：関西学連)に加盟できた。当時の関西学連は、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、大阪府立大学、甲南大学、関西大学(以上一部)、大阪工業大学、桃山学院大学(以上二部)の8校からなっていた。そのころすでに神戸大学に洋弓部はあったが、学連には未加盟であった。大阪外大の体育会に「洋弓部」として正式に認めってもらうには、どうしても実績が必要であった。実績において、学連加盟校には全く歯がたたなかったが、神戸大との練習試合で幸いにして勝つことができた。“国立大学ナンバー・ワン”を学内にPRし、これを足がかりに、翌昭和40(1965)年1月、大阪外国語大学体育総部(のちの体育会)にて、「洋弓部」として正式に承認された。やっと陽の当たる場所に出たわけで、洋弓部部長に片岡孝先生(当時大阪外国語大学助教授・ロシア語学)を迎えた。

これよりまえ、入部した赤城一字君(昭和40年ロシア語卒)からクラブに巻き藁の寄贈があり、設備も充実してきた。部員自ら廃材を利用して屋上練習場(レンジ)を作り、全員でその整備と保全に努め、練習に励んだ。

(小林 靖彦 第2代主将・昭和40年ロシア語学科卒)

#### <最近の活動>

大阪外国語大学創立70周年にあたる1992年は、洋弓部にとっても、その萌芽期の洋弓同好会の誕生から数えれば、ちょうど30年という記念すべき年であり、OB、OGの数もまもなく150名に達しようとしている(1961年秋、同好の先輩の尽力によって、洋弓クラブが発足していたらしいが、洋弓部の沿革では、大学に同好会として認められ、新入生を対象に部員募集を開始した翌1962年を部創立の年としている)。

洋弓部(日常、我々は「アーチェリー部」と呼んでいる)は、現在、男子部員10名、女子部員11名の合計21名。技術的な面で、長年にわたって山中修コーチ(友創クラブ)に御指導

いただいている。

男子について言えば、外大全体における男子学生の漸減に伴い、男子部員の確保が困難であるという事情がある。そういった不安のなかで、1991年は男子部員全体の半分にあたる5人もの新入生が入部し、リーグ戦に参加できなくなるという非常事態は避けることができた。昨年度のリーグ戦には、男子8人、まさに一丸となって臨んだが、リーグ降格という不本意な結果に終わってしまった。

女子に関しては、昨年度の国公立大学戦において団体優勝を果たし、昨年度のリーグ戦でも、宿敵同志社大学には惜敗したものの、一部ブロック2位という好成績を収めた。

次に、洋弓部の年間の活動について述べてみたい。まず、年間行事の中心とも言える夏合宿は、例年通り、今年も白馬(長野県)で実施した。1年生にとって嬉しいのは「初射ち」である。いつから始まったのかは知らないが、先輩からのメッセージでいっぱい初射ちの的(初射ちの的の上級生が寄せ書きをする)というのは、かけがえのない一生の思い出の品となるようである。

夏合宿が終わると、いよいよ関西学生アーチェリー個人選手権大会(通称「関個」)が行われる。今年は女子2名が決勝に進むことができた。

10月にはいると、アーチェリー・シーズン到来で、日曜日は全部試合で埋まってしまう。そのうち、主要な試合は、なんとといっても、新人戦と三外大定期戦であろう。新人戦は、他校の新人のレベルが高く、入賞するのは困難だが、これが終わるとやっと一人前のアーチャーになる。三外大定期戦(大阪外国語大学・京都外国語大学・関西外国語大学合同の個人戦)は、昨年度は男子、女子ともに大阪外大が1位、2位を独占するという好成績のうちに終わった。

そして、年末年始、間谷の厳寒をくぐりぬけ、春合宿へとつながる。春合宿先の佐伯国際アーチェリーランド(広島県)では、フィールド・アーチェリーができて、アーチェリーの魅力がまた深まる機会でもある。

春合宿がすむといよいよリーグ戦で、その年度の部活動の総仕上げということになる。

(清水 弘和 平成3(1991)年度 第29代主務・中国語学科3年)

#### 4. バドミントン部

我が大阪外大バドミントン部は、学校創立から在ったわけではないのだが、それでも創部以来、30数年がたっている。当時の記録によると、昭和33年にこのバドミントン部は産声をあげた。バドミントン部創立を発起した当時の3年生数名は、何か素人からでも容易に始められ、かつ健康づくりに適当なものをと考え、バドミントンというスポーツに目をつけたのであった。

また、丁度時機を同じくして、上記数名とは別の所でも、バドミントン部創立を、という案があり、結局両案合併し、新部創立の運びとなったわけである。当時のメンバー数は、

30数名にもものぼったと言う。

練習は、1名を除いて全員初心者ということもあり、アベノ体育館で大阪市大が指導してくれるということになったが、ラケットすら持っておらず、体育教官に頼んで、実習用のラケットを用いたという。アベノ体育館が主な練習場であったが、その他に名門実業団である電電公社(現NTT)の体育館で、大阪樟蔭女子大と合同練習もした。このような記録を見ると、現在の方が環境的には恵まれているとは分かりながらも、多少うらやましさを感じる。

当時、学内体育祭でバドミントンが行われ、審判を依頼されたものの、部員にルールを全部理解している者が少なく、適当に済ませたこと、また、我が大阪外大から関西バドミントン大学連盟委員並びに大阪府バドミントン協会理事を送っているにもかかわらず、当時の主力メンバーも対外戦出場の経験がなかったことなど、30数年の部の歴史には多くのエピソードも残っている。

創立から、30数年たった現在、男子については12人(4年-2人、3年-3人、2年-6人、1年-1人)で構成されている。半数以上が経験者であり、少人数ではあるが、メンバー的には問題はない。また、12名中5名が二部生であるということも我が部の特徴かと思われる。

現在、全関西6部リーグ中、6部に位置している。毎年2度、春と秋にリーグ戦があり、ここ数年は、6部のブロック優勝の常連校となっているのだが、6部リーグ順位決定戦でのクジ運の悪さなどもあり、一度も5部昇格をかけての入れ替え戦には出場出来ずじまいである。計5回も、本当に5部まであと一步、という昇格に手が届きそうなところまで行きながら、その度に涙を飲んでいる。1991年度の秋リーグでは10月中旬に対：兵庫教育大学戦で再びブロック優勝を決め、10月下旬の順位決定戦にのぞんだ。出場4校中上位2位に入れば入れ替え戦出場なのであるが、対：追手門学院大学戦2-4で、残念ながら再び涙を飲む結果となってしまった。

毎年、恒例の東外戦は、過去43大会全てには参加していないが、20回程で2敗しかしていない。例年、我が部は留年者が多く、4年間と制限のついたリーグには出場出来ない強力な影のレギュラーが東外戦には出場出来たためかもしれないが、とにかく、大阪と東京には実力の差がある。

しかし、今年は影のレギュラーにあたる先輩が居らず、なかなか伯仲した試合となった。連敗中の東京は、春リーグも秋リーグも二の次にして、打倒大阪に燃えて来た。結果は5-4と、かなりせった試合ではあったが、今年も大阪が勝った。

さて、一方、女子の方は、現在部員数15人(4年-3人、3年-4人、2年-4人、1年-4人)と、男子同様、少人数だが、その利点を生かして、他クラブ以上にまとまっている。部員のほとんどが初心者ながら、男子以上の活躍をしている。関西リーグ(現6部制)で、最高2部まで行ったという現状では信じられない程の、すばらしい歴史を持っているが、

最近においても、関西学生選手権新人戦シングルスBの部において、優勝者が出るなど、昔同様の隆盛を極める、とまでは行かなくても、かなりの活躍を期待できる。

1991年の秋リーグにおいては、5部から4部への昇格を決めた。10月下旬に行われた順位決定戦では、優勝し、入れ替え戦に臨んだ。今回のリーグで最後となる4回生の底力を原動力として、奈良教育大学を3-2と苦しみながらも勝利を収めたあの感動は、誰も忘れることは出来ない。

また、東外戦における女子の戦績は、過去全16戦中大阪側の12勝4敗と、男子同様、本学クラブの中でもきわめて優秀である。しかし、結果的には勝利であっても、内容的には、ここ数年3-2でせり勝つことが多く、実力的にはあまり差がないのかもしれない。それでも例年、勝つというのは、やはり大阪特有のしつこさ、よく言えば粘りゆえなのだろう。

(石井 愛朗)

## 5. 硬式野球部

大正11年の入学生の中から印度語部の加藤利忠が創立委員に選ばれたとあるから(『扉』26号)、野球部は外語創立とほぼ同時に誕生したことになる。初代野球部長として印度語部小川正助教授の名が見えるが、僅か1年余りで辞職したため、公式には英語の吉本正秋教授が初代野球部長となっている。第1回生だけで10名以上部員が集まって練習を始め、大正11年11月19日には早くも大阪高等学校(後の阪大教養部、以下大高と略称)と第1回戦を行い、13A-9で快勝した。この大高とは以後ずっと昭和15年まで、多い時には春季・秋季と二度も定期戦を行い、好勝負をしている。

翌12年には赤座(F2)、宮城(IP2)、吉田(D2)、13年には矢嶋(C3)(後の大西)、14年には土江(臨E3)、昭和2年には大谷(E5)等続々名手が入り活躍した。大高との定期戦の他大阪高工(現阪大工学部)、大阪医大(現阪大医学部)、神戸高商(現神戸大)等と主に塚塚球場で試合を行っているが、この時代で一番注目に値するのは矢張り大正14年10月31日甲子園球場での米国女子職業野球チームとの対戦であろう。女子プロといってもバッテリーは男で、元はプロで活躍した巨漢だったという。投手ハミルトンの剛速球と懸河のドロップに悩まされ、腰を落としたままスナップで矢の様な返球をする捕手エーンスマスに圧倒され乍ら、それでも外語は着実に得点を重ね6A-3で快勝している。なおこの試合の時、中目校長が挨拶の前に米チームに対して、「フランス語が出来るか」とたずね、ノーと言わせておいて、「それでは貴国語でやりましょう」と国際人の真骨頂を発揮しながら演説を始めたことは有名である。

主に『咲耶』1号(大11・12・23)から20号(昭16・2・22)に依拠しつつ、外語野球部初期の記録から特徴的なものをあげてみると、一つは応援が盛んだったことであろう。「大高との定期戦。紅白の旗合戦、大八車に大太鼓をつんで上八から北畠まで歩いて行った応援団の熱」とある。今日では全く想像がつかない。いま一つはグラウンドの悩みである。こ



米国女子野球チーム。但しバッテリーは男子プロ。左から3人目が投手ハミルトン、5人目は捕手エーンスマス（大正14年10月31日甲子園球場）

これは野球部創設当初から昭和54年の移転まで続いた。上八学舎の南側のグラウンドは狭く、しかもまわりを民家がり取り囲んでいた為、ボールが家の中へ飛び込んで障子を破ったり、窓ガラスをこわしたり、屋根瓦を割ったりした。その都度近所から学校へきつい抗議が持ち込まれ、バッティングは禁止となり、初期には美章園グラウンドへ出かけて行かねばならなかった。その後の花園グラウンドも荒れて、雑草がひどく、田圃に落ちたボール拾いも大変であったが、自分達の学校のグラウンドがあった分だけ恵まれていたと言いきかもしれない。とに角グラウンドの問題は昭和54年の移転によって大幅に改善された。外大野球部のもう1つの特徴として部員確保の悩みがある。昭和2年矢島、土江、富田等を送り出し、その補充に頭を痛めて以来、野球部は幾度となくチーム編成の危機にさらされてきた。しかし、規模の小さな学校ゆえに必然的に起こるこの問題をどんな状況に陥っても何とか克服して今日まで野球部の灯を消さずに来たことは野球部として誇ってよいであろう。

昭和2年春に大阪高工、大阪医大、神戸高商、大阪高商（現大市大）、関西学院、大阪外語より成る六校野球連盟が生まれたとあり（『咲耶』7号）、昭和3年春には神戸高工（現神大工学部）、和歌山高商（現和歌山大）、大阪工大、大阪商大（現大市大）と関西学生野球連盟戦を行っている（『咲耶』9号）。『咲耶』8号が欠けているので事情がよく分からないが、恐らくこの時期は各学校の野球部をまとめて連盟を作ろうという試みがなされていたのであろう。

東外戦の話もこの頃から出てくる。昭和2年6月に東京外国語学校と毎年多種目にわたって行っている対抗競技に野球試合を加えようとの交渉がなされ、この年は番外として7月11日神宮球場で挙行、大阪が20-4で快勝している。3年 11-1、4年 15-10、5年 8-5と無敗であった。以後東外戦の話は『咲耶』16号（昭12・2・20）まで出て来ない。またそこにも「昭和11年に対東京外語定期戦の開始について既に日割迄確定して、行く準備を成せしも、事情止むを得ず来年に延期することになりしは両校の為に惜しむべきことであった」となっており、翌年の『咲耶』17号には東外戦の記載がない。戦前の東外戦は結局定期的には行われていなかったのだと考えざるを得ない。長岡十四雄（D19）も『OB会報』

22号で「3年間(昭和15~17年)東外戦はなかったし、先輩からも聞いたことはない。但し陸上競技部などにはあった様だ」と述べている。

昭和11年には、後年、読売巨人軍で活躍する旭川中学のスタルヒンと、北海道で1、2を争った野付牛中学(現北見北斗高校)の平手嘉一(F15)や今宮中学から安達一郎(M15)が入部し、関西学生野球秋季リーグで神戸高商と同率首位となり、明石公園球場で優勝決定戦を行った。結果は6-2で敗れたが平沢・森脇両先生も応援にかけつけ、ナインをいたく感動させた。翌12年秋季リーグ戦でも神戸高商と同率首位にまで行ったが、昭和13年には平手肩を痛め、安達また病み、1勝4敗でリーグ5位に落ちた。なお後年B級戦犯とされ、巢鴨拘置所の絞首台に消えた悲運のエース平手については『OB会報』20号、ならびに戦後発行の『咲耶』7号に安達の友情あふれる文がある。平手は昭和59年の創立記念日に母校の烈士之碑に合祀された。

以後も野球部は昭和14年、15年と藤原(I N18)、吉田(M18)、長岡(D19)等有力選手を擁してリーグ戦に、全国実業専門学校野球大会に、また大高との定期戦に奮戦を続けるが、昭和16年2月には従来の校友会を解散して、新たに報国団が結成され、勤労働員の強化によって、鍛錬部に含まれていた野球・庭球などの球技も昭和17年春季リーグ戦をもって事実上できなくなってしまった。

戦後の大学野球はなかなかリーグが結成出来ず、東外戦の方が先に始まった。東外戦は昭和24年第1回として関西大学グラウンドで実現、翌年は東外大グラウンドでと順調に軌道に乗っていった。勿論、この時代のこと、食糧として米1升持参、夜行急行1台増結の東京行である。当初は大阪が優勢で昭和32年の第9回大会まで9連勝している。

昭和26年秋に佐伯達夫の唱導で近畿大学野球連盟が誕生、一部リーグ：近大・大歯大・阪大・和太・神商大・大市大、二部リーグ：大工大・大経大・学大(現大阪教育大)・神外大・浪大(現大府大)・大外大の陣容となった。以後今日までこの中から神外大、近大、大経大が抜け、大薬大、神大、高野山大、奈良教育大、阪南大、奈良産大、奈良大が加わって合計16チームになっている。従って昭和44年以来三部制をとり、一部6、二部6、三部4チームとなった。春秋のシーズンを終るごとに上部リーグ最下位チームと下部リーグの優勝チームの間で入替戦を行う。昭和26年から近畿リーグに所属している大学で一部リーグに昇格したことがないのは残念乍ら大外大だけである。平成3年秋季のリーグ構成は、一部が奈良産大、大阪教育大、大工大、阪南大、大市大、大府大、二部が和歌山大、奈良教育大、阪大、神大、高野山大、奈良大、三部が神商大、大外大、大薬大、大歯大となっている。

外大にも幾度かチャンスがあった。特に惜しまれるのは昭和38年春から翌39年春と二部リーグで三期連続優勝した時と昭和56年春と昭和57年春から58年春にかけて三期連続二部リーグ優勝をしたときである。

昭和38年春からの丸山(大F12)・橋本(大D13)両主将の時代は、38年春の3年生が10名[橋本・岡澤(大E13)・松下(大IN13)・丹羽(大C13)・田中(大F13)・上野(大S13)・安田(大C13)・中野(大IP13)・西川(大P13)・樹下(大C13)]もあり、殆ど負けを知らないチームだった。一部リーグ最下位で入替戦に出てきた市大・阪大など実力では明らかに勝っていたが、あとひと息で涙をのんだ。特に最後となった第3回目の入替戦で阪大と対戦した時、1勝1敗のあとの第3戦で8回裏まで2：1とリードしながら、2アウトのあとのレフトフライを野手がメガネを落としたため捕れず、ホームランとしてしまって3：2で敗れた試合は今も彼等の間で語り草になっている。

昭和56年春からの森川(大TV31)・松雄(好)(大IP32)・竹内(大R32)主将の時代も強かった。主将たち以外にも増本(大IN30)、千速(大F30)、濱崎(大IIF16)、林兄弟(大S34)(大A34)、西尾全司(大TV34)、西尾圭司(大IIE17)、岡村(大IIF17)等秀れた選手がどんどん集まった。この時も慢性的な選手不足がウソの様な時代だった。近畿地区国立大学体育大会(近国体)では1回戦で敗退することが多いのだが、この頃にはいつも2つは楽に勝ち進んだ。それでも入替戦だけは4回もあったのに1勝8敗、最後の昭和58年春には神戸商大に1つ勝てただけであった。不思議である。

この昭和58年春を境に急速な転落が始まる。まず昭和61年春には史上かつてないリーグ戦出場停止処分を受けた。外大の連盟委員の不手際に対する当時の理事長の処分が厳し過ぎるくらいがあったとはいえ、部長の管理が行き届かなかった点、また幾度も連盟本部まで出かけ乍ら、事態を収拾出来なかった点、時の野球部長には悔いが残る。この春二部リーグ最下位扱いで出場した入替戦では辛うじて踏みとどまったが、秋には三部に落ちた。以後5年にわたって三部低迷がつづき、平成3年秋に漸く二部リーグに復帰した。

東外戦は昭和24年から32年まで9連勝のあと、仲良く勝ったり負けたりしていたが、昭和49年の第26回から53年の第30回まで大阪が5連敗したことがある。しかし、その後平成2年にいたる迄の12年間はまた大阪の10勝1敗1分けで、通算成績は大阪が28勝13敗1分けと圧倒している。

野球部の長い歴史を振り返ると、例えば当時の東外大小沢野球部長を長嘆させたスラッガー岡映宏(大IN4)、5割をマークして近畿二部リーグのリーディング・ヒッターに輝いた亀倉真一(大E16)、2日間で3試合に完投した剛腕濱崎健太(大IIF16)をはじめ現役選手として大活躍した人、卒業後目覚ましい発展をした人、また特記すべき珍しい経歴の持主等々人材にこと欠かない。もっと個々人にも触れたかったが、際限がなくなるし、またそこにある種の不公平も生じ得るので、あくまで全体の流れを追うことを心がけた。最後に野球部の活動をささえて来た役職者や組織について述べる。

野球部部長については、冒頭に述べた様な事情はあるが、公式には初代は吉本正秋、あと鴛渕一、白井正、吉野美弥雄、精松源一と続き、ここで吉野美弥雄が再登場、次いで内藤春三、中西龍雄、ここでまた精松源一が復活、昭和39～42年は富田竹二郎、昭和43～48

年は原利一、昭和50年から平成2年は布施俊夫、そして3年からは山本進が第13代の部長をつとめている。

次にOB会であるが、このOB会抜きに外大野球部は語れぬ程その存在は大きい。『扉』6号で吉野美弥雄は「野球部OB会は、昭和36年7月29日正式に発足した。会長には加藤利忠(I P 1)、副会長宮城郁太郎(I P 2)、顧問赤座弥六郎(F 2)、幹事長森本信一(I P 3)、支部長富田幸左衛門(R 3)の諸氏の他に各回ごとに役員幹事1、2名が推薦され、会員151名、会の運営は大西可美(C 3)(従来からの監督、旧姓矢島、往時の名キャッチャー)が新たにOB会会長代理に推され、現役軍を掌握監督し、併せてOB会の庶務会計事務一切を担当することになった」と述べている。大西はこの広汎煩雑な任務をもの見事に文字通り全て実行してみせたのである。しかも『OB会報』22号で高井洋一(大 I N 1)が述べている様に、この作業は実は既に昭和26年から始まっており、昭和62年に亡くなるまで36年に及んだ。絶えずOB会員に情報を流し、先輩、後輩、同期のチームメート等の連絡をはかり、頻繁に会員名簿を作り変え、元部員の遺族にまでやさしく声をかけ、会合を設定し、会費の徴収につとめ、現役部員を物心両面で支援しつつ、また一方できびしく躰け、叱咤激励した。この大西会長の、ご本人のみならず、一家をあげての骨身を惜しまぬ努力によって始めてOB会は正しく組織され、維持され、円滑に運営されてきたのである。大西会長の清廉で、献身的な貢献に今も多くの人が心から感謝している。

しかし、その大西会長も昭和50年代中頃から徐々に体調衰え、膨大な時間と労力を要する業務を独りではこなし切れなくなった。それを昭和58年始めから62年春まで助けたのが吉田疇(C 19)である。副会長としてOB会を取りしきり、立派な『OB会報』を出しつつ、よく試合にもかけつけて選手を激励し、その気さくで、こだわらぬ性格の故に現役選手・マネージャーにも親しまれ、慕われた。

昭和62年春には大西会長の病状悪化し、また吉田副会長も東京転居となったため、3月21日の幹事会で第2代OB会長の選挙を行い、岡本勝(大 S 2)を選出した。専門学校27回に対して、大学はこの時点で既に35回の卒業生を出しており、これからは大卒がどんどん増えて行くのであるから、専門学校世代に近い大卒から会長を選んだのは当を得た人選であった。この間も大西の病勢はますます募り、6月9日には遂に帰らぬ人となった。しかし、40年近く野球部を支え続けて来た一代の熱血漢大西は、後任にこの上なき人材を得て、心やすらかに最期を迎え得たのであった。おだやかで、しかも太っ腹な新会長は多忙の身であり乍らよく試合にも出かけ、選手・マネージャー達の信頼は厚い。立派な新会長のもとでOB会は安泰である。これ迄の野球部に籍者総数が女子マネージャーを含めて約280名、物故者約40名を差引くとOB会会員は約240名ということになる。

戦前のチームでは監督はその時のチームの古参選手がなっていた。戦後は初代は大西可美が、昭和38年から57年までは北野高校の名監督清水治一(A 25)が、また平成2年以降は現役の高校野球監督森川栄一(大 T V 31)が監督を務めている。勿論私立大学、あるいは高

校野球の監督の様に一つのはっきりした役職でなく、全く無報酬の奉仕活動であるから、試合、練習にあまり頻繁に参加を求めることも出来ないし、またそんなことができる程暇な人々でもない。従って監督には可能な時に試合や練習に来てもらって、集中的に指導を受け、その他は主将が監督の任務を行っている。

外大野球部に女子マネージャー井上尚子(現姓横田)が始めて登場したのは昭和53年のことだった。当時すでに各運動部で女子マネは流行になっていたが、特に硬派的色彩の濃いOB会を背景に持つ野球部で女子マネが受け入れられるか、定着するか、当初は心配であった。果して東京の古いOBから難しい注文が出て涙する様なこともあったが、皆の理解と協力で乗り切り、次々に明るく、心やさしい、しかも大変しっかりした女子マネージャーが続いて、今では野球部になくてはならない存在になっている。特に大西前会長にとっては、男ばかりの野球部における彼女達の存在は「ぎょうさん孫娘ができた」ような心情を抱かせるものであり、彼女たちも、この野球部最大の功労者に細やかな心遣いを見せていた。

最近の外大野球部のあり方を整理してみると、二部リーグで優勝し、入替戦に出られるのが良い状態、二部リーグ内にとどまっているのが普通の状態、三部リーグにいる時が良くない状態ということになる。良くない状態は漸く抜け出したが、一日も早く普通の状態から良い状態へ、更にはかつて誰もが経験しなかった最良の状態、すなわち一部昇格へとつき進んでもらいたいものである。

(布施 俊夫)

## 6. 陸上競技部

本学の陸上競技部は、大阪外国語学校が開校した1922(大正11)年5月に創設された校友会の陸上運動部としてスタートした。OGAC会員名簿(1990年4月)には、1926(大正15)年卒業者の名前がある。その後、1991(平成3)年までの会員は290余名にもなり、すでに鬼籍に入られた人は51名を数える。

まず、陸上競技部初頭の偉業について「大会のあゆみー定期競技大会30周年迎えてー」から羅列してみた。

……1924(大正13)年の秋だったと思いますが、東京へ(ガタガタ汽車)行って、当時は竹橋の辺りにあった東京外語の飯郷好五郎さんを訪ねました。大阪外語にとっては創設間もない頃でしたので、兄貴分の東京外語に対して学生の立場から、精一杯お引き立てを願う気持ちで、定期的に対抗競技を行うことを提議しました。幸いに飯郷さんの全面的な賛成を得て、翌1925(大正14)年毎年1回交互に主催することになりました……【金子二郎、中国語大正15年卒：元学長、体育会会長、陸上競技部長：東外戦によせて】

……1927(昭和2)年に東京外語に入学した時、東西外語の陸上競技対抗試合は、第2回目か3回目だったのであろう(正確には第3回目)。東京方の代表飯郷好五郎氏が大阪の西田

虎男氏(ドイツ語昭和2年卒：金子二郎主務も同席)などと交渉して開始されたと聞く。当時、大阪外語の陸上競技は関西の雄で、中でもスペイン語の仲川武雄氏(昭和3年卒)は、全日本学生陸上競技の400メートルハードルの記録保持者であった。……私が東京の学長になったのと前後して大阪の学長に金子二郎氏がなられた。……当時は公認陸上競技場なども少なく、東京大会は明治神宮の外苑競技場、大阪は築港のグラウンド(大阪市立運動場)という当時日本一の競技場で行われた。開始以来、昭和6年(正確には昭和3年)までは東京の負け続きであった。……二人ともどちらかといえばトラック・フィールドの雄というよりもマネジャーであった……【小川芳男、元東京外語学長：外大戦の思い出】

……そもそも日本のただ二つの東西外国語学校で、一つの運動部の対抗戦を始めたらと話が持ち上がったのは、1924(大正13)年の頃だと思う。それが、いよいよ具体化して陸上部と剣道、柔道(ラグビーを含む4種目)など2、3の部の対抗戦が決まり、勇躍東征のガタガタ汽車に乗り込んだのが1925(大正14)年の秋でした。

当時の大阪外語陸上部は、倉橋敏夫(ロシア語昭和2年卒)、仲川武雄(イスパニア語昭和3年卒)の日本陸上界の代表ともいえる二斗を擁し、清和隆一主将(中国語大正15年卒)、金子二郎主務の下、部員約20名烈烈たる闘志を秘めて、東京に10点以上を取らずなど、当るべかざる勢いで、会場の学習院トラックに臨んだ……第1回以来3、4回は、大阪の勝利(4連勝)が続きましたが、その後東京方の発奮により(4連敗後)、遠征チームが勝つという不思議なジンクスが生まれ、その成績が暫く続いた……【安田英夫、中国語大正15年卒：若い日の思い出】

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
西暦	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1933	1934	1935	1936	1937	1939	1940
元号	大14	大15 昭1	昭2	昭3	昭4	昭5	昭8	昭9	昭10	昭11	昭12	昭14	昭15
大阪	44	○	47.5	41.5	23.8	24.6	11	19.5	31	23.5	38	26.5	36.5
東京	21	×	21.5	27.5	45.2	32.4	46	37.5	26	33.5	19	30.5	20.5

通算成績：大阪7－東京6

……発足当時の大阪外語陸上競技部は非常に強力で、東京側は歯がたらず4年間負け続けた。……対抗競技は主催校と交替で行っていたのが、大阪遠征ともなればその費用も大変なので、……教官からも寄付を貰っていた。……昭和15年までは大体順調に行われ、4連敗後は4連勝、その後は敗勝敗勝の繰り返しで合計6勝7敗(大阪方は7勝6敗)である。昭和16年は大阪で行われる予定で、この年は勝つ番だと一同懸命に練習していたが、出発直前に対抗競技禁止命令がでた(太平洋戦争開戦、全国的競技会の中止)。選手たちの無念の状、今も目に浮かぶ。

両校にとって悩みの種は運動場で、開催の場所選びには大変苦労した。東京では上井草、芝公園、日吉慶大グラウンド、大阪では甲子園の競技場、大阪市立運動場が使われた。甲

子園は500メートル……終戦後間もなく、石神井仮校舎時代に体育各部が発足した。陸上競技部としては昭和22年に大阪と定期戦の復活の交渉をはじめた。だがまだまだ物資不足の時代である。競技場も正式のものを借りる力はなく、草ぼうぼうの滝野川グラウンドを全校生徒の手を借りて整地しようという意気だけは盛んな計画だったが、この年は実現せず、その中に全種目同時開催の案が出されたので陸上競技部もこれに参加した。第1回大会に参加できなかったのは残念だが、当時主催校としての大阪が競技場を確保出来なかったからで……【土井久弥、元東外大陸上競技部長：外国語学校の対抗戦】

……復活大会(1949年)の話が大阪側から出たと思います。金子二郎先生(陸上競技部)、赤阪力先生(ラグビー部)、田中四郎先生(相撲部)方と色々話し合いが進められ、新制大学発足と同時に開催すべきだときまり、……大阪が当番を受け持つ……【原利一、元保健体育教官、バレーボール部長、野球部長：復活大会の思い出】

……陸上競技部では、1976(昭和51)年に東京・大阪両外大陸上競技部対抗50周年を記念して合同懇親会が開かれ、それ以後毎年開催されています。20代、30代……70代と各時代の選手が和気あいあいと昔話に花を咲かせるなど、人間関係が続いている現実を目の前にして、大外大陸上部で競技できた喜びと誇りをひしひしと感じた……【木村博保、英語昭和52年卒、現陸上競技部監督：定期戦は共有の歴史と財産である】

1925(大正14年)年、東外戦の第1回大会から数えると戦時の中断を除いても、今年(平成3年)で56回目。次いで大阪工業大学との定期戦が1953(昭和28年)年以来39回目。その他に大阪市立大学との定期戦などが現在も引き続き、多くの好記録を見ることができる。例えば、東外大戦では小西新平の400m：50秒0、1963(昭和38)年第15回大会▽鈴木克啓の円盤投げ：37m42、1969(昭和44)年第21回大会▽宮田孝・田中健二・竹内淳雄・初田清彦の4×100mR：43秒5、1985(昭和60)年第37回大会▽平岡毅の110mH：15秒5、1990(平成2)年第42回大会。大工大戦では小西新平の100m：10秒9、200m：22秒5、400m：49秒8、1963(昭和38)年第10回大会▽鈴木克啓の砲丸投げ：12m03、円盤投げ：34m08、1969(昭和44)年第16回大会▽鈴木博保の三段跳び：13m51、1976年(昭和51)年第23回大会▽橋本哲夫の走幅跳び：6m62、1978(昭和53年)年第25回大会▽田中淳の5000m：15分52秒3、1990(平成2)年第37回大会、1500m：4分2秒5、1991(平成3)年第38回大会などの人々の活躍があり、現在も大会記録として残っている。

一方、1921(大正10)年に第1回が開催された関西学生対抗陸上競技選手権大会は、1932(昭和7)年には1・2部制(男子)となり、現在1部校12大学、2部校42大学にもなる。特に1980年代からは女子部員の活躍が目立つ。1980年以後の年度別関西学生50傑をみると、男子では1982(昭和57)年に宮田孝の200m(13位)、400m(14位)、女子では1981(昭和56)年に岸田(旧姓北原)聡美の1500m(18位)、1983(昭和58)年に安田(旧姓武智)千津子の400m(17位)、1985(昭和60)年に石原千秋の100mH(6位)、1986(昭和61)年に高瀬ルミの400m(18位)などの活躍に加えて、関西学生対抗陸上競技選手権大会、近畿地区国立大学体育大会等の優

勝者は以下の通りである。

全日本陸上競技選手権大会

第15回	1927(昭和2)年	仲川武雄(400mH)
------	------------	-------------

関西学生対抗陸上競技選手権大会

回	西暦(元号)	氏名(種目)
6	1926(大正15)年	仲川武雄(200mH、三段跳び)
20	1940(昭和15)	新金 光(110mH、400mH) 坂口義雄(ハンマー投げ)

回	西暦(元号)	氏名(種目)
21	1941(昭和16)	坂口義雄(ハンマー投げ) 前田四郎(円盤投げ) 石原努・今村鉄夫・山田栄三・赤尾重胤(4×100mH)
39	1962(昭和37)	井上雅旦・島貫全・小西新平・佐村幸弘(4×400mR)
40	1963(昭和38)	小西新平(400m)
55	1978(昭和53)	橋本哲夫(400m)
56	1979(昭和54)	橋本哲夫(400m)

大阪学生対抗陸上競技選手権大会

西暦(元号)	氏名(種目)
1961(昭和36)年	小西新平(400m)
1962(昭和37)	小西新平(200m、400m)
1963(昭和38)	小西新平(400m)
1964(昭和39)	岩田武久(100m、200m)

近畿地区国立大学体育大会

回	西暦(元号)	氏名(種目)
1	1963(昭和38)年	岩田武久(100m、200m)
2	1964(昭和39)	岩田武久(100m、200m)
7	1969(昭和44)	鈴木克啓(砲丸投げ、円盤投げ)
11	1973(昭和48)	市橋隆雄(走幅跳び)
16	1978(昭和53)	橋本哲夫(400m)
23	1985(昭和60)	石原千秋(100mH)
25	1987(昭和62)	藤原正樹(800m、5000m)

本学陸上競技部の歴史はすでに半世紀以上に及んでいるが、これまでの数々の偉業は一重に多くの苦難を乗り越えた地味な努力の積み重ねとOGAC組織の結果といえよう。

特にOGACは、1934(昭和9)年に陸上競技部の発展と会員(大外大陸上競技部に在籍者及び総会で承認された者)相互の親睦をはかる目的で発足。大外大陸上競技部内に本部、東京・大阪にそれぞれ支部を置き、会長、東京・大阪支部長、事務局局長、同会計、運営委員などの役員で編成。毎年1回総会と懇親会を開き、さらに陸上競技部の指導と支援の組織を持つ。歴代の会長安田英夫氏(昭和9～昭和60年)、仲川武雄氏(昭和60～平成1年)、そし

て南部博氏(平成2年～現在)をはじめ、会員の限りない情熱と献身的な支援活動は無限で、この組織活動の果たす役割は極めて大きいものがある。

(陸上競技部長 辻 忠)

## 7. 女子ハンドボール部

平成3年度女子ハンドボール部の部員数はマネージャー1名を含め17名である。その内高校での経験のあるものは6名である。ここ数年人数不足に悩まされていて試合前になると人数集めに必死になっていた。それに比べると現在はとても充実していて活気があふれている。しかし、春秋2度行われる関西学生ハンドボールリーグ戦でこれまではいつも力のなさを感じるばかりであった。こんなことを繰り返すばかりで目標とする部昇格が夢のまままで終わってしまいそうな焦りが募ってきた頃、すばらしい指導者花畑平男氏にめぐりあった。日体大OBの花畑氏は今年の春期リーグで私たちの敗戦試合を見て、あまりにハンドボールを甘く見すぎていた私たちに喝を入れて下さった。現在では、練習内容を一変して、氏の指導のもと個人個人の実力アップを中心に練習に励んでいる。

創部は1980年と比較的歴史は浅い。きっかけは、体育の授業でハンドボールをして病みつきになり「結構おもしろい、クラブを作ろう」ということで、初代キャプテンの荒牧三知子(大I T31)を中心に女子ハンドボール部をつくった。口コミや紹介で中高時代にハンドボールの経験のある人、全くなかった人とが集まって、とにかく練習が始まった。体育の沖本先生や松下先生にも色々相談し、男子ハンドボール部の全面的な協力のもとに練習が始まったという。

最初の年は男子部と一緒に練習していたが、翌年後輩も数名入部し、女子部員だけでゲームできるようになった。

部として活動を始めた翌年の秋季リーグに他3大学と共に初参加。当時の部員数は8名であった。ちなみにユニフォームは黄色と紺色のカラーであった(今は赤・白・青のユニフォーム)。1982年には1年生が多数入部し、秋季リーグ成績は、3部の3位と健闘している。これは、その頃の非常勤監督であった男子部の岡本健志(大DM32)のお陰によるところが大きい。

その後数年は、どうにか試合に出場出来る程度の人数での練習が続いていた。創部されてからの試合成績が充分に残されていないために、記述できない部分があることをお断りしておく。1991年からは残念ながら4部に降格となった。

### 戦 績——春・秋季リーグ戦

参加年	部 員 数				戦 績
	1年	2年	3年	4年	
'81秋	1人	3人	4人	0人	初参加
'82春					3部3位
'82秋	7	1	3	0	3部3位

参加年	部 員 数				戦 績
	1 年	2 年	3 年	4 年	
'83春	0	7	1	3	3部6位
'83秋	1	6	0	3	3部6位
'84春	0	3	6	0	
'85春					3部3位
'85秋					3部4位
'86春					3部4位
'86秋	3	1	3	1	3部5位
'87春					3部3位
'87秋					3部8位
'88春					3部8位
'88秋					3部7位
'89春					3部9位
'89秋					3部9位
'90春	0	2	1	4	3部8位
'90秋	9	3	1	0	3部9位
	(この年に4部が新しく作られ、4部に降格した)				
'91春	0	10	3	1	4部3位
'91秋	4	10	3	0	4部2位

## 8. 男子ハンドボール部

我が部は長い歴史と伝統を持ち、今日まで発展してきた。

しかし、共通一次やセンター試験の様変わりにより、次第に大阪外大に男子生徒の入学者が減ってきて、その影響により部員不足の問題が年々深刻になってきた。同時に、昔の様に、筋骨隆々とした学生は影をひそめ、もやしっ子が増えたとよく言われる。

ハンドボールというスポーツは、常にマイナーな存在であったので、人に言っても、相手が理解してくれないような時代が長く続いた。しかし、最近では、高校の体育で取り上げられるようになり、少しは知られるようにもなった。我が部のコートも、日本で有数の全天候コートに様変わりした。

我が部は、東外戦においては、おせじにも良い戦績を収めているとは言えない。しかし、勝敗を超越した何かがあり、プロ野球のオールスター戦の様な、華やかで年に一度のお祭りとして位置づけられているのは、1981年から今日に至るまで変わらない事実である。

1981年	大阪外大	●18-30	東京外大
1982年	〃	●14-20	〃
1983年	〃	●17-26	〃
1984年	〃	○22-16	〃

1984年は我が部が東外戦の初勝利を収めた年である。我が部は66本のシュートを打っているのに対し、東京外大は、47本しかシュートを打っていない

ように、我が部の攻撃における積極さが目立つ。しかも、後半の方がシュート決定率が高いのが東京外大の追撃をはばんだ。我が部の歴史の中の輝ける一ページである。

1985年 男子ハンドボール部は不参加。

1986年 大阪外大 ●11-23 東京外大

1987年 // ●13-26 //

1988年 // △19-19 //

会場 東外大グラウンド

エースが骨折するというアクシデントの中、みんながまとまり、敗戦を予期されていた試合を残り1分で同点に持ち込み、連敗を阻止する。

1989年 大阪外大 ●12-14 東京外大

会場 大外大コート

前年度の引き分けで、チームにも余裕が出来て、試合も前半を8-6と有利に進めたが、後半集中力の欠如をつかれて、結局は逆転負け、またしても勝てず。ただ部員の目にキラリと光るものがあり、チームが若いだけに来年こそは……、という実感と希望の持てる試合であった。

1990年 大阪外大 ○23-14 東京外大

会場 東外大グラウンド

昨年、涙を流した若手が順調に成長し、ベテランと若手が上手にかみあい、理想的な試合運びをし、東京外大を一步も寄せつけなかった。スカイプレー、速攻、セットプレー、どれをとっても、素晴らしい一言であった。試合後は、みんなから、連勝宣言がとび出し、意気揚々と大阪へ帰ってきた。

これが我が部の東外戦戦績であり、現在2勝6敗1分けである。80周年までには、東京外大に勝ち越せるよう今後も頑張るつもりである。

## 9. 柔道部

柔道部は本学発足の大正11年より活動を始め、本学と時を同じくして70周年を迎える。

校友会会誌『咲耶』によると、柔道部は大正11年4月本校誕生と同時に成立した。当時本学では、柔道及び剣道を正課としていたが、当初は道場もなく、天王寺警察署の武道場を借りて稽古していた。その後大正13年に道場が完成、学内で練習が行われる運びとなった。そしてその翌年、記念すべき対東京外語第1回定期試合を開催。気合い充分の接戦の末、惜敗しているが、第2回東外戦ではその雪辱を果たしている。当時より専門の柔道家、浜野正平師範・浅井貞吾師範の指導のもとで修練し、大阪府下の私大を除く各大学・専門学校との対戦でも好成績を残した。

本学の一大行事である対東京外大戦においては、記録の残った昭和29年度より平成2年

度までを見ると、36戦中本学柔道部は19勝14敗3引き分けで東京外大に一歩リードを保っている。それも昭和61年度より5連勝中である。

70年の長きに亘り、柔道部の歴史と伝統を守り、伝えてきた卒業生は200余名。わずかに残される記録の中に、例えば学園紛争のさなか、投石よけに畳が使用されて雨にぬれ、50畳の道場が35畳の狭さになってしまった、とある。また昭和49年、柔道部OB会設立の案があり、精華会、と名付けられている。事情あって跡絶えたが、10年後OBと部員等の尽力によって、天竺会と名を新たに再発足を果たした。現在7年目を迎えるこの会が、現役部員の活動に物心両面からの多大な援助を惜しみなく与えている。年に一度盛大なOB総会を開催すると共に会誌の発行を重ね、ここに柔道魂を通じての堅固な結束をみるものである。

この天竺会は、昭和60年、大阪府柔道連盟相談役の林利喜雄会長(昭和4年卒)、前本学学長の林栄一前柔道部長(昭和15年卒)を中心として発足し、名称は学舎が天王寺から箕面へ移ったことから「天竺会・てんきかい」とされた。その後幾多のOB、学生等の努力によってOB名簿も充実し、現在に至っている。また林会長が、平成2年秩父宮記念大阪府体育振興会より3度目の体育功労賞を受賞する等、会長自らが充実した柔道人生を送っていることは大変喜ばしいことである。また、戦後ニュージャパン柔道協会初代常任師範で本学柔道部でも師範をされた杉田善三郎(昭和15年卒)、他にも海外でも柔道を通して現地の人々と交流を深めた経験を持つ人など、挙げれば際限もないが、幾人かの言葉を借りることとする。

昭和15年卒 杉田善三郎(R16)

昭和28年高槻学舎で当時の平澤、吉野、岩崎、原、林諸教授の御尽力と、私と丸尾、今西諸先輩の協力によって当時としては珍しく50畳の道場が誕生し、50名の部員を擁して隆盛でした。

外大の柔道は専門家を養成するものでないことは明らかで、強い弱いは関係なく今日の国際情勢に臨み、それに対処できる知識と健康を修得し、精力善用もって社会に貢献することを最重要の目的としている。したがって剛道ではなく柔道の原点に帰り正しい柔道を修得すること、基本にかえれということを切に要望するものである。(『天竺会会報』第6号より抜粋)

昭和34年卒 藤田欣吾(大E7)

私は昭和30年に大外大に入学しました。前期2年間は高槻市にあった旧陸軍兵舎を市立中学校と折半して校舎として使っていました。柔道場はややたて長の細長い道場でしたが、それでも50~60畳はあったと思います。

3、4年生は上八学舎に居り平素は合同練習ということもなく、1、2年生であいている時間に適当に道場に来て練習するというのが実態であったと思います。

確か昭和30年・31年と夏の合宿は上八学舎の食堂(木造)に畳を持ち込んで急造の道場と

し、そこに泊り込んで合宿したと記憶しております。(中略)32年の夏は和歌山県御坊市の日高高校の道場を借りて合宿をしました。同志社高校の柔道部員も一緒に合宿をやりました。これがおそらく終戦後初の学外合宿ではないかと思えます。(中略)私が3年生になった昭和32年に高槻学舎は廃止となり全学が上八に統合されました。しかし狭い敷地でまともな運動施設もなく、柔道場も小さな運動場のそのまた片隅に高槻とは比べものにならない小さな道場がありました。せいぜい30畳程度で3組も乱取りをすればいっぱいという道場でした。でもここで冬場に朝早く寒稽古をやりました。素足で土のグラウンドを何周かし、稽古に入ったものです。稽古のあと皆で学校近くの銭湯へ朝風呂に入りに行ったのが今なおつかしい思い出です。(中略)卒業直前、後輩諸君が今でいう追い出しコンパを開いてくれました。上八界限はもともとお寺の多い所で外大の学生も沢山お寺に下宿しておりましたが、その一つの庫裏を借りて自分達で材料を買い集めスキヤキをしてくれました。皆、貧乏学生でいつもお金がなくピーピーしていましたが、気持だけは明るく、何とかなるさと楽天的でした。(中略)

教室では得られない友情を外大の道場で育むことが出来て本当によかったと思います。

そういう思い出をもっていることで、どれだけ人生が豊かになったことか、卒業後30数年たった今、改めて大外大柔道部に在籍して本当によかったと思っております。

昭和50年卒 竹田晴仁(大S23)

柔道を始めたのは中学の時である。当時のテレビ番組の柔道一代、姿三四郎 etc. に影響され、入学後思わず柔道部に入り、それから高校、大学と当然のここのように柔道を続けた。柔道の素晴らしさは、ここでいうまでもないと思うが、短時間に体を鍛えられる効率性、一本勝負という試合にかける集中力、裸のつきあいの中から生まれる連帯感、友情と得られるものは限りない。

昨秋、初めて箕面の外大柔道部を訪ねた。その時、後輩諸君の礼儀正しさや、女性や外国の方も多数参加されており、道場のりっぱさと共に隔世の感を持った。そしてOB会結成の話もその時間聞いた次第である。外大柔道部というものが核になって諸先輩、同期生、後輩諸君とのつながりがこれを機会に結ばれていく意義は非常に大きいと思う。(『天竺会会報』創刊号より抜粋)

昭和59年卒 森 浩一(大A32)

外大に入学するまで柔道はほとんど知らず、柔道部に入るなどは夢にも思っていませんでした。

最初は、ただ投げられるだけで、ほとんど宙を舞っていた、と記憶しております。当然道場に行くことが苦痛で、夕方になると沈んでおりましたが、唯一楽しかったのは「練習後の生協での団欒」でした。当時の柔道部は非常に個性の強い方が集まっていたと思います。そのお陰でいろんな人生経験をすることが出来ました。結局4年間在籍し、卒業時には三段までいくことが出来ました。外大柔道部は常に私の気持ちの中で支えとなり、励み

になっております。血ヘッドを吐きながらの寝技の練習、小豆島では毎日宙を舞っていた春合宿、初めて勝つことの喜びを教えてくれた東外戦、試合が終わるまでは一言も話をしないが、夜はドンチャン騒ぎの東外とのコンパ、次々に飲まされる新歓コンパ、救急車まで来た東外戦祝勝会、どれを取っても今は楽しい思い出となっております。これらの素晴らしい経験を与えてくれた柔道部は私にとって外大一、いや、日本一、世界一のクラブだと思います。(『天竺会会報』第5号より抜粋)

70年の素晴らしい歴史と共に歩を進める現在の柔道部であるが、昭和60年より小口信一師範の指導のもとで稽古に励み、伝統に恥じない成績を挙げている。東外戦5連勝を始め、第24・25回全国外国語大学・外国語学部柔道大会(通称5外戦)で優勝。第40回全日本学生柔道優勝大会で、140校中32位。第33回全国国公立大学柔道優勝大会で8位。第29回近畿地区国立大学体育大会で準優勝など、破竹の勢いで、ここでは団体戦の結果を挙げたが個人戦でも活躍している。

また近年は女子の柔道人口も急増し、国内でも女子の公式試合、国際試合が盛んに行われるようになった。本学柔道部でも、第1回大阪府下女子体重別選手権48kg以下級で4位となった清島(旧姓 鈴木 昭和61年卒)を初代として、現在6名の女子が在籍。その全員が本学入学後初めて柔道着を身に着けた者ばかりだが、1年程で段位を取得、男子部員に交じって修練を積んでいる。

本学では昨今圧倒的に女子学生が多く、柔道部でも他の体育系クラブ同様、男子部員獲得が最大の悩みと言えよう。現在でも団体戦に出場するのに十分な人数とは言えず、毎年入部したての一年生を試合に出さざるを得ないこともある。しかし、部員の努力と団結によって乗り切り、OB会の援助によって発展を続けている。

(ドイツ語学科・高木 悠子)

## 10. 空手道部

### 〈創部から現在まで〉

創立は昭和34年、当時、町道場で空手をしていた田中祥夫(大I P10)と同期の辻智司(大I N10)による。学内には道場がなかったため近くのYMCAまで出稽古に行ったり、剣道場の片隅を使って練習していた。創立直後の一時期、法政大のOBに指導を受けたが、大阪外大空手道部を30年余にわたって指導してきたのは故田中明師範である。昭和62年に田中師範が亡くなってからは現在まで斎藤勇師範の指導の下、日夜練習に励んでいる。

京都教育大学とは付き合いは古く、年3回の審査の他、合同練習など現在でも兄弟校として交流している。

### 〈合宿〉

創部以来、合宿は春と夏の2回行ってきた。その他にも、連休を利用して試合前にミニ合宿をすることもある。春夏とも期間は1週間程度で、京都教育大学と合同で行うことが

多い。高知、淡路島をはじめ静岡や能登など年によって場所は様々であるが、田中師範の頃には、友人の道場があった関係で沖縄にも行った。ここ数年は、春は大学の合宿所、夏は長野県戸狩で行っている。

練習は早朝、午前、午後の3回にわかれていたが、田中師範は青竹を竹刀がわりに、部員をしごき、1週間の合宿の間にその青竹が何本もボロボロになったという。夏の合宿は特に厳しく、海上自衛隊の幹部をして「こんな厳しい訓練をやれば、自衛隊員の大部分が除隊するでしょう」と言わしめる程のものであった。足の裏の皮がむけ、体中あざだらけになるのはもちろん、日射病で救急車で運ばれる者も出た。

#### <東外戦について>

今までの成績は14勝9敗3引き分けと、大阪が押している。空手道部は1964年の第16回大会にオープン戦を行い、去年(1991年)の第43回大会で27回目を迎えた。オープン戦の時に勝利を得て以来、勝利の女神が大阪側に微笑んでくれているのかもしれない。引き分けをはさんで、今のところ4連勝している。女子の方は、一度オープン戦を5人制で行ったのだが、東京外大の女子の人数がたりなくなってしまい、やむなく公式戦にはならなかった。それ以後、女子は試合をするものの、記録には残されずにいた。しかし、今後は再び女子のオープン戦が3人制で始められる予定である。

#### <女子部について>

今では女子が半数を占める空手部であるが、昭和34年の創部以来約20年間、男子部員だけという時代があった。しかし昭和55年入学の中国語学科のある女子学生が、この空手部の門をたたいて女子空手道部の歴史が始まった。

初期の頃は、補強運動、基本練習は男女一緒に、その後男子は組手、女子は型に集中するという練習内容であった。その成果があつてか、昭和61年、伊藤篤子(大M36)が国公立戦個人型4位という見事な成績を残している。

しかし、その後、時代の流れにより女子も組手を始めるようになり、昭和61年9月の全関西大会に於て組手公式試合デビューを果たした。結果は1回戦で惜しくも敗退したが、昭和62年西日本大会では2位に入るという大変な健闘を見せた。今に比べて参加チームが少なかったということもあるが、私大の強豪達を倒しての準優勝には、大きな価値があるだろう。

そして平成2年10月、全国国公立戦での優勝は、女子空手道部だけではなく、外大体育会の歴史にも残る成績であろう。西日本大会2位の時に2年生で活躍した陰山佳代は4年生になり技もますます冴え、熟達した試合運びでチームを優勝に導いた。それと共に自らも最優秀選手賞を手にした。

#### <成績>

S 40. 日本空手道選手権 組手の部 2位

S 42.(卒) 関西国公立戦 3回戦

- S 43. 日本空手道選手権 組手の部 3 位
- S 46. (卒) 協会の全日本団体(一般の部) 3 位、大西 府大会ベスト 4
- S 52. (卒) 大阪市大会 3 位
- S 57. 全国国公立戦 4 位 優秀選手・上前
- S 58. 全国国公立戦ベスト 8
- S 59. 箕面市民大会 個人型の部・優勝、3 位
- S 61. 箕面市民大会 組手個人戦 準優勝、型個人戦 準優勝  
修交会全国大会 組手個人戦ベスト 8 (倉本)  
全国国公立戦 女子型個人戦 4 位入賞(伊藤)
- S 62. 箕面市民大会 組手個人戦有段の部 3 位・段外の部優勝・準優勝・3 位  
空手協会京都大会 組手団体戦 3 位・女子組手個人戦 3 位  
西日本大会 2 位
- S 63. 全国国公立団体戦 3 位 優秀選手・本田
- H 2 . 全国国公立女子団体戦優勝 最優秀選手・陰山 優秀選手・長谷川

注：(卒)とはその年に卒業した先輩の在部中の成績を指す。

(三好 英明)

## 11. ラグビー部

1922年創部のわがラグビー部は、長い長い歴史の中に、幾多のOB諸氏の血と汗と涙の営々たる努力の結晶が光り輝き、現在の現役部員にまでその伝統の火が途切れることなく受け継がれている。

1922年創部の頃の様子を伝える一文が『咲耶』創刊号(大正11年12月23日発行)に載っている。「(前文略)最近の運動界は屋内から戸外一日光の直射を必要としています。この意味に於て野球が現在の隆盛を来たしたのです。而も勝敗はプレーヤーの頭脳と洗練された技倆、観衆の理解とによりて一層興味づけられるのです。此に於て、ラ式フットボールは当然勃興すべきものでありましたが、その競技に接する機会が少なかったため只ア式(注、アソシエーション・フットボール、現在のサッカー)によってのみ辛うじて存在を認めていたのです。然し乍ら野球は稍もすると投機的になり勝になるに反して蹴球は最も正々堂々たる肉弾と肉弾と相争う競技です。私達は信じます。庭球が軟球より硬球へ転移したる如く蹴球に於ても必ずア式よりラ式に移るに相違ありません。其上、英国人の紳士的気品の含まれている蹴球は恐らく観衆の理解力を増すと共に現今の野球を凌ぎ代表的運動として数えられる事とせう。斯う云う主張信念の下にラ式蹴球部が産れたのです。その証拠としては過去に於ては単に関東にて慶応、関西にては三高、同志社、それから横浜、神戸の外人チームが組織せられていたのみでしたが、今や東西帝大、早大、大高商、明大、商大等相次いで設立されました。これを見ても如何に理想的な競技であるかといふ事が認められる

でせう。冬が来ました。私達の冬が。私達は只 WHISTLE の音、ボールの響に強い執着を持つ者です」

第1回生の部員は、次の人々である。(文中敬称略、順不同)

熊谷俊次(D 1)、田中一郎(D 1)、藤田敬太郎(D 1)、原善一(C 1)、  
岡崎恵猪吾(C 1)、望月雄三(S 1)、他。

大正12、13、14年頃はラグビーの校内大会が盛んであった。参加チームは東洋3年、西洋3年、東洋2年、西洋2年、東洋1年、西洋1年の各チームで対抗試合を行っている。これは部員獲得に功を奏した模様である。

対外試合としては、天王寺中学(現在の大阪府立天王寺高校)、北野中学(現、北野高校)、関西大学、関西学院、同志社、神戸高商、大阪高商、大阪高校等が当時の主な対戦相手であった。

当時の主な対戦相手を列記する。

大正14年1月13日、大高商運動場での阪神専門学校リーグ戦にて対関西学院戦、6対3で大阪外語の勝利。

同年1月18日、大毎主催、日本蹴球大会にて三高と対戦し大敗。

昭和2年1月 対関西大学 於天中校庭 12対0で負ける。

昭和2年の他の戦績

9月26日	対 北野中学	12-0 勝、	10月1日	対 関西大学	46-3 負
10月5日	対 天王寺中	31-0 負、	10月9日	対 天理外語	32-6 負
10月16日	対 同志社予科	24-0 負、	10月23日	対 天理中学	15-0 負
10月27日	対 大阪高商	3-0 勝、	11月3日	対 関西大学	21-0 負
11月13日	対 天理外語	15-3 負、	11月17日	対 大阪高校	40-0 負
11月22日	対 大阪高商	12-0 負			

本年度部員名(1928年2月記)

松岡(S-3)、西出(S-3)、伊藤(S-3)、北条(C-3)、羽仁(C-3)、伊藤(N-3)、  
有田(M-3)、見上(R-3)、長島(主将)、菅沼(D-3)、平岡(C-2)、塚原(C-2)、  
田中(C-2)、浅野(M-2)、金塚(M-2)、植田(M-2)、天野(D-2)、鈴木(D-2)、  
小川(D-2)、山本(D-2)、見次(H-1)、安本(H-1)、乾(IN-1)、堀内(D-1)、  
山本(C-1)

昭和5年(1930年)11月30日 対東京外語第1回戦 9-0 勝 於東京上井草グラウンド

FW 田阪(R-3)、林(C-3)、木村(R-1)、高島(H-2)、吉本(M-2)、今村(S-2)、  
杉本(R-3)主将、加藤(R-2)

HB 戸井(IN-1)、三品(M-3)

TB 黒山(H-1)、真田(IN-2)、川端(S-3)、上野(S-3)

FB 藤岡(H-1)

東京外語との第1回定期戦が、昭和5年に行われたこと、大阪から東京への初遠征であったこと、大阪の勝利であったことは、まことに銘記すべきことである。この定期戦は戦前は毎年定期的に行われたわけではなく、毎年定期的に継続して行われるようになったのは戦後の昭和24年からのことである。

昭和6年の戦績の中から次の2戦を記しておきたい。

9月20日、宿敵神戸商船を27対3のスコアで破る。

同年10月20日 対同志社大学 於花園 外語 3-82 同大

吾等は関西のナンバアワン同大と戦った。勿論勝敗は別として吾等が何処迄此の強豪に迫るかであった。大敗にきしたが其のシャープなタックルはよく敵のTBの攻撃を防ぎ、後半にはFWの活動ものすごく赤阪20分ドリブルに単身出で遂に戸井、赤阪飛込んでトライ、遂に零敗を免る。

昭和7、8年度部員は次の通り。

岡部十三郎(主将)、赤阪力(副将)、寺戸永人(マネ)、上野勝、潮田郷三郎、佐井昭治、脇田一政、吉田和雄、伊藤洋二、青野貞一、大塚亮平、上田土郎、高島武彦、菅野正三、小泉正毅、井東三郎、伊藤正弘

昭和10、11年のメンバーは次の通り。

FW 村島、山本、尾崎、井東、仁連、伊藤、村下

HB 高市、小泉、大塚

TB 猿渡、片岡、一木、沼辺

FB 村井

昭和10年11月3日 対東京外語(3-30 負)

遠征の疲労に動かざるに、東西協会ルール解釈の相違は更に我が部員を動かさしめず、加ふるにフォワード、インフィールドオフサイド、インタフェア等の認められざる結果、味方の呆然たる隙にトライを許す事数度なり、時に敵を圧してゴール前にルーズとなり、前半小泉トライを得たれど、味方バックスの不調は屢々抜かれて敵の快走に敗る。

昭和11・12年のメンバー次の通り。

FW 全田、日戸、舟守、尼子、菅瀬、木坊子、丸山

HB 太田、古沢、江藤

TB 村井、平田、前田、大森

FB 畠中

昭和11年度全国高専大会大阪地区決勝戦出場、戦績次の通り。

11月8日 27:0 大薬専、11月22日 25:10 大歯専、11月29日 0:6 日大専門(決)

昭和12年の戦績次の通り。

5月15日 対 大阪商大 33-0(負) 6月13日 対 大阪歯専 19-8(勝)

6月19日 対 昭和商高 32-5(勝) 9月19日 対 関西大学 26-3(負)

9月25日 対 日大専門 32-9(勝) 10月3日 対 関大専門 11-0(勝)  
10月9日 対 天理外語 21-3(負) 10月16日 対 松山高商 12-0(負)  
11月3日 対 関大専門 22-0(勝) 11月7日 対 昭和高商 37-3(勝)  
11月23日 対 大阪高医 14-0(負)

昭和13年10月9日 対天理外語 16-15(勝)

昭和15年9月29日 対神戸商船 22-12(勝)

同年11月、第16回全国高専大会大阪紀和予選が行われ、次の通り準決勝まで勝ち抜いている。

第1回戦 対関大専門 37-3(勝) 第2回戦 対日大専門 21-5(勝)

準決勝戦 対大阪高医 21-16(勝) 決勝戦 対天理外語 17-0(負)

昭和17・18年の部員

戦局益々厳しく、学徒出陣で外語からも戦場にかりたてられ、スポーツするという余裕は社会的に認められない時代であった。

写真①は昭和18年の貴重なもので、3年生だけがユニフォームを着ている。戦前の外語の全盛時のおもかけを残している縞のジャージーは全部でこれだけしか無かった。

熊谷先生(部長)、佐賀威(主将)、神原金吉(F20)、田中三雄(E20)、三橋史郎(E21)、白井通夫(M20)、住友真一郎(F20)、糸沢宗次郎(E20)、渋谷哲郎(E20)、林一郎(E21)小林喬(F22)、川村正樹(E21)、浜田英造(C21)、狭間新治(C23)、加瀬啓太郎(E21)、松原房夫(E22)、泉井良夫(E22)、米田稔(E21)、進藤治(D22)、戸崎正夫(S21)、政滝福治(F21)、伊賀光(D22)、平沢尚(E21)

昭和18年9月 戦前最終チームのメンバー

FW 浜田、川村、佐藤、伊賀、林、平田、進藤

HB 泉井、三橋、加瀬

TB 小林、戸崎、政滝、米田

FB 平沢

昭和20年8月15日 太平洋戦争終結

戦後の混乱期を経て、外語の庭に三々五々ラグビーボールを追っかける姿が増え始めたが、まだまだチーム編成にはほど遠い状況であった。

昭和21、22年当時の部員

安藤計助(主将)、奥晋(マネ)、宗像寛(S、O)、赤尾清昭、舟橋純、福田善雄、植田早苗、大江淳、西村昭平、和田幸三、井本莊三、小川、高橋克己、榎本芳雄、安田俊和、中沢一、蛸沢衛、山田暹、山本亮一、佐藤道夫、福井清一

昭和22年には天理外語、高槻の大阪医専他と試合を行ったがまだ勝利をあげるまでには至らなかった。

昭和23年春、天王寺中学を卒業した私は、高槻学舎に外語の入学試験を受けに行ったその日に運動場でいきなりフッキングの仕方を教えてくれと言われたのには驚いた。天中の学生服のままスクラムを組んだのを憶えている。

入学して間もなく大阪薬専と試合をして快勝した。大江、高橋、榎本、福井氏等の喜こんだこと、聞けばこの一勝が戦後の初勝利なのであった。

高槻学舎の運動場は兵舎の跡で石ころだらけで走るのには大変なグラウンドだったが、ひばりもさえずり、のどかな所であった。部員も急に増えてきて練習も楽しく、部室も一日中満員でとてもにぎやかであった。練習方法も天王寺中ラグビー部で5年間鍛えられた方法に次第に変わって行った。この事は後年大北君が外大卒業後天王寺高校ラグビー部の顧問先生に就任した時「アレ！外語と同じ練習や」と奇異な声を挙げた笑い話として今も残っている。

部員は大勢集まったが、ボール、ユニフォーム、特にシューズには困った。部員の数だけ揃えられないのである。物資不足の真只中であつた。それでも大阪経大はじめラグビーチームを作ったから練習試合をしてくれという申し出が次々に来て、少し兄貴風を吹かせていろんなチームと試合をした。

昭和24年11月14日 復活第1回東外戦

わがラグビー部と、野球部、テニス部の3部だけで東京外大との定期戦を復活実現したことは、当時の校内に明るい光をなげかけた。しかし試合の前日私は東外の練習を見て驚いた。整然と揃った濃紺のユニフォームにFWを中心に実に良くまとまったチームである。中心選手は恩田、大山両氏、この破壊力はすごい。わが大阪側はユニフォームは武田薬品ラグビー部からの借り物でそれも三通り位のヨレヨレの古着である。しかも得点力にはまだ自信が無かった。

1時41分大外のキックオフ、前半10分まで東外25ヤードにて混戦、13分大山(東外)のタッチで大外側に入る。スクラムを東外はブラインドに廻し釘づけ戦法をとる。23分国玉(東外)スクラムの球を受け右中間にトライ(0-3)。27分20ヤード附近のスクラムより東外大山-窪田-国玉と渡り、中央にトライ(0-6)。33分大外ゴール前の混戦より中山(東外)ボールを拾い桜田(東外)に渡り中央にトライ(0-9)。

後半開始3分、大出(東外)スクラムよりの球をもち込んで中央にトライ(0-12)。大外キックオフの球をそのままゴール前に迫り、8分野尻ゴールポスト右にトライ、コンバート成る(5-12)。13分遠田(東外)こぼれ球を拾い大山にパス、ゴール下にトライ(5-15)。20分高橋東外のこぼれ球をひっかけ独走するも恩田(東外)タッチキック、これが滋賀の正面に、滋賀左隅にトライ(8-15)。しかし26分、28分大山(東外)の連続独走トライ(8-18)(8-21)。32分20ヤード附近のスクラムからの球を窪田(東外)ゴール下にトライ(8-24)。タイムアップ寸前に福井ラインぎわを独走するも大山(東外)のナイス・タックルに無念の涙をのむ。

メンバー次の通り。

大外 FW 津川、後藤、蛸沢、大久保、小林、河野、高橋

HB 野尻、橋本、田中

TB 滋賀、福井、榎本、山本

FB 中沢

大阪でいい気になっていた我々は東外に冷水を浴びせられた思いをした。東京のチームは東外に限らずタテの当りが強いと言う事を思い知らされた。チームの強化に真剣にとり組み猛練習を開始、昭和25年から26年にかけて次のメンバーにより臥薪嘗胆、東外に23-11で初勝利をあげ、天理大に50-0で、大阪経大に35-0で勝ち、南山大定期戦には16-3で初戦をかざるという連戦連勝チームにまでやっと仕上がった。

この間、われわれ現役学生の努力も大変なものであったが、赤阪力部長先生も大いに協力して頂いた。第一、練習するのにグラウンドが無かったのである。高槻学舎から上八へ移転したばかりの時点で、上八も運動場が整備出来ていない状態で、五条公園、生玉公園、今宮工業グラウンドと転々、まるでジプシーであった。花園が使用出来るようになったのは更に3、4年後であった。五条公園は赤阪先生のお宅に近かったので、当時貴重だった氷水をいつも持って来て頂いて我々を励まして下さった。

大阪外大として発足してからの歴代主将を記す。(数字は卒業期)

野尻庄蔵(1)、白神壮三郎(2)、左藤孜(3)、岩垣健治(4)、小松千加弘(5)、  
瀬越末彦(6)、山本康隆(7)、川添義隆(8)、笠井昭治(9)、村上治(10)、  
前田直明(11)、斉藤弘志(12)、市川英二(13)、黒野誠一(14)、菊池泰三(15)、  
鈴木丈郎(16)、宇佐美幸彦(17)、森山邦雄(18)、馬庭克則(19)、中嶋健(20)、  
長野俊一(21)、大北周二(22)、平井隆次(23)、福本良春(24)、森崎優二(25)、  
山辺厚三(26)、谷口淳一(27)、玉巻裕章(28)、縄田正一(29)、多田昭(30)、  
栗林大(31)、浦塚敏彦(32)、内橋仁志(33)、中田昌孝(34)、結城徹(35)、  
福島浩樹(36)、島谷隆(37)、関陽一郎(38)、安部哲史(39)、蒔田俊雄(40)

以上の通り主将だけで40人居るわけで、その歴史たるや山有り谷有りによくぞ続いたものである。

昭和32年 近体(国公立近畿体育大会)に於て優勝をなし遂げたのが次のメンバーであった。

FW 近沢、上杉、古谷、観月、大藤、伊瀬知、芦沢、野口

HB 中村、山本

TB 笠井、宮浦、中島、川添

FB 古川

次いで昭和39年から43年にかけての猛練習につぐ猛練習で、戦後最強の黄金時代を築きあげた。

この時期には昭和40年にDリーグ優勝を果たしCリーグに昇格し、2シーズン連続22連勝、3定期戦とも4年連勝、そして昭和43年(1968年)Cリーグ全勝優勝をなしとげた。しかし、同年12月12日、快晴、満員の花園第1グラウンドにてあいまみえた上位リーグ大阪市大と16-16にて引分けた。

昭和47年10月10日、快晴の上八グラウンドにOB、現役多数集い創部50周年記念式典を挙行了。当日の式次第次の通り。(写真②)

司会 宇佐美、赤阪部長挨拶、物故者に黙禱、野尻監督挨拶、来賓挨拶(東外)、来賓挨拶(南山)、祝電披露(大山)、記念品贈呈(OBにはボール置物、現役にはボール置物とユニフォーム)、現役報告(長野主将・吉村主務)、全員でランパス、記念写真、懇親会

昭和47年の戦績次の通り。

10：6 対奈教大 53：4 対関外大 22：6 対大医大 4：27 対大工大  
4：28 対大阪大 33：0 対大薬大 8：62 対南山大 14：28 対東外大

昭和53年5月20日 赤阪力先生ご退官祝賀会 於上八学舎

永年部長先生として大変御援助頂いた赤阪先生が同年3月退官されたのを祝して、OB、現役あい集い、箕面へ移転する直前の上八学舎で永年のご苦勞を感謝し、新しく部長になって頂いた松下唯夫先生を全員にご紹介した。

同年10月26日、唯一、秩父宮ラグビー場で行われた第30回対東外戦は26-19で快勝した。当時の部員名は次の通り。(写真③)

谷口淳一、高山博、西田宇憲、大野薫、中農憲司、横江健一、安福正之、玉巻裕章、岡田善彦、樽田良和、成田幸徳、浅川昌之、辻浩一、井尻正昭、河辺雄治、飯田政伯、平田泰史、山形雅章、森満重行、松坂千也子、乾多可乃、花月裕見子、西三津枝

キャンパスは昭和54年9月1日から箕面へ移転したのであるが、グラウンドはすぐには使用出来なかった。正式にグラウンド開きを行ったのは昭和55年5月であった。安全を祈願してグラウンドに神酒を捧げ第1回の試合を関大工学部と行った。

昭和55・56・57年、この頃が部員数が極端に少く、部を維持することのみに懸命であった時代である。それでも何とか伝統の火を消すまいと各定期戦、リーグ戦も戦ったが戦績はさえない時代であった。

昭和58年4月、体育科の授業がご多忙になった松下唯夫先生の後任部長先生として松尾大先生(大I N9)に就任して頂いた。

昭和58・59年から再び部の勢力はよみがえってきた。昭和59年7月1日、京都外大と第1回定期戦を行った。これで東京、神戸、南山につづいて定期戦は4試合となった。京外大に対してはこの年の第1回戦を戦ってから今年(平成3年)まで8連勝している。

このシーズンのメンバーは次の通り。

FW 児玉良紀、山口竜也、橋本哲哉、結城徹、末松徹、池本和氣、浦塚敏彦、  
栗林大

HB 原田浩蔵、内橋仁志

TB 藤井聡、岡村昌宏、髭野芳英、中田昌孝

FB 南茂一

リザーブ 山下修、高瀬竜一郎、大倉真一、岡崎公彦

マネ 田中ゆかり、田多厚子

昭和60年5月、赤阪力先生が勲三等を受章されたのを祝い、OB77名と現役代表が大阪  
コクサイホテルに集い、赤阪先生ご夫妻を囲んで楽しい一夕をすごした。

昭和61年の戦績及びメンバーは次の通り。

リーグC-3

大市大 負、大経法大 勝、大府大 負、追手門大 勝、電通大 負、  
桃山大 勝、大薬大 勝、大芸大 勝、摂南大 負、4定期戦全勝

メンバー

福島浩樹、山下修、鍋師広隆、福島英明、内田雅之、清洲忠洋、結城徹、岡崎公彦、  
高瀬竜一郎、渡辺秀明、大倉真一、土井裕一郎、妹尾三千男、島谷隆、乾英文、中  
西啓文、藤原正幸、渡辺泰夫、下平雅晴

平成元年の5月3日、監督の座を宇佐美幸彦君(大D17)に引き継いで貰うことを決意し、  
同時にOB会を確立する事にOB諸君の了承を得、大阪外大ラグビー部を更に強化、発展  
させることに力を結集することを広くうったえる為、国際交流センターに多くのOB諸君  
と現役代表に集って貰った。席上OB代表として、赤阪力先生から私に感謝状と記念楯を、  
学生諸君から記念キャップを、東京支部OB諸君から記念ボールを贈られた時私は永年の  
数々の思い出が頭をよぎって感涙にむせんだ。(写真④⑤)

この時のメンバーは次の通り。

FW 安部哲史、渡辺泰夫、上田哲也、中村成圭、菅田泰弘、坂本勝、石坂秀和、  
蒔田俊雄

HB 関陽一郎、武田朋也

TB 北島高弘、木村丞、土井裕一郎、岩田裕之

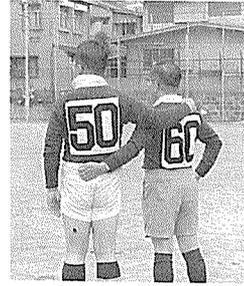
FB 山根泰延

このシーズンは対東京外大の戦績をイーブンにした記念の年であり、近国体にベスト4、  
東海Aリーグの南山にも完勝した。平成元年7月よりAリーグ8大学、Bリーグ8大学、  
Cリーグ8大学、Dリーグ32大学の4リーグとなり大外大はDリーグ第3ブロックとなっ  
た。リーグ戦の戦績次の通り。

対電通大 負、対大府大 負、対大芸大 負、対摂南大 負  
対大薬大 勝、対桃山大 負、対経法大 負



①昭和18年全盛期の部員達。ユニフォーム姿は3年生だけ



②50周年記念のジャージーを着る野尻監督(左)と還暦祝のジャージー姿の赤阪先生



③秩父宮ラグビー場での勝利



④野尻前監督から宇佐美新監督へ



⑤第1回OB総会  
国際交流センターにて  
(平成元年5月3日)

平成2年(1990年)2月24日、初めての海外遠征を行った。山本康隆団長、高山博隊長、宇佐美幸彦監督、芦沢良一、大藤勲、瀬越末彦、黒野誠一、藤原正幸の8OBに現役24名の総勢32名で次の2試合を行った。

全大阪外大 0  $\left[ \begin{array}{l} 0 \cdot 15 \\ 0 \cdot 14 \end{array} \right]$  29 台湾巨人軍 (於台北市)

全大阪外大 6  $\left[ \begin{array}{l} 0 \cdot 4 \\ 6 \cdot 18 \end{array} \right]$  22 崑山工業専科学校 (於台南市)

2敗ではあったが、海外との交流試合は非常に有意義なものがあり、台北、台南とも現地で大歓迎を受けた。

平成2年の戦績次の通り。

リーグ戦 対 大芸大 勝、 対 大府大 負、 対 神商大 負、 対 桃山大 負、  
対 電通大 負、 対 大薬大 勝、 対 経法大 負  
定期戦 対 京外大 勝、 対 南山大 勝、 対 東外大 勝、 対 神外大 勝

東外大には勝ち越し

平成3年5月5日、快晴の大外大グラウンドでOB対現役戦を行い、次いでOB総会を開催した。OB50余名、現役40余名の多きにのぼり、にぎやかな楽しい一日であった。

以上70年の歴史を記録したが、各年のすべての戦績、部員名全部を書きつくすにはまだまだ調査しなくてはならない事柄が多いので常に更に調べて行こうと思っている。外大OBの方々、とくに戦前の部については、赤阪力先生はじめ古いOBの方々に史料をお送り頂いたことに深く感謝しお礼を申し上げます。

(野尻 庄藏)

## 12. サッカー部

### 1. 専門学校時代(大正14年・1925 ~ 昭和15年・1940)

#### <a. 運動部としての創設>

当時サッカーのことを「ア式蹴球」と言った。「アソシエーション・フットボール」を簡略化した和名である。

大正11年に創立された大阪外国語学校の校友会に所属する運動部としては「蹴球庭球部」しかなかった。「蹴球部」とはラグビー部のことである。

大正13年の春以来クラブ(倶楽部と書いた)つまり同好会を作って渴をいやしていた細見又郎(E3)をはじめとする人々に体育会運動部への参加が認められたのは、大正14年10月5日のことである。「遂に光明に生まれ出た」「悦びに十数人の良き友が、手をとり涙を流して乱舞した」のは無理からぬことであろう。

もっともそれは蹴球庭球部の「一部として」認められたのであって、「サッカー部」として独立するのは昭和7年のことである。

部として認められるに先立って、同年7月同好会チームは「校友諸兄の友と情とにより」「全校を代表して」第一回東外戦に加わり、2-0で勝利している。

なお、当時ユニフォームは濃青、純白のパンツに、黄と青のストッキングであった。

初代の主将には細見が選ばれた。同チームの中には、後に母校のフランス語部の教官となり、昭和19年までサッカー部部長として現役の面倒を見ることになる畠中敏郎(F3)の名も見える。畠中によれば、当時の部費は月1円であった。

#### <b. 連盟加入とリーグ戦>

創設者たちは、部として認められた大正14年に直ちに「関西学生ア式蹴球連盟」に加入している。連盟の成立は大正11年、大阪外語の創立と同年である。まだ部制は敷かれず総当りのリーグ戦であった。グラウンドは甲子園にあり、この年の対戦相手は和歌山高商(現和歌山大学)、関西学院、関西大学、神戸高商(現神戸大学)の4校であった。2勝(うち1勝は不戦勝)2敗の成績をあげている。

翌大正15年(12月25日以後は昭和元年)の対戦相手は京都帝大(現京大)、関西大学、神戸

高工(現・神大工学部)、和歌山高商、神戸高商、関西学院。京大には接戦の末0-2で敗れているが、関西大学は2-1でこれを破っている。前半1点、後半また1点を先取し、後半風下の不利にもかかわらず1点の失点のみで守り抜いた。

二代目主将となった増原猛夫(S4)、安田 芳(S4)、一年生の角田理三郎(S5・のち母校のイスパニア語学科教授となる)の巧みなパスと角田の好シュート(2点とも)が勝利の要因であった。「ああ吾人は斯界の強豪関大を遂に一蹴した」とは当時のチームメイト(板野〔のち槇田〕六男 C3)の誇らかな記録である。

昭和2年より関西蹴球連盟は二部制を敷き一部と二部に分けた。外語は前年度の成績から一部に入れられている。この年の外語は第3位であった。この年にも関大に6-4で逆転勝ちしているが、泉 立尾(S4)は「FW角田の大奮闘、FB村松太郎(F6)のキック正確なりしは注目に値す」と記している。

昭和4年秋のリーグ戦に全敗、翌昭和5年より第二部に属することとなる。しかし、3年のちの昭和7年秋には第二部で優勝。入替戦で「宿敵神戸商大」を1-0で破って、昭和8年より第一部に返り咲いた。すでに昭和6年に優秀な選手が多数入り、チームが上向きの勢いであったことが勝利の大きな動因であった。昭和8年度の主将(FC)となった織田(のち矢野)淳一(E10)は、のちに関西蹴球協会の審判員を長くつとめ、戦後、国際審判員の第一号となった。

外語はその後部員の懸命の努力によって第一部の地位を保ったが、昭和10年、ついにまた第二部との入替を余儀なくされる。このときも入替戦の相手は神戸商大であった。昭和11年第二部において5校中(大阪商大〔現大阪市大〕、大阪帝大〔現阪大〕、和歌山高商〔現和歌山大〕、同志社高商〔現同大〕、大阪外語)第3位、さらに昭和13年には秋の関西学生リーグにおいて三部(京都医大、大阪高医〔現大阪医大〕、大阪商大、大阪外語)の最下位となった。

### 〈c. 部員・グラウンド・合宿〉

連盟の成長と反比例して外語が不振に陥って行く前述のような過程を語るとき、外語が負わされていたハンディキャップについてコメントが必要であろう。

旧制の外語は専門学校として三年制であった。旧制中学の五年課程を終えた者が入学するのであるから、最上級の三年生でも現在の新制大学の二年生である。一年生に至っては現在の高三に当る。当時の対戦相手の多くは大学であり、四年生を有しているし、在部期間も1年長い。

選手母体としての全学生数もまた大学に比べて著しく少い。創立当時の語部は9つに過ぎず、1学年の学生数は僅かに225名であった。3年の課程が出来上った時点でも約750名の学生しかいなかったのである。

サッカー部は常に少い部員数に悩みながら活動を続けたと言っても過言ではない。当時の校友会誌『咲耶』の記録にしばしばそのことが窺われる。大正14年創設当時の部員数が

14名であって、以後20名(昭和8年)を越えることはない。

部員獲得のためでもあろうか、サッカー普及を目指して校内で「校内語部対抗試合」を開催した時期もあった(昭和9-11年)。

上八にあった旧学舎の南側に道路を隔てて狭小な「グラウンド」があったが、あれが旧制時代の人々に与えられた練習場所であった。「あの狭いグラウンドで、野球部、ラグビー部、競技部に挟まれてしなければならない窮屈な練習。試合の度毎に、相手校のグラウンドに行ってやらなければならない」嘆きは新制大学時代に入っても長く続いた。当時のチームがしばしば近隣の旧制中学と練習試合を行っているのも、一つには相手のグラウンドを使用せんがためである。

花園の外大グラウンドが出来たのは昭和13年のことである。しかし、この新グラウンドは「種々不備にて」、「雑草は膝を没する有様に」、「合宿中或る時は午前練習を草刈りに当てる」始末であった。

最初の夏季合宿記録は大正15年に見られる。第2回東外戦(於大阪)に備えて「食堂2階に合宿し毎日午前午後2回の猛練習を行ひ」とある。続く記録は昭和4年9月、場所は「大阪校庭からすぐ近くの木梨画伯宅」であった。翌5年も上の宮の個人宅に合宿、昭和6年は奈良春日野グラウンドを使い、昭和7年からは奈良県の吉野へ出かけて美吉野グラウンドを使っている。昭和11年は淡路島の洲本に変ったが、12年は再び美吉野グラウンドに戻った。昭和13年は、新しいグラウンドが出来た花園で合宿しているが、満足のゆく状態ではなかったためか、続く14、15年は洲本で行っている。記録上最後の昭和15年の合宿の参加者は12名、記録記事を次に引用する。太平洋戦争はこの翌年に始まった。

「先づ合宿規則を作り、各部屋長を定めて統制ある合宿を始めた。朝5時半警笛一声に起き出で浜に据えられたラジオ塔に向ってラジオ体操を行ひ……」

#### 〈d. 東外戦その他〉

「東外戦」は大正14年に始まった。旧制時代は7月14日が定められた日であったようである。第一回は大阪が東京へ出かけ、「中野法政グラウンド」で対戦した。

第一回は2-1で勝ち、大正15年の第2回の東京からの来征には1-2で負け、以後第13回まで勝ちつ勝たれつ、両外語生の血を湧かせるこの対抗競技大会は続けられたが、昭和12年10月学校からの「現下の時局に鑑み一切の遠征を中止する」旨の通達を以て中止となる。「冗費節約」のためであったが、戦争がすでに学生のささやかな楽しみをも制限するほどに暗いかげを落しはじめていたのである。以後、東外戦は昭和29年大阪において再開されるまで17年間ものあいだ中断される。

当初、双方ともグラウンドは他所で借りていた。記録には大阪は築港市立運動場、甲子園グラウンド、東京は明治神宮外苑競技場、立教大グラウンド、上井草グラウンドなどの名が見られるが、昭和8年からは東京での試合は東外の「新運動場」で行われている。

東外戦以外に、神戸高商との定期戦(5月)が行われた。第1回は大正15年(1-8)、第

2回は昭和2年(0-7)。

「大阪三校聯盟リーグ戦」というマッチも行われた(大正15年)。メンバーは大阪高工、大阪高校(現阪大教養部)、大阪外語。昭和2年には大阪高校に代って大阪高商が入った。この年外語は優勝し、「銀杯我手に得」ている。

いかにも外語らしいのは外国人チームとの親善試合である。昭和8年秋、「英国支那艦隊水雷戦隊」(1-3)ならびに「英国支那艦隊航空母艦」『イーグル』号(1-5)と対戦している。当時3年生であった奥平正二(C10)は「ハーフタイムに毛だらけの大男の水兵がビール瓶をラッパ飲みする逞しい姿が今も鮮明に記憶に残っています」と記している。

#### <e. 部長>

旧制時代は部長の教官は廻り持ちであったようである。また、部長のほかに副部長も置かれていた。歴代の部長、副部長の熱心な観戦や合宿見舞に記録者は常に感謝を表明している。氏名を次に記す。

鷺淵 一(昭和2年)、熊谷俊次(昭和5年-6年)、山本磯治(昭和7-9年)、畠中敏郎(昭和7-9年、同10-11年、同13年-15年)、国沢慶一(昭和10-11年)、稲村純一(昭和10年)、山本健太郎(昭和11年)、森沢三郎(昭和12年-14年)

## 2. 新制大学時代(昭和27年・1952 ~ )

### <a. 同好会の発足>

昭和27年に新制大学4期生として高槻学舎に入学した打田徹(E・在学中物故)と乙政潤(大D4)は外大にサッカー部がないことを惜しみ、部を作ろうと考えた(ラグビー部は存在した)。しかし、部として「学友会」(当時なおそう呼んだ)や大学から認めてもらうためには実績がなければならない。2人は語らって同好会を作った。大方の人数は打田が同級生を引っ張ったので、未経験者も多かった。

高槻学舎跡は今日公園となっているが、もとは陸軍工兵隊と兵舎のあったところで、門柱と衛兵の立哨所が記念に残されている。門を入ったところは広いクローバーの生えた敷地で、同居の中学校と共有の運動場であった。ここでボールを蹴っていると、だんだんとサッカーの経験者が集って来た。芦屋高校でやっていた1学年上のベテラン柏原新星(大C3)が加わったことは部の再建に大きな力となった。

この同好会チームの好敵手は同じく高槻にあった京大の化学研究所のチームや高槻医大であった。試合にはもっぱらJR高槻駅の北側にあった湯浅蓄電池のグラウンドを借りた。この頃からフランス語学科助教授(当時)畠中敏郎はサッカー同好の学生への援助を惜しまず、のち昭和32年に母校イスパニア語学科講師として就任した角田理三郎と交代するまで長く部長を務めた。現在はOB会会長(初代)として健在である。

### <b. 部としての承認と連盟への加入>

昭和28年は同好会もますます経験者がふえ、順調に活動を続けたが、翌29年、念願かな

って校友会所属の部となり、次いで関西学生サッカー連盟に加入することとなった。

当時は四部制がしかれており、新参の外大は当然四部へ編入された。以後昭和33年の三部昇格まで新生チームは四部に低迷することとなる。確か甲南大学は外大より1年遅れて連盟に加入したが、毎年一部ずつ上り、3年のちには二部に昇格してしまったのは見事であった。

当時四部でよく対戦したのは、甲南大学のほかに滋賀大学、西京大学(後の京都府立大学)、大阪歯科大学、大阪医科大学などである。滋賀大学は三部昇格のライバルで、三部昇格では先を越されたが、外大の二部昇格の際にはこれと対戦し雪辱を果たす形となった。

当時、関大、関学、大阪経大などの一部チームともリーグ戦において対戦することがあったが、昭和30年には大経大に1-15で、昭和31年には関大に0-8で完敗している。もっとも、高田和正(大E7)の手記によれば、この試合の後半0-2は「互角とも言える善戦」であって、関大チームは試合後先輩より「外大相手に一ケタ得点しか取れなかったカドにより延々二時間に亘りしぼられた」由である。

連盟の試合にはよく鞆公園内のグラウンドが使われた。当時としてはこれは十分な広さの土質もまずまずのグラウンドであった。しかし、練習のグラウンドには当時のチームは苦勞したものである。上本町の学舎に付属するグラウンドはあまりにも狭すぎた。先述の高槻学舎の西側の、のちに島上高等学校の土地は当時高槻市の運動場になっており、そこを利用したり、先述の湯浅蓄電池のグラウンドを使わせてもらったりした(ちなみに、当時の体育大会はここで行われた)。また転々として大阪市内や近郊の公私のグラウンドを使わせてもらった。

#### <c. 旧制OBとの交流とOB会の発足>

昭和30年ごろから旧制時代のOBと現役チームとの連絡が芽生える。とりわけ旧制時代の卒業生である矢野淳一(E10)や奥平正二(C10)、勅使河原有一(S14)は母校を訪れては現役チームを励ました。東外戦が東京で行われた年には東京在住のOBであった細川弥之輔(S12回)との接触も生まれた。

この頃は現役が手分けしてOBを勤め先に訪れては寄附を仰ぐならわしであった。校友会の予算が乏しかった部としては多くのOBの喜捨はまことに有難く心強いものであった。なお当時の部則によると部費は月100円である。

昭和35年、OBを組織化することが話し合われ、「大阪外国語大学サッカー部OB会」が生まれた(会長畠中敏郎)。翌36年には規約が作られている。規約の作成や整理にはとくに高倉信雄(大F9)が与って力があつた。

#### <d. 東外戦への初めての参加>

復興されたサッカー部が東外戦に初めて参加したのは昭和29年のことである。東外のグラウンドで行い1-2で惜敗した(1点は高橋一三・大S6のPKである)。高橋は小兵ながら技倆に優れ、当時のチームの得点王であった。

固有のグラウンドとしては、上八からはるか離れたところにある草だらけの花園グラウンドしか持たなかった当時のメンバーの目には、東外のグラウンドは素晴らしいものに見えた。もっとも前記高橋はそこには芋畑の畝のあとがはっきり分かったと後日記している。

#### <e. 三部へ、そして二部への昇格>

昭和30年代に入ると優れた選手が続いて入部して来た。三木泰久(大S 8)、鈴木勝也(大R 9)、中田浩二(大I N10)、青木俊一郎(大C11)、古河幸俊(大S13)、三好勉(大I P15)。これらの主将を助けるファイト満々の好プレイヤーが多くいて、結束は固く、部の意気はいやが上にも高まり、四部から三部へ(昭和33年)、さらに昭和34年には三部から二部へと昇格して行った。とりわけ三部昇格の大きな原動力となったのは玄函輔(R・昭和36年、朝鮮民主主義人民共和国へ帰国)であった。そして、昭和35・36年度の両年度外大は二部に属する。戦後復興チームのいわば黄金期である。この時期になると花園のグラウンドは練習に欠かせなくなり、部員は上八から近鉄奈良線やバスを利用して生駒山麓まで通った。合宿も春季に、あるいは夏季にグラウンドの端にあった管理人宿舎を借りて行った。

当時の二部の対戦相手は、大阪市大、阪大、大経大、大歯大、大商大、同大、甲南大、立命大、大薬大、神大などである。グラウンドは西宮のグラウンドが多かった。神大は一部から落ちて来たので復帰への執念を燃やしていたが、昭和37年度、外大はこれと対戦して0-0で引き分けている。

#### <f. 近畿大会>

今の近国体の前身は「近畿地区大学体育大会」と言って、国立大学ばかりでなく近畿の国公立の大学を集めた大きな催しであった。昭和35年から始まったと記憶する。昭和38年から国立大学だけで行うようになったのは、優勝・準優勝等の賞をすべて私立大学にかっさらわれるのを厭うてのことであると聞いた。

この「近体」においても二部であった頃はかなりの好成績を残している。昭和36年度は一回戦対大工大3-1、二回戦対神商大3-2、三回戦対京学大(現京教大)0-7、昭和37年度は一回戦対滋賀大1-0、二回戦対大学大(現大教大)4-0、三回戦対京外大1-2。

#### <g. 対神外大定期戦など>

神戸市外国語大学はかつて二部に属し、復興チーム草分け期に練習試合を申し込んで応じてもらえなかった経緯がある。しかし、昭和33-34年ごろから定期戦を行うようになり、互に行き来し、現役の対戦のみならずOB戦やコンパをも行うまでになった。さきの古河の記録によれば、昭和36年度3-0、昭和37年度0-2、昭和38年度2-3、昭和39年度3-2である。

現在行われている「四外戦」(神戸市外大、関西外大、京都外大、大阪外大)は昭和49年から始まった。関西外大は平成元年度から参加せず、神戸、京都、大阪の三校で行われている。平成2年度は、対神外大1-1、対京外大2-3の成績である。

#### 〈h. ふたたび三部から四部へ〉

学生数がもともと多いとは言えない外大のような小規模の大学では部の勢いは部員数を始めとするその時々要因に左右され易い。

昭和35・36年の両年度二部所属を保持した外大にも勢力にかけりが見え始める。昭和37年度リーグ戦の成績芳しからず大商大との入替戦に敗れ(2-3)、三部所属となった。そして、昭和38年度の古河主将以下の二部復帰への努力にもかかわらず三部での優勝を惜しくも逸して第2位に留まり、昭和39年度には最下位決定戦において兵農大に敗れ(0-1)、口惜し涙をのんで四部に下った。なおこのころはよく服部緑地グラウンドが使われた。

皮肉なことに、この昭和39年10月に日本は東京オリンピックにおいてアルゼンチンに逆転勝ちし、日本におけるサッカーブームを惹き起こすのである。

#### 〈i. 三部制時代と二部昇格のスローガン〉

昭和40年代に入ると日本においてもサッカーはかなり普及し、戦術や技術の革新と進歩も著しかった。したがって外大にも高校でのサッカー歴を持つ優れた選手が入学して来ることになった。しかし、同時に大学チームの数がふえ、力量は水準が上るとともに平均化した。

昭和32年角田理三郎がイスパニア語学科講師として就任し、畠中敏郎と交代して二代目サッカー部部长となった。

坂本勉(大M17)、岡田公一(大C19)、大谷林(大I P20)、岩原浩一(大C21回)、湯川秀人(大DM22)、岡野恭介(大S23)各主将や彼らを囲むチームのメンバーの努力と情熱にもかかわらず外大が他に抜きん出て優位に立つことはますます困難になって行った。昭和45年から関西サッカーリーグは四部制から三部制に切換えられたが、三部はさらに4ブロックに分かれ、実力伯仲のチームがせめぎあう時代となったのである。なお、昭和49年角田理三郎は定年退官となり、乙政が三代目の部長となった。

この時期にも外大の部員数は多かったとは言えない。昭和50年代に入って小野功児(大I P25)、遠山茂(大C26)、岩下直也(大R27)、小崎力庸(大E28)、遠藤 隆(大A29)各主将と彼らを支えるチームメイトの善戦が続けられたが、選手層の薄さに常に悩んだ。人数不足のため春のリーグへの出場を放棄したことさえあった。

昭和54年に外大は現在地に移転した。サッカー部は創設以来ここにはじめて十分な広さの、他の部に遠慮せずに練習できるグラウンドを得た。そのことと相前後して、部員数がふえて20名を越し、かつ外大に技術、体力ともに優れた選手が集中しはじめる。彼らもまた「二部昇格」をスローガンとして揚げ実現を目指して邁進した。生田勝久(II D13・主将)、富依孝祥(大E30・主将)、中浜一行(II R16・主将)、稲谷司郎(大C32・主将・物故)一彼らの意気込みは昭和55年度の秋季リーグの戦績となって現われた。この年外大は5勝1敗勝点10の戦績でブロックで第2位となり二部昇格を決定する「三部優勝チーム決定トーナメント」に出場する資格を得た。三部の3ブロック各2チーム、計6チームが争うこ

のトーナメントでは惜しくも滋賀大に1-4で敗れたが、三部優勝の大工大を3-2で破る実力であった。富依はOB会報に「'80年夏我サッカー部は燃えています」と書いている。昭和50年代の部史の一つの黄金期と言えよう。

続く世代の藤原弘一郎(大S34・主将)、吉田博一(大S34・主将)は共に関西学生サッカー二・三部選抜チーム選考会に指名を受けるほどの実力であったが、この頃から再び部員数の不足に悩み、彼らの下に団結する部員の称揚すべき努力にもかかわらず、チームとしては伸び悩んだ。

昭和60年代、平成時代も、上妻英規(大B35)、越智政道(大PB36)、伊藤元志(大K37)、網野一彦(大F38)各主将および村上一範(K5回生)、藤井三之(II F4回生)を中心として部員の情熱は変わらず、奮闘を続けたが、不十分な部員数による劣勢は覆い難かった。しかし現主将の矢島 誠(E3回)の下、再び部員数は30名を越えている。平成における黄金期を期待したい。

#### <j. 初代女子マネージャー>

主将・副主将・主務のほかに女子学生が「マネージャー」としてチームの世話を見ることが始まったのは小野(旧姓松村)八千代(大C26)からである。以降、部のため献身的に無償の協力をおしななかったマネージャーは数知れぬくらい多い。スペースの制限のため一々氏名を挙げないが、部独自の歴史を編むときには逸してはならない人々であろう。

#### <k. OBの結束>

OB会は昭和52年より会報を発行し始めた。また、昭和59年より秋に「OB総会」を開くことを始めた。OBの結束はいっそう固まったとすることができる。

以上、大阪外国語学校校友会誌『咲耶』の旧号ならびに『大阪外国語大学サッカー部OB会会報』を参照して、サッカー部70年の歩みの概略を記した。多くの貴重な人名データを逸していることを恐れる。人名はすべて失礼を顧みず敬称を省略した。

(乙政 潤)

### 13. 軟式庭球部(男・女)

#### <思い出編>

時は1974(昭和49)年。大阪万博から数えて4年後、ベトナム戦争終結の前年。上八校舎の中庭のバスケットコート兼テニスコート、そこで我が軟庭部は高らかに産声をあげた。

木南・古池両氏、不破・松岡・合路(旧姓)各女史の面々を軸に、まず同好会として発足したのである。まだ入学間もない若き諸先輩の、軟庭に寄せる熱き思いが、現軟庭部の礎となっている訳である。時をおかず、その年の夏には、記念すべき第1回目の合宿が、石川県七尾市にて、総勢9名で行われた。

発足の翌'75年には、関西学生軟式庭球連盟に登録され、各種公式大会に出場しつつ、実戦を通して腕を磨いてきた。まだ同好会の身分故、部室らしきものもなく、体育会室前の

廊下に置かれた小ぶりのロッカーが掲示板の代わりをしていた程度であったが、そこに張り出された試合日程表を睨んでは意気込んでいた。

この頃ででき上がったのが、我々の士気を大いに鼓舞してくれた、あの労作、応援歌「荒ぶる魂」である。現在、高校で教鞭を執っている猪股氏が詞を書き、古池氏が曲をつけ、斉藤氏によって編曲された。

世間のちりを　よそにして  
白球はずむ　真田山  
オレンジ色のラケットを  
握るその手に力が込もる(オー)　(2、3番略)

翌'76年の最大事と言え、やはり東外戦に初めて参加したことであろう。まだオープン参加ではあったが、来たるべき部への昇格に向けて、名実ともに着々と態勢を整えていった訳である。試合は残念ながら惜敗に終わったが、たしか東外の生協ホールで行われた打ち上げコンパでは、狂喜乱舞、大騒ぎであった。

そんな東外戦から数ヶ月後、年も明けた'77年。男子部初代キャプテン、真の創立者、そして前年には体育会委員長も歴任した木南氏の尽力で、我が同好会は、正式に体育会に所属、ここに大阪外大軟式庭球部として成長、発展を遂げた訳である。従来の公式大会以外に、この年より、近国体・東外戦及びリーグ戦にも参加、今日に至っている。因に、この年の東外戦は前年の雪辱を果たす大勝であった。

ただ、クラブとして認められたと言っても、施設面での状況は変わらず、専用コートもなく、ボールの入ったバケツ片手に、真田山、長居、花園コートをジプシーのように転々とする日々であった。練習後、東花園のお好み焼き屋や近鉄のビアガーデンでよく乾杯したものである。

今年('91、平成3年)で同好会発足より17年。その都度の現役部員達が新たな伝統、部史を作り上げてきた。

#### <現況編>(男子)

まず現在の軟式庭球部を考えるにあたって、2つの側面から考えていく。ひとつには内的、つまりは私達がどのような理念、理想のもと、活動を行っているのかということ。もうひとつには、外的、どのような技術、施設のもとで行っているかということである。

現在、体育会離れが進んでいる。「体育会」という言葉に象徴される根性主義、勝敗への拘泥、といったものに疑問を感じ、それを受け入れない者が増えてきた。外大の大部分の体育会系クラブにおいて、人数不足というのは慢性症状である。

とりわけ我が部は極度の人数不足により、あっさりとして体育会主義を放棄した。というより正確には上の者が下の者を引っ張っていき、半強制的にベクトルの向きを修正していたものを、極力個人の手任せ、干渉しないというものにした。具体例を挙げよう。コート整備は1年の仕事だと思わず、まずは上の者が率先して行う。練習中の声出しの有無は個

人次第。遅刻欠席については、理由の自己申告を原則とし、取り沙汰しない、などである。その後、新人部員は急増、クラブ自体もスムーズに回転している。こういったプラスの面が見受けられるところを見ると、どうやら基本方針は間違っていなかったようだ。この方針を、「愛好会化」と呼ばせていただく。軟式庭球が好きな人間が自発的に集まり、その自発的な自覚を礎とし活動し、その活動は体育会という名のもとに行われはするが、体育会主義と称される価値観からは何ら影響を受けるものではない、という趣旨である。これがすなわち、現在の私達の理想、理念、つまり、内的なものである。次に外的に考えてみよう。

まずは技術に関してであるが、中・高での経験者が多いため、なかなかのものである。練習を見る限りは上位の部と比べても、それほど見劣りするものではないと思う。ではなぜ今の部に甘んじているかという点、「勝ち方を知らない、負け癖がついている」、これに尽きると思う。

次は施設、器具であるが、昨年大規模なコート改修により素晴らしいものとなった。未だにアウトコートの広さは変わっていないのだが、フォアで打てない逆クロスというのは非常に効果的な練習ができそうである。ラケットの変化にはやはり目を見張るものがあるだろう。ウッドのレギュラーを使っている者は今時珍しい。ほとんどの者がカーボングラフィイトのものを使用、それに加えてスイングスピードを早くするため、エアロダイナミックスなるものまで考えられている。

現在、部は非常にうまくいっていると言って差支えないだろう。私達なりに青春を謳歌している。人間と人間がぶつかることもあれば、その反対もある。それは二人の男女のこともある。試合で泣くこともあれば、酒を飲んで女を口説くこともある。先輩が昔そうであったように。何も変わっていない。人間の本質とでも言うべきか。現象の相異だけにとらわれず、本質の相似にも目を向けることができるなら、「温故知新、温新知故」、軟庭部の過去と現在の対話において素晴らしい関係が得られるのではないだろうか。

#### 〈現況編〉(女子)

軟庭部のみならず、外大体育会における多数の男子部の最大の悩みのタネである「人員不足」とは反対に、どの女子部にもたいてい、入部希望者の増加が見られる。女子軟庭部についてもそれは当てはまり、ここ数年はコンスタントに新人部員が加わっている。

我が部についてもほぼ毎年、初心者が入部がある。そしてもちろん、経験者が多く入部するわけだが、最近では特に、技術的に優れた人材に恵まれ、女子軟庭部は「発展期」を迎えていると思われる。

関西学生リーグにおいて、我が部は近年、4部と5部を行ったり来たり、という感じであった。そしてついに1991年の秋リーグで、念願の3部昇格という、部創設以来初の偉業を成し遂げた。次季リーグ戦では2部昇格を狙える状態でもある。

## 14. 卓球部

卓球部の歴史は古く、部員の第1回卒業年次は大阪外国語学校時代、昭和3年に遡る。以後、新制大学に受け継がれ、戦争中を除けば今日まで部活動が途切れたことはない。女子学生増加に伴って、昭和36年女子部創設、これも中断することなく今日に至っている。

関西学生卓球連盟リーグ戦に参加したのがいつからか、手もとに資料がないので分からない。戦績史についても、OBから仄聞したのをもとにするだけで正確は期し難いが、男子部は平均すると4部あたりが長く続いた。昭和30年代末には3部の雄として2部をめざし、昭和54年には3部優勝を飾り、2部昇格寸前まで行ったこともある。このあたりが外大卓球部の最盛期であろう。しかし近年は男子学生減少のあおりを食って対外的には不振で、昭和62年には遂に6部にまで降格し、いまだに浮かびあがれない。平成3年春季リーグには6部優勝を遂げたが、入替戦で王手をかけながら逆転負けを喫し、惜しくも昇格を逸した。ここ2年ばかり、毎季ブロック優勝までは行くが、今一步のところで涙をのむということが続いている。

対外的には近年は女子部の方が優勢である。5部に甘んじる時期が長く続いたが、昭和63年に4部昇格、さらに平成3年春季3部昇格と歴代最高位に昇った。平成2年には年末の会長杯大会でダブルスが3位入賞の快挙を遂げ、翌年1月に開催された大阪国際卓球大会出場を推挙された。リーグ戦は今秋季、残念ながらもわずか一季で降格し、3部の重圧を味わわされたが、戦いぶりは決して惨敗というものではなく、3部定着も不可能ではないという希望を持たせた。

他大学との定期戦は、ビッグ・イベントである東外戦のほかに、神戸市外国語大学とのそれが以前からあったが、最近神戸市外大が部員不足でチームが組めず、途絶えがちである。大阪外大も決して部員は豊富ではないが、少ないなりに部活動は充実し、近畿地区国立大学体育大会、関西国公立大学卓球大会、在阪国公立大学卓球大会など、参加が途切れることなく相応の活躍を続けている。

東外戦には男子部は昭和25年から、女子部は昭和40年から参加している。男子部は全種目のうちでも4番目に古い。戦績は男子部は圧倒的にリード、特に昭和39年から50年にかけては12連勝した。女子部はほぼ拮抗している。彼我ともに部員不足に悩む昨今である。

昭和61年にはOB会が結成された。現会長は小藤保(I N 17)、副会長は新井俊一(大 I P 12)である。毎年9月に定期総会と、OB現役入り混じえての試合を行っている。総会の方は今ひとつ出席者が少ないが、試合の方はなかなか活発で、日頃の運動不足もものかは、いまだに現役を圧倒する猛者もいる。

(岩間 正邦)

## 15. 女子バレーボール部

### <1. あゆみ>

昭和52年 渡辺 智子(F)、北条 ゆかり(S)、他1名(途中退部)を中心にスタートする。2年生-3名、1年生-6名 うち半分が初心者。

昭和53年 一年間の活動が認められて、「同好会」に昇格。ここに止まらぬよう「クラブ」昇格をめざして、気をひきしめる。

新入部員には中学・高校でのバレーボール経験者も多く、練習も充実するが、発足時のメンバーの退部が続き、人数不足はそのまま。

☆東外戦(於 東京)に非公式ながら初参加(敗)、四外戦に初参加 4位

昭和54年 部員数も増え、活動もクラブらしい体裁を整える。

箕面に移転後、「クラブ」として認められる。この年にはまだ体育館がなく、グラウンドで練習。

☆東外戦(於 大阪)に正式参加-初勝利!、四外戦 4位、近国体 初参加-敗、リーグには未加入。

昭和55年以降の戦績は、当時の部報もなく、わからない。

## <2. エピソード>

どこの大学にでもありそうなバレーボール部がなかったのは、まちがいに体育館がなかったからでしょう。

発足当時、上八校舎の南グラウンドで練習をしていました。「猫の額」と呼ばれるほど狭い所でしたが、それでもボール拾いは大変でした。グラウンド中を他のクラブをぬって走り回るうえに、ボールの砂を払うというおまけ付きです。これを怠ると二度泣くことになります。パスをすると目にパラパラと砂がふってきます。目の痛さに泣きながら練習していると、ポロッとコンタクトレンズが落ちてしまうのです。グラウンドに落としたコンタクトレンズを見つけ出すのは奇跡に近いものがあります。「また今月のバイト代もコンタクトのために消えて行くー」と、何度泣いたことか。

箕面に移ってから、一年間は体育館がなく、ボール拾いには苦勞しました。こちらは広さ故でした。

練習だけでなく、合宿中もボール拾いは大変でした。人数が少ないので(6人で合宿したこともある)、自分でスパイクを打って自分でボールを拾いに行くというとんでもない練習もありました。

奈良県のG市にあるその合宿所は、外観が西洋のお城風で、元は別の目的で利用されていた宿泊施設であったことが一目でわかります。初めてその門をくぐるときは、なんとも言えず緊張します。中は薄暗く、廊下の電灯はピンクの光を放っています。合宿に来て社会見学ができるとは思ってもみませんでした。でも、この程度でひるんでいては洗濯もできないところです。私たちの使う洗濯機は、同じ敷地内の映画館の中にありました。洗濯をしていると、上映中の映画の音が聞こえてきます。その映画というのが、題名に難しい漢字ばかり使っている類のものでしたから、始めは顔を真っ赤にして、そそくさと洗濯を

済ませていたものです。足がすくんで洗濯機まで到達できないと困るので、新入部員と上級生がペアで洗濯当番をやっていました。でも、上級生の心配りをよそに、新入部員たちは非常に積極的に洗濯をしにいていたようです。何とも頼もしい後輩たちで、バレー部の未来も明るいと感じたものです。

(大R28 中切 恵美(旧姓 三浦))

### 〈3. 現状〉

1989年、女子バレーボール部は関西大学バレーボール連盟4部リーグに位置していました。1年生には4部のチームというのがどれくらいの実力であるのか良くわかりませんでした。

1979年に正式に部に昇格した我が部は、着実に力をつけ、1982年の秋リーグでは4部での準優勝を果たし、入替戦で3部への昇格を果たしました、さらに83年の春リーグでは3部での準優勝を果たしたそうです。

しかし1989年の秋リーグからバレー部には苦悩の日々が続きました。1989年秋、1990年春、秋と3期連続でのリーグ降格……。皆いっしょうけんめいやっているのに勝てず、自分たちではどうしたらいいのかわからない状態でした。

そんなとき、男子バレーボール部元主将の大久保厚さんがコーチの役目を引き受けてくれ、つらい練習にも耐え、1991年春リーグにおいて6部に昇格することができました。

現在、私達は東外戦での勝利と次リーグでさらに昇格することを目標とし、力を合わせてがんばっています。

(主務 金田 千春 英語学科3年)

## 16. 男子バレーボール部

伝統ある「東外戦」において、男子バレーボール部は体育館での全ての試合の最後、つまり閉会式の直前に行われることになっている。この対戦次第では総合優勝が左右されるという場合もあり、毎年大きな盛り上がりを見せるのも一つの特色である。数々の戦いの中でも、フルセットまで持ち込まれ、壮絶な戦いとなった対戦二つを紹介したい。

「昭和58年10月20日、大阪外大体育館。大阪外大・東京外大定期戦の火蓋は切って落とされた。『閉会式があとにつかえてるから、3セットでかたづけろ』という体育会委員長の命を受けて、第1、第2セットは簡単に先取。にんまりしたのも束の間、あと1セットということで気の緩みが出たのか、第3セットを落としてしまった。セットカウント2対1で迎えた第4セット、得点は14対10。ここで東京側は御大西原氏を投入。東外大最後のあがきとみられたのだが、この西原氏、その異様に長い腕から放つ強烈なスパイクを悉く決め、大阪側はこのセットを悪夢のような逆転負けで取られてしまった。そして迎えたファイナルセット。体育館は両校応援団で超満員。試合開始から2時間以上経過して、まさに気力の勝負となった。エース同士の壮絶な打ち合いに、あの全日本のニッポンコールを彷彿

彿させるような『オオサカ』『トーキョー』の大コール合戦が沸き起こり、一時試合を中断する始末。まさに東外戦のフィナーレを飾るにふさわしい戦いとなった。しかし、あと一歩及ばず、我が大阪外大男子バレー部は敗れてしまった。実に3時間に及ぶ大熱戦であった」

時は流れ、平成の時代に入る。

「1989年10月19日、東外戦の火蓋は切って落とされた。今年ほどの種目も大阪が順々に勝利を収め、東外戦の最後をかざる我々バレーボール部も負けられない状態となった。

『思い切っていくぞ!!』 額に青すじを立てて気合いを入れたのだった。なにしろプレーヤー6人、しかもエースは故障し、コンディションは良くなかったからだ。1セット目が始まった。応援も少なく、静かな試合開始であった。選手全員かなり好調であったにもかかわらず、我々はセットを落としてしまった。前評判通り東京外大は一枚上手なのであろうか。

第2セット、東京外大は気がゆるんでいたのであろうか、1セット目にも劣らぬ攻撃で我々はねばりにねばった。その末、17-15で、かろうじて第2セットを取った。その後3セット目は東京外大が、第4セットは大阪外大がとって、勝利の行方は第5セットに持ちこまれた。いつの間にか体育館にも多くの人が集まり、コートの上は、盛大な応援につつまれた。誰も味わったことのないファイナルセットが期待と不安と共に始まった。このセットも両者ゆずらずのシーソーゲームとなった。ファインプレーの応酬に大きくどよめく観衆。悲鳴に似た声もしばしば。

しかし10点を過ぎたところで、大阪のオープン攻撃、クイック、ライト攻撃が爆発。会場は沸いた。そして最後は、エースのスパイクが決まり我々は感動的な勝利を得ることが出来た」

現在プレーヤー9名。一般的に1チームにおける選手数としては少ない数であり、セレクションなどによりセミプロ化している私立大学相手では太刀打できない状態である。そのためか四外戦(本学・神外大・関外大・京外大)においては万年準優勝、そして念願のリーグ昇格は入替戦止まりに終わり、果たせないままである。

(改野 秀樹)

## 17. ワンダーフォーゲル部

昭和33年に創部。以来、途絶えることなく活動が続けられ、OBの数は250名をはるかに越える。その間、創部20周年と30周年の会が盛大に開催され、旧交を暖めると共にOBと現役との親睦がはかられた。また、創部20周年を機に、創部以来、部長を務めた荒井伸一教官(現・モンゴル語学科教授)は顧問となり、第2代部長に細谷昌志(現・一般教育・哲学教授)が就任し、現在に至っている。

当部の特徴は、なによりもその活動の多彩さにある。山岳部、探検部、サイクリング部

等、他大学であれば別の組織のもとにそれぞれの活動があるが、外大ではすべてワングルの範疇に入っている。したがって、春・夏・秋の合宿では、さまざまな形態の活動が試みられてきている。

まず、活動の基幹は夏合宿である。4月から練成合宿や予備合宿を重ね、夏合宿に備える。それは、新入部員の体力と技術の訓練の場であると共に、なによりも部のアイデンティティの確立の場である。したがって、中部山岳地帯(南アルプス等)や東北、北海道の山岳地帯で、数パーティに分かれ、現地本部に集結するといった分散集中方式が30年間変わることなく継承されている。部員は、団体生活を通して協調と互助の精神を学ぶこととなる。

秋合宿はもっとも自然と親しむことのできる時である。授業の合間をぬってのことではあるが、紅葉の日本列島を自由に楽しむ。ワングル＝渡り鳥という感じがびったりするのはこの時かもしれない。

春合宿において、創意工夫をこらしたさまざまな計画がたてられている。雪山に登るパーティもあれば、南西諸島の無人島でのサバイバルのパーティもある。民宿(たとえば北海道での酪農体験)、セツルメント、サイクリング、スキューバダイビング、筏下り等挙げたらきりが無い。

このように活動形態の多様さとともに、活動舞台もしだいに広がり、現在では、日本全国はもとより、台湾、韓国、中国、インドネシアと、世界に雄飛している。昭和62年度の「大阪外国語大学学長杯」が当部に授与されたのも、韓国遠征の成果に対する評価である。30数年のワングル史において、顕著に変わったことといえば、女子部員の増えたことである。平成3年度ついに女子の主将が誕生した。しかし、ワングルは活動において当初から「男女機会均等法?」を適用してきたので、そのことは特別な現象ではないし、そのことによって部活動の質的变化が生じるものでもない。なお、地味ではあるが特筆すべきことは、『ヴィアツール』という部誌(活動記録)が毎年発刊されてきたということである。ワングルが創立時、協調精神とともに批判精神を養うことをモットーに掲げて出発した伝統が、こういう形で今も生きていることは、他に誇ってよいことであろう。

最後に、遭難事故について。当部は過去2回事故を起こしている(昭和38年飯豊山と昭和57年比良山。幸いいずれも怪我ですんだ)。過去の反省にたつて、われわれは遭難事故のあらゆる可能性を考え、それに対処しうる装備と技能をもって山に入らなければならない、と肝に銘じ、事故対策に万全を期している。

(細谷 昌志)

## 18. ヨット競技部

ヨット競技部が実際に動きだしたのは1963年の8月のことで、今年で創部30年目を迎える。創部当時の諸先輩は、アルバイトに精を出す一方で、外大という縁だけを頼って、企

業等の先輩を訪問し、寄付を募り、艇の購入のために努力したと聞いている。当時の寄付金集めに関して、以下のような資料があるので紹介しておこう。

#### 大阪外国語大学ヨット部寄付金募集趣意書

このたび本学にヨット部を創設いたしました。

ヨットはマラソンのねばり、体操の機敏さ、重量挙げの力及び明せきな頭脳、勇気、決断力を必要とする高度に洗練された近代スポーツであり、このヨット部を本学に創設することは本学のスポーツの発展に大きな意義を有するものと確信いたします。現在大学間のヨットレースにおいてはスナイプ級とディンギー級の二種があります。我々はスナイプ級二艇、ディンギー級一艇を準備しようと思っております。それがためにはヨット部創設にあたり、45万円が必要であります。我々ヨット部全員で今夏期休暇中にアルバイトでもって、15万円を用意いたしますが、これではヨット部創設の目的は到底達せられませんので、先輩のあたたかい御援助を折入って乞い申上げる次第であります。

昭和38年8月

ヨット部長 角田 理三郎

ヨット部主将 宮地 茂樹

さらにこの趣意書には、当時の森沢学長の依頼文も添えられている。

練習は、当時、西宮ヨットハーバーに拠点を置いて活動をしていた大阪市立大学のヨット部に寄寓する形で行われていたようで、「廃屋同様というよりも、廃屋そのものの漁師小屋を、艇庫兼合宿所として寝泊りしながら日夜練習に励んだ」というような、当時の様子を物語る記録も残されている。しかしその翌年、1964年の9月、台風が西宮のハーバーを襲い、そこで練習をしていた各大学のヨット部は壊滅的な状態に陥り、これがきっかけとなり、市大ヨット部、府大ヨット部と共に、当時はまだ新設されたばかりであった二色の浜ヨットハーバーへと拠点を移した。それから約23年間、我が大阪外大ヨット部は、この二色の浜において、市大、府大、追手門学院大、産大、経大と共に活動していくこととなる。

この頃はまだ今とは異なり、スナイプクラスとA級ディンギークラスという二つのクラスがレースに採用されており、バイトと、OBからの寄付によりようやく手に入れたスナイプ2杯、A級ディンギー1杯を、それはもう大切に日夜練習に励んだという。こうして、歳月を重ね、クラブの体制も徐々に整っていき、当時はまだヨット同好会だった我が部も、体育会ヨット競技部へと昇格していった。そしてその後も、合宿所の新築や、大学予算に依る艇の購入、レスキュー艇「蒼穹」の購入と、物質的にも格段の進歩を遂げていった。部員の少なさには、毎年泣かされながらも、1979年には、オリンピック強化選手がこの外大ヨット部から選ばれたこともあった。二色の浜時代は、まさに、我が外大ヨット部の発展の時代といえる。

そんな二色の浜からの移転の話が持ち上がったのが今から5年前であった。設備の老朽化と交通の便の悪さ、さらに新空港建設のために様々な不便を強いられる状況下にあったこと等を理由に、1987年、永年にわたり慣れ親しんできた二色の浜の海をあとに、追大、市大のヨット部と共に、現在の大阪北港ヨットハーバーへと、二度目の引っ越しをした。この北港ヨットハーバーは、設備面、環境面、共に申し分のないハーバーである。そして、部員数17名、所有艇数7杯を数える現在の大阪外大体育会ヨット競技部は、ここを拠点として、日々練習に励んでいる。

#### <活動内容>

現在、2人乗りのFRP製レーシングディンギーである470級を4杯、スナイプ級を3杯、計7杯のヨットを大阪北港ヨットハーバーに所有している。合宿中は、早朝、午前、午後と3部に分けて、一日平均7時間程度を海上の練習に費やす。

次に、年間を通した活動内容を見てみると、3月、4月の春休みを利用して行われる春合宿の開始と共にシーズンインということになる。春合宿の後、授業の開始と共に、合宿は毎土曜、日曜日ということになる。そして、5月の連休を利用して行われる春期新人戦、6月の関西インカレ個人戦と二つの大きなレースをこなし、7月、8月の夏合宿へと突入する。この夏合宿のしめくりとなるのが、8月の末にある関西インカレ団体戦であり、これは同時に、ほとんどの四回生にとっての引退レースとなるため、各人、各大学のこのレースにかける意気込みは、並大抵のものではない。そうして、このレースが終ると幹部交代を行い、心機一転、11月の秋期新人戦に臨む。このレースが終われば一応3ヵ月間、次の春合宿までオフということになる。年間にして120日以上が、ハーバーにおける合宿ということになる。

#### <戦績 etc>

最後に大阪外大ヨット部の関西水域における成績を、1991年8月に行われた関西インカレ団体戦でみてみると、470クラスが第8位、スナイプクラスが第13位、両クラスの総合で第11位という成績であった。

### 19. 基礎スキー部

スキー部(部員数は40名を超える)としての主な活動は、もちろん冬場から春先にかけてのスキーシーズン中に合宿という形をもって行われる。幸運なことにも、信州は白馬山麓の五竜遠見スキー場から徒歩2分という最高の環境に外大「山の家」がある。破格の低料金で宿泊できるこの施設のおかげで、我々スキー部員はスキー上達のためのとりあえずの目安となる年間滑走日数を多く稼ぐことができる。私事ながら、昨シーズンに関しては80日近く滑った中で、少なくとも50日以上は山の家での生活によるものであったと思う。

先日、私の十数年も上の代に当たり、初代主将を務めたN先輩からクラブ創設当初の苦労話を聞く機会があったが、特に印象に残っているのが、合宿一つ行うにも女子学生の保

護者から「本当にウチの娘をやらせて大丈夫なのか」と聞かれて大変だったという話だ。クリスマスも正月も、20歳の成人式の日まで山の家に籠っているという、どうしようもないスキーバカでいっぱいの現在のクラブの状況からは想像もつかないことだ。やはりN先輩も何よりもスキーが好きで、当時から行われている体育科スキーツアーに毎年参加するうちに、今ではスキー部顧問部長としてお世話になっている体育科教授の松下先生に、「いっそのことスキー部を作ってみないか」と誘いを受けて、それをキッカケにこのクラブを結成したという。今我々基礎スキー部員たちが、最高の仲間巡りに会い、素晴らしい先輩の指導の下、こうして三度の飯より好きなスキーに熱中できるのは、これまでにクラブを作り上げてきた数知れぬ先輩の尽力の賜物である。外大スキー部「ユングフラウ」を、さらに技術力に裏打ちされた、結束力の強い、そして何よりも楽しいクラブに発展させてゆくために、我々は努力を惜しんではいけないし、この和やかな雰囲気にも満たした居心地のよいクラブを持続させていって欲しいと後輩たちに望む次第である。

(浦郷 照明)

## 20. 跆拳道部

跆拳道が初めてソウル・オリンピックという大舞台で披露された時、世界の人々が固唾をのんでその素晴らしい技に魅了されたのも記憶に新しい。跆拳道とは、韓国においては国技といえる武道である。

我が跆拳道部は、今年で同好会として発足以来10周年、体育会に部として承認されて以来7周年を迎えた。同好会が発足した昭和57年当時は、日本ではあまり跆拳道は知られていなかった。その跆拳道を大阪外大で始めたのが、<sup>アルダンホ</sup>安達鎬先輩である。安先輩は、入学して空手道部に一年在籍した後、高校時代に金剛学園で練習していた跆拳道を再び始めるために大阪外大で跆拳道同好会を創ることとなった。翌58年、まだ部員は4名であったが、指導者として高田厚信師範を迎えた。高田師範は、安先輩が跆拳道を学んだ金剛学園で、練習生として一緒に跆拳道をしていた。こうして、跆拳道部の基礎が確立された。

高田師範は、当時まだ現役であり、部員と共に激しいトレーニングを行った。その戦歴は非常に華々しい。主にライト級で、全日本跆拳道選手権において、第1回大会から第5回大会まで連続優勝、そして一度の欠場をはきんで、第7回大会でも優勝した。こうした高田師範を迎えられたことは、現在の跆拳道部にとっても非常に有難いことである。

高田師範と部員たちの熱心な練習は、昭和59年に7名の新入部員を迎えることで、実を結ぶ。さらに、その年の全日本選手権で安先輩はバンタム級で優勝した。大阪外大跆拳道部最初の全日本チャンピオンである。部員も増え、好結果も残し、翌60年には体育会に承認された正式な部となって、跆拳道部はその存在をゆるぎないものにした。

我々大阪外大跆拳道部は、大学における部としては、日本で最も初期に生まれたもののひとつである。正式な部となり、部員数もより増えて、ますます活気にあふれている。そ

して、様々な大会で好成績を残している。全日本選手権をはじめ、福島大会や九州大会、そして在日大韓跆拳道協会の多くの試合において、優秀な成績を収めている。その中でも、昭和63年の全日本選手権における、吉田成先輩のフライ級優勝及び最優秀選手賞受賞は特筆すべきことである。吉田先輩は、安先輩以来、2人目の大阪外大からの全日本チャンピオンということになった。

こうした輝かしい歴史の上に現在の跆拳道部がある。まだ歴史は浅いが、大阪外大の中でも胸を張れる立派な部になったと思う。平成3年には第1回全日本学生選手権も行われた。まだ参加大学も少なく、あまり大きな大会ではなかったが、大阪外大は団体優勝等、優秀な成績を収めたのである。

(出口春彦)

## 21. 水泳部

水泳部は昭和59(1984)年に、細谷哲也(大T V37)が発起人となり、同好会として始まった。今でこそ、部員数は一、二位を争う程であるが、創部当時は数える程で、決まった練習場所がない、部員数が少ない等の問題をかかえていた。部誌創刊号の主将あいさつから、当時の苦勞を紹介する。

「春は陸トレのみ。夏は人ごみの中市営プールで泳いだ。秋・冬のシーズンオフは陸トレと週一回市営の温水プールでの水練。今考えればひどい状態だった。細谷氏はプール確保のため奔走された。小学校のプールなら使用されていない時間が多いのではないかと。教育委員会に掛け合ってみようということになった。事故発生時の責任問題等の理由で断られた。氏の母校で泳ぐという意見もあったが、遠距離で通うのに難があった。そこで阪大か大教の水泳部の方と一緒に練習させてもらえないかという案が浮上してきた。そして何日か何週間かして、阪大の方からOKの返事があったことを聞かされた。春-忘れもしない3月7日、初めて阪大の水泳部の人達にお会いし練習に参加した」

創部8周年を迎えた水泳部であるが、未だ学校にプールがない。そんな水泳部の活動場所はJAスイミングスクール箕面である。この唯一と言える活動場所を確保するために奔走したのが、第3代主将である大熊基之(大S 38)である。前述の通り、阪大のプールで阪大水泳部と一緒に練習をしていた水泳部が、大熊の努力により、昭和63年の冬に初めて一つの水泳部として活動を開始した。阪大水泳部の弟分という感じがあったが、東外大、神外大との交流を深めることによって、徐々に「独立」していったのである。

水泳部の通常練習は近くのJAスイミングスクールのプールを借りて、月曜から土曜までの毎朝9時から10時半頃まで行われる。授業との兼ね合いもあるので、週3回以上がノルマである。

春合宿は、夏に向けての第一歩である。とにかく一年中で最も厳しい練習で、体力的に

も、精神的にも鍛えられる。そして、通常の練習が再び始まる。4月に入部した新入部員が落ちついた頃、神戸市外大との定期戦が、相手校プールで行われる。

7月、8月、とうとう夏。私達のシーズンが始まる。温水プールで、一年中泳げるとはいえ実際、水泳の試合があるのは夏だけである。

毎年、関西国公立大会、関西インカレ、近畿国立大会の三つの大会に出場する。特に近畿国立大会は、三年の部員にとっては、引退試合になる思い出深いものである。又、他のクラブよりは一足先に東外戦も行われる。このように試合の目白押しで、夏、私達水泳部には8月の末までoffはないのである。

そして、8月の近畿国公立大会が終わると、10月には、J Aスイミングスクール主催のマスターズ大会にも参加する。他にも、期間をおいて記録会が行われ、シーズンオフに刺激を与えるよい機会となっている。そうしてまた来シーズンがやってくるのだ。

我が水泳部は、3年間の「同好会」の段階を踏み、1987年に、「部」へと昇格した。それから、部員数も著しく伸び、様々な大会においても、恥ずかしくない成績を収めることができるようになった。特に、1991年までの東外戦4連覇や神外戦3連覇、また、関カレにおいての一部リーグ昇格などが、その確実な成長を物語っている。

何度も言うようだが、プールが学校にない我々水泳部の活動場所はJ Aスイミングスクール箕面という民営のスイミングスクールである。水泳部員の中からインストラクターのバイトに出すという条件で月1000円という格安の金額でプールを借りている。普段は何の問題もなく各人バイトに励んでいるが、毎年夏になると問題が生じてくる。我々水泳部の目標は夏の試合である。試合に出場するためにはバイトを休まなくてはならない。しかし、普通のバイトと違って自分の都合だけで休むわけにはいかないのである。ちゃんと自分の担当のクラスというのがあるので、休んでしまうと穴があくわけである。スクール側としては、プールを貸しているんだから、あまり休まないで欲しいというのが本音のようである。しかし、我々水泳部も夏の試合に向けて日々の練習に励んでいるわけなので試合を休んでまでバイトをするわけにはいかない。こういった問題を解決するためにも、本学にプールができることを切に願っている。

## 22. サイクリング同好会

### 〈同好会の歴史〉

このサークルは1988年にサイクリング同好会として発足した。発起人は岡村雅司をはじめとする諸先輩であった。発足の1年前、外大にはサイクリングらしきクラブやサークルが一つもなかった。そこで、岡村が仲間に声をかけ、初めは3人というわずかの人数で活動を開始した。まず最初に学生課にサイクリング同好会を作りたいと申し出た。しかし、人数が少ないせいもあってか、初めは話に耳を傾けてもらえなかった。それでも、しつこく学生課に足を運んだ。そのかいあってか、それではとりあえず今から1年間活動し、そ

の報告書なども提出してもらって、1年後もきちんと活動をしていれば同好会として認めましょう、ということになった。そして、いよいよ同好会に向けての活動が開始された。それが87年11月のことであった。

その日から岡村たち3人は練習日もきちんと決め、まじめに練習を続けた。そして、4人の新しいメンバーも加わって活動も本格化し、88年6月には新入生もメンバーとして加わった。まじめにやってきたかいがあって、その年の11月に学生課から同好会として承認された。同好会顧問の大野徹先生の御協力を忘れることはできない。そして、91年で同好会承認から3年が経ち、体育会から正式の体育会クラブとして、めでたく承認された。

#### 〈これまでの実績〉

この部はサイクリングといっても競技の自転車部ではないので、試合というものが無い。このため、他の体育会のクラブのように試合に勝つことで評価を受けることができない。しかし、年に1度、体育会主催の駅伝大会なるものがあり、各クラブやその他の一般のグループが出場する。それに参加して上位入賞することで体育会からいつかは評価を受けるのではないかとということで毎年参加している。88年に初めて参加し、いきなり3位入賞となり他のクラブの者たちを驚かせた。このことで学生課の人に好印象を与え、同好会承認をスムーズに進めさせたり、体育会のこの部に対する印象をよくしたのは言うまでもない。89年の大会では陸上部をぬいて堂々の優勝となった。これで、サイクリング部の存在は確固としたものとなった。また翌年の大会も2位と、3年連続上位入賞となった。このように、駅伝大会を通してサイクリング部の存在をアピールできた。その他に、自転車で、北は北海道から南は沖縄まで、色々な所を走破した実績も、クラブを運営していく上で大きな自信となっている。

#### 〈現在の活動〉

現在、部員は50人近くおりその大半が女子である。普段の練習は主に陸上トレーニングを取り入れて行っている。これは自転車で色々な所を走るために必要な基礎体力を養うことに重点を置いている。そして、時間のある日は自転車を使って近くの山々へ走りに行く。この時に、集団で走行する時の規則を身につけていく。サイクリング部の活動でメインとなるのは合宿であろう。長期休暇を利用して普段行けない遠い場所に走りに行く。これは、テント、自炊道具等を自転車に積み、数日間都会の雑踏から離れて自然の中にどっぷり浸って、思い切り自然を満喫するサイクルツーリングのことを意味する。みんなで自然の中を走りぬけ、食事や寝起きを共にする。これらの集団行動の中でクラブの各人がお互いに結束を持ち合うようになり、クラブ内でのきずなが強められていくのである。

(若松 敏明)

## 23. 管弦楽団

### 〈1. はじめに〉

大阪外国語大学管弦楽団(以下略して外大オーケストラ)の歴史を私が書くことが適切であるかどうかという点で、私自身疑問をもつ。

しかし私以外にまた書ける人がいないのも事実である。私は第2回定期演奏会(以下定演とする)以来、留学などで2回を除いて他の定演には全部出演しており、現在にいたるまでの外大オーケストラに最も深くかつながり関係してきた唯一の人間であるからである。以下の略史は、定演を中心にまとめあげたものである。

## 〈2. 定期演奏会以前〉

第1回の定期演奏会は、1974年12月23日におこなわれているので、これ以前の段階は「外大アンサンブル」として出発するに当たっての準備段階と考えられる。外大オーケストラの生みの親ともいえる杉田信博氏(現在人形劇団クラルテ)によれば、1991(平成3)年は外大オーケストラが実質的に発足して20年目であるということであるので、1973年に以前の外大上八学舎E教室にクラシック音楽に関心をもつ数名の学生が集って「外大アンサンブル」をスタートさせたと考えられる。この発足に参加した学生は、ヴァイオリンの三好健司・増田晴子(旧姓清水)・藤田正一・下村知子、ピアノの三好陽子(旧姓前田)・斉藤有利子、フルートの杉田信博・鈴木幹夫、ファゴットの下村孝夫、それから宮田方史の10名であった。これらの創設期の諸氏は、演奏活動の面で特別な足跡を残しているわけではないが、外大オーケストラの歴史においてはアンサンブルという形でもかくも種をまいたという意味では特筆すべき仕事をなしたといえよう。

## 〈3. 定期演奏会スタート〉

第1回定演は、1974年12月23日天王寺の郵便貯金会館で開かれた。曲目は林晶夫氏指揮のモーツァルトの交響曲第35番「ハフナー」、井出元研一氏のチェロ独奏、ボッケリーニ・チェロ協奏曲口長調、畑公也氏指揮のベートーヴェン交響曲第五番「運命」であった。ここに登場した井出元研一氏は、大学に入学してからチェロをはじめたという変り種で、それがこうじてプロのチェリストとなり、現在名古屋フィルハーモニーの首席チェリストとして活躍している。現在にいたるまでプロの音楽家として活動しているのは、外大オーケストラOB会メンバー150名中、かれひとりである。林氏は、第3回定演まで指揮をして外大オーケストラの基礎づくりに貢献した。

75年の定演は、メイン曲がベートーヴェン交響曲第八番、76年のそれは同じくベートーヴェン交響曲第六番「田園」であった。第2回定演から第6回定演にかけて大阪フィルハーモニーの氏治原明氏がトレーナーとして「外大アンサンブル」を指揮し、第6回定演においてはかれ自身ウェーバーのファゴット協奏曲へ長調を演奏した。氏治原氏の指揮は、ファゴット奏者の特性を生かしたりズム中心のものであったか、同時にアンサンブルを全体として如何に形成してゆくかといった問題を何時も提起するもので、当時の外大アンサンブルにとってはきわめて有益なものであった。第2回定演より松原敬之氏がコンサート・マスターとなり、第6回頃までその重任を果した。かれはきわめて優秀なヴァイオリン奏

者で、ほとんどの曲をほぼ初見で弾く能力をもち、のちにドイツのケルン大学の講師となり日独友好促進に一役をかった。この時代には、林・松原・井出元といった諸氏の他にセカンド・ヴァイオリンの小林北洋、オーボエの中原雄司、少し時代は下るがフルートの喜田晃司といった芸達者がいた。

定演2・3・4回頃は、夏の合宿は信州の志賀高原で行い、定演直前の合宿は長居の陸上競技場のスタンド下のブラバン練習場でおこなうというのが慣習となっていた。筆者も第2回定演以来アンサンブルのメンバーになったが、若かったので合宿にも参加し、楽しい思い出をたくさんつくった。この時代の学生は、個性が強くそれゆえ自己主張が強烈で、音楽上の「ケンカ」は絶えなかった。指揮者の林とチェロの井出元の論争、これにコンサートマスターの松原、ホルンの富樫昌義が加ったときには収拾もつかない混乱となり、練習が中断された。富樫はのちにファゴットに移ったが、「日本で俺が最高のモーツァルト研究者」だと自認し、モーツァルトに関する論文を自費出版していた。こうした混乱状態は、現時点で考えるときわめて重要な意味をもち、外大アンサンブルが外大管弦楽団＝オーケストラに発展するに当たって必要であったエネルギーを表していたように思われる。なお当時の部員数は、平均15人ぐらいで定演のときには他大学からのエキストラ応援に大きく依存する以外なかった。曲目の中に割合ベートーヴェンが多いのも、当時の学生の気質からしてベートーヴェンを求めたという事情もあるが、片や小規模編成でベートーヴェンをやる以外なかったともいえるのである。

#### 〈4. 「アンサンブル」より「管弦楽団」へ〉

大阪外大は、1979年上本町八丁目より箕面市に移転した。上八学舎の時代には練習室がなくE教室を利用していたが、机を動かして練習体制に入るのにエネルギーを消耗した。箕面に移転してクラブ・ハウスが建設され、その三階の一部屋がオーケストラに割り当てられた。部員も20数名から徐々に増え1980年頃には30名を越える勢いとなった。練習する場所ができたということは一番嬉しかった。

移転の前々年から、つまり第4回定演からプロの指揮者を迎えていた。岡田良機氏であった。岡田氏は、大阪フィルハーモニーでオーボエを吹いていたが、当時宝塚歌劇場の管弦楽団に席を移すと共に西宮の市民オーケストラを振っていた。トレーナーの氏治原氏の友人でもあった。岡田氏は第4回定演では、ベートーヴェンの交響曲第三番「英雄」を指揮したが、プロの指揮者をはじめて迎えたということで皆緊張した。次の年には、岡田氏はドヴォルザークの交響曲第九番「新世界」を振った。はじめてベートーヴェンの棒をはなれてドヴォルザークを演奏するということが皆感激した。岡田氏は人柄は温厚で余り過激な表現を要求する人ではなく、音のハーモニーを大切に音楽を要求した。

指揮者の岡田氏と連係して外大オーケストラの発展に著しく寄与した人達として、初期の時代の岡田氏に傾倒していたコンマスの中林尚之、中林の次のコンマス川辺亮、ヴィオラの北島成子(旧姓田中)・同早田聖一郎らを挙げなければならない。中林は真面目な性格

で美しい音をつくった。早田聖一郎は部長であったが、外大学生による指揮を主張し79年にウィンター・コンサートを定演以外に組織して、モーツァルト交響曲40番ト短調を指揮した。この時の音楽は必ずしも最高の出来とはいいがたいが、外大オーケストラは外大学生があくまでも中心で出来る限り現有勢力で演奏することを主張した点立派であった。

岡田氏は、第7回定演でチャイコフスキー交響曲第五番、8回でドヴォルザーク交響曲第八番、9回でベートーヴェン交響曲第八番を振って、ベートーヴェンからドヴォルザークやチャイコフスキーへの曲目シフトをはたして82年に外大オーケストラより去った。岡田時代の後期には、コンマスは川辺と井口治彦が担った。川辺は優れた音楽的才能があり、ヴァイオリンのテクニックもしっかりしていた。井口は、ここ一番という時、つまりコンマスのソロなどにおいては見事な音楽を見せた。この時代には、テクニックに優れた奏者が全体的に多かった。副コンマスの存在の鷺尾賢一、ヴィオラの根来隆臣、クラリネットの谷敏行などがいた。

岡田時代は、今考えると「アンサンブル」といっていたのを「管弦楽団」というようになったように現在の外大オーケストラの基礎が形成された時代といってよい。ベートーヴェンの小編成のアンサンブルから抜けでて、ドヴォルザーク、チャイコフスキーのロマン派の大編成の曲目でも演奏可能になってきたということである。人数も多くなったので部長以下の役員の組織も完備してきて、各部長も登場してきた。先の早田、チェロの原功などの諸氏は部長としてオーケストラをまとめていった。

#### 〈5. 「伝統」の形成に向けて〉

1982年の定演は、岡田指揮でベートーヴェンの「田園」を予定していたが、夏になって突如岡田氏が辞意を表明した。オーボエの谷敏行が急遽現在の指揮者である守山俊吾氏を見つけてきた。この守山俊吾氏の下で外大オーケストラは著しい発展を示し、外大オケの「伝統」めいたものの形成に入るようになった。守山氏は大阪音大クラリネット科卒業後、71年渡欧しイタリアのセント・チェチリア音楽院とオーストリアのザルツブルクにあるモーツァルテウム音楽院で学び、帰国後77年指揮者としてデビューし、関西フィルハーモニーの客員指揮者となり、86年、89年ブルガリアのソフィア・フィルハーモニーを指揮して関西の楽壇で高い評価を受けるにいたった重要な音楽人である。守山氏が登場して以来、定演のメインの曲目は第11回のドヴォルザーク交響曲第七番、第12回のチャイコフスキー交響曲第一番、第14回のブラームス交響曲第二番、第15回のブラームス交響曲第四番と外大オケはベートーヴェン離れ、ロマン派音楽への移行を示した。これは学生がベートーヴェンの意志の音楽を余り好まないという問題もあるものの、守山氏のうたう音楽、情感的音楽による所が大きいと考えられる。守山氏は人間的にいつてきわめて明るい性格でありそれが音楽にも反映している。かれは論理的に音楽を解釈し、それを説得的に外大オーケストラに伝えるというより、かれのもつ情感を音楽に投影させ、それを身振り手まねよろしくプレイヤーに伝達し、結果として温かく人間味豊かな音楽芸術を形成するというタイ

プの指揮者である。こうしたかれの音楽づくりは学生を上手に掌握し、「守山イズム」ともいえるものが外大オーケストラに徐々に浸透し、長年かれの下で弾いているOBなどは曲がかわってもかれの意図は即座に理解できるようになっている。守山氏が指揮者に就任して以来、こうして「伝統」めいたものが徐々に形成されOBをも導入して外大の学生を中心にしたオーケストラ体制がとれるようになりつつある。89年の第17回定演を例にとるならば、メインの曲目はチャイコフスキー交響曲第六番「悲愴」であったが、本学学生・教官・OB合せて82名、客演出演者はハープやイングリッシュ・ホルンなどの特殊楽器奏者を含め27名となっている。

外大オーケストラも、こうしてロマン派音楽を中心に人間的な音楽という「守山イズム」を基礎にした「伝統」めいたものが形成されつつあるが、これは守山氏個人の努力だけでなくそれに対する協力者に負う所もまた大きい。ここ数年弦楽器トレーナーとして協力して下さっている関西フィルハーモニーのコントラバス奏者佐々木宏氏には感謝しなければならない。かれは桐朋学園大学音楽学部を卒業しているが、同大学で小沢征爾に指揮法を師事している。かれの指導は、オーケストラ全体の流れをいかに自然に形成するかという点できわめて適切である。85年の学内コンサートをした折には当時大フィルのコンマスであった稲庭達氏にお世話になった。当時同じ大フィルのホルン奏者山本氏が時々現われ指導していたことも覚えている。また85年ドヴォルザーク第六番を定演で演奏した折には、パリ・コンセルバトワール管弦楽団でヴァイオリンを弾いていたことがある斉藤ヨシ子氏が数回に渡って指揮している。

守山氏を指揮者に迎える頃より外大オーケストラの演奏者のタイプも変ってきた。以前の一匹狼的な個人として技量の高い奏者は、影をひそめ、全体としてのハーモニーを上手に形成するタイプのもが多くなった。各個人は、ソリストックでなく全体的に合せものが上手な人が主流になった。これは、初心者からの外大的なトレーニング方法が確立してきたということでもあり、ソロ的な個性の強い学生が少なくなったということも関係している。そうした中で外大オーケストラの発展に貢献した者も、沢山存在した。コンサート・ミストレスとして活躍した上田珠里、コンマスの亀山和人、フルートの渡部律音、部長としての能力を示した谷名雅典、同尾山将洋、指揮者として頑張った今本修司、同加藤敬介、現在のコンマス友永健二などはクラブの発展のために頑張った諸氏である。忘れてはならないパーソナリティは、チェロの山岸仁であった。かれはチェロ弾きとしての技術も十分であったが、天真爛漫な性格はチェロ・パートをまとめて高い水準に引き上げた。これらの諸氏は卒業後でも時々外大に現われ、現役の演奏を見守っている。

演奏制度については、定演に対して82年に学内コンサートを開いて以来、サマー・コンサートと定演、それから卒業生中心の卒業演奏会の3回演奏体制は確立している。さらに1991(平成3)年の4月から入学式でエグモント序曲を演奏し、入学式での演奏も慣例化する可能性も生まれた。サマー・コンサートを定演の中にくみ入れることと、卒業式での演

奏を申し出るか否かという問題が残されている。

このように概史を追ってみると、大阪外大管弦楽団も実にすばらしい発展を示してきたといえる。定演以前のアンサンブルのメンバーであった諸氏は、一回でも現在の外大オーケストラを聞いたならば、「俺達がまいた種がここまで……」とあって絶句されるであろう。

しかし問題も多く残されている。第一に外大の学生においては音楽そのものに対する情熱のようなものが必ずしも十分とはいえず、したがって他大学の学生に依存し勝ちであること。第二に卒業したかつてのオーケストラのメンバーが、現役メンバーを十分みてやる体制がないことである。第三に練習場が狭くなっていることである。第四に音楽そのものとの関係では管は高校におけるブラバンの発展などで充実してきたが、弦の方は、とくにヴァイオリン部門は優秀な人材が以前に比べとほしいことである。

しかしこれだけ発展したことは事実であるので、メンバーが団結すれば問題も一定程度解決は可能であると信じている。

(嵯山 靖司)

#### 24. 女声コーラス部

忘れもしない、15年前の或る日、ひとりの小柄な女子学生が、研究室を訪ねてきて、今度、女声コーラス部を結成したので、顧問になってほしいという依頼を受けた時のこのころの躍りような驚きを。学生は英語学科一年の小林さんであり、女声コーラス部の誕生であった。たしかに大学の女性の数は、増えつつあったが、女性が女性だけで、ひとつの部を企画し、結成する時代になったのか！という感慨が強かった。その前の年、1975年に何人かが集まって、女声コーラスを始めようと話し合ったそうだが、翌年初めて外大祭に登場した時の記録は微笑ましい。

「それは1976年11月、外大祭の文化祭典の日のことでした。20人余りの女の子がチョコマカとステージに立って合唱を始めたのは。あれから一年半、やっと1～3回生がそろいました」

しかし躍進は目覚ましかった。1977年10月の学外コンクールでは、Aグループ第2位奨励賞を獲得、2、3年後には、もうホールを借り切ったの演奏会、1981年には、京都教育大混声合唱団、愛知教育大男声合唱団とのジョイント・コンサートを実現し、名古屋に遠征している。特に、1981年から続けられている東京外大との合同演奏会は、音楽関係と体育部以外こうした意義ある機会の少ない両大学としては、注目すべき試みである。学外の優れた指導者の御援助(富岡先生、ボイストレーナーの松井裕子先生、後には、御夫君の松井義和先生)を得て、どんどんレベルアップを続けている。

外大70年の歴史のなかでは、わずか15年を彩るに過ぎないが、歴代活動的で創意に富む部員を擁して、年毎に新しい演出が工夫されていくのを見てみると、時代そのものを象徴

しているような期待を感じさせられる。

(赤木 富美子)

## 25. 混声合唱団テンペスト

混声合唱団テンペストは、1981年に結成されたクラブである。昨年(1991年)にははや10周年を迎えたが、少人数にもかかわらず、よく頑張ってきたと思う。以前はグリークラブ、女声コーラス部のみ存在していたが、ぜひ混声合唱をやりたい、という有志らによって、ここまで築き上げることができた。トレードマークの青色トレーナーには、TEMPESTと書かれている。この名前の由来は、かつてのその有志らの一人に、ベートーベンの「TEMPEST」をこよなく愛した者がいたからである。我々もこの名を気に入っているし、響きにも快いものが感じられる。英語の辞書を引いてみると、「大騒ぎ」とか「大嵐」などの日本語訳がつけられているが、我々の情熱はこの名にふさわしいと言えるだろう。クラブの歴史はこのようにまだ浅いが、現在、日々の練習、合宿、コンサートと、もりだくさんの活動に若いエネルギーを注いでいる。私達の特徴は、何より家族的な雰囲気である。卒団していても、一人一人が活動を通して育んだ友情を宝として持ち続け、そして時折握りしめてみる、そんな我々の絆は、どのクラブにも負けない気がする。我が合唱団は、歌う喜び、そして人の喜び、双方とも味わうことができるステキな合唱団なのである。

### テンペストの活動

4月 春合宿

6月 大阪府合唱連盟合唱祭

8月 夏合宿

11月 間谷祭・合同コンサート(グリークラブ、女声コーラス部、二部混声合唱団)

// 定期演奏会

## 26. 邦楽部

### <1. 創設期>

初期のことについては、資料はなく、記録もないので、現在の我々にはよく分からないところが多い。

昭和37年に当時ロシア語学科の男子学生が尺八の同好会を作ろうとして、ポスターなどで有志を募ったところ、中国語学科の女子学生がそれを見て、それならば琴も一緒にやろうということになり、邦楽同好会が出来上がったというのが始まりだといわれている。

その同好会は、すぐに部(クラブ)として承認されたが、上本町八丁目の時代であって、部室などはなく、練習(稽古)は大学の宿直室を借りて行っていたそうだ。その後、大学正門の向かいにあった(現在もある)「吉野旅館」で発表会をしたこともあり、不定期ながら、時折演奏会を開いていたようである。当時は定期的演奏会はずらずに、部員が協議して演

奏会をするかしないかを決めていたようである。

大学の他の部との共同の演奏会の記録が残っている。「大阪外国語大学・音楽サークル交歓演奏会」という名の会で、第1回は不明なのだが、第2回には、ギタークラブとかアンサンブルと一緒に演奏した記録がある。そのプログラムに掲載されている「プロフィール」がなかなかの名文であるので、少々冗長かも知れないが、転載する。

「邦楽部などというと、優雅上品な雰囲気を想像なさるむきもあろうが、現在のわがクラブにそれを求めるのは、生協のランチに味覚的な満足を望む以上の無理難題。退廃と虚無の極みに達した輩が、まだわずかながらのあどけなさの残る者を蝕みながら、あたかもスラムにたむろするように、営みを続けているのが実状ではないだろうか。『昔はねー』とつぶやく大年増あり、唇をはらして尺八に情熱を傾けんと悩む坊やあり。個性尊重という名の放任主義のなせるままに、これはクラブかはたまたタコベヤと、世の人を嘆かせているが、どういわけか部員は急増中。学年が下がるほど技量が冴えるという隠しおおせぬ事実のため、下から突き上げが激しく、上級生は肩身の狭い思い。(中略)戒律厳しくすさまじく、ひたすら立派としかいいようのないクラブが数ある中に、一つぐらい間のぬけたのがあってもいいじゃないかと自らを慰めている。怠けぬくこともできないほどダメなクラブなのである。とはいえ、若い素敵な先生も得て、本格的にやりたい人のちょっとした足台や、自由にのんびりやりたい人のたまり場にはなれるかもしれない。入部勧誘など大それたことも、これ以上の秘めたる恐るべき実態を暴露することもできないが、宿直室のわび住いで、細々と生き続ける決心だけは、けなげにも保持しているのである」

## 〈2. 揺籃期〉

サークル交歓会では次のような曲が演奏されている。やはり詳しいことは分からないが、琴の師匠が指導に見えていたようである。

第2回(1971.7.7)	☆菊城正明作曲	「光と風と」
	☆高野喜長作曲	「竹絃三章」
第3回(1972.7.6)	☆山本邦山作曲	「竹」(尺八二重奏)
	☆野村正峯作曲	「舞扇」
第4回(1973.7.5)	☆大月宗明作曲	「雲」
	☆沢井忠夫作曲	「水面」

サークル交歓会では、アンサンブルといって今の管弦楽団の前身が、モーツァルトのピアノ協奏曲とか、ベートーヴェンの交響曲1番とかを演奏しているのも興味深い。

定期の演奏会が開かれたのは、その後間もなくのようである。部室の記録には残っていないが、最も古いのが第3回のもので、1978年であるから、たぶん第1回は1976年(昭和51年)ということになる。

第3回のプログラムから知ることのできる事実は、たぶん部員は20名を越えていたであろうということや、相当に難しい曲をこなしていたので、落研と部室を共用していたとしても、なかなか頑張っていたといえるのではないか。川村泰山・千恵子先生を師匠として紹介しているので、両先生との付き合いはこの頃に遡り、相当長期間にわたってお世話になっているということがわかる。第3回は1978年11月2日北御堂、第4回は1979年12月3日朝日生命ホール、と開催されたが、大学の箕面への移転に伴って、次は昭和55年12月5日に池田市民文化会館で行われている。部員は20名を越えているようである。

この頃に出された『ほうかく5』という部の雑誌がある。内容からすると再刊とあるから以前に出されていたようだ。そこに部員数、尺八7名、琴22名、三絃3名とある。この雑誌は2号が昭和40年に出ているから、しばらく途絶えていたのだろう。数年出て十年後に再び発行されている。部員諸君の感想文が主だが、実に興味深い。が、箕面へ移転した時にまた途絶えている。

### 〈3. 発展期〉

創部20周年と銘打った演奏会は、第8回で、昭和58年12月2日千里中央の協栄生命ホールで開かれている。部員は25人を越えているようだ。

第9回から第11回のプログラムが散逸したようで、チラシしか残っていない。けれども会場は協栄生命ホールを続けて使っている(この会場は少し大き過ぎるのだが)。第12回から現在のプログラムの形式で、表示も西暦に戻っている。1987年12月4日協栄生命ホールである。この頃から小生が顧問をしていたように思う。第12回のプログラムが手元にあるからだ。

第12回(1987.12.4)	藤井 凡大作曲	「無意味な序曲」
	中島 靖子作曲	「琴・十七絃のため三つの小品」
	小野 衛作曲	「合奏曲第五番」など
第13回(1988.12.3)	山本 邦山作曲	「二つの幻想」
	川村 泰山作曲	「碧」
	長沢 勝俊作曲	「冬の一日 PARTII」など
第14回(1989.11.27)	川村 泰山作曲	「絃緒」
	沢井 忠夫作曲	「小さな春」
	八橋 検校作曲	「合奏曲 六段」など
第15回(1990.12.3)	沢井 忠夫作曲	「古典的喜遊曲」
	松本 雅夫作曲	「賞花亭にて」
	森岡 章作曲	「阿波」など
第16回(1991.12.11)	吉崎 克彦作曲	「群」
	沢井 忠夫作曲	「道化師」
	後藤すみ子作曲	「瀬戸」など

現在は部員も充実して、川村泰山・千恵子先生の長年に亙るご指導を受け、未来に向けての発展を期待しながら、日々合宿に、練習に、そして演奏会にと精出している。

(貝田 守)

## 27. ピアノクラブ

### <1. はじめ>

外大が箕面に移転して、学生会館の二階に音楽鑑賞室ができたが、そこに一台のグランドピアノがある。昭和59年の秋の或る日、タイ語学科の学生と連弾をしていた時に、英語学科の3年生の沼沢恵さんが入ってきて、そこで話が始まったのである。丁度学生会館の二階に厚生係の寺阪利夫氏が居られてピアノ等の管理をされていたので、その協力も得て、「ピアノ同好会」を発足させることになった。ビルマ語学科の山本和子さんをキャプテンにして、部員を募ったところ、直ちに20名余の学生が集まった。

驚くべきことは、その発足は10月半ばであったのに、12月8日に「クリスマス・コンサート」を行っていることである。オールコットの『若草物語』の筋書に従って、そこへ曲を付ける感じで進行するユニークな構成で、上手な人も下手な人も演奏に参加できるよう工夫されていた。ショパンのピアノ・コンチェルトからチャップ・スティックまで、独奏、連弾とりまぜて実に21曲も演奏し、音楽鑑賞室が空前絶後の満員になったのである。

### <2. 演奏活動>

初年度のメンバーで、演奏会ができるかどうか小生は危ふんだが、学生諸君は意気軒昂、テイジン・ホールにスタインウェイのピアノがあると聞くと値段がかさむのも必死のチケット売りでカバーして、会場をそこに決め、ガラあきの会場は恥であるというので、絶対に来てくれる人にチケットを売ることにして、1985年11月19日のテイジン・ホールを超満員にしたのである(定員400人のところへ500人以上来場)。

曲はバッハの「半音階的幻想曲とフーガ」(西村尚子)や、ショパンの「バラード1番」(伊藤真由美)、「スケルツォ2番」(北内正史)、「同3番」(坂本展子)などの難曲から、パッヘルベルの「カノン」(中山育子)のような楽しいものまで、連弾も2曲加えて大成功の内にと終わった。

### <3. 文化部への昇格>

1986年の春、小生の友人で大阪芸術大学元講師の沖本ひとみ先生を呼んで、レッスンを開き、各人が選んだ曲を弾いては、アドヴァイスを受けて今後の練習の糧とした。

1986年10月31日に第2回演奏会がテイジン・ホールで開かれた。ここでやはりリストのハンガリー狂詩曲のような難しい曲も目立ったが、実力のある学生の弾くサティの「ジムノペディ」(有田加代子)は非常に印象的であった。この時はじめて2台のピアノを使って、チャイコフスキーのピアノ協奏曲1番1楽章を男子学生2人(北内正史・久木敬三)で弾いたのは迫力があつた。

1987年11月20日に第3回の演奏会が吹田のメイシアターで行われた。部員は20名を前後していたと思われる。出演者も少ない時で、小生が学生時代に作曲したピアノ協奏曲2番1楽章を2台のピアノで弾いた(プリモ 山田美幸、セコンド 貝田守)。キャプテンはドビュッシーの「メヌエット」(伊藤真由美)を弾いている。その後オーストリアへ留学(ピアノ)した学生がリストの「ハンガリー狂詩曲1 1番」(下代直美)を弾いて大きな拍手を浴びたことが思い出される。

三年目が終わってから、同好会から部への昇格が認められた。第4回、第5回の演奏会の記録がないので分からないが、開催したことは確かである。第6回の演奏会はガーシュインの2台のピアノによる協奏曲(河内太邦、小関慈治)など20曲の曲目が並んでいる。部長(太田和麻)がジャズ系なので、そういう種類の曲も多い。そこまでは、顧問として演奏会の度に、会場へ出向いて、最後のステージの後に挨拶をしたものであった。しかし第7回の演奏会の折りに顧問を辞めた。

なお、「ピアノ同窓会」について、付言しておく。1988年に、ピアノクラブの発起人である沼沢さんが発起人となって、卒業生が毎年演奏会を開いている。第1回は大阪音楽大学の教室で、グランドピアノ2台を使って行われ、第2回は1989年に上本町の大阪外大の跡地にある国際交流センターの小ホールで行われた。いずれも7月7日である。1990年は府立文化情報センターで、1991年7月7日には豊中市立ローズ文化ホールで行われた。沼沢さんは会員の連絡を密にするため、同窓会新聞を編集・製作して会員に配布している

(元顧問 貝田 守)

## 28. E S S

クラブOB兼顧問、といっても若輩の私(田尻)にはE S S (English Speaking Society)の歴史を語る資格などないのだが、いくつかの資料と乏しい知識をもとに若干の事柄を覚書として記しておきたい。

### <戦前・戦後>

大阪外国語学校E S Sがいつ正式に設立されたかは寡聞にして知らない。ただ、管見に入った資料の中で、このクラブが初めて言及されているのは、英語部会(現在の語学科は語部と称していた)発行の『EDU』第3号(1932年)の中の「EDU日誌」という活動報告においてである。1941年発行の同誌第16号には、E S Sの財政悪化の原因として、「E S Sが学校の校友会の部ではなく、専らにEDU [英語部会] に依存して居る」ことを挙げている。これらのことからわかるように、当時E S Sは専ら英語部学生有志によるクラブであり、全校に開かれたものではなかったようだ。また、手許のE S S卒業生名簿の1991年版を見ると、1ページ目の片山忠雄(E 7、名誉教授)、林 栄一(E 16、元学長・名誉教授)らをはじめとして、Eの文字がズラリと並び、英語専攻以外の部員が初めて顔を出すのが、戦後十年以上経った1958年の卒業生からである。それ以前にも他学科の学生も在籍してい

た可能性はあるが、やはり当初は英語専攻の者のためのクラブ、ということであったようだ。

『EDU』から往時の活動状況を少し見てみよう。第7号の「ESS日誌」(『EDU日誌』から独立)には「[1933年]五月十九日(金)英文毎日主催関西学生英語弁論大会の校内予選開催参加者五名、審判員は吉本、上田、ショー、ジョーンズ諸教官」とある。本70年史の「英語学科の歴史」の中で詳しく紹介されている、吉本正秋、上田畊甫、Glenn William Shaw、William Jonesといった外語初期の英語部教官が協力している様子が窺える。他のコンテストでは、大平頼母らもジャッジを務めている。この頃の活動で主だったものはスピーチ・コンテストであり、他の大学・学校との交流も盛んであったようだ。同志社、大阪商大(現・大市大)、神戸商大(現・神大経済学部)、関西学院、ウィルミナ高女(現・大阪女学院)などの名前が見られるが、東京外語との交流はあまり無かったものとみえる。コンテストでは入賞者を出すなど、一定の成果はあげていたようだが、意外に苦戦しているというのが率直な印象である。この点について、第14号(1938年)所収の「ESSダイアリー」中、「外語対神戸商大第三回会話コンテスト」(1937年1月15日)の報告に興味深い記事がある。いわく「プレチデント横山君 [横山嘉之(E14)] 風邪の為欠場せるも奮戦よく大差を以て敵を降し茲に三年間連勝す、スピーチ方面の不調にひきかへカンヴァセーションに関する限り我がESSの独壇場なり」。会話コンテストというものが、どのように審査されたのかよくわからないが、ここには、prepared speechではdeliveryなどの面でひけをとるが、英語の運用能力そのものに関しては他校学生の追従を許さない、という自負が表れている。これは、40数年後、筆者が在籍していた当時(1979-83年)のESSを思い出しても、なんとなくわかるような気がする。その他、ESSの活動とはいえないが、今日も続いている日米学生会議に参加する部員が何人かいたことは特筆に値する。前出、林 栄一も1939年8月に渡米している(第15号(1940年))。日米間の雲行きがいよいよ怪しくなっていた時期である。

『EDU』の記述は覚書の域を出ないので、当時の活動ぶりは実感としてはなかなかわかりにくいのであるが、1968年発行の『ひろば』(これについては後述)第2号に羽田三郎(E20、元・英語学科教授)が寄せている「なつかしいE. S. S.」という一文が、これを補う貴重な情報を伝えている。羽田は戦争突入前後にESSに籍を置いていたのであるが、入部の経緯をつぎのように述べている。「……英語部へ入ってみると、早速ESS先輩の襲撃を受けた。(中略)当時フレッシュマンの私共が昼めしを食っていたら、上級生がドヤドヤと入ってきて、流ちょうな英語でペラペラやりはじめた。(中略)同じ学生服の上級生から、かくも自然な英語がペラペラ飛び出してくるのにはおどろいた。それから私もESSのとりこになった」。『EDU』第16号(1941年)の「ESSダイアリー」の記事に「[1940年]五月 昼食時間に集まって、二十分程会話の練習をする会を始める。一年の諸君、仲々有望である」とあるのがこれであろう(なお、この昼休みの活動は、今のnoon recess activities

の前身というべきものである)。それから羽田は一念発起、英語を猛勉強し、校内英語弁論大会で優勝する。しかし、「2年生の秋、休み明けに登校すると、最上級生が1人もいなかった。軍の御用で出かけたとのこと。戦争に直接の必要もある。占領行政にも必要。ということにはわかったが、何だかスッキリしない感じで英語の勉強をつづけた。山口高等商業学校主催の英語弁論大会に出場したとき、私は『正しい愛国主義と誤れる国粹主義』と題して、当時の風潮—坊主が憎ければ……の諺のような、英米文物一切を排除する風潮、野球の審判までがセーフ・アウトの代りにヨシ・ダメと叫んだような風潮に、ささやかなレジスタンスを試みたこともあった」という。この大会でも優勝した羽田もついに学徒出陣で海軍にとられる。それでも、「英語をやっていたおかげで、血なまぐさいところへは行かず、後方において、電波に乗ったアメリカ英語を聞いていたので、いのち拾いした。これもESSのおかげである」。羽田は戦後、母校の教壇に立つのであるが、古巣のESSは壊滅状態で、その復活に取り組むこととなる。「私も若かったから、余暇のすべてを割いて学生と遊び、どうやらESSらしくなった。英語劇でベニスの商人もやれるほどになったときは本当にうれしかった」と述懐している。

戦時中の英語排斥、学徒出陣、空襲、敗戦、戦後の混乱—この国のすべてのものがそうであったように、外語・外専ESSも筆舌に尽くしがたい試練を経験した。ただし、学校自体が外国語の習得を通じて侵略戦争という国策に組み込まれていたこの時代、たとえ課外活動とはいえ、このクラブも意図せずともその一翼を担っていたという側面からも目をそらしてはならないだろう。今日の我々には想像を絶する時代であった。

#### <紛争前後>

話は1960年代後半に飛ぶ。現在、筆者の手許に大阪外大ESS The Alumni発行の『ひろば』という機関紙の創刊号(67年)、第2号、3号、5号のコピーがある。パラパラとページをめくってみると、大学紛争当時のこのクラブの様子が窺えて興味深い。スピーチはもちろんのこと、すでにこの時代、おそらくはそれよりずっと以前に、ディスカッションやディベート(日本語にすればどちらも「討論」だが、そのやり方は随分違う)などの活動も確立していた。様々な大会で上位に入賞していた、という話を仄聞している。例えば、『ひろば』創刊号に掲載されている「1966年度活動報告」によると、同年10月22日には関西地区大学ESS連盟主催の英語弁論大会で、田村[田村幸道(大S17)]が第1位、といった報告がなされている。ディベートについていえば、伝統ある「三外大(本学、東京外大、神戸市外大)ディベート・コンテスト」で優勝(7月18-20日)、とある。この大会ではないが、このころのディベートの論題に「日本は社会主義化すべきか」などといったものが見られるのはまさに世相である。

しかしさらに興味深いのは、当時のESSでは、心理学、文学、言語学、歴史学、哲学、経済学、政治学、その他日本文学の翻訳といった、現在は見られないセクションが活動していたということである。これらのセクションで研鑽しつつ、スピーチやディベートの大

会にも参加していたのであろう。『ひろば』第2号(68年)を見ると、言語学セッションでは山本 進(大E19、現・留学生日本語教育センター助教授)、文学セッションでは内田憲男(大E18、現・英語学科助教授)らの名前が見られ、それぞれ個性的なエッセイを綴っている。また第3号(69年)では留学帰りの松田 武(大E18、現・英語学科教授)がアメリカ史についてのペーパーを寄稿している。彼らのそれぞれが、現在、母校の教壇に立ち、当時の関心事を引き続き研究していることは、ESSとして誇ってよいであろう。また、心理学セッションの田中(現・松見)淳子(大E19)は、現在アメリカで心理学者として活躍中であると聞く。

これらの学問的セッションが、当時流行した概念である「自主ゼミ」と軌を一にしているのは疑いない。現在ほどゼミ体制が必ずしも確立していない当時、言葉-ESSの場合は無論英語であるがーを通して学問を、という外大の基本理念をこのクラブに求めたのは想像に難くない。とって、言葉そのものを蔑ろにしていた訳ではあるまい。『ひろば』には英文による投稿も見られるが、なかにはハッとするくらい冴えた英語が飛び出してくることがあり、現役の後輩諸氏にも一読してもらいたいものである。

さらに忘れてはならないのは、ESSの活動を様々な形でサポートした教官たちの存在である。外語英語部初期の教官陣の協力、戦後、羽田がESS復興に果たした貢献は前述の通りである。また1965、6年頃、羽田のあとを受けて顧問となった英語学科外国人教師のAustin Faricyにしても、春・夏の合宿には殆ど欠かさず参加していたという。1988年秋に再来日した氏は、当時を振り返り感慨深げであった。現在では英語学科とはまったく独立したクラブである以上、おんぶにだっこという訳にはいかないが、外国人教師をはじめとして英語学科スタッフがなにかの助力をESSに与えていることは今も変わらない。

<ここ十数年>

前項で述べた、スピーチ、ディスカッション、ディベートは現在も続いている。スピーチはかつてのように弁論者が準備し、暗唱した内容を一方的に喋るだけというやりかたではなく、スピーチの内容を基に質疑応答があったり、即興スピーチを課すといった形式がここ十年で定着してきている。ディスカッションでは、優秀討論者を選出するなどの工夫をしているという。ディベートはもともとアメリカの大学で発達したものであり、かの地での討論理論の変化が日本の大学ディベートにも影響を与えるものらしい。ある命題について肯定側と否定側に別れて論じるのであるが、十年前なら肯定側が勝っていたはずなのに、今の理論では否定側の勝利、ということも考えられる。前述の三外大ディベート大会は、東京外大と神戸市外大のディベート・セッションがやや低調なこともあって、1985年を最後に無くなってしまった。日本の大学英語ディベートの大会では最も伝統あるものの一つであっただけに残念であるが、そのかわり三外大ディスカッションとして、毎年7月に持ちまわりで会を持っている。ディスカッションは部員すべてが参加できるので、親睦という意味ではよいのであろう。

1982年であったか、ESSにドラマ・セクションが誕生した。もちろんそれまでも英語劇を演ずる機会は何度もあったであろうが、セクションとして独立したのである。以来、春・秋の定期公演、シナリオ・リーディング・コンテストなどに参加して活躍している。ことに秋の公演は、ここしばらくミュージカルを演ずるのが定着したようで、ちょっとした外大名物になっている。前項で述べた「学問的セクション」はいつしか姿を消したが、これまた時代のしからしむるところか。学問をしなくなった、などというのは野暮で、各学科のゼミナール等の充実で学問的欲求が満たされるようになってきたのだ、と考えたい。

部員たちは、以上のようなセクション活動の他に、毎日昼休みに集うヌーン・レセス・アクティビティー(前出)、春・夏の合宿、コンパと様々な活動に青春を謳歌している(コンパと言えば、毎年1月に現役部員の音頭取りで、ESS OB総会なるものを催している。現役・卒業生の親睦を図るためのものだが、OB・OGはせいぜい30代半ばあたりまでの人しか参加しない傾向があり、少し残念である)。関西地区大学ESS連盟(KIEF)加盟校をはじめとする他大学との交流も盛んで、大会などに出ても、ここ数年成績は良好のようだ。それも英語学科の学生だけでなく、他学科の学生がコンテストで1位、2位をかっさらってくるのは頼もしい。昼間の仕事、夜の授業の合間を縫って活動する二部生も少数だがいる。さらにこれは余事だが、本学の現在の全体的傾向と同様、女子部員が圧倒的に多いことも書いておかねばなるまい。ある年など、入部者のうち、男子はたった一人だけだったこともある。その一方で、1978年以来、女性の部長が途絶えているのは珍現象といってよいかも知れない。その理由についての揣摩憶測は控えておく。

部員たちは、それぞれ自分にあったやりかたで、ESSからいろいろなことを学んで卒業していく。「いかに」英語を操るか、これは無論重要である。切磋琢磨しなければなるまい。と同時に、英語で「何を」語るのか。さらに、「なぜ」そうするのか。ESS部員は自分なりの答を模索して四年、五年の大学生活を送る。羽田三郎は「誤れる国粹主義」に「ささやかなレジスタンス」を試みた。半世紀後の私達はさて。

(ESS顧問 田尻 雅士・大E31)

## 29. 上方落語研究会

1967年6月30日、シベリヤドン 志辺里家鈍、コサック 故索、スバゲッテイアッチ 須波気亭阿墮、カルメンテイトウギユウ 借綿亭豆牛らにより当時の上八学舎A5教室において、大阪外国語大学上方落語研究会旗揚げ公演挙行される。“上八寄席”と名付けられ、この名は大学が箕面に移転した今も受けつがれている。なお鈍、故索らの名は、その後も世にはばかり続けている。

同年8月、初の夏合宿、笠置寺において行われる。参加者5名、最終日、参詣者や寺の住人達の前で発表会。聴衆の温かい一半分やけくその一応援に感激するが、反省材料も多く残る。先達をもたないド素人集団の、手探りで一步一步前進する日々が続く。

同年10月、外大祭出演のため猛練習に突入する。これまで、屋上、空教室などでの練習

であったが、この頃、宿直室の使用許可がおりる。以後、宿直室が落研の根城となる。

同年11月、外大祭大公演。総入場者数400名(?)を越す。ようやく市民権獲得か。

68年4月、潮岬青年の家において、春合宿行われる。

同年5月、新入生歓迎公演行われる。150名余りの聴衆を獲得するが、授業の合い間にやるということに問題あり。

71年、会員不足に落研解散の話題で部内もちきりとなる。落研史において、存続の危機は幾度となく訪れるが、この年がその第一波であった。

72年、しかし、入学式直後の新入生大量入部で落研復活。

同年6月2日放送の「素人名人会」において、借綿亭<sup>サンチョ</sup>惨兆が「江戸荒物」にて名人賞を獲得する。審査員の桂米朝曰く「これは玄人にみっちり稽古つけられているはずや」。

後に盗難<sup>トウナンジャラシラシ</sup>治家乱群の語るところによると、惨兆は落研時代、才気煥発にして向うところ敵無しであったそうな。

73年10月24日、借綿亭豆牛「結婚への扉」にテレビ出演。

この頃、須波<sup>スバゲツテイナガイ</sup>気亭奈害、高利家<sup>コウリキヤアボジ</sup>阿呆児の兩名、天王寺公園にて、落研部員としての誇りを胸に、ネタの無差別突然稽古を連日のように行うが、通行人の不評をかう。

惨兆、第6代会長に就任する。授業そっちのけで落研にとり組み、「落研かわら版」の出版、外大祭での「シンポジウム」参加など数々の試みに挑む、パワー全開の頃。

なお、この後落研の歴史を記した資料がなく、いきなりとぶが、

87年10月10日、吹田メイシアターにて、20周年記念落語会開かれる。大盛況。

同年12月吉日、20代会長・父達を中心に20周年記念誌発行。

前後するが、86年1月、印度<sup>インド</sup>家<sup>キアッサム</sup>暑寒、冬登山で遭難のまま帰らぬ人となる。

そして92年3月現在、外大落研は、会長以下11名の少数精鋭部隊として、志水先生(現、落研顧問)、学生課、邦楽部さん(部屋を共有している)、生協の方々、その他、寄席にお来し下さるの方々、間谷の奥さま方に迷惑をかけ続けている。

(外山 勝也)



## 第4章 附属図書館

### (1) 創設期

#### 〈外語図書館公開の方針〉

大阪外国語学校が開校して間もない大正11(1922)年4月20日付『大阪朝日新聞』に、恐らく本学図書館に関しては最初のものであろうと思われる次の記事が掲載されている。

臚<sup>やが</sup>て公開する

#### 外語校の図書館

大阪外国語学校は今年開校したばかりであるが、既に1万冊近い図書を購入して居る。之は個人の蒐集した蔵書幾口かをそっくり購入したのであるが、その中の最主要的なものは同校教授で有名な英語学者、数学者なる佐久間信恭氏の集めたもので3,000余冊に上り英文学に関しては殆ど完璧に近いもので中には非常な珍書も少くない。又、独逸語のものでは先頃物故した大津康氏の蔵書がある。同校では是等の書物を学校だけに独占するのは惜しむ可きことであるのみならず、大阪には図書館の設備甚だ不十分であるから行々は学校の図書館を公開して市民のために利便を与へたいと希望して居る。もし之が実現すれば同校は市内でも知識階級の人の多い地域であるから市民のためには非常な利益である。(中略)斯くして学校が単に学生を養ふのみならず社会に直接有益な知識を供給し教育の社会化といふ現在の理想を遺憾なく実現しやうというのが学校の意気込みである。

#### 〈図書 7,626冊〉

市民のための図書館公開という発想は、今日の生涯教育・学習の考え方を先取りするもので、いかにも中目覚初代校長らしいアイデアといえよう。事実、外語図書館規程第2条は「卒業生及校長ノ許可ヲ受ケタル者ハ閲覧室ニ於テ図書ヲ借覧スルコトヲ得」と定め、教職員、生徒以外にも利用の道を開いていたが、実際にどの程度市民に利用されたかどうかは明らかではない。また記事には「1万冊近い図書」とあるが、大正11年の『学校一覧』および『開校記念一覧』によると、保有図書は和漢書 794部 2,296冊、洋書 3,898部 5,330冊、合計 4,692部 7,626冊であった。

## 〈図書課長と図書課〉

現在の本学の図書館設置は、国立学校設置法の「国立大学に附属図書館を置く」との規定に基づくもので、国立大学図書館がすべて「附属図書館」と呼ばれるのは、この法律的根拠によるものである。図書館長についても、国立学校設置法施行規則に「国立大学の附属図書館に館長を置き、その大学の教授をもって充てる」と定められている。

しかし専門学校令と文部省直轄諸学校官制に基づく大阪外国語学校時代の図書館には、今日のような明確な法令的根拠はなく、学則細則の教育事務分掌規程、校務分掌規程に定められた図書課長と図書課が、図書館規程に基づいて運用に当たっていた。

図書課長は学校長が教授のなかから任命すると定められており、外語初代図書課長事務取扱は伊藤資生(商業)、図書課員は書記・中村知、雇・田中小一であった。図書課の主管事務は

- (1) 図書ノ購入及ビ修理ノ計画ニ関スル事
- (1) 図書ノ保存及ビ整理ニ関スル事
- (1) 図書ノ貸付及ビ閲覧ニ関スル事
- (1) 図書目録ニ関スル事
- (1) 書庫及ビ図書閲覧室ニ関スル事
- (1) 教科書冊子ノ印刷ニ関スル事
- (1) 学術報告等ノ編纂発行ニ関スル事
- (1) 活字印刷機械並ビニ附属品ノ管理ニ関スル事
- (1) 其他図書ニ関スル一切ノ事項

[大正11年発行『大阪外国語学校一覧』]

とされた。「教科書冊子ノ印刷」や「活字印刷機械並ニ附属品ノ管理」が図書課の仕事とされているが、中目校校長発案になる校内印刷の構想は実現しなかった。同校長退官(昭和8年9月27日)後の昭和9年度版『学校一覧』の図書課主管事務からは、教科書印刷、学術報告等の編纂発行、活字印刷機械管理に関する事項が削除されている。校内印刷構想については後日、中目校長が次のように回想している。

「私が学校創立と同時に考えてとうとう出来なかったのは印刷所です。語学の中には漢字ローマ字以外の文字を使うものが色々あります。その頃東京に蒙古語の活字を持つてゐる所が一ヶ所あっただけで、アラビア文字・満州文字(清文)などで印刷する所がありません。どうしても教科書なり論文なりは学校で印刷せねばならぬと思ひました。満州文字の活字は天理印刷所で造ろうという事でしたが、これも実現は致しませんでした。ところが35年後の今日、沢先生などの御骨折りで、江南書院から『アジア語学双書』というものが出版される事になり、その著者は総て大阪外国語大学の先生方であります。私は非常にうれしく思います」[外大同窓会「母校創立35周年記念会誌」]

中目校長が今日、印刷製本室はもちろん、マイクロフィルム室、視聴覚教室、ビデオル

ーム、同時通訳室からコンピューター室まで完備した近代的な附属図書館を目にすることができれば、どのような感想を抱くことであろうか。

#### 〈図書館規程〉

大阪外国語学校開校当初の図書館規程は次の通りであった。

#### 図書館規程

- 第1条 閲覧室ニ於イテ図書ヲ閲覧セントスル時ハ教官自ラ書庫ニ入りテ図書ヲ検索シテ借覧スルコトヲ得 生徒ハ掛員ニ請ヒ借覧ノ手續ヲナスヘシ
- 第2条 卒業生及校長ノ許可ヲ受ケタル者ハ閲覧室ニ於テ図書ヲ借覧スルコトヲ得
- 第3条 図書ヲ借覧スル者ハ時々ノ公示ニ注意シ且之ヲ遵守スヘシ
- 第4条 閲覧室ハ本校休業日ヲ除ク外毎日之ヲ開ク 但シ閉閑時刻ハ其都度之ヲ提示ス  
右休業日ノ外曝書ニ必要ナル期間臨時休業スルコトアルヘシ
- 第5条 本校備付ケノ図書ハ本校職員及特ニ校長ノ許可シタル者ニ貸付スルコトヲ得 前項ノ場合ニ於ケル貸付ハ教官10部30冊以内、事務員5部10冊以内トス 和漢装丁ノ図書ハ右冊数ヲ倍加スルコトヲ得  
但シ校長室、教官室、各教室、研究室及ビ各課事務室ニ於テ図書ノ備付若クハ保管ヲ要スルタメノ貸付ニ対シテハ各室ノ上席者又ハ各学科主任ガ該図書ノ借受及保管ニツキテ其責ニ任シ其貸付冊数ハ制限セス
- 第6条 左ニ掲クル図書ニ関シテハ第5条第1項ヲ適用セス
1. 貴重図書
  2. 委託図書
  3. 辞書類
  4. 統計書類
  5. 新聞及新刊ノ雑誌
- 第7条 図書ノ貸付ケヲ受ケントスルモノハ先ヅ定式ノ借用証用紙ニ書名、番号、姓名其他必要ナル事項ヲ書入捺印ノ上掛員ニ差出スヘシ
- 第8条 貸付ノ図書ハ調査ノ為メ臨時返納セシムルコトアルヘシ、此場合ニハ3日以前ニ其旨ヲ通知スヘク又掛員出張ノ上点検スル場合ニハ其前日ニ其旨ヲ通知スヘシ
- 第9条 凡テ借用シタル図書ハ他ニ転貸スルコトヲ許サス
- 第10条 夏期休業中ハ図書ノ貸付ヲナサス  
但シ学校長ノ許可ヲ得タルモノハ此限りニアラス
- 第11条 借用シタル図書ハ丁寧ニ取扱ヒ、字句ヲ改竄記入又ハ塗抹シ若クハ句読ヲ施ス等ノ事ヲナスヘカラス、万一破損、汚染若クハ紛失シタルモノハ修繕ヲ加



生徒閲覧室(大正末年頃)



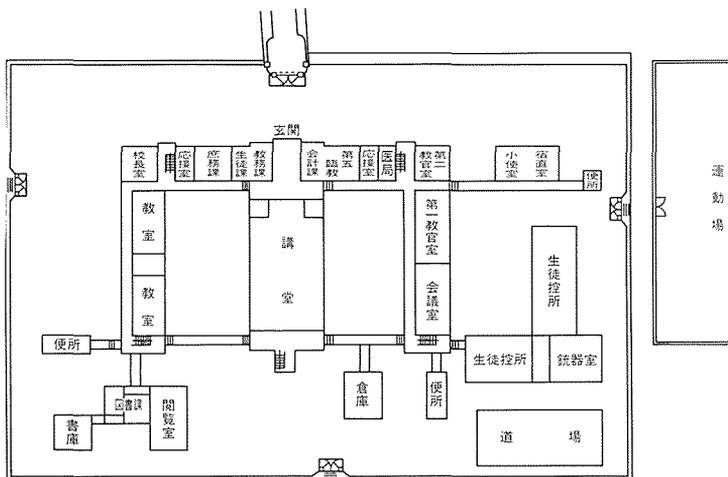
(昭和10年頃)

ヘシメ若クハ代本又ハ代価ヲ以テ弁償セシム

現在の附属図書館利用については、附属図書館規則のほか視聴覚資料利用規程、文献複写規程、貴重図書・資料利用者心得、弁償基準などが制定されているが、外語図書館規程は70年を経た今日の図書館規則と比べてみても、中身に大きな違いはない。図書課の仕事にしても、コンピューター関係業務を除けば、本質的には今日と大差ないといえそうである。

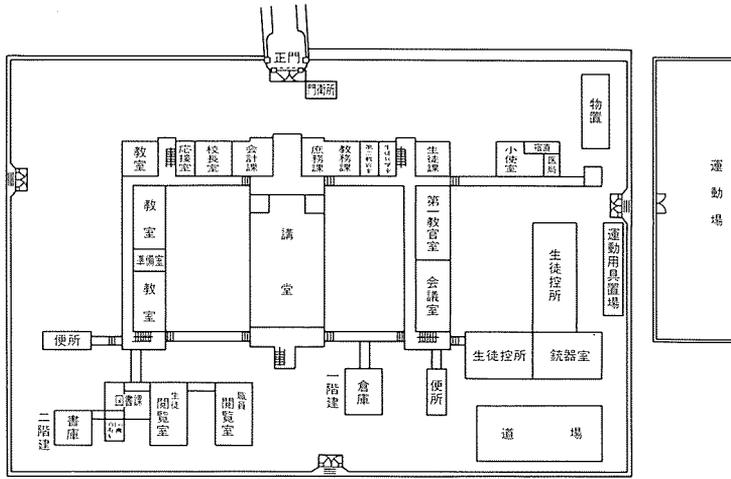
#### <閲覧室>

大正12年版『学校一覧』に大阪外国語学校敷地と校舎略図(図1)が掲載されている。図書館関係は校舎西北隅に配置されており、面積はこの略図には記載されていないが、鉄筋・3階建書庫は延べ48坪(約158平方メートル)、木造平屋家図書課は開架棚設置スペースを含め20坪(約66平方メートル)、同じく木造平屋建閲覧室は28坪(約92平方メートル)であった。



<図-1>

それが昭和6年の略図(図2)では、同面積の閲覧室一棟が増設されて生徒閲覧室と職員閲覧室に分かれ、さらに図書消毒室(約13平方メートル)も新設されている。



〈図-2〉

職員より当然生徒の方が数が多いのに、両閲覧室が同じ面積というのは不合理のようであるが、当時、教官用には相部屋の第1、第2教官室があるだけで今日のような個人研究室がなかったので、研究室に代わるスペース確保が必要だったためと思われる。小規模ながら図書消毒室が設けられたのは、防虫のためと思われるが、戦前“亡国病”とまで呼ばれた結核はじめ伝染病予防の配慮もあったことであろう。

当時の生徒閲覧室の規模はどのようであったか。昭和49年9月発行の附属図書館『館報』第1号に出口安正事務長(D12)は次のように記している。

「このちっぽけな閲覧室には、その中に約30センチほどの高さの木の衝立を取付けた、粗末な木製の、向い合わせに座れるようになった6人掛けの閲覧机が、合計6脚ばかり2流れに配置されており、新聞立が4個ほど置かれているに過ぎない。収容人員が、やっと36人程度の大変質素なものであった。それでも、学生にとってはそこでは、『改造』を読み『中央公論』を借り出し、あるいは専攻語学の勉強のために種々な辞書類を借覧でき、倦きると『英語青年』にその疲れを癒すことのできる唯一のオアシスであり、厳肅な勉学の間であった。たとえ、その簡略籐椅子たるや、直径30センチの円形籐製座席に曲木をくっつけた、長半円形の背もたれの付いた夏椅子のような粗末なものであっても……」

#### 〈戦争と図書館〉

蔵書数7,626冊、課長以下3人の図書課でスタートした外語図書館であったが、昭和3年には蔵書数26,070冊、昭和6年には34,500冊と開校時の約4.5倍にふえている。年間約3,000

冊の増加ペースである。当時の旧制専門学校の平均的な蔵書数はどの程度のものであったのか、資料がないため明らかではないが、大阪外国語学校と同じ大正11年4月に開校した大阪高等学校(現・大阪大学)の昭和13年当時の蔵書数約3万冊[『大阪大学五十年史・通史』]と比べると、外語図書館の蔵書は一応、平均以上のものであったと見てもよさそうである。

しかし、外語生徒の図書館に対する評価は、かなり厳しいものであった。通史第2章で触れた昭和6年2月の中目校長排斥ストライキの際、生徒代表が読み上げた校長不信任決議の第1項目は「昭和4年、陛下大阪御臨幸の際、御陪食に召されたる校長に御下問あり。之に対する奉答に於いて亜細亜方面満蒙、印度、波斯、アラビア其の他書籍を集め研究せしむるに力を注ぐとあるが、本校の実情は然らず」というもので、アジア関係専門書の不備を追及している。

さらに同年11月24日、校内に撒布された『大阪外語学生新聞』第3号には、(1)教師に対して不満はないか(2)授業はおもしろいかの問いかけの次に(3)図書館の本はあれで十分か、とあり、学内改革闘争の標的の一つに図書館整備・充実が挙げられていたことを物語っている。

その後の蔵書数の推移を『学校一覧』によってたどってみると、昭和9年38,747冊、10年39,529冊、12年になって41,561冊、15年45,628冊、17年47,071冊というように、増加ペースは年間1,000冊に落ちてくる。昭和6年の「満州事変」以降、日中戦争、太平洋戦争と戦争一色の時代を反映して、洋書輸入が途絶えたほか、図書購入予算の減額などの措置もとられたのか、詳細は明らかではないが、戦争の影響は否定できないところであろう。

図書課の陣容も課長以下3人体制が昭和10年までつづき、昭和11年以降は図書課長・稲村純一(地理)以下、雇2、臨時雇1の4人体制となるが、昭和17年度版『学校一覧』には、図書課長・大平頼母(商品学・英語)のほか雇1の記載しかない。

教職員も相次いで戦線に動員されていた当時の状況によるものであったろうか。

### 〈陳舜臣の回想〉

図書館長は大平のあと上田畊甫(英語)、つづいて金子二郎(中国語)が就任するが、このころ西南亜細亜語研究所の助手を務めていた作家の陳舜臣( I P 20)は、図書館事務室にデスクを置いてインド語辞典編纂に従事する一方、図書館の仕事も手伝ったと、当時を次のように回想している。

「若き日の金子教授は意欲的であった。戦局は日に日にきびしく紙は不足していた。だが、外語の倉庫には、創立以来の入試答案が保管されていた。採点済みのもので、ほとんどが保存義務年限をとくにすぎている。当時の入試答案用紙はおどろくほど上質で、その裏がじゅうぶんに使える。金子館長はそれを利用して、新着図書をかんとんに解説するパンフレットを作成して、各教室に配ることを考え出された。そして私に解説を書けと命じられたのである。

たまたま図書館に机を置いてもらっただけで、給料をもらっていないのだから、べつに図書館の仕事をするいわれはないが、私は本好きだったので、よろこんでひきうけることにした。本来なら研究所助手としてしなければならない時間を、図書館のほうにまわしたことになる。

戦局はますますきびしくなり、私も、この辞典編纂は未完に終わりそうな予感をもった。学生の読書の手引でもするほうが、有意義かもしれないと判断したのである。

学徒出陣、そして学生の工場への動員などで、キャンパスははだいにさびしくなった。私は細々と辞典編纂のためのカードづくりをし、新着図書の解説をかいていたが、ときどき同期生が軍服姿で立ち寄ってくれた。私たちのときの配属将校の今田大佐が、二十三部隊長となっていたので、外語出身者はなにかとよくしてもらったらしい。

——おまえはインド語をやったんだから、忘れないように勉強してこい。  
という名目の休暇をもらって、母校に遊びにくる見習士官もいた。

同期マレー語の塩見季彦君が、海軍少尉の軍服で訪ねてきてくれたことはわすれられない。彼はその後、特攻隊員として、沖縄の海に散った。外語マラソン最強のランナーで、さっぱりした気性の好漢だった。

暗い戦時中の青春だが、図書館にいたのが、せめてものことだったとおもう。一日の大半、書庫の中にいることが多かった。書庫によく来ていたのは英語の庭田四郎先生であった。いわば書庫仲間であったが、庭田氏はやがて図書館に勤めておられたト田勝美さんと結婚された。

学校に残ったのは秀才だったからだろうと言われるが、ありようは同級生は兵隊へとられて、私しかいなかったからだろう」〔「西南亜細亜語研究所のころ」陳舜臣『わが国における外国語研究・教育の史的考察(下)』〕

そして勤労働員と学徒出陣で、利用者もなくなった図書館は、昭和20年3月の空襲で、書庫を除いて焼けてしまったことは、通史編で述べた。しかし、書庫が入口の鉄扉2枚に守られて焼け残ったことは不幸中の幸いであった。焼失をまぬかれた蔵書約6万冊。これなくしては、外専から外大への昇格は不可能であったろうと言われるほどである。

#### 〈高槻時代の図書館〉

しかし、図書館受難時代は敗戦後もつづく。校舎を焼失した外専は、間借り授業をつづけたあと大阪を離れ、昭和21年2月から高槻市の旧工兵隊跡へ移転した。旧兵舎の一室が図書館にあてられた。高槻移転後間もなく図書館長は金子から林和夫(フランス語)に変わる。大阪から高槻へ、とても図書館とはいえないようなところへ風呂敷に包んだ重たい本を毎日何回かかついで運ぶ日がつづいた。食うにも事欠く物資欠乏時代である。

「勿論、図書館資料類は殆ど入手できず、日常業務がすべて研究者・学習者の要求に基づき、その資料さがしに終始するというようなことの連続であった。したがって、

殆んど古ぼけた蔵書のみが、貴重視され、種々な図書が、いつの間にか紛失してう  
というような事態が、日常茶飯事化するのではないかとさえ思われるような風潮であ  
った。館員は資料の紛失防止に汲々としていて、遂には、4～5人の館員では手が回  
らず、蔵書目録、検索カード等の道具の焼失した状態であったにも不拘、止むを得ず、  
自由接架を禁止するという最悪の措置を執らざるを得ない有様であった」〔「附属図書  
館の50年(1)」出口安正『館報』第1号〕

蔵書の紛失あるいは盗難防止に気を使わなければならなかった戦後混乱期の図書館の一  
断面である。外専最後の図書館長は岩崎兵一郎(ロシア語)であった。

#### <悠々寮文庫>

附属図書館には「悠々寮文庫」の印を押した本がある。

新制大学移行を目前にした昭和23年10月12日、高槻校舎南棟2階の悠々寮から出火、南  
棟約1,900平方メートルを全焼したことは通史編で述べたが、着のみ着のまま焼け出された寮生に  
対して関西一円の大学・高専の学友から救援の浄財カンパが寄せられた。以下は悠々寮文  
庫誕生にまつわるエピソードである。

「罹災学生の救援のなかでも、やはり寝具の調達が一番むずかしい問題だった。こ  
の時、会計課の中山博氏から耳よりな申し出があった。氏の戦友に米軍基地で働いて  
いる人がいて、軍の払下げ毛布を安価で斡旋してもらえるとという。中山氏は学内に住  
んでいて、学生にも親しまれていたし、竹を割ったような正直な性格の人だ。そこで  
会議をひらいて検討の結果、浄財のうちからとりあえず2万円を毛布代として支出、  
斡旋を頼むことになった。残念なことには、その戦友は中山氏から金を受けるとと基  
地に入っていったまま二度と姿をあらわさなかった。まんまと一杯喰わされたと知っ  
た中山氏の激怒と落胆ぶりは、今も眼前にハッキリ浮かぶが、この件については、学  
生から見れば中山氏もグルではないかと疑いが出、しかもカンパの浄財であるだけに、  
責任を氏に負わせるほかないときびしい結論が下された。氏は結局退官して退職金で  
弁償したが、まったく大きな犠牲を出してしまった。この金の用途は、いろいろ研究  
されたが、図書を購入して図書館に寄付することに落ちついた。悠々寮文庫という印  
を捺した本が、今もこの悲しい不幸な事件の記念として残っている」〔「追憶の一齣・  
外大誕生前夜」小林武三『学生部広報』第37号〕

米軍払い下げ物資をめぐる悪質ブローカーが横行した時代の悲劇であった。

このころは在校生、職員、卒業生、父母らがそれぞれ復興委員会を結成、図書館拡充費  
200万円はじめ建物改裝修理費など総額500万円の母校復興計画予算を組み、学園復興、さ  
らに大学移行のための資金集めに皆が汗を流していた時期でもあったのである。

## (2) 成長期

ここでは大阪外国語大学設置以降、昭和54年の箕面市粟生間谷キャンパスへの移転まで30年間の附属図書館成長の足取りを概観する。

昭和23年4月22日、大阪外事専門学校が文部省に提出した国立大阪外国語大学設置申請書に記載されている蔵書数は76,553冊である。20年3月の空襲にも書庫が焼失をまぬがれたため約6万冊の蔵書は無事であったが、その後3年間で約16,000冊の増加をみたわけである。当時としては驚異的な増加ペースであった。新制大学設置認可にあたっては、図書館蔵書数も一つの基準とされたため、大学移行を希望するところは、あらゆる手段を講じて図書確保に努めた。大学設置委員会委員の現地視察に備え、教官個人の蔵書まで狩り集めて数を揃える“水増し”が、当時の関係者の間では常識となっていたと言われるが、本学の場合は、前記の悠々寮文庫、さらに復興委員会の募金活動で図書館蔵書の整備・増加に努力したのであった。

### 〈大学附属図書館の発足〉

こうした努力が実って24年5月31日、国立学校設置法により、大阪外事専門学校を包括して大阪外国語大学が設置され、旧制度の図書館も同設置法に基づく大学附属図書館として新しく発足したわけである。もっとも附属図書館といっても、蔵書はともかく、施設たるや明治42年建築の木造2階建オンボロ旧兵舎(延べ約500平方メートル)がすべてという貧弱なものに過ぎなかった。

### 〈79,449冊でスタート〉

大学移行後の24年6月発行『大阪外国語大学便覧』によれば、附属図書館蔵書は大学蔵書、復興文庫、同窓会文庫、父兄会文庫合わせて79,449冊とある。大正11年、大阪外国語学校開校当初の7,626冊に比べ、10倍の蔵書を抱えてスタートした附属図書館の初代館長はロシア語学科教授の岩崎兵一郎、事務長は、のちイタリア語学科教官となる文部事務官・宮本幸三郎であった。

蔵書数は25年81,796冊、27年84,691冊と推移するが、このころの図書館は館長、事務長の下に庶務係員1人、司書係員4人という陣容であった。

### 〈上八図書館完成〉

昭和29年3月、上八学舎に鉄筋コンクリート3階建の図書館が完成、4月24日に落成披露が行われた。26年5月、大学設置審議会第9特別委員会の答申に基づく文部省の「外大大阪統合」の方針を受けて、本学では27年度以降、後期課程の授業が大阪学舎で行われるなど、上八への統合復帰が緒についており、新しい図書館建設も進められていたのである。

焼け残った書庫に接続して南側に伸びる新図書館は延べ約1,900平方メートル。1階が事務室、2階が学生の閲覧室、3階が映写室や教官研究室の一部に当てられた。粟生間谷キャンパスの現在の図書館に比べればはるかに小規模ではあるが、高槻学舎の図書館しか知らない学生にとっては、初めての近代的図書館であった。『アーリヤ学会会報』第25号は「学内便り」の欄で「鉄筋コンクリート3階建の豪華図書館」完成を伝えている。約300平方メートルの明るい閲覧室には学生があふれた。当時「近隣の大学では最も快適な図書室」[「学園だより」羽田三郎『扉』第7号]であった。

この年は第5福竜丸がビキニの米水爆実験で被災、「死の灰」「水爆マグロ」が流行語となり、原水爆禁止運動が高揚する一方で、陸海空3軍の自衛隊が発足。テレビのプロレス実況中継が人気を呼び、街頭テレビに観客がむらかった。やがて始まる経済高度成長前夜であった。

#### 〈蔵書10万冊突破〉

図書館完成の翌30年5月現在の蔵書数は和漢書66,814冊、洋書37,025冊、計103,839冊と10万の大台を越えた。図書館の運営は館長以下8人体制。従来の庶務、司書の2係は28年度から管理、整理の2係となっている。

32年4月からは前期課程もすべて大阪学舎に移り、本学学舎の上八への統合・完全復帰が実現した。これに伴って高槻図書館も大阪学舎へ移転、上八の新図書館が大学総合図書館として第一歩を踏み出す。高槻から大阪へ膨大な図書の移転は予想以上の難事業であったが、館員の努力で乗り切った。

#### 〈洋書比率の増大〉

短期大学部の併設(33年度)、第二部の設置(40年度)、大学院修士課程の設置(44年度)のほか、第一部でもペルシア(36年度)、朝鮮(38年度)、イタリア(39年度)、デンマーク(41年度)各語学科の新設が相次ぎ、大学組織と学問領域が急速に拡大したこの時期、附属図書館も急成長をとげる。

短期大学部が6語科となった34年5月現在の蔵書数は和漢書76,604冊(64%)、洋書44,063冊(36%)、計120,667冊。37年5月現在では和漢書84,500冊(61%)、洋書52,301冊(39%)、計136,801冊。さらに第二部設置の翌年41年5月は和漢書89,838冊(59.4%)、洋書61,304冊(40.6%)、計151,142冊。和漢書に比し洋書の購入割合が年を追って増加してきていることについて『学生便覧』は「生のままの現代語ならびに民情、民俗等に関する外国図書の必要が激増してきていることの証左にはかならない」と述べている。

#### 〈国立大学初のLL導入〉

語学教育にとって画期的な役割を果たす設備と期待されたLL(Language Laboratory =

語学実習装置)40ブースが本学に導入されたのは、昭和37年であった。この年2月19日には同装置完成披露会が学内で催されている。

戦後、アメリカの大学における語学教育でのL.L.利用の実情が伝えられて以来、わが国でも関心が高まり、一部私立大学に導入され始めていたが、国立大学でL.L.教室を設置し、これを正規授業に取り入れたのは本学が最初であった。36年6月就任した森沢三郎学長の発議で導入計画が進められ、文部省予算のほか大阪財界の寄付によって実現したものである。

以後30年を経過した今日では、中・高等学校にも導入され、珍しくもない設備ではあるが、そのころは南山大学、神戸市外大など二、三の大学にしか導入されていなかった。当時は耳馴れなかったL.L.装置について37年版『大学要覧』は特に一節を設け、次のように解説している。

語学実習装置(ランゲージ・ラボラトリー)

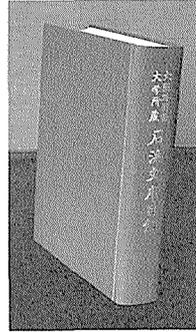
#### L.L.と語学教授

言語が第一義的に音声記号の体系であることを考えると、いわゆるaural-oral(聴取一口述的)な訓練が、語学の修得に根本的な重要性を持つことは明白で、従来の専ら視覚的な言語教育は、言語本来の機能を十分に考慮に入れたものではありませんでした。この理屈は誰でもわかるのですが、我が国のように大勢の学生をかかえた教室では、個人差のある一人一人の学生に徹底した音声訓練を施すことは、実際問題としては不可能であったところ、近代の電子工学の発達は、その悲願を実現する装置を案出したわけで、これがこのL.L.装置であります。L.L.は一つのコンソール(マスター・テーブル)と数十名が入れるブースから成立しており、前者からnative speakerを利用した組織的な教材を送り、後者はそれを自分のテープに録音すると同時にそれを手本として模倣し録音の上、再生、再吹きこみを繰返すことによって、多数の学生が一時に、かつ個人的に、心いくまで訓練することができます。ブース形式は学習者の心理的障害を除去するのに大きな効果がある反面、解放感が行き過ぎる恐れがありますので、教授者はコンソールから各ブースを絶えずチェックしたり助言指導を与えたり、また学生の活動を録音して採点判定の材料にします。教材としては次第に程度を高め、pattern practice から dialogue practiceを経て、スピーチやドラマや文学作品(特に詩など)の鑑賞に資することも考えられ、また技術的には同時通訳の練習を行うこともできるでしょう。歌曲の練習にも威力をもつことは必定であります。もちろん、言語の習得には多方面の配慮があるべきで、決してL.L.のみで万事が充足されるわけではありませんが、その最も基本的な部分がL.L.によって果たされることは疑うべきもありません。

翌38年には、さらに30ブースが追加され、二つのL.L.教室は各語科の授業にフルに利用され「聞く」「話す」「繰り返す」「比べる」などの訓練を積んだ。40年には学生自習専用室



石浜純太郎博士



『石浜文庫目録』

(テープトレーナー室)も設置されている。ステレオ式テープレコーダー10数台が備えられ、アダプターの利用によって同時に30人の学生がヒアリング学習できるようになった。

LL導入に伴って図書館事務部に新しく視聴覚資料係が設けられ、管理、整理係と合わせ3係制となって人員も13人に増員された。初代視聴覚資料係長は、のちスウェーデン語非常勤講師を兼ねる文部事務官・小室昌久であった。

その後の図書増加に対応して図書館事務部は42年度から運用係が加わった4係制となり、47年度からは、この運用係がさらに第1運用係、第2運用係に分かれ5係制となり、陣容も強化された。

### 〈石浜文庫〉

43年5月、和漢書96,344冊(58.1%)、洋書69,350冊(41.9%)、計165,694冊に達した図書館蔵書は、故・石浜純太郎博士の蔵書(以下、石浜文庫という)受け入れによって、飛躍的な質的向上をとげる。

東洋学界屈指といわれる石浜文庫とは、どのようなものか。当時の附属図書館長であり、石浜文庫目録編纂委員長も務めた名誉教授・外山軍治(東洋史学)の解説を引用するのが最も適当であろう。52年3月発行された『大阪外国語大学所蔵 石浜文庫目録』に寄せられたものである。

### 石浜文庫について

外山軍治

石浜文庫というのは、本学の所蔵に帰した故石浜純太郎博士(1888～1968)旧蔵の図書に対して、本学附属図書館がとくに名づけた称呼である。その中には、昭和45年3月博士の遺族より購入したものと、その後、遺族より寄贈をうけたものからなっており、両者を併せて博士蔵書の全部ということになる。その冊数、内訳は次の通りである。

漢籍	20,262冊	和書	9,021冊
洋書	3,269冊	雑誌	9,743冊

博士は明治21年大阪市に生まれ、同44年東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業後郷里に帰り、家業である製菓業を継承したが、その方にはあまり身を入れず、もっぱら学究としての道を歩んだ。元来漢学畑に育った人であるが、中国の伝統の学問にはあきたらず、新しい学問の分野の開拓を志向して、中国周辺諸地域の言語・文化に関心を示した。博士が、大正11年創立当初の大阪外国語学校(本学の前身)に聴講生として入学し、二年間モンゴル語の習得につとめたのも、その一つのあらわれである。

それと前後して、当時京都帝国大学文学部東洋史学の教授であった内藤虎次郎(湖南)博士に弟子の礼をとり、以来いわゆる京都学派に属する諸学者との交友が生じた。その頃の京都学派は、敦煌石窟より発見せられた書籍文書の研究に没頭していたが、博士もまたこの流行に投じて敦煌学一方の重鎮となった。そしてその後学問分野も、漢学から発して言語学・歴史学の世界に進入し、領域も、中国・西域・インド学にひろがり、考証の精緻なことと学識の該博なことをもって名を馳せるに至った。

博士はまた、大阪の町人学者の伝統をうけつぎ、市井の学者であることに誇りをもちつづけた。生活のために学校の教師になる必要もなかったが、またなろうとも考えなかった。博士が人々から羨望せられたのは、製菓会社の経営は他人にまかせ、余裕のある環境で学問の道一筋にゆくことができたことである。そして、書物を愛した博士は、このような好条件を利して蔵書の数をややし、学界屈指といわれるほどになった。今日本学に帰している石浜文庫がすなわちこれであって、博士が半世紀以上にわたって収集した苦心の結晶ともいべきものである。

では石浜文庫にはどのような書物が、どのようにして収められているのか。一わたり概説してみよう。

まず第一に、西夏語、モンゴル語文献などに稀覯書というべきものが含まれているほか、博士の造詣の深い、モンゴル語・満州語・西夏語・ウイグル語・チベット語等に関する資料が数多く収められている。これはこの蔵書の誇るもっとも大きな特徴であろう。

つぎに漢書は、博士が元来漢文学を修めた人だけあって、その収集は経・史・子・集の各部門にわたって層の厚さを示している。とくに博士が私淑していた羅振玉・王国維をはじめ、中国近代語学者の業績が、哲学・史学・語学・文学の各方面にわたって網羅されている。中でも、文字学・金石学・音韻学・目録学等に関する文献が充実していることは心強い。博士が新しい学問の動向に敏感であったことはさきに述べたが、殷墟書契関係文献や、敦煌学関係の文献はほとんどもれなく集蔵されている。

ところが、博士はこのような著名な蔵書家ではあるが、善本と称せられる、板本のよいものはあまり入っていないのである。これは博士の収書の方針がそうさせたのであって、石印(つまりチープエディション)主義であつめるのだということを公表していたと聞く。実は、京都には内藤博士や、博士よりも少し年少の神田喜一郎博士(現日

本学士院会員)のような善本の収蔵をもって鳴る人々がいて、とうてい太刀打ちができないので、あっさりあきらめてしまったのかも知れない。しかし、石印主義で集められたことが非常に効果的であった。大学図書館としては、板本のよいものよりも、石印本であっても収集のひろい方が結構である。但し、善本の部類に入らないでも、今日入手不可能な板本が非常に多く含まれていることをつけ加えておかねばならない。

それとともに、博士は、いわゆる俗書といって、当時の京大などでは購入をはばかる種類の書物には、とくに目をかけて集めている。これは、今日になっては非常に貴いことで、石浜文庫の特徴の一つはこの点にある。

洋書の収蔵は実にすばらしく、歴史学・言語学の分野にわたって偉容を誇っている。博士は、大正8、9年頃から昭和12、3年頃までの間に、丸善を通じて輸入された東洋学関係の洋書は、ほとんどもれなく買ったという噂がある。これはほんとうにその通りであったようである。その領域も、東アジア・中央アジア・西南アジアにわたっており、ことにスタイン・ペリオ・ヘディンら、二十世紀初頭に行われた中央アジア学術探検隊の報告書の類は遺漏なく集められている。また博士がロシアの東洋学については該博な知識を有せられたことは有名だが、関係文献の収集においても他の追随を許さない。その他、単行書のほかに、欧米の東洋学者から数多くの論文抜刷を寄贈せられているが、中には全く得難い貴重なものが多い。

和書においては、明治、大正、昭和三代にわたる東洋学・言語学・仏教学関係文献が収められており、その収書は博士逝去の昭和43年に到るまで、断絶することなく続けられているのは敬服に値する。

そのほか、日本・中国・欧米の学術雑誌のバックナンバーの種類も多く、主要なものや、発行の古いものはほとんどそのすべてを見出すことができるのである。

さらに看過することのできないのは、博士が強い関心をよせていた近世大阪の文化史関係の文献が多いことである。その質量ともに他の追随を許さないであろう。

またその収蔵は中国書画関係の出版物にも及んでおり、中国・日本で出版せられた複製本はほとんど全部入っていて、博士の教養のひろさをしのばせる。博士は雑学をもって自ら持しているところがあったが、いろいろな書物を蔵していて、大衆小説の類にまで及んでいる。博士の遺族は、これが父の学問の特徴なのだから、全部一括してめんどうをみてもらいたいと希望しておられる。

さてこの蔵書が本学にひきとられたのは、昭和43年上半年期、金子学長、畠中館長時代であった。その年の7月、私は畠中氏の後をうけて図書館長に就任したのであるが、そのときには、すでに新館書庫の一階にあふれ出るように積みかさねられていた。以来私はこの石浜文庫ととりくむこととなったのである。博士には昭和初期、京大在学中からおちかづきを願っており、いろいろと教示を受けた関係もある。たいへんな仕事だが、やりがいのある仕事だと心得てこれに当たった。まず数名のアルバイト学生の

手もかりて所在目録の作製をいそいだ。この目録がその後文部省に対して購入費の申請をする段階で大いに役立った。虫喰いのひどいものも多かったので、夏季の数日、部屋を密封してガスによる殺虫を実施したこともある。44年の初めには和書・洋書・漢書とまとめて書架に一応ならべられ、大学設置審議会委員の視察に供するに耐えるほどになっていた。

外大が大学紛争の波にまきこまれたのはその頃からのことである。次第にエスカレートして一時全学封鎖も行われ、学内のガラスというガラスの大部分がこわれ、実に惨憺たる状態となった。私はまだ購入手続きも終わっていない蔵書を損傷するようなことがあってはならないと、この事には随分頭をなやましたが、おかげで杞憂に終り、ほっとした。

紛争がおさまりかけた頃から、購入費の交付を文部省に申請しようということになった。当時代行であった牧学長の指示をうけて、私が三宅事務局長とともに11月と12月に、文部省に赴いた。私は石浜博士の東洋学者としての名声、本学との浅からざる関係から説き始めて、その蔵書の内容がいかに豊富であるか、そして何故これが本学にとって必要であるか、というようなことを繰り返し説明した。当初、交渉はとうてい円滑に進むように見えなかったが、結局当方希望の特別予算が与えられることとなったのは幸いである。なお、蔵書の評価については、外語時代の蒙古語部卒業生である津田喜代獅氏らの尽力を得た。また、提出書類や目録の作製にあたっては、図書館全員の献身的な協力があつたことは、今でもさわやかな思い出になっている。

45年3月に購入がおわり、石浜文庫はいよいよ本学のものとなり、こんどは整理分類の段階に入った。館員の手によって、個々の書籍の整理が続けられた。帙のないものは帙をつくった。それでは費用がかさむので簡易なボール紙の帙で我慢するものもあつた。腐蝕が進み、今のうちに写真をとっておかねばならないものはつぎつぎにとつた。うら打ちすべきものはうら打ちした。それらの費用については、教授会会計委員会の配慮によって、連年、教官研究費の中から割愛をうけてまかなってきた。その仕事にあたるべき館員の手が足りないという事情もあるが、徐々にしかし的確に作業は続けられた。

また何とかして早く文庫を利用できるようにと考え、所在目録を作製するときにつくったカードを分類配列し、それを写真印刷に付して、仮り分類目録を急いだ。また、その後、寄贈を受けたものについても、所在目録が作られた。

一方、本格的な目録編纂をめざして、石浜文庫目録編纂委員会がつくられた。当時図書館長であった私が委員長となり、辻本春彦・荒井伸一・橋本勝・村田忠兵衛・伴康哉・勝藤猛および岡崎正孝の諸氏が委員として加わっている。分類困難な書籍の内容を検討して、しかるべき部門に入れるということは大切な仕事である。私のことはさておき、委員諸氏は、頻繁に図書館に立ち寄り、そのような作業に協力を惜しまな

かった。とくにモンゴル語関係文献については、荒井・橋本両氏の協力によって、著しく進捗の度が高い。

この委員会は46年6月、私が館長をやめてからもひきつづき存在し、50年4月、私の定年退職とともに発展的解消を遂げ、教授会所属の図書委員会にバトンタッチを行った。その後、目録作成の仕事は図書館員の手によって着々と進められ、この度いよいよ待望の“大阪外国語大学所蔵石浜文庫目録”ができたという。ご同慶にたえない。

なお移転に際しては、石浜文庫を収容できる十分なスペースをとり、その場で閲読できるように設備をつくってほしい。本学が石浜文庫をどのように活用するかは、学界注視のまとなっている。宝の持ち腐れだなどといわれたいにしたいものである。博士の遺族は博士と本学との深い因縁もさることながら、本学によってもっともよく活用してくれるであろうと期待して、一切を本学に託されたという。遺族の期待に応えることが、また博士の遺志にそう所以であると思う。

さいごに、私が直接石浜文庫の整理に関係している間に、ご助言ご鞭撻を賜った人人、とくに京都産業大学教授倉田淳之助、筑波大学名誉教授酒井忠夫両氏に対して深く謝意を表す。(本学名誉教授・元附属図書館長)

東京帝大支那文学科卒業後、大阪に帰り、家業の丸石製薬合名会社を継ぐ一方、34歳にして大正11年、開学したばかりの大阪外国語学校に改めて選科生として入学。蒙古語を学びながら当時、外国人教師として在学したソ連東方学の権威であるN・ネフスキーと知り合い、中国辺境文化史を研究、さらに大阪外事専門学校で言語学、民俗学講師を務めるなど、本学とは縁の深い石浜博士であったが、本学以外にも関西大学、京都大学、竜谷大学、天理大学などで教鞭をとっていただけに、石浜文庫に寄せる各大学の関心は高く、引く手あまたの状態であった。なかでも関西大学は熱心であった。石浜博士が文学博士の学位を受けたのは関西大学からである。

本学でも関係者が奔走した。前出『石浜文庫目録』の序に、当時の図書館長・芝池靖夫は次のように記している。

「まず、ご遺族石浜恒夫氏ご一統の終始渝らぬ芳情を記して心から感佩の意を致したい。遺宝をめぐり引く手あまたという状況下において、氏の厚志はついに微動だもするところがなかったのである。それを直接ささえたのは本学校友の故吉川勝太郎氏(先生と蒙古語部同期)および司馬遼太郎氏であった。また当時の学長金子二郎、同窓会長繁村長孝氏らをはじめ、牧祥三(金子氏の後任学長)、前記の外山軍治、三宅能正(当時の事務局長)、津田喜代獅(校友・書肆主)ら諸氏もそれぞれの部署に応じて奔走につとめられた。学界に名を知られた文庫の招請ともなれば、さすがにさまざまな手続き作業を必要とするものである。時あたかも全国的な大学紛争の嵐はすでに本学をも捲きこみつつあったが、しかし諸氏の活動はこれによっていささかも制肘をうける

ことがなかった。諸氏の誠意のこもった周旋があったればこそ、本学がついによく引璧の幸を獲ちえたといえることができる」

70年史編集委員会のインタビューに答えた牧祥三名誉教授の回想は、より具体的である。

「石浜文庫のことは学長代行になるとき金子前学長から聞かされた。関西大学との奪い合いになり、関大では1億円出そうということだったが、蒙古語の先輩、吉川勝太郎さんらが間に入り、博士が亡くなられる(43年2月)直前、枕元で『将来、外大にいただけますか?』とたずねたら、黙ってうなずかれたということで、支払いの事など考えずに、ご遺族の許可だけもらって書庫に運び込み、そのままになっているという。

学長代行になって間もなく同窓会に出席したところ、文庫の件で尽力された司馬遼太郎さんが寄ってきて『話したいことがある』という。聞けば『石浜文庫のカネはどうなっているのか。代議士を動かして文部省に働きかけようか』ということなので、あわてて『待ってくれ』と言った覚えがある。

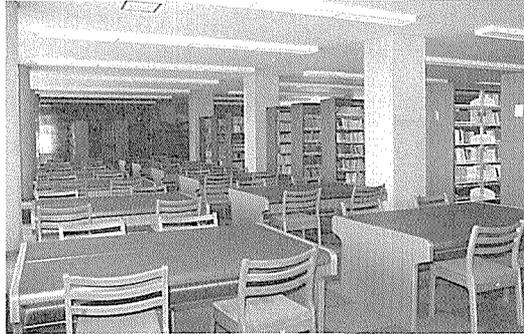
早速、外山軍治さんに頼んで、石浜文庫は、どれほどの価値があるものか調べてもらい、特別予算を出してもらおうよう文部省と交渉してもらった。文部省は100万円プラスして特別予算をつけてくれた。あとで聞いたことだが、ちょうど大学紛争のときで、各大学とも割り当てられた予算を消化しきれず、臨時予算がその年はかなり残っていたということで、これも外大にとって幸いした」

こうして45年3月、石浜文庫は本学の所蔵に帰した。本学こそ石浜文庫を最もよく活用してくれるであろうという博士の遺志と遺族の理解により、購入額は関西大学が示したといわれる額の1/10にも満たないものであった。その後、遺族から寄贈されたものも含め、石浜文庫は総数42,295冊、本学が誇る東洋学の一大文庫である。

#### <移転準備>

昭和46年7月の教授会で箕面市小野原地区へのキャンパス移転が正式決定した。このころ附属図書館蔵書は20万部を突破、47年5月には232,658冊。上八新図書館完成から20年を経過した49年5月現在の蔵書数は和漢書(59%)、洋書(41%)合わせて255,577冊。41年3月の書庫増設完成も追いつかずパンク寸前となり、キャンパス移転によって新天地を求める以外、発展の余地もない状態であった。

移転をにらんで発足した将来計画委員会は、各専門部会の答申をもとに、48年4月発行の『「あたらしい外大のために」施設計画特集号』で早くも施設計画の基本構想を打ち出しているが、「附属図書館を大学機能の中心とする」としたうえ、図書館内に「語学教育工学センター」のためのスペースとして750㎡を要望している。国立大学最初のLL施設設置の実績を踏まえ、(1)LL教室6室(50ブース1、40ブース2、30ブース3)470㎡、(2)音声実験室、録音室2、教材作成研究室など実験室関係160㎡、(3)テープライブラリー、事務



広々とした閲覧室(3階)

室など資料準備室関係 70㎡、(4)自習室 50㎡というのがその内容で、移転を機に、可能な限り多種多様・最新の視聴覚機器を駆使して実技面の訓練と語学教育の方法論の開発を進める一方、C A I (Computer Assisted InstructionまたはComputer Aided Instruction) システムの導入をはかるといのが注目される。

### (3) 発展期

昭和50年3月、粟生間谷キャンパス用地の買収が完了、移転作業が本格化する。図書館移転も現実の問題となってきた。附属図書館長・芝池靖夫は11月刊の『館報』第3号に「図書館施設計画作成にあたって直面するいくつかの問題点」と題する一文を掲載し、(1)大学間図書資料の相互利用・ネットワークシステムの確立、(2)図書館のコンピューターシステム化と機械化、(3)視聴覚施設の拡大延伸の必要性を強く指摘した。

#### 〈建築設計基本要綱〉

これを受けて将来計画委員会は52年2月、「学舎移転にともなう附属図書館および語学教育研究施設の建築設計基本要綱」を教授会に提出した。学習・教育および研究諸活動のための図書館と、読み書き聞き話するための実技訓練・実験・理論的分析を進めるための語学教育研究施設を、あたかも楕円の二つの中心のような大学の機能的中心ととらえ、双方の有機的な発展を目指しているのが特徴的であった。基本要綱全文は『館報』第4号にも収録されているが、ここでは主要目次だけを掲げておく。

#### 主要目次

- I 図書館および語学教育研究施設の本学教育研究体制上にしめる地位、またその発展方向
  1. 二つの機能的中心
  2. 附属図書館

3. 語学教育研究施設
4. 図書館および語学教育研究施設の夜間利用問題

## II 建築設計上の理論的条件

1. 自由で能率的かつ快適な利用空間
2. 自学自習と知的交流に役立つ空間
3. アカデミック・ゾーン内における図書館および語学教育研究施設の位置、各部スペースの配置
4. その他

### 〈新キャンパスに近代的図書館〉

51年11月から用地造成が始まったのにつづき、図書館棟建設は52年12月27日着工、53年12月25日本体工事竣工。鉄筋コンクリート5階建・延べ床面積6,550㎡、落ち着いた色調の煉瓦タイルが、うしろの山並みの緑とマッチする近代的図書館が粟生間谷キャンパスのアカデミック・ゾーン中心部に姿を現わした。工事費総額7億200万円。内部施設整備も54年1月に完了した。

### 〈31万冊の図書移送〉

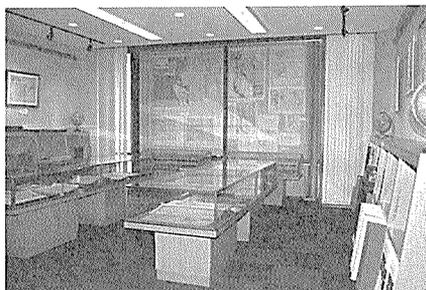
5月の連休明けから図書移送が始まった。この年、蔵書は和漢書175,736冊(56.6%)、洋書134,665冊(43.4%)、計310,401冊に達している。かつて上八から高槻へ運ばれた蔵書は、再び上八へ戻ったあと、今また粟生間谷へ移される。大型トラックが何度、大阪―箕面間を往復したことか。運び込まれた31万冊の図書を分類、整理し直して書庫に収め、さらに新図書館に取り入れられるブック・ディテクション装置(自動管理装置)のため、一冊ごとに磁気テープを貼付していくという地味で根気のいる作業が酷暑のなかでつづけられた。大移動作戦が完了したのは8月末、こうして新図書館は9月25日、授業開始と同時に開館にこぎつけた。1～3階が図書館、4、5階が視聴覚施設である。

移転を機に図書館事務部は総務、整理、受入、運用、視聴覚資料の5係に改編された。59年10月からは図書館専門員も配置された。

### 〈ブック・ディテクション装置〉

新図書館には当然のことながら最新の装置が採用された。前述のブック・ディテクション装置もその一つで、2、3階閲覧室利用者は個人の荷物をロッカーに預けることなく自由に持ち込め、図書館の本と個人の資料を引き合わせて利用できるが、貸出し手続きをとらずに図書を持ち出そうとすると装置のアラームが鳴るシステム。このため利用者は入・退館に際しての手続きは一切不要となる。同装置は国立大では筑波大に次ぐ採用であった。

書庫には電動式密集書架(エレコンパック)も採用された。1階のエレコンパック374㎡は



地図コーナー

関西では最大のものであった。最新式設備を誇った図書館には見学者が相次いだ。第4号まで発行された『館報』を引継いで62年3月再刊された『LIBRARY INFORMATION』創刊号で、事務長・松村俊一は「自動化といっても機械は日進月歩で今日ではさほど珍しくもない設備と化しているが、それでも設置当時は、モデル校である筑波大ほか二、三の大学にしかなかった画期的なもので、やや大げさに言えば全国津々浦々の関係機関などから連日見学があり、案内と説明でおおわらわな忙しい日々を過したのである」と回想している。

#### <コンピューターシステム>

昭和60年6月から貸出・返却など閲覧システムと蔵書を探す検索システムが稼働した。閲覧システムによって、手続きは大幅にスピード化された。検索システムは、オンライン目録用端末機という形で利用者自身が操作、利用できるものである。

62年10月には、附属図書館と学術情報センターとの接続が完了した。学術情報センターは、学術情報を迅速的確に提供するための中枢機関として61年に東京大学文献情報センターを改組して設立されたもので、学術情報センターとのオンライン接続で本学も全国的な学術情報ネットワークに組み込まれた。図書館事務部は、新しく学術情報係を加え6係制に強化された。

#### <地図コーナー>

62年11月、図書館3階に地図コーナーが開設された。世界の各地域の自然や人文社会の諸条件を知る基本的な出発点は地図であるという認識から、世界の地図、地図帳、古地図、模型、地名関係参考書などの地図資料を集めた地図コーナーの開設が構想され準備が進められるうち、実業家・美術品収集家として知られ、古地図にも関心深い広岡寅治(R4)から奨学寄付金が贈られ、これを基金に開設されたものである。

所蔵の古地図のなかには、フランドルの地図学者オルテリウス作による「地球の舞台」と題する地図帳の最初のドイツ語版(1572年刊)はじめ、イタリアの地理学者コロネリの「日

本地図] (1692年刊)など貴重なものも数多い。

#### 〈貴重図書〉

本学の「附属図書館規則」第2条は「本館管理の図書その他の資料を次の8種に分ける」として、(1)貴重図書(2)特殊図書(3)辞書、事典及び年鑑、統計(4)一般図書(5)新聞、雑誌(6)視聴覚資料(7)その他の学術参考資料(8)委託資料—に分類している。

トップにあげられた貴重図書については、さらに「貴重図書・資料利用規程」「貴重図書・資料利用者心得」を制定し、利用者は図書館長の承認を必要とすると定めているが、利用規程第2条によれば「貴重図書・資料とは、本学所蔵の希観書、貴重書及びこれに準ずるもの、その他その性格から管理運営上特に必要と認めたもの」となっている。

附属図書館3階の貴重図書保存室には、以上の定義による貴重図書約3,000点が収蔵されている。専攻語別、研究分野別に専門的な貴重図書を数えあげれば限りがないが、モンゴル語の『百二十老人話』および『蒙文大蔵経』は、日本に一点しかないという意味で、まさに極めつきの貴重書であろう。

中国語関係ではR・モリソンによる『広東省土語字彙』(Vocabulary of the Canton Dialect・1828)が希観本である。前にも触れた石浜文庫の中にもモンゴル語、西夏語、満州語などの希観書が多数含まれている。

このほかに江戸時代、西洋への窓口となった蘭学、オランダ語関係の貴重図書も数多い。大槻玄沢『蘭学階梯』(天明8年・1788)はじめ、桂川甫斎『蛮語箋』(寛政10年・1798)、藤林普山『訳鍵』(文化7年・1810)、広沢竜淵『蘭例節用集』(文化12年・1815)などがそれである。

幕末から明治にかけて、語学の中心はオランダ語から英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語へと転換していく。英・仏・蘭3カ国語の便覧である村上英俊の『三語便覧』(安政元年・1854)、同じく英俊の『仏語明要』(元治元年・1864)は和仏対訳辞書であり、わが国のフランス語辞典の嚆矢とされるものである。

このほか、石橋政方『英語箋 上・下』(万延元年・1860~文久元年・1861)、森田靖之『独逸七以呂波』(明治4年・1871)、緒方洪庵の子息でロシアに留学した緒方惟孝の『魯語箋』(明治6年・1873)などは、開国期のわが国の語学状況を示すものである。

以上あげた貴重図書のほとんどは外語開校の年である大正11年から翌12年にかけて購入されたものであり、中目初代校長の選択眼の確かさを物語るものであろう。

語学関係以外では、本学が箕面市栗生間谷に移転してから入手した『摂津国島下郡栗生村間谷名寄帳』がある。江戸期の間谷地区の土地台帳であり、近世農民史研究にとっては貴重な資料である。

### 〈特殊文庫〉

本学附属図書館は、石浜文庫以外にも寄贈者の名を冠した特色あるコレクションを所蔵している。

まず中国語関係では元教官・山本磯治寄贈になる漢籍を中心とした山本文庫、同じく相浦泉による中国近・現代文学関係の4,000冊にのぼる相浦文庫がある。

インドネシア語関係の南十字星文庫約2,300冊は、インドネシア語学科卒業生の同窓会・南十字星会が会員に呼びかけ母校に寄贈したもので、内容は歴史、文学、政治、経済、社会などのほか、旧日本軍が発行した宣撫文献など貴重なものも多い。

インド語関係は大学第1回卒業生・武藤友治寄贈になる約1,100冊の武藤文庫、元教官・沢英三の沢文庫約1,400冊など。ビルマ語では元教官・原田正春寄贈の原田文庫約1,000冊のほか、ラングーンの日本語学校校長であった杉本良巳氏寄贈の杉本文庫845冊もある。

北欧関係文献はYoshi Ozaki氏寄贈の尾崎文庫約1,200冊のほか、関西デンマーク協会・粟飯原健三氏からの粟飯原文庫124冊、このほかイスパニア語関係では外語12回卒業生・歌島文雄の遺族から寄贈された歌島文庫、元教官・国沢慶一の国沢文庫約1,800冊があり、いずれも貴重な特殊文庫である。

### 〈学術講演会(石浜文庫記念)〉

特殊文庫に関連して、ここで石浜文庫記念学術講演会に触れておこう。『石浜文庫目録』の完成を記念して昭和54年4月25日、大阪堂島の毎日会館国際サロンで大阪外国語大学学術講演会(石浜文庫記念)が開かれた。第1回記念講演会の講演者と演題は井上靖の「敦煌の旅・新疆の旅」および京大教授・西田龍雄の「石浜純太郎博士と東洋学」であった。

記念講演会は翌年以降も毎年開かれ、学舎移転後の第2回は司馬遼太郎の「秦末の動乱と中国社会」、第3回は陳舜臣の「西域事情」、第5回は石浜恒夫の「父の思い出」、そして63年10月29日、本学図書館視聴覚ホールでの第10回記念講演会は石浜紅子の「私の祖父とシルクロード」および小松左京の「日本からの発信—地球化時代の外語教育」というように、毎回石浜博士とゆかりの深い講演者とテーマが選ばれ、盛況であった。

学術講演会は、その後も毎年開かれているが、5年ごとに「石浜文庫記念」の名前を冠することとし、次回第11回記念講演会は平成5年に予定されている。

### 〈図書館委員会の発足〉

図書館運営については、従来、教授会委員会の図書委員会が関与してきたが、平成元年度から図書委員会が、図書館委員会と学術出版委員会に改組された。改組の理由は図書館長の職務権限との関係で疑義が残ること、組織面での対応の遅れが指摘されたことなどによるものであるが、この結果、他の国立大学附属図書館の同種組織のように、図書館長を委員長とする図書館委員会が発足した。

一方、図書委員会から本学の紀要『大阪外国語大学学報』の刊行および学術図書出版の関連業務を引継いだ学術出版委員会は、まず従来から論議のあった『学報』の名称を教官アンケートの結果、『大阪外国語大学論集』に改題した。

本学教官の学術的成果発表の場を広げるため、『大阪外国語大学学術研究双書』の創刊も決定され、現在第6号まで発行されていることは、通史第4章の研究活動の項で述べた。

#### 〈蔵書45万冊に〉

箕面移転から12年。平成3年5月現在の蔵書は別表のとおり和漢書244,701冊(53.8%)、洋書209,888冊(46.2%)、計454,589冊に達した。情報化時代といわれるだけに急速な増加ぶりである。

年間1万冊のペースで図書がふえているだけに、係は整理に忙殺されるが、どのような図書が入ったか、は研究者にとって大きな関心事だけに、図書館では毎週1回、「整理速報」を発行、その週に受け入れた図書を知らせている。

また月1回程度発行される「紀要記事索引」は、他大学から受け入れた紀要類の記事を、人文・社会、言語学、文学など部門別に整理したもので、閲覧者の便をはかっている。

図書蔵書数(平成3年5月1日現在)

和漢書(Oriental Books)			洋書(Occidental Books)				
総記	37,641	産業	4,866	総記	18,175	産業	5,292
哲学	9,228	芸術	5,098	哲学	19,211	芸術	5,393
歴史	22,929	語学	34,240	歴史	24,717	語学	50,582
社会科学	30,809	文学	60,873	社会科学	23,138	文学	50,857
自然科学	8,122	(石浜文庫)	28,620	自然科学	7,181	(石浜文庫)	3,269
工学	2,275	計	244,701	工学	2,073	計	209,888

北欧民族・歴史関係(昭和54年)、イタリア作家叢書(55年)、ロシア・スラブ言語関係(57年)、インドネシア現代史政治資料集成(58年)、アラブ・イスラム・アフリカ言語文化関係(60年)、ギリシア・ラテン作家集成・古代学研究叢書(62年)、チュルク系諸言語コレクション(平成2年)など、大型コレクションの購入による蔵書蓄積で、書庫・開架閲覧室の収蔵能力は当初予定の42万冊の限界をとっくに超え、その対応が課題となっている。

図書館部分の現況は別表の通りである。ブラウジングルームは軽読書室あるいは談話コーナーともいうべきもので新聞・雑誌閲覧などに利用されている。

#### 〈視聴覚教育施設〉

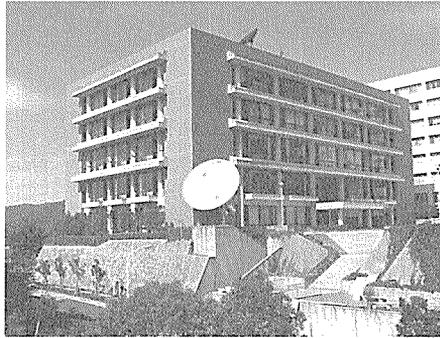
図書館棟の3階の一部と4、5階を占める視聴覚教育施設は、第1から第4までのLL教室はじめ、ビデオ教室、視聴覚ホール、同時通訳ユニットを持ち小国際会議場としても



LL教室での授業風景



ビデオ教室



図書館前の6 mパラボラアンテナ

利用できるデジションルーム、映写ルーム、録音室、スタジオ、テープライブラリー、音声実験室などを備え、総合的なオーディオ・ビジュアル外国語教育センターともいべき機能を持っている。

階	主要室名	面積	席数	冊数
1	自習室	130㎡	56	(180,000)
	情報処理室	86		
	書庫(電動密集書架)	374		
2	閲覧室	577	88	参考書 5,200
	ブラウジング・ルーム	107	28	
	マイクロ・フィルム室	38		(120,000)
	書庫(籍層)	373		
3	閲覧室	565	108	一般書 57,187
	貴重図書保存室	77		
	書庫	373		(80,000)
	地図コーナー	46	6	

(注) 冊数欄の ( ) は収納可能冊数

#### <目から耳から>

ビデオ教室では、アメリカや日本で採用されているNTSC方式だけでなく、PAL、SECAM方式で録画されたビデオ再生装置を備えており、ヨーロッパやアラビア圏、さ

らにインド、パキスタンなどのオリジナルビデオを授業で見ることができる。またテープライブラリーは約22,000本のカセットテープ、約1,300本のビデオを保有している。コンピューター室は、将来のC A Iシステムによる学習教育プログラム実施のためのものである。57年9月には、内容を視聴覚教育にしばった『A V J ournal』が創刊された。図書館関係の『LIBRARY INFORMATION』とともに、誌名にも記事にも横文字やカタカナがあふれるのは、外国語大学だけのことではないのであるが……。

#### <衛星から>

海外テレビ放送受信システムは63年3月に設置を完了した。アメリカのA F R T S、ロシア共和国や中国の国営テレビが大口径パラボラアンテナを通して受信されるようになった。

将来計画委員会が前出「建築設計基本要綱」で示した“二つの機能的中心”の一つである視聴覚教育施設は今後、技術革新のスピードに合わせた急速な発展・変容が予想される。現代の視聴覚教育が目指すコミュニケーション能力開発の教育・研究に科学的基盤を与えるため「コミュニケーション科学研究センター」設立構想も浮上してきた。

別表は附属図書館が管理する視聴覚教育施設の現況を各部門別に示したものである。

#### 1. 教育部門(授業に使用する諸施設)

	施 設 名	面 積
3 階	ビデオ教室(35席)	46㎡
4 階	第1LL教室(45席)	135
//	第2LL教室(32席)	97
//	視聴覚ホール(176席)	249
//	デシジョンルーム(21席)	90
//	同時通訳室	14
5 階	第3LL教室(44席の外、移動席20席)	159
//	第4LL教室(32席)	87
//	映写モニター室	21
D棟2階	ビデオ室(90席)	99㎡

#### 2. 教材作成研究部門(各外国語教材の独自開発と製作と基礎的研究のための諸施設)

	施 設 名	面 積
4 階	録音室(アナウンスルーム、コントロールルーム)	28㎡
//	スタジオ	128
//	企画室	13
//	調整室	14
//	編集室	15
//	資料室	39

	施 設 名	面 積
5 階	教材作成室(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)	67㎡
//	音声実験室	54
//	無 響 室	33
//	海外放送受信室(音声)	10

### 3. 共同利用部門(教官、学生の共同利用に供するための諸施設)

	施 設 名	面 積
3 階	ビデオ自習室(24席)	130㎡
4 階	テーブルブライリー(24席)	84
5 階	LL自習室(27席)	64

### 4. 管理部門

	施 設 名	面 積
4 階	事 務 室	84㎡
//	資料整理室(海外放送受信室)	21
//	モニター室	19.5
//	コンピューター室	46
5 階	準 備 室	12

## 第5章 関係諸組織

### (1) 教職員組合

戦後の混乱した社会情勢、窮迫した経済生活の中、教師の生活を守るためいくつかの組織が結成され、やがて全国的統一組織として昭和22年6月、日本教職員組合(日教組)が結成された。

#### <初代委員長・西沢修>

本学では教職員組復興委員会ははじめ各組復興委が組織され、全学的な学園復興運動に取り組み始めた時期である。新制大学移行をにらんだ学園復興運動の高まりの中から、教職員組合も誕生した。70年史編集委員会のインタビューに応じた赤阪力名誉教授の回想によれば「西沢修先生(法律学)や外山軍治先生(歴史学)の呼びかけで高槻時代にできた。初代委員長は西沢先生だった。私もまじめにやった方で、日教組の会議にも出席したが失望した。当時、大学で組合があったのは少なかったし、イデオロギー色も薄かった」という。とにかく発足当初の組合は、教職員の懇親会という色合いが強かったようで、機関紙も発行されず、活動内容も不明である。

#### <『組合新聞』第1号>

本学教職員組合が、実質的な「組合」となり、日教組に加盟して活動が活発化するのには昭和37、38年ごろからであり、『組合新聞』第1号が、38年12月8日付で発行されている。日教組近畿地区協議会大学部主催の「大学教育研究会」特集号となった第1号は、編集人に八木浩、布施俊夫、田辺保の3人が名を連ね、巻頭に片岡孝委員長の「まず愛される組合に」の訴えを掲げてスタートした。

#### <大学管理法案反対運動>

『組合新聞』創刊に至るまでの時期、活動の中心課題は大学管理法案反対に置かれた。戦後、政府・文部省の大学管理立法化の動きの最初は昭和23年の大学法試案要綱、2度目は26年の国立大学管理法案であったが、いずれも全国大学教授、教職組、学生自治会など

の反対で流産した。

安保改定反対闘争が国民的規模で盛り上がっていた35年5月、松田竹千代文相は中央教育審議会に「大学教育の改善について」諮問。中教審は翌36年7月から順次、大学再編成のための計画案を提出したが、大学管理・運営については、文相に学長任命拒否権を与えるほか、学外者による管理機関の設置、教授会の構成を教授に限定する一などの内容が盛り込まれていたため、各大学教授会、教職員組合、学生自治会が反対運動に立ちあがり、37年6月には「大学の自治を守る会」も結成された。

同年9月には国立大学協会総会が大学管理運営に関する中間報告を発表、大学運営協議会の設置を提案したが、これに対し外大教職員組合執行委員会は教官有志と共同で声明を発表し「中間報告は多くの点で矛盾にみちたものであり、現時点では中教審および政府によって悪用される恐れがある」として「今後とも、一切の大学管理制度改悪の意図に対し、粘り強く闘うものである」[『大阪外大新聞』36号]との態度を明らかにした。

こうした反対運動のため、38年1月の閣議は国立大学運営法案の国会提出とりやめを決定するに至る。戦後3度目の大学管理立法も流産したのである。

政府・文部省の考える大学に対抗して、国民のための大学像をつくりあげることが組合活動の中心に据えられた時期であったが、新しい大学像の模索は、このあともつづけられていく。

#### 〈労働条件の改善〉

職場の労働条件改善も組合の重要課題であったことは言うまでもない。

- (1) 事務職と技能職、作業員、守衛などの中でのさまざまな格差、特に超過勤務手当の差別の解消
- (2) 特別昇給の公正化
- (3) すし詰め教室・研究室の解消

などを当面の問題として、精力的な局長交渉が持たれたことを『組合新聞』第4号は伝えている。

#### 〈第二部設置への取組み〉

昭和39年に入って、組合は短期大学の夜間大学への昇格・第二部設置問題にも取組み、全学の理解を呼びかけるなかで、教授会の一本化を強く要求している。

短期大学部教員の身分は学部教員とはっきり区別され、一段低く見られる風潮があった。こうした傾向が第二部にも持ち込まれてはならないというのが組合の姿勢であり、第一部、第二部対等での教授会一本化が基本であった。教授会が一本化されることによって、これまで第一部で認められてきた講師、助手の教授会構成員資格が奪われるのではないかという心配も一部から出されたが、組合の要求で、教授から助手までが参加する一本化が実現

した。

#### 〈懇親活動〉

教員と職員の交流を深める懇親活動も、このころから活発に行われるようになった。組合として、また組合外で、写真部、読書クラブ、労演クラブ、文芸部、卓球部、さらに懇親旅行、クリスマスパーティーなど数々の催しも開かれている。

#### 〈事務局長出張問題〉

残業手当、特別昇給、旅費支給、配置転換などでの不明朗・不透明の一掃が問題とされるなか、昭和40年に表面化した当時の事務局長の出張問題は、なお残存する古い体質を示す象徴的事件であった。1年間の出張日数が前人事務局長の年間55日の2倍の117日、実に1年の1/3の日数にのぼり、うち100日は住居のある東京を中心としたものだったことが問題化、組合に特別調査委員会も置かれた。

#### 〈人事問題で組合脱退者も〉

翌41年には庶務課を中心とする不当な人事異動が一方的に行われたことや、組合員差別、女性差別問題に対する抗議運動が起り、これらを契機に事務の公開化・民主化が進められていった。

この年は留学生別科教員の採用人事をめぐって、公募による被推薦者の扱いについての方針が確立されていないことが問題となり、半年にわたって紛糾した。

職員異動、留学生別科とも、人事問題だけに感情的な要素も加わって激しいものとなり、組合からの脱退者も出るなど、傷跡を残した。組合の意味をめぐって論議が深まったのもこの時期である。事務局各課、各語学科で組合員による懇談会が持たれた。脱退組のなかから組合に復帰する人も現われ、みんなが参加する組合活動をめざし、明るい職場づくりが進められていった。

#### 〈紛争と大学改革〉

昭和44年1月から本学も大学紛争の嵐に巻き込まれた。通史でも述べたように、新館封鎖、学長軟禁など一連の事件のあと、五者協議会(教職員組合、第一・第二部自治会、寮自治会、生活協同組合からなる合議体)は、大学改革委員会(仮称)の設置を提案した。同委員会は、大学を構成する教員、職員、学生の三者が等しい権利をもって参加する全学協議会の母体となるものであると同時に、全学協議機関ができあがるまでは、学長選挙や大学改革、学舎移転など全学的な重要問題を協議する場でもあると位置づけられた。

この提案に基づき、教授会は3月以降、第一次・第二次大学改革問題特別委員会を発足させ、これによってカリキュラム改革、学生・職員の意向を反映させる形での学長選挙改

革などが実現されていった。

この時期、中教審答申に基づいて文部省が国会に提出した「大学の運営に関する臨時措置法案」は、大学の自治を破壊するものとして全大学人の反発を買った。紛争の自主的解決を求める組合は、臨時措置法案が国会に提出される前の時点で、すでに「反動的な中教審答申をてこにした政府・自民党の大学弾圧立法に断固反対する」ことを5月17日の臨時総会で議決。同法案が衆議院で強行採決されたあと、8月には参議院での法案破棄を求めて、教授会の陳情団とともに組合代表も陳情に参加した。しかし、参議院も異例の審議省略・抜き打ち採決で同法案を成立させてしまったのである。

一方、臨時措置法公布後も本学の紛争は激化、全闘委の全学バリケード封鎖で教職員の学内立入りも拒否されるに至る。これに対し組合側は9月5日、執行委員会の名で声明を発表、暴力行為を非難するとともに「特に我々外大教職組に結集する組合員の労働権を一方的・問答無用式に剝奪したことは組合員全員に対する挑戦と解せざるを得ない。全学封鎖は我々の労働権を奪うことにより、労働者としての存在をもおびやかす可能性のある暴挙と考えられる」として速やかな封鎖解除を強く要求した。

全学バリケード封鎖が、二度目の機動隊導入によって解除されたのは10月2日であった。

#### 〈六者協学習会〉

紛争の余燼の残る翌45年1月、前出の五者協議会に大学院生協議会を加えた六者協議会が結成され、4月には「外大民主化」をテーマに学習会が開かれた。3日間にわたった学習会には延べ145人が参加、外大民主化の現状と当面する課題、国立大学財政と外大予算、移転問題、外大民主化と教育改革、外大改革と事務職員などのテーマで幅広い話合いの場が持たれたことは、外大民主化にとって画期的なことであった。

#### 〈安保破棄宣言〉

大阪・千里で万国博覧会が開かれたこの年、安保条約は固定期限10年を終了、政府の声明どおり6月23日、自動延長された。本学では6月22日に安保破棄を求める外大統一集会、23日には教職組総決起集会が開かれ、安保破棄を宣言した。

#### 〈移転問題への取組み〉

本学の移転問題は、昭和39年7月の教授会での上八離脱決定からスタートしたが、組合は同年末、早くも「移転については短期大学の勤労学生および職員の不利益にならないよう慎重に対処する」との基本的態度を打ち出している。このあと移転候補地として万国博跡地が浮上するなかで、組合は42年9月、教職員組合、第一・第二部自治会、生活協同組合、寮自治会を含む五者協議会を結成、移転計画への全学構成員の意思反映と交渉経過の公開を要求。さらに同年12月の組合臨時総会でも「全学の意思を反映した民主的な移転

計画」を学内スローガンの一つに掲げた。

#### 〈全学移転対策会議〉

大学紛争のあと、移転候補地が万博跡地から箕面市小野原にしぼられた昭和47年4月11日、全学移転対策会議(教職員組合、第一・第二部自治会、生活協同組合、寮自治会、院生協議会)が発足、4月24日の学長交渉で移転問題での交渉団体としての地位を獲得、移転先や施設計画原案の公開や将来計画委員会への代表参加が認められた。

組合としては、特に職員の通勤条件、住宅問題、移転作業に伴う労働強化、移転後の職場環境などの問題を取りあげ、組合員の意向反映に努める一方、小野原地区の整地・建物配置についても全学移転対策会議独自の案を作成、将来計画委員会に提出した。

組合としても深いかわりを持った学舎箕面移転は昭和54年9月に実現した。それから13年、組合を取り巻く社会的条件や学内環境も大きく変化した。そして本学自身も、新しい大学改革構想の線に沿って、さらに大きく変容しようとしている今日、「組合員の経済的地位の向上を図り、あわせて学園における民主主義の発展に寄与することを目的とする」(規約第4条)組合の責務は、これまで以上に重みを増していくであろう。

## (2) 学生自治会

昭和20年8月15日、敗戦とポツダム宣言受諾によって、全国民を「天皇」の名のもとに戦争にかりたてた日本帝国主義とファシズムは崩壊した。その翌日16日には学徒動員が解除され、学生たちは精神的にも、肉体的にも消耗しつくして学園に帰ってきた。だがそこには戦災に荒れ果てた学園が待っているだけだった。全国3,000校、実に28万坪が戦火に焼かれていたのである。我が大阪外国語学校——この頃はまだ新制大学になっていなかった——も敗色濃い昭和20年3月13日の大空襲で図書館の書庫と教室の一部を残すのみで、殆どの施設を焼きつくしてしまった。戦後の混とんと物資不足の中では学園復興は障害があまりに多かった。本校はやむなく、昭和21年2月に高槻の陸軍工兵隊跡に移った。そんなわけで我が外語の戦後における学生自治活動も、まず高槻の地に移って始まるわけである。

昭和36年4月15日付『大阪外大新聞』第26号から連載を開始した外大新聞局編集部による「外語自治会15年史」は、以上の書き出しで始まっている。この15年史は連載後、加筆修正され、37年11月発行の外大総合雑誌『求索』創刊号に収録された。外専から外大への移行期を含む本学自治会初期の貴重な記録である。



外大総合雑誌「求索」

### 〈緑風会の誕生〉

勉学よりも、まず食えること、生きることが先決問題であった。敗戦で完全な虚脱状態に陥った学生も、GHQによって矢つぎ早やに打ち出される日本民主化への諸改革政策に鼓舞され、学園の民主化と復興へ力強く立ち上がる。インフレ、食糧難から学生生活を守る運動も起こってきた。「我々の手で自治会を、学園民主化を」と団結した学生は、「戦犯教授」の追放、服装の自由、寮生活刷新、食堂経営改善などに取組み始める。

まず昭和21年、古森利雄(R23)らを中心に、「緑風会」が結成された。本学初の自治会誕生である。各語科からの立候補者のうちから、全学投票の結果、初代委員長に古森が選ばれた。関西の大学・高専のなかでは大阪商大(現・大阪市大)とともに最も早い自治会結成であった。

### 〈学園復興運動の先頭に〉

第2代委員長・近藤鞆(C24)、副委員長・山口圭一(E24)を選出した自治会は学園復興運動の先頭に立つ。22年6月、自治会の申入れによって、在校生組、職員会組、卒業生組、父兄会組の名を冠した復興委員会が生まれ、全学的な復興委員会常任委員会も組織された。在校生組復興委員会は、大阪市水道局や清掃局の仕事に従事し、自らの汗で復興資金を稼ぎ出したことは通史で触れた。学制改革による新制大学への移行が問題となっていた時期だけに、学園復興運動は全学的な高まりを見せ、新制大学昇格のための大きな力となったことは否定できない。

22年夏には委員長改選が行われ、第3代委員長に楠見昭二(C25)が選ばれた。このとき夏期休暇のあとの試験を実施するかどうかの問題をめぐる自治会は2日間の連続ストライキを構えて抗議。学校当局は大学昇格問題を抱えている時期のストライキによる対外的影響を恐れ、また復興資金集めに学生の協力が得られなくなるのを心配して妥協し、学生側の完全勝利に終わった。

### <授業料値上げ反対・教育復興闘争>

23年2月、文部省は大学・高専の授業料3倍値上げ案を発表した。外専の授業料もこれまでの400円から1,200円になる。6月に東京大学で開かれた全国学校代表者会議は、授業料値上げ反対を含む幅広い教育復興闘争の展開を決め、本学自治会も6月23日の学生大会で24日と26日のストライキを決議、まず24日のストを打ち抜いた。25日になって平沢校長は「教育復興闘争に対しては全面的に賛成するが、あす26日の盟休は再考慮してほしい」と要望、このあと学生大会は盟休反対派が主流を占め、中止を決定した。

7月発行の『大阪外専新聞』第6号は「同盟休校を省みて」の論説を掲げ、「本校の戦線離脱はともあれ、ここに全国一斉の同盟休校が行われ得た事実は、戦後学生運動の飛躍的成長を示すものとして祖国教育復興のために喜ばしいことである。われわれはこの同盟休校問題において、学内は未だ決して民主化されておらず、学問の自由と学生の自治活動はいろいろの制限を受け、そして反動化の傾向は次第に強くなりつつあることを身にしみている。われわれは今こそ一切の不純物の浄化のために全校をあげて立ち上がらねばならぬ。——智慧の女神は武装していた(ハイネ)——」と主張した。

この教育復興闘争を契機に、23年9月には全国組織としての全国学生自治会総連合（「全学連」）が結成されるに至る。

### <食堂奪還、寮生活刷新運動>

教育復興闘争と並行して自治会は23年の新学期から食堂奪還と寮生活刷新運動に取り組んだ。食堂奪還運動については、前出「15年史」が次のように記している。

「食堂を業者の手から取りもどし自分達のものにしようという運動が最も強くおし進められた。食糧難の中で、十分に物も食えず、毎日うすい“だんご汁”をすすっていた当時の状況下では、業者の不正を除き自らの力で食堂を運営する事は学生全般にわたる切実な問題であった。まず食堂経営における不正摘発運動が寮委員会、小林武三先生(中国語科)を中心に約一年間にわたっておし進められた。カロリー調査、帳簿調べなどの手段がとられ、ついに帳簿調べと、棚卸しは学生の手により急ぎ実行され、実に米4石の不正(後出の小林武三教授の回想では米2石となっている)、父兄会の宴会の領収書までが発見された。この結果業者の谷口氏を顧問に、小林先生や自治会が食堂運営に当ることになった。しかし、この時にあっても業者のまき返しが行なわれ、倉庫の米を隠とくしてしまった。このため自治会側は、高槻市の日本農民組合より米を借り入れ、当面の米不足をつくろう始末であった。かくして一般学生の強力な後押しによりその年の9月には業者を追い出し、教職員、学生、従業員からの各代表で構成される「食堂経営協議会」が組織され、この運動は成功のうちに終わった」

寮生活刷新運動は、楠見委員長自ら特に入寮して運動を進めたが、退寮した一部寮生の妨害もあり難航した。当時の寮は毎夜「寮雨」や時には廊下に「黄金の小山」を築く不心

得者もあって不潔この上なかった。さらに敗戦後の荒んだ風が出入自由な寮に吹き込み、賭場に利用されたり、闇取引の場ともなっていた。寮のボスの存在であった学生は、かなりの運転資金を持ち、高利貸をしたり、食堂の食券や闇物資を動かし、ボスの配下の学生は寮生の夜具・ふとんを盗んで売り飛ばすなど、ともに論旨退学処分を受ける有様。寮生活がようやく改善に向かい始めた10月12日、問題の寮の一角から火の手があがり、寮を含む南棟校舎が全焼してしまう。このため食堂、寮を中心とした復興運動は一時、挫折を余儀なくされることとなった。

#### 〈大学法案反対闘争〉

昭和24年5月31日、国立学校設置法の公布に伴い新制大阪外国語大学が設置された。この年は、戦後史の曲がり角とも言われた年である。1月、中国人民解放軍は北平(北京)市軍事管制委員会と北平市人民政府を樹立、中国革命の成功は国際情勢に大きな変化を与えた。7月、連合国最高司令官は米独立記念日に際し「日本は共産主義進出阻止の防壁」と声明、GHQの占領政策も右旋回する。GHQ教育顧問イールズは各大学で、共産主義教授追放を演説して回った。国鉄人員整理をめぐるのは、この夏、下山事件、三鷹事件、松川事件が相次いだ。

この時期、本学の最大の闘争は大学法案反対ゼネスト参加であった。大学の管理・運営に学外者を加えようとした文部省の大学法試案要綱に対し、全国の教授、大学教職組、学生自治会が、大学の自治を侵すものと反対、3月には大学法対策全国協議会も結成された。本学自治会は大阪市立大とともに府学連の支柱として、夏期休暇返上闘争に入った。府学連主催の大学法反対の集いが中之島の朝日会館で持たれ、労働歌を歌って市中をデモ行進する運動形式もとられた。大学法案は結局、廃案となった。

#### 〈吹田事件〉

反占領政策的な政治活動を志向するようになった全学連は、25年1月、コミンフォルムの日共批判による共産党内部の対立激化を契機として過激な非合法活動に走り出す。6月には朝鮮戦争が勃発、レッドパージが荒れ狂った。

講和条約発効の昭和27年は共産党の極左軍事方針に基づいて各地で火炎びん闘争が繰り広げられた。5月には、いわゆる血のメーデー事件があり、6月には吹田事件が起きた。吹田市での朝鮮戦争2周年記念集会のあと、吹田操車場まで行進、朝鮮戦線への軍事物資輸送を阻止しようとしたデモ隊と警官隊が衝突、多数の検挙者を出した。戦争への加担を阻止しようとしたこの事件では、本学からも退学者が出た。

吹田事件と前後して自治会は破防法(破壊活動防止法)反対闘争に取組んだ。多数の学生が高槻市内の一軒々々を訪れて情宣活動や署名運動を行った。夏休みには農村工作も実施、幻燈や紙芝居を携えて反対運動をつづけたが、法案阻止には至らなかった。

### 〈細胞解散事件〉

この時期、細胞解散事件で波乱があった。当時、外大には約20人の共産党員がおり、各種活動の中心的役割を果たしていた。前出「15年史」によれば、当時の平沢学長は「公共物管理の立場から、破壊活動を行う者を学内に置くわけにはいかない」と細胞解散命令を下した。細胞側は「解散の法的根拠なし」と食い下がり、大挙して学長に団交を申し入れたが、このとき平沢学長は「黙れ、解散だ」と一蹴、その場で反論した4人を無期停学処分にしたという。「ダマレ解散事件」と伝えられるもので、このときの停学者はロシア語学科2名、英語、フランス語学科各1名であった。

### 〈自治会再建〉

自治会は昭和28年の大阪水害復興闘争、学生選挙権制限反対闘争、翌29年はビキニの水爆実験で被災した第五福竜丸事件をきっかけに高まった原水爆禁止運動に精力的に取り組む、学内でも焼失した寮の建設促進運動を進めたが、朝鮮戦争休戦協定調印以後、退潮期に入っていた学生運動は、30年7月の日本共産党第六回全国協議会(六全協)が、党分裂と極左冒険主義を自己批判したのを機に、全国的な停滞期に入る。

活動停止状態にあった本学自治会は31年初頭の授業料値上げ反対闘争を機に再建への道を歩み始める。6月の再建総務選出のあと、小選挙区制反対、教育三法反対闘争、さらに翌31年の砂川闘争での街頭カンパ、抗議はがき戦術を経て、32年4月には念願の上八完全復帰・学舎統合を実現、前期、後期学生合同による単一自治会が成立したのである。

### 〈11・1国際行動デー〉

統一自治会が最初に取り組んだのは、イギリスのクリスマス島での水爆実験(5月15日)反対運動であった。11月1日が核実験反対国際行動デーと設定され、世界的な集会、デモが行われた。本学でも10月からクラス討論会が持たれ、10月29日の学生大会では圧倒的多数でストライキを決議、実行した。天王寺公園での決起集会には260人の学生が参加した。

### 〈安保闘争〉

勤評反対闘争、警職法反対闘争につづいて自治会が取り組んだ最大のものは安保反対闘争であった。昭和34年3月、社・共両党、総評などが日米安保条約改定阻止国民会議を結成したのを受けて外大自治会も安保対策委員会を組織して4・28、5・15闘争に参加。全学連主流派を含む国会請願デモ隊約2万人が国会構内に突入した11・27統一行動日に、府学連は大手前公園で全大阪学生総決起大会を開催、参加学生2,500人は、デモ行進のあと扇町プールの大阪府民集会に合流し、運動の高まりを見せた。

翌35年5月19日、衆議院安保特別委員会は自民党の採決強行で混乱、清瀬一郎議長は警官隊を導入して社会党の座り込みを排除、20日未明の本会議で新安保条約・協定を強行採

決、以後国会は空白状態となり、国会周辺は連日デモに取り巻かれる。

6月15日、全学連主流派は前年の11・27統一行動日につづく二度目の国会突入をはかり警官隊と衝突、東大生・樺美智子が死亡した。政府は翌16日ついにアイゼンハワー米大統領の訪日延期を要請したが、安保阻止統一行動に結集した33万人が徹夜デモで国会周辺を包囲するなか19日午前零時、新安保条約・協定は自然承認に持ち込まれてしまう。岸首相が退陣の意思を表明したのは23日であった。

一方、外大自治会は安保反対92%という新聞局学生世論調査の結果を背に、6月16日には学内で抗議集会を開き、17、18両日のストを決議した。17日午前中の語学科別大会のあと開かれた学生大会は、教官陣も出席する全学大会に発展した。

史上空前の高揚を見せた安保闘争では、自治会だけでなく、教職員も運動に深くかかわった。アイゼンハワー米大統領訪日打ち合わせのため羽田に飛来した新聞係秘書ハガティーが総評、全学連反主流派に包囲され米軍ヘリコプターで辛くも脱出した、いわゆるハガティー事件の翌日、6月11日に開かれた最初の「民主主義をまもる学者・研究者の会関西集会」（関西民学研）には大阪を中心とした11大学から100人余の学者・研究者が参加した。関西民学研結成の趣旨に賛同した各大学教授の中には、金子二郎教授らも名を連らねている。[[『大阪市立大学百年史』]

友田謙一(短D2)が『きんきら50年』に寄せた「60年安保のころ」は、当時の雰囲気伝える数少ない記録の一つである。

私は迷った。その上でやはり60年安保のとき、夕暮れ迫る母校の片隅で起きた一出来事を記すべきだときめた。

1960年6月18日(土)は6・15安保反対デモ国会乱入事件での樺美智子さんの死に抗議する全国的規模のデモが行なわれていた。短期大学部学生も大部分が、御堂筋一杯に繰り上げられていたフランス・デモに参加していた。休講続出の中、出席者のまばらな一教室で、若い小柄な女性の佐藤(保子、F27・大F1)講師が、いつもより熱の入ったフランス語の講義を続けていた。勤めとの関係で出席時間の確保に苦労していたわれわれ短期大学部学生には、土曜日は時間に追われず出席できる大切な受講時間であった。授業は平常通り終了した。時間講師であるにも拘わらず、佐藤講師は各語学科の出席簿を閉じて重ねたまま、小さいが強く透る声でいった。

「本日は、休講とします」

#### <学長三選反対決議>

安保後の昭和36年、自治会は再び懸案の寮建設要求運動を進めながら、大学管理法案反対闘争に取組む。この時期の大管法反対闘争については、前節の教職員組合のところでも述べた。

この年は学長選挙の年であり、自治会は4月、学長選挙への学生参加を求めて学校当局

に公開質問状を提出したが、学生参加を拒否されたため、5月には平沢学長三選反対を決議した。何らかの形で学生参加という要求が認められないまま行われた学長選挙の結果、第2代学長に森沢三郎が選ばれたことで、自治会は「一定の成果」と評価した。

前出「自治会15年史」は、この時期までを扱って終わっている。以後の活動の様子は、『大阪外大新聞』に詳しいが、主要な活動のみを簡単に拾いあげておく。

#### 〈学寮自治で全学スト〉

昭和38年4月、花園運動場に学生寮が完成、学寮規程が制定されたが、寮の運営にあたる学寮委員会に学生代表が含まれていなかったため、自治会は学生大会で寮自治の獲得を要求。第一次入寮直前の5月30日には入寮決定者中の有志が寮自治の実現を求めて入寮を延期し座り込みに入る事態も生まれた。学生参加を求めるスト権投票の結果は、賛成554、反対256で、6月7日全学ストが実行された。この結果、教官9人、学生9人からなる学寮規程検討委員会を発足させることに成功した。

#### 〈自治会解散通告〉

しかし、寮自治への足がかりと見られた学寮規程検討委員会で検討された学生参加案は8月には廃案とされてしまった。そして38年9月12日、寮自治獲得の6・7ストに対する学長訓告処分、13日には学生部長から自治会委員長に口頭で「学生心得を守らない場合、9月30日をもって自治会を解散する」という通告が行われた。

ここで問題とされたのは学生心得のうちの課外活動条項であり、学生団体結成や集会についての届出と許可、学内掲示の場所・期間指定と許可などを定めているが、自治会は、この団体届を出していないというわけである。

“自治会つぶし” 反対闘争は急速に盛りあがった。自治会執行部と学生部長、学生課長の話し合い、教授会に解散通告撤回を求めての座り込みのあと、10月23日にはスト権も確立した。翌24日の教授会では「学校側は解散通告を出さない。学生側はストライキ権を行使しない。そして補導委員会と執行部が11月14日を期限として学生心得について話し合う」ことが決められた。しかし、学生心得の課外活動条項撤廃を求める自治会と、同条項順守を求める補導委員会・教授会の間に歩み寄りは見られず、話し合いは物別れに終わった。

翌39年1月、庶務課は学内ポスターの撤去を強行した。自治会の抗議に対し、学生課長は「団体届の出していない団体とは話し合えない」と、交渉に応じなかった。さらに学生用掲示板の位置を変更、同掲示板以外の無届の掲示はすべて「清掃」の対象となり、今回のポスター類撤去はこれに基づくもので、大学当局は教授会の決定を履行したものに過ぎないと強調した。

安保闘争後の挫折感から学生の間にも政治無関心層がふえてきていた。大学の自治を守るためには全大学人の団結と学内規約の確立が必要であった。事態をこれ以上悪化させな

いたためにも教授会を敵に回すようなことは避けなければならない。自治会執行部は一定の譲歩を決断せざるを得なかった。

#### 〈第二部自治会の発足〉

第二部設置を前に、39年秋から短期大学部自治会が取組んだ活動として、第二部即時編入要求運動があるが、通史編の短期大学部併設のところで取り上げたので、ここでは触れない。40年の第二部設置後は第二部・短大部合同自治会が、短大部廃止後は第二部自治会が、第一部自治会とともに、平和と民主主義、学問と思想の自由を守り、学生生活の向上をめざす両輪となる。

#### 〈大学紛争の教訓〉

全国の大学を巻き込んだ大学紛争の背景、本学での紛争の経過と自治会とのかかわり、大学改革への諸要求などは通史編で述べた。安保闘争後、全学連は指導理論をめぐって抗争をつづけ、革マル、民青、三派系(中核派、社会学同諸派、社青同解放派)に分裂、これを反映して本学の紛争も、民青と全闘委の覇権争いの色合いが濃かったことは否定できない。全闘委学生の襲撃で自治会書記長らが負傷・入院した5・19事件、民青が封鎖自主解除を叫んで全闘委と激突した7・1「外大戦争」など、流血の事態が繰り返されるにつれて、両者の憎しみが増幅されていったのは、不幸なことであった。

第一部自治会規約の末尾には、次の4項目の確認事項が掲載されている。

1. 学内にゲバ棒、ヘルメット等凶器を持ちこまない。
1. 意見の相違を暴力で解決しない。
1. テロ、リンチを行わない。
1. 学生の総意に基づかない封鎖は行わない。

大学紛争の苦い教訓に学び、大学の自治を守り、学問の自由を擁護していくために、自治会員が守らなければならない「自主規律4原則」として確認されたものである。

#### 〈学舎移転への取組み〉

第一・第二部自治会が昭和42年9月、教職員組合、生活協同組合、寮自治会とともに五者協議会を結成し、移転計画の公開と全学構成員の意見反映を求めたことは、前節の教職員組合のところで触れたとおりである。41年には代表団による文部省交渉も行われた。大学紛争中の44年2月には「学舎移転ニュース」が発行され、自治会の議論も深まった。45年には五者協に大学院生協議会を加えた六者協が結成され、「自主・民主・公開の原則」が基本的課題とされた。47年には全学移転対策会議が発足した。

第一部自治会執行部内には移転局が設置され、施設、交通、カリキュラム、管理運営問題の4点を重点に要求をまとめあげた。第二部自治会では50年に移転問題小委員会を設置、

外大発展のため移転は必要と認めながらも、働きながら学ぶ権利、擁護のための交通問題、カリキュラム改革を掲げ、移転シンポジウムを開催した。このほか第一・第二部共通の問題として、男子だけでなく女子寮建設を強く要求し、実現に結びつけていった。

#### 〈第一部自治会活動停止〉

大学紛争以後も過激派集団は、赤軍派による日航機よど号ハイジャック(45年)、沖縄施政権返還反対闘争での火炎ビン、小包爆弾などによる警察官・家族殺傷(46年)、連合赤軍の浅間山荘事件、パレスチナ解放人民戦線日本人ゲリラによるイスラエル・テルアビブ空港での自動小銃乱射事件(47年)、連続企業爆破事件(49年)など絶望的な行動を繰り返し、世論を敵に回した単なる体制否定の過激派小集団に分裂していった。既成派閥の主導権争いによる抗争も激化し、革マル派グループの中核派襲撃など「内ゲバ」が頻発(48年)するに至る。他方、一般学生は“政治の季節”を終えたあとの“しらけ”の時代を迎える。

本学でも箕面移転後、学生を取り巻く環境は一変した。汚くて狭くて何もかもが不備だった上八時代は問題山積、次から次と出される自治会の学内改善要求に対しても敷地面積と予算の制約から何一つ応えられない状態だったのが、箕面では大学会館、男子・女子寮、体育館、運動場、サークル共用施設、合宿所など厚生施設がそろい、教室、図書館から視聴覚施設まで一新され、欲を言えばきりはないとしても、ほぼ学生の要求が満たされる新キャンパスが実現したのである。自治会の要求事項はぐんと減ってきた。

学生気質も大きく変わった。自動車生産台数が1,100万台を突破、米国を抜いて世界第1位になった(昭和55年)ことに象徴されるように、わが国は経済大国への道をひた走り、豊かさしか知らない若い世代が育ち始める。豊かさは個性豊かな人間を育てる、と貧しさの中に育った大人たちは期待した。しかし一般的に言えば、豊かさが受験戦争に拍車をかけ、偏差値教育と乱塾時代を切り抜けて大学にたどり着くころには全精力を使い果たしてしまい、あとは遊ぶためのアルバイトとサークルと合コンしか興味がないという学生も少なくない。大学はレジャーランドと化した、と極言する評論家も現われる昨今である。自己中心的で、興味のあることには“オタク族”的関心を示すが、政治や社会的矛盾には「グサイ」とそっぽを向き、面倒なことには手を出さない学生がふえてきたのは全国の大学に共通した傾向である。

本学でも移転後、年2回の学生大会が次第に成立しなくなってきた。大学紛争の結果生まれた、学生が学科などについて自主的に話合うための時間、アセンブリー・アワーも主としてクラブ・サークル活動に当てられるようになり、当初の目的のためには活用されなくなった。自治会の学長交渉で、アセンブリー・アワーが検討の時期に来ていることが問題となったときは、「取りつぶし反対」で結束し、学生大会も成立したが、その後は低調で、平成2年初めには、次期役員を決めることができず、自治会はついにその機能を停止するに至った。本学の『学生案内』の末尾には自治会規約はじめ学生団体規約が掲載され

ているが、平成3年度版の自治会規約には「現在、活動停止中」と記載されている。敗戦の混乱の中、学園復興・民主化へと高槻の地で燃えあがり、上八へ引き継がれた自治会活動の火は、移転後の箕面でこのまま消え去るのであろうか。あるいは再び新しい力を伴って、いつか燃えあがる日を迎えるのであろうか。

なお、第二部自治会は、第一部自治会の機能停止後も活動をつづけている。

### (3) 大学生活協同組合

#### 〈食堂経営協議会〉

大学生活協同組合の誕生は、学生自治会活動と深くかかわっている。食べるものにも事欠く敗戦後の食糧難のなか、荒廃した学園を建て直すため本学自治会が誕生、生活擁護運動として食堂を業者の手から取りもどし、学生たちのものにする食堂奪還運動が進められ、食堂経営協議会を成立させたことは前節でも述べた。本学生協の原点ともいえる食堂経営協議会の成立については、単身赴任で高槻校舎の旧将校集会室の一室に住み、寮生といっしょに食堂の団子汁をすすった小林武三教授(中国語)が『学生部広報』第37号に寄せた「追憶の一齣・外大誕生前夜」で、次のように回想している。

「23年の新学期に入るや、学生自治会委員長楠見昭二君が特に入寮して寮生活の刷新にとりくみ、丸山典男、立間早苗君たちが食堂奪取に立ちあがる。5月20日の午後、自治会委員の立ちあいの下で、食堂を封鎖、帳簿の押収、倉庫の立ち入り検査など強行した。食堂側もさるもの、倉庫には米一粒も残していなかった。“一体どうしてくれるんだ、理不尽なこんなことをして!”と反撃に出た。学生側は慌てた。農民組合にとびこんで、やっと明日の食糧を確保した。それから深夜まで息つまる帳簿検査が続く。米2石の不足が説明できなくて、やっと学生側に凱歌があがった。ここで食堂経営協議会が成立、経営者谷口源治郎氏を一職員に位置づけるのに成功した。経営協議会は学生、職員、教官代表をそれぞれ2、2、2計6名で、わたくしがその長におされた。(中略)晩秋になって谷口氏から、氏の戦友の未亡人母子二人の生活を守ってくれ、その子供の成人するまで保証してくれればという条件で、食堂を学生に譲ると申し入れがあり、協議会はこれを受け入れ、氏に感謝状と金一封を贈ることでめでたく妥結、野見神社で食堂の譲渡式が挙げられた。因に、この未亡人は生協食堂にひきつがれ、娘さんが高校卒業、就職するまで働いて、44年3月引退した」

#### 〈外大生協創立〉

食堂経営協議会を足がかりに、食堂や寮をさらに改善して生活協同組合にする動きも出てきた矢先の昭和23年10月、悠々寮火災が発生、生協化計画は大きく遅れてしまった。外

大生協設立準備会が発足したのは31年6月であり、生協創立総会が開かれたのは、高槻から上八への統合・完全復帰が実現した32年7月6日であった。初代理事長には前出の小林武三教授が選ばれた。

定款には「組合は、協同互助の精神に基づき、民主主義的運営により、組合の文化的・経済的向上を図り、公共の福祉を増進することを目的とする」とうたい、新しく女性7人を雇い入れ、食堂だけの営業を開始した。こうして生協は“大学の胃袋”としてスタートしたが、悠々寮火災のあと、花園寮がまだ建設されていなかった当時、地方出身学生の経済的負担軽減に大きな役割を果たした。

34年度950万円だった供給高は、35年度1,175万円、36年度1,425万円と、徐々にではあるが着実に伸びていた。

#### <第1回総代会>

初期の生協は、組合員の意識も低く、理事会と従業員との定期的な話し合いの場もなく、総代会も設置されていなかったが、生協を組合員自身のものとするため、定款規定にのっとり37年度から総代会が設置されることになった。総代会は、全組合員の総意を反映した生協運営を行うため、常時開催が困難な総会に代わるものであり、各語学科、教職員、生協従業員から選出される計60名の総代によって構成され、年度の方針や予算の決定、理事・監事などの役員も選出する最高議決機関である。

生協第1回総代会は37年11月10日に開かれた。村田忠兵衛・第4代理事長以下、理事8名、監事2名の役員を承認、各種報告を一括承認したが、学生の組織率87%という事実を踏まえて、組織率100%達成、さらに当時はまだ任意団体であった外大生協の法人格化などが課題とされた。

#### <組織部設置とサービス拡大>

翌38年には組織部が設置され、組織活動を強化。当初は食堂だけの営業だったものが、食堂部、食品部、喫茶部、購買部、書籍部、サービス部の6部制に拡大され、供給高も1,595万円に増大、翌39年には理髪部が生協化された。

#### <食堂、地下へ移動>

39年春、鉄筋コンクリート5階建新館完成に伴い、生協食堂は校舎北端の学生控室棟から校舎南端の新館地下1階に移転した。

夜間・第二部設置に伴って40年から第二部向けの営業を開始、書籍部に職員を配置したほか食堂部に栄養士を配置するなど生協充実に努め、この年供給高は2,000万円を超えるに至る。

41年からは附属図書館への書籍取扱を開始、教科書の一元取扱いにも取組み始めた。42

年には供給高3,493万円、正規職員18名を数え、生協ニュース、総代通信も発行、書籍部、軽食部の増築と食堂大改装を行った。

#### 〈赤字との闘い〉

順調に歩んできたかに見えた生協も42年には繰越赤字340万円を計上する。さらに翌43年は供給高4,388万円であったが、過大な設備投資が裏目に出て単年度約700万円の欠損を出し、上部団体である大学生協連関西地連の査察を受ける。44年には大学紛争による全学封鎖で営業がストップ、封鎖解除後の10月から食堂だけ細々と営業を再開したが、累積赤字はついに1,132万円にのぼった。生協は大幅な人員整理、経費の大幅削減、営業部門の縮小など、苦しい再建の道を歩み始める。

『外大教職組新聞』1970年3月13日合併号には「外大生協の再建は一人一人の実践から始まる！」と題する生協理事長・八木浩の一文が掲載されている。教職員の再建への協力を呼びかけたものであるが、生協の現状、生協のあり方にも触れているので次に引用する。

#### 生協の現状

外大生協は昭和42年までの赤字と、43年度の大きな赤字と、44年度の封鎖でうけた打撃が主原因となって、1,000万円の赤字をかかえ、全面営業が不能となり、定員は最高時の四分の一となって、主として食堂だけが動いている状況にあります。

御存知の通り、一番大きな失敗は、43年度に自己投資を行って生協を改造し定員を増加してレストラン方式へ移行したさいに、4,000万円を突破する供給増大のみに目を奪われて、月々の仮決算がおくれたり、誤っていたりして、理事会が刻々増大している赤字に全く気づかなかったところにありました。

そして丸一年ののち、大学生協連に指摘されて巨大な赤字に初めて気づくというような結果となりました。

こうして生協における理事会のありかたが根本的に問いなおされ反省されることとなり、経営を業務主任まかせにしておくのではなく、理事会が正確な月々の決算を予算と対照して検討し、互いに各部門でチェックした結果を総合していく必要があらためて認識されるに至りました。

#### 教職員へのお願い

目下の生協の再建計画は、4月・5月・6月のうちに、なんとかして全面営業にこぎつけるにはどうすればよいか、にかかっています。4月に東販の書籍赤字を消すために、先生方の教科書をできるだけ多く生協扱いにしていきたいと思います。

4月から書籍や購買部門の共同購入を大幅に増大させたいと思いますので、これにも御協力をおねがいします。また、日々食堂をぜひ御利用下さいませようお願い申し上げます。

出資金貸与を呼びかけましたところ、すでに40名の先生から10万円の御協力がありましたが、なお一層の御支援をおねがいます。

学生は出資金を凍結した上、3,000円へと値上げする予定です(新入生の場合)。教職員の出資金も1,000円から1口、2口(1口は500円)は引き上げねばなるまいと考えています。

教職員に奉仕することの少い生協ですが、厚生事業団体としてのわれわれの生協を、大学の中に明確に位置づけて、これを発展させることを真剣にお考え下さいようお願いいたします。ことに全教職員が生協民主主義をより深めて、理事と総代にいろいろ意見を反映して下さい。そしてこの6月には、ぜひとも新しい理事を御推薦下さらなくてはなりません。

#### 生協のあり方

生協と大学の関係については、昭和24年の「学校消費生活協同組合の育成について」の大学学術局長通達が基本的なあり方を示しています。生協の厚生活動とその教育的効果を考え、これを教職員学生一体となって自主性と共同責任をもって発展させるように、育成援護せよというのがその趣旨なのです。しかるにその後、文部省は昭和34年の「国立大学学生会館設置要項」において、学長任命の職員と学生に運営させ、学生部長が部下を常駐させて管理運営すべきだといひ、その上、受益者負担の原則を水光費などについておしつけてきました。昭和40年の「国立大学における厚生補導にかんする基本的施設・設備について」の通達では、福利施設と称して基本値を出していますが、右の誤った、また民主主義破壊的な考えのために、全国の大学での生協と当局の種々の矛盾・衝突がおこっています。

生協への当局の援助はしぶしぶであって、ひどいときは外部団体とみなしたりする管理者すらあります(金子学長も生協よりデパートの方がましだといいました)。教職員のみなさまが、このような矛盾に対して、どういう立場に立たれるかは、申すまでもありません。

#### むずかしい外大生協

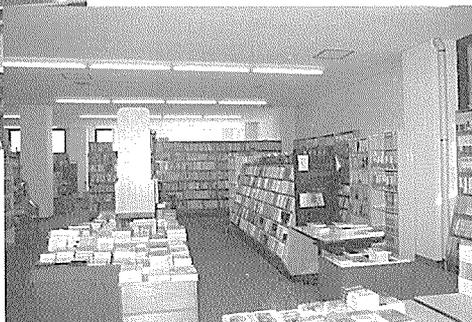
生協の1年をよく検討してみますと、1年の半分が休みに近いことが目につきます。この閑散期の利用がむずかしいところに、まず生協のむずかしさがあると思います。

そのため、生協従業員のオーバーワークは人権を侵すばかりのものとなり、主任など1日12時間はさらに働いています。しかも職員の待遇はひどく悪いので、なんとかして引上げなくてはならないのですが、それもなかなかうまくいきません。

生協は食堂がないともいえるわけで、実は学生ホールということなのです。従って回転率は最悪であり、清掃も追いつきません。外大生は本当に気の毒です。学生会館



食堂部(真面学舎)



書籍部(同)

なしで、食堂を会館代りにしなければならないのです。

しかも上六周辺には、いろいろたくさんのお店があり、こんなにひどい地下室なら、外にこういうことにもなるでしょう。辛うじて生協意識が、学生・教職員を生協にひきとめているのは幸いです。

生協は、基本的施設がありません。休養更衣室も、書籍のたなも、組織部の部屋も経理の部屋も、学校に叱られながら、自分の金でつくらねばなりません。食堂に至っては、1年で250万円も投資して改造せざるをえなかったのです。設備が悪いため、大けがした人も何人かおられます。

組合のみなさんの生協への暖い御理解を切にお願いいたします。なぜなら生協は、どんなに困っても組合員の団結と連帯を最大の宝とみなす組織であるからです。

八木理事長の一文では触れられていないが、第二部組合員のための営業が従業員の長時間労働につながり、経費増から経営効率を悪くするという点も外大生協のもう一つのむずかしさであった。

再建初年度の45年は赤字体質の払拭を目標に食堂、フード、購買の3部門制でスタート、10月には書籍部も営業を再開した。組織部による喫茶自主営業も始まり、この年7年ぶりに160万円の剰余を計上、累積赤字は952万円となった。

#### 〈「受益者負担は不適當」で確認書〉

この年10月、生協は水道・光熱費の受益者負担問題で学生部と交渉、山口慶四郎学生部長、田辺保学生課長との間で「教育の場における受益者負担は不適當」との確認書を交わした。

生協の年間供給高は3,000~4,000万円であり、うち120万円が水道・光熱費として支払われてきたが、この確認書は、学生の経済負担軽減への第一歩となったのである。

翌46年5月の学生部交渉では、喫茶部全面営業の前提となる配管工事実現を約束させた。こうして47年9月、全額大学側負担になる喫茶室が食堂ホール北側にオープンした。コーヒー70円、野菜サラダサンドイッチ200円、トースト・コーヒーまたは紅茶・果物のモーニングサービスは100円であった。

#### 〈出資金引上げ〉

赤字解消は、遅々として進まなかった。昭和50年の累積赤字は1,545万円に達し、経営管理の混乱から関西地連の指導が入った。翌51年には出資金が第一部10口・5,000円に、第二部は8口・4,000円に引上げられ、52年にはさらに第一部14口・7,000円、第二部10口・5,000円となる。

#### 〈法人格の取得〉

昭和53年6月、外大生協は法人格を取得した。

12月に開かれた法人格取得後初の総代会では、学舎移転に向けての活動基本方針を決定した。これより先、47年に生協は一・二部自治会、教職員組合などとともに全学移転対策会議を発足させていたが、総代会では、永年の懸案である総合的学会館の建設および生協諸施設の充実、生協の地位と権利の向上などを自治会とともに大学当局に強く働きかけることを再確認したのである。

#### 〈赤字克服・黒字体質へ〉

51年から3年にわたる再建計画によって生協は54年6月、ようやく赤字を克服し、黒字体質の基礎をつくることに成功した。新入生加入率も第一部98%、第二部80%に高まった。この年、出資金は1口1,000円、第一部は7口、第二部は5口となった。

#### 〈箕面移転後〉

昭和54年9月、上八から箕面への学舎移転が実現した。食堂のほか休憩室、談話室、会議室、集会室など、学生会館的役割をすべて担ってきた狭くて汚い上八地下生協ホールに代わって箕面キャンパスには鉄筋コンクリート造2階建延べ3,038平方メートルの学会館も完成した。すでに赤字を克服した生協は、移転後、一変した新しい環境のなかで順調に健全経営の道を歩み始める。上八と違って、大学近辺に商店がほとんどないせいもあって生協利用は増大した。

学会館に食堂部、喫茶部、書籍部、さらに文具・食品、家電・事務機器、各種チケットなどを取扱う購買部が入り、このほか生協本部事務所では各種証明写真、共済、旅行保険、自動車保険などの加入・給付業務も行っている。また留学生会館では寮生(留学生および日本人)向けの食堂、購買部の運営も担当している。平成5年からは海外旅行を含む旅行

あっせん業務も開始する予定で、豊かになった学生のライフスタイルに合わせた「物品からサービスへ」の多彩な取組みが今後の課題といえる。こうしたなかで、たとえば新入生向けの『辞書の紹介』と書評誌『RAINBOW REVIEW』が各語学科・講座の教官・院生の協力を得て発行(年1回)されたことは、外大生協の特色を生かしたユニークな試みといえよう。

平成3年12月末現在の生協組合員数は4,416人、出資金は第一部10,000円、第二部8,000円、年間利用総額は5億2,500万円、創立当初に比べ、実に50倍以上の成長を遂げたわけである。

外大生協は平成4年7月、創立35周年を迎えた。歴代理事長は次の16人にのぼる。平均在任期間は2年2カ月であるが、第15代の田川弘雄は昭和58年から平成元年まで足かけ7年の長きに及んだ。現第16代の林弥富は第12代につづいて2度目の就任である。

初代	小林 武三	第9代	島崎 郁
第2代	住田 照夫	第10代	岡本 武
第3代	黒木 義典	第11代	巢山 靖司
第4代	村田忠兵衛	第12代	林 弥富
第5代	梅津 和郎	第13代	石田 修一
第6代	国本 哲男	第14代	世古口雄三
第7代	法橋 和彦	第15代	田川 弘雄
第8代	八木 浩	第16代	林 弥富

## (4) 大学後援会

### 〈父兄会の発足〉

本学後援会の前身である父兄会も、教職員組合、学生自治会と同じように、敗戦後、高槻での学園復興運動のなかから生まれた。

昭和22年6月、学生大会の決議に基づく自治会の申入れで復興委員会が組織され、総額500万円の母校復興計画予算が組まれた。父兄会は、岩崎兵一郎教授(ロシア語)の尽力で、在校生の父母から復興資金を得るための母体として発足したのである。復興委員会に組み込まれた父兄会の募金割当額は150万円(同窓会300万円、在校生50万円)であり、図書館の図書はじめ教室など校内設備の整備・充実に財政面で大きく貢献した。23年7月には、父兄会内部に新制大学移行父兄後援会が結成され、大学昇格実現に向け協力している。

### 〈父兄会費問題〉

父兄会は大学昇格後も、戦後の混乱・窮乏期の多難な学校運営を物心両面にわたって援

助しつづける。「大学と家庭の連絡を密にして大学教育の充実をはかる」ことを目的に、事業として

- (1) 学生の教育に必要な施設の補助
- (2) 大学当局との懇談会
- (3) 学生との座談会
- (4) 教官の学術研究に対する補助と慶弔慰労
- (5) その他大学振興上必要と認めた事項

を掲げた父兄会であったが、昭和30年代後半に入って、学生自治会が会費の使途を問題にしはじめた。いわゆる「父兄会費問題」である。

昭和37年4月14日付『大阪外大新聞』第33号は「予算会議参加を要求 再燃した父兄会費問題」の見出しで、入学式当日、自治会が「父兄会費は払う必要がない」という掲示を張り出したところ事務局が撤去しようとしたことを伝えている。当時の父兄会費は3,000円で、入学時に納入することになっていたが、自治会は父兄会費の使途が公開されず、決算報告も行われていないことを不満とし、使途を決める予算会議への自治会執行部参加を要求したのである。

自治会による父兄会費不払い呼びかけは翌38年もつづけられた。父兄会費の学生への還元が外大祭、東外戦、総合雑誌『求索』に対する補助など僅か20万円で、新入生から集めた会費総額100万円の2割に過ぎず、しかも残りの使途は不明という点を不満としたものであった。

「我々としては教育の機会均等から、少ない費用ですむ国立大学に来ているのであるから、もし父兄会費をとるなら、やはり学生のために使ってくれることを要求する。そのためには現在、父兄会の会計監査も行われていないという状態、近隣の父兄のみしか来ることができない入学式につづく総会等をそのまま放置することは絶対にできないであろう」[39年1月27日付『大阪外大新聞』第44号]

#### 〈大学後援会の創設〉

父兄会は39年3月31日をもって解散、4月1日から大阪外国語大学後援会(以下、後援会という)として発足する。同年4月15日発行の『学内報』第8号は、後援会創設について次のように報じている。

「本学父兄会は、去る昭和22年に創設され、戦後の多難な学校運営時代以来、物心両面にわたる本学への援助をつづけて今日に至ったが、時勢の推移に伴い、資金面の制約等で活動範囲が著しくせばめられるようになった。ここ数年来、同会幹部の間でこれが打開策を検討しつつあったが、本年2月7日の父兄会役員総会において、この際思い切って父兄会を解散し、従来父兄のみの会であったものを幅広く一般有志の参加を得られる姿に改め、活動を強化充実すべきであるとの線が打ち出された。次いで

2月28日、父兄会臨時総会を開いて付議した結果、本年3月31日をもって父兄会を発展的解消し、4月1日から大阪外国語大学後援会として発足することを議決した。同時に大阪外国語大学後援会規約も本総会で正式に決定された。

父兄会と著しく変わった点は

1. 既述のように従来父兄のみを会員としていたものを、賛助会員、特別会員として一般有志が参加できるように改められた。
2. これまで3,000円であった父兄の会費が5,000円に改められた、等である」

父兄会から後援会への改組が、前に述べた学生自治会の要求に応えるものであったかどうかは『学内報』の記述からはうかがえない。後援会発足に対しては、今度は教職員組合が素早く反応した。『組合新聞』第4号(39年4月16日発行)は「突然 父兄会、後援会に変わる」と題する次の一文を掲げ、後援会運営に危惧の念を表明した。

「この会は父兄からなる正会員、趣旨賛同者よりなる賛助会員、卒業援助者よりなる特別会員より構成され、役員は委員長1名、副委員長3名、委員若干名、会計監査2名、常任幹事2名、顧問若干名、相談役若干名よりなっています。ところで最も大切な事務担当は学生部長と事務局長の2名よりなる常任幹事であり、意見開陳する舵取りである顧問には、学長と、役員会で適当と認めたものと、本学功労者となります。これらは再選をさまたげません。

このような委員構成は、学生と教職員一般の生きた意見を反映するに乏しく、お互いの自由な批判と現実とそうした見方をうち出すのに不便ではないでしょうか。この大切な事業には、教育の場の外の委員が適当と認めたり、功労ありと認めたりした人を中心におくべきでしょうか。さらにこれらの委員の選挙規定は不思議にも書かれていません。

役員会は随時開かれえますし、臨時総会も役員会で代替できます。しかも議事は役員会出席者の過半数でまきます。また総会の議決によって総会を省く役員会に審議事項を一任できます。

このような会のために、父兄は1口5,000円を寄付します！ しかもある父兄は加入せず、ある父兄は5,000円……(中略)……大学生は学資としての他、このような援助があるのでしょうか。

私達の時代は民主的組織自体が操縦されやすい時代であります。ですから本当にしっかりした目的と規約とをつくらないと、非民主的偏向を示します。われわれの自治は、教育研究の自治と学生の自治を意味します。局長、部長、学長、適当と認めた者、功労者というような管理職的色彩のあるグループと、事業を援助する者という財界的色彩のありうるグループと、ただでさえ主体性のうすい、出席のむずかしい父兄グループの三者が、この会の目的を達成するために必要な具体的事業の審議と予算の編成をすることになっています。

一体これらの事業や予算の審議は教授会や学内が一般に関与できない雲の上で行われるのでしょうか。

そしてこのような規約はもっと多数で多角的な意見を取りいれてつくるべきではないか。学園の民主化を阻まないか否か、父兄会のやったことにわれわれは口出ししてはいけないのか否か、産学共同体となりつつあるのはよいか否か、皆様方の御意見をさらにお聞かせ下さい」

貧困な国立大学財政のなか、後援会の資金は本学の施設充実、学生への各種援助、教育研究活動に欠かせないものではあったが、自治会、教職員組合からは厳しく見守られる後援会のスタートであった。

以下に掲げるのは数回の改正を経た平成3年度末現在の後援会規約である。会費は正会員1口1万円、賛助会員は年額1口1,000円である。

#### 大阪外国語大学後援会規約

第1条 本会は、大阪外国語大学後援会と称し、事務所を大阪外国語大学内に置く。

第2条 本会は、大阪外国語大学の教育事業の向上、発展を後援することを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達するため下記の事業を行う。

1. 諸施設・設備の改善充実援助
2. 学生の厚生および体育・文化活動の援助
3. 教育研究活動援助
4. 会員相互及び大学との連絡に関する事項
5. その他大阪外国語大学振興上必要と認めた事項

第4条 本会は下記の正会員及び賛助会員、特別会員をもって組織する。

1. 正会員 大阪外国語大学学生の父母
2. 賛助会員 本会の趣旨に賛同し会費を納入した者
3. 特別会員 本会の事業を援助する者

第5条 本会は下記の役員を置く。

- |      |     |                                      |
|------|-----|--------------------------------------|
| 委員長  | 1名  | 本会の会務を掌理する。                          |
| 副委員長 | 4名  | 委員長を補佐し、委員長事故ある時は之を代理する。             |
| 委員   | 若干名 | 委員長及び副委員長を補佐し、本会の会務を処理する。            |
| 会計監査 | 2名  | 本会の会計監査に当る。                          |
| 常任幹事 | 2名  | 本会の事務を担当する。常任幹事は大阪外国語大学学生部長と事務局長とする。 |
| 顧問   | 若干名 | 本会の重要な会務に関し意見を開陳し本会の諮問に応ずる。          |

イ. 学 長

ロ. 役員会が適当と認めた者

相 談 役 若干名 本会に特に功勞のあった者で、役員会が適当と認めた者

委員は総会で選出する。委員長、副委員長、会計監査は委員の互選とする。委員長、副委員長、委員、会計監査の任期は1年とし、次期役員の決定するまでその任務を行うものとする。但し、再選は差支えない。

第6条 役員会は本会の目的を達成するために必要な具体的事業の審議と予算の編成をする。役員会は随時開くことができる。

第7条 本会は毎年1回7・8月の間に定期総会を開く。本会委員長が定時総会の開催が困難と認めたときは役員総会をもって代えることができる。

第8条 役員総会を定時総会に代えて開催したときは、委員長はその総会で行われた議決その他重要な事項について会員に通知するものとする。

第9条 総会並びに役員会の議事は出席者の過半数で決し、可否同数の時は議長が決するところによる。

第10条 本会の経費は会費及び寄付金をもってあてる。既納の会費は返還しない。

第11条 本会正会員の会費は1口1万円、賛助会員会費は年額1口1,000円とし、入会の際納入するものとする。

第12条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月末日に終る。

第13条 本会の会計は毎年4月末日までに会計監査の監査を終え委員長は監査の結果を定時総会に報告し、総会の承認を受けるものとする。

第14条 本会の規約は総会の決議を経なければ変更することができない。

#### 付 則

1. 本会を解散する場合の財産は、本会の目的を達するため大阪外国語大学に指定寄付するものとする。
2. 本規約は昭和39年4月1日から実施する。
3. 昭和39年3月31日現在における、大阪外国語大学父兄会会員は昭和39年4月1日以降大阪外国語大学後援会正会員となるものとする。
4. 本改正規約は、昭和43年8月17日から実施する。

#### 付 則 (昭和51年8月改正)

1. 本改正規約は、昭和51年8月29日から実施する。
2. 改正後の第11条による会費の2分の1に相当する額は、当分の間積み立てるものとし、大学が移転した場合の記念事業に当てるものとする。

#### 付 則

この規約は、昭和54年8月11日から実施する。

## 付 則

1. この規約は、昭和61年8月9日から実施する。
2. 当分の間、第11条の規定により納入された会費の中から、大学の特別事業に充てる経費として、相当額を積み立てるものとする。
3. 昭和51年8月29日改正付則第2項の記念事業は、その目的を達したものとし、その積立残余額は、前項の特別事業に係る経費に繰り入れるものとする。

51年8月改正時の付則にあるように、大学移転記念事業に当てるため積み立てられた基金の一部は、同窓会が大学に寄付した記念会館の備品費などに1,500万円、同じく長野県白馬村の合宿研修施設・山の家の什器・備品費に300万円が支出された。

### <地方別懇談会>

後援会の事業は規約第3条に掲げられているとおり、財政的援助が主体であるが、正会員である本学学生の父母と大学とのコミュニケーションを深めるため実施されたものに地方別懇談会がある。

北は北海道、南は沖縄と本学へは全国各地からの入学者が集まるが、遠隔地の会員が本学を訪れる機会は少ないため、学長、学生部長はじめ後援会役員らが地方へ出向き、子女の教育について懇談する場を持つというもので、昭和53年度の九州・中国地区を皮切りに、原則として年2回、四国、近畿、関東・東北、北海道、甲信越、北陸、東海、沖縄など地区別に開かれてきたが、近畿地区の懇談会は61年度で打ち切られた。63年度は東北・北海道、東海・北陸の両地区で実施されたが、この時点で懇談会見直しの声があがってきた。

地方別懇談会は、国立大学では他に例のないユニークな企画であったが「存在そのものが過保護」という声や、実効を疑問視する意見も一部にあった。さらに近年、本学への女子学生入学比率が年々高まり、これに関連して学生の出身地が次第に近畿地方に偏る傾向も強まってきた。平成元年度入学生に例をとれば女子学生比率は70%、近畿地方出身者は60%を占めるに至っている。このため、結局、地方別懇談会の所期の目的は達成されたとして、63年度を最後に打ち切られた。

### <『CAMPUS NOW』の発行>

地方別懇談会に代わる企画として平成元年度から広報誌『CAMPUS NOW』（後援会日より）が発刊された。年度の予算、収支決算書はもちろん、本学の年間行事からカリキュラム、課外活動、奨学金など厚生関係、国際交流、健康、就職問題など、あらゆるキャンパス情報が保護者のもとへ送り届けられている。

後援会支出のうち最大のものは、事業費であり、年度支出の60%を占める。内訳は第一

部、第二部学科別合宿研修援助費、学寮祭援助費、就職あっせん援助費など学生厚生補助費と、東外戦宿泊費、近畿地区国立大学体育大会参加分担金など学生体育援助費、このほか間谷祭(統一外大祭)援助費、山の家管理援助費などであり、最近では活発化する一方の国際交流関係経費の比率も高まってきた。

年度ごとの事業費のほか(1)学術交流助成、(2)総合体育施設整備、(3)創立70周年記念、(4)学生災害救助対策など、大学特別事業計画の協力経費積立も行われており、貧しい本学財政を支える目立たぬ潤滑油、あるいは縁の下の力持ちの役割を果たしている。

## (5)同窓会(咲耶会)

### 1. 戦前

大阪外国語学校が第1回卒業生を送り出したのは大正14年3月19日である。大正12年から外語に付設された第五臨時教員養成所の第1回卒業式も同時に行われている。この年に外語および第五臨教卒業生を正会員とする第1回同窓会総会が開かれたことが各種資料から類推できるが、日時・場所などは特定できない。

#### 〈『会報』第1号〉

昭和5年1月1日・同窓会本部発行の『会報』第1号が残っている。タブロイド版10頁のものであるが、そこに第5回同窓会総会を昭和4年6月8日、四ツ橋の「南一温泉料理」で開催、「会長閣下(中目覚校長)を初め諸先生方の御光来を得、また30余名の同窓諸兄の出席」があったことが伝えられている。

この同窓会『会報』は第1号と銘打ってはいるが、編集後記には「前号会誌発行以来永らく中断致しまして誠に申訳ないことと恐縮(中略)今回発行の会報も今までの形式を破って新聞様のもと致しました。決して時代の流行に倣ったと云ふものではありません。今の本会の状態では斯うした形式をとって成可く費用を要せず、しかも最も効果を大きくと云ふ考えから……」と記されている。「前号会誌」がいつ発行されたのか、『会報』第2号以降はどうなったか、資料を欠くため明らかではないが、同窓会発足初期は当然、会員数も少なく、財政的基盤も弱いため、活動も思うに任せなかったようである。

『会報』第1号には、中目会長の祝辞が寄せられているが「同窓会も昭和5年3月に第6回卒業生の入会を見れば本科卒業会員の数が1,000を超え、これに教員養成所卒業生を加ふれば1,200余名を算することとなる。第1回卒業生諸君に至りては各方面の実務に就いて既に5年の経験を積むことになる。方に油の乗る時期<sup>まさ</sup>と言はねばならぬ。願くば会員諸君互いに研磨扶掖し益々本会の光を放たれたい」と、今後に期待をつなぐものであった。

ちなみに昭和4年5月発行の『外語一覽』付録に卒業生の方面別分類が掲載されている

が、それによると第1回から第5回までの本科卒業生は892人、第五臨教卒業生134人、計1,026人、消息のわかるもの1,008人。このうち893人(89%)が国内に在住、115人(11%)が中国、台湾、朝鮮、南洋方面、さらにウラジオストク、インド、南米、メキシコ、フィリピンなど国外に散らばっており、同窓会支部として東京、福岡、大連、哈爾濱(ハルビン)、京城の5支部があげられている。

#### <同窓会会則>

『会報』第1号には同窓会会則も掲載されている。

第1条 本会ハ大阪外国語学校同窓会ト称ス

第2条 本会ハ会員相互ノ親睦ヲ図リ母校ノ発展ヲ援助スルヲ以テ目的トス

第3条 本会ノ事務所ヲ大阪外国語学校内ニ置ク

以上の総則条項は「大阪外国語学校」を「大阪外国語大学」とすれば、現在の会則に通ずる。

#### <会 員>

会員は3種類に分けられていた。

第4条 本会ノ会員ヲ次ノ三種ニ分ツ

(イ)正 会 員 大阪外国語学校本科及ビ第五臨時教員養成所出身者ヲ以テシ卒業ト同時ニ入会スベキモノトス

(ロ)準 会 員 母校選科及ビ別科修了者中ノ者ニテ希望入会シタルモノ

(ハ)特別会員 母校現任職員及ビ旧職員並ビニ母校ニ対シ功勞アリ特ニ校長ノ推薦ニカカル人

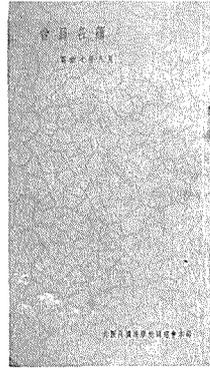
この会員分類は現会則でも踏襲されているが、その後の本学組織拡大に対応して、正会員は外語、第五臨教のほか外専、大学(第一部・第二部)、短期大学部の卒業生、大学院修了者も含むものとなった。さらに現会則では中途退学者でも入会を希望し、総会の承認を得れば準会員となることができる。

#### <役員>

同窓会役員については、会長、理事、幹事、会計係を置くと決めているが、会長は「大阪外国語学校校長ヲ推戴ス」と定められており、戦前・戦後を通じ専門学校時代は、校長が同窓会長に推されるのが通例であった。理事は「特別会員中ノ母校現任職員ヨリ会長コレヲ指名囑託ス」、幹事は「大阪市及ビソノ付近ノ地方ニ在住ノ正会員中ヨリ同期出身者毎ニ三名ヲ選挙ス 猶幹事ハ更ニ互選ヲ以テ常務幹事ヲ設ケ是ニ日常ノ会務ヲ取扱ハシムルコトヲ得」とされた。会計係も「特別会員中ノ母校現任職員」であった。



左から葉山同窓会長、中目先生、  
中目先生令夫人



『会員名簿』新書サイズ(136頁)

### 〈入会費・会費〉

昭和5年当時の入会費・会費は、「入会ノ際ニ金2円ヲ入会費トシテ納メ 且会費年額1円ヲ納ムベシ 但シ一時金15円ヲ以テ終身会費トス」と定められている。この額は昭和12年会則でも変わっていないが、昭和16年になって「本会会費ハ終身会費金17円トス ソノ一部ハ在学中分割予納、残金ハ卒業ノ際完納スベシ 分割納入ハ各学年各学期毎ニ金1円」と改められた。ただし会費を納めるのは正、準会員のみで、特別会員は会費納入を免除されていた。

### 〈中目校長胸像の建設〉

戦前の同窓会事業のうち主なものとしては、中目覚・初代校長(同窓会長)の胸像建設と「烈士之碑」建立があげられるが、「烈士之碑」については、すでに通史第2章で述べたので、ここでは繰り返さない。

中目校長は、大正10年12月10日、大阪外国語学校校長に就任以来、在職11年10ヵ月、昭和8年9月27日退官したが、同窓会本部では同年11月、葉山万次郎会長らを実行委員とする中目前会長記念事業発起人会を発足させ、「立体写真により胸像を鑄造し校内に安置すること」を決め、同窓会員、母校現・旧職員に1口1円の募金を呼びかけた。

同年末の払込期限までに400余人から990円87銭の資金が寄せられ、翌9年5月27日、本校講堂で胸像披露式が挙行された。胸像は等身大のものと、縮小サイズの二つが作られ、小さい方は、この日夫人同伴で出席した中目前校長に贈呈された。

挨拶に立った前校長は「還暦に当たる今年、私自身胸像を頂戴できますのは身に余る光栄と存じます。子々孫々に伝え、記念として永く家におさめておきたいと存じます」と、喜びを隠さなかったという。披露式のあと会議室で、祝宴を兼ねて第10回同窓会が開かれたと、『中目覚先生胸像建設記念誌』は伝えている。

等身大胸像の方は、その後長く校長室に飾られてきたが、昭和20年3月の空襲で母校とともに焼失した。一方、ミニ・サイズの胸像は、中目校長没後は女婿の外語フランス語教

授・目黒三郎方に保存されてきたが、平成3年秋、同教授の子息、目黒士門氏から本学へ寄贈された。ほぼ60年を経て、大きく成長・変容した母校へ戻ってきた「中目覚先生胸像」は今、学長室に飾られている。

#### 〈同窓会支部の拡大〉

最初の同窓会会員名簿が、いつ発行されたか明らかではないが、同窓会本部に残されている一番古い名簿は昭和7年8月発行のものである。このあと戦前の名簿としては10年、11年、12年、14年、15年、16年、17年、18年発行のものが残っている。

以上の名簿から同窓会支部を拾うと、昭和7年は東京、北九州、大連、奉天、哈爾濱、上海、京城の7支部があり、前記昭和4年版『外語一覽』にある5支部のほか、新たに奉天、上海支部がつくられたことがわかる。これが11年には東京、東海、香川、北九州、京城、大連、奉天、新京、哈爾濱、熱河、呼倫貝爾(ホロンバイル)、上海、京津、營口の14支部に増加、12年には神戸倶楽部、王爺廟の2支部が加わり16支部となっている。日中戦争が勃発した12年の会員名簿からは、冒頭に「戦死者」が掲げられるようになり、「烈士之碑」建立後は「烈士之碑英霊」が名簿のトップを占めることになる。

日中戦争、さらに太平洋戦争と戦局の拡大に伴って昭和17年12月現在の同窓会支部は神戸倶楽部、東京、東海、香川、関門、北九州、函館、京城、台湾、大連、營口、新京、奉天、哈爾濱、呼倫貝爾、王爺廟、牡丹江、北京、天津、包頭、青島、上海、西貢(サイゴン)の計23支部を数えるに至った。17年の名簿からは「防諜ノ見地ヨリ取扱ニ特ニ御留意下サイ」の注意書が印刷されている。戦争は一学校の同窓会名簿にも濃い影を落としたのである。18年を最後に、名簿が発行された形跡はない。

## 2. 戦 後

#### 〈学園復興への取組み〉

戦後の同窓会活動は、学園復興運動への取組みからスタートした。昭和22年、学生自治会の自力復興呼びかけにこたえて職員会組、卒業生組(同窓会)、父兄会組、在校生組の名を冠した四つの復興委員会が組織され、総額500万円の母校復興計画予算が組まれたことは、通史第2章で述べた。卒業生組復興委員会に割り当てられた募金内訳は300万円(1人当たり1,500円以上)であった。

#### 〈卒業生組復興委員会〉

23年7月20日、外専同窓会本部と復興委員会共同で発行されたタブロイド版2頁の粗末な『会報』第1号には「再び卒業生各位に懇<sup>うった</sup>う」と題する卒業生組復興委員会常任委員一同による一文が掲載されている。

「肅条たる兵舎跡に、自力復興を叫んで果敢な運動を展開した在校生諸君の熱意に

応え、我々卒業生側でも復興委員会を組織し、その一翼を担って起ったのは昨年6月であった。(中略)本復興委員会は、専ら母校の大学移行達成のための寄付金集めの機関ではなく、また徒らに母校をして輪奐の美を誇らしめんとするものでも断じてなく、只その教育施設面の最低の復興と充実を目的とするものであることは、既に当初の趣意書にも明らかなどころであるが、新学制において母校はその性質上、大学となるより外、活路のないものである以上、我々が学校当局の復興計画を、この線に沿って取上げ、これが促進援助を計ることは当然である。

高進するインフレ下、ことに海外よりの引揚者多数を擁する我々同窓会としては割当てられた募金額は、まことに重荷であり、目標額には前途なお遠きを思わしめる。しかしおよそ業を大阪外語に畢えたほどの者にして、在校後輩のこの熱誠と運動に対し、一臂の寄与なくしてこれを看過できようか。今秋頃と予想される母校出路の最終決定に備えて、早急に能う限りの施設整備に資したく、あえて再び各位の御同情を懇請する次第である」

昭和23年といえば、前記文中にもあるように、郵便料金の4倍値上げをはじめ外専の授業料も400円から1,200円へ3倍値上げとなり、鉄道、ラジオ、新聞なども倍々式値上げがつづいて、国民生活は戦後インフレにあえぐ。職も財産も失って身体ひとつで海外から引揚げた者にとっては、なおさらである。『会報』第1号のロシア科の消息欄は、それまでに判明した引揚者58人の氏名で埋め尽くされている。シベリアの抑留所で歌われていた「異国の丘」が爆発的にヒットしたのもこの年である。1人当たり1,500円以上という復興募金は、想像以上の重荷であったことがうかがえる。

この『会報』第1号には、同窓会支部結成の呼びかけと、同窓会会員名簿発行の予告も掲載されているが、23年7月の時点で本部と連絡のある支部は東京、東海、香川、北九州、尾道の5支部に過ぎない、とある。戦前、海外を含め23を数えたものが、4分の1以下に激減したわけである。

会員名簿は、23年秋発行を目標とし、本部あて8月15日までに氏名、卒業語部・科、就職先、住所の届け出と実費150円の払込みを要請しているが、同年秋の発行は実現しなかった。

#### 〈初代会長・繁村長孝〉

昭和24年、大阪外事専門学校を包括して新制大阪外国語大学が設置され、同窓会も外語・外専同窓会から大学同窓会となった。専門学校時代は校長が同窓会長に推戴され、理事には特別会員である母校職員が就任してきたが、大学になってからは学長は名誉会長に就任するものの、実質的な運営は、すべて正会員(卒業生)から選ばれる幹事長(のち会長)、常務幹事(のち常任幹事)、幹事が掌握するようになる。

初代幹事長・繁村長孝(F2)は、就任のいきさつについて次のように語っている。

「戦後、私が東京に帰ってから、金子二郎氏(C 2)より昭和25年10月電話があり、上八校舎に来るようにいわれた。烈士之碑(校門を入った右側)の横に小さな小屋風の建物があり、4～5人の同窓生が集まっていた。その席上、金子氏より同窓会長をやってくれといわれ、引受けさせられた。これが戦後の同窓会の出発で、年1回総会をやることなどが決まった。その時は同窓会名簿もなかった。名簿はのちに住田照夫さん(C 7)や赤阪力さん(D 10)が手がけてくれた。私はなにもしなかったが、お二人がなんでもやってくれた。昭和50年5月30日に辞任するまで、25年間同窓会長をやってきた。当時移転問題もおこっており、学長は牧さん。私が文部省の連中をよく知っていることでもあり、牧学長は強く留任するよう私を引留めた。同窓会では一桁の卒業生は役員を辞めることに決まっていたので辞任した。住田、赤阪両氏に支えられて、私はこれということもやらなかったが、ただ一つ、全国各地の支部を結成したことを誇りに思っている。

ただ、大阪支部は本部と近いため、支部と本部の活動があいまいで苦心した。大阪には本部があるので支部の活動が作用せず気の毒であった。私は同窓会は本部より支部に重点を置き、支部が盛んになれば、本部も発展すると思っている。枝ができれば木は繁る。本部は支部の世話をして、裏から育てていくのがよい。本部だからとて支部を押えついたり、押しついたりすることはもっての外だといってきた」〔『大阪外国語大学70年史資料集』〕

#### 〈戦後初の会員名簿〉

以上述べられている同窓会会員名簿が発行されたのは昭和26年12月である。戦前昭和18年を最後に途絶えていた名簿の戦後初の発行であった。26年3月の最後の外専卒業生をも含む「会員総数5,330名を収録した本名簿は正に記念すべきものであります」と本部が自賛するとおり、同窓会員待望のものであったろう。

名誉会長・平沢俊雄、幹事長・繁村長孝、常務幹事23名の中には、金子二郎(C 2)、精松源一(M 1)、中西龍雄(I N 15)、山本健太郎(I P 2)、森沢三郎(E 1)、熊谷俊次(D 1)、赤阪力(D 10)、畠中敏郎(F 3)、望月雄三(S 1)、岩崎兵一郎(R 1)の名も見える。

支部は東京、名古屋、香川、大阪、京都、岡山、福岡、神戸、函館の9支部。占領時代で海外支部はまだない。同窓会終身会費は1,280円と定められている。

#### 〈幹事長から会長へ〉

会員名簿はこのあと昭和31年6月に発行されている。第4回までの大学卒業生の名前が初めて登場したが、同名簿には会則、本部役員の記載はない。巻末に「なお先日の本部常務委員会の席上、本部組織再編成の議が起こり、この際、同窓会規約全文につき検討を加えることになり、目下審議中であります。したがって、この名簿では同窓会規約、本部役

員氏名などは割愛しました」と断っている。

そして、35年9月発行の会員名簿には、31年11月11日改正の新会則が収録されている。主な改正点は、それまで「本会を掌理するもの」とされた「幹事長」が「会長」と変わり、「会務を掌理し本会を代表する」ものとなった点である。「常務幹事」は「常任幹事」となった。会長が常任幹事の互選による点は変わっていない。終身会費は1,500円となった。

同名簿掲載の支部数は22、海外にバンコク支部もできている。なお短期大学部卒業生も加えた40年11月発行の名簿によれば支部数は23、新たにニューヨーク支部の名が見える。

#### <創立記念式典(35周年、50周年)>

昭和32年11月11日、大学、同窓会、父兄会共催の母校創立35周年記念祝典が中之島・中央公会堂で開かれたことは通史でも述べた。高槻から上八への完全復帰が実現した年である。祝典にひきつづき同日夕刻からは同窓会記念総会も開かれた。

先に述べた同窓会本部・復興委員会共同発行の『会報』第1号のあと、どのような同窓会誌・紙が出されていたかは、資料を欠くため不明であるが、35周年を機に、同年11月1日、中目覚初代校長はじめ懐かしの旧師執筆の回顧録や支部情報、海外だより、個人消息をまとめた『母校創立35周年記念会誌(特輯号)』が発行されている。編集後記に「中絶していた同窓会誌を復刊、会員相互の親睦と情報交換の場をつくるため、特集号をお送りすることが出来たことは、感慨深いものがあります」とある。中絶期間がどれくらいあったかは、わからない。

このあと節目ごとに創立記念式典、記念同窓会総会が開かれてきた。昭和42年11月11日には創立45周年を祝って午後2時から「烈士之碑」前で慰霊祭、夕刻からは北区天満橋のホテル・ニューキャッスルで同窓会総会が開かれた。

#### <『きんきら50年』発刊>

昭和47年11月11日には、大学主催、同窓会、後援会協賛の創立50周年記念式典が大阪府中小企業文化会館で開かれている。式典に先立ち、繁村長孝同窓会会長は、牧学長とともに林蝶子女史の墓前に参拝、母校誕生半世紀の喜びを報告、式典のあと東洋ホテルで祝賀パーティーが開かれたことは通史でも述べた。

同窓会50周年記念誌『きんきら50年』が発刊されたのも、このときである。元・前学長、名誉教授はじめ170余人が寄稿したこの記念誌は、今回の外大70年史発行に当たって、貴重な資料となった。

56年11月11日には、創立60周年記念同窓会総会が中央区の大阪コクサイホテルで開かれている。

#### <山口博恭会長の就任>

創立50周年を迎えて、世代交代論が登場した。昭和48年3月発行の同窓会広島支部機関

誌『扉』（『扉』については、のちに詳しく触れる）で、吉川勝太郎（M1）は「同窓会への一つの提案」と題して、明治生まれの役員退陣を訴えている。

「若い卒業生そして我々明治生の会員が渾然として融和し大阪外大同窓会を組織しているところに半世紀の歴史を歩んできた重味を感じる。然しその機構に関し多少の不安があると思う。我々明治生れがいつまでも大先輩づらして役員の大要職にアグラをかいては若い人のアイディアは伸びないし、所謂、マンネリ化を恐れる。こゝらで新陳代謝するべく昨年改めて明治生れの者は開校50年を記念してその総会を花道にさせてもらい拍手に送られて役員を退陣するべきであり、大正生れ以降の人たちに運営を一任すべしと提案した。そして明治会を作り恍惚の人々が2ヵ月に1回ぐらい集まって、ライオンのお八重は別嬪だったとか、樟蔭女学校の誰やらはウンシャンやったが、俺に惚れていたとか愚にもつかない雑言を気兼ねなく話せる場をつくり、また側面的に同窓会を応援したいと大半の賛同を得て2回ばかり実は会合した。そしてこれを常任幹事会に持ち出したところ副会長の意見で寄付金の結末をつけてからの事にしてくれと（多分先輩に遠慮のためそれは結構だともいえなかったと想像する）の発言で到頭花道の夢は流れてしまった」

48年度総会では、会長の下に副会長2人を置くこと、終身会費1,500円を2,000円に引き上げることが決まったが、世代交代論は、48年度、49年度総会でも論議の対象となり、結局、大学移転問題が最終段階を迎えていたため、繁村会長の50年3月末までの留任を決め、50年5月の常任幹事会で、第2代同窓会長に山口博恭（D8）を推薦、選出した。

#### 〈女性副会長の誕生〉

卒業生のうちに女性が占める割合がふえるに従って「婦人部」結成の動きも芽生えた。東京支部では昭和45年以降、女性会員のつどいが年1回催されるようになり、本部としても女性会員の意向をくみ取る必要を痛感するに至る。こうして50年に初めて女性常任幹事が誕生したのにつづき、60年11月の総会では副会長4人のうちの1人に岩野（旧姓高谷）直枝（大E1）が選ばれたほか、常任幹事にも女性4名が新しく加わった。

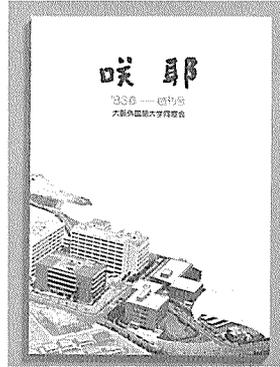
#### 〈同窓会誌『扉』〉

前に述べた『母校創立35周年記念会誌』につづいて、昭和36年1月25日、同窓会広島支部機関誌『扉』創刊号が発行された。

久保満（C15）、松田正男（C18）、村上清人（F20）、奥田泰治（C21）、桑原治平（大C1）が計画、実現に漕ぎつけたもので、『扉』はすべての同窓・在校生に開放します。原稿をお寄せください」の呼びかけにあるように、単に一広島支部の機関誌ではなく、同窓会全



『扉』



『咲耶』

員に開かれた『扉』でもあった。

創刊号には産経大阪新聞文化部長の肩書で司馬遼太郎(M21)が「悪魔と異国語」の一文を寄せたのをはじめ、第3号には陳舜臣(I P 20)の「推理小説に足を踏み入れて」、第5号には庄野潤三(E 18)から「外語のころ」の寄稿もあった。「全国区」機関誌をめざして、母校の現状紹介、各支部通信、海外通信にも力を入れ、42年11月発行の第26号は「創立45周年特別記念号」と銘打って「外語の創立時代と将来の展望を語る」座談会や「外語出身作家特集」も組んだ。さらに第45号は「神戸支部特集号」として『扉』の編集権を神戸支部に任せたとをはじめ、東京、福岡支部特集号も出した。第46号は「母校創立50周年記念号」であった。こうして47年11月11日、50周年記念本部総会で「『扉』が広く全国同窓の友好親善に寄与された貢献度はまことに大なるものがある」と表彰された。

しかし、年4回発行の建前は昭和50年ごろから崩れ始める。維持会員増加作戦にもかかわらず、一地方支部の財政基盤には限度がある。54年には第63号を1回発行しただけ、1年後の55年12月10日発行の第64号を最後に休刊、20年間開かれつづけた『扉』はついに閉じられたのである。

#### <同窓会『本部通信』>

山口博恭会長就任後、発行されたものに同窓会『本部通信』がある。50年8月1日発行の第1号には、山口会長就任、箕面市粟生間谷への移転本決まりなどのニュースのほか、本学所蔵となった石浜文庫目録整理のための協力呼びかけなどが掲載されている。配布先が本部役員、支部役員、本・支部主催の会合に出席した会員に限られ、会員全員にまでは行き渡らなかったが、57年11月の第13号まで発行され、『扉』の休刊後は唯一の同窓会刊行物となった。

#### <『咲耶』創刊>

以上の『扉』、さらに『本部通信』を継承し、同窓会・咲耶会の機関誌として昭和58年4月発刊されたのが『咲耶』である。

これより先、昭和56年に同窓会は会の愛称を募集した。46種類の応募の中から幹事会は「東星会」「咲耶会」「東光会」「暁星会」「芦水会」「芦友会」の6候補を推薦、伊地智学長、司馬遼太郎、陳舜臣、その他のOBとも相談して最終的に「咲耶会」を選び、同年11月の総会で決定した。賞金10万円は、複数当選者に分配贈呈されたということである。

『咲耶』は、古今集仮名序にある難波津の歌からとられたものであり、大阪外国語学校の校友会誌の誌名でもあったことは周知のとおりである。

『咲耶』は、編集委員長・山中一郎(D12)、副委員長・小林義男(C11)、編集長・福永銀美(C20)らの努力で、平成2年10月の第16号まで発行されたが、有料会員制という制約のため、志に反して大きな広がりを持つには至らなかった。

#### 〈大学移転記念事業募金〉

大学の箕面移転を目前にして同窓会は移転記念事業を計画、募金委員会を結成して資金募集に乗り出す。

昭和54年8月、同窓会長・記念事業募金委員会委員長、山口博恭の名で募金趣意書が発送されたが、記念事業の概要は次のとおりであった。

(1) 記念会館の建設 1億円

大学所有地に鉄筋2階建延べ860平方メートルの記念会館を建設し、資料展示室、和洋会議室、特別研究室等を設備し、卒業生、在学生、教職員、外国人留学生の精神的文化交流を図る。

(2) 烈士之碑移転並びに周辺環境整備 1,000万円

(3) 研修センターの拡充整備 2,500万円

岡山県英田町に国費で建設される40ベッドの研修センターに、さらに40ベッド相当の付帯施設を拡充整備する。

(4) 附属図書館の整備 1,000万円

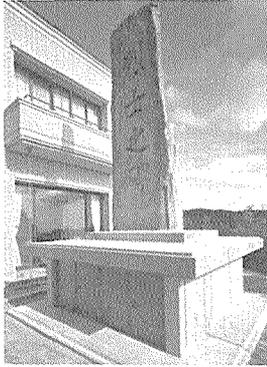
「石浜文庫」「南十字星文庫」その他各語部・語学科展示資料受け入れのための特殊書架、陳列台の購入等、国費不足分の補填。

(5) 募金に要する経費 500万円

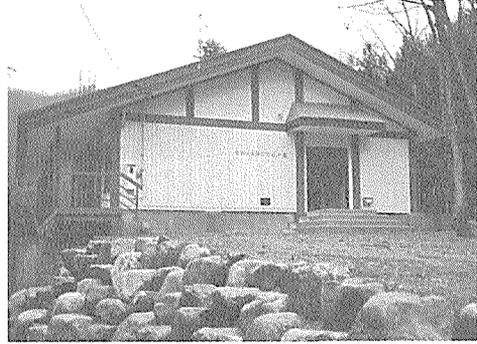
以上募金目標額は1億5,000万円。募集期間は54年9月1日から56年3月31日まで、1口5,000円以上(1口以上、端数も可)というものであった。

この年11月11日、移転を終わった箕面の新学舎で初めての同窓会総会が開かれている。山口会長から募金への協力要請が改めて行われ、評論家・俵(旧姓中野)萌子(F27・大F1)の講演もあった。

なお、これより先、11月1日から同窓会連絡所が北区曾根崎新地に開設された。脇田一全(IP11)が経営するホテルニューセントラル3階ロビーの提供を受けたものであった。



烈士之碑は箕面移転後、  
記念会館に抱かれるよう  
にひっそりと建っている



山の家

### <1億5,000万円達成>

法人募金に当たっては別に案内状を送り、同窓会役員が各社を回って協力を要請した。会社回りに同行した伊地智、林両学長および岡本、南部両同窓会副会長の献身的な努力は特筆に値するものであった。国税局の免税承認期限の56年3月末時点での募金額は目標の60%、免税措置を1年間延長してもらったが、57年3月末でなお目標の80%、さらに6ヵ月免税期限を延長してもらい募金をつづけた結果、個人(同窓生、教職員、旧教官)では山田元次(E9)の1,000万円を筆頭に2,575名・4,781万464円、法人(一般法人、同窓生がオーナーの会社)では松下電器産業の1,500万円など123社・9,226万円、計1億4,007万464円となり、受取利息を計上すると1億5,000万円を上回るようになったため、国税局の指導に従って57年9月30日で募金を締め切った。なお、最終的募金総額は、受取利息を含め1億6,213万6,909円(60年8月31日現在)と報告されている。

### <烈士之碑移転>

敗戦をはさんで烈士之碑を見る目は大きく変わった。同碑移転について同窓会本部副会長・岡本真佐男(IN11)は次のように書いている。

「戦後、烈士之碑の慰霊祭の儀が同窓会常任幹事会で論議されながら、色々な事情で遅延し、昭和37年11月に挙行されたのが初めてであると記憶しております。この慰霊祭は、同窓会常任幹事全員、各支部長並に学校長を始め教職員有志多数参列の上厳かに挙行されました。慰霊祭実施については、当時の熾烈な学生運動の傾向から不測の支障が起こるのではないかと心配されましたが、何事もなく無事終了できて関係者一同大喜び致した次第でした。この慰霊祭が実施されてから、烈士之碑に対する同窓生の関心が急速に高まり、同窓会本部にも問い合わせや意見が多数寄せられて参りました。特に、大学移転計画が発表されるや、この碑の取り扱いが同窓生の注目的になったのでした。同窓会本部としては、新学舎の適当な場所に移築するために大学当局に敷地の選定をお願いし、既に格好の場所を決定して頂き着々建設中であります。

新学舎が箕面市粟生間谷に建設され、愈々(54年)9月から全学が移転することにな

りましたので、8月18日、上八学舎において烈士之碑の抜魂式をとり行いました。当日は学長、教職員有志の方々を始め、同窓会常任幹事、各支部代表、同窓生有志多数参列して合祀者の霊をお慰めた次第であります。抜魂式終了後、学内において同窓会主催のお別れパーティーを開催、その席上本学設立の恩人とも言うべき故林蝶子さんの遺族に感謝状並に記念品を贈呈し、往事を偲んで最後のお別れを致しました。

烈士之碑の入魂式は、11月11日の創立記念日にとり行う予定に致しております」〔昭和54年11月11日『本部通信』第8号〕

碑移転については、碑そのものをなくしてしまえという強硬意見も含めて、教授会、学生の間には反対意見が強かったが、同窓会の多数の賛成を背景に、移転が決行された。万一の事態を避けるため、夏休み中に移転作業を進めるという気の使いようであった。空襲のときの碑面のヒビ割れ補修、移転費用はすべて同窓会が負担した。

#### 〈記念会館〉

移転記念事業の最大の柱である記念会館の敷地選定は隣接住民の反対や地盤上の問題もあって二転三転したが、ようやく烈士之碑が移された場所に落ち着いた。

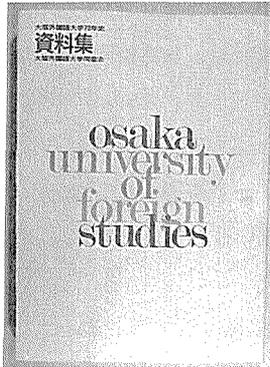
建設については約10社が入札、落札価格は1億2,000万円であったが、他の記念事業に影響するので、施工の戸田建設と設計管理の東畑建築事務所と交渉、9,700万円の最低価格で引受けてもらうことに成功、烈士之碑移転費用も含め1億円を僅かに下回る金額におさまった。58年4月着工、11月7日に竣工式を終え、大学に寄贈された。

鉄筋コンクリート造2階建延べ412㎡、1階は玄関、ラウンジホール、応接室、事務室、2階は談話コーナー、大会議室、和室。内部の什器・備品は外大後援会からの寄付1,500万円に頼った。同窓会沖縄支部からは色鮮やかな琉球紅型(びんがた)が贈られ、2階壁面を飾った。玄関左の壁面には「EX ORIENTE LUX ET PAX」の文字、さらに下方には山口博恭会長の筆による「新学舎建設記念 上八から箕面へ 大阪外国語大学同窓会 昭和58年11月11日」と刻まれた銘板が埋め込まれている。記念会館は賓客の接待、語学科の研究会、時にパーティーなどに利用されている。

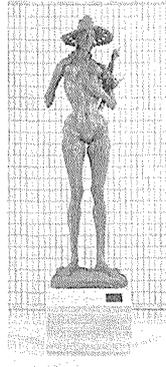
#### 〈山の家〉

学外合宿研修施設・山の家は、記念募金開始当時、研修センターとして40ベッド規模のものが国費で建設されることになっており、同窓会はさらにベッド数を追加補充しようと2,500万円の予算を計上した。建設場所については、兼松江商から岡山県英田郡英田町の山間部4,600平方<sup>メートル</sup>の敷地寄付の申出があり、昭和55年度中の完成が見込まれたが、行政改革の影響で文部省予算が出なくなってしまった。

その後、英田町では交通が不便であるということから同窓会側は信州、琵琶湖周辺など学生が利用しやすい場所を探した結果、夏は登山、冬はスキーも可能な長野県北安曇郡白



『70年史資料集』B 5判(233頁)



『夏・流木と女』



新装『咲耶』

馬村神城に適地を見つける。

2,500万円では到底まかなえないが、記念事業の一部である図書館整備に国費が支出されることになったので、予定した同窓会予算が山の家に回せるようになったほか、50周年記念募金の積立分などを加えて6,000余万円の予算が見込めることになった。こうして59年4月、現地の建築業者・丸長建設、設計管理の樋口事務所と契約を結び、同年11月18日開所式を行って大学に寄付した。備品・什器類約300万円は後援会からの寄付でまかなわれた。

土地1,190㎡、鉄骨2階建延べ325㎡、収容人員45名の山の家は、前記の記念会館とともに、先輩から後輩への最大の贈りものとなった。

#### 〈国際交流センターに記念像寄贈〉

昭和62年9月、上八学舎跡地に大阪国際交流センターが完成し、本学発祥の地であることを示す碑も建てられた。同窓会本部では、独自のモニュメントとして、淀井敏夫東京芸大名誉教授に記念像の制作を依頼、高さ210㎝、台座高45㎝のブロンズ像「夏・流木と女」を同センターに寄贈、9月17日、除幕式を行った。制作費用についてはすでに58年度総会で58、59年度の積立金でまかなうことが了承されていた。この年11月、国際交流センターに生まれ変わった思い出の上八学舎跡で開かれた62年度同窓会総会は、出席者270人を超える盛況であった。

#### 〈『70年史資料集』の発行〉

59年11月の同窓会総会閉会に際し、岡本真佐男副会長は「今後、先輩が健在のうちに同窓会記念史を編集したい」と、箕面移転記念事業にひきつづく事業構想を打ち出す。これが具体的に動き出したのは61年4月。大学、同窓会幹部が懇談し、草創時の先輩との座談会を企画、実行に移すなかから、外語・外専・大学史を正史、同窓会史を外史として、それぞれ編集するというコンセンサスが形づくられていった。

同年5月からは、朝日新聞100年史編集の経歴を買われて山中源也(D25)がメイン・スタ

ップとして参加、7月には大学にも「大学史編纂準備委員会」が設けられた。62年7月には同窓会側メンバーとして、山中と京都二中同期の高橋昭平(C23)がアシスタントとして加わり、約2カ月かけて京阪神在住の第1回卒業生にインタビュー、かたわら、旧『咲耶』購読者1,200名にアンケートを送り、100余名から回答を得た。これらを整理・取りまとめ、写真と年表を付して平成元年1月、まず刊行されたのが『大阪外国語大学70年史資料集』(233頁)である。同年2月には「大阪外国語大学70年史刊行会」が発足、「さあこれから」という平成元年9月、山中は病に倒れ、最終構想の実現を見ないまま、この世を去った。彼の労作が、今回の70年史の基盤となったことは言うまでもない。

#### 〈国際交流基金への援助〉

同窓会では毎年の学園祭・東外戦に対し、後援会とともにその費用の一部を援助してきた。しかし海外との交流がますます活発化する趨勢に対応して、これを支援することに改め、63年度から国際交流基金への援助として、毎年100万円を支出している。

#### 〈第3代会長に早原瑛〉

平成2年11月の同窓会総会で山口博恭会長に代わって早原瑛(大F3)が第3代会長に就任した。相談役を除く役員から外語・外専卒業生が去り、すべて外大卒業生に入れ替わった。新役員は、まず同窓会機関誌『咲耶』の一新を図った。平成2年10月発行の旧『咲耶』第16号を継承するものではあるが、従来の会員制を廃止し、全卒業生に無料配布する新装『咲耶』1991(平成3)年6月号を発行した。大学の発展とともに卒業生数も年々増大、今や20,000人を超える全卒業生を対象とした機関誌・会報発行の必要性が痛感されるに至ったための措置であった。

平成3年4月には戦後9回目となる同窓会会員名簿も発行された。名簿資料整理は、すでに前回昭和62年版からコンピューター化されている。

最新会員名簿による支部数は40にのぼり、国内25支部のほか、香港、北京、上海、広州、台湾、マニラ、バンコク、ミラノ、ニューヨーク、パリ、マドリッド、ブラジル、ロサンゼルス、デュッセルドルフ、ロンドンと海外に15支部を数え、国際化時代にふさわしい本学同窓の活躍ぶりを示している。



# 資料編

---

■歴代校長・学長等一覧

■名誉教授一覧

■大学の組織

■学生在籍者数

■卒業者数

## 歴代校長・学長等一覽

### (1)大阪外国語学校・大阪外事専門学校

職名	氏名	在職期間	備考
校長	中目 覺 <small>あきら</small>	大正10. 12. 10~昭和8. 9. 27	校長事務取扱  校長事務取扱 24. 5. 31兼大阪外大学長
	葉山 萬次郎	昭和8. 9. 27~昭和17. 4. 10	
	横山 俊平	17. 4. 10~ 19. 4. 27	
	吉本 正秋	19. 4. 27~ 19. 6. 7	
	尾崎 卓郎	19. 6. 7~ 21. 3. 30	
	稲村 純一	21. 3. 30~ 21. 8. 22	
	平澤 俊雄	21. 8. 22~ 26. 3. 31	
教務課長	高木 敏雄	~大正11. 12. 18	
	高橋 周而	大正12. 5. 1~昭和17. 3. 31	
	吉本 正秋	昭和17. 4. 18~昭和18. 8. 18	
	上田 畊甫	18. 8. 18~ 20. 7. 5	
	吉野 美彌雄	20. 7. 5~ 21. 3. 18	
	金子 二郎	21. 3. 18~ 26. 3. 31	
生徒課長	生田 鹿之丞	大正11. 3. 30~大正13. 2. 22	
	上田 駿一郎	13. 7. 5~ 14. 8. 25	
	佐伯 正	14. 8. 25~ 15. 9. 14	
	金本 正二	大正15. 9. 14~昭和3. 11. 17	
	志水 義暲	昭和3. 11. 17~昭和10. 8. 14	
	平澤 俊雄	10. 8. 14~ 17. 9. 30	
	白井 正	17. 9. 30~ 21. 3. 18	
	山本 健太郎	21. 3. 18~ 23. 4. 10	
	吉野 美彌雄	23. 4. 10~ 24. 3. 30	
図書課長	伊藤 資生	大正12. 5. 3~大正14. 8. 25	教務課長と兼任
	稲村 純一	大正14. 8. 25~昭和17. 4. 18	
	大平 頼母	昭和17. 4. 20~昭和19. 3. 31	
	上田 畊甫	19. 3. 31~ 19. 7. 11	
	金子 二郎	19. 7. 12~ 21. 3. 8	
	林 和夫	21. 3. 18~ 23. 3. 31	
	岩崎 兵一郎	23. 4. 1~ 26. 3. 31	
庶務課長	瀬川 亀	~大正12. 3. 30	事務取扱
	生田 鹿之丞	大正12. 3. 30~大正13. 2. 22	
	上田 駿一郎	13. 2. 22~ 13. 7. 5	

職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課長	佐伯 正	大正13. 7. 5～大正14. 8. 25	兼会計課長 〃
	小西 茂	大正14. 8. 25～昭和16. 8. 7	
	高橋 周而	～ 17. 3. 31	
	稲村 純一	昭和17. 4. 18～ 19. 2. 29	
	吉田 孝次郎	19. 7. 11～ 21. 3. 8	
	本田 要太郎	21. 3. 18～ 22. 9. 1	
	上田 明吉	23. 3. 31～ 24. 6. 30	
会計課長	加藤 富松	大正11. 3. 28～大正12. 4. 30	
	水上 邦三郎	12. 4. 30～ 14. 4. 27	
	長谷川千代二	大正14. 8. 25～昭和4. 6. 12	
	本田 要太郎	昭和4. 6. 12～昭和20. 8. 4	
	川合 敏之	20. 8. 4～ 21. 3. 18	
	本田 要太郎	21. 3. 18～ 22. 9. 1	
	上田 明吉	23. 3. 31～ 24. 6. 30	

(注) 上記で空白となっているのは在職期間の原資料とした個人履歴書にその役職任免の年月日が不明のためである。

## (2)大阪外国語大学

職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
学 長	平澤 俊雄	昭和24. 5. 31～昭和36. 6. 10	事務取扱
	森澤 三郎	36. 6. 11～ 40. 6. 10	
	金子 二郎	40. 6. 11～ 44. 6. 10	
	牧 祥三	44. 6. 11～ 47. 2. 29	
	同	47. 3. 1～ 52. 2. 28	
	伊地智 善繼	52. 3. 1～ 57. 2. 28	
	林 榮一	57. 3. 1～ 62. 2. 28	
	山田 善郎	62. 3. 1～	
事務局長	坂口 半造	昭和24. 5. 31～昭和32. 11. 27	事務取扱
	秦 秀夫	32. 11. 28～ 39. 11. 7	
	大石 達徳	39. 11. 8～ 39. 11. 15	
	柴沼 力	39. 11. 16～ 41. 3. 31	
	市川 悌雄	41. 4. 1～ 42. 4. 30	
	三宅 能正	42. 5. 1～ 45. 3. 31	
	前川 春雄	45. 4. 1～ 47. 3. 31	
	芋田 徳太郎	47. 4. 1～ 49. 3. 31	

職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
事務局長	丸山 登	昭和49. 4. 1～昭和51. 6. 30	
	吉野 幸夫	51. 7. 1～ 54. 3. 31	
	小村 俊夫	54. 4. 1～ 55. 10. 1	
	佐藤 士郎	55. 10. 1～ 57. 7. 8	
	下川 啓吉	57. 7. 9～ 60. 3. 31	
	中澤 敬治	60. 4. 1～ 62. 3. 31	
	永井 烈	62. 4. 1～平成元. 2. 1	
	新澤 憲生	平成元. 2. 1～	
学生部長	金子 二郎	昭和24. 8. 1～昭和26. 7. 31	事務取扱
	岩崎 兵一郎	26. 8. 1～ 29. 7. 31	
	山本 健太郎	29. 8. 1～ 36. 7. 31	
	高橋 輝正	36. 8. 1～ 38. 7. 31	
	片山 忠雄	38. 8. 1～ 39. 7. 31	
	中西 龍雄	39. 8. 1～ 42. 7. 31	
	金子 二郎	42. 8. 1～ 42. 9. 23	
	伊地智 善繼	42. 9. 24～ 45. 4. 9	
	山口 慶四郎	45. 4. 10～ 47. 4. 9	
	相浦 泉	47. 4. 10～ 49. 10. 16	
	伊地智 善繼	49. 10. 16～ 51. 10. 15	
	廣實 源太郎	51. 10. 16～ 54. 10. 15	
	池田 廉	54. 10. 16～ 56. 10. 15	
	山田 善郎	56. 10. 16～ 58. 10. 15	
	布施 俊夫	58. 10. 16～ 60. 10. 15	
	池田 修	60. 10. 16～ 63. 10. 15	
	大河内 康憲	63. 10. 16～平成2. 10. 15	
田川 弘雄	平成2. 10. 16～		
二部主事	小林 武三	昭和40. 4. 1～昭和40. 7. 31	
	嶋田 昇平	40. 8. 1～ 42. 7. 31	
	赤阪 力	42. 8. 1～ 44. 4. 13	
	廣實 源太郎	44. 4. 14～ 44. 8. 31	
	芝池 靖夫	44. 9. 1～ 45. 12. 31	
	緒方 一男	46. 1. 1～ 47. 3. 31	
	片岡 孝	47. 4. 1～ 49. 3. 31	
	島崎 郁	49. 4. 1～ 51. 3. 31	
	山田 善郎	51. 4. 1～ 53. 3. 31	
	正木 恒夫	53. 4. 1～ 55. 3. 31	

職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
二部主事	小野 堅 松井 三郎 吉田 秀太郎 好田 実 乙政 潤 西村 成雄	昭和55. 4. 1～昭和57. 3. 31 57. 4. 1～ 59. 3. 31 59. 4. 1～ 61. 3. 31 61. 4. 1～ 63. 3. 31 63. 4. 1～平成2. 3. 31 平成2. 4. 1～ 4. 3. 31	
附 属 図書館長	岩崎 兵一郎 老田 三郎 吉田 孝次郎 外山 軍治 長谷川 信好 東郷 豊治 金子 二郎 畠中 敏郎 外山 軍治 林 榮一 牧 祥三 黒木 義典 芝池 靖夫 森塚 文雄 山田 善郎 相浦 梶 廣實 源太郎 八木 浩 山口 慶四郎 池田 廉 貝田 守	昭和24. 8. 1～昭和26. 3. 31 26. 4. 1～ 27. 9. 30 27. 10. 1～ 29. 9. 30 29. 10. 1～ 32. 9. 30 32. 10. 1～ 35. 9. 30 35. 10. 1～ 38. 9. 30 38. 10. 1～ 40. 6. 9 40. 6. 10～ 43. 6. 30 43. 7. 1～ 46. 6. 30 46. 7. 1～ 48. 6. 30 48. 7. 1～ 48. 7. 16 48. 7. 16～ 50. 7. 15 50. 7. 16～ 52. 7. 15 52. 7. 16～ 54. 7. 15 54. 7. 16～ 56. 7. 15 56. 7. 16～ 58. 7. 15 58. 7. 16～ 60. 7. 15 60. 7. 16～ 61. 4. 4 61. 5. 16～ 63. 5. 15 63. 5. 16～平成2. 5. 15 平成2. 5. 16～	事務取扱
保健管理セ ンター所長	廣實 源太郎 浅井 敬一 志水 彰	昭和54. 4. 1～昭和55. 7. 31 55. 8. 1～ 63. 3. 31 63. 4. 1～	事務取扱
留学生日本 語教育セン ター長	小林 明美	平成3. 4. 12～	

## 名誉教授一覽

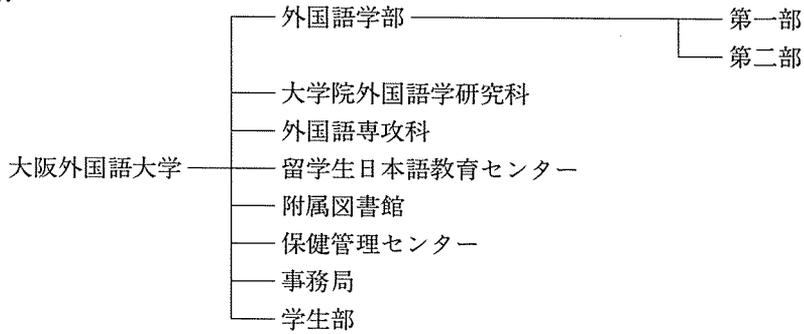
氏 名	授与年月
平澤 俊雄	昭和36年 6月
精松 源一	同 43年 4月
畠中 敏郎	同 47年 4月
長谷川 信好	〃
外山 軍治	同 50年 4月
住田 照夫	〃
片山 忠雄	〃
牧 祥三	同 52年 3月
大谷 長	同 52年 4月
赤阪 力	同 53年 4月
水嶋 香東士	〃
中西 龍雄	同 56年 4月
安倍 濱男	〃
伊地智 善繼	同 57年 3月
黒木 義典	同 57年 4月
辻本 春彦	同 58年 4月
富田 竹二郎	同 59年 4月
伴 康哉	〃
林 榮一	同 62年 3月
山崎 俊夫	同 63年 4月
廣實 源太郎	〃
上山 政義	〃
君塚 進	平成元年 4月
吉田 彌壽夫	〃
梅津 和郎	〃
山口 慶四郎	同 2年 4月
岡田 令子	同 4年 3月

(物故者)

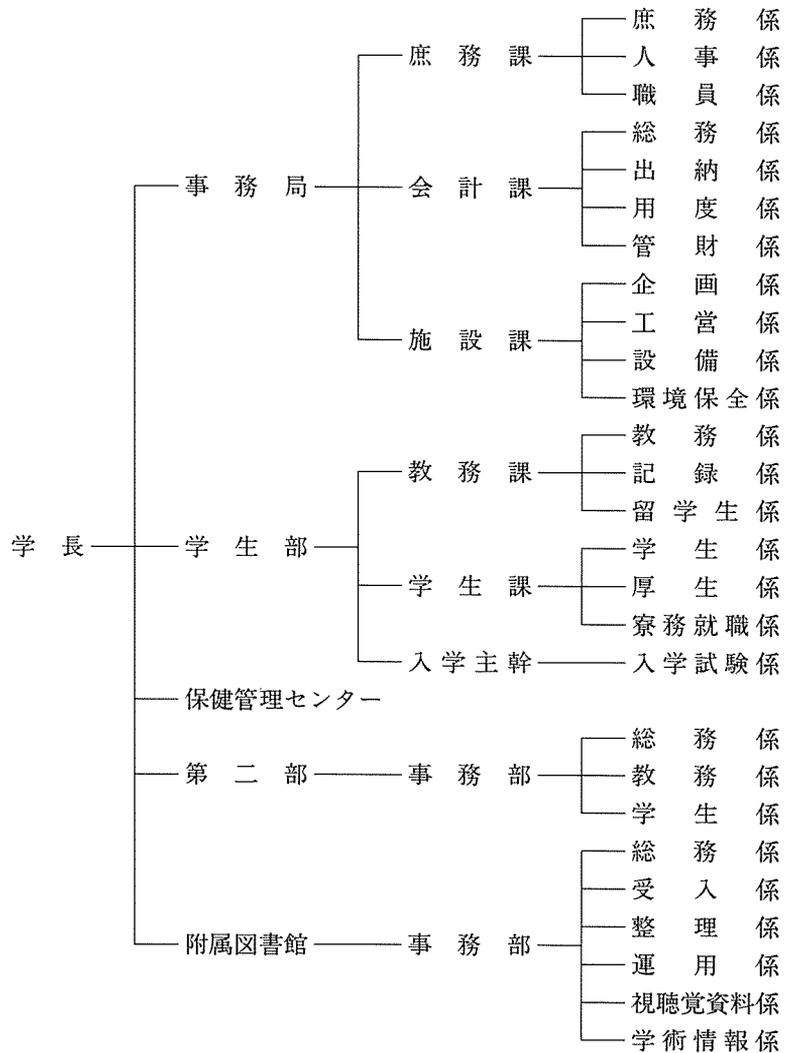
氏 名	授与年月
中目 覺	昭和 8年11月
高橋 周而	同 17年 5月
葉山 萬次郎	〃
吉野 美彌雄	同 34年 4月
澤 英三	同 36年 4月
森澤 三郎	同 40年 6月
山本 健太郎	〃
國澤 慶一	同 43年 4月
金子 二郎	同 44年11月
吉田 孝次郎	〃
小林 武三	同 49年 4月
丸山 忠雄	同 57年 4月

# 大学の組織

## 機 構



## 事 務



# 学生在籍者数

学 部(第一部)

(平成4年5月1日現在)

学科	学年 性別	収容 定員	1 年			2 年			3 年			4 年			総 計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
中 国 語 学 科		270	27	46	73	28	51	79	30	38	68	44	40	84	129	175	304
朝 鮮 語 学 科		60	10	8	18	10	12	22	13	7	20	11	9	20	44	36	80
モ ン ゴ ル 語 学 科		60	8	8	16	6	14	20	9	8	17	11	13	24	34	43	77
インドネシア・ フィリピン語学科	インドネシア語	165	5	20	25	6	15	21	12	11	23	8	18	26	31	64	95
	フィリピン語		10	17	27	10	18	28	6	15	21	3	9	12	29	59	88
インド・ パキスタン語学科	ヒンディー語	180	9	27	36	6	23	29	11	26	37	10	17	27	36	93	129
	ウルドゥ語		10	7	17	3	18	21	2	19	21	9	9	18	24	53	77
タイ・ベトナム語学科	タイ語	100	5	10	15	3	12	15	5	11	16	16	8	24	29	41	70
	ベトナム語		6	8	14	8	8	16	3	9	12	10	2	12	27	27	54
ビ ル マ 語 学 科		60	4	15	19	5	11	16	4	12	16	2	15	17	15	53	68
ア ラ ビ ア 語 学 科	アラビア語					2	0	2				2	1	3	4	1	5
	スワヒリ語								0	1	1	2	0	2	2	1	3
アラビア・ アフリカ語学科	アラビア語	210	11	22	33	2	23	25	7	26	33	4	17	21	24	88	112
	スワヒリ語		18	20	38	12	19	31	11	19	30	8	12	20	49	70	119
ベルシア語学科	ベルシア語	90	5	12	17	6	13	19	4	13	17	1	22	23	16	60	76
	トルコ語		3	11	14										3	11	14
英 語 学 科		280	35	55	90	23	47	70	25	51	76	31	60	91	114	213	327
ド イ ツ 語 学 科		140	19	24	43	13	30	43	4	32	36	19	23	42	55	109	164
デンマーク・ スウェーデン語学科	デンマーク語	115	8	13	21	2	10	12	4	17	21	6	14	20	20	54	74
	スウェーデン語		8	17	25	5	4	9	2	10	12	4	12	16	19	43	62
フ ラ ン ス 語 学 科		140	8	26	34	9	28	37	12	30	42	10	32	42	39	116	155
イ タ リ ア 語 学 科		120	8	29	37	10	21	31	4	27	31	10	31	41	32	108	140
イ ス パ ニ ア 語 学 科		200	29	41	70	11	32	43	13	45	58	22	38	60	75	156	231
ポルトガル・ブラジル語学科		120	16	20	36	11	18	29	10	20	30	16	19	35	53	77	130
ロ シ ア 語 学 科		200	21	35	56	32	33	65	22	49	71	16	24	40	91	141	232
日 本 語 学 科		160	8	29	37	8	29	37	11	27	38	9	34	43	36	119	155
総 計		2,670	291	520	811	231	489	720	224	523	747	284	479	763	1,030	2,011	3,041

学 部(第二部)

(平成4年5月1日現在)

学科	学年 性別	収容 定員	1 年			2 年			3 年			4 年			5 年			総 計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
			中国語学科	155	12	21	33	14	19	33	25	17	42	8	17	25	24	20	44	83
英語学科	350	31	39	70	32	44	76	47	52	99	26	31	57	61	39	100	197	205	402	
ドイツ語学科	155	17	16	33	13	19	32	17	17	34	9	13	22	25	19	44	81	84	165	
フランス語学科	155	9	22	31	17	14	31	19	19	38	10	17	27	26	21	47	81	93	174	
イスパニア語学科	155	9	21	30	17	13	30	15	20	35	8	20	28	32	15	47	81	89	170	
ロシア語学科	155	11	21	32	13	21	34	23	14	37	14	9	23	35	18	53	96	83	179	
総 計	1,125	89	140	229	106	130	236	146	139	285	75	107	182	203	132	335	619	648	1,267	

大学院

(平成4年5月1日現在)

専攻	年次 性別	収容定員	1 年 次			2 年 次			総 計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計
			東アジア 語学専攻	中国語学	32	4	2	6	0	1	1
朝鮮語学	0	2	2	0		4	4	0	6	6	
モンゴル語学	0	1	1	0		2	2	0	3	3	
南アジア 語学専攻	インドネシア・フィリピン語学	24	0	2	2	4	2	6	4	4	8
	タイ・ベトナム語学					2	2	4	2	2	4
	ビルマ語学								0	0	0
西アジア 語学専攻	インド・パキスタン語学	28	0	1	1				0	1	1
	アラビア・アフリカ語学		2	0	2	0	1	1	2	1	3
	ペルシア語学					0	1	1	0	1	1
英語学専攻		16				1	0	1	1	0	1
ドイツ語学専攻		12	0	1	1	0	4	4	0	5	5
フランス語学専攻		12	0	1	1	3	2	5	3	3	6
イタリア語学専攻		4	0	2	2	1	2	3	1	4	5
イスパニア語学専攻		16	1	0	1				1	0	1
ロシア語学専攻		12	3	2	5	0	2	2	3	4	7
日本語学専攻		12	3	8	11	2	3	5	5	11	16
計		168	13	22	35	13	26	39	26	48	74

専攻科

(平成4年5月1日現在)

専攻	性別	定員	男	女	計
デンマーク語専攻		2	0	0	0

研究生

(平成4年5月1日現在)

所属	区分 性別	国 費			私 費			総 計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
		学 部							0	0
大 学 院							3	3	6	
計							3	3	6	

聴講生

(平成4年5月1日現在)

所属	区分 性別	第1種			第2種			総 計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
		学 部	第一部	1	3	4				1
第二部	5		5	10	4	1	5	9	6	15
計		6	8	14	4	1	5	10	9	19

(注) 第1種：本学が開設する授業科目を学修しようとする者。  
第2種：教育職員免許状を取得するための単位を修得しようとする者。

## 卒業 者 数

(1)大阪外国語学校(大正13年度～昭和18年度)・大阪外事専門学校(昭和19年度～昭和25年度)

語部・科	年度																									合計		
	大正 13	14	15	昭和 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23		24	25
支那語部・支那科・中国科	36	33	25	34	35	28	37	33	31	37	37	42	37	34	33	35	43	67	70	62	68	65	61	73	57	39	32	1,184
蒙古語部・蒙古科	11	—	—	17	19	—	10	12	10	17	22	17	16	11	18	15	14	16	13	16	16	13	13	13	9	—	7	325
馬來語部・マライ科・インドネシア科	21	19	18	22	20	24	19	23	21	17	12	20	21	17	23	21	22	17	22	23	24	19	23	18	23	23	23	555
印度語部・インド科	15	18	23	—	16	21	—	10	12	12	6	12	12	12	9	11	8	6	13	13	14	10	14	10	17	18	16	328
ビルマ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	—	4	9	29
亜刺比亜語部・アラビア科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	9	11	15	12	11	4	6	10	89
英語部・英米科	37	27	38	34	27	29	36	31	30	35	32	35	30	38	35	32	34	33	33	27	29	34	40	60	42	61	46	965
仏語部・フランス科	23	20	25	16	16	32	23	19	17	26	28	27	25	23	22	25	25	20	23	26	18	30	18	24	26	42	24	643
独語部・ドイツ科	18	26	22	19	22	19	22	18	24	19	26	20	23	20	21	21	25	27	24	22	24	30	22	24	24	31	11	604
露語部・ロシア科	14	18	29	20	—	22	20	11	17	9	13	11	16	8	9	9	11	11	10	25	23	26	23	30	40	32	28	485
西語部・イスパニア科	13	11	—	18	17	—	18	14	—	17	18	22	18	20	20	19	23	16	26	22	20	20	17	26	16	28	20	459
合 計	188	172	180	180	172	175	185	171	162	189	194	206	198	183	190	188	205	213	245	245	247	262	243	305	258	284	226	5,666



## ロ. 第二部

(イ)別科(昭和26年度～昭和34年度)・短期大学部(昭和35年度～昭和42年度)

科	年度																
	昭和26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
中国語	2	11	6	9	13	—	9	13	—	11	14	5	6	14	12	13	2
英語	16	28	16	17	21	—	20	29	—	32	26	38	33	29	24	18	2
ドイツ語	4	3	9	10	10	—	4	13	7	—	8	10	10	11	16	15	1
フランス語	14	11	11	8	13	—	24	10	14	—	15	17	13	15	18	17	—
イスパニア語	7	3	3	5	20	—	9	16	—	15	21	16	18	12	23	13	2
ロシア語	—	5	5	5	14	—	7	10	4	—	9	12	9	16	4	15	2
合計	43	61	50	54	91	—	73	91	25	58	93	98	89	97	97	91	9

(注) 別科は31年度から2年制となる。

(ロ)第二部(昭和44年度～平成3年度)

学科	年度																			平成元	2	3		
	昭和44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62				63	
中国語	男女	11	14	9	10	12	11	8	18	13	9	8	7	19	17	18	18	14	16	19	13	12	11	
		3	3	2	4	4	3	1	3	2	2	5	6	4	2	4	8	2	4	6	6	19	11	12
英語	男女	26	32	32	14	21	27	26	40	28	34	35	35	42	39	38	30	40	24	34	23	36	18	27
		1	14	10	8	6	5	6	8	9	11	8	13	12	10	13	9	20	17	30	24	18	25	22
ドイツ語	男女	4	5	8	10	14	8	12	14	6	5	9	12	17	10	15	10	11	14	10	14	16	11	13
		1	5	3	—	2	1	—	2	1	3	1	3	5	4	5	3	3	4	4	6	6	12	3
フランス語	男女	9	10	11	11	10	10	11	10	11	10	16	14	11	14	16	7	16	13	15	14	13	14	12
		4	4	8	2	4	1	2	3	6	6	4	4	3	9	5	6	4	4	8	8	5	13	12
イスパニア語	男女	13	14	11	17	11	14	7	17	13	20	15	16	13	18	17	13	10	15	15	12	13	13	8
		4	4	3	1	3	7	2	1	5	4	2	5	3	6	8	2	5	7	6	6	5	9	11
ロシア語	男女	6	11	9	17	8	10	9	18	12	7	17	4	12	17	17	10	12	18	11	8	11	14	16
		2	3	1	5	2	1	4	3	2	2	5	4	6	5	3	6	5	3	7	6	5	4	5
計	男女	69	86	80	79	76	80	73	117	83	85	100	88	114	115	121	88	107	98	101	90	102	82	87
		15	33	27	20	21	18	15	20	25	30	27	35	33	36	38	34	39	39	61	56	58	74	65
合計		84	119	107	99	97	98	88	137	108	115	127	123	147	151	159	122	146	137	162	146	160	156	152

(ハ)大学院修了生数(昭和45年度～平成3年度)

専攻	年度	昭和																				平成		
		45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	
*東アジア語学専攻	男	1	2	1	—	3	5	3	1	6	1	4	2	—	2	5	2	4	4	5	2	6	6	
	女	—	1	—	1	—	2	—	1	—	2	2	2	—	—	1	1	4	2	4	3	4	2	
南アジア語学専攻	男	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	3	—	2	—	—	2	—	
	女	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—	
西アジア語学専攻	男	—	—	2	—	1	1	1	1	—	1	2	1	—	2	—	1	—	1	1	1	1	—	
	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2	—	—	—	1	—	—	1	—	2	
英語学専攻	男	1	2	3	1	2	2	2	1	2	1	—	3	—	2	3	2	1	—	1	—	1	—	
	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	
ドイツ語学専攻	男	1	2	1	1	1	1	1	3	1	—	1	—	1	—	1	—	1	—	—	—	—	1	
	女	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	2	
フランス語学専攻	男	1	1	2	1	—	2	1	—	3	—	1	—	—	1	1	—	—	—	2	1	—	—	
	女	1	—	—	—	1	1	—	2	—	2	1	—	2	—	—	—	1	1	—	—	—	1	
イタリア語学専攻	男	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	2	—	
	女	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	2	—	—	—	1	1	1	2	1	—	
イスパニア語学専攻	男	—	2	1	—	—	1	2	—	1	—	1	3	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	
	女	1	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	1	1	
ロシア語学専攻	男	—	1	—	4	1	—	2	—	1	2	—	2	—	—	1	2	—	1	1	1	—	1	
	女	1	—	—	1	—	—	—	—	1	—	3	—	—	—	—	—	—	1	2	1	2	1	
日本語学専攻	男	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	2	6	2	2	2	3	3	4	4	2	2	2	
	女	—	—	—	—	—	—	—	2	3	7	3	1	7	3	3	6	5	5	9	9	5	4	
計	男	4	10	10	9	8	12	13	4	17	4	12	11	13	8	15	9	14	9	17	9	14	10	
	女	4	1	—	3	1	4	1	4	5	9	11	12	7	12	6	5	9	13	13	10	14	14	
合計		8	11	10	12	9	16	14	8	22	13	23	23	20	20	21	14	23	22	30	19	28	24	

\*昭和49年度より中国語学専攻を改組

(3)第五臨時教員養成所(大正13年度～昭和5年度)

科	年度							合計
	大正13	14	15	昭和2	3	4	5	
英語科	35	37	35	—	—	30	—	137
歴史地理科	—	—	—	—	27	—	—	27
国語漢文科	—	—	—	—	—	—	27	27

(注) 大正15年度から修業年限3年となる。



# 付 録

---

■外大をとりまく環境

■キンキラ節

■各語部 部歌

■東外戦 戦績

## 外大をとりまく環境

大阪外国語大学が箕面に移転してはや、10年余になる。教職員の多くには、まだかつての上八キャンパスの面影の記憶がくっきりと刻まれているとはいえ、上八キャンパスを知らず、現在の箕面から勤め始めた教職員の数も少なくはなくなっている。ましてや、学生にとっては、上八はもはや「伝説」で、外大=粟生間谷となっている卒業生も、10期を越えようとしている。

そんななかで、外大も間谷の自然とともに、周囲の自然に育まれながら、歩んできたといえる。教室や、研究室の窓から、またグラウンドやサークルボックスから、山の四季の移り変わりを眺め、また数が多いとは言えないが、積極的に「裏山」に入ったり、周囲の村の祭りに出掛けたりするものもある。通学の途上では、秋の刈り入れの風景を楽しんだり、粃殻を焼く煙が谷をうっすらと覆うのに見入ったり、またあざやかな新緑に目を楽しませたり、と私達にやすらぎと潤いを与えてくれるのも、この間谷の風景であり、北摂の山々である。さらにいうなら、半年ごとに世界の各地から外大へやってくる留学生にとっての、「初めて接する日本の風景」でもある。

もちろん、こういった恵まれた「自然」は、交通の不便さとも隣り合わせで、人によっては2時間以上にも及ぶ通学時間や、「小野原」などでは、何でもない冬の寒さなのに、外大付近では凍結や積雪となる、といった「山の天気」に悩まされたりもする。しかしそういったことも含めて、我々はこの間谷の景観から、そして外大を抱くようにしてつらなる北摂の山々から、有形無形の恩恵を受け、それらともはや切っても切れない縁を持ちつつある。

かつてであれば「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」との言葉のように、周囲の自然は変わらず、その中の人々は移り行くことにはかなさを覚えるのが常であった。しかし、この変化の激しい現代においては、逆に人間の変化のスピードに増して、周りの自然が形を変えさせられていることに、焦りを覚えざるをえない時代となってしまった。この間谷も例外ではない。

現在、我々を取り巻いている山々は、数年後には開発の波にさらされて、近々様相を一変させることとなっている。「国際文化公園都市」という構想がこの地においてなされ、700ヘクタール以上の雑木林に覆われた丘陵地帯が、商業施設や、住宅地、研究所などの施設導入地区へと姿を変えることになっているという。工事期間は10年余りで、その間周辺の緑の恩恵を受けていた外大は、一転して巨大な工事現場の只中に位置することとなる。この間谷に移り住んできた外大そのものが、すでにその開発の一端を担う結果となっていたことは皮肉でもあるが、今後私達外大の構成員も、何らかの形でこの周辺の変化に対し、積極的に関わってゆくことが必要とされている。

次に100年史が編まれる頃には、すでに大きく様変わりし、現在の面影をも留めていない

ことが予想されるこの間谷の景観について、後から移り住んできた、新住者の一員である私達が、少しでも記録に留め、次の世代に伝えて行くことは、現時点での最低限の、歴史的責務といえるかも知れない。

大学も学問も、その空間的立地や環境と、決して無縁には在り得ない。その意味で、この項では、現在の外大がよって立つところの周囲の環境と、その歴史的経緯について、若干の記述を試みたい。

まずは、間谷の歴史の変遷について日本史の武田佐知子助教授に、間谷の集落と里山の関わりについて、人文地理学の神前進一助教授に、外大周辺の四季折々の鳥について、ビルマ語教官でアジアの野鳥を観察している大野徹教授に、それぞれ執筆をお願いした。

(深尾 葉子)

## 1. 大阪外大キャンパスの歴史的環境

外大から大阪平野を見渡して左手の方角にあたる、北摂丘陵が大阪平野と境を接した茨木、高槻の地域は、三島野と呼ばれ、墳丘の直径100メートルにもものぼる大規模な古墳が点在している。河内、大和の最大級の前方後円墳群に比べるとその規模は劣るが、大和王権と従属的に同盟しながら三島野地方に対する支配権を強めていった地域王権の存在を示している。

この地域の古墳で最大級のもは、真の継体陵といわれている今城塚古墳である。二重の堀をめぐる全長は、350メートルにもものぼる。継体は越後から入って大和王権の大王となったというが、大和王権の系譜とは直接的につながらない。また大王になってからも京都や枚方市の葛葉に都して20年も大和に入らず、墳墓も大和や河内でなく三島野に造られたことから、この地域の出身という事態も想定され、武烈までの天皇系譜と継体以降の天皇系譜は断絶していることが考えられる。

阿武山の京大地震観測所の裏手にある阿武山古墳は、昭和初期に発掘されて、玉枕に横たわり、金糸銀糸をまとった貴人の墓として有名になったが、近年再び脚光を浴び、藤原鎌足ではないかとする説がある。この地は藤原氏と因縁浅からぬ地であり、藤原鎌足が七世紀の半ば、三島に退去して三島の別業としたという所伝がある。

箕面の地は、国際文化公園都市として生まれかわろうとしているが、この地は古代においても、渡来人が住みつくなど、極めて国際的な環境の中にあつた。都と大宰府を結ぶ古代山陽道は、大宰府が国際関係の窓口であつたこともあつて、国際的にも重要な幹線道路であつたが、これを継承した西国街道も、政治、経済、国際関係の上で、重要な役割を果たした。この道路は、現在の国道171号線にほぼ重なる。

中世箕面には、滝安寺(りょうあんじ)と勝尾寺(かちおじ)というふたつの山岳寺院が大きな勢力を誇つた。中世のこの地域に対する豊富な歴史事実が知られるのは、勝尾寺におびただしい数残されている古文書によるところが多い。大学の裏山は、勝尾寺につながる。

この広大な山林地域は、古来の山岳信仰の影響もあって、古代から山林修行の仏教者達の修行の場となった。古代末期の山林仏教は、呪術的な固有信仰と仏教の混合したものであって、その祖として修験道の開祖役小角(えんのおずぬ)をあおぐことが多い。

滝安寺も役小角の開基と伝える。白雉元年(650)役小角が金剛山で靈巖の地を求めて三鉢杵を投げると、それは箕面の滝の東嶺の松の上にかかって靈光を放っていた。老翁の姿で現れた地主神は、この地を仏法興隆の為に役小角に寄進することを申し出、伽藍が建立されたという。勝尾寺の開基は、奈良時代に箕面の山林で修行した善仲、善算という双子の聖者を師として受戒した光仁天皇の子の開成皇子とされる。平安時代末に流行した歌謡によれば、滝安寺や勝尾寺は紀伊熊野の那智、大和の大峰、葛城などと共に、山林修行者である「聖のすみか」として有名であったことがわかる。

さて、勝尾寺の広大な寺域の境界を示すため、現在でも八箇所に「八天石蔵」と呼ばれる石組が残っている。三段の方形に組まれた石組の中に、陶製の容器があり、中に勝尾寺の方向を向いて四天王像や四大明王の像が一体ずつ納められていた。

1220年代の末、山林の利用をめぐる勝尾寺と周辺住民の間に激しい争いが起こった。古代以来、勝尾寺周辺の住民は、寺の周囲の山林で、木を切ったり、柴を採ったり、また狩猟などをしてきた。それがこの段階で突然、寺の聖域を荒らすという理由で禁止され、寺側は入山した住民の斧や鎌を没収したのである。住民側は既得権益を侵害されたとして禁止の札を打ち割り、寺僧と流血の衝突をし、対決の様相は深刻を極めた。かかる事態を招いたのは、西国街道を媒介とした商品経済の発達であった。周辺住民は、慣習的に自給用の木材や柴を、山林に入って採集していた。ところが山陽道に沿った交通至便な地であったことから、炭が商品として生産されるようになり、住民はこぞって炭竈を設け、またその原料となる木を求めてさらに山深くわけいった。これを阻止するために寺側は「八天石蔵」を設けて寺領への入山を禁止しようとし、勝尾寺側は寺領の真ん中に炭竈が造られ、木が悉く伐採されて「野山」になってしまったとし、炭竈を撤去している。実は寺領周辺で、炭の生産を具体的に地名として確かめられるのが、粟生村なのである。

外大の裏山を歩くと、所々にもう使われていない炭焼きがまが見つかる。それらは、中世粟生に生きた先住民達の、力強い営みの証ともいえよう。

(武田 佐知子)

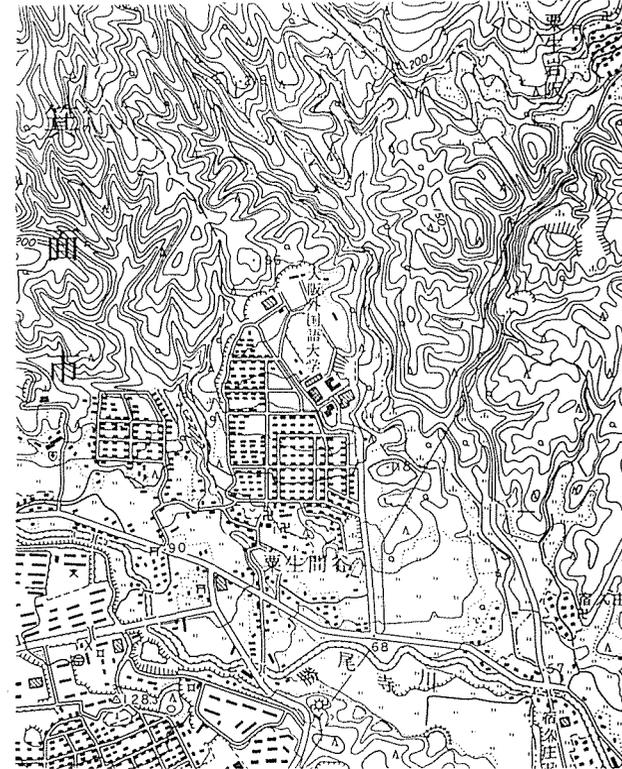
## 2. 外大周辺の自然環境と地域変容

外大の教室や研究室から、よく晴れた日には生駒山地や遠く淡路島まで大阪平野を一望できる。外大へ向かう道筋からは、間谷の集落の上部、緑のなかに聳え立つ校舎を目標に、「外大坂」を登りつめ、ようやくたどり着く。海拔110mから150mに位置する外大キャンパスの敷地は人工的に改変された土地で、造成前の地図と見比べると、尾根を削り、50mにもおよぶ深い谷を埋めて平坦面を作り出したことがわかる。尾根を削った部分には、本部棟、

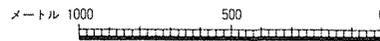
## 地形図にみる外大周辺の変容



昭和36(1961)年修正 1:25,000「高槻」図幅



昭和61(1986)年修正測量 1:25,000「高槻」図幅



図書館、A～E棟、記念会館、寮などの建物が配置されている一方、谷を埋めて作り出した平坦面は地盤強度を考慮してグラウンドに利用されている(地形図参照)。

外大の位置を地形的に見ると、大阪平野から北摂山地へ移行する傾斜変換線上にあるといえる。北摂山地は箕面断層の北側がブロック状に隆起して形成された山地で、山頂部に平坦面をもつ数段の山塊からなり、平野部とは深い峡谷で隔てられている。秩父古生層中には銅の鉱脈があり、外大東側の谷沿いには銅を採掘した間歩跡が残っている。外大北側の丘陵性山地は、赤マツや、クヌギ、コナラなどの雑木林からなる典型的な里山で、炭焼き、薪の採集、採草など、古くから地域住民の生活と密接に結びついて維持管理されてきた自然が残されている。

外大から下の地区に目を向けると、北摂山地から流れ出す勝尾寺川やその支流が谷口部に形成した扇状地性の緩傾斜地と、活発な地殻変動の作り出した勝尾寺川兩岸の河岸段丘面が発達している。河岸段丘上の平坦面は災害の危険の最も少ない場所で、古代から安定した農地として利用されてきたことは、一町間隔の規則正しい水田区画が現在も残る条里制地割りが物語っている。粟生間谷を構成する在来の各集落もここに立地し、里山に囲まれた小盆地的な空間が、古代からの生活の舞台であった。

この南側には雑木林の間に小規模な溜池がみられる粟生丘陵とでも呼ぶべき地区を隔て、国道171号線が通るほぼ東西方向の低地帯がある。ここは、有馬高槻構造線と呼ばれる断層帯にあたり、古代の山陽道や近世の西国街道から現在に至るまで幹線交通路として利用されてきた。

外大の位置は行政的には、箕面市粟生間谷東にある。この地は箕面市の東端で、茨木市との境界にあたる。この行政境界は比較的新しいもので、昭和31年の粟生地区の分離合併により生じた。この付近は江戸時代には摂津国嶋下郡粟生村と呼ばれていた。粟生村は勝尾寺から西国街道にまで及ぶ広大な領域をもつ中世以来の大村で、村内は間谷、岩阪、川合、新家、外院の5地区に分れ、さらに間谷は、山ノ口、中村、奥の3集落に分れる複雑な構成となっていた。

粟生村は、明治22年の町村制施行時に周辺の村々と合併して豊川村となり、昭和31年に町村合併促進法のもとで箕面市と茨木市に分村合併するまで存続した。箕面市の成立時には、人口規模3万人という基準を満たさねばならず、豊川村は求めに応じて全域が箕面市に加わったのち、住民の意向に従って東部は茨木市へ分離編入されることになった。粟生地区はちょうど箕面と茨木の間地点付近に位置し、東北端の岩阪だけが粟生地区から分離して茨木市粟生岩阪となった。この時点で外大東側の谷に両市の境界線が設定されたが、耕地の所在状況を反映して飛地のある錯綜した境界線となった。

粟生地区は都市近郊にありながら、1960年代後半まで純農村的景観を保持してきた。この地区は、特に酒米の産地として名を馳せていたほか、裏作としてケシ栽培、山麓部でのビワなど各種の果樹栽培が行われていた。また、集落の背後には広大な里山が存在し、入

会利用によって住民全体の生活や生産に重要な役割を果たしてきた。このように周囲の自然との豊かな関わりのなかで、安定した暮らしが成り立っていた。

この地区での都市化の端緒は、1970年前後の大規模宅地開発に求められる。大都市近郊の都市化前線で一般にみられるように、広い敷地や静かな環境を求めて、住宅団地、病院、学校などの郊外移転が都市化の先鞭をつけた。住宅公団や阪急電鉄等による住宅地開発、ガラシア病院等の立地に続き、外大が上八から移転したのが1979年であった。

この地区は、交通の便の悪さ、特に電車による大阪市内へのアクセスを欠いていたため、箕面市内では止々呂美地区を除き、最も遅くまで住宅地化から取り残された地域であった。しかし、丘陵地の里山が大規模住宅地に開発されたのを契機に、道路網が整備され、旧集落の周辺にも徐々に宅地化の波が押し寄せつつある。水田や樹園地の農地転用によって商業施設や学生用を含むアパートやマンションが建設され、新旧住民の混住化が進み、農村的土地利用と都市的土地利用の混在する景観を呈するようになった。

人口の推移から都市化の進展をみると、1960年代後半までは人口は停滞的で、わずかな減少すらみられた。1970年前後の相次ぐ大規模住宅地の開発に伴う新住民の転入により、粟生地区の人口は1965年の1,118人から1975年の8,990人へと8倍以上に激増し、市内最高の増加率を示した。1990年国勢調査による粟生地区の人口は21,258人で、人口の95%までが新住民となり、箕面市全体の人口に占める粟生地区の割合も、1965年の2.5%から1990年の17.4%に増大した。

都市計画法で市街化区域とされている在来集落の周辺部で市街地化が進行しているのに対し、市街化調整区域に指定されている外大坂東側や勝尾寺川南側では、まとまって農地が存続している。しかし、生産緑地法の改正で宅地並み課税が行われると、急速な農地の減少が予測され、外大周辺の緑に囲まれた環境は大きく変貌すると予想される。

さらに現在、外大の北側の丘陵地一帯を国際文化公園都市として開発する計画が進められている。700ヘクタール以上の地域にまたがり、国際交流、学術文化、研究開発等の機能を組込んだ人口5万人の複合機能都市で、20年後の完成を目指している。モノレールの乗り入れも予定されているが、丘陵の地形を大幅に改変し、里山の緑を破壊するこの計画が完成した暁には、外大キャンパスは人工的都市空間の真只中に位置することになる。

移転当時の外大には、裏山に四季折々に変化する里山の緑のあったことが昔語りにならぬよう、21世紀の外大にとって好ましい環境について真剣に議論する時に来ているのではないだろうか。

(神前 進一)

### 3. 四季折々の鳥たち

青葉若葉の候

北摂の山々を後背地に控えているという恵まれた地理的環境の所為か、外大のキャンパ

スでは、1年を通じて実に様々な野鳥の姿に接する事ができる。入学式が終わってフレッシュな顔がキャンパスに溢れる4月下旬、周辺の山々からは明るいウグイスの囀りが聞こえてくる。上八時代には想像もできなかった事である。始めはまだたどたどしい鳴き声も、5月頃には見事なトレモロを聞かせてくれるようになる。鳴き声が聞こえてくるのは、主としてA棟東側の谷間と、運動場北側の裏山とからが多い。このウグイスの囀りに混じって、時々ホトトギスの鳴き声が微かに聞こえてくる事がある。ホトトギスは夏鳥として日本に渡来するが、カッコウと同じように自分では子育てをせず、ほかの鳥の巣に卵を産み込み、育ててもらおうという特殊な習性をもっている。ホトトギスの託卵相手に選ばれるのがウグイスなのである。移転完了後暫くの間は、天高く舞い上がって囀るヒバリの鳴き声もよく聞かれた。運動場周辺の叢で営巣していたものであろう。

### 珍鳥の鳴き声

授業が軌道に乗り始めた5月中頃の事であった。A棟東側の谷間から「ショーチューイッパイグイッ」という鳴き声が聞こえて来た。私は、一瞬、自分の耳を疑った。野鳥の鳴き声を人間に分かるような言葉に置き代えて聞くことを「聞きなし」という。代表的な「聞きなし」としては、ホトトギスの「特許許可局」、ホオジロの「一筆啓上仕り候」などがある。「土食って虫食って渋い」と聞きなされるツバメの例もよく知られている。「焼酎一杯グイッ」と聞かれるのは、センダイムシクイの鳴き声である。日本には夏鳥として渡来し、低山帯の落葉広葉樹林で繁殖する。この一風変わった鳴き声を私は知識としては知っていたが、自分の耳で実際に聞いたのはその時が初めてであった。90分の授業中、その鳴き声は何回も聞かれた。私と一緒に、学生たちも耳にしている。しかし、次の週の同じ曜日の同じ時間、期待していた珍しい鳴き声はもう聞かれなかった。どうやらA棟東の谷間は、そのセンダイムシクイにとっては、渡りの途中に立ち寄っただけの中継地点に過ぎなかったようだ。

### ホオジロの聞きなし

ウグイスと同じように春を告げてくれる鳥にホオジロがいる。この鳥は、背中が茶色で、一見スズメに似ている。しかし、スズメよりは幾らかスマートである。それに、スズメの腹部は白だが、ホオジロは赤茶色をしている。繁殖季になると、その色は一層鮮明さを増す。眉と頬とが白いのもホオジロの特徴である。運動場周辺の叢で餌を探していたり、フェンスに止まっている姿などがよく見られる。ホオジロは冬の間は「チチッ」という小さな声を出しただけだが、春になると木の梢や枝先に止まって囀る。囀りは一般に「一筆啓上、仕り候」と聞きなされるが、時には「源平ツツジ、白ツツジ」と言う様にも聞こえる。最近では、「札幌ラーメン、味噌ラーメン」と聞きなす人もいるという。その気になって聞けば確かにその様にも聞こえるのだが、果たしてどの聞きなしが実際の鳴き声に一番近いの

だろうか。

### トックリ形の巣を作るツバメ

新学期開始と同時に見られる鳥の典型的な例として、ツバメがある。A棟とB棟と図書館とで構成される中庭、すなわちローマ字のU字形の空間上空を、春から夏にかけて、「チュイッ、チュイッ」と小さな鳴き声を出しながら、左から右、右から左へと軽やかに飛びかう姿が毎年見られる。ツバメなど珍しくもないと思う向きもあるかも知れないが、外大上空を飛びかっているツバメは、実は普通のツバメではない。これらのツバメは、A棟、B棟の非常階段の軒下に土で巣を作るが、その形がちょうど徳利を縦に二つ割りした様な実に変った形をしている。また、体の色にも特色がある。A棟4階の教室の窓から眺めると、飛翔するツバメを上から見下ろす様な形で観察することができる。普通のツバメは、腹は白いが、背中黒い。ところが外大で繁殖するツバメは、腰の部分が赤褐色をしている。コシアカツバメである。日本へは夏鳥として渡来するが、渡来時期は普通のツバメより1箇月ばかり遅い。

### モズの高鳴き

夏鳥のツバメが姿を消し、朝夕の冷え込みが感じられる季節になると、外大に隣接する住宅地から「キーキーキー、キキキッ」というけたたましい声が聞こえるようになる。モズの高鳴きである。モズは体は小柄だが、尾が長く、それをよくクルリ、クルリと回転させている。背中は灰色をしているが、頭は赤褐色、脇腹は明るいオレンジ色をしている。小型ではあるが猛禽の一種で、鋭い嘴をもっている。嘴の付け根から目の後に掛けて帯状の黒い線が走っており、それがこの鳥のまなざしを一層鋭いものになっている。

### 冬季の定期的来客

北摂の山並みに接している所為か、外大の冬は寒い。大阪市内に較べると、気温が5度は違うのではないと思われる。ダウン・ジャケットを着てくる学生の姿が目立つようになったある日、「ヒッヒッヒッ」という澄んだ声に続いて「カッカッカッ」という、何か固い物同志を打ち突け合わせる様な音が聞こえてくるようになる。ジョウビタキの鳴き声である。ジョウビタキは冬鳥で、日本には秋から春まで滞在する。いつも同じ所で越冬するらしく、外大では職員会館の周囲でよく見掛けられる。背中は灰褐色だが、腹は濃いオレンジ色、頭は銀白色、顔は黒、翼の白い紋が目立つ。意外に綺麗な鳥である。固い物同志をぶっつけ合うような「カッカッカッ」という音が、火打ち石の音を連想させる所から「ヒタキ」と呼ばれるようになったと言われる。しかし、その音が、嘴を打ち鳴らして出すものか、尾羽根を打ちつけて出すものか、明らかではない。

## 真冬の鳥たち

冬の間、キャンパスの中で見られる鳥は少ない。しかし、枯草の茂みの間には、植物質の餌を求めて動く小鳥たちの姿が見られる。その代表例が、カシラダカやアオジ、ツグミ、イカルなどである。カシラダカは大きさも体の色もホオジロに似ているが、ホオジロ程の赤味はなく全体的に色が薄い。最大の特徴は冠羽と呼ばれる頭上の毛で、時々それを逆立てる。アオジは頭が黒灰色、背中は緑灰色、下半身は黄緑色に黒い縦斑が入っている。スズメよりはやや体が大きい。ツグミはスズメの2倍ぐらいの大きさの鳥で、胸の黒い斑点が目立つ。ひと頃焼き鳥の材料として大量に捕獲された。霞網の使用が禁止された今は、ヨーロッパから冷凍物が輸入されている。秋には林にいて、冬になると平地の草原に降りてくる。地上を数歩歩いては立ち止まる事を繰り返す。立ち止まる時には、どうだと言わんばかりに胸を反らす。イカルはムクドリぐらいの大きさ。背中と腹部は汚白色。頭は黒く、嘴は黄色くてずんぐりと太い。木の枝に止まって「ヒーコーキー」と明るく朗らかな声で囀る。この囀りは「チョット、オカシー」とも聞こえる。山口県や島根県辺りでは「キークー、ニジュー」（菊、20）と言う風に聞こえる。ツグミやアオジのように、地上に降りる事はない。

私鉄系列の不動産企業が所有する外大裏手の山には、別の小鳥たちがいる。シジュウカラ、エナガ、メジロ、コゲラなどである。シジュウカラは胸に黒いネクタイのような帯模様をもっている。春になると「ツツピー、ツツピー」と囀る。エナガも雑木林の鳥で、体は小柄だが尾が長い。下半身は白、背中は薄茶色に黒が混じっている。群れを成して、木から木へ、枝から枝へと移動する。移動しながら「ジュリリ、ジュリリ」と貝殻を擦り合わせたような音を出す。メジロは目の回りに白いリングがある事からそう呼ばれる。全身は鮮かな黄緑色。スズメよりは少し小さい。繁殖季には「チャーチュル、チューチュル」と早口の囀りを繰り返す。これを「長兵衛、中兵衛、長中兵衛」と聞き成している。コゲラは背中に黒と白の横縞模様を持った小柄なキツツキ。木の幹を下から上へと移動しながら餌を探す。時々「ギーギー」という軋るような鳴き声を出す。以上が、冬の雑木林での常連客である。

## おもな留鳥

外大の周辺で見られる鳥には、夏鳥や冬鳥といった渡り鳥だけではなく、1年中踏み留まっている鳥、すなわち留鳥もいる。その代表例としては、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワ、セグロセキレイ、コジュケイ、アオゲラなどがある。キジバトはヤマバトとも呼ばれる。背中には赤褐色と黒の鱗模様があり、首には青と白との小さな縞模様がある。「クークー、ポーポー」と鳴く。ヒヨドリはキジバトよりはひと回り小さい。全身灰褐色をしており、目の後に薄茶色の紋がある。銀白色をした頭部が毛羽立っている事、「ピーヨ、ピーヨ」という甲高い声を出す事などで知られる。ムクドリはヒヨドリよりは

ひと回り小さい。全身黒っぽい灰色をしているが、目の回りだけが白っぽい。「ギョルギョル」という濁った鳴き声を出す。カワラヒワはスズメぐらいの大きさ。スズメよりは黄色味が強い。静止している時には翼の中程に黄色い紋様が見える。嘴は薄いピンク色。飛びながら「キリキリ、コロコロ」という明るい鳴き声を出す。セグロセキレイは白と黒のツートン・カラー。初夏には図書館の屋上で囀る姿がよく見られる。コジュケイはキジの雌に似ている。顔は赤く、尾は短い。「チョットコイ、チョットコイ」と大きな声を出して人を驚かせる。アオゲラは、黄緑色の背をしたキツツキの仲間である。

(大野 徹)

## 外大名物「キンキラ節」

外語名物、数々あれどあれど  
バイソラキンキラキン  
ひとつキンキラ聞かせやしょう  
それもそうかいなキンキラキン

パリのエッフェル塔から小便すればすれば  
バイソラキンキラキン  
ブリジットバルドーが傘をさす  
それもそうかいなキンキラキン

アラビアよいとこ一度はおジャレおジャレ  
バイソラキンキラキン  
月の砂漠に虹が出る  
それもそうかいなキンキラキン

沖の鷗と外語の生徒は生徒は  
バイソラキンキラキン  
波のいずこで果てるやら  
それもそうかいなキンキラキン

惚れた惚れたよ外語の前で前で  
バイソラキンキラキン  
馬が小便して地が掘れた  
それもそうかいなキンキラキン

君は樟蔭僕は外語外語  
バイソラキンキラキン  
仲をとりもつ大軌線  
それもそうかいなキンキラキン

外語出るときゃ一番で出たが出たが  
バイソラキンキラキン  
今じゃロンドンでこじきする  
それもそうかいなキンキラキン

雪のシベリアウラルを越えて越えて  
バイソラキンキラキン  
今日はボルガの月を見る  
それもそうかいなキンキラキン

俺のゆくとこ北京と決めた決めた  
バイソラキンキラキン  
俺がゆかなきゃおさまらぬ  
それもそうかいなキンキラキン

ドイツよいとこビールが飲めて飲めて  
バイソラキンキラキン  
ゲルマン美人のひざまくら  
それもそうかいなキンキラキン

ロシアよいとこウォッカが飲めて飲めて  
バイソラキンキラキン  
スラブ美人のひざまくら  
それもそうかいなキンキラキン

スペインよいとこ闘牛が見れて見れて  
バイソラキンキラキン  
血を見てよろこぶセニョリータ  
それもそうかいなキンキラキン

娘やるなよ、外語の生徒に生徒に  
バイソラキンキラキン  
末は波止場で泣き別れ  
それもそうかいなキンキラキン

娘やるなら、外語の生徒に生徒に  
バイソラキンキラキン  
末は大使か総領事  
それもそうかいなキンキラキン  
キンキラキンのキンキラキン

外語よいとこ夕陽を受けて受けて  
バイソラキンキラキン  
魔風恋風そよそよと  
それもそうかいなキンキラキン

万里の長城で小便すればすれば  
バイソラキンキラキン  
ゴビの砂漠に雨が降る  
それもそうかいなキンキラキン

粋な好看 <sup>ハオカン</sup> 戒克 <sup>ジャンク</sup> にのせてのせて  
バイソラキンキラキン  
黄河下れば月が出る  
それもそうかいなキンキラキン

故郷を出るとき禪忘れ忘れ  
バイソラキンキラキン  
ゴビの砂漠をブラブラと  
それもそうかいなキンキラキン

ゴビの砂漠で見合いをすればすれば  
バイソラキンキラキン  
新婚旅行はチベットへ  
それもそうかいなキンキラキン

外語出る時やビリから出たが出たが  
バイソラキンキラキン  
今じゃ蒙古で姫の髻  
それもそうかいなキンキラキン

送りましょうか送られましょかましょか  
バイソラキンキラキン  
せめて神戸の波止場まで  
それもそうかいなキンキラキン

## 各語部 部歌

### 支那語部々歌

作詞 芝池靖夫  
作曲 杉江 秀

1. さみとりの空高く晴れ  
輝きわたる旭日に立つ  
我等若人  
燃ゆる血潮  
高き矜持  
青春の意気昂然たり  
支那語部 支那語部  
大なる哉 支那語部  
支那語部 支那語部  
我が支那語部
2. 南風吹いて 曠野はるか  
烈日を蔽ひ 今し翔くる  
我等大鵬  
羽搏き起す  
五彩の雲  
大陸久遠の平和あり  
支那語部 支那語部  
大なる哉 支那語部  
支那語部 支那語部  
我が支那語部

### 蒙古語部々歌

1. アルタイ山や高粱の  
風薫るモンゴルの  
オナンの岸やケルレンに  
成吉思汗の跡しのぶ
2. 濁流みなぎる<sup>ホンホ</sup>黄河の  
流れのもとに吼けば  
如何に思ひは身にしみて  
空飛ぶ鷲に究むらん

### 馬來語部々歌

作詞 瀬川 龜  
作曲 松村順吉

1. 御津の浦曲の潮風騒に  
船艤ひて南張る  
光クララと浪にひく  
東の空の彌彦星  
雨も降り降り北風つのは  
船は南へまつしぐら
2. あはれ南洋汝の地は  
陽水めぐみ極まれる  
無限無盡の宝庫なれ  
開かん鍵は吾等持つ  
暑い南洋ぢや火は燃えてるが  
誠男のバラダイス

### 英語部々歌

西岡辰二

1. 浪華の蘆の露繁く  
照す朝日の光受け  
輝やき渡る東洋の  
和洋洋々の春の園  
<sup>マド</sup>團樂ふ吾等が肩の上に  
かかる使命ぞいと重き
2. 秋空清く澄み渡り  
嘶く駒の聲高く  
振ふ吾等が鞭の下  
紅燈緑酒何かせん  
勵む吾等が逸り男の  
榮譽はかかる英語部に

### 西語部々歌

作曲 杉江 秀

1. ピレネー山やナランハの  
風かほる國スペインの  
アルハンブラやグラナダの  
サラセン文化の跡を追ひ
2. 濁流みなぎるアマゾンの  
流れの下に嘯けば  
如何に思を身に秘めて  
空行く鷲に極むらん





# 年 表

---

# 大阪外国語大学年表

	本校関係	一般
大正七年(一九一八年)	7・12 林竹三郎 死去。	8・3 富山で米騒動発生。 9・29 原敬内閣成立。 11・11 第1次大戦終わる。 11・17 大阪市中心公会堂落成。
大正八年(一九一九年)	1・24 林蝶子、100万円の寄付願を大阪府知事に差し出す。	1・20 河上肇『社会問題研究』創刊。 2・10 「高等諸学校創設及び拡張費支弁ニ関スル法律案」を衆議院に提出(3.25 可決)。 6・28 ヴェルサイユ条約調印。 12・15 関西の14労働団体、普選期成関西労働連盟結成。
大正十年(一九二一年)	3・31 林蝶子、大阪外国語学校創設費として寄付金100万円を政府に完納。 5・23 松山高等学校教授中目覚、第二外国語学校創立委員を囑託さる。 10月 本館完成。 12・9 勅令第456号をもって大阪外国語学校を設置。 12・10 中目覚が校長に任命さる。 12・12 文部省告示第497号をもって文部省内に仮事務所を置き事務を開始。 12・29 文部省令第49号をもって大阪外国語学校規程を制定。	2・3 衆議院、国民党・憲政会提出の普選法案をともに否決。 4・28 大阪電灯会社争議。 5・1 大阪市で最初のメーデー。 5・10 大阪市庁舎新築落成(中之島)。 7・7 神戸三菱・川崎両造船所スト(7.14 軍隊出動)。 11・4 原首相、東京駅頭で刺殺さる。 11・8 大阪高等学校開設(開校は11年5月)。 11・12 尾崎行雄ら全国普選断行同盟を組織。 12・13 ワシントン会議で日英同盟廃棄。
大正十一年(一九二二年)	1・16 事務所を文部省内から大阪市東区上本町八丁目大阪外国語学校内に移転。 1・16 4月入学の本科生徒を募集。 4・1 入学選抜試験を実施。 4・10 大阪外国語学校学則を制定。 4・15 入学式。 4・17 授業開始。 5・5 校友会創立総会。 8・2 9月入学の別科生徒を募集。 11・11 開校式。 11・12 第1回記念陸上競技大会。	1・22 普選断行・綱紀肅正民衆大会、東京で開催。 2・6 ワシントン海軍軍備制限条約に調印。 2・27 衆議院、憲政会・国民党らの統一普選法案を否決。 7・3 海軍軍縮計画発表。 7・4 陸軍軍縮計画発表(いわゆる山梨軍縮)。 7・15 日本共産党、非合法に結成。 11・7 学生連合会結成。 12・30 ソ連邦成立
大正十二年	4・5 文部省告示第263号をもって第五臨時教員養成所を付設。 4・14 入学式。 4・24 第五臨時教員養成所諸規則を制定。 この年 生徒控所を増設。	2・23 東京で普選断行大示威行進。 3・1 衆議院、普選法案否決。 4・5 日本共産青年同盟結成。 4・30 大阪市立運動場開場。 5・10 道頓堀に松竹座完成。 9・1 関東大震災。 9・7 支払猶予令・暴利取締令を公布。

	本校関係	一般
(一九二三年)		9・16 大杉栄ら殺害さる。 11・10 国民精神作興ニ関スル詔書發布。
大正十三年(一九二四年)	1月 社会科学研究会生れる。 1・29 道場完成、鏡開き。 4・14 入学式。 5・31 林蝶子、勲三等瑞宝章受章。 7・14 東京外語と庭球試合(神崎川コート)。 10・25 土俵落成。	3月 第一次共産党、解党を決議。 5・10 第15回総選挙、護憲三派大勝。 6月 南海電鉄など関西交通機関の争議続発。 7.3~ 大阪市電スト。 7・15 宝塚大劇場竣工。 8・1 甲子園球場開場。 9・14 学生社会科学連合会結成。 11・10 高等学校長会議、各高校の社会科学研究団体の解散措置を決定。 11・12 全国学生軍事教練反対同盟結成。
大正十四年(一九二五年)	3・19 本科および第五臨教第1回卒業式。 4・1 大阪市の区域変更によって学校所在地東区を天王寺区と改称。 4・14 入学式。 4・24 配属将校渡辺喜一中佐が着任。 6・29 国際連盟協会の学生支部発足。 7・10 対東外第1回定期戦のため剣道・柔道・庭球・陸上競技・ア式蹴球部が上京。	2・11 全国各地で治安維持法・労働争議調停法・労働組合法案の3悪法反対示威運動。 2・22 普選・貴族院改革断行国民大会開催。 2・28 (社)大阪放送局設立。 3・19 治安維持法成立(4・22公布)。 3・29 普通選挙法成立(5・5公布)。 4・13 陸軍現役将校学校配属令公布。 5・1 高田・豊橋・岡山・久留米の四師団廃止(宇垣軍縮)。 10・15 小樽高商の軍事教練で朝鮮人暴動を想定し問題化。 12月 樟蔭女子専門学校設立認可。
大正十五年・昭和元年(一九二六年)	3・19 本科および第五臨教第2回卒業式。 4・1 第五臨教、歴史地理科増設。修業年限3年となる。 4・14 入学式。	1・15 京都学連事件(初の治安維持法適用)。 4・9 労働争議調停法・治安警察法改正、各公布。 4・10 暴力行為等処罰に関する法律公布。 5・29 岡田文相、学生生徒の社会科学研究禁止を通達。 6・28 全日本学生自由擁護同盟結成。 7・21 一年志願兵及一年現役兵服務特例を公布(教練の成績検定とその合格者の在営期間の短縮)。 8・30 大軌ビル完成。 10・9 朝日会館完成。 12・25 大正天皇没。 12月 改造社『現代日本文学全集』刊行開始。
	3・19 本科および第五臨教第3回卒業式。	2・26 大阪市の初めて市バスが走る(阿倍

	本校関係	一般
昭和二年(一九二七年)	<p>4・14 入学式。</p> <p>6・22 校友会における本科と第五臨教との提携なる。</p> <p>11・13 第1回語学大会を大毎ホールで開催。</p>	<p>野・平野間)。</p> <p>3・15 渡辺銀行など休業、金融恐慌はじまる。</p> <p>4・1 徴兵令を改め兵役法公布。</p> <p>4・18 台湾銀行取付け、休業銀行続出。</p> <p>4・22 緊急勅令で金銭債務の支払延期等公布施行。</p> <p>5・9 日銀特別融資及び損失補償法等公布。</p> <p>5・28 政府、居留民保護を理由に山東出兵を声明。</p> <p>7・10 岩波文庫刊行開始。</p>
昭和三年(一九二八年)	<p>3・19 本科第4回卒業式。</p> <p>3・28 入試科目から数学がなくなる。</p> <p>4・16 入学式。</p> <p>4・19 第五臨教、国語漢文科増設。</p>	<p>2・20 第16回総選挙(最初の男子普通選挙)。</p> <p>3・15 共産党への全国的大弾圧。</p> <p>4・17 文部省、学生生徒の思想傾向の匡正、国民精神の作興を訓令。東京帝大新人会に解散命令。</p> <p>4・18 河上肇・大森義太郎・向坂逸郎ら、大学から追放さる。</p> <p>6・4 張作霖、奉天到着前に爆殺。</p> <p>6・29 緊急勅令で治安維持法改正公布施行。</p> <p>7・3 全県警察部に特別高等課設置。</p> <p>7・24 司法省、思想係検事を設置。</p> <p>9・11 閣議、思想善導費として15万6千円の支出を決定。</p> <p>10・30 文部省、思想問題に対処するため学生課を新設、直轄学校に学生主事・生徒主事をおく。</p>
昭和四年(一九二九年)	<p>3・15 本科第5回、第五臨教第4回卒業式。</p> <p>4・12 入学式。</p> <p>4・29 大阪外国語学校校旗を制定。</p> <p>6・8 第5回同窓会総会(四ツ橋・南一温泉料理)。</p> <p>6・19 応援団誕生。</p>	<p>3・5 代議士山本宣治刺殺さる。</p> <p>4・15 阪急百貨店開業。</p> <p>4・16 共産党員全国的大検挙。</p> <p>7・1 文部省学生課を部に昇格、社会教育局設置。</p> <p>9・10 文部省、国体観念明徴などの教化動員を実施。</p> <p>10・24 ニューヨーク株式市場大暴落、世界恐慌始まる。</p> <p>11・7 学生社会科学連合会自主的解散、非合法活動に入る。</p> <p>11・22 大阪・花園ラグビー場開場。</p> <p>12・26 憲兵司令部、思想研究班を編成。</p>
昭和五年	<p>3・15 本科第6回、第五臨教第5回卒業式。</p> <p>4・11 入学式。</p> <p>6・28 航空研究会発足。</p>	<p>1・29 大阪の地下鉄工事始まる。</p> <p>2・26 共産党関係者1,500人全国的大検挙。</p> <p>4・5 文相、各帝大総長と思想問題につき協議。</p>

	本校関係	一般
(一九三〇年)	11・21 美術部、大阪外語ローロール第1回展覧会を開催。	4・22 ロンドン海軍軍縮条約調印。 6月 株式・綿糸などの相場暴落。 9・26 横浜正金銀行、正貨現送を開始(ドル買い問題化)。 10月 生糸価格暴落。 11・14 浜口首相、東京駅で狙撃され重傷。
昭和六年(一九三一年)	2・24 中目校長排斥スト。 3・15 本科第7回、第五臨教第6回卒業式。 3・31 文部省告示第104号をもって第五臨時教員養成所を廃止。 4月 学則(服制)改正により、制服が折襟背広から立襟背広となる。 4・11 入学式。 この年 職員閲覧室を増築。	1・10 中学校令施行規則改正(柔剣道必修化、公民科設置)。 5・1 大阪医科大学を国に移管、大阪帝国大学を創設。 7・1 文部省、学生思想問題調査委員会(河合榮治郎・蠟山政道ら)設置。 7・15 内務省社会局、5月の全国失業者総数40万人突破と発表。 9・18 関東軍、柳条湖の満鉄路線を爆破(満州事変)。 9・24 上海の反日スト、中国各地に波及。 10・24 国際連盟理事会、満州撤兵勸告案を可決。 11・7 大阪城天守閣落成。 12・13 金輸出再禁止。
昭和七年(一九三二年)	3・15 本科第8回卒業式。 4・11 入学式。 6・18 第8回同窓会総会(淀屋橋美津濃)。 12・25～弁論部第1回巡回講演会(名古屋)。	1・28 日本海軍、上海で中国軍と交戦(第一次上海事変)。 2・29 国際連盟リットン調査団来日。 3・1 満州国建国宣言。 5・15 海軍将校ら首相官邸など襲撃(五一五事件)。 5・26 斎藤内閣成立(政党内閣時代終わる)。 6・29 警視庁、特別高等課を部に昇格。 9月 上智大学生が靖国神社大祭で礼拝を拒否して問題化、陸軍省配属将校引きあげ。
昭和八年(一九三三年)	3・15 本科第9回卒業式。 3・21 金本正二講師(教育学・修身)に対する辞職要求をめぐる紛糾。 4・11 入学式。 9・27 校長に葉山万次郎就任。	2・16 国鉄城東線、天王寺・大阪間高架となり電車による運転始める。 2・20 小林多喜二検挙、築地署で虐殺される。 3・27 日本、国際連盟脱退を正式に通告。 3・27 大阪ガスビル開館。 4・22 鳩山一郎文相、京都帝大滝川幸辰の辞職要求。 5・20 大阪地下鉄、梅田・心斎橋間開業。 6・7 共産党佐野学、鍋山貞親、獄中にて転向声明。 7・8 文部省『非常時と国民の覚悟』を学校に配布。 8月 東京で「東京音頭」熱狂的に流行。

	本校関係	一般
昭和九年(一九三四年)	3・15 本科第10回卒業式。 4・9 入学式。 4月 独語部、山本茂教官の授業拒否事件。 6月 陸上競技部を後援する「大阪外語アスレチック倶楽部」誕生。 6・20 文学研究会『外語文学』第1号発行(『文学ABC』を改題)。	12・23 皇太子誕生。  3・1 満州国帝政実施。 5・2 出版法改正公布(皇室の尊厳冒瀆、安寧秩序妨害などの取締強化)。 6・1 文部省、学生部を拡充し思想局設置。 6・1 大阪駅の高架工事完成。 9・21 室戸台風。 10・1 陸軍省、『国防の本義とその強化の提唱』配布。 10・6 警視庁、学生・生徒らのカフェー・バー出入りを禁止。 12・3 閣議、ワシントン条約単独廃棄を決定。
	3・15 本科第11回卒業式。 4・8 入学式。 11・9 各国語学大会の会場をガスビルに移す。	2・18 貴族院で天皇機関説攻撃始まる。 3・16 ドイツ、ベルサイユ条約廃棄、再軍備宣言。 5・1 第16回メーデー(戦前最後のメーデー)。 8・3 政府、国体明徴声明を発表。 8・12 永田鉄山刺殺される。 9月 第1回芥川賞(蒼氓)、第1回直木賞(鶴八鶴次郎)。 10・3 イタリア、エチオピアへ侵攻 12・10 大阪野球倶楽部(大阪タイガース)創立。
昭和十一年(一九三六年)	3・15 本科第12回卒業式。 4・8 入学式。 8・1 第3回日米学生会議に参加。 この年 雨天体操場を新設。	2・26 二・二六事件起こる。 3・24 内務省、メーデー禁止を通告。 5・18 広田内閣、軍部大臣現役武官制復活。 5・29 思想犯保護観察法公布。 6・15 不穏文書臨時取締法公布。 7・10 講座派・左翼文化団体関係者の一斉検挙。 9・26 大軌ビル内に直営百貨店開業。 11・25 日独防共協定調印。
	3・15 本科第13回卒業式。 4・8 入学式。 7・31 花園運動場新設。 10・3 5烈士の慰霊祭。 11・26～近畿高専連合野外演習(伊丹平野)。	2・29 兵役法施行令改正。 5・11 御堂筋完成。 5・31 文部省『国体の本義』を編纂配布。 6・4 第一次近衛内閣。 7・7 盧溝橋事件(日中戦争の発端)。 7・21 文部省、思想局を廃止し教学局を設置。 8・15 政府、中華民国政府の断乎屏懲を声明、全面戦争に突入。 8・24 「国民精神総動員実施要綱」を決定。

	本校関係	一般
昭和十三年(一九三八年)		12・13 南京占領。 12・15 第一次人民戦線事件。
	1・30 本校最初の防空演習行わる。 2・11 蒙古語部11名による和蒙辞典、ぐろりあ書房より出版。 3・15 本科第14回卒業式。 4・8 入学式。 4・19 航空研究会、校友会の一部として承認。 6・3 花園運動場開設祝賀運動会。 6・5 烈士之碑除幕式(11柱)。 7月 勤勞奉仕始まる。 11・27 烈士之碑合祀祭(3柱)。	1・11 御前会義「支那事变処理根本方針」を決定。 2・1 第二次人民戦線事件(大内兵衛ら勞農派檢舉)。 2・25 兵役法改正(学校教練修了者の在營期間短縮の特典廃止)。 3・1 綿糸布配給統制規則公布(初の切符制)。 4・1 国家總動員法公布。 6・9 文部省「集团的勤勞作業運動実施ニ関スル件」実施。 7・11 張鼓峰事件起こる。 8・12 商工省、9月より新聞用紙制限を指令。 8・24 学校卒業生使用制限令公布。 10・5 河合栄治郎4著作発禁。 11・3 第2次近衛声明(東亜新秩序建設)。 11・7 中支那振興、北支那開発各会社設立。
昭和十四年(一九三九年)	3・15 本科第15回卒業式。 4・1 支那語部増員、2組編成となる。 4・8 入学式。 10・8 烈士之碑合祀祭(2柱)。 10・18 体力章検定のテスト。	1・28 東京帝大河合栄治郎ら休職処分。 3・9 兵役法改正公布(短期現役制廃止、兵役期間延長)。 3月 大学の軍事教練必修科目となる。 4・12 米穀配給統制法公布。 5・12 ノモンハンで外蒙軍と満州国軍と武力衝突。 5・22 「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」下賜。 6・16 学生の長髪禁止、ネオン全廃、パーマメント禁止などの生活刷新案決定。 8・23 独ソ不可侵条約締結。 8・28 平沼内閣「欧州情勢は複雑怪奇」と総辞職。 9・1 ドイツ、ポーランドに侵攻。 9・3 英仏、独に宣戦布告。 11・11 兵役法施行令改正公布(第三乙種設定)。
	3・15 本科第16回卒業式。 4・1 亜刺比亞語部設置。 4・8 入学式。 10・20 烈士之碑合祀祭(12柱)。 この年 生徒控所の上に教室増築。 雨天体操場を教室に改築。	1・26 日米通商航海条約失効。 3・30 汪兆銘、南京に中華民国政府を樹立。 6・22 文部省、修学旅行の制限を通達(18年以後全面中止)。 6月 大都市で米・みそ・醤油・塩など10品目の切符制実施。
昭和十五年		

	本校関係	一 般
(一九四〇年)		7・26 閣議「基本国策要綱」を決定(大東亜新秩序・高度国防国家の建設方針)。 9・23 日本軍、北部仏印に武力進駐。 9・26 アメリカ、対日屑鉄全面禁輸を断行。 9・27 日独伊三国同盟締結。 10・12 大政翼賛会発足。 11・10 紀元2600年祝典。
昭和十六年(一九四一年)	2・11 紀元節式典後、報国団結成式(校友会を解散)。 3・15 本科第17回卒業式。 4月 露語部増員。 4・8 入学式。 10・1 大陸語学研究所付設。 11・9 烈士之碑合祀祭(5柱)。 12・26 本科第18回卒業式(繰上げ)。	1・8 東条陸相「戦陣訓」を示達。 4・1 小学校を国民学校と改称。生活必需物資統制令公布。 4・13 日ソ中立条約調印。 7・21 文部省教学局『臣民の道』刊行。 8・1 アメリカ、対日石油輸出を全面停止。 8・30 軍事教練担当の現役将校を大学に配属。 10・16 大学・高等専門学校などの修業年限短縮。 10・18 東条英機内閣成立。 11・5 御前会議「帝国国策遂行要領」など決定。 12・8 太平洋戦争始まる。
昭和十七年(一九四二年)	1月～3月 臨時補習科(3年生のみ)。 4・7 入学式。 4・10 校長に横山俊平就任。 6・6 第16回各国語講演大会(最後の大会)を中央公会堂で開催。 9・21 本科第19回卒業式(繰上げ)。 11・15 烈士之碑合祀祭(21柱)。 この年 西南亜細亜語研究所設置。	1・8 大詔奉戴日(興亜奉公日を廃止)。 2・1 味噌・醤油の切符配給制・衣料の点数切符制。 4・18 東京・名古屋・神戸など初空襲。 5・20 翼賛政治会結成。 6・5 ミッドウェー海戦。 11・1 大東亜省設置(拓務省、興亜院など廃止)。 11・8 連合軍、北アフリカ上陸作戦開始。 11月 鉄道省、乗車券の発売制限、乗越しなど禁止。
昭和十八年(一九四三年)	4・1 青雲寮できる。 4・10 入学式。 9・27 本科第20回卒業式(繰上げ)。 11・11 創立記念式・出陣学徒壮行会。 11・14 烈士之碑合祀祭(19柱)。 11・22 本科第21回卒業式。	2・1 ガダルカナル島撤退開始。 4・1 中学校の修業年限1年短縮、教科書国定化。 6・25 「学徒戦時動員体制確立要綱」決定。 9・23 17業種の男子就業禁止、25歳未満の未婚女子による勤労挺身隊を動員。 10・12 「教育ニ関スル戦時非常措置方策」決定(理工科系・教員養成系以外の徴兵猶予停止など)。 10・21 出陣学徒壮行会(神宮外苑競技場)。

	本校関係	一 般
昭和十九年(一九四四年)		11・16 大阪府下大学高専校出陣学徒合同壮行会(中之島公園)。 12・24 徴兵適齢臨時特例公布(適齢を1年引下げ19歳とする)。
	4・1 勅令第165号をもって校名を大阪外事専門学校と改称。 4・7 入学式。 4・27 校長事務取扱に吉本正秋就任。 6・7 校長に尾崎卓郎就任。 9・22 本科第21回卒業式(繰上げ)。	1・18 「緊急学徒勤労働員方策要綱」決定。 3・7 政府、学徒勤労働員の通年実施を決定。 7・18 東条内閣総辞職。 8・4 政府、一億国民総武装を決定、竹槍訓練本格化。 8・23 女子挺身勤勞令、学徒勤勞令公布。 10・18 兵役法施行規則改正公布(17歳以上を兵役編入)。 10・25 海軍神風特攻隊、レイテ沖に出撃。
昭和二十年(一九四五年)		3・9 東京大空襲。 3・18 国民学校初等科以外の授業を1年間停止。 4・1 米軍、沖繩本島に上陸。 5・7 独軍、無条件降伏。 7・17 ポツダム会談。 8・6 広島に原爆投下。 8・8 ソ連対日宣戦布告。 8・15 戦争終結。 8・16 学徒動員、農業・運輸・通信を除き解除。 9・2 降伏文書に調印。 10・15 治安維持法廃止。 10・22 GHQ、軍国主義的、超国家主義的教育の禁止指令。 10・30 GHQ、教育関係の軍国主義者・超国家主義者の追放指令。 12・17 衆議院議員選挙法改正公布(婦人参政権等)。
	3・13 大阪大空襲により書庫等を除き校舎の大部分焼失。 4・1 ビルマ科設置。 4・10 入学式。 9月 大阪高等学校・五条小学校を借り授業再開。 9・25 本科第22回卒業式(繰上げ)。 11・10 林蝶子死去。	
昭和二十一年(一九四六年)		1・1 天皇神格否定の詔書。 1月 『世界』『展望』『潮流』『人間』等創刊、『中央公論』『改造』復刊。 2・17 金融緊急措置令(旧円封鎖、新円発行)施行。 4・10 第22回総選挙(女性議員39名)。 5・1 メーデー復活。 5・12 世田谷区〈米ヨコセ〉区民大会、宮城へデモ。 5・19 東京で食糧メーデー、プラカード事件おこる。 11・3 日本国憲法公布。
	2・1 大阪府高槻市もと工兵第四連隊跡に移転、授業を行う。 3・23 本科第22回卒業式。 3・30 校長事務取扱に稲村純一就任。 4・1 支那科を中国科、マライ科をインドネシア科と改称。 4・27 入学式。 7・1 事務所を大阪市天王寺区上本町8丁目に変更。 8・22 校長に平沢俊雄就任。 この年 学生自治会の前身「緑風会」誕生。	

	本校関係	一 般
昭和二十二年(一九四七年)	3・15 本科第23回卒業式。 4・9 入学式。 6月 「復興委員会」組織さる。 秋 父兄会創立。	1・31 マ元帥、2・1スト中止声明を發表。 3・31 教育基本法・学校教育法公布。 4・1 6・3制教育開始(新制中学発足)。 4・20 第1回参議院選挙。 9・5 閣議、石炭国管法案原案を決定。 10・21 国家公務員法公布。 10・26 改正刑法公布(不敬罪・姦通罪廃止)。 12・17 警察法公布(地方分権・民主化)。 12・22 改正民法公布(家族制度廃止)。 12・31 内務省解体。
昭和二十三年(一九四八年)	3・15 本科第24回卒業式。 4・12 入学式。 7・19 父兄会、新制大学移行父兄後援会の結成を決定。 10・12 南棟2階悠々寮から出火。	1・7 財閥同族支配力排除法公布。 2.10~ 進学適性検査はじまる(~29年)。 3・7 新警察制度発足。 4・1 新制高校発足。 7・15 教育委員会法公布。 9・18 全日本学生自治会総連合結成。 12・18 GHQ、米政府指令の経済安定九原則發表。
昭和二十四年(一九四九年)	3・10 本科第25回卒業式。 4・1 タイ科設置。 5・31 大阪外国語大学設置。 初代学長に大阪外事専門学校長平沢俊雄補せられる。 6・27 高槻学舎で大学第1回入学式。 6・27 本学父兄会から木造平屋建40坪、廊下6坪寄付。 10・7 教授会規則を制定。 11・11 高槻学舎で開学記念式挙行。 11・14 東外戦(復活第1回)。	3・7 ドッジ公使、超均衡財政(ドッジライン)を強調。 4・23 GHQ、1ドル360円の単一為替レート設定。 5・31 国立学校設置法公布。 6・1 新制国立大学69校開校。 7・4 国鉄第1次人員整理發表(下山事件、三鷹事件、松川事件発生)。 8・26 シャウブ使節団、税制改革勸告案を發表。 10・1 中華人民共和国成立。 10・22 全国大学教授連合、反レッドパージ声明。 12・15 私立学校法公布(25年3月施行)。
昭和二十五年(一九五〇年)	3・10 大阪外専本科第26回卒業式。 3月 大阪学舎、中庭の池の南側に木造平屋建教室123坪新築(38年取こわし)。 4・21 入学式。 10月 同窓会会長に繁村長孝(F2)就任。	4・22 日本戦没学生記念会結成。 6・2 警視庁、集会、デモを禁止。 6・6 マ元帥、共産党中央委員24名の追放を指令。 6・25 朝鮮戦争勃発。 7・11 日本労働組合総評議会(総評)結成。 8・10 警察予備隊令公布。 8・30 全学連、反レッドパージ闘争宣言。 9・1 閣議、公務員のレッドパージ方針を決定。 9・3 ジェーン台風。
	3・10 大阪外専本科第27回卒業式。 3・31 大阪外事専門学校廃止。	1・25 グレス講和特使来日。 3・15 イラン国会、石油国有化法可決。

	本校関係	一般
昭和二十六年(一九五一年)	<p>4・12 入学式。</p> <p>5・7 大阪学舎の本館の一部復興により3年の授業は同学舎で行う。</p> <p>5・21 別科(1年制)開設(中国語、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語)。</p> <p>6・28 教授会規程制定。</p> <p>12・13 大阪外国語大学学則制定(施行 26.4.1)。</p> <p>12・20 同窓会、戦後最初の会員名簿発行。</p>	<p>4・11 マ元帥罷免。</p> <p>5・1 9 電力会社発足。</p> <p>6・21 日本、ILOおよびユネスコに加盟。</p> <p>7・10 朝鮮休戦会談開く。</p> <p>9・8 サンフランシスコ講和会議で対日平和条約・日米安全保障条約調印。</p>
昭和二十七年(一九五二年)	<p>4・10 入学式。</p> <p>4・21 大阪学舎の本館復興につき後期の授業は同学舎で、前期授業は高槻学舎で行う。</p>	<p>4・28 GHQ廃止。対日平和・日米安保両条約発効。</p> <p>4・28 日華平和条約調印。</p> <p>5・1 メーデー事件、皇居前広場でデモ隊と警官隊衝突。</p> <p>5・9 早大事件(警官隊が集会に突入)。</p> <p>6・6 中央教育審議会設置。</p> <p>6・24 吹田事件(吹田市でデモ隊と警官隊衝突)。</p> <p>7・21 破壊活動防止法・公安調査庁設置法各公布施行。</p> <p>8・1 保安庁発足。</p> <p>8・13 日本、IMF・世界銀行に加盟。</p> <p>10・15 保安隊発足(警察予備隊を改組)。</p>
昭和二十八年(一九五三年)	<p>2・23 鉄筋コンクリート造2階建研究室・教室を増築。</p> <p>3・10 大学第1回卒業式。</p> <p>4・14 入学式。</p> <p>4・16 学長選考規程制定。</p> <p>5・10 学長選挙が行われ平沢俊雄再選。</p> <p>6・11 平沢俊雄学長に再任。</p> <p>12・18 大阪外大教職員組合規約制定。</p>	<p>2・1 NHKテレビ本放送開始。</p> <p>3・5 スターリン没。</p> <p>3・14 内閣不信任案可決、国会(バカヤロウ)解散。</p> <p>4・2 日米通商航海条約調印。</p> <p>7・27 朝鮮休戦協定調印。</p> <p>8・7 スト規制法公布施行(電気・石炭業の争議規制)。</p> <p>11・29 日本自由党結成。</p> <p>12・15 水俣病患者第1号発病。</p>
昭和二十九年(一九五四年)	<p>3・10 第2回卒業式。</p> <p>4・1 留学生別科設置。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>4・24 大阪学舎に鉄筋コンクリート3階の附属図書館が落成。</p>	<p>2・22 政府、教育の政治的中立確保に関する法案・教育公務員特例法改正案を国会に上程(6・3公布)。</p> <p>2・23 造船疑獄。4・21指揮権発動。</p> <p>3・8 日米相互防衛援助協定調印。</p> <p>4・28 文部省、社会科学習指導要領の大綱発表。</p> <p>6・3 衆議院本会議、会期延長めぐり警官導入。</p> <p>6・28 周恩来・ネール平和五原則の共同声明。</p> <p>7・1 防衛庁・自衛隊発足。</p> <p>7・21 ジュネーブ会議、インドシナ休戦</p>

	本校関係	一般
昭和三十年(一九五五年)	3・10 第3回卒業式。 4・14 入学式。	協定調印。 9・23 第五福竜丸無線長久保山愛吉没。
	3・10 第4回卒業式。 4・1 専攻科設置。 別科、2年制となる。 4・12 入学式。	1・28 民間6単産、春季賃上げ共闘会議 総決起大会(春闘の始まり)。 3・11 防衛庁防衛六カ年計画案を決定。 5・14 ソ連・東欧八カ国ワルシャワ条約 調印。 8・6 第1回原水爆禁止世界大会。 9・10 日本、ガットに加盟。 9・13 砂川基地反対闘争。 11・15 自由民主党結成、保守合同なる。
昭和三十一年(一九五六年)	2・7 名誉教授称号授与規程制定。 3・11 第5回卒業式。 3・18 鉄筋コンクリート造4階建研究室・ 教室を増築。 3・29 柔道場竣工。 4・1 高槻学舎の授業を大阪学舎で行う。 4・15 入学式。 5・9 学長選挙が行われ平沢俊雄が当選。 6・11 平沢俊雄学長に再任。 7・6 大阪外大・生協創立総会。 11・11 創立35周年記念祝典(中之島中央 公会堂)。	2・19 『週刊新潮』創刊(週刊誌ブーム)。 3・19 在京10大学長、教育2法反対声明。 4・19 衆院、新教育委員会法案をめくり 混乱。 7・17 経済白書「もはや戦後ではない」 と規定。 7・26 ナセル、スエズ運河国有化宣言。 10・10 文部省、教科書調査官設置。 10・19 日ソ国交回復に関する共同宣言調 印。 10・30 スエズ戦争勃発。 12・18 国連総会、日本の加盟案可決。
	3・10 第6回卒業式。 4・1 別科、中国語・英語・イスパニア 語の3語科募集停止。短期大学部 (夜間)中国語・英語・イスパニア 語の3語科併設。 4・12 入学式。 5・16 短大第1回入学式。 7・3 第1回リレーカーニバル(中百舌鳥 陸上競技場)。	3・25 欧州共同市場(EEC)条約調印。 5・20 岸首相、東南アジア6カ国訪問。 6・14 国防会議、第一次防衛力整備3カ 年計画を決定。 9・10 文部省、教員勤務評定制度の趣旨 徹底について通達。 10・4 ソ連、人工衛星スプートニク1号 打ち上げ成功。 12・6 日ソ通商条約調印。
昭和三十三年(一九五八年)	3・10 第7回卒業式。	1・20 インドネシアと平和条約賠償協定 調印。 1・31 (米)初の人工衛星打ち上げ成功。 7・31 文部省、学習指導要領改訂案発表。 10・8 警察官職務執行法改正を上程(審 議未了)。 11・27 皇太子明仁と正田美智子の婚約決 定。 12・1 一万円札発行。
		3・28 安保改定阻止国民会議結成。

	本校関係	一 般
昭和三十四年(一九五九年)	<p>4・1 別科ドイツ語・フランス語・ロシア語の3語科募集停止。短期大学部(夜間)ドイツ語・フランス語・ロシア語の3語科設置。</p> <p>4・13 入学式。</p> <p>4・24 短大入学式。</p>	<p>4・10 皇太子結婚式。</p> <p>4・15 安保改定阻止第1次統一行動。</p> <p>8・29 三池争議始まる。</p> <p>9・14 ソ連の宇宙ロケット月面到着。</p> <p>9・26 伊勢湾台風。</p> <p>11・27 安保改定阻止第8次統一行動のデモ隊2万人国会構内に突入。</p>
昭和三十五年(一九六〇年)	<p>3・10 第8回卒業式。</p> <p>3・25 鉄筋コンクリート造5階建研究室・教室を増築。</p> <p>4・1 事務組織規程・事務分掌規程を制定。</p> <p>4・11 入学式。</p> <p>4・12 短大入学式。</p>	<p>1・12 政府、貿易為替自由化の基本方針決定。</p> <p>1・19 日米新安保条約・行政協定調印。</p> <p>5・19 政府・自民党、衆院に警官隊を導入し新安保条約と会期延長を単独強行採決。</p> <p>6・4 安保改定阻止第1次スト560万人参加。</p> <p>6・15 安保改定阻止第2次スト、全学連主流派国会に突入。</p> <p>6・19 新安保条約自然成立。</p> <p>10・12 浅沼社会党委員長、右翼少年に刺殺される。</p> <p>12・14 経済協力開発機構(OECD)条約調印。</p> <p>12・27 閣議、所得倍增計画を決定。</p>
昭和三十六年(一九六一年)	<p>1・20 同窓会広島支部会誌『扉』創刊。</p> <p>2・28 鉄筋コンクリート造5階建研究室・事務室を増築。</p> <p>3・10 第9回卒業式。</p> <p>3・11 短大第1回卒業式。</p> <p>4・1 ペルシア語学科設置。</p> <p>4・11 入学式。</p> <p>4・12 短大入学式。</p> <p>5・9 学長選挙が行われ森沢三郎当選。</p>	<p>2・5 社会党中執委、構造改革論による新運動方針決定。</p> <p>5・13 自民・民社両党、政治的暴力防止法案を国会提出。</p> <p>5・16 韓国、軍事クーデター。</p> <p>6・12 農業基本法公布。</p> <p>9・16 第2室戸台風。</p> <p>10・2 大鷗・柏戸、横綱昇進。</p> <p>10・25 衆議院、核実験禁止を決議。</p> <p>11・2 第1回日米貿易経済合同委員会開催。</p>
昭和三十七年(一九六二年)	<p>2・19 語学実習(L.L.)装置を設置。</p> <p>3・10 第10回卒業式。</p> <p>3・12 短大第2回卒業式。</p> <p>4・1 蒙古語学科をモンゴル語学科と改称。</p> <p>4・12 入学式。</p> <p>4・13 短大入学式。</p> <p>7・1 『学内報』発行(第28号まで)。</p> <p>11月 総合雑誌『求索』創刊。</p>	<p>2・1 東京都の常住人口1千万人突破。</p> <p>3・31 義務教育の教科書、無償となる。</p> <p>4月 鉄鋼生産10%強の減産、各産業に不況拡大。</p> <p>10・5 閣議、全国総合開発計画を決定。</p> <p>10・22 米、キューバ海上封鎖宣言。</p> <p>10・26 池田首相の私的諮問機関「国づくり」懇談会。</p> <p>11・9 日中総合貿易に関する覚書調印。(LT貿易)</p> <p>12・5 「人づくり」懇談会発足。</p>

	本校関係	一般
昭和三十八年(一九六三年)	3・11 第11回卒業式。 3・12 短大第3回卒業式。 3・20 花園運動場に寄宿舎竣工。 4・1 朝鮮語学科設置。 4・11 入学式。 4・12 短大入学式。	2・20 ガット理事会でガット11条国への移行を通告。 7・12 閣議、新産業都市と工業整備特別地域を決定。 8・14 政府、部分的核実験停止条約に調印。 8・15 政府主催第1回戦没者追悼式。 11・22 ケネディ大統領暗殺。 12・21 教科書無償措置法公布。
昭和三十九年(一九六四年)	2・1 外大・体育会規約施行。 3・10 第12回卒業式。 3・11 短大第4回卒業式。 3・20 鉄筋コンクリート造5階建研究室・事務室を増築。 4・1 イタリア語学科設置。 4・1 大阪外国語大学父兄会を同後援会と改組。 4・11 入学式。 4・11 短大入学式。 7・9 教授会で上八離脱・適地移転を決定。 8.27～ 第2回近畿地区国立大学体育大会。	3・22 大阪環状線、完全高架完成。 3・23 ジュネーブで国連貿易開発会議(UNCTAD)開催。 4・1 日本、IMF8条国に移行。 4・28 日本、経済協力開発機構(OECD)に加盟。 9・5 名神高速道路、一宮・西宮間開通。 10・1 東海道新幹線開業。 10・10 第18回オリンピック東京大会。
昭和四十年(一九六五年)	3・10 第13回卒業式。 3・11 短大第5回卒業式。 3・25 花園運動場に留学生寄宿舎竣工。 4・1 短期大学部、学生募集停止。外国語学部第二部(夜間学部)中国語・英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語の6語学科設置。 4・11 学長選挙が行われ金子二郎が当選。 4・12 入学式。 4・15 第二部第1回入学式。	1・28 慶大生、学費値上げ反対全学スト。 2・1 原水爆禁止国民会議結成。 2・7 米軍、北爆開始。 5・17 ILO87号条約および関係国内法可決。 5・28 山一証券に無制限無期限の日銀特別融資。 6・12 阿賀野川流域で第2水俣病発見。 6・22 日韓基本条約等に調印。 11・10 中国で文化大革命始まる。 11・19 閣議、国債発行を決定(戦後初の赤字国債)。
昭和四十一年(一九六六年)	3・15 第14回卒業式。 3・16 短大第6回卒業式。 3・末 図書館書庫の増築工事完了。運動場北側に軽量型鋼造2階建の教室完成。 4・1 インド語学科をインド・パキスタン語学科と改称。 4・1 デンマーク語学科設置。 4・13 入学式。	1・18 早大生、授業料値上げ反対スト。 3・31 日本の人口1億人突破。 6・25 国民祝日法改正公布。 7・4 政府、新東京国際空港建設地を成田市三里塚に決定。 7・8 建国記念日審議会設置。 8・20 紅衛兵、北京街頭に進出、各地に波及。
	3・15 第15回卒業式。 3・16 短大第7回卒業式。 4・12 入学式。	2・11 初の「建国記念の日」。 4・15 美濃部亮吉が東京都知事に当選。 6・5 イスラエル、6日戦争開始。

	本校関係	一般
昭和四十二年(一九六七年)	6・8 教授会で万博跡地への移転計画了承さる。	6・6 閣議、資本取引自由化の基本方針決定。 7・1 ヨーロッパ共同体(EC)成立。 8・3 公害対策基本法公布施行。 8・8 東南アジア諸国連合(ASEAN)発足。 11・15 日米共同声明発表(沖縄返還の時期示さず)。
昭和四十三年(一九六八年)	3・16 卒業式(学部16回、短大8回)。 4・15 入学式。	1・8 アラブ石油輸出国機構(OAPEC)設立。 1・29 東大医学部学生自治会、登録医制度反対などで無期限ストに突入。 2・26 三派系学生・農民、成田空港建設反対デモ。 4・5 日本政府、小笠原返還協定に調印。 6・15 東大で医学部学生ら安田講堂占拠。 6・17 大河内学長、機動隊出動を要請、排除。 10・21 国際反戦デーで学生ら新宿駅占拠、放火。 10・23 明治百年記念祝典。 11・16 文部省、東大・東京教育大・東外大・日大に授業再開要請の通達。 12・29 東大全学部・東京教育大4学部、入試中止を決定。
昭和四十四年(一九六九年)	1・20 学生により新館封鎖さる。 3・15 卒業式(学部17回)。 4・1 大学院外国語学研究所(修士課程)設置。 4・1 専攻科廃止。 4・15 入学式(学生の式場占拠により中止)。 5・2 デンマーク語学科研究室占拠さる。 5・24 学長事務取扱選挙が行われ牧祥三を選出。 6・3 『学生部広報』No.1発行。 6・11 牧祥三、学長事務取扱に就任。 7・2 機動隊導入、封鎖解除。 9月 全学バリケード、学外で授業。 10・2 機動隊導入、封鎖解除。 10・13 学内正常授業に戻る。	1・18 警視庁機動隊、東大安田講堂の封鎖解除に出動。 2・18 日大文理学部、機動隊を導入して封鎖解除。 3・3 国立大学一期校、機動隊の警備下で入試実施。 3・31 大阪市電、廃止となる。 4・21 文部省、大学秩序維持について次官通達。 4・28 全国で沖縄デー。 7・7 東大でほぼ授業再開。 8・7 大学の運営に関する臨時措置法公布。 10・9 自民党、安保条約の自動延長を決定。 11・21 佐藤・ニクソン会談、共同声明を発表(沖縄の47年返還・安保堅持など)。
昭和四十五年	3・20 卒業式(一部18回、二部1回)。 4・1 専攻科デンマーク語専攻新設。 4・15 入学式。 4・20 学生生活相談室開設。	3・14 吹田市で日本万国博覧会開催。 3・31 赤軍派学生、日航よど号をハイジャック。 3・31 八幡・富士両社合併、新日本製鉄

	本校関係	一 般
(一九七〇年)	5月 学科別懇談会(合宿研修)始まる。 8・3 附属図書館、夏期市民講座開設。 11・21～第1回統一外大祭。	発足。 4・19 日中覚書貿易協定調印。 6・22 政府、日米安保条約の自動延長を声明。 6・23 全国の反安保統一行動77万人が参加。 11・25 三島由紀夫、市ヶ谷の自衛隊でクーデター扇動、割腹自殺。
昭和四十六年(一九七一年)	3・15 大学院修了式(第1回)。以後卒業式に含めて略記する。 3・15 卒業式(一部19回、二部2回)。 4・15 入学式。 4月 会計課施設係を分離して施設課となる。 7・8 大学移転候補地として箕面市小野原地区に決定。	2・22 千葉県・新東京国際空港公園、空港用地収用の強制代執行。 4・11 大阪府知事に黒田一当選。 6・17 ワシントンで沖縄返還協定調印。 8・15 ニクソン、ドル防衛策発表。 8・16 東京証券取引所、史上最大の暴落。 11・17 自民党、衆院沖縄返還特別委で沖縄返還協定を強行採決。 12・18 10カ国蔵相会議、多国間通貨調整に決着(1ドル=308円)。
昭和四十七年(一九七二年)	2・10 学長選挙が行われ牧祥三が当選。 3・18 卒業式(大学院2回、一部20回、二部3回)(大阪郵便貯金会館・合同) 4・14 入学式。 4・20 将来計画委員会が発足。 11・11 創立50周年記念祝典(大阪府中小企業文化会館)。 『きんきら50年』刊行。 11・16 単位互換制度(他大学への留学)の実施。	1・3 日米政府間繊維協定調印。 2・21 ニクソン大統領中国訪問。 5・15 沖縄の施政権返還・沖縄県復活。 5・30 岡本公三ら過激派ゲリラ、テルアビブ空港で小銃乱射。 6・5 文部省、学生国際交流制度の実施。 6・11 田中通産相『日本列島改造論』刊行。 9・25 田中首相訪中、日中共同声明発表。 10・6 国大協入試調査特別委、共通1次試験の中間答申発表。 11・20 就職活動の早期化防止の申し合わせ(国立大学協会、中央雇用対策協議会)。
昭和四十八年(一九七三年)	3・17 卒業式(大学院3回、一部21回、二部4回)。 4・16 入学式。	1・27 ベトナム和平協定調印。 2・12 バリの5カ国会議、ドル10%切下げ決定。 2・14 東京為替市場再開、円は変動相場制に移行。 8・24 中共十全大会(旧幹部復活)。 10・6 第4次中東戦争勃発。 10・16 OPEC湾岸6カ国、原油公示価格を70%値上げ。 10・25 エクソン等石油供給5社、10%の供給削減通告。 11・16 政府、石油大口需要産業への供給削減などの緊急対策要綱を決定。
	3・18 卒業式(大学院4回、一部22回、二	4月 春闘賃上げ平均2万9千円弱、率

	本校関係	一 般
昭和四十九年(一九七四年)	<p>部5回)。</p> <p>4・1 大学院外国語学研究科中国語学専攻を東アジア語学専攻に改組。</p> <p>4・16 入学式。</p> <p>10・24 大学移転候補地箕面市小野原地区を断念し、箕面市間谷地区に決定。</p> <p>12・12 学長選挙が行われ牧祥三再選。</p>	<p>32.9%。</p> <p>6・1 電気料金平均56.8%値上げ。</p> <p>8・9 ニクソン大統領辞任。</p> <p>8・15 韓国朴大統領狙撃され夫人死亡。</p> <p>9・28 人口1億1千万人突破。</p> <p>11・12 衆院法務委などで金脈問題追及。</p> <p>11・26 田中首相辞意表明。</p> <p>12・1 椎名自民党副総裁、三木武夫を新総裁に裁定。</p>
昭和五十年(一九七五年)	<p>3・18 卒業式(大学院5回、一部23回、二部6回)。</p> <p>4・14 入学式。</p> <p>5・30 同窓会会長に山口博恭(D8)選任。</p> <p>8・1 同窓会『本部通信』第1号発行。</p>	<p>4・30 サイゴン入城、ベトナム戦争終結。</p> <p>8・4 日本赤軍、クアラルンプール米大使館等占拠、過激派の釈放要求。</p> <p>11・15 第1回先進国首脳会議。</p>
昭和五十一年(一九七六年)	<p>3・18 卒業式(大学院6回、一部24回、二部7回)。</p> <p>4・15 入学式。</p> <p>6月 本年から就職問題懇談会ひらく。</p> <p>11・12 新学舎の第1期敷地造成工事始まる。</p> <p>12・16 学長選挙が行われ伊地智善継当選。</p>	<p>2・4 米上院外交委多国籍企業小委員会でロッキード献金事件表面化。</p> <p>4・5 周恩来追悼めぐって天安門事件。</p> <p>5・1 資本自由化完了(農林水産業など4種目を除き)。</p> <p>5・14 衆院、ロッキード問題調査特別委員会を設置。</p> <p>7・2 ベトナム社会主義共和国成立。</p> <p>7・27 東京地検、田中前首相をロッキード事件で逮捕。</p> <p>10・29 政府、防衛計画の大綱決定(防衛費、GNPの1%以内)。</p>
昭和五十二年(一九七七年)	<p>3・18 卒業式(大学院7回、一部25回、二部8回)。</p> <p>4・1 大学院外国語学研究科日本語学専攻を設置。</p> <p>4・1 タイ語学科をタイ・ベトナム語学科と改称。</p> <p>4・15 入学式。</p> <p>4・15 学生部広報を『ひろば』と改題。</p>	<p>1・27 ロッキード事件丸紅ルート初公判。</p> <p>7・21 ロッキード事件小佐野ルート初公判。</p> <p>7・23 文部省、小中学校の新学習指導要領で「君が代」を国歌と規定。</p> <p>8・12 中共十一全大会、文革終結宣言。</p> <p>9・28 日本赤軍、ボンベイ離陸直後の日航機をハイジャック。拘留中の赤軍派の釈放を要求。</p> <p>10・1 伊藤忠商事、安宅産業を吸収合併。</p>
昭和五十三年	<p>3・17 卒業式(大学院8回、一部26回、二部9回)。</p> <p>4・13 入学式。</p> <p>12・2 研究講義棟・B棟完成。</p> <p>12・4 大学会館完成。</p> <p>12・28 附属図書館完成。</p>	<p>3・15 東京教育大学閉学式。</p> <p>4・9 京都府知事選挙で林田悠紀夫当選、28年間の革新府政終わる。</p> <p>5・20 新東京国際空港開港式。</p> <p>8・12 北京で日中平和友好条約調印。</p> <p>10・31 東京外国為替市場1ドル=175円</p>

	本校関係	一般
(二九七八年)		50銭の最高値。
昭和五十四年(一九七九年)	<p>1・4 研究講義棟・A棟完成。</p> <p>3・23 卒業式(大学院9回、一部27回、二部10回)。</p> <p>4・1 ポルトガル・ブラジル語学科設置。</p> <p>4・1 保健管理センター設置。</p> <p>4月 第二部推薦入学制度。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>4・25 附属図書館、学術講演会を始める。</p> <p>9・1 箕面市大字粟生間谷2734に移転。</p> <p>9・25 粟生間谷学舎にて授業開始。</p> <p>9・25 大阪学舎の土地建物を大阪市に譲渡。</p> <p>12・13 学長選挙が行われ伊地智善継が再選。</p> <p>12月 全学駅伝大会始まる。</p>	<p>1・1 米・中、国交樹立。</p> <p>1・13 国公立大学第1回共通一次試験導入。一期校・二期校制廃止。</p> <p>2・9 衆院予算委、航空機輸入疑惑解明の集中審議。</p> <p>2・11 イラン革命成立。</p> <p>6・12 元号法公布施行。</p> <p>12・21 衆参両院で一般消費税反対を決議。</p> <p>12・27 アフガニスタンでクーデター、ソ連軍介入。</p>
昭和五十五年(一九八〇年)	<p>3・28 卒業式(大学院10回、一部28回、二部11回)。</p> <p>3・29 第1体育館完成。</p> <p>3・31 研究講義棟・C棟完成。</p> <p>4・10 入学式(よみうり文化センター)。</p> <p>12・5 第1回合同祭。</p> <p>12・10 同窓会・広島支部会誌『扉』第64号にて休止。</p>	<p>1・22 自民党、『自由新報』で教科書批判を開始。</p> <p>5・18 韓国国土に非常戒厳令、金大中ら逮捕。</p> <p>5・24 JOC、モスクワ・オリンピック不参加決定。</p> <p>6・12 大平首相急死。</p> <p>6・22 初の衆参ダブル選挙、自民党圧勝。</p> <p>9・9 イラン・イラク戦争勃発。</p>
昭和五十六年(一九八一年)	<p>3・28 卒業式(大学院11回、一部29回、二部12回)。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>5・30 本部棟完成。</p> <p>10・31 新学舎落成祝典。</p> <p>11・11 烈士之碑合祀祭(24柱)。</p> <p>12・17 学長選挙が行われ林栄一当選。</p>	<p>3・2 中国残留日本人孤児47人、初の来日。</p> <p>3・16 第二次臨時行政調査会初会合。</p> <p>5・14 自民党教科書問題小委員会、教科書法制定方針で合意。</p> <p>7・9 文部省、高校教科書「現代社会」の検定で、自衛隊の合法性明記要求など明らかとなる。</p> <p>7・10 臨時行政調査会第一次答申(補助金削減など)。</p> <p>11・27 参院本会議で行政改革関連特例法成立。</p>
昭和五十七年	<p>3・27 卒業式(大学院12回、一部30回、二部13回)。</p> <p>4・9 入学式。</p> <p>11・11 同窓会『本部通信』第13号(最終号)発行。</p>	<p>2・10 臨時行政調査会第二次答申(許認可等合理化等)。</p> <p>7・23 防衛力整備計画「56中期業務見積り」決定、防衛費のGNP比1%以内の政府方針崩れる。</p> <p>7・26 中国政府、歴史教科書の記述が日</p>

	本校関係	一 般
(一九八二年)		<p>中共同声明の精神に違反と抗議。</p> <p>8・8 外務省情報文化局長ら、教科書問題の説明に訪中。</p> <p>8・24 拘束名簿式比例代表制の参議院議員選挙法公布。</p>
昭和五十八年(一九八三年)	<p>3・28 卒業式(大学院13回、一部31回、二部14回)。</p> <p>4・11 入学式。</p> <p>4・30 同窓会会誌『咲耶』創刊(『本部通信』を吸収)。</p> <p>7・9 夏祭はじまる。</p> <p>11・7 同窓会・後援会より記念会館を寄付。</p> <p>11・11 烈士之碑合祀祭(19柱)。</p>	<p>1・17 中曽根首相訪米、「日本列島不沈空母化、四海峡封鎖」発言、問題となる。</p> <p>5・24 政府、行革大綱を決定。</p> <p>8・21 フィリピン、アキノ元議員暗殺。</p> <p>9・1 大韓航空機、ソ連軍機に撃墜される。</p> <p>10・12 東京地検、田中角栄被告に懲役4年・追徴金5億円の実刑判決。</p>
昭和五十九年(一九八四年)	<p>3・28 卒業式(大学院14回、一部32回、二部15回)。</p> <p>3・28 課外活動施設として合宿所竣工。</p> <p>4・1 インドネシア語学科をインドネシア・フィリピン語学科と改称。</p> <p>4月 第二部、社会人特別選抜制度実施。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>10・30～第1回間谷祭(第15回統一外大祭)。</p> <p>11・11 烈士之碑合祀祭(27柱)。</p> <p>11・18 同窓会・後援会より信州「山の家」を寄付。</p> <p>12・13 学長選挙が行われ林栄一再選。</p>	<p>3・18 江崎グリコ社長拉致される(グリコ・森永事件の発端)。</p> <p>7・28 第23回オリンピック・ロサンゼルス大会。</p> <p>8・10 国鉄再建監理委、第二次緊急提言で初めて分割・民営化の方向を明示。</p> <p>8・21 臨時教育審議会設置。</p> <p>9・6 全斗煥大統領来日。</p>
昭和六十年(一九八五年)	<p>3・28 卒業式(大学院15回、一部33回、二部16回)。</p> <p>4・1 デンマーク語学科をデンマーク・スウェーデン語学科と改称。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>11・11 烈士之碑合祀祭(11柱)。</p>	<p>1・27 竹下登を中心に勉強会〈創政会〉が発足。</p> <p>3・10 ソ連共産党書記長にゴルバチョフ就任。</p> <p>3・16 国際科学技術博覧会。</p> <p>4・9 政府、経済摩擦等の対策の包括的な対外政策を決定。</p> <p>5・17 男女雇用機会均等法可決。</p> <p>8・12 日航ジャンボ機が群馬県御巢鷹山山中に墜落。</p> <p>8・13 三光汽船、5千億円の負債で戦後最大の倒産。</p> <p>10・11 政府、国鉄改革のための基本方針を決定。</p>
昭和六十一年	<p>3・4・5 入試(第2次学力試験)。</p> <p>3・28 卒業式(大学院16回、一部34回、二部17回)。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>5・20 研究講義棟・D棟完成。</p>	<p>1・24・25 共通1次学力試験</p> <p>4・26 ソ連チェルノブイリ原子力発電所事故。</p> <p>4・29 天皇在位60年記念祝典。</p> <p>10・28 国鉄分割・民営化法案可決。</p>

	本校関係	一般
(二九八六年)	10・15・16第38回東外戦。 10・29～'86間谷祭。	11・21 三原山 209年ぶり大噴火。
昭和六十二年(一九八七年)	3・1 学長に山田善郎就任。 3・1 入試(第2次学力試験 Aグループ)。 3・28 卒業式(大学院17回、一部35回、二部18回)。 4・1 日本語学科を設置。 4・10 入学式。 10・12・13第39回東外戦。 11・4～'87間谷祭。 11・19 附属図書館に地図コーナー(広岡記念)開設。	1・5 NTT株売出し。 1・24・25共通1次学力試験。 2・23 日銀、公定歩合引下げ 2.5%となる(史上最低、先進国中最低)。 4・1 JRグループ各社開業。 9・21 上八学舎跡に大阪国際交流センターがオープン。 10・19 ニューヨーク株式大暴落(ブラック・マンデー)。 11・29 大韓航空機、ビルマ上空で行方不明。
昭和六十三年(一九八八年)	3・5・6 入学試験。 3・28 卒業式(大学院18回、一部36回、二部19回)。 3・30 第2体育館完成。 4・1 アラビア語学科をアラビア・アフリカ語学科と改称。 4・11 入学式(箕面市民会館)。 8・20 会社説明会開始(就職協定協議会の決定)。 10・19・20第40回東外戦。 11・2～'88間谷祭。 11・12 烈士之碑合祀祭(6柱)。	1・23・24共通1次学力試験。 2・25 韓国大統領に盧泰愚就任。 4・10 瀬戸大橋営業開始。 7・5 リクルート事件起る。 8・20 イラン・イラク戦争停戦。 9・17 第24回オリンピック・ソウル大会。 12・24 参議院、消費税導入を柱とする税制改革関連法案可決。
昭和六十四年平成元年(一九八九年)	2・28 入試(第2次学力試験)「連続A日程」方式。 3・28 卒業式(大学院19回、一部37回、二部20回)。 4月 帰国子女受入れ始める。 4・10 入学式。 10・18・19第41回東外戦。 11・1～'89間谷祭。	1・7 昭和天皇没、皇太子明仁親王即位。 1・20 米大統領ブッシュ就任。 1・21・22共通1次学力試験。 4・1 消費税実施。 4月 国公立大学入試、分離分割方式採用。 5・31 日銀、公定歩合を0.75%引上げ。 6・2 竹下内閣総辞職、宇野宗佑内閣成立。 6・3 天安門事件。 7・23 第15回参議院議員選挙、与野党議席数逆転。 8・9 海部俊樹内閣成立。 11・10 ベルリンの壁の取り壊し始まる。 12・29 東証平均株価史上最高値(3万8,915円)。
	2・25・26入試。 3・28 卒業式(大学院20回、一部38回、二部21回)。	1・13・14大学入試センター試験。 3月 ソ連、憲法改正を決定(一党独裁制の放棄、大統領制導入など)。

	本校関係	一般
平成二年(一九九〇年)	<p>3・30 研究講義棟・E棟完成。</p> <p>4・10 入学式。</p> <p>10・17・18第42回東外戦。</p> <p>10・30 同窓会誌『咲耶』第16号発行。</p> <p>10・31～'90間谷祭。</p> <p>11・10 同窓会総会で早原瑛(大F・3)が会長に就任。</p>	<p>4・1 国際花と緑の博覧会開幕(～9.30)。</p> <p>8・2 イラク軍クウェートに侵攻。</p> <p>10・3 ドイツが国家統一を回復。</p> <p>11・12 天皇即位の礼。</p> <p>11・17 雲仙・普賢岳が約200年ぶりに噴火。</p>
平成三年(一九九一年)	<p>2・25 入試。</p> <p>3・28 卒業式(大学院21回、一部39回、二部22回)。</p> <p>4・10 入学式(吹田市文化会館)。</p> <p>4・12 留学生別科を留学生日本語教育センターに改組。</p> <p>6・15 同窓会報『咲耶』発行。</p> <p>10・16・17第43回東外戦。</p> <p>11・13～'91間谷祭。</p>	<p>1・12・13大学入試センター試験。</p> <p>1月 多国籍軍、イラク軍に対し攻撃開始(～2.28)。</p> <p>6・12 ソ連ロシア共和国初の大統領選挙でエリツィン当選。</p> <p>6・20 証券会社の大口投資家への損失補てんが明るみに。</p> <p>7・15 91年上半年企業倒産負債総額3兆4,300億円、史上最高。</p> <p>8・24 ゴルバチョフ・ソ連大統領がソ連共産党書記長を辞任、共産党解散を提唱。</p> <p>9・19 政府、PKO協力法案を国会に提出。</p> <p>11・5 海部内閣総辞職、宮沢喜一内閣成立。</p> <p>12・26 ソ連最高会議共和国会議は最終審議を行いソ連邦消滅を宣言。</p>
平成四年(一九九二年)	<p>2・25 入試。</p> <p>3・28 卒業式(大学院22回、一部40回、二部23回)。</p> <p>4・1 ペルシア語学科にトルコ語専攻を新設。</p>	<p>1・11・12大学入試センター試験。</p>



## 編集後記

学校の年史を作ろうという話はこれまでに二度、創立35周年(1957)と50周年(1972)の時に出たと聞いている。35周年の時には時期尚早、特に大学になって日が浅いということで、また50周年の時は大学紛争後で態勢が整わぬというそれぞれ尤もな理由で沙汰止みになったようである。しかし、今回70年目にして初めての年史作成に取り組んでみて、年史はやはり遅くとも50年目までには第1冊目を作っておかねばならないということを痛感した。70年も経ってしまうと、創設期はおろか、戦後の新制大学発足当時に学校の運営に携わっていた人々もほとんど亡くなっておられ、詳しい事情を正確に把握することが大変難しくなっている。しかも外大の場合、上八での戦災、高槻への移転、上八への復帰、そして箕面への移転があったため、多くの大切な資料が散逸してしまっており、作業は困難を極めた。せめて箕面移転の前に年史を作っておいてくれたらと長嘆したことも二度や三度ではない。しかし、それだけに年史を作るのはこれが最後のチャンスである、古い時代を何とか記録にとどめ、すべてが忘却の彼方に流れ去り、無に帰するのを堰止められるのはもう今しかないという思いは私達の中に段々と募っていった。この年史の中で古い時代、専門学校時代に特に大きな力が注がれているのはそういう気持の反映である。

古い時代に力点を置いたことを第一の特徴とするならば、この年史の第二の特徴は学校の公的な歴史、つまりいわゆる正史だけでなく、名物教授のプロフィールや教室の雰囲気、運動部の試合風景といった、いわば歴史のヒゲともいえるべき外史的な要素もふんだんに盛り込まれていることであろう。外大は専門学校から大学への移行の際にもあまり大きな変化がなく、一つの流れが切れ目なく創設期から今日まで続いて来た学校なので、私達編集委員の願いは出来るだけ血の通った、読んで懐かしく、楽しいものにしたいということであった。従って、単科大学であるにもかかわらず、第二編を部局史として、その最初に各語学科・一般共通・留学生別科等の個別史を配し、第3章「学生生活」でもクラブ史にかなりのスペースをさいた。学科史については各学科主任にお願いし、場合によっては学科主任からさらに執筆に適した方に依頼していただいたので、学科内部の人でなければ書けない生き生きとした、よい文章が集まった。これはクラブ史についても同様で、全クラブが網羅出来なかったのは残念だが、大半のクラブの顧問教官や熱心な卒業生・在学生諸氏から力作の原稿を出していただいた。ご協力くださった先生方、そして卒業生・在学生の皆さんにこの場を借りてあつくお礼を申し上げたい。ただ、原稿が集まり過ぎて膨大な量になったため、その多くはそのままの形では掲載出来なかった。もちろん私達は寄せられた原稿すべてを精読し、そこに記された重要な部分は通史編・部局史編のあちこちに活用させていただいたし、原稿はすべて今後のために大切に保管してあるが、たくさんの方々のご尽力に完全な形で報いることが出来なかったことは残念であり、大変申し訳なく思っている。ここに衷心からお詫び申し上げる次第である。

1989年2月4日の第1回編集委員会からこの企画に参加した私達編集委員の多くはそれまでの事情を知らなかったが、70年史の刊行は岡本真佐男前同窓会副会長が中心になって

熱心に提唱され、それに大学が応じる形で随分早くから話題になっていたようである。そろそろ年史を作らねば、やがて年史作成は不可能になってしまうだろう、という正しい認識が岡本氏を初め多くの人々にあったのだろう。ただ、どういうわけか、この企画はその間教授会では正式の議題に取り上げられなかった。そして大学の公的な行事として全学で足並みをそろえてこれに取り組むという態勢が作られていなかった。作業を始めてからこのことに気付いた私達は懸命に年史の意義や私達の任務等を説明して人々の理解と協力を得ることに徐々に成功していったが、もはや大学構成員全体の理解と協力を求める場はなく、水面下の仕事の辛さと苦しさから最後まで解放されることはなかった。大学当局によってこの計画が教授会にかけられ、その承認のもとにスタートするという正規の手続きが踏まれていたら、多くの苦労はせずに済んだことだろう。今回は初めてのことなので仕方がなかったかも知れないが、今後この種の計画がでた時にはまず最初にそれを公にして全学のコンセンサスを取りつけ、それから実行に移されるよう今から強くおすすめしておく。初めにボタンをかけちがうと、それが最後まで尾をひくのである。

もちろん、前述の先生方、卒業生・在學生を初めとして、年史作成に快く協力して下さった人々の数は多かった。元学長の平沢・牧・伊地智の三先生、また名誉教授の島中・住田・赤阪の三先生は、私達には分かり難く、全貌がなかなかつかめなかった往時の諸事情をくわしく説明して下さった。また前同窓会長で、年史刊行会長の山口博恭氏は作業が間違いなく、円滑に進むようにいつも心を砕いて下さったし、木村実後援会委員長の財政的援助も有難かった。大学の事務サイドでは特に庶務課にお世話になった。多忙な日常業務の中で労を惜しまず、探し難い多くの貴重な資料をよく見つけて提供してもらったし、年史刊行会の会計部門を担当して、煩雑な事務を手際よく処理していただいた。以上の皆さんにも心から感謝の意を表したい。

当編集委員会の初代委員長はロシア語学科の山口慶四郎教授であった。先生は1990年3月の定年ご退官までに年史の構成、取り上げるべき項目など一番大切な土台の部分をしっかり固めて下さった。そのお陰でそれ以降の仕事がどれだけ楽になったか分からない。編集委員一同心から感謝している。ただ、先生が「洛陽の紙価を高める」べく、巻頭に「日本における外国語教育史」を据えようとしておられた高邁な構想は、年史の内容が資料が集まるにつれてだんだんにふくれあがり、どうしても外語・外大に直接かわる事項だけに限らざるを得なくなったため、残念ながら実現できなかった。まことに申し訳なく思っている。

執筆は当初は元朝日新聞記者の山中源也氏が担当することになっていた。この年史に先駆けて1989年1月に発行され、年史作成にも大いに役立った「大阪外国語大学70年史・資料集」は現に氏の手になる立派な業績である。しかし、氏がこの年の9月に惜しくも急逝されたため、急遽執筆を元毎日新聞記者の小林俊夫氏にお願いすることになった。氏は本学の卒業生ではないが、非常な誠意をもってこの仕事に取り組んでくださり、発刊までの期間があまりないという悪条件のもとで黙々と膨大な資料に目を通し、調査に出かける労を惜しまず、連日夜遅くまで記念会館にこもって熱心に筆を進められた。年史のほとんど

すべての記述は氏の手になるものであり、また校正段階での表現の統一、小さな誤りの発見といった緻密な作業も氏に負うところが多い。二年余りの氏の献身的な作業と健筆がなければ年史の完成は覚束無いところであった。ここに深甚なる謝意を表する次第である。

最後にもう二人、卒業生の功労者をあげねばならない。その一人は小林義男氏(C11)、写真を中心に、手に入り難い資料をよく集めてくださった。そして、もう一人は高橋昭平氏(C23)、年史刊行のプロジェクトが発足した当初から最後まで五年間、資料の編纂という地味な、しかし重要な仕事を一手にひき受けてやってくださった。年史の仕事は編纂室の設置から始まるといわれ、少なくとも数名のスタッフを要する仕事であるが、それを一人で担当しながら、綿密に、ねばり強くひとつひとつ資料を探し、検討を加え、どこの編纂室にも劣らぬほど幅広く、奥深い、そして何よりも正確な資料を整えてくださった。氏は編纂作業だけでなく、執筆も一部担当、また校正の作業、出版社との細かな事務打ち合わせ等面倒な仕事をすべて担当され、文字通り八面六臂の活躍であった。年史作成を陰で支えてくださった氏の大きな存在をここに紹介し、心からその労をねぎらいたい。

初めての外大の年史を編むに当り、私達は70年の歴史の中で活躍した人々、主だった出来事はすべて取り上げよう、そして正確に記録に残そうと精一杯頑張った。しかし、70年間の出来事を一冊の書物の中に収めるにはどうしても限界がある。面白いと思いつつもやむなく削った事項もたくさんあるし、前述の通り多くの卒業生の原稿もそのままの形では載せられなかった。

当初はたくさん取り入れる予定であった写真の大半も紙面の都合で諦めざるを得なかった。完璧を期して作業を始めたが、終わってみれば心残りの点がいくつもある。また、何分にも初めての年史である。私達の気付かぬ多くの不備や誤りもあることだろう。お気付きの点があればどんどんご指摘、ご批判いただきたい。私達はこの年史をこれまでの外大の歩みを確かめる一里塚と考え、外大はこれからも発展し続けるに違いないから、将来何冊も出されるであろう年史の基礎づくりとの気持ちで作成した。寄せられたご意見、また今回充分に活用できなかった資料はすべて将来のより良い外大の年史のために大切に保存しておきたいと思っている。

この70年史の出版をお願いした凸版印刷には大変お世話になった。特に、学科史・クラブ史の原稿のいくつかの大幅な遅れを辛抱強く待つ間に合わせてくださり、すべてに不慣れな私達をうまくリードして年史刊行を実現してくださった年史センターの皆さんに最後に心からお礼を申し上げる。

1992年9月

大阪外国語大学70年史編集委員長  
布施 俊夫

[70年史刊行会]

会 長：山口 博 恭  
副 会 長：木村 實  
          布施 俊 夫  
理 事：岡本 眞佐男  
          高橋 昭 平  
          福田 定 一  
          石浜 恒 夫  
          森岡 政 晴  
          田川 弘 雄  
          岡本 武  
          法橋 和 彦  
          森本 久 夫

[70年史編集委員会]

委 員 長：布施 俊 夫  
副委員長：森本 久 夫  
          大野 徹  
委 員：勝藤 猛  
          高橋 昭 平  
          荒井 伸 一  
          赤木 攻  
          武田 佐知子  
          山本 進  
          田尻 雅 士  
          深尾 葉 子

## 大阪外国語大学70年史

---

1992年11月11日 発行

発 行 大阪外国語大学70年史刊行会  
箕面市粟生間谷東8丁目1-1  
電話(0727)28-3111

編 集 大阪外国語大学70年史編集委員会

印 刷 凸版印刷株式会社  
大阪市福島区海老江3丁目22番61号

---